
Air・Fantagista (エア・ファンタジスタ)

RYUU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エア・ファンタジスタ
Air・Fantagista

【Nコード】

N5110D

【作者名】

RYUU

【あらすじ】

空を往く飛翔艦を巡る、少女と青年の物語。運命に立ち向かう彼等の冒険を、どうぞ見守ってあげて下さい。 「空想物語書庫」(<http://ryuu.boon.jp/>)で連載中の小説の出張版です。新作やイラスト・漫画・ブログなどは上記サイトで公開しております。

第一章 『愛すべき犠牲より』 プロローグ（前書き）

この物語を記す機会が存在することと、読んでくれる貴方に感謝。
筆者

第一章 『愛すべき犠牲より』 プロローグ

A i r・F a n t a g i s t a (エア・ファンタジスタ)

第一章

プロローグ

最後の大天使ペルテシノが放つ心で、大陸の汚れは浄化された。

天には源が満ち、海には生が満ち、大地には花が満ちた。

大教典最終章 第四十一節 『果ての言葉』

「その者は二人で一つの兄妹である。」
誤解される賢人は言った。

大聖典 第二十章 十四節 『血の契約』

『創る者』が800の神を背負い、異形の物を追い払う。
さだめはそこから生まれ始めた。

大聖典 第三章 六節 『聖戦』

竜達は孤高の聖域を求めて旅立った。
大陸に もはや安寧の場所はない、と。

大聖典 第一章 十八節 『尊い嘆き』

「難儀だねエ……坊や。」

婆は^{ばはあ}ブ厚い本を開き、中の頁を^{ページ}至近距離で眺めると、青白く光る
小さな輪が

浮かび上がった 俺の右手の中指の付け根を強く握った。

「
天命第五位^{てんめいだいごのくらゐ}『犠牲の月獣』。」

暖炉の炎に照らされて浮かび上がる、しわくちゃな婆の顔は迫力
のある陰影を描く。

「この天命の輪を授かった人間は、それはそれはロクな人生を送ら
ないよ……。」

ああ、難儀だ。」

婆は繰り返し、言った。

「難儀だねエ……。」

婆は その道では高名な占い師だった。

真つ暗な部屋にある髑髏どくろの置き物。

人の手の平ほどもある巨大な水晶玉。

香の匂い。

それらは子供ながらに恐かった印象があるが、視覚的な記憶はもう定かじゃない。

ただ、俺がしっかりと憶えていることは、自分には逃れられない生き方があるという『通告』だった。

制作・著作

RYUU

ここに、神は全て死んだに等しいことを記す。

大聖典 序部 『創る者の言葉』

1 - 1 「求む、飛翔艦乗り」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 1

『 From the sacrifice which sh
ould be loved 』

The first story
・ Wanting flight warship ride ・

空は本当に青くて。

ちぎれた丸い雲が泡のように たくさん流れて。

鳥は居ないのかな。

陽のあるところまで飛ぶことって出来るのかな。

天空の雲を割りながら突っ切っていく船の先端。

ブリッジ内から それを見ている幼い子供心に、少ない語彙ながら感想が幾つも浮かんでくる。

「どうだ、世羅^{せら}。」

お空は とてつもなく大きいだろう？」

すぐ前方で舵を握った大男が振り向かずに言った。

「この飛翔艦が初めて飛んだ日に、お前も ここで生まれたんだ。そして、今日八歳の誕生日を迎えたお前を再び こいつに乗せることが出来て、俺は本当に嬉しいぞ。」

慣れた手さばきで艦を旋回させる。

艦全体の傾き。

身体が浮くような感覚。

それは新鮮だった。

「『人、第一の故郷・大海原から生まれ、第二の故郷・大地で育まれる。そして第三の故郷・大空へ飛び立つだろう』。」

空で生まれる世代が生まれること……。

八年前、こいつが完成するまではこんな時代が来るなんて誰も思

わなかったらうな。」

大男が振り向く。

背にした強い陽の光のため彼の表情は見えないが、ブリッジ内の仲間は全員笑顔で応えていた。

「大聖典：第一章 三十三節『祝福』：ね。」

そして、男が舵をとる　すぐ後ろの席で世羅を優しく包み込むように抱いた女性が言う。

「だいせいてん？」

「……ははあ、世羅にはまだ難しすぎたな。」

彼女の言葉に対して不思議そうな顔を浮かべた世羅を見て笑う大男。

もう、幾度も繰り返した　安らぎの空間が広がっていた。

「…世…世羅はどんな飛翔艦乗りに…なりてえんだ？」

お…おめには剣の才能がある。親父のように…強い飛翔艦乗りにな…なれよ。」

そこで後ろから世羅に声をかける、刃が直角に曲がった　奇妙な大剣を背にした男。

「いえいえ、坊ちゃんの才は賢さです。」

この歳で私が教えた大源法をもう一つも会得なさいました。

きつと奥様のように聡明な飛翔艦乗りになるに違いありません。」

ここぞとばかりに、薄布で顔を隠した怪しげな老人も言う。

「おい、ナロク、セドギア！

俺は息子に…飛翔艦乗りになることを強制する…つもりは無いぜ。
き、危険だからなア…この仕事は。」

世羅を抱いている女性の顔を窺いながら言う大男。

嘘ばかり、と言いたそうに彼女は笑う。

「…なんで？　とうさん。」

そして一呼吸おいてから、あどけない表情で世羅が大男を見上げて言った。

「ん？」

「ぼくは絶対になるよ……。　とうさんのような、立派なひしよかん乗りに。」

「……………」。

はは……こいつめ。

一体誰に吹き込まれたんだ？　立派だ……なんてよ。」

瞳を潤ませながら、世羅の頭に大きな手をのせる大男。

「久し振りにでかい仕事だ。

派手にやろうじゃねえか、野郎共!!」

執^とる。
気を取り直し、照れ隠しのために威勢良く声を張り上げて指揮を

それに続いて、ときの声を上げる仲間達。

彼等の床踏みは、動力の振動と合わせて轟音となる。

おぼろげな視界の中、みんなは大空を楽しそうにずっと駆けていた……。

それは永遠に続く幸せな夢のように。

「ぼくは絶対になるよ……。とうさんのような、立派な ひし
ようかん乗りに。」

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第一章

愛すべき犠牲より

・

第一話 『求む、飛翔艦乗り』

1

大陸東南部、ヒエラー森林帯を縦断疾走している定期装甲馬車の内部は、乗客で一杯だった。

お互いの吐く息と汗と体温が充満する、不快な空間。
地方独特の湿気に外の豪雨も加わり、誰をも鬱とした気分にする。

「兄貴、その話は本当なんですか？」

「……ああ。」

左頬に一本の細長い傷のある、長い髪をオールバックにして後ろで結んでいる若い男。

彼は小さな丸眼鏡の奥から、鋭い目つきで分厚い本を読みながら虚ろな返事をした。

「レバーナ自治港へ戻ったら、本当に都会へ行って…しまっすか？」

「そうだ。予定だと明日、港へ飛翔艦が来る。」

この機を逃すと 中王都市まで行く手段は かなり先まで…無え。

「

泥の溜まりに車輪を取られたのか、一瞬、馬車全体が大きく沈んだ。

乗客全員は一樣に不安そうな表情でばやし声を小さく発する。

「行かないで下さい！ 大学へ行くなんて、ガラじゃないですよ！ 戒の兄貴なら、いつか絶対にレバーナをシメることが出来るのに

…」

戒と呼ばれた その若い男は、本から目を離さずに窮屈な黒い修道着の首のベルトを緩めた。

雨のおかげで窓も閉め切られている。
ひどく暑苦しい。

そこへさらに暑苦しい言葉を浴びせれて、不機嫌な表情が自然と浮かぶのが自分でも判る。

港街で生活を始めてから約一ヶ月。

その間何度も利用してきた この便は、安さこそ魅力だが環境はすこぶる悪い。

戒は手下の二人と定期馬車内の一角に陣取りながら、何度もそれを思っていた。

「俺様は、あんな小せえ港街で一生を終えるつもりなんか無えんだよ。」

もつと『世界』へ目を向ける。

だから、てめえらは いつまでたってもウダツがあがんねえんだ。

┐

ランプの微弱な明かりが、わずかしか手元を照らさない。

おまけに馬車の揺れが激しく、本の文字は ことごとくブレている。

戒は必死に目を細めて、それに抗^{あらが}っていた。

「世界…」

「流石、兄貴だぜ。」

手下の二人は うっとりとした表情で感嘆と賛美の声を何度となく口にする。

それに肩を震わせる戒。

「やかましいんだよ！」

辛抱堪らず、彼は硬いブーツの底を二人の顔面へとめり込ませた。

「試験勉強の邪魔だ！ ブツ殺すぞ、このクソ共！！」

馬車内に響き渡る怒号。

強烈すぎる蹴りを喰らった二人は背後の壁際にまで吹き飛ばされていた。

「……っさ、さすが兄貴…。ステキな台詞だぜ…。」

「やっぱ…修道士なんかにしておくには…もったいねえ…。」

ところが、鼻血を流しながらも、一向に熱い視線を失わない彼等。

その様子に、戒は肩と一緒に本もがっくり落としてしまった。

「猪族の村が 先程通過した国境付近の密林にあってな。」

馬車内の目立たぬ隅の方で、獣皮の雨具を頭から目深に被った四人組の中の一人が言った。

水気を弾くために染み込ませた油の香りが各人の鼻腔をくすぐる。

「何でも、最近その村長が大怪我をして瀕死の重体に陥ったそう
だ。」

「ああ、私も聞いたよ。」

助かる見込みも無かったらしいが、レバーナから派遣された若い
医者が見事に治してしまったらしい。

まさに それは神技^{しんぎ}だったという話だ。」

「そんな奴が一人でも自分の組^{グループ}にいたら、さぞかし安心できるだろ
うな。」

四人の中で、唯一の青年が口を開く。

「……ところで最近では、めっきり仕事が減ってるという噂だが、ウ
チは大丈夫だろうか？」

その青年に訊く、男。

「どういう意味だ？」

「いや今度、娘に子供が生まれるんだ。いい暮らしをさせてやりたいからな。

ガンガン稼ぎたいのさ。」

「…心配ないさ。

一人一人が普段から精進して、高い技術を提供している限り、仕事はウチに集まってくる。

それに……この世が平和だったためしは、ただの一時として無いのだからな。」

青年は生真面目にそう言って、脇に座る小さな同志にも優しく微笑みかけた。

疾走する馬車の速度により何も見る事がかなわない夜の森。

さらに月の光は厚い雨雲に覆われては届かず、ガラス越しに見る変わりばえしない風景が
いつにも増して気分転換にならなかった。

ほとんどの乗客が寝息をたてている中、戒は耳のピアスを弄^{いじ}りながら一心不乱に本を読み続けていた。

「あいつら…このクソ暑い馬車の中だったのに、雨具を脱がないんですよ……。」

怪しい奴等ですよね。」

戒に付き合っで起きている手下の一人が気まぐれに、不気味な四人組の方へ視線だけ向けながら言った。

「…そうだな。」

だが、そんなことに全く興味の無い戒は適当に相槌をうつ。

…路銀を稼ぐ為の仕事が思いのほか忙しく、最近では勉強が殆どはかどっていない。

あとは中王都市へ着いてから、一夜づけの連続でこなすしかないだろう。

いくら通っていた神学校の推薦で 大学を受験をするといっても、絶対はない。

面接は皆、どうせ猫をかぶり大差は生まれないのだから、結局のところ合否を分けるのは
実技試験の結果であるといえる。

ところが今のよう^{あわただ}に慌しく、過酷な状況ではそれに全くの自信が持てないのだ。

何故、こんなにも余裕が無いのだろう。

こんなことで自分の『夢』を叶えることなど、本当に出来るのか。

齒がゆい。

齒がゆい。

自分はまだ、こんな場所でくすぶっている……。

「ん……！」

そこへ突然、馬車全体の大きな縦揺れ。

戒は思わず壁に片手をついた。

その直後、車を引く十騎の馬の嘶いななきが遠くで聞こえた。

身体が一瞬 宙に浮く。

「ッ!？」

瞬間の衝撃。

気が付けば、皆互いに身体を押し付け合っていた。

「いてて！ 兄貴…踏んでる踏んでる！！」

無意識に自分の身体をクッション代わりにして自分の身を守った戒が、子分を下にしたままさらに立ち上がる。

「何だ……今のは？」

足元の惨状など全くおかまいなしに周囲を確認する戒。

急停車の衝撃は、乗客を缶詰の肉のように押し潰していた。

横転こそしていないが、馬車は ひどく斜めに傾いている。

大きく揺れたランプの光が、不安に駆られた乗客の表情を右へ左へ交互に照らしていた。

誰も一言も発さないまま、強い雨音だけが聞こえる。

「……うあああつあああん！！」

そして その静寂を破ったのは子供の泣き叫ぶ声だった。

戒はいち早くそれに気付き、動き出していた。

乗客全てが、その子供の様子に目を見張った。

近くににいる者達が駆け寄って、必死になだめようとするが、それは効かない。

子供の人差し指は、横へと直角に折れていた。

「この程度の傷で……わめくなクソガキ！
他の人間が動揺するだろうが！！」

そんな誰もどうすることも出来ない中、不意な事故に近付いてい
く　黒い修道着。

頬に傷のある、人相の悪い長身の男。

その子供の小さな手を、彼が乱暴に掴んだ時。

「おいっ…あいつ…！」

「なんて野郎だ…！」

雨具を纏った四人組の中の二人が思わず立ち上がる。

「待って！」

だが、傍の小さな者がそれを制した。

その男は子供の手を乱暴に突き放す。
それだけで立ち去ってしまった。

…あまりに不自然なその行為。

皆が呆氣にとられている中、誰かが子供の手が元通りになっていることに気付いた。

途端に広がる喧騒。

苦痛に歪んだ表情で、子供の怪我と同じ箇所をさすりながら目立たぬよう闇に消える男。

小さな者は獣皮のローブの隙間から、それを追う。

「何か…感じるものでもあったのか？」

脇の青年の問い。

「こんな中、あの人が一番最初に動いたんだ。
あの子供の親よりも…誰よりも。」

小さな者の唇が微笑んだ。

先ほど立ち上がった二人が、その会話に思わず顔を見合わせる。

「……よくわからんが…まあいい。

…それより、今の急停止。

何かあったようだ。」

「良かったぜ。

今回の旅、何も無かったら報酬は半分だったところだ。」

「不謹慎だな。

だが、俺もそう思う。」

青年は頷いて立ち上がり、二人の肩を軽く叩く。

小さな者もそれに続き、四人は静かな足取りで移動を始めた。

「おい……一体どうなっている!？」

停車してからもう五分だ。なのに何の説明も無いってのはどう

いうことだ!？」

戒達三人は、誰も居ない馬車の前部の奥へと車掌を連れ込み、高

圧的に取り巻いた。

「あんまダンマリ決め込んでると……良いことねえぞ。」

一人の手下が彼の襟元を掴み上げ、もう一人の手下がナイフを取り出す。

「……ラカーチュ泥鬼が出たんだ。」

その迫力に負け、力無く呟く車掌。

「泥鬼……」

三人は息を呑んだ。

「まさか……大群じゃないんだろ？」

そして子分の一人が、青ざめながら言う。

「全部で4匹だ。」

「……………！！」

この馬車……安全な行路を逸それたのか？

「……イヤ、そんなじゃねえ。」

戒の問いに答えたのは、そこへやって来た小柄な御者だった。

「雨が『結界』を流しちまったんだ。 奴等の大好物の汚ねえ泥と一緒にさあ。」

別に ここいらじゃ珍しい話じゃにえね。」

「……まさか結界を調達するまで、このまま ここで立ち往生……。もしくは後戻りってわけじゃねえだろうな!？」

御者を押しのけ、三人が出口扉のガラス越しに、外の様子を窺いながら叫ぶ。

前方に見える木々を越えて、うつすら見える動く影。
森にそびえる木と同じほどある背丈。

その異形の姿に、手下の二人は身震いした。

ボウオオオウウウウウウ……

「!?!」

泥鬼達の不気味な雄叫びに、戒も思わず身を強張らせる。

だが、自分の中の畏れを払拭^{はいつしき}する為、彼は勢いよく一気に扉を開け放った。

「おい！何をやって……！！」

その酔狂な行為に、御者と車掌は同時に叫ぶ。

「街はもう　すぐそこなんだ！

馬車が動かねえってんなら、徒歩で行ってやる！！」

「無茶だ、兄貴い！！」

前から雨と風。

背中に言葉を浴びせられ。

一歩外へと踏み出せば、異形のものの様子が一層よく見てとれる。

ぬかるんだ土を無造作に手の平一杯に握り、目と口だけの自分の顔に押し付けて、山を部分部分に作る泥鬼。

その行為はあたかも、人の顔を真似するようで哀れを誘う。

しかし、『その生き物』は数秒と経たぬうちに飽きてしまったのか、再び訳のわからぬ奇声を上げ、徘徊を始めた。

（確か、奴等には耳が無かったはずだ。　上手くすれば…逃げきれず…はず…。）

相手の知能の低さを直に感じた戒は、周囲の静止をよそに、身を隠す木を探しながら二歩目を踏み出そうとする。

だが、同時に背後から飛び出した集団に驚き、彼は思わず硬直してしまった。

大斧、弓矢、刀……それぞれの武器を背負った、獣皮で出来た雨具を纏う四人組。

最悪の足場をものもしない軽い身のこなしで、瞬く間に駆け出して前進して行く。

「ボク達に任せて。」

彼等の中でも一番小柄で、唯一何の武器も持たない者が戒へ一声かけた。

少女の声だった。

「おいおい……。あの人数で叩くつもりか？」

「『一人一匹』ってわけじゃなかろうに、無茶だ……。」

戒の二人の手下は呟く。

「罔くらいには……なりそうだな。あいつら。」

戒の考えも すぐには変わらない。
タイミングを見計らって再び進もうとする。

「彼等に任せておけ！

こういう時の為の『アイザックの傭兵団』だ！」

それを制したのは、車掌の声。

「アイザックの…？」

戒は振り向いた。

剣聖ロンファン・アイザックの下に集まった精鋭達によって構成される、大陸最大級の傭兵集団の名。

それは世界に数々の支部と団員を持ち、その実力と絶対的な安定感で、大陸において最も信頼できる傭兵団であることくらい戒も知っていた。

（……………どうする？）

進むか、留まるか。

戒は横に首を振った。

(…こんなことくらいで……迷うな…)

重い両膝に力を入れて、全身を後ろに振り向かせる。

手下の二人が安堵するのが見えた。

瞼^{まぶた}に垂れる雨の雫を拭いながら、戒は恨めしそうに密林を振り返り 木々の間の不気味な闇を見詰めた。

留ませたのは、自分の意思か。

それとも あの少女の声か。

戒には解らなかった。

一人の傭兵が信号弾を撃ち終えてから大きな息をつく。

その筒は暗中でもよく映^はえる、光の煙を立ち上らせながら白み始めた空に消えた。

各自、雨具に返った内臓、血液、脳漿などを丁寧に拭いながら切り株に腰掛け、休息をとり始める。

「神呪^{シンジュ}の子。」

一通りそれが済んだところで 青年が雨具のフードを外し、小さ

な隊員に声をかけた。

「隊長？」

強い雨の為、小さな隊員はフードを外さずにそのまま応える。

「確か、契約は次の街までだったな。

だが、お前を失うのは惜しい。出来れば、俺達と一緒に……」

「ありがとう。でも……」

小さな者が口ごもった瞬間、青年は自分の群青色の髪を照れくさそうに掻いた。

「いや……すまん。今の言葉……忘れてくれ。」

「……ごめん。ボクにはどうしても叶えたい夢があるんだ。そのためにも世界中の色々な所を回らなきゃ……。」

「もしかしたら お前にとって世間は厳しいかもしれない。

でも、負けるなよ。

そして……頑張れ。」

そう言って、青年は首から下げたメダルを小さな者に手渡した。

気持ちは同じなのだろう、他の団員達も自然と笑顔になる。

「…ありがとう。」

その祝福に、小さな者は大きな笑顔で応えた。

やがて、鈍い車輪の音が近付いてくる。

雨はあがり始め、強い風によって雲は運ばれ、陽の光が徐々にのぞく。

四人は馬車が来るまで 共にそれを見上げていた。

ぬかるんだ土に足を付けると、^{かかと}踵がすぐに沈んだ。
まさに泥鬼が好む、うってつけの状況であったことを確認する。

横たわる四体の、大きな人の形をした褐色の巨大な骸^{むくろ}。
だが、その異常に長い四肢は ところどころ切断され、地面に散乱していた。

何かの術の仕業であろう。

中でも、腹が三分の二ほど大きく半円形にえぐられている屍^{しかばね}は—
際目を引いた。

あたりに漂う、それらが生前に食したものがごちゃまぜになった

臭気に思わずむせかえる。

遙か昔、大陸の『果て』で発生したと云われる凶獣。

泥鬼は その中でも最も知能が低く、大聖典においては『人の出来損ない』と

蔑^{さげす}みの言葉で記されていたことを思い出す。

「兄貴！」

戒は、背後からかけられた言葉で現実を取り戻した。

「馬車が点検を終えて出発するそうです、早く戻りましょう！」

すっかり晴れ渡った空。

視線の遙か向こうに、レバーナ自治港の高い灯台が見える。

まだ冷える風の中、屍達に一瞥^{いちへつ}くれてから、戒は胸元から出した小さな赤い十字架を強く握りしめた。

「『世羅＝ディーベンゼルク』……名前からして、出身は瑠邑ルムラの国か。」

建物全体が心地よい檜ひのきの匂いで覆われた　小さなギルドの建物の中で、親方はそう言った。

「すごい。」

なんでわかったの？」

卓を挟んで、世羅と呼ばれた少女が　つま先を上げて応える。

澄んだエメラルドグリーンのかなかな瞳。

薄い紫の髪、ポニーテール。

それに良く似合う濃い紫を基調とした、黒の線で幾何学模様の入ったスリーブレスの上着。

膝上までの半ズボンは　いかにも少女的だったが、左だけ二の腕まで覆った　黒くて長い手袋は

対照的に貴婦人が着けていそうな代物だった。

さらに両手足の皮手袋・ブーツに加え、尖った赤いリボンは挑戦

的な印象さえ与える。

そんな個性的な姿ではあるが、幼いながらも不思議と美しさを感じる顔立ちは少しならず目を引いた。

だが、あまり容姿を凝視するのもはばかれたので、親方は何気なく卓上の仕事予定表に視線を落とす。

「知り合いに『そこ』の出身の奴がいてな。それでだ。
…で、何が出来る？」

「源法術。」

少女はぶっきらぼうに言う。

口の利き方が玉にキズだな、と親方はすぐさま思った。

「源・衝^{フェル・ド}、氷・生^{チス・キ}が出来るよ。」

「出来るって…それだけ？」

「うん。それだけ。」

親方はそこいらの素人でも使えるような基本的な術の名を何の臆面もなく挙げられて困惑した。

このように、大陸中の仕事の依頼が集まる『ギルド』の仕事の大

変さと、己の実力をわきまえずに
安易な気持ちでやって来る若者は、ごくたまにいる。

「カトリアヌ。 この子の相手を。」

半分あきれ顔で、親方は後ろの広間で資料を整理している女性型
魔導人形へ命令した。

親方もその程度で仕事を探してもらっては迷惑だ、と本人に直接
言ってしまうが良いのだが、
人の良い性格のためか『仕事の説明』という流れから やんわり断
るよう、その役目をいつも
魔導人形に任せていた。

心の無い人形の言葉ならば、言われた方も傷つかないと考えてい
るのである。

「はい。 親方様。」

人形の細長い腕で部屋の奥を促され、それに素直に従う少女。

だがその直後、人形は急に扉の方へ向き直り、90度腰を曲げて
礼をした。

「いらつしやいませ、チバステインⅡデスタロッサ男爵。」

全てを行動を超えて優先されたその言葉に、親方は作業中の卓から目を離して扉を見る。

帽子から靴まで全て白づくめ。

背後には馬車と数名の護衛。

そんな太目の男性がステッキと大きいトランクを持って扉を開け放って居た。

「これは…男爵。

こんな辺境まで自らお越しとは…。」

「まいった。」

サングラスを外して小さな目を不機嫌そうに泳がせる。

そして眼球を回しながら室内を観察しつつ 彼はギルド内へ入った。

「中王都市を出てから もう一年になる。

ここのととは海路だ。 やれやれだな。」

「今日は一体どのようなご用件で？」

「勿論、仕事の依頼だ。

…ああ、お茶はいらんよ。 すぐに帰る。」

ペンを置く親方に先んじて言う男爵。
親方もそれに従う。

表面上は民間の依頼だが、本当の依頼主が政府であるということを強調するため、要人が直接ギルドに足を運ぶことは珍しいことではなかった。

デスタロツサ男爵はその中でも特に抜きん出た『マメさ』で、中王都市の実力者となった人物。

ただ、一年のほとんどを他国で過ごすため、皮肉にもその立場があまり意味を成していないことは本人以外皆が知るところである。

「依頼の成功の確率は、依頼した量で上がる。
そのためには、いくら辺境とて例外でなく回らねばな。」

「……仰るとおりでございます。」

親方は儀礼的に深々と頭を下げた。
そんな彼に、男爵は自慢げに大きくひとつ鼻息を吐きながら、束になった書類を手渡した。

「……こんなに飛翔艦乗りの需要が……戦争の準備でもするのですか？」

受け取った書類のほとんどが、飛空艦乗りの仕事であるのを一通り確かめると親方が言う。

「なんと人聞きの悪い。」

男爵は襟元を直した。

「最近、飛翔艦乗りを雇って不穏な動きを増やしつつある隣国に対抗すべく、

我が国では国土防衛政策の一環として、同じような対抗措置を執^とっているだけのこと。」

一度、咳払い。

「何よりも、これは摂政のゼン閣下の命である。

一介のギルドの支部長が意見出来ると思っているのかね？」

「い、いえ…意見だなんて…」

親方は額の汗をハンカチで拭いた。

「ただ…ギルドの仕事も……個人向けの仕事は少なくなってますまいりました。

これでは、飛翔艦乗り達のみがますます有利に…」

「早く時代の流れに乗りたまえ。

もはや時代は飛翔艦……『求む、飛翔艦乗り』、なのだよ。」

そこで唐突に、南向きに造られたギルドの建物内が一瞬にして暗転した。

窓ガラスが小刻みに震え、響き渡る重低音。

二人はすぐに動きを止め、外へと視線を移した。

「噂をすれば…だな。」

男爵が得意そうに口髭を撫ぜる。

「そつえば…今日でしたな。」

親方は口を開けっ放しにしたまま呟いた。

「……すごい!!」
「!?!」

そこで、急な少女の大声に 二人が顔を強張らせる。

いつのまにか部屋の奥から顔を出した世羅が、好奇の顔で窓の外を見上げていたのだ。

港町の建物群。

そのギリギリを航行する、卵型した鉄色の巨大な船。

その脇腹についた右翼にマーキングされているのは灰色の五つの
円 中王都市軍の紋章。

そして下部には、しっかりとした長い鉄の箱が付いており、大小
さまざまなガラスが入っていた。

傷一つ無いその姿は 陽の光を反射して眩しく。
速度を緩めては 悠然と大空を進んでいる。

「……あの娘は？」

「男爵……あまり お気になさらずに。
仕事探しの……者です。」

それ以前の者かもしれない そう思いつつ、説明するのも面
倒な親方は男爵に答えた。

「……君は飛翔艦を見るのは初めてかね。」

「うん、初めて!!」

自分が、男爵を男爵と呼んでいたのに気付いていないのか、それ
とも口の利き方が本当になっていないのか。

だが、その少女の自分に対する言動に 複雑な表情を浮かべる男
爵の顔を眺めることが出来たのは
親方にとって少し愉快なことだった。

「完全源炉配備、搭載可能重量 約20万G^{ガント}。

中王都市自慢の輸送飛翔艦、『ルベランセ』だ。

君も将来を見据えるのなら、各地の飛翔艦が集まる我が中王都市に来て、立派な飛翔艦乗りを目指すが良からう。」

とるに足らない少女の言葉に対して、哄笑を口元に歪ませながら男爵は応戦した。

「そっか、教えてくれてありがとう！

ボク、飛翔艦乗りになるために旅をしてるんだ！！

立派な、ね！！！」

「……せいぜい頑張るがよい。

……では、私は次の街へと急ぐよ。」

嫌味を素で返され、男爵は暫く面食らっていたが、必死に平静な顔を繕^{つくろ}ってギルドを後にした。

ところが世羅はというと、その後も一向に奥に戻らずに空を眺め続け、その飛翔艦に見入っていた。

夢中で瞳を輝かせ、微動だにしない彼女の様子に、親方も『仕事の邪魔』とは言いにくい。

結局、彼は卓上の葉巻入れから一本抜き、火をつけた。

「『生まれ変わり（ルベランセ）』とは良く言ったものだ。」

大聖典に ところどころ記された『神の言葉』を飛翔艦の名前に

付けることは一種の慣習であり、
珍しいことではなかった。

技術がいかに進歩しようと、何か神秘的なものに　あやかろうと
する人の様。

それを思いながら、親方は苦笑混じりに続けた。

「体が真新しいだろ？」

実は、あれは『ギュレートル』という古い戦略飛翔艦を改修した
ものなんだ。

…とはいえ、表面を塗っただけで、武装も何もかも全てそのまま
だね。」

「戦略飛翔艦？」

「確か、今の艦長は中王都市軍のお偉いさんの息子でね。

そいつは正式に入隊したばかり。

まずは安全な輸送隊に所属させ、ひとつ仕事を成功させて『ハク』
を付けさせようってワケだ。

それにしても、子供には過ぎたオモチャだが……。」

「……『ギュレートル』ってどういう意味？」

飛翔艦の尻が見えなくなったところで、世羅が訊く。

親方は葉巻を口から離して、大きく息を吸った。

「おお、世界に燃え盛る業火を鎮め給え。」
大きな炎は小さな火を飲み込んで。 数千の日を焼き続ける。
」

煙を鼻から出しながら、ギルド全体にいき渡るような大声で詩を歌う。

「私の魂と汝の魂を引き換えに。」
焼き払えつ、燃やし尽くせつ、おお『炎の翼』^{ギョレートル}。」

親方は、葉巻を灰皿に押し付けた。

浅い海面へ無事着水した艦内は 常に微量に揺れていた。

「停泊完了なの。」

統括念通士のメイが念通球を耳に付けながら、満面の笑顔で言った。

「今、^{いかり}錨も下ろした。
艦体固定も完了。」

保安念通士リードの各部チェックにより、ブリッジ内全ての乗組員が緊張から開放される。

「みんな ご苦勞様。」

見計い、ブリッジ内で一番背の高い椅子に座った女性がねぎらいの言葉をかける。

それを合図に皆、堅い椅子の上で態勢を崩した。

『ルベランセ』の記念すべき処女航行となった今回。
出発して早、半月。

鉄都バルバレイへ赴き、物資を運んで来る任務も ここまでくれば完了も同然だった。

あとは 食料と水の補給を済ませれば、中王都市まで直行で帰れるのである。

ここ数日は天気も荒れ、精神をすり減らされるような中での航行により 乗組員全体の疲労も
はなはだ甚だしかった。

そのため特に、前回の中継地点よりロクに寝ていない……このブリッジと呼ばれる司令室の面々は
ことさら、青く晴れ渡る大空と 港街から臨む絶景に癒されていた。

「ところで、梅さんは？」

「さあ？　そういえば見かけないね。
ネズミでも追いかけているんじゃないですか？」

高い椅子に座った女性の言葉に、戦略念通士のデチャードが垂れた尻尾をさらに下げて答えた。

「そう…あまり不潔な『おみやげ』はブリッジに持って来て欲しくないのだけれど……」

「うああ……やっとレバーナかあ……。」

そこで、ブリッジ奥の大きな扉が開き、空気が重く一変する。

「もう少しで故郷だよ…、長かった…ああ…懐かしいなあ…。
パパあ…僕は頑張ってるよあ……。」

偉そうな金の肩当てを付けた一級士官用軍服を着せられたオカッパ頭の青年。

彼は半笑いを浮かべて、舌と鼠ねずみのような出っ歯をだらしなくのぞかせながら、足取りもおぼつかなく

前面のガラスにへばり付き、景色を眺めながら呟いた。

だが、その顔は蒼ざめて、細身の身体を震わせている。

「あ…出発の時間まで…休んでもいいよ。」

一通り自分の世界に浸った後、ようやく乗員全員の視線に気付き、彼は気楽に言った。

「ありがとうございます、ペツポ艦長。
ですが……お気持ちだけで結構です……。」

高い椅子…『艦長の座』に腰掛けていた女性は反射的にそこを降りて敬礼すると、神妙な面持ちで答える。

ここまで実際の指揮を執^とってきたのは副艦長のフィンデル、彼女であった。

「そう…？」

また離陸したら、中継地点まで休みはとれない…んよ？……うぷ。

「

口元を押さえるペツポに対し、乗員達は嫌悪の表情を抑えるがや
っとだった。

「艦長こそ……まだ部屋でお休みになられたほうが…」

そんな中で、フィンデルだけは優しく言う。

「そうかい……なら、そうするね……。」

さらにペツポの為に扉を開けてやり、見送った。

自分までもが感情的になる訳にはいかない。
フィンドルは唇を軽く噛んだ。

「つたく、あのボンボン。 才能が無いっす。

艦長本人が飛空艦酔いを起こすだなんて、聞いたことねえっすよ。

」

艦長の気配が完全に消えたところで、操縦士のタモンが舵に肘を
かけながら言う。

「さっきあの人、何もしてないのに『頑張ってる』って言ってたの。

」

「ふざけんなって！

副司令殿の愛息だか何だか知らねえが遊びじゃねえんだぞ！！」

「軍隊ってのは、これだからいかん…。 全て階級で決まってしまう
うのだからな…。」

それを皮切りに、並んで座っている念通士の三人も愚痴り合う。

「まあまあ、みんな… あともう少しの辛抱だから。」

どうせ国に戻れば、あの無能な艦長は 父親の威厳をもって格上の
飛翔艦へと配属されるだろう。

否、そうでなければ困る……そんな思いでフィンデルは軍帽を脱ぐと、水色の長い髪をなびかせて
扉へ向かった。

「折角だから、補給物資とは別に買出しに行つて来るわ。
みんな、欲しい物を言つて？ 私が自腹で買つてきてあげる。」

少しでも乗員の気が晴れればと、フィンデルは軽い気持ちで言つた。

途端に乗員達は全員、待っていたかのように表情を明るく一転させる。

「いちこのショートケーキ！ クリームは多めの……！」
「グレイプ・アルコールサイダー。つまみは……ブルーチーズでいいや。」

「ジャンホン社のクッキー詰め合わせ。 シナモン抜きで。」

皆口々に言つた。

「ちょ、ちよつと……」

「副長！ 醤油味のせんべいも忘れないで欲しいつす。」

早く行つてこいとばかり、連なる言葉にブリッジを押し出されるフィンデル。

「……みんな……副艦長への敬意なんて微塵も無いのね……。」

彼女は乗員達の遠慮の無さに肩を落としながら、長い廊下を歩いて行った。

「強いのかな？」

「古いが、強いさ。」

あれは16年前に終結した『アルドの反乱』の時も各地で起こった騒動の鎮静化に活躍した名飛翔艦だ。

中王都市には、あんな飛翔艦がゴロゴロと在る。」

飛翔艦が視界から外れた後も 興奮冷めやらぬ世羅に、親方はまだ付き合わされていた。

「…いいなあ。」

飛翔艦に乘りたいなあ。

……中王都市行きの仕事ってないかな？」

「ごくわずかの間で考えた後、世羅は言った。

「さっきの話、真に受けるのか。
はは、単純だなあ…どれ…」

それは一瞬の気の迷いだっただのかもしれない。

彼女の真っ直ぐな意気に負けて、親方は『全て』を忘れて言われるままに探してしまったのだ。

「……ちょうど今、男爵が持って来た依頼の中にあつた！
ギルドの紹介状を持っていけば、どの飛翔艦でも三級の搭乗証^{パス}を発行してもらえる……とある……」

そこまで言ってしまった直後、後悔。

ギルドの仕事はどれも甘くない。

「どんな仕事!?!」

「……しまった。……中王都市への『武具の輸送』とある。
……これじゃあ、か弱いお嬢ちゃんには無理だな……。」

慌てて訂正するが、後の祭りだった。

餌を前にした犬のように、世羅は瞳を輝かせて、すり寄って来る。

「無理じゃないよ、やれるよ!」
「無理無理!……大変な仕事だ。」

少女の細腕を眺めながら親方はすぐに言った。

「やれるったら！」

頬を膨らませた少女は、その場の勢いで胸元から小さいメダルを取り出していた。

それを見た瞬間、親方は飛び出るくらいに目玉をひん剥いたのだ。
った。

「……なんだと!!」

艦の発着場にされている港の受付で、頬に傷のある修道士の青年
戒の大きな声が一発轟いた。

「中王都市まで『人』は乗せられないだって!？」

「はい。飛翔艦『ルベランセ』は軍属につき、『民間人』の搭乗を
一切認めておりません。」

「軍属……?」

こいつは、輸送飛翔艦だって聞いてたぞ!？」

「…ですから、軍属の輸送飛翔艦で……。ただ今も輸送作戦の途
中です。」

全身から力が抜け、砂混じりの床にへたり込む。

だが、戒はすぐに気を取り直して立ち上がり、早口で続けた。

「別によ、寝る場所は荷物置き場でも構わねえんだ。とにかく目的地に着けりゃあよ！」

「今の説明…聞いてましたか？」

『民間人』は乗せられないんです。」

「理屈は解る！！」

だが、この街から中王都市までの便が何日無いか、お前も知ってるだろ！？」

「一ヶ月間ほど……ありませんね。」

受付の女性は手元の資料を眺めながら、事務的な態度を崩さずに言った。

「それじゃ遅いんだよ！！」

俺様は2週間以内に どうしても中王都市に行かなきゃならねえ！！」

「2週間…馬車じゃ…到底間に合いませんねえ。」

「だろ？ 解ってくれたか！？」

「はい、『それ』は解りました。
ですが、乗せることはできません。」

「……何故だッ!！」

戒は頭を抱えて雄叫びを上げる。

「『規則』だからです。

これを破りますと…中王都市政府によって…私がコレになっちゃいますんで。」

受付の女性は笑顔を作ると、手首を手錠にかけられる仕草を示した。

「ぐうううう……!！」

「お気の毒様です。」

「本心から思っただろ？ ええっ!？」

ヒステリックに机を叩く戒。

その時、受付の奥から、頭にターバンを交差して巻いた太めの男が酒瓶を片手に飛翔艦から降りてくる。

「…どうかしたのか？」

その男は戒と受付のやりとりを興味深そうに眺めながら、赤ら顔

で言った。

「いいえ、終わりました。

お客様は今お帰りのようです。」

受付は戒に有無を言わず、きっぱりと言い放った。

戦いと輸送を司る、小型の飛行機。
その三機を配備した格納庫。

「副長、オシヤレしてどこへ行くんですか？」

整備に汗を流すミーサは、思わず呼び止めた。

目前に現れたフィンドルは見慣れた無機質な軍服ではなく、紫と黒のチェック柄のポロシャツと
白と黒の縞色ズボン、というラフな姿。

所々にアクセサリを付けて、顔にも薄く化粧を塗っている。

「ちよつと街まで。

普段、色気も何もありやしなからね。せめてこんな時にでも
好きな物を着込まないと。」

「いいですよ、それ。」

「とっても似合ってます。」

「あら、何を買ってきて欲しいのかしら？」

「はは、お世辞じゃないですよ。」

「私、いつも こんな作業着だし……そういう服が似合う副長が羨ましい……」

ミーサは洒落っ気も素っ気もない、自身の整備用の汚いツナギと彼女の姿を交互に見ながら、思わず作業中の手を休めて話しこむ。

「なあ……」

そこで戦闘騎の下から潜り出てくる、まだら模様の猫。

「あら、梅さん……こんなところに居たんだ。」

フィンドルは猫の目線まで屈みこんだ。

梅さんと呼ばれた猫は喉を鳴らしながらも、その場を動かこうとしない。

「ここ、弾薬や戦闘騎のために涼しく保たれてるから。きつと、居心地がいいんですよ……」

「おい、ミーサ！」

突然、戦闘騎の横から油まみれの体格の良い大男が顔を出す。

「喋ってねえで、俺の戦闘騎の整備を手伝ってくれ！！
ここ、俺の手先じゃ小さすぎて入らねえんだ。」

顎^{あご}に生えた無精髭で指に付着した油を拭いながら、大男は続ける。

「行つてあげて。」

フィンドルはウインクで合図する。

ミーサは頬を赤く染めて大きく頷いて走っていった。

「畜生！ あのクソアマあ！！」

ギルドでの戒の悪態は、温厚な親方さえあからさまに迷惑そうな表情を浮かべる有様だった。

「まったく融通が利かねえんだからよ！」

出されたミルクティーを、口から泡にして吹き出しながら叫ぶ彼。

「俺様がおとなしく頭まで下げてるってのに、何だあの態度!!」

「まあ、そう荒れるなよ、戒。」

彼の性格をよく知る親方は、頭を下げたことについては若干の嘘臭さを感じながらなだめた。

「うるせえ！ ほっといてくれ！」

「……まあ……お前を医者不足の村へ派遣してしまった俺にも責任がある。」

思いのほか長引いた仕事のせいで……

「……あんたに責任は無えよ。
旅の資金を稼ぐのだって、俺様にとっちゃ重要……だったんだからな。」

「しかし本来、中王都市行きへの便はもつと頻繁にあったのだが……最近のキナ臭い情勢だろうが、こんなに極端に少なくなってしまうとは。」

親方は呻いた。

「中王都市が侵略戦争に踏み切るって噂か？」

歴史ではここ数十年、大きな国同士の戦争はねえ。

今更、危険を冒してまで戦火をあげる理由なんてどこにもねえだろくに。」

戒は呟く。

「俺も噂だと信じたいがな。」

「…だけどよ、これを逃したら本当に受験が出来ねえ…。
一体、どうすりゃいいんだ。」

受験日まで、あと2週間…どうにかして中王都市に行く方法はねえのか…。」

「……親方さま。」

戒が落胆する傍で、秘書の魔道人形が親方に耳打ちする。

「中王都市といえば…先程の依頼…」

「あー!!」

彼女の言葉に、みるみるうちに蒼ざめる親方。

「どうした?」

「い、いや…なんでもないよ……」

戒は肩眉を上げて、明らかに様子のおかしい親方の襟えりを両手で掴

んで持ち上げる。

「……目が嘘ついてんだよ！」
「教える！ 何を隠してる！？」

「……じ、実はだな……中王都市に行く方法があった。」

「……本当か？」

「あ、ああ……。」

親方は満面の引きつった笑顔で答えた。

「つい一時間ほど前まで……な。」

3

飛翔艦に乗ってしまったら一巻の終わり。

だが、その前ならばチャンスはある。

親方の話によると、『その少女』がギルドを出てからまだ二時間も経過していない。

それに普通、旅の前ならば色々と準備をするものだろう。ならば まだ この街の中のどこかに居るはずだ。

…いや、絶対に居る。

戒は楽観的な自分に嫌気を感じつつも、良い方に信じるしかなかった。

「ら…『拉致』つか!？」

仰天した手下の一人が裏声で叫んだ。

「やむをえねえ事態だ……さらに一時的に『暴力』も解禁する。」

飛翔艦ルベランセが停泊している浜辺付近の空き地。

戒は、集まった20名ほどの男達に向かって、大きな石の上に腰掛け、足を組みながら言った。

「まさか……『冗談でしょう?』」

手下の一人が半笑いで言った。

「……………あ？」

小さな丸眼鏡の奥から鋭い眼光がのぞく。

戒のただならぬ殺気に、一瞬で手下達は縮みあがった。

「ですが、『チンピラみてえな真似するな』って、兄貴自身が俺らを諭^{さと}して決めたことじゃないですか。
これを覆^{くつがえ}すには…相当の理由が必要…そして、それがスジってもんじゃねえですかい？」

手下の中の一人が勇気を振り絞って聞く。

「なりふり構っていらねえ。
この『俺様』が、そういう事態に陥っている。
……………そういうことだ。」

立てた親指で自分を指し、自信満々に答える戒。
その様子に、広場の小さなざわめきは大きな波紋として広がっていく。

「よくわからねえが、兄貴が本気^{マジ}ってことはわかった！俺は何でもやるぞ…！」

「お、俺もだ…！」

「久し振りに血がたぎるぜええええ!!」

戒が冗談を言うような人間でないことは、皆知っている。
困っていることも判った。

ならば、戒の男気に心酔している彼等にとって、動く理由はそれだけで充分だった。

「…で、具体的には何をすればいいんで？」

さらに自発的な声も上がる。

「先程も言ったように、今、俺様には捜している人物がいる。
そいつは、俺様から依頼を横取りした、悪いヤツだ。」

「そいつをとつ捕まえてくれればいいわけですね!？」

手下はすぐさま答えた。

こういう事には、恐ろしく頭の回転が早い。
戒は、くだらないことで感心させられる。

「その通りだ。」

正確には、ギルドの紹介状と依頼品だけが必要なのだが、できれば話し合いで決着をつけたい。

だが、抵抗した時……その時は 強行な手段をとっても構わねえ

ってことだ。」

「…なるほど。しかし、お言葉ですが兄貴。
このレバーナは広い。ただやみくもに捜し回っても……。」

「んなことは百も承知だ。
それについては策がある。」

不安が広がる前に、戒が素早く言い放つ。

「不器用なてめえらは、街で標的をしらみつぶしに捜すことだけ考
えろ。」

その間、俺様は最後の砦を兼ねて、あそこで待ち伏せる。」

「？」

初めは一樣に困惑した表情を見せていた手下達だったが、戒が街
と浜辺を繋ぐ『唯一の一本道』を
指差したところでようやく理解した。

「さすがは兄貴、卑怯で姑息だ!!」

「兄貴!」

「兄貴イイ!!」

手下達による『兄貴コール』が、広場に瞬く間に巻き起る。

「　　うるせえ！
話はまだ終わってねえんだ！！」

別段、大した作戦でも無いことを十二分に解っている戒は、うんざりとした表情で手下達を怒鳴りつける。

そして一瞬にして静まり返った場に対して続けた。

「これから標的の大まかな外見を説明するから憶えろ！

それは『小柄』で『ポニーテール』の『少女』！

服は『黒い模様入りの濃い紫』！

あと、とんがったりポンを付けているとか、長い手袋とか、丈の短いズボンとか細かい特徴があるが、

どうせバカには憶えられねえだろうから割愛する！！」

声を張り上げるのは、より印象づけるため。
さらに解りやすく、注意して言葉を選ぶ。

そして手下たちは皆、指折りでその特徴を復唱しながら、必死な表情で情報を脳に詰め始める。

「そして……」

そんな様子を眺めながら、戒は一度、間をとった。

「そして…俺は　この作戦が成功したら、すぐに中王都市へ出発す

る。」

その一言で空き地での熱気は一転、再び静まり返る。

「だが、俺が居なくなっただ後も、昔のようなバカな真似は絶対に許さん。

元気が有り余ってるんなら別の所に使え。

もしも、俺が居なくなっただのをいいことに、チンピラ家業に戻るようだったら…

いつでもブン殴りに帰って来る…そのつもりでいろ。」

天空を見詰め、遠い目をする戒。

「別れの最後でワガママを言って悪いが…お前達の力……俺様に貸してくれ。」

それは手下にとって、ちょっとした演説だった。

いやがおうでも、テンションは上がり、広場の熱気は最高潮に達する。

中には涙すら浮かべて、今から別れを惜しむ者もいた。

(…にしても、あのアホ親方……。)

だが、そんな彼らを尻目に、当の戒本人は一人冷静を保ち、まる

きり別のことを考えていた。

（俺様が中王都市へ行きたいのを知っているながら うっかりしやがって。

おかげで、こんな面倒くせえこと言っで、こんなバカ共の力を借りなきゃならねえハメに…）

「兄貴…もう止まりませんか？」

とても暑苦しい空間の中、一人の手下が小さな杖を手の平と親指で噛みながら耳打ちした。

「…殺さなきゃ…いい。」

その後は俺様が何とかする。」

「…まあ確かに…兄貴の『能力』なら何とかなるな。」

「………怪我するのが、お前達じゃなけりゃあ、いいが。」

ボソリと呟く戒。

「冗談でしょう？」

俺ら腐っても、そこいらの女ごときに遅れは取りませんぜ！！」

それを聞いた、子分の一人が言った。

「そ、そうだな……。」

しかし、さつき俺様が言った標的の情報は、あまり信用ならねえ。なにせこの情報の提供者は かなりのうっかり者だからだ。」

何も知らない手下達の純な瞳。

戒は思わず視線を逸らした。

「とにかく、特徴なんかは若干の違いがあることを念頭に入れておけ。」

それとなく怪しいと思った奴は、片っ端から連れて来い。手柄を立てた奴には、それなりの報酬を出してやるぞ!!」

その言葉を皮切りに、手下は立ち上がる。

「よっしゃあああ！ 行くぞ!!」

そして掛け声一発、全員が声高らかに天へ拳を突き上げた。

……しかし、そんな中、戒は無責任に考えていた。

（標的が『アイザックの傭兵団』に居たって情報も……。何かの間違いだといいいんだがな……。）

港町の大通りでは、さして苦勞もせず大抵の物が手に入った。

フィンドルは仲間に頼まれた品物を大事に胸に抱えながら、街の緩やかな潮風の中に浸っていた。

初めは仲間の使いだけをするつもりだったが、本屋で自分の欲しい書籍も買うことが出来た。

自分が自分のために何かをしたのは、いつ以来だろうか？

今回の任務が終わりに近付き、やっと余裕が出てきたのだろうか。心穏やかに、時間を有意義に使えたのは本当に久し振りのことだった。

「ちょっといい？ おねえさん……」

背後からの声に、思考が止まる。

「ルツセンの鍛冶屋を探しているんだけど……。」

振り向くと、背の低い少女がうつむき加減で自分に声をかけていた。

「ごめんなさい、私もこの街は初めてで勝手が分からないの。」

あたりに誰も居ないことを確かめながら、フィンドルは言った。

「そっか……。」

「でも、知らない街を歩く時は上の方を見ながら……よ。」

そして、笑顔で指で上の看板を見上げる。

それは脇道を矢印で指して、『ルツセンの鍛冶屋まで200M』マイフトとあった。

「あ……。」

ありがとう！おねえさん！！」

少女は、お礼の言葉も程々に、ポニーテールを大きく振りながら、看板の指す方向へ元気良く走り出して行った。

（港街の子って、元気ね……。）

さほどの事をしたわけでもないのに、気分が良い。

（私も、あの子のような髪型にしてみようかしら？ 気分転換も出来そうだし……）

脇の店の窓に自分を映し、髪を上げる仕草をする。

「あーーーーーっ!!」

そこへ、爽やかな空気をブチ壊す前方からの男の裏声。

(え？ 何！？)

その男が指差した背後へ、紙袋を強く抱きしめて振り向くフィニ
デル。

が、そこには誰も居ない。

「発見ーーーー!! 兄貴の言ってた奴っばい!!」

「おい待て、違うぞ！

『女』と『服の色』は合ってるけど…『髪』が…ストレートの口
ングじゃねえか！」

「違うんだ！

今、俺の方を見て、慌てて髪型を変えたんだよ!!」

自分勝手な解釈。

なにか大きな勘違いをしている男。

彼は、もう一人の仲間らしき者に必死に訴えている。

(……………???)

フィンドルは関わりに合わぬが得策とばかりに、ゆっくりと踵きかづを返した。

だが、次の瞬間には、そんな悠長な考えは捨てねばならなかった。

「に、逃げるぞ！ 捕まえろ！！」

(……………え？……………ええっ！？)

それまでは疑心暗鬼の表情で話し合ってた男二人が、目の色を変えて突進してきたのだ。

「何か大事そうに持ってやがる！」

「きつとアレが依頼の品だぜ！！」

さらに、その脇道からも別の男が二人。

急な恐れが正常な判断を欠かせたのだろうか。

フィンドルの過ちは

口で誤解を解けば良いものを、そこで反射的に逃げてしまったことだった。

「おまえは、あっち！ てめえは、こっちに回り込め！！」
「他の班にも知らせろ！ 絶対捕まえるぞ！！」

彼女が細く入り組んだ路地を見つけ、隠れ込んだ時には 既に取
り返しがつかない事態になっていた。

逃げ道を変える度に、どこから湧いて出てくるのか、追っ手の人
数も増えてくる。

フィンデルはたまらず、料理店の出口脇に積まれた木箱の陰に身
を潜めた。

自分でも驚くくらい、簡単に息が上がっている。

（は、白昼堂々と暴漢が襲ってくるなんて……なんて危険な街なの？
安全基準をクリアしてるから……自治区なんだと思ってたのに……。）

そうでなければ、初めての訪れた街で屈強な男共に襲われる憶え
は無い。

何か理不尽さを感じながらも、次の行動を模索する。

「どこへ行きやがった！」

「ぶつ殺せ!!」

「バカ、殺すんじゃないくて捕まえて、兄貴に献上するんだろ。」
「絶対に捕まえてやる…兄貴の為に…ハアハア…」

遠くから聞こえる、悪い夢のような内容の怒号。

息を殺し、その場をやり過ごしながら考えを巡らせる。

(……飛翔艦にさえ戻れば……。)

心を落ち着かせ、冷静に周囲を観察すると、今居る土地は少し高いのか。

偶然にも海岸が左手前の路地から見渡せた。

慎重に…かつ迅速に、中腰のまま立ち上がり、その薄暗い道に入る。

わずかに坂になっている　その地面をを全力で駆けた。

一気に抜ける道の出口。

目の奥に真っ直ぐ飛び込んでくる陽の光。

それはとても眩^{まぶ}しくて開放的だった。

フィンドルは思わず両手を高く広げていた。

だが、それは危機を脱した嬉しさではなく。

出口の脇で待ち伏せしていた、男共が持った凶器に対してだった……。

4

「んあ……っ……!!」

自分の座席で仮眠をとっていたメイが突然跳ね起きた。

「どうしたっすか？」

「……潰れたの。」

タモンに尋ねられ、よだれと^{まいた}瞼を擦りながら答える。

「つぶれ……?」

「ショートケーキが潰れた夢みたの。」

「なんか不吉っすね…。」

「そうかねえ？ ケーキが潰れる夢が不吉なんて初耳だよ。」

真面目顔で間の抜けた会話をしている二人を眺めながら、デチャードがリードに欠伸あくび混じりに言う。

だがリードは ただ一人、先程から真剣な表情で仕事を続けた。
た。

「やはり…これは…いや、まさか…」

「……どうしたんだ？」

やがて独り言のように小さく呟く彼に、デチャードは訊いた。

「……先程から半径500Mマイフト範囲で索敵をかけていたんだが…」

妙な雰囲気、やがて全員がリードの言葉に聞き耳を立てる。

「ひとつ引っ掛かった。」

ブリッジの空気が変わる。

「ひとつつて……まさか飛翔艦っすか？」

その中で、タモンが恐る恐る尋ねる。

「いや……全然小さい。」

これは……きつと……戦闘騎のサイズ……だと思う。」

リードは耳につけた念通球から、脳内で空を飛ぶ小さな影を読み取った。

「どうするの？」

「……敵かもしれん。」

一応、こちらの戦闘騎にも迎撃の用意をとらせよう。
格納庫にリジャンとバークを！」

リードが慌ててメイに指示を出す。

「待った。」

この中立地帯で物騒な真似はまずい……。」

そこでデチャードも、急いで自分の椅子の前に置いてある念通球を取り、耳に付けた。

「……うん……？」

これは……ひよつとして……」

目を閉じ、作業に集中しながら複雑な表情を浮かべる彼に、全員
息を飲んで注目する。

「三本足の馬の紋章が見える……これは……中王騎士団の機体だ……」

「……中王騎士団だって？」

その事実^{ウチ}に耳を疑うリード。

「なぜ、この領域に俺達の国の騎士団が……？」

「私だって、わからないよ。」

少し緊張が和らいだのか、デチャードは前のめりの姿勢を直した。

「……とにかく交信しよう。」

そして、意を決した顔で言う。

「何だって、そんなことを？」

軍と騎士団は犬猿の仲だぞ。」

リードはすぐに反対した。
他の者もあまり良い顔はしない。

「たったの一機だ。何か理由があるのかもしれない。
それに…仮にも同国の兵士……。
察知している上で無視したとあつてはマズインじゃないか？」
だがデチャードの正論が混乱を収拾する。

「わかった。
……メイ。」

やや落ち着きを取り戻したリードは、喉を少し詰まらせながら言った。

「はい…なの。」

メイはそれに従い、一つの念通球をやはり耳に、もう一つを手前の机の窪みくぼみに入れた。

「聞こえますの？
戦闘騎の操縦士……。」

《…聞こえる…。》

すぐに三人の机の前に置かれた、四角い声通機からノイズ混じりの声が返る。

「一体、どうされましたの？」

《……戦闘訓練中……母艦とはぐれてしまった……。補給を求む……。》

その後しばらく、誰も喋る者はいなかった。
ブリッジ内に重い時間が流れ、不気味なノイズだけがわずかに響いている。

「どうする？ 副長は不在だし、艦長はベッドでオダブツだ。
勝手に判断を下してよいものか……。」

「ああ、確かに軍規に反する。 だけど、放っておけない。
……助けよう。
責任は全て私が取るよ。」

デチャードの覚悟の一言に、リードは頷いて同意をした。

「こちら、中王都市軍 第三補給部隊所属 輸送飛翔艦『ルベラン
セ』。

戦略念通士のデチャード少尉だ。
本艦責任者の代理として、補給を認める。 至急着艦されたし。」

《…こちら中王騎士団 白華^{はくか}所属 マクスⅡオルゼルア…。
貴艦の好意に感謝する。》

交信の終了と同時に、ブリッジ前方を疾風のように横切る銀一色の戦闘騎。

それが既に肉眼で確認できるくらいに近付いていたことに、ブリッジの面々は驚愕した。

無理もない。

戦闘騎独特のエンジンとプロペラの音が存在しなかったのだ。

極端に両翼が短いその機体は、海上に飛び出したルベランセの甲板に、まるで羽毛のように軽やかに舞い降りる。

リードは、見事すぎる操縦を眺めながら一抹の不安に駆られていた。

それはまるで、大聖典に記された人智を超える存在。

神の使い 『神使^{しんし}』を 何故か連想させたのである。

第一話 『求む、飛翔艦乗り』
了

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

1 - 2 「小道の上で」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 1

「From the sacrifice which should
be loved」

The second story
「On an alley」

頬の傷。

小さな丸眼鏡の奥の瞳は鋭く、挑発的なオールバックの髪と金色
のピアス。

近寄り難い黒色の修道着。

人との触れ合いは少なく、極めて非社会的。

新しく街にやって来た、そんな生意気そうな若者。

それを知った血気盛んな街の男共は それを逃すはずがなかった。

瞬く間に乱暴な挨拶が敢行されたが、彼はどんなに多くの者達に
囲まれても全く動じる様子は無かった。

若者のそんな異常さ。

加えて、背負うものの大きさに、男達はすぐに気付くべきだった。

一切の手加減の無い拳。

『相手を殺すことは無い』という絶対の自信から、全力で相手の
顔面に叩きつける。

小さな小競り合い程度で腕を慣らしていた男達は、その若者とそ
の戦い様に震えあがった。

さらに同時に、彼の色々な意味での強さに、尊敬にも近い感情が
一様に生まれていた。

やがて、いつしか街は静かになっていた。

二ヶ月後……再び喧騒に包まれる その日まで。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第一章

愛すべき犠牲より

・

第二話 『小道の上で』

1

「……これが依頼の品になる。頼むぞ。」

大型のレンズを両目を入れた鍛冶屋の主人が、畳の上に一振りの

刀を置く。

「…すごい…綺麗。」

細かく彫りの入った鞘と豪華な装飾の鐔つばと柄つか。

それを物珍しそうに眺める世羅の様子に、主人は満足げな表情で着物の袖を直した。

「銘めいを『レフリカ・ドラグーン』偽造竜牙』という。」

鍛冶屋の奥座敷。

囲炉裏と茶器を挟んで話す。

そこから望める庭内では、燃え滾たぎる釜の周りで滝のような汗を流して働いている男達が居た。

「中王都市に着いたら、その品と紹介状を向こうのギルドに渡せばいい。」

そうすれば報酬も向こうが渡してくれるだろう。

さて…」

主人が取り出した金属の輪、二つ。

「…一応、こういう輸送の仕事には『保険』をかけるのが決まりになっている。」

品を預けたままトンスラされちゃあ、かなわんからな。

いや、もちろん嬢ちゃんがそういうことするように見えん、あくまでも決まりだ。」

その輪を鞘と柄の方から それぞれ入れて、鐔を挟み込む。

世羅はそんな主人の作業を黙って眺めていた。

「…これはな、依頼主が持つ鍵でないと開かない仕組みになっている。」

防犯を兼ねた『錠』といったところだ…な。」

主人は傍に飾ってある頑丈そうな東方の鎧から籠手こてを外し、それを装着した後で刀の柄を握った。

そこで、世羅は慣れない正座に足を直した。

「これを盗もうなんて考えたらどうなるか…ヒヒ……」

目のレンズを怪しく光らせ、気色の悪い笑みを浮かべる主人。

「おやっさん！ ちょっと鍛冶場へお願いします!!」

だが刀を引き抜く、まさにその時、若者が突然部屋に舞い込んで叫ぶ。

「なんだ！

今、接客中だぞ静かにしろ!!」

「す、すみません…。」

でも…お願いします! おやつさんに火加減見てもらわないと…!」

「火加減だあ?

失敗してもかまわん、自分達でやれ。

さもないと練習にならんぞ。」

「イヤ、それが…早急に『商品』を『たくさん』作らないといけないんです!」

「?」

「ついさっき、ウチの武器が全部売れちまったんですよ!」

「……全部だとお?」

主人は思わず片膝を立てた。

「ガラの悪い若者達が一杯押し寄せてきて…全部買っていったまっ
て…。」

在庫もカラで!

早いところ、新しいのを作らないと!!」

「……確かにこの街で武具はここでしか手に入らねえからな…。
しかし…いったい何に使うつもりだ……? おい、おまえ、用途
は聞いたのか?」

彼の言葉に対し、弟子は首を振る。

「いえ…迫力に押されて…うむを言わず売った買ったになりました…。」

ただ…『最後のひとあばれ』とか、物騒なこと言ってたのを聞きました…。」

「……まったく、しょうがねえやつらだ。
最近来た若造にシメられて、少々おとなしくなったと思っただろ。」

再び、主人は静かに正座する。

「しょうがねえ…。
わかった。今日は看板を下げたおけ。
だが今は客が来てるからな。……後に行く。」

弟子は頷いた。
だが一向に部屋を出ようとはしない。

「なんだ？」

「あの…どういふ関係ですか？ その子と…」

そこで、話の腰を折られたために、再び刀の装飾を眺めるのに没頭していた世羅が
弟子と不意に目を合わせる。

彼女の瞳に凝視されて、彼は思わず頬を赤く染めた。

「鼻の下伸ばしてるんじゃないよ。
ギルドの依頼を受けたモンだ。 中王都市まで例のブツを運んで
もらう。」

「……なに…言ってるんですか？ おやっさん!？」

「なにって何がだ？」

「こんな『やわ』そんな子にできる仕事じゃないでしょう!？ そ
れは…」

身を乗り出して、弟子は主人に詰め寄った。

「それにこれは…あの組織の注文…」

「それ以上、言うな！
この子が出るって判断したのはギルドだ！ ならば出るんだ
ろっよ!!」

主人の大声に、庭内で仕事中の男達は思わず作業を止めて目を向ける。

「……出来るよな？」
「うん！」

さらに主人の問いに自信満々で即答する少女。
弟子は思わず固まった。

「それにな、この炎と煙と男の汗が充満した鍛冶屋で嫌な顔ひとつしねえ。

俺は気に入ったんだよ。」

見ず知らずの少女に、少なくとも主人は本気のようにである。

「……おやっさんもギルドもどうかしてらあ!！」

座敷の中で、呆れかえった弟子の叫びと、ししおどしの音が同時に響いた。

「何だか、俺様の想像とは かなり違うんだがな……」

フィンドルを見下ろしながら、戒は彼女の顎を軽く持ち上げて呟いた。

両の腕は後ろで縛られ、周囲は刃物を持った男達。
目の前には彼らの頭と思われる…より一層に人相の悪い…頬に傷のある男。

身動きがとれないながら、フィンデルは膝小僧を地に付けたまま、恐怖で身体を精一杯後ろに退く。

ここは浜辺に近い空き地。

滅多に人も来ないに違いない。

自分の不幸。

そして、迂闊に艦を離れてしまった後悔で、フィンデルは目に涙を溜めた。

「髪型が全然違うぞ。」

「イヤ、ほら、こうすると…」

「…いつ…いたた!!」

不満そうな戒の様子に、手下の一人が、慌ててフィンデルの長い水色の髪の毛の根元を乱暴に掴む。

「見事にポニーテールでしょ？　でしょ!？」

「……まあ…確かにな。」

戒はまだ納得いかない口調で言った。

(…コレってひょっとして品定め…！？　ふうええええ……。)

人身売買……フィンドルは自分が想像しうる限りの、一番最悪の事態を目の当たりにして一気に絶望する。

「そつ、それに逃げたんでさあ。

兄貴、言っただじゃないですか、怪しい奴がいたら捕まえて来いって。」

別の手下が付け加えた。

「しかしな……聞いていたよりも…年増なんだが…」

「な、なにそれ、失礼ね!!」

今までは恐怖で一言も声を上げなかったフィンドルは、そこでようやく口を開く。

「私、まだ『28』よ！」

この年齢だつて……お客にも、きっとまだニーズがあるに違いないわよ!!」

「…ニーズ？」

「客？」

子分と戒が目を見合わせる。

「なんか勘違いしてるようだが……まあいい。」

服装や髪型に関して異なるのは さほど問題ではなかった。
いつまでも『それら』が同じという保証は無い。

「…で、荷物は？」

フィンドルを捕まえてきた者達が持つて来た紙袋を調べている子
分に訊く。

「これといったもんは無えです、兄貴。
中身はお菓子ばかりで……。」

「フン…こんなに沢山か。あまり食うと太るぞ。」

「別に…私が食べるわけじゃ……」

意地悪そうに言った戒に向かい、フィンドルは真っ赤になって否
定する。

「あとは…こんな本があるだけで。」

「どれ、かしてみろ。」

戒は子分から二冊の本を受け取ると、それを適当にめくってみた。

「『航空戦略／上級編』…それに『誰にでも出来る念通術』…？
なかなか難しそうな物を読んでるじゃないか。」

時折、眼鏡を直しながら、一枚一枚、ページの間を熱心に確かめる仕草。

（……………？ この人、何か…探してる…？）

内容そのものには興味が無さそうだが、戒の丁寧すぎる動作にフインデルは違和感を覚えた。

「兄貴…ブツは…？」

「無い。 本の中には挟んでないな。」

本を乱暴に畳み、紙袋の中に投げ入れる。

そして、再び高圧的に彼女を見下ろし、睨みつけた。

「ディーベンゼルクさんよ、ブツは一体どこにある？
隠すと痛い目に遭うぜ。」

「…だ、誰のこと！？」

私の名前はフインデル…。

貴方達の目的は全くわからないけど、私は軍隊の飛翔艦の副艦長

をやってるの。

今、みんなのおつかいで降りていて……この街も初めてだし、多分、貴方達は人違いをしてるんだわ……。

だから……お願いだから帰して……。」

説得するべく、声の調子を穏やかに、皆を諭すように。

だが慌てているためか、そのフィンドルの言葉はいまいち要領を得ていなかった。

「だまりやがれ。」

思いは全く届かず、戒は悪魔のような形相でフィンドルに近付いて来る。

「嘘をつくのなら、もっとマシな嘘をつくんだな。」

部下のパシリをする副艦長が何処の世界にいるんだよ。

さつさと紹介状と依頼の品を出せ。早くしねえと……あの飛翔艦が発しちまう。」

空き地の向こう、海上にそびえる飛翔艦の方へ顔を向ける戒。

「な……！？ ルベランセに何の用が……？」

「俺様は中王都市へ行かねばならねえ。」

フィンドルの襟元を掴み、自分の顔に近付かせ、凄みを利かせながら言う。

「どんなことをしてでもな。」

その顔は恐ろしかったが、決意が込められていた。

「あ、兄貴!」

「止めるな、俺様は本気だ!」

手下の言葉にも微動だにせず、さらに襟元に加わる力強さに、フインデルは言葉を失った。

「ち、違います……!!」

あ、あそこ……あ、あれ!!」

そんな中、一人の子分が指差したその先は、飛翔艦の停泊所へと続く小道。

そこを、とことこ歩くの背の低い少女に、広場にいる大勢の子分達も戒もフインデルも、全員しばらく注目した。

その娘は布に巻かれた長い物体を持ち、旅荷物を背負い、一心不乱に前を向いてゆっくり歩いている。

背は低く、遠目にも判る薄紫色のポニーテールに、濃い紫を基調とした黒い紋様の入った服。

尖ったリボン。

さらに詳しくは、左手全体を覆った手袋に丈の短いズボン。

ギルドの親方から聞いたとおりの　そんな人物が歩いていた。

「……………あれだ……。」

戒は一瞬で判断。
力無く呟いた。

2

「おい……折角、俺様が街を厳戒態勢にしたのに、何であんなわかりやすい奴が平気で歩いているんだ!？」

「な、何でしょ?」

空き地を全力で走りながら戒が叱咤する。

子分達は困惑して、それぞれの顔を見合わすばかりだった。

「…なら、教えてやる…。」

それはな…てめえらが全員、ここに集まっちまってるからだ!!」

「あ……。」

「バカみてーに、偽者の女を全員で追っかけやがって!」

「ご、ごめんよお、兄貴……。」

最後だから、みんな手柄が欲しかったんだ!!」

「偽者っていうか、全然似てないんだけど!!」

あなた、一体どんな指示を部下に出したのよ!？」

「…って、なんで、お前までついてきてるんだよ!？」

縛られたまま、大柄の手下のに抱えられているフィンデルに向かって、戒が足を止めずに叫んだ。

「これが、ついて来てるように見えるって言うの!？」

「離してやれ!」

戒の大声で、ようやくその手下は気付き、フィンデルを下ろした。その間に、他の子分達は小道を歩く少女を取り囲むべく散開する。

「奴等はバカだから、三つ以上のことを憶えられねえんだ。それが、お前が間違えられた理由だな。」

戒はフィンドルを束縛する荒縄を解くと言った。

「災難だったな。行っていいぞ。」

そして紙袋を乱暴に投げつける。

（な…なんで他人事なの！？）

全く悪びれることのない様子にフィンドルは心底呆れた。

再び少女に真っ直ぐ走り出す戒。

彼を漠然とした目で追いながら、彼女はあることに気付いた。

（……うそ！？ ……た…たた、大変！！）

その少女は街で自分に道を尋ねてきた娘だったのだ。

（な、なんとかしなきゃ…）

だが心と裏腹に、足は集団から離れ、弧を描くようにして広場の
大木の後ろに隠れる。

身体が恐怖に包まれつつも、彼女は何故かその場から離れること

が出来なかった。

「おい、そこのお前！　ちょっと待て！！」

「……！！？」

自分の声に反応し、立ち止まり振り向いた少女の顔を見る。

戒は凍りついた。

今まで見たことも無いような、均整のとれた顔の輪郭。
潤いのある唇と、曇りの無い瞳。

（クソ親方……てめーの言ったとおり、ホントに……綺麗じゃねえか。
こんな時だけ正確な記憶出しやがって……。）

思わず唾を飲み込んだ音が、自分自身の耳に聞こえた。
だが、それによりすぐさま我を取り戻す。

既に、手下達は少女を完全に包囲していた。

「それ以上……飛翔艦の方へ近付くんじゃねえ！！」

戒の言葉を皮切りに手下は全員、刃物を抜く。

そこで少女は表情を一瞬にして変えた。

「……………そうか…」

この『刀』は渡さないぞ！

これを守るために中王都市へ行くんだから！」

手にした棒状の布巻きを抱えこむ少女。

「刀…？」

戒と手下が動きを止める。

「？」

その様子に、少女は不思議そうに首を傾けた。

「おまえ…名前は『世羅』デーベンゼルク…だよな？」

「そうだよ。……………なんで、ボクの名を？」

さらなる戒の質問に、少女は素直に即答した。

「…こいつも……………バカだ。」

俺様に考えがある、少しの間、お前達は黙って見てろ。」

傍らの子分に耳打ちし、世羅に向かってゆっくりと歩き出す戒。

肩をいからせ、鬼気迫る恐ろしい顔で近付いてくる、そんな男。反射的に、世羅は身体を強張らせた。

「戦うつもり!?!」

「……頼む!!」

だが身構える世羅に対して、その恐ろしい形相の男は意外にも頭を下げる。

「その仕事…俺様に譲れ…いや、譲ってくれ!!」

「……?」

「俺様の名は『戒』セバンシュルド』。

頼む、同郷の生まれとして、俺様の一生の頼みだ!!」

「……え…。」

同郷と聞き、気が緩む。

「俺様は、二週間以内に中王都市へ行かなければならねえ用がある。

その仕事を譲ってもらえないだろうか。……どうしても必要なんだ。」

「……………」

警戒を解くように肩の力を抜く世羅。
しかし次の瞬間

「今だー……ッ！！ いただいたあー！！！」

そこへ無闇にテンションが上がった、暴走する子分達が刃物を手に 一気に襲い掛かる。

「！！！」

世羅は それを寸前で上手にかわし、全員に、戒に向き直った。

「バ……バカ……！」

何やってんだデメエら！！！」

戒は思わず両手を横に広げ、手下全員を見回して叫んだ。

彼にしても予想外の手下の行動 。

「だって……こういう作戦でしょ！？ 兄貴！？」

笑顔で振り返る子分達が、非常に憎らしい。

「バカが！ 『刀だけ』 奪っても意味がねえんだ…… 見る！！」

世羅が荷物から一通の封を取り出し、それを急いで自分のズボンのポケットにねじ込む。

「あの『ギルドの紹介状』を血に染めるわけにはいかねえ！ これで面倒なことになっちまった！！」

眼前の少女はもはや、怒りのこもった目で自分達を睨み回している。

「話し合っフリをしてだますなんて、汚いぞ！！」

「誤解だ！！」

戒が言うよりも早く、世羅は荷物と刀を道端に置き、踵^{きつす}を返しては反対方向の手下達の半分に向かって走りだした。

小柄な彼女はさらに態勢低く、右の手の平を大きく広げて、彼等の懐^{ふところ}に恐るべきスピードで飛び込んで行く。

「ばかめ！ 自分から来るなんてな！！」

もはや歯止めの利がなくなった手下達のナイフが乱舞する。

それを器用に縫いながら、世羅は最後に軽く跳び、集団の中心に入った。

「……《源・衝》！」
フェル・ド

振りかぶった右手は地面に勢い良くぶつけられ、一瞬、黄色い光が地全体から洩れ、収束。

そして、すぐに地は山のように盛り上がり、破裂。

吹き上がった砂利と雑草混じりの土に押されて中空へ舞い上がる手下達。

蜘蛛の子を散らすように彼らが落下した直後、砂煙の中から軽い身のこなしで側転しながら世羅は現れ、すぐに戒と残り半分の手下達に狙いをつける。

「今……あいつ、一体何をしやがった！？」

まるで大砲が着弾したかのような見たことも無い破壊力に、戒達は状況をすぐには理解できなかった。

「『源・衝』……とか聞こえたが……！」
フェル・ド

「兄貴、冗談！！ 初歩の源法術があんなに威力があるはずがねえでしょ！」

戒の言葉に、横に居た手下が逃げ腰の態勢で答える中、間もなく、世羅の手の周りに光の粒子が集まる。

「
《源・衝》^{フェルド}！！！」

彼女の狙いを肌で感じた戒は、咄嗟に身を（よじ）擦る。

髪が引つ張られるほどの黄色い大きな光球の勢い。
背後の巨石の全体が薄丸く陥没し、やはり直後に破裂。

砕けた石の衝撃と破片が命中し、残りの手下も皆吹き飛び、空き地に叩き落とされる。

そして、再び立ち上がる者は居なかった。

戒は、自然による災害が起こっているかのような光景に、思わず目を見張る。

（……早え！ これだけの術を…詠唱無しかよ……！！）

膝を地に付けていても、今の爆風で幾分 体が押されていた。

「……そうか…おまえ…あの時の…！」

降りしきる豪雨の中。
泥鬼^{ラカーチュ}の屍。

それらの腹に開いた大きな風穴。

まだ記憶に新しい、昨晚の光景と胸の悪くなる臭気が感覚によみがえる。

「なんてこつた……。」

戒は首を下に垂らして、静かに眼鏡を外した。

「だが、退くことはできねえ……！
できねえんだよ……！」

倒れた子分達を器用に避けながら、戒に突進する世羅。
ただならぬ気迫を感じとり、少女は決して彼から目を離さない。

戒は右手を前に、左手を自分の腹部に構えをとった。

世羅は、少しも動じず、走りながら焦らずに彼に狙いをつける。

「
フェル
《源……》」

そこで戒は突然横へとステップし、狙いを外した後、駆け抜けて
間合いを一気に詰める。

不意に飛び込まれた世羅。

そこへ彼女の脇腹を狙って振り込まれる戒の拳。

避けられない
そう判断した世羅の体は自然と動き、小さな手の平が

その攻撃に対してタイミングよく合わせられる。

「な!？」

お互いの手が触れ合い、世羅の細腕が勢いよく振り上げられた次の瞬間、転ずる視界。

戒の身体は大きく宙を舞い、気が付くと既に背中を強く地面に叩きつけられていた。

「……………!?!?!」

戒は暫く放心していたが、青空の中、自分が小さな少女に見下ろされている屈辱にすぐ気が付き、慌てて立ち上がるうとした。

しかし、自分に向けられた彼女の右手に、その動きを止められる。

「やめろ。」

ボクの源・フェルト衝を近くで喰らえば、ただじゃ済まないぞ。」

その勧告は、さらなる屈辱。

目の前の少女は陽を背に堂々と二本の足で立ち、真っ赤なりボンをなびかせている。

風が強まってきた。

「何かの…武術か…！？」

叩きつけられた背の痛みに顔を歪めながら、戒は呻いた。

そうではなくては、こんなか細い少女に自分が力負けをするはずが無い。

同じ言葉を頭の中で何度も巡らせながら、戒は修道着の脇のポケットから赤い十字架を
さとられないように取り出した。

「……そうだよ。 力はいらない武術。
実際に本番で使ったのは今日が初めてだけど…」

律儀に世羅は答えた。

だが、喋って術名を唱えることが出来ないその間に、戒が立ち上がることを許してしまう。

「……ずるい！！」

「うるせえッ！

戦いにずるもクソもねえ！！」

地面に唾を吐き捨てる戒。

悔しいが、目の前の相手は強い。

その事実がプライドも体裁も崩していく。

口を拭いながら、手の中の十字架を深く握り込む。

「よこせ！」

そして、不意をつく下段蹴り。

「俺様は…一ヶ月前から、飛翔艦に目を付けてたんだ！

それを…横取りされてたまるか！！」

それを器用に一步步つ下がつて避ける世羅に向かって戒が叫ぶ。

「そうなの！？」

続いて繰り出される蹴りを避け続けながら、世羅も叫んだ。

「？」

その反応に、戒は自分の動きが鈍るのを感じた。

「一ヶ月前からってこと！」

「そうだ！ ああ、そうだよ！！」

「ごめん！！ 知らなかったんだ！！」

「何い！？ 戦いの最中に……！」

相手を敵として完全に捉えることの出来ない自分。
思わず唇を噛みしめる。

「謝罪なんて……いるかつ！！」

段々と上がりだす呼吸。

何度も強く握りこむ拳の中の十字架。

もはや、まともに動ける時間は少ない。

勝つ為には、本気で倒す覚悟を決めなければならなかった。

「おい……ただでは済まないんだつたよな。
自分の術に随分自信があるじゃないか！？」

「だって、ほんとうの事だもの！
だから、あまり人に使っちゃいけないって、言われてる！！」

「そうか……。
なら……やってみやがれ！！」

「……！？」

急に動きを止めた戒に、つられて世羅も動きを止める。

「行くぜ！　しっかり狙えよ！！」

その隙に戒は一気に間合いを詰め、両足を浮かせて世羅の顔面へ蹴りを放つ。

明らかに陽動。

屈んで避けるのはわけなかった。

戒の服の前垂れが、目の前で回転して舞う。

空中で、本命の回し蹴り　それもすぐに手の平で受け流す。

互いに近付く上半身。

両者の間合いは文字通り、至近距離。

「ごめん……！　力…抑えるから！！」

態勢を崩す恰好になった戒の胸元を狙い、世羅の右手が再び粒子を集める。

「フェルー・
《源…》」

それは、明らかに世羅のタイミングだった。

（かかった……！！）

だが戒は諦めずに地を蹴り、踏ん張って無理矢理身体を持ち直す。そして、その世羅の小さな手に対して、今度は戒の方が十字架を握った拳をタイミング良く合わせるのだった。

（悪いが……指の骨二、三本は覚悟してもらおう！！）

強い海風が青葉を散らせた。

潮の匂い、大地の草の匂いを、鋭敏になった神経が感じとる。

互いの瞳に映り合う、互いの姿。

二人はそれを長い一瞬で見詰め合っていた。

「やめなさい！！！」

だが、戒の拳と世羅の光る手の平が衝突する、まさしくその瞬間。寸前で二人は動きを止め、同時に大声のした方向へ顔を向ける。

そこには、いつの間にか道端から刀を拾い上げたフィンデルが居た。

「事情はよくわからないけど…喧嘩はダメよ！
こ、こんなになるまで…」

無様に転がった戒の手下を眺めながら言う。

「…なぜ逃げてねえ、この女！
せつかくの…くそ、邪魔しやがって…！！」

戒は握った拳を下ろし、フィンデルに向き直る。

「あなた！ 恥ずかしくないの！？
子供相手に…こんなによつてたかって…しかも本気で戦って…。」

「黙れ！ お前に何がわかる…！！」

「あなたもそう！」

戒の反論を無視し、今度は世羅を指差すフィンデル。

「え、ボク！？」

世羅が大きく瞳を見開く。

「さぞかし、修行を積んだんでしょうけど、恥ずかしくないの！？それをこんな……チンピラ風情相手に本気で戦って！！」

彼女の言葉に、戒と世羅は思わず互いの顔を見合わせた。

「なんかよ…言ってることが矛盾してねーか？ あんた。」

「と、とにかく…喧嘩はダメってこと！！」

フィンドルは、真っ赤になって必死に答える。

「喧嘩じゃねえ！ 俺様のこれからの人生の為に必要な戦いだ！！」

「人生の為に戦いだなんて…若い子が言うもんじゃないわよ！！」

「……何だってんだよ……急に強がりやがって…。」

先程まで震えているばかりだった彼女が、一気に自分と対等に、目を付き合わせて意見してくる。

戒は、自分自身も世羅も構えを解くのを確認しながら、例えようの無い、どこか内心安堵している自分に気付いた。

だが、地面の小石を蹴飛ばし、そんな思いをすぐに捨てる。

「…ひっこんでろ。 部外者の出る幕じゃんねえんだ。」

「部外者ですって!？」

間違えて、私を拉致しておいて…」

「だから、それはさつき謝っただろうが。

いいから、それを置いて消える。大事な品なんだからよ。」

「そ、そうだよ。大事な品なんだから!」

唐突なフィンデルの行動に呆気にとられていた世羅も、彼女が手にしているのが自分が請けた依頼の品だということを感じ出して叫んだ。

「とにかく……お互いもっと話し合うべきよ……。さもないと…」

「さもないと……?」

「これを捨てます!!」

フィンデルは刀を両手で目一杯高く持ち上げた。

その様子に、世羅と戒は啞然とする。

「……捨てるったって…どこに捨てるつもりだ?」

「え?」

戒の冷静な問いに、フィンデルが周囲を見回しながら戸惑った。

ここは一面草っ原の空き地。
海へは、まだ少し距離がある。

「教えてくれよ、一体どこに捨てる場所があるっていうんだ、ええッ!？」

世羅をそっちのけ、今度はフィンデルに近寄る戒。

「あ、の…そのだから…例えばの話よ、ね、ね？」

戦いを止めたい一心で口にしてしまった台詞に後悔をしながら、後ずさる彼女。

「遊びじゃねえんだ。さあ、よこしな。」

「やめて…近寄らないで……!」

フィンデルは、手にした刀の柄に思わず手をかけた。

「やめろ、手つきでわかるぞ。……素人だってこと。
刀なんて握ったこともねえんだろ……？」

「う……。」

戒はいともあっさりと、刀の鞘の先端を掴んだ。

フィンドルも柄を持った手に、一層の力を込める。

「離せ！」

「だ、ダメ！ 絶対に……ダメ！！」

互い持った部分を引き合った瞬間だった。

鞘から鰐つばが外れた瞬間、カタリ、と妙な金属音がした。

刹那、鰐に付いた器具が蛇の頭へと変化して、牙のぎっしりと詰まった口を大きく開ける。

（
トラップ
罠！？）

鞘を持つ戒にも、刀を持つフィンドルにも、その罠の標的が自分達であるところをはっきり認識する。

動きは、非常に素速い。

大きな蛇の口は両者の手首を同時に噛み砕くため、恐ろしい速さで閉じ込めようとする。

そこへ、二人の間に滑り込む世羅の姿。

軽く身体を浮かせたまま戒を脇へと蹴り飛ばし、着地した後が続けてフィンドルの手から刀を手で払う。

だが、そこからは彼女の予想と違った。

攻撃を外したと認識したが早いか、蛇の頭は伸び、一本の槍へと姿を変える。

そしてすぐに標的を世羅とし、彼女に向かって一直線に突き出したのだ。

態勢が崩れたまま足に、まさかの衝撃を受けた世羅は、宙を行く一筋の槍と飛散する赤いしぶきをただ客観的に眺めていた。

やがて、全身を巡る耐えようも無い激痛。
嫌がおうにも自分が傷を負ったのを知る。

槍によつて斬られた彼女の細い足は、踵かかとからふくろはぎまで無残にも縦一文字に裂け、
筋肉の間からは骨が露出して見えるほど傷は深かった。

初めは小さな粒だった鮮血は、白い肉からやがて大量にこぼれ出す。

「だ、だれか……!!」

世羅の足からの出血を止めようと、フィンデルは咄嗟に彼女の患部を押さえつける。

だが一旦噴き出し始めた血は止まらず、彼女の服を瞬く間に真っ赤に染め上げた。

「は、はやく、医者……!!」

「代われ!」

世羅は朦朧とする意識の中、フィンデルの叫びと戒の怒号を聞いた。

そして、すぐに心地よさが、痛くてたまらないはずの足を包んでいた。

3

赤い空。

そこを流れる透明感のある無数の白い帯状の雲。

戒は中腰のまま自分の周りを眺める。

一面ガラス張りの部屋。

みたことのない機械や、無骨な椅子が並んでいる。

ブーツの底が固い。

目線を下げると、敷かれた鉄床の上に自分は居た。

不思議に思わずにはいられない。

もはや、そこは港街ではなかった。

モーター、エンジンの音。

さらに空気の振動で微量に揺れる室内。

窓の外で落ちかける陽。

自分たちの巢へと戻るのだろうか、雲の向こうを集団で飛ぶ大きな鳥達。

そんな流れる景色をガラス越しに眺めながら、戒は一つの結論に達した。

道理はまるで通っていないが、自分は今、まぎれもなく飛翔艦に乗っている。

意を決して一歩進むと、すぐにつま先に硬い金属が触れた。

それは大きな反りのある片刃の剣で、まるで使われた形跡が無く、無機質な床に新品同様で落ちていた。

広い上げようと屈むと、その先に人が転がっているのが認められる。

その先に目を向けてみれば、さらに一人、また一人。

何故、今まで気付かなかったのだろうか。

自分の居る室内は首の無い人間の死体だらけだった。

そして、にわかに室内の中央に浮かび上がる人影。
数にして八。

だが、『人』という形容が合っているかは疑問だった。
薄暗い室内で動めく彼等の動きは、人間とどこか違う。

それを詳しく確かめる間も無く、戒は彼等の奥の機械棚に沢山並べられた生首に気付く。

男女問わず、そんな首達の恨めしげな目線が、自分に向けられている感覚。

戒は思わず顔を背けた。

今、床を転がっている死体に付いていたもの……それが判ると同時に動悸が早くなる。

戒は自分の胸を掴みながら、視線を人影達に戻した。

八人の影は一人の幼い少年を囲んでいる。

やがて一つの影がその少年を片手で掴み上げた。

「摂理に反し、空で生まれし者。」

他の影もその言葉に続く。

「ついに捉えることができた。」

「大聖典に記された危険な存在。」

「果たして、業を授けることで回避できるのか。」

「やらねばならない。」

「我等の主人に仇なすとあらば。」

「人は、未来永劫、地で這いつくばる運命。」

それぞれが一言を口にしたところで、全ての影の動きが止まった。

外の鳥も雲も止まり、全ての音も止んで。

動いているのは自分だけだった。

やがて、その中で八つの影のうちの一つが動きだし、ゆっくりと戒の方を向く。

大きく鳴り出した心臓が頭の頂点まで揺らす。

右手が熱い。

近寄る影、少しずつ陽に照らし出される姿。

それは、黄金を基調とした、七色の鎧。

各間接部は柔軟でなく、硬く複雑な形で出来ており、全く肌を露出していない。

巨大な仮面の奥の視線の先が分かるはずもなく、ただ凝視される続ける様に、戒は不快感を覚える。

「ほう…ここへ来た人間は…あのアルドという子供以来だ。」

丸みを帯びた仮面が揺れ、こもった声で始めた。

「天命第五之位『犠牲の月獣』……か。
悲しきさだめを持つ人間よ。歓迎しよう。だが…」

鎧が堂々と立ち止まり、仁王立ちする。
その金属表面の色がつるりと流れた。

「頭^ずが高い。」

時の神のひとつ、天命第一之位『逃れえぬもの』の御前であるぞ。

声の重圧により、戒は膝から崩れ落ちる。

（神…神だと…！？）

倒れこむのだけは必死に抵抗しながら、顔を上げる。

「…まあよい。
己の天命の輪すら具現化出来ぬ、未熟者風情に我々の尊さが判るうはずもないからな。」

七色の鎧は戒の目の前で柔らかく解けだし、人の形から変化してただの流動体という形状をとった。

「信じるか？」

生物は皆、元々腐敗している。

生きるという事は、ただ腐らないように努力しているに過ぎない。

「

その異形の者は戒の目線の高さまで昇り、そのまま続けた。

「終わりを…腐敗を恐れるな。それはあるべく姿に戻るに等しい。

世の流れに抵抗することは無駄なのだ。

ならば…おのずと解ろう。

……身を全て任せてしまえば良い。」

戒の口元で、溶けた鎧の七色の光が流転する。

「せいぜい『この者』を守るがよい。

それが、貴様の…『夢』のためにもなる。」

「てめえ……！ 知ったような口を……！！！」

その言葉に、戒は一瞬にして感情的に怒鳴り散らした。
しかし、すぐに口元に笑みを浮かべる。

「『この者』て誰だ？ それに、俺様の『夢』だって！？
…言ってることがわからねえな。」

肩をすくめて精一杯 強がってみせる。

その様子に、目の前の鎧は沈黙した。

「俺様は俺様の道を往く。 誰の指図も…受けはしない。」

「……。
抗^{あらが}うも逆^{あらが}らうも勝手よ。」

鎧が静かに答える。

すると、止まっただけの時間の中、影の中の一人が戒の方を向いた。

だが、いくら陽に照らされても その者の身体の細部は確認できず。

やがてその黒さは影のためではなく、その者自身が影のように黒いのだという事実に気付かされた。

それは、まるでこの世の闇の全てを纏ったような黒だった。

その者は先程片手で掴んだ少年の首に力を込める。

(……！……やめろ！！)

戒は目を強く閉じた。

「……人間よ。」

声に気付き、目を開くと、そこには人型に戻った鎧が居た。

もはや自分が立っている処は飛翔艦ではなく、周りにも自分と鎧以外他の誰も居ない。

「そなたの感じるまま、心に従え。」

鎧が戒の目前で腕を広げる。

すると、鎧の一つ一つが、平たく広がり、大きなシーツのように戒の全身を覆うように開いていった。

戒は、張り裂けるくらい^{まぶた}瞼を見開いた。

鎧の中に認められるのは、先程 人影達に囲まれていた少年。

細身の体を鎧に護^{まも}られるように入れられ、母体の中で眠るように静かに瞳を閉じている。

だが、少年の表情は亡^{はつ}として、顔に残った涙の跡がとても哀れを誘った。

理由など無いのに、何故か胸が苦しくなる。

「天命の輪は繋がりだした…。それを止めるのではない…。
全てを絡め、回し続けるのだ…。」

やがて、鎧の中からあふれだす粘ついた液体が戒の髪に、眼球に、
全身にまとわりつく。

自分が床に溶けていく感覚。

(…待て……！
…くそ！…一体…なん…なんだ……)

声にならない声を喉の奥で叫びながら、戒はまどろみのなかに意識を沈めていった。

「戒〓セバンシュルドか……覚えておこう……」

最後に聞こえた鎧の声。

その声は、きつと晒さらっていた。

目を開けると、嫌に青空が眩しかった。

陽の光を背に、世羅とフィンデルが仰向けになった自分の顔を心配そうに覗き込んでいる。

何か夢のようなものを経験したはずだったが、
だが、戒はそれを全て忘れていた。

「……気付いた……」
「……良かったわ……」

最悪の気分で上半身を起こしてみる。

足に非常に強い痛み。

自分は、その為に気絶したらしい。

「あなた……『エア・ファンタジスタ天命人』……ね。」

間を見て、フィンデルが言った。

目の前で一人の若者が起こした奇跡。
エア・ファンタジスタ
彼女自身、噂に聞く天命人の能力を見たのは初めてで、ただただ

驚愕するばかりだった。

あの時、患部に触れただけで世羅の傷を完全に治療した戒だが、その後すぐに彼はのたうち、失神した。

彼自身に傷は無い。

その能力は、痛みを己に移すことを代償として他者の身体を癒すもの。

「……………」

戒は手をわずかに持ち上げて、自分自身、虚ろな表情で眺めていた。

能力を発現させた、彼の右手中指の付け根に浮かぶ青い光の輪

エア・ファンタジスタ

天命人に生まれた証、『天命の輪』が浮かんでいる。

「あまり…人を好奇の目で見るんじゃないねえ…。」

フィンドルの視線に対し、戒は呟いた。

足の痛みが、再び鈍痛として襲い掛かる。

「くっそ……………」

一方の戒は目を閉じ、後頭部を広場の草に任せた。

どこまでも逆らえぬ己の運命。

また今回も飲み込まれるのか。

悔しさと疲労感が身体を包む。

堕ちていく闇の中。

しかしそこへ光が射し込むように、熱い吐息を感じ、薄目を開ける。

「死んじゃだめ！」

世羅が思い切り、互いの唇が触れ合いそうになるくらい顔を突然近づけて来る。

「！！」

その行動に、戒は一気に跳ね起きた。

「きゅ、急に寄るんじゃないっ！」

尻を地に付けたまま、勢いよく退く彼の様子に世羅は満面の笑みを浮かべた。

「…………死にはしねえよ……」

それより、世羅とか言っただけだ。」

若干調子を狂わせながらも、完全に意識を取り戻した戒は足をさすりながら言った。

「…仕事はお前のもんだ…行けよ。」

「ううん。」

世羅は顔を横に素早く振り、戒に覆いかぶさるように、再び顔を近づけた。

彼女の爽やかなエメラルドグリーンの瞳に映る、自分の驚く顔に驚いて、戒は再び退がる。

「何だっただよ！？」

「…思い出したんだ。」

戸惑う戒に、世羅が答えた。

「確かキミは…昨日の馬車に乗っていたよね？」

「…そうだ。…アイザックの傭兵さんよ。」

「知ってたの？」

「…ああ。忘れるはずもねえ。」

力無い微笑みを浮かべる戒。

それと逆に、世羅は満面の笑顔になっていく。

「……ボクの方こそ、この仕事…キミに譲るよ。」

「あー!?」

「ほら、見てよボクの足。すっかり元通り。」

キミはボクの身体を治してくれた恩人だし。」

戒は、しばらく言葉を失った。

「……バカか!? お前が怪我したのは俺様のせいだ。」

これは自分で自分のケツを拭いたまでのこと……だから行け!」

「やだ!

だって、キミは……中王都市に…大事な用があるって言ったじゃないか!」

「ある!

だけど、もういい!! 気の変わらないうちに行けっ!!」

「やだったら、やだ!」

「このクソガキ……。」

お前だつて、大事な用があるんだろ！」

「あるよ！ でもやだ！！」

ボクはキミが あの時だつて子供の怪我を治してたのを知ってる。
キミは……」

「やめろ！ あんなの戯れ事だ！！」

「……もうやめて！！」

終わりの無い二人の幼稚な応酬。
仲裁に入つたのは、やはりフィンドエルだった。

「今度は口喧嘩？……もう争いは沢山よ……」

呆れ返つたように言い続ける。

「二人とも……ルベランセに来なさい……。 乗せてあげます！」

「……何言ってるんだ……」

乗せられるわけないだろう、お前に。」

「で……出来るわよ。」

私、副艦長だもの。」

フィンドエルは口を尖らせ、胸を張って答えた。

戒は口を小さく開けたまま、二度まばたきをする。

「……あの言葉…本当のことだったのか？」

「この期に及んで嘘ついてどうするの！」

全身から力が抜けるのを感じた。

「良かったね、戒！」

「え？ あ、ああ……！」

世羅が馴れ馴れしく名前を呼び、まるで自分のことのように肩に飛びついて来る。

戒は、砂の付いた自分の髪を手でくしゃくしゃにした。

「本当に…いいんだな？」

「ええ。それで争いを止められるなら、安いもんだわ。」

そう告げると、フィンデルは世羅の頭を優しく撫でた。

「私はあの飛翔艦…ルベランセの副艦長、フィンデル＝ハーディ。貴方達を歓迎するわ……半分だけ。」

そして戒の方を見ながらそう言うと、彼女は血まみれになった自

分の服をつまみながら
恨めしそうに苦笑したのだった。

陽が傾きだした大空に笑い声が響く。

三人は小道の上で遠くに見える飛翔艦を目にしながら、いつの間にか風が止んでいることに気付いた。

第二話 『小道の上で
了』

1 - 3 「明日への抱擁」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 1

『From the sacrifice which should
be loved』

The third story

‘Embrace to tomorrow’

遠くに見える、大きな荷物を引きずる戒。

それに気付いた世羅は、すぐに腰掛けていた岩場から立ち上がる。

「待ちくたびれちゃったよ!」

「……誰も待ってくれなんて頼んでいないだが。」

頬を膨らませる世羅に対し、戒が汗を拭いながら小さく呟いた。

「ずいぶん大きな荷物だね。」

戒の引いてきた木製のトランク。
それを触りながら世羅が言う。

「当たり前だ。」

俺様は、しばらくは中王都市に住む『予定』だからな。」

「予定？」

「……………」

世羅の無邪気な問いに、戒は深刻な表情をする。
一向に進まない勉強のことが、頭の中を巡った。

「どうしたの？」

「…なんでもねえ。」

それよりお前の荷物は、割りと少ないな。」

彼女の背負うバッグを見て言う。

「うん、換えの服が少しだけ。」

行動が鈍くなるから、どこかに落ち着くまで荷物は増やすなって、お師匠が言ってた。」

「お師匠ねえ……。」

戒が片唇を下げる。

ぶっきらぼうな言葉を使う彼女が『お』をつけるくらいだ。相当尊敬していることは想像に難くない。

戒は世羅の顔に注目しながら、色々な想像を巡らせていた。すると、何故か彼女の顔も笑顔へと変わる。

「うふふ……」

「なに、にやついてるんだ。」

「だって、一人で旅をするよりも、他の誰かと一緒にした方が全然楽しいもん。」

純朴な表情でまともに言われる戒。

「さっきから勝手に決めるんじゃない。」

俺様は別に、お前と一緒に旅行するつもりは無えんだ。」

「……そうなの？」

一転して、悲しげな顔。

そんな感情を露にし続ける少女に、終始調子を狂わされ続ける戒は思わず顔を逸らした。

「まあ、『あれ』なら、中王都市までは三日程度で着くからな…。
その間だけなら付き合ってやっても別に構わねえけどよ。」

「…ありがとう！」

海上に悠然と浮かぶルベランセを背景に。
静かにはにかむ世羅。

手が強く引かれる。

戒は戸惑いながら、彼女の早い歩調に合わせた。

それが旅の始まりだった。

エア・ファンタジスタ

・

第一章

愛すべき犠牲より

・

第三話 『明日への抱擁』

1

「何これ!？」

格納庫に入ると、フィンデルは仰天して声を上げた。

見たことも無い銀無垢の戦闘騎。

それが、そこに平然と置いてあったのである。

ルベランセに搭載されているのは、戦闘騎2機に補給騎が1台。いくら疲れていても、それは間違うはずもない。

現実を確かめる為、その美しい銀の機体に触れてみる。

ほぼ新品に近い。

形状も普通の戦闘騎とは違って、プロペラが無く、両翼が極端に小さく短くて、筒のようだった。

「あ、副長……」

普段どおり作業着姿で、ミーサがその戦闘騎の影から顔を出す。

「ちょっと……これはどういうこと!？」

「副長こそ!」

その服は一体……!？」

血にまみれたフィンデルの姿を、思わず指差しながら驚くミーサ。

「私のことはどうだっていいわ! それよりも、こっちを説明して……」

「副艦長……であらせられるか。」

足早にミーサに近づくフィンデルが、不意に男の声に止められる。

「丁度良かった。」

私はこの戦闘騎の操縦士、マクスⅡオルゼリア。

……中王騎士団の者だ。」

名乗った長身の男は、うなじを覆うまで達する銀髪に銀の瞳。

更に銀色の大きな甲冑で全身を包むという、傍の戦闘騎と同じ、銀一色のいでたちでミーサの後ろから現れる。

「中王…騎士団…！？」

「実はマクスさんは、この空域で訓練中に母艦とはぐれてしまったらしくって…」

あまりに急な事に目を点にするフィンデルに、ミーサは付け加えた。

「補給を求めて来たんです。」

「……着艦許可は…ペツポ艦長が？」

「いえ……」

ミーサの声がしばむ。

「ブリッジの独断と聞いてます…。」

「そんな！ 軍規違反だわ！」

「やはり…まずかった、と？」

片方の眉を落として、マクスが訊く。

「あ……いえ…その…」

思わず、独り言を大声で発してしまい、フィンドルはばつが悪かった。

「こちらとしては、墜落寸前だったので感謝しているのだが。」

「…あ……そう…ですね。」

まあ…状況が状況だったのなら…仕方ないと…思います。」

真顔で近寄ったマクスの穏やかな銀色の瞳に射抜かれて、フィンドルは頬を赤らめて目を背けた。

一方の身長の高い彼は、不思議そうに彼女の反応を見下ろしている。

「ところで…どうされた？」

「え？ 何が、ですか？」

さらに問いかけられて、フィンドルは慌てて訊き返した。

「副長……だから…服、服！」
「あー!!」

ミーサに言われて、自分の無様な服装に改めて気付く。

「あ、あの！ 後で艦長室へお越し下さい!!
色々…手続きを踏みたいと思いますので!!」

マクスの方を向いて言いながら、通路へ後ずさる。

「場所は…えっと……ミーサ！
丁重に教えて差し上げて!!」
言いながら、さらに後ずさる。

「こんな恰好で…私つたら!!」

そして叫びながら、一目散で廊下を駆けて抜けて行く。

マクスとミーサは啞然としてそれを見送っていた。

「暑いな…それに油くせえ…」

飛翔艦の入り口を抜けると、そこは暗めの廊下。

鉄で出来た　その無機質な通路が声を反響させる。

「ここで待つように言われたんだがな……！」

あまりの蒸し暑さに、繋いだままになっていた世羅の手を乱暴に振りほどく戒。

傍の鈍重な扉の奥からは、蒸気のアがる音と金属が重なり擦れる音が響いていた。

やがてその扉は開き、中からは熱気と共に、頭に四角い麻の袋を被せられた油まみれの小人達が
ぞろぞろと沢山出てくる。

それは、俗に『蛮族』と呼ばれる被支配階級の者達だった。

頭の袋にあいた二つの穴から覗く目。
それと目が合うと、睨み返される。

栄華を極めた国には、やはり差別・貧困など、常に一種の『影』
がつきまとうものなのだろう。

戒は彼等の自分に対する、殺伐とした空気を肌で感じながら思った。

「…二人とも、おまたせ。」

そして気が付けば、既に目の前にフィンドルが立っていた。

彼女は灰色の軍服に着替えていて、ピンと立つ襟、タイトスカートに軍帽、首に締めた幅広のタイが先程よりも立派で締まった印象を強める。

「どうかしたかしら？」

「イヤ別に…」

そう言いながらも、戒の視線は まだ小人達に向けられる。
フィンドルは、すぐにそれに気が付いた。

「機関室に配属されている隊員達よ。そろそろ夕食の時間だから。」

「…そうか。」

「食堂…あるの!？」

言葉の重い戒に対し、全く思考の無さそうな世羅が叫んだ。

「ええ、これからの用件を済ませたら行ってみるといいわ。
味は保証できないけどね。」

苦笑しながらフィンドルは言う。

「あんだ、そっちの服の方が似合ってるな。」

そんな彼女の横に並んで歩き、戒は何気なく言った。

「……え？」

思いもしない言葉に戸惑うフィンドル。

「……イヤ、私服より無理してる感じがしない、ってことだが。」

「…そう見えるかしら。」

そして、フィンドルは視線を落とした後、足早に離れるようにして先行した。

一瞬、その態度に足を止める戒。

「……おい、行くつてよ…。」

気を取り直して脇の世羅に声をかけると、彼女はそわそわと艦内を物珍しそうに、ぺたぺたと壁を興味深そうに触りながら、小動物のようにフィンドルの後を追って走って行く。

「女つてのは……わからん。」

戒は二人を最後尾で眺めながら、一言呟いた。

どこも似たような通路を超え、しばらく廊下を歩き続けると大きな銀鎧を纏う長身の男が目についた。

その男はフィンデルに会釈をする。

彼女も平静を装って、会釈を返した。

「…聖騎士…だと!？」

「…え？」

だが、彼の姿を目にした途端に発せられたの戒の言葉に、すぐさまフィンデルが反応する。

鎧の肩と胸に刻印された大きな赤い十字架。

戒は、過去に神学校の定期集会で呼ばれた聖騎士が全く同じ鎧を着ていたのを思い出していた。

騎士の外見というものは国によって様々なれど、聖騎士と呼ばれ

る者達は必ず同じ甲冑を身に着けている。

それは現在の大陸で一番普及しているクレイン教の総本山……『聖都』で洗礼を受けている証拠でもあり、それがことあることの神学校への来訪に繋がっているのだろう。

老いた聖騎士が行事の度に学校を訪れ、長々と延々スピーチをする……。

欠伸^{あくび}を連発するような退屈な話だった。

いつも列の後ろの方で悪友達と私語をしていた、故郷でのその光景が少し懐かしい。

「せ……聖騎士……でいらしたんですか？」

腕を組んだ彼の全身を細かく見渡しながら、フィンデルの声が緊張でうわずった。

軍隊に入っている、聖騎士と呼ばれるものが特別な存在であることは知っている。

神と教団への絶対の忠誠のため、その重い鎧は決まった時以外脱ぐことがないとか、真に大陸の平和の為に尽くしていると教団に認められた者のみなる事ができるとか

大抵が噂話だったが、中でも重要なのは、時に施行される大陸全

土に影響するクレイン教の法王の勅命。

それは国と人種の枠を超えて、聖騎士達を任務の遂行へと向かわせる。

教団の意にそぐわないという理由で、各地の聖騎士達に肅清を受けた国や豪族達が歴史上には幾つも存在した。

たとえそれが自国であろうと、聖騎士達は私情を捨てて冷酷にその命に従った、とも聞く。

それゆえ、各地に聖騎士を任命するのは、教団が世界を監視する為の一つの名目とも言われているほどだった。

「君は…修道士か。」

その服は、レティーンの神学校のようなが。」

「ええっ!？」

戒の着る、黒の修道服に対する鎧の男の言葉に、世羅とフィンデルは同時に驚愕の声をあげた。

「何だよ、今まで気付かなかったのか？お前ら。」

「私はてつきり…」

「ボクはてつきり、盗賊団のボスかと思ってた…」

言いたいことを世羅に先に言われて、フィンデルは思わず言葉を

飲み込む。

彼女にとっては聖騎士云々よりも、こちらの方が驚きとしては大きい。

「…色々と誤解があるようだな…。」

二人からの言われように、戒はこめかみを痙攣させながら言った。

「ところで……この部屋で宜しいのか？ 副艦長殿。」

「あ…そ、そうです。」

鎧の男の問いに、フィンデルが我に返り、頷く。

そして、目の前の扉を二回ノックして一歩踏み出した。

「ペップ艦長。」

フィンデル中尉、失礼します。」

雨戸まで締め切られた薄暗い室内では、寝巻き姿でベッドに横になっている優男。

脂汗を額に浮かべ、シーツを幾重にもかけて小さく唸り続けている。

「病気か？」

戒が思わず飛び出す。

「いいえ……乗り物酔いよ。」

フィンドルは恥ずかしそうに呟いた。

「…あんだ、今、こいつのことを『艦長』って呼ばなかったか？」

「ええ…呼んだわ、確かに。」

室内全体を包む重い空気と沈黙。

皆が一様に動きを止める中、最初に動いたのはやはり戒だった。

「おい！」

そして、横たわるペツポの胸倉を乱暴に掴み上げて一気に持ち上げる。

「『客』だ。起きやがれ!!」

さらに、自分自身を指差し、堂々と言う。

「?…な!?!?!?…なに?」

ペツポは急に起こされた衝撃で立ちくらみを起こしながら目玉を剥き、ずれた寝巻きの帽子とズボンを直しながら叫んだ。

戒の片手一本で軽く持ち上がる、筋肉の殆ど^{ほとんど}ついてない痩せた体は、およそ軍人とは思えない。

「きゃ…『客』って?!?!?…きみたちは一体?!?!?」

目をこすり、周りを数回見渡して、やっとのことで室内の四人を確認する。

そして、すぐに鎧の男に目を留めた。

「……!?!?」

「これが初陣とお見受けします。

聖騎士の名にかけて祝福いたします。 ペツポ艦長殿。」

机の上に置かれた真新しい軍服を見るなり、マクスは微笑みながら敬礼する。

「フィンドル! どういうことか説明しろ!?!?」

「はい。」

フィンドルはペツポの動揺を軽く受け流すように返事をし、両の踵かかとを合わせた。

「マクス氏は我が国、中王騎士団・飛翔艦部隊所属の戦闘騎の操縦士です。」

演習中に母艦とはぐれてしまったらしく、偶然居合わせた本艦に補給を求めて参りましたので、即時保護いたしました。」

感情的なペツポに対し、冷淡に事務的な態度で臨むフィンドル。

残る三人は後ろで、ただ黙ってその様子をつかがっていた。

「騎士…しかも、よりによって中王騎士団だって……！？」

こっ…こんなことが もしもパパに知れたら……。
な、なんて勝手なことをしてくれてたんだ……！」

「…何言ってる？」

同じ国の者同士、どこが都合が悪いってんだ？」

戒が素朴な疑問を口にした。

「実は、中王都市の軍事組織……我々の中王騎士団と 彼ら中王都市軍は犬猿の仲なのだ。」

他国の者から見れば、まったくおかしい話ではあるがな……。」

真面目な顔つきで、マクスが彼に耳打ちする。

「す、すぐに放り出せ、フィンデル！

補給なんて絶対に認めないぞ！！ 騎士なんて野たれ死んでしまえばいい！！」

「……同じ国に属し、心身を削る同胞として、それは賢明な判断とは言えないかと。

それに仕方なく副艦長権限を使わせていただいたのは、艦長ご自身が不在だったため。

勿論、これは全て私の独断です。

処罰は いかようにでもなさって下さい。」

フィンデルの凜とした虚言に、マクスは彼女の顔を一瞬見た。

「う……う……。

処罰つたって……そんなことしたら、誰がこの艦の指揮をとるんだよう……。」

そんな彼女の態度に、一転して口ごもるペツポ。

「拘束、謹慎、どのような罰に対する覚悟も出来ております。」

「……いいよ……不問だ。

……その件は……全部任せる……。」

「ありがとうございます。」

深々と頭を下げて、悟られないよう深く息をつくフィンドル。
無能な上官に対する自分の意地悪い計算に、少し胸が痛んだ。

「ところで…そっちの二人は？」

ペツポが、今度は世羅と戒へ顔を向ける。

「世羅」ディーベンゼルクさんと戒「セバンシユルド君。

二人は中王都市までギルドの依頼を果たすため、本艦に搭乗許可を得に来ました。」

「ふ……ん……」

あからさまに世羅の比率を多く、二人の顔を交互に眺めるペツポ。

「世羅って娘はいいよ。」

でも、そっちの戒ってはダメだね。」

「あ？」

思わず、戒はペツポに近付いた。

「態度が生意気だから。」

「てめえ……！」

「どうか、お願いします。」

戒がペツポに再び掴みかかる寸前で、フィンデルが慌てて言った。

「冗談だよ。

まったく、野蛮なやつだ…。

でもこの艦で空いている部屋は一つだけのはず。

それもブタ小屋みたいに汚い部屋だよ、どうするの？」

「あ……。」

フィンデルは思わず、手を口に当てた。

ルベランセは元々戦艦を改装したもので、膨大な物資を運ぶには適していない。

隊員達の部屋は使用分を除き、その区画のほぼ全てを物資を積むために流用してしまっていた。

マクスと戒達の処遇をいかに上手く誤魔化して認めさせるか、それだけを考えていた為に

そこまでは頭が回っていなかったのだ。

「でも、安心しなよ。

この艦では、綺麗な子はそれなりの扱いをするからさ。

ブタ小屋行きは、生意気そうなお男だけ。」

「それは……どういうことでしょうか？」

ペツポの思いつくことが良いためしなど今までに殆ど無い。

故に、それが名案であるという期待は全くせず、フィンドルが一応訊き返す。

「君は、この部屋に泊まるといいよ。」

世羅に近付きながら、いやらしい笑みを浮かべるペツポ。

フィンドルも、その破廉恥な言動を平然と行う彼の様子に肩を落とした。

「このクソ野郎……」

拳を握る戒。

既に鼻を伸ばしたペツポの顔面に照準を合わせている。

「いや、ボクは戒と一緒にの部屋だよ。」

「え？」

だが、さもあたりまえのように言う世羅に、戒は拍子抜けした。

「ボクら一緒に旅をするって約束したんだからね、そうだよ、戒？」

「……ま……そうは言ったが……。」

あまりに急な彼女の言葉に思考が止まる戒。

そんな様子の彼を、白い目でペツポが覗き込む。

「きみたち……付き合ってるの？」

「付き合ってねえよ!!」

即、否定。

だが、それによりフィンデルまでもが白い目に豹変する。

「でもそれって……余計に問題あるわよ!」

「おい、あんたまで……!!」

土壇場での意外な障害に、戒は戸惑った。

「……いや、安全でしょう。」

そんな中、マクスは静かに口を開いた。

「敬虔なクレイン教徒は、一生涯女性を断ちます。
レティーンは『神都』と呼ばれるほどの国。

彼はその神学校出身なので、相当身が堅いと思われませんが。

」

「……………本当に？」

マクスの言葉を聞くが早いか、ペッポとフィンデルが戒を問い詰める。

「…そういうことだ。」

一瞬の判断、戒は真っ直ぐ向いて答えた。

「だから…あいつと同室というのは…むしろ、ガキの子守^{おもり}みてえなもんだな。」

さらに、既に話に飽きて、室内に飾ってある奇妙な民芸品の人形を弄^{いじ}くり回して遊んでいる
世羅に目を配る。

「なーんか…腑に落ちないな……………う！？」

世羅の方を未練がましい目で見た直後、ペッポは皆が見ている前で口を両手で押さえて屈みこんだ。

突然の他人の来訪で麻痺していた感覚が再び戻り、視界が歪む。

「艦長？」

「いい！……いい！

もう面倒だよー！　彼等の件は…ぜーんぶ、フィンドルに任せるから…」

青い顔で、フィンドルに肩を抱えられながら、情けない姿でベッドへ戻るペツポ。

「それでは……失礼いたします。」

微笑を浮かべながら、フィンドルを一番後にして、部屋を出て行く四人。

「……あとで…バケツ…持って来ましょうか？」

そして扉を閉める直前に放った副艦長の言葉に、艦長はシーツの中から左右に手を振った。

「大変失礼いたしました、マクスさん。」

艦長室の扉を閉めてすぐに、聖騎士に頭を下げるフィンドル。

「いや……」。

中王都市において、軍隊と騎士との間の深い溝はある程度覚悟しておりますゆえ。

それに…結果的に何とかなったので良かったといたしましょう。」

「そう言ってもらえると助かります。

しかし、貴方の部屋はどういたしましょう…。

先程聞いた通り、今、この艦には空き部屋が無くて…。」

「ご心配なく。我々は戦闘騎の中で睡眠できるよう訓練しております。」

マクスは淡々と言った。

「……なあ、ところであんた、固そうに見えて機転が利くじゃねえか。」

おかげで助かったぜ。」

そこで、聖騎士の肩の鎧に笑顔で気安く触れる戒。

マクスも微笑んで返す。

「機転？」

フィンデルが言った。

「『女断ち』の話だ。」

戒が笑顔のまま答える。

「嘘だったの!？」

声を荒げて戒に詰め寄るフィンデル。

「嘘言ったのは、俺様じゃねえだろうが!！」

「……う。」

「…聖騎士には文句言わねえのか!？」

そして急に黙りこくった彼女に、戒は口を尖らせた。

「なに、あの程度なら嘘にはなるまい。

それに…機転という点では副艦長殿には敵わんよ。」

その様子に苦笑しながらマクスが言う。

「さして事情を知らない貴女が独断で私の着艦を許可したという話…。」

実際に許可した乗組員を庇^{かは}うためか？ それとも私を庇^{かは}うためか？

「りょ…両方です…。」

「…そうですね。」

……貴女には感謝の言葉も見付からない。」

「……あ……」

フィンドルの手を両手で握り、片膝を落とし、頭をその手よりも下げて最上級の敬意を示す聖騎士。

「こいつは…ごちそうさまだな。」

すっかり耳まで真っ赤な色に染めた彼女の様子に、戒が脇で眺めながら呆れかえった。

「何か…内緒で食べたの？」

戒のその小さな独り言を聞いた世羅が彼を見上げて見当違いの言葉を放つ。

「……そっいや、腹が減ったな。」

面倒なので説明はせず、戒は夢心地のフィンドルに聞こえるように、わざと大声で言った。

「そ、そうね。」

それじゃあ、部屋を案内するから、そこに荷物を置いてから食堂に行きましょうか。

それと……」

戒の言葉で現実を取り戻した彼女は、惜しむように手を離し、そのままマクスを見詰めて口を開く。

「良かったら……マクスさんも……ご一緒にいかがですか？」

伏せ目がちに、彼女はたどたどしく言った。

「折角のお誘い、申し訳ないが私はこれから格納庫へ。」

あの整備の方と機体の整備をする約束をしましたので……。」

挨拶もほどほどに、マクスは会釈をした後、廊下を真っ直ぐ歩いて消えていく。

それを、フィンドルはうつとりしたまま、口を半開きにして暫く見送っていた。

しかし、それと代わるようにして、廊下の置くから極端に小さな影が近付いてくる。

「梅さん……？」

それに気付いたフィンドルが、唇をわずかに開いて呟く。

その影は一匹の猫だった。

「梅さん？」

「なんか偉そうだな、猫のクセに。」

世羅、続けて戒が言った。

「もう16年もこの艦に居るの。」

誰よりも先輩だから、みんな『さん』を付けてるわ。」

中腰になって、手を伸ばすフィンドル。

「おいで。」

梅は彼女の声に導かれて、トトトと音もなく足早に寄ってくる。

「…可愛いね。」

しかし、世羅が近付いた瞬間、方向を転換。

何度も向き直りながら、再び廊下の隅に隠れる。

そして その毛の色は白と黒の『ぶち柄』から、みるみるうちに赤一色に染まっていた。

そして一瞥^{いちべつ}くれてから、廊下の奥に消えていく。

「……。」

手を伸ばしたまま固まっている世羅。

「気にしないで。 けっこう好みが激しいの。
ウチの艦長のことも嫌ってるし。」

そんな彼女に対して、フィンドルが優しく声をかける。

「なんか……色が変わってたぞ。」

戒が廊下の奥を指差したまま言った。

「気分で変わるみたいなの。 色とか模様とか。」

「気分だって…？
ただの猫じゃねえのか？」

「さあ？
詳しくは知らないわ。」

彼女には、色々と伝説が残されているけれど…。」

「伝説？」

「絶滅した貴重種の生き残りとか、実は正体は魔女とか、犬以上に
鼻が利くとか…」

「……くっだらねえ。 さっさと荷物を部屋に置いて、メシだメシ。」

今度は戒が先頭になって廊下を突き進む。

たったひとつの とても小さな猫の鳴き声が、誰も居なくなつた廊下に、静かに響きわたつた。

2

指示された部屋。

ただ扉を開けただけで舞い上がるカビと埃。
その中で荷物を降ろす。

「依頼品はちゃんとベッドの下に隠しておけよ。」
「うん。」

世羅は素直に従って、部屋に一つしかないベッドと床の隙間に刀

を入れた。

生活環境に対してタフらしい、平然とした彼女。

普通の女とは違って、色々と手間はかかりそうも無く、戒は安堵する。

「……食事前にお風呂にでも入りたいね。」
「なに!？」

だが、直後の唐突な言葉に驚く。

「さっぱりしたあと食べるごはんは美味しいんだよ?」

「バカ。」

…空では水は貴重なはずだ。風呂なんてあきらめろ。」

「じゃあ、ここの人達は汗やホコリで体がべとべとになったらどうするの?」

「濡れタオルとかで拭いてるんじゃないか? 節約の為に。
大体、風呂なんて三日くらい我慢出来るだろ…」

だが、そこで世羅が瞳を潤ませているのを見て言葉を止める戒。

じわりと足が痛んだ。

(……俺のせいかな)

戒は、その理由が分かると押し黙り、足を押さえながらベッドに座り込んだ。

「仕方ねえな…そのことだったら俺様が何とか…」

戒が言葉を途中で切らす。

泣きそうな顔から一転、満面の笑顔の世羅が同じベッドに飛び乗ってきたのだ。

「…世羅!？」

「うごいてる!！」

「動いてる!？」

「飛び立つんだ……この船……!！」

ベッドの脇の小窓を覗く、満面を好奇の表情に変えている世羅。促されて見ると、既に飛翔艦は海面から離れようとしていた。

稀に見る巨大な質量の乗り物である。

相当の揺れを覚悟していた戒は、肩透かしを食らった気分だった。

ほとんど無音で、無振動。

戒は、静かにゆっくりと動き出す自分の乗っている物体に、普通の技術とは違う何か不気味なものを

感じざるをえなかった。

空を往く行為とは、もしかしたら人智を超えたものではないのだろうか。

そんな気さえする。

はじめはわずか、だが段々下へと遠ざかっていく見慣れた景色。港町で過ごしたわずかな時間と記憶も遠ざかっていく。

「…意外と……静かなもんだな。」

「見てよ、戒!!」

若干の感傷に浸る戒の耳元で世羅が騒ぐ。

「戒の友達…」

みんながお別れをしているよ!」

小さく粒のようだが、見慣れた顔。誰もが手を振っているのが見えた。

「最後まで暑苦しい奴等だ…」

「応えてあげなよ。」

「無駄だ。」

向こうから こっちの姿は見えねえ。」

それは向こうも分かっているはずなのに。

戒はその光景をすぐに心の中へ押し込んで、目を離した。

決意を鈍らせる余韻からは覚めなければならない。

自分は進まなければならないのだ。

「うあ、せんべい割れてるっすよ…。」

「ケーキもクッキーも、形が崩れてるの…。」

「乱暴に扱ったんじゃないかなかったですよね！ 副長？」

必死の思いで運んできた品に対し、口々に不満を漏らすブリッジの面々。

故郷への出発と共に、和やかな時間が流れていた。

「…あのね…。それどころじゃなかったのよ…。」

しかし、当のフィンドルは疲れきった顔で応える。

「……それよりも、随分、勝手なことをしてくれたそうじゃない？」

「それについての処分は覚悟しています。」

彼女の言葉に、ヂチャードが立ち上がる。

「待ってくれ、副長。」

やむをえない状況だったんだ。別に彼は悪くない。」

そこでリードは言った。

「そうつす、大体、あの艦長さえしっかりしていれば……」

「わかってるわ。」

……この件は不問にしておきます。」

タモンの言葉を制するフィンデル。

「え………？」

「艦長が居ないのに外に出てしまった、私の方にも非はあるってこと。」

一同が驚く中、フィンデルは続けた。

「それに私達はいくら軍属っていったって、戦闘部隊じゃないし。そうきつく締め上げてもしようがないでしょう。」

それよりも、進路をとってくれるかしら？ 中王都市が私達を待ってるわ。」

「……ありがとうございます。」

デチャードが頭を下げる。

「さすが、話が分かるっす。ウチの副長。」

喜びの声をあげるタモン。

メイモリードも思わず笑顔をこぼす。

こういう甘い性格が威厳を損ねるのだろうか、フィンデルは喜ぶ彼等の様子に少し複雑だった。

争いが嫌いな性分。

故にいつでも他人に合わせて生きてきた。

そんな太い芯も持たない自分が何故、軍隊などに属し、飛翔艦に乗っているのだろうか？

ただ流されて 何となく『ここ』にいるのではないか。

自分の年齢を感じはじめてから、よく疑問に思う。

ガラス越しの空。

それはいつでも『そこ』にあったが、答えてくれることは無かった。

小さな食堂に、人の姿はまばらだった。

おそらく、食事の時間も回数も隊員それぞれなのだろう。

料理のカスや汁が飛んだままのテーブル。
向きも適当で引き出されたままの椅子。

そこには風紀も何も無い。

「少なかったね…料理。」

「仕方ねえだろ。」

この飛翔艦にとって俺様達は『余計』なんだ。」

テーブルに付けている世羅の腹が重低音を響かせた。

自分が半分も食べないうちに すっかり平らげた皿。
戒は小さな少女の旺盛な食欲に呆れ返っていた。

「いつそのこと、この椅子でも食ったらどうだ？
料理の味的には そんなに変わらないと思うが。」

ゴムのようなパスタを噛みながら、味も素っ気も無いポテトをフ
ォークですり潰す。

「そんなことないよ。 ボクは好きだな……」

「お気に召したのかい？ ルベランセ名物、『ブタも食わない空中
料理』が。」

唐突に鉄製のトレイが顔の横に出現する。

「！？」

振り向いて見上げる世羅。

そこには頭にターバン交差して巻く、中年の太った男が食事を差
し出していた。

「食いな。」

「……………！？」

目をぱちくりさせる世羅を見て、その男は目を細めて微笑む。

「若い時は、気の済むまで食っとくもんだぜ、お嬢ちゃん。」

「いいの？」

「……なに、丁度処分に困っていたところだ。それに……」

ニイ、と齒をむき出して笑う。

「俺にはこれがある。」

もう片方の手に隠し持つ二本の酒瓶。

「……じゃ、いただきます。」

世羅は瞳を輝かせて、料理を男の手から奪うように取った。

「……くつくつく……がはは！
そうだ、子供はそれでいい。」

見ている方が恥ずかしい気持ちにさせられる世羅の振る舞いに、
戒が思わず黙り込む。

そんな彼を尻目に、上機嫌の太った男は千鳥足で別の席へと歩いて行った。

そして戒が何気なく彼の動きを追ったその時、フィンドルが周囲

を見回しながら食堂に入ってきた。

「遅れて悪いわね。」

あ、食事をしながらでいいから……」

何故か二人分の料理を相手にしている世羅を凝視しながら、フィンドルは席につくなり、書類とペンを取り出した。

「これから搭乗証を作るの。」

ちよつとした質問に答えてくれるかしら？」

「ああ。」

「二人の出身は？」

「二人とも瑠^{ルムラ}邑の国。」

世羅が料理を口に詰めたまま言った。

「……あの五星^{いつつぼし}島の近くの？」

「とても小さな国だぜ、よく知ってるな。」

「そりゃあ、飛翔艦発祥の地だもの。」

「そうなのか？」

戒の驚きの言葉に、フィンデルがさらに驚く。

「知らなかったの？」

「俺様はそこで生まれただけで、育った国は違っからな。
お前は知って……」

戒はすぐさま世羅に聞こうとしたが、彼女のへらへらした笑顔を
見て止めた。

「ボクも初めて聞いたよ。」

そして返される、予想通りの答え。

「そつえば……戒君は何故、中王都市まで？」

「……言わねえと、何か問題でもあるのか？」

「そついうワケじゃないけれど……。」

「まあ、聞かねえと納得がいかねえわな。
あんな目に遭ったからには。」

「……。」

思わず、フィンドルが苦笑する。

「中王都市には大きな大学があるだろう？」

「……まさか…。」

「『まさか』って何だよ？」

仮にも神学校の推薦で入学試験を受けに行く、俺様に対して。」

「へえ……。」

フィンドルは感嘆の言葉を漏らした。

「世羅さんの方は…仕事だったかしら？」

「世羅でいいよ？」

「じゃあ、世羅…ちゃん。

…あなたは いつも独りで依頼をこなしているのかしら？
まだ若いのに偉いわね……。」

「うっん、ギルドでの仕事は初めて。
今までは傭兵団に居たから。」

「傭兵……。」

ちなみに、年齢を聞いてもいいかしら？」

「16。」

世羅が何気ない表情で答える。

「16……!？」

「どうしたの？」

驚くフィンデルに、世羅が訊く。

「年齢の割には、あんまりガキっぽいから呆れているんだろ。」

「……そうなの？」

憎まれ口を叩く戒に、世羅は真面目な顔で返す。

「…ちがうわ。」

16っていったら、私が まだ仕官学校にいた年齢だから…ちょっと驚いただけ。」

力なく笑う。

「ちなみに、俺様はそれの一つ上だ。ちゃんと記しておけよ。」

「……はあ。」

若いっていいわね。」

フィンドルはしみじみと言いながら、搭乗証にペンを滑らせた。

「ところで、お前よ、何で中王都市なんだ？

仕事の依頼だったら、ギルドには腐るほどあつたろくに。」

戒が世羅に訊く。

「そこへ行けば、『飛翔艦乗り』になれるって聞いたんだ。」

「…なつてどうする気？」

その答えに、フィンドルは声を上げた。

「わかんない。

どうするかは、なつてから決めるよ。」

あつけらかんとして続ける世羅に、彼女は啞然とした。

「そんなことで……なれると本当に思ってたのか。」

戒は瞳を閉じながら言った。

「うん。

なんとかなるよ、きっと。」

皿の上に残った最後のポテトを平らげて、世羅は椅子から飛び降りた。

「あ、ちょっと…」

反射的にフィンドルは彼女に手を伸ばすが、世羅はそのまま、小走りで行く。

「あいつ…世界的なバカかもしれねえな。」

「ある意味…羨ましいわ。」

「本気かよ?」

戒が肩をすくめる。

「…ところで、戒君。」

「…ちょっといいかしら。」

だが彼女はそこで急に姿勢を直し、真面目な顔つきで戒に直面した。

「……さっき年齢を聞くまで特に心配してなかったんだけど…」

口ごもりながら小さな声で言う。

「…なんだ？ 言いたいことはハッキリ言えよ。」

「彼女と…一緒に部屋で…その…絶対に『間違い』は起こさないでね？」

「……………」

長い沈黙。

「…世界的なバカだぞ？」

そして、戒は手にしたフォークを彼女に向けて逆に聞き返した。

太った中年の男は、大剣をテーブル脇に置いて既に一杯やっている男のテーブルについた。

「おい、バーグ！」

公共の場に そんな物騒なモノは持つて来るなと言ったろう？」

そして椅子に深く腰を下ろすと、彼はすぐさま言う。

「何度言ったら分かるんだ。お前は戦闘騎のパイロットなんだ。」

もつと誇りと気品を保て。……この青く雄大な、大空のようにな。」

「うるせえよ、今は夜…。

沼より深い、絶望の黒い闇だぜ、リジャン。

まったく、ことあることに説教たれるんじゃないやねえよ……。」

バークと呼ばれた大柄な男は、バーボンを片手に面倒臭そうに言った。

「……いつまでも一匹狼的な気分じゃ困るぞ。

ここは軍隊だ。

団体生活もあれば、規則もある。」

リジャンと呼ばれた太った男は、まだ続けた。

「ここへ来て、もう一ヶ月だろう？

その間、お前が乗組員達とまともに喋っている所を見た事が無い。今までどんな生き方をしてきただろうが関係ない、お前は二等兵、ここでは一番下っ端だ。

それなりに気を使って、他の連中とコミュニケーションを図るべきだと思っぞ。

それに…いくら同じ戦闘騎チームとはいえ、曹長の俺や軍曹のミ―サに対しても敬意を…。」

バークはリジャンの長い説教に、舌打ちをしながら無精髭をさすった。

「……俺は…剣士だ。」

リジャンを睨み付けながら、テーブル脇の剣を取り、立ち上がる。

「…どこへ行く？ もう飲まないのか？」

「飲む気分を削いだのは……お前だろうが。」

さらにバーグは額ひたいに巻いた小さなベルトを締め直し、食堂を後にした。

一方のリジャンは赤ら顔のまま、彼の様子を特に気に留めずに、持参した酒のコルクを歯で抜く。

「……けんか…したの？」

そこで、尖った赤いリボンがテーブル下から上がった。

「ん。」

瓶の中身のアルコールを一気に半分ほど胃に流し込んでから、口を結んで声の方へと向く。

そこには、さきほど自分が料理を与えた少女が テーブル脇に屈んでいた。

リジャンは酒瓶をゆっくりテーブルに置いた。

「…なに、いつものことさ。
俺達は戦友なんだ。」

だから少し時間が経てば、また仲良くなるのさ。
……心配してくれてありがとうよ。」

そう言って、世羅の頭を撫でるリジャン。

「ねえ、この艦の中、探険してもいいかな？」

「ああ、勿論さ。」

特に甲板に近い廊下の窓は、夜空の星が最高に綺麗に見えるぞ。」

「見たい！どこにあるの？」

「ふ、『客』を案内するのも隊員の役目ってね……」

テーブルに、二つの酒瓶を置いてきぼりのまま。

リジャンは立ち上がって世羅の手を引き、食堂を後にした。

「あの聖騎士さま、まるで伝説に謳うたわれる神使しんしのようだって思いません？

美しい顔つきで……まるで彫刻みたい。

うつん……中王教会の大天井に描かれた絵にも……似てたかも。」

「ミーサはロマンチストね。」

「ええ…？そんなこと…ないです…」

「いい年こいて、目の前で女学生みたいな会話しないでくれねえか？
メシが不味くなる。」

皿に残した料理をちびちびと食べながら、テーブルで読書をしながら戒は言った。

「一体何なんですか、副長。」

この失礼な男は…修道士って聞いたから、どんなに礼儀正しい人かと思ったら…」

ミーサは久し振りに隊員以外との楽しい食事を期待して、急いで用事を済ませてかけつけたというのに非常に損な気分させられる。

「世の中の修道士が全員礼儀正しいだって？ 随分勝手に誇大な妄想だな。」

戒は本のページから目すら離さずに言った。
その態度が、さらにミーサの神経を逆撫でる。

「……ところで、もう一人居るって聞いたけど…」

「さあな。ひととおりメシを食ったらどっか行っちゃったよ。
まったく落ちつかねえ奴だ。」

しかも…よくまあ、こんな不味いメシを二人分も食べたもんだぜ。

あとで腹でも壊さなきゃいいけどな。」

「……食べさせてもらってるくせに!!」

「まあ、作っているのは彼等だから…。

でも人間の味覚も知らず、限られた食材でよくやってる方じゃないかしら。」

怒りで肩を震わせるミーサを抱き、厨房で働く覆面姿の小人達を脇目に、作り笑いを浮かべるフィンデル。

「…中王都市では、あいつらのことをまるで人間じゃないみたいと言い方をするのか?」

戒は言った。

「…!」

特に意識もしていなかった言動を指摘され、フィンデルがハツとする。

「経費削減のために被支配階級を使うことくらい、先進国ならどこもやってるわよ!」

ミーサは返した。

「俺様は単に社会勉強のために他人の意見が聞きてえただけだ。それも、お前みたいな三下じゃなくて、フィンドルみたいに地位がある奴の、な。」

「なんですつて!？」

大体、副長を呼び捨てにするなんて……」

「黙れ。俺様は確かに若いが、それなりの修羅場を潜り抜けてきた。」

こんな狭い船の中で閉じこもりきりの奴等よりは、よっぽど世の中のことを知っているつもりだ。」

「な……な……!」

「いいの。ミーサ。」

「ごめんなさいね。人には……色々と事情があるものだもの……ね?」

爆発寸前のミーサをなだめ、フィンドルは戒に言った。

「わかりやあ、それでいいんだよ。」

そんな彼女のはからいもまるで意に介さず、今度はテーブルの上に足を放る戒。

(やっぱり、私……こいつ嫌いだ……)

その悪態に我慢の限界を感じるミーサ。

そんな中

「ところで……この艦に、シャワーはあるのか？」

両の目を閉じ、急に戒が言う。

「シャワーですって！？」

その言葉に対し、ミーサが声を荒げる。

「とんでもないわ！ 水は空じゃ一番貴重なの！
この飛翔艦の搭乗員だって、どんなに水を浴びたくても体を拭く
くらいで済ませてる。

…これだから素人は！」

「違うわ、ミーサ。」

フィンデルは穏やかな表情で彼女を制した。

「別に…戒君が浴びたいわけじゃ…ないのよね？」

「……………」

仏頂面のまま、何も答えない戒。

「10分くらいなら…そして一人なら許可するわ。
シャワー室は、機関室の横。

もう何十日も使われていないから、色々不具合はあるでしょうけど。」

ミーサはフィンデルの顔を見た。

彼女は今まで見たこともないような優しい顔で笑っていた。

「おい。」

だが、そこで突如としてテーブルが影に覆われる。

三人は思わず天井の照明を見上げた。

その影の原因。

それは大きな剣を背にし、軍服の上着の前をだらしなく開け広げ、無精髭を生やした屈強な体つきの人物。

指先と軍服は油まみれで、顔もすすだらけ。

どうやら、彼が格納庫で『苦戦』したのは明らかだったことをフィンデルとミーサは直感する。

「バーグさん……。」

紹介するわ。

こちら、戒「セバンシュルド君。彼は修道士で、中王都市まで…」

他を圧倒する彼の様相に、フィンドルが少し気後れしながら言った。

「そんなこと、どうでもいい。
それより……」

息を大きく吸い込む男。

「機体の整備をしたいのでね。
手伝っていただけませんかね、ミーサ軍曹殿。」

「……何？ どしたの？
妙にトゲのある言い方して……。」

「へえへえ、どうせ、わたくしめは所詮軍隊見習い、二等兵の身分
でございます。」

ゆえに自分だけでは どうしてもわからねえ部分が沢山あるんです。

だから……どうか、直々にご教授いただけませんかね。」

「リジャンにまた何か言われたのね……。
分かったわ。」

行きましよ、私……今、すごく暇だし。」

立ち上がり、戒を見下ろす。

ミーサの様子に、戒は特に気にも留めず、本を読み続けていた。

二人が去った後。

戒を頬杖を突いて眺めながら、フィンデルは口を開いた。

「戒君って、面白いわね。」

「……失礼だな。」

「そうじゃなくて、何事にも動じない、ちゃんと『自分』を持っていて羨ましいってこと。」

「……妙なこと言いやがって。」

戒が本を開いたままテーブルに置く。

「自分ってのは、この世で一番なんだぜ？」

自分がしつかりしてねえ奴が、他人をどうこう出来るはずもねえ。

……まず自分あつての他人だ。そうじゃねえのか？」

戒は、自分に言い聞かせるように言った。

「……しかしまあ、他人を羨んでいる時点で、あんたは論外だけだな。」

別段、責める気は無いのに、口が勝手に動く。

「……そうね。」

反論もせず、フィンデルは目を伏せ。

「私にも天命の輪があつたなら……才能があつたなら……そんな風に、きつと自分に自信がもてるのにね。」

そして本当に小さく、つぶやいた。

「才能？」

しかしそれを聞き取った戒が声を荒げる。

「……普通の人と違う力は才能よ。」

「ふざけるな。」

これが…才能？　こんな…中途半端な能力ちからがか？

こんなものをもって生まれたことが　いかに残酷か……お前にはわからねえだろうよ。」

右手の指を左手で包みながら立ち上がる。

「俺様は俺様だ。」

たとえ、エア・ファンタジスタ天命人で……なくなつてな。」

感情的に席を離れる戒。

それがフィンデルにとって初めて、彼の若さと幼さを感じた瞬間だった。

3

「遅かつたな。」

深夜。

世羅が部屋に戻ってくると、ベッドの上の戒は読んでいた本をすぐさま閉じた。

「えへへ、きれいな夜空を見てたら、時間を忘れちゃった。リジャンっておじさんが楽しい場所に連れていってくれたんだ。」

そう言って笑う世羅を、戒は冷めた目つきで眺めて立ち上がる。

「来い。風呂は無理だが、シャワーは浴びることができるらしい。」

「ホントに!？」

「汗を流せるのがそんなに嬉しいか？」

「うん！」

「そうか。」

でも別にお前を喜ばせるためじゃねえぜ。」

戒が世羅の顔に人差し指を近づける。

「これで、貸し借りは…チャラだからな。」

「…なんのこと？」

「……いいからついて来い。」

今日は疲れたからな、さっさと済まして寝るぞ。」

「あ…とと…待つて!」

戒が急かすのをよそに、世羅は自分の荷物の方へ移動する。

「えへへ……石鹸とタオル。」

取り出した入浴用具を抱えて、先に廊下を進む戒に並ぶ。

廊下には、わずかな光を放つ小さなランタンが一定の距離で掲げられていた。

そして廊下のガラスの先に大きな月を臨みながら、二人は靴の音を響かせて歩いていった。

「くそっ！　くそっ！！」

冷え込んだ格納庫奥で、バ―グが大きく呻く。

戦闘騎の内部。

一度外して掃除した小さな歯車を再び元の位置に戻すだけでも、彼の大きな手先では一苦勞であった。

さらに焦りが精度を狂わせて、きちんとした位置にはまらない。

「畜生！　向いてねえ…向いてねえんだ！！」

バーグは手にした齒車をついに放ると、その場に大の字になった。

「短気は損気。」

慌てずに、ゆっくりやってみなよ。」

ミーサは転がった齒車を拾い上げ、油を注いで綺麗にしてから、バーグに優しく返した。

だが、彼は一旦はそれを受け取ったものの、もはや立ち上がる氣力を失っていた。

「なあ…おまえも内心は思ってるんだろ？」

「何を？」

「俺は操縦士には向いてないってことだ……。」

「そんなこと…」

ミーサが視線を床に落として黙り込む。
全て言わずとも、その反応だけで充分だった。

バーグは仰向けの態勢から自分の腕を枕にして横になる。

「とどのつまり、剣士以外、不器用な俺の生きる道はねえんだよ…。」

「そんなのわからないってば！」

まだここに来て一ヶ月くらいなんだし……。」

「なぐさめはよしてくれ。」

バーグは自分の顔面を分厚い左の手の平で覆い、携帯用の度の強い酒を取り出して一気にあおった。

「……俺がこの一ヶ月で教えてもらった中で一体どのくらい会得できた？」

操縦も満足に出来ねえ。

整備だって手間かけさせる……。

おまえもリジャンも、さぞ迷惑だろうよ……！」

「そんなことないよ……！」

それに……はじめっから何でも出来る人なんて……どこにもいないんだから……。」

「だから、なぐさめるな！」

余計にむなしくなるんだよ……。」

横になった体制によって、奥にある銀無垢の戦闘騎が目に入る。

バーグはおもむろに立ち上がった。

「……あー、面白くねえ……。」

ピカピカしやがってよお……。」

さらに近付いて指紋を塗りたくる彼。

「もし、操縦席の中に小便ひっかけたら、持ち主はさぞかし困るだろうなあ。

ひやはは。」

完全に酔いが頭に回っている様子だった。

言いながら、バーグはズボンを下ろし始める。

「みつともないよ！　バーグー！！」

「うるせえ！　俺は騎士つてのが大嫌いなんだー！！」

「ダメったら！」

その持ち主は副長のお気に入りなんだから！」

「あ…？」

副長？　あのねーちゃん、年甲斐も無く、聖騎士さまにときめいちゃってるつてのなあ！？」

「恋愛に…年齢は関係ないでしょ！」

「なにムキになってんだ？」

ミーサは目を開いて少しの間固まった。

だがすっかり酔い、正常な判断を欠いている今のバーグを見て、覚悟を決めて口を開く。

「バーグは……もう……恋……しないの？」

「馬鹿言え！」

40近い、子持ちの中年が そんなみつともないこと出来るかよ
「！！」

ズボンを降ろしたままの姿勢で言う。

（今の恰好の方がみつともないんだけど……）

ミーサは彼の姿を白い眼で追いながら思った。

「たとえば、娘より年下の お前なんかと付き合ったら……」

「！」

ミーサの心臓が高鳴る。

「かなりの傑作……！」

天国にいる愛する妻に顔向け出来ねえよなあ……。」

だが、うつとりした表情で、銀の戦闘騎に自分の顔をすりつける
バーグ。

「 バカ……！」

「うげ！？」

そんな彼の尾？骨を、ミーサは手にしたスパナで思い切り叩きつけた。

「い！？…い…いてええええ…なにすん…！？」

「深夜の見回り行つて来なさい！ この新入り！！」

悶絶して床を転がり回る彼を見下ろしながら、恐ろしい形相と剣幕でまくしたてるミーサ。

バーグは涙目で尻をさすりながら、その場から命からがら逃げ出したのだった。

鼻歌混じりの世羅に対し、戒はシャワー室と呼ばれる場所に足を踏み入れた瞬間に言葉を失った。

フィンドルに言われたとおり、そこは現在使われている様子が全く無く、相当に汚れていた。

生きている大蛇のように 壁際にうねる錆びた鉄パイプ。
カビすら生えない パサパサに乾燥した床。

しかもこれらには全て まんべんなく埃が溜まっていた。

いくつもあるシャワーの各扉は、上と下になりのスペースがあり、密閉されていない。

防犯上は かなり危険である。

「……本当に使えるのかよ…コレ。」

戒は漠然と呟きながら、恐る恐る一つの扉を開ける。

中も、さして周りと変わらず汚ない。

蛇口を捻ると、壁の上方に付いた鉄のシャワーから錆びついた赤く濁った水が漏れ出し、
床の汚れと混ざりあって黒ずんだ液体として外の排水口へ流れていく。

戒はその様子に思わず顔をしかめるが、流し続けるうちに透明の綺麗な水が出るようになるのを
確認して安心した。

「なんとか…使えるようだ。」

「やった!」

「10分くらいの約束だからな、さっさと浴びろよ。」

「うん!!」

戒と入れ代わり、世羅がいそいそとシャワーに入った。

待ちきれないのか、世羅は既にリボンを解いている。
髪をおろした彼女はすれ違った瞬間、印象が違って見えた。

軽い扉をしつかりと閉め、戒はすぐに見張りに付く。

「戒は？」

ブーツが床に投げ出され、長い手袋が扉にかけられるのが遠目で分かった。

「俺様は……いい。」

このことを知らない乗組員が水の音を不審に思うかもしれない。
自分が離れるわけにはいかなかった。

「そう？ きつと気持ちいいと思うけど。」

続いて、上着、瞬く間に下着がかけられる。

そんな中、戒は食事の時でさえ取らなかった彼女の左手の手袋に
何気なく注目した。

長い、二の腕全てを覆うくらい長くて薄い手袋。
貴婦人が点けるような、世羅の性格にはおよそ似つかわしくない
もの。

戒は自分の感じ始めた妙な気分を紛らわせる為、そこで暇つぶしに持って来た本を取り出した。

「わ!」

「…どうした!？」

しかしそれも束の間、世羅の発した大声に思わず身を乗り出す。

「冷たくて、すごく気持ちいい!」

だが、何でもない一言に溜め息をつく。

…やがて一分と経たぬうち、けたたましい水の落下音と共に、石鹸の泡が排水口に流れはじめた。

ほのかで清潔な匂いが読書中の戒の鼻腔をまさぐる。

ひよんなことから共に旅をすることとなった元気でガサツな少女に対し、戒は

色気など微塵も感じなかったものだが、今は彼女の意外な女性らしさを感じざるをえない。

「あ!」

再び大声。

戒は今度こそ気に留めず、読書を止めなかった。

「戒！ 戒！！」

「なんだ！？ 今、俺様は忙しいんだよ！！」

「石鹼ー！！」

誤って落としてしまったのだろう。

見ると、濡れた楕円形の石鹼がつるつると床を滑っていた。

「……くっ……！」

排水口に飲み込まれる寸前、戒は咄嗟に走り、なんとか石鹼を助け出す。

「何やってんだ、おまえ！！」

「ごめんごめん。」

扉の空いた上部から、泡だらけの髪で、目を閉じながら舌を出す世羅の顔が見える。

「……ほら、受け取れ。」
「ん。」

戒は遠くから石鹼を放ろうとするが、目を閉じた世羅がそれを見るはずもなかった。

仕方なく、近付く。

「手、出せよ。」

なるべく室内を見ないように、戒は遠くから大きく腕を伸ばした。それに呼応して、世羅は全く意図せずに、左手を差し伸べる。

だが、それは真つ黒な腕。

彼女の白い柔肌と対照的な黒。

石鹼は滑って落ちた。

しっかりと開いた目でみると、それは完全な黒ではなく、鮮やかで細かな紋様^{もんよう}。

それが左手の全ての指先から手首、肘、二の腕にかけて螺旋状に伸びていたのだ。

つまり、真つ黒に見えたのは錯覚。

……だが、それは望まれない錯覚だった。

見た刹那、自分の中を物凄いスピードで突き上げる衝動。

全く止めることが出来ない。

戒は勢いよく扉を蹴破り、中の世羅を腕力で壁際に押し潰した。

「ん！」

突然の背中への衝撃に、世羅が小さく呻く。

さらに、戒は世羅をそのまま乱暴に押し倒すと、胸元から取り出した十字架を彼女の首元に押し付けた。

世羅の濡れた顎から、肌の温度の加わった生暖かい水の雫。

それが、彼女の首を捉えた自分のもう片方の手の甲に落ちる。

「…答える。

……何故……」

戒の意思によって細く伸び、先端を尖らせ始める赤い十字架。

彼はそれを押し付けている彼女の首筋にも黒い紋様があることに気付いた。

そして、目を下の方へ移すと、さらに驚愕する。

左胸…丁度心臓のある箇所。

そこにも同様の紋様が蛇のように細くうねりながら、下へと伸び

ていた。

それが、やはり腹にもある紋様に繋がっているのである。

盛り上がったもへこんでもいない。

完全に肌と同化している特殊な紋様。

戒には、まったく見覚えがあった。

「何故…。」

何で、お前の身体に……これが……あるんだ……！」

彼の迫力と大声に驚き、世羅が目を閉じたまま、小さな身体を震わせる。

「答える……！」

何故……『その紋様』があるのに、おまえは動いていられる……！」

閉じた瞼。

世羅は闇の中でも、戒の腕が自分と同様に震えてるのが判った。

「それとも……『あいつ』の『呪い』と……お前は関係があるのか……？」

上から覆いかぶさられたまま、戒の重みと鼓動を感じる。
そして、理由の分からない問い。

「…答えるおおおっ！！」

嗚咽にも似た絶叫が、鼓膜に轟いた。

バーグは痛む尻をさすったまま、乾いた自分の足音が響き渡る廊下を歩いていた。

この艦がルベランセに改装する前は、戦艦だったことはリジャンから聞いていた。

なまじ人の歴史を感じる場所の方が気味が悪い。

これならば夜の森を歩いた方がまだマシだ、バーグはそう思った。

官軍：大陸十字軍として戦争に加わった、若い傭兵時代。
夜中といえば、局地においてゲリラ戦で抵抗する地元兵。

それを、今思えば身震いするくらいの数を葬った。

その後もその経験を生かし、各地を転戦。
時には凶獣退治に精を出し、人々からそれなりの賞賛を受けたこともあった。

その中で妻と出逢い、娘も出来た。
自分には過ぎた幸せな人生のはずだった。

ところが、40歳という年齢を前に自分は、何の因果か、今まで
の人生とは全く脈絡の無い仕事で生活している。
…屈辱の日々だ。

最近では、悔しさを紛らわすために飲めない酒に手を出し、悪循環の連続だった。

そんな自分に嫌悪しながら、無機質な廊下を見回す。

異常などあるべくもなかった。

だが格納庫へ戻ろうとしたその時、耳元の壁が響いた。
研ぎ澄まされた感覚が戻り、洩れるような水の音を捉える。

「……………！」

背の大剣を握り締める。

バーグは小走りで、音のする方向へ自然と進んでいった。

（『覚悟』をするんだ世羅。）

（『普通の人間ではない』おまえが『下界』で普通に生きるという

ことは、並み大抵の努力では出来ない。
それを肝に銘じておけ。）

（特に『身体』は隠せ。人は『自分と違うもの』を極端に『恐れる』。）

（決して気を許すな。真に『信じあえる者』と出逢うまで……）

師の言葉が闇の中、聞こえた。

熱い。

涙がこぼれた。

「……ごめん……なさい……。」

世羅が胸の中で細く鳴く。

恐らくその謝罪の言葉は自分に向けられたものではないだろう。

だが、それは戒の頭から血の気を抜き去るには充分だった。

首元に突きつけた凶器と化した十字架。

弱々しい、そんな少女の命を握った右手を、その身体を乱暴に扱った左手を冷静に見詰める。

そこには取り乱した自分が独りで居て、悔いた。

「……すまん。……あまりに……似すぎて……いたんだ……
……俺様の知っている『呪いの紋様』と……」

世羅の瞼に付いた石罅の泡と水を指の腹で静かに拭う。

おそろおそろ薄目になりながら、少女はゆつくりと戒を見た。
そこには、乱れた前髪から自分と同じように雫を垂らして、憂いでいる戒の姿があった。

「ボクには……8歳からの記憶が……無いの……。
気が付いたら、この身体で、お師匠のところにて……」

濡れた唇を震わせて答える。

「憶えてることは、ボクが飛翔艦乗りになりたいってことだけ……。
だから……だから……」

「何も知らねえよな。……それじゃ……」

涙を頬に伝わせる世羅を、戒はそっと抱き寄せた。

「……なあ、油断したんだろ？
俺様と親しくなつて。」

本当は、それは隠さなきゃいけないって言われてたんじゃねえのか？」

世羅は耳元で囁く戒の問いに頷いた。

「ごめんね……先に言えば……良かったね……」。

戒のこと信じてたのに……ちょっとだけ……知られるのが恐かった……」

「謝るな。」

それにな、これからは……油断しても……いいぞ。」

「……信じてくれるの？」

「……おまえは……嘘をつけるほど頭よくないからな。」

戒がシャワーを片手で止める。

けたたましい水音は消え、静けさが広がった。

「俺様の方こそよ……その……なんだ……」

「戒も……恐かったの？」

言葉が上手くまとまらない戒の胸が、世羅が温かい吐息を感じる。

「ああ……そうだな。」

俺様の目的……。

まさか、中王都市に行く前に、何か『それ』に近いものを掴めるなんて……思わなかったからよ……」

「お師匠は……これを『神呪』^{しんぐ}って……呼んだ……。」

世羅が顔の雫を振って飛ばして、自分の黒い左腕を指す。

「神呪……か。」

具体的な名称に、戒は切っ先を触れることさえ途方も無いことと思っていた『糸』を一気に手繰り寄せた気がした。

世羅の身体の紋様をもっとよく調べる為、顔を少し離して更に注目する。

傷一つ無い真っ白な柔肌。

その紋様以外は、何ら変哲の無い普通の人間と何ら変わらない。

だが、彼女の胸に触れている自分の胸から、心臓の鼓動が伝わるのを感じて、彼はすぐにある一つの重大な点に気付いた。

夢中になって気付かなかったが、今お互いは濡れたまま、胸や腹はおろか、
腿^{もも}の付け根まで密着させている。

訳もわからず、あどけない表情を浮かべている世羅に、突然の罪悪感を覚えた戒は

すぐに、彼女の肢体から目を離し、首を無理矢理な方向へ逸らした。

「……誰かに見られたら誤解されそうだ。

さて、シャワーを浴び終えたら……今日は もう休もうぜ……。」

世羅から離れようとした丁度その時。

シャワー区画の扉が勢いよく開かれた。

そして重い足音を鳴らして中へ入ってきたその者は、大剣を持つ大男……バークだった。

なんとという間の悪さ。

戒は彼に説明するために、咄嗟に口を開いた。

だが、その大男の認識は、肌を露にした少女とそれに覆いかぶさる食堂で見かけた若い男の姿。

その事実だけだった。

「……貴様ツ!?」

しかも襲われていると思ったのは、自分の子供と同じ年頃の娘。途端にバークの頭の中は真っ白になる。

「ま、待て！　これは　」

「問答無用だ！！」

遠い距離を、一気に跳躍。

縮こまった姿勢のまま、中空で抜剣。

「だから、ちよっ…ま……」

あまりにも動きのキレが良い相手の様子に、ひとまず説得をあきらめ、戒は急いで世羅から離れる。

きらめく刃。

頭上のパイプは一瞬で寸断され、一気に水が噴く。

戒は濡れた床を転げ回り、またたく間に室内の隅へと追いやられた。

「許せねえ…」

そこへ、さらに上段に構えてバークが突進して来る。

「坊主の分際でウチの女子隊員に手を出すとは…いい度胸だ！！」

「……ウチの隊員だつて!？」

世羅のことを言っているのだろう。

この男が大きな思い違いをしているのは明らかだった。

だが、考える間もなく、空を切る音。
戒は息を吞んで、瞬時に腰を落とす。

髪をかすめる刃。

明らかに、首を狙っている攻撃。

(……………やばいぞ!!)

そこで戒は自分の頭上で剣が止まったのを見て、その次の動きを理解すると、握ったままだった十字架を構えた。

案の定、返す刃が向きを変え、今度は縦の軌道で戒に襲いかかる。

「イーデイス
聖十字!!」

戒の叫びに呼応し、上下左右が一気に伸びた十字架。
瞬時にその中心が菱形ひしの赤い膜に覆われる。

「!？」

渾身の力を込めて振り下ろした剣が一瞬強い抵抗を感じたと思えば、そのまま両腕が空をきり大きく落ち込み。

剣身が、十字架の赤い膜に触れた部分から粉々に砕け散る。

気が付けば手に残ったのは、刃がわずかに残った柄のみ。

バーグはその光景に目を見張った。

「『聖十字』だとっ!？」

そして叫びながら、蹴りを放つ彼。

「く……!！」

戒はそれを交差させた腕で耐えるが、相手のあまりの怪力に、再び世羅の脇まで一気に飛ばされてしまう。

「……なんで、戦うの!？」

たまらず、世羅は戒の前に立ちはだかり叫んだ。

「えっ!？」

少女が一糸まとわぬ姿で自分に浴びせかける、その意外な言葉。バーグは間の抜けた声で返した。

「何故って、お前が襲われているから…。」

「？」

「……おまえ、名前と階級は？」

少女の態度に、額ひたいから脂汗がにじんでくるのを感じながら、バグが訊く。

「ボクは、世羅Ⅱディーベンゼルク。

……階級って？」

「おまえ、ウチの隊員じゃないのか！？」

「二人とも…『客』だ……！」

戒が叩きつけられた腰をさすり、齒ぎしりを混じえて言った。

刃を失い、羽毛のように軽くなった自分の剣を力無く下ろすバグ。

「誰だってよお……『そういうこと』って思うじゃねえか…。
人相の悪い男に若い娘が襲われてりゃあ……。」

「……ちよつと待て、それは言い訳か？」

戒は静かに言った。

「じゃあ…認めるんだな！？ てめえが悪いってよ！！」

「ぐ……ああ、謝るぜ。」

軍服の上着を脱いで、一糸も纏わぬ世羅にかけてやるバーグ。
そして彼は、丸太のような太い腕を小さく落とし、申し訳なさそうに彼女の薄い肩に軽く触れた。

「おまえこそ…ホントにここの隊員か？」

そいつが自分の仲間かそうじゃねえか、それくらい見分けはつくもんだろつよ。」

戒が納得のいかない様子で、さらに世羅を見ながら言う。

その言葉にバーグは顔色を変えた。

「俺はまだ、この艦に来て日が浅い。

艦内に人がいりゃあ、軍人と思うのが普通だ。

それよか、紛らわしくもこんな所で、いやらしい行為に夢中だった奴の方が責任はあるんじゃないかねえのか？」

「……いやらしい……！？ 俺様達は…そついう関係じゃ……」

「どうか、このスケベ坊主め！

女体を開く前に、悟りを開きやがれ！！」

「な、な……！！」

大体、最初にこつちの話を落ち着いて聞きゃあ、こんなことにもならなかったろうが！

この単細胞のクソヒゲ野郎！！」

二人は顔を互いに顔突き合わせ、齒をむき出しにしていがみ合った。

だが、その様子をぽかんとして見上げる世羅の視線に気付き、バ―グは短く咳払いをする。

「…それより、坊主。

どこで聖十字を盗んで来たんだ？」

「ああ？」

「それは各地の神学校、首席卒業の証のはずだ。

お前みたいな野郎がもらえるような代物じゃねえんだよ。」

襟を直すバ―グ。

その太い首に一瞬、細い鎖が光る。

「馬鹿言え、実力だ。

お前の言うとおり、首席卒業なんだよ。この俺様は。」

堂々と言い切る戒に、バ―グは思わず顔をしかめた。

「……中王都市まで一体何しにいくつもりだ？」

「大学へいく。」

「世も末だな。お前の人相じゃ、司祭より魔王の方がおに合いだぜ。」

「誉めてもらってありがとうよ。」

だが、もつとも、俺様は司祭になる気なんざ毛頭ねえ。俺の目的は、その『呪術科』で勉強することだ。」

「！」

世羅がその言葉に反応する。

そんな彼女の様子を、戒は見えて見ぬふりをした。

一方のバークは、すらすらと自分に対して意見する青年が気に入らない。

「……砕けた剣、弁償しろやクソガキ。」

終わったことを持ち出して再び詰め寄る。

「……てめえこそ、俺様の高等な技を使わせやがって。おかげで、疲れちまったぜ。こっちが金をもらいてえくらいだ。」

「あ？　なんだと！？」

「殺すぞ！！　ヒゲ！！」

戒も応戦し、それはまるで子供同士のつかみ合いの形に発展する。

だがそこで、再びシャワー室の扉は突然開かれた。

「……だれなの！？　こんなところで騒いでるのは？」

それは戒も、勿論バーグも知っているミーサの姿だった。

「……バーグ！？」

その手には、やはりスパナがある。

反射的に尻を押さえるバーグ。

まだ、ほのかに痛い。

「……帰りが遅いと思ったら……一体何してるのよ……。
それに……」

ミーサは彼等の傍にいる世羅に目線を向けながら、怒りで肩を震わせていた。

恐る恐る確かめる戒とバーグ。

世羅は髪と全身が水浸しの姿で、さらに半裸のまま。

それを囲むように二人の男。

はたから見れば、完全に不審な光景。

同時に蒼ざめていく二人は、忍び寄る不安に一歩ずつ退いた。

その後、シャワー区画には暫くの間、重々しくも鈍い金属音が響き続けていた……。

「ケーキ……そろそろ食べたいの。」

艦体安定の確認作業を終えたメイが呟いた。

「あら、まだ食べてなかったの？」

フィンデルが訊く。

「さっき食べた『残り』って意味さ。」

リードが呆れながら答えた。

「……そうだ、お茶をいれよう。」

「キーキに合うのは…紅茶だろうか。」

『砂糖』は沢山入れるのがいいかな？」

デチャードは立ち上がりブリッジの扉へ向かう。

その途中、彼は中央の椅子に座るフィンデルに視線を送りながら近寄った。

「？」

彼の不自然な行動が気になった彼女は、近付くように態勢を傾ける。

「…副長、お話があります。」

「実は先程……」

それは小声での耳打ちだった。

急遽、ブリッジに呼び出されたマクス。

「先程、この艦の念通士がある通信を受け取りました。

実は……貴方の母艦がこの付近の空域まで来ているようなのです。

」

フィンドルの言葉にも、彼は重い表情ながら眉一つ動かさなかった。

「マクス操縦士はすみやかに帰還するように、と。」

「帰還？」

重い表情を変えずに、腕を組む。

「それは……今、この艦が飛行中に、との解釈で宜しいのか？」

「ええ。

…早い話、先方は貴方とルベランセが接触した事実を公おおやけの記録に残したくないそうで…」

「つまり、あんたが軍隊に世話になった事実を隠蔽いんぺいしたいってことさ。

中王都市に着く以前に手を打ってきたってわけだよ！」

「リード……！」

椅子で伸びをしながら悪態をつくリードを、フィンドルが叱咤する。

「フン、騎士団の連中が考えそうなことさ。

何よりも名誉を重んじる、素晴らしい方々だからな。

恩に対する礼よりも、恥をさらしたくない心の方がよっぽど強いと見える。」

かまわず続けられる言葉にも、マクスは動じなかった。

「助けていただいたのに、非常に申し訳ない。」

「いえ、何も言わないで下さい。

解ります。人には立場というものがあることを。」

「……感謝いたします。」

フィンドルだけでなく、ブリッジの乗組員全員に深く頭を下げるマクス。

メイとタモンはつられて会釈し、リードは面白くなさそうにそれを脇から眺めている。

「では早急に準備を、聖騎士殿。」

デチャードに促され、マクスは彼の顔を一瞬見た。

そして一瞬、笑顔をこぼした。

「……どうかされましたか？」

「いいえ。」

では失礼しようと思います。」

別れの言葉を発するマクスに、フィンデルが付き添おうとする。

「ありがたいが……私ごとに見送りは結構。
そして……この礼は、いつか必ず。」

「……はい。」

では、お氣をつけて。」

二人は互いに敬礼をして離れた。

ブリッジの扉が閉まった後も、フィンデルは暫くそのままの態勢だった。

天井に吊るしたランタンを消すと、窓から洩れる月の光が映えた。
暗闇で感覚が冴えたおかげで、カビ臭さが際立つ二人の寝室。

「ねえ、戒…さっきの話だけど…」

硬いベッドの上で世羅が呟く。

「何だよ。」

さらに硬い、その床に横になりながら戒は答えた。

「戒は呪いを解く勉強をしたかったんだ……。」

「…それが…何だってんだよ。」

「えらいよね。」

ゆっくりと上半身だけを起き上がらせ、胡坐あぐらをかいて微笑む世羅。

「……………」

戒は毛布を頭からかぶったまま、振り向きもせずにも何も答えなかった。

「世の中で呪いに苦しむ人々を助けたいんでしょう？ それって素晴らしいよ。」

「勘違いするな。」

寝返りをうつ。

「俺様が真に救いたい思っている人間は この世で一人だけだ。別に他の人間がどうなろうと知ったこっちゃねえよ。」

その言葉に、世羅は黙っていた。

「ああ、勿論…お前のことだって考えてやるよ。明日になったら、呪いの症状とか教える。『ついで』に考えてやるから。」

だから……心配しないで もう寝ろよ。」

そこでようやく戒も上半身を起こし、世羅に向く。

「……戒、ボクは…そんなつもりで言ったんじゃないよ。」

だが月明かりを背に、世羅は優しく微笑んだ。

「……。」

それを見て、戒は再び毛布の中に頭を突っ込んだ。

彼女の純朴な眼差しと今の一言がとても痛かった。

格納庫の扉が開かれると、冷たい夜風が一気に中へ流れ込んだ。

吹き付ける豪風によって、鉄の扉を握ったミーサの短い髪がなびく。

「急な事態で申し訳ない。」

流曲の形をする銀の兜を被ったマクスが、銀の機体の操縦席の中から言った。

「いえ……お気をつけて！」

ミーサは風圧で片目をつむりながら叫ぶ。

それを合図に、マクスの戦闘騎は振動。

小さめの両翼がわずかに横に開き、最後部のブースターに蒼い火が灯る。

そして機体全体が垂直に浮き始めると、ミーサは思わず目を見張った。

普段聞き慣れた、戦闘騎特有のエンジン音が無い。
整備士の自分が見たことも無い起動。

先程、彼と共に機体を整備した時も、機関係統には錬金学的な封印が施されていて、
開けて中を覗くことすら叶わなかった。

だが、ルベランセの整備士だからこそわかる。
この戦闘騎には、この飛翔艦と同じ、『源炉』の技術が使われている。

源法術の素^{もと}にして、この大気に充滿する万能物質『源^{フェル}』。
これを利用する動力機関を持つ機体は、ほとんど燃料を必要としないで大空を自由に出来る。

勿論、その分扱いが難しく、戦闘騎に積めるほどの小型の源炉が開発されたなど今まで聞いたことが無かった。

「それでは、旅の無事を。」

敬礼するマクス。

銀の機体が宙に浮いたまま、ブースターから噴出する炎によりゆっくりと前進する。

横から見える彼の表情は、銀の兜に覆われて、何も伺^{うかが}い知ること

は出来なかった。

深夜のブリッジでは、メイが椅子で小さな寝息をたてていた。

「…ったく、メイのやつ…職務怠慢もいいところだぞ…」

リードが自分の重い肩を拳で叩きながら、立ち上がるうとする。

「ああ、私がやるよ。」

それに先んじて、彼女の食べかけのケーキと皿、紅茶のカップを片付けるデチャード。

「もう寝室まで連れて行こう。」

彼女は精神的に子供だ。きっと疲れが溜まっているんだろう。」

「……ああ、頼む。」

リードが頷くと、彼はそのままメイを抱えてブリッジを出ていった。

二人が出て行った後、リードはすぐさま口を開いた。

「なあ、フィンデル。」
「！」

普段ブリッジで聞き慣れない自分の名前に、艦長の椅子に座ってうたたねをしていたフィンデルはどきりとして目を覚ました。

「な、なにかしら、リード…。」

「さっきの俺、ガキっぽかったか？」

「……マクスさんに言ってたこと？」

まだ眠そうな目をこすりながらフィンデルは答えた。

「ああ…。」

俺はいまだに公私混同で物を考えちまう…。
それに比べてフィンデルは凄いよ。あるべきところでは、しっかり軍人だ。」

「…そんなこと…ないってば。」

あまり緊張の無いところでは、元々くだけた口調のフィンデルだったが、同期に軍の補給部隊に配属されそれから働きを共にしてきたリードとだけ話す時は、特にそれが顕著に現れてしまう。

「俺は何年もフィンドルの働きを傍で見ているから、お前の凄さが分かる。」

……尊敬してるんだ、マジで。」

溜め息混じりのリードの言葉。

「ところが俺は全然ダメだ。」

それに比べてデチャードの奴…。

軍で働くのはこれが初めてなのに、念通士としての技量も判断も俺より上だ。

人としての度量もな……。」

「リード？」

急に彼は立ち上がり、フィンドルに近付いた。

「今回のルベランセへの異動だって…フィンドルとまた一緒だったから喜んだけどいいところ…見せられそうもねえな。」

「ちょ…ちょっと…」

真顔で憂いだ表情で寄って来るリードに、フィンドルは困りながらも顔を赤らめた。

二人きりになると、ことあるごとにリードは自分にアプローチを

かけてくる。

「ベ…別に…私にいいところを見せようだなんて…」

リードは自分らしく…していれば…いいと思うけど…」

彼女の方にあまり『その気』は無いのだが、彼のひたむきさは嫌いではない。

何年もの間、迫られる度に、何とか誤魔化すことを続けている。

「あれ？」

他の二人、どうしたっすか？」

そこへ用を足し終え、戻って来るタモン。

すると、リードは何事も無かったかのように自分の席へ戻る。

フィンデルも椅子に深く座り直し、同時に胸もなでおろした。

照明のほとんどを消し、周りの闇に溶け込むように。

それは天高くに居た。

月夜を切り裂く大きなエンジン音。

乗りこむ者全ては息を潜め、それぞれの得物を手に、言い表しよ
うの無い高揚感に浸る。

《9番艦から10番艦へ…》

真っ暗なブリッジに響くノイズ混じりの念通士の声。

《こちら…視界不良になってきた。

『鳥』が見えないため……作戦開始時刻の特定ができない。
そちらからは…どうだ？》

厚いマントを羽織り、双眼鏡を両手にしてブリッジ中央に陣取る
男。

それを聞いて、傍の念通士の肩を叩く。

「…教えてやれ。合図の『鳥』は飛び立った、と。
幸運の……『銀の鳥』がな。」

第三話 『明日への抱擁』
了

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

1 - 4 「無謀な作戦・前編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 1

「From the sacrifice which sh
ould be loved」

The fourth story

「Reckless strategy・First part」

花で一杯の棺。

両の手を水平に、背筋を伸ばしたまま仰向けに。

肩口から胸部、そして下腹部へとかけられたわずかな白い薄布。

そんな彼女の前で

「不思議なものだ。

生きても死んでもいない。」

「どんなに時を経ても全く朽ちもしない。」

「『神の奇跡』として、このまま展示しようではないか。」

「賛成だ。これで民の教団への信仰もより一層強くなるう。」

「女神のように美しい肢体でもあるしな。」

大勢の司祭らの、下卑た哄笑が響いた。

傷ついた足を引きずり、身体全体を斜に歪め、そんな彼等の背後から棺に近付く。

仰向けにされているのは、背中一面に浮き出た文様の所為^{せい}。
彼等の言うとおり、それは美しい寝姿だった。

居るはずの無い聖歌隊の、普段の歌声が響いて聞こえてきそうな
気さえする。

その錯覚は、礼拝堂の外の朽ちた校舎と大勢の仲間達への鎮魂歌か。

頭の後ろに目は付いていない。
だが、分かる。

未来永劫、休まることの無い彼等の恨み。
無事である自分への妬み。

背にした扉の外から、それらが髪を引くような。

だが止まるわけにはいかない。
自然と向かう、遠い彼女の身体。

届け、と。
手を伸ばす。

だが、掴むのは虚空のみ。

自分は無力だ。
いつそのこと、想いを、未練を、この不自由な足ごと断ってもらえたら。

どんなに楽だろう。

「…我々は常に狩りを稼業とするものに睨まれている。

凶獣は人の敵なれど……この世はバランスなのだ。

いくら民の為とはいえ、己の器量もわきまえず…教団の意向を無視して勝手に結界を拡大するなど愚かな。」

「本人もまさか、守ろうとした『人間』に足元をすくわれるとは、思いもしなかったでしょうな。」

鼻でそう笑った途端、二人の教師は不意に背後から肩を掴まれた。

「何かね？君は…」

振り向き、落ち着き払った面持ちで答えた一人の顔を目にした瞬間、戒は無意識のうちに握り締めた拳を振り切っていた。

鈍い音と共に、椅子と卓を割りながら教師は無様に飛び、教団から派遣された数人の司祭達の足元へと転がる。

「…こいつは…自分を犠牲に、俺達を…この学校を守った。それが…この仕打ちか！！」

赤く腫れ上がった自分の拳に目もくれず突き進み、続けて奥に控

える司祭達にさえ食ってかろうとする。

司祭への危害は御法度中の御法度。

教師達は泡を食って、多勢でそれを止めにかかった。

「……確かに あの得体の知れない飛翔艦の襲来は、このレティーン神学校始まって以来の危機だった…。

だが、この惨劇を神秘的な美談にしてやろうというのだ！
永久に女神と謳^{うた}われる、彼女も幸せだろう！！」

「勝手なことやってんじゃねえ！！」

教師の言葉に反し、周囲を見渡して怒れる腕を水平に振り、威嚇。

そんな戒の剣幕に、教師達は一様に怯えた。

だが司祭達は、全く恐れず、慄^{おの}きもせず、ただ冷淡な笑みを浮かべている。

「このまま…ずっとさらしものだ…？」

てめえらのやってることは……陵辱…いや、それ以上の行為だぜ

……！！」

「……知られたからには……！！」

先程、戒に殴られた教師が錫杖を構えた。

「よせ。この男は我が校きつての問題児だ。ヘタに近寄ると噛み付かれるぞ。」

それを別の教師がすぐに制する。

「ふ、まったくだ。戒『セバンシユルド、おまえの口からそんな『偽善』が聞けるとは思わなかったぞ。』」

また、別の教師が言った。

「てめえら……！！」

「よしたまえ。」

そんな中で、学長が奥から一步、彼に近付く。

教師の全てが手を止めて言葉を飲みこんだ。

「では聞こう。」

セバンシユルド君……キミは彼女を救えるか？」

「……！」

静まる礼拝堂。

「彼女にかけられた呪いを解く方法はない。我々は それを知っているからこそ……」

「う、御託を並べて誤魔化すな！」

教師達の手を振りほども、戒は学長の面前へ進んだ。

「俺は…そういうことを言ってるんじゃない！！」

「…なるほど…そうか…」

わかった。では何が望みかね？」

静寂の中、彼は微笑んだまま、両手の指を自分の腹の上で交差させて静かに質問する。

「望み…だと!？」

脅迫のつもりは全く無い。

しかも今さら懐柔しようというのか。

怒りで全身が震える。

……だが、怒りでは何も変わらなかった。
誰も救えなかった。

手の平に強く握りこんだ指の爪が割れる。

はつきりと、強い考えが浮かんだのは その時だった。

「……ああ。」

……いいぜ……そういうことにしてやるよ……。」

独り言のように小さく呟く。

「何かね？ はっきりしたまえ。」

「……この件について、他言無用にしてやる。
代わりに……俺様の願いを……聞いてもらおうか……。」

「俺様？」

まったく……あの女のような下品な口ぶりだ。」

学長の目が彼女の方へ動く。

それだけで汚される気分。

だが、戒は嫌悪の吐き気を抑え、自分を指差した。

「この世で一番大事なのは自分だ。」

ない

自分を大事にしなければ、何も、誰も守ることなんて出来

（そう教えてくれたのは…あんたじゃねえか。）

戒は心の中で哭いた。^な

（それなのに…自分だけ…犠牲になるようなことしやがって。）

「だから、自分に『様』をつけて生きてやる。

誰も侵すことの出来ない…孤高の領域とするために。」

彼女の口癖を真似る。

（もう…沢山だ。

これ以上…この天命の輪のさだめに振り回されるのは。）

青年は生き方と夢と覚悟を同時に決めた。

「代わりに今年の聖^{イーデイス}十字を渡せ。」

「バカを言え！

首席で卒業させろ、と？」

後ろで教師が叫んだ。

「構わん。」

それを総学長は冷静に制した。

だが、次の瞬間、その穏やかな顔は憤怒の色に変わる。

「いいだろう。」

だが、その肩書きなど何処どこでも使うところなど無いぞ！

所詮、暴力しか取り柄の無い貴様には……未来永劫、血にまみれるのが おあつらえむきだぞ！！」

普通の者であつたなら消沈するであらう、その叱責。
しかし、戒はまったく怯まなかった。

それどころか、その若者は 自分の目の前に血に塗れた手を伸ばす。

まるで邪神に贄にえにされるような気分だった。

「おまえに意見する資格はねえ。
言つたろう？ 誰も侵せないって。
俺様に命令出来るのは」

首の皮ごと襟を掴み上げ、後ろの十字架へ背中を叩きつける。
学長は低く、小さく呻いた。

どよめく周囲。

「『俺様』だけだ。」

魂を喰らうような戒の微笑。

押し付けた学長と共に、大きな十字架が傾いた。

その空間が、その一日で最も静まりかえった瞬間。

膝元に望むのは彼女の姿。

十字の下で 二度と目覚めることない彼女の姿。

大勢の足音が忙しく、自分に近付く。
もう何も湧いてこなかった。

「教団を なめるな！」

「この無礼者が……！」

「お前のような輩は……！！！」

数十本もの錫杖が乱舞して、自分の身体を束縛する。

そして、傷を負った箇所を何発も重ねて叩かれる。

薄れいく意識。

傾いた十字架。

薄れいく意識。

（俺が証明してやるよ…あんたの考えは…生き方は正しかった…って…。）

（それまで…おやすみだ…。）

（リア＝カナン…先生。）

十字の下に神など降りて来なかった。

あるのは自分。

……十字の下に神など降りて来なかったのだ。

エア・ファンタジスタ
Air・Fantagista

・

第一章

愛すべき犠牲より

・

第四話 『無謀な作戦・前編』

1

初めは地震が起こっているのかと錯覚した。

だが、窓の外には大きな月。

ここが空であることを思い出し、戒は薄ぼんやりとした感覚から完全に身を覚ます。

月光で室内を確認すると、天井に吊るされた油切れのランタンはやはり少し揺れていた。

「…世羅？」

おもむろにベッドに近付いて確認する。

世羅は毛布のみ腹にかけ、小さく丸まりながら横になって寝息をたてていた。

安堵から腰を床に下ろし、頬を伝う汗を指で拭う。

ベッドの奥の窓に映る自分の顔。

あからさまに憂いだ表情が気恥ずかしい。

床は僅かに振動していた。

予想していたものよりは微弱なのだが、やはり動かない地上とは根本的に違う。

寝るまでは気付かなかったが、緊張が解けた今、生きる環境の違いを痛感する。

その不安が見せた夢か。

戒は首を左右に振りながら膝を突いて立ち上がる。

既に治療の代償とした足の痛みは消えていた。

世羅に覆いかぶさるようにベッドに手を突いて、窓ガラス越しに夜の景色を眺める。

よほど高い所を飛んでいるのだろう。
視界の下半分は全て雲に覆われていた。

満天が星で一杯の、遮るものの一切無い夜空で 月はいつよりも明るく光る。

その明かりに照らされて造られる雲の陰影は、まるで自分が別世界にいるように思わせた。

……別世界…夢の世界……。

(そついや最近…いやな夢が……多いな。)

認めたくないが、精神的にも参っているのだろう。
仕事に追われる毎日、休む暇も無い。

目的地へ行く手段を手に入れたものの、肝心の学業を疎かにしてきた事実。

不安にならない方がどうかしている。

だが、今はこの飛翔艦のように前へ進むしかない。

そんな思いを巡らせる中、戒は遠くの雲の一部が盛り上がったのを見た。

まるで、魚が飛び上がった時に作られるような海のように、一瞬、突起した雲。

「？」

顔を窓に近付けようとすると、下で世羅が寝返りをうつ。

彼女を起こさないよう、ベッドからそっと手を離し、今度は手の平をガラスに直に付け、態勢を前に。

深い夜の闇から、一筋の煙が流れた。

「おいおい、俺のとおきおきの場所に踏み込むなよ。」

飛翔艦後部、滅多に誰も来ない甲板近くの廊下の大窓。

見渡しの良いガラス張りの一角で煙草をふかしているリジャンが、顔を全く動かさずに言った。

「かたいこと言うな。俺らはそんな仲じゃねえだろう？」

暗い廊下の先から歩いてきたバーグは、独り言のように呟くと胸ポケットから煙草を一本出す。

「食堂の時とは随分態度が違うじゃないか？」

それに合わせて、リジャンはライターを差し出して火を点けた。

「……あれは…悪かった。

最近、イラついてんだ。何もかも上手くいかなくてよ。」

眉を下げながら口を真一文字に閉じ、くわえた煙草をリジャンの火に近付けて、バーグも彼と並んで

空の遠くを見詰める。

夜の特有の肌寒さが煙草の温度で少し和らいだ。

「ま、いいさ。

俺も言い過ぎた。

急に生き方を変えろって言うのも無理な話だ。

それが無骨な中年男の人生だったら…なおさらだな。」

リジャンはバーグのしおらしい態度に満足そつな笑みを浮かべ、大きな腹をさすった。

「……もしかして…ここにずっと居たのか？」

彼の足元のおびただしい量の吸い殻と灰に気付き、バーグが訊く。

「ああ……変わった嬢ちゃんを連れてきてからずっとだ。」

「嬢ちゃん？」

「昨日から民間人を乗せているだろう？」

「……あ、ああ……あれな。」

先刻のシャワー区画での自分の失敗を思い出すバーク。

あれは何かも上手くないという、最近の自分の状況を象徴するような出来事だった。

「それより……なんか眠れなくてよ。」

自分の羞恥心を誤魔化すように言う。

「お前もか？」

「『も』？」

だが、意外なリジャンの一言に、バークは目を見開いた。

「こんなこと……この軍隊に入って初めてだ。」

顔をしかめて、悦に入るリジャン。

「全身の毛が危険を感じて　ざわざわしやる。」

こういつ気持ちつてのは……」

「よせよ！」

傭兵時代から お前の嫌な予感は当たるんだ……！」

バーグは口から煙草を離し、両手を広げた。

「……憶えているだろ？」

いつ現れるか判らない密林ゲリラと戦^やり合った時もよ……」

「見事、奴等の奇襲を予測したっけな。」

リジャンは齒に煙草を挟んだまま大きく笑った。

「でもよ、それを言ったら、おまえだつて。」

「アルドの残党、捨て身の爆撃を退避したこと、か？」

バーグも一転、笑顔で返す。

「……あれは傑作だったよなあ！」

俺らの部隊以外は全滅でよ、政府からはスパイ容疑をかけられて……」

それまでの緊張が緩み、なつかしそうに子供のような無邪気な表情で話すバーグ。

しかし、リジャンは緊張な面持ちを崩さず狼狽

「みんな真っ青になってよ……ん？」

バーグも思わず、そんな彼の視線の先を追う。

ルベランセの上方へと近付く、月の明かりに照らされた、細く白い煙。

そして闇に紛れ、恐ろしい速度で流れている小さな鉄塊。

煙草の灰が落ちる。

一瞬の風を切る音。

「　　っ!？」

その音にわずかに遅れること一秒。

到着した強烈な縦揺れの激震に、二人は思わず手すりに掴まった。

やがて、何事も無かったかのような沈黙。

「……着弾した……のか。」

窓の上方、飛翔艦の表面装甲がぱらぱらと舞って堕ちていく様を 中腰のまま冷静に眺めながら、リジヤンは静かに呟いた。

「着弾だと……！？」

生まれて初めて体験する、艦内に響く爆音と振動に打ち震えながら バーグも中腰で叫ぶ。

「ひょっとしたら対艦戦が始まるかもしれん。 急ぐぞ。」

リジヤンは大きな肩を揺らしながら、素早く格納庫へと爪先つまさきを向けた。

「ま、待てよ！」

……戦いが…始まるつてのか？ こんな…空中で…。」

バーグは床を手の平で叩いて立ち上がると、慌てて彼の後を追う。

「ラッキーじゃねえか！」

「あー？」

「ここ十数年間、一度も戦争をしていない天下の中央都市軍が喧嘩を売られたんだぞ？」

「ど、どこがラッキーなんだよ！？」

「戦闘騎乗りにとって、実戦が何よりの勉強になる。そういうことだ。」

……大丈夫さ。お互い『勘』は……錆びついてねえようだしな。

「

リジャンの能天気な言葉。

バーグは足元の灰を蹴飛ばした。

世羅はベッドの代わりに、生温かく、柔らかい『何か』の上で寝ている自分に気付いた。

「……う……ん……」

しかし眠気により、考えるのも面倒な彼女は 声にならない声を洩らした後、再び夢の世界へ旅立とうとする。

「……寝るな……。」

そんな中、耳元で聞こえる声。

「んん……。」

目をこすりながら、片手を立てる。
ぐにやり、とした慣れない感触。

「早く……どけ!!」

世羅の手で押し潰された頬を動かしながら、戒は叫んだ。

「わ!?!」

「ヴっ……!!」

突然の大声に、覚醒する世羅。
下敷きになっている方の戒は、その反動でみぞおちに体重を思い
切りかけられ、悶絶する。

「なんでなんで？」

「なんでボク、戒の上で寝てるの？」

「……この……あんな衝撃があつたのに、起きないなんて……どこ
まで図太い神経してんだ……。」

「しょうげき?」

寝ぼけた顔で まばたきを続けている世羅。

「いい! 説明するのも面倒くせえ……。」

いつまでも上に乗られているのでは堪^{たま}らないと、戒は世羅を退け、

ベッドに腰掛けてから荒れた室内を眺める。

空で地震が起こるはずもないが、荷物はあちこちに散乱し、ベッドも大きく場所と向きを変えていた。

あからさまな艦内の異常。

これは夢ではない。

「……一体どうなってる？」

何かが爆発したとかじゃねえだろうな!？」

飛翔艦が飛ぶ仕組みなど解りもしないが、それゆえの不安がある。

居ても立つてもいられずにドアを開けると、そこは無機質で不気味な廊下。

漆黒の闇に、戒は進むのを少し躊躇した。

小さな二つの光の点が廊下の奥から近付いて来たのは、その時であつた。

音も無く、上下に揺れる光。

それは近付くにつれ、やがて命の輝きを見せる。

廊下の闇に溶け込むような黒猫。

彼女は止まり、その瞳は、黙ったままの戒の顔を下から凝視した。

「梅さんだ！」

それを見た世羅が笑顔と共に、軽い身のこなしで戒の背後から部屋から抜け出す。

だが、彼女が撫でようと左手を近づけると、梅はソップを向いて距離を置いた。

「お前、やっぱり嫌われてるぜ。」

戒が茶化して笑い、世羅は頬を膨らませた。

だが、梅は廊下の奥を向いた後また二人に近付くと、飄々（ひょうひょう）と彼等の目の前を歩き回りながら、クイ、と再び廊下の奥へと顔を向ける素振りを見せる。

「何か…あるの？」

後ろに立ち、梅を見下ろしながら屈む。

「おい……勝手な解釈をするなよ。
猫の行動なんざ あてに……」

「きつと、『来い』って言ってるんだよ。」

「おいおい……。」

戒はぼやきつつも乱れた長髪を直し、梅について行く世羅の後を追う。

見えない足元。

壁を手で伝いながら、必死に追いかける戒。

やがて廊下の突き当たりまで案内されると、急に向かいの角で人影が蠢いた。

世羅が反射的に一步退く。

戒は駆け、すぐにその彼女の腰を抱き寄せた。

その時感じる、廊下の死角からの重圧。

戒は恐怖のあまり、その方向へ拳を勢いよく突きあげる。

「……どうして…民間人がここに居る？」

そこには顔が傷だらけの、軍服を着た男が居た。

寸止めされた戒の拳を顎の手前に感じたまま、彼は窮屈そうに言う。

「……いちゃ…悪いかよ？」

戒は声を振り絞って言い返した。

滴り落ちる汗。

錯覚だったのか、もう重圧は感じない。

男の顔の傷は大分古いもののようであったが、長さも太さもバラバラで幾つも縦横無尽に顔面を巡っている。

体つきは全体的に痩せ型だったが、その他に特徴は無く、この艦の乗組員ではない二人には勿論見覚えはない。

だが、梅はすぐに彼と戒の間に割って入ると、その男の足に顔をすりつけている。

その行動に対し、男は相当に複雑な表情を浮かべた。

そして、慣れているように、そつと梅を抱き寄せながら、再び言った。

「……例の…民間人か。」

フィンデル副長から…聞いているよ。」

さらに、背後の厚く鈍重な鋼鉄の隔壁かくへきを見ながら、男は自分の唇を噛んだ。

「おい……ここつて…」

戒が自然と声を出す。

この隔壁がある所は見覚えがあった。

確か自分がルベランセに初めて来た時に通った廊下。

蒸気と金属の音を感じた、機関室があった場所である。

だがその扉の前に左右から飛び出した隔壁は相当に厚いらしく、今は何も聞こえない。

男は 戒のその様子を、暫くじっと眺めていた。

「中で…何かあったの？」

そして世羅が訊くと、彼は素早く彼女を見下ろした。

「いや…内部ではなく、外だが……」

そこまで言うと、考えを巡らせるように握った手を口元に当てる。男の瞳が一瞬、輝きを増した。

「……ここ…機関室の外表面近くに何らかの衝撃を受けてな。多分これは…何らかの弾頭が命中したのだろう。」

答える男。

「…ちよつと待て。弾頭？」

唐突な話を聞き、半ば状況を飲み込めないまま 戒が言った。

「……ここは…空なんだよな？
それって…別の飛翔艦からの……攻撃ってことか？」

「…恐らくはな。」

「それに、機関室の外表近くって…！」

「そんな、大丈夫なのかよ!?」

「だから…隔壁を閉めたのだ。

安全の確保の為に。」

そこで廊下の薄暗さに目が慣れてきた戒は、彼の指先に血痕がわずかに付着していることに気付く。

「おまえ、怪我を…！」

「私は大丈夫だ。」

触れようとする戒の手を、男は言葉で遮る。

「……中の作業員は？」

戒は咄嗟に訊いた。

「大丈夫だ。

皆、少し動揺しているが 重大な怪我人はいない。」

まるで報告のような、正確で迅速で、じゆうたう流暢すぎる言葉。

「……本当か？」

戒が男を睨み付ける。

「ああ。」

彼は躊躇せずに返答した。

だが、戒は妙に思った。

詳細こそ知らないが、機関室の仕事は主に小人達が行っていたはずである。

しかし、彼の着ている軍服はフィンデルと同じく士官のもので、おおよそ作業をするには向いていない。

艦内の構造にやけに詳しいところは、ここで何か重要な役割を担っているのだろうか、

戒には目の前の男の素性がどうしても不安でならなかった。

「……こちらは大丈夫だ。

それよりも……君達はブリッジへ行ってくれないか？」

「ブリッジ？」

男は目を丸くする戒から世羅へ視線を移し、最後に梅を足元の床へ戻した。

「飛翔艦において指令と管制をつかさどる場所だ。

私が今ここを離れるわけにはいかない。

君達はそこへ、ここの状況を伝えてやってくれ。

この艦の機関部……つまり動力が少し異常を見せている……すぐに

飛行を停止して修理するべきだ。」

「…異常だって？」

戒は息を飲み込んだ。

「もしも…それを放っておけば……どうなる？」

そして、恐る恐る訊いた。

「この艦は……墮^おちる。」

「!?!」

男の返答に戒が血相を変えるのと同時に、世羅が早くも彼の袖を引く。

「大変だ、早く知らせないと!」

「あ……ああ……」

世羅に捲くし立てられ、戒も流される。

「さあ、行くんだ……梅さん。」

男は屈んで眩き、梅の頭を撫でる。
そして彼等の案内をするよう示した。

……廊下を駆け抜けていく二人と一匹。

傷だらけの顔を持つその男は、彼等を見送ると苦笑して扉を血に濡れた指で弾いた。

「……罪の上塗り……か。」

2

（墮ちる……？）

（墮ちるって何だよ……？）

（この艦が墜落する…ってことか？）

当然のことを、頭の中で繰り返す。

（それって…乗ってる奴は全員死ぬってことだよな？）

廊下を駆けながら、頭の中で繰り返す。

思えば部屋の窓から見た雲を抜けてきた煙の筋、それが大砲の弾だったのだ。

「くそ……やべえぞ、世羅！」

世羅は何も答えずに、前を行っている。

身体が重い。

余計な考えが行動を鈍くしているのか。

「おい、猫！」

ブリッジってどっちだよ！？」

背後からの大声に、梅は振り向いて止まる。

うるさがるような表情。

「猫じゃなくて、梅さん！」

世羅も立ち止まって口ごたえをする。

「わかったわかった！」

今から名前で呼んでやる！

あと……信用するから進め！　しっかりついて行ってやるから！
」

そこで戒は、梅が振り向く瞬間、満足したような表情を見たような気がした。

（…人間の言葉がわかるみたいな動きをしゃがって…。）

今度は何も考えずに全力疾走。

もはや、どこをどう進んだか分からなかった。
もう案内無しでは、寝室には戻れないだろう。

行き着いた細い廊下。

一番先は扉で行き止まりになっている。

その扉はわずかに開いており、中から光が洩れていて、そして何かがそこで小さく動いている。

足元の梅が、毛を逆立てた。

「今、指揮をとっているのは誰だ!？」

前を走るバーグが叫ぶ。

「さあな…。」

あの…どうしようもない…艦長じゃねえことを祈るが……」

息も絶え絶えに、廊下を走り抜けるリジャンは大きな腹を揺らしながら答えた。

「軍隊に入ってから、ずいぶん不摂生をしてたようだな!」

一方のバーグは、全く息が上がっていない。

「だ…だまつてろ……」

リジャンはもはや根性だけで巨体を動かしている。

格納庫へ続く螺旋状の階段に到着すると、二人は目を見張った。

冷たい風が下から噴き上がっているのを感じる。
格納庫の発進口ハッチが開いているのだ。

呆然と立ち尽くしている間に、そこから外の闇に飛び出す一機の
輸送騎。

「あれは……ミーサか!？」

「……わかん。」

鉄の手すりに触れたまま、二人は ゆっくりと階段を降りる。

「偵察の任務を……受けたのかもしれない……」

お前、彼女から何か聞いていないか？」

「何で俺が？」

リジャンの言葉に、さも意外な顔をするバーク。

「いつも仲が良いだろう。」

「あいつが勝手に まとわりついてくるだけだ。」

「……だが、このことは聞いてな」

「何してるの？ 二人とも……？」

それに、この騒ぎは一体……」

寝巻き姿で、当のミーサ本人が後ろから現れる。

「……お前じゃないのか？」

ミーサを指さし、バーグが呆けた顔で訊いた。

「何が？」

ミーサも呆けた顔で返す。

「今、出撃した輸送騎、誰が乗っているのか知っているか？」

「え？」

だが、リジャンの言葉がミーサの眠気を一気に覚まし、彼女は二人を抜いて階段を駆け下りた。

「ええ！？

私の…輸送騎！！」

愛機の無い格納庫。

見回して愕然とする。

「どうなってるの！？

妙な震動に起こされて、こっちへ来てみたらこんなことって！！」

「盗まれた…みたいだな。」

「もしくは…誰かが勝手に脱出したのか…。」

バーグとリジャンは他人事のように小さく呟いた。

「ひどおい!!」

両の拳を握って叫ぶミーサ。

しかし、すぐに怒りを沈め、二人に向き直る。

「…ず…ずいぶん物騒な発想なのね…。
今…何が…起こってるの?」

「イヤ…別に何も起こっちゃいねえさ。」

視線を泳がせながら、バーグが答える。

「今更、隠してどうなる。」

しかしリジャンは彼の二の腕を叩き、ミーサに近付いた。

「今さっき、この艦が攻撃を受けた。」

一発でかいのを貰ったが、それ以降の攻撃は無い。

敵の目的は不明だが、いつでも出撃できるように準備をしようと思っ
てな。」

驚く彼女を横切る彼。

「…乗員区画に非難するんだ。あそこが一番丈夫に出来ているはずだ。」

「わ、わからないよ…」

急にそんなこと言われても…」

「わからなくてもいい。さあ早く…」

「やだ!」

混乱ゆえに、ミーサはリジャンの優しい物言いにも反発する。

「おとなしく言うとおりにしておけ。」

バーグがミーサの肩に触れた。

温かで分厚い手の平に、彼女の緊張がほぐれかけ、力が抜ける。

「……二人は？」

「万が一の出撃に備える…って言ったただろっ?」

ミーサの問いに答えるバーグ。
黙って頷くリジャン。

「じゃあ、整備…手伝う…」

「いいから行け!!」

そんなもの…既に完璧に決まってるだろ!!」

「……………!!」

急なバーグの怒号に、ミーサは一瞬体を強張らせ、それからすぐにうつむいたまま何も言わずに格納庫から走り去った。

「あんな言い方はないだろう、バーグ。」

「…ああでも言わなきゃ…あいつ…行かねえだろうが。」

危なっかしい手つきで戦闘騎の機関銃に弾を込めながら、バーグは呟いた。

そんな彼を見ながら、リジャンは静かに笑みをこぼした。

「外表が傷ついたが、…大したことは無い。
航行に支障は…無いと思う。」

手元にある艦内の地図板を手にした念通球で探り、瞳を閉じなが

らリードは言った。

「保安念通士としても、これ以上は判らないな……。現場を直接見なくては。」

「けっこう衝撃があつたけど……本当に大丈夫？」

フィンデルが艦長席から尋ねる。

「ああ……。」

被弾したのは間違いないが……熱源反応は無い。」

「それは……矛盾してるわね……。」

「俺もそう思うよ。」

リードは自分の唇を弄りながら言った。

直撃にも関わらず、あまりに軽微な被害。

「……射ち込まれた弾頭に火薬が入っていない。」

二人は同時に疑問を口にした。

「この空域は？」

続けてフィンドルが訊く。

「どの国にも属さない。

たとえ領域侵犯でも、何の警告も無しに攻撃される道理なんてあるものか。」

「下に…降りるっすか？」

舵をとるタモンの問いに、フィンドルは軽く首を横に振った。

「様子を…見ましょう。」

彼女の一言で、しばらく無言の時間が流れた。
初弾以降、全く動きが無いのが余計に気味が悪く、精神をすり減らされる思いがする。

「畜生！ 俺達は……中央都市の軍隊だぞ！！」

辛抱出来なくなったリードが声を上げて、足下の鉄柱を蹴飛ばす。

そう、自分達は補給部隊とはいえ、大陸でも名立たる中央都市…その正規軍なのだ。

中央都市軍の紋章を掲げた飛翔艦が攻撃されるなど、滅多に無い。

だが絶対では無い、フィンドルだけはそう思っていた。

その時。

ゴン……と鈍い音がブリッジの扉から響く。

ブリッジ内の三人は皆、一斉に固まった。

「この野郎!!」

今度は、扉の奥からはつきりとした怒鳴り声。

三人は、今度は席から立ち、身構えた。

そこで強い音と共に扉が開き、前のめりになった男が、ブリッジ内に転がり込む。

それは艦長のペツポであった。

「な、なにをするんだ、この野蛮人!!」

「艦長なら艦長らしくしゃがれ！」

こんなところでコソコソ様子をうかがいやがって……」

そして勝手にブリッジに上がりこむ戒。

世羅も後からついてくる。

「だって……急に凄い衝撃が……それに……攻撃受けたとかって怖い話してるし……」

「言い訳するんじゃないよ！ このオカッパ頭が！！」

ペッポのおでこを手の平で思い切り強く叩く戒。

「何なんだ？ お前たちは？」

とりあえず無様な恰好の艦長は置いておき、リードは他の二人に
対して叫んだ。

「戒君？」

それに…世羅ちゃん…！？」

後ろでフィンデルが立ち上がる。

「……もしかして、彼等が例の民間人か？」

「ええ…このメンバーには直接紹介してなかったけれど、
でも……よくこの場所が分かったわね？」

飛翔艦で指揮を司り、最も重要とされるブリッジは、他の侵入を
防ぐために最も奥に造られている。

「うん、梅さんが……」

答える世羅は後ろを見回すが、既に梅の姿は無かった。

「……梅さんがどうかした？」

「あれ……さっきまでいたのに。」

ブリッジから顔だけ出して、廊下の奥まで確認する世羅。

「……ところで、何の用かしら？　こんな夜遅く……」

気を取り直し、フィンドルは今度は戒に訊く。

「何の用かって！？」

おまえら余裕じゃねえか。

あんなに凄い衝撃があつたつてのによ！」

「……うん……確かに凄い衝撃だったわね。」

フィンドルは静かに答えた。

「だが安心しろ。」

それなりの衝撃はあつても、所詮は無火薬。

外表の損傷なんて微々たるものだ。

ましてや内部まで被害が及ぶなんて考えられない。」

リードは冷静に言う。

「機関室も俺様の部屋も、目に見える被害があったぞ…！」

「被害？」

物が飛んだ程度だろ。」

詰め寄る戒に言い返す彼。

「バカにするなよ。」

把握はしてるさ。艦内の様子くらいは。

ま、おおよそだが……。」

念通球を片手にリードは淡々と答えた。

「実際に見ないで、どこまで判るってんだ？」

だが、そんな彼の態度に、戒の顔は段々と凄みを増していく。

「だいいち重要なのは、この艦が何者かに攻撃を受けたってことじゃねえのか？」

それに対して何も対策を講じないのかよ、軍人つてのは…！」

「攻撃……！！？」

おまえこそ単なる衝撃だけで、何故そこまで言い切れるんだ…！」

リードが怪訝そうな表情を浮かべて叫んだ。

「実際に撃ち込まれた大砲の弾を窓から見たからだ!!」

戒が気迫で押す。

「……あと…機関室で男に事の次第を聞いたしな。」

「男？」

今度はフィンデルが訊いた。

「そう…ここの連中が着ているような軍服を着てた。」

戒はブリッジを見回し、続けた。

「顔面が傷だらけの男に、だ！」

フィンデル、リード、タモン…そして床に腰を下ろしたままのペツポ。

彼等は狼狽して、黙ったまま戒を見返す。

「……誰のことだ？」

そんな中、まずリードが口を開いた。

「俺様が知るか!!」

じれったそうに、戒がわめく。

「確かに今は そんなことを議論している場合じゃないわね。……戒君の目から見て、機関室の様子はどうだったかしら？」

フィンデルが二人をなだめるように言った。

「わからねえよ、実際に中を覗いて見たわけでもねえし……。ただ、機関室と近くの俺達の部屋、かなり揺れたのは事実だ。それに……この飛翔艦の動力部が少しおかしいとか聞いたぞ。」

たどたどしい戒の報告。

それを聞いたフィンデルは、リードに顔を向けた。

「……いくら民間人とはいえ……そこまでの報告を受けたら保安念通士として何もしないわけにはいかない。」

それに、もしも本当に源炉に異状があればことだ。

一旦、どこかに着陸し、源炉を止めて調査することを提案する。」

顔をしかめながら言う彼。

「……いかがですか、艦長？」

フィンデルは一応、ペッポに尋ねた。

「…………だ、大丈夫だよねえ？」

震えながら、泣きそうな顔でペツポが言う。

「それは…調べてみないと判りませんが。」

「う……。」

「…ちゃ…着陸を許可する…。」

その言葉に、フィンドルは頷くことでタモンに合図する。

彼も頷き、すぐに舵の横のレバーを上へ強く押しつけた。

艦全体が斜めに傾き、ゆっくりと高度を下げる。

「お……」

「うわ……」

慣れていない重力の変化に、戒と世羅は足を踏ん張りながら、身体を強張らせた。

目下に広がる雲への侵入。

ブリッジ正面のガラスに広がる、白い景色。

抜ける瞬間、冬に吐く真っ白い息のように、雲が軽く千切れ飛ぶ。

そして広がる闇。

雲の上とは対照的に、星一つ無い夜の景色。

そして星の代わりに。

正面に一隻の飛翔艦。

「!?!」

念通球を握ったリードの手が跳ね上がる。

脳天まで突き上げる、危険を知らせる痺れ感覚。

雲を抜けた途端、索敵反応。

だが、もう遅い。

「待ち伏せ……!?!」

フィンデルは呟いた。

全身が赤い飛翔艦。

「炎団……」

その側面にマーキングされた黒い炎の紋章。

「炎団セルゲドニ……。」

それは、大陸で最も危険な空賊の名前だった。

3

ルベランセから離れること3000M。マイフト

そこは一寸先の視界さえ覆い尽くす、不気味で濃い雲が広がっていた。

《 任務完了。 》

「了解。これより貴殿を警護する。」

雲の真っ只中で飛空、待機したまま、マクスは交信に答える。

《 ……意外と脱出に手間取ってな。 》

工作を少々と、こんな輸送騎を一機しか持ち出せなかったよ。 》

「…源炉は予定通りの出力を見せている。

破壊ではなく、戦力を低下させるだけのシナリオだ。
上出来だろう。」

流石は、『黒の隊』といったところか。」

《 『聖騎士』殿に褒められるとは光栄だよ。 》

しかも脱出の護衛までしてもらえる、なんてな。 》

交信を続けたまま、下から雲を突き抜けて現れる輸送騎。

美しい銀色の戦闘騎と並列する。

「その名で呼ぶな、友よ。」

マクスは微笑みながら言った。

お互いに敬礼すると、輸送騎に乗った、傷だらけの顔をもつ男も歯を見せて笑う。

「さて…奴等のお手並み拝見…といきますか。」

「母艦でゆつくりと、だ。」

「了解。」

「ただ、この輸送騎に速度を^{スピード}合わせてくれよ、マクス。」

そう言つと、輸送騎内の操縦士は顔を手の平で覆った。

小指の付け根が輪の形に光り、傷だらけの顔が人あたりの良さそうな青年へと一瞬で変化する。

「ああ……わかつてるさ。　ヂチャード。」

その様子を見て、聖騎士は再び微笑んだ。

「緊急上昇！　また高度を上げて！！
雲の中に身を隠さないと……」

下は一面が岩場の荒地で、それは見渡す限り広がっている。

降りてきた中空は見晴らしが良く、あまりにも何も無さ過ぎる。

狙い撃ちにあえばひとたまりもない。

ところが、フィンデルの指示にも関わらず、ルベランセはいつこ
うに動こうとしない。

「高度、上がってないわ、タモン!!
上昇を…」

「……副長…もう…やってるっす…。」

レバーを握った、力を込めた太い腕を震わせるタモン。

既に、現在の出力は全開であつた。

「バカな…!!?」

源炉が機能していない…!!」

リードが叫ぶ。

「やはり故障だというの!?!」

「違う!

一定の推進力は出ている……。」

だが、何故か上昇するだけの出力まで出ない!

これは航行には重要でない不具合だが…」

息を飲む。

「この局面では致命的だ……。」

頭上の雲に比べ、今いる何も無い空が恨めしい。

ルベランセは裸同然で、敵を前に決断を迫られている。

「真つ赤な飛翔艦だ……。」

そんなブリッジの乗組員の焦りをよそに、正面の大きなガラスから夜空を覗きこみながら、世羅が呟いた。

「この大陸で最も強大で、最もタチの悪い空賊だぞ……！」

リードが大声で叫んだ。

「だけど……い、いくら最大の空賊といっても、ウチの軍隊を襲った事なんて聞いたことないよ……！」

「……でも事実だろうが……！」

ペッポに掴みかかる戒。

「先の攻撃は…本当に奴等の仕業っすか？」

「…そう考えるのが自然ね。」

タモンに、フィンドルが答えた。

「……だけだよ…やられたら…やりかえせばいいだけの話じゃねえか…。」

さつさと蹴散らしちまえよ…おい。」

軍人達を見回し、うつすらと苦笑と汗を表情に浮かべながら、戒は言った。

「バカ言うな！

戦闘なんて…できるわけ…ないだろう…。」

そして、彼に胸ぐらを掴まれたままペツポが叫ぶ。

見ると、リードもタモンも震えていた。

「お前ら……軍隊だろうが…！」

彼等のふがない様子に、戒は叫んだ。

防衛のために領土各地に配備されている中王都市軍だったが、その大国に戦争を挑むも国は無く、

その殆どが実戦の経験など無い。

輸送艦の彼等は特に、中王都市軍の紋章が掲げられた飛翔艦に挑むような者が大陸上に『いるはずがない』、と安心していたのだ。

だが、もちろん崩れ去る甘い考え。

それが身体を脱力させ、精神から戦闘の意欲を奪い、思考を低下させる。

その中でフィンデルは、一種のパニック状態に陥りつつあるブリッジの様子を、独りで傍観していた。

事態の收拾。

立て直し。

作戦。

決断。

士官学校で習った緊急事態におけるトラブルシューティングが頭に順に浮かぶ。

絶望するほど、実践には程遠い。

「フィンデル…」

しかし、この状況下でもう一人冷静だったのが、意外にも世羅だった。

傭兵の経験からか、それとも単に鈍いのか。

だが、フィンドルにはその少女の方が他の連中よりも、よほど逆境に慣れているように感じられた。

「どうするの？」

全てを見透かしたように、大きな瞳でフィンドルの瞳を見詰める。

「……それは…私にも…判らない……。」

彼女は視線を逸らして言った。

「何か……白い物だ！」

そんな中、唐突にペッポが叫ぶ。

「…白いもの!？」

そんな突然の彼の様子に、ブリッジ内の全員が呆気にとられる。

「大きな白い物……そうだ！
シャツがいいー!!」

「待ってください！」

虚ろな瞳、だが急いでブリッジを出ようとするペッポを、フィンドルは慌てて制した。

「まさか、向こうに対し降伏の意向を示せば……交渉の余地がある、とでも？」

「そうさ！　まずは白旗を掲げて安心させてから、そして彼等の申し出を聞こうじゃないか。

同じ人間同士なんだし！」

「落ち着いてください！」

彼等が交渉に応じるとは思いません。

賊にとっても軍隊を標的にすることは覚悟のこと……。

万が一、交渉に応じたとしても、きっと口封じのため、私達は一
人残らず処分されます！」

一瞬にして、ペップの口を閉じさせる早口の言葉。

ブリッジも静まりかえる。

「それに……攻撃の程度からして、こちらを無傷で手に入れたいことは明白……。

これが既に無言の降伏勧告だとすると、それがあちらの望むところでもあり、そう差し向けていることです……。

この作戦を立てたのは……かなりの計略家……だからこそ、今は裏をかく行動をしなくては……！」

「……それは……攻勢に出る……ということか？」

フィンドル……。」

リードが緊張で喉を鳴らした。

「む…無理だよ…。」

それに…た、戦ったら…きっと僕のルベランセが傷物に…。
僕の記念すべき初航行は…問題無く終わらせなきゃ…。」

「傷に関して言えば…もう手遅れです。」

フィンドルは冷たく言い放ち、深く座り直した。

(…それにしても…あまりにも都合が良過ぎる…。

上昇のみが出来なくなった源炉…。

戒君が見たという男…。

それに…軍艦を狙うなんて あまりにも大胆な発想…。
私の予感が正しければ)

気が付くと、リードが席を離れようとしていた。

「こうなったら、早く、メイとデチャードを部屋から戻さないとい
！」

「リード！ ここにいる私達だけでやるしかないわ！！」

「正気か、フィンドル！？」

戦略念通士無しでは…とても…」

「貴方だったら、このような状況でブリッジを離れていたらどうす
る？」

フィンドルの問いに、リードは彼女に向き直る。

「決まってるさ！」

異常を感じた時点で、何はさておき『ここ』に戻る！」

「きつと……誰でもそう考えるわ。」

「……？」

まさか……あの二人に何かあったとも言っのか！？」

「それだけで済めば良いのだけれど……。」

目を伏せるフィンドル。

その様子に、洪々再び席につくリード。

「……とにかく、このままじゃどうしようもないだろ！？」
早く次の行動を指揮しろよ！！」

そんな二人を交互に眺めながら、戒は叫ぶ。

幸いなことなのか、目前の飛翔艦は全く動かない。
だがそれはまるで、獲物の動きをうかがったまま一切のスキも見
逃さない、草原で『狩り』をする獣のようだった。

「指揮……？」

その彼の言葉で、フィンドルは自分が艦長の椅子に座っていることに気付いた。

「ボケつとするなよ！」

「え…今は…艦長がいる…から……」

不意に不安に襲われる。

さほどでもないその席の高さだが、フィンドルはめまいさえ感じた。

「フィンドル……」

当の艦長が、いつものように甘えた声を出し、いつものように期待する。

（指揮……？

…だって……この状況で……）
シチュエーション

目を開いたまま、硬直する。

（…戦闘すれば……おそらく……どちらかが……死ぬ……！）

過去に何度も思っていること。

常に自分を襲い、縛る感覚。

争いたくない。

「艦長が健在の場合は……それに従うまでです。」

フィンデルは無表情のまま言った。

「無理だよ!!」

ついに、ペツポは泣き叫んだ。

「なあ、軍隊では艦長が健在でない場合は どうしてるんだ？」

戒は静かに言った。

「……？」

それは……現時点で最高の役職の者が指揮をとるのが原則だけど……。

「

フィンデルが何気なく答える。

「そうかい。」

「ごめんよ、オカッパ頭!!」

「え!？」

ブリッジに鈍い音が響いた。

戒の拳を腹にめり込ましたまま、『く』の字に折れ曲がるペツポ。

そして、すぐに白目を剥いたまま、そのままの姿勢で床に伏す。

「さて…指揮をとってもらいましょうか、フィンデル副艦長。」

戒は笑うと、肩をすくめた。

4

その惨事は、彼女にとっての禁断の果実だった。

「フィンデル君!」

血にまみれ、ただの肉塊のような姿で中年の男が叫ぶ。

「確かキミは、中王都市の士官学校の生徒だったな……!!」

すぎるような眼差し。

「……はい。　まだ、一年ですが。」

とりあえず頼りない返答をしたが、周囲の者は皆　泣いて喜ぶ。

意外な反応だった。

「今、この艦で指揮をとれる者は　あんたしかいない!!」

「……指揮……ですか……。」

「頼む……!!」

手や足がもげた者達ですら、しっかりとした意識を持って、生返事を続ける自分に懇願してくる。

フィンデルはすぐに理解した。

ガラスは全て吹き飛ばされ、大半の機材を破壊され、見る影も無くなったブリッジ。

足元には、折れた鉄パイプを頭に貫通させた　初老の艦長が横た

わっている。

周りの者は全員、戦略のイロハも知らない田舎者。

今ここに、経験不足の憂いも性の差別もない。

存在するのは、生きるためになりふり構わない人間の生への執着と欲望、自分に対する畏敬の念のみ。

そう、人は『生きるための道』をなりふり構わずに、選ぶのだ。

それは生き物として恐ろしく醜い。

……が、それでも たてよの無い優越感だった。

そして興味があった。

書物で溜めた自分の知識が『実戦』でどう発揮されるのか。

自分がどれだけ通用するのか。

「……わかりました……。」

フィンドルは静かに、はっきりと答えた。

絶望的な状況にも関わらず、不敵な笑みを浮かべながら……

「おい、フィンドル!!」

戒が繰り返し名前を呼び、ようやく四度目。

彼女は振り向いた。

「何をぼけつと考えてんだ、早く指揮をとれ！
今は お前が一番偉いんだからな!!」

「ごめんなさい……やっぱり…出来ない……!!」

死人のような虚ろな表情で、ゆっくりと艦長の椅子から降りるフィンドル。

そして、彼女の言葉に凍りつくブリッジ。

「なんだと……!?!」

戒が顔の筋肉を強張らせたまま口を開く。

「じゃあ、俺様が こいつを眠らせた意味がねえじゃねーか!!」

さらに気絶しているペツポの側頭部を踏みつけ、捻^{ねじ}る。

(…っていつか……メチャクチャだ、こいつ)

リードとタモンは、目の前の青年の悪態に心底怯えた。

「しかし今、この艦でまともな指揮をとれる者は君しかないんだぞー！」

気を取り直し、リードが叫ぶ。

「本当にごめんなさい……。
よかつたら……リードが指揮して。
それでもしも、悪い結果になっても……私は恨まないから。」

様子が激変していた。
任務中、幾度も艦長の代わりを務めていた彼女の毅然とした姿は
もつ見る影も無く、非常に弱々しい。

「……わかった。」

消沈するフィンドルの為に勇気を振り絞り、立ち上がるリード。

だが、膝は笑っていた。

「……あ……。」

そして歩こうと目線の先を見、思わず声が洩れる。

空席になった艦長の椅子には、いつの間にか先程の少女、世羅が座っていたのだ。

「おまえ！

こんな時に遊んで……ふざけてる場合じゃねえだろ！！」

戒がそんな少女の腕を乱暴に掴む。

「ふざけてないよ。

ボク、わかるよ。

艦長って、隊長みたいなものでしょ？」

「……………」

彼女の真摯な瞳に、仰け反る戒。

「傭兵をしてた時…隊長のやり方、沢山見てきたよ。」

「見るのとやるのとはワケが違う！！

それにお前なんか…命令が出せるわけ……………」

「ボクは命令なんかしない。」

「……………命令しない！？」

「そう。信頼している仲間なんかには命令なんて要らないんだ。」

疲弊しきつた皆と違い、生命力に溢れた表情。

「フィンドル。」

自分を呼ぶ声。

思わずフィンドルは顔を上げた。

「みんなを助けてよ。」

「……！！」

次にフィンドルは世羅の顔を見た。

決意の表情。

「フィンドルなら……多分できる。」

ただ……ここには座りたくないだけなんだ。」

それはさらに、出会ったばかりの自分を信頼している表情でもあった。

それを見ると、心が安まるのは何故だろう。

（うん……。）

……私に……争う資格なんてない……。 だけど……）

嬉しさで戸惑うのは何故だろう。

(……)

それはきっと…利害とは関係なく、自分が信頼されたのは初めてだから

ブリッジ内の面々を順に眺める。

助ける。 救う。

考え方の方向を変えれば、きっと戦いは勝敗だけではない。

そう感じさせてくれる、自信に溢れた表情を絶やさない少女。

「…わかりました。 世羅艦長代理。」

その言葉に、世羅が思わず笑みを浮かべる。

フィンデルは、そんな彼女の場違いな表情が可笑しくて思わず目を細めた。

「…お…おい…」

その様子に、戒とリードが半ば呆然として同時に呟く。

「こんな時は、何て言うの!？」

世羅の問い。

それに合わせ、フィンデルは声通管を勢い良く手に取った。

《総員、『対艦戦』用意!》

張り上がった音が声通機から響く。

「こちら、戦闘騎格納庫。

……準備は出来てる。」

リジャンは別段驚く様子も無く、戦闘騎の中から片手を伸ばして
声通管を取り、そのラッパ状の
切っ先へと語りかけた。

「今のは……?」

バーグが訊いた。

「副艦長の姉ちゃんだな。」

引き締まる……いい声だ。

さあて、久々の出撃…血が騒ぐな。」

リジャンは、カラカラと笑った。

「何で、おめえはそう呑気に構えていられるんだよ…」

バーグが発進口の鉄の大扉に渋々と手をかける。

「ビビったか、バーグ!？」

「だれが!！」

憎まれ口を叩き合う。

傭兵時代と変わらないやりとり。

これを繰り返すうち、いつしか緊張はほぐれていく。

友の厚意に感謝しつつ、腕に力を込める。

軋んだ音を響かせて開いた扉から 抜ける突風。
それに貫かれた胸が凍りつく。

「こいつぁ…地獄への穴だな。」

目の当たりにする。見たこともないような夜の風景。

吸い込まれそうな深い闇が、永遠と思えるくらいに広がっている。

バーグは首にかけた細い鎖を、軍服の上から心臓の位置へと押し付けた。

先のフィンデルの一声で一つになるブリッジ。

「主砲、副砲、発射用意。」

更に続ける彼女。

「リード、出来る？」

「…やるしかないだろう！」

リードは言われたまま、若干前のめり気味の態勢で念通球を構えた。

とはいえ、飛翔艦の砲台を動かしたことは数度。

そうになると、専門家の念通士達が不在なのは痛い。

「操舵手、旋回の用意を…」

「いつでもいけるっす!」

タモンが縮み上がった喉から、無理矢理 声を振り絞って気合を入れる。

思いもしない、戦闘中での操舵。

ミスは許されない。

そして一通りの指示を終えたフィンデルは、真っ直ぐと正面を向く。

敵艦の向きとルベランセの直線上の先に厚い雲。

貯めこんだ記憶を必死に思い返す。

士官学校で幾度と無く繰り返した模擬戦。

マス目と駒のイメージ。

知識の総動員 。

『嫌な予感があれば、それを全て払拭せよ。』

そして最後に浮かんだのは、一人の好きな戦略家の言葉だった。

「回頭開始！」

敵方向真逆、十時の方向！！」

「敵に背を向けるのか？ フィンデル！！」

既に動き始めたルベランセ。

横殴りの重力の中、手にした念通球で艦内の制御板を操作しながらリードが叫ぶ。

「お願い、言うとおりに！！」

そして、同時に副砲のみ後ろ敵艦への照準を合わせ！！」

「……な！？」

無茶を言う。

リードは脳内に流れ込む複数のイメージに混乱しないよう、必死に抵抗した。

回頭する方向と逆に動く、ルベランセ下部に付けられた二門の砲座。

照準を合わせた赤い飛翔艦はいまだ動かない。

「つづけて本艦真正面、仰角30度に主砲発射用意。」

「その方向は雲しか無いぞ！？」

「いいから!!」

「!!」

ルベランセの下部、一際大きい砲座の口が開く。
リードはもはや、何も考えなかった。

念通球を持つ手を震わせながら、頭の中で見る。

主砲の筒の中。
闇に在る弾頭。
そして その導火線。

念通術のための、艦内に張り巡らされた回線が指先の神経と繋がった。

いつでも撃てる。

「主砲、発射。」

そんな中、フィンデルがタイミング良く合図を発した。

「発射!!」

リードは念通球を強く握り締めた。

ブリッジの真下の閃光。

大きな花火のような、一瞬の大きな空気振動。

反動でルベランセが空中を跳ねる。

皆が声にならない声をあげ、騒然とする。

その中でフィンデルだけは一瞬たりとて目をつぶらず、主砲の弾頭が真っ直ぐに雲を突き抜けるのを見届けた。

（敵の目的が…『ルベランセの奪取』というなら……私ならばこう配置する！！）

まず、雲は円形に吹き飛び。

ブリッジでは全員が その奥で何かが炸裂した光を見る。

雲の円形状の穴は時間が経つにつれ更に広がり、そこから、こぼれ落ちる沢山の金属片。

別の赤い飛翔艦が体を沈ませ、腹を少し見せた。

「……まだ飛翔艦が潜んでいたのか？」

疲弊しきったリードが、虚ろな目で呟く。

「すげえじゃねえか……フィンデル！」

戒は笑顔で彼女の肩を叩いた。

だが、その肩は震えていた。

「お願い……逃げて……」

これ以上……戦えば……」

敵に対する、奇妙な懇願だった。

想いが届いたのか、一旦は雲の下に沈んだ前方の飛翔艦は、やがてすぐに体勢を直し、

白煙を上らせながら雲の中へと戻っていく。

だが、その艦の一部は燃えており、危険な状況なのは明白だった。

「中央都市軍は腑抜けと聞いていたんだがな。」

肘を椅子にかけたまま、頬杖を付いて笑う男。

「なかなかどうして……やるじゃないか……あの補給艦め。」

先ほどルベランセと対峙していた飛翔艦内のブリッジ。

その艦長の席に座る者は、立てかけた大剣を脇に余裕の表情を見

せていた。

「……ここで『最善』の選択とは。
シナリオ
この計画を聞いた時、あまりの完璧さに寒気がしたが……まさかそれを破るなんてな。」

そして、楽しそうに自分の厚いマントの毛を弄^{いじ}る。

「向こうの指揮官は どうしようもない奴だという情報だったが……まあいい。」

まさかの一撃を喰らった、こっちのお仲間の様子はどうか？」

「…… 9 番艦、撤退開始しました。
我々はどういたしますか。」

前方の念通士が言った。

「作戦は続行する。」

「しかし……それは作戦予定と違いますが……。
確か、予定の変更が余儀なくされる場合は一旦退却し体制を整えよと……依頼主が……」

「いいから、続行だ。」

それと……『炎の矢』を準備。

先程とは違って今度は本気で潰しにいくぞ。」

「よ、よろしいので…!？」

標的は なるべく無傷で手に入れると……。」「

「炎団の掟、第2条
」

艦長の睨み。

「か!『艦長の命令は絶対』!！」

念通士は口癖のように叫び、立ち上がった後、背筋を伸ばす。

「そつだ…。」

それに、せっかく最強の空賊に入れてもらえたんだ。
仲間がやられて、オメオメと退却するようなマネしたら……お笑い種だぜ。」「

艦長の男は椅子に深く体重をかけ、ブリッジ内と外の全体を眺め
回した。

「むしろ…9番艦がしくじったのは運がいい。

ここで手柄を立てりゃ、早くも組織で一つ上がれるチャンスだ。」「

撤退する仲間の飛翔艦を想像しながら、目の奥をギラつかせる。

「…もう向こうの乗組員の生死は問わねえ…。
こうなった以上…殺し合いだ。」

標的さえ墮とさなきや 何をやっても構わねえぞ!!」

艦長の合図で、周囲の団員の気炎は一気に上がる。

「さて…空賊の戦い方…見せてやろうか……!!」

「そうか……姿の見える方の攻撃に集中していたら……後ろから襲われていた…。」

前方で撤退する飛翔艦を睨みつけながら、席で果てるリード。
全身から力が抜ける。

「だけど…きつと本番はきつとこれから……ね。」

フィンドルが背筋を直す。

降伏すれば勿論、終わり。

こちらを攻めれば、後ろから奇襲を受けて終わり。

やはり思ったとおり、二重三重に入念に練られた策略。

「副長！ これからは…」

「前方の艦の姿が完全に消え次第、全速前進して。」

「了解！」

タモンの意気は上がっていた。

「そして…リードは…」

フィンデルが言葉を止める。

「……なんだ？」

「…何でも指示…してくれ。」

対照的に、気丈に振舞う彼の顔色は明らかに悪い。

通常は各念通士が分担して行う飛翔艦の操作をたったの一人で行っているのだ。

それは無理なかった。

「おい！ フィンデル！！」

突然、背後から戒が声を荒げる。

「奴等……来るぞ！！」

振り向くと、今まで微動だにしなかった背後の飛翔艦のあらゆる部分が光を放っている。

小康状態からの急変化。

それは敵が攻勢に転じたことを示していた。

「副砲は…どうする？」

さつき用意したまま、すぐにでも使えるぜ…。」

「いえ……とりあえず休んで頂戴。」

「な……に？」

彼女の言葉に、憤慨するリード。

「俺は まだやれる！ やれるぞ…！」

「大丈夫、このまま何とか誤魔化しながら、逃げましょう。」

まともに撃ち合う必要など無い。

とつくに射程距離に入っている自分達に対して砲撃を全く行わないことは、相手がルベランセ自体を欲していることを確実に示している。

理由は不明だが、それを生かさない手は無かった。

とりあえず時間を稼ぎ、リードの回復を待つ。

そして、あとは副砲の一斉掃射で何とか退けられるに違いない

「……………？ 機影探知！！」

しかし、そう考えた矢先、リードが声を発した。

「機影！？」

それはあまりに急だった。

「本艦背後500Mに戦闘騎サイズが、数にして……………」
マイフト

彼は念通球を片手に、中腰のままで報告する。

「約……………18機…だと！？」

声には既に絶望の色が滲み、ブリッジを包み込む。

それを聞いたフィンデルは、目を閉じたまま右手人差し指を虚空で素早く動かす。

さらに壁に貼った、付近の空図を確認。

（……………数が…多すぎる…！

これでは……………逃げられない！！）

苦虫を噛み潰したような表情で 次に見るのはブリッジの背面が

ラス。

近付いてくる赤い粒。

戦力の差は歴然だった。

よほどの大型飛翔艦でなければ、搭載できる戦闘騎などせいぜい5機以下。

だが、相手の機影数は確かにリードの索敵どおりである。

おそらくそれらの殆どは別働隊で、雲の中にでも待機させていたのだらう。

戦時下であれば補給部隊を警護する部隊は当然として配備するものなのだが、ルベランセだけで

この数の敵を退けられるほどの装備は無かった。

額を押さ^{ひたい}えながら、必死に意識を保とうとするリードの姿を見る。

慣れない砲台操作、同時に索敵。

彼の精神は既に限界。

しかも、今ルベランセに残されたのは通常よりも遥か以下の戦力。

「『普通の戦略』では『策略』に勝てない……
『良い戦略』では『謀略』に勝てない……。
だが……『完璧な戦略』は……何にも勝る……。」

震えながら唇の上で 手の平を組み合わせで呟く。

言葉を繰り返しながら心臓の音が休まってい

フィンドルは少しずつ冷静を取り戻し、考える。

(……！)

そして一つの手段を思いついた。

(待つて…私……。それは……ダメ。)

思いついてしまった。

(何て事を…考えるの……？)

手で顔を覆う。

……だが、彼女の頭は、自分の意思とは関係なく、考え出された戦略は巡り、生き残る手段をはじき出す。

《おい、ブリッジ。》

そんな中、耳元の声通機から響く低い声。

《一部始終をこちらの声通機で聞いてたんだがな。一つ提案がある。》

リジャン＝デベント。

ルベランセ、戦闘騎の操縦士。

《いくらエンジンの調子がいまひとつでも、前には進めるんだろ？……それなら逃げ切れる。》

「無理っす！

今、向こうの戦闘騎が沢山出てきて！！」

タモンは艦長席横の声通管に届くよう、大声で反論した。

《やれるさ。

こっちからも戦闘騎で向こうの飛翔艦に直接突撃する。

奴等も飛翔艦が大事だろう。

きつと敵機はそれを放つてはおかはずだ。

…こっちとしては、そんなふうに適当に時間を稼ぐ算段だが、あわよくば飛翔艦も撃沈できれば儲けモンだな。》

「そんな無謀な作戦……誰がやるってんだ！！」

戒が叫ぶ。

絵空事に近い、机上の空論。

しかも圧倒的な数の差を目の当たりにして、それが極めて危険で困難であることは素人にも判断できた。

《俺とバーグがやる。》

《ああ!?!》

リジャンに加え、バーグの裏返った声の一つブリッジに響いた。

「無理だ……。」

保安念通士として…許可は…出来ない。」

リードが言う。

《無理…無謀……結構なことだ。

……だがな、『ごちゃごちゃ言うな』。》

リジャンの低く、ゆっくりとした口調にブリッジ内は静まり返った。

《そんなこと、こちとら、ハナから承知なんだよ。

でも、やらなくちゃならねえ。

誰のためかって？

そりゃ、お前らのためさ。》

タモンが強く舵を握る。

《…だったら、ちつとくらいは『お願いする』とか『信じる』とか、
そういう言葉、出てこねえのか？

『仲間』として　ちよつと悲しいぜ。》

「……！」

意を決して壁にかけられた地図を取り、一気に開くフィンデル。

「進路を若干修正し、本艦は一旦、ゴーベ山脈のふもとへ避難します。」

そして声通管を取るなり、すぐさま言った。

《……中立地帯か。

そしてその山脈を抜ければ、すぐに中王都市の国境がある。
山越えが少し困難だが、距離的にはさほど変わらない…。

……いい作戦だ。》

「……副艦長として、その作戦…正式にお願いするわ、リジャン。」

《…了解。》

「……ごめんなさい。」

フィンデルは声通管を握りながら、小さく呟いた。

《…あんたも俺も同じ考えだったってことか。

ああ、心配はいらない。

こちらとら、くぐり抜けた修羅場の数が違うんだ。

…それより、ここまでするんだ。絶対に中央都市へ戻れよ。
いいな?》

「……了解です。」

フィンドルは静かに念通管を置いた。

戒はもう、ブリッジのやりとりを、距離を置いて傍観していたけ
だった。

視界の利かない夜の大空を何気なく見る。

こんな処で自分にやれることなど、ただの一つとて無いのだ。

「なあ、世羅…」

同意を求むように、艦長の椅子の肘掛けに触れる。

「……世羅?」

だが、そこでは誰も居なくなった艦長席の椅子が静かに揺れていた。

「大したもんだ。

あの姉ちゃんくらい出来る人間がこんな部隊とくにいるなんてもった
いねえな……」

「……おい！

ンなことより、向こうの戦闘騎はいくついるんだ!？」

感嘆の独り言を呟くりジャンに対し、激しい言葉をぶつけるバー
グ。

「いくつだって望むところだ。

空賊の戦闘騎なんざあ、100騎でも1000騎でも落としてや
るよ。」

そんな彼をあしらいながら、リジャンは手袋の紐を歯できつく締
める。

同時に操縦席内のエンジンレバーをキック。

機外に露出しているアイドリング状態の戦闘騎の心臓部が更に唸
りを上げ、プロペラを激しく回転させる。

「くそつたれ！

ゲリラの奇襲の方が幾分もましだぜ!！」

バーグもそれに続く。

しかし彼の機体のエンジンは、一瞬ひとすじの細い火を噴き、す

ぐさま不自然に動きを止めてしまった。

「……!？」

振り向き、自機の後部を確認するバーグ。

エンジンの脇のパイプから立ち昇っている黒煙。

「動力系……!？」

ウソだろ！ 昨日までは…正常だったのに……!!」

「いいぞ、バーグ!!」

後から来いっ!!」

「……すまん!!」

操縦席から飛び降りて、ぐさま機体のチェックにかかる。

リジャンはその様子を脇目に、首に下げたゴーグルをかけた。

「蒼く澄んだ大空のように誇り高く…」。

己を育んだ大海と大地への感謝を忘れずに…」。

まばゆい陽の光に全身を照らされても恥ずかしくないように生きます……」。

どうか、ご加護を…」。

いつ以来だったろうか。

リジャンは狭い棺桶のような戦闘騎の中で、手を組み、黙禱^{もくとつ}する。

「リジャン＝デベント、出る。」

出撃の為、戦闘騎と床を繋ぐ下部ストッパーを外すため、脇にか
けられた長い鉄棒を握った。

その時『何か』が、中腰で作業するバーグの脇を走り抜ける。

「お、おい！ おまえ！！」

バーグの大声。

器用に素早く、自機の右翼に駆け上がる少女の姿。

「……なんだと！？」

一度かけたゴーグルを額へと上げるリジャン。

「ボクも行く！！」

開け放たれた発進口の扉から強く吹き込む風の如く、小さな少女
は唐突に現れた。

高揚感。

そう、あれは、自分が傭兵を辞め、己の飛翔艦を持った、夢追いの頃の感覚に等しい

「嬢ちゃんが来ても、出来ることなんて無えぞ！」

「連れて行ってくれば、きっと役に立つー！」

はつきりとした少女の言葉に、リジャンは大笑いした。

「くっくくく……！」

お前、肝っ玉で この嬢ちゃんに負けてるなー！」

「うるせえ！ お前らが異常……マトモな神経じゃねえただけだー！」

工具を片手に、バーグが叫んだ。

「よおーし、来なー！」

「後ろでいいの！？」

「そっだっ！ ベルトをしっかりと締めろよ！」

後部座席に飛び込む世羅。

「……で、どうすんだ、兄ちゃんの方は？」

嬢ちゃんは ちっちゃいから、後部座席は詰めればあとひとりくらい入れるぜ。」

「……？」

世羅が驚いた様子でリジャンの目線の先をうかがう。
そして、その彼女の表情はすぐに笑顔へと変わった。

金属の床を鳴らしながら、ゆっくりと歩み寄って来る戒。

「戒……！」

手を伸ばす世羅。

「……俺様には……」

だが、それとは裏腹に、戒は寸前で足を止める。

「……………戒？」

彼の態度に気付き、世羅の手からわずかに力が抜ける。

「俺様には…やらなきゃいけないことがあるんだ。
こんな所で…死ぬわけにはいかねえ。」

髪を風圧で乱し、視線を下に落としたまま戒は続けた。

「お前らが時間を稼いでルベランセを逃がすんだろ！
自信があるんだろ！？

「だったら、俺様は こっちに残って目的地へ行かせてもらっ……。」

自分は当然のことを言っている。
そのはずだ。

「だいいち……俺様が行っても…何も出来ねえ。
勝手かもしれねえが……ここはお前らに任せる。」

「うん、わかった。」

予想通り、世羅は優しく微笑んだ。

「もしもの時は…ボクの代わりに……中王都市に荷物届けてね。」

「……ああ。」

「ありがとう。」

彼女の言葉に、思わず顔を背ける。

「……戒の夢……叶うといいね。」

いやに遠くで聞こえる声。

プロペラの回転とエンジン。

二つの轟音が奏でるのは死出への旅の曲か。

やがて鉄の棺桶は前へとゆっくり進み、加速をつけた後、無邪気に手を振る彼女の姿と共に夜の闇へと消えていった。

第四話 『無謀な作戦・前編』
了

1 - 5 「無謀な作戦・後編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 1

「From the sacrifice which should be loved」

The fifth story

「Reckless strategy・latter part」

安定した気圧の中で、ゆっくりとその動きを止めるエンジン。

「豪勢だ。」

一足先に床に降りたマクスへと声をかけ、格納庫の天井の高さを見上げながらデチャードは輸送騎から降りる。

「『白華』^{はくか}の『ロンセ・カロウド』を使わせてもらえるとはな。」

鋼鉄の床と壁が、甲高い声を反響させる。

黒い皮服に身を包んだ騎士達の手によって　すぐさま閉められる
ハッチ
発進口の扉。

さらに静まる気圧の中。

二人はその扉が閉まっていくのを一瞥、そして歩み寄り、固く握手した。

「……ところで、肝を冷やしたぜ。
ルベランセのブリッジで顔を合わせた時……何故、俺の顔を見て笑った？」

「……本気で言っているのか？」

マクスが呆れ顔で自分の腰に手を添えた。

「『素顔』だったからだ。」

そして、一人で前を歩き出す。

早足で後に行くデチャード。

「横着癖は直せ。」

しかも偽名すら使わないスパイが何処にいる？」

「ここ。」

図星に、チチャードは苦笑しながら言う。

「いいじゃないか、どうせウチの部隊は表向きには存在しない。万が一、本作戦がバレて軍が騎士団を疑っても籍が無いんじゃない？」

「私は、そういうことを言っているのではない。」

「ああ…悪いね。心配させて。しかし、それよりも……」

二人が格納庫の扉に近付くと、傍の一人の騎士が扉を無言で開ける。

その先の廊下には赤い絨毯が敷かれ、見渡す限りに伸びていた。

「しかしこの艦、よく使わせてくれたな。」

「散々ボヤいたさ。どこの部隊でも、自分のところの艦を『黒の隊』に貸すのは嫌なものだ。」

寡黙で不気味さを漂わす、周りの騎士達。
鉄鎧は誰一人として纏わず、目立つことを避けるよう。

「こりや嫌われたものだ。

……それに、『黒華^{こくか}』だろ。

馴染めないのか？ 新しい名称に。」

デチャードは肩をすくめた。

「外ならともかく、騎士団の中では使わないとまずいぞ。

新しい理念の下、生まれ変わる組織：名称の変更は その先鋒を
つかさどるのだからな。」

「フツ… もっともらしいことを言う。

どこの演説家の受け売りだ？」

デチャードの口調に、鼻で笑う。

「不義を行いながらも、『華』とは恐れ入るよ。」

そう言っ て聖騎士は唇を閉じ、それから一言も発さずに前を進
んだ。

栄華… の華か。

握る拳が鳴った。

「長いものには巻かれろ、マクス。」

無骨な鉄の壁の廊下と優美な絨毯のコントラスト。

デチャードは慣れない空間を前進しながら、気迫を帯びた聖騎士の背を見詰めた。

「しかし、この艦に猫は居ないのか？」

「……猫だと？」

「今回の旅で分かったよ。軍艦での殺伐とした生活も猫が一匹でも居ると心が和む。

今度、試してみるといい。」

「……ああ。」

真顔で話すデチャードに、思わず頷くマクス。

途端、彼の張り詰めた気配は幾分緩んだ。

「マクス様、並びにデチャード様……」

その最中、大広間の扉にさしかかるところで一人の騎士に呼び止められる。

「…中で黄金の騎士様がお待ちです。」

そして不意に聞く、中王騎士団 最高実力者の通り名に、二人は
思わず顔を見合わせたのだった。

エア・ファンタジスタ
Air・Fantagista

・

第一章

愛すべき犠牲より

・

第五話 『無謀な作戦・後編』

耳元を切り裂いていく突風が強すぎて。
機械の音も震動も、何も気にならない。

目の前には ただの闇が広がり、手を伸ばせば届く頭上くわうじやうに雲がある。

鉄の羽を持つ、空駆ける騎馬。

己が望んだことなれど、流れる夜の景色と乗り心地に暫し安心してしまう。

「お嬢ちゃん…戦闘騎に乗るのは初めてだな？」

「……うん。」

リジャンの問いで、世羅は我を取り戻す。

「怖えだろ？」

彼は操縦桿を小指側から握り直した。

「こっ…怖くないよ!！」

「なら、足の震えを止めてくれねえか？」

後ろでそれをやられると、こそばゆくてたまらねえや。」

二人の座席が底で繋がった戦闘騎。

針のように尖った神経が、エンジンの振動以外も鋭く気付かせる。

「……ごめん。」

世羅は 笑う両の膝を抱きしめた。

戦闘騎の装甲の隙間から洩れる夜風が冷たく、心と身体を突き抜ける。

……一向に止まる気配がない。

「…わかるぜ。」

飛翔艦と違って、戦闘騎は安定感がねえからな。」

「……………」

「怖くなるには、どうしたらいいか教えてやろうか?」

「……………うん。」

肉厚の手の平が俯いた頭うづむに触れた。

「俺を…信じな。」

顔を上げると、大きな笑顔あった。

ゴーグル越しの温かい眼差し。

「…とはいえ…ほとんど初対面じゃ無理か…?」

背中の方こう、止まった震え。

「……信じるよ。　ボクら…仲間だもの。」

世羅は、その手を小さな両手で　しっかり握り締めて言った。

「へえ…出会ったばかりなのに……信じる、か。」

リジャンが笑う。

「…嬢ちゃんは、俺に似てるな。」

「？」

「外見じゃない。

まあいいさ。お喋りは生きて帰ってからに

しようか…!」

前方に近付く5つの点。

敵艦と同じ、赤地に黒い炎のマーキングを施した戦闘騎。

リジャンは慎重に、操縦桿の上部に付いた機関銃の引き金に親指トリガーを添えた。

炎団、戦闘騎部隊。
通称『炎の矢』。

彼は経験で知っている。

奴等はその名の如く、炎のように盛さかる戦闘意欲を持ち、矢のように鋭く素早い。

乾いた唇を舌で潤ませる。

双方が近付くにつれ、上がる速度。
一気に詰まる距離。

唸りを上げるエンジン。
振動が激しくなる視界。

緊張の臨界点

互い、すれ違う寸前、機関銃の速射、爆裂音。

世羅の目の前で火花が散る。

タイミングを得られなかった集団の中の一機。
リジャンの放った連弾が機体の表面を縦に舐め、最後にその操縦
士の眉間に命中する。

すかさず弧を描くリジャンの機体。
それを追う他の四機。

反転、切り替えし、再度数秒の射撃。

火を噴く二機。

またたく間に堕ちていく三つの戦闘騎を下に臨みながら、世羅は
絶句した。

「挨拶にしちゃ……やりすぎかね。
奴等…目の色変えてやがる。」

防寒のタイを靡^{なび}かせて笑う。
そんな目の前の男の横顔は、力強かった。

「おい、クソガキ……。
いつまでここにいてるつもりだ？」

手を全く休ませることなく、見向きもしないでバーグは言った。

「……俺様の勝手だ。」

格納庫の味気ない床に座り込んだまま、戒は返す。

「……ああ……勝手だ。」

バーグは眉間にしわを寄せ、細かい部品を口にくわえた。

その後の沈黙が、格納庫の気温を深々と下げていく気がする。

「……おい、ヒゲ。」

あいつら……自信満々で出撃したが……本当に大丈夫なんだろうな？
こっちに戻る算段とか……最悪、中央都市に帰る手段とか、ちゃんと考えてるんだろうな？」

戒はいかにも興味無さそうな素振りで訊いてみた。

しかし、彼からはさも意外そうな視線が返ってくる。

「自信？ バカ言え。」

生きて帰る算段なんてあるものか。 奴等は半分死ぬ気さ。」

「……………!?!」

妙にあつさりとしたバーグの答えに狼狽する戒。

「戦闘騎に積んだ燃料は少ない。
敵を運良く足止め出来たとしても、どんどん反対方向へ進むこの
艦に戻れるとは思えねえ。」

「おまえ……………!」

そんな大事なことを、何で最初に言わねえんだ!?!」

部品が床に落ち、跳ねる。

戒に強烈な力で掴み上げられ、大柄なバーグも思わず爪先で立つ。

「……………覚悟を決めた奴を引き止めるのは野暮だ。」

頬に当たった、戒の拳が震えているのが判った。

「そして……………たとえ教えたとしても お前は奴等を止められたか?
代わりの方法を思いつくことが出来たか?」

「……………!」

その言葉に、無言で腕を下ろす戒。

それを、バグは哀しい瞳で見詰め、整備のために再びしゃがみ込む。

「…まあ、そう罪悪を感じるなよ。」

…奴等が出撃する前にお前が言った言葉……俺も同意見だ。」

ポケットから煙草を取り出し、気分転換のため火をつける。

「俺にはな、中王都市に娘がいる。」

たった一人の、かけがえのない家族だ。

そいつのためにも…まだ死ねねえ身よ。」

だが、バグはその煙草をほとんど吸わないうち、床に置いた。

「今でも、このイカレエンジンが調子を取り戻さないで欲しいと心底願ってる。」

目を細め、工具でエンジンの角度を変えながら呟く。

「じゃあ……あんたは何故、その手を止めない？」

戒が訊く。

「……さあな、わかんねえ。」

バーグは顔をしかめ、立ち上がる。

「俺は馬鹿だからよ……いくら頭で考えても答えなんて出ねえ。
だから、まず行動する。」

それで失敗することや、後悔することなんざ沢山あるけどよお。

『この生き方』は曲げられねえんだ。

『俺』は……曲げられねえんだ。」

工具を戦闘騎の右翼に乗せ、首にかけた鎖を軍服の上から握り締める。

「そういう『俺』を……『あいつ』は死ぬまで愛してくれたのだから。」

煙草を踏みつけて。

螺旋の階段を見上げるバーグ。

そこには、作業服に着替え、両手一杯に工具を携えるミーサが立っていた。

「……何よ！……その顔。」

素直に……下っ端のあんたの言葉に従うと思ったの？

別に……作業着と道具……取りに行ってたただけなんだから。」

息を切らせ、ふくれっ面で言う。

「ここの配線……頼むわ。」

彼は照れくさそうに応えた。

大広間。

室内の奥に立ち並ぶ彫像。

廊下の物よりも更に豪華な絨毯。

壁と柱の彫り物。

そんな室内の一角に護衛の黒華の騎士が四、五名。

その中に、一際目立って『彼』は居た。

「実に大儀であつた。」

直立不動の背格好は振り向き、まず^{ねぎり}労いの言葉をかける。

装飾と宝石の散りばめられた、豪華な黄金の大鎧。

頭髮白く、顔面には無数の青い筋の刺青。

それは年波を刻む皺^{しわ} 全てをなぞっていた。

彼は襟に繋がったマントをひるがえし、腰に下げた剣の柄を片手で押さえ、しっかりとした足取りで歩み寄る。

伸ばされる手に、マクスとデチャードは反射的に膝を床に付き、自分達の手をかぶせた。

大陸十字軍を勝利に導いた最大の功労者達の一人。

歴史に名を刻む者の、大きな手甲の堅いガントレット感触に、二人は辟易する。

「楽にせよ。」

短く言つと、黄金の騎士は踵を返し、再び距離を置いた。

薄い残り香。

「大団長……ザイクⅡガイメイヤ様……。
自らおいでとは……」

着ている軍服の胸元を直しながら、デチャードは震える声で言った。

「いつもそうだ」

彼の言葉に対し、ガイメイヤは 実に柔らかな動きで右手を肩の高さにまで挙げる。

「老人がたまに動くと、驚かれる。」

だが、その冗談に二人が笑うことはなかった。

「…現状把握はその場にいなければ全てを知り得ることは出来ん。命令ひとつ下すのも、その場にいればより早く正確に判断することが出来よう。」

それに……老人とて仕事をさせてもらいたいものなのだ。」

「その心、仕えるものとして痛みいります。」

マクスとヂチャードは同時に言った。

「その割には…色々聞きたいことがあるような顔だ。」

二人の顔を交互に眺めながら、四角張った精悍な顎あごを動かして喋る。

「……さがれ。」

黄金の騎士の一言で、周囲の者達が一斉に部屋を後にする。

だが、その中でただ一人だけ残る者がいた。

マクスが重圧に慄く。おの

そして改めて気付く。

気配を絶ち、影のように大団長ガイメイヤの脇に立つ者。

黒い仮面、

黒の鎧。

黒いマント。

大団長と対照的に、一切の装飾も文様も入っていない、黒づくめ。

漆黒の騎士。

その装いが過去の記憶の扉を、無理矢理こじ開けようとする。

「あの男…?」

マクスが小さく呟く。

「どうした?」

彼の異変に気付いたデチャードが訊く。

「いや…何でもない…。」

「……?」

「…しかし、あの得物…どうなってるんだ?」

デチャードは好奇の顔をして、さらに小声で訊いた。

鞘にも入れられずに抜き身の、漆黒の騎士の腰に掛けられている黒剣。

五個の念通球が縦に並んで刃に埋め込まれている。

「知るか。」

おまえの方が専門だろう。」

マクスは苛ついた口調で言った。

たてよのない嫌な感じを受けつつも、前方の二人へと一歩近付く。

「今作戦の予定は…彼が立てたのですか？」

「何故……そう思う？」

ガイメイヤは、低い声でマクスに聞き返した。

「一度、聖都観艦式でお見受けした記憶が。」

その言葉にも、漆黒の騎士は微動だにしない。

「確かに、このディボレアルは優秀な軍師であるが……今作戦を立

てたのは私だ。」

「……そうですか。」

そこで、マクスに代わって、デチャードが一步前に入る。

「失礼、デチャードⅡエニ、一介の騎士として僭越ですが一言意見を申し上げます。」

「……何か。」

「何故、危険を冒してまでマクス…聖騎士殿を　このような作戦に駆り出したのか…
どうしても合点がいきません。」

突然のデチャードの物言いに、傍らのマクスの表情が曇る。

「作戦の始まりを知らせる合図、そして私の護衛など……諸所の工作を行うのは勿論、
血や罪を背負うのは『黒華』で充分。

この男はもつと『高み』にいます。　このような作戦に…」

「デチャード。」

貴殿が言わんとしていることは解る。」

マクスが彼のその口を止める前に、黄金の騎士の口が動いた。

「血や罪を背負う…か。」

だが、それも全て中王都市の民のため。
破壊や闘争を 血や罪と喩^{たと}えるのなら、騎士団の全ては既に塗^{まみ}れ
ている。

何もせず、のうのうと暮らしている『軍』の分までな。」

「それでも……空賊の手を借りるなど 正気の沙汰とは思えません
が。」

表情を殺して続けるデチャード。

「正気の沙汰？」

そのくらい意表を突かねば策略とは呼べぬ。」

そこで、初めて声を発する漆黒の騎士。

頭部全てを覆う平坦な仮面の奥から発せられた、その獣のような
低く唸るような声に

デチャードは思わず言葉を失った。

「空賊を『利用』するのは、我々の仕業であることを悟られぬため。
無論、奴等との交渉時には、我々の身分は隠している。」

「……あのルベランセには一体何があるというのですか？
そうまでして、あれを手中に収めたい理由をお教え下さい。」

実際に中を見たところ、積荷も艦自体も特に秀でたものはありません。」

マクスは言った。

「貴殿にはそう見えるか。」

漆黒の騎士は抑揚の無い声で晒^{わら}う。

仁王立ちのマクスは、それを真っ直ぐ凝視した。

黒い仮面は静かに、それを受け止める。

「いずれ話そう。」

……そして解ろう。

その理由も、何もかもな。」

二人をなだめるように、ゆっくりと語りかける黄金の騎士。

「新しい理念の下、騎士団も変わらねばならぬ……」。

諸君らも色々と思うところはあるだろうが……今は ただ力を貸してもらいたい。」

「……もつたいないお言葉です。」

デチャードがマクスの肩に触れながら言った。
その指には強い力が込められている。

「…で、これからの行動ですが…」

デチャードが言いかけたところで、漆黒の騎士は不意にガイメイヤに近付いた。

「……ディボレアル、どうした。」

ガイメイヤの方から、耳を近付ける。

「風が……変わる…か。」

そして他の者には聞こえない、その仮面の奥からの言葉に頷いた。

「……この艦に部屋が用意してある。

両名ともゆつくりと休養し、待機するがよい。」

「かしこまりました。」

そして発せられた黄金の騎士の言葉に、デチャードが即座に答えた。

（待機…だと？）

だが、マクスは納得のいかない面持ちで前の二人に臨んだ。

「空賊が……いかがしましたか？」

「この距離だ。」

奴等の様子など……誰にも分からぬよ。」

黒騎士は淡々と答えた。

そこで大広間の扉が開く。

見ると、小さく開いた扉の隙間から近付く少年。

10を満たすか満たさないか、そんな年端も行かない子供だった。

眼鏡をかけ、大きめの白衣を着た姿でいる。

「何者でしょう？」

見たところ……騎士とは思えませんが……」

デチャードが率直な疑問を口にする。

「彼はミシユード」ハカレイ。

レンセン共和国 国立錬金学校で神童と呼ばれていた少年だ。」

そして黄金の騎士に促され、ぶかぶかの両袖を合わせながら会釈。

「我々の『協力者』だ。」

少年を目の前に一様に訝しい表情を浮かべる二人に対し、黄金の騎士は付け加える。

「彼等を部屋を案内するように。」

眼鏡の奥で目を細め、少年は礼をした。

2

下から昇り続ける黒煙。

鼓膜が痺れていた。

周囲に敵の姿はもう無い。

だが息つく間もなく、第二波が遠くに訪れる。
世羅はただ後部座席にいるだけで、疲労を感じていた。

自分が乗った戦闘騎はぐんぐんと速度を上げ、敵の上方を駆ける。
打ち込まれる機関銃の弾をかわし、描いた緩やかなカーブ。

敵もそれを追い、列に。

そこでリジャンの機体は不意に上昇し、雲の中へ突っ込む。

生まれて初めて吸い込む雲。

濃密な蒸気を吸い込み、むせる世羅。

振り向けば、白いもやの中に映える赤。

自分達の後に続いてくる。

「嬢ちゃん！　振り落とされるなよ！！」

注意が聞こえるのも半分に、内臓が浮く感覚。

急降下。

そして、戦闘騎の頭を軸にそのまま縦回転。

雲からの脱出。

天地が逆になった視点から、敵機達が自分を追い、不意に雲から抜け出してしまうのが見えた。

寸前まで雲に視界を遮られていた敵。

先手を取る為に既に照準の目測を付け、その瞬間を狙ったリジャンの弾を避ける手段は無い。

再び味わう、眩しく騒がしい機関銃の連射。

世羅はベルトを力一杯握り締め、思わず瞳を閉じる。

恐怖に負けまいと、すぐ薄目を開けると、そこには前回と同じように堕ちゆく敵達。

クラウドターン。

雲を利用し、お互いの反応の落差を活かしたその高等技術に、それを遠くで見ている

敵の一機が慌てて向きを変える。

それはルベランセの方向だった。

「見かけ倒しか、この野郎！

相変わらず趣味の悪い服が泣いてるぜ！！」

追撃が面倒なりジャンは、進路をそのままに。

彼等の飛翔艦・戦闘騎と同じカラーリングを施された、団員の赤いゴム製の全身タイツを指して大声で笑った。

それを聞き、一旦は前を行った操縦士が顔を憤怒の表情で、反転。背後から猛烈な勢いで迫って来る。

「おっとつと……！ 恐いねえー！！」

リジャンは まんまと挑発に成功した相手戦闘騎の後ろからの銃弾を器用に避けつつ、さらに迎え撃つため操縦桿を握り直す。

だが、前方の雲の中から突如として下降してくる別の敵機。

（ なんだと！？

……やべえ……！！）

急に前後両方を挟まれ、余裕を無くすリジャン。

だがその時、あさつての方向から、背後の敵への銃弾。

「……」

その様子を良く確かめないうちに、リジャンはすかさず前方の敵を撃ち堕とす。

そして改めて、彼は弾道の『元』の方向を見た。

既に戦闘不能な相手へ、いまだに止まない銃撃。

不細工な攻撃　　。

それはルベランセの進む方角から来る。

「くそっ！！　なんで、俺様はここにいるんだ！！」
「自分で決めたんだろぅが！　腹を決めやがれ！！」

騒がしく喚き散らしながら、窮屈そうに戦闘騎に乗り込んだ『二人』が近付いて来る。

リジャンは息を深くついて、自機のを速度を緩めた。

「……だ……！」

急に頭を外へ出す世羅。

髪が風圧で泳ぎ、顔にまわり付く。

「……来てくれたんだ……！！」

それを必死に直し、叫び直す。

やがて並列した二つの戦闘騎。
世羅とリジャンの笑顔を目の当たりにし、思わず頬が緩む戒だったが、すぐに表情を暗く落とす。

「おい……てめえら。」

静かだが、普段以上の彼の迫力に気圧^{けお}される二人。

「俺様の前で、『犠牲』になるような真似は二度とするな。
……それだけを言いに来た。」

そして、戒は人差し指を向けた。

その前の座席で笑うバーク。
笑みを返すリジャン。

「うん……ごめん！」

笑顔で素直に謝る世羅。

そこで再会の余韻から切り替え、リジャンは厳しい目つきでバークを見た。

「行くぜ、バーク。」

教本と俺の練習を思い出せ。」

「チツ…偉そうに。」

だが…やるしかねえな！」

目の前へ再び迫り来る、赤い戦闘騎群。

二つの戦闘機は迎え撃つために、夜空で左右に分かれて展開した。

「バーク機も無事、出撃した。」

自分の席で、報告するリード。

「追っ手は…今のところ無い。」

上手く引きつけてくれたようだ…。」

「速度を計算すると…このまま逃げ切れるっす。」

タモンもそれに続く。

二人の表情と声は先ほどに比べ、比較的明るくなっていた。

「……源炉は？」

だが一方のフィンドルは、鈍く問う。

「全く変わらない。」

…この出力で安定している。 真っ直ぐの航行する分には問題ない。」

「……そう……」

それきり、フィンドルの返答が無くなったブリッジ。

「フィンドル!？」

席から跳ね起きるリード。

だが、すぐに、再び腰を落ち着ける。

彼女は艦長席で寝息を立てていた。

「俺以上に……参ってるのは……お前の方じゃねえか……。」

呟きながら、舵をとるタモンを見る。

タモンは頷き、ルベランセは夜空を迷わずに進んでいった……。

「ふう、さすが大陸十字軍に参加した人間は気概が違うな。
戦意：いまだ衰えずかよ。」

…… 70は軽く過ぎてるんだろ、あの大団長^{じいさん}。」

三人で進む、ロンセ・カロウド艦内廊下。

いまだ先の大広間での重圧に浸りながら、デチャードが言う。

「引退など、死ぬまでするまいな。」

マクスは苦笑しながら言った。

それを少年は、下からこころとした笑顔で見上げる。

「なんだ、どうかしたのか？」

デチャードが、マクスの代わりに訊いた。

「聖騎士さま、あまり強そうに見えませんか？
今までに、たくさんの人を殺したようにはとても。」

無邪気に言葉を発する少年の様子に、二人は面食らう。

「あ、すみません。
いきなり失礼でしたね。
まずは自己紹介をしなくちゃ。」

少年はうつすらと線が浮かんでいる耳の付け根に触れた。

「名前は先程、大団長が言ったとおりです。
そして僕だの天命の輪は……第六位だいろくのくわい『在るべき鑄造』です。
思い通りの物を作ることに長けてます。」

押し黙って聞く二人。

エア・ファンタジスタ
天命人が初対面の相手に、自分のことを詳しく語ることは少ない。
…特に天命の輪の能力に至っては、たとえ天命人同士とて触れな
いのが礼儀でもある。

少年の態度も含め、他の天命人に会うこと自体が珍しいことも
あってか、
二人はしばらく呆氣にとられていた。

「それは勿論、理論的に間違っていないければ出来ませんが。」
少年は構わず続けた。

「この度、聖騎士さまの専用の戦闘騎を設計、制作を担当したのは
僕なんです。」

「そうか…。」

あれは、とてもいい機体だ。
かたじけない、ハカレイ殿。」

「貴方に合わせるため、素材は全て純銀。
お礼なら、二つ返事でその費用を捻出させたあの大団長に言うて
ください。」

その言葉に、マクスは複雑な顔をした。

「それに固いですよ、聖騎士さま。

学校では皆、僕のことを名前と苗字を合わせて『ミシュレイ』と
呼んでました。

だから、それで。

……それに、貴方の方が年上で先輩だし、僕のことと呼び捨てで
呼んで下さい。」

楽天的な笑顔。

「わかった、ミシュレイ。

私のこともマクスでいい。」

「分かりました、マクス。」

終始変わらず、仏頂面で喋り続ける聖騎士を眺め、口を結んで笑

う。

すでに目的の部屋へ着いていた。

狭いが、内装は大広間同様とても凝っている。

そんな室内に入ると、デチャードは先んじて柔らかないソファに座りこんだ。

「……ふう。」

そして作戦の疲れからか、深く座り込み、天井を仰ぐ。

続き、マクスもその脇に腰を下ろす。

だが、ミシュレイはすぐに後ろのカーテンへの裏へと姿を消した。

「……なんだ？」

すぐに訊くデチャード。

「お茶の一杯でも淹れますよ。」

「ほう……気が利くやつだな。」

ついでにコレも処分しておいてくれよ。」

続いて、彼は窮屈な軍服を脱ぎ、足を組んだ。

「誰かに洗わせて届けますよ。」

また軍隊へ潜入の任務があるかもしれないでしょう？
ホントに便利ですね、天命第六位『千の顔を持つ梟』^{ふくさつ}」

「おまえ！！」

…なぜ俺の天命の輪を…」

狼狽して立ち上がる。

「予習です。」

だが、ミシュレイは食えない笑顔でカーテンから顔だけを出す。

「……ここで淹れるのか？」

そして すぐさま戻ってきた彼に、今度はマクスが訊いた。

ミシュレイはポットと水差し、それと紅茶の葉の入った筒を
とめて大皿に乗せ、そのまま
目の前のテーブルに置いたのだ。

そして手慣れた様子で、水差しから空のポットへと水を注ぎ、茶
葉を指の腹で擦りながら
その中へ振りかける。

「《炎・生》（ホヲラ・キー）。」

さらに源法術を唱え、発生した指先の小さな火をポットの中の水へと付けた。

水は瞬く間に泡を上げて沸騰し、蒸気を昇らせ、部屋の中の空気は一瞬にして紅茶の匂いに包まれる。

それは、身体から疲労を一気に飛ばしてしまうような、心地よい芳香だった。

「見事なものだ。」

「火の調節と物質の生成は、錬金学の基本ですから。」

マクスの誉め言葉に、ミシュレイは本当に嬉しそうな笑顔を浮かべた。

カップに注がれ、出された紅茶も素晴らしい出来である。

色は高価な琥珀のように透き通っており、飲んだ後、確実に甘い匂いを鼻腔に残し。

さして食通でない二人も、この紅茶が素材の良さを、最大まで引き出しているのが良くわかった。

久方ぶりの温もりに、思わず時間さえ忘れそうになる。

「ひとつ質問いいですか？」

二人が一息つけたところを見計らって、ミシュレイは切り出した。

「エア・ファンタジスタいくら天命人だからって、生身の人間がたった一人で飛翔艦を墮とすなんて

本当に出来るんですか？」

「…無礼だぞ。」

だが、その言葉に、ヂチャードが割って入る。

その剣幕に目を丸くする少年。

「その…なんだ、天命人なんて関係あるか。人間、根性があれば何でも出来る。」

咳払いをして、子供を叱るような態度。

「……理論的でない解答はやめて下さい。

それに、僕はマクスさまに聞いているんです。」

ヂチャードの本性を見抜いたのか、ミシュレイは軽く笑顔を交えながら言った。

だが、マクスは視線を落としたまま、無言を通す。

「噂どおり、本当に脱がないんですねえ、鎧。」

少年は痺れを切らしたように言った。

「もういい、お前の役目は終わった。
帰っていいぞ。」

少年の齒に物着せぬ物の言い方にうんざりしながら、チチャードは言う。

「冗談でしょう？
お茶菓子、持ってきますよ。」

溜め息を一度つき、部屋を軽い足取りで後にするミシユレイ。
室内には紅茶の匂いだけが残された。

「何なんだ…あの生意気なガキは……。」

表情を歪ませるチチャード。

マクスも難しい顔をする。

「ガキの言うことだ。
あんまり気にするな。」

「いや……そのことではない。」

親指を下唇にあてがう。

「ずっと考えていたのだから……あの黒騎士……」

「ん、大団長の横にいた奴か？」

デチャードの言葉にマクスは頷いた。

「間違いない。」

奴は……親王隊しんのうたいの軍師だ。」

「……何を言っている？」

親王隊の者は全て軍警察によつて、全て……処刑されたはずだぞ！」

「……『叛乱の恐れあり』、確かそれが名目だったな。」

そして、その時、騎士団は親王隊を庇かばい、それを止めようとしていた。

故に、騎士団は今ないがしろにされている。」

頷くデチャード。

だが、マクスは続いて首を横に振った。

「しかし、それは別段、今に始まったことではないな……」

若き王が病に伏せた頃から、すでに現政権と軍隊の増長は始まっていた。

親王隊の処刑自体も、奴等の共謀ということは間違いあるまい。」

「ああ。

そして あの事件から、騎士団内では日に日に現政権への不満が高まっている。

騎士団が現政権を覆して国の全権を得ようとしている、そんな物騒な噂さえある。

…勿論、こんな作戦が無ければ、俺も『騎士団の叛意』なんて根も葉もない話と信じていただろうがね。」

「……なあ、チチャード。

騎士道とは何だ？」

マクスは瞳を閉じ、静かに訊いた。

「…騎士道……ねえ。」

「騎士道とは、主君への忠誠から始まる。

本質を損なう思想の意義など……皆無に等しい。」

「……まあ、な。」

チチャードが疲れた顔で 紅茶から天井へ立ち昇る煙を見上げた。

「騎士団の叛意……。」

そして、今回の作戦……。」

マクスがテーブル上で指を組む。

「もしも、現政権を覆す口実になる切り札を、既に騎士団が手に入れているとしたら…」

視線を低く、泳がせる。

「現政権と結託している軍隊。

それらと騎士団がことを構えるのは…むしろ好都合。

『それ』を周知の事実としたい思惑もあるのではないか。」

カップの中の紅茶が揺れ、わずかに波紋を残す。

「すると…私は利用されているのかもしれん。」

「マクス……。」

「なに、杞憂だ。」

再びカップを手に取り、マクスは紅茶をすする。
その温度は、先程よりもずっと冷めていた。

汗ばむ手袋の中。

疲労により操縦桿の握りも甘くなる。

狭く暑苦しい操縦席の中で。

……リジャンは考える。

周囲の敵を何度も退けた結果、ルベランセとの距離は離れ、一つの課題をクリアしたことになった。

だが問題は……これからであった。

距離をおいて遠く臨む、巨大な炎団の飛翔艦。

それはまだ余力を残しているだろう。

一方、自分の機体の燃料は……もう三分の一も無い。

何度退けようが、わいて出て来る敵の数も予想以上に減らず、進退を考える時に差し掛かっている。

「……ジリ貧だぜ。」

何かいい方法を考えねえと。

このまま戦い続けるのも……いまさら逃げるにも……難しい。」

「ここまで来たら……戦おうよ！」

何も考えずに、後ろから言う世羅。

「嬢ちゃん……。簡単に言っけどよ……」

鼻に皺しわを寄せるリジャン。

（こうなったら白兵戦か……。）

片手だけを戦闘騎の外に出し、冷ます。

（あいつも同じことを考えるだろうな。
……きっと。）

大きくて堅い敵艦を、改めて確認。

「あと、せめて敵さんに侵入する方法があればな。」

苦笑し、何気なく世羅に言う。

「……なら、飛翔艦ギリギリに飛んで……!」

「おい! 何する気だ!？」

急に背後から強い力で首を抱きつかれ、驚きの声を上げるリジャン。

「信じて！」

「……………！！！」

脇目に映る、少女の真っ直ぐな瞳。

「……………よし！　いいぜ！！！」

無茶な加速。

これからはいくら燃料を浪費しようが関係無い。

リジャンは最後の賭けを始める覚悟を決めた。

悲鳴をあげるエンジン。

軋む腕の骨。

重力の負荷による、身体がバラバラになりそうな感覚。
耐えながら、二人はただ空を駆けた。

相手が飛翔艦に近付くとは予想もしていなかった敵機達は、案の
定　何の反応も出来ず、
各防衛線は次々と抜かれていく。

やがて目の前に広がってくる敵飛翔艦。
それは遠くで見ると一層に大きく、至近距離から眺めるそれ
は、あたかも真っ赤な地平線のように見えた。

外表に沿うように飛ぶと、戦闘騎の両翼は冷たい外気に反応して長い白筋を夜空に浮かべた。

それは、死角。

リジャン達は敵飛翔艦の真上をとることに成功する。

「で、どうするんだっ!？」

本当の意味で後へは退けなくなったりリジャンがヤケクソ気味に声を張り上げた。

「これを逆さまにして!!」

「さかさまあ!？」

「出来ない？」

「出来ない……わけねえだろ!!」

歯を食いしばり、足を踏ん張り、操縦桿を一気に横に傾けるリジャン。

機体が天地を間逆にした瞬間、背後で不穏な動きを感じる。

「天に達する山の如き。」

源の理を頂くアルド」セイングウェイの名において命ず。」

「じょ……!!」

振り返ると、そこには飛翔艦へ腕を目一杯伸ばした世羅がいた。

「嬢ちゃん!? それはいけねえ!!
腕を持っていかれ!!」

そこでリジャンは言葉を失い、周囲の異変を見回す。

彼女の詠唱と共に 周囲に現れる光の粒子。

大気に満ちた源の具現化。
そのあまりに神秘的な光景に何もかも忘れる。

「時で形を変えるもの。
其れは神の鉄槌」

やがて戦闘騎全体を覆うほどの膨大な源は、全て世羅の小さな手の平に集められる。
そして機体を、少女自身を照らす。

闇に不釣り合うその眩しさに、リジャンはゴーグル越しに思わず目を細めた。

「《源・衝》^{フェルド}!!」

機体のサイズよりふた周りは大きく膨らんだ光球。

少女の手から離れ、飛翔艦に付いた瞬間炸裂し、装甲が一瞬へこむ。

大砲どころではない。

近くに稲妻が落ちたほどの衝撃。

目を大きく開けて気付けば、既に溶け、焦げた赤い装甲が散り。

獣の死体の胸から飛び出した肋骨のように。

大小幾つもの鉄の柱が、飛翔艦の頭頂に開いた大きな穴の中から生えていた。

「こいつぁ、たまげた!!」

一体、何をした!？」

「……それは……」

答える世羅の顔は疲労で濁っていた。

察したりジャンは、休むよう彼女の頭を優しく撫でる。

「まあいい! これで…侵入……出来る!!」

飛び出ている邪魔な装甲と鉄の柱を 更に機関銃で破壊。

「鬼が出るか…蛇が出るか……」。

勝負だ!!」

リジャンは吠えながら、眼下に広がる飛翔艦の大穴へと消えていった。

隊列を組む戦闘騎との対峙。

その中から一機が飛び出し、正面から射撃してくる。

「フン。そんな弾……」

操縦桿を洒落^{しゃね}た手つきで引くバーク。

だが、同時に雨粒が傘に当たったような音。
戒が身を乗り出して戦闘騎の装甲を見ると、焦げた小さな穴が沢山あいていた。

「おい、ヒゲ!？」

あ…当たってる……当たってるぞ!!」

「……あ？

上手く避けた『つもり』だったんだがな……。

流石に…教本と練習どおりにはいかねえ。

まだイマイチ、身体と機体との間にギャップがあるみてえだ。」

その言葉に一瞬表情を凍りつかせ、口元だけ小さく動かす戒。

「つかぬことを聞くが…」

おまえは……戦闘騎に乗って、どれくらい経つ？」

「……ざつと一ヶ月だ。」

「ざつと、って……たつ……たた……たつた一ヶ月だと!？」

素で答えるバグに対し、後ろで立ち上がろうとする戒。
だが、肩にかけられた安全ベルトでそれは遮られてしまう。

「ド……ド素人じゃねえか!!」

「うるせえ！ 俺は剣士なんだよ!!
食っていく為に仕方なく 戦闘騎に乗ってんだ!!」

「ハメやがったな、この野郎!!」

「ぐ……やめろ！ 堕ちてえのかクソガキ!!」

バグの脊髄を背後から両手で締め上げ、縦に揺らす。
その反動により、彼の額は操縦桿を押し下げ、機体は急降下した。

だがそのおかげで、再び放たれた敵の銃弾は外れ、二人の顔面をかすめる。

仰げば、頭上に無数の敵が旋回していた。

ポジションも最悪。

すでに周囲を完全に囲まれ、狙い撃たれているのが判る。

思わず、戒は後部座席で頭を抱えた。

そこへ、頼んでもいないのに急加速。

「いくぞ、おらあ！」

こうなったら、このまま敵艦に殴りこみだ！

その方が、このまま空中にいるより少しは生き残る確率も高え！

「！」

「……畜生

！！」

戦闘騎はみるみるうち乱暴に速度を増し、その反動で前のバークの席にしがみつく戒。

白い息と共に吐く絶叫がこだました。

仰天して逃げ出す炎団側の整備兵達。

まさか発進^{ハッチ}口へ向かって機関銃を乱射しながら突っ込んでくる戦闘騎など。

そんな光景など誰もが夢にも思っていない。

騒然とする格納庫、その半開きの扉を「まぐれ」で縦向きで通り抜け。

腹を擦り、火花を散らしながら、無理矢理に着艦するバーグの機体。

無論すぐには止められず、不安定な動きに加えて機銃の乱射も止まらない。

出撃準備をしていた炎団の操縦士達も泡を食ってコクピットから逃げ出し、かろうじて蜂の巣を免れる。

「……よし。」

「ここなら…もう戦闘騎に攻撃される心配がねえな。」

薄暗い操縦席の中で、バーグが静かに気取って呟く。

「ふざけんな！」

叫び、余韻に浸るバーグの後頭部を蹴り上げる戒。

「何度、死ぬかと思わせやがる!!」

「うるせえ、さっさと出る!」

バーグは先んじて操縦席から飛び降りると、流れる動きで彼等を見上げて固まっていた
周囲の敵操縦士達を拳で打ち伏せる。

それを一段落させ、狭い操縦席のどこに隠していたのか。
バーグは大剣を五本、束で取り出した。

「かしてやる!　しっかり働けよ。」

そして、戒にその中の一本を軽く投げ渡して言った。

「…俺様に白兵戦をやれつてのか!??」

「お前は何をしに来た?
遊びに来たのか?

それともまさか、坊主だから人殺しは出来ねえとか、泣きごと言
うつもりじゃねえよな?」

剣を受け取ったものの、状況が把握出来ない戒に、顔を近づ
けて威圧する。

「……上等じゃねえか…
やってやるよ。」

剣の重みに手を震わせ、刃を膝よりも下げながら戒は言った。

バークはにらみつけながら、彼の額ひたいに自分の額を突き合わせる。

「いいツラだ。」

…でも心配するな、それは護身用だ。」

一転、大きな笑顔をつくる。

「クソガキ、てめーは自分の身を守ることだけ考えな。
戦いは俺がやってやる。」

そして肩に軽々と大剣を乗せて前に行く。

「ただ、『覚悟』が聞きたかった。」

『そこ』で決まるぜ。戦場で生きるか死ぬかは、な。」

バークは、近くのランタンを素早く斬り落とした。

ランタンの火を息で消し、壁から外して床に置く。

「？」

世羅は不思議そうに、そのリジャンの行動を眺めていた。

「なに、奇襲の定石さ。」

乱暴な侵入のため、崩れた壁。

瓦礫の散らばった廊下を伝いながら、その行為を続けるリジャン。

光を失い、手元・足元は見えにくくなったが、闇の中から覗く別の場所は逆に見やすくなってくる。

世羅は思わず感嘆の声を洩らした。

天井にはその少女が開けた大きな穴。

視界にかろうじて残る、今まで世話になった戦闘騎。

敵艦の内部は、侵入時に幸運にも一帯が壁ごと破壊され、出来あがった広い空間は着陸するには充分だった。

「！！」

しかし、侵入と呼ぶには あまりにも大雑把で派手。
早速、正面の廊下に映りこむ敵影。

途端にボウガンの矢が撃ちこまれて来る。
二人は急いで廊下の角に身を潜めた。

「フェル
《源》…」

屈みながら唱える世羅。

「待った、嬢ちゃん!!」

そんな彼女の口を慌てて遮るリジャン。

「その術、威力はどれくらい抑えられる？」

「……？」

「爆発力が高い術は、なるべく避けてくれ。

外からに比べ、飛翔艦は内部からの衝撃に弱いんだ。

迂闊に攻撃してこいつが堕ちてしまったら元も子もない。

無謀な作戦だがな、俺はちゃんと生きて帰るつもりなんだぜ？」

「うん……。」

「じゃ……!!」

両手を左右に開く。

「《氷・生》^{チス・キ}！！」

少女の周囲に青い粒子が生まれ、床、左右の壁、天井に広がる。

そして突如現れる小さな氷。

それはうねり動きながら段々巨大になっていき。

各四つの氷柱が、廊下全体に螺旋を描きつつ、敵集団へ向かっていく。

「！？」

やがて刃物のように平たく変化した青い氷は、集団に直撃し、動きを止めると同時に彼等の手足を切断していく。

リジャンは感嘆の口笛を吹き、腰から抜いた銃を構えた。

身動きが取れなくなった相手へ、すかさず放たれる銃弾。それぞれの眉間を的確に貫いていく。

「…大丈夫か？」

「ん？」

声をかけた矢先、あどけなく返される世羅の顔。

「いや…何でもない。」

賊とはいえ……人間を倒すことに抵抗が無いのは、面倒でなくいい。

だが、子供が他人と平然と戦うことに、リジヤンは憤りを感じざるを得なかった。

（何も変わっちゃいねえんだな……。）

幾多もの仲間が命を散らした大きな動乱が終結してから、十余年。世界はいまだ乱れている。

「…しかし、随分とやるもんだな。嬢ちゃん。」

そして氷が床と壁に張った廊下を進む。

体重を思い切り載せても、ヒビひとつ入らない強固な氷。

（あまりにも、出来すぎなくらいにだ……。）

昔、部隊を組んでいた仲間にも、この少女くらいの腕前の者が一人でもいただろうか。

壁にかかっていたランタンを氷から剥がしながら思う。

「なあ、突入する時……あの術の詠唱でまさかと思ったんだがな…

嬢ちゃんはもしかして……」

言いかけたところで、脇腹をかすめ、背後の壁に突き刺さるボウガンの矢。

廊下の先で角から半身で、もう自分達を狙っている団員。さらに別の足音も次々と聞こえて来る。

「おしゃべりは……まだ後だっつか……」

矢のかすめた部分を手でさする。

リジャンは、ぬめった感触をその指で確かめると、そのまま服の上から患部を片手で押さえつけた。

「嬢ちゃんがいくら凄腕だって、術を使い続けるのには限界がある……。」

世羅を連れて再び廊下の角に態勢低く身を隠し、銃の中の残弾を確認する彼。

「……何とか……バグ達と合流したいところだな……。」

暗がりの中、リジャンの腹部は血で滲み始めていた。

「大胆ですな。」

足音のない、絨毯の廊下を歩む。

「聖騎士を謀^{はかりごと}につかうとは。」

「オルゼリア家は中王都市きつての名門。」

何が正しくて、何がそうでないのか、判らぬ男ではない。」

足を止めず、前を真っ直ぐ見詰めたまま、黒騎士に答える大団長
ガイメイヤ。

「我々の行為は民のためである。」

この正義を常に掲げる限り、奴は従うであろう。」

大きな肩の鎧で風を切る。

「貴殿の心配どおり、少々扱いにくい男でもあるが。」

笑うと、顔の刺青が歪んだ。

黒騎士はその言葉に、短く頷く。

「……それよりも……各地生成場での源炉暴走……
その情報は間違いでなからうな。」

「『完全源炉』のみ……でありますか。」

「そうか。」

そうでなければ、この作戦……ここまでの危険を背負う価値が無い。同国に仕える部隊同士が争うのだからな。」

長い廊下の壁を横目で見る。

白い壁にひとつの染みを見つけ、ガイメイヤは足を止めた。

「しかし……魔導技術を覆すほどの術を何者かがかけた、かにわかに信じられぬ……。」

壁の染みに触れる黄金の騎士。

「それは まるで世に聞く『神言』^{しんごん}ではないか。唱えたのは神……もしくは神の使いか？ まるで絵空事だな。」

「……………」

「とにかく……この事実を知る者は まだ少ない。これからの時代、『完全源炉』を何基所有するかで大陸上の勢力は大きく左右されるだろう。」

「それだけのために、犠牲を……？」

仮面の奥から、籠った笑い。

「犠牲？ 今更、何をためらう？」

人間とは、大きかれ小さかれ、多かれ少なかれ、何かの礎いしずえの上に立つものだ。

むしろこれは運命と言っても良い。

それを受け容れられぬ心の弱い者など…生きる資格など無い。」

言いながら、壁の染みを指で削る。

「貴殿も学ぶのだな。」

「……御意。」

黒騎士はガイメイヤに正対した。

「我々は…摂政のゼン、その下僕の軍隊共を許しませぬ。

奴等には極刑以上の地獄を。

そのためならば、この拾われた命、どうか閣下の崇高な思想のために存分と使役下さいませ。

そしてその思いは…療養なされている我が隊長も同様であること…ご承知あれ。」

「分かっている、それは心強いことだ。

だが…今はその時期ではない。」

「雌伏の時…解っております。」

それを聞くと、ガイメイヤは壁から指を離し、再び歩き始めた。

「ロンセ・カロウドはこのまま中王都市へ帰還せよ。
後の指揮は、貴殿に任せた。」

廊下が終わりに差し掛かり、奥に衛兵の立つ大きな扉。

「よいか。」

中王都市には元々…戦闘組織は二つと要らぬのだ。」

扉が開かれると、そこは全天が大きなガラス張りの寝室。

「そしてもしも…現政権が これ以上、我等の意にそぐわぬのなら
…」

雲を遥か下に臨む星空の風景。

「王室政府とて要らぬ。」

天のそびえる大きな月が 黄金の鎧を強く照らした。

「《氷・生》^{チス・キ}！！」

世羅が術を繰り返す。

廊下に張った氷の上に更に広がる氷の柱。

さらに傷を受ける者。

そのまま、生き埋めになる者。

だが、艦内に集結し始めた敵の数は一向に減る気配が無い。

リジャンも落ちた照明の闇に隠れ、たまに身を乗り出して射撃。
この繰り返し……いわゆる膠着状態に陥ってから30分は経とう
としていた。

脇腹を抑えた手を少し離して、血で濡れた手を確かめるリジャン。

世羅はそこでようやく彼の異常に気付いた。

「……リジャン？」

「……おう。」

並々ならぬ量の血で手の平を赤く染めて、虚ろな目で返すリジャン。
ン。

「な…何で…何も言わないんだ！？
こんなひどい怪我してるのに！！」

耳元、しかし遠くで聞こえる叫び。

「言っても…どうにもならんさ。」

座り込み、顎を上げる。

「嬢ちゃん悪いな…巻き込んでよ…。
何か やり残したことはねえか？」

「……ないよ。
夢はもう果たした。」

「果たした？」

悟ったような表情の少女に訊く。

「飛翔艦乗りになること。」

「へえ……。」

立ち上がるリジャン。

「じゃあ、まだまだ死ねねえな。」

「え？」

「真の飛翔艦乗りつてのは、自由で何物にもとられない奴のことさ。」

ただ飛翔艦に乗る程度じゃ、ダメだ。」

「……そうなの？」

「ああ、だから生きろ！」

生きて自分だけの飛翔艦を手に入れるんだ！！」

「……どうやったらいい！？」

「生きて帰ったら……俺が教えてやる！！」

……一から十まで教えてやるよ！！」

「うん！！」

力を振り絞って立ち上がり、近くの扉を開ける。
そこは何も無い小さな空室。

「でも……その前に怪我を治してもらわないと……。」

傍のガラクタを枕に、リジャンを床に寝かせる。

「嬢ちゃん……何処へ行くつもりだ？」

そして再び扉の外へ出ようとする世羅に、リジヤンは声をかけた。

「大丈夫、外から扉を凍らせたら、すぐ戒を連れて戻ってくるよ！」

「……やめとけ……外へ出るんだったら、もう俺には構うな……」

「戒なら怪我を治せるんだ……！」

世羅の大声にリジヤンは片目を大きく開けた。

視界に入る、室内の小窓。

「……どうしても……俺を見捨てられないっていうんなら……とことん無謀な作戦に……付き合ってくれるかい？」

「？」

リジヤンは傷付いた半身だけ起こし、窓の外を確認する。

現在の位置は艦体脇の上部。

砲座も機関部も、ブリッジも近くには無い。

「ここなら……思っ存分壊しても平気だ。」

リジヤンは壁にもたれるようにして、そこに手をあてがった。

「……？」

そっか……！！」

世羅も壁に両手を付ける。

溜める渾身の力。

そして、少女は唱えた。

「《源・衝》フェルト・ド！！」

「何だ！？」

突如として艦内に轟く爆音に、バーグが剣を持つ手を止めた。

「……世羅だ。」

戒が呟く。

「今の音の方に いるのか！？」

「ああ……。きつと間違いない。」

戒は敵の死体が重なった、廊下を振り向きつつ答えた。

轟音は、他の二人の位置を伝えるべく、何発も断続的に聞こえてくる。

「なら、ここからは一直線で行けるな!!」

バークが前方の壁を剣で乱暴に叩き壊す。

返り血にまみれたバークの後ろ姿は頼もしかったが、恐しくもあった。

(こいつ……口だけじゃなく……強え……。)

侵入してからというものの、バークに指先すら触れられる賊は一人としていなかった。

ゆく手を塞ぐ者、逃げ惑う者、全て逃さず斬り伏され。

それらは今、臓腑をぶちまけた哀れな姿で廊下を転がっている。

握った剣の切っ先を引きずりながら、戒は生き残る光明を見い出し始めていた。

大陸全土を巻き込んだ反乱が完全に終結した日。

一方的な殺戮ともいわれた『戦争の後片付け』を済ませた、血と汗と土で汚れきった傭兵達が戦場を後にする。

「俺は…飛翔艦乗りになるぜ。」

引き上げる際に、リジャンは言った。

「何だ、急に。」

もう既に勝利の美酒を飲むことしか頭がないバーグが返す。

「大きい力を得るといふのは危険かもしれん。

だが、世を平和にするには時にそれもあると思う。

子供達が未来を生きる世界のため、自分が汚れ役になるってのも悪くは無い。」

「また、難しく考えやがって。」

真新しい白い布を頭に巻き、未来への思いに瞳を輝かすそんな戦友。

バーグは頭を掻き、砂を飛ばしながら答えた。

「死なねえ程度に勝手にしやがれ。
国に帰ったら、俺は妻と子供と……よろしくやる。」

そして彼は拳を突き出した。

バーグもそれに拳を合わせ、振り返る。

その時の夕焼けが、多くの友の墓に長い影をつくっていた……。

頭に細く巻いたターバンが^{まぶた}瞼の上に落ちる。

気付くと、扉の前には肩で息をしている世羅。

幾重^{いくえ}にもかけられた、氷の柱を扉を固めている。

自分の意識が飛んでいる間の少女の努力。

それは想像に難くない。

しかし、無常にも扉の外からは炎団が強く叩く音。

氷は少しずつ砕け始めていた。

「嬢ちゃん……もしも扉が破られたら、なんとか敵の集団をすり抜ける。」

そして……バーグ達が追いつくまで……音を出し続けながら逃げるんだ。」

「リジャンも…一緒にね。」

「俺はダメだ…もう走れない。」

「そんなのヤダよ!!」

「嫌でもやるんだ……。」

近付き、駄々をこねる少女の姿は愛らしかった。

「嬢ちゃんだけでも…生きなくては…だめだ…」

「リジャン!!」

安らかに目を閉じるリジャンに対し、世羅が必死に呼びかける。

閉じた目。

一切の闇。

集中した聴覚が捉える、微かに聞こえる重い足音。

旋回する剣の刃音。

複数の断末魔の声。

「……どうやら……嬢ちゃんは幸運の天使だ。」

うつすら目を開けて笑みをこぼす。

凍りついた扉に一線が斜めに入る。

続いて、もう一線。

バツの字に斬られた扉を蹴破り、侵入してくる見慣れた大男。
さらに黒い修道着の若者が駆け寄ってくる。

「戒！！」

…リジャンが…怪我を！！」

戒は世羅に頷いて応えると、すぐさまリジャンの脇にしゃがみこんだ。

「……………う！！」

そして、懷にふところ一気に入れられる手の感触に、リジャンは激しく顔を歪ませる。

「リジャン！！」

馬鹿野郎が！　しくじりやがつて！！」

高い所から叱咤する、大きくて低い声。

「老いたよ、バーグ…。」

リジャンは青く変色した唇を震わせた。

「ゲリラ共が密林の中を潜み、こちらの寝首を虎視眈々と狙っている…。」

そんな視線を、そんな殺気を……昔はもっと敏感に感じとれたもんだ。

だが、今は…。」

「…それ以上喋るな!!」

バーグが刃のこばれた大剣を捨て、歯ぎしりする。

「…これは……!」

そしてリジャンの軍服を開き、傷を改めて確認する戒。
直後、顔には失望の色が浮かぶ。

「…全っ然、かすり傷だ。」

その言葉の後、室内を暫しの沈黙が支配した。

「出血が多いのは切れた皮が引っ張られて開いたからだな。」

太り過ぎだぜ、オッサン。」

患部に触れ、リジャンの肩を叩く戒。

一瞬にして嘘のように引いた痛みに驚き、リジャンは自分の腹をさすりながら、自身が暫く呆気に取りられている様だった。

「……がはは。」

帰ったらダイエットしねえとな……。」

「冗談かましてんじゃねえよ！

マジかと思ったぞ……！」

「そつだ、ひどいよ……！」

涙目で訴えるバーグと世羅。

「わるい、わるい。」

そんな彼等に対し、リジャンは大口を開けて誤魔化す。

「……へえ、天命の輪か……。」

そして光る輪の浮き出た、戒の指先を軽くつまむ。

「……。」

彼は黙ったまま、それを振りほどき、立ち上がった。

「……ただ、治すのか？」

「……。」

「傷を治すかわりに、同じ痛みを自分に移すの。そうだよ、戒？」

何も答えない戒に代わって、世羅が答える。それに対し、戒は舌打ちする。

「そうか……自分を『犠牲』にしてまで……か。すまん、迷惑かけて。」

「別に。」

痛みだって半日 我慢すれば治る。」

「……すまん。」

戒は、リジャンが頭を下げるのを避けるようにして壁にもたれかけた。

そして、指の輪は光を鈍く放つと、消えた。

「それより、みんな揃ったことだしよ。
先へ進もうぜ。」

休憩もそこそこに、バーグが意気揚々と言い放った。

「…うん！

………！！！」

それに合わせ 勢い良く扉に走る世羅。
だが途中で、その両膝は崩れ落ちる。

咄嗟に大剣を捨て、彼女の脇の下に手を入れてその身体を支える
戒。

そして何も言わず、そのまま背負う。

「おい……！！」

「こつちも怪我してんのか？」

「戒に負ぶわれて、すぐに寝息を立て始めた世羅を眺めながら、バグは慌てて訊いた。」

「いや……術の使いすぎで精神が参っちゃったんだろ……。
俺が不甲斐ないおかげさ……。」

「苦々しい顔で言うリジャン。」

「このまま背負ってくれるのか、兄ちゃん？」

「……ああ。」

「当然のように答える戒。」

「わかった、行こうぜ。」

「時間をかけるだけ俺達の不利だしな。」

「バグは戒に預けていた剣を拾い上げると、床の瓦礫と氷を踏みしめる。」

「……リジャン、ここはオヤジ達の心意気と生き様をいっちょ見せてやるか。」

「おいおい…遊びじゃないぜ。」

「わかってるって。」

おどけるバーグが気を取り直した直後。

《……………は……………》

声にならない声が聞こえた。

「わかったって言ったろ。まだ何か言いたいことでもあるのか？
しかも変な声出しやがって……………」

「今のは俺じゃない。」

振り向いたバーグに、リジャンが答える。

静まった室内に響き渡る雑音。

「……………これは……………」

唇に人差し指を当て、二人に黙るよう命じてから室内を眺め回す
リジャン。

雑音は壁に掛けられた、声通機からだった。

《俺は…炎団セルゲドニ10番艦 艦長、マーケット＝ロペール。》

「!?!」

今度は、はっきりと聞こえた言葉に身構える。

《俺の指示どおり進め。

ブリッジまで案内してやる。》

「……こんな見えすいた罠にかかると思ってるのか!?!」

バークが怒号を上げた。

「さて、バーク。」

リジャンは、戒、そしてその背で泥のように眠る世羅を見た。

「心配するな!

まだ俺だけは元気だ、何人だって斬れる!?!」

そう言ったバークの持つ剣。

残りはあと二本。

「俺様だってやれるぜ、ヒゲ!」

戒が両手の指を鳴らした。

「クソガキもああ言ってるんだ。

向こうの言うことなんざ、無視して進もうぜ!」

意気を上げるバーグに、リジャンがそっと近付く。

「嬢ちゃんの様子は、見て分かるな？」

だが…実は兄ちゃんも……本当は立てる状態じゃねえんだ。」

「あん？」

彼の言葉に、最初は呆けた顔で　ただ耳を傾けていたバーグだったが、みるみるうちに血相を変える。

「まさか……おまえ……!!」

「ああ。あの時、俺の傷は内臓に達するギリギリだったよ。腹を切る痛みに……お前はあそこまで耐えられるか？」

「…クソガキめ……」

良く目を凝らせば。

戒は脂汗を顔に浮かべ、たまに手足を震わせている。

平然と世羅を背負い、気丈に振舞う彼の姿にバーグは心の底から驚嘆した。

「わかった…。」

ここはリジャンの勘に任せる。

もしも罠だったのなら……その時は俺が命を張ろう。」

「心強いぜ。」

戦友^{とも}よ。」

拳を合わせる二人。

「案内してもらおうか、空賊の大将!!」

そして同時に。

彼等は壁に掛けられた声通管に向かって威勢よく叫んだのだった。

「状況が変わった。」

黒騎士が部屋に入るなり、くぐもった声で言った。

「格納庫まで来てもらおうか、聖騎士殿。」

ソファで大いびきをかいて眠りに落ちているヂチャードを一目見て、マクスは静かに立ち上がった。

「初陣にして……とんでもねえ、ババを引いちまったな。」

艦長の座席で、その男は呟いた。

扉は開かれ、ブリッジに侵入する焦げ臭い匂い。

侵入者の数、たったの四名。

前方で弓なりに並んで座り、自分達を威圧するようなブリッジの
念通士達の雰囲気。

その中でバーグは、すぐさま剣を構えた。

「待て。」

見ての通り、ここは精密な機械が集まっている。

ヘタな攻撃はお互い死を招くぞ。

それではつまらんだろっ……」

若干高く位置する椅子に座ったまま対面する男は、バーグと同程
度、あるいはそれ以上に見えるほど

体格に優れている。

「いまさら話し合いで決着つけられると思っているのか？」

！
「追い詰められてる奴に、そんなこと選ぶ権利があるわけねえだろ」

「追い詰められた？ 違うな。

こちらが貴様達をここへ呼んだ理由は、それが勝利への近道だからだ。」

戒の言葉を平然と返す男。

「は…ハツタリを言うんじゃない！」

「落ち着け、兄ちゃん。」

リジャンは、敵の瞳の鋭い光を見る。
それは戦いを享樂する危険な眼差し。

「今日は散々な日だ。

炎団にようやく加入出来てからの最初の仕事なのによ。
たったの四人にこのザマとはな。」

立ち上がる男。

背丈も、バグより若干大きい。

「俺としては、たとえこのまま物量で^お圧して勝っても、組織に立つ顔がねえ。

このへんで終わりにしたいというのが本音だ。

俺達は、元は名もねえ空賊。

炎団に入っても、部下と飛翔艦はそのまま持ってきた。
出来ればこれ以上、失いたくねえし壊されたくねえ。」

「勝手なこと言いやがって…今更そんなワガママ、通るとでも思っ
てんのか!!」

戒が吼える。

「わからん小僧だな。

こっちの真意を……察してもらいたいものだ。」

その男は眉をひそめた。

「……いいだろう。

傷付くのが沢山なのは、お互い様だ。

お前が言いたいのは……『決闘』だろう？

このバグが負けたら、俺ら他の三人の命もやる。
だが勝ったら、この艦は俺達のものだ。それでいい。」

素早く答えるリジャン。

それを聞いて笑う男。

「おい…馬鹿言え！」

何で勝手に俺様の命まで賭け……」

「…どけや、クソガキ。」

バーグが圧倒的な殺気で戒を睨み付けながら、前へ数歩出る。

その迫力に、戒はそれ以上口を動かさなかった。

「ここは俺の見せ場ってことだろ？ なあ。」

バーグが頭を掻き、未使用の一本を捨て、使い慣れた腰の剣を抜く。

リジャンがその様子に、歯を見せた。

「物分りが良くて助かったよ。」

これから、俺達はもっと組織の上へと上がらねばならねえ。

こんなところで…つまづくわけには…いかんのさ。」

男も座席脇に立てた剣を取り、鞘から抜く。

そしてマントを脱ぎ、椅子の背もたれにかけると、刃の切っ先をバーグに向けて両手で構えた。

「貴様…相手が悪かったな。」

続けて 男は言った。

沈む空気。

殺意が飛び交う。

「俺は飛翔艦に乗るようになって、毎日千回の素振りをかかしたことがない。」

「……そうかい。」

バーグが右手で軽く剣の柄を握り、左手で無精髭を触る。

背には三人の仲間。

故意に力を抜く首、肩、腰。

その中で唯一、足だけを前へ勢いよく抜き出す。

「！？」

男はバーグの体を見失った。

一瞬の踏み込みで。
懐に飛び込まれている。

（……馬鹿な……吞まれた……！？）

人影が剣を握った手を伸ばし、自分の首を狙うのがわかる。

その剣先を目で追いつつも、何故か体が反応できない。

指先の一本でさえ、動かなかった。

……続けて、何かが身体を通った感触がした。

握った剣を相手のうなじに通り越したまま動きを止めるバグ。

「敗因は……場数の違いじゃあねえぜ。」

そして一発、床を強く足踏み。

男の首があらぬ方向へゆっくりと傾き、ごとりと嫌な音がブリッジに響いた。

「俺は毎日万回の素振りを欠かしたことがねえんだ。」

剣を振り、血を飛ばす。

男の身体が完全に倒れた瞬間、ブリッジ内の団員達は瞬く間に戦闘の意欲を失った。

「バーグ！」

後からリジャンに肩を叩かれ得意顔。

だが、振り向いて見た彼の顔に賞賛の表情は無かった。

「おまえなあ…戦闘騎に乗り始めてからも熱心に剣の稽古をしていたのは気付いていたが…そんなにしてたのか。」

「あ。…いや、その……！」

思わず口ごもるバーグ。

「まあ、いいさ。」

結果的に、それが俺達を…」

両手を挙げ、降伏の意を示し、一斉に立ち上がるブリッジの団員達。

「そして、ルベランセを守ったんだからな。」

リジャンの勝利の言葉に、バーグは両の拳を握り喜びに悶え、戒はようやく腰を床に下ろす。

世羅はその背で 安堵の表情のまま眠り続けていた。

「随分、急な話ですね！」

搭載した源炉に火が点いた銀の戦闘騎に駆け寄り、ミシュレイが興奮気味に言った。

「お茶も満足にとれないくらい忙しい聖騎士さま。
出撃前にぜひとも聞きたいことがあるんですけどね！」

少年の顔を見ずに、操縦席で手甲を握り直すマクス。

「今回も沢山、人を殺すんでしょう？
何故、平然とそんなことが出来るんですか？」

マクスの横顔は、平然と計器を確かめている。

「やはり天命人だからですか？
エア・ファンタジスタ
……ですよね？」

ミシュレイは戦闘騎に寄りかかりながら、黒華の騎士達によって開けられる発進口を眺めた。

「貴方も本当は見下しているんでしょう？」

自分は特別な存在だ、と。
他の凡夫など、どうなってもいい、と。」

外の闇を眼鏡と瞳に映しながら、うつすらと笑いを浮かべる。

「僕が『ここ』にいるのは、ここが学校よりも僕に高い評価を下したからです。

そしてここなら、資材・資金など、研究の素材が際限なく手に入る。

時間の制限も無いし、錬金学を究めるには都合の良い事この上ない。

でも僕が天命人でなかったら、そんなこともなかったでしょう。
このことから我々は、選ばれた人間だと思いませんか!？」

「……逆に聞こう。」

そこで初めてマクスは少年の瞳を真っ直ぐに見詰めた。

「あの紅茶は…他人に美味しく飲んでもらいたいと心の底から思い、何度も努力せねば出せる味では無い。

私はそう感じたが。」

彼の予想だにしない返答に、ミシュレイの思考は暫し止まった。

発進口の突風で、そばの整備士の持つ部品がひとつ飛ぶ。

「……なんですか、それ？」

言っていることの意味が良く解りませんね。
もっと具体的に…」

少年の声が震える。

「もしも天命人が特別な存在というのなら、君がその上に胡坐あぐらをかき、努力を怠おこつていても
今の君の立場が存在し得えたということになる。」

マクスは首を振った。

「天命人も人だ。」

天命の輪は決して人の本質まで変えるものではない。
君が評価されるのは、君の努力の結果だ。
もしも、君が天命人に生まれなかったとしても……」

「ふ……！……はははは！
綺麗ごとだ……！」

唐突なミシュレイの笑いが、そのマクスの言葉をかき消す。

「貴方はとても興味深い……！
僕は貴方のことが好きになりましたよ……！！
一体どうやったら、そんな下らない考えに行き着くんですか？」

さらに胸を大きく膨らませ、苦しそうに息を吐き出しながら興奮

する少年。

「天命第二位を持ち……生まれながらにして騎士の名門。僕なんかよりも全然、エリートの方が！？」

上半身を操縦席の中にまで乗り上げ、聖騎士の顔に無理矢理近づく。

「任務内容……。」

標的・炎団セルゲドニ10番艦。

さらにその全ての戦闘騎、人員の殲滅……。」

そんなうろたえた少年を見限るように 銀の兜をかぶり、機械的に呟く聖騎士。

その様子に、ミシュレイは一転、平静を取り戻す。

そして床に足を付けて降りると、彼は発進口の騎士に向かって合図を送った。

一際大きくなる、ブースターの蒼い炎。

正面を向き、顎を引く聖騎士。

「マクスⅡオルゼリア……出る。」

推進力に変換された、源の粒子を残し、銀の戦闘騎は少年の視界からものの数秒で消え去った。

第五話 『無謀な作戦・後編』
了

t o b e c o n t i n u e d . . .

1 - 6 「愛すべき犠牲より」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 1

『From the sacrifice which should be loved』

The sixth story
'From the sacrifice which should be loved'

「既に作戦の変更を余儀なくされている。」

出撃前。

黒騎士は腕を組みながら、早い口調で言った。

深夜の静寂に包まれた廊下は、二人以外は誰も居ない。

「炎団が…敗れたと言われるか？」

部屋のドアを閉めると、マクスは答えた。

「なかなか察しがよろしいな。

まだ、敗れたとまではいかないが……寸前だろう。」

自分を見下ろす黒騎士が腰にさした剣。

それに埋め込まれた念通球がわずかに振動している。

「…にわかには信じられぬ。

この作戦に『穴』は無かった。あの圧倒的な戦力の差で…」

「『穴』があつたとするならば、それは奴等に関しての情報が少ない過ぎたことだ。」

黒騎士が言葉でマクスの言葉を遮る。

「貴殿も大団長も、飛翔艦そのものをルベランセの戦力と捉えてはいなかったか？」

確かに『あれ』は、一昔前の古い飛翔艦…そして補給部隊に過ぎん。

だが、そのことに気をとられるあまり、『個』の能力を調べるところを怠った。

これが敗因であると思われるが、どうか。」

「そして、侮^{あなど}った…と？」

マクスは語気を強めて言った。

「……元々、貴殿は戦略家ではない。

ただ命ぜられたままに動いた者に　この作戦の責任は無い。」

返される、笑いを帯びた言葉。

（大団長を愚弄するのか……？）

その先に内包された意味を、何となしに理解するマクス。

「……現在の状況は？」

「賊の艦に直接乗り込んだルベランセの者達は…これを破る。

そしてその艦を使って、先へと進んだ自艦と合流すべく進むだろう。」

このまま行けば…いくら巧妙に隠してあるとはいえ、賊共から手がかりを見つけ…」

「裏で糸を引いていた者へと辿り着く可能性がある…と？」

マクスは黒騎士を見詰めた。

いやに詳しく説明的で、未来の予測ともいえる大胆な展開を堂々と口にする。

だが、その表情の無い仮面からは何も読み取れない。

「先ほどは、状況など全く分からないような素振りをしていた割には……今ははっきりと言うものだ。」

「貴殿には、まったく敵わぬな。」

黒騎士は顎^{あご}を引いた。

「私は念通術におぼえがある。
そして探知にかけての腕は……それこそ、飛翔艦の念通士共の比ではない。」

「……そのようだ。」

無表情で返すマクス。

「この状況を救ってくれるな？ 聖騎士殿。」

「私でなくてはいけないか。 親王隊の者よ。」

わずかに沈黙の時間が流れた。

「憶えていたか。」

それまでの黒騎士からの距離を置いた声の調子は無くなり、高圧的な声が姿を現わす。

「聖都での観艦式に見たと言ったろう。」

あの時のこと、忘れようはずもない。」

「そうだな。」

あの時の貴殿の武勲が、聖騎士になるきっかけを作ったともいえる。」

「私だけの力で聖都を救えたと？」

「違うか？」

マクスは見えない視線に、真っ向から臨んだ。

「私はいまだに思っている。」

『あの時』……本当に聖都を救ったのは、私ではない。

それは中王都市の飛翔艦隊すべてであり……。

さらに、忘れてならないのは、それを常に指揮していた親王隊長。長。

そしてその傍らに居た……黒い騎士。」

黒騎士は己の仮面の下の部分を指でつまみ、位置を直した。

「いかにも。」

私は親王隊……軍師ディボリアル＝マシーアンス。
だが……それほど大した働きはしていない。それは貴殿の妄想
だな。」

その言葉に、マクスは思わず詰め寄った。

「何故、表舞台に立とうとしない。

そのおかげで、私は代わりに道化とさせられた。」

「聖騎士の名誉を道化というか……！」

黒騎士は初めて大声で笑った。

「だが、貴殿がそのように言うのなら話は早い。

今後も道化を演じ続ければ良いだけだ。

フフ……大陸全土の平和を願う中王騎士団を救うことは聖騎士の
務めぞ。」

そして背を向ける。

「そしてせいぜい……オルゼリア家の名に恥じぬように戦うがよい。
」

仮面の奥は笑っているのだろうか。

奮^{ふる}える気持ちを抑えながら、マクスは堪^{こた}えた。

「貴殿が……ここにいる理由の説明は無いのだな……。
軍隊に粛清された親王隊の残党が、一体何を企んでいる？」

「……………」

「……復讐か？」

「どう思ってもらっても構わぬよ。」

黒い姿がゆっくりと横を向く。
頭部を包む仮面の隙間から襲い掛かる威圧感。

暗い廊下の闇が更に増す。

マクスは突如痺れ始めた右手を抑えた。

荒くなる自分の息。
本能が感ずる拒絶感。

「貴殿が生きてさえいれば……それはいずれ分かる。」

いやに鼻にかかった声。

そして足音と共に 廊下の奥へと消えていく黒い鎧。

マクスはなす術もなく、ただそれを傍観していた。

……その時、聖騎士はまだ気付いていなかった。

黒騎士も自分の左手を、彼と同様に抑えていたことに。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第一章

愛すべき犠牲より

・

第六話 『愛すべき犠牲より』

1

まどろみの中、目をゆっくりと開く。

肌に触れている あたたかい毛布。

「よお……。」

長い剣を肩にかけたまま、目の前のバーグが口を開いた。

そして世羅は、彼の膝を枕にして寝ていた自分に気付く。

悪いと思って、慌てて離れようとするがバーグは優しい眼差しでそれを制した。

「……まだ寝てていいぜ。」

疲れたろ。子供にしちゃあ、よく働いたからな。」

「……ん……。」

力を抜いて、大きな膝に首を再びもたれかけ、見上げる鋼鉄の天井。

ブリッジは、うつすらと記憶にある、突入時と全くそのまま。

敵の団員達もただ黙ったまま、飛翔艦を動かす任務に付いている。

ブリッジ全体を見渡せる室内の一番奥で、世羅とバークの二人は陣取って固まっていた。

その少し先で戒とリジャンは、団員達を監視するかのように立つ。睨みを利かせ、リジャンの方はいつでも撃てるよう、その手に銃を構えていた。

そこでバークの様子の変化に気付いた戒が、視線を送る。

「お姫様のお目覚めだ。

どうだ、俺と変わるか？ クソガキ？」

「……ブチ殺すぞ、ヒゲ。」

世羅を膝に寝かせたままからかうバークに、戒は疲れた表情で答えた。

「……どこに向かつてるの？」

まだ虚ろな顔で世羅が訊く。

「……ゴーベ山脈へ。」

リジャンが低い声で言った。

「そこは……？」

「ルベランセの向かっている場所だ。」

「じゃあ!?!」

世羅は急に飛び跳ねるようにして起き、自分にまわり付いた毛布を投げ払った。

その歓喜の大声に、耳を押さえながら、苦笑する傍らのバーク。

「ああ、これから合流する。この艦でな。」

「これって確か…」

リジャンに駆け寄り、見上げる世羅。

「ああ、敵さんのだ。
だが頭を押さえた。」

そして、団員の全てに投降するよう、ここから命令してある。」

窓の外の甲板を指す。

そこは吸盤によって飛翔艦の外装に吸着した、赤い敵機でびっしりと埋まっていた。

「今は……俺達の艦だ。」

リジャンは目を細め、そこでようやく大きな笑顔を見せたのだっ

た。

「そこに着いたら、我々はどうなる？」

リジャン達の会話を聞いていた団員の一人が言った。

「中王都市の軍隊に齒向かったんだ。
勿論、山を越えて中王都市の軍警察に逮捕してもらう。
不利な裁判は覚悟してもらおう。」

「……。」

「まあ、全員 極刑は免れねえな。」

「……………！」

リジャンとバークの言葉に、絶望の色を浮かべるブリッジの団員達。

「…だが、そうになると、あんたらはここで最後の抵抗を必死にする
かもしれん。」

そこで交換条件だ。

このまま俺達をおとなく目的地まで運んでくれ。
そしてその場で武装を解除し、解散してくれればそれ以上は関わ

らない。

軍に突き出すのも見逃そう。

ただ……最低一人は主犯として中央都市までご同行願うことになるがな。」

両手を開き、肩をすくめるリジャン。

「……恩に着る。」

その役目は……私がしよう。」

団員の中の一人が言った。

「わかった。」

じゃあ、引き続き、飛翔艦の運転を頼む。

だが妙な真似をしたら……ためらい抜きで撃たせてもらう。そのつもりでいてくれ。」

銃口を向けるリジャン。

その団員はすぐに頷いた。

見事な交渉だった。

数で不利があるだけに、下手に締め上げるよりも、より効果のある条件の提示して安全を確保する。

ブリッジの団員の全てが安堵から肩の力を抜き、殺伐とした雰囲気も若干和やかになった。

「一時はどうなるかと思ったが……」

それを敏感に感じ取った戒は、腰を床に落ち着ける。

「これで一安心だぜ。」

だけど追っ手の心配は……無いんだろうな？」

そして顔の汗を拭いながら言った。

「さっき言ったように、ここの連中が妙な素振りを見せたらすぐさま撃つさ。」

今のところ、こちらの状況はどこにも報告されていないはずだ。」

リジャンは手近な椅子を選んで、それに座ると答えた。

「だが、気になるんだがよ……。」

続けてバーグが口を開く。

「いくら大陸最大の空賊団だからって、中王都市に喧嘩を売るか？」

「ありえないだろうな…普通なら。」

即答するリジャン。

「だが…完全な勝利が約束されているのなら話は別だ。
相手を完膚なきまでに叩きのめし、誰の仕業か分からないほど完
壁に作戦を成功させる。」

それが可能ならば……やるさ。
しかもこれ以上無い、おいしい話だ。」

「それが可能になる保証がどこにあるってんだ？」

「情報が掌握されている場合、だ。」

「……！！！」

ずるり、とバークの肩に掛かった剣が落ちる。

「ルベランセの航空ルート、戦力、全てが一切分かっている、ど
のようにも出来る。」

「それっておい……！」

リジャンが淡々と続ける話に、たまらず声を発する戒。

「それはきつと、ルベランセ内部からの機密の漏洩……。
まあ、ここらへんは中王都市で改めて調べるしかあるまい。
証拠になるモノがこの艦にあれば良いんだがな……。」

難しいだろう。

リジャンは思った。

この用意周到な計画は、万が一失敗した時のことも視野に入れているはずである…。

「そして、気になるのはそれだけじゃない。

それほどまでに完璧な作戦なのに、奇妙な点が一つだけある。」

「あん？」

もううんざりといわんばかりの顔をして、バーグは一応聞く素振りを見せる。

「実はルベランセには、賊が欲しがるようなブツなんて積んじやいない。

今回中王都市へ輸送していたのは、鉄鋼や石炭・木炭などが主。重い割には大した金にもならない、軍隊以外にとつちやガラクタだ。

…そこまで情報が洩れていたにも関わらず、肝心な『積荷』の情報が洩れていないのはどういうことだ？」

戒とバーグは黙り込んだ。

「あるいは、積荷以外にルベランセには重要な『何か』があるのか……どうも、この襲撃の裏には…別の大きな思惑が絡んでいるような気がしてならねえ。

それが何なのかまでは…分からないがな。」

そこで会話が止まり、静まりかえるブリッジ。

そんな中、不謹慎にも、世羅の腹が大きく鳴った。

「……おまえな!!」

戒が思わず、歯を剥く。

「だって……おなか…空いたんだもん…」

世羅は頬を膨らませて応戦する。

そんな二人の間に割って入ったのはバーグだった。

「まあ、無理もねえ。

かくいう俺も腹ペコだよ。……なんかメシでも探してくるわ。
腹が減っちゃ、ロクに頭も働かねえしイライラする。

それに…しばらくここを離れるわけにはいなくなるしな。」

「頼む。」

リジャンの言葉に頷くと彼はすぐにブリッジの扉をくぐった。

極限に近い状況ほど、彼の背中はいつでも頼もしく見えた。
…だがその景色は、すぐにぼやけることになる。

「……おい、オッサン。

あんたも休んだ方がいいんじゃないか？」

眉間を指でつまんで、顔をしかめるリジャンに対して、戒が言った。

「歳…だな。

兄ちゃん、嬢ちゃん、俺が休む間……くれぐれも寝ないでくれよ？」

「大丈夫。

ボク、さつき寝たから。」

世羅の笑顔に笑顔を返し、リジャンは椅子から離れると、そばに倒れこむように大きな身体をブリッジの冷たい床に横たわらせた。

そして、すぐに寝息をたて始めたのだった。

「……リジャン！ 生きてるか！？」

髪も無精髭も伸び放題。

服も返り血と泥でドス黒く汚れたまま。

そんな野獣のような姿のバグが、静まりかえった周囲を見渡し
ながら無防備に叫んだ。

「おう……ここだ。」

ライフルを肩にかけ、汚い帽子を目深にかぶったりジャンが、潜
んでいた草むらの中から立ち上がって歯を見せる。

「悪運の強え野郎だ!!」

「てめえもな!」

二人は駆け寄り、歓喜の拳を合わす。

その足元には、つい数時間前までは生きていて、ふざけあっていた
味方の兵隊の死体が幾つも転がっていた。

16年前。

大陸南部、ヨルドカント熱帯雨林地方の戦況は 全くの膠着状態。
反乱軍も大陸十字軍も 劣悪な自然環境という戦場において、ど
ちらも決め手にかけていた。

追い詰められた反乱軍のとったゲリラ戦法は 大いに十字軍を苦
しめていたが、人員において既に圧倒し、
単なる掃討戦と化していた戦争において、官軍たる十字軍が本気で
かかればそう長引く戦いではなかった。

しかし、戦争後期の十字軍陣営の中核を担う貴族、騎士、豪族な
にな

どは既に無駄な損害は
被りたくなく、戦力を出し渋る。

おかげで前線に回されるのは、兵役の給料欲しさに飛びついた民間人・農民の素人。

無論、他の参戦者にはプロの傭兵も数多くいたが、そのような混
合軍では余計に戦いにくいものだった。

「戦いが長引きや長引くほど稼げる…天国かと思ったがよお……。
俺あ、一刻も早くここから逃げ出したいぜ。」

バーグは水筒をくわえ、口内を水でゆすぐと、すぐに辺りへ吐き
出した。

もう一生涯分の生命を絶ったろうか。
人の油と髪の毛にまみれた愛剣を無造作に捨てる。

「軍と契約してんだ。
敵前逃亡罪で死刑だぞ。」

リジャンが言った。

その言葉で、大の字に寝転ぶバーグ。

背に感じるのは、熱い、ひどい感触の泥。

「かーっ！　ここは地獄かーっ！　！」

その日は、特に暑さの厳しい夏の頃だった。

「何だいこりゃあ？」

頭を90度近く上へ。

天を仰ぎながら、リジャンは言った。

高い木々が並ぶ林の中。

その中に隠されるように配備された巨大な鉄の塊。

ラグビーボールに近い形状だが、脇と上下に翼が付いている、初めて見る『それ』は奇妙なモノだった。

「この戦争の『切り札』ですよ。

飛ぶ……そうです。」

「『飛ぶ』!？」

伝令兵の言葉に、素っ頓狂な声をあげるリジャン。

その鈍重な見た目からは思いもつかないその語句は、にわかには信じられない。

「冗談だろう？　こんなに大きな鉄の塊だぞ。」

「私だって信じられませんよ。」

発明家のやることは　いつも良くわかりませんが……。

何でも、源^{フエル}つてのは万能の物質でしょう？

それを動力に利用しているそうで……。」

塗装も装飾も何も無い。

ネジもつなぎ目もそのまま　不細工な物体。

木々の間から洩れる熱い陽の光も、それに反射すればたちまち冷たく見えた。

「試作機は小さな国が開発したらしいのですが、その技術を各国が仕入れ、独自に研究したそうです。」

これは源^{ゲン}覇^ハ国の『レプレ・パトール』という名前で……」

リジャンにはもはや、それ以上その伝令兵の言葉は聞こえなかった。

その圧倒的な迫力に飲まれ、魅了された。

これから訪れる地獄など、その時は想像もしていなかった…。

『レプレ・パトール』

大聖典にて、腐った地を浄化する炎を大陸全土に撒き散らしたといわれる『始まりの神使』の名。

その名を冠した飛翔艦も、それと同様に地をなぎ払い、血風を巻き起こした。

飛翔艦自体に装備された爆弾による爆撃はもちろん、配備された戦闘騎十数機による攻撃により、密林は潜んでいた反乱軍と共に、ものの数分で全て灰になる。

被害は操縦士自身の操縦ミスにより墜落した戦闘騎一機のみ。

そして戦績は数年分に等しい勝利という結果に、大陸中が目を見張った。

以来、各国の飛翔艦技術は加速度を増し、数ヶ月後には、各戦場に忌まわしい強大な影が多数
天空を闊歩かつぽすることになる。

草一本、水一滴残らない、枯れた土地。

あれだけ進攻に苦しんだ沼も、数時間前に行われた絨毯爆撃により今では干上がり果てている。

リジャンは、そんな荒野でたたずんでいた。

「50年近く抵抗していた反乱軍の全てが さっき全面降伏したそう
うだ。」

「なんかよ…マトモに戦ってるのがバカらしいな。」

バーグが後ろから声をかける。

「ああ……人間のすることじゃあ……ない。」

掴んだ灰混じりの土が、リジャンの手の平で粉になって砕けた。

「戦争屋は……もうやめだ。

俺は故郷に戻る。

戻って……レビ……いや、カミさんと……今度生まれてくる子供と
幸せになってみせるぜ……。」

照れくさそうに話すバーク。

それを見て、リジャンは目を丸くした。

「レビークと結婚するのか？

おまえら……最近、なんとなく怪しかったが……そういうわけか……こ
の野郎。」

肩を強く叩いて、祝福する。

「よせよ……。」

まんざらでもない顔で返すバーク。

「……リジャン……これから お前はとうすんだ？」

「俺は…」

言いかけたところで、身なりのみすばらしい少年が遠くから近付いてくる。

その子が纏まとっているのは一枚の大きな布きれのみで、彼が反乱軍の民族であることが判った。

「……！！」

身構え、剣の柄に手をかけるバグ。

「やめる。」

リジャンは、それを咄嗟に制した。

目の前の少年は笑顔だったのだ。

「何の用かな、ぼっちゃん？」

近づく少年の目線の高さまで腰を下げて、リジャンは優しく声をかけた。

吹き荒ぶ焦げ臭い風の中。

少年は笑顔のまま無言で頭のターバンを外すと、彼に差し出した。

リジャンが目を大きく開く。

そして次に、思い切り瞑^{つぶ}った。

そして再び瞼を開くと、はっきりとした視界の向こうに三人が映る。

「ん、お前もこっちで食べよ。」

バーグが目を覚ましたリジャンにいち早く気づき、声をかける。

リジャンは重い腰を上げて伸びをした。

どのくらい寝ていたのか見当もつかないが、三人が囲んでいるパン、チーズ、干し肉の食い散らかし具合から、かなりの時間が経っていたのが判る。

「ここの非常食、ルベランセのメシより美味いぜ。」

戒が皮肉混じりに言った。

世羅はその傍らで、瓶に入った水を一心不乱に喉に流し込んでいく。

「そりゃ結構。」

……ところでバーグ、艦内に異常は？」

「それがだな……。」

眉間にしわを寄せるバーグ。

「俺達が立ち入らなかった場所で、自害している団員が数人いやがった。」

おそらく……」

「何か知っている連中だな。」

捕まって情報を洩らすより……自ら死を選ぶ、か。
ますますもって、キナ臭いな。」

「まったく……ほれ。」

ワインの瓶が無造作に放られる。

「なかなか上物じゃないか。」

リジャンはそれを片手で受け取ると、すぐに歯で栓を抜いた。

「乾いたパンと肉が、いいつまみだ。」

バーグが笑う。

それに合わせて、意味も解らずに世羅も笑顔を見せた。

そんな二人の様子に、バーグの頬も自然と緩む。

だが、その和やかな空気に反発するように、戒だけは片肘をついたまま仏頂面で虚空を向いていた。

「…なあ兄ちゃん。」

声をかけると、その青年は瞳だけを動かして反応する。

「兄ちゃんは何で、ここへ来たんだい？」

「あ？」

「あのままルベランセにいれば良かったんじゃないのか？
こつちが危険なのを知ってて何故……」

「そんなの…俺様の勝手だ。」

「…やめとけリジャン。」

このガキ、恐ろしく頑固でワガママなんだ。 しかも素直じゃねえ。」

脇から口を挟むバーグ。

「こいつが心配でたまらなかったんだろう？ なあ？」

世羅の頭を撫でながら、バークが ほろ酔い気分で訊く。

「……………そうなの？」

無邪気な顔で世羅も訊いた。

そんな二人に対し、拳とこめかみを振るわせる戒。

「さつきも……………言っただろうが。」

抑揚の無い低い声。

「俺様の前で犠牲になるような真似はするなっとな。」

「兄ちゃんも変わり者だなア。」

そのポリシーは一体どこからくるんだい？」

戒が顔をリジャンの正面に向ける。

「そんなこと、オッサンに話してどうなるんだ。」

「つれないね。一緒に戦った仲じゃねえか。」

俺はこう見えても、世界を旅する飛翔艦乗りだったんだ。
なにか……………力になれるかもしれない。」

「……………力になんて……………なれるわけがねえ。」

戒は、興味津々の様子で自分を見詰める世羅とバークの様子に気付くと、すぐに顔を反らした。

「ためしに話してみろよ。こいつは最近まで、飛翔艦の艦長をしてたんだぜ？」

「……まあ、今じゃあ、しがない戦闘騎の操縦士だかな。」

ワインを片手に仰け反りながら笑う二人。

「どうして艦長をやめちゃったの？」

そんな彼等に世羅がたずねる。

「仲間に裏切られたんだよ。」

バークが代わりに即答した。

「ある戦いでな…。」

こいつは、つい自ら戦闘騎で出撃しちまったんだとよ。」

「戦闘には勝ったんだがな…いざ帰還しようとした時、自分の艦の姿が見えねえ。」

苦笑いするリジャン。

「こいつはな……人が良すぎるんだ。昔から。」

バーグが言う。

「それは、かなりバカな話だが……」

そこで、戒は臆面も無く言い放った。

「……ヒゲ、お前程度の腕で、戦闘騎の操縦士をしているということの方が俺様にはもっとバカげた話だ。」

「何だと!」

そんな戒の言いように一瞬にして切れ、つかみかかろうとするバーグをリジャンが笑顔でなだめる。

「こいつは、剣の腕は確かなんだが……」

横目で、パンくずを口から吹き出しながら語る。

「気が短いために、ことあるごとにギルドと喧嘩しやがる。」

そして、つい半年前、中王都市のギルドで暴れた拳闘、協会から永久追放を食らったのさ。

まったく…俺がバカなら、こいつはバカの上に『超』が付く。」

「…んだと、このデブ。」

バーグが据わった目つきで言い放った。

「お、悪口か。」

昔からお前はそうだ。理屈で敵わないとそういう汚い言葉で…」

下から見上げるように睨み付けて対抗するリジャン。

「仲がいいんだ…二人とも。」

そんな彼らのやりとりを眺めながら、世羅が呟いた。

バーグとリジャンは動きを止め、照れくさそうに彼女の方を同時に見る。

「ボクもこれから先…仲良くできる友達できればいいな…」。

「おいおい！」

微笑みながら勝手に喋る世羅に、思わずバーグが叫ぶ。

「俺達は友達だなんて青臭いもんじゃねえぞ！」

「そうだな…お友達よりも、もっと泥臭え。」

……まあ戦友ってどこか。」

リジヤンは目を閉じてワインの最後の一滴を口に運んだ。

「……『アルドの反乱』を知ってるか？」

そして、二人の若者に問う。

「……どこかで聞いたことあるけど……」

ぶんぶんと頭を左右に振る世羅。

「馬鹿にするなよ、受験生を。」

代わりに、戒が口を開く。

「……50年も続いた有名な戦争だろ。歴史の教科書に載ってるぜ。」

その言葉に、リジヤンとバーグは複雑な表情を浮かべた。

「その戦争の後期だ……俺達と一緒に戦ったのは。」

「ああ、あの時の仲間の絆が^{きずな}一番強かった。」

懐かしむように二人は言った。

「あれは本当に酷い戦いだっとな。
もう、あれから20年くらい経つか。」

「20年！」

世羅が叫ぶ。

「ボクの歳よりも、ぜんぜん多いよ。
それでもずっと仲良し……。それが戦友なの？」

リジャンとバークは、少女の真っ直ぐな言葉に、同時に頭を掻いた。

「……そういうの羨ましいな……。」

「……どこがだ？ 20年も仲がいいなんて暑苦しいにもほどがあるぜ。」

戒が言う。

「一人で旅をしてみてわかったんだ……。
みんなでいる方が……。うんと楽しい。」

世羅が上目づかいで、戒に言った。

「ボクも…そういう仲間がたくさん出来たらいいな…」

「何言つてやがる。」

バーグが笑う。

「俺達あ、もう戦友じゃないか。」

リジャンはくわえた煙草に勢いよく火を点けた。

「歴史の教科書だってよ。」

もうあれは過去の出来事ことなんだろうかなあ？。」

「俺にはつい最近のように思い出せるがな。」

バーグは目の前に置いたランタンの火に顔を近付けながら言った。

リジャンは固い表情で、細く交差して巻いた頭のターバンの位置を直す。

「……リジャン…おまえ…」

もう十年以上も同じモン、巻き方もわからねえまま巻いて。」

「ん…？……ああ。」

俺があの時、得た勲章はこれだけさ。

俺が戦地を離れる間に現地の子供がくれた……これは民族衣装かな……。」

胡坐あぐらをかき、天井を見上げる。

「あの子は笑って俺に渡しやがったんだ。

ただ戦いが終わったこと、もう血が流れないことを喜んでいた…

…。

自分が『負けた側』ってことも理解出来ず…これから訪れる圧制も知らず。

……そんな哀れな子供だ。」

思い浮かべる、子供の笑顔。

それは どこか寂しく見える。

「悲劇は…もう御免だ。」

子供には明るい未来だけがあればいい。」

「そうは言っけどよ…リジャン。」

あの頃の戦友は皆…そうやって気負って死に急ぐ。

皆、なんかわけのわからねえ使命感で世界を変えようとしやがる。」

いつになく真剣なバーグの言葉に、リジャンは黙って耳をかたむけた。

「その考えは……本当に正解なのか？

俺達はその時、充分尽くした。

そろそろ自分の余生を考えてもいいだろう？」

「……いいのさ。

俺には家族も……何も無い。」

「……何も無いなんて……言うな。」

バーグは睡魔に抵抗しながら呟いた。

「……すまん。」

リジャンが静かに答える。

酔ったバーグは既に眠っていた。

次へ

静まるブリッジ。

ワインの空瓶を枕に 大いびきをかくバーク。
それから距離を置き、戒の傍らで一言も発さずに寝息をたてる世
羅。

「……ようやく寝やがったぜ。」

『戦友』だと？ ……まったく、あんな言葉くらいで興奮しやが
って……。」

戒が渋い表情でリジャンに近付く。

「悪いな。」

見た目より嬢ちゃんは疲れているんだ。
休んでもらわんとな。」

「……それは分かるが、なんで俺様が子守みたいな真似をしなくち
やならねえんだ。」

「嬢ちゃんは、兄ちゃんといるのが一番安心できるようだからなあ。」

「

「……………」

無表情のまま、リジャンの横にどっかりと座りこむ戒。

「腹は…まだ痛むか？」

「もう慣れた。どんな痛みにもな。」

「……悪いな。」

「生き残るには、あんたの知識と戦力が必要だと思ったからやったんだ。」

「あんたが謝る必要なんてねえ。」

二人は静かな口調で話した。

「痛みを移し変えることで、傷が治る……………」

「考えようによっちゃ、恐ろしい能力だ。自分自身にとって…な。」

「

「？」

「傷は大した事なくても、痛みのショックで死ぬ奴もいる。」

「戦場では、そんな奴がごまんといた。」

「治してもらった俺が言うのもなんだがな、その力を使う時は気を

つけた方がいい。」

「……わかってる。俺様はそんな馬鹿じゃない。」

「しかし、兄ちゃんが一人いれば、仲間の安全は高まる。

どこへ行つても重宝されるだろう。

…しかし天命人つてのは皆、そんな凄い能力を持っているのかい？」

「さあな。

この世に天命の輪は800しかないんだ。他の天命人になんて会ったことねえよ。」

その言葉で、リジャンは戒の横顔を注視した。

「天命の輪について、詳しいんだな。」

「俺様の婆おばあが占い師をやってる。

今は会う機会も無えが、小さい頃は色々と自分のことを教えてもらった。」

苦々しい顔つきで、戒は続けた。

「天命の輪を持つ者が死んだ時、それと同じ天命の輪を持つ者が何処かで生まれる。

天命の輪は永遠に巡り、その継承した者に同じ「さだめ」を与え

るんだと。」

（決して、それからは逃げられぬよ……。）

祖母は いつも不気味な笑いを浮かべて言った。

。「俺様のさだめは……」常に自らを犠牲にし、犠牲も多く生み出す」
その天命の輪の名を『犠牲の月獣』という。」

（難儀だねえ……坊や。
これからは強い心をお持ち。）

遠い、幼い頃の記憶だというのに忘れることは無かった。

「ふざけるなってことだ。」

その脳離にこびりついた、しわがれた言葉を振り払うように言う。

「俺様は、こんな輪っかに振り回されて生きるのは御免だ。」

戒の右手中指に浮かんだ青白い輪。
それに合わせて、彼の瞳も鋭く光る。

「俺様の人生は、俺様のものだ。」

生き方は俺様が決める。」

「なるほど。」

だからあの時、俺と世羅に対して怒ったんだな。」

リジャンは深く息をつきながら言った。

「自分のせいで、誰かが傷付くのは嫌か。」

「そついうんじゃねえ。」

何かに捉われる……昔からそついうのが気にいらねえだけだ。」

「……だがな、気にすればするほど、その『迷信』とやらに振り回されちまうぞ。」

「……………」

「何をしようにも、何が起ころうとも、自分の天命の輪の仕業じゃねえかと思いきんじまう。」

そつじゃねえのか？」

図星に、難しい表情を浮かべて黙り込む戒。

そんな彼に、リジャンは足を崩して微笑みかけた。

「そもそも……この世には何で、天命の輪なんてものが在るんだろうな？」

「……そんなこと知るか。」

「そうだな。」

場所に拘こどわつてしまえば、この世で一人の人間が知ることなんて限られている。」

戒は自分の肩に、大きくて温かな手の平を感じた。

「……今、お前さんに本当に必要なことは、旅をすることももしれんぞ。」

人が一人で得ることが出来る知識も経験も……たかがしれてるんだ。旅をすればそれがよくわかる。」

その言葉で、戒がリジャンへと顔を向けることはなかった。

「俺様は……中王都市でやることを決めてるんだ……。」

「まあ、いいさ。」

結論を急がずとも 兄ちゃんは若い。

……でも一緒にいるうちは、お前も力になってやれよ。なあバー

グ？」

「……？」

床にだらしなく転がっているバークを見る戒。

「おい…まさか起きてんじゃ…」

そこで、バーグはわざとらしく寝返りをうつた。

「ヒゲ、てめえ、起きてるだろ!？」

「……おきてねえよ…」

寝言のよつに、もぐもぐと呟く彼。

「起きてんじゃねえか!！」

「……………」

背を向けたまま、動かなくなるバーグ。

「まあまあ、兄ちゃんも、もう寝な。

休める時に休まねえと…身がもたねえ。」

「…ち……………」

釈然としない様子で 戒はリジャンの傍から離れると、バーグを避けてより遠くで横になる。

眠りに落ちるまで。

冷たい床からは、エンジンの大きな振動がいつまでも感じられた。

「出撃？」

「マクスが、か？」

ミシュレイの薄い胸倉に掴みかかり、猛烈な剣幕で訊くデチャード。

「何故……その時に俺を起こさなかった!？」

「起こそうとしたのに起きなかったのは貴方でしょう？
大いびきで、ぐっすりでしたよ？」

少年に冷静に反論され、彼は赤面して手を離れた。

「当初の予定とは……大分違うぞ……。」

「セルゲドニの飛翔艦が敗れることはまだしも、まさか奪われるとは……僕だって予想しませんでしたよ。」

騎士団がこの件に一枚噛んでいることが軍に洩れるのはまずい。
だから、マクスに殲滅を命じた。
そうつわけですよ。」

平然と語るミシュレイ。

「騎士団に…マクスに、これ以上罪を背負わせるわけか……。」

「……罪？」

少年がヂチャードを小馬鹿にしたような目つきで見る。

「喜んで背負ったらどうです？」

中王騎士団は国の為…そして民の為に在る。
小を捨てて大を取る。

これが国政というもの。違いますか？」

「…間違いじゃあない。」

ヂチャードは語気を強めて答えた。

「…だが正しくも、ない。」

そして目線を伏せ、首を左右に大きく振る。

「何故、マクスなんだ？」

あいつは…あいつの機体は奴等に面識がある。 万が一……」

「聖騎士さまがそんなミスを犯すはず無いじゃないですか。

全滅させますよ、間違いなく。

それこそネズミ一匹残さず、ね。」

若い哄笑。

（私は利用されているのかもしれん　　）

その無邪気な笑い声が室内に響く中、デチャードはマクスの危惧^{きぐ}を理解した。

「よお、探検の収穫はあったか？」

「ああ。」

満面の笑顔でブリッジに戻ったりジャンが、箱を二つ胸ポケットから出しながら、見張り役を交代していたバーグに答えた。

「お前が好きそうな刃物は無かったが…」

それを開けると、中から拳銃の弾が出てくる。

「助かったぜ。　高いからな火薬は。」

「ご苦労なこった……。」

これならタダなのによ。 努力と精進を怠らなけりやあな。」

剣を煌^{きり}かせるバーク。

そんな中、窓の外で空の景色が白み始める。

空賊の飛翔艦で一夜を過ごすようなことになるとは思わなかったが、極限の状態に慣れている二人は、すぐにその状況を自分の庭で遊ぶかのように楽しんでいた。

近付くルベランセとの距離。

空で生きる者の勘で、この奇妙な空の旅が終わりに近付いているのが判ると、不思議と感傷的になる。

「…それと、ここの団員を使って、俺が乗ってきた戦闘騎を格納庫へ移動させた。」

突っ込んだお前の戦闘騎も一緒に、弾薬の補充も兼ねてメンテナンスさせている。」

「……賊を使って？ 良くそんな危険な真似が出来るな……。」

「なに、人間同士だ。」

今回は何もお互いが憎くて戦ったわけじゃない。信用してやれば信用してくれるさ。」

「ホント、お前は人がいいんだからよ……。」

バークは肩をすくめた。

リジャンは弾を銃に込め、真剣な眼差しでそんな彼を見る。

「バーグ。」

……俺はあの若者達の助けになりたい。」

「……もう何も言わねえよ。勝手にしな。」

半分呆れ顔で、しかし妙に納得した表情でバーグは言った。

「中王都市までは、俺も手伝ってやる。」

「中王都市……以降はどうだ？」

「どうということだ？」

大口を開けて訊くバーグに、ただ笑顔で返すリジャン。

それだけで、彼が何を言わんとしているのかバーグは理解する。

「……おせっかい過ぎるぜ。お前はよ。」

「性分だ。」

仕方あるまい……？」

それまで黙々と作業していた団員達がざわついた。

咄嗟に、銃の激鉄を起こすリジャン

「どうした？」

さらにブリッジの面々に対し、銃口を向けて構える。

「妙な真似……するなよ。」

バークも剣の切っ先を向けて言う。

団員達は首を素早く左右に振った。

「違う。」

何か……一瞬感じたんだが……。」

その中の一人が、念通球を片手に不思議そうに呟く。

「なんだと!？」

リジャンは窓際へ走り、突風で震える分厚いガラスに顔を押し付ける。

一時期晴れ渡っていた夜空は一転。

飛翔艦は後部から中ほどまで、いつのまにか霧のように薄い雲に覆われていた。

「天候が……これじゃ探知なんて……!!」

「おい！ リジャン！！」

バーグも背後から叫び、奥の空を指差す。

続いて口笛のような高音と共に、斜めに飛んでくる数本の棒状の物体。

「……………！」

それが焼夷弾であることが判っているながら、リジャンにはもはや何も行動できなかった。

衝撃の波。

ブリッジが大きく傾き、甲板で投降中の戦闘騎達^{かたむ}が爆風で散る。

「頂部装甲、および左翼に被弾！！」

続く、一人の団員の叫び。

「……………！？」

さらに耳鳴りのような、深遠からの銃撃音をリジャンの耳は捉えた。

「どこか……攻撃されているぞ!!」

その瞬間、視界の真下から垂直へ昇る機影。

「まさか　　!?!」

がくん、と高度が下がる。

「艦底において……動力部損傷……!!」

さらなる団員の一言に、ブリッジ全体に動揺が走る。

「探知は何をやってたんだ!?!」

「それが……急に現れたみたいで……」

団員を叱りとばすバークを、リジャンが抑える。

「雲が多い時は索敵が困難だ……」。

…敵さん、天候が悪くなるのを待っていたみたいだぜ……」。

早くも自分が恐れていたことが起きたことに唇を噛む。

「一体、どこの戦闘騎だ!？」

団員達は一様にうろたえている。

それは、炎団が失敗した時の一つの『保険』を意味していた。

そして、一瞬の稲妻のような激しい攻撃。

それが戦闘騎によるものであることが、わずかに聞こえる風切り音で分かる。

(全てを処分しに来やがった……たった一機で！)

リジャンが銃を下ろす。

炎を巻き込んだ風はブリッジの視界を遮り、皆を萎縮させ。
初撃で破壊された戦闘騎の破片は、恐怖を煽^{あお}った。

「…総員、待避だ。」

この艦は持たない。」

リジャンが歯を食いしばって、抑揚の無い声で呟いた。

「おまえ…そんな簡単に…」

状況を認めたくないバークが半笑いで言う。

「俺らが突入した際に無茶したからな。

艦体のバランスがすこぶる悪い。このままじゃ不時着出来ん。」

リジャンの的確な言葉に、ついにバーグは飛び上がった。

「ど、ど、どど、どうすんだ!？」

「とりあえず落ち着け。

いったん浮力のついた飛翔艦は そんなにすぐには墜落しない。
数分もてば脱出くらいはできる。

とにかく…子供達を連れて行ってくれ。」

騒がしい周りの状況に違和感を感じつつも、疲労から目覚めることが出来ないでいる戒と世羅を親指で差す。

「わ…わかった…!」

バーグは頷くと、素早く二人の足を片方ずつ持って走ろうとする。

「慌てるな!

そのまま行けば、二人ともコブだらけになるぞ…!」

リジャンのその言葉に彼は再び頷き、今度は世羅を肩に上げ、戒の腕を抱えた。

「我々はどうすればいい!？」

団員が叫ぶ。

「伝える。全員逃げろ、と。

このままじゃ犬死にする。

…外の戦闘騎も全部だ。」

リジャンの命令に、団員は狼狽した。

「……いいのか!？」

「こんな事態だ。とにかく逃げろ!」

「わかった……!!」

声通管を手取る団員。

「総員に告ぐ。

ただちに待避……」

彼は繰り返した。

「ただちに待避、総員脱出せよ!!」

次へ

3

「襲撃されたって…!？」
…一体どうなってやがる!!」

崩れかかった廊下を全力で疾走しながら、戒が怒りの口調で他の三人に言った。

勿論、前を走る彼等に答える暇は無い。

「俺様には、おとなしく眠る暇も与えてくれねえのかよ!!」

安眠を邪魔されて不機嫌なのか、わめき続ける彼にリジャンだけが少し振り向いた。

「……兄ちゃん、愚痴は帰ってからゆっくり聞いてやる。
今は脱出のことを考えてくれ。でないと本当に死ぬぞ。」

冗談を交えないその瞳に、すぐに戒は無言になる。

「今度は逆！」

世羅が言った。

「ああ、その通りだ！ 入るのにあれだけ苦労したのに……今度は出るのに苦労しなきゃならんとはな！！」

バーグが崩れた壁を大きくジャンプしてかわす。

「……道順は……合ってるのかよ！？」

「ああ！ この先の格納庫だ！！」

戒の問いに再びリジャンが答え、走る廊下奥の急カーブを四人は一丸となって曲がった。

そして抜け出たのは天井の高い、ひらけた区画。
そこに彼らの戦闘騎は在った。

発進口は全開で外気を吸い込んでおり、その他の炎団の戦闘騎は

全て脱出を終えたようであった。

リジャンは真っ先に機体に駆け寄ると計器などを簡単にチェックした後、すぐに操縦席に乗り込む。

世羅もその後ろに続いて座った。

バーグは自分の機体に入る前に、いつものように剣を座るシートの脇に置く。

「どうした兄ちゃん!？」

エンジンを吹かしながら叫ぶリジャン。

バーグと世羅も、その声の行き先を注目する。

戒は格納庫の入り口で、首を垂らしたまま止まっていたのだ。

モーター、エンジンの音。

空気の振動で微量に揺れる区画内。

ルベランセで既に知った感覚なのに、何故か今は印象が違って思える。

（何だ？ 何も意識してねえのに……。）

右手の熱さに驚いて見ると、中指に天命の輪が浮かんでいた。

そこで彼の周りの光景は色を失い。

足元の床は柔らかく盛り上がり、命が躍動するような蠢く物体が伸びだした。

その物体の表面は常に流動しており、周囲が色を失っているのに
も関わらず、唯一 七色に輝いている。

戒は自分の奥に染みた邂逅の憶えに、全身の動きを止めた。

「…守れ……戒〃セバンシュルド……」

頭に直接響く声と共に、柔らかい『それ』は床から伸びたまま
自分の目の高さまで上がり、大きな腕の形を作る。

さらに自分の眼前に近付いて来る。

だが

「……だめ……もう…関わらないで…」

……繋がりだした天命の輪に…巻き込まれて…しまう……」

響く声にかぶさるように聴こえる もう一つの優しげな声。

その声に合わせて、戒の顔に近付いた腕は飛散。

突如、中から生身の子供の小さな手がその中から現れる。

「……!!」

あまりの恐怖。

咄嗟に両手を前へ突き出す必死の戒。

だが、そこにあるのは虚空のみだった。

「……何やってんだ、クソガキ！
置いてくぞ!!」

バーグの叫びが聞こえる。

飛翔艦が崩壊の序曲を奏で始める中、戒は呑気に立ち尽くしたままの自分に気付いた。

先と何も変わらない艦内の光景。

敏感で、妙に浮わついた感覚を引きずりながら、うつろな目でバーグとその機体を眺める。

「……どうした？」

リジャンと世羅が、彼の様子に注目する。

その視線に戒も気付き、二人を見た。

世羅の不安げな視線が自分に突き刺さるのがよくわかる。

「……世羅……」

「……戒？」

戒はバーグの機体から踵きんすを返すと、リジャンの機体に近付き、世羅に寄った。

「……俺は……世羅を……守らねえと……」

そして戒は片手で頭を押さえ込んだまま、自分でも思いも寄らぬ言葉を口にした。

「？」

急な、脈絡も無い彼の言葉に、リジャンと世羅は怪訝な顔をする。

（いや……世羅は……『手がかり』なだけだ。

俺の……やるべきことの唯一の……な。

ただ……それだけだ。

……それだけなんだ……。）

そこで戒は混乱した思考にいったん区切りをつけると、世羅の後ろに乗り込む。

そしてすぐに、窮屈になった操縦席の中からバーグの方を向いた。

「俺様はこっちに乗せてもらう。」

そつちに乗ったら、命がいくつあっても足りやしねえからな!!」

世羅の背を押し込み、狭い操縦席を詰めながら自分勝手に言う彼。

「な、なんだと……!!」

操縦席へと登りつつ怒鳴り返すが、足を滑らせて一瞬ずり落ちるバグ。

「……違いねえや。」

それを見たりジャンは苦笑しながらゴーグルをかけた。

髪が一本一本、夜の湿った空気を感じていた。

赤い戦闘騎群に照準を次々と合わせ、引き金を引く。

発射される弾に吸い寄せられるよう、次々と命中する敵機。

回避も攻撃も機械的に。

感情を乗せずとも、戦える。

自分に空戦の才能があると思うほど自惚れは無い。

だが、自分が放つ一弾一弾がこつもあつさり人の命を奪う事実
は、時に恐ろしく思える。

素早く流れる目下で、黒煙を上げる賊の飛翔艦。

ルベランセ自身、そして その格納庫には戦力と呼べるものは見当たらなかった。

それで二つの飛翔艦を破った方法など見当もつかないが、もはや彼等を侮ることなど愚の骨頂だろう。

マクスは自分が被る、兜を締め直した。

後頭部が流れるような長い曲線のフォルムの銀の兜は、特注品中の特注品。

クレイン教団史上、初の戦闘騎乗りの聖騎士。

乱空において聖都および教団を救ったものへの報酬。それは、名誉・名声と純銀の鎧一式だった。

そして失ったものは……自由。

一筋の風が兜の目に当たる穴から入り込み、頬を撫で、首へと通り抜けた。

瞳を閉じ、全身の鎧から感じる拘束感で奮い立たせる想い。

（この罪はいずれ御前で払おう。 神よ…今は我に力を。）

マクスが胸で十字を切ると同時に、下の飛翔艦から飛び出す二機の戦闘騎。

視界の先で地平線から紅い光が射し始める。

……夜が明け始めていた。

空へ飛び出した途端、そこには広がっていたのは悪夢。

自分達を苦しめた『炎の矢』と称される炎団の戦闘騎達。その全てが火を吹いて堕ちていく光景。

白みがかかっているはずの空は、その煙で真っ黒に染まっていた。

「あいつら……逃げろと言ったのに……！」

リジャンが首にきつく締めたタイで口元を覆う。

直後、目の前の天空を二つに割るように垂直に駆け上る機体。

「……一矢報いたいのもわかるがな……。
あれに近付くのは……きつと雷に触れるようなもんだぜ……!!」

鼓膜をつんざく、空気を斬る音。

高速で回転しながら上空の雲に突き入る銀の影。

「……あれって……」

「……確か……あいつは……」

後部座席で呟く二人。

「信じたくないがな……俺にも見覚えがある！」

リジャンも顔を歪ませた。

次第に強くなる風。

軽い、霧のような雲が、堕ち始める飛翔艦の周りと自分達を完全に包みこむ。

「……聖騎士……!!」

世羅と戒は同時に叫んだ。

「……誰か……今あれに乗っている奴の顔を見たか!？」

「うつん！早すぎて……！！」

リジャンの問いに、世羅が答える。

「すると、断言するのは まだ早いが……騎士団がこの件に絡んで
いるってことか……」。

厄介な事になってきやがったな！

「……ど、どうする！？」

すぐ横を並列して飛行するバーグが訊いた。

「お前が敵う相手じゃない。

俺が奴をひきつける……その間、隙を見て何とか逃げろ。」

「何とかって……言っただってよお！！」

バーグの機体が揺れ始める。

「泣きごと言っくんじゃねえ！！」

「！！！！」

弱気な彼を集中させる為、リジャンが檄^{げき}を飛ばす。

「空も地上の戦場と同じだ!!」

指の先まで意識を集中し、目を動かし、そして耳をかたむける！
……空を恐れるな!!」

「……ああ。…わかった。」

強い言葉で我に返るバーク。

そんな彼の様子を確認したりジャンは、操縦席で深い体勢になると乾いた唇を舌でなめずった。

周囲は瞬く間に、薄雲で視界を奪われている。

今、敵機はその中に潜んだ。

だが、見えなくとも、『音』までは消せはしない。

こちらは自分とバーク。

そして、相手は一機しかないのだ。

乱戦でない、この静かな状況。

戦闘騎の飛行を耳で判断出来るため、奇襲は不可能。

今、味方と自機のエンジン音しか聞こえないということは、敵も近くにはいないはずである。

(どうする…？ 今のうちにバークだけ逃がすか……？)

リジャンは、飛ぶだけでやっとの様子のバーグの機体と 現在の空の状況を交互に見る。

その時、バーグの機体の脇の白い雲に灰色の影。

彼の戦闘騎の影が映りこんだのだろうか。

そんな様子をリジャンが注意深く見守る中、バーグはそれに全く気付くことなく真正面だけを向いていた。

雲は わずかに盛り上がり、光る先端が覗く。

「バー………!!」

異常に気付き、リジャンが叫びかけたところで完全に飛散する雲。バーグの機体の脇腹を突くように現れた銀の戦闘騎。

（そんなバカな…。 無音だと………!!?）

反射的に操縦桿を倒すリジャン。

バーグの機体に自機で体当たりをかける。

「ぐうつ!?!」

その突然の衝撃に、バーグは悶絶した。

銀の戦闘騎から放たれた銃弾はリジャンの戦闘騎をかすめ、狙った『バーグ本人』からも逸^それる。

だが、それによりバーグの戦闘騎はバランスを崩し、もともと不安定だった飛行は更に角度を悪化させた。

「バーグ！」

その光景に、世羅と戒が思わず息を飲み込む。

「体勢を立て直せ！！
不時着の仕方、一番初めに教えただろう！！」

届くか届かないか。
リジャンはありったけの大声で、堕ちゆくバーグに叫んだ。

それに応えるように、地面に対して垂直に近かった彼の機体が、平行へと変わる。

「……よし。あれなら助かる。」

機体の損傷自体は甚大ではない。

同時に火も上がっていないことも確認したリジャンは安堵する。

しかし、上空を反転する銀の戦闘騎。

それは冷徹にも、再びバーグに狙いをつけているのが判る。

「 させるかよー!! 」

一直線に下降し、友にとどめを刺そうとする憎き敵に、リジャンはすかさず機銃を放ちながら横から突撃する。

銀の戦闘騎はそこで軌道を変え、再び脇の濃い雲の中へと潜り込む。

「野郎……!! 」

リジャンは、相手が先にあれだけ派手に風を切っていたのが伏線であることを悟る。

どのようなカラクリがあるのかは解らないが、向こうの動力は音が発生しないのだ。

『 敵戦闘騎が全くの無音で雲の中から現れる。 』

一方的に音を出し続けるのは自分達の機体だけ。

…周囲を雲に覆われた この状況下では圧倒的に不利だった。

「その戦法、嫌いだぜ。 コソコソとよ……!! 」

誘い出すため、敵が消えた雲に向かって機銃を乱射する。

しかし、相手の動きはまるでない。

潜んで狩りをするが如く、全くの隙も気配も見せない相手の戦い方に戦慄を覚える。

その間に、バーグの戦闘騎は眼下の密林に消えた。
爆発は無い。

しっかりとそれを見届けてから、リジャンは覚悟した。

「さあて……どう戦う!？」

今度は自分の機体を雲めがけて加速させるリジャン。

そこで下方の雲から飛び出す機影。

「……そこか!！」

下から放たれる銃弾。

すかさず、トンボ返りでリジャンはそれをかわす。

そして二機はそのままお互いの機体の腹を見せ合いながら、数秒
並行して空を翔た。

そんな状況でも、銀の戦闘騎は雲の隙のポジションを上手に守る。

「……こっちは入らせてくれないってか!!」

上下の歯を強く咬み合わせて、悔しさのあまり、叫び声を吐くりジャン。

回頭、Uターン。

何とか態勢を入れかえようとすると、相手は必ず動きの出始めに狙いをつけて銃撃を開始してくる。

「なんて腕だ……！」

この俺が……まるきりペースを掴めないなんてよ!!」

冷たい汗が背中を伝った。

今戦っている相手は腕も確かである。

『戦法』を使うのは、単なる『用心』であり。

それが余計に相手の冷静さを物語り、リジャンをより強く緊張させた。

「戦闘騎の性能も腕も……向こうが上……。
どうすれば……！」

「おい、オッサン!!」

そんな時、後ろから戒が大声を上げた。

「てめーは、大事な命を二つも背負ってんだぞ!！」

そして、彼は世羅の首に腕を絡めた。

「なんとかしろ!！」

後ろを見ると、冷えた空気で顔を紅潮させながらも、絶望していない二人の姿。

「……はは!！」

リジャンは笑った。

無茶を言う。

だが、その言葉で先までの弱気は吹き飛んだ。

（こうなったら……意地でも雲を利用してやろうじゃねえか……。）

相手の機体の動きを注目しながら全天を見回す。

（確か……さっきまで俺らがいた所は……）

戦闘の時間と進んだ距離の計算。

ほとんど視界のきかない恐ろしい天空で、驚くほど自分の頭は冷

静に働いた。

「こうなったら、読めない攻撃で裏をかく。
いいか？ 俺の作戦に乗ってくれ。二人の協力が必要だ。」

「……うん、わかった！」

元氣よく答える世羅。
戒も無言で頷いた。

軽い脳震盪のうしんとうが続くような、いつ気を失ってもおかしくない きわどい操縦だった。

自分よりも遥かに劣る機体で、自分と互角に戦う相手。
中王都市の軍隊にこれほどの操縦士がいたものかと心から敬服する。

そして、ときおり相手の機体から見える、修道着の男とリボンの少女。

…ルベランセで出会った、前途ある若者達。

言い訳にもならないが、それが機銃のトリガーに触れた指の反応をわずかに鈍らせる。

聖騎士マクス＝オルゼリアは、自分の被った銀の兜をこれほど窮屈に感じたことは無かった。

何度も繰り返し、敵機を追うように空を駆け抜ける。

鳥も、空気も。

近づけないような限界の速度の中。

相手は急にスピードを落とし、視界からも消えた。

「いつけえええ！《源・衝》フェル・ド！！」

そして次の瞬間、少女の声とまばゆい光を背に感じるマクス。

（！？）

遅れる機体の操縦。

間一髪、自分へと向かって放たれた大きな光球をかわす。

「やはりな……空中で源法術ってのは、滅多に経験が無かるうよ！」

聞こえる、その反応のわずかな差を見逃さなかった相手の歓喜の叫び。

続けて、脇の雲からの銃撃。

（いつの間に！？）

照準を逸らすため、マクスはそのまま上昇する。

それに対し、真っ直ぐに雲を突き抜けて追う、加速のついたリジヤンの機体。

そして、二機が交差する瞬間。

戒に抱かれ、戦闘騎から半身を乗り出した世羅が唱えた。

「《氷・生》。チス・キ」

広い空間に放たれた、軌道の予測が出来ない氷柱ひしじがマクスを追いかける。

（ でかい！！ ）

雲を裂き、千切りながら、尖った氷は自分の真下の視界を全て覆うように突っ込んでくる。

すぐに追いつかれる。

事態を見越したマクスは反転をかけた。

それこそ大きさは自分の機体くらいある、縦横無尽に広がる氷の
槍。

その中の数本が一直線に自分に向かう。

(……だが!!)

冷静に機関銃で一本一本砕く。

その中で砕ききれない一本が伸びる。

なんてことはない。

あとは最低限の動きでかわすだけだ。

心に少し余裕が生まれた、その刹那。

それに『氣をとられ』、気付かなかったのか。
それとも、『その空域』まで誘い込まれたのか。

マクスは背後の雲から熱い空気を感じた時、ようやく自分の立場
に気付いた。

遠くの視界に流れるリジャンの笑い顔。

瞬間、理解する。

二つとも、眼前の敵の思惑通りだったこと。

迫り来るのは。

よりにもよって、自分が墮とした

炎団の飛翔艦

。

火を噴き、破片を散らばせながら、雲を突き抜けてきた怪物は、その圧倒的な質量で自分を押し潰そうとする。

前方に氷の槍。

後方に墮ちる飛翔艦。

回避不能。

彼が、銀の右の手甲ガントレットを外す。

露あらわになった、手首から肘に不気味に広がる紋様。

銀色の、細かい長方形が連なった紋様。

瞬時に操縦席を大きく開け放ち、操縦桿を左手で握り、その右手で腰の剣を抜く。

氷が着弾する瞬間、渾身の力で操縦桿を引き、機体を垂直の姿勢で固定した。

重力と推進が相殺し合い、一瞬、機体は落下も上昇もせず、その場、天空で回転する。

「……………こおおおおお！！！」

回る夜空。

絶叫と共にペダルを踏みこみ、源炉を唸らせる。

目一杯腕を伸ばして構えた彼の刃は。

水に入る如く、飛翔艦の鋼鉄の外壁に、柔らかく吸い込まれていった。

白い濃厚な蒸気に包まれる三人。

遅れて到着した爆風にあおられ、機体はその空域から勢いよく飛び出した。

かろうじて後方に見えるのは、広がって舞い散る雲。

氷と鉄の欠片^{かけら}。

何も聞こえない時間^{とき}が数秒。

やがてリジャンは、疲労感でうつむきながらも機体を操作し、青く広がった空のキャンバスに、両翼で白い雲を引いた。

「くつくつく…ははっ、ザマーみやがれ!!」

そして、興奮を抑えながらゴーグルを上げる。

「うまく…いったか…!」

冷や汗を全身にかきながら、戒が呟く。
その胸で世羅が動いた。

「……リジャンの…おかげだね…。」

顔に当たる、上空のひんやりとした独特の空気が心地良い。

そこで、余韻も程々に下降を始める機体。

「いや。俺一人じゃ、あの銀ピカを墮とすのは無理だったぜ。
……ありがとよ、二人とも。」

半分振り向きながら、微笑を浮かべるリジャン。

「特に嬢ちゃんは大したもんだ…。
その度胸と腕がありゃあ、いつかきつと立派な飛翔艦乗りになれる。」

「ほ、本当!？」

「ああ、俺が保証するよ。」

その言葉に、世羅は嬉しそうに大きく頷いた。

「さて…と、バーグのやつを回収しねえとな。
どの辺りにいやがるか…。」

薄暗い密林を眼下に、旋回する。

「大丈夫かな？」

「殺したって、死ぬもんかよ。あのだうなヒゲ野郎が。」

「……そうだな…」

世羅と戒の会話に答えようとした　その時。

背にした陽の光が、一瞬弱まった。

振り返るリジャン。

世羅と戒は全く気付いていない。

真っ直ぐ昇り、続けて自分に向かって急降下してくる影。
そして放たれる無数の小さな鉄の塊。

咄嗟、操縦桿を目一杯傾けて回避。

耳の傍をかすめた飛礫^{つばし}が自分の右肩に突き抜ける。
激痛。

間髪をいれず、上から降る風切り音。

世羅と戒は、リジャンの身から勢いよく噴き出した血で、初めて
異変に気付いた。

それは 笑顔すら消す間も無い瞬間の出来事だった。

落下する銀の影。

左右に揺れながら、避けにくい弾道を加えた射撃。
さらに確実に戦闘騎の急所を狙い撃つ。

自分を追い詰めた者への、一切の容赦の無い攻め。

空を駆る者からの気迫と殺意に、リジャンの視界が窄む^{すぼ}。

本能が逃げると言う。

しかし、その思いを砕くかのように、一つの銃弾が胸を貫いた。

「……………ああああ…ッ!!」

血にまみれた飛沫と全ての気合を喉から吐き出し、前屈みになりながら渾身の力で機体を傾けるリジャン。

だが、すでに彼の思った通りの回避の運動は出来なかった。

突然の豪雨に遭遇したみたいに、鉄弾を浴びること。
そんなことは、戦時中も経験したためしが無かった。

（何だ…？）

力強く握っているはずの操縦桿が全く動かない。

（……………。

ははっ……………右手が…無えや……………。）

ゆっくりと確認する、血に溢れた^{あふ}自分の操縦席。

自分の身体に感じる、精神と身体の離別感。

五感すら、もう信用できないのか。

残った左手が震える。

機体の部品が風に抵抗出来ず、吹き飛ばされ始め、右翼の半分がガタつく。

タンクに開いた穴から燃料が大量に噴き、リジャンの血液と共に世羅の顔や衣服に数滴付着した。

「……リジャンー!!」

ただただ、叫ぶ世羅。

「大丈夫……嬢ちゃん……」

「……なんとか……切り抜けてみせるから……」

「おいオッサン!

……何がどうなってる……!?!」

戒は動転する瞳で忙しく周囲を見ながらも、状況を飲み込めないでいる。

右翼が、暴走した速度に飲み込まれて吹き飛んだ。

無心の眼差しで、相手の機体に照準を定めるマクス。

だが、満身創痍の敵機はやがて左右に揺らぎ、回転を始める。

その時点で彼は、機関銃の引き金から指をゆっくりと離れた。

「……せめて最期は…母なる大地に吊ってもらうのが良いか…。」

一度の敬礼。

先ほどまで墮ちていた飛翔艦だったもの。

それがその全てを銀の粉と変えて、風に舞っていく。

そして光を無限に反射する空を背景に、聖騎士は音も無く、この空域から姿を消した。

次へ

「ぐ…… オッサン！ どうなってやがる……！？」

落下と激しい回転によって発生した、全身を襲う重力に悶えながら叫ぶ戒。

「とにかく、この運転はやめ……」

「戒…… それ以上言わないで。」

そんな彼を、静かになだめる世羅。

前の操縦席の惨状を知らないため、覚悟を決められない戒には悪いが、説明する時間も無い。

回転する視界の中心に認められる密林の深緑。

このまま真っ直ぐに。

それへ向かって墮ちていくのが嫌に遅く感じられた。

「嬢ちゃん……」

唇を震わせながらリジャンが口を開く。

「リジャン…喋らなくて…いいよ。」

「敵は……？」

「？」

意味も解らず。

回転する機体の中で空を見上げる。

「もう……いないみたい。」

「そうか…。」

そうか……さすが…聖騎士……。

騎士道をわきまえている…。

死人に鞭は…打たないってか……。」

感覚の無い左手と両足。

もはや歯で操縦桿を引くしかなかった。

それまでの激しい運動は微妙な振動に変わり、半壊した機体が木々の頭ギリギリで態勢を立て直す。

「……リジャン……これを狙って……？」

「……………」

「リジャン？」

返事の返らない大きな背中を揺らす。

「なんとか…だませたが……」

…悪いな…二人とも……ここまで…だ…」

エンジンが一度大きく隆起し、火と黒煙を大きく噴き上げる。

残った左翼が大木に引っかかり、機体は逆さまのまま密林に飲み込まれた。

「まただ。」

今度はザイルの野郎だよ。」

木のテーブルに片肘を付いたまま、もう一方の手で封の破れた封筒を肩より上げて見せびらかす。

「あれまあ。」

この町で誰からも慕われる剣士さんも『それ』が来ると いつも飲んだくれだねえ。」

外の大通りから酒場を覗く中年の婦人から声をかけられる。

「ああ！ そうだよ！！

傭兵が戦場へ行く前に自分で書いて残す、自分の…戦死報告書。

……遺言だ…。

こんなのもらって……嬉しい奴いるか！！」

おどけながら彼女に応えると、視点の定まらない表情で先から幾度となく呟いている台詞を

独りで再び語りだす。

「…場所はマクエール内戦区だと。

バカが……。大陸でも随一の危険地帯だぞ…。」

アルコールの強い酒をラッパ飲みするが、悲しみは薄れなかった。

「どいつもこいつも……死に急ぎやがって…。」

酒瓶の底をテーブルに強く叩きつけても、もはや店内の誰ももはや相手にしない。

孤独感が徐々に自分を支配する。

「人間なんてよお……何でもかんでも出来るわけじゃねえだろお？
たった一つのよお…家族を守るだけで精一杯…それが人間だろお？
」

うつむき、だれた声を絞り出す。

「『アルドの反乱』を駆け抜けた奴あ、みんな何かを背負おうとしやがる。

大きな殺し合いは、別に俺らの責任じゃあねえんだ…それなのに
よ……。

あれ以来、何かこの世に償いをしたがる。

未来に対して何か残そうとしやがる…。

そのために簡単に無理しやがって…バカヤロ。」

腕の力を強くかけたテーブルが軋んだ。

「……畜生。

あの頃一緒に戦った仲間が残ったのは…これで…」

ふと窓の外へ脇目をふる。

黄色い土の通りを、砂塵を巻き上げて、とぼとぼ歩く影。

「……？」

見慣れた姿。

ボロボロの軍服姿でゆっくりと歩く。
リジャンがそこに居た。

片面のガラスが砕けたゴーグル。
すすけた顔。

「…おい」

わけもわからず驚き、声をかける瞬間。

「バーグさん。」

後ろから呼びかけられ、肩に触れられる。

すぐに振り向くと、真っ黒な服に身を包んだ郵便屋から、一通の封筒を渡された。

「『リジャン＝デベント様』からお預かりです。」

バーグはハッとして、窓の外を再び覗いた。

……そこには誰も居なかった。

鉄が軋む音。

まず感じたのは、けいつい頸椎の痛み。

全身も重い。

大木の巨大な蔓^{つる}に機体ごとぶら下がっている自分。

うな垂れた恰好のままで、バーグは自分が墜落したことを押し寄せる記憶と共に知る。

歪んだ操縦席の中。

バーグは痛む手の平を握り、力が入ることを確かめると、すぐに自分から地面へと転げ落ちた。

すぐに耳に聴こえる、得体の知れないもの鳴き声。

地面全体を覆う苔^{こけ}。

見慣れない巨大な木々と植物群。

見渡す限り、周りは濃い緑で出来ている。

バーグは、ここが人が住める土地でないことを悟った。

恐怖と、それでも生きていた奇跡に震えながら。

…だが、言い知れぬ予感で彼は走り出していた。

空に立ち昇る 黒い煙へと向かって。

戦闘騎の狭い操縦席のことを

よく棺桶と称する者がいたが

『完全に撃墜された場合は棺桶にもならない。』

流血と硝煙。

所々が碎け、溶解して。

もう自分の大きな身体を包むスペースなんて無いほどに縮んで小さくなつた操縦席。

そんな光景を不思議と冷静に、客観的に望む。

白くぼやけた部分が広がった視界。

小さな影が何かを必死に、こちらへ訴えかけていた。

「……ン！」

……ジャン！！」

音の無い世界に 徐々に聞こえてくる言葉。

かなり大声らしいが、遠い。

「リジャン！！」

やがて少女の声で はつきりと呼ばれた自分の名。

わずかに覚醒する意識があつた。

操縦席から真つ二つに折れ曲がつた戦闘騎に挟まれたまま、リジヤンは首だけをわずかに持ち上げた。

墜落の衝撃で外へ放り出され、水分を含んだ湿地に落ちている戒。

自分の傍かたわらの世羅も彼と一緒にだつたのだろう。

二人共、泥だらけだが、かすり傷程度で済んでいる。

……それが一番の安堵だつた。

「……オッサン!？」

世羅から遅れること十数秒。

立ち上がるが早いのか、戒もリジャンに駆け寄り、彼の肩に触れた。

「今……治して……」

「よしんだ……」

お前の能力は…身体を復元できるものではないだろう…？」

「！」

凶星に硬直する戒。

「体の…右半分が弾の直撃を食らって吹っ飛んだ…」

腰から先も…ぜんぶ機体に挟まれてる。

…さまあねえな。

ここで『終わり』なんてよ…」

リジャンの額から流れた血が、砕けたゴーグルのガラスを伝う。

「おい…なんだよ…これ。」

そんな彼の惨状を徐々に掴み始めた戒が、両手で自分の頭を強く押さえつけ、背を曲げて唇を噛んだ。

「…随分と不公平じゃねえか！

オッサンばかり…こんなに弾浴びて…機体にも身体を潰されて

…！！」

リジャンに噛み付いた大きな鉄クズに手をかけ、無理矢理引き剥がそうとする。

だが、逃がられない運命のように。

土に深くめり込んだ機体は、びくともしない。

「いい…さだめ…かもな。

お前達が無事だということが…。」

悟ったような表情とその言葉を聴いた瞬間、世羅の背筋が凍りついた。

「……いやだ！

やだよ！ リジャンー！！」

大きくて綺麗な瞳から溢れる大粒の涙。

「なんだい…らしくねえ……。 …嬢ちゃん…どうして泣く？」

「だって…悔しいから！

…ボク達…戦友になったばかりなのに…！！
終わりだなんて…終わりだなんて…！！！」

「…なあ…世羅…。」

リジャンは、彼女を初めて名前で呼んだ。

「この世には色々な奴がいてな…。

他人を利用する奴、信頼する奴、騙す奴。 色々いる…。」

血にまみれても、安らいだ顔だった。

「でも…他人を信じること……これが俺の生き方で……。
出会った時間が短かろうが…関係ない…。

それをずっと貫けたこと…全く後悔はないし……正解だったと思
える…。

何故なら…」

世羅と戒の顔を、目のみ動かして交互に見る。

「最期にお前たちという、『未来』に巡り会えたから……。」

二人の子供の頭を触れるため、手を差し伸べたかった。

だが、それはもはや叶わない。

「心残りは……なあにもしてやれなかったことだ…。

約束したのにな…。

飛翔艦のこと…たくさん教えてやるって……言っただのになあ…。」

世羅が首を強く左右に振りながら、リジャンの首に抱きつき、声
にならない声を上げる。

「蒼く澄んだ大空のように誇り高く。

己を育んだ大海と大地への感謝を忘れずに。
まばゆい陽の光に全身を照らされても恥ずかしくないように生きる。」

「……？」

「いま…教えられるのは…飛翔艦乗りの…心構えだけ…だ…。
すまん……。」

麻痺した全身からは何も感じなかった。

しかし、それが余計に恐ろしく、既に自分に時間が残されていないことを悟らせる。

「そして…戒……。」

お前は…怒るかもしれないが…。

俺はなあ…犠牲の心つてのは嫌いじゃねえ…。

そしてお前のために…犠牲になった奴がどれだけいたかはわからねえけど…。」

「……。」

足元もままならないまま、ゆっくりと近付いてくる戒。

「犠牲にしたって…いいじゃねえか。」

「……オッサン…だけど、俺は!!」

「聞け！ 戒……。」

戒がその声で背を伸ばし、リジヤンの顔をまともに見る。

「自分を責めるな……。」

それよりも……望んでお前の犠牲になっていった奴を少しでも愛してやってくれ……。

その瞬間から……そいつらの心は報われる。

犠牲じゃなくて……もっと価値のあるものになる……。」

「……！！」

戒は強く、瞼を閉じ合わせた。

「……二人共……笑ってくれないか……？」

最期に……心に焼き付けておきたい……。」

泣くことを止めることが出来るはずもなかった。

だが、応えようと必死に作る笑顔。

こぼ零れ続ける涙もいじらしく。

そして、そんな少女の顔の上に重なるのは、過去の幻影。

自分にその国の民族衣装をくれた少年の笑顔。

「…そうか……あの時の笑顔は……戦いの終わりを喜ぶとか…そういうんじゃないくて……」

長い間、疑問にしていたこと。

雲のように白く広がっていく視界の中で、彼は一つの答えを見つけた。

「ただ…純粹に……俺を讃^{たた}えてくれていたのかもな………」

それまで小刻みに動いていた、リジャンの眼球が止まった。

第六話 『愛すべき犠牲より
了』

It progresses to epilogue.....

第一章

エピソード

「注文の戦闘騎と弾薬の…帝都小団へ対する納品の件ですが。
……リ・オン様？」

黙々と蓄音機の修理をしながら報告を聞くスーツの男に、メイド
姿の女性が聞き返す。

「期日どおりに。」

館の一室。

男は作業を止めずに、ただ呟いた。

「承知いたしました。」

そして…先ほど不時着した軍艦の代表が面会を求めています。

「

「今日の午後にも会おうか。」

エンゼルエンデルハイム、それまで休め。

おまえも一週間も休まずに働かずめだ。」

「はい。」

無表情で丁寧に礼をする魔導人形を横目に、傍らの薄いカーテンを開ける彼。

「さて……。」

金の卵か。 災いの種か。」

外に望む 高き山脈。

そこへ斜めに着陸した一隻の飛翔艦。

艦体の腹は山肌を擦り、お互いを削っている。

中王都市軍のマーキングが施された飛翔艦。
剥がれた装甲の下は血のように赤い。

「祈るかね。」

大きな百合の花のような蓄音機は、やがてヴァイオリンの音色を奏で始める。

男は満足そうに唇端に微笑を歪ませた。

第一章
了

Thank you for having you read .
to be continued...

第二章 『天へ往くため地を駆けて』 プロローグ

A i r・F a n t a g i s t a
エア・ファンタジスタ

第二章

プロローグ

はじまりの神使が いなないた。
腐った大地は、これでまたよみがえる。

大聖典第四章 十節 『炎の海』

ふたつの業を背負うもの。
それは誰よりもはやく空を駆け、誰よりも多く矢を射った。

大聖典 第十八章 四節 『空の渦』

大陸の中心に穴が開く。
輪に巻き込まれ、彼等は落ちた。

大聖典 第十六章 八節 『魔窟』

竜は待つ。

己が動くべき時を。

大聖典 第一章 二十節 『飛竜』

「パンリさん、パンリさん！」

体格の良いおかみが、階段の上から叫ぶ。

下のバルコニーで呼び止められた、赤いロープを目深に被った少年は足を止めた。

「あんたのおかげで、ウチの子、今回のテストの点数、上がったんだよ。」

洗濯物を抱え、嬉々として降りてくるおかみ。

「ホント、悪いねエ。」

受験前だったのに、ウチの子の勉強の面倒まで見てもらって。」

「あ……いえ……。」

本試験まで、もう2週間切ってますから……もう今さら、勉強すること無いですし……。」

全然支障……ありませんから……。」

彼女の迫力に押され、弱々しく答える少年。

「さっすが、余裕だねえ……パンリさん。」

大学に入っても、たまに遊びにくるんだよ。」

換気のため、開け放たれる店の入り口。

そこから覗く、人の往来の絶えない中王都市の大学通り。

その様子を眩しそうに見詰め、少年はさらに深くローブを被った。

「あの……合格とか……まだ分からないですし……その……」

そんな彼の謙遜の言葉などおかまいなく、おかみはマイペースで、手にしたベッドのシーツのしわを伸ばしにかかる。

少年は肩をすくめて、バルコニーと繋がっている食堂に足を運んだ。

そして、毎日の日課。

奥に飾られた、お気に入り神の油絵を見る彼。

美しい女性の肢体でありながら、猫の顔を持ち、背に広げる蝶の
ような羽根。

右手には果実。

左手は……端に寄った構図上、描かれていない。

時間を忘れ、絵に見入る。

風が、薄地のカーテンをなびかせた。

テーブルに置いた厚い本の頁がめくれ、瓶に挿した花が泳ぐ。

少年は、自分が着たローブを強く握りしめた。

ここに、神は全て死んだに等しいことを記す。

この物語を記す機会が存在することと、読んでくれる貴方に感謝。
筆者

2 - 1 「覚悟の対峙」

This story is a thing written
by RYU

Air・Fantagista

Chapter 2

「It runs on ground to go to
the heaven」

The first story
of confrontation of preparedness
s'

人は強力な力を欲すると同時に、とても畏^{おそ}れる。

自分の考えに及ばないもの。
すぐわないもの。

そんなものを特に畏れる。

「なあ、俺達はきつと裁かれるぞ……。」

黒煙にまみれた天を見上げながら、リジャンは言った。

「裁かれる……って…何にだ？」

呆けた顔をして、訊くバーク。

「さあな。

俺にもわからん。」

「はあ？」

腰を折り曲げ、間拔けな声で問いかける彼に対し、リジャンは厚い唇を歪めた。

小便のように臭い、どろどろした汗で服を重くして、体中は泥だらけ。

血と脂肪にまみれた それぞれの武器を手に、目の前を動くものは小さな蟻^{アリ}であろうと必ず殺す。

そういう毎日を繰り返していたら、もう思考もままならないのは

当然だった。

…戦場にいる者は皆、そんな人間。

そして、そんな人間達が敵でもあり、味方でもあった。

大陸史上最大級の戦争、『アルドの叛乱』の終焉。

その時代、誰もがまともな考えなんて持ち合わせていなかったろう。

そのような状況下の中で『わずかな疑問』を持てたりジャンという人間は貴重な存在だったのかもしれない。

「だが…神か…何か。

この世に何か強い影響を与えることが出来るものが存在するといふのなら…この所業を黙って見過ごすものかよ。」

視線をゆつくりと地に下ろす彼。

全てが焼け落ち、焦土と化した一帯。

戦争を終わらせた…空を支配した飛翔艦という名の暴君は、あらゆる生物も緑も建築物も全て灰にした。

「人間は……お互いを殺し合い過ぎた。」

樹液が焦げた臭気でまともな息も出来ない中で
彼は呟いた。

「なあ、俺達はきつと裁かれるぞ……。」

エア・ファンタジスタ
A i r・F a n t a g i s t a

・

第二章

天へ往くため地を駆けて

・

第一話 『覚悟の対峙』

昔もこんな風に、戦場を駆け抜けていた。

緑一色になる、流れる視界。

頭部に当たる、大粒の水滴。
突然のスコール。

踏み込んだ、泥と化した地面が深く沈む。

茂みの中。

見上げれば、空の真ん中へと集中して伸びた木々。

木漏れ日すら届かない鬱蒼とした青の雰囲気は、人の感覚を全く寄せ付けない。

変わるはずもない、目の前の光景に思わず頭こぶしを垂らす。

一体、何分たつたろうか。

否、それは数時間だったかもしれないし、あるいはまだ数秒かもしれないかった。

感覚は薄れ。

疲労感が一気に押し寄せる。

再び視線を前へ戻すと。

友の機体の残骸は、まだ地中に潜ったまま立っていた。

思考はそこで無理矢理、止まって。
時間だけがむなしく過ぎ去っていった……。

「
ようはあ!!」

突然、たとえようの無い歓喜の大声が響く。

鳥でも獣の声でもない。

かろうじて人の言葉と認識できる声。

手近な岩に腰掛けて身を休ませていた戒は、反射的にその声の方へと顔を向けた。

身を汚した泥を洗い流すには丁度いいと、半分投げやりの気持ちで雨をそのまま浴びていた彼。

体温は奪われ、息は自然と白くなる。

「ずいぶんと悪運が強えじゃねえか！
お前等も！！」

大きな葉の隙間から見え隠れする長身。

足取り軽い人影は近づくにつれ、バグになった。

「見てくれよ！
墜落したつてのに、俺もかすり傷だぜ！！」

袖を捲り上げて、擦れて赤く腫れあがった自分の太い上腕を見せて笑う彼。

「いや……おまえらの方が……ひどいな。
……よく生きてたもんだ。」

苦笑しながら、地にほぼ垂直に突き刺さった戦闘騎の背を軽く叩く。

「……リジャンはどうした？」

笑顔のまま、泳いだ戒の視線の先を追う。

そこには少し距離を置いて、短い草が群生した茂みで小さく膝を抱える世羅。

向かい側に座る彼女は、バークの脇、戦闘騎の下部をずっと凝視していた。

勿論、バーク自身もずっと前から分かっていた。
それでも決して見ないのは、認めたくないため。

眼球だけ動かして確認する、地中に半分埋まった戦闘機の操縦席部分。

胸の高鳴り。

胃袋から喉への隆起。

きつと、やはり。

彼はまだ『そこ』にいるのだ。

目線を戻す。

「……最期に何か言ったか……あいつ。」

バーグは胸ポケットから、震える指で煙草たばこを出した。

「……ああ。」

あのオッサン……死ぬ間際まで、俺様達を慰めやがった……」

バーグが事情を察したことを理解すると、戒は顔を上げて答える。
その言葉にバーグは口に微笑を浮かべ、煙草を口にくわえた。

「俺には……何か言ってたか？」

「……何も。」

「そうか。」

短く切られた言葉。

一転して目線を伏せるバーグ。

「?」

戒は怪訝そうにその様子を眺めた。

「……………戦場じゃ当たり前のことだ。」

バーグは、そんな彼を気にすることも無く独り言を呟き、携帯用のマッチを擦る。

「…あいつは人が良すぎた。
…いつ死んでもおかしくねえって、前々から思っていた…。
おどろくものかよ。」

水滴だらけの顔で、戒は漠然と同じような顔をしたバーグの様子をうかがった。

湿ったマッチに火が灯ることは無く、何度も擦り直している。
そんな彼の様子はじれったくもあり、哀れにも見えた。

「悲しんでも、なんにも始まりやしねえな。」

やがてバーグは頭の水滴を振り払い、煙草をあきらめた。

スコールは足元に大きな水溜りをもたらしていた。

雨音と蛙の鳴き声。

同時に、濡れた草葉をいくつも潰す音。

遠くの木々の隙間から現れる、一筋の切れ目がある緑色の光沢を持つ球体。

その脇から生えた細い足を器用に使って転がりながら、一匹、また一匹と後方の茂みから湧き出て来る。

(
ティバン
菌虫かよ……！)

その様子を眺めながら、バグが深く息をつく。

生きた肉を好む凶獣。

力こそ弱い、大群であること自体が脅威の厄介なもの。

もはや、この森が人の住める場所でないことは明らかだった。これ以上この場に留まれば、命が危うい。

「行くぞ。」

人外の地で、食料も水も……ロクな装備も無えんだ。奴等のエサになる前に、せめて人の居るところまで抜ける。」

言うなり、足早に進むバグ。

「……そんなこと……てめえに言われなくなつて……おい！」

戒は脇を通り過ぎる、そんな彼をすぐに呼び止めた。

「なんだ、クソガキ。」

「少しくらい待て！」

世羅の準備が……」

戒が力を込めて、彼女の方へ首を向ける。
バーグは冷めた目つきでそれを追ったが、世羅は残骸の前から全く動く気配を見せなかった。

「連れていくんだったら お前が相手しろ。」

いつまでもぐずぐずやってる奴なんて…俺は知らん。」

「くっ……」

世羅へ駆け寄り、手を強く引く戒。

だが彼女は何も反応せず、その腰は重く地面から離れない。

思わず彼は、更に力を入れて引いた。

「世羅……」

そして大声で叫ぶと、細い腕が真っ直ぐ伸び、腰が上がる。

半ば強引に手を引き、乱暴に密林を突き進む。

既にだいたい離れている先頭のバーグに必死に追いつくため、思わ

ず小走りになった。

軽い体重のはずの世羅の腕は、今は何故か重い。

「……ここで死ぬのが嫌だったら、必死について来い。
俺も自分のことだけで精一杯だ。」

距離を置いて放たれるバーグの言葉も重かった。

「わかったぜ……そういうことかよ。
この野郎……!!」

二人の方へ振り向くこともしないで前進する彼に対して、戒が齒を剥く。

「きつと、あの野郎……。
リジャンが自分に何も言い残さなかったことを嫉妬してやがるんだ。」

世羅の手を引きながら、前方をさっさと進むバーグの姿を睨む。

だが、彼は重要なことにすぐに気が付いた。

「……おい、ヒゲ！
剣を一本かせ!!」

一旦、世羅から手を離し、自分の全身をまさぐりながら戒は叫んだ。

「だめだ。」

今頃丸腰であることに気付いたのか。
そう言わんばかりの冷めた顔つきでバーグが答えた。

「もう剣は二本しかねえんだ。」

空賊の飛翔艦に突撃した時とは違う。

……素人に任せられる剣はもう無い。」

「……てめえ……!!」

素手で、この森を歩けつてのか!!」

「たとえ武器があつても、素人のお前が満足に戦えるのか?」

戒に向けられるバーグの指。

その問いに、彼は何も答えられなかった。

「お前は戦おうなんて考えるな。」

素人が剣を握っても、もう気休めになる状況じゃない。

これからの戦闘は、俺が全て引き受ける。

この方法が全員生き残る確率が一番高い。

……理解しろ。」

「てめえが生き残りてえだけだろ！」

万が一の時……俺様達を見捨てても大丈夫なように!!」

「……!!」

その言葉に、バーグも思わず足を止めた。

「……てめ……ッ……!!」

いつもの調子で応戦しようとするバーグだったが、急に口をわずかに動かした直後、噤む。

気配を感じ、素早く両脇に目配せすると、やはりそこでは草むらが動いていた。

濡れた草を掻き分けて、先程とは別の菌虫達が寄って来る。

外殻は緑と黄の光沢。

人間の赤ん坊が這っているくらい大きい。

バーグは歩調を早めた。

「それよりも……、ちゃんと連れて来い。」

そして一瞬、沈んだ世羅の姿を見て、すぐに無愛想に前を向く。

戒には、急ぐバーグの背が嫌に遠く感じた。

「おまえも疲れてるだろう。
世羅にも自分で歩かせる。」

「……うるせえ……!!」

バーグの物言いに、憤慨を続ける戒は息を切らせながら、強引にバーグの脇に追いつく。

「クソガキ。」

てめえは、今までに仲間や知り合いの死体を見たことがあるか？」

「……あるさ。」

戒が深くついた白い息が、中空でさらに大きく広がった。

「なるほどな……。」

どおりで、立ち直りも早いわけだ。」

「何が言いてえんだ。」

戒の言葉に、バーグは立ち止まって世羅を見る。

「世羅。」

お前、親しい人を亡くすのは……初めてだな？」

「……………」

世羅は何も答えずに、下を向いたまま。

だが、その態度だけで充分だった。

「その程度の『覚悟』で賊の飛翔艦に乗り込んだのか？
しかも敵を殺しても、仲間が死ぬのはイヤだったか？
……世界はそんなに甘くねえぞ。
死は誰にだって……平等に訪れる。」

「やめろ、この野郎……！！」

再び喧嘩腰になる戒。

それをいなすように、バークは前へ向き直ると再び歩き出した。

「ガキ共。」

俺は、てめえらの1000倍はそれを経験してるんだ。」

無機質な言葉とともに、歩きながら剣を抜く。

いつの間にか正面から迫っていた虫の大群に、戒が言葉を失った。

「見てみる。」

人間、一步危険に足を踏み入れれば、死なんてすぐそばにある。
それを認められないというのなら……初めから戦うな。」

両脇、背後。

球体の上半分が開き、びっしりと口内に生えた小さな牙を見せる。
それを細かく素早く噛み合わせ、醸し出す威嚇の音。

虫達の、硬い、反響する音に囲まれる中。
世羅が戒の腕を振り解く。

真っ赤に腫れた目。
結んだ口。

「……………戦う……………」

そんな彼女が小さく呟いた。

両手を虫達へ向け、手の平を開く。

「フェル・ド《源・衝》……………！」

唱えた刹那、世羅の身体はぬかるんだ地に崩れ落ちた。

届かない、戒の伸ばした手。

膝を折り、座り込んだまま痛みに震える腕を自分で抱きしめる彼女。

鈍痛が身体全体を支配していた。

遠くで、バグが怒号と共に、虫達に突撃するのが見える。
戒が寄り添ってくれるのも見える。

だが……。

普段 源法術を唱える時に現れる、空気中の粒子……『源』（フエル）は全く見えなかった。

外から見た、絵に描いたような豪邸。
その外観どおりの優雅な邸内。

世に広く知られる、サイア商会。
そのゴベ支社の一室に、二人は軍服姿で居た。

小奇麗で狭い応接室で手持ち無沙汰になり、そわそわと落ち着かない素振りを見せているのは、艦長のペツポ。

そして、心持ちは傍らのフィンデルとて全く同じだったが、そんな彼の様子を見ていると、

自分まで情けない心境で臨むわけにはいかない。

コツ、と乾いた音が響く。

何の音か、疑問に感じつつ振り向くと、その男は居た。

昨晚訪問した二人の相手をし、今日は玄関から二人を案内してくれたメイド姿の魔導人形。

それを脇に連れ、サイア商会 会長『リ・オン』サイア』は姿を見せたのだった。

20代後半だろうか。

思ったよりも若い風貌と、女性的な顔立ちに驚く二人。

灰色^{グレー}の頭髮は丁寧^{グレイ}に伸ばされ、前髪には針金のような細い装飾具が巻き付いている。

そして、緑のなめし皮の服に身を包み、その長い袖の先には金のボタンが三つ。

「さて……」

二人を迂回し、テーブルを挟んだ椅子に着座すると、リ・オンは二人を真っ直ぐに見詰めてから

両の手にした手袋を合わせ、ぎゅ、と音を鳴らした。

「お待たせいたしました。
用件を聞きましょう。」

既に、歴戦の商談を思わせる鋭い視線。

その彼が微笑むと、白い顔の右目下のほくろが印象的に見える。

資産家の協力を求めること。

それは仕事の都合上で『彼』が、偶然ゴーベに居るというのを不
時着した現場付近の地元民から
聞いての、フィンデルの発想^{アイデア}だった。

だが、彼女自身が思いついたことながら、いざ本人を目の前にす
ると会話を交わす以前に
既に圧力に押し潰されそうになってしまう。

「…私は中王都市軍、フィンデルⅡハーディ中尉です。」

「同じく、ペ…ペペ…ペツポ大尉…だ。」

意を決して、切り出す二人。

「…本日はリ・オンⅡサイア氏に、あるお願いをしに参りました。」
フィンデルは、お願いと言うにはあまりにも厚かましいことを十
二分に噛みしめながら、口を開いた。

「それは……こちらで飛翔艦の武装を我々に分けていただきたいという事です。」

「それは突然ですな。」

しかも飛翔艦の要り様いじょうようとは。

…具体的な説明をいただきましょうか。」

言葉とは裏腹に動ぜず、冷静な物腰を全く崩さないリ・オン。

「戦闘騎を数機。」

そして、飛翔艦用の弾薬。

……出来れば、飛翔艦の装甲、及び機関部の修復も……」

「違う。」

そこで、リ・オンは短い言葉で制した。

「先立つものがあるか、ということですよ。」

「……それを兼ねてのご相談です。」

相手のはっきりした物言いに、フィンデルの声が萎しぼむ。

「成程。」

資金は無い……と。」

リ・オンは見透かしていたかのように笑い、ゆつくりと机の上で手を組んで彼女の瞳を見詰めた。

「我々は、鉄鋼等の輸送の途中で……今、本国へ帰還する途中なのです。」

予定が崩れたうえ、トラブルがありまして……。
現状のままで航行は非常に困難であり……。」

彼の凍てつくような視線に、若干 仰け反りながらフィンデルは続ける。

「補給艦には、輸送する物資を買うための、最低限の金以外は積まない規則になってます。」

……航行ギリギリの範囲の資金しか持たされない、そういうことです。」

なので、予定外の状況には……」

「傲慢な。」

それは自国の艦が攻撃されないとの自負か。」

「……」

彼の静かな早口に、フィンデルは言葉を失った。

「判るよ。」

あれは、攻撃を受けた傷だ。

……そう深くはないがね。」

指先で額を触わりながら、独り言のように呟くり・オン。

思った以上に洞察が鋭く。

もはや隠すことや誤魔化すことは、逆の効果をもたらすに違いない。

「この付近の空域で…炎団セルゲド二に襲撃されました。

もしかしたら、山を越える前に再び襲撃を受けるかもしれません。その為の『備え』をいただきたいのです。」

決断したフィンデルは、慌てるペツポを尻目に、せきを切ったように本音の言葉を発する。

「ここは中立地帯なので…軍艦を直す設備も無く、金も無いので装備も買えない。

なるほど、八方ふさがりだ。」

独り言で頷き、含みのある笑いを浮かべるリ・オン。

「しかし、これは中王都市軍が負けを認め、民間の一介の商人に頭を下げて来た……ということ。

これは中々愉快ですな。」

屈辱的とも取れる言葉に、ペツポは歯軋りした。

「…わかりました。」

だが、直後。

はつきりと発した彼のその一言に、フィンドルとペツポは驚きで目を見開いた。

湧き上がる期待。

「では、こちらの秘書に、すぐにそちらの積荷を確認させましょう。」

「

そう言い、扉付近に直立不動で構える魔導人形に目配せするり・オン。

「積荷の……確認？」

喜びも束の間、二人は困惑する。

「ええ。」

それらの価値を調べてから、それと『交換』で見合った装備を配給させていただきます。」

「バカな!!」

ペツポはすかさず叫んだ。

「本国へ輸送する品物を奪うだって!？」

それじゃあ、空賊と何ら変わらないじゃないか!！」

「人聞きの悪い。」

涼しい顔で返すリ・オン。

「これは『取り引き』でしょう？」

ならば、代価は当然です。」

両手を合わせ、姿勢を前傾の姿勢をとるリ・オン。

重圧が少し増した。

「私は商人でね。

断じて慈善家ではない。

こちらも…生活がかかっているのですよ。」

「輸送品を持たずに帰還すれば、どのような理由でも、軍法会議で極刑に処されます!！」

フィンデルが叫ぶ。

その言葉で、逆にペツポが震えた。

「……知らんよ。」

そこで、リ・オンの目つきが厳しく変わる。

「履き違えてもらっては困るな。」

それまでの紳士的な言葉は一瞬にして潜み。

「商人にとって、商品は『命』だ。

それを何の引き換えも無しによこせという、それが今の君達だ。軍という権力を傘にして、一介の商人を脅迫しようとする。

そちらの方がもっと賊的な行為だ、違うかね？」

「…代金ならば、我々が中王都市に到着のした後、速やかにお支払いできます！！

貴方ほどの資産家なら、この程度の出資…問題など無いではありませんか？」

「それは…信頼があればこそその話だ。

初対面の君等に、私がそこまでする『義理』は無い。」

筋の通るフィンドルの言葉にも、リ・オンは不敵な笑いを浮かべて一蹴する。

それはまるで、言葉の応酬を楽しむかのよう。

必死に食い下がろうしつつも、彼女にはそれが若干ひっかかった。

「……たとえば聞こう。

君達、軍人にとっての『命』^{いのち}とは何だ？」

不意の質問。

気をとられていたフィンデルはすぐに言葉を返せない。

「え……と……」

さらにペップが先に一言発したので、彼女は余計にタイミングを逃してしまった。

「もちろん、国と民さ。」

あからさまに言葉を選んだ答えに、即座に首を横に振るリ・オン。フィンデルも思わず、肩を落とした。

「綺麗ごとなんぞ聞きたくも無い……これは簡単なことだぞ……それは……」

「軍事力です。」

そんな彼を真っ直ぐ見詰めて、フィンデルは答えた。

「そう！

そうだな！」

その答えに、リ・オンは満足そうな顔で叫んだ。

「君は、その坊やよりも全然キレるようだ！
ならば分かるだろう！！」

その命……赤の他人に貸せと言われて、貸せるかね！？」

瞬時の興奮。

白い顔を紅潮させて、少年のように身を乗り出してフィンデルに
近付いて訊く。

「…非常に難しいと思います。」

しかし、時と場合によつては……」

「ああ……その日和見^{ひよりみ}はいけない。」

途端、リ・オンは残念そうに呟いて顔を背けた。

それまでの激情が、夜の波のように静かに引いていく。

その視線の奥。

窓を通して、そこには雄大な岩山と青い空を背景に、のどかな昼
の草原が広がっていた。

「時の場合も、どんな賢人でさえ読み間違えることがある。」

だからこそ自分の『命』と取引き出来るのは……相手との『同等
の見返り』のみなのだ。」

「……。」

「そこに感情を入れてはならない。」

そのようなものを入れる余地を作れば、すぐに足元をすくわれる。これが世の中だ。」

彼の早口に、フィンドルは一層 黙りこんだ。

「まあ……『義理』を通すことは、その唯一の例外ではあるが……」

濁すり・オン。

「とにかく、商人たる私にとっての『命』とは『商品』。
繰り返すが 君達は、その『命』をただで差し出せと平気な
顔をして言っているのだよ。」

暫しの間。

「理解したかね？」

反論が無いことを確認した後、彼は人を小馬鹿にしたように再び
肩をすくめた。

彼の言葉による畳み掛けに、既にフィンドルは何も言えなくなっ
ていた。

だが、後退するばかりの彼女に対し、意外にもペツポがり・オン
に向かって一歩踏み出す。

「……今まで隠していたけどな、僕は中王都市軍の副司令官の息子だぞ。」

「？」

急に語気を強めたペツポの言葉に、リ・オンは眉をひそめた。

「僕が中王都市へ帰れば、いくらだって金を払える。

我が家の資産から個人的に金を出したっていい。

……だから、早く商品売れよ。」

「わからん奴だな、君も。

『命』の後払いなど、認めない。

今の話……聞いていたのかね。」

「……おまえ!!」

ペツポがリ・オンに詰め寄る。

その行為で、フィンドルの顔が蒼ざめた。

「いけません、艦長!!」

「中王都市軍に逆らったらどうなると思ってるんだ！
おまえみたいな商人風情、簡単に潰せるんだぞ！！
パパの力なら」

そこでペツポの言葉は止まった。

静かに、流れるような動きで彼の口を止めたのはリ・オンの『手』。

奇妙に細く変形し、彼の口内に入った『手』だった。

ペツポが何かを言おうとするが、口の中から大きく一杯に広がった顎あごは一寸とて動かない。

直後、恐ろしい力で持ち上がった彼の軽い身は反転し、弧を描いて机上に背から叩きつけられる。

「『誰が』……『誰を』潰すって？」

軋む机。

ペツポの口の中に手を突っ込んだまま、彼の上から言葉を落とすリ・オン。

「私が一代で築いたサイア商会は、決して権力には屈さぬ。」

口内の膨張は増し、段々と息が苦しくなる。

「…小僧。

もう一度、この私に脅迫めいた口を利いてみる。

神の息子だろうが、誰の息子だろうが……地獄に叩き墮とすぞ。」

「……うぐ……ぐ……ぐう……。」

あまりに急な、そして非情なその行為に、ペツポは口内に彼の手を入れたまま涙を流して
声にならない声で助けを懇願する。

そして、彼が恐怖のあまり失禁していたのを確認すると、リ・オンは手袋をしばませて彼の口から引き抜いた。

「……いい手袋だろう？」

『億』の金がかかっている。」

リ・オンが手袋をフィンデルにかざす。

「錬金術で生成した特殊繊維で編み込んだ、護身用の手袋だ。」

その手袋で机上の鉄の文鎮を軽々と放り、中空で握りつぶす。

いびつな形になった文鎮は机に即時に叩きつけられ、威嚇的な大音を室内に轟かせた。

「大陸中を巡る自由商人というのは大変危険だね。
私は安全の為なら金に糸目はつけん。」

机に重なったまま、腰を抜かし、床にだらしなく膝を落とすペツ

ポ。

それを蔑^{さげす}んだ瞳で見下したまま、リ・オンは再び椅子に腰掛けた。

「エンゼルエンデルハイム。

…新しいズボンをお持ちしろ。

そして、丁重に屋敷の出口までお二人をお送りしてやれ。」

そして椅子を回転させて背を向き、腕を高く上げて指を鳴らす。

「せいぜい、良き旅を。」

そのままの姿勢で、発せられる言葉。

フィンデルは立ち尽くしたまま、彼の背を見詰めていた。

外の景色を眺めながら、足を組むリ・オン。

金に糸目をつけない。

先ほどの言動とは裏腹な。

フィンデルの目に付いたのは、彼の左足首から生えた汚い棒きれ。

それは彼女の頭に、嫌にこびりついた。

次へ

2

「……というわけで、交渉決裂だ。
くそっ……いまいましい……。
たかが一介の商人の分際で……!!」

ペッポはブリッジで一通りの状況を報告してから、両の拳を悔しさで震わせた。

一同はそれぞれの椅子に座り黙って聴いていたが、ほとんどの集中は、彼の軍服にそぐわないズボンに注がれていた。

腿の部分が妙に膨らんでいて、細身のペッポに全く似合わない。オレンジとグリーンの格子模様の生地も、どこか間抜けな印象さえ与える。

「……くそ、もういい!」

ペッポはやがてそう言い残すと、ふてくされて扉を開けた。

「艦長、どちらへ?」

彼の傍らで、唯一 立ったまま話を聞いていたフィンデルが訊く。

「今日は疲れた。 もう寝る!」

「……これからの予定はかがしましう?」

「~~~~~」

前傾姿勢のまま、ペッポは猫のように唸り。

「僕にわかるもんか!」

ブリッジの扉を勢いよく閉めて出て行った。

「……なんだ、あいつ。」

それより……あのズボンはどうしたんだ?」

眉間にしわを寄せて、口をとがらせるリード。

「まあ……色々あって……」

フィンドルは誤魔化すように苦笑して答える。

一介の商人に、自分達の艦長が死にも等しい屈辱を味あわされたなどと誰が言えよう。

「……副長。」

動力室の片付け、終わらせておいたっす。」

機を見計らって、タモンが言った。

「……嫌な仕事を押し付けて　ごめんなさいね……。」

重い口調で言うフィンドル。

タモンは首を左右に振って応える。

「いえ。」

あと簡単っすけど、全員の埋葬も……」

「……ありがとう。」

眼前にそびえるゴーベ山脈に、不時着したのは朝一番。
そして思い出す、機関室の惨状。

まず動力の確認に向かうと、そこで働く小人達は皆、心臓を一刺しで殺されていた。

それは無感情で能率的な殺し方で、明らかに『慣れ』が感じられた。

さらに、肝心の源炉への工作被害は軽微ではあったが、ルベランセにそれを修理できる専門家が居ないことが痛かった。

「ヂチャードの野郎!!」

リードは一旦冷めかけていた怒りを再び爆発させ、机を強く叩く。朝から何度も繰り返す、彼の行為を横目で見るフィンデル。

「あいつが……スパイだったなんてよ!!」

勿論、その確証はない。

艦内異常の発生直後の、彼の失踪。

そして同じタイミングに機関室で目撃された、彼の変装と思われる見知らぬ男。

…そして一連の工作。

それらを総合しての一つの結論に過ぎない。

戒達が機関室前で見た男がヂチャードだとするのなら、機関室で凶行に及んだのも恐らく彼と見て間違いない。

複数の工作員が、長い期間この狭い艦内で潜んでいられることは非常に考えにくいからである。

だが彼が元々どこの組織に所属し、何が目的なのか。それは全く不明だった。

彼が空賊のスパイだったとは、どうしても思えなかった。

確かにヂチャードはこの任務の直前に配属された新参者だが、それにしても一回の襲撃作戦にしては前準備が過ぎる。

どんなにずさんな体制だとしても、偽造の経歴で潜入できるほど中王都市軍の管理は甘くない。

考えられるのは他国の機関か、軍の深い部分に関係出来る組織だろう。

「メイ……おまえ、本当に何もされなかったらうつな？」

横の席でキャンディーを頬張るメイに、リードは何度も訊いた。

「…うん、何もされなかったの。」

膝で、背を丸めて呑気に寝息を立てている梅の背を撫でながら、彼女もまた呑気に答えて頷いた。

「ケーキと紅茶食べてたら、眠くなっちゃったの。

……チチャードはもう戻ってこないの？」

「だああああ……から、裏切られたんだよ、バカ！！」

まだ事態を飲み込んでいないのだろう、そんなメイの様子に、リードがわめく。

その様子に驚いて目覚めた梅は、メイの膝から飛び起き、床を走ってそそくさとブリッジから出て行った。

彼女の飲んだ紅茶の中に、睡眠薬を盛られたことは明白。

ルベランセの統括念通士たるメイを失うことが、戦略上大きな意味を担っていることを考えれば、有力な作戦だったが、フィンデルにとってはそれも解せなかった。

想像もしたくないが。

単純にルベランセの戦力を削るなら、彼女を殺した方が圧倒的に早い。

それどころか、その気になれば、彼がブリッジ全員の寝首を一斉にかくことも可能だったはずである。

解せない……そんな部分が多くあった。

フィンドルは何気なく、メイの顔を見る。

精神的に幼い彼女には勿論、このことはブリッジの誰にだって相談は出来そうになかった。

皆、自分の心中を整理するので精一杯であり、嫌な出来事からは顔を背けたい。

ことの重大さを抱えるのは、責任ある地位の自分だけで充分なのだ。

あいかわらずキョトンとした目で返すメイの肩を抱き、フィンドルは優しく微笑んだ。

デチャードの行為は、凶行でありながら、何か理性を感じさせる。

リードにしてみれば面白くないかもしれないが、それこそおかしな感想なのだが。

フィンドルはいまだに、デチャードからは怨恨や敵意を感じていない。

そんな甘い自分に、また嫌気がさした。

「…雲行きが怪しそうつすねえ…」

そんな中、タモンが呟いた。

「補給も整備もままならなかったら、これからどうすれば…」

「大丈夫よ。」

フィンデルの一言に、タモンは心配顔を向ける。

「……私が…なんとかするから…元気出して行きましょ。」

彼女は無理に笑って言った。

「今夜また、サイア商会に掛け合ってみる。」

それに、ちょうど…待つ時間が欲しかったもの……。」

フィンデルは大きな窓に寄り、空の夕闇を見詰めた。

彼女は、仲間の帰還を信じていた。

「
フェル
《源…》」

術の発動を促す神語を口にする間も、どこか違和を感じる世羅。

周囲の『源』の抽出が依然として無い。

だがそれでも構わずに、付近の大木に狙いを定める。

「《衝^ド……!!」

叫ぶと同時。

脱力と激痛で身体が落ち込み、うずくまる。

そんな世羅の肩に、戒は触れた。

今にも泣きそうな表情で、彼女はムキになって同じことを何度も繰り返す。

「もうやめろ、世羅。」

転がった虫の死骸を避けるように大岩の上で腰掛け、剣を肩に乗せて煙草を吹かしながら
バーグが一言声をかける。

それを皮切りに、世羅が地に尻をついて頭を垂らした。

「確か：凶獣除けの結界には、高濃度の源を使っていた。
凶獣は源を嫌い、源が無いところにしか棲まない。」

戒はバーグへ近付いて、静かな声で言った。

「源法術つてのは詳しくねえが……つまり、ここには源がねえってことか。」

結界を張るのは、教会の仕事だった。
修道士である戒の説明に納得するバーク。

「…術が使えない……。
世羅の戦力が無くなるのは…痛えな。」

「…てめえ……さっきから世羅が足手まといだと言いたげな態度ばかりとりやがって!!」

「なんで、そう歪めて解釈しやがる。」

土が蹴られる音。

戒がその方向へ首を勢いよく曲げると、世羅は既に走り出していた。

「ヒゲ！」

てめえの声がでかいから!!」

「馬鹿言え。」

でかいのはお前の声だ。」

言い争いもそこそこに、戒がすぐに追いかける。

凶獣との戦いで疲れきっていたバーグは、ゆっくりとした歩みでそれ続いた。

だが、疲労は世羅が一番なのだろう。

ふらついた彼女の足に、戒はすぐに追いつく。

「ごめん…ごめんね……」。

ボクが…ボクがこんなことをしなければ…！」

開口一番、顔を背けたまま涙混じりに言う世羅。

「やめる。」

すぐ後ろで、戒が頭を振る。

「だって…戒は中王都市へ 絶対に行かなきゃならなかったんだ！
夢を…叶えるために……！！」

「……おまえの判断は…間違ってねえよ……」。

困難な状況下で、自分ですら忘れていたことを世羅に突きつけられ、戒は戸惑った。

「……ボクのこと恨んでるよね……二人とも。」

「おまえ!!」

ヒゲはともかく……俺様が…そんな小さい男だと思ってるのか!」

無理に笑いながら叫ぶ。

(俺が……あの時、何故世羅を追ったかって!?)

しかし、そこで表情を止める彼。

(何故……だ…?)

自然と世羅の肩からは手が離れ、一步後退する。

(何故、俺は……!?)

(思い出せない……。)

(別に……あいつを守る必要なんて無いのに……。)

なぜか、何かの義務のようなものを感じていた。

(あの時 飛び出さなければ、俺は今頃 安全なところに居て……。
)

（中王都市に行くのだって…楽に……）

（おい……俺は一体、何考えてる？

この程度の逆境くらいで……弱気になって……）

戒は足を止めて、全身を強張らせた。

（世羅は俺の目的の『鍵』だ……。

神呪つてものが何なのか、あいつの身体が秘密を握ってるんだ…
…。

あいつを守っても……損はねえはずだ……。）

（後悔とか……考えるな！！）

そんな葛藤のうち、再び離れていく世羅は目の前の木々の中に消えてゆく。

今、追わなければ、本当に見失うかもしれない。

「 なあ、戒。」

気が付くと、背後には考え顔で歩いて来るバークがいた。
こんな事態にもかかわらず、彼は言葉をゆっくりと発する。

「人はよ……自分の能力以上のものをしようとする」と失敗するんじゃないか？」

「…急に…何を言っただけ？」

「いくら、この世が危険にあふれているなんて言ってもよ、普通に生活していりゃあ、

そうそう死ぬことなんてねえだろう。」

周囲を見回して言う。

「だから…人が自分の力量を超えたことをやっちゃった時…。

うまくいかなかったり、死んだりするんだ。

何か…不思議な力に裁かれるようによ…。」

「ヒゲ、てめえ!!」

バグに詰め寄る戒。

「てめえまで…こうなったのはリジャンや…世羅が、悪かったと言
いてえのか!？」

「そうは言っただけ。だがよ…」

「あの時、あいつらが飛び出さなかったら…堕ちていたのはルベラ
ンセだったかもしれないだろうが！

どのみち、俺様達も出るしかなかったんだ…。

その方が…きつとマシだったはずだ。」

「マシだと？」

仲間が一人死んでるんだ。この状況をマシだと言っのか？

俺は…もつと良い手があったんじゃないかねのか、そう思ったただけだ

…」

「結果論で過去を後悔するんじゃないやねえよ！！」

戒の絶叫に、思わず上下の顎を噛みしめるバーク。

「…無理な話だ。」

お前は…人生を全く後悔しないとでも言うのか？」

そうして小さく口を動かすバークの冷めた表情に、戒はどこか彼から倦怠めいたものを感じた。

「ああ、後悔なんてしねえ。」

俺様は……俺様の通る道を絶対の自信で走り続ける。」

バークから離れ、つま先の向きを変える。

「はじめっから、左右どちらを向いて寝るのかを決めて眠る奴がいるか！？」

……この世に生まれようとして生まれてくる奴がいるのかッ！？」

前を駆ける戒。

彼の言葉にバグは、つい歩を止めた。

「先のことなんて…誰にもわからねえよ…!!」

狭まる木々の枝を両手で乱暴に掻き分け、世羅への道を作る彼。

跳ねた一つの枝が頬を捉え、小さな痛みが走った。

神学校を出てからというもの。
広い世界を体験した。

この世では、自分の分からないことの方が遥かに多い。
そんなことは、すぐに理解できた。

（だから……）

いつもその場しのぎの前向きな考えを強要して。
それでも常にぐらついて。

それでも矢継ぎばやに繰り出される広大な世界からの問い
を、自分の狭い世界の中から答えるしかない。

（走り続けるしかねえだろうが!!）

腿^{もも}が悲鳴を上げても。

足首が折れそうになっても。

構わずに森の中を疾走した。

やがて森の中でも部分的に開けた所に抜け出ると、戒は一度足を止める。

その先には木々ではなく、植物の長く太い蔓^{つる}が縦横無尽に覆い広がっていたのだ。

それは互いに編み込み、作りだしたトンネル。

その天井には、先に遭遇した巨大な虫達が逆さまになってびっしりと集まっていた。

それらは寄り添い合い、乾いた音を立てながら、こちらを襲うでもなくただ不気味に密集している。

戒は地面に小さく潰れた足跡らしきものが中へ向かっているのを発見すると、すぐに一步を踏み出した。

同時に、足元の枯葉や枯れ枝の堆積^{たいせき}からは、温かな空気の立ち昇りを感じる。

それは甘い香り。

天井の虫達は、それに誘われているのが解った。

陽の光がわずかに木漏れ出たトンネル。

その光で自分の身体に細かな陰影を作りつつ、戒は慎重に中を進んだ。

時々、頭上の様子をうかがう。

獲物を目の前にしても、なぜか虫達は動こうとしなかった。

こうなると、視界に全くその姿が見えない世羅のことも心配になってくる。

「おい……っ!!」

乾いた音と声。

ようやく追いついたバーグが、背後から叫びかけている。

戒が振り返った瞬間。

盛り上がる、その足元。

「あぶねえ!!」

手を差し伸ばすバーグの姿。

だが、それもむなしく、戒は一瞬にして飛び上がった土と枯れ葉に飲み込まれた。

地中から飛び出たのは、筒状をした巨大な植物。

戒を飲み込んだその口の蓋ふたの部分が閉まるのを確認するが早いか、バーグは剣を抜いた。

「くっ……!!」

そして植物の下部にうつすらとした二人分の影を確かめると、腹の中心に狙いをさだめ、迷うことなく横に薙^なぐ。

断たれた箇所から汁液を振りまきながら、地に落ちる植物の下部の溜まり。

バグは思い切り刃を振るい、分厚い皮を切断し、さらにその勢いで、襲い掛かってくる蔓^{つる}を振り払って刻んだ。

「…戒！ 世羅!!」

バグは空いた手で落ちた溜まりから二人を引き出す。

「う……ご……ほ……!!」

粘着する液体にまみれ、地に転がる二人。

「……逃げろ!!」

「……く……!!」

バーグの言うとおりに、戒が態勢を整えて世羅を起こそうとする。だが、彼よりも飲み込まれてから時間が経っていたせいか、彼女は気を失ったまま目覚めない。

そこで、彼等が弱るのを待ってたかのように、ぶら下がっていた虫達が一匹ずつ飛び立った。

甲殻から薄い羽を出し、空気を裂く音を立て、その全てが中空でホバリングしたまま三人を囲む。

この半日、あまりにも体力を消耗し過ぎた。

戒と世羅の二人は、もう一步も動けなかった。

バーグが剣を振るい、一匹の虫を潰す。
返す刃で、もう一匹。

だが、続けざまに早いスピードで襲い掛かってくる大群には、すでに限界の刃は届かなかった。

その時、蔓の天井が突然裂け。
重量のある物体が降り注いだ。

たちこめる獣臭。

舞い上がった木の葉の中を、光る瞳。

その者は、前垂れの長い東洋の着物をまとい。
白き長槍を背に差す者。

顔は黒い豹。

「……危険な『巢』だ。
これは、壊さねば。」

その豹は短く言葉を放ち、虫達の前に立ちふさがる。

横顔の奥の目が、三人を一瞬だけ見た。

紺色の着物がひるがえり。

手にした白い槍が垂直に、土に勢いよく突き刺さる。

そしてすぐに先の地中から再び現れた槍の先端が遠くの一匹の虫を貫くと、槍は中心から何又何にも分かれて伸び、周囲の他の虫達にも襲い掛かる。

前方の敵の全てを弾いた後、次の目標を三人の背後に忍び寄る虫達にすぐに合わせる男。

態勢低く屈み、地面にコンパスの如く弧を素早く描き、竜巻のような槍さばきで全てをなぎ払う。

その蛇のようにうねる細い槍は、不思議と三人を正確にかわして

いった

黒光りした豹頭。

大きく開いた着物の胸元は、普通の人間の肌。

そんな見慣れない彼の外見に、バーグと世羅は思わず見入ってしまった。

「戒〓セバンシュルドではないか。

どうした。」

不意に自分の名を呼ばれた戒。

彼はそれまで、気が抜けたままただ呆然としていた。

「どうした、と聞いている。

もう別地へと、着いているところかと思っていたぞ。」

「あ……ああ。」

事態が飲み込めないのか、うわのそらで答える戒。

「……不笑人……だど？」

バーグが思わず大剣を握る手を上げようとするが、その重みで切っ先を地面に落としまった。

「まさか……戒、おまえ……知り合いなのか？」

獣の頭をした男に平然と話しかけられる戒。
その奇妙な光景に対し、バーグは訊く。

「……そうか。」

ここは……ヒエラー森林帯……。
猪族の……村の近くか……。」

だが彼の質問には答えず、目の前の獣人を視界に入れて周囲を見回しながら呟く戒。

「全然……気付かなかったぜ……しかし……なんて……偶然だ……。」

その再会は喜ばしいことだったが。

その豹頭の言葉は、この地から装甲馬車で自治港へ帰り、中王都市を目指していた自分が
後戻りしてしまったことを意味していた。

「びっくりしたぞ。」

何か煙が出ていたので、様子を見に来たら、そこにフ族の乗り物

が堕ちていた。

そして凶獣の巢に、戒、お前がいるではないか。」

「『そこ』……だと……!？」

彼が指差した方向に見える残骸。

たまらず、戒はその場にへたり込んだ。

さらにあるうことが。

半日歩きどおし、深い森の中を巡り巡った拳句の果てに。
三人は元の場所へと戻って来てしまっていたのだ。

「どう、直りそう?。」

機関室のドアに背をもたれながら、フィンドルは声をかけた。

「専門外ですよ、副長……。」

ミーサは源炉に向かい、中腰で作業をしたまま頼りない返事を返す。

ルベランセの心臓

すなわち源炉。

フィンドルはそれを、単なる飛翔艦の一部品とばかり思っていて、それまで全く気に留めておらず。

一旦不具合が生じれば、これほどまでに手間がかかる代物だとは思ってもいなかった。

「これって……やっぱり貴重なものなのかしら？
たとえば……交換はきかないの？」

そして素朴な疑問を口にする。

「……さあ？」

私が造ったわけじゃないんで……わかりません。」

昼夜を通した作業で疲弊しきった首を傾げて答えるミィサ。

「でも……やるだけやってみます。
働いていた方が、余計な心配を考えなくていいし。」

両手に工具を持ち、彼女は腕を広げて笑った。

「そうね。」

一歩ずつ寄って、微笑むフィンドル。

そこで冷たい源炉に触れながら、一つの疑問にぶつかる。

あの時 強奪された輸送騎。
それでデチャードが脱出したのは想像に易かった。

同時に源炉と戦闘騎への工作も行い、ルベランセの戦闘能力をダウンさせる。

加えてメイに睡眠薬を用い、指揮系統へのダメージも与えたのだ。
全てが入念な計算。

だが、一番重要な情報。
ルベランセを奪取しても、艦内には貴重な品は一切無いということ。

彼が賊の一味だったのなら、それを仲間に知らせる機会が航行中にいくらでもあったはずである。

一つ貴重品があるとすれば世羅が持ち込んだ依頼品の刀だが、刀の一振りなどそれこそ盗むだけで済む。

フィンデルは、物言わぬ源炉を見詰めた。

空賊……炎団セルゲドニ。

明らかに、彼らは飛翔艦を無傷で手に入れようとしていた。

もしかして自分は、彼等が『賊』であるということにこだわります。

ぎて、見落としている部分があるのではないだろうか。

賊の襲撃は単なる手段であり、その裏に巨大な『謀』はかりごとがあるとしたら。

そして、チチャードはそれに関係があるとするならば。

…その標的になったルベランセにも、きっと何か秘密があるに違いなかった。

「ところで、こんな夜更けにどこへ行くんですか？」

表情を強張らせるフィンデルに、ミーサは言った。

「え？」

フィンデルはそこで思考を止めて答える。

「なんで…出かけるって分かるの？」

「だって…こんなに遅いのに、ファンデーション落としてないじゃないですか。

それって…まだ寝ないってことですよね？」

ミーサの言葉に、フィンデルは照れる。

「やっぱ、女の子ね。
ふふ…ブリッジの人達ね、そういうこと、誰も気付かないのよ。
参っちゃうわ。」

言いながら、長い髪を指ですく。

「大丈夫…心配しないで。
ちよっとした用事で出かけるだけだから。
もし、誰かに聞かれたら……そう伝えておいて。」

フィンドルはそう言い残し、機関室を後にする。

少しリラックス出来たこと。
彼女はそれをミーサに感謝した。

目の前に置かれた異族の食物。
客人用だが、人間社会から見れば大層粗末な家屋で三人は身体を
休めていた。

不笑人は主に、普通の人間の暮らしから大きく離れた、奥深い自
然の中で暮らしている。
それは凶獣が生息する所であろうが、お構いなしのバイタリテイ
だった。

辺境に住む彼等の主食は、勿論 凶獣や虫類。
空腹でありながらも、戒は眼前の異形の料理の数々に思わず顔を歪める。

見れば、横に座ったバーグも手が全く伸びていない。

世羅の方は旺盛な食欲で食べるかと思いきや、依然 元気の無いまま俯うつむいているだけだった。

「つまり……クソガキは、数日前までこの場所で仕事をしてたってことか。」

バーグは胡坐あぐらをかいた膝に手を置きながら言う。

「ああ、ここの族長の命を助けてやった。」

少し自慢げに返す戒。

「だが、ひとつ話を合わせろ。」

「あん？」

だが、真顔で自分を見詰める彼に、バーグは座ったまま体を少し近付けた。

尻わらに敷いた、藁わらが音を立てる。

「俺様は、この村では『名医』ってことになっている。」

「はあ？」

「不笑人の連中に、エア・ファンタジスタ天命人の能力なんて理解できるか!？」

「……なるほどな。」

バーグは顎に指を付けて頷いた。

「それは分かるが……ずいぶんな商売じゃねえか。
修道士さんよ。」

「やかましい。」

戒がにらむ。

「やり方はどうあれ、とにかくここでは、俺様の顔が効く。
なにせ族長の命の恩人だからな。
そこらへん、感謝しろよ。」

これは おまえらも、俺様に命を救われたも同然だからな。」

「恩着せがましい…そんな態度が男を下げるんだよ。」

バーグが苦笑する。

「しかし、一応は…歓迎されているようだが……。
…俺は不笑人ってのは、どーも信用できなくてな。
あいつらは皆、野蛮だし…」

手にした薄汚れたカップ内の、水の汚れ具合を確かめながら彼は
呟いた。

「フ族、それは誤解だ。」

すだれ
簾を開け、家屋に入ってくる豹頭の男。

「我々は野蛮ではない。
それに、フ族ほどずるがしこくないし、大陸を我が物顔で暮ら
してない。」

「いいや。不笑人は野蛮の代名詞だね。
戦地では、お前たちに食われた仲間が何人いたことか。」

すぐに立ち上がったバーグが、豹の顔とにらみ合って応戦した。

「おまえ……肉は食べないのか。」

「…これだから不笑人ってのはよ。」

ストレートすぎる言葉に、憮然として自分の頭をこするバーグ。

「……フ族……？」

両手でカップを持って、世羅が小さな声で訊いた。

「こいつらは、そうやって俺達を『弱い者』として差別してやがるんだ。」

すぐさま、バーグが答えた。

「それも誤解だ。

…『普通』だから、『フ族』だ。」

無表情のまま返す黒豹の頭。

「……冗談を言える不笑人がいるとはな。」

複雑な表情で、バーグは齒を見せる。

「いや……そもそも…大陸語を喋る蛮族っても珍しいか。」

直後、彼は訂正した。

「申し遅れた。

自分の名は、ザナナ。

各地で仲間達の、用心棒をしてる。」

そこで礼儀正しく、頭を下げる豹頭の男。

「もともと腕っぷしが強い不笑人に、そんなもん必要ねえだろう。」

「自分達も、お前たちと同じ人間。とても弱いもの。」

ましてや、危険なところに住んでいるのだから。」

「……へいへい。」

バーグはあさつての方を向いて返事をする。

彼自身、戦時中に不笑人を相手にして幾多もの戦闘の経験をした。

彼等は人間に対して友好でも敵対もしていない。それゆえ、交渉も相手の『腹具合』ときている。

風習も思考も、無数にあるそれぞれの部族によって異なり、複雑で理解もしがたい。

それこそ『普通』の人間にとっては、もっとも付き合いにくい相手であった。

「……………」

そんな中、ザナナは黙って両の手のひらで自分の即頭部を挟む。

「!？」

彼の行動に注視していた三人は次の瞬間、言葉を失った。

ザナナはそのまま、自分の被る豹の皮を脱いだのだ。

耳、鼻唇の凹凸は無い。

髪の毛も何の毛も無い。

皮が薄く白い、そんな異形の顔面。

そして顔全体から眉間に集中する、浮き出た真っ青な血管。

その両脇に付いた、瞼の無い小さくて丸っこい眼球が真っ直ぐ三人を見詰めていた。

「フ族よ……信用しろ。」

口の上の筋肉は退化して動かず、物を噛むために使う下顎しか動かない。

それは決して笑うことの無い、表情の無い種族。

まさしく不笑人だった。

「……被れ。」

バーグは思わず口にした。

彼等の容姿には同一性があり、皆似た顔をして、その家族でさえ見分けがつかないという。

そして人里離れた場所で暮らす各族には、それぞれ崇拝する『獣』があり。

彼等は、子が生まれたと同時にその崇拝する獣を一匹殺す。

子はその獣の皮を被らされ、獣と一体となる。

そんな獣人が、他人の前で『自分の皮』を脱ぐなんてことはありえなかった。

「信用しろ。

戒、ザナナの友達。

戒の友達も、ザナナの友達も同じ。」

「……ああ、わかったよ。」

流星のバーグも気圧されて自然と応えと、ザナナはようやく、獣の皮を被りなおした。

そんな彼等のやりとりに、戒は思わず笑みをこぼす。

彼はザナナの氣骨を気に入っていたが、それよりも、生まれた時から何かしらの運命のようなものを
背負わされた彼等……不笑人に、どこか共感が持てた。

そういった意味では、この村で過ごした数日、決して居心地が悪く
なかったのを思い出す。

戒には時に疑問に感じられた。

大聖典にも記される、不笑人。

彼等は神を信仰しなかった罪として、笑うことを禁止された存在。

凶獣も含め、普通の人間と違う『もの』には大抵、そんな逸話がある。

まるで、『普通の人間』と呼ばれる種族が、さも一番偉そうな生き物であるかのような。

故に、蛮族と呼ばれ、虐げられた者達が引き起こしたというアル
ドの叛乱とは、世に広まった
クレイン教に……一握りの人間の傲慢に対する叛旗だったのだ、と
彼は思っている。

聖書の教えは、やはり自分達の世界を基準にして善し悪しを考えて
いるのだ。

個人ならまだしも。

全ての人間に同じ考えを要求するのは、あまりにも暴力的に思えた。

同じ人間でありながら、姿や風習が違うというだけで、差別や迫害を受け、長い戦争で傷付いた、蛮族と呼ばれる者達。

『彼等は自分達と違う』という理由だけで、人間扱いすらされない。

他人から特別な目で見られる気持ち。

戒は天命人として、それが大いに理解できたのだ。

思いに耽^{ひた}る様子のそんな彼を一目見て、ザナナが口を開く。

「戒。

その節は世話になった。

ザナナ、フ族見直したの、実はおまえのおかげ。」

「……まあな。」

当然のように、胸を張る戒。

「クソガキが尊敬されてやがる。

こいつらの価値観、やっぱおかしいぜ。」

バークは全員に聞こえるよう、わざと大声で世羅に耳打ちした。

「ところで、ここは一体大陸のどこらへんなんだ。
猪族の村だつて？

お前は豹族だろ。

それに……誰一人、他の村人が現れないのもおかしいじゃないか。」

ザナナの指示で、村外で待たせられた後この家へ入ると、すでに
もてなしの準備は整っていた。

そして猪族の村と聞いて、バーグと世羅の二人は、単純に猪の頭
の皮を被った沢山の人間達を
想像しているのだ。

「理由あって、村人、今、それぞれの家から出られない。
これ、風習。」

ザナナは簡潔に答えた。

「……俺達は、ゴーベ山脈まで行きたいんだがな。」

細かいことは気に留めず、バーグが続けて訊く。

ザナナは彼の言葉に頷き、疲れきった表情の戒と世羅を交互に見
る。

「ザナナ、その道は知らない。

ここから近いのは、港町だけ。」

「レバーナの何か？

まるきり逆方向じゃねえか。」

バーグは小さく呟いた。

戒と世羅も、もはや落胆の色を隠せない。

「……その山に、何がある？」

そんな空気の中、ザナナが漠然と尋ねた。

「きっとルベランセという……飛翔艦が着いている。
少しくらいは、俺達が帰るのを待っているはずだ。」

「ひしょうかん……？」

前に戒が言ってた、空飛ぶ乗り物のことか？」

そこで、ザナナの声の調子上がる。

「ちゃんと間に合って、乗れたのか。
良かったな、戒。」

そして彼の悪気無い言葉に、戒は片手で頭を抱えた。

「乗れても落とされちゃ、意味が無えんだよ……。」

「なんだ、乗るだけじゃダメなのか。」

「もう、いいぜ。」

うんざりとした顔つきで、カップの水を飲み干す彼。

「……おまえは、食べないのか。」

そこで、バーグのまったく手をつけられていない料理を見ながら、ザナナが目ざとく言った。

「いや……」

バーグが、手を料理の上で行き来させながら口ごもる。

殻を取った、歯虫の姿煮。

泥鬼の輪切りを焼いたもの。

得体の知れない、危険な色したスープ。

彼は最終的に、無難な果実酒の入ったカップを手に取り、胃袋の中へと一気に流し込んで応えた。

それを見届け、ザナナは満足そうに戒に視線を戻す。

「…戒、今から少しつきあえ。」

「…ああ。」

不意に促され、戒は立ち上がった。

だが、バーグは彼等の方を見ようともしせず無言で酒をあおっている。

思い出される、密林の中での彼の行動と言動。

戒は、世羅を残して席を立つことを不意に不安に感じた。

「世羅。」

上から声をかけると、小さく座った世羅は戒を仰ぎ見た。

「俺様は……少し出かけてくる。」

「……うん。」

両手で持ったカップに口を触れたまま、静かに頷く世羅。

「ヒゲの様子がさつきから妙だ。
注意しろ。」

戒の言い残した一言に、彼女は目を丸くした。

すっかり陽が落ちた村内。
明かりとなるのは月の光のみ。

目が慣れるまで足元すらおぼつかないが、それでも地上で過ごす
夜は、雲の上よりは
断然落ち着けた。

しかし。

今宵はあまりにも静か過ぎた。

「……本当に誰も外へ出てねえな。
前は夜でも賑やかだっただろう？」

再び、村に来て受けた最初の疑問。
それをザナナにぶつける戒。

「今、喪に服してる。」

「……なんだ、誰か死んだのか？」

戒は両手を頭の後ろで組みながら、他人事のように訊いた。

「いいから……ついて来い。」

獣の皮の奥。

静かな瞳で ザナナは言った。

村の離れは、月明かりすら一切届かない高い木々に囲まれていた。

記憶の片隅にある、大きな草葺ぶきの家だった。

懐かしさの余韻に浸る前に、ザナナによってその中へと誘いざなわれる。

煙い、香の匂い。

そして果物の甘い香り。

入り混じる空気。

目につく、赤や黒。

さらなる黄色。

原色の、まじない道具のような大布。

それが被せられているのは、床に横たわる土気色した巨大な体だった。

「これは……」

戒はその者を目の当たりしたまま、呟く。

「族長、昨晚、死んだ。」

そんな彼に対し、ザナナは重い口を開いた。

「……なんだと……？」

顔をわずかに、ゆつくりと彼に向ける戒。

「……おまえ……何言ってるんだ？」

治ったじゃねえか、傷は……あの時、俺様が治したじゃねえか。」

「確かに、戒のおかげで、いったんは回復した。
一時は、色々としやべることも、できた。」

腕組みをして、淡々と述べるザナナ。

「だが、毒と熱、すでに族長の中、蝕^{むしば}んでた。
もう……生きながらえる体力、無かった。
そして、昨日……」

「……手遅れだったってことかよ。」

急に視界がぐらついた。
思わず、よろめいた足。

後退して、自然と族長の大きな死体から遠ざかる。

「…へっ……」

柱に寄りかかり、一発。
拳を強く打ちつける。

「こんなッ……能力があつたつてな……！」

誰も救うことなんて出来ねえんだ……！！」

二発目で、家屋全体が揺れた。

中央の柱に拳を押し込んだまま、固まる戒。

手の甲の皮が裂け、血が流れる。

ザナナは、静かに彼の腕を取った。

「戒は、悪くない。

おまえは……」

「一瞬助けただけじゃ……何の意味もねえだろうが……」

「それ、違う。」

ザナナの握力がさらに強くなる。

「おまえのおかげで、族長、最期に皆と話せた。
次の族長を決めること。

今まで生きてて楽しかったことへの感謝。

……いっぱい、いっぱい話した。

それ、とても大事。」

「……わからねえよ。」

戒は歯を噛みしめた。

ザナナの言葉でまた思い出す、リジャンの姿。

「すまない。

ザナナ、言葉ヘタ。」

「……ちがう。

そついう意味じゃねえ。」

見当違いの謝りに、逆に苦虫を噛み潰す表情を浮かべる戒。

そしてザナナは手を離して、何も無い床を見詰めた。

「フ族の考え、とても短絡的。」

「……………」

静かな口調だった。

彼は背に差した白い槍を抜く。

「森でも、見ただろう。」

……実は、これは死んだ者の、骨。」

そして、それを前に突き出す。

「祖父の背骨だ。」

戒は黙って、それに見入った。

「我等の魂がこもる骨、生前に愛した者、まもる。

だから、死ぬのなんて何でもない。

むしろ、それは望むところ。

死ねば、いつまでも、好きな者のそばに居て、助けられる。」

だが認めたくない気持ちで、語りを続けるザナナから体を逸らし、戒は家を出るために踵を返した。

「族長も同じ。」

明日には、その骨、皆に分けられ、それは皆を守り、皆に愛される。

そこで悲しむ者、我等にはいない。

いつでも一緒、いつまでも一緒だから。」

構わず続けるザナナ。

「手遅れ、違うぞ、戒。」

族長の家から出た戒を追いながら、彼は付け加えた。

「村の者のお前に感謝する気持ち、それだからこそ。」

その言葉に戒はようやく足を止める。

それは、もてなしの料理を見れば判った。

だが戒には、ザナナに答える言葉は何も浮かんでこなかった。

「まずは泉で、汗と泥を流せ。」

「……泉？」

小さく、呟く戒。

「村の中に、湯の出る泉ある。」

おまえ、きつと疲れてる。

心と体、そこで癒せ。

それから色々考えろ、何も、遅くはない。」

戒は彼の言葉に促されるまま、短い草むらの道を戻った。

影響を与えられれば、全てそれに傾いてしまいそうな、そんなふ
らついた心と足取りだった。

「リ・オンさん！
お願いしますー！！」

「貴方の融資が無ければ、私の工場は明日の昼にでも倒産してしま
う……！！」

「ほんの少し……200万ヤクスYほど借していただければ……我々は救
われるのですー！！」

相手の言いたいことを全て喋らせてから、一段落待つ。

「恥も外聞も無く懇願して……情けないとは思わんのか。」

その後、リ・オンは口を開いた。

「何の苦勞もせず、何かを得ようなど、ありえん話だ。」

邸内の廊下。

粗末な服を着た二人組を同時に眺めながら、彼は言った。

「諸君等を助ける義理など無い。
くたばってしまえ。」

吐き捨てるように。

心の奥底から侮蔑するようになり・オンは続けた。

「くそ……強い者に、弱い者の気持ちがわかるかよ!!」

その行為に一瞬にして怒り、二人の男は声にならない声で散々わめいた後、大きな足音を立てて廊下を早足で抜けていく。

「失礼。」

これは、とんだところを。」

一連のやりとりを、距離を置いて傍観していたフィンデルにリ・オンは笑いかけた。

「すみません、またお邪魔して……」

圧されていた彼女がようやく声を洩らすと、リ・オンは首を振った。

「今の連中は……気にしないでくれたまえ。」

いつものことだ。」

そう言われると、自然に肩を落とすフィンデル。
今のやりとりを見るだけでも、これからする交渉は難航しそうだった。

「昼間は失礼した。」

だが、予想に反して頭を下げるリ・オン。

「子供の可愛い暴力に対し、殺意で返してしまったこと。
大人げなかったと反省しているよ。」

言葉とは逆に、彼はやはり怖い目をしていた。

フィンデルは、そんな彼の様子に戦慄を感じざるをえない。

「しかし、君が改めて来たということは……根本的な問題を解っていないと見える。」

「？」

「君達、中央都市の軍隊に無償で兵器を提供したとあっては、サイア商会は大陸全土の
国家と商人に一齐に睨まれることになるのだよ。」

彼の言葉は、至極まともな言い分だった。

「……それだけの見返りが……私には無い。」

「しかし……代金の問題ならば、後から払うことが出来れば……」

「後払いなど……信じない。」

昼間と同様の応酬が行われかける。

「私が信じられるのは金のみだ。
それと……『義理』くらいか。」

自嘲するように笑うリ・オン。

「しかし君は頭がいいが、真面目すぎるな。
金稼ぎなど……少し考えれば、方法なんて簡単に見付かる。」

彼の言葉に、フィンデルが一瞬まばたきを見せる。

「この山の街は、なかなか大きい交易場でね。
なんだったら、良い娼館でも紹介するが？」

「……身体を売れと……言うのですか？」

だが突然の言葉に、彼女はすぐに思わず声を荒げた。

「背に腹は変えられまい？」

君の艦にいる女性達が三日ほど必死に働けば結構な金になる。
安い戦闘騎の一つなら、買えるくらいにな。」

「……貴方は!!」

全身を駆け巡る激情。

「何なら……私が君を買おうか？」

軍人の女性とは幾度となく肌を合わせたが、士官クラスとはまだ
無い。

楽しませてもらえば、それなりに」

振り上げるフィンデルの平手。

だが、真上に来たところで動きを止める。

「ふ……まだ、自分を抑えるか。」

面白い。」

その様子を冷めた目つきで眺めながら、リ・オンは余裕の表情で
片手を机にして頬杖をついた。

「見損ないました……大陸きつての名商人も…鬼畜に過ぎないので
すね……。」

上気した顔の表面の温度が鎮まるのを待つて、彼女は言った。

「どう捉えてもらっても結構。
信用をして…バカを見るよりはずっといい。」

背を向けるリ・オン。

「平静を装って…可愛らしいものだ。

君の『争い嫌い』には何か おかしささえ感じるよ。」

心を見透かす視線。

「久方ぶりに愉快だ。

そう、君のように理知的な人間の態度と心を崩すのが最近では唯一の喜びだな。

そうだ、退屈しのぎになった代金でも支払おうか。」

リ・オンは札束を懷から出して、床に放る。

「拾いたまえ。

そしてそれで、ウチの武器を買うかね？」

勝ち誇った言葉。

拾ってしまえば、フィンドルの完全な敗北だろう。

だが、仲間のための思えば。

彼女の神経は、指先を無意識に動かした。

悔しさと羞恥心で、顔が下を向く。
そこで、不意に背後で気配を感じた。

「 父上。」

凜とした若い声。

「……そのくらいになさいませ。」

濃いクリーム色の皮ツナギを着た、細身の青年が廊下の奥から姿を見せる。

灰色の髪。

黒目がちな瞳は、対面のリ・オンに鋭い視線を向けていた。

「そしてお客人も…やめなさい。」

それを取っても、父が貴女に商品を売ることはない。

父は……心底、意地が悪いのだ。」

さらなる青年の言葉で、素早くリ・オンの顔を見るフィンデル。

彼は悔しそうな目つきで、口元を細かく動かしていた。

「余計なことを……若造が口を挟むことではない。ひっこんでいろ、ジン。」

ジンと呼ばれた若者は瞳を閉じ、肩をすくめた。

「息子さん……ですか？」

「愚息だ。」

戦闘騎に乗ることしか覚えようとせん。」

フィンドルの問いに、リ・オンは思わず苦々しい表情で答えていた。

「飛翔艦ハーベルグラン、到着いたしました。積荷、人員、全て無事です。」

「あたりまえだ。」

ねぎらいの言葉も無く、青年の脇を通り抜けるリ・オン。

青年の方も全く動じず、それが当然とばかりに、淡々と引き上げる。

その間、フィンドルは廊下に立ち尽くしながら、そんな親子の妙を慎重に眺めていた。

次へ

3

「炎団の失敗につきましては…秘密の保持のため、聖騎士に殲滅^{せんめつ}させました。」

「……して、ルベランセはどうか。」

「動きは間違いなく捕捉しております。」

「奴等は現在、ゴーベ山脈の麓に。」

「被害も甚大につき、すぐに動くことは難しいと思われます。」

「……そちらの追討は…どうしたものか。」

「炎団にも面子がありましょう。」

「きつと、このままでは終わらせないはず。」

「我々は深追いせず、後は彼等に任せるのが妥当かと。」

「ふ、む……。」

黒騎士の返答に対し、ガイメイヤは目をつぶり、再び考えに耽^{ふけ}つた。

「そなたに全て任せよう、ディボレアル。」

迅速に聖騎士に追撃させた件も……見事な判断だ。」

中王騎士団 白華所属の飛翔艦ロンセ・カロウド。

そのブリッジで、黒騎士の急な呼び出しに大団長ザイクⅡガイメイヤは応えていた。

先の作戦が失敗したこと。

その報告に、作戦の立案者の彼は大層驚いていた。

「いささか、さしでがましいとは思いましたが……」

傍らで、ディボレアルが囁く。

黒い甲冑が鈍い光を見せた。

「気を遣ってくれんでも良い。

歳には勝てん。」

安眠を妨害され、幾分、眠気が残る顔で答えるガイメイヤ。

「分かるだろう？」

私の身体は……もう立っているだけで精一杯だ。」

冗談を交えた言葉。

だが言うとおり、彼の疲労は間違いなかった。

「長旅で老体に無理がたたっているのだろう。」

つい先ほどまで眠っていた彼は、黄金の鎧を纏っている時と比べ、段違いに小さく見える

豪華な厚手のローブに着替えていた。

いかに虚勢を張ろうとも、年齢の誤魔化は効かない。

ディボリアルはそう感じていた。

「……マクスはどうしている。」

「先ほど、帰還いたしました。

今は……休息をとらせております。

このロンセ・カロウドは、これからどういたしましょう？。」

「……進路は予定通り、このまま中王都市へ向けよ。」

「御意。」

短く返事をする、黒騎士。

「定例会議が迫ってきておる。
補給艦が一隻帰ってこない軍隊の顔と、その言い訳はさぞかし見
ものであるうな……。」

腰を深く椅子に沈ませ、ガイメイヤは深い息と共に言った。

いつも同じだった。

闇の中で銀の鎖につながれ、身動きのとれないまま仰向けに寝か
されて。

背の高い目に見下ろされる。

いつの頃からだったろうか。
無意味ということを悟り、抵抗しなくなったのは。

その影はいつものように、自分の顔の上に握った拳を据えた。

下あごを強い力で引かれ、開けられた口に注がれる目一杯の銀の
粉。

拳から無尽蔵に落とされる粉はやがて、喉の底で一杯になり、あ
ふれ出す。

どんなに苦しくても。

その行為を止めてくれないことを、マクスは知っている。

まるで全身が内から外まで、全てが別のものになってしまいうような感覚。

そして、マクスは意識を失う瞬間、いつも同じことを思う。

ひとおもいに殺される夢の方がまだ幾分もましだ、と。

大きな咳せきの音。

ヂチャードがすぐに向き直ると、ベッドで悶えるマクスの姿があった。

身体を何度も大きくはねさせ、その度にベッドが軋んだ。

「おい……!!」

ヂチャードが血相を変えてマクスに駆け寄る。

彼は上半身を起こし、口元を手で押さえ、目を大きく見開き、しばらく虚空を眺めていた。

「……大丈夫…か？」

背中を軽く支えるヂチャード。

だが、マクスはそれをすぐに片手で引き離れた。

「……！！」

その手の冷たさに、ヂチャードは驚く。

そしてマクスは、顔を逸らして再び大きく咳こんだ。

おさえた手の指の間から吹き出る、銀の粒子。

ヂチャードは、マクスのそれを隠すような素振りに気が付くと、彼も背を向けた。

「出撃する時は…一声かける。」

背後のマクスの様子が一段落したところで、ヂチャードは改めて声をかける。

「……………」

だが黙したままの彼。

たまらずにヂチャードが振り向くと、そこには半身を起こすも、うな垂れたままのマクスが居た。

少しクセのある銀髪の間隙から、濁った瞳が覗く。

「……まあ……のんびり寝ていた俺にも……責任はあるが。」

思わずヂチャードは目を泳がし、マクスもそこでようやく、彼に
対面して口を開いた。

「……ここは……？」

「ロンセ・カロウドに臨時で作った医務室だ。」

「ちゃんと自分で帰還しておいて、憶えてないのか？」

「……必死……だった……な。」

マクスはそう言い、苦笑した。

口元を拭い、震える手の平を見詰める。

「ルベランセの戦闘騎を墮としたところまでは……かるつじて……記憶はある。」

「お前が半分気を失って、戻ってきた時は仰天したぜ…。
俺もミシュレイの奴も……。」

チチャードは静かに笑った。

「黒華に、救護班はいないんだ。
重いお前をここまで運んで介抱するのは骨だったぜ。」

そこでマクスが、自分の姿に気付く。
銀の大鎧は肩と腰の外装を外され、若干軽微になっていた。

「それは全部脱がすな、ってミシュレイの奴が言いやがったんだ。
俺は楽にしてやりたいと思っていたんだが……」

「……それでいい。
私は…聖騎士なのだから。」

マクスは目を閉じ、静かに腕を組んだ。

「しかし…お前を追い詰めるほどの相手が居たとはな。」

「……相当の武人だった。」

短く言い切ると、マクスは再び横になる。

しばらく何も無い天井を見ていたあと、彼はゆっくりと瞳を閉じ

た。

それを見届け、デチャードは静かに退室した。

部屋の前の廊下でデチャードを待ち構えていたのは、ミシュレイだった。

「……どういうことだ…マクスの身体は一体…？」

一気に彼に詰め寄るデチャード。

「天命の輪を使った為の一時的な疲労でしょう。命に別状はありませんよ。」

少年は平然と言った。

「これが戦場で、戦いの真っ最中でしたら確実に死んでますけどね。まあ…きつちりと帰還してから倒れる、そんな精神力の強さが彼の聖騎士たる所以ゆえんなんでしょうが。」

無邪気に返し続けるミシュレイの胸倉を、デチャードは逆手に掴んだ。

「疲労だけじゃない。

……なんか…変な物を吐いてる。」

「天命の輪は高位になればなるほど、使用した時の代償は大きいものですよ。」

その剣幕から、目を逸らさずに返す少年。

「……彼のこと…あまり知らないんですね？」

「何だと？」

「貴方はマクスに、それくらいしか信頼されてないんですね。」

哄笑が廊下に響く。

「ただ仕官学校からの付き合いがあるだけで、彼の全てを理解もしていないのに。

おめでたいなあ…。

それで友達みたいな顔をして。」

デチャードは鼻で笑うミシュレイを、軽く突き飛ばした。

「……おまえに…あいつの何がわかる。」

そして腕を大きく広げ、振る。

「天命第二位『銀の聖域』」

だが、ミシュレイは顔から位置のずれた眼鏡を直しながら言った。

「一定領域、全ての無機物を『銀』に変換する強力な天命の輪……。僕達のような低位の天命の輪とは比べられない恐ろしい能力ですよね。」

少年の口から紡ぎ出される、デチャードの知らない語句。

「クレイン教皇はじめ、諸国が巻き込まれた聖都観艦式での動乱……。

それは叛乱軍の残党の起こした事件……。そして、幾つも消えた敵の飛翔艦……。」

彼は、面前の少年がいともたやすく羅列していく言葉をただ押し黙って聞いていた。

「一体、誰が敵を全滅させたんでしょうね？」

いくら敵とはいえ、その艦には何人乗ってたんですか？

普通は出来ませんよねえ。

やはり……。自分は天命人……。他人とは違う、と割り切らないと。」

「やめろッ……！」

話が核心に及ぶと、いつの間にかヂチャードは叫んでいた。

友の天命の輪の名さえ、今の今まで聞いたことが無かった。それどころか、友が自分の前で能力を使ったことすら無い。

だが、自分が彼の友人であるという確信。それは揺らぐことは無い。

二人は信頼し合ってる。それは間違いないはずだ。

だが、聖都での動乱以来。後に彼が聖騎士となつてから、その認識に少しの『染み』が広がっていることは自分自身、理解していた。

その染みが大きくならないように。ただ祈ることしか出来ない自分がいたのだ。

「知らないでしょう？
存在自体が秘密の黒華の他に、騎士団には更に隠密の情報局が存在していることを。
その彼らが記した、表に出せない記録…そういうのが存在してるんですよ。」

次第に遠ざかっていく少年の姿。

「彼も本当は他人を見下しているんです。

天命人は特別な存在だ、と。

他の凡人など、どうなってもいい、と。」

続けるミシュレイから、デチャードは自ら逃げ離れていた。

「敵に『情け』をかけた貴方はきっと、彼の友達にはなれませんかよ。」

決定的な一言を付け加え、笑う少年。

「同じ天命人だから 喜怒哀楽を分かち合えるとか、そんな甘いことは考えない方がいいです。

天命人は、生涯孤独……。

天命人同士だからって、お互いの気持ちを共有することなんてきつと出来はしない。」

優麗な飛翔艦内の、白く明るいはずの廊下が暗転した。

「そう、貴方は弱いから、臆病だから……仲間が欲しいだけなんだ。」

少年は一人になってから、そこでかすかな笑い声を耳に感じた。

廊下の柱の影。

それと同化した黒い鎧。

「盗み聞きですか？」

「大したことも話してしまい。」

柱の際から一步前へ出て、黒騎士は言った。

「まあ……そうですね。」

ミシュレイも笑う。

「…聖騎士の様子は？」

「今のところ疲労困憊こんぱいといったところです。」

まあ、命に別状はありません。」

「ならば良い。」

それを聞き、すぐ場を離れようとする黒騎士。

「……やだなあ。」

もしかして、貴方まで心配なんですか？」

ミシュレイは微笑みながら、黒い背に声をかけると、その足はすぐに止まった。

「当然であろう。」

奴は騎士団の重要な『駒』なのだから。」

「僕のマクスを……くれぐれも『捨て駒』にはしないで下さいね。」

満面の笑みの少年の言葉。
黒騎士は何も答えない。

「しかし、ディボレアルさん。」

さらに悪戯っぽい笑いを含み、ミシュレイは切り出す。

「今回の大団長の作戦。」

一見完璧な作戦ですが、結果的に失敗している。

軍師としての詰めが、少し足りなかったんじゃないですか？」

「……………」

暫しの沈黙。

「傲慢な者は、己が不足であることを理解させねばならない。」

負の感情と共に、首を少年に向けるディボレアル。

「…適当に失敗してもらわねば、新参者の私が困る。」

あとは仮面の奥の瞳が物語っていた。

「ふふ……どうも貴方とは絶対に友達にはなれそうにありませんよ。」

戦慄を肌を感じながら、ミシユレイは呟いた。

「これより中王都市へ帰還する。」

その間、奴の機体の再整備と報告書を作成するように。
下らない話をする以前に、自分の仕事を終わらせる。」

「了解。」

新参者は新参者なりに、……ですね？」

互いに、反対方向へ進む二人。

その夜、それからその廊下を歩く者は誰も居なかった。

次へ

4

横になつて見える屋内の光景。

いつの間にか寝てしまっていた。

世羅はそんな態勢のまま、首だけを起こす。

鼻腔をくすぐる、耳のすぐ下からの藁の匂い。

自分の身体に被せられているのは、薄い編み物。

自然の匂いをゆっくりと感ずることが出来たのは、久方ぶりの気がした。

この一日、五感の失せるような緊張の中を動いていたのだ。

再び、首から頭全体、そして柔らかい頬が床に沈む。

体中が汗と土でべたついて気持ち悪かったが、動く気力は無かつ

た。

そんな薄い闇の中で 聴覚が物音を拾う。

目だけ動かして、その方向を見る世羅。

暗がりの中でうごめいているのは、バグの大きな背中。
不機嫌そうな独り言を呟きながら、彼は舌打ち混じりに食べ物と
酒類を物色していた。

バグに気を許すなという、戒の言葉。
それを思い出し、言い知れぬ不安を覚える。

世羅は藁の編み物で半分顔を隠すと、縮こまりながらそれを傍観
した。

やがて、周りをキョロキョロと見回した後、態勢を低くして家屋
を出るバグ。

世羅は軋む身体で飛び起き、音を立てぬよう彼の後を追った。

小道の中、バグの足取りは早く、距離は瞬く間に差がついてし
まった。

それ故、世羅は音に気を付けて適度に走って追うが、数分も経たぬうちに、その足を思わず止めた。

息をするのすら忘れ、ただ見る彼女。

それは、蔓草つるの柵を飛び越えるバークの姿だった。

彼は誰にも何も告げず、村から出て行ってしまったのだ。

無心で彼の後をしばらく追った。

時折、木々の間に身を隠し、距離が開きすぎるとまた追いかける。その連続の中、世羅には絶対に認めたくない事実があった。

……それは、彼が剣を背にしていたこと。

（きつと……バークは…）

津波のように押し寄せてくる不安は現実には

（ボクたちが お荷物になったんだ……。）

考えるほど、頬の筋肉が痙攣する。

リジャンを亡くしたことで、果てていた涙が再び溢れ、零れ落ちた。

「……………ッ!」

地面から突き出した木の根が、世羅の足首を取る。
彼女は受け身もとれず、土の上を転がりこんだ。

もう面倒になって、そこで土に顔を付けたまま放心する。

地面を這う小さな虫。

思わず、手元の草を握った。

その時。

密林の少し先から伝わるわずかな振動が、頬を伝って感じた。

わずかに首を持ち上げて見上げる。

遠くに戦闘騎の残骸が見えた。

不意に、リジャンに笑われた気がした。

「……………ん!」

両手で踏ん張り、土から体を起こす世羅。

その振動の向こうへ。
自然と足が動いた。

そこは、自分達の戦闘騎の墜落した場所。
目を背けたくなる残骸は、変わらず地に突き刺さっているままだ
った。

身を隠すのに適した巨木の脇に辿り着くと、世羅は心臓の音が聴
こえるくらい、自分の膝と
胸を付けてしゃがみこんだ。

そして研ぎ澄ました視線が一瞬、残骸の脇で剣を振るうバーグの
影を捉えた。

それは剣舞のようにも見えた。

バーグの剣は月光の下で、幾つもの煌^{きりめ}いた残像を残していく。

戦闘騎の壊れた羽根は綺麗に落とされていき。
焦げた装甲が次々と削られる。

しぶくバグの汗。

それと共に、金属の破片が飛んだ。

彼が造らんとしているもの。

それが『墓』だということに世羅が気付くのに、そう時間はかからなかった。

やがて、手を止めたバグは民芸品だろうか、三日月型をした筒を取り出す。

暗がりでもしくは見えなかったが、それは植物で編んだもの。どうやら、先ほど物色していた中であつた物らしい。

彼の一拳一動を見逃しまいと、世羅はまばたきもせず居た。

筒を手にしたバグは、中の液体を残骸に向けて振りまく。それは世羅の位置まで、うつすらとアルコールの匂いを運んだ。

彼女の記憶に残るリジャンは、いつもその匂いだった。

やがて剣を地面に軽く突き刺し、あくら胡坐をかいてどっかりと強く座るバグ。

続けて筒の残りを少し口に含み、彼は低く唸った。

同じ感覚を味わっていた世羅にはすぐに判った。

彼は泣いている。

どれくらいの時間が経ったろうか。

巨木を背に、バーグと一緒に泣いて、時を数えるのさえ忘れていた。

残骸の前に酒と食べ物を並べていたバーグは、自分ではそれらに一切手をつけていなかった。

そして幾分落ち着いてから、彼は口を開き始めた。

「…遅くなった……悪かったな…リジャン…。」

少し、涙の残る声。

バーグは頭を振り回し、気付けの酒を再びあおる。

「…悪運の強さじゃ……俺に分があったな。」

まあ……これからは……ゆっくり休めよ……。」

真っ赤に染めた顔で、戦闘騎を叩く彼。

「……しかしなあ……昔……あの時……飛翔艦乗りになってお前がやりたかったこと。

それは何だったんだ？

俺はいまだに解らねえよ……。」

まさか、お前一人が頑張れば、この世に争いが無くなるなんて夢みてたんじゃ……ねえよなあ？」

酒は男を無理矢理、饒舌に変え。

「いつまでも……ガキじゃあるまいし……。」

随分、夢見た人生送りやがって……。」

動きを大袈裟に変えた。

「でもなあ……ガキはガキなりに、素晴らしい部分がある。」

そして、大きく口を開けて、喋り、おどける。

「あの二人は、どんなに苦しくても誰のせいにもしない。運命のせいとか……神様のせいになつて……しねえんだ。」

両手を一杯に広げ。

潤み、澄んだ瞳。

「あいつらには…強い意志のようなものを感じる。
世羅は真っ直ぐ、懸命に生きて…いい子だ。

戒は憎たらしい野郎だが…絶対の自信で己の道を走る……だと。」

今度は、まるで自分の子供を誉めるかのような。
そんな輝いた瞳で彼は続けた。

「俺もバカだからよ。」

そんなバカな奴等を見ていると考えちまうんだ。
俺もそうありたい、協力したいってよ。」

次々と変わる、忙しい顔。

それは元気に満ちあふれた表情から始まり……

「だが、俺は若者に感化される年齢か？
もう歳を食いすぎちまったよ。」

今度は一転して、難しい顔。

「そりゃあ、若い時はがむしゃらだったさ。
戦友を一人でも多く守るってな…。 やっきになってよ…。」

ときに、全てを包み込むような優しい顔をする。

「でも…今の俺は、家族以外を守るところをどこかで拒絶しているんだ。

それをしちまつたら、家族を裏切るような気がして…。」

そして、寂しげな顔をしたのは、その時だった。

「だがな……お前や戒にはな…中王都市で娘が待ってるだなんて力ツコつけて言ってたけどよ。

……妻が死んだ日。

ギルドからの仕事であいつの死に目に居合わせなかった俺に……とつくに娘は愛想を尽かしてるんだ。」

バークが、首の細い鎖を握る。

「だからこそ…今さら家族とか言い訳にしたら…。

騎士団に入った娘は、俺を心底 軽蔑するだろう。

それをずっと考えて…ずっと考えて……。

…さっき結論を出して、決めたんだ。

あの二人を守りたいという感情を……俺はもう絶対に抑えない。」

(……………!!)

世羅が顔を上げる。

背にした、太い幹が揺れた。

ハッとして、バークを見る。

彼は気付いていない。

「だってよ……一緒に生死をかけた戦友じゃねえかよ。
守るのは当たり前じゃねえかよ。」

年甲斐もなくて……恥ずかしいけど……。
昔と同じように……」

バーグは大きな身体を折り曲げて、土に両の拳をつけた。

「俺は自分に正直に生きてえんだよ……！！」

また後悔するかも……いや、何度でも後悔するかもしれねえが……

……」

それだけを言うと、バーグはふらりと立ち上がった。

「飲み過ぎちまったなあ……へへ……。」

今日で最後にしねえとなあ……」

緩む口元。

だが息を吸い込み、次に一気に強く吐くことで、酔いを吹き飛ばす。

「これから、何かが二人を裁こうというのなら……。」

俺がその裁きを超えて……潰してやるんだからよ。」

剣の柄を強く握り、地から引き抜くバーク。

「おまえが最期に俺に何も伝えなかったのは……あの時……おまえが賊の飛翔艦で語ってくれたこと……それが全てだったんだよな。」

片手でしっかりと握る大剣。
それは下段から上段へ。

「お前の遺言は……届いたんだ。」

空いた親指で己の胸を指すバーク。

「決して強制しないのはお前らしいが、水臭いぜ……」

踏み込みの足を、土に押し込む。

「……安心しろ、リジャン。」

お前の遺志を継ぐとか、恩着せがましいこと……言わねえ。
俺は俺なりにやらせてもらう。」

顎を引き、渾身の構えから繰り出す剣。

「……あばよ！」

先に……あの世で待ってる！！」

斬られた装甲が一枚。

鋭い回転で夜空を旅し、地に沈んだ操縦席に落ちて封をする。

「俺はまだしばらく……この世でがむしゃらだ……！！」

最後に、彼は大声で哭いた^な。

骨まで達した、村長の足の深い切り傷。
患部は既に腐り始めていた。

針のような硬い全身の毛の間から、並々と油汗を垂らし悶える族長の顔を見れば。

家の中に居た、まじない師だか祈祷師だか分からない連中が『さじ』を投げたのも解った。

危険が伴うが……外科的に処方するならば、腐った箇所を削いで薬で治すのだろう。

だが戒にとつてはなんてことはない。
普段どおり、簡単な治療だった。

自分の天命の輪を発動し、患部に触れるだけでいい。

子供の頃から不思議だった。
原理は分からないが。

とにかくそれだけで、治る。

代償として、戒は族長の痛みを受け、思いのほかその痛みはひどく、二日ほど歩けなかった。

そのおかげで予定が崩れ、自治港へ戻る際、だいぶ慌ててしまったことを思い出す。

だが

失った生命力や、消耗した体力までは還らない。

それを今回、あらゆる死を通して嫌というくらい思い知らされた。

(これから……どうするか…)

あたたかい泉に肩まで浸かりながら、彼は深く息をついた。

色々なことが頭の中を駆け巡る。

飛翔艦ルベランセ。

港町のこと。

自分の旅の目的。

レティーン神学校。

もう思い出すことも無いだろうと思っていた、族長の死でさえ心にしこりを残す結果となった。

今、自分の浸かる泉。

その中の泡のように、浮かんでは消える記憶。

夜空の中。

一粒の星が流れると、戒は泉の中で思わず立ち上がって見上げた。

リジャン。

彼が最後に伝えたこと。

自分の犠牲になった者を愛する……。

そんなこと、出来るだろうか。

今の自分には、その言葉の意味すら解らない。

そして、世羅。

中王都市の大学へ行くことが困難な今。
彼女の身体について調べるこそが、自分の目的に近いのではないだろうか。

戒は湯を両手ですくうと、顔に浴びせ、洗いこんだ。

瞼の奥まで月の光は届かない。
そんな闇。

（いつから……世羅を守ろうって考えてるんだ…俺は。）

自分が本当に救いたいのは、世羅ではない。

それなのに何故 気になるのか。
身に憶えも無く、整理もつかない。

多分、ザナナの言うとおり疲れているのだろう。
今はゆっくりと、旅の疲れを癒すことが先決だと思った。

一度閉じた瞼は、疲労で開かない。

ただずっと、何か得体の知れない夢を見た記憶と感覚が、身体に残っていた。

それは直後には忘れてしまっただが、不気味な傷を自分の内側に残しているような気がした。

目を閉じれば、闇の奥底から……伸びる小さな腕。
それはまた、自分の意志と心を掴もうというのか。

そんな思惑の中、戒は頭の頂点へ衝撃を受け、身体を深く沈めた。

突然、水中へと押しこまれた彼。

暴れながら小さな泡を掴み、しこたま水を飲んでしまう。

戒は慌てて泉の底へ足を突き、大きくむせかえりながら水上へ飛び上がった。

小さな獣でも乱入してきたのだろうか。

驚き、薄目で泉を眺め回す。

眼前には、汚れたままの服装でどこからか飛び込んできた世羅がいた。

「　　お、おい!!」

声をかける間もなく、彼女が汚れた上着から下着まで一気に脱ぎ捨てると、戒はすぐに反射的に背を向けた。

あまりに突然なことに理解不能。

だが、身体と服を乱暴に泉でゆすぐ彼女の様子は揺れる水面で、背を向けた戒にも容易に想像がつく。

世羅は体中を振って身体全体の汚れを落としながら泉の中を潜り、やがて戒の背中に辿り着いた。

「　ボクは…バカだ……」

そして、すぐに彼女は言った。
咄嗟に離れようとした戒が、その動作を止める。

「あの時、もう戦友だって……言ってたのに……」

「……?」

戒は落ち着きを取り戻し、自分の顔の水滴を拭った。

「…疑ってたんだ……」。

きつと……それはボクの心が弱いから……」

「……一体、なんのことだ……世羅。」

少女が息を飲む。

つられて、戒も同じ行為をする。

「あのね……」。

バーグが……ボクたちを守ってくれるって……」。

「あいつが お前にそう言ったのか？」

「ううん。」

世羅は首を振った。

腰に回された彼女の腕に、より強い力が込められる。

「でも……守ってくれるって……」

「……わかった。」

お前がそう言つのなら……信じてやるよ。」

「……うん。」

「だから……その……ひつつくなよ……」

ぬくもり。

彼女の身体のライン。

逃げようとする戒だったが、世羅は彼の腰に回した両手をより強く締めた。

やわらかい頬の感触が背中に伝わり、戒もようやく観念する。

黒い紋様の広がった、彼女の左腕。

戒は、その小さな手を静かに握った。

当初の目的　中王都市の大学で学ぶのは不可能に近い。
ならば、いつそのこと世羅と旅するのも良いかもしれない。
そんな考えが頭を支配した。

「ねえ、戒……」

「…何だ？」

「石鹼持つてない？」

「あるわけねえだろ。」

「石鹼はおるか、荷物は全部ルベランセの中だ。」

「そうだね……。そうだった……。
すっかりしてた……。」

あは…。」

「やっぱり、お前はバカ…だ。」

腹の底から湧いた笑い声を、戒があげる。

「あははは…。」

世羅も彼の腰に回した手に強く力を込めながら、笑う。

「ふ…。」

「はははははは…！」

二人の笑いが、森にこだました。

「…ねえ、必ずルベランセに戻ろうよ！」

そして、あきらめずに目指そ…中王都市を。」

だが彼女の突然の言葉に、戒は口を開けたそのまま固まった。

「中王都市に行くんだよ！」

戒…！！

夢は……かなえなきゃ…！」

「……………！！！」

目覚ましのような、強い世羅の言葉。

戒が目を白黒させる。

「ボク……絶対かなえるから……」

うな垂れた世羅の濡れた頭が、背中に当たる。

一瞬、気丈さが戻った彼女から今度は哀しみを。

そして 熱い雫を感じた。

「…………リジャン……」

彼女の言葉。

そして夜空の中、星がまた一つ流れた。

ゴーベ山脈の夜の大草原は満点の星空だった。

それは、風の感触と草の匂い。
適度に体温を奪う気温。

そこでは自然の雄大さを、さらに身体で感じることが出来る。

状況が状況でなければ、良い休暇になったに違いない。
フィンドルには素直にそう思えた。

そんな美しい光景の中、目に付く巨大な飛翔艦が一隻。
草原に四本の鎖を打ち込み、バランスをとって停泊している。

大きさはルベランセの四倍はあろうか。

実用的でない。

フィンドルはそれを見てすぐに思ったが、大勢の人間によって外へ運び出される沢山の真新しい
戦闘騎を確認して納得した。

あれはルベランセと違い、本格的な輸送目的のみを目的とした飛翔艦なのだろう。

護衛が付くことを前提に、大陸中を行き来するサイア商会のものに違いない。

深夜を押し、大声を上げて積荷を降ろす男達。

そんな喧騒から離れ、草原の真ん中で孤独に戦闘騎を整備する者が居た。

それは、邸宅で見たり・オンの息子。」

「……先ほどは、父が大変 失礼な真似を。」

フィンドルが何気なく近寄ると、彼は戦闘騎に触れていたその手を止めて立ち上がった。

「……いえ……こちらこそ……」

我々は元々……無理なお願いをしているのですから……」

「事情は、エンゼルエンデルハイムに聞きました。

まったく……父も頑固者だ。

中王都市に逆らえば、この空で堂々と商売など出来まい。」

「……はは……」

フィンドルは疲れきった表情で笑った。

「……貴女は、父の足を見ましたか？」

「……あの傷は……どうされたのです？」

「あれは……父が根っからの商売人であるという証明です。」

「……？」

「腐るほどの金を持ちながら、あの部分だけは良い義足にしようと

しない。

何故だか、不思議でしょう？」

「……………はい。」

無言で頷くフィンデル。

「あれは『義理』の証明らしいのです。」

「…確か……………あの方がその言葉を用いるのを何度か聞きましたが…。」

「

父には、ある人物に唯一果たせなかった義理があるそうです。」

再び、己の戦闘騎に手を触れるジン。

「ただ、それが何なのかは……………私にも良くは知りません。

そしてそれに関連して、ことあるごとに父は私に言われます。

何故、お前は『女』に生まれてこなかったのだ、と。」

「おんな？」

唐突な語句に、目を丸くするフィンデル。

「父が義理を果たせなかった人物…その方には息子さんがいましてね。

私が女に生まれれば、ぜひともその人の『嫁』にくれてやれただ

ろっ、というわけです。」

自分を指差しながら力無く笑うジン。

「……まさか。」

つられて、笑うフィンデル。

「もちろん冗談でしょう。」

「……半分はね。」

ジンはさらに笑みをこぼしたが、目はそうではなかった。

「でも、半分は本気だったのでしょうか。」

御覧のとおり、父は偏屈です。

必要が無ければ子供なんて作らない。」

彼はそこまで話し終わると、再び工具を手を取った。

「宜しければ、修理工の人員と戦闘騎の補給は私が都合いたしますが。」

ウチの飛翔艦には、腕の良い工夫もありますし、処分を待つ戦闘騎もいくらかもあります。」

「……お気持ち、感謝いたします。」

フィンドルは頭を下げた。

「貴方から話を聞く前だったら……ご好意に甘えたかもしれません。」

「……。」

と、おっしゃいますと?」

フィンドルが自分の話に乗らなかったのは、彼にとって意外なことだった。

既に明日へ向け、息子としての特権でルベランセへの物資の手配を頭に思い浮かべていたのである。

「リ・オンさんには：私の知らないことがまだあるみたいです。」

その人の全てを理解しないで、結論を出すわけには参りません。」

そしてフィンドルのはっきりとした言葉に、ジンは目を大きく見開いた。

「……また、改めてうかがい直します。」

「明日、昼食でも用意してお待ちしておりますよ。
フィンドルさん。」

そんな彼女の真摯な態度に、彼は微笑んだ。

「何やってんだよ…、お前ら。」

バーグが呆れ顔で、頭を強く掻きながら言った。

「まったく…後先考えずに行動するんじゃないやねえよ！」

泉の茂みより、薄着の戒が説教をしながら村の広場に現れる。

「えへへ……」

そして戒の修道着を上から羽織らせてもらい、ずぶ濡れの服を小脇に抱えながら。

彼の説教にも関わらず、笑って来る世羅。

そんな二人の姿は、かなりおかしく見えた。

「とりあえず、服、乾かせ。」

バーグの横のザナナ。

目下の焚き火に目配せしながら、彼は言った。

「何だ、世羅。」

「また裸じゃねえか。」

バーグは顔をしかめ、乾いた布を世羅に被せてから戒を見る。

「俺様は何もしてねえぞ。」

世羅が…勝手に……」

「まあいい。」

「今、不笑人と話してたんだがな。」

腕組みをするバーグ。

世羅はその傍で屈み、火にあたる。

「やはり、定期馬車でここから自治港に向かうしか道が無いそうだ。」

「…結局……逆戻りかよ……」

その言葉に、やはり落胆の色を隠せない戒。

「いや、違う。」

だが目を閉じたザナナが、静かに言った。
彼の顔を下から見上げる世羅。

「!？」

驚き、彼を凝視するバーグと戒。

「実は、ここから、おまえたちの目指す、ゴーブという山、行ける。」

「……おい……！」

さっき俺に言ってた話と全然違うぞ。」

バーグが詰め寄る。

「ザナナ、気が変わった。」

両腕を組み、頭をわずかに傾けるザナナ。

「おいおい……。」

バーグが、困惑する。

「お前たちを初めて見たとき、ザナナが思ったこと。」

それは、腐った肉のような顔をしていたということ。」

ザナナの言葉に、三人黙って耳を傾けた。

「まだ一人でも、そんな顔をしている者が居たら、その道、教える

つもりは無かった。」

彼の丸い瞳が、戒と世羅を交互に見る。

「三人、さつきまでと顔つき、まるで違う。」

片言ながらも、見極めた言葉。

「今は、とっても美味^{うまい}そうだ。」

豹の皮が縦に歪んだ。

三人は複雑な表情で、ザナナの冗談に笑う。

「今なら、この道、教えられる。」

やがて汚い地図を裾の中から取り出し、広げるザナナ。

「今、俺様達のいる位置はどこなんだ。」

戒は地図を覗きこみ、すかさず訊いた。

「ここだ。」

ザナナが指差す。

簡易な地図だったが、彼の指したそのわずかに上に山が描かれてい

る。

それは間違いなく、ゴーベ山脈であろう。

「距離は？」

「歩いて、半日。」

「……近いじゃねえか！」

戒は、ザナナが地図をなぞる指先を追いながら声を上げる。

だが、その指が赤い顔料で描かれた不気味な『森』の絵の上を通った時、声を失った。

「……なんかよ……ここは、危険な道なんじゃねえのか？」

そう言った戒の顔を、ザナナは不思議そに見詰める。

「よく、わかったな。」

「この道、とても危険。」

「だって……明らかになんか変なマークが……。
いや、それよりも早く隠さずに教える。」

声を荒げる戒。

「……一体、何がある？」

そんな彼の肩を抑えながら、バーグも興奮気味に訊く。

「とても恐ろしい凶獣。

皆は　　ここを『蠢く森』と呼んでいる。」

ザナナの低い声が夜の森に響いた。

「そこ、そのために、どんな生き物も近付かない。
とても、危険。　そんな場所。」

焚き火にくべた薪たきぎが音を立てて割れた。

「だから……何十年と、ここから山への道は、塞がれてるも同じ。
強制はしない。

選ぶのは、おまえらだ。

ひ弱なフ族、そこに行く勇氣、あるか？」

「……行く。」

世羅の即答に、戒とバーグも無言で頷いた。

「ならば、ザナナ……案内する。」

「一緒に行ってくれるの？」

世羅が顔を輝かせて言い、ザナナは深く頷く。

「戒。」

実は……族長に、死に至る傷 負わせたの、そいつ。」

「……!!」

戒とザナナが視線を交わす。

「族長は、この村で最強の戦士だった。
敵は、強いぞ。」

二人の全身は思わず奮え、強張った。

「実はザナナも、村人達の無念、晴らしたい。」

そして背にした槍をすらりと抜き、斜に構える彼。

「なんだ……。」

お前、不笑人にとっては 死は無駄じゃないとか割り切ったフリしてよ……」

「誰だって、死ねば、悲しい。」

割り切っても、悲しい。

それは、種族違っても、同じ。」

戒の言葉に、ザナナが答える。

「でも、森は危険。

いつも平静でなければ、自分が死ぬ。

だから、その為。

そしてザナナは……村人の代わりの、刃。

今回は、怒りの刃、になる。」

彼の決意の言葉に、一同は無言になった。

「すまん、ザナナ、言葉ヘタ。

うまく、説明、できない。」

「いや、わかる。」

バーグが別の方向を向きながら、言った。

「案内してくれる間、この村の守りはいいのか。」

戒が訊いた。

「次の族長、すでに決まっている。

皆も落ち着きを取り戻し、ザナナが居なくても、もう平気。

それに……族長の仇とるの、きっと村人の願い。

皆、喜んで送り出してくれる。」

ザナナは指の骨を鳴らし。

「出発は、明日の早朝。
覚悟しろ、フ族。」

そして低い声で言う。

だが。

そんな言葉にも、全く物怖じしない三人が目の前に居た。

顔を背けることなく、自分と同様に決意を固めた三人。

焚き火の炎が大きくなり、それぞれの顔を赤く照らすと。

一瞬、不笑人の獣の顔がありえない笑みを見せたような気がした。

第二章

第一話 『覚悟の対峙』

了

2 - 2 「赤より熱き青」

This story is a thing written
by RYU

Air・Fantagista

Chapter 2

「It runs on ground to go to
the heaven」

The second story

The blue is hotter than red ,

残骸に残った最後の灯火が消え。

焦げた鉄の匂いだけが置いてきぼりにされた。

人外の森の真ただ中へと不時着した飛翔艦。

赤い塗装は禿げ落ち、砲台は折れて朽ち。
見る影は全く無い。

『彼女』は、傍で^{そば}気丈に振る舞う『のっぽの男二人』を見上げ、すぐに目を伏せた。

夕べは ひとり、またひとりと。

早まった仲間達が出て行った。
……死を覚悟して。

そして、その大半が死ぬだろう。
考えるだけで、恐怖に身が震えた。

「……絶対に……許さへん……。
……ルベランセ……」

少女は決意と共に、薄汚れた青い布を握り締めた。

エア・ファンタジスタ
Air・Fantagista

・

第二章

天へ往くため地を駆けて

・

第二話 『赤より熱き青』

1

乾いた屋根の隙間から射す、陽の光。

屋内の暗がりを照らし、己の視界を広げる。

藁^{わら}で編んだ敷物の上で、大の字で寝そべっている自分に気付く戒。

まどろみの中、世羅が甘えた猫のように寄り添ってくるのが分かった。

床冷えしている朝は、人肌が心地良かった。
普段ならすぐに離れる彼も、半分覚醒していないために行動を起こせずにいる。

ところが彼女と反対側では。
頬に、ぞり、と荒いタワシのような感触。

「……？」

振り向くと、無精髭がさらに伸びたバーグがその顎あごをすり寄せていた。

「……………」

何故か二人に挟まれた状態で寝ていた戒は、無言でバーグのみに対し、みぞおちに膝をめり込ませる。

「ふっ…！」

「……うぐ…。」

不意の激痛に襲われ、彼は一瞬表情を歪ませ、だんだんと薄目を開けた。

「……俺様のそばに……寝てんじゃねえ！
気持ち悪いんだよ！！ ヒゲ！！」

「……あ……？」

頭から捲くし立てる戒に、まだ眠そうな顔で応えるバーク。

「……不笑人^{わらわすびと}の家が……あまりにも狭いから、仕方ねえだろ……。」

そして他人事のように呟き、半身を起こす。

「それに……小せえことを気にするな。
俺たちや死線をくぐり抜けてきた『戦友』じゃねえか。」

彼の冗談交じりの言葉。

目覚めと共に再び強く感じる、早朝の冷えた空気。
それが自然と、お互いの体温を求めさせたのだろうか。

照れくさく、そしてそんな弱さも認めたくない。
どこか混乱した自分の気持ちがつつとうしく感じる。

そんな中、バークは手元の余った毛布を、世羅が丸出しにしている腹に被せた。

それはまるで娘に対するような仕草だった。

戒は、まだ若干疲労感の残る身体に力を込め、肩膝を立てる。それに合わせてバーグも体を起こし、胡坐をかいて、彼と向かい合った。

「ところで……」

半開きの目。

だらしなない寝覚めの表情のまま、バーグは言う。

「おまえ、この森を…凶獣の森を本気で抜けるつもりか？」

「何だと？」

その質問に、眉をひそめる戒。

「ヒゲ、まさか一晩くらいで俺様が臆したとでも思ってたんじゃないだろうな？」

「……それ以前の話だ。」

はつきり言って、ここからは喧嘩が強いくらいじゃどうにもならん。

それこそ本当の修羅場を経験した奴じゃねえと厳しい…。
俺はな…それを言いたいんだ。」

「……………」

戒は黙り、少しの間考え込んだ。
だが、すぐにバ―グを凝視する。

「馬鹿言え。」

何のために、てめえとザナナがいるんだ。」

「俺と…あの不笑人…？」

「そんな風にヤバくならねえように、おまえらがちゃんと『道』をつくるんだろうが。」

……俺様のために頑張りやがれ。」

戒は自分を親指で自信満々に差して、バ―グの肩を真正面から叩いた。

「おまえ……本当に身勝手なガキだな！！」

複雑な表情で顔を上気させ、バ―グは鼻をこする。

「……人間つてのは限界あるんだ。」

ましてや、こんな危険な森でガキ二人なんて守りきる保証はねえ……」

そしてそのままの笑みで、戒の襟元をつかみ、引き寄せる彼。

「……だから、『世羅』はお前が絶対に守りきれ。」

命に代えても、だ。」

「……………」

その言葉に、戒は黙ったまままばたきを連発する。

「…聞ってるのか？」

約束しろよ、クソガキ。」

「う……うっせえ！！」

…なんで俺様が……命までかけて　そんな約束しなきゃならねえんだよ！？」

強い力によつて動かせないでいる戒の頭。

目だけを動かし、自然と目下で無防備に寝ている世羅の顔を見る。

「…女の子を守るのは、男の務めだ。」

バークは真顔で言った。

「…お前の言うとおり、『道』なら俺が作つてやる。

だから、世羅を守ることがお前の役目だ。

もしも…それを出来なかったら………」

そして、襟をつかんだ手を緩ませ。

「許さねえからな。」

そして軽く突き飛ばす。
交錯する二人の瞳。

やがて機を見て、バーグは素早く立ち上がってから伸びをした。

そんな中、屋内に入ってくる豹頭の男。

「ゆっくり休めたか、フ族。」

そのザナナの両手には一杯の武器が抱えられていた。

「……寝ている間、料理にされなかったようでな、安心したぜ。」

バーグはそっぽを向いて答える。

だが、さして気に留めることもなくザナナは近寄り、抱えていた武器を乱雑に床へと放った。

金属の落下音が、横になっている世羅に刺激を与え、気取らせる。

「……ん？」

「……あ……おはよ……」

まだ眠い目をこすりながら起きる彼女。

先のバーグの言葉を思い出すのを避けるため。
声を真っ先にかけられた戒は、世羅の顔から目を逸らした。

「よく寝れたか、世羅？」

そんな彼の代わりにバーグが問う。

世羅は頷き、身体にかけられた布を両肩に被せ直して身を縮こませた。

「……森を出す準備だ。

好きなもの、選べ。」

ザナナが簡潔に言う。

あまりに唐突なことに初めは誰も動かなかったが、やがてバーグが手頃な、刀身が剥き出しの剣を
拾い上げて刃を眺める。

「へえ、なかなかの業物わざものじゃねえか。」

すぐに持てるだけの武器を小脇に抱え、満足そうな笑みを浮かべるバーグ。

そんな彼の様子を尻目に、戒も適当な槍を一本だけ持った。

「……何に使うんだ、そんなもん。」

そして、バーグが肩に絡めた鎖の束を見ながら、呆れて呟いた。

「まあ……備えあれば憂い無しってな。」

バーグが笑う。

炎団の飛翔艦で目にした、彼の戦いぶりはかなり荒っぽい。

武器なんてものは消耗品とばかりに、乱暴に扱い、壊れたそばから捨てていく。

それが彼の戦法なのだろう。

戒はそれ以上何も言わなかった。

「……………」

傍らで細身の槍をじつと眺め、手に取る世羅。
かたわ

「……おい、別にお前は…無理すること…」

そんな彼女に言葉をかけようとするが、先のバーグの言葉を妙に気にしてしまう戒。

さらに、その様子を世羅は不思議そうな顔で見詰め返したので、彼は口ごもったまま背を向いた。

「……まあいい。
すぐに出発するぞ。」

「…朝……ごはんは？」

世羅が間の抜けた声で戒に訊く。

「出るッ出るッ……！」

だが、短い言葉と共に家屋を飛び出す戒。

「おいおい、何もそこまで急がなくても……」
「そうだよ……」

そんな彼に対し、バーグと世羅はあからさまに不満の色を浮かべた。

「のんびりしてられるか……」
「ルベランセだってな……来るか来ねえか分からん奴をいつまでも待っててくれるはずがねえ。」
「今は一分一秒を争う時だ。」

「まあ……一理あるな。」

神妙な顔つきで呟かれたバーグの言葉に、世羅が瞳を潤ませる。

「そうだ。

さっさと森を抜け、美味いメシでもフィンデルにおごってもらおうぞ。」

戒は一人、皆に先んじて外に飛び出し、真に受ける日差しに思わず目を細めた。

昨日までの^{よど}澱んだ空が、嘘のように晴れ渡っていた。

本当にそれまで気付かなかったが、生い茂った植物は緑が濃く、空へとまっすぐ伸びた木々は明るい。

風が心地よい空気を運ぶ中、ザナナが続いて外へ出た。

「ところで…どうしたんだ、この武器。

明らかに人間が作った物のようだが…」

その後から、バークが続く。

「この森に血まみれで落ちてた、フ族の武器だ。」

「ぶっ!!」

ザナナの言葉に、派手につまづくバーク。

戒が顔をしかめて、手にした槍を思わず手から離れた。

「こついつの、森に迷い込んだフ族の死体と一緒に、よく落ちてる。」

「……。」

「礼ならいない。」

大丈夫、ザナナ達は『肉』の方を大切にいただいたから……」

「あー！ー！！」

聞きたくねえっ！！」

わめき散らしながら、バーグは地を駆け回った。

「やっぱり、お前とは仲良く出来そうにねえ！！」

その大声でも、訳が解らず押し黙って立ったままのザナナ。世羅は、おかしくて腹を抱えて笑った。

目を閉じる戒。

肩に張った力が少し抜けていった。

「晴れてきましたねえ……お嬢……」

大きな岩に座ったまま、二人の男が呟いた。

「天気なんて…どうでもええ。」

少女は頭を垂らしたまま応える。

「そんなことより早く、この森を抜ける方法考え出さんかい！
この役立たずども！！」

そして高い声で吠えた。

「…あからさまに『役立たず』だつて……」
「…ひつでえなあ…」

呑気に、二人の男は苦笑しながら言葉を交わす。

「こ、こ、こんなところでえ……あたしが死ぬはずないんや…。
あたしを誰やと思うとんねん！」

「そ……それは…」

二人の男は互いを見詰め、うんざりした表情で視線を落とす。

「…泣く子もさらに泣きじゃくる…！」

そして一人が渋々立ち上がって、大声で空の向こうを指差し。

「大陸に名だたるジルルメツシュー一家の末娘！」

それに習い、もう片方の男が叫んだ。

「そう、シャロン＝ジルルメツシュー様とは、あたしのことやー！」

腰に両手をあて、堂々たる高笑い。

「しかも、稀代の美少女！」

間違いなく、歴史に名を残す器量！！

こんなチンケな森で野垂れ死になんて……そんなもったいないマ
ネ、神様がするはずないわー！！」

さらに続ける笑い声。

だが、それは数度 森にこだまただけで、むなしく静寂の中に
飲み込まれていった。

「せめて……せめて……」

「……この『決め台詞』^{セリフ}、生きている間に一度でも使いたかったなア
……」

そこで二人の男が涙と共に抱き合い、慰め合う。

「ふ、不吉なこと言うんやない！」

こ、これから何度も使うことになるでー!!」

「お嬢……」

二人は見上げた。

そこで、不意に耳にする樹木のざわめき。

「うわぁー!!」

それに驚いた二人の男は飛び上がるが早いか、その音の方向と逆に大急ぎで退散する。

「……ま、ま……！」

ままま…待たんかい!!」

少女も反応するものの、あまりに突然なことに腰を抜き、地を這いながら二人の後を追う。

「あたしを置いてくなんて……なんて子分やーッ!!」

「い、いででっ!!」

足元の石を前方を走る二人の頭へ投げつけながら、彼女は森のさなる深みへと入っていった。

「はっはっはあー！」

バーグが心底楽しそうに、剣を振るい、巨大な虫達を斬り倒していく。

そんな気迫あふれる彼の後ろを、残りの三人はゆっくりと歩いて続いた。

「森では、森の規則ある。」

ザナナが低く呻く。

「『源法術』は一切使えねえってことだ、わかるな？ 世羅。」

気休め程度に持った薄汚い槍の先端を、同じく軽い細槍を持つ世羅に向ける戒。

「：こういう危険な所は、ああいう単純で馬鹿な奴に任せておけばいい。」

そう。戦いしか能がねえんだから、そういう役目で当然だな。」

バーグの方を見ながら、彼は断言した。

「……戒。

族長のことだが……」

そののち、ザナナが立ち止まって唐突に言う。

「……隠していれば、良かったか？
知らない方が、幸せだったか？」

「……いや……」

空いた手を修道着のポケットに突っ込み、少し考えてから答える
戒。

「命を救うつてのは……難しいことだ。
それくらい知ってる。」

彼は昨晚 取り乱した自分を隠し、強がって見せた。

「……そうだな。

命を奪うことの方が、守ることより、何倍も容易い。
「たやす

ザナナが遠くを眺めた。

「……今向かっている所。」

『ある日』、村の子供が迷いこんだ。

勇敢な族長、皆が止めるのを振り切って、助けに行った。」

視界から高くそびえる木々に妨げられながらも、わずかに覗く青い空。

何筋もの細い雲が流れる。

「そして族長、『何か』にやられ、重い怪我を負った。
だが子供は逃げ、生き延びた。
それは、族長が^{おとこ}囷になったおかげ。」

「……良かったのかな？ それで……」

世羅が訊いた。

「……いいわけねえだろ。」

戒が拳を握りしめた。

「……さて、どうだろうか。」

ザナナが歩調を速める。

「族長は最期、とても満足そうな顔……してたぞ。」

彼はそう言い残すと歩調を速め、前を進むバークを追いついて森

の奥を先行した。

「……お、なんだあ？」

あいつ……人が気分良く快進撃を続けているのに、追い抜きやがって……」

「単細胞には、わかんねえ話だよ。」

不満顔の彼に、後ろから言い放つ戒。

「……誰が……単細胞だってえ？」

そんな戒の首に太い腕を巻きつけ、上機嫌のバーグが笑う。

「しかし、やっぱりよー、予備の武器があると安心だな。」

刃こぼれた剣を簡単に地に放り捨て、新しい剣を抜くバーグ。
先日よりも遥かに動きが軽い。

続けて、彼は慣れない手つきで槍を両手に持って歩く世羅を見る。

「世羅、お前は無理して戦わなくてもいいんだぞ。
この森では術は……」

「うるせえな、バカ。
何度も繰り返すんじゃないよ。」

バーグが言いかけると、戒が彼の大きな背を肘で小突いた。

「…うん、わかってる。」

でも……足手まといには、なりたくないから……」

そう言うと、世羅は口を結んでバーグを見上げた。

「…感心だな！」

他人まかせの、どうかの誰かさんとは大違いだ!!」

戒の方をわざとらしく眺め、バーグは再び前に行く。

その先の深い森は、一寸先も見えず。

振り返れば、昨晚身を休めた村ですらもう目視することは出来なかった。

「リ・オン様。」

「……なんだ、エンゼルエンデルハイム。」

机に置かれた、分解されてある金の置き時計。

リ・オンは作業を中断し、片目にはめた整備用の拡大レンズを外

して魔導人形の声へ顔を向ける。

「お客様が面会を求めています。」

「今、忙しい。あとにしろ……」

リ・オンの簡潔な言葉に、いつもの礼を返さない魔導人形。

「申し訳ありません。」

……面識の記録がございましたので、既に通してしまいました……」

その言葉を合図に、彼女の脇から歩いて姿を見せたのはフィンデルだった。

一瞬にして目を剥く、リ・オン。

「……………これはこれは……」

だが、彼はすぐに冷めた表情を取り戻して言い放った。

「……懲りずに またご来訪とは恐れ入るな……副艦長殿。
しかし残念かな、私はしつこい女が嫌いなのだ。」

時計が直っていれば、正午の報せしらせを鳴らしていただろう。

暖かい草原の陽気が、開かれた窓の外から廊下へ流れた。

室内に入り、そのまま主人であるリ・オンの傍らに移動する魔導人形。

その間というもの、フィンドルはずっと彼の針のような視線を無言で見詰め返している。

彼女を勝手に邸内へ通したことに、文句の一つを言いかけたり・オンだったが、人形独特の無表情な顔つきにやる気を削がれてしまった。

彼は仕方なく視線を、再びフィンドルへと泳がせて気を取り直す。

「……………それとも……昨日の言葉を真に受けて……………抱かれに來たのかな？」

フィンドルは軍服ではなく、私服で軽装だった。その全身を嘗め回すように見た後、挑発する彼。

しかし、今度の彼女は指先一つ動かさなかった。

「……………。」

そんな様子に何か感づいたのか、リ・オンも首を据えて構えた。

「……………失礼。」

私がお呼びしたのですよ、父上。」

彼女の脇から不意に現れるジン。

彼もまたいつものツナギ姿ではなく、彼女と同じく軽装で現れる。

「ジン……貴様……？」

……勝手な真似は許さんぞ。」

「貴方はいつも独りでしょう。」

たまには大勢で食事というのも良いのではないですか。」

対峙したまま、ふてぶてしく答える息子にリ・オンが唇を震わせた。

「……くだらん。」

エンゼルエンデルハイム、お客には早速お帰り願え。

……ジン、お前も消える。

ここは貴様の自宅ではないのだ、勝手は許さん。」

「よろしいのですか？」

だが傍らの魔導人形は、無表情で　またも意外な返事を返した。

その様子に思わず眉をひそめるリ・オン。

「本日の昼食は、すでに多めに作ってしまいました。」

……食材の量とり・オン様お一人の消費を比べますと、経済的損失

は免れません。」

「……………」

淡々と答える人形の言葉が、彼の目つきを変える。
そして微笑を浮かべつつ、その視線を受け流すジン。

「おまえたち……一体、何を企んでいる？」

目の前には変わらず、何にも動じず毅然と黙したままのフィンデルが居た。

「陽が傾いてきたなあ……………」

ただ呆然と、男二人が口を揃えて言った。

「お前ら、天気のことしか頭に無いんかい！！
まったく…芸の無い！！」

少女が怒鳴る。

わずかに進み、休憩をしてまた少し進む。

何か生き物に遭遇しそうになれば、一目散に逃げ出す。

その繰り返しだった。

方角もわからず、ただ迷っているのみ。

いい加減に、体力も気力も失せる。

「……芸が無いですって……？」

「確かに……この森じゃオレらは無力ですがねえ……」

不敵な笑みを浮かべながら、少女に近付く二人。

「お嬢……まだオレ達には夢と希望があるぜ……！」

「そつだ………夢と希望だ……！」

「……アホや。」

しゃがみこみ、力無く答える少女。

そこで目の前の焚き火が消えかける。

「あ………あかん………！！」

火打石を取り出し、必死に格闘。

だが、男二人はそんな彼女に目もくれずに陶醉している。

「源法術さえ使いりゃ、こんな森なんて……楽勝やのに……！！」

「もう変えられないことにグチグチ言うのは止めましょうぜ、お嬢。」

「とにかく、今は救援を待つことです。」

二人が大きな口で笑った。

「オレらに出来ることは、それまで生き残ることですよ。
……言っただでしょう?」

「オレ達三人、この旗の下で でっかくなるって!!」

そう言っつて、地面に置いた青い薄布を拾ってかざす。

彼女はそんなカラ元気の彼等を眺め、より一層に顔をしかめた。

「ほらほら、お嬢! 元気だして!!」

笑顔のまま、ふところからパンを取り出す二人。

「おまえら……いつの間に……」

少女が呟く。

「……何かあった時のために、食堂から かすめとっておきました!」

彼等はおどけながら、敬礼して笑う。

「用意がいいで……まったく……」

それを手に取り、千切って口に運ぶ少女。

「……せやな……」

こんなところで……終わるわけにはいかへん……

あたしは……」

だがそこで、藪やぶの中から、急な足音と草のざわめき。

「お嬢！！ 何か……何か来た！！」

「ひいつ……」

二人は、前で決意を語る少女を放って一目散に飛び出し、そばの茂みにもぐりこむ。

「お前らあ、何度同じパターンをさらすつもりや……！
子分は……親分を……守らんかいいいい……！！」

手にしたパンを投げ出して後を追う。

彼女は茂みに向かって勢い良く跳んだ。

「……おい……。」

足を止め、呆然とするバーク。

誰も居ないはずの森林に、明らかに目立った焚き火の跡。
その次に目に付く、落ちている鮮やかな青い薄布。

「この辺に住んでいるのは、猪族だけじゃねえのか？」

「……そのはずだ。」

ザナナは低い声を洩らした後、槍の先端で布の下を覗く。
その拍子に、森の奥がざわめいた。

すぐさま反応し、その方向を睨む彼。

奥の茂みが静かに揺れていた。

「……俺達以外に……誰か居るのか……近くに……？」

「ちょうどいい、休む。」

一人考えるバークをよそに、ザナナは近くの平たい岩に腰を落ち着けた。

「おい……そんな時間は……」

戒が駆け寄る。

「無理しすぎるのは、良くない。

死にたくなければ、ザナナの言うとおりにした方がいい。」

「……チツ……仕方ねえな……」

本当は足も棒なので、すぐさま地に座る戒。

背骨から腰にかけて襲う痺れ。

彼は竹細工で出来た水筒を取り出し、疲れを癒すために村の井戸から汲んだ水を喉に流し込む。

「おい……見えるぞ。」

「……何が？」

遠くを眺めるバークの肩越しに、興味で覗く世羅。

「……山だ……!」

直後の彼女の大声。

驚いた戒は、思わず口に含んだ水を噴き出す。

「山だと……？」

すぐに立ち上がり、岩肌をさらした山脈が遙か向こうに確認できた。

それは遠かったが。

目標を目の当たりにすると、やはり奮い立たせられる。

「ルベランセ……いるよね？」

「……信じて……進むしかねえな。」

世羅の言葉に、バーグが笑って返した。

「いま……あいつ、何て言った？」

突然現れた四人の様子を、茂みの中から覗きながら少女が呟く。

「……？」

いまいち要領を得ない様子で、二人の男が彼女に寄った。

「『ルベランセ』……言っただろ。確かに。」

「……え？」

「まさか……」

直後、素っ頓狂な声を上げ。

「飛翔艦ルベランセ!？」

二人はお互いを指さした。

「アホ！ 声がでかいわ!!」

下から、二人の口を塞ぐ少女。

「これは……とんでもないチャンスが転がってきたで……!」

「お嬢？」

「神様はやっぱり、あたしらを見捨ててなかった……!!」

声を小さく抑え、口から洩らす歓喜の叫び。

彼女は続けて四人の動向に食い入った。

「今、なんか聞こえなかったか？」

顔を上げるバーグ。

「獣が奇声でもあげてるんだろ……」

疲労が拭えない表情で、戒があしらう。

そこで彼は、自分の座る地面に転がっている物体に気付いた。

「……なんだ？」

これ……は……」

それは乾ききったパンだった。

よく見ると、そんな不味そうなパンが焚き火の跡の周りを幾つか散乱している。

バーグはその中の一つを拾い上げた。

「……なんで、そんなのがここに落ちてるんだ？」

「俺が知るかって。」

戒の言葉に、大した興味もないような素振りを見せるバーグ。

「おい…！」

なんか妙だぞ…全員…これには手エつけるな…！」

それで余計に、戒が振り返って警告する。

だが目の前には、既に何かを頬張っている世羅の姿があった。

「世羅…！」

「ん…！」

満足げな表情で駆け回る世羅、戒がそれを即座に追いかける。

落ちていた残りのパンは蹴り飛ばされ、彼の足が青い布を踏みつけ回った。

バーグが声を上げて笑う。

だが、そこへ飛び込んでくる一筋の人影。

「何しとんねん…！」

おまえツ…！」

甲高い声。

その直後、飛び蹴りを後頭部に受け、戒が地を転げる。

「あ、あたしらの大切な…！」

青布を拾い上げ、そんな無様な恰好の彼の上から捲くし立てる少女。

身体にフィットした、丈の短い青のエナメル製ワンピース。所々を黒いラバーバンドで締めている。

明るい茶色のシャギーの髪の上には、大きなゴーグルが乗って。それが日差しでまぶしく照り返った。

「……ぐ……？」
だッ、誰だ……！？」

苦悶の表情で目を開ける戒。
その際に、不可抗力で彼女の短いスカートの中身が覗いた。

「……こいつ……！？」
この……すけべ……！」

「……ぶッ……！」

さらに戒の顔面を踏みつける彼女。

呆氣にとられたまま、その光景を口を開けて傍観するバークと世羅。

「……動くな。」

そんな混乱の最中、一人冷静に背後に忍び寄ったザナナが槍刃を彼女の喉元に突きつける。

(…し…しもた!…)

そこで自分の犯した重大なミスにようやく気付く少女。

「いや……、ともども…」

その直後、茂みの中から出てくる声。

申し訳なさそうに森の奥から登場する二人の男。

鳥のくちばしのように 大きくて尖った鼻。

灰色の肌。

細身で背は高く、地を擦るくらいに腕が長い。

彼等は、少女と同じ大きなゴーグルを目にかけ、頭のバンダナをはじめ全身をつやのある

真っ青なツナギで決めていた。

「あ、イヤ、うちのお嬢がえらい迷惑かけたみたいで……」

ぺこぺこと頭を下げながら、ザナナ、世羅、バーグの順に回り。

最後に地面にめり込んだ戒の前でしゃがみこんで手を合わせる。

「…それじゃ、失礼いたします。」

少女を小脇に抱え、二人の男はそそくさと場を離れようとした。

だが簡単には退散は許されず、直後に恐ろしい殺気が背筋を襲う。

「……そう急ぐな。」

…まあ…ゆっくりしていけよ…」

こめかみを震わせながら、半笑い。

頭から大量の土をかぶりながらも復活した戒が、背後で二人の首の根を掴んでいた。

「…なんやねん！ この扱い！！」

地べたに並んで正座させられ、見下ろされる三人組。
その中の少女が、大声でわめいた。

「まるで尋問やないか！」

「不満なら、拷問に変えてやろうか！」

牙を剥いて戒が応戦する。

「おお！

上等や！ やってもらおうやないか！！」

「お嬢！ ここは抑えて！！」

青ざめ、少女を慌ててなだめる両脇の二人。

（エラそうに……これだから男は好かねん……！）

やがて少女は口を尖らせ、断りも無しに足を崩す。

「お嬢だつて？」

ずいぶん身分が高そうな呼び名だな。」

バークが肩眉を上げる。

「あ……イヤ……その……」

そんな彼の疑惑の目に対し、背筋を伸ばす少女の脇の二人。

「……現に格が違うねん！」

あたしの名は……大陸に名だたるジルルメ……むぐう……！」

「少し黙ってて下さい！ お嬢……！」

彼等は少女の口を慌てて塞ぐ。

「……なんか怪しいな……妙な方言を喋るし……」

腕を組みながら、ついに少女の顔を丹念に覗き込むバーク。

「怪しいと思うなら、すみずみまで検査すればええやん……！
ほら……！」

胸元の黒いバンドを外し、開け放つ少女。

彼女は外見に幼さが残るものの、彼女は豊かな身体つきをしていた。

「ついでに手籠めにしたらええ！」

あたし、ごつつ可愛いしな！

しかも丁度、ここは人の目の届かない凶獣の森やしな！！

いかがわしいことをするには、うってつけやで、オッサン！！」

「……あのなあ……」

目の前で言葉を速射する少女に、バーグは閉口した。

「年頃の女の子が……むやみに肌をさらすな。

おまえさん、名前は……？」

明らかに哀れみを浮かべた彼を頭上にして

「シャロンや……。」

うなだれて悲しむフリをしながら、少女は横目で両脇の二人に微笑んだ。

「……そっちの二人は？」

そんな三人を、戒がしかめっ面で見下したまま聞く。

「オ、オレはイール……」

「オレはムールって言うんで。」

同じ顔が揃って言った。

「双子か？」

戒が素朴な疑問を口にした。

「…こいつらも蛮族だろ。」

海の近くで似たような奴等を見たことがある……くわしい名前は忘れたがな。」

ザナナを一度見てから、バーグが口を挟む。

「よくご存知で、旦那。」

そんな彼に対し、へこへこ小刻みに頭を動かす二人。

「他の種族が、こいつらの個体を識別するのは困難だ。みんな似たような顔してやがるからな。」

「種族なんて、どうでもいい。」

戒が頭を振るう。

「…問題は、こんな場所で何をしてやがるってことだ。」

「ここは猪族の領域。」

他の者達がいるのは、おかしい。」

ザナナが付け加えた。

「え…と…それは…その…せやから…」

シャロンは適当に言葉を引き伸ばしながら、足元のパンを目に入れる。

「配達……」

「あ？」

小さく呟いた彼女に、それを聞き取るため戒が近寄る。

「パンの配達……。」

「パンう？」

彼の声は思わず上ずった。

（…ナイスだ、お嬢！…）

その瞬間、歯を出して親指を立てるイールとムール。

「オレら、陽気なパン職人でーす！」

「はあ？」

呆気にとられる戒の前で、まずはイールが陽気な声を張り上げて立ち上がる。

「パンを輸送騎で空輸してたんですよ！ オレらー！」

ムールが続いた。

「そしたら……墜落してもうたんや……。」

そして、シャロンが絶妙なタイミングで締める。

「……だから、怒ったのか？」

さっき、こいつがパンを蹴飛ばしたから……」

バーグが戒の肩を数回叩きながら訊いた。

「そうや……。」

パンは……あたしらの……命や……ねん……」

そう言いつつも、戒に踏まれて汚れた青い布を見詰めるシャロン。

「……最近のパン屋は、ずいぶんと遠い所まで営業してるんだな？」

「せや！ 今は空の時代やねん！
だけど……」

彼女は目を伏せた。

「その空輸の途中で、急に飛翔艦同士がドンパチ始めおって……！」

「……！」

その言葉にバーグが顔を歪める。

「そんでもって、続けて戦闘騎やら、銃弾やらが乱れて……あたしらの輸送騎は半壊。

なんとかここまで飛んできたのはええんやけど、不時着するのが
やっとやったわ……。」

「……そうだったのか……」

申し訳無さそうに頭を掻くバーグ。

「そりゃ、被害者に近いよなあ……」

「……もしかして、おっさんら……その『どっちか』の関係者なんか

「？」

シャロンの目が光る。

「……ああ……ルベランセっていう飛翔艦の乗組員だ……」

低く、声を絞り出すバーク。

（……やっぱり……！）

その言葉に、少女は思わず笑みを洩らした。

「しかしな……俺達だって好きで戦ったわけじゃねえ。
『炎団』の側から一方的に襲ってきやがったんだ。
だから、これは正当防衛ってやつで……」

「……事情はわかつとるがな……別にあたしらの輸送騎を修理せえとか言わへん。」

明るく振る舞い、バークの腰に手を回すシャロン。

「そのかわりと言っちゃあなんやけど……あたしらを森から抜けるまで護衛してくれへんか？」

「護衛？」

「…せや。

実はな……あたしら……」

イールとムールを一瞬見る彼女。

「全員、源法術士やねん。

この森じゃ……完全に無力なんや……。」

そして、そう言つて頭を垂らすシャロンに、世羅が笑顔で駆け寄つた。

「へえ……偶然。ボクもだよ。」

「誰も聞いてへんわ！

それに楽しそうに言うな!!」

無邪気な彼女の様子に、一転、シャロンが齒を剥く。

「そいつは災難だったな……。」

いいだろう、ついてくるのは勝手だ。」

バーグは即答した。

「待った!」

そこで畳み掛けるシャロン。

「それともう一つ、お願いがあるんやけど……」

「何だ？」

「中王都市まで、おたくらの飛翔艦に乗せてって欲しいねん。」

「……まあ……それは俺が決められることじゃねえが……頼めば何とかなるかもな。」

「こいつらもそうだし……」

バークは、戒と世羅を交互に見る。

「……おい。」

だがその視線を無視し、睨みを利かせて三人に近付く戒。

「お前ら、何でそんなことを言うんだ。」

「へ？」

「何故って……」

彼のきつい視線に怯えながら、シャロンの方を不安げに見るイー
ルとムール。

（アホ………！

強気でないとかバレてまうがな……!」

少女が気合を込めて戒の顔を見上げる。

「あたしら、『中王都市のパン屋さん』なんやで？
店に帰るには、それしか手段が無いねん。」

「……そういうことじゃねえ。」

ところが、戒は逆に冷めた顔つきで迫った。

「なんで、『ルベランセ』の行き先が『中王都市』ってことを知ってやがるんだ？」

「え……!？」

言葉を失い、口を開け閉めするシャロン。

「……そういえば……!」

それまでは同情で心を許していたバーグも身構える。

そこで、イールとムールが気付いた。

「……ふ……ふく! 服……!」

指差したその先はバーグ。

「あ！

中王都市軍の軍服着てるやん、あんた！！　それでや！！」

シャロンも必死に声を上げた。

「むう……。」

胸元を開け、少し着崩しているものの、紛れもない軍服。バーグが自分で襟をつまんで確認する。

「そついや、そうだな……。
疑って悪かった。」

そして、苦笑い。
つられて、引きつった笑いを浮かべるシャロン達。

「いややわあ。
人間、極限の状態に陥ると疑心暗鬼やからな。
…まあ、少しの無礼くらいは許したる。
ほな、はよ連れてってえな。」

立ち上がり、素早く戒の腕をとるシャロン。

「気安いんだよ、てめえ！」

それが他人にモノを頼む態度か！！」

だが、その手に捻り上げて、頭突きを一撃決める戒。

「い、いだー！ー！！」

涙目で悶える彼女を尻目に、岩に座っていたザナナが無言で立ち上がった。

そして、森の奥へと何事も無かったように進み始める。

「……偉そうによく言うぜ……てめえも一人じゃ抜けられねえくせに。ま、いいや。そろそろ行くぞ、世羅。」

欠伸あくびをして、ザナナに続くバーク。
そして、世羅。

さらに、戒が一瞥いちべつくれて青い三人組から離れた。

「……お嬢！　大丈夫ですか！？」

うずくまるシャロンに、イールとムールが駆け寄る。

「……。」

真っ赤な顔のまま、うつむく少女。

「な……なんや……？」

頬の熱を確認する仕草。

「ど、どこか痛むんですか!？」
「お嬢!？」

「……なんや……?……この胸の高鳴り……」

眩き。

「え!？」

嫌な予感に表情を曇らせる二人。

「……あ、あの……凶悪なツラ……すぐに手をあげる容赦ない性格……
誰かに似てると思わへんか？」

「……さ、さあ？」

シャロンは首をかしげる二人を通り越して、戒の背中を追った。

「……あたしの愛しい『兄貴』にそっくりやん……」

……めっちゃ素敵やで……。」

それも憂いだ表情。

「まさか…お嬢…あいつを好きに…」
「うそだー！ーッ！！」

ただただ、呆然とするイール。
握りこぶしで絶叫するムールは誰も居ない方へ奇声を上げた。

街の離れ。

馬車道から外れた、薄暗い森。

男は振り向いた遠くに、大きな屋敷を確認して狂気的笑みを浮かべる。

「お…おい……さすがに…これはマズインじゃあ…」

そんな彼に小さく声をかける、別の男。

「うるさい！

あの……強欲商人が金さえ貸してくれりゃあな……」

彼は手にしたスコップが止めずに答えた。

「ウチの…工場は…潰れることなかったんだ……！
これから俺は……どうにも…ならねえ…」

掘り起こされ続ける黒い土。

「…だからって……街全体を巻き込むぞ……ここじゃあ……」

「…知ったことか！」

その挟り取った土の中から小さい金属を取り出し、得物を真つ直ぐ落として粉碎する男。

「…もう……どうにでも…なれ……ハハハハ…」

狂気は、彼の目の前を大きな花びらが一枚舞ったことさえも気付かせなかった。

「……次、行くぞ。」

「ここら全ての結界は…全部破壊してやる……」

ざわめく、木々の音。

返事の無い友の方を振り返る男。

蔓が素早く足に絡まり、地面に滑りこむ自分の体。

闇の中でその男が最期に見たもの。

それは逆さまに吊るされた友の影だった。

長い昼食だった。

サイア商会の親子は、食事中も終始無言で、間に挟まれたフィンデルは非常に居心地の悪い時間が続いた。

「さて……食事も終わった。
もう帰れ。」

ナプキンで口を拭いながら、リ・オンが言う。

「……はつきりと申しておきましょう。
私は、貴方とゆっくり話がしたいがために、この食事の席を設けたのです。」

ジンが返す。

「話すことなど、何がある。」

「貴方は昔、その義足を変えない理由は『いましめ』であると私に言いました。」

しかし、詳しい理由は教えてくれませんでした。

私も貴方の過去などには一切興味が無かった。

ですが…突然、今は知りたくなったのです……息子として。」

単刀直入の言葉だった。

「……突然だと？」

…何を身勝手な。

しかも、今さら『息子』だと?。」

「私は…今まで貴方のことを避け、理解しようなどと思わなかった。」

父へ向かって正面から対し、ジンは続けた。

「しかし初対面であるにも関わらず、貴方を理解しようとするフインデルさんを見て、

私は自分を恥じたのです。」

「…行きずりの人間に感化されたとも言うのか?。」

首を左右に大きく振るリ・オン。

「どこまでも情けない男だ。
それに……」

そして、彼はフィンデルを見詰めた。

「副艦長殿、貴女も貴女だ！
人の息子をたらしこんで、助力を得ようなど！」

「……助力……ですか？」

しかし、さも意外そうな顔で答えるフィンデル。
そんな様子に、逆に辟易するのはリ・オンの方だった。

「あ……でも、そう捉えられてしまうのは……自然な流れなのかもしれない……。
どうにか援助していただきたいという気持ちが無いと言えば嘘になりますし……。
でも……ジンの言うとおり、私は一つの純粋な気持ちでここに
いるつもりです。」

独り言のようになり、段々と小さくしぼむ声。

「……『機先は生道にあり』……」

そして、最後に呟いたフィンデルの一言。
かろうじて聞き取ったり・オンが片眉を上げた。

「……『相手を知るには、戦力よりも心……根底にある生き方を知るべし』と？」

「あ…すみません。

私の好きな書物の…一文です…。」

「……ふん。

まさか、このリ・オン「サイアを口説くのに『兵法八十一計』を持ち出す者がいるとはな……。」

「…口説くだなんて…そんな…そういうわけでは…」

相手の博学さに気付き、顔を真っ赤にしながらフィンデルが言う。

「それに…私は自分のためだけで、ここにいるわけではありません。」

気弱な瞳。

だが、しっかりと真実を映してリ・オンの目を見る彼女。

「仲間が…ここへ向かっています。」

「仲間？」

「私が遂行した作戦のために、囹として切り捨てた仲間です。」

フィンドルは目を閉じ、手を自分の心臓に当てた。

「私達が無事に生きているのは、そのおかげです。彼等は危険を顧みず、戦ってくれました。」

改めて目を開けた瞳の奥から伝わる感情。

「彼等が生きているならば、この山を目指すでしょう。」

私は、それを裏切るわけにはいかないのです。

ルベランセが完全に近い形で彼等を待たなければ、彼等は失望するはず。

お互いが完全な状態での再会だなんて…可能性は薄いかもしれない。でも…何か行動しなくては…いられない。」

彼女は大きく息を吸い込んだ。

「私は…彼らに対し……『義理』を果たしたいのです。」

「……」

リ・オンが口を結んだ。

「…これは……放つてはおけませんねえ…父上。」

ジンが歯を見せて笑った。

「……くそ……！」

拳をテーブルに叩きつけるリ・オン。

「すみません……」

リ・オンさん……。」

フィンドルが頭を下げて詫びる。

「……どちらの……アイデアだ……？」

彼は依然として、苦々しい表情で二人をにらみつけていた。

「……私は……本当に食事に誘っただけですよ。
だが思ったよりも、賢くて勇敢な女性だ。
私が下手に小細工するよりも、よりスマートに父上を言い負かせ
てくれると信じていましたよ。」

「黙れ、ジン。」

人の揚げ足をとったつもりだろうが……援助などしないぞ。
他人の義理など……私には関係ない！」

そう言つり・オンは、明らかに取り乱していた。

「……副艦長殿。

…そうまで言うのだから、その仲間とはよほど長いつきあいの
だろうな。」

手元の紅茶を勢いよくあおり、そして息を整えながら彼は訊いた。

「いえ…出会ってからたった数日、数ヶ月の關係にすぎません。」

目を伏せるフィンデル。

「ですが、お互いが分かり合えるのに、時間は重要ではありません
！」

「……それは…」

自分と同じものを彼女の瞳の中に認め、リ・オンは視線も落とした。
た。

「理解できる。」

浮いた腰が、椅子に落ち着く。

「……私がまだ…商人の駆け出しの頃だったか…」

そして切り出す彼に、フィンデルとジンは見入った。

「若い時…船で大陸中を貿易していた時だ。

周囲の同い年の人間よりも、圧倒的な稼ぎが自慢だったが…」

空になったティーカップ。

「まだまだ青かった年齢だ…。

そのことが驕りであり、隙だったのかもしれない。」

言葉を紡ぎだす彼。

その横で、魔導人形は紅茶を静かに注ぎ足す。

「『その日』は私にとって、初の大きな商談…。

それは、とある船団へ兵器と船を売る手配だったのだが…。

愚かな私は…交渉に呼び出されて、それに応じ…」

そのカップを受け取るリ・オン。

「……騙されて、殺されかけたのだ。」

目が覚めると、違和感が体中を支配していた。

まず、左の足が普段よりも軽かった。
対照的に、頭は高熱で重い。

声を出して、助けを求めているはずの自分の口は ただ開閉を繰り返すのみ。

喉が乾燥して焼けているようだった。

「おい……みず……だ……
みずを……くれてやれ……」

闇の奥からの声。

上から乱暴に注がれた水が開いた口に溜まり、端からだらしなく首元に流れる。

その冷たさで、徐々に戻り来る感覚。

「……おう、気付いたか？

引き揚げるのが遅くて悪かったな。

お前の左足、サメのエサになっちまったよ。」

歪む視界。

目の前の大きな隼の首。

それがそう喋ったような気がした。

「あなた!!」

「おっと、こいつは失礼。」

今度は大きくて高い声に目覚めさせられたおかげで、はっきりと見える、傍らの女に叱られて舌を出す男の姿。

羽織った豪華な毛皮のマント。

大きな隼の頭の剥製はくせいが右肩に縫ってあり、羽毛が背まで広がっている。

さらに腰から左足まで覆った、虎の皮の前垂れ。
野性味あふれる、表情豊かな顔。

リ・オンは、これほどまでに『かぶいた』外見の人間はこれまでの記憶に無かった。

「…サメ……エサ……?」

そんな男から一旦目を離し、虚空を見上げながら呟く自分。

「あ、気にしないで……今は何も考えずに安静に……」

慌てて、なだめる素振りを見せる女。
繋がり出す記憶の断片。

「……!!」

全てを思い出したり・オンがベッドから跳ね起きる。

「た、立ち上がったちゃダメ!!」

そこで若い女性は、身体を張ってリ・オンを止めた。

温かく、柔らかな感触に包まれると、彼は身体を硬直させた。

命の鼓動。

感じる、二つの生。

「……おいおい、お前も安静だろうがよう。」

押し潰すようにリ・オンの上に乗る女性に、なかば呆れながら男は言った。

「あ!ごめんなさい! 私ったらつい……」

目を白黒させているリ・オンに謝りながら離れる女性。

そこで、初めて彼は彼女が妊婦であることに気が付いた。

大きく膨れた腹。

先ほどの鼓動の元だろう。

頭を垂らし、片足をシーツの外に出す。

先の男の言葉の通り、そこに慣れ親しんだ自分の足首は無い。代わりに、粗末な棒切れがズボンの裾から顔を覗かせている。

瞳を閉じるリ・オン。

気を落ち着かせようと努めた。

思い出せば怒りで身が滾たぎってしまっただろう。

「まだ痛む？」

女が尋ねる。

「いや……。」

…処置をしてから…どのくらい…経ったろうか…」

朦朧もろうとしたリ・オンの言葉。

女は男の顔を見た。

「海上で浮いてるのを発見してから……ざっと、丸二日は寝てたな。ウチの艦にいる、最高のドクターに感謝しろよ。もう痛くないだろう？」

リ・オンの足の棒切れを、腰の剣の柄で軽く叩く男。

「まあ……応急処置だがよ。」

「く……………！！」

それを聞き、怒りの形相で再び動こうとするリ・オン。

相手を信じ込み、単独で相手の船に乗ったのが間違いだった。
身の安全を考えていなかった自分の甘さが憎らしい。

商談を引き伸ばされている間、周囲に待たせた自分の船団が乗っ
取られるとは夢にも思わず。

敵の中心で孤立していることに気付くやいなや、夢中で海に逃げ
込んだ。

その代償こそ、今の無様な自分の身体

「二日だと……………！！？」

すぐに追わなければ……………奴等……………私を騙しやがって……………殺してく
れる！」

「だめよ！　今無理したら傷口が開くわ。

…あなた、とりあえず肩をかしてあげて。」

「なんで、俺が？」

女に急に話を振られ、狼狽する男。

「……いいから！」

人に良いこととしてあげれば、何か良いことあるかもしれないですよ！――」

「……はいはいはい……っと――！」

言われたとおり、男はリ・オンと肩をつないでやった。

「ところで……ここは……今……どこの海域だ？」

窓際へと移動する間。

「海域だあ？」

そんなリ・オンの問いに、男はとびきりの笑顔で返した。

「？」

その顔の意味が分からないまま、小窓に到達する二人。

そして、外を見た。

……しかし正確には見下ろした形になったこと。

それは今までの人生の中で、全く経験のない奇妙な感覚だった。

全身を突き抜ける衝撃。

突然の脱力……増えた彼の体重に、肩を貸した男も思わず態勢を崩す。

「おい!？」

あ……つぶねえなあ……。急にどうしたんだ!？」

「無理もないわ、あなた……」

女は微笑んだ。

「馬鹿な……私は夢を……見ているんだろうか……」

リ・オンが顔を己の手で覆ったまま呟く。

「空を……飛んでいる……」

彼方に望む地平線。

男が、自分を支えるために肩に余計に力を入れるのが分かる。

「はっは……ははあ……」

リ・オンを再びベッドに降ろし、こみ上げる笑いを薄く開いた唇から笑いを洩らし始める彼。

急に背筋を伸ばし、かしこまった仕草をする。

「ようこそお客人！」

大陸で一番最初の飛翔艦……アイデスペリ号へ……！」

男は大きく腕を広げ、手の平を返し、それを恭しく胸の前につけて笑った。

足に響くような大声だった。

3

「エンゼルエンデルハイム……！」

話の途中。

突然、リ・オンは声を荒げた。

「茶が切れたぞ……」

薄くて小さい、陶器のカップをつまんで軽く上げる彼。

「かしこまりました。」

魔導人形は丁寧になんかを受け取り、給仕台のポットから再び紅茶を注ぎ入れた。

「その話は……」

一段落した様子の彼に、ジンが切り出す。

「どれほど前になるのですか。」

その問いに、軽く^{まぶた}瞼を閉じるリ・オン。

「……16年前だ。」

紅茶が目の前に置かれる。

リ・オンはそれをすかさず口へ運んだ。

「……本当に……飛翔艦の創成期ではないですか……!」

フィンドルが思わず声を洩らした。

「大陸で初の飛翔艦に乗れたという、貴重なる体験だったな。」

リ・オンが肩をすくめる。

（…アイデスペリ……。

大陸史上初の飛翔艦……？）

フィンドルは士官学校時代の記憶を呼び戻す。
そんな名前は、歴史の教科書には載っていない。

「…嘘か真か…わからない。

そういう顔をしているな……副艦長殿。」

彼女を見透かしたようにリ・オンは言う。

その時には既に、彼は過去を語ることに對して苦しそうな素振り
は見せていなかった。

「二代目も産まれることだし……。

順風満帆ってやつかなア……！」

男は舵を握りながら、大声を張り上げて笑う。

その大声で、ブリッジ全体が揺れるような錯覚さえ覚えた。

ブリッジはいつも、その男の仲間達の笑顔が満ち溢れていた。

そんな光景をリ・オンは窓の脇に寄りかかりながら、険しい目つきで眺めていた。

「ごめんなさいね。」

女が近寄って、言った。

「これから、『宝の島』へ行くものだから……皆、興奮しちゃって……」

「……ふん……」

冷めた目つきで、リ・オンは女を一瞥する。
それでもめげずに、彼女は彼におとぎ話のような言葉を続けるのを止めなかった。

そんな話しこむ二人を遠くから眺めていた男は、やがて舵から手を離し、仲間の一人に操縦を任せる。

「宝の島だと……？」

馬鹿馬鹿しい。 子供の夢でもあるまいし……」

曇った瞳で言葉を放つリ・オン。

「それが夢でも無えんだな！」

男はいつの間にか、二人の傍^{そば}へと近付いていた。

「これから行く島はな、盛り上がった海底山脈に囲まれた『海路からは入れない』、いわば本物の孤島だ。」

さらに彼は鼻息を大きく一つ吐く。

「それゆえ手付かず。

行けるのは、まさしく飛翔艦のみよ！」

大袈裟な身振りと表情。
いつもの大声。

「これからは、飛翔艦^{こいつ}の時代になるぜえ？

…宝探しだけじゃない。

戦争だって、冒険だって……商売にだって…何にだって使える。」

「…こんな文明……怪しいもんだ。」

得体の知れないものに恐れを抱いた、それは自然とリ・オンの口をついて出た本心の言葉だった。

「それに、イカれてる。

いつ堕ちるかわからん物に、妊娠している妻を乗せているなんてな。」

みおも身重の彼女を見て、さらに呟く彼。

「堕ちるもんかよ、この飛翔艦が。」

自信に満ちた顔と挑戦的な態度を隠すことなく、その男は堂々と言い放った。

「いいから舵をとりなさい、あなた。

そろそろ目的の島……着陸は他の人にはまだ難しいわ。」

呆れ顔で女は言う。

「……む……。」

渋々リ・オンから離れ、彼女に従う男。

「自慢したいのよ、自分の飛翔艦を。

貴方はただの乗り物だと思うでしょうけど……彼は我が子みたい
に愛しているから……」

その様子を温かい視線で追いながら、自分の腹をさすって女が笑う。

「あと……一つだけ言わせて。」

そして彼女の少し強くなった口調に、リ・オンは見入った。

「ここは貴方の言うような、危険な場所ではないわ。

……この飛翔艦は絶対堕ちないもの！」

男と同じような自信に満ち溢れ。

それは、とても眩しかった。

「まったく……どうかしている!!」

「何が？」

ソファの上で読んでいる本を畳み、女が尋ねた。

「乗組員がほとんど出てしまっただうする!？」

医師とあんた、そして足を悪くしている俺だけでは、こっちで何かがあった場合……対応できんぞ!!」

怒鳴り散らすリ・オン。

「誰も踏み込んでない土地よ。
皆、行きたいに違いないわ。」

「……それを差し引いても……見ず知らずの男に、妻を預けて行くか、普通……」

ぶつぶつと呟き続けるリ・オンの様子に、女が笑った。

「あら？」

貴方は妊婦に手を出す、卑劣漢？」

「……私は違う！」

だがな、それはたまたま、私が私であるからでな……」

「……私の夫は、人の善悪の区別くらいつくわ。」

素の表情の女から、呆れるような答えが返る。

リ・オンは溜め息をついて今まさに飛翔艦が浮かんでいる真下、高い岩礁に囲まれた小島を窓越しに見詰めた。

溜め息で、ガラスが白く曇る。

くだらない商談で騙され、くだらない連中に助けられて、生き延びている。

それは、今まで上手に立ち回ってきた自分の人生において初めての汚点であり、この上ない屈辱だった。

生きる気力など、もう有りはしないように思えた。

「ただ……予定の日がとくに過ぎてるが気になるのよね……。」

「……なに？」

何気ない女の言葉に、鬱々とした気分から覚めるリ・オン。

「産まれないの。」

「……それは……どういうことだ？」

「予定から考えると　いつ産まれてもおかしくないんだけど……。まあ、早産よりは危険じゃないから安心よね。」

「……やはり、どうかしている……！」

能天気な様子で話す彼女と対照に、不安な表情を浮かべて叫ぶリ・オン。

「大丈夫よ……ドクターもいるんだから。」

「……私の足を治した医師か……確かに腕は悪くなさそうだが。」

「それに、これだけ遅いんだから、そろそろ産まれるわけ……」

女は、そこで言葉を止めた。

「？」

リ・オンが目を剥いて、彼女の様子を探る。

「……えっと……」

女が自分の腹をさする。

「……おい、まさか。」

足首に付けられた棒切れを擦りながら、びっこを引いて近寄るリ・オン。

「冗談は……やめろ……やめてくれ。」

今、自分がさがるような情けない顔をしていることは、彼自身には判らなかった。

「ドクター……」

そんな彼の目を、汗の滲み出した顔で真っ直ぐ見つめる女。

「ドクター呼んで来てっ……………！」

彼女の言葉に押し出されるようにしてブリッジを飛び出し、リ・オンは夢中で廊下を駆け抜けた。

「こっちだ……………！」

「…んああ？ 何じゃって!？」

「だから……………こっちだ!！」

「んあ？」

足と棒が繋がった部分が深く痛んだ。

廊下を踏み込むたびに、脳天へと鈍い衝撃が突き抜ける。

（…こんな…耳も遠いような老人が医師だと……………？
本当に大丈夫か…!?!）

失望の中、老人の細腕を引く。

「…いかなぞう…おぬしの足、完調にはまだまだじゃあ…」

そんな中、ようやくリ・オンが誰なのか判別できた老人が、見当違いの台詞を口にした。

「私のことなど良い!!」

強い言葉と共に、ブリッジの扉を両手で押し込んで勢いよく開くリ・オン。

目に飛び込む、ソファに身を沈め、小刻みに震えながら痛みをこらえている彼女の姿。

「……おや、始まったかの…」

だが老人は落ち着いた面持ちで腰に手を当てて、彼女にゆっくりと歩み寄る。

「何を呑気な！」

落ち着いている場合では…」

「場合じゃ。」

老人は短く言葉を切ると、女の額の汗を拭った。

「まずは湯を沸かして持ってこんかい、若いの。」

「わ、私がか？」

リ・オンは自分自身を指差した。

「他に誰がいるんじゃない？」

「……！」

言われたとおり、急いで再び廊下へと戻る彼。

勝手の知らぬ艦内を何度駆け巡ったことか。
ただただ、夢中だった。

傷が再び開いたのだろう。
足代わりの棒切れの根元には、血が滲んでいた。

だがいつの間にか。
彼はそのおかげで走り回れる、その棒切れに『何か』の感情を抱いていた。

何とか一通りの準備を整えてブリッジに戻り、後は医師に任せて
リ・オンは席を外す。

赤の他人の出産に立ち会うわけにもいかず、廊下にへたり込む彼。

ただ待つ時間がやけに長く感じた。

「……おい……若いの……」

厚い扉の奥から、もう心底聞きたくないと願う老人の声が再び響く。

「……若いの!!」

返事を待たずして、その医師は声を大きく張り上げた。

「……なんだ!?!
もう産まれたのか?」

重い体を引きずりながら、リ・オンはブリッジ内へ入る。

だが、そこで目に飛び込んでくるのは、血と羊水で濡れた床。汗だくで作業を続行している医師が居た。

「なにやってる! まだ……終わってないではないか!」

慌てて後ろを向くり・オン。

「貴様、医者なのだろう!?!
どうにか……なんとかしろ!!」

そして、彼はそのままの姿勢で叫んだ。

先ほどまで、あんなに笑顔を振りまいていた彼女。

今は一瞬しか目にしていらないが、息も絶え絶えだったのが判る。

ふと、心臓が高く鳴り響いた。

「赤子が……大きすぎるんじゃない……」

このじじいの力だけじゃ無理じゃ。

…手伝え、若いの。」

「……おまえこそ無理を言うな!!」

リ・オンは思わず振り返り、身を強張らせた。

勿論、そんな経験など全く無い。

「なあに……難しいことはないで。」

老人は彼女の服をまくり、大きく張った腹を見せた。

「上から下へ向かって、おなかを力強く押せ。」

「……し……しかし……!」

彼女の周りをゆっくりと回りながら、考えこむリ・オン。

「考える暇があるか、早くせいッ!!」

しかし、せかす老人の言葉で反射的に彼女の腹を両手で触れた。

張っている腹部は、つるりとした感触。
じつとりと汗で湿っている。

これが自分と同じ人間の身体であろうか。
不思議だった。

苦悶の表情で喘ぐ、彼女の顔を横にして思う。

やはり人というものは、こんな大きな物が体内にあっても平気なものではない。

たとえ我が子であっても異物には違いないのだ。

命とは人がどうにかできる代物しろものなのか。

おそろおそろ、力を込めて、押す。

彼女の汗で自分の手のひらは滑り、思うように力は入らなかった。

「…もっと、強くじゃ!!」
なにをビビっておるか!!」

「……くっ!!」

これ以上力を加えたら、中の子供を潰してしまいそうで怖かった。

「人は……強いんじゃない……！
これくらいでは壊れん……！」

リ・オンの中の恐れを見透かしたかのように叫ぶ老人。

「……くそ……！！」

その檄に対抗し、伸ばした腕に力が強く込もる。

「……か……神よ……！！」

「……！」

彼の発する言葉に、女は薄く目を開けた。

「……そなたが死を欲するのなら……どうか望む者を先に……！！」

何もかも失い、いつそのこと死んでしまいたいののはリ・オンの方だった。

だが、それに反して生きるべき人間が命をこぼそうとしている、
この世の不条理。

自然と涙があふれていた。
一段と込める力。

算段無しに一生懸命になったことは初めてだった。
何も考えずに、夢中で誰かを応援したのも初めてだった。

神への祈りも初めてだった。

うまく立ち回った人生など、生命の奔流の前では無力なのだろう。

押す。

命に価値をもたらすために生きる？

押す。

生きていることが既に尊いものだとしたら。

生き様など、なんとちっぽけでくだらないものなのだろうか

「……………おお……！」

やがてシーツの奥で、医師の歓喜の言葉と共に手が動く。

今まで手にしていた抵抗が消え、リ・オンは床に崩れ落ちた。

意識の遠くで、誕生の息吹が聞こえる。

それはとてもうるさくて。

とても心地良い泣き声だった。

「冗談だろう!？」

手にした財宝を廊下に投げ捨て、騒々しい足踏みでブリッジに突入する男。

「おい……ッ!」

今まで身重だった姿に慣れていたせいか。
子供を抱く、今の彼女はひどくやつれた印象を受けた。

「マジかよ……」。

よりによって……『ちよっくら』出かけている時に……」

拳で自分の側頭部を激しく殴りつける男。

「悪かったな……」。

肝心な時にそばに……居てやれなくて。」

「ううん…いいの。」

肩にかけられた大きな手。

小さな命を食い入るように見詰める夫を見て、彼女はさらに幸せを噛みしめた。

「謝って済む問題か。 バカめ。」

そこで寝ていたソファの影から、ゆっくりと顔を出すリ・オン。

「……な……。」

バカ……だとお！？」

「ああ、バカだ。」

おかげで…私がどんな目に合ったと思っているのだ！！」

「……何のことだよ、おい！！」

二人がにらみ合う。

「…私とこの子の命の恩人に噛み付くの？
あなた。」

「…え？」

照れくさそうに下を向くり・オンを、男が口を半開きにして見詰める。

「それはもう、難産だったわ。

ドクターったら、力が弱いから。」

「……手伝った…のか？

きさま…俺の妻の出産を……！！」

血が全面に回ったような赤い顔をした男に、肩を強く掴まれる
リ・オン。

「…勝手に悪いとは思っている。

だが、私とて必死だった！！」

「違う、そうじゃねえ！！」

リ・オンの肩に、彼の指はさらに強くめり込んだ。

「…ありがとうよ……！！

そして…すまねえ…！！」

身体と共に視界が揺らされた。

自分と違って、己の感情を真っ直ぐに表現する。
やはり豪快な男だった。

「俺の恩人よ！ 『義理』ができたな！！
こいつは絶対、返すぜ……いや、待てよ。
そうだ……先に聞かねえとな……。
お前、名前なんて言っただよ！？」

考えてみれば、まだ自己紹介もしていない仲だった。

「……リ・オンだ。
リ・オン＝サイア……という。」

女の抱いた赤子。

彼はそれを一瞬見て言った。

再び縫合してもらった足の傷が痛む。

しかし、その足の痛みこそ、自分が生きている証拠だった。

もしも死んでしまったら、決して味わえない痛み。

「ねえ……リ・オンさん……」

女が口を開く。

「まだ……生きること……失望してる？」

自分を覗く彼女。

その胸であどけなく自分を見上げている赤子の瞳。

その子から生命力を受け取ったかのように、彼の目は生き返っていた。

子供が生まれてから、数日経つたろうか。

空の生活にも慣れ、その中での人間にも慣れた頃。

「名前…まだ付けないのか？」

「そうね…名付け親になってくれない？
リ・オンさん。」

いつものようにリ・オンは窓際で。

女は子供の頭に薄っすらと生えた髪の毛を優しくすきながら。

「ふ……」。

その役目まで奪ってしまったら、『あいつ』に殴られる。」

「……そうかもね。」

二人は言葉を交わした。

「ところで…。」

また妻を放って、あいつはどこへ行ったのだ？

他の連中も、今日は朝から姿が全く見えないのだが…。」

「さて？ どこでしょう？」

含みのある表情で笑う女。

景色の真上から射す日差しが眩しかった。

海上に停泊し、エンジンを休ませていた飛翔艦全体が揺れる。

「ん？」

窓から外を覗くと、艦はいつの間にか船の一团に囲まれていた。

「…そんな…！」

またしても皆が居ない時に…！」

途端に騒ぎだすリ・オン。

だが、うろたえる彼に、彼女は落ち着いて笑うばかりだった。

「せめて…君と子供だけでも逃げ…」

「貴方、本当に優しいのね。」

「……何を……言っている!?!」

硬直する彼。

開くブリッジの扉。

そこには、大きな剣を片手に携えた男が立っていた。

「よお、リ・オン。戻ってきたぜ。」

「……何を呑気な!?!」

男の持つ大剣は、赤く濡れ、少し上気していた。

「今、私達は囲まれ……?」

表情を止めるリ・オン。

「……何に囲まれているって?」

再び確認する窓の外。

記憶にある船の姿。

男は初めて出会った時のように、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「私の…船だ……」

リ・オンは呆然と呟いた。

人を驚かせるのが心底好きなのだろう。

何にも変え難いものを、『男』はまた大声で笑い飛ばした。

「…一個船団から取り返してきた、というわけですか。

飛翔艦も使わずに。」

ジンが言った。

「私の船を傷付けなくなかった、という配慮なのだろうな。

飛翔艦は、船団の探索とその海域までの移動で使っていたようだが。」

リ・オンが薄目で口を開く。

「……まあ、ただ出産を手伝っただけにしては、高過ぎる見返りだったよ。」

「そんなこと…無いと思います。」

フィンドルが口を開く。

「当人に見てみれば…それでも安かったかもしれません。」

「……かもな。」

視線を落とすリ・オン。

「…とにかく私は奴の人格、そして飛翔艦というものにすっかりと魅入られた。」

彼は両手をテーブルに乗せた。

「私は彼等の飛翔艦を降りた後、経験を生かし、飛翔艦を商売へと結びつけた。

結果は御覧のとおりだ。」

フィンドルもすっかり理解していた。

彼の言う『義理』を果たすという信念は、まさしく彼の会話に出てきた『男』の生き方を
なぞっているのだ。

「今、その方達はどこに…？」

「気になるかね？」

「はい……。」

「…実はな、大陸をまたにかけて商売をするこの私が、いまだ『返していない』のだよ。」

彼等への『義理』を。」

その言葉に、訊いたフィンデルの方が言葉を失った。

「二人が決して堕ちないと言い張った、あの飛翔艦……」

声を詰まらせるリ・オン。

「…8年前……アイデスペリは堕ちたのだ。」

「…なあ、戒。」

あんた背え高いなあ、いったい幾つあるん？」

必要以上に戒に寄り添いながら、シャロンが訊いた。

「あたしの兄貴もあんたくらいあるんやけど……やっぱ、背え高い男はええなあ。」

そんな彼女に、うんざりした表情で黙して歩き続ける戒。

「あと、体重は幾つくらいあるん？」

ついでに、スリーサイズとか教えてほし……」

「おい。」

短く切って、立ち止まる戒。

それに順じて、止まるシャロン。

「ひとつ、俺様の一番大事なことを教えてやろうか？」

「え？　ほんま？」

嬉々として戒の顔に近付く。

「俺様はな……馴れ馴れしく話しかけてくる奴が一番……嫌いなんだよ……！」

だが、返されるのは鬼のような形相

「今度くだらねえこと訊いてきたら……さっきの頭突きを100発喰らわせるぞ。」

わかったな？」

苛々した口調で一通り言葉を放った後、シャロンを置いて前を行く戒。

置いていかれて茫然とする彼女に、背後でそれを眺めていたイーエルとムールが追いつく。

「あいつ……悪魔ですかい？」

そして、二人は同時に言った。

「アホ…。」

きつと、スティックなんや……。ますます惚れるわ……。」

だが変わらず、のぼせた表情で呟くシャロン。懲りずに、先を進む四人へと近寄っていく。

「…ありや、もうダメだな…。」

それを眺めながら、二人は力なく呟いた。

「お前よ、もっとあの三人に優しくしてやれよ……。」

追いついてきた戒に、バークが言った。

「馬鹿言え。」

「どこの馬の骨かわからねえような連中、俺様は信じねえぞ。」

悪態をつきながら返す彼。

「確かに…完全に信用すること出来ねえけどよ……。
これは俺達にも少しは責任が…」

「ねえよ。」

バーグの言葉の途中、戒が言い切った。

「全面的に、炎団の奴等が悪い。」

「…んで、その炎団はどうなったん？」

いつの間にか近付いていたシャロンが戒の脇から顔を出す。

「……あいつらなら、みんなやられたぞ。」

むっつり答えない戒に代わって、バーグが答えた。

「みんな!？」

その言葉に対し、シャロンが素っ頓狂な声を上げる。

「10番艦……いや、あの悪名高い炎団が……!?!」

「あなたたち……よほど腕が立つんですねえ!!」

両手を揉み合わせながら、彼女の後ろからイールとムールの二人も訊いた。

「いや……」

バーグが口ごもる。

「腕が良かったのは、俺達じゃねえよ……。」

そして唇を噛んだ。

「それにな……最終的に全部もっていきやがったのは……あの銀の騎士の野郎……」

長いまばたき。

「いや……わかんねえな……実際のところはよ!」

さらに、バーグは自分の髪の毛を乱暴に掴み、頭を掻いた。

「？」

「複雑だなあ……。」

彼の様子も言っている意味が解らず、三人も首をかしげる。

「まあ、ええわ。

ほんで、ルベランセは……無事なんか？」

「あ？

ああ……正直言って、それもわからん。」

バーグは我に返り、三人に向き直った。

「そーいや……ヒゲ。

炎団の奴等、もう一隻いやがったよな……。」

彼の一連の話を、脇で何気なく聞いていた戒が口にした。

(……！！)

身を強張らせるシャロン。

「お前らと違って、俺はずっと格納庫に居たから、そんなこと知らねえよ。」

バーグは、ザナナと並んで先に行く世羅の方を見る。

「炎団の別の一隻が、雲の中で待ち伏せしてやがったんだ。ルベランセを挟み撃ちにしようって考えたっただろうが……俺様たちによって逆に返り討ちにあったわけよ。」

戒は軽やかな口調で、さも自分のことのように自慢した。

「しかし……『あの一撃』で炎団を倒し、そのまま逃げきれたか……。それとも、態勢を整えた奴等に追いつかれてやられちゃったか。」

独り言のように呟きながら続ける彼。

その横で、シャロンが手に力をこめて握り締める。

（『あの一撃』……あたしらは そのおかげで……）

そんな彼女の様子を、イールとムールは背後から複雑な表情で見詰めた。

「……な、なあ、ルベランセってのは、よっぽど優れた指揮官が乗ってるんやろなあ……」

やがて、シャロンは訊いた。

（なんつったって…雲の中の敵まで予測して撃つなんて…常人やないで…）

先ほどまでは彼女に見向きもしなかった戒が、唇を歪ませて笑う。

「まあな。」

そして答えは、短く簡潔。

（絶～～対…そいつだけは殺したる……！！）

その反面、シャロンは闘志を込めて手の青い布を握り締めた。

「ただな……俺達もやられたからな。

…炎団に対しての同情は微塵^{みじん}も無えぜ。」

「へ？」

そのバーグの言葉に、イールとムールが声を揃える。

「ああ。

炎団の奴等は…もう絶対に、許さねえ。」

戒が続く。

「元はといえば…あいつらが襲撃さえしてこなければ…リジャンは死ななかったんだから…」

それまで比較的穏やかだったバーグから初めて感じる殺気。

「俺様だって、こんな足止め喰らってねえぜ…」

そして、戒からの相変わらずの淒味。

三人組は改めて恐怖を覚えた。

「あ…あたしらは炎団ちゃうねんで！」

思わずシャロンが声を上げて腕を振る。

「何言ってるんだ？」

そんな彼女の反応に、戒が訝^{いぶか}しむ。

「奴等のカラーは『赤』なのさ。
素人は知らんかもしれんがな。」

バーグが付け加えた。

(…あかん……危うく墓穴を掘るところやった…)

愛想笑いを浮かべながら、汗を拭うシャロン。

「…せやな……」

炎団の色は……『赤』やねんな……」

「…お嬢……」

視線を落とし、歩みが遅くなる。

イールとムールもそれに合わせた。

他の四人は気にせず前に行く。

「…アホ、今こそチャンスや。

そんな矢先に落ち込んでどないすんねん！」

「え……いや、落ち込んでるのは、お嬢……」

二人が面食らいながら苦笑する。

「そもそも！

あたしらみたいにな、実力のある人間がいつまでも下働きなんて間違つとる！

手柄さえ立てれば、こつちのもんや。誰も文句言わさへん……。嫉妬や偏見なんて……もう……」

シャロンの決意の視線の先に。

ひらり、と一枚。

大きくて黄色の花びらが舞い降りる。

前を行く四人。

後ろをついて行く三人。

その全員が動きを止めた。

強い風が吹き、目を細める戒と世羅。

周りの木々が揺れ。

他に赤、緑、青など、極彩色の……数え切れないほどの大量の花びらが、乱雑に舞い散りながら
目の前の空間を覆っていった。

顔や肌にまとわり付く、『それ』からはわずかな湿り気を感じる。

そんな異様な森の変化に、全員は暫く^{しばし}言葉を失っていた。

陽が沈みかけ、殺風景な深森。

花びらの乱舞は、それにそぐわない幻想的な光景だった。

続けて気取る、急な静けさ。

いつの間にか、虫や凶獣の類は近くにいない。

周囲の木々達は、見たことも無いいびつな螺旋を幹に描いていた。

ザナナが白き槍を構え。

バーグが痛んだ剣を捨て、背の愛用の大剣を改めて抜く。

それを皮切りに全員は自然と寄り集まり、お互いを背にして周囲に全身の集中を向ける。

緊張をもって、一人一人が瞳を動かしているのが互いに伝わった。

「なに、なに？」

みんな……冗談……やめてえな……」

シャロンが怯えた声で戒の服の裾すそを掴む。

進む方向の木々の奥。

多くの鮮やかな花を咲かせた、一本の大きな樹木があつた。

その木の根には、鮮やかな苔こけが生え、無数の乾燥した細枝が縦横無尽に伸びている。

その面が自然とわずかに盛り上がると、それに注目した全員は違和を感じざるを得なかった。

直後、小刻みに揺れる大地。
風に乗り、恐ろしい速度で近寄って来る『森の一部分』は、決して錯覚ではない。

皆を見て、左右に散るよう指示するバーグ。

全員が一切を考えずに分かれて両脇の茂みへと飛んだ。
地面に深い彫りを残しながら、過ぎていく土と疾風。

「ほんと……ここって面白い植物が多いよね！……前にボク達も飲み込まれちゃったし……！」

傍の木にしがみつきながら、世羅が戒を見詰めて笑った。

「『蠢く森』だって……？
ハッ！ 冗談キツいぜ……」

その脇で、バーグが鼓動を抑えながら呟く。

「あれは『突撃してくる森』じゃねーか、ザナナあ……！
戒が叫んだ。

しかし。
返事も、彼の姿も無い。

「……おい……不笑人はどうした!!」

バーグが叫びながら周囲を確認する。

反対側で隠れているのが見えるのは、青い三人組だけだった。

そして、夜空の下。

さらなる暗闇が覆う。

巨大な蔓と根がバーグの頭上を飛んだ。

自分達を足元から囲んでいる草枝。

さらに、世羅のしがみついている木さえも胎動を始めている。

わずかに浮き、めくれ上がる土。

バーグは一帯の植物の根の全てが、目前で動いている森の脇から伸びているのを見た。

そして、先ほど迫って来た『地』の中心部。

深く開いた穴の中から、赤みがかった光が、右から左に平行に動く。

(しまった…こいつは……!)

軟体状の物体が、その穴から飛び出し、天高く突き出して伸びる。

それは真ん中まで一気に裂け、口となり、歯を剥き出した。
その先に付いているのは、敵意にあふれる狂った丸い瞳。

(…森……なんかじゃ……ない……!!)

思った言葉を発するよりも早く、足元の細長い蔓つるに蛇のように素早く膝を絡め取られ、
バグはそのまま近くの木々に背から叩きつけられた。

くぐもる視界の中でさらに気付く。

盛り上がった、苔の生えた茂みは甲羅。

そこから生えた鱗うろこまみれの短足。
その蹄ひづめが、地と木々の根を抉えぐりながら突き進んだのであろう。

そして最も大きな樹木は、その甲羅から螺旋を描くように生え。
これから訪れる凄惨な光景に似つかわしくない、美麗な花を散らし続けていた。

一帯の植物の根が繋がる巨体の脇。
さらに隠れていた平たい木が翼のように広がる。

その生物は自分をさらに大きく見せて森の侵入者を威嚇し

《…ハ……アウウ……ウウウウウー!!》

天空に向かって低く咆哮する。

だが、月光は獣を祝福せずに、一筋の人影を映し出した。

甲羅を目掛けて伸びた白い槍を突き刺し、高い木々の上から軽やかにその上へ乗り移るザナナ。

その彼の背後を襲うため、脇の木々がすぐに伸びるが、彼は動かない。

「…族長は……勇敢であつたな……」

ザナナはうち震える声で吠えた。

白き槍が弾ける。

分かれ、伸びる槍の先端。

舞い散る花びらを全て両断し。

さらに背に迫る木々を粉碎する。

ザナナは跳び、身を反転させながら器用な指さばきで槍を繰り、再び一つにまとめる。

そして遠心力を乗せ、振り降ろす最高の斬撃。

「 ツ!？」

しかし、それが甲羅に命中した刹那、吹き飛ばされたのはザナナの方だった。

空に身を投げ出したままの無防備な彼に、すぐに細い木々が再び襲いかかり。

そしていくつもの枝に貫かれ、空中で弄ばれながら彼の身体はやがて闇へと消えていく。

「……………!」

「…ザナナ…!!」

その光景に、茂みから飛び出す世羅と戒。

柔らかくて長い凶獣の大きな首が、それを待っていたかのように二人を見下ろしていた。

「は……………はあっ…!!」

イルが両手をばたつかせながら息を荒げる。

「お……お嬢!!」

ムールが先行するシャロンに向かって叫んだ。

「逃げてても……いいんで？」

「オレら、ルベランセに潜入するんじゃない？」

このままだと……」

二人が呻くと、小走りで引き返してくる彼女。

「アホッ！」

死んだら、手柄も何もあるかいな!!」

さらに、二人の頬を叩く。

「それに、完全には逃げへん。

まず、あたしらが退路を確保して、その道を奴等に知らせたればええやろ。」

彼女の意外にも冷静な言葉に、二人は頷いた。

「しかし何や……あのけつたいな凶獣は……。

あんなん、見たことないで……」

「お嬢……それなんです……」

蛙のように大きい口を開くイール。

「ウチの田舎の、『珊瑚^{フイムス}亀』ってのに似てるなァ……。」
「そう、それだ。」

彼の言葉に、ムールは賛同した。

「でも……海辺にしか生息してないし……珊瑚の代わりに植物が宿つて……」

「……だから、亜種かも……!」

声を合わせて言う二人。

「おまえら、ほんまにアホか!
知ってるんなら、はよ言わんかい……!
なにか攻略法……あるんやろ……!」

早口で捲くし立てるシャロン。

「……そうですねェ……」
「……確か……」

のんびりと考えながら答える二人。

「オレらが子供の頃……あの凶獣が発生した時……」

「……確か、村人全員で逃げたよな。」

お互いを指差し、声を上げて笑う。

一方のシャロンは、聞いた直後に無言で踵^{きんす}を返し。
先ほど以上のスピードで前を急いだ。

「……まったく……とんだ災難やで……！！
……ん？」

走るうちに気付く、地面に掘られた小さな穴。

盛り上がった土。

その脇に無造作に放置されている、金属で出来た何かの残骸。

シャロンは何も考えずに、それを手に取った。

(……なんか……不気味やな……)

さらに付近には、血痕らしきものが飛んでいる。

「……あ！」

「……なあ、あれって……」

その間、シャロンを追い抜いた二人が前方で叫んだ。

彼等の手前に広がる、森を横切るように敷かれた小道。
そして、今度ははつきりと視界に映る高き山。

「もうすぐで…森が…抜けられる！」

「早く行こう！ お嬢！！」

喜び勇んで、飛び出す二人。

「せやな…あとは…ルベランセにも潜りこむだけや…」

後ろを振り返るシャロン。

だが手にした物体は、その時妙に冷たく感じられたのだった。

「二人とも…何やってる！？」

バグが痛む背をさすりながら、戒と世羅を怒鳴りつける。

彼が大剣を構えると、自分に敵意を向けていることを悟り、二人からは目を逸らして彼を見る凶獣。

瞳が合うと、全身の毛が逆立つ気がした。

「だって……ザナナが……！」

ザナナが消えた方を向き、訴える世羅。

慌てて追いかけようとする、そんな彼女を戒が捕まえる。

「落ち着け。」

……あれを見る。」

凶獣の甲羅を指差す戒。

そこには、ザナナの白い槍が刺さったままになっていた。

その先端は幾つにも分かれて伸び、周囲の木々に結ばれている。

凶獣が前傾するとそれが上手い具合に絡みつき、動作を鈍らせた。

自分に寄生した、思い通りに出来る植物とそうでない植物。
その判別が出来ない幼稚な頭は、すぐに癩癩かんしゃくを起こす。

長い首で、鬱陶うつとうしそうに木をなぎ倒す、怒りの声で吠える凶獣。
もはや、人間の姿はその目には映っていない。

「……うお……っ……！！」

折れた大木が足元まで飛んできて、バグが思わず退いた。

世羅の手を引いて、戒は一旦彼の所まで戻る。

「…いい時間稼いだ。

このまま逃げるって作戦だろ。　ザナナ。」

そして、森の茂みに向かって言った。

「……族長の仇、討てないの悔しいが…」

深い森の中を迂回していたのか、戒の言葉に応じながら、ザナナが痛む腕をさすりながら
茂みの中から現れる。

「ヤツは、自然と共に生きている。

倒すのは、むずかしい…」

「おい、こつちや!」

遠くから響くシャロンの声に、一同が顔を向けた。

「道を見つけたで!

森の終点まで、もうすぐや!」

その言葉で、バーグは剣の柄を握る手を緩めた。

「助かった…あんな化けモンと争ったら、命がいくつあっても足り

なかったからな!!」

そして安堵の表情で駆ける。
他の三人も続いた。

前を走るシャロンについていくと、地面に砂利が混じってきているのが分かる。

湿地が終焉を向かえ、乾燥した土の匂いがした。

「早く早く!」

「こつちですよー!!」

前方で両手を振って合図を送っているのっぽの二人に、皆が頷いた。

「……………」

だが、走る道の途中。
空いた幾つもの穴に戒が気付く。

何気なくシャロンを見ると、彼女は何かを手に持っていた。

途端に身体を襲う悪寒。

「……………きゃっ!?!」

急にシャロンの手を取り、立ち止まる戒。
そのおかげで、彼女の手はきつく伸ばされる。

「……何やってんだ、戒!!」

その様子に気付いたバークが叫んだ。

「……………」

「き、急な…展開やで！」

可愛い子に惚れるのもええが、こんなことは後にせえや!!」

眼前で、自分を睨みつけている戒に、シャロンは真っ赤になって言う。

だが、彼は自分の左頬の古傷に無言で指をあてがっていた。

どんなに痛みに慣れても。

慣れない痛みが一つだけあった。

自分の理性が飛びそうになるのを必死に押さえつけ、平静を保つ。

「そつだ、俺達が森を抜けた時点で『勝ち』なんだぜ。」

焦りの中、叫ぶバーク。

世羅も心配そうに、その脇で見詰めている。

「……これでもか？」

だが、戒はシャロンの手から金属の残骸を奪い取って、静かに呟いた。

「？」

それを不思議そうな目で見るザナナ。

「……まさか……！？」

状況を理解したイールとムールが叫ぶ。

「そつだ……凶獣^よ除けの……『結界』だ……！！」

戒の一言で、一同が言葉を失う。

「……つまり……それって……どういつこつちゃ？」

「お嬢！

ここから先も安全ではねえってことです！」

早口で答えるイール。

「今…この場所には、いわば結界の穴があります。
結界の効果は…その大きさで大体……」

残骸を見つつ、ムールが言った。

「50M^{マイフト}」

戒が答え、残骸を握り潰す。

魔導技術で高濃度の源を注入されていた器は無残に飛び散った。

「…そんな穴が、外へ向かっていくつも開いている…。
そういうことか。」

森の外へ向かって同様に荒らされている地面を眺めながら、ザナ
ナが言う。

「…何も難しいこと考えるこたあねえだろ。

幸い、今は敵の動きは止まってるんだ。

一旦脱出してから街の自警団とかに協力を求め、あの凶獣を殲滅
してもらおう。

その後、結界師を呼んで穴を塞げばいい。
それだけだ。」

バーグは落ち着いて一言一句を正確に言った。

「……あ。 そうやな…… はは。
びつくりしたで… まったく…」

自分の後頭部を軽く叩き、シャロンも高らかに笑った。

「ダメだ。」

……あの凶獣は…ここでブツ倒す。」

だが対照的に、恐ろしい主張を口にする戒。

「何言うてんのや、戒…！」

たまらず詰め寄るシャロン。

「みな、死ぬで…！」

「…一緒に残れなんて、誰も言ってねえ。」

「~~~~~ッ…！」

全く聞く耳を持たない彼に、シャロンは顔を強張らせて拳を握る。

「勝手にさらせ…！」

あたしらは、逃げさせてもらっわ!!」

踵を返す、彼女。

イールとムールもそれに従った。

だが、それ以外の人間は動かなかった。

「お前らも……行け。」

戒は残った三人に向かって言った。

「……残るよ……ボク。」

だが、世羅が切り出す。

「……俺様一人で充分だ。」

ひたすら気丈に自分を見上げる彼女から、戒は目を逸らして言った。

「ロクに戦えもしねえガキが何言ってるやがる。」

しかめっ面で、バークが大剣の鐔つばで戒の背を叩く。

「うるせえ、一人で充分だって言ってるだろ!!」

「まあな……本当は俺も逃げたいところだ。」

大きな苦笑を浮かべながら、あさつての方向を眺めるバーグ。
彼は状況もわきまえず、胸ポケットから煙草を取り出し、素早く
火をつけた。

「アレに気付かなきゃ……な。」

その目線の先に、大きな屋敷の屋根が見えた。

「もしも俺達がここから街へ逃げこんだら、いずれ追いかけてくる
凶獣は……」

「途中にある、あの家を襲うよ。」

バーグと世羅の交互の言葉。
ザナナは黙って頷く。

「ほんとおまえ、犠牲にするつてのが嫌いなんだな。
まあまあ、いいところあるぜ。」

「そんなんじゃないやねえ……」

にやけながら言うバーグに対し、戒が震える指で再び頬の傷をな
ぞった。

拭えない記憶。

忘れてはいけない過去。

その感覚は、自分の旅の始まりとどこか似ていた。

「…今回は…他人がどうのとか、関係ねえ。
ただ…」

頬の傷が一層疼いた。

「これだけは許せねえだけだ…!!」

崩れ、見る影も無くなった結界をさらに握り締める。

「くわしくは今は聞かねえよ。」

そんな戒を一言で制し、バーグは彼に背を向けて大剣の柄を再び握る。

握力の戻りは充分だった。

「なあ、世羅？」
「うん。」

無邪気に笑う世羅。

バーグはそれを合図に、口にくわえた煙草を噛み千切って捨てる。

二人を同時に眺めながら、戒は複雑な表情を浮かべた。

そんな彼等に、ザナナがゆっくりと近付く。

「お前たち、街へ行つて味方を呼べ。

…その間、ザナナが敵の相手する。」

急な言葉に、固まるバーグと世羅。

「……急に何言つてんだ、てめえ!!」

詰め寄る戒。

「森の出来事は、森で片付ける。

これは、きつと…ザナナの役目なのだろう。」

「馬鹿野郎!!」

森とか、役目とか…関係あるか!」

戒がザナナの着物の襟をつかんだ。

「ああ。

囧って作戦には賛成だが…」

バーグが視線を泳がせながら呟く。

「一人じゃ、作戦の立てようが無いぜ。

どうせやるなら、ここは俺と不笑人で食い止めるのが妥当だと思う。

戒と世羅だけ……」

「ヒゲ！

てめえも喋るな！！」

今度は、バーグの頬を掴み、引きちぎらんばかりに強く握る戒。

「これは、『俺様のわがまま』なんだ！！

誰も付き合っな！

……誰も触れるんじゃないやねえ！！」

他の者には理解できない戒の感情。

だが己の主張を全面に出す三人は、誰も引き下がる様子は無かった。

「……ねえ……」

そんな中。

世羅がつつむきながら呟く。

「ボクがルベランセから飛び出した時、戒は追ってきてくれたよね

…。」

「…それとこれとは話は別だ！
理由なんて…もう忘れちゃったしよ！！」

戒は言い放つ。

その言葉に、バーグが目を丸くした。

「クソガキ、それは違うぜ……」

そして、顎^{あご}の無精髭を撫でながら笑みをこぼす。

「『理由』なんて……いらねえんだよ！
『戦友』の間ではな！！」

世羅の頭を優しく撫でるバーグ。

「…自分は死にたくねえし誰にも死んで欲しくねえってのは、きつ
と虫のいい話だ。」

彼はせきを切って言葉を感情的に紡ぎ。
思い出すのは、逝った戦友の顔。

彼もこんな気持ちだったろうか。

「だから、もしも自分に何かがあった時、ここにいる誰かを

恨みそうだと思う奴は今すぐ逃げろ！！」

手にした大剣の切っ先を森の奥に見える凶獣の顔に向けて、バグは気炎を上げた。

世羅がザナナに近付き、見上げる。

彼女の美しいエメラルドグリーンの瞳に映る、黒い豹の顔が深く頷いた。

「……決まり！」

戒に言い、世羅が三人の前に出る。

やがて彼女は歩みを止め、一気に振り向いてとびきりの笑顔を見せた。

「……ボクたち仲間なんだから……」

笑って……自分の好きなこと……しようよ？」

森が静まりかえる。

「……てめえら……死んでも、本ッ当に俺様を恨むんじゃねえぞ！！」

戒が地面に向かって言葉を吐き捨てる。

影が近い。

彼は手にした細槍を素早く下段に構えた。

「笑って好きなこと……ね。
ゾクゾクすること言っじゃねえか…。」

自分もまだまだ若い。
バーグが歯を見せて、大剣を軽く肩に乗せて手を添える。

「…笑う…か。
…ザナナにも…いつかできるだろうか。」

態勢低く、四つ足で身構えるザナナ。
その姿はまさしく、森林に解き放たれた黒豹の如く。

先の近い距離とは異なり。
遠目でようやく見えてくる、はっきりとした凶獣の姿。

甲羅に植物がびっしりと寄生している、それはそれは巨大な亀。
食い込んだ槍が周囲の木々から外れたことにより、再び獲物へと
狙いを定めたのか。
短い足で大地を踏みしめて近付きながら、じっと考え込むように
四人を見据えた。

高々と伸びる軟体状の首。
そこから大きく縦に裂ける口。

冷気を帯びた空気に、煮えるはらわたから白い息が立ち昇る。

今宵、月を隠す雲は無い。

4

「…知つての通り、アイデスペリ号は決して有名な艦ではない。
だが、飛翔艦が墜落した情報というものは、その筋の者であれば
どんなに遠くにいようと
すぐに耳に入るものだ。」

リ・オンが両の手を重ね、前傾する。

「…そして、その墜落場所は何の変哲も無い西の海域。
私はすぐにそこへ飛んで行き、引き揚げられた飛翔艦の中を丹念
に確認した。」

彼の重々しい口調に、フィンデルとジンは思わず姿勢を直した。

「しかし…艦内は想像どおり酷い有様だった。
既に乗組員の死体は魚や凶獣の類に啄ばまれ、年齢や性の判別さ
え出来なかったほどだ。」

思えば、随分と長い話だった。
窓外の陽は落ち、既に夕闇を通り越して夜の空が広がっている。

「…情けない話だ。
そんな絶望的な状況にも関わらず、私はまだ『可能性』を捨てき
れないでいる。」

その夫妻の死体をこの目で見たわけではないからと、彼等が生き
ていることをいつまでも
信じ続けているのだよ……。」

リ・オンは首をゆっくりと左右に振りながら、呟いた。

「私も、副艦長と同じく諦めるわけにはいかない。
そこで『彼等』に出会わなければ…、『義理』というものを教え
てもらわなければ、
私の運命は大きく変わっていたのだから。」

彼の傍の魔導人形が、空になったティーカップを片付けた。

「そして、この足の棒切れは、過去の私の甘さをいましめるもので

あり……『義理』を受けた証拠でもある。
全てを返し終えるまで、決して交換しないつもりだ。」

リ・オンは話し終えると、かなり疲労した様子で肩を縮こませて小さく椅子を引く。

それまで若々しく見えた姿が、幾分歳をとって見えた。

「……なるほど。」

私は女として産まれた方が良かったと……貴方が良くそう言っていた意味も分かる気がしますよ。」

ジンは、自嘲気味に言った。

「あの時産まれた子は、『男』だった。

自分の娘を聡明に育て、その嫁にくれてやりたいという私の願望……それは決して否定しない。」

リ・オンは真剣な面持ちで語る。

その言葉に、ジンは視線を落とした。

何も答えない父親。

それ以上訊かない息子。

「ジンさん……。」

生に絶望していた……しかし、新たな生によって学び、救われた人間が『それだけ』を

望むはずがないと思います。」

二人を前に、さしでがましさを感じながらもフィンドルが口を開く。

「ああ……」。

そんな些細なこと……もう、とうの昔にあきらめている。生まれ持ったものは、変えようが無い。」

彼女の言葉に後押しされたように、リ・オンが呟いた。

「むしろ大事なのは……生まれきたこと自体なのだ。」

その言葉は、リ・オンが身をもって知った言葉だとジンにも理解できた。

「……しかし、些細なこととはいえ、長年息子を傷つけていたとはな……
悪い口を持つと損をする。」

肩をすくめ、洒落つ気を混じえておどけるリ・オン。
だが態度とは反面、目にははつきりと謝罪の色が浮かんでいた。

「私が一方的に反骨し……思い違いをしてきたのでしょうか……？」

ジンが思い詰めた顔でフィンドルを見る。

彼女は何も言わずに微笑んで返した。

「たえそうだとしても……」

同時に、リ・オンにも視線を投げかける。

「……親子の間で、深いわだかまりになりますか？」

暫くの間、魔導人形が最後の食器を片付ける音だけが響いた。
やがて目の前には、真っ白なテーブルクロスのみが残った。

「……どうなのでしょう、父上？」

ジンも彼女の言葉になぞられ、愚直に訊く。

「……些細なことと言っただろう。」

戦闘騎だけをいじっているから、心に大きなゆとりが持てんのだ。
もっと色々と学び……私を早々に隠居させてみる。」

その目線を逸らし、苦々しい顔つきで答えるリ・オン。

ジンが深く頭を下げる。

フィンドルがテーブルクロスの下を、己の両手の平を強く掴んだ。

おそらくはこみ上げる感情をこらえているのだろう。

リ・オンも唇を噛みながら、大きく鼻息を吐く。

「父上、貴方の恩人……その方のお名をお聞かせ下さい。
私も行く先々で、調べてみようかと思っています。」

前のめりで、ジンが訊く。

「……あの豪快な男……」

父親の名は、洵爛^{じゆんらん}。ディーベンゼルクという。」

彼に対し、素直に答えるリ・オン。

「……洵爛^{じゆんらん}……ディーベンゼルク……？」

そこで思わず身を乗り出し、フィンデルが繰り返す。

「……確か、瑠邑^{るい}の生まれと聞いた。
だから、少々変わった姓名だ……」

リ・オンは最初は何気なく口にしたが。

「まさか……？」

その瞬間、直感で肩を震わせた。

「いえ……」

フィンドルは言葉少なに、冷めた紅茶を乾いた口先へと運ぶ。

「……偶然かもしれませんが……しかし……私はその姓に……確かに憶えがあります……」

「なんだと！」

テーブルを強く叩きつける音。

驚くジンとフィンドル。

リ・オンはそんな二人の様子を見てようやく平静を取り戻し、浮いた腰を再び落ち着けた。

「……とにかく、その話をくわしく……」

今度は、突如として轟音が天井を震わせる。

屋敷全体が揺れるほどの衝撃に、室内の全員が一斉に立ち上がり、窓の外を向いた。

止まらない、短く太い足。

恐ろしいまでの巨体にも関わらず、速度の高い突進。
凶獣は本能的に、自分以外の生物全てに敵意をむき出して狙いを付けていた。

前方で高い木の枝を器用に飛び、ザナナが凶獣の気を空中に引き付けようとする。

いつか生まれる隙を信じ、藪の中を平行に疾走して、攻撃の機会を待つ戒と世羅とバーグ。

凶獣の殺気と圧力に押されながら、段々と目前に近づく森林の終点。

意を決して、挑発する距離を狭めるザナナ。

案の定、赤い目玉はすぐに彼を捉え、釘付けになる。

(…今だ……!!)

バーグは自分達三人に襲い掛かる枝を払ったための大剣を納め、肩に巻いた太い鎖を両手に取った。

「…どれ、力比べといこうか!!」

彼は叫びながら藪を飛び出して、前へ前へと伸びる凶獣の前足へその鎖を三重に素早く絡ませる。

それにより一瞬、凶獣の動きが止まり、鎖を握る彼自身も硬直し

た。

「……こんな小さな『なり』で恐縮だけどなあああッ!!」

一気に屈み、肩を支点に絡めた鎖を引く。

悲鳴をあげる上腕。

鎖の間から飛ぶ血液。

噛み合わせた歯が、軋む。

象のように太い一本の短い足が地を滑り、凶獣の態勢が傾いた。
斜めになった甲羅が弧を描き、内側の並木を一齐になぎっていく。

枝が飛び散り、砂塵が舞う。

その絶好の機を逃さぬよう、地を滑る甲羅に飛び乗ったザナナが、
その場に突き刺さったままの
自分の白い槍を抜いた。

凶獣の長い首にしっかりと狙いをつけ、力強く横に刃を払う。
しかし意外にも、少し歪んだだけで一瞬で形を復元しまっ、その
軟体状の皮と肉。

気が付けば、背に迫る木々。

ザナナは次の行動は考えてはいなかった。

一瞬の破裂音。

小石のように吹き飛び、高樹の太い幹に叩きつけられる人影。

バーグは下方で鎖を握りながら、それを見ていることしか出来なかった。

「……不笑人っ！！」

続けて彼自身へも目掛けて飛んでくる鋭い枝があった。
それらを避けながら叫ぶバーグ。

気を失ったのだろうか、ザナナは木の根元でうなだれたまま動かない。

そこで途端に眩む、一切の視界。
バーグ自身も、横一直線に飛ばされる。

その最中、かろうじて確認する自分を撥ねた巨木。
それは木々を抜け、自分の死角から打ち込まれていた。

軋む肋骨。

地に叩きつけられ、何べんも転がった。

「……ぐ……くそ……」

…まずい……ぞ……」

全身の神経が吹き飛んだような痛みだった。

バーグが虚空を見詰める。

聞こえの悪くなった耳に、近づく凶獣の地響き。

「……だめ!!」

今度は世羅が飛び出し、細腕で細い槍を凶獣の堅くて太い足に打ち付けているのが見える。

だが足元の些細な攻撃など全く意にも介さない様子で、森の終点で見え始めた山脈へと首を向ける凶獣。

自由自在に操る、触手のような木々で巨体を持ち上げてさらに角度を変え。

瞳は、さらにその中間にある屋敷の方を見る。

この時点で標的が変わったのが、皆にも判った。

「行かせ………ない!!
行かせない!!」

何度も何度も非力な槍を打ち付ける世羅。

蹄が土を抉り、全てが揺れる。

バーグは定まらない視界の中で、蠢く樹木の隙間に足を取られる世羅を見た。

あまりにも非力な抵抗。

その長すぎる時間の中で、見えるのは絶望だけに思えた。

「…なんでやねん………なんであきらめへんのや…。」

森を抜けた地点。

その見張りの高台の中で隠れながらシャロンが呟いた。

汗が、額から目の脇を滴る。

「お嬢！ 逃げるなら、早く逃げましょうよ………」
「ここだって安全じゃな……」

「やかましい！ ルベランセの連中がくたばるところ見ただけや！
あとちよつとだけ……待たんかい……！！」

そう言つて四本の腕を振りほどく彼女。

凶獣と戒達の戦いの様子が遠くから観察できる、この場所に身を隠してから暫く経つ。

その間、気の休まることは勿論無い。

「他の奴なんて、どうでもええやん…。
ちつと逃げれば…自分は助かるんやろ…。
それをなんで…わざわざ…」

昨夜からつい先ほどまで味わっていた死への恐怖。
シャロンはその感覚に嗚咽しながらも、彼等の戦いから決して目を離そうとはしなかった。

「エンゼルエンデルハイム。」

「はい、リ・オン様。」

リ・オンの呼びかけで廊下の柱を外し、その下の隠し部屋から巨大なガトリングガンを引き出す魔導人形。

銃身に付いた太い紐を引くと、けたたましい機関の音と共に銃身が回り、大股で床を踏んで足を張る。

モーターから噴き出す上気と風。
彼女のエプロンドレスがなびいた。

「いつでも出撃可能です。」

「よし。」

一連の準備を整え、玄関を出ようとするリ・オンと彼女。

「あ、あの…一体？」

全く状況の掴めないフィンデルが訊く。

「なに、大したことはない。」

大方、近くの凶獣除けの結界でも壊されたのだろう。」

「……ええっ？」

冷静に答えるリ・オンに、彼女は思わず間の抜けた声を上げた。

「いつものことです。」

武装した魔導人形も冷静に答える。

「父は、普段から恨みを買っていますからね。」

ジンは肩をすくめた。

「…馬鹿を言うな。」

いつも、おかど違いの感情で巻き込まれる私の身にもなってみろ
…」

「リ・オン様、既に戦闘が…開始されております。」

喧騒の方角を見据え、魔導人形が呟いた。

凶獣の瞳孔が開く。

まるで斧を振り上げるかのように。

甲羅の左右から翼のように広がる平たい樹木は、世羅へと目掛けて構えられる。

一方、針のように尖っている木々の奥に食い込んだ彼女の足。自分の力では、もはや動けなかった。

さらにその脇の地面を疾走するのは、細い枝と蔓。

半弧を描きながら、追われるようにその前を走っているのは戒。

一見、彼が単に逃げているように見える光景も、走る延長線上にいる世羅を見れば合点がいった。

そして後を追う植物群も、二人を合流させまいとする意図の下、動いている。

それを理解しているバグとザナナが、動かない身体を奮い立たせようとする。

自分達のとどめを刺すための植物すら、周囲には無い。

それが逆に悔しかった。

「…知ってるぜ……てめえらの怒る理由…」

戒がめまぐるしい風景と空気の抵抗の中で呟く。

「『外』へ出た瞬間…」

『俺達は、狭いところに閉じ込められていたんだな』って思うこと…。

だから…、腹いせに色々なところを襲うんだよなあ！？」

凶獣の蹄に負けないくらい、彼のブーツも勢い良く土を飛び散らせ、草むらを抉っていく。

「今回だって……誰が悪いかわかっているつもりだ……。
だがな」

タイミングを計り、世羅を目掛け片足で跳びあがる彼。
それを追う枝と蔓。

「俺様には『目的』がある！
お互いに退けない……そんな『さだめ』を呪いやがれ！！」

草と土の上を勢い良く滑り込んでいく身体。

伸ばす手。

伸ばされる手。

（……守れ……）

戒の頭の中で声が響いた。

朝に聞いた、バークの声の記憶ではない。
わからない何か。

その行動に合わせて迫り来る木々を無意識のうちに、手刀で弾く
戒。

世羅の手をとり、その細い腰を絡め取り、彼女の身体を木々の間
からもぎ取る。

頭上から打ち降ろされる樹木。
懷から取り出す赤い十字架。

「
『イデース
聖十字』！！」

地を踏み、駆けた自分の全身にブレーキをかけて、今までの速度
を相殺。

続けて態勢を正面に構え、防御の態勢をとる。

戒の手にした十字架から瞬時に伸びる、菱形の赤い膜。

堅い木と手の間に、火花が散り。

神の名の下、あらゆる種類の『瞬間の力』は無効化する。

しかし、続的にのしかかる、許容を遥かに超えた圧力。

戒は世羅を片手で抱えたまま、限界まで耐えたのち潔く聖十字を解除した。

瞬時に地面を蹴り、彼女を内側にしたまま転がる彼。

力の受け側を失った木々は地面を直撃し、その場を斜めに裂いた。
風圧と衝撃で二人が宙を舞う。

地に叩きつけられる寸前、片手を付いて何とか着地する戒。

「……戒！」

死線から救われ、喜びの表情を浮かべた世羅。

しかし次の瞬間に一転、表情を曇らせる。

流れる鮮血。

先の衝撃で額を割った戒が片目を強く閉じ、狭まる視界に抗っていた。

「……何も言うんじゃねえ。
かすり傷……なんだからよ……。」

世羅を包みこむように強く胸に抱いたまま、膝を立てて、小さな肩をつかむ彼。

「俺様は……いい……。
それより……今まで、散々楽させてやったんだ……」

耳元で囁く。

「……思いっきりブチかませ……『ここ』なら……できる……」
笑みと共に落ちる膝。

「……だから……負けたら……承知しねえぞ……世羅……」

そこはもう森ではなかった。

森林は既に抜けて、足元には人の手が施された短い芝と砂利道が広がっている。

吹き荒ぶ冷たい空気。

視界に広がる、大きくそびえたった山。

もう後は無い。

肩を抱いた、その手に触れる彼女の髪。

いつもの匂いを感じたまま、戒は意識を失った。

「…うん。」

…ありがとう…戒。」

戒の頭をゆっくり地に降ろし、その彼の前で、二本の足で決して退けない道を踏み。

両手を握り締め、堂々と眼前の凶獣を睨み上げる。

リボンが、上昇する風でなびいた。

息を大きく吸い込む。

予感。

前触れで。

肌がざわついた。

(…何やて…！?)

シャロンが思わず、身を乗り出す。

「お嬢…あれっ…？」

「妙だ…」

イールとムールが自分の手を含めながら、周囲を見回して呟く。

「まさか…あの子…が吸い込んで…！？」

やがて二人の視線は、光を放つ少女で留まった。

そして再び森の中にいるように、『力』が薄まった感覚に陥る。

「あんな…！」

あんなガキが…ひとりで…」

両肩を抑え、身を強張らせるシャロン。

「…こんなにも…こんなにも源を集められるもんなんか…！？」

流れる汗は、いつしか熱くなっていた。

両手をやや下で広げ、目を閉じる。

「《源・（フェルー）》……」

神語と共に、周囲に集まる粒子。

それはやがて世羅の身体よりも大きな光球となり、闇夜の地を照らした。

甲羅から真上に伸びた、尖った木々。

全ての先端が世羅を向く。

ザナは木々の破片の中から、バグが地に寝そべりながら、その木がゆつくりと少女に伸びていく光景を眺めていた。

風を切る音。

巻き上がる煙で視界は覆われ。

飛んでくる砂利を噛んだ。

そんな、幾度となく襲い掛かる絶望の中で見る

凶獣の首元近く。

木々をかわして夜空で止まるの世羅の姿。

「 《衝^ド》 ツー!! 」

右手が振り投げられ、放たれる大きな光球。

それは凶獣の頭部に炸裂し、その巨体は地から離れて浮かぶ。

《 …… ツオオオオオオオツ…!! 》

つんざく叫び声と共に 伸びる首。

「 …… まだ …… !! 」

浮いた凶獣へ向けて、中空でさらに構える世羅。

「 《源・衝^{フェル・ド}》 …… !! 」

光の小弾を散発。

順にへこんでいく凶獣の腹部。

その間、軽い身のこなしで着地する世羅。

休まない。

すぐさま凶獣の下方へと潜り、左手をぶん回しながら中心へと走っていく。

追いかける、地を這う植物。

世羅はそれを縫うように避け、凶獣の真下で両手を広げる。

充分に攻撃を引き付けてから跳び、そのままの姿勢でまたも中空を浮く彼女。

標的を外し、地にめり込んだ細い植物群。

そこに青白い光が集まる。

「
《氷・生》チス・キ！！」

凍る地。

植物が砕け、代わりに飛び出す幾多もの氷柱。ひょうじ

それは瞬く間に凶獣を囲み、足を封じた。

そして世羅は伸びた一本の氷に乗り、加速をつけて首の根元に辿り着く。

「
《源・衝》フェル・ド！！」

合わせた両手から、再び凶獣の首へと放たれる光球。

今度は加速を加えた、至近距離での着弾。

凶獣の体は地に張り付いたまま固定され、軟体状の首は上へと伸びることしか出来ない。

世羅が宙で反転し、今度は遠心力をつける。

「^{フェルト・ド}《源・衝》！！」

放たれる光弾によつて。

首が月へと向かつて伸び続ける。

張力の限界は訪れようとしていた。

裸足の足音。
疾風の如く。

満身創痍のはずのザナナが、乾いた甲羅の苔の上を駆け。
その頂点で両足で踏ん張り、溜めをつくる。

「……くらえ……」

そして、頭上の高い木の枝への跳躍。

逆さまになつたまま狙いを定め、その反動を利用して、完全に伸びきつた首に向けて斬り込む、全力の槍閃。

頭に被る皮 黒豹の口元から、吐き出す気迫と共に吹き出す
血の飛沫。

その瞬間、彼の瞳が下で寝そべるバグを一度見た。

(…そうか……!!)

咄嗟の理解。

生きるには『今』、身を起こすしかないことを悟る。

限界など顧みず、地面から跳ね起きるバ―グ。

動きを止めている凶獣の足を蹴って、さらなる高みへ。

伸びた首をなぞり。

ザナナと真逆の、上への斬撃。

二人の攻撃点がぶつかり合い、凶獣の柔らかい首が一瞬へこむ。

「…いい加減……ッ……くたばりやがれッ……!!」

重なる怒号と共に大剣を左手に預け、残った右手の爪で、伸びて張り切った凶獣の首を掻っ切るバ―グ。

その組織は、伸び続けた頭部と固定された体部に張力に耐え切れず。

軟かい皮は端から破れ肉は網状に広がり。

弾け　　自ら切れ、長い首はぶんぶんと身を振りながら夜空を舞った。

「……いよっお……しゃあああっ!!」

攻撃後、態勢もままならないまま落ちるバーク。
その中で目を閉じたまま、全身を広げて拳を握る。

飛び散る、握った汗。

地面に落ちる時に訪れるだろう、背の衝撃もはやどうでもいい。

だが地に着く寸前で、何かに支えられる自分の身。

表情の無い、黒豹の顔が傍に居た。

支えているのは、紛れも無く彼の腕だった。

「……けっ……」

自分だって…血イ吐くくらいヤバイくせによ……」

若干力が戻り、ふらつきながらも自らの足で立つバーク。

その言葉で、自分の状態に初めて気が付いたザナナは、血にまみれた口元を初めて拭う。

そして二人は無言でお互いの得物を合わせ、音を鳴らした。

その向こうでは、世羅が倒れている戒の傍に駆け寄っていた。

予想では、改めて静寂が訪れるはずだった。

だが耳に入ってくるのは、何かが砕ける音。

「……!？」

バーグが狼狽する。

首を失った凶獣の身体は、鼓動と共に動いていた。
頭部を失ったまま傷口から血液を振り撒きながら、足を膨脹させて氷を砕く。

「…これでも止められねえのか…!？」
なんて…生命力だ……畜生!!」

足の代わりに、凶獣を動かしているのは、地を這った植物だった。

「おいおい…支配のすげ替えてわけか…？」
冗談……!」

言いかけたところで、足元をすくわれるバーグ。

ところ構わず、根が地面を抉り始めていた。

世羅は、戒の介抱に手間取っている。
ザナナも足がかなり鈍い。

そんな逆境の中、凶獣の前に立ちふさがる三人の影。

「…………おまえら!？」

バークが驚きの声を上げると同時に、シャロンが両手を広げて、
下へ突き出した。

その手に目掛け、ジャンプするイールとムール。

「《源・衝》フェルト・ド!!!」

光る彼女の手。

軽い衝撃で大きく弾みをつけ、飛び上がって凶獣の反対側へ着地
する二人。

「お嬢おおおおお!!
どこッ! どこっ!???」

散開した状態から、慌てた声で叫ぶイール。

「…あと三步……後ろや！」

ムール！もちつと右に寄らんかい！！」

必死に叫ぶシャロン。

頷き、即座に命令に従う二人。

「……！？」

その光景を、意識を取り戻した戒が世羅の膝の上で呆然と眺める。

「我は陽に仕えしもの。

ラシメールの理と名のもとに、熱き糸を紡ぐべし……」

「其れはもつとも熱く……」

「其れより熱きものは無し……」

三人。

全く同時の詠唱。

「ホヲラ・ヒヲフ
《炎・光》！！！」

そして全く同じタイミングで放たれる、赤き光の一線。

それは三人が立った、正三角の真ん中に位置した凶獣を照らし、その焦点の赤い炎は、青い炎と変わる。

まはぬ
眩い閃光。

視界が白く覆われたかと思うと、次の瞬間には甲羅を残して、吹き上がる蒸気。

全ての植物と肉は、灰となって散った。

「……消えちゃった……」

その場にへたりこむ世羅。

「蒸発……させたのか……？」

バグがゆつくりと剣を降ろした。
ザナナは無言で槍を自分の肩に倒す。

「あつはっはは……はあはあ……。
どやっ？」

あたしは無敵や……！！」

息を切らせながら叫ぶシャロン。
駆け寄ってくる二人を迎える。

「……お嬢……。無理はこれっきりで勘弁だあ……。」

「こんな……危険なこと……」

「やかましわ！……ボケエー！」

「ここで目立たな……！」

わあ、とシャロンは一度声を上げてから向こうの四人に悟られぬよう、声を抑えてゆっくりと呟く。

「……言つたやろ。」

夢と希望はこの旗の下に……」

そして彼女が青い布を取り出すと、二人は嬉しそうに笑顔を見せた。

「そしていつか……『青』が赤よりも熱いということを証明したるつてな……」

少し雄弁なのは、利害を計算していたと自分自身に言い聞かせるためだったのかもしれない。

「だから別に……他人のためやのうて……。」

これは、あたしらのため……」

だが屋敷の方向から近付いてくる人影に気付くと、彼女はそれ以上何も語らなかった。

問題の地点に近づくにつれ、状況の輪郭が見えてくる。

大地は滅茶苦茶に裂け、無残な状態。
不安で仕方の無いフィンデルが、リ・オン達に先んじて現場に駆けつける。

「
？」

まず目に付いたのは、三人組。
奇抜な青い服装に暫し気をとられ、相手ともただただ、彼女と視線を交わすことしか出来なかった。

そして鼻腔に感じるのは、焼けた、胸の悪くなるような匂い。
凶獣の図体から噴き出ているドス黒い煙が、夜の空に紛れていく。

それを目で追いながら、ふと彼女は前を向いた。

視界の奥で少女と会う。

再び会う。

「……フィンドル…？」

その少女は呟いた。

「……世羅…ちゃん？」

気が付くと、飛んで抱きついてくる少女をフィンドルは胸で包んでいた。

やがて感覚に追いついてくる、温かい思い。

抱きしめた腕に力がこもる。

「頑張ったのね……みんな…」

世羅のすすだらけの顔を指で拭ってやり、遠くを見詰める。

破れた着物を纏い直す豹頭の男。

疲れ果て、地に寝そべるバーグ。

それらを目にして、彼女は思わず頬を緩めた。

「……戒くん…。」

片腕を、彼のために開けるフィンドル。

「……よせ」

ゆつくりと歩み寄ってきた彼は、照れくさそうに苦笑して通り過ぎる。

「彼等が……彼女の言っていた仲間ですか……。
この森を……徒歩で抜けてくるとは……。」

フィンデルの後方から、無残に破壊された森の様子を眺めるジン。

「……父上？」

しかし傍らのリ・オンの視線は、フィンデルの抱いた少女に注がれていた。

開いた目に、煙が染みた。

「……世羅……世羅だと？」

手袋が強く鳴る。

過去などを語ったからだろうか。
どこかデジャヴにも似た、邂逅。

遠く過ぎ去ったはずの時間を、リ・オン＝サイアは強く思い返していた。

第二章

第二話 『赤より熱き青』

了

2 - 3 「火種」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 2

「It runs on ground to go to
the heaven」

The third story

The small charcoal ,

「行ってしまうのね、リ・オンさん…。
寂しくなるわ。」

朝靄の中。
彼女が言う。

「…傷は、もう大分良くなった。
私がここに居る理由は…もう無い。」

飛翔艦から伸びた長い橋を降り、少し冷える波止場に立ったまま
リ・オンは言った。

「ただ、この恩は忘れない。
いずれ…」

「よせよ。」

湿っぽくなるのを恐れたのか。
眼前の男は照れくさそうに、太く短く言った。

「それより聞いてくれ。
こいつの名前…決めたんだぜ、リ・オン。」

そして、太い指先で胸に抱いた赤ん坊の髪を撫でる彼。

「…聞こうか。」

リ・オンが義足に体重をかけた。

「……『世羅』だ。

世羅Ⅱディーベンゼルク……いい名前だろ？」

男はいつものように、大きな笑顔と共に言う。

「……憶えておく。」

リ・オンは瞼を閉じて、軽く呟いた。

「そして約束しよう。

将来、私がその子に会うことがあったなら、必ず……」

言葉が終わる前に。

笑い、手を振る夫婦。

遠ざかっていく景色の中。

その時、自分は決意を持って大地を踏み出したのを、彼は再び思い出していた

耳の後ろから吹く、冷たい風。

「!?」

気配に気付き、世羅が振り返る。

少し小高い丘から、ただ押し黙って世羅を見詰める瞳。

リ・オンの上着の長い裾がたなびいていた。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第二章

天へ往くため地を駆けて

・

第三話 『火種』

「まさか、サイア商会の豪邸で休めるとはな……」

小綺麗な椅子に軽く腰掛けたバグが足を伸ばしながら、天井に吊るされた豪華な細工のシャンデリアを真っ直ぐ眺める。

「…知ってんのか？」

戒が訊いた。

「ああ、有名な武器商だ。

傭兵時代に……何度か武器を買ったことがある。
安くはないが、そのぶん質は確かだったが……」

バーグは呟いて返し、手前にあるカラメル色の鶏の姿焼きを何気なくフォークで突き刺す。

パリ、と乾いた音と共に破れた肉の表面からは、香ばしい匂いが立ち昇った。

その湯気を見上げながら、手を止める彼。

彼等が部屋に入った時には既に、テーブルにはそんな豪勢な料理が並べられていた。

加えて室内や廊下、至る所に置かれている美麗な芸術品の数々は、そこがまぎれもなく絵に描いたような富豪の邸宅であることを証明していた。

敷き詰められた柔らかな絨毯も、長旅で疲れきった足首を優しく癒す。

…だが、皆がそんな待遇を不自然に思う。それは当然のことであつた。

「そ…それでですねえ…」

「中王都市まで連れてつてくれる話…どうなりますかねえ…」

その中で、極めて低姿勢で尋ねる続けるイールとムール。

ゴーグルをつけているので相変わらず無表情な顔つきだったが、彼等の不安は伝わるものがあつた。

「……まあ、大丈夫だろ。
話は俺からつけてやるさ。」

「おまえ、そんなに偉いのかよ。」

戒の横槍にバーグは首を横に振り、すぐに肩をすくめた。

「偉くねえけどよ、土下座してでも頼むしかねえだろ。
約束だしな……。」

さらに彼は言いながら、壁に寄りかかるザナナの方を見る。

「……お前はとうすんだ？
森へは帰らねえのか。」

「……ザナナ、悩んでいる。」

黒い豹の頭が少し揺れた。

「一体何を悩んでるってんだ？
……ていうか、不笑人でも悩むことがあるのかねえ。」

苦笑しながら頭を掻くバーグ。

そこでドアノブが回る金音。
皆が注目する中、客間の扉が開かれた。

「…ふう…ええ湯やったわ…」

タオルを片手に髪の毛を拭きながら、入って来るシャロン。
世羅もその後から続く。

彼女達からは湯気が上気しており、石鹸の香りが瞬く間に室内を
占拠した。

「あ…すごい…！」

テーブルに置かれた豪華な料理の数々に、すぐに目を輝かせる世
羅。

真っ先に誘われるようにしてテーブルにかじりつく。

「まだ手エ出すなよ。」

卑しいと思われるからな。」

椅子に座る戒が、腕を組んだまま不機嫌そうに言った。

世羅は椅子につけた尻を浮かしたり沈めたり、そわそわしながら
指をくわえ、それに従う。

「構いませんよ。」

どうぞ、召し上がって下さい。」

灰色の髪、大きく黒目がちな瞳が印象的な身なりの良い青年。
そしてその背後には、表情の無いメイド。

そんな二人が、開け放たれたままになっている扉の奥、廊下側から姿を現していた。

「あんたがこの家の亭主……じゃなさそうだな。」

全員が彼らに対して少し身構える中、青年に言葉をかけるバーク。

「父が直々に挨拶出来ない無礼をお許し下さい。

ただ今、壊された結界を修理する手配をしておりますゆえ……。」

毅然とした態度。

だが全員に対しての言葉のはずなのに、彼の目は世羅のみを捉えていた。

「私はジン＝サイアと申します。

遠慮はいりません、どうぞ楽にして下さい。」

さらに彼は世羅に近寄ると、彼女の小さな手を取り、深い礼をする。

その様子に、全員は互いの顔を見合わせた。

「……食べていいの?」

「どうぞ。」

毒など入っていませんよ。」

たずねる世羅に再び返される、柔らかいジンの言葉。

彼はさらに、握った彼女の手にもう一方の手の平を被せた。

そして世羅は無言で、戒の顔色をうかがう。

「……………いいんじゃないか？」

戒は面白くなさそうに、口を歪ませて言った。

途端に食器を手に取り、世羅は乱暴な食事を開始する。

だが、目の前のジンはその様子を見て、顔をしかめるどころか、微笑みさえ浮かべていた。

(……………なんなんだ？)

戒は目の前に突然あらわれるなり、世羅へのあからさまな好意を示す彼の心理が読めないでいた。

「な、なんなんだ!？」

そこへザナナの上ずった声。

見ると、壁際に追い込まれたザナナが先のメイドに着物を脱がさ

れ、上半身を触られていた。

「ふ……ぐうつうつううう……!!」

唸りながら、さらに高い声を出す彼。

「エンゼルエンデルハイムは優秀な魔導人形。
これより、皆様には彼女に診察を受けていただきます。」

物腰を崩さない態度で、ジンが言った。

「この方は内臓を痛めております。
後で薬を処方いたしますよう。」

そうこうしているうち、魔導人形が言う。
ザナナは彼女の手を振りほどくと、無言で自分の腹部をさすって
から急いで着物を纏^{まと}い直した。

「……たいへん！ 戒、治してあげて!!」

食べながら叫び、食器をテーブルに乱雑に置く世羅。

「あ、ああ……。」

戒が苦笑を浮かべながら答え、立ち上がる。

だが対照的にザナナは一步退いて、それを制した。

「平気だ。」

ザナナ、そんなに弱くない。」

「…無理するんじゃないよ。」

ポケットに片手を突っ込み、視線を伏せてピアスをいじる戒。

「無理してるのは、戒、おまえだ。」

豹の皮の奥の目が、そんな彼を射抜く。

「誰だって、痛いのは嫌だろう。」

身体は自然に治る、心配いらない。」

そう言うとは彼は腕を組み、黙って壁に背をもたれかかる。

「…他のフ族にも、言っておいた方がいい。」

おまえの能力は、そんなに軽々しく使えるものではないと…」

「わかったわかった。」

あたかも世羅を責めるかのようなザナナの口調に、戒が素早く答えた。

「ところで…俺も脇腹をかなり痛めたんだがよ…」

上着を半分まくり、肌をさすりながら魔導人形に近づくバーグ。

「…せや！

あたしも森中駆け回ったもんやから、体中を枝とか葉で擦っても
うて…」

興味半分でやって来るシャロン。

イールとムールも彼女の背後で愛想笑いを浮かべる。

「……貴方は大丈夫でしょう。」

ところが、バーグに向かって即答する魔導人形。

「それと……貴方と貴方と…貴女も。」

そして冷めた視線で、シャロンら三人を眺める。

「なんで、そう言い切れるんだよ。」

バーグは不満そうに口を尖らせた。

「見た目が平気です。」

魔導人形と同様、冷めた目つきで歩み寄って答えるジン。

「なんでやねん!!」

思わず駆け込み、シャロンは彼の胸元を手の甲で突っ込みをいれた。

「……さて……」

だが、ジンは無反応。
残った戒とその横の世羅へ目を向ける。

それになぞられて迫る無機質な魔導人形の視線に、戒が思わず一歩退いた。

「貴方は……」

均整の取られた妖美な人形の顔。
それは戒の顔に寄り、体温の無い指先が彼の頬の傷に触れた。

「……触るな。」

顔を振り、彼女の手を払う彼。

「これは昔の…」

「いえ。」

魔導人形は無表情で自分の額を指す。

それに倣^{なら}うように、戒も自分の同じ箇所に触れる。

今は血は止まっていたが、そこには確かに先の戦闘で負った切り傷があった。

「貴方は、適当な塗り薬で充分でしょう。」

ジンが言った。

横切る際に二人の視線が重なる。

しかし、ジンはすぐに戒の視線から目を外して、その後ろの世羅に合わせた。

「…そして、貴女は……」

ジンの代わりに言い、食事に夢中の世羅を見下ろす魔導人形。

「どうぞ。別室へお越し下さい。」

彼女の手を取り、引く。

「……………?」

ちょうど肉団子を口に頬張っている途中。
そんな世羅が大きくまばたきした。

「おい、何を勝手に決めて…」

すぐに魔導人形へ詰め寄る戒。
だが、その間へ身体ごと割って入るジン。

「…彼女は『男』ですか？」

そして、彼は言った。

「……あ？」

見当違いの言葉に、戒が目を剥いて凄む。

「どういう意味で言ってるんだ、この野郎…！」

「『女性』ならば、皆さんが居るこの部屋で軽々しく診察出来ない
でしょう？」

戒の静かな恫喝にも全く動じずに、ジンは襟を直しながら答えた。

「あいつは、どこも悪くねえぞ？
食欲も旺盛だし…」

バーグが言う。

「あれだけの戦闘の後です。
言い切れますか？」

自分達とは明らかに違ったその対応に、言葉をかけたバーグ、さらにシャロン達も啞然となった。

「……さあ、どうぞ…別室を用意してあります。」

魔導人形は早くも廊下への扉を開き、世羅を促している。

「……戒……」

半ば強引に手を引かれ、不安げな瞳で世羅は戒に訴えた。

「…待て……!!」

ジンらを止めようと、必死な顔で戒が前へ出る。

だが、その瞬間

「料理……」

世羅の口をつく、意外な言葉。

「ボクの分も…残しておいてね…」

その泣きそうな声に呆れ果て、途端に脱力する戒。

そうこうしているうち、魔導人形は室内にジンを残したまま世羅を連れて行く。

ドアはきつく閉められ、戒は立ち尽くしたままで暫くその扉を眺めていた。

「なんやねんな、この差は……！」

そんな彼の横顔を見ながら、腹いせに手元の料理をがつつくしゃロン。

「あきらかにリアクションが違いますねえ……」

「それより……こりゃ、うんまい。」

イールとムールも手羽先を手に取り、かじりつきながら言った。

「……ところで…戒ってお医者さんかいな？」

「……なんだと？」

シャロンの言葉に、戒は我に返って肩眉を上げる。

「怪我を治すとか、さっき言ってたやん。」

「ああ、それが…」

面倒臭そうに生返事しながら、彼は何気なく手前のパンを手にとった。

「こいつ、『エア・ファンタジスタ天命人』なんだ。」

「…余計なことを言うんじゃない…ねえ！」

横から口を出すバーグの肩口に、戒はフォークを突き刺す。

「へえ……そうなんや。」

だがシャロンは平凡に答え、イールとムールも何事も無かったようにもぐもぐと口を動かしている。

「ありや。」

あんま、驚かないんだな。」

残念そうに呟くバーグ。

「天命人って、みんなけつたいな能力があるんやろ？
あたしの身内にもおってな。」

「……じゃあな、これを聞いたら驚くだろうなあ……」

彼は今度は、笑いを含む自信満々の表情をした。

「アホ言ったらあかで、おっちゃん。

あたしがそうそう驚くことなんてあるかいな。」

答えるシャロン。

脇のイールとムールも大きく頷く。

バーグは大きく息を吸って、口を開いた。

「こいつは、修道士だ。

しかもレティーンの神学校、首席卒業……」

「えッ……ええええええええええっ!？」

今度はすぐに天井に届かんばかりに飛びあがり、口にした料理を
吐き出しながら叫ぶ三人。

「み、見えませんねえ!!」

「全然!!」

大口を開けて、戒を指差すイールとムール。

シャロンは爆笑し、声にならないで身体をくの字に曲げて悶絶している。

「だから、余計なことは言うなって言っただろうよ…」

「きひひ……。」

戒が不機嫌な表情で頬杖をつくのを見て、バーグは意地の悪い笑みを浮かべた。

息も絶え絶えに、腹を押さえて、シャロンが戒の顔を見る。

「…何て恐ろしいギャグや……。」

ああ…おっかしいで…。

…どっちかっていうと…あたしらと『同業者』系の顔やのになア
「！」

まだ所々に笑いを洩らしながら、ようやく言う彼女。

「……パン屋か？」

戒は半開きの口で答え、何気なくパンを手にとって眺めた。

「……あ、イヤ、職人系の顔ってことで……!!」
「お兄さん、渋い……!!」

すぐにシャロンの口を押さえ込み、必死に誤魔化すイーランドとムール。

「……？」

彼らの、不自然な動きと汗。

それを怪訝な表情でうかがう戒。

「そ、そうや、これも前から訊こつと思つとつたんやけど……」

たまらず話題をすりかえるシャロン。

「戒は、あの世羅とどういう関係やねん？」

「！」

不意を突かれた質問に、彼は思わず口に含んだ水を噴き出す。

「ただの仲良しや……ないと思うてん。」

女の目つきで、シャロンは戒を見た。

「……ただ行き先が同じだけだ。」

重い口で答える彼。

「……あいつ…一見 能天気そうに見えるけど、何か重いもん背負ってるんじゃないか？」

「何で、そんなことわかるんだ！」

大声で戸惑う戒。

「さつき風呂場でちよろつと見たんやけどな…世羅のやつ…身体に何か真っ黒なアザがあつたんや。」

「あれ……火傷とかの跡じゃねえのか？」

俺も突っ込んで聞くのは、ちょっと悪い気がするよ。」

バークも加わる。

勿論、彼は戒の顔を見て言っていた。

「何で、揃って俺様に聞くんだ!？」

「だってお前ら、何度も裸の付き合いしてるくらいじゃねえか。」

「だから、余計なこと言うんじゃないよ!！」

戒が顔を真っ赤にして、バークの首を両手で掴んで左右に揺らす。

「……恋人同士なんや。」

妙に冷めた目つきで、その二人の会話を見詰めるシャロン。

「勝手に勘違いしてる!!」

戒が大声で叫んだ。

先の戦闘とはうって変わった、その和やかな光景。
少し身を引いて、バークは目を細めた。

「まあ……いいや。」

俺も、ひとつ風呂浴びてくらあ。」

彼はのそりと立ち上がり。

「……俺は他にも用事があるから、もう戻ってこねえからよ。
後はよろしくやってくれ。」

わずかに顔をしかめながら、誰の返事も待たずに部屋を出る。

「……神学校を首席卒業。
……クレインの至宝『イデイス聖十字』を持つ修道士ですか。」

「うっ!!?」

そこで突然低い声をかけられ、戒は思わずたじろいだ。
いつの間にか脇に座り、紅茶をすすっているジンが居る。

「なるほど。」

戒の頭から全身を、彼の視線がなぞる。

(……こいつ……まだいたのか……)

どこか気に食わない青年のそんな態度に、途端に不機嫌になる戒。
目つきをさらに悪くする、そんな彼の様子にジンは鼻で笑い、紅
茶をまた一口すすった。

「……さらに天命人ですか……。
見えませんね。」

連なる言葉に、戒は思わず拳を握り締める。

「あつ……あいつ……！」

その様子を少し遠くで眺めていたシャロンが齒軋りする。

「お嬢？」

「……どうしたんで？」

「あいつ……あたしらがやったネタを再びかぶせおった……！
高度なテクニクや……出来る……！」

だが、またも彼女の言葉を無視したまま、その青年は戒に視線を
降ろしたまま立ち上がり
部屋を後にした。

「なんだ、あいつ……！
態度のでけえ野郎だ……！」

「塩まいとけ、イール！ムール……！」

叫ぶ戒とシャロン。

「いいのかな……別にうちの家じゃないのに……」

不安げな表情で、二人はテーブル上の食塩を手を取った。

そんな彼等と共有する雰囲気一種の馬鹿馬鹿しさを覚えると、
安心したのか。

戒は途端に、疲労による睡魔に襲われる。

「……まあいい。
俺様は少し寝る。」

「……絶対に起こすなよ。」

続けて彼は眉間を押さえながら椅子から立ち上がり、だらしなく壁際で横になった。

弾力豊かな絨毯は、高級ベッド並みの寝心地に思えた。

「そんなら、あたしも寝させてもらうかな……」

紛れて戒の横に並んで横になるシャロン。

彼は勿論、即 彼女に蹴りを入れて突き放したのだった。

「……場違いですよ……」

ルベランセから、サイア邸の一室に呼び出されたミーサ。
ひどく落ち着かない様子で、彼女はうつむいて呟いた。

「え？」

それまでソファに腰を深く沈め、くつろいでいたフィンデルが思わず姿勢を正す。

「……どうして、私なんですか？」

こういう綺麗な場所なら、士官の人の仕事だと思っんですが……」

「あ……そういうことね……。
でも、技術面から具体的な意見が聞けるのは、うちではミーサだけだし……」

フィンデルが答える。

「……他にも、何か理由が？」

ミーサが不安げな表情で尋ねても、前にした彼女はただ、にやにやするばかりであった。

そんな中、不意に部屋のドアが乱暴に開けられる。

姿を見せたのは、体格の良い男。

「……おう、副艦長。」

男はフィンデルを目に認めると、ぶっきらぼうに挨拶をする。

短く刈り上げた髪に、精悍な顔つき。

太くて座った首が、固くて強い意志を思わせた。

「……誰ですか？」

小声でフィンデルに囁くミーサ。

男は、中王都市軍の軍服を着ていたのだ。

「ミーサも来てるのか。」

なんか……もう長い間会ってなかったように懐かしく感じるな。」

「……も……しかして……!!」

男が首からかけた細い鎖。

憶えのある『それ』を見た瞬間、立ち上がるミーサ。

「バーグ!？」

駆け寄り、人差し指を突き刺す勢いで出す。

それに合わせて思わずのけぞる彼。

「……何だよ、気付かなかったのか？」

「だって……だって……」

「さっき風呂場で髭を剃ったが……それくらいで、印象が変わったかなあ？」

顎をさすりながら、彼はおどけて見せる。

「無事だったのを知って……一言も言わないなんて……ずるいです……副長。」

ミーサが涙を目に溜めて、フィンデルに訴えた。

「ごめんなさい。驚かせようと思って。」

……度が過ぎたかしら？」

微笑みながら、彼女が言う。

その言葉に一転、笑顔になるミーサ。

「ま、再会の挨拶は置いておいてな。」

……軍人らしく、まずは報告でもさせてもらおうか。」

バーグはミーサの肩を軽く叩き、かしこまって一歩前に出る。

「バーグⅡハウド二等兵、ただ今 帰還いたしました。」

そして敬礼もせず、言い放つ彼。

「……はい。」

フィンデルは両手を重ねて自分の腿ももに当て、聞く姿勢を改めてとる。

「まず、炎団の撃破に協力してくれた子供達は無事です。さらに森の中で民間人3名を保護。」

こちらの被害は、戦闘騎2機と……」

バークが真つ直ぐな瞳で、中空を見詰める。

「リジャン＝デベント曹長が戦死いたしました。」

「……！！」

フィンドルが息を詰まらせる。

彼の姿が見えなかったことからある程度は予測していたが、彼の報告を聞くまでは故意に考えぬようにしていた。

同じく、ミーサも悲しみに視線を落とす。

「以上、簡単ではありますが　報告終わります。」

そして、バークは口を閉めて胸を張った。

「ご苦労さまでした……どうぞ楽にしてください。

あと……もっと自然な言葉で構いませんか？」

「……ああ。

助かるぜ、ガラじゃねえしな。」

促され、苦笑しながらソファに腰を降ろすバーク。

「疲れているでしょうけど……二、三質問させてもらっても宜しいかしら？」

「いいさ、なんなりと。」

一息ついてから、彼は胸ポケットから煙草を取り出した。

「…何故、空にいた貴方達が森から戻ってきたのですか。」

「そうだなあ…まあ色々あってな…」

バーグが耳の裏を搔く。

「信じるかい？」

俺達があゝの炎団の艦を撃破したことを…」

そして片手でライターの火を点け、くわえた煙草に近付けた。

「それは無茶な作戦だったんだぜ…」

特攻に近い形で乗り込み、俺達は奴等の飛翔艦を制圧した……

それまでは…良かったんだよな…」

目を閉じ、一言一言をゆっくりと放つ。

「俺達はそのまま、制圧した飛翔艦でこのゴーベまで来るはずだっ

た。

だが……」

ぼんやりとした火が、くわえた煙草の先をじりじりと焦がす。

「突然現れた『一機』の戦闘騎によって、全て墮とされちゃった……。」

残っていた炎団の戦闘騎も……。

飛翔艦も、俺達も……リジャンも、みんな根こそぎだ。」

「たったの……一機……？」

それまで黙って聞いていたミーサが声を上げた。

「それも……あんた達……もちろん俺も知っている機体だ。」

「？」

不思議そうな顔をするフィンデル。

「銀色の戦闘騎を憶えているだろう？
俺はもう絶対に忘れない。」

バーグは歯を強く噛み合わせて力んだ。

「……そんな……！」

今度は察した彼女が、そのまま言葉を詰まらせる。

「…操縦している奴の姿は誰も見ていないがな。」

「……そう……」

「おいおい。」

安堵の色を浮かべるフィンデルを見て、バークは空いているグラスに煙草を押し付けた。

「あの日、ウチの格納庫に来たやつに間違いないんだぞ。」

かなり特徴がある機体だ……見間違えるなんてありえねえ。」

そして強い語気で続ける。

「あんたが、あの聖騎士に対して特別な感情を持っていたも……ひいき目は無しだぜ。」

彼の手にする、曲がって短くなった煙草の燃えカスの先がフィンデルに向いた。

「そんな……私は別に……」

「まあ、証拠や確証があるわけじゃない。」

断定出来ないといえば出来ねえ話だ。

…こっちの調査は、あんたに任せるよ。 ……真偽の判断もな。」

バーグの指がグラスの表面をなぞった。

「だがこの先、万が一『あいつ』に会うようなことがあったら、俺は必ずこのことを問い詰めるつもりだ。

……少し乱暴な方法になってもな。」

グラスを爪で弾く。

乾いた、冷たい金属の音が響いて消えた。

「でも……聖騎士が…何故？」

暫くしてから、ミーサが呟く。

「俺が知るもんか。 大方、騎士団と軍が仲が悪いことが関係してるんだろっよ。」

「冗談じゃない…賊と結託して同国の人間を売るなんて……ありえないわ。」

フィンデルが強い口調でバーグに言った。

「難しい予測は国に帰ってからにしようぜ。
ちなみに……そっから先は、あんたが見てのとおり。」

……墜落した森から奇跡の生還ってやつだ。」

バーグが話を閉める。

その年相応の大人びた雰囲気、二人は目を見張った。

「少し……変わりましたか？」

バーグさん。」

思わず口にするフィンデル。

「人がそんなにすぐに変われるもんかよ。」

バーグは目線を合わせずに、横を向いたまま答えた。

「ただ……あの森で、友と約束をしてきた。
今、俺には生きる目的が明確にある。」

目を半分閉じかける彼。
フィンデルとミーサは、語る彼の横顔に見入っていた。

「……それだけだ。」

室内に立ち込める、湿っぽい空気に気付いたバーグが照れくさそうに笑った。

「あと…俺のことは呼び捨てでいい。
上官なんだから、これからはもっと部下を気楽に使いな、副長さんよ。」

彼からの優しい言葉に、フィンドルは微笑んで頷く。

「……そうだ。」

あとよ、中王都市まで連れて欲しいって奴等がいるんだけどよ…
…何とかならねえかな？」

「考える時間をもらえるかしら？
今はちよつと…用事があつて…」

「ああ、構わねえよ。
じゃあとにかく伝える事は伝えたんでな、俺はこれで…」

そそくさと椅子から腰を上げるバーク。

「……あ…」

つられて、ミーサが彼に手をさし伸ばした。

「待って。」

そこですかさず、フィンドルが引き止める。

「これから、私はリ・オン氏に呼ばれています。

その間、二人でお話でもしていたらどうかしら?」

「俺とミーサが?」

「な、なに言ってるんですか、副長!」

ミーサが耳まで真っ赤にして叫ぶ。

「彼女、慣れない場所で妙に緊張してるから、話し相手になってて頂戴。」

「……ああ。

別にいいけどよ。」

何気なく答えたバーグ。

微笑みながら部屋を後にするフィンデルの好意に感謝しながら、その脇でミーサはうつむいた。

そして、座る位置を少し彼に近づける。

長く鈍かった夜の時間が、そこからは早く流れていくように感じられた。

「…今日は…語らい合いましょうか。
落ち着いて…ゆつくりと…」

少年の声が響く。

全身が浮いたような感覚の中で、戒は自分の即頭部に手を添えた。

（何が…ゆつくり…だ。
また…現れやがって…！）

いつもの悪い夢。

起きれば、どうせ全てを忘れているに決まっている。

戒は薄い意識の中で、頬の傷を手の平でなぞった。

「…大事な傷……なのですね。」

少年の影が揺れ、その彼の様子を見ながら言う。

（……絆だ。）

消えそうな声で囁く戒。

《貴様は生涯、傷を負う必要など無いはずだ…。
代わりに誰かに傷を負わせ、それを貴様が癒してやれば済むこと。

》

異質な声が突然鳴り響く。

（俺は……あいつが一瞬でも傷付くのが嫌だった。
そのことを話したら……あいつは余計に泣いたっけか……）

その声に対して、戒の口は馬鹿のように正直に動いていた。

《それは…世羅のことではなく……》

「貴方の大切な人なのですね……」

脇から再び、少年の声。

（ああ……）

「どんな……誰よりも？」

（ああ……そうだ。）

歪む視界。

己の存在する空間。

そんな中で、戒は必死に言葉を搾り出していた。

《自分が犠牲になることで、誰かを救う…。
その行動は理解しがたいが、貴様は己の道を正しいと信じて疑わ
ない。

だが、それはいずれ…》

「…残念です。

貴方ならもしかして…と思ったのに。」

重なる二つの声。

(勝手に…残念がるんじゃない…。
俺は最初から…そんなつもりは…)

《世羅の『さだめ』は…》

《…これからもっと険しいものとなるぞ…》

《…誰が守るというのだ?》

戒の言葉を遮り、次々と被せられる無数の言葉。

「…うるさい…どうせ…これは夢なんだろ…」

対して、彼は重い口を動かす。

ふっ、と視界が白く染まった。

何も見えなくなった中でも、口を動かし続ける彼。

「ゆ…め…?」

突如、鋭敏になる意識。

戒は今度は、口をついて出た自分の声をしっかりと耳で感じ取って目を覚ました。

粘ついた絨毯から頬を離す。

目に飛び込むのは、自分に胸に寄り添い小さくなって寝ている、いつの間にか帰って来た世羅。

戒は暗がりの中、立ち上がる。

大分、時間が経っているのだろう。

明かりの消された室内。

手で壁を確かめながら、扉へと向かう。

暗い闇に目が慣れれば。

シャロン達三人は床に大の字に。

バーグの姿は無い。

壁際で胡坐をかいて寝ているのはザナナであることが判った。

静かにドアを開けて、廊下に出る。

眼前に飾られた絵画。

目の覚める、芸術の数々。

それを皮切りに、記憶は確かになっていった。

「てめえは……一体…何者なんだ…」

何も無いところで、独り壁にもたれかかる戒。
目を閉じて、闇の中で眩く。

自分の意思とは無関係に、前へ疾走していく感覚。
それは、いつも思考を追い抜いて焦燥だけを残す。

「何故…俺様に命令する！！」

目を開け。

苛立ちと共に壁に叩きつける拳。

その自分の指には、何かに反応するかのように 天命の輪が静かに浮かんでいた。

「失礼します。」

数度のノックの後、室内に入るフィンドル。

そこには既にジンの姿。

さらにその奥では、机を挟んでリ・オンが座っている。

「結界の方は……」

「心配ない、処理はもう終えている。」

尋ねるフィンデルに、淡々とした返事。

「それよりも副艦長殿。

貴方の言う『世羅Ⅱディーベンゼルク』……確かに、あの森から出てきた者達の中にいたようだな。」

リ・オンはジンを横目で見ながら言った。

「……これは運命だろうか。」

彼は小さく呟く。

「……おっしゃっている意味が良くわかりませんが。」

フィンデルの声がわずかに震えた。

「私は『ディーベンゼルク』と名の付く人間は、もう既に大陸中を

くまなく探している。

…それこそ莫大な金をかけてな。

だが、私の知っている子と名前や年齢が一致した事例は今回が初めてだ。

これを……他にどう説明すれば良いのだ？」

「肝心の…性別が一致していませんが…」

彼女の言葉にも、リ・オンはまるで表情を変えなかった。

「父上は、記憶違いをしておられたのでは？」

そこでジンが口を挟む。

「そうであると願いたいが……私はそんなに間抜けではない。」

先と矛盾するリ・オンの言葉に、二人は困惑した。

そんな中で開かれる扉。

魔導人形が静かに姿を現す。

「どうだった、エンゼルエンデルハイム。」

「…はい。」

主人からの問いかけに、一呼吸おいて彼女は答えた。

「検査の結果、『世羅』ディーベンゼルク』は99パーセントの確率で女性であると思われます。」

「!？」

その抑揚の無い人形の言葉に、フィンドルが血相を変えて立ち上がる。

「一体…何をしたのですか？」

「私は、まず彼女が性別を偽っているのではないかと疑った。だから、調べた。何か『まずい』かね？」

「……それは…！」

…少し、やり方が卑怯ではありませんか。」

「ならばその前に本人へ事情を説明するべきだったと言っかね？
なに、調べたのは心の通わない人形……人権は守っているつもりだが。」

「私は、そういうことを言っているわけでは……！」

「貴女の言いたいこともわかる。
だが、私はこの件に関して誰にも譲るつもりはない。
それだけ……本気なのだよ。」

真摯なり・オンの瞳に、フィンドルはその場を退いた。

「何か、他に気付いた点は？」

彼は続けて、魔導人形に訊く。

「彼女の身体には痣のような…黒い紋様が体中に広がっています。」

「それは火傷の跡ではないのか？」

ジンがささず言った。

「いいえ、『それ』は肌から盛り上がっていません。

さらに刺青のように彫られているわけでもなく、ただ肌に同化しているようです。

これに該当するような物は、私の記録に存在しません。」

「これ以上の調査には…もっと時間がかかるということだな。」

リ・オンは短く呟くと、椅子を回転させて背を向けた。

「……話を換えようか。

色々あって、うやむやになってしまった貴艦への援助の件についてだが…」

急な話のすり替えに、困惑の表情を浮かべつつも聞き入るフィンデル。

「色々考えた結果、やはり貴艦を援助することは出来ない。」

彼は淡々と続けた。

「商人が特定の軍隊に無償で品物を与えることは危険なのだ。それが兵器に関するものであるならば、なおさらな。」

「そうですか……」

フィンドルの頭は自然に下へと傾いていた。

「私は別に、君達や中王都市に恨みがあるわけではない。その点は理解して欲しい。」

抑揚の無い言葉と視線を彼女へとかけるリ・オン。

「……しかし、中王都市といえば……ジン。」

「……確か運ばなければならぬ品があったな。」

「またも、急に話を変えるリ・オン。」

「はい。ごくわずかですが。」

申し合わせていたかのように、即答するジン。

フィンドルが眉を上げる。

「あれは、お前が責任を持って運べ。
出来るな？」

「はい。」

ジンは一歩前へ出て返事をする。
そしてリ・オンはすぐに二人へと向き直り、難しい表情を作った。

「だが、運ぶ品物はごく少量……。」

いちいち我が商団の飛翔艦を動かすのでは、あまりにも経費がかかり過ぎる。

「実にもつたいないことだ。」

彼は、独り言のように呟いた。

「……どこか、代わりに輸送してくれる艦はないだろうか。」

「……！！」

そこで、フィンドルが全てを理解する。

「現在、ゴーベに駐留中の飛翔艦ルベランセが…適任かと。」

ジンが言った。

「ふむ……」

わざとらしく、顎をさすりながら頷くり・オン。

「……この輸送代金として、貴艦の修理と補給を行うという話はどうかね？」

今なら護衛として、息子も付ける。」

そして、フィンデルへと視線を投げかける。

「……願っても……ありません。」

彼女は深々と頭を下げ、震える声で感謝を示した。

「父上。それならば、戦闘騎の試用もいくつかやってもらいましょう。」

軍隊ならば、優秀な戦闘騎乗りも豊富でしょうから。」

「ならば機体の選定もお前に任せる。」

明日、手を貸して差し上げる。」

「はい。」

頭を下げたまま、二人の声を聞くフィンデル。

「…源炉を修理する専門家も、用意できるな?」

「はい。」

「ありがとうございます!」

思わず彼女は声を上げた。

「礼には及ばない。」

これは正当な取引なのだからな。

ただ、この話の条件として一つだけ頼みを聞いてもらいたい。」

「…何でしょうか?」

頭を上げると、リ・オンは口元に何ともいえないような微笑を浮かべていた。

「中王都市への帰還中は、ルベランセの全指揮を貴女にとってもらいたいのだ。」

「!」?

目を見開くフィンデル。

「表面的にはこのような形にしたが……心情的には貴女個人に貸すつもりだ。」

他の者には、任せたくない。」

「…わかりました。」

迷ったのを悟られないため、フィンドルは素早く答える。

「では……宜しく頼む。」

短い言葉で話を切るリ・オン。

何かに感づいたフィンドルは、もう一度深い礼をして二人から離れた。

ドアを開く魔導人形に促され、退室する。

「世羅「ディーベンゼルク……直接、お会いにならないのですか？」

そのドアが閉められるなり、ジンが言った。

「……長旅で疲れているだろう。

むやみに動揺させてどうするというのが。」

「しかし！

誰よりもお会いになりたいでしょうに……！」

「…残念だが、髪の色も瞳の色もまるで違う。

産まれるところをこの目で見た……あの子供とはな。」

「……！！！」

驚き、狼狽するジン。

「ただ、面影はある。」

彼の様子を眺めつつ、リ・オンは短く付け加えた。

「私はこれほどまでに、真偽を詳しく調べようとすることを恐く思ったことはない。

長年待っていたというのに、実におかしなことだ。さらに弱々しくも、『何かの可能性』にしがみ付きたいと心底願っている。

その『何か』が何なのかは…全くわからんがな。」

手を組み合わせ、額へと運びリ・オン。彼は少し憔悴しやうすいしているようにも見えた。

「……ジン。」

「はい。」

「…素性はともかく、あれはなかなか愛らしい娘だ。……貴様は男に生まれて良かったのかもしれない。」

「私も同じことを思っていました。」

父の冗談に、ジンは笑みをこぼした。

「……最後に…私が言わんとしていること、わかるな？」

「…貴方の息子ですからね。」

かつて、彼にこうまでも頼まれたことが無かったジンは胸に手を当て、改めて決意を口にした。

「空において、私が守りきれないものではありません。
それがたとえ、神が邪魔をしようとも」

柱にめり込むブーツの踵。

「……くそ…！」

その後、壁に憤怒と拳を叩き付ける。

肩で息をしながら、戒はそんな愚行を何度も何度も続けていた。

「…戒くん………！？」

彼の様子をうつかり後ろから目撃してしまった、フィンドルが怯えながら声をかける。

「あ？ こんな夜中に何やってんだ、おまえ…」

気付き、逆に質問を投げかける戒。

「え？ ちょっと…明日のことで考え事を。」

フィンドルは面食らいながらも答えた。

「…戒くんは？」

小さな声で切り出す彼女。

「…別に何でもねえよ。
文句あるか。」

戒が苛々しながら、腫れた両拳を左右に大きく振る。

「……何か、出発に問題でもあるのか？」

「ちょっとね……。」

援助を受けられる話になったのは良いんだけど……。
やっぱり人員が不足してて……それをどうするかで頭が一杯なの。

」
彼女がリジャンのことを言っているのは明白だった。

「ふん…。」

変わらず、仏頂面の戒。

「それならば……俺様と交渉する気は無いか？」

だが、その彼からの思いもよらない言葉に、フィンデルが驚いた表情を素早く向ける。

「悪い話じゃ…ねえはずだぜ。」

何故そんなことを考えたのか、自分が何を言っているのか。戒は半分理解をせずに言葉を続けていた。

南向きに作られた、角ばった無機質な建物で。

日差しを和らげるために植えられた庭内の木々を眺めながら、早朝からマクスは遠くの山脈を見詰めていた。

正面からは、石畳の廊下を渡って来るデチャード。

「いやゝ参ったぜ……」

彼はマクスを認めるなり、寝癖のついた頭を掻きながら言った。

「せっかく故郷に帰ってきたのに、まさか訓練場の宿舎で一夜を過ごすハメになるとはな……」

「騎士たるもの…贅沢を言っな。」

マクスが半分呆れながら、静かに笑う。

「幾多もの人間の汗が染み込んだ堅いベッド…。
これなら、ロンセ・カロウドのソファの方がまだマシだぜ…」

「仕方あるまい。」

腰をさすってばやくデチャードに対し、変わらず素っ気無い態度

を返す彼。

「…まったく、何でそんなに聞き分けがいいんだか…」

彼は諦め、陽の眩しさを見上げて顔をしかめた。

青い空と澄んだ空気。

その日は、遠くにそびえる山肌の様子も細かく認めることが出来る。

「心配すんな。 奴等がゴーベを越えてくることは無い。

あれだけ戦力を削ったんだ。

それにとどめは……お前が刺したんだろ？」

その方向を凝視したままのマクスに、ヂチャードは軽く声をかけた。

「…ああ、そうだな。」

「外見と同じで、いちいち堅っ苦しく考えすぎなんだよ、おまえは。気を休めるためにも……もっと…ほれ、目の保養をしたほうがいいぞ。」

そして彼の肩の甲冑を強く叩き、ゆっくりと歩み出す。

「見るよ。 こんなにしみったれた訓練所でも、一つだけ『ついて

る』ことがある。

今日は『緑華』の皆さまが駐留してるってことだ。」

やがてデチャードは目の色を変え、庭先へ向かって半身を乗り出した。

高い掛け声と共に、練習用の剣を突き出す集団。

つらい訓練中にも関わらず、華やかな印象を受けるのは、女性のみで構成される緑華ならではだった。

そんな空間には浮いた存在であるところの二人の男が廊下に現れると、庭内はにわかに色めきだつ。

「？」

何かの異変に気付いたマクスが周囲を見回す。

その視線の先を追う、若い女性騎士達の瞳。

そして皆、それぞれ手にした武器をすぐに降ろし、顔を赤く染めて互いに小声で何かを囁き合い始める。

「……一体、どうしたというのだ。」

「おまえ、本気で言ってる？」

……オルゼリア家の坊ちゃんが来てるから妙な期待をしてるんだよ。」

からかうように、ヂチャードは言った。

「冗談はよせ。」

「冗談なもんか。」

もっと自覚を持ってよ……しかもそんな銀ピカのなりしてるもんだから目立って目立って……」

言葉を続けようとする彼。

「各人、集中しないか!!」

だがそこで庭内をつんざく、高い声。

その声が響いた瞬間、先ほどまでの空気が一変し、張り詰める。

高い木々で日陰になっている庭を、対角から近付いてくる人影。それは朱色のソバージュをなびかせる、軽い鎧に身を固めた若い女性。

「……シザー教官……」

変わらぬ彼女の尖った目つきと雰囲気、ヂチャードは即座に姿勢を直して、その名を自然と口にしていた。

「……失礼だぞ、ヂチャード。
緑華の小団長殿に向かつて。」

マクスは微笑みながら彼女に正対し、深々と礼をする。

「構わん。……久し振りだな、変わりは無いか？
マクスにヂチャード。」

懐かしそうに交互に二人を見詰める、彼女のきつい視線が少し緩んだ。

「最近、重要な任務があつたそうだな。
ご苦労だった。」

そして労いの言葉ねぎらいがかけられると、二人の男の肩からも力が抜けていく。

「きよ、今日はどういう風の吹き回しですか？
緑華は前線で戦つてるイメージが強いんですが。」

「お前へのサービスでない事は確かだ。」

シザーの素っ気無い答えに、頭を掻いて照れるヂチャード。

「詰まるところ……私の退役が決まってな。
もう警備くらいの仕事しか回つてこないのだ。」

「…退役？」

マクスが口を半開きにして呟く。

「結婚を機に、夫となる者から騎士団を辞めるよう言われたのだ。」

「結婚！？ 夫！？」

ヂチャードの声が上ずる。

「なんだ？」

その意外そうな顔は。」

「…『訓練場の凶獣』とまで呼ばれてた鬼教官が……そりゃ驚きますって。」

笑顔を無理矢理作る彼。

「おめでとつございます。」

しかし……」

今度は、マクスが感慨深い面持ちで言った。

「 常勝不敗。」

艦隊戦においての最高の名将がいなくなる……これは中王騎士団

にとって甚大なる損害。

非常に残念でなりません。」

「常勝不敗…か。

だがな、相手は訓練もされていない反乱勢力。

騎士団の精鋭と艦隊があれば、今の世で功績を挙げる事など……
さして難しいことではない。」

「…ご謙遜を。」

「謙遜ではない。

本来ならば『圧倒的な戦力の差を覆して生道を照らしてみせる』、
そんな指揮官が賞賛されるべきだ。」

語る彼女の遠い視線を、二人は追う。

「そのような指揮官をご存知で？」

「……古い友人だ。

だが、今は戦闘の指揮など執^とっていないだろうな。」

「どういふことです？」

「彼女は争いが嫌いなのだよ。」

シザーは微笑んで言うと、二人の前を行った。

「ところで……俺達は、何をすればいいんでしょうね？」

ここで泊まるように言われた以外は、何も聞かされていないんですが。」

「その件に関しては、大団長からの命を仰せつかっている。お前達に指示を与えるように、と。」

「小団長自ら？」

デチャードの素っ頓狂な声が、遠くの若い騎士達の号令に混ざる。

「……かなりの大事ですか？」

そして訝^{いぶか}しげな表情を浮かべるマクス。

「……まあ、そう堅くなるな。」

ちよつと……見てもらいたい者がいるだけだ。」

やがて三人が行き着いた先は、庭内の隅の角。

そこで独り静かに剣の素振りをしている人間が居た。

練習用の鉄仮面と全身を包んだ鎖帷子^{くさりかたびら}。

背の高さが非常に目立つが、全身の柔らかなフォームから、やはりその人物も女性とわかる。

彼女は仮面の奥から三人の姿を目に留めると、その手を止めた。

「こいつは腕が立ちすぎて、稽古の相手が居ないのだ。
可哀相だろう?。」

「……そうですね。」

気の無い答えを返すマクス。

「まさか用事って……。」

たかだか一兵卒の稽古相手になれって言うんじゃないでしょうねえ?。」

チチャードは早口で言葉を放った後、肩をすくめた。
その様子を黙って見詰めている鉄仮面の騎士。

「試してみるのが早い。」

「面白いじゃないですか。」

シザーの挑発的な言葉に、チチャードが不遜な顔で一步前へ出る。

「教官、憶えているでしょう?」

剣術の試験はいつもマクスがトップで、俺が二位……。」

壁に掛けられている、刃の部分が太い鉄の針金で出来た練習用の細剣レイピアを取るデチャード。

「相手が女性でも、いっさい手加減しませんよ？」

「……………」

同じく練習用の刃が削られている大剣を降ろしたまま、何も答えない眼前の騎士。

当然のことながら、その鉄仮面からは表情は伺えない。

「…良かったな、お優しい先輩がいらっしやって。」

シザーの言葉に、その騎士は無言で頷き、ようやく手首を返して剣を構える。

「……………何者ですか？」

その流れる動作を見た瞬間、マクスが小声で訊ねた。

「見ていれば…わかる。」

静かに答える恩師。

やがて、お互いの剣が合わさり、音が鳴る。

すぐさま半身に構えるデチャード。

上段に移行する仮面の騎士の大剣。

それは彼女の長身を、さらに大きく見せた。

「……………！！」

デチャードの気が整わないうちの、素早い踏み込み。

「…ッ！？」

おおそ大剣の間合いではない至近距離に突然迫られ、戸惑う彼。

（……………なんだと！？）

さらに肩で身体を強く押され、後ろに飛ばされる。

途端に背中に壁を強く感じ、デチャードは表情を歪ませた。

感じる鉄のにおい。

喉仏に触れる、冷たい感触。

気が付くと自分は地べたに尻を付き。

大剣の先を向けられ、冷たい仮面に見下ろされていた。

「……………試験で二位という話も、所詮は昔の話のようだな。」

廊下側から聞こえる、シザーの言葉。

「……はは。

ブランクがありましたね……」

ズボンの土を払いながら、デチャードは立ち上がる。

それに合わせて相手は再び間合いを広げ、大剣を降ろした。

「…悪いな、もう一本。

今度は……最初から本気だ。」

彼の言葉に頷く彼女。

再び互いの得物を合わさると、デチャードの表情が締まる。

「……フッ!!」

短い呼吸と共に、細剣を真つ直ぐに突き出すデチャード。

指先の動きと微妙な力加減が、細い針金に振動を生み。
繰り出した剣先は揺れて、幾多もの突きと化する。

彼女はそれを低い姿勢でかわすと大剣を横に振りかぶる。

だが、その動きを予測していたデチャードは反転。

相手の剣の振りと平行して横から攻める。

しなやかで軽い細剣は、素早く、彼女の胸元を捉えて振り抜かれた。

「……しまった！」

寸止めのつもりが、鈍い感触を手に感じたデチャードが叫ぶ。

「デチャード!!」

マクスから思わず飛ぶ怒号。

「……。」

無言で自分の胸元を押さえこむ彼女。
ムチの様に^{しな}繞る細剣の攻撃は、鎖帷子の上からも衝撃を充分に与えていた。

「……あいつ……！」

「待て。これは実戦形式の訓練……気に病むことは無い。
それに……」

二人に駆け寄ろうとしたマクスを制するシザー。

「…これで、ようやく同点だ。
彼女は勝負に白黒つけたいようだ？」

さらに彼女は微笑を浮かべたまま、姿勢を取り直し始めた相手を見るように促す。

「本気かよ？」

デチャードが自分の皮手袋を直し、構える。
こめかみから一筋の汗が流れた。

整然と直立しながらも、指先で鉄の仮面の『顎』の部分浮かせる相手。

相当、息が上がっているのだろう。

だが、闘志はまるで折れていない。
牽制と威圧を兼ねた、己の構える大剣の切っ先をしっかりと自分の方へと向けている。

「……………！」

試合の三本目を知らせる、再び視界から消え失せるかのような騎士の素早い動き。

デチャードの瞳が収縮する。

初撃と同じ展開。

突進する相手に合わせ、デチャードは一步退くことを選ぶ。
ただし今度は詰められないよう、相手との間合いを剣で薙ぐのを
忘れない。

「……！！」

相手はタイミング良くそれを大剣の腹で受け止め、上に跳ね上げる。

そしてお返しとばかりに、続けて繰り出す横の剣閃。
速度はあるものの、大きすぎる動作。

デチャードがそれをかわすことは訳が無かった。

案の定、相手は低い態勢で大剣を振り切ったまま硬直する。
それを逃さず、早い突きを入れるため地を蹴り、間合いを詰めた
瞬間だった。

大剣を振り切ったままの態勢のはずの彼女。
だが、その身体の脇に重なって、急に飛び出した灰色の影。

細剣を握る腕を伸ばしたまま、デチャードの眼球が『それ』を追
う。

灰色の影は人の腕の形をしていた。
さらに、大剣のフォルムをも描いていた。

まるきり。

寸分たがわず、先の『彼女の姿と攻撃』をなぞっていたのである。

そして、その影の動きが狙っているのは 自分の身体。

その攻撃の軌道から逃れられないことに気付いたと同時に、得体の知れぬ一撃を腹部に

まともに受けて再び壁に吹き飛ばされるデチャード。

今度は、背にした煉瓦が碎けるほどの衝撃だった。

「……が……あ………！」

そして体面も考えず、彼は庭先で転げ回る。

「……デチャード!？」

何が起こったか全く理解出来ずに、困惑しながら駆け寄るマクス。

「これまでだな。」

シザーが一度だけ、両手を打ち鳴らす。

それを合図に、デチャードの相手は大剣を地に突き刺した。

重い仮面に両手をかけ、すぐに脱ぐ。

窮屈な空間から解放される深緑の長髪。

少し憂いを帯びた瞳。

身長の高さが少し不釣り合いな、幼さの残る顔つき。

それは紛れもなく女性だった。

「紹介しよう。」

彼女は『クウⅡハウド』。実は彼女は……」

言いかけるシザー。

「エア・ファンタジスタ……天命人ですね……？」

マクスの手を取り、立ち上がりながらデチャードは苦笑を浮かべた。

そして、目の前の若い娘は、固い表情のまま二人に向かって会釈をした。

現在、中王都市に在る戦闘組織の双壁。

国土防衛を主な任務とする、血を流さずとも将来が安定している

中王都市軍。

大陸各地の要請により治安維持を目的とした武力を派遣する、常に危険を伴う中王騎士団。

その双方の性質と在り方は全く対象的であつたが、その士官学校は共通であり、

軍に配属される者も騎士団に配属される者も、初めは同じ道を歩む。

その学び舎の中で、どちらの組織を志望し進むのか、学徒自身が自分で選択するのである。

そして騎士として生きることを選んだ者達は士官学校を卒業後、訓練場で鍛えられ、各小団に配属される。

マクスもデチャードも、そんな若き日の苦労を懐かしみながら、昔馴染みの二階テラスのテーブルを
恩師と共に囲んでいたのだった。

「彼女が街の道場の出身でな。

その腕を見こんで、この訓練場へよく稽古に来てもらってたのだ。

シザーが言った。

「数ヶ月前、たまたま彼女が騎士団の仕事に興味があると聞いてスカウトしたわけだが。」

「スカウトって…」

紅茶の入ったカップを軽く持ち、まだ痛む背をさすりながら半笑いのチチャード。

傭兵制を容認している軍隊と違って、騎士団は士官学校出身者以外の入団を殆ど認めていない。

余程の実力が無ければ開かれない道だが、先の彼女の腕前を味わえば頷ける話だった。

「そんな中、タイミング悪く始まってしまったというわけだ。」

「何が、です？」

マクスが訊く。

「天命人狩りだ。」

彼女の言葉に、ぎよっとした二人が目を剥いた。

「ああ、言い方が悪かった。

天命人とおぼしき者が各部隊にいる場合は報告するように、この『上』からの命令があつてな…。

各小団長達は皮肉を込めてそう呼んでいる。」

含みを持った表情をする彼女。

「非公式の部隊がやっていることは大体見当がつく。
汚い仕事が多いのだろう?」

図星に、二人は何も答えることが出来なかった。

「故に、この件に関しては私自身も迷っているし、本人の意向もまだ決まっていない。」

だから、二人から彼女に色々と話してもらいたい…ということだ。

「説得というわけですか?」

「このことを大団長は…」

ヂチャードとマクスが、揃って気の乗らない表情を浮かべる。

「私は中王騎士団の騎士だ。」

もちろん、全てを正直に話している。

その上で大団長も承知なされた。

大団長も私と同じ意見…彼女に強制はしない、そう言っている。

シザーは答えた。

直後に、唇の端に微妙な笑みを浮かべる。

「…まあ、表面上はな。」

加えて、眼光の鋭さが増した。

「しかし、彼女は本当に生真面目でな。

いずれ緑華の将来を背負ってもらってもおかしくない逸材だ。正直、特殊部隊入りはもったいないと私は思っている。」

彼女が腰を上げ、視線が緑の垣根を越える。

眼下に見えるのは中王都市南部の素朴な街並みだった。

そこでは祭りの準備の音　　楽しげな音色が散らかっていた。

「…そして我々のもう一つの任務は、明日、中王南教会で行われる会議の護衛だ。

そろそろ頃合だ……出立しよう。」

「会議？

それに…今から出たんじゃ、昼頃に着いてしまいますよ。」

デチャードが言った。

「今、南部は祭りの最中だ。

向こうに着いたら、たまにはゆっくりと休日も良かろう。」

「それならば賛成ですよ。

いや話が分かるなあ。　シザー小団長は。」

「安心しろ。」

教会の広庭を特別に借りて、お前には錆び付いた勘をしつかりと思い出させてやる。」

「ちょ……！」

デチャードは、彼女の言葉にたまらず紅茶を嘔きこぼす。

「しかし……クウの奴、まだ着替えているのか。」

「……遅いな。」

「私が様子を見てきます。」

気を遣い、立ち上がるマクス。

「お、おい、教官と二人きりにしないでくれ。」

「では私たちは外で待っているぞ。」

シザーはデチャードの肩口を掴み、半ば強引に引き上げた。

そうこうしているうち、遠ざかる聖騎士の銀の背中。

「ふ……いつまでもふざけ合って……」

お前達を見ていると羨ましい。

常にお互い意識して張り合ってしまう女同士であれば、こうはい

かな。」

「男同士だって…いいことばかりじゃないですよ。全てを解り合って一緒にいるわけじゃ…」

あさつての方向を向いて答えるヂチャード。

「喧嘩でもしたのか？」

「……してませんよ。」

彼はそのまま続けた。

「ただ、思っんですよ。」

あいつは俺を心配するけど…俺はあいつを心配しちゃいけないのかって…」

いつになく真面目な表情をする彼の背に、歩み寄るシザー。

「たまに、遠く感じるんですよ。」

あいつのことが…」

ヂチャードは手を握り締め、その力を込めた五指をじっと見詰めていた。

誰も居ない一室。

練習後に皆が放り投げた、使用済みの汚れた布。

その上に、汗にまみれた鎖帷子を脱ぎ重ね、一息つく。

やがて彼女は下着をまくり上げ、自分の乳房に横に直線状に腫れ上がった箇所を室内の大鏡で確認した。

換気のために開け放たれた高い窓の奥では木立が揺れ。

湿った素肌に心地よい風が当たる。

そして、その風は別の音も運んだ。

背後で鳴る、甲冑の金属音。

それを耳で察知した瞬間、クウは振り向き、その直後に無防備な自分の身体を隠した。

「……すまん。」

あまりに遅かったものでな……」

その時、彼の背には眩しい陽の光が射していた。

端正な顔が横に振れると、その銀の髪が一本一本が煌く。

「……すみません……」

すぐに行きます。」

一瞬、クウはその彼の容姿に見とれていたが、すぐに我に返り、急いで服を着直した。

支度もほどほどに、改めてマクスに近付く。

「傷は深くないか。」

「…かすり傷に過ぎません。」

彼の言葉に、クウは同じ目線で淡々と答えた。

「すまん。ヂチャードのことだが…」

「練習での事故です…」。

私こそ本気を出してしまつて…すみませんでした。
あの人の強い気迫を感じたから…」

「ああ見えて、あいつも『プロ』だからな。」

マクスは柔らかな笑みをこぼした。

「しかし、見事な腕だ。」

「女にしては、ですか？」

互いの言葉が、一瞬止まる。

マクスは踵を返し、今来た道を彼女と共に歩いた。

「……そういうことではない。」

さほど気にしない様子で、若干前を進む彼。

「……すみません。」

口ごたえをした自分を悔やんで、クウは下を向いた。

「……確かに剣閃に関しては、男勝りの印象を受ける。
よほど剣の師が良かったのだろうな。」

彼は言った。

「いえ……剣は独自に学びました。」

「我流か。　だとしたら、素晴らしい才覚と思う。」

「……毎日稽古する父の真似をしているうち、覚えたのです。」

「父上の腕の良さが伺えるな。」

背後の彼女が歩を止める。

「直接、教えてもらったことなど、ただの一度もありません。
あの人は、私がいくら頼んでも……剣を持つことを絶対に認めて
くれませんでした。」

「……それは、親心というものだ。」

「私にはわかりません。」

前のマクスが振り向く。

優しい笑みが、眩しく見えた。

「いずれわかる時が来る。」

訓練所の門の前。

マクスに連れられた彼女のしなやかな容姿を見て、デチャードが口笛を鳴らす。

皆が集合したところで、シザーは既に待ち受けていた馬車に素早く乗り込み、残りの三人もすぐにそれに続いた。

「……先ほどは……」

車内で、クウはばつが悪そうにデチャードに向く。

「気にするなって。」

察した彼は、すぐに答えた。

「そうだ。」

あれは、お前の鍛錬不足のせいだな。」

彼の横でシザーが笑い、正面に座るクウとマクスに微笑みかける。

「……外は賑やかですねえ。」

誤魔化すように、話を逸らすデチャード。

馬車が走り出すなり、太鼓や笛の音が耳に入ってきていた。

「ほら、出店が沢山ありますよ……。
ガキの頃、良く行っただけ。」

馬車の窓から顔を出し、彼は続けた。

大通りの上部を横断する極彩色の旗。
食べ物が焼ける、香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。

「これは、南部の古い風習のようだが……」

「収穫祭です。」

マクスに対し、クウが静かに答えた。

「南部の人間は、普段陽気じゃありませんから……祭りはその分いつも派手に行うんです……」

ぼそぼそと呟く、地元の人間である彼女の言葉は説得力があった。三人は一様に頷く。

やがて大通りを歩く人の多さに、馬車が速度を失った。
緩やかな振動に身体を揺らし、喧騒を下から受けながらその中を進んでいく。

「夜は特に激しそうだねえ。」

嬉々としながらヂチャードは言う。
その目の先には、祭火用の木々が大きく積み重ねられていた。

だが、そんな彼の言葉を遮るように咳払いをするシザー。

「…今のうちに話しておこう。」

明日、南教会で行われる会議は小規模ながら、王室と軍隊と中王騎士団の各首脳が集う重要なものだ。

先に話したように、その警備の任には主に緑華が当たる。」

「私達はどうすれば？」

マクスの問い。

「お前達は、常に大団長に近い所を警備してもらつ。」

「うげ。」

先とは一転、ヂチャードが心底嫌そうに顔を歪めた。

「……俺、あの人と一緒にいると息が詰まりそうになるんでスけどね……」

「それは私とて同じことだ。」

平然と答えるシザー。

「本格的な戦争を経験した人間は『空気』が違つからな……」

馬車を引く馬が、道に転がった大きなオレンジを蹄で弾いた。

「それと……何を考えているか……わからない。」

呟き、マクスに向かって静かに目配せする彼女。

「……何かが動き始めているようだ。」

お前達がゆつくり出来る機会も……もう少ないかもしれんな。」

そうして、にぎやかな街並みを深く眺めるシザーの横顔。

残る三人は、それをただ漠然と無言で見詰めていた。

3

リ・オンの正式な援助も決まり、出立の準備が急がれる朝。
それは、長い間待ちぼうけを食らわされていたルベランセのブリ
ッジの乗組員にとっては
格別に気合の入る朝だった。

「梅さんだ！」

ところが、突如としてブリッジの扉は開かれ。
入ってくるなり叫ぶ世羅の姿。

その大声に驚き、梅はおだやかな乳白色から真っ赤に毛の色を変

化させ、高い棚の上へと待避する。

ストローの入ったジュースを持ったまま、その様子を呆然と追いかけるリードとメイ。

舵にもたれた姿勢で欠伸した口を大きく開けて、^{あくび}全ての動きを止めるタモン。

「なかなか綺麗なブリッジじゃん？」

…艦体自体は山に半身突っ込んで、無様に傾いとるけどな。」

続いて、シャロンも中へ入って来る。

「お、お嬢…」

「あんまり…目立たない方が…」

さらにその後ろには、小さくなっているイールとムール。

一番高い椅子に座り、山積みの書類に頭を抱えているフィンデルは彼等の喧騒を見てみぬふりをしていた。

「…おい！」

何なんだ、お前ら…は…！？」

彼女の代わりに言葉を切り出すリード。

そこで黒豹の顔が視界を横切る。

途端に彼は声を失った。

「これが……空を飛ぶのか？」

前面のガラスに両手を付いて、へばりつくザナナ。

「すごいでしょ？」

脇で世羅が笑う。

不遜な態度の不笑人。
そして無邪気な少女。

リードはその異様な光景に暫し啞然としていたが、軍の士官として、毅然な態度をもって注意しようとする。
だが、最後にブリッジに入って来た戒の姿に、それは断たれることとなった。

(…う……あいつは……!!)

以前、彼が艦長のペツポを足蹴にしていた様子が脳裏に甦り、血の気が引く。

「…一体何を考えてるんだ、フィンデル！」

仕方なく、彼女へと向けられる怒りの矛先。

「……彼等も中王都市まで行きたいんですって。」

だが、彼女は書類に集中したまま平然と言い放った。
これにはリードも面食らう。

「ふざけてるのか!!?」

彼の大声に静まるブリッジ。

「俺達は一度、裏切られてるんだぞ！
それなのにまた……こんな……どこの馬の骨かわからん連中をルベ
ランセに乗せるだって……!?」

「……あの……それどういことなん？」

そこで気が付いたシャロンが、恐る恐る訊く。

「ブリッジの搭乗員の中にスパイがいたんだよ。
デチャードっていう、クズ野郎がな！」

リードは、傍のメイを横目で見ながら叫んだ。

「げ。」

その言葉と剣幕に、イールとムールがたじろぐ。

「…そのことでリードが疑心暗鬼になるのも解るわ。でも、彼等は森で私達の仲間を助けてくれたのよ。」

フィンデルが冷静に言った。

「だから大丈夫だよっ!!」

さらに世羅がふくれっ面で、リードに詰め寄る。

「~~~~~!!」

彼女達に押され、彼は思わず視線を逸らした。

つられて、シャロン達も視線を泳がせる。

「それに…聞けば、彼等は私達の戦いに巻き込まれたおかげで、中王都市に戻れないわけだし…」

表情を落としつつ、フィンデルは言った。

「そんなことで……!!」

コップからストローを抜き、それで彼女を指すリード。

「いちいち、お前が罪悪を感じるなよな!」

再び叫び、彼はそれきり口をつぐんでしまった。

「まあ……体面上、ただ連れて行くというわけにはいかないから……
ルベランセの中で
仕事を何か手伝ってもらいたいんだけど……」

やがて、その場を取り繕うように言うフィンデル。

「仕事？」

シャロンが目を丸くする。

「なら、厨房にでもブチこんでおけ。」

戒が言った。

「……………え？」

その言葉に青ざめる彼女。

「パン屋が働ける場所なんて、あそこしかねえ。」

彼は続ける。

「…三人が作ったパンはとても美味しいんだよ！」

フィンドルの座る肘掛けに寄る世羅。

続いて、イールとムールに向かって忙しく駆ける。

「また食べたいな！ あのパン！！」

「いやあ……参ったな……」

「じゃあご挨拶代わりに、早速…腕にヨリをかけて……」

彼女の屈託の無い笑顔に見上げられ、両手を揉み合わせながら照れる二人。

しかし、そこでイールのすねに蹴り。

ムールの喉元に突きがタイミング良く突き刺さる。

「…アホか……！」

…こちら……ほんまはパンなんて焼けへんやろが……！！！」

うづくまる二人の首に強く腕を回しながら、至近距離でシャロンが小声で呟いた。

「そ…」

「そうでしたっ……！」

痛みで顔を歪めながら、そこでようやく気付く二人。

「…悪いけど…料理の方は間に合ってるの。」

そこでフィンドルは声をかけた。

「良かったら、艦内の清掃とか……あと洗濯物もお願いできるかしら？」

彼女は続ける。

「あ、あたしに家事をやらすって言うんかあ！？」

その内容に、シャロンが喚わめいた。

「選択権は無えんだよ！」

連れてってもらえるだけでもありがたいかと思いやがれ。

ほら！ さっさと行け、きりきり働けよ！！」

首根っこを掴み、彼女等三人をブリッジから強引に押し出す戒。

（だから、何でこんなに偉そうなんすかねえ…）

その姿を遠くで見ながら、タモンの大きく開いた口がさらに下がった。

「ところで……そちらは…ザナナさん…でしたっけ……。
えっと…貴方は…」

フィンデルの恐縮した言葉に振り向く豹頭。
その異形に、思わず言葉が詰まる。

「ああ、中王都市に興味があるんだってよ。
『ついで』だからいいよな？」

だけど、昨日の戦いで怪我してるから仕事はさせるんじゃないねえぜ。

「

すぐに戒が言った。

「…怪我？」

戒くん、確か傷は治せるんじゃない…」

「簡単に言っな。」

今度は、ザナナがフィンデルに詰め寄る。

「…すみません…」

彼の凄味に、反射的に謝ってしまう彼女。

「ま、そんなわけだ。」

人畜無害、いざって時には役に立つ奴だからよ。……頼むぜ。」

戒は言いたいことを言うだけ言って、背を向けた。

「ところで、…戒くん……昨日の約束だけど…」

「……これからその準備だ。」

声をかけるフィンデルに、短く返事をして彼はブリッジを後にした。

さらにザナナと世羅もそれに続く。

こうして、ブリッジに訪れた嵐は去っていった。

「『約束』って何だよ。」

圧倒されていた空気が若干残る中、白い目でリードが訊く。

「…こっちの話。」

だが、つれなく返すフィンデル。

「…しかし、本当に良いんですか？」

艦長に許可は？」

今度はタモンが訊いた。

「……そのことについては、みんなに大事な話があるんだけど……。」

資料を積み、足をきつく閉じて、神妙な面持ちで全員に向き直るフィンデル。

「実は……これから中王都市に到着するまで、私がこの艦の指揮をとることになって……。」

「へ？」

彼女の言葉に三人全員が目丸くする。

「あのね……これは私が望んだことじゃなくて、サイア商会の助力の条件が、そうだったわけで……。」

「なるほどね、あのバカ艦長には力は貸せないってことが。まあ、わかるぜ。」

リードが口を歪ませながら言った。

「そのこと、もう艦長には話したの？」

メイが訊く。

「朝一番に……話はつけたわ……」

自分の額を押さえながら、疲れた表情でフィンドルは答えた。

「そういえばさっき艦長室の前を通ったら、すすり泣きが聞こえたつすけど……」

タモンが苦笑する。

「あの野郎、ふてつて部屋に閉じこもりつてわけか。
まあ、これで中王都市までやりやすくなって良かった。
到着までよろしく頼むぜ『艦長』。」

茶化すようなリードの言葉に、フィンドルは冗談を返す余裕も無かった。

草原の離れ。

数百の戦闘騎が整頓されて並んでいる、サイア商会の巨大な格納庫。

屋根の隙間から漏れた光が、まだ新品の機体達の表面を照らして

いた。

「すっごーい!!」

ミーサが目を輝かせながら叫ぶ。

「どれでも好きな選んでいいなんて、さすがサイア商会、太ッ腹
よね!!」

はしゃぐ彼女をよそに、戒とバークは乗り気でない表情。
そして鈍い足取りで中に行く。

「いまいち、どれもパツとしねえな。」

しかめっ面で、身近な機体の一つを眺める戒。

格納庫の一番手前に陣取る、その緑と茶色の迷彩柄の戦闘騎は、
全体的に平たいフォルム。

ごつい装甲に覆われて、露出部の無いエンジン。

加えて、四枚の翼に挟まれた二門の機関銃がいかめしい。

「こ、これって…ベイン・ジュトロの後継機？」

まだ、市場に出回ってないのに……。」

「……はい。ここにある物は全て、製造元から優先されて頂いて
いる物です。」

各社から試用して欲しいと山のように来るのですが、時間があまり無くてこのとおりです。」

ミーサに答えながら、その機体に片手を触れるジン。そして、彼はそのまま膨大な数の戦闘騎を見回した。

「戦闘騎の技術は日進月歩ですが……。
このベイン・ザートロは、今のところ最新鋭の機体ですよ。
火力も乗り心地も一番です。」

「まさしく、俺様にこそ相応しい機体だ。
かもし出される風格は、ただの機体ではないと初めから思っていたぜ……」

いつの間にか、腕組みをしながら既に操縦席を陣取っている戒。目を閉じながら、独り、優越に浸る。

「……もう！……調子いいんだから！！」

ミーサが彼を見上げて叫んだ。

「……でも……あいつ、何で急に協力する気になったのかしら？
しかも経験の無い、戦闘騎にまで乗るなんて……おかしいわ。」

「……さあな。
フィンドルに頼まれたからじゃねえのか？」

彼女の呟きに、バーグは各機体をぼんやりと眺めながら答える。

「あいつ……そんな良い奴かしら？」

「……ああ……」

生返事をしながら、バーグは倉庫の奥を覗く。

（……何でも選んでいいったってよ……いまいち、俺には何を選んでいいのやら……）

試しに遠くまで足を伸ばすと、彼の目に一つの機体が目に留まった。

埃を沢山かぶっていて。

倉庫の隅にこじんまりと置かれている『それ』は、見る者に哀れな印象を与えていた。

「ミーサ、こいつは？」

「こんなの……知らないわ。」

バーグに駆け寄って、機体のすす汚れを指にとって答える彼女。

「計画が頓挫し、生産までいけなかった機体です。」

ジンが答える。

「丈夫なだけを取り得の機体……ですね。」

その機体の色は、上下を臙脂えんじと黒ではっきりとツートンカラーに分けていた。

ジンは歩み寄り、その下部を指す。

「この腹の部分は、黒色イーゼル鋼……つまり、錬金術によって生成された特殊な金属で造られているのです。
その硬度は……」

下へ向かって鋭利な山になっている機体。
それを慎重に指でなぞりながら、彼は続けた。

「鉄の約5000倍。
並の銃弾などは通しません。」

啞然とする二人をよそに、彼は続けて布を手にする。

「付けられた機体の銘めいは……『イグノシアの大剣イグノシア・ブレード』。」

その指が素早く一気に機体の脇を拭くと、埃の下から現れる、筆記体で書かれたその名。

「まさしく、掘り出し物みたいじゃねえか!!」

歡喜の声を上げるバーグ。

だがそんな彼に対し、ジンは首を振った。

「これは装甲の堅さは無論のこと、確かに機動力も火力も悪い機体ではありません。

…ですが、手軽に修理が出来ない代物を貴方は使いたいと思いますか?。」

「……一流の剣士は、戦っている時に修理のことなんて考えねえよ。」

バーグが笑いながら返す。

「上手く扱えば、大剣のように相手を真つ二つに出来るんだろ?俺にピッタリじゃねえか。」

「なに、バーグ!

あんた、そんなに適当に選んで!!」

冗談のような彼の態度に、烈火の如く怒るミーサ。彼女の大声に縮こまりながら、バーグが振り向く。

「だって、面白そうじゃねえか…。

どの戦闘騎だって、俺にゃあ同じに見える。

そんな中、直感で気に入ったんだ。勘弁してくれよ。」

情け無い声で彼は訴える。

ミーサも溜め息混じりに、苦笑を浮かべた。

（戦闘騎の腹が刃物のようになってる…。

これが造られた当時、普通の操縦士達には、そんな設計機構と用途は理解出来なかった。

だが…普通でなければ…どうでしょうか…。）

ジンは二人から少し離れた。

「　　そうそう上手くはいかないでしょう。」

それなりの速度が出ても、戦闘騎が剣のように鋭利な刃物になるとは到底思えません。」

「それって、同意見。」

離れ際のジンの言葉に頷きながら、ミーサも言った。

「理屈じゃねえのさ。　まさしくこれは、剣を選ぶ時のような感覚だな。」

バーグが笑う。

「……わかりました。　早速、搬出させましょう。」

あと、半日しか訓練時間はありませんから厳しくやらせていただきますよ。」

ジンは扉を目指して歩きながら、すれ違いざまに戒へ声をかけた。

「……ちつ、偉そうによ……」

舌打ち混じりに、機体上で呟く戒。

「……貴方の、戦闘騎の搭乗歴を聞いておきましようか。」

ジンは後からついてくるバークに言った。

「……一年も無い。」

「……わかりました。」

新しい機体は勝手が違います。まずはそれに慣れて下さい。くわしい技術は、それから教えます。」

「……よし！」

彼の言葉に、バークが両の手を叩き合わせて気合を入れる。

「戒さんは……」

振り向き、まだ機体に乗ったまま踏ん反り返っている戒を見上げ

るジン。

「まず飛び立つことだけを考えてください。」

「馬鹿にしてんのか、てめえ。」

淡々とした彼の言葉に、戒は思わず機体から飛び降りた。

「なに怒ってんだよ。」

難しいんだぞ、普通に飛び立つのって。

特に、浮くタイミングってヤツを会得するのにはよ……俺は一月くらいかったんだ。

とても数時間で出来るもんじゃねえとは思っがな……。」

バークが素の表情で言った。

「それでも、やってもらわなくては困ります。」

ただでさえ、今のルベランセには戦力が無い。」

「…ふん。」

いっちょまえに、味方ヅラしやがって。

あとで吠えヅラに変えてやるぜ……。」

捨て台詞を残し、大股で前を行く戒。

「あいつこそ…少しは味方面するべきじゃないかしら……。」

彼の背を見ながら、ミーサが一言呟いた。

「納得……いかないんだよなあ……」

無然とした表情で、目のすわったリードが呟いた。

「そろそろ機嫌を直してもらえるかしら？」

そりゃ、一言も相談しなかった私も悪いけど……。」

艦長席で報告書を書き続けるフィンデルがペンを止める。

「俺たちは無能か！？　なあ？」

彼は椅子を半転させ、彼女に向いた。

「……何で、そういうことを言うの？」

「……何でって……。」

ルベランセの戦力の殆どを部外者に頼りきって……これじゃあ誰が見ても……」

そんな言葉を吐くリードは、直後に冷たい視線を浴びた。

「善意でやってる彼等は、体面だとかプライドとか、そんな些細なこと微塵も考えて無いと思うわ。」

「む……。」

「特にジンさんなんて…本当に、何の得も無しに協力してくれているのよ。」

年齢だつて…私達よりずっと若くて……それなのに立派だつて思わないの？」

「歳は関係無いだろ……」

返す言葉も無く、リードが下を向く。

「……つて…あいつ、いくつ？」

「…多分、世羅ちゃんより遅く生まれてるから……」

フィンドルが考えながら黙りこむ。

やはり彼も無言となり、二人は考えるのをやめた。

「ひええ……大人びてますねえ……」

代わりに呟くタモン。

そんな中、窓外の空を流れる一筋の影。

「あら！」

思わず歓喜の声と共に立ち上がるフィンデル。

「やっぱりさすが！」

教え方がいいのかしら。……バーグの飛行があんなにも見違えるなんて。」

青空を真っ直ぐ加速する一機の戦闘騎。

それは、やがて遊覧するように余裕のある滑空に移行。

さらにターンをして見せて、とんぼ返りさえ行って見せる。

「いや……あれは……」

しかし、指で目を細めてそれを見上げるタモンの表情は冴えない。

「？」

「……どうやら……あの『戒』って子が乗っているように見えるんですけど。」

「え？」

フィンデルは思わず間抜けな声を上げた。

「じゃ…じゃあ、向こうでへっへっしてるのは…？」

震える指で遠くを指す彼女。

天空を優雅に飛行する機体の遥か下で、飛ぶのもやつとに見えるもう一機。

「あっちが…バグ機っすね…。」

何故か申し訳ない気分になって、タモンは呟いた。

それはまるで初心者飛行。

高度も出せず、小刻みに揺れて安定していない機体。

まともに飛べていないのは、誰が見ても明白だった。
思わず全員の肩が落ちる。

「…ますます肩身が狭いっすねえ…うちの軍は…」

タモンは追い討つように言った。

「…そう気を落とすな、ヒゲ。」

一旦の休憩時間。

汗を拭きながら、爽やかな表情でバークの肩を叩く戒。

「俺様が天才なだけなのだ。」

「ヒゲって言うな！

もう剃ったんだからよ！！」

戒の嫌味に、ついに掴みかかるバーク。

「あまり、調子に乗らないでもらいましょうか。」

まだエンジンの熱い二機の戦闘機を前で揉み合う二人に、ジンが歩み寄る。

「確かに初めてにしては見事ですが、それはあの機体のオートバランスが働いているに過ぎません。

まあ、それだけ高価なモノですから当然といえば当然です。」

「機体の性能だっって言いてえのか？」

それまでご機嫌だった戒が睨みを利かせた。

「その通りです。

この程度で慢心されては困る。次、射撃訓練に移りますよ。」

「…望むところだぜ。」

去りゆくジンに、意気揚々と続く戒。

「な、なあ…俺は…」

息を切らせながら、自分を指差すバーク。

「貴方は まず普通に飛んで見せて下さい。」

ジンは振り向き、冷淡に言い放った。

草原に置かれた、幾多もの物干し竿。
風と共になびく、それにかけられた真っ白なシート。

日差しを遮る雲も一片も無く、出立までには全部乾きそうな様子にシャロンは安心した。

（……ってアホか！ 洗濯するためにルベランセに潜りこんだわけやないやろ！！）

だが直後に気付き、まだ中に少し洗濯物が残っている籠かごを勢い良

く振り回す彼女。

再び鼓膜を貫く轟音。

見上げれば、また戦闘機が飛行している。

戒達の訓練は、朝早くからひっきりなしで。

その勢いには、シャロンも心底感嘆していた。

「……随分……おもしろいことやってるじゃない……シャロン？」

だが、そこで背後から嫌味を含む声。

「やかましいわ！」

こないな仕事、あたしだって好きでやってるワケじゃ……」

叫びながら、反射的に振り向くシャロンが硬直する。

視界に入る、真っ赤なツナギ。

その腹や腿の部分には、特殊な黄色い炎の紋様。

首に風除けのゴーグルを下げた、そんな中背の女性がわずかな気配で立っていた。

「……オ……オヴェル……！？」

驚きのあまり収縮する喉。

シャロンの狼狽した表情をあざ笑うかのように見、眼前の女性は自分の長い髪を手ですいた。

「どしたの？」

そんな間抜けな顔しちゃって……。」

自分の両手を背中できぎ、肩を振りながら近寄る彼女。

「『同期』のよしみで迎えに来たのよ？」

そしてシャロンのすぐ横顔で微笑を浮かべる。

「あ……アホ抜かせえ……。」

11番艦の戦闘騎部隊の隊長のおまえが……わざわざ……」

「あ、バレちゃった？」

女は、すぐに舌を出して笑った。

「本当は偵察。」

ウチの艦を二隻も墮とした敵さんだもの。

部下には任せられないわね。自分でやった方が早いし、確実。」

立ち尽くすシャロンを横切り、腰に手を当てながら遠くにぞびえるルベランセを見張る。

「でもまさか、あんたが潜入しているだなんて思わなかったけど……一番の驚きは、サイア商会が手を貸したことよね。これはちよっぴり厄介かしら。」

オヴェルは、空を飛ぶ戦闘騎を目で追いながら言った。

「あ、そうそう。」

言い忘れてたけど……」

口の端を歪めたオヴェル。

シャロンはそんな彼女を黙って見詰めた。

「私、もう『戦闘騎部隊の隊長』じゃないのよ。今は『11番艦の艦長を兼任中』、ヨロシク。」

「……なんやて？」

彼女の急な言葉に、目を白黒させて驚くシャロン。

「今の艦長が急に具合を悪くしちゃって、その代理。でも今回の作戦を成功したら、この地位は間違いなく私のものとなるわね。」

言っていることとは対照的な、軽い口調。

彼女はシャロンの顔を舐めるくらいに近付き、不気味な円を描きつつ周りを回る。

「また差が付いちゃったわね。」

止まって、会心の笑み。

「うふふ。すべては、紅蓮^{ぐれん}さまのおかげ。

紅蓮様にお仕えて、紅蓮さまの言うとおりにしていれば、炎団では何でも手に入るんだわ。」

当てつけるようなオヴェルの言葉の数々。

それに対し、シャロンはさすがのような目をした。

「な……なあ……。」

なんで、あたしは 紅蓮様に嫌われてるんやろか……。」

「……………」

そこでオヴェルは動きを止め、無言でシャロンの言葉を聞き入る。

「紅蓮様が、私のアニキに惚れてるんは知ってる。

あたし…別に止めへんで。

アニキも紅蓮様を好きになれば、むしろ祝福するし……。」

互いに、暫しの沈黙があった。

小さな一つの溜め息が、嫌に遠くから聞こえた。

「……ったくよ……わかんねえかな……
……このバカはよ……」

やがて視線を逸らし、地に唾を吐いて呟くオヴェル。

洗濯籠が倒れ、洗ったばかりの大きな青い布が地に落ちた。

「……っぜえんだよ……！」

紅蓮さまには……てめえの存在自体がよ……！」

掴み上げられるシャロンの胸倉。

「紅蓮さまの恋路を止めない？ 邪魔しない？
二人が相思相愛になれば、むしろ祝福する？
……勘違いしてんじゃねえぞ……！」

そのままの姿勢で恫喝。

「『妹』っただけで、そういう風に余計なこと考えるから、ムカつくんじゃないか……！」

オヴェルの雷撃のような言葉に、シャロンは身体を硬直させるばかりだった。

「いつまでも勘違いしやがってよ……！」

『赤』を誇りとしている炎団の中で、紅蓮様がてめえらにそんな『青』い服を与えた意味……

てめえ、分かってねえだろ!？」

動けない彼女の頭から足の先まで、眺めまわすオヴェル。

「……紅蓮さまはな……『やめちまえ』って言ってるんだよ!!
消えろよ、バカ!!」

俺はてめえが兄への憧れだけで空賊やってるってこと自体が、すげえ腹立つしよ……!!」

唾と共に罵声を浴びせ、オヴェルは地を何度も強く踏みつけて不快感を示す。

ようやく手が離れたかと思うと、シャロンは最後に突き飛ばされ、足をもつれさせて地に転んだ。

「……おまけにコロコロと配属変えられるから……ロクに手柄も挙げられねえで……」

……でも……そうやって……のうのうとして……」

俺だったら……とても恥ずかしくて居続けられねえ……」

小さく呟き続け、やがて平静を取り戻していくオヴェル。

さらに、頭が小刻みに震えたと思うと、彼女は一旦動きを止めた。

「…ま、いいや……。」

今のシャロンの状況は、炎団にとって都合がいいし。」

顔を上げると、先ほどのように明るい表情を見せるオヴェル。

「共同戦線と行きましょ？」

私達がルベランセを背後から襲い、その隙にシャロン達がブリッジを占拠する。

今回はこれがベストの方法、そうでしょ？」

「……なあ…あんな艦、無傷で手に入れてどないすんねん…」

地べたで萎縮しながら、シャロンは訊いた。

「そんなこと知らない。

…知る必要も無いし、団員は組織が決めたことに従っただけ。」

オヴェルは答える。

「ふふっ……ルベランセは…このオヴェル…ハイマンがいただいちゃう。

成功した暁には…もうちょっとマシな待遇にしてもらえよう、私から紅蓮様に伝えてあげるわね。

…せいぜい頑張るのよ？」

勝ち誇った顔をして、彼女はつま先を反対側へ向けた。

彼女が視界から消えるまで、じっと地を握りしめるシャロン。
後には悔しさ以外、何も残っていなかった。

（…何で…何でこんな恥を偲^{しの}んで災団に居続けるかやて……？）
まだ震える手で、地に落とされた青い布を取るシャロン。

（…今、ここで止めたら……ただの負け犬やないか…！）
全身から砂を払い、それを握り締める。

（あたしの覚悟……そんなちっぽけなもんやないんや…！！）
彼女は唇を噛んで立ち上がり、白いシートと一緒に青い布を竿にかけた。

布の向こうから差し込んだ陽の光が、涙で妙に眩しく見えた。

「…そう…優しく握って下さい。」

「……………」

言われたとおり、操縦桿を持つ世羅。

ジンは彼女の傍らに近付き、肩を片手で抱いて、もう一方の手を彼女の手の甲に静かに被せた。

「…そう。」

そして…機銃のスイッチに親指を添える感じで。」

教えながら、さらに互いを寄り添い合う二人。

「……何、イチヤつき合って遊んでやがるんだ……あいつら?」

そんな二人を遠目に見ながら、前傾で座り込んでいる戒が呟いた。続けられる訓練に、本人は汗だけで疲労を極めていたが、苛ついた口調は崩さない。

「世羅の遊び相手になってやってるだけだろ。」

……嫉妬なんてみつともねえぞ。」

角度を調節するため、自分の機体の右翼を手で曲げながらバークが言った。

「嫉妬? 俺様が?」

小馬鹿にしたように、肩をすくめる戒。

「どう見たら、そう解釈できるんだ。」

「どう見たって嫉妬でしょ？」

その機体の真下から、這い出すミーサ。顔は油で、ところどころ黒ずんでいる。

「戒ってけっこう、わかりやすいのね。」

さらに彼女は笑った。

「無駄口叩いてねえで、さっさと俺様の機体も整備しろ。」

「何よ、それが人に物を頼む態度なの！？」

「てめえは整備兵。俺様は義勇兵だ。」

「…戦ってやるから偉いつてこと？」

別に私は頼んでないんだからね！！」

「てめえのところの副艦長が承認済みなんだよ。雑兵はおとなく上官の命に従ってる！」

戒の暴言に、強く握られるミーサの大スパナ。

「こいつ……！」

「ミーサ。」

バーグが静かに口を開く。

「まあ、ここは一つ頼むわ。」

彼女の肩になだめかけられる、ぶ厚い手の平。

「……わかったわよ……」

「手エ抜くなよ。」

余計な戒の一言に、ミーサがまたも睨んで返す。

「それより……戒、お前よ……」

そんな中、おもむろにバーグが煙草に火をつけながら言った。

気温も上がり始めた昼下がりに。

最終的には、何とかバーグの飛行も『まし』になり、一通りの訓練は終了した。

だが、慣れない戒はまさしく疲労困憊の状態であった。

「昨日は忙しくて聞きそびれちゃったが…。
そろそろ、説明してくれてもいいんじゃないか？」

「何をだ？」

「皆をあれだけ危険に遭わせておいて、説明が無いってわけでもな
かろうに。」

息を勢い良く吸う。

一気に灰になる煙草。

「てめえらが勝手に危険に飛びこんだんだろ。」

「みんなお前の力になりたいからこそ、やったことだぞ。」

「……まあ、お前がイヤだって言うんなら、無理には聞かねえけど
よ。」

バーグの優しい言葉にも、戒は憎らしい態度を取り続けた。

「お前が中王都市へ行く理由と、何か関係あるのか？」

彼は何も答えない。

下で聞こえる、整備の金音だけが耳に入った。

「……それに……中王都市に着いたら、世羅はどうすんだよ？」

「あ？」

暫くしてからの言葉に、戒が野太い声で返す。

「あいつと一緒に居てやれよ。」

「……………バカか？」

行き先が同じなだけで、俺様が何でそこまで面倒みなきゃならねえんだ……！」

思わず大きくなる声に、戒が周囲を見回す。

別の場所へと遊び場を変えたのだろうか。

既に、世羅の姿は無い。

それが分かったと、途端に身振りを大きく。

戒は両の腕を大袈裟に開いた。

「……………俺は、あいつの何だ？ 他人だろ？」

これから進む道だって、まるで違う。

あいつは飛翔艦乗りになりたい、俺様は……………大学に行きたいんだ。

「

「お前、勉強なんて向いてねえよ。

あいつの傍に居てやれ。」

「人の話聞けよ！」

戒が目を剥いて、バーグに掴み寄る。
だが、返ってくるのは、穏やかな視線だった。

「……お前……にぶいな。」

そして、バーグの呆れるような声。

機体の下で黙って二人の話を聞いていたミーサが手を止める。

「あの子はな……ああ見えても、行きずりで誰かと一緒にいるような子じゃない。」

お前の本質を心の底から認めているからこそ……」

「うるせえ。」

戒が、バーグの口を強く手で掴む。

「……世羅のことはもう……フィンデルに任せただよ。」

静かな一言。

「……おい……!？」

まさか……お前……!！」

バーグは、その言葉の意味を理解すると血相を変えた。

「もしかして……その『条件』で戦闘騎に乗るって『取引』したのか!?!」

逆に、彼の修道着の襟をわしづかみにして詰め寄る。

「…悪いかよ……！」

…飛翔艦乗りになりてえのなら、専門家に任せた方が早いに決まってる!?!」

戒が窮屈な姿勢で呻いた。

「……てめえにしちゃ……上出来だぜ……全く。」

バグが舌打ちをして、手を離す。

機体の下のミーサも笑みを浮かべて、作業を手早く仕上げた。

狭い視界の横で、戒のブーツが早歩きで動くのが見える。

「…まったくよ……ジンの野郎、俺様の機体にこんなにペイント弾撃ちやがって……」

ドライバーを片手に、自分の機体の背後に付着した蛍光色の粘液を削る戒。

「別に、あんたが貰った機体じゃないでしょ…。
借り物なんだから…文句言わない。」

ミーサは機体下から這い出し、汗を拭った。

「でも、バークの方には…あんまり付いてないわね。」

「…そうか？」

彼女が何気なく発した言葉に、バークが不思議そうな顔で自機の後ろを覗き込む。

「あいつ、ヒゲは眼中に無えんだろ。」

「いえ…ちゃんと平等に狙いましたよ。」

またも、いつの間にか近付いていたジン。
彼もまた、バークの機体の背面を触れながら調べる。

「確かに…思ったより被弾していない……」

呟く、その目は、真剣そのものだった。

「何故、こつも避けることが出来るのです？
操縦は恐ろしく下手なのに。」

彼のはつきりとした言葉に、バーグが思わず顔をしかめる。

「わかんねえよ。」

そして少し考えた後、言った。

「なんとなく、相手が撃ってくるタイミングがわかる。それだけだと思う。」

「『なんとなく』？」

直感で操縦している、と？」

ジンの問いに頷くバーグ。

「それならば何故、同様の感覚で私に撃ってこないのです？
機体の操縦だって、もっと上手く出来るでしょう？」

「無理だって！！」

武器は機関銃だぞ？ 剣とは違うんだ。
空と陸の差だってあるし……」

その言葉に対し、ジンが眼光を強めた。

「空も陸も同じですよ。」

そして彼に近寄り、下から睨みつける。

「それに銃と剣にだって、根本的な違いなどありません。
……そんな先入観が、貴方の操縦を小さくしてとは思いませんか？」

語気を強めて、彼は去っていった。

「あいつ、何言ってるんだ？」

空と陸…銃と剣なんて、根本から違うじゃねえかよ。」

暫くしてから、バーグが口を尖らせる。

「意地悪言って、混乱させようという魂胆だぜ。」

ジンの背を眺めながら地面に唾を吐く戒。

だが直後、彼は深刻に考え込むバーグに気付いた。

「…む……。」

確か…リジャンにも昔、同じようなことを言われたような気がするんだが…」

「よせ。」

単細胞が考え出したら、ハマるぞ。」

戒はそんな彼を尻目に、戦闘騎と草原の作業場から離れようとする。

「ちょっと…そろそろ出発よ!？」

その彼の様子に思わず声をかけるミーサ。

「すぐに戻る。

整備やら搬入やら……後はやっておけ。」

戒は言い残すと、森の方へと歩いて行った。

「わーーーーっ!!」

奇声にも似た、世羅の大声が草原に響く。

「さー！　これから大カーブだ!!」

「しっかり掴まって下さいよお!!」

イールとムールが押している木の台車には、水を入れるためのタ
ルが乗っており、その中に世羅が半身を沈めて
草原を駆け抜けている。

下り坂で驚くべきスピードをつけ、速度を保ったまま、サイア邸
の庭先に突入。

急なカーブも力任せに角度をつけて、水を汲むための井戸へ向けて一直線に台車が駆けていく。

「さて、ここからは…」

「進むのみ……！？」

大きな井戸が見えた矢先。

台車を押す二人が庭の人影を認めた瞬間、車輪が急停止する。

身なりの良い優男が、自分達のふざけ合う姿を冷たい目つきで眺めているのであった。

「あ……」

「これは……えっと…」

ばつが悪そうに、彼の視線を気にしながら、台車からゆっくりと手を離すイールとムール。

すぐに世羅を脇に抱えて降ろし、台車だけ押して、いそいそと目的の井戸へと向かう。

「……？」

また、遊ぼうね！！」

全く事態を飲み込めない様子で、笑顔と共に彼等に手を振る世羅。

遠くで、二本の手が振られるのが見えた。

「……世羅……ディーベンゼルク……」

意図せず、唐突に目の前に現れた世羅。

リ・オンは、彼女を見下ろしながら思わず口を動かしていた。

「？」

彼の顔を凝視する大きなエメラルドグリーンの綺麗な瞳。

特に似てもないのに、知っている夫婦の顔が重なる。

彼は目を軽く閉じ。

義足に体重を乗せて彼女に近付き、その頭を優しく撫ぜようとした。

だが寸前でその動きは止まり。

「……本当に……良い名だ。」

一度聞いたら……一生忘れない。」

彼女に聞こえないように呟き、リ・オンはその場を離れ去った。

「…………頼む。」

木々の隙間を縫うようにひっそりと現れた人影に、昨夜倒した凶獣の残骸ともいえる木片を渡すザナナ。

彼はその影が消えるまで見送り、白い槍を肩にかけた。

「……いいのか？」

後ろから、近付く戒。

「族長の仇を討てたこと、今の猪族の者に伝えてもらおう。ザナナは、森に戻る気は無い。」

「…………変な野郎だ。」

振り向かず答えるザナナ。
落ちる木の葉が、ゆっくりと舞っていった。

「あとよ…………何かとつけて、俺様をかばうような真似はよせよ。」

やがて、機を見て言葉を発する戒。

「かばってなどいない。」

ただ、皆、戒が傷を治すことを『当然』だと思っている。

それが許せないだけだ。」

「許せないってなあ……」

呆れる戒に、向き直る豹頭。

「ザナナの『同族を守ること』は当然だ。
だが、戒は違う。

そこまでの覚悟、無いだろう。」

「……………」

「戒の覚悟は、どこか違う場所にある。

そのために中王都市というところまで行くのだろうか?。」

「……………ああ。」

鼻から大きく息を吐くと、戒はうつむいた。

「だけどよ……世羅には……言っても理解できねえことだ。」

「ザナナは、別に世羅のことが嫌いと言っているわけではない。」

「そんなことくらい、わかってる。」

「ザナナは むしろ……………」

含みを持ったまま、ザナナは言葉を止めた。

暫くしてから、再び口を開く。

「あの世羅のように笑いたいと思った。」

「あん？」

急な言葉に、戒が不完全に答える。

「笑うと、フ族はすがすがしいのだろう？」

「まあ……普通は、な。」

彼の言葉の意味も分からずに、戒は答えた。

「……ザナナは笑うことが出来ない。

だが、世羅が笑うと、ザナナの気も晴れる。
……そんな気がしたのだ。」

豹頭が語る真意に、戒はずっと見入っていた。

「お前がついて来る理由は……『世羅』かよ？
……全く、どいつもこいつも……。」

冗談交じりに笑い飛ばす彼。

「それに…興味があるのだ。
空にもな。」

「いいのか？」

「いいのだ。」

元々…ザナナに安住の地は無い。」

二人は並んだまま、陽の光が弱まり始めた空を見上げた。

太い掛け声と共に、数十人の男達が一斉に鋼鉄で結わいた極太のロープを引く。

そのロープは、ルベランセの屋根に何本もくくりつけてあり、それが強い力で引かれる度、山にもたれたその艦体を垂直に戻していった。

その動きを艦内の廊下に居ながら感じていたフィンデル。
それまで傾斜のあった足元が平行に近付いていくのがわかる。

「…どう？　憶えきれる？」

「脳みそが『うにうに』してますよ…」

動力室に入り、フィンデルは後ろから声をかける。

振り向きもしないで、ぶ厚いマニュアルを片手にしたミイサが呟いた。

「源炉の修理は…」

「完璧に終わってますよ。」

さすがはサイア商会の技師、すぐに直してくれました…」

「それは……損傷自体が軽かった、ということかしら？」

多くの管に巻かれた、物言わぬ金属の大きな塊に、ゆっくりと歩み寄るフィンデル。

「技師の話では、源炉内第二層のディンコマス弁が操作されて、出力を抑え込まれていた
みたいなんです…。」

これじゃあ、吸源管と排出管が生きてても思ったように動きませんよね…。」

「そうね……。」

でも…えっと……つまりどういうことかしら？」

フィンデルは苦笑いを浮かべて訊いた。

「『簡単』な工作をされたって感じですね。」

やっぱり、敵はルベランセを壊すのが目的じゃなかったみたいで
す。」

ミーサはそれだけ言つと源炉に向き直り、床に腰を下ろして早速作業を始める。

フィンドルはその答えについて少し考えた後、彼女の肩に優しく触れた。

「ごめんなさいね、搬入した戦闘騎の整備も残ってるのに……」

「いえ。……でも、これって一度起動すれば操作する必要ありませんよ？」

技師がいる中王都市に戻れば、彼等に任せられるし、安全……」

源炉を見ながら、マニュアルを手の甲で叩くミーサ。

「だめよ、この源炉を思い通りに操作できること。それが今回の作戦の最大の『要』になるわ。」

「うわっ……壮大……」

彼女の強い口調に、「冗談交じりに返すミーサ。

「お願い、ミーサ。」

一日だけ、源炉のエキスパートになって頂戴。」

しかし、フィンドルの横顔は真剣そのものだった。

「何か…あっさりと凄い無茶言ってますよ。副長。」

ミーサの言葉に、彼女は自分の全身が強張っていることに気が付いた。

「……ごめんね。」

でも、無茶は承知の上なの…」

「大丈夫。副長の思いと同じくらい……今は私もこの艦を守る気があるつもりです。」

ミーサは微笑んで答えた。

「……バーグが帰ってきたから？」

「…ち、ちがいます!」

フィンドルの言葉に、瞬時に真っ赤になって否定する彼女。

「バーグだけじゃなくて…」。

…他にも…一生懸命な奴とかいるし…」

マニュアルと源炉本体を素早く見比べ、照れ隠しに作業を始める。

「…そうね……。
やらなくちゃ……ね。」

その真剣な彼女の横顔を眺めながら、フィンドルは最後の挨拶をするために動力室を後にした。

「なあ……どうするよ……。」
「え？」

イールの呟きに、反応するムール。

「いざ潜入してみたものの……どうすりゃ、これを制圧できんだ？」
「うむう……。」

モップでルベランセの廊下の床をしごきながら、彼は呻いた。

「それにさ……なんか……やる気そがれちつたなあ……」
「イール……！」

ムールが立ち上がる。

「……すまん。」

思わず口をついてしまった自分の言葉に謝罪するイール。

「お、オレもわかるよ…。」

ここの人達、悪い奴じゃねえし…。」

先の世羅の笑顔を思い返す。

「でも…お嬢への想いは、それとは『別』のはずだぜ。」

「…ああ、そうだな…悪かったよ。」

いつしか、二人は無言になり。

「ああ…」

同時に溜め息。

「賊に向いてないのかな…オレ達。」

そして同時に呟く。

その時、突き当たりに青い服の端が見えた。

姿を見せる、神妙な面持ちのシャロン。

今の話を聞かれてはいないかと、二人は背筋を緊張させて彼女に体を向けた。

「……お嬢……。」

「……これから段取りを話すで……。」

彼等の呼びかけに、彼女は虚空を見詰めたまま答えた。

「段取り？」

「この艦を制圧する段取りや。」

早口で返される言葉。

「……11番艦がもうすぐそこまで来とる。」

「え！？」

イールとムールは同時に飛び上がった。

「ルベランセが奴等の攻撃に氣をとられている間に、あたしらが内から制圧する。」

そんな『予定』で話は進んどる。」

「もうそんな手はずを……」

「……流石はお嬢！」

二人が両手を叩いて示す賞賛に、シャロンは顔を紅潮させて齒軋りした。

だが、余計な事は言つまいと自分の両頬を叩いて気合を入れる。

「覚悟……出来てるんやろな！」

「……はい！」

「もちろんで……！」

笑顔をつくり、二人が威勢良く叫んだ。

（上手くいけば……これが第一歩となるはずや。

失敗は許されへん……）

彼女の目に、余計なものが目に入ることは無かった。

少しの迷いも無く、迷路のような艦内の廊下を突き進む。

「……炎団『青組』……いくで……！」

三人の踵が、廊下に鋭く鳴り響いた。

一番星が輝く、薄夜空の下。

「…で、どうですか？

即席の戦闘騎部隊の方は…」

ルベランセから伸びた階段を降りながら、フィンデルは下で待ち構えていたジンに訊いた。

「戒さんは初心者ながら、なかなか器用に扱っています。無論、まだまだ実戦レベルではありませんが……。」

「バーグの方は？」

「…正直………なんと言いますか……
彼を作戦に参加させること自体、無謀ですね。」

口調も重い。

「彼の腕で今の機体を扱うことは難しいでしょう。
おそらく、彼は不器用では無いのでしょうか、年齢のせい
か頭が固い。」

額に指をトン、と乗せて笑うジン。

「……わかりました。

そろそろ出発の時刻です…宜しくお願いします。 ジンさん。」

「ええ、やるしかないでしょう。」

……行きましょうか。」

首の後ろまでしっかりとガードの付いた、クリーム色のツナギの前を閉めるジン。

彼はそのジッパーを勢いよく上げた。

同時に、源炉の唸り声に大地が揺れる。

砂と土は噴き上がり、粉々に砕けて舞った。

強引な離陸のため、見送る者も居ない草原。

二人は飛翔艦へと上る階段の途中で、その暴風の中を臆せずに近付いてくる人影を認めて足を止めた。

それはリ・オン。

「父上、何か言っておくことは？」

「無い。」

ジンの言葉に、彼は即座に答える。

魔導人形も、いつも通り無言で主人の後ろに付いていた。

「……では、行きましょうか。」

「リ・オンさん……この度の御好意をルベランセ全乗組員に代わって、心から感謝いたします。」

ジンに促され、頭を下げて階段を上るフィンデル。
リ・オンの目に映る二人の姿が遠ざかる。

「…言うことが無いのなら……来る必要は無いのに…。
本当に、父上は素直でない。」

横のジンの呟きを聞いたフィンデルが、最後に振り向く。

飛び立とうとしている艦をただ凝視しているリ・オンの姿。
フィンデルはその彼の想いに、今度は敬礼で応えた。

4

歯止めを知らない、祭りの賑わい。
闇夜を揺らして照らす強い炎の光は、庭内の壁ごしにも見えるほどだった。

対照的に、中王南教会の敷地内は寒々しいまでに広く。

会議の場となる本聖堂は騒々しい周囲とは無縁で、その中心で静かにたたずんでいた。

周辺警護の任を担う緑華が本格的に配備されるのは明日の昼間。それまで敷地内には教会関係者以外はおらず、その夜は閑散としていた。

「おい、マクス……！！
ようやく……しごきが終わったぞ……！！」

「……私に言われても困るな。」

大声を張り上げ、庭先まで疲れた体を引きずってやって来るヂチヤードに、マクスは傍らのクウに笑いかけながら素っ気無く返した。

「しかしなあ……。
あとは目一杯遊んで来てもいいだなんて……シザー教官らしくないなあ……。」

青い顔で本聖堂を振り返り。

「……これは何かの罠だな。」

一人納得するヂチヤード。

「……考えすぎじゃないでしょうか……。」

クウが、ぼそりと呟いた。

その言葉に、向き直るヂチャード。
彼女は、思わず目を伏せる。

「私も考えすぎだと思う。

恐らく小団長は……本気で、遊んで来いと言っているのだろう。」

マクスが微笑んだ。

「……へえ……。」

その真意を汲み取ると……ゾツとするね。」

ヂチャードも肩をすくめて笑った。

「まあ、遊べと言われたら、俺は遊ぶけど。
お前らはどうする?」

「……明日は警護だ。」

それに差し障るような行動は控えるべきだと思うが……」

「おいおい……」

マクスの普段通りの生真面目な言葉に、彼は即座に溜め息をつく。

「……だが……限度を越えなければ、別に良かるう。」

歌と音楽を奏でながら、松明を片手に並んで横切っていく門外の住民達の姿。

それを眺めた後、マクスは穏やかな表情で言った。

だが、彼はすぐさま視線を遥か遠く。

闇夜の先にそびえる、高い山脈へと向ける。

彼が今までに、その動作を無意識に何度も行っていることをチヤードもクウも察していた。

「あら？どうしたの？」

ブリッジへと続く細長い廊下。

フィンデルが、その床で小さくなって作業をしているイールとムールに声をかけた。

「え？」

「あ！」

それに対し、大声を上げたと思えば、すぐに立ち上がり姿勢を正す二人。

「？」

彼等の様子に、小首をかしげる彼女。

「……イヤ……床のタイルがちょっと壊れてましたんで……」
「……ちよいと修理しておきました……。」

ぼそぼそ、声を出す二人。

「そう？」

この艦、結構古いから……。

ありがとう。」

微笑みながら彼女は礼を言った。
そんな言葉に対し、二人は下を向く。

「あの……副艦長さんは……どこへ……？」

「これから会議だ。」

航行中は、あまりチヨロチヨロするなよ。」

険しい目つきで睨む、後ろから彼女について歩くリード。

「ハイ……」

「すみませんです……」

廊下の端に寄り、イールとムールは列になった二人を通す。
遠ざかる軍靴の音。

「この廊下……思ったとおり、すれ違うだけで精一杯だな……。
最悪、オレ達の死地は……ここだ。」

二人が見えなくなったところで、イールが呟く。

「……ああ……」

ムールは無感情にそう答えるので精一杯だった。

人気の無い食堂。

テーブルを中心に集め、後は寄せて片付けた。

明日には中王都市か、それともあの世に着くのであろうか。
どちらにせよ、もう暫くは使わない食堂。

その中で、戒とバーク、ジンはそれぞれ考えを巡らし、表情を強
張らせていた。

フィンドルとリードがそこへ入って来る。

「みんな、わざわざ集まってくれてありがとう。
早速だけど今回の作戦の内容を聞いてもらえるかしら。」

足早に着席し、すぐに全員に声をかける彼女。

「その前に副長さんよ、この飛翔艦の飛び方について一つ気付いたことがあるんだが…」

食堂奥の小窓、若干傾斜した外の景色を眺めながら、バーグが言った。

「何でゴーベを斜めに、少しずつ上がってるんだ？」

「これじゃあ、時間がかかるだけだろ？」

そこで戒も加わる。

「やれやれ…素人め…」

呆れた様子で呟き、首を振るリード。

さらに手首を垂直にして、彼等に向ける。

「そのまま直線的に頂上を目指したら、飛翔艦の傾きはどつなる！？
乗っている人間が、みんな後ろに落っこっちゃうだろ！！」

「…それに、迅速な方向転換ができないので、あまりにも危険なです。」

リードの強い口調の後、付け加えるジン。

「そんなこと、俺様達が知ってるわけねえだろうが。」

悪態を返す戒。

「まあまあ、それは置いておいて…」

場をなだめ、改めてフィンデルが姿勢を正す。

「…ルベランセが最初の炎団の攻撃を退けてから早三日。

敵勢力は、既にこちらに追いついて来てもおかしくないわ。」

静まる空気の中、誰かの喉が鳴った。

皆の緊張が高まっているのが良くわかる。

「それでも攻勢をかけてこないのは、どこかで機会をうかがっているということ。

今まで中立地帯で停留していた私達を狙うには、ゴーベを越えるこの時をおいて他には無いと思うの。」

その空気を感じつつも、フィンデルは言葉早く続ける。

「おそらくは敵も必死…そして、最後のチャンスに全てを賭けてくることは必定。」

そして、追討して来るのは間違いなく『高速飛翔艦』

「

「高速？」

バークが聞いた。

「彼等は後発でも、ルベランセに余裕で追いつかなければいけない。そのために、火力よりも機動力を重視してくると思うわ。」

「それに、山岳付近では大規模な空中戦は展開出来ない。戦闘騎による襲撃も、少数精鋭で来るに違いない。」

リードが付け加える。

「おいおい…ちょっと待ってくれ。」

戒が焦った表情で言葉を発する。

「あんたら、まるであっちの動きを読んでいるみたいだがよ、それを完全に信じて行動するつもりか？」

昨日から思っていたんだが、来るかどうか分からない敵に、ちよつと慎重過ぎるぜ…」

彼の言葉に、リードは不安げな表情でフィンドルを一目見た。

「備えあれば、憂い無しということでしょう。皆さんの意見は色々あるかもしれませんが…私の経験から言っても、この程度の危険予測は欠かせません。」

だが、そこで口を挟んだのはジンだった。

「ですが裏を返すなら、ここまでは空に携わっていれば誰でも推測できる範囲。」

たとえ、その通りの展開になったとしましょう…」

テーブルに手を付いて椅子から立ち上がり、フィンドルのみを見詰める彼。

「問題は、このルベランセの戦力で、万全な襲撃をかけてくる敵に打ち勝つ算段があるかどうかです。」

そして口から発せられる毅然とした言葉。

「無論…何かの『策』があるのでしょうか？」

「……はい。」

フィンドルは、彼の質問に即答した。

「ならば、詳しい説明は不要です。

私は何をしたら良いですか？ それだけを教えてもらいたい。」

口元に笑みを浮かべるジン。

「やがて訪れるであろう、敵の先発隊に対抗してもらいます。

貴方達 三人の役目は、ルベランセに敵戦闘騎を一機たりとて近付けないこと。

……出来ますか。」

戒とバーク、最後にジンを見回し、フィンドルは言った。
彼女の瞳には一片の遠慮も無い。

「やりましょう。」

ジンが席を離れる。

「それが出来るならば……後は、私が何とかします。」

彼が食堂を出る直前に、フィンドルはもう一声かけた。

「『何とか』ってよ……」

不安な表情のまま言葉を洩らす戒。

「ちなみに、『お国違い』のお前に言っておくがな……」

リードが彼に向かって言う。

「これから向かっている中王都市の南部においては、ゴーベ山脈自体が国境みたいなもの……」

超えてしまえば、軍隊の駐留所とは目と鼻の先だ。」

「つまり、逃げ切れれば俺達の勝ち……ってことだな。」

バークが腕組みをして、腹の底から低い声を出す。

「……そうね。」

沈みがちな視線を、水平に保ちながら答えるフィンデル。

「各自、なるべく今のうちに休んで頂戴。」

山脈の頂上付近が、交戦ポイントになる確率が高いと思うわ。」

彼女の言葉を皮切りに、全員の椅子が鳴った。

彼女以外、誰も居なくなつた食堂。

その背後へ、すぐに戻ってきた戒が近付いた。

「何かしら？ 戒くん。」

うなじをかきあげ、彼の目的が解っていないながら彼女は言う。

「本当に……襲撃は……」

そこまで言うと、戒は一瞬言葉を詰まらせた。

「いや、その……なんていうか、確率で言うのだな……どれくらいで奴等が襲ってくるのか……聞いておきたいだけだ。
参考までに……」

「………怖い？」

フィンドルの問いに、頭を思い切り振り上げる彼。

「………怖いわけねえだろ……！」

「………無理しないで。」

過剰に反応した彼の手を握る彼女。

「まっとうな軍人でさえ、何年も……何度も何度も訓練しても、いざ

実戦では恐くて恐くて仕方なくて…

それでも『何も出来ない』のが『普通』よ。

実際…戦いというのは、それだけ危険で…」

「そんなことは、わかってんだよ……！」

真顔で諭すフィンデルに、戒が答える。

「…なまじ、出来る人間は辛いわ。

皆に期待されるし、それに応える義務がある……。」「

彼女が哀れむような目をしているのは、見なくても分かった。

「本人は…そんなに強くないのにね。」「

声がかすれているのは、飛翔艦の振動のせいだけではないだろう。それは、自分の境遇を重ね合わせている言葉のようにも聞こえた。

「戒くん……」。

貴方は本当に戦う必要は無いのよ…軍人じゃないのだから…」。

「…ヒゲに任せた方が、逆に危険なんだよ！

まだ…自分で戦った方が生き残る可能性があるぜ。」「

戒の強がりに、フィンデルは頬を緩めた。

「言つとくけど、冗談じゃねえからな。
見たらどう？」

あいつの操縦は本当にひでえんだ……」

うんざりとした顔で続ける彼。

「……それに……もうリジャンもいねえしよ……」

そして、彼女から目を逸らす。

「……ありがとう。」

ただ一言。

それが、フィンデルから発せられる。

「……これで、『地の利』と『人の利』が揃った……。
あとは……」

廊下の小窓の外をうかがう彼女。

強張ったその肩を、戒が軽く叩いた。

「……能書きはいい。」

それより、俺様がここまで危険をさらしてやるんだ。
生きて帰って……絶対に『約束』を守れよ。」

背を向けて、前髪を片手で上げる仕草。

天を仰いだ姿勢で動きを止め、彼はそのまま歩いていく。

それを見送った後、フィンドルは腰を椅子から離す。

そして食堂には、今度こそ誰も居なくなつた。

会議を終え、自分の部屋に戻ったバーグは考えていた。

（俺は……本当に出撃するべきなのか？）

気を静めるため、剣を抜いて素振りをすること数分。

（戦闘騎の操縦に関しては、ジンの方が数枚も上手……。ましてや、初心者戒にさえ……）

汗が飛び、それによつて握つた柄がぬめると、彼はすぐに剣を置いた。

（くそ…俺はまた、足手まといに違いねえ……）

居ても立つてもいられず、暗い廊下へと飛び出す。

思い出す銀の戦闘騎。

あの時、自分は手も足も全く出せずに墮とされた。

そして、ジンが言うように、『戦う環境の違い』を理由にして無意識に逃げているのだろう。

剣と違って、戦闘騎において敗北しても、悔しい感情の鈍さが一番腹立たい。

自然と辿り着く、螺旋状の階段。

眼下の格納庫の暗がりの中。

ランタンの作るまばゆい光の中に見えるのは、作業を続けているミーサの姿だった。

自分が出撃をためらっている事実を、彼女に相談するべきだろうか。

階段を一步一步降りる度、胸の動悸は高鳴る。

見ると、今まさに彼女が扱っているのは自分の機体だった。

硬くて慣れない物質の為か、その部位に触れ続けていた彼女の軍手には血が滲んでいる。

それは、出立からずっと作業を続けている証拠に違いなかった。

「…おい。」

声をかけると、ミーサはすぐにその両手を背に隠して立ち上がる。

「な、何？」

急に…びつくりした…」

眠そうな表情で笑ってみせる彼女。

大きな身体で、ゆっくりとバーグが寄る。

「…おい、殴れ。」

「は？」

彼の突然の言葉に、呆氣にとられるミーサ。

「俺を殴れ！」

「な、何？ 急に…」

「い・い・か・ら！」

殴ってくれ、早く…！」

自分の頬を叩きながら両目を強く閉じ、首を前に突き出すバーグ。

眠気覚ましなのだろうか。

ミーサは、仕方なしに手元の大スパナを握った。

「……いい!？」

そして尻に訪れた衝撃に、閉じた瞼の裏に星が飛ぶ。

「……いで……っの!!」

…くっ……だれが…『スパナ』でやれって言ったよ!？」

「え!？」

…だって…殴れって!」

「…普通、『平手で頬』とかだろ!!」

「何よ!

私にとってはこれが『普通』よ!!」

「く……くう……!!」

四つんばいになって、床にへたるバーク。
流石に、ミーサも腰をさすってやる。

「わ…悪かったわね…。」

「……………」。

その姿勢のまま暫く黙っていたバーク。

「…………いや、俺の方こそ…すまなかった。
ミーサ。」

真顔で呟く彼。

彼女は、再び目を見開いて驚いた。

「整備…俺にも手伝わせてくれよ。」

「やだよ…バ―グ、不器用だもん…」

ミーサが冗談交じりに笑って答える。

ランタンの火が、二人の影を揺らした。

「ええか？ 抜かるんやないで。」

用心のため、声を小さく絞ったシャロンの号令。

「相手は炎団の飛翔艦を二隻も退けた、有能な『指揮官』なんや…。
こっちが三人だからって、油断するんやないで。」

「はい！」

荒縄を両手に構え、震えるイールとムール。

「しかし、出来る人間は余裕やな。
ブリッジにも出んと、自室でゆっくりしとるとは……」

静かにドアノブを後ろ手で掴み、身構えるシャロン。
突入のタイミングを計る二人。

だがそこが『艦長室』であるということ。

それがルベランセにおいては何を意味するかを、部外者である彼等は当然 知る由もなかった……

暗い空間。

音が完全に止み、準備が完了する。

扉を開放するため、錠が外され。
吹き込む、月明かりと冷たい風。

「ああ、愛しい紅蓮様。」

鼻歌交じりに、きつく締められる右の赤い皮手袋。

「この戦い…貴女に捧げます。」

続いて、左手。

「私の人生における悦びは、貴女をいつかセルゲドニの首領にあげること。」

戦果の御報告、待っていて下さいね。」

胸の黄色い炎の紋章をなぞり、防風ゴーグルを装着する。

彼女の独り言は、そこで終わった。

「…んじゃあ、行くわよ。」

操縦席後部、左右の砲台に座る手下が、せかすように身体を揺らすのが判ったので呟くオヴェル。

「全機、出撃。」

彼女が片手を高々と上げて合図を出すと、格納庫の厚い扉は全開し、冷えた溶岩のような岩肌の
ゴーベ山脈が姿を現す。

横に広がった、巨大な赤い翼を先頭に、戦闘騎達は夜空に一斉に飛び出して。

そして山の傾斜をなぞりながら、風に乗って舞い上がっていった。

「……どう？」

みんな、適度に休めてる？」

フィンデルが、艦長席で仮眠から目を覚ますなり言った。

その言葉に、リードとタモンが緊張の面持ちで振り向く。
室内の角で、胡坐をかいて陣取るザナナの片目が開いた。

「あと……どのくらいで山頂かしら？」

ブリッジ無いの嫌な空気の濃度は増す一方であることを察したフィンデルは、皆の気分を変えるために訊く。

「……一時間ほどで……辿り着くんじゃないっすかねえ？」

答え、リードの方を見るタモン。

だが彼は何も反応せず、念通球を手の平でただ転がし続けていた。

「中王都市に住んでいる皆は、ゴーベのてっぺんって……普段注目しているかしら？」

「……てっぺん……っすか？」

「そう。」

何気ない彼女からの会話に、タモンが付き合う。

「あんまり……記憶に無いっす……」

「私もね、そんなに記憶は定かじゃないんだけど……あそこは、いつも……」

「……来た……」

そんな会話に混じり、リードが小さく呟く。

「……来たぞ……。」

もう一度。

自分に言い聞かせるように呟く。

「フィンデル……距離にして500M^{マイフト}後方……！

この大きさは……戦闘騎のサイズ……数は……約10機……！！！」

リードは念通球^{はし}に奔る緊張を確かめながら同時に、横でうたたねしているメイの小さい体を揺する。

「総員……」

待ちかねていたかのように、脇に用意していた声通管を静かに手にするフィンデル。

一呼吸置き、覚悟を決めること一瞬。

奥で座す、ザナナのもう片方の目が静かに開く。

「空中戦用意」

感情を押し殺した、冷たい声が艦内にこだました。

第二章

第三話 『火種』

了

2 - 4 「背徳の策」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 2

It runs on ground to go to
the heaven

The forth story
'Immortal tricks'

「　　おいおい！！」

世羅の奴あ、どこ行っただんだ！？」

軍服を慌てて着直しながら、バーグが叫ぶ。

「あの三人組も……ちゃんと安全なところに隠れてるんだろうな！
？」

一気に緊張を高めた、声通機からのフィンドルの戦闘合図。
長らく姿を見ていない彼等の身を案じ、バーグは自分の戦闘騎の
近くで動き止める。

「バーグ！！」

他人より自分のこと！！」

ミーサは呆けた様子の彼に発破をかけ、それと同時に各機体のエ
ンジンに火を入れていく。

格納庫という小さな空間に、増す喧騒。

その中で、戒とジンも到着する。

「世羅達を見なかったか！？」

そしてすぐにかけられるバーグの言葉に、二人は顔を見合わせた。

「…それは心配ですが…今、彼女を探している時間は…」
即座に答えかけるジン。

「……。」

一方、戒は無言のまま自分の戦闘騎の前へ歩み寄る。

「……出て来い。」

そして彼は抑揚の無い声で言った。

皆が見上げる中、その操縦席から少し出る赤いリボン。

「……な…」

バグが大口を開けて呆ける。

「えへへ……バレちゃった…」

舌を出しながら、姿を見せる世羅。
戒に降りるよう促され、彼女は床に軽やかに飛び降りる。

「……全然…気付かなかったわ…」

呆れながら呟くミーサ。

「ねえ、一緒に行ってもいいよね？」

勝気な彼女の視線と言葉を受けると、戒の目線はジンへと向いた。

「…ジン、てめえが面倒を見ておけ。」

そして素っ気無く言い放った後、彼女を通り過ぎて戦闘騎に乗り込む彼。

「…違うよ、戒と一緒に…！」

その態度に、世羅はすぐに振り向いて訴える。

「言う通りにしておけ……世羅。」

しかし、彼女の肩に触れて制するバーク。

静かに諭した後、彼も自機へと向かう。

「どうしますか…世羅さん…？」

私は、出来れば貴女には『ここ』に残っていただきたい。」

それまで様子を腕を組んだまま状況を見守っていたジンが、反射

的に二人に寄ろうとした
彼女の手を掴んだ。

「……行く。」

悔しさに唇を噛みながら、世羅が答えた。

「……ボクだって…戦いたい！」

リジャンの代わりに……ここを守りたいんだ!!」

世羅の言葉を聴きながら、戒とバーグの二人は操縦席で瞳を閉じる。

彼女の気持ちなど、とつくに承知していた。

だからこそ、命の保証の無い棺桶に一緒に入ることなど出来ない。

「ちょっと！ 素人が先でいいの!？」

やがて出撃の態勢を整えた戒の機体。

ミーサが重い格納庫の扉を開け放ち、吹き込む夜風に圧倒されながら叫ぶ。

それに対し、ジンが肯定的に頷く。(うなずく)

そして世羅には一番奥の自分の機体へ入るよう促した。

「生きて帰って来なさいよね！ 戒!!」

飛ばされる、ミーサの激。

「……当然だぜ。」

呟きながら、防風ゴーグルをかける戒。

彼の乗った機体がゆっくりと前進を始める。

世羅は後ろに控えるジンの機体に取り込みながら、その彼の背中を見詰めていた。

「バーグさん。」

それに続くため、自機に昇ろうとするバーグに対し、ジンが声をかける。

「貴方は、昔から操縦が下手だったと聞きました。」

彼の歯に衣着せぬ物言いに、バーグは思わず振り返った。

続けて睨みつける彼の視線から、脇のミーサは思わず目線を逸らす。

「……ですが、私との訓練では なかなかの回避率でした。それは……その機体との相性が良いということです。」

「……戦闘に出る寸前に励まさなきゃならないくらい、俺のことが心配だって？」

一気に操縦席に駆け上がると、バーグは大きく苦笑した。

「自分の身体に馴染むこと。

戦闘騎を選ぶ上で、それが一番大事なことだと私は思ってます。」

言いつつ、ジンも己の機体に足を運んだ。

そして操縦席に飛び移ると、はじめに世羅の安全ベルトを確認する。

「あいつ、気休め……言ってくれなせ。」

「……専門家の言うことだから……まんざら、気休めじゃないかもよ？」

バーグの機体の翼に上がり、計器類の最終チェックをしながらミ
ーサが囁く。

「私、長年整備をしているけど……」

あんな古い機体、見たことないもの……！！」

格納庫の一番奥。

薄暗い闇に浮かぶ、先の練習では使用していなかった機体。

彼の着ているツナギと良く似た、白に近いカラーリング。
ジンは操縦席で腕を組みながら、外の夜空を真っ直ぐと見詰めていた。

エア・ファンタジスタ
A i r・F a n t a g i s t a

・

第二章

天へ往くため地を駆けて

・

第四話 『背徳の策』

寒空に突入すると、まずは山脈を流れる風が荒々しく出迎えてくれた。

細かな塵^{ちり}が直線となって目の前を流れる、ゴーグル越しの夜景色は視界も恐ろしく悪い。

高度の為か。

思った以上に呼吸も困難で、戒は早くも全身に疲労を感じていた。

そして遠くに見える、多くの粒　　炎団の機体達。

互いに猛烈な速度で迫っているため、そのサイズは瞬く間に大きくなっていく。

戒は耳と接触を続ける風切りの音と共に、炸裂音を聞いた。

操縦桿に付けられた機関銃のスイッチを。

……自然と自分で押していたのだ。

相手がまだ射程距離に入っていないのが頭では解っているが、先に撃たれたくないという気持ちが行先する。

どんなに指を離そうとしても、気持ちが悪魔をしていた。

「……戒！ 落ち着け！！」

銃を乱射しながら突っ込んでいく彼に、後方からバークが叫ぶ。
案の定、余裕で反応して散開する、前方の炎団の機体達。

彼の行為は、むざむざと弾を消費した かのように見えた。

しかし、前方の仲間に邪魔されて気取れなかったのか。
それとも運が無かったのか。

一番奥のポジションを飛んでいた炎団の操縦士の眉間から、突然
に血煙が舞った。

（当たった ！？）

相手機とのすれ違いざま、信じられないという表情で、戒が相手の
様子を一瞬見る。

のけぞり、口をだらしなく開けたまま、夜空を仰いで微動だにし
なくなった相手の姿。

彼が握っていた操縦桿は遊び、その戦闘騎は急落下していく。

（……俺はほとんど素人なんだぜ……。
こんなことで……！）

顔を引きつらせながら、操縦桿を握った手の汗を拭う戒。

（……あつけない……。

……あつけなさ……すぎる……ぜ……）

興奮しながらも、頬が緩んでいく。
しかし、すぐに返ってくる、先の記憶。

相手の死顔。

「……！？」

急激に震えだす、自分の腿^{もも}。

それを鎮めようと片手で抑えるが、その痙攣は瞬く間につま先へ
移り、全身に回る。

あまりにも簡単な敵の死。

それが戒に、ある認識を与えた。

空では大地以上に。

誰にでも平等に死が訪れる。
。

『妥協の出来ない空間』の恐怖。

それを肌が直に味わい、上がった白い息がゴーグルを曇らせた。
遠ざかる意識。

戦闘騎の猛速度が、心臓を締めた。
呼吸することさえ、苦しい。

「……おい！！ 奴等、返ってくるぞ！！
こっちも迎撃だ！！」

一機を失った炎団達が、何事も無かったかのような余裕のカーブを描く。

それを振り向いて覗^{うかが}いながら、バーグが叫ぶ。

だが前方に行く戒の速度は、増していくばかりだった。

このまま進み続ければ、背後を突かれる形になる。
普通ならば、自分達もどこかで反転して正面から挑まなくてはならない。

それは戒も頭では分かっている。

練習どおり、トンボを切ればいい。

(……くー！)

だがその途中で、戒は自分の安全ベルトをふと気にした。

(……このまま…回っても…平気か!?)

ベルトが緩んでいるような気がしてならない。

さらに、緊張でから高まった心音と呼吸が自分の中で反響し、やがて何も聞こえなくなった。

頭の中が、真っ白になる。

「あいつ……緒戦で…舞い上がってるのか!!」

「……バーグさん…!!」

後方に付いていたジンが声をかけるが早いのか、バーグも限界までペダルを踏み込み、速度を上げる。

「戒!!」

付近まで追いついて声をかけても、まるで反応しない彼。

戒は正面から叩きつける風に目を細め、ただ一点を見詰め飛行している。

それを追い抜き、バーグは手元の大剣を握った。

戒の鼓膜に届く、別の風の音。

バーグの機体が視界の斜め前方に入った。

その瞬間。

「……………ぶツ!？」

額ひたいに何か硬い物が衝突したことで、思わず天を仰ぐ戒。

直後に彼は、堅い剣の鞘が自分の操縦席の中に転がっていることに気付く。

「……………てめえ! ヒゲ!！」

赤く腫れ上がった額を涙目になって押さえながら、脇を飛ぶバグを怒鳴りつける戒。

「俺様を殺す気か!?!？」

「ああ、殺すね!?!
てめえが山に衝突して死ぬくらいだったらな!?!」

大きく笑いながら、返すバグ。

二人はほぼ同時に、山の斜面すれすれでカーブして、炎団に向き直る。

「お前、俺よりも操縦が上手いんだろ!?!
天才なんだろ!?!」

だったら、がっかりさせてくれるな！　おい！！」

彼のそんな言葉に、戒が顔を上気させた。

「慌てなくても…これから、格の違いを見せてやる…！
てめえこそ、くたばらずに最後まで目ん玉開けてろよ…！」

「そうこなくちゃあな…！」

戒とバークがぐんぐんと速度を上げた。

それを見て安心したジンも、細かい動きで反転。
三機は目の前の集団へと進んでいった。

「主砲、副砲、準備できたの。」

ブリッジに響く、メイの言葉。

「フィンデル…！」

リードがそれに頷き、声を張り上げる。

「…必要ないわ。」

今作戦では、本艦は航行に徹します。」

しかし、彼女からは意外な言葉が返った。

「当艦の念通士は、全精神を『航行のための艦体維持』と『索敵を含んだ周囲状況の把握』に集中。」

「……………了解。」

メイとリードは揃って答えた後、口を結び、念通球を握り締めた。逃げに徹するということ。

彼女の命令どおり、二人は余計なことは考えないようにした。

「速度は充分出てる？」

「……………問題無いです。」

フィンドルの問いに、今度はタモンが答える。

ザナナはその脇で胡坐あぐらを組み、正面ガラス越しの夜空をただじつと眺めていた。

「このまま頂上を越えるまで、この速度を維持……」

そこまで言うと、艦長席の足元で梅がじつと自分を見上げていることに気付く。

「……？」

不思議そうな顔でそれを見詰め返すフィンデル。

しかし梅はすぐに尻尾を立てたまま振り返り、開かれた扉のわずかな隙間から、音も無く出て行った。

「艦首の方向は合ってるな？ タモン！」

角度を間違ったら…山越えに余計な時間を取られるぞ！！」

「わかってるっす！ 大丈夫っすよ！！」

緊張の為か、声を荒げて言い合う二人。

徐々に熱を帯び始めるブリッジ。

フィンデルのこめかみから、嫌な汗が流れた。

それは、これから始まる出来事の先触れだったのだろうか。

「…ミーサ！ 聞こえる？」

続いて、機関室に繋がっている声通管を手にし、フィンデルは問いかけた。

《はい…副長……》

雑音混じりに、響き聞こえる彼女の声。

「戦闘騎部隊の様子はどうか？」

《…全機、無事に飛びたてました。
私は…こっちに集中できます…》

「お願い。」

そっちは予定通り頼むわね……」

答えながら、何気なく目配せした背後の扉。

手にした管が滑り、下に落ちる。

視界に入るのは、部屋で閉じこもっていたはずのペッポの姿。

彼は全身を縄で縛られており。

しかも、それを連れて来たのは 予期せぬ来訪者。

青服の三人組だった。

至近距離での爆風。

煽られる機体の中で、身を縮こませる戒。

(ジンの野郎……!!)

考える間も無く、続けざまにその逆側からも爆風。

飛び散る細かい破片を、まともに顔面に受ける。

(まさか……これほどまでとはな……)

バグも呆気にとられて、後ろで傍観者になりかけていた。

空中で爆炎の中を駆けるジンの機体。

戦闘騎としてはごくありふれた形状だが、その機体後部から飛び

出た何本もの長い布。

シルエット
特徴的な影を炎の中に浮かばせる。

それはジンの飛行技術と相成って、優雅に見えてもおかしくない
はずだが、何故かそれは
草地を這いずる蛇のような、不気味で生々しい印象を戦場の敵味方
を問わずに与えていた。

それを象徴するような、火の粉と煙に紛れた、角度の読めない射
撃。

戦場の一切を完全に支配し、一機一機を順番に狩っていく。

何故 彼が若年にもかかわらず、サイア商会の番人を任されていたのか。

バーグは瞬時に理解できた。

それは至境の飛行と言うべきか。

思い出したくもないが、戒とバーグは、たった一機で炎団の全てを蹴散らした聖騎士の強さと

同じものを目の前の少年から感じていた。

そしてやはり、敵側も迂闊に動くことが出来ず、戦場の展開は鈍くなっていく。

（この調子なら……いけそうだぜ！！）

バーグの脳裏に一抹の安堵がよぎった時、『それ』は訪れた。

下方から迫り来る、エンジン音と熱気。

目の前の炎団達が、瞬時に色めきだつのが分かった。

満を持して下方から抜けて出る、通常の機体よりも遥かに巨大な赤い戦闘騎。

その両翼には、球体状の砲台が一個つつ埋まっており、各砲座には砲手が乗っていた。

そして、その中心で陣取る、長い髪的女操縦士。

商団の防犯のため記憶している空賊の記録を、ジンが頭の中で思
い出す。

（炎の矢でも特に名高い……）

それは、要注意のランクに記されていた。

（『三ツ首の怪鳥』……オヴェルⅡハイマン……！

あの相手は……二人には……まだ任せられない　　）

脇目で戒とバーグの機体を確認しつつ、操縦桿を傾けるジン。

重心が動き、内臓が斜めに引っ張られる感覚。
後ろで、世羅がシートを強く握るのを感じた。

「あらら……意外ね……」。

もう、あらかた片付いているのを期待してたんだけど。」

戦闘の様子を一巡しながら、オヴェルは言った。

「確かに……戦いにくそうな相手だけど……」

目配せする。

戒の操縦する最新鋭の機体。
バーグの操縦する、初見の機体。

「……とても苦戦するような相手じゃないでしょ？」

彼等の操縦を少し見て、笑う。

「聞いてねえぞ！ 隊長！！」

しかし、彼女の横に並んだ戦闘騎。

その操縦席から、団員の一人が叫んだ。

「あんだ、本当に連中を偵察してきたのか！？」

慌てて叫んだ拳句、彼が乱暴な手つきで示した方向。

景色と空気に溶け込んでしまいそうな、おぼろげな一機の白い戦闘騎。

後部には薄汚れた長い布が何枚もたなびいて、まるで尻尾のように空を流れている。

「隊長……」

「あいつは……！」

砲手達も、そのあまりの異形さに言葉を失う。

「現役の『零式』^{ゼロ}？

懐古趣味の馬鹿がいるみたいね……！！」

ジンの駆る機体は、戦闘騎の歴史の中でも最古のモデルであった。その方面に深く精通しているオヴェルには、遠目でも良く分かる。

「とぼけてんじゃねえ！

あれは…『サイアの亡霊』じゃねえか！！

俺たちや、腰抜けの中王都市軍とやるだけなんだろ！？

あんな化物と戦うなんて……聞いてねえぞ！！」

彼女に対して言葉を放ちながら、その団員は怒りに目を血走らせる。

オヴェルは小さく笑い、急激に速度を落として彼の後ろにつく。

刹那、機体先端の機関銃を発射し、文句を言ってきたその団員を撃ち殺す彼女。

「！？」

その行為に狼狽する、彼女の両脇の砲手。

周囲でその光景を黙って見ていた団員達も、戦慄を覚えた。

「……『矢』が…余計なこと考えるんじゃないよ。」

そしてオヴェルから口脇から洩れる、ドスの効いた声。

「お前たちは、炎団の中でも特に誇れる戦闘騎部隊『炎の矢』。
……ただ目の前の敵を討ち、燃やし尽くすことだけ考えてりゃあ
いい……」

呟きながら、怒りで肩を小刻みに揺らす彼女。

「……わかった？」

そして一転、軽く笑って言った。

静まる団員達。

不気味な士気が、空を支配していった。

それまで怯えたように密集していた敵機達。

それらは、オヴェルが到着した後、各機の間隔を開け始めた。

(……陣容と雰囲気が……変わった……。)

良く訓練の行き届いた、その動きを注視するジン。

「世羅さん……術は……出さないように。」

彼の言葉に、世羅が後ろから身を乗り出す。

「……何で！？　ボク、後ろからだって戦えるよー！」

「大丈夫。」

『切り札』は……初めに使っては意味がない………そういうことです……！」

静かに呟き、ツナギの口元を直す彼。

一度挑発するように舞い、戦場から離れていく。

それに誘い出されるように、オヴェルの大きな機体のみがそれに続いた。

残された戒とバーク、そして炎団達。

彼等は、ゴーベの岩壁を斜めになぞりながら空を駆けていった。

《……副長？………副長！？》

落ちた管から、繰り返されるミーサの大声。

「大丈夫、ちょっと声通管の調子が悪いみたい。
……何でも無いわ。」

管の先をそつと拾い上げ、平静を装って言葉を返すフィンデル。

「ごめんなさい、いったん通信を切るわね。」

そして、管の脇のダイヤルを締める。

「……………!!」

既に怒りの表情で、半ば椅子から立ち上がっているリード。

メイは何事か理解できず、その三人組を見詰めており。

タモンは舵を握ったまま、進路とブリッジ内の様子を交互に忙しなく視線を動かしている。

その脇ではザナナが槍を強く握ったのが見えた。

わずかな時の中で、自分でも驚くくらい冷静に瞳が動いている。

「ん~~~~んぐっ……んぐ……!!」

無残にも口に猿ぐつわをはめられ、目に涙をためながら何かを訴えている、艦長のペツポ。

「…やっぱり、ただのパン屋じゃなかったんだな……貴様等……！！
一体…何者だ！？」

しかし、リードは特に彼を心配することもしせず、後ろの三人に対して怒声を浴びせた。

「よくぞ、きいてくれはった！！」

そんな彼の激情を受け流すかのように、涼しい顔で答えるシャロ
ン。

続けて指を鳴らすと、イールとムールが前へ踊り出る。

「泣く子もさらに泣きじゃくる！！」

「大陸に名だたるジルルメツシュ一家の末娘！！」

一呼吸。

「シャロン…ジルルメツシュとは、あたしのことや　　！！」

シャロンは大声で叫んだ後、満足げな表情を浮かべた。

（決まったああああ）
（最ッ高）

イールとムールも、ガッツポーズを決めながら悦に浸る。

「ジ……ジルメツシュー家……？」

彼らのあまりのテンションに、静まり返るブリッジ。
リードだけが呟いて応えた。

「どや……見ての通り……おたくらの『大切な艦長』、しっかりと
預からせてもろたで……！」

シャロンがひとり勝ち誇りながら、ペツポから奪ったと思われる
拳銃を取り出してちらつかせる。

すると、ブリッジは恐怖などでなく、逆に何か場違いな空気を醸
し出し始めた。

室内の温度も、何故か先ほどよりも低く感じられる。

「……なんやねん……？
さっきから……この薄いリアクション……。」

「……ハッ、……ジルメツシューの人間が、直々にこの艦を奪いに来
たって……？」

呟いて、今度は完全に立ち上がるリード。

「おい、勝手に動くんやな…」

「それは10年以上前に、竜巻に巻き込まれて滅んだ間抜けな空賊一家のことだぞ。」

「当時だったとしてもかく、今、その子孫を語る奴も相当の間抜けだ。」

「余裕ある、彼の表情と言葉。」

「シャロンも笑って見せて対抗した。」

「そう、お前の言う通りや。」

「でもな……ジルメツシュの血を受け継ぐ者は、現実にはここにいない。」

「今は『炎団の一員』としてやがな。」

「炎団!?!」

「タモンが声を荒げた。」

「……随分と…大胆な作戦じゃないか…。」

「流石に、今度は表情を歪めるリード。」

「なに、半分は偶然や。」

「今回は状況に合わせて、作戦を立てただけのこと…。」

縄に拘束されたペツポを床に蹴り倒す彼女。

「さて……改めて、その節はお世話になりました。
ルベランセの艦長はん。」

ブーツを彼の即頭部に乗せ、シャロンは言った。
目を大きく見開いて、目の前の銃口に怯えるペツポ。

「あんたが『あの時』撃ち込んだ砲弾、ごつつ効いたで。
おかげさんで、あない危険な森に不時着するハメになったわ。」

「……!!」

その言葉に、フィンデルが反応した。

「おまえら……あの時、雲に隠れていた飛翔艦に……!？」

それでリードも察する。

「……だ、だが、先に仕掛けてきたのはお前らだ！
恨みのある言い方するな!!」

「アホお！ 実際に恨みがあるんや!!
さて、どないしてくれようか……。」

リードの言葉に対抗しながら、シャロンはついに拳銃の激鉄を下ろす。

「ん……！！ん………！！」

「お嬢………」

「何か言いたそうですぜ？」

そこでイールとムールが、鼻水を垂らしながら必死の形相で訴えているペツポを指で突付きながら言った。

「ええわ、冥土のみやげや。

喋らせたれ。」

余裕の顔で指示をする彼女。

指示通り猿ぐつわはすぐに外され、ペツポは咳をしながら肺に空気を大きく吸い込んだ。

「…あ、あれは……僕の指揮じゃない！！」

「あん？」

そして吐き出される言葉に、思わず彼の柔らかい頬を掴むシャロン。

「今さら……何言つとんねん。

あれは、お前の指揮やる？ ええ？ 『艦長』！？」

「……ち、違うつたら！

僕はあの時、気絶をして……」

「……その通りだ。

残念だったな。」

複雑な笑みを見せながら、割って入ってくるリード。

「確かに、そいつはルベランセの艦長。

だが……あの時、指揮をとっていたのは別の人間だ。」

「……言うつる意味が……わからへん。」

口をぼんやり開けたまま、シャロンが訊いた。

「ちょっとした事情で……実は今も指揮権は違う人間に移っている。

つまり人質にならない奴を拉致した、お前たちの作戦は完全に失敗だつてことだ……！」

「……！？」

三人がブリッジ内の人間を見回す。

リードの目線の先で、フィンドルは黙したまま座っている。

言葉の表現は濁したため、そこが艦長席であることに三人はいまだ気付いていない。

「あ…アホなこと言うなあ!!」

普通、飛翔艦の指揮は艦長がとるもんやろ!!
そうでなきゃ、飛べんはずや!!」

「あいにく、そいつの無能さは普通じゃないんだよ!」

リードが床に這ったペツポを見据えたまま、半笑いで叫んだ。

「た…確かに…おかしいとは思っていたけど!!」

「余裕だから…くつろいでたんじゃなかったんですね…!?!」

両手で頭を抱えながら、即、納得するイールとムール。

「……役に立たないから…部屋におったんかい……!
んな…アホな…!!」

脱力し、銃の重さに耐えきれなくなつた彼女の手が下がった。

「理解したか?

…そんな奴、殺されたって…痛くも痒くもないってことを…!!」

「ちよつと待て!!」

リードの言葉に、ペツポが叫んだ。

「さっきから黙っていれば……な、何を勝手なことを言ってるんだ！
い、今すぐ全員降伏しろ！！」

暴れた末に、前のめりなる彼。

「！？」

その意外な言葉に、呆然とする三人組。

「僕の命の方が…大切だろう！ こんな飛翔艦より！！」

「こいつ……何を言い出して……！？」

困惑するリード。

いくら指揮権を剥奪されているとはいえ、自己防衛のみを考えた
それは、とても然るべき立場の人間の
言葉とは思えない。

「僕だつて……！」

大陸に名だたる中王都市軍の副司令官の愛息子なんだぞ！！」

さらに早口で並べられるペツポの言葉に、シャロンが思わず慄然
とする。

「僕に何かあってみろ、親父が黙っていないからな!!
ブリッジのみんなにも、炎団の連中にも言っておくぞ!!
この艦はどうなってもいい! 僕を傷付けたら、酷い目に遭うと
思え!!」

「うるさい…だまれ!
どうせ投降したって…命の保証なんて無いんだ!!
血筋を自慢するなら、『自分はどんなってもいいから艦を救え』
って、誇らしく命令しろ!!」

リードが一喝した。

「うるさいうるさい!!
ほら、みんなでお願いするんだ!!」

縛られたまま、ぺこぺこ情けなく懇願するペツポ。

思いも寄らぬ展開に、シャロン達は逆に言葉を失っていた。

「この艦は差し上げます!
だからその代わり…乱暴はしないで下さい…。」

「……まあ…別に、あたしらだって手荒なマネはしとうない……。
炎団の命令では、人員の生死は問わんっちゅう話やし…」

彼のあまりの卑屈ぶりに、顔を見合わせる三人。

「そっちが全面的に降伏するっちゅうんなら、命くらいは保証する。」

せつかく中王都市も近いやさかい、このまま解放って話にも…してやらんでもないわ。」

「流石、お嬢!!」

「なんて慈悲深い!!」

大袈裟に相槌を打つ、イールとムール。

「ありがたいです、お嬢さま~~~~!!」

そしてペツポも調子良く、泣き喚きながらシャロンの足元に擦り寄る。

「な、何をやってるんだ!

はやく武装を解除して投降するんだ!!

お嬢様の気が変わらないうちに!!」

ブリッジの面々は、ペツポの動向に完全に呆れ果てていた。

指揮を失ったとはいえ、既に中王都市軍とルベランセの尊厳は死んだかのように思えた。

このまま時が過ぎれば、続いて気力も萎えるだろう。

「……馬鹿言うな！
誰が空賊なんかに……！！」

最後の手段。

素早く拳銃を抜き、構えるリード。

だが、シャロンは余裕の笑みを浮かべ、唇を開いた。

「フェル・ド
《源・衝》！！」

指が引き金に触れる間もなく宙を舞う拳銃。

リードが手首を押さえ、うづくまる。

光の粒子が残る指で彼を指したまま、シャロンがさらに笑った。

「オイタは……あかで、にーちゃん。
あたしら三人は、かなりの源法術の使い手や。
今度うかつな真似したら、火傷すること……」

「す、すみませんでしたっ！！
うちの乗組員がとんだ無礼を……！！
ほらっ！ お前たちも一緒に謝れ！！」

彼女の手際に蒼ざめて、皆に号令をかけるペッポ。

「一刻も早く、投降を……」

中途半端に止まる彼の言葉。

鳴り響いた一発の乾音に、皆は目を覚ました。

いつの間にかシャロンの傍そばにいるフィンデル。

そしてその目の前で、独楽コマのように全身を回しながら、床に倒れるペツポ。

彼は気を失う寸前に、自分の方向に平手を振り切ったままのフィンデルの姿を見た。

2

「現在、当艦の指揮官は私です。

……投降は、一切許可しません。」

空賊三人に向かって、毅然と言い放つ直立不動のフィンデル。

「……………！！！？？」

リードの視界がぐにやりと揺れた。

見間違いでなければ、確かに彼女がペツポの頬をはった。

そのすぐ横では、突然自分の人質に手を出されたことに呆けるシヤロン達が立ち尽くしている。

「フィンドルが…人を叩くの…初めてみたの……………」

^{かたわ}傍らでメイが呟いた。

それはタモンも含め、誰もが同じことだろう。

悠然とした歩みで、再び艦長席に戻っていくフィンドル。

彼女は両肘を抱えたまま、何事も無かったように前を向いて座った。

「……………おっ……………おまえ！！」

よくも…大切な人質を……………！ え！ え！？」

わけも分からず、床に伏したペツポと自分の拳銃を交互に見るシヤロン。

「い…いや、こいつは、おまえらの上官だからこそ人質であって…」

…！！

…だから……！」

「お嬢！」

「落ち着いて！！」

混乱をきたす彼女の肩を、必死に揺さぶるイールとムール。

「その銃口を向けられる役目は、私が受けます。」

フィンデルは、前を向いたまま言った。

「！？」

言うとおりに、反射的に彼女へと銃口を向けるシャロン。

「…指揮官の…おまえが代わりに人質になるって言うんか？
随分と殊勝な心がけやな…」

「本艦、予定通りに航行速度を上げます。
全速前進。」

しかし、フィンデルは彼女を無視してタモンに命じた。

「…おまえ！ この状況が理解できとるんか！？」

「わかつているつもりです。
撃ちたければ、撃ちなさい。」

「……!?!」

「ただし、私を殺せば、貴女達も死ぬことになる。」

「なに……言うтонねん……!?!」

シャロンが目を白黒させて呟いた。

「私が死んだ場合、このルベランセは自爆する手はずになっている
のだから。」

「……………!?!」

驚き、銃を落としそうになるシャロン。

表情ひとつ変えずに嘘をついたフィンデルに、リードは緊張の表情で頷いて同調を見せる。

「そ、そんなん……嘘やろ!?!」

「……そう、『嘘』だわ。」

「え!?!」

二人のやりとりに、一転、困惑するリード。

「ただど……今の私の言葉で、それは『真実』になった。」

狼狽する彼に対し、無言で目配せをするフィンデル。

「……了解。」

フィンデル艦長代理が死亡した場合……この艦は爆破する。」

リードは瞼を閉じ、小さな声で呟いた。

「アホな……！」

おまえは……手前勝手な都合で、部下に死を強要するんか……！」

背筋を張りながら、シャロンが叫ぶ。

「お前らも……こんな馬鹿げた命令に、素直に従うっていうんか……？」

さらに、リードやタモン、ブリッジの搭乗員達を見回す。

「……これで貴女達は私を殺すことが出来ない。」

有無を言わさない、フィンデルの冷静な口調。
焦り、後ろで顔を見合わすイールとムール。

「……ど、どうかしてるでー!!」

シャロンは片手で顔を覆いながら叫んだ。

(……うまく騙せた……)

…ルベランセには…このブリッジからの操作で自爆できる機構なんて…無いんだ。

大した策士だぜ……フィンデル……!)

脇目でシャロン達の焦れた様子を確認しながら、リードは幾分平静さを取り戻していた。

続いて、その目でブリッジ内を見回す。

やりとりの意味が半分は解らない様子、流れにただ身を任せているメイとザナナ。

タモンの方は自分と同様、その意味が計りきれている。

ペツポは相変わらず、気を失ったまま床に沈んでいた。

…これは、うるさくなくて良い。

現時点で、目の前の賊と自分達の立場は互角のように思えた。

「……おまえらがそういう態度に出るのなら…本当に一緒に心中になるで……」

しかし、シャロンは抑揚の無い不気味な声で向き直る。

「この艦を狙つとるんは、あたしだけやない。
今展開中の戦闘騎部隊に続いて、武装した飛翔艦が追いつく手は
ずになつとる…」

銃の照準を定めたまま、片手を広げる彼女。

「しかもそれは、あたしがブリッジを占拠していることを前提で
迫つて来る。

おまえは賢い女や。

……この意味、わかるやろ？」

「……どういうことだ？」

何も答えないフィンデルに代わり、リードが訊いた。

「追いつかれるまでに、こちらが速度を落としたりして何らかの降
伏の意を示していなければ……
奴等は強行手段も辞さないっちゅうこっちゃ。」

「……つまり…攻撃されるということか!？」

彼の問いにシャロンは頷いた。

「ヘタな意地張って、命を無駄にすることあらへん。
……ここは退くんや。今なら余裕を持って間に合うで。」

「しかし、そんなこと既にこちらでも予測済みだ…。足止めのために、こちらから戦闘騎も……」

彼女に対するリードの声は、小さくなっていった。

「いいや！」

おまえらは炎団をナメとる！！」

シャロンは、高い声で圧倒した。

「即席の連中で、ほんまに勝てると思つとるんか！？
そんなもん、中王都市に辿り着く前に必ず突破されるわ！！
相手は……お前らが思っている以上に用意周到なんや……」。

「……仲間を、随分と買っているのね。」

フィンドルが口を開いた。

シャロンの動きが一瞬止まる。

「……オヴェルは……炎団への忠誠心だけで戦うタイプや。
勝利への執念が半端やないし、頭も良くて腕も立つ。

この戦いも……こっちに確実に追いつけると確信しとるから、攻め
よんねん……！！」

フィンドルの顔に近付く彼女。

「えええか？」

ルベランセにどれだけの戦力があるかも、あいつはとづくに調査済み……。

おまえらの動きは全部読まれとる……逃げ切れる確率は……絶対にあらへん!!」

必死の形相で訴えるシャロンを見ながら、それが嘘でないことはリードにも判った。

現実にルブランセも、その戦闘騎達も非力である。

なのに、フィンデルは表情を変えない。

普段とはまるで別人。

鉄の仮面と鉄の心臓を持っているかのようだった。

「……！」

一方、再三の脅しにも関わらず、変わらない状況に歯軋りするシヤロン。

オヴェルなら、迷わずにこの引き金を引いているだろうか。

考えると、余計に悔しい思いがした。

「隊長……。」

砲手が指で示すその先。

白い機体。

ジンの後ろに乗る、赤いリボンが非常に目立つ少女の姿。

「あいつら……何で二人乗って……？」

「気にしちゃだめ。」

それも、奴等の作戦かもよ？」

オヴェルが余裕のある表情で速度を上げた。

「それにしても……古い機体で……よく動く！」

機銃を噴かせながら叫ぶ、もう一方の砲手。

ジンの機体の尾にたなびく長い白布は、機体を大きく見せて照準を狂わせていた。

結局、全く相手の動きを捉えられないまま、装填済みの弾を撃ち尽くし、砲手は

舌打ち混じりに予備を詰め始める。

「別に古いつてことが弱いわけじゃないわ……！！」

あの時代の戦闘騎は、いかに相手を合理的に殺すか……それだけを考えて作られている!!」

相手が手強いことを充分に確かめると、オヴェルは一層に気を引き締めた。

岩肌をなぞるくらいに低空で飛び、相手目掛けて斜めに上昇する。しかし、白布は荒々しいラインを引いて接近を避け、敵機はポジションの不利を上手にかわした。

「そして、何と言つても……操縦士の腕がいい!」
「さすが大陸中の空賊が恐れる、サイア商会の守衛騎!!」

そのまま振り切られまいと、縦の態勢のまま、しつこく追いかけるオヴェル。

「……でも、アレを墮とせば間違いなく殊勲!!」
きつと紅蓮さまもお喜びになるに違いないわ!! どうしよう!!」

状況もわきまえず、明るくはしゃぐ声。
両脇の砲手は思わず、心配そうな視線を彼女に投げかける。

「何よ、その顔……!」
私……冷静よ!?!」

オヴェルは自然と舌を舐めずっていた。

「……………!!」

何気なく、脇の窓を見たリードが前のめりになる。

「タモン！」

面舵をとれ！ 山に衝突するぞ!!」

「え!？」

言われるまま、舵を回すタモン。

視界もままならない闇の中、不気味な山肌が横の窓を流れていった。

大きく息をついて、リードは椅子に腰を落とす。

いつの間にか、周囲を目視出来ないほどの雲に覆われていた。

リードとタモンは、窓の外を見上げて空の様子を確認する。

「……………光が……………」

消沈した言葉の通り。

月はおるか星のひとかけらさえ見えない状態。

「…頂上付近は…さらに雲が厚いぞ……」

力みながら呟くリードの言葉に、フィンドルがわずかに耳を動かして反応する。

目を泳がせ、一点で止める瞳。

何かを言いかけた彼女の様子。

シャロンはそれに気付かずに、勝手な動きを始めたブリッジの面々に苛立たしさを感じていた。

（…まずいで…この雰囲気…）

フィンドルの気丈な態度のおかげで、力による支配が及ばなくなっている。

「貴女は…」

心が迷っているうちに、目の前のフィンドルが口を開く。

「本当にあの艦に……？」

「……………！！」

そうか……あの時、指揮をしてたのも……おまえなんか……！」

彼女の手際から察し、シャロンは怒りの念を再燃させた。

「……おまえが……撃たせたんやな……！」

「……………」

押し付けられる銃口と彼女の言葉に、フィンドルは黙り込んだ。

「あの時、主砲は直撃させたが……艦はかろうじて動けただろう……！」

彼女をかばうため、声を張り上げるリード。

「せやな。確かに、あの時はまだ動けたし、不時着も何とか出来た。」

だけどその場所が肝心や。

みんなが……あんな凶獣だらけの森から生きて出れたとは思えん……。

これは、お前が殺したも同然やろ……！」

「言いがかりだ……！」

床を強く踏む彼。

「戦いの中で加減なんて出来るものか……！」

あの時、フィンドルは俺達を守るために仕方なく指揮をとったんだ！！

それに……どう考えても、先に空賊行為を働いてきたお前達が悪い！！」

「空賊だからって、簡単に殺してもええんか！？」

シャロンの言葉に、リードは思わず気圧される。

「ひとえに賊っていつても、みんながみんな同じ考えやない。家族や兄弟を大事にしてる奴もおるし、ほんまはこんな仕事、やりたくない奴だっておる……。」

暫くの間、沈黙がブリッジを支配した。

「……ジルルメツシュー家だって、絶対に殺しはやらん空賊だったそっや。」

標的だって、金があり余るってような連中に限っておった……」

彼女の言葉を聞きながら、フィンドルが重いまばたきをする。

「……全部……兄貴から聞いた話やけどな。」

最後に低く呟く、シャロン。

「貴女は……ジルルメツシュー家を再興したいの？」

「…兄貴は…したいらしいけどな。
あたしは……実はどうでもええ。」

疑問を投げたフィンデルに、何気なく答える彼女。

「兄貴に習った術……あたしは、その成長と成果を何らかの形で認めてもらいたいんや。

炎団で大きくなりたいってのは、半分意地。
特に、その後は考えてへんわ。」

「……そう……」

フィンデルは、それを憂いだ表情で見詰めていた。

「……ん……！」

何で……お前に……こんなこと話さなあかんねん……！」

シャロンはくだらない問答をしていることに気付き、顔を真っ赤にして彼女を怒鳴りつけた。

(……でも……紅蓮の奴に目を付けられたのが運のつき……。)
……いつも手柄から遠いところに飛ばされて……。)

だが、予断を許さない状況とは裏腹に、彼女の頭は別のことに支配され始める。

（…本当は、あたしは實力は充分だし、人一倍努力だってしとる…！
ただ、運が無いだけなんや……！！）

「命の大切さを解っているのなら…」

突然、フィンドルの声が耳に響いた。

「……退くのは貴女だわ。」

その言葉に、シャロンが銃を構えたまま息を詰まらせる。

「何故なら…仲間が『ここ』に帰って来るのだから、『ここ』が無くなるような選択肢は……私には無い。」

言い切る彼女を目の前に、頭をよぎる、昨夜の凶獣との一戦。

「…人間なんて、生きててなんぼや！

仲間がどうか、そういうのが一番くだらない考えやで！！」

あの時、戒達に対して感じた疑問とどこか似ていた。

「……そうね。

くだらないかもね。」

フィンドルは自嘲するように笑った。

「私も責任ある者として……常に大局を見て、冷静に努め、理知的に最善を尽くそうと思ってる。
でも……」

顎を引く。

「こればかりは、理屈じゃない。
私は……本気よ。」

「馬鹿にするな……！
あたしだって……おまえが考えてる以上に本気や……！」

震わせる銃口を彼女の眉間に突きつけるシャロン。

「……わかってる。
だからこそ負けたくないの。」

半分を拳銃に覆われた彼女の顔。
その眼が睨み返す。

「もう一度言っわ。
……ここに帰って来る仲間のために、私は絶対に降伏しない。」

「……もしも、そいつらが帰って来る前にやられたら……どないすんねん？」

シャロンが言った。

「そうなたらもう……ルベランセが背後を突かれるのは避けられへん。」

その時はおとなしく、この艦を明け渡すんや。」

「逆に…もしも彼等が無事に帰還したならば、貴方達が降伏して頂戴。」

フィンドルが微笑む。

「……それは…賭けのつもりなんか？」

同じ表情でシャロンが返し。

「その勝負……おまえ、途中で…降りることになるで…！」

張り上げる声を、ブリッジ中に響かせた。

戒が無理な回避で、機体を四、五回転させる。

通常ならばバランスを崩してそのまま墜落の姿勢だが、機体内部の自動平衡装置の働きで

重心は戻り、なんとか飛行状態を取り戻す。

「ぐ……！！」

しかし、頭を襲う激しい『酔い』に呻く戒。

炎団側の大きな機体が現れ、ジンも戦列を離れてからというもの、戦況は一気に傾いた。

元々、数で負けているうえに、戒とバークの腕は拙い。
もはや弾を避けて飛ぶだけで二人は精一杯だった。

「ジンの野郎、何やってやがる……！
さっさと片付けて戻ってきやがれ！！」

同じように逃げてきたバークが並んだところで、戒が愚痴を叫ぶ。

「それだけ……あっちも余裕が無いんだろ！
今は俺たち……」

一方、横を向く余裕すら無いバーク。

「とりあえず、生きることだけ考える……！」

叫んだところで、銃弾の礫が再び頬をかすめる。

二人は慌てて、左右に分かれて飛んだ。

大陸中の空を、ずっと共にしてきた機体だった。

それは、まだ飛翔艦が生まれる前に創られたという。

機構も粗末で、無秩序に空いた機体内部を埋めるために包帯を詰めている。

そしてそれが装甲の隙間から外部に飛びだして、まるで死体や亡霊のようだと忌み嫌われていた。

初めて倉庫で見た時も、子供心に恐ろしくて仕方なかった。

しかし乗り込んでみると、意外にもその操縦席は、暖かく包んでくれた。

両親はいつも仕事でかまってもくれず、いつしか、そこは寂しさから逃げる場所になっていた。

自分が操縦士になった時、父のリ・オンはそのことに対して、特に感情は持っていなかったように見えた。

そんな無感情な態度が、心を余計に戦闘騎に向かわせたのかも知れない。

ただ鍛錬と戦闘を積む毎日。
やがて、自分ほどの空賊にも恐れられるようになった。

『サイアの亡霊』

その威名から、最近では空で戦うことも稀^{まれ}になっていた。

続いていく漠然とした戦いに対し、何も感じなくなっていた自分は、身も心も亡霊そのものになったのかもしれない。

それが今、人のため、父のために戦っている。
ジンはそんな運命の流れに不思議を感じていた。

馴染み、手足のように動かせる機械……というよりも友。
今までよりも一層、力を貸してくれと願う。

機銃は先端に一門。

通常の機関銃のように連射は出来ないが、長い銃身が機体内を通じていて、いわばライフル銃のような
弾速と破壊力を備える。

その能力を知り尽くし、信頼している銃が、普段のように韻^{いん}を踏んでいった……。

突然、背に迫ったジンの機体。

オヴェルは素早く反応し、回避運動をとる。

そして放たれる弾を寸前のところでかわし、態勢を整える彼女。

だが。

ジンからの攻撃は数発続き、彼女は同様にして避け続ける。

余裕を見てかわせるその攻撃は、一見、無駄のように思えた。

「……このリズム………違う？」

ふと浮かんだ疑問に、後ろを振り向かせられるオヴェル。

目に飛び込むのは、放たれた銃弾の延長上、その向こうで煙を噴く多数の味方機。

脳に上り始める血液で、頭が熱くなっていくのが自分でも判った。

奇術を見ているようだった。

あさつての方向から放たれた銃弾。

それが自分の機体をかすめたかと思えば、目の前の敵達に吸い込まれるように命中していったのだ。

(……ジンの奴が撃ったのか！？ あいつは向こうで戦ってるはず……！？)

首を捻りながら、銃弾の放たれた方を向くバーク。

(……何て距離から……！ 化物か……！！)

遙か遠くで、豆粒のような機体がかろうじて確認できた。
しかも相当の速度、夜闇の視界の中で、針の穴を通すような射撃に驚愕する。

(…こんなの見せ付けられちゃあよ……！！)

相手の数は半減したものの、不利な状況は依然として変わらない。
だが、彼の戦意は大幅に回復していた。

先のジンの攻撃は、諦めてはいけないという激励の意志も含んでいるのだ。

バークはそれを噛みしめながら、堕ちていく機体達の間を縫っていった。

「あの野郎!？」

目を剥く、二人の砲手。

「こつちを狙いつつ、別の機体をやるなんて…これが…『亡霊』
の実力…!!」

興奮に唇を震わせながら、オヴェルがペダルを踏み込む。

同じ弾道上に、二機を置いた射撃。

かわせば味方、かわさなければ自分に命中する。

どちらに転んでも相手を墮とす、死の射撃だった。

「く……くくつ……!」

やがて不気味な笑い声を洩らしながら、オヴェルがうな垂れる。
その目には、堕ちていく部下の機体が映る。

「……死んだのは、どうしようもねえ役立たずのクス共だな!!」

突然叫び、腹から低い声を上げる彼女。

「周囲の状況なんて、関係ねえ！

結果が出ない？ それは、何が何でも勝ちにいくっていう気概が不足してるからだ！！

わかるか！？ え！」

砲手二人に交互に怒鳴りながら下弦からカーブを描き、ジンとの間合いを一気に詰めるオヴェル。

「まずは……！」

てめえ、絶対殺してやるッ！！」

限界まで回転させるエンジン。

同時に、オヴェルの機体と執念が乱暴に加速していった。

戦闘騎で狙う時の定石は、相手に近付き過ぎず、適度な距離をもつて背後を突くこと。

加速をひたすらにかけると今のオヴェルからは、その意思を全く感じない。

狙いは不明だが、ジンは用心のためにペダルを踏みこみ、自身も加速した。

しかし、既に最高速度まで達した相手。

瞬く間に抜かされ、脇に付けられるジン。

「っ!!」

そこで90度回転し、自分の方に向く相手の砲台。

とつさに判断を効かせ、ジンは逆噴射で速度を落とす。

耳元をかすめ飛んでいく銃弾。

「ジン!!」

後ろの世羅の顔に、鮮血が散った。

「大丈夫。かすっただけです……」

首を曲げたまま、前を向いて答える彼。

挟^{えぐ}られた耳端から、熱い血液が肩に滴っているのを感じた。

速度を落としたため、今度は自分が追う番。

ジンはためらわずに機銃のスイッチを押し込む。

しかし相手は、まるで後ろに目があるかのようにかわす。

一流の人間が、操縦のみに集中しているのだ。

それは当然であつた。

そして同時。

前に行く戦闘機の砲台は、再び背後の自分へと回転する。

「……！！」

速射される火花。

攻撃を中止して回避に入るジン。

放たれた弾は、案の定、今自分がいた空を撃ち抜いて行く。

（…全方位 撃てるとは……厄介な機体だ……！）

しかも敵は、完全に攻撃役と操縦役を分担している。

大きな外見から動きの鈍重さを期待していたが、その認識は一気に不安へと変貌した。

嵐の中のような速度の中。

ジンが目を凝らすと、前を飛ぶ彼女が怪しい笑みを浮かべているのが見えた。

突然のスコールを傘で受けているような機銃の音。

わずかに後ろを顧みて、操縦桿を傾けるバグ。
機体すれすれを抜けていく銃弾。

肝を冷やすのも慣れただろうか。

煩わしい、蜂から逃げるような展開を、もう10分は数えた。

(…確かに…以前より『かわせる』……。

ジンの言つとおり、俺の反応に合ってる機体かもしれない…)

前方の視界に敵集団が入る。

反射的に機関銃のスイッチを押し込むバグ。

だが、銃弾は残された排気だけを貫いて飛んでいく。

そして回避を終えた憎らしい赤色の機体達は、あざ笑うように、
散ったり集まったりを目の前で繰り返す。

「下手くそが!!」

何回りも逃げのびて、バーグの背後を偶然に訪れた戒が叫んだ。

勿論、彼にも最初の一機以上の手柄は無く、敵弾を避けているだけで手一杯。

野次を飛ばされる義理は無い。

だが本来なら、経験者として彼を守る立場でなければならぬ自分。

その操縦の稚拙ぶりに、バーグは自分に心底腹が立っていた。

(…戦いは逃げるだけじゃ勝てねえ…。

どうにかして…攻めなきゃよ……)

考えれば考えるほど、ぐちゃぐちゃになる頭。

その中で再燃する一つの疑問。

何故、弾を避けることが出来て、命中させることが出来ないのか。

それは射撃の練習を積んでいないからだ、勝手に決めつけていた。

そんな考えの中、目の前の敵機から放たれた小さな礫いかりが、自分の機体の脇を恐ろしい速度で真っ直ぐ通過した。

その直後、考えることもなく操縦桿を傾けていた自分に気付く。

（俺は……弾を見てるんじゃない……！？）

本能が、一つの答えを嗅ぎ付けた。

相手との距離を見て、無意識に間合いを計る自分。

それは、陸において剣を構える相手と対峙する時の感覚と似ていた。

操縦席の中で、戒に鞘を投げたために抜き身となった愛剣に触れるバグ。

剣の刃が届く距離がある。

遠すぎても、近すぎても敵を討つことは出来ない。

自分が相手を斬る時は、どうあがいても逃げられない距離に相手を引き込んでから剣を振る。

それは、きつと銃も同じ。

撃てば相手がかかわせない、そんな『必死の距離』というものが、剣と同じように存在するのだ。

それを本能的に悟り、自分は相手の間合いを外している。

後方に、見える敵機。

今度は確実に、その銃口の角度と自分への距離が、一つの線とな

って見えた。

（こういうことか……ジンよお!!）

笑みを噛みしめながら、旋回するバグ。

急に照準を外された相手は、撃つ姿勢をやめて自分を凝視しているのが良く見えた。

「戒!!」

おまえは撃つことを考えるな!!

逃げて、逃げて、逃げまくって、相手をかく乱しろ!!」

「……囃になれっていうのか!？」

唐突に近寄ってきたバグに命令され、当然、反発する戒。

「いいから、言うとおりにしてくれ!!」

掴んだ感覚を手放したくない。

心が急く。

「すつとばせ!!」

全速で進めば、そうは照準は合わせられない!!」

「気楽に言うんじゃないよ!!」

彼の迫力に押され、渋々ながら真つ直ぐに加速していく戒。

新品のエンジンの火柱が山肌を照らした。

いきなり猛進して来る戦闘騎。

正面の炎団の二機は泡を食ってそれをかわす。

瞬間、戒の背後から狙いを定めるバグには、それら両脇の戦闘騎が得物を構える二人の剣客に見えた。

一方の機体に斜め下から近付き、避けようのない至近距離で機関銃のスイッチに軽く指を乗せる。

殺す間合い。

殺される間合い。

空でも、銃でも同じ。

交差する寸前まで引き寄せた射撃。

鈍い金属音。

指先と大空に張った神経に、今度は手ごたえを確かに感じた。

燃料部に一つの穴を開けた赤い機体が、爆発する。

息つく暇も無く、回頭。

その脇の戦闘騎の背後にも回りこみ、間髪入れずに撃ち込む。

剣を扱う自分。

すれ違いざまに、もう一人を薙^なぐ。

陸で二人を相手にした時、自分がとるであろう行動。
そのイメージが今の動きと見事に重なっていた。

空気と機体が破裂する中の歪みを突破するバグ。
熱いはずの炎が、妙に心地良く汗を飛ばす。

経験や才能で相手の動きを読むのが、リジャンやジンの射撃。
それと比べれば何と不恰好な攻撃だろうか。

だがバグは、とても自分らしいと思った。

そして何よりも、いつも遠く感じていた空と風が自分を祝福してくれること、今はそれが何よりも嬉しい。

「……この調子で行くぜ、戒！

今回は、お前が逃げる役。

俺が撃つ役だ！！」

「……………！！」

意気上がる自分の言葉に、戒が遠くで目を丸くしていた。

「あらら……かわいそう。
そんなに血を流しちゃって。」

耳から出血しているジンの様子に目を細め、甘い口調でオヴェルが呟いた。

そんな彼女の機体から速射される、機関銃。
そして、両翼の砲台から放たれる砲弾。

だが依然として、ジンはそれを軽やかにかわし続ける。

「……そろそろ…楽になれよ！」

羽毛のように捉えようのない動き。
それに苛つきを覚えたオヴェルが途中から吠える。

「隊長……」

その激昂げきいつの顔を両脇から、やはり不安そうに見る二人の砲手。
彼等の視線に気付き、オヴェルが口角を歪めた。

「…わかった、そろそろやめるわ。

…もう『終わった』の人間を相手にしても……時間の無駄だし。」

そして彼女は直後、小さく言葉を吐く。

「!？」

急に自分から離れた、オヴェルの戦闘騎。

もはや彼女は顔を背け、遙か遠方の戒とバークに狙いを定めているのが分かった。

ジンはこれには面食らい、速度を上げて追った。

「……血が…すごい出てるよ！ 本当に…平気なの!？」

身を案じる背後の世羅の手をとり、安心させようとするジン。

「……出血は多いですが……そんなに深くない……大丈夫……!」

めまい
眩暈。

そして、鋭く高度を下げる機体。

ジンは疼く患部を素早く手で覆った。

(…これは……!?)

耳の傷が脈を打ち、その鼓動が波紋のように頭や喉、身体全体へ広がっていく。

(まさか……!?)

震える手首。

それになぞり、揺れる機体。

(……さっきの弾に……毒……!?)

焦燥の中。

「言っただろうが!!

てめーは……『終わった』ってよおおおお!!」

猛禽類もっぎんのようなオヴェルの甲高い嬌声が、頭上から浴びせられた。

気付かぬうち、彼女の遙か下を飛んでいる自分。

朦朧とする意識の中、ジンは操縦桿を必死に傾けた。

狭まる瞳孔。

みるみるうちに視界が奪われていく。

「……こんなことになって……すみません……世羅さん……！」

ジンの小さな言葉に、世羅がゆっくりと頬を寄せる。

「しばらく……私の目になって下さい……」

「……？」

わけもわからず、頷く世羅。

「周囲の状況……それさえ教えてもらえれば……」

「ジン……目が……！？」

察した彼女は、すぐに周囲を確認した。

「……上っ……！」

零式のエンジンの火に照らされて、山肌に映った怪鳥の影。すぐに見上げて叫ぶ世羅。

彼女の声に反応し、全身を傾けて強引に機体を右にずらすジン。

目下の岩が銃弾に貫かれ、砕け散る。

「……あ！…何かに当たる！！」

ところが、岩肌から伸びた枯れ木。
衝突しかける寸前に、世羅が慌てて叫んだ。

「……っ！！」

今度は操縦桿を引き、自分の勘を頼りに機体を持ち上げるジン。
垂直に持ち上がった機体は、そのままゴーベの岩肌ぎりぎりを舐
めて昇っていった。

もう追う必要が無いということだろう。
大きなエンジン音は遠ざかっていく。

(…おそらく…これは…神経性の……毒…)

操縦桿を握る逆の手で、自分の座るシートの下をまさぐるジン。

「………？」

世羅がその様子に注視する。

彼が取り出したのは、小型の拳銃だった。

「……いい『気づけ』に…なれば良いのですが。」

その銃口を、自分の足に当てがうジン。

世羅の制止の叫びは、銃声にかき消された。

「あつちは……どうなってるんだ!？」

「知るか……よ!！」

並んで飛んでいる戒が、気合の叫びと共に、逃げ腰になった最後の
の一機を撃ち堕とす。

その様子に口笛を鳴らすバーグ。

半分以上がジンの手柄だったが、尻上がりに調子を上げた自分達
その最後の一機が堕ちる様を見ながら、二人はようやく一息つ
いた。

まるで現実感の無い、夢心地な状態。

バーグも戒も、慣れない戦場に肉体が限界に達していた。

上昇していくうち、雲が多くなり、^{もや}靄も深くなる高山。

頂上は近付いているのだろうか。

二人は戦っているうちにルベランセとの距離感をとくに失っていた。

「……おい……」

よく見ると、靄は機体より早く上へと昇っていた。

風が『下』から吹いている。

「……!？」

海から浮上する鯨のように、突如、下の雲からせり上がる来る巨影。

薄い雲越しに初めは真っ黒に見えたその姿が、鋼鉄の身体をした飛翔艦であることに気付くのに時間はかからなかった。

鋭角の尖頭。

細長い艦体。

それは、雲を突きぬけ、天空へ目掛けて飛ぶ槍のようだった。

赤のカラーリングと脇に描かれた炎の紋章は紛うことなく、炎団のもの。

呆然と見詰める間に、自分達をあっさりと抜き去って行く飛翔艦。

（あれが…高速の……！！）

フィンドルの言葉を思い出し、ペダルを踏み込む戒。

しかし、距離は縮まらない。

相手の加速は充分で、恐ろしいほど速度が乗っている。

気持ちだけでは、限界以上にエンジンを回転させることは出来なかった。

追い討つ射撃も、猛スピードの飛翔艦に対しては焼け石に水。

いつしか、二機の機関銃は弾切れで空回りをしていた。

上昇する際の空気圧のため、発生する耳鳴り。
それと重なる、悪夢のようなエンジン音。

（何故……あいつは動ける！？）

追われるはずの無い相手。

背筋に感じる視線。

焦ったオヴェルがペダルから足を踏み外す。

「隊長！！

落ち着いてください……！！」

機体がぶれるため、砲手もなかなか狙いを定めることが出来ずにいる。

「うあああああ——！！！」

我を失ったかのように、恐怖に怯え、ただひたすらに上昇を続けるオヴェル。

何も考えない、垂直の飛行。

「何で動けるんだよっ！！

あの毒を……喰らってんだろっが！！！」

得体の知れない不安から、彼女はただ逃げのびたかった。

（……操縦が……荒れ出した……）

狭い視界の中、背後から相手の機体を見定めるジン。

世羅から貰った。

舌を噛まないよう、口にくわえた赤いリボン。

破いた残りのそれは、自分の腿の弾痕にきつく縛り、血止めとした。

初めは騒いだ彼女も、今は後ろでおとなしく自分の覚悟を見守ってくれている。

身を引いてレバーを握り、引き金を軽く押し込んで撃ち込む一弾。

破裂音にオヴェルが顔を向けると、脇では頭部を撃ち抜かれた砲手の姿があった。

「くそがあああああ！！！」

オヴェルの絶叫の中、もう一方の砲手の頭も碎け散る。

背後から迫る亡霊は、尾に付けた白布を威嚇するように広げ、自分を飲み込もうとしていた。
その恐怖に屈服する寸前

噴き上がる豪風。

引き金から、ジンの指が離れた。

待望の。

下腹に響く鈍い音に、一瞬にして気を取り戻すオヴェル。

「ふ……ふ……あははは……！」

やった！ 俺の勝ちだ……！！」

機体を反転させ、逆さまに向ける彼女。

「……………！？」

音のする方へジンも振り向く。

熱い風と共に、一瞬にして至近距離を過ぎ去っていく飛翔艦。
風圧に流されながら、ジンは反射的に迎撃態勢に移る。

「……させるかつ……！！」

しかし、体当たりで彼の行く手を遮るオヴェルの機体。

「慌てなくていいんだよ……！！」

てめえは………ここで指をくわえて見てやがれ……！！」

操縦席の脇の特殊なレバーを操作するオヴェル。

席に死体を乗せたまま、砲門が自分に向いた。

「……くっ……!!」

すぐさま反応して、放弾を回避するジン。

（砲手が居なくても……動かせるのか……!）

眼下に、戒とバーグの機体が確認できた。

二人が追いついて来ている。

「よっしゃあ……おもしれえ……三機まとめて……相手してやる!!」

同じく彼等に気付き、不利な状況にも関わらずオヴェルは笑う。

「ふふふふ……遊ぼうぜえ……!!」

オヴェルの狂気と、巨大な機体に気圧される様子の戒とバーグの姿。

天を見上げれば、飛翔艦の姿はもう見えなくなっていた。

「……あ……！」

一番最初に気付いたのは、念通術に秀でたメイだった。

彼女の顔を見て、改めて自分も察知するリード。

「……でかい……」

……しかもかなりの速度だ……」

念通球を握りながら、彼は震えて呟く。

「……足止めは……失敗か……！」

そして、近付いてくる飛翔艦のイメージに、怒りにまかせて机を叩く。

「はよ降伏せえ……！」

時間が……無いで……！」

シャロンは焦る。

ルベランセを制圧し、それを早く示さなければならない。

彼女は片方の空いた手で声通管を取り、フィンデルに差し向けた。

「いや……あきらめちゃ……ダメっすよ……！」

だが、そこで勢い良く舵を切るタモン。

目の前に姿を見せる、ゴーベの頂上部。
ついに到達したそこは、周囲よりもさらに厚い雲で真っ白に覆われていた。

綿^{わた}を貫くような、音と柔らかな衝撃。

途端に見えなくなる視界。

そこは、どこまで続いているのか全くわからない、深き雲の世界だった。

「……確かに…飛翔艦なのね？」

そこでフィンデルは姿勢を崩さずに訊いた。

「…間違えるものか！」

しかも、この速度じゃ……あと一分も経たずに接触するぞ……！
「！」

リードから洩らされる言葉。

途端に、タモンからは先の明るい表情が消え失せる。

「……ミーサ、聞こえる？」

シャロンの手から静かに取る声通管。

それは誰もが予想しない、フィンドルの言葉だった。

「源炉の出力を……低下させて。」

眼前の大窓の外は、深雲によって何も見えない。

それはまるで、今の全員の心中を表したようだった。

「ルベランセは落下しないだけの推進を保ち、この空域で停止。」

フィンドルは続ける。

「……ようやく……降伏する気になりおったんか……」

安堵の表情で、シャロンは汗を拭った。

「お嬢！ 超・お手柄っすよお！！」

「ルベランセを無傷で……！！」

嬉々として浮かれるイールとムールをよそに、シャロンはまだフィンドルから銃口を外せないでいた。

「……ブリッジを制圧した合図、どうしましょうかねえ……」

窓から真っ白な景色を見回すイール。

「こう雲が厚くちゃあ……この信号弾の光も見えるかどうか…」

懐から長い筒を出したまま、ムールが考える。

二人の言葉を聞き、シャロンは窓の外に注目した。

周りを囲む靄。

すぐ真下に見える、先ほど突き抜けた雲。

次の展開を予測し。

彼女は心臓の動きを詰まらせた。

「……あかん……！」

11番艦に知らせ……ッ！」

時間的にも無理だと解つていながら、彼女は自然と二人に命令していた。

「…これは……『畏』や…」

瞳に、フィンデルがさらなる命令を下す姿が映る。

「
源炉完全停止用意。」

「……どうなっている？」

オヴェル以外のウチの戦闘騎が全く見えなかったぞ……」

薄暗いブリッジで、団員の一人が呟いた。

「標的の速度も止まらない。」

別の一人も言う。

「やむをえん……。」

降伏の意思が見えなければ、攻撃しろとの命令だ。」

「雲の中に入ったようだ……？」

団員達は、ブリッジ前方に座る念通士に目を向ける。

「分かっているだろう？」

雲の中に入った標的の索敵は不可能だ。
様子は分からない。」

苦笑しながら答える念通士。

「構うものか。 見ろ。」

艦長の代理の者が視線を向けた。

迫り来る厚い雲。

そこには、ルベランセの航路を示す大穴が開いていた。

「標的の進入角度がわかる。

雲が厚いのが幸いした……！」

操舵士に『そこ』へ向かうよう指示をする彼。

「しかし、紅蓮様も太っ腹なことだ。

この最新鋭の飛翔艦を今作戦に用いるとはな。

よほど、オヴェルのことが可愛いとみえる……」

余裕から軽口の雑談を交わした、その時だった。

雲に飛び込んだ直後に認める、ルベランセの底部。
すぐに全身の毛穴が開いた。

「…お、面舵 ……！！」

誰かの、その指示は間に合わなかった。

衝突。

ひしゃげる艦首。

「……ぎゃっ!!」

続けてブリッジを突き抜けてくるルベランセの装甲に、押し潰される念通士。

助けを求める者。

騒然となる団員達。

「下へ……逃げ……!!」

自分達の飛翔艦は抑えこまれ、岩をむき出した山頂に迫っていた。目上のルベランセは、既に落下していたのである。

鋭く、早い衝撃。

最後に彼等に許されたのは、絶望の叫び声のみだった。

「源炉、完全停止状態から最大出力へ移行!

これ以上の自由落下を、何としても回避せよ!!」

艦長席に掴まりながら、握った声通管に向かって必死に叫ぶフィンデル。

「相手を上から潰す？　アホなっ……！！
こんな手が……！！？」

シャロンも適当な機器に掴まりながら叫ぶ。

ヒビが入り、碎ける床のタイル。

（しかも航行中にエンジンを停止やと……！！？
何故……こんな馬鹿げた指示に機関室の奴も従ってんねん！！）

飛ぶ書類。

「……上昇……！！
どうしたッ！？」

変わらない状況に、リードが吠える。

「もう……舵が効かないっす……！！」

握った舵を小刻みに震わせているタモン。

このままでは、ルベランセ自身も墜落する。
それは誰の目にも明らかだった。

下敷きにした艦の爆発が、激震となって襲う。
態勢を崩し、床に転げるタモン。

放りだされる舵。

咄嗟にそれを握ったのは、それまで脇で身動きひとつせず座していたザナナだった。

「……どうすればいい。」

豹頭が唸る。

「と、とにかく、舵を真っ直ぐ引くっすー!」

倒れたまま、叫ぶタモン。

「…山を踏み台にして、飛び上がる感覚でー!」

フィンデルが命ずる。

敵艦と山頂に半分埋まった姿勢から、持ち上がるルベランセ。

ブリッジ前部の分厚いガラスに長い一本の亀裂が入り、そこから枝分かれする。

細かい破片が、足元に落ちて散った。

舵を握るザナナの上腕は膨れ上がり、血管を浮き出させる。

「……………おおおー!!」

わずかに動く舵。

彼は、直後に一気にそれを伸ばした。

同時に、皆の足が一瞬浮く。

「……………やった!!」

歓喜の声を上げながら窓際に転がり、下の様子をうかがうリード。

だが、その声は一瞬にして消えた。

目下の惨状。

無残にも溶けたる飛翔艦の残骸。

そして、砕けた山脈の頭頂。

無論、相手の乗組員の生存は絶望的だった。

何よりも、自分達が押し潰した感触。

それが罪悪感として足元に残っていて、拭えない。

「おまえ　　ッ!!」

立ち上がったシャロンの銃口が、フィンドルの唇に突きつけられる。

「逃げる気なんて……毛頭無かったやろ……」。

初めから……ここへ誘い込んで……相手を殺す算段だったんやろ……!!」

涙を浮かべて、訴える彼女。

「悪魔か……!!」

悪天候の利用。

鉄鋼などを積載し、質量に勝るルベランセが持ちこたえ、速度重視型の軽い相手飛翔艦が負けて潰れる道理。

全てが初めから計算だったのか、そんなことは解らない。

ただ、ゴーブという自然を利用して敵艦を轢殺れきとつするという、神をも恐れぬ背徳の策。

信賴できる仲間でありながら、フィンドルという人間を恐ろしく感じている自分が確かに存在した。

「あの時も……今も……飛翔艦には……何人乗っていると思うとるんや!!」

……その命……おまえは一瞬で奪ってるんやぞ……!!」

「確かに……戦争において、相手に降伏の余地があることが美德とされていた時代があったわ。」

私は、その時に編纂へんさんされた兵法に触れて憧れ、軍隊に入った。」

彼女は淡々と返した。

「でも、すぐに思い知った。」

……空には逃げ場なんて無いの。

大地で戦うよりもずっと、人はあっけなく死んでいく。

空に出る者は、いつでもそれを覚悟しなければならぬ……。」「

「ふざけるな」

シャロンが叫ぶと同時に、フィンドルは嗚咽おえつした。

艦長席から崩れ落ちる寸前で、先と同じように肘掛けに掴まってこらえる。

「……おまえ……！」

呟くシャロン。

「……敵だけでなく……自分の心も殺してるんか……！！！」

彼女の言葉に、フィンドルは力無く笑った。

祭りの初日は終焉を向かえ、騒ぎは最高潮に達していた。

巨大な炎の梯子はしこの周りを踊り狂う民衆。

空に打ちあがる花火が、お互いの顔を眩しく照らす。

身体を寄せ合わなければ、お互いの声も届かないほどの太鼓と笛の音。

そんな場違いな熱狂的な空気の中。

三人の騎士は、広場の最後方にぽつりと空いていた粗末なテーブルに陣取っていた。

「楽しんでんのかよ？

え、マクス？」

アルコールで顔を真っ赤にしながら、デチャードがマクスに絡む。

「……………ああ。」

特に迷惑そうな表情も浮かべず、マクスはただ答えた。

手にしたカップに注がれた、深井戸の新鮮な冷たい水。
自然豊かな風景と幻想的な祭の雰囲気。

彼にとっては、それだけで十分だった。

「マクス様……そろそろ止めてあげて下さい。
これでは、明日の任務に差し支えます…。」

傍らで、クウが耳打ちする。

「なに、こいつは意外と気を使う人間でな。
飲めない私の代わりに飲んで、さらに私達を楽しませようとして
いるのだ。」

そう言っつて、彼は笑った。

「もしも、明日体調がすぐれないと言ったら、休ませてやればいい。
実際は警護するほどのことも起こるまい。」

「……………!?!」

平然と答えるマクスに、クウが顔を強張らせる。

「こらそこお！

なに二人で…こそこそ話てるんだあ？

もしかして…会ったばかりで、もうデキてんのか？ ……うぶ。
」

そんなやりとりも知らず、テーブルの上に片足を乗せ、下品な笑いを浮かべながら
ビールをがぶ飲みするデチャード。

彼の泥酔した様子に、いったん口を半開きにしたまま呆れ返る二人。

「まあ…いいや。

しかしタダ酒ほど、うめえものねえな……まったくよ……。

…おかわり……してきまーす……」

そして独りで呟き、おもむろに腰を上げる彼。

「……どうして…そんなことを言っんですか？」

千鳥足のデチャードの姿が視界から完全に消えてから、クウが強い口調で言った。

「そんなこと、とは？」

意外そうな顔で、返すマクス。

「明日、平然な顔で『休めばいい』などと言えば、彼は自分を責め
ると思います。」

『自分はいなくてもいい、その程度の人間なのか』って。」

「そういう意味で言ったのではない。
いざという時に助けてやれず、何が仲間かと……」

「それは、貴方が勝手に思うことです。
相手は、決してそうは受け取らない。
だってそうじゃありませんか!？」

マクスの言葉を制し、より一層、語気を強める彼女。

「一方的な優しさなんて……逆効果です……。
そんなの……本人がみじめになるだけじゃないですか!！」

そして、ついに声を荒げた瞬間、クウはそこで固まった。

「……すみません……!
平民風情が……」

直後、恐縮する。

「いや……。まさにその通りだ。」

マクスは、感嘆の表情で腕を組んだ。

「私は、昔からそういう方面に鈍くてな。取り柄といえば、武芸くらいだ。」

彼は自嘲しながら、美しい銀の瞳でクウの顔を真摯に見詰める。

「おかげで親しい者に対しては、良かれと思った行動をしてしまうことがある。」

「… 今後は、気を付けよう。」

彼の穏やかな表情を前に、彼女は自然と両の手に力が入った。

「… なかなか鋭いようだな、君は。何より人への思いやりが深い。これから… 色々なことを教えてもらいたいものだ。」

さらに、深く頭を下げるマクス。

とても身分ある騎士の言葉とは思えなかった。そして対等の扱いともとれる、彼の態度。

だがクウは、警戒を全て解くことができずに無表情を保っていた。ついていた。

妙に汗ばんだ手で、テーブル上のカップを握る。

揺れる水面。

一際大きな花火が上がった。

わあ、という人々の歓声。

だが、『それ』に気付く人間は二人以外にいなかった。

立ち上がるクウ。

確かに花火と同時に、背にした森の奥から、鳥や小動物の鳴き声が反響した。

マクスの目が、森林の闇中をなぞる。

それはその先で、国境にそびえる山脈と繋がっていた。

「……見えませんよ。」

その頂上を見上げようとする彼に、クウは言った。

「ゴーベの山頂は…いつも天候が悪いですから……」

目線で示す彼女。

言つとおり、山頂付近は黒の絵の具で塗りつぶしたように途中からは星空が見えない。

「……嫌な予感がする。
教会へ……戻るぞ。」

マクスの言葉に、クウは無言で頷いた。

轟音と共に、真昼のように明るくなった山頂。

炎が付いたまま飛び散っている鉄の装甲が、頭上に降る。

視覚の大半を失っても。

出撃前にフィンドルと会話を交わしたジンにとって、その光景を想像するのは容易かった。

火山のように熱くなったゴーベを昇っていく、残った四機の戦闘
騎。

各々（おのおの）が、脇に沈んで堕ちていく飛翔艦の残骸を目の
あたりにする。

「……なんだ？」

……これは……失敗……！？」

彼女を襲う、理解の及ばない状況。

だが視界に飛び込んできた変えようの無い『現実』が、オヴェルに判断を下させた。

「……こうなったら……直接……墮としてやるよ……!!」

さらに上へと飛び出す赤い鋼鉄の巨体。
すぐそれを追う、ジンの零式。

「邪魔だ!!」

怒りにまかせて、体当たりを仕掛けるオヴェル。

そして、それを上手くかわしたジンに照準を合わせ、機銃のスイツチに指をかける。

「!?!」

だが、相手の機体の中から両手出して構えている世羅の姿を見て、彼女は足のペダルへと意識を変えた。

「
《源・衝》フェルド!!」

目の前に広がる光弾。

寸前でかわし、無様な螺旋を描きながら、やまもや山霧の中に消えるオヴ

エル。

「やった!？」

身を乗り出し、確認する世羅。

だが、その様子は既にうかがえない。

「……いや、おそらく……」

ジンは警戒しながらも、少しでもルブランセへと近付くため、垂直に上昇を続けながら周囲を見渡す。

後ろには、戒の戦闘騎。

さらにその背後に、白い蒸気が上がった。

疲労から、うつろな目をした戒は全く気付いた様子はない。

無理な態勢で、世羅が後ろに手の平を向ける。

「……《源・衝》フェルト!!」

放たれた光弾を、今度は最低限の動きで避けるオヴェル。

「馬鹿め……二度同じ手を……食つか!!」

彼女は、改めて戒へと照準を合わせた。

「……………!?!」

そこで背後の敵機に感づいた戒。
しかし、身体は反応出来なかった。

前方のジンが迷う。

ルベランセを守るためには、ここで反転すれば致命的になるのだ。

だが、次の瞬間。

撃つのも忘れ、狼狽するオヴェル。

そしてジンも彼女と同様の表情で、空の後部座席と、そこでバタ
っている安全ベルトを見詰めていた。

両者の空間には、ためらいもせずに空に身を投げた世羅の姿。

「《源・衝》^{フェルド}ッ!?!」

至近距離から、オヴェルの右翼をもぎ取る光弾。

しかし機体自身は、勢いのついた速度のため、その衝撃から持ち
こたえて上昇は続いている。
対照的に落下していく世羅。

ジンは何も出来ないまま、ただそれを眺めていることしか出来な

かった。

細い腕が泳いだ。

目の前で大きな影がトンボを切る。

その瞬間、手首からの衝撃が全身を伝わった。

腕を伸ばしたまま、戦闘騎から乗り出す戒の姿。

空中で繋がった二つの手。

「……戒!!」

互いの腕が、嫌な音を立てて軋んだ。

「離して!!」

腕が……戒の腕が……ちぎれちゃっつよっ!!」

「うるさい……!!」

彼の言葉に、彼女が口を結ぶ。

「……っ!!……くそが……ッ!!」

操縦も忘れ、叫んだ。

彼女の長い手袋をしっかりと引き持つ彼の手。
その指の天命の輪が輝くと、肉と筋が悲鳴をあげていた手首から、
痛みが引いていくのを世羅は感じた。

「戒……」

伝わる、鈍い骨の音。

機体が世羅の落下に追いつき、軽めの身体がふわりと、狭い操縦
席に収まる。

戒は彼女を、そのまま強く胸に抱いた。

「……リボンは……どうした……」

髪を乱した世羅に、かすれた声をかける。

「ジンが……怪我したから……あげたんだ……
……戒の分が……無いから……ボク……」

紫色に腫れあがっている、彼の手首に彼女は擦り寄った。

驚きと共に安堵をするジン。

それも束の間、追われる形になった戦況に意識を戻す。

「次は……てめえだ!!」

下の二人の様子には全く気付かずに、自分に向かって狂走するオヴェル。

放たれる、速度と怒りに任せた銃撃。

ジンは回頭して避け。

それと同時に背後に付き、撃ち込んだ弾がオヴェルの機体を抉^{えぐ}つた。

だが装甲の厚さで、致命傷にはならず彼女は飛び続ける。

その速度は留まるところを知らず。

満身創痍だが、今の彼女ならば執念でルベランセを墮としかねない。

そんな、凄味をジンは感じていた。

その時、思いもしない『正面』という方向から、飛行してくる機体。

バークの戦闘騎。

(…いつの間に…？……さっきの隙に回りこんでいたのか！？)

ジンが目を見張る。

それは天から振り下ろされる、一筋の剣閃。

「どいつもこいつも…！」

何故こうも歯向かって 「！」

首を捻じ曲げ、迎え撃つオヴエル。

戦闘騎の先端の機銃と、残った左翼の砲台が火を噴いた。

軽い金属音の連続。

わずかに機体を持ち上げ、頑丈な部位で防御したバーグの機体は
まるで速度を失うことなく、
真っ直ぐ突っ込んでくる。

相手が一弾も撃っていないことに気付き、彼女は目を剥いた。

(こいつ…まさか ！？)

その『狙い』に、気が付くのが遅すぎた。

焦りと混乱の中、操縦桿を傾けて回避運動を取ろうとする彼女。

しかし、先に奪われた片翼がそれをさせなかった。

(…こちら…もうとつくに全部撃ち尽くしてんだよ……。
…これしか…ねえんだ……!!)

バーグが操縦席で前のめり、相手を見定める。

きしみ、細かく震える機体。

急激な上昇と下降。

機体も自身も限界であった。

全身の感覚は麻痺し、寒さも何も感じない。

不意に機体がわずかに浮いた。

正面から突っ込むはずが、軌道が上に逸れる。

二機が上下ですれ違う、その刹那。

それは刃を重ねるが如く。

バーグの戦闘騎の鋭利な腹部が、赤い機体を縦に薙いだ。

「……………!!……………!!?」

オヴェルは内部がむき出しになった、自分の機体の断面図を上に見視した。

自分は何故か、ゴーベへと落ちていく空の中にいた。

その空間だけ時が止まったように、吹き飛んだネジの一つ一つまで、目で確認することが出来る。

自分の身体だけがゆっくりと落下し、意識が遠ざかっていくのがわかった。

何かを叫ぼうと、喉を震わせる。

しかし吐き出されるのは、凍りつく息のみ。

彼女、オヴェル。ハイマンは墜落した仲間達の残骸の中に消えた。

「やった……！」

戒と世羅が同時に呟く。

前に行くジンも、ゴーグルを上げて勝利を祝った。

「！？」

「バーグ？」

だが一人だけ、速度を落とせずに垂直落下していくバーグの機体。

戒は、痛めた手で操縦桿を握り締めた。

ジンも今度は方向を転換し、追いかける。

「バーグ！！」

世羅の大声に目を開ける彼。

下降している自分、そして周囲を見回す。

「なにやってんだ、ヒゲ！！」

「へ……歳だ……！」

腕が……痺れて動かねえ！！」

笑いながら受け答えるバーグ。

しかし、戒は真剣な眼差しで自分を睨んでいる。
さらに脇に現れるジンの姿。

彼等は、自分の戦闘機の下部に潜り込み、方向を変えようとする。

だが素材の硬さに、音を立てて散る二機の装甲。

「……やめろ！　もたねえぞ……！！」

バーグは慌てて叫んだ。

「……やめてくれ！！」

「……ここまできて、お前らまで死ぬことはねえ！！」

火花と共に翼が折れかける二機。

「……死なないよ、誰も……」

「……ううん……死なせないんだ！！」

その操縦席から立ち上がった世羅。

彼女と三機の周囲には、源の粒子が集まっていた。

厚い雲を抜け、広がる星空。

周囲は不気味なほど静かであった。

「……どうなっているんだ……戦況は……！？」

呟くリード。

「反応が……」

索敵を続けていたメイが、声を失った。

「……戦闘騎の反応……！」

たった一機……だと……！？」

続けて気付いた彼も叫ぶ。

「……きっと、オヴェルや……！」

はよ……飛翔艦を……止め……」

多量の汗をほとばしらせながら、シャロンが言いかけた。

「……いや……」

……フィンデルの……勝ちだ。」

後方を覗き、呟くザナナ。

「……………あ……！」

イールとムールが彼になぞり、窓の外で目撃する。

雲を突き上げて姿を見せる、それは、源法術の氷で頑丈に接合されている三機の戦闘騎だった。

「……そういうわけか!」

機体状況は最悪の様子ながら、彼等が格納庫へと無事到り着いたのを確認。

リードが念通球を握りしめる。

「………… オヴェル…………。」

やられたんか………… おまえが…………」

シャロンの手から下がる銃。

「…………。」

勝ち誇りもせず、フィンデルは淡々としていた。

「………… お嬢…………。」

「………… オレら、出ます。」

イールとムールは背筋を直しながら、シャロンに近付いた。

「………… よせ。」

「…もう…あたしらの負けや…賭けも勝負も…」

「なに言ってるんですか？」

「オレ達は…炎団ですぜ？」

「賊は賊らしく、最後まで悪あがきしましょうよ。」

二人の様子に、目を見開く彼女。

「……なに言うつんねん…おまえら…」

「一応、オレらにも用意した『最後の手段』ってのがありまして。」

「ブリッジもお嬢が占拠してる。」

「依然として、うちの方が有利じゃないですか。」

「静止も聞かず、ブリッジの扉を開く彼等。」

「いつか言いましたよね、お嬢……。」

「火は、青い炎の方が温度が高くて熱いんだって。」

「やるんでしょう？」

「いつか……炎団の全てが青く染まるまで。」

二人は笑った。

「この期に及んで……あきらめが悪いぞ…お前ら……！」

唸るリード。

（そんなこと……）

（重々承知なんだよ……！！）

彼に対し、心の中で返しながら足を踏み出す二人。

「炎団…青組……行くぜ。」

全身スーツとゴーグルを直す。

二人は同時に、ぴしゃりと頬を張った。

片方の目に、シャロンの顔。

もう片方の目に、長い廊下が広がっていた。

第二章

第四話 『背徳の策』

了

2 - 5 「宴前」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 2

「It runs on ground to go to
the heaven」

The fifth story
'Before a party'

闇の中。

光ひとつ無い暗闇の中。

暑苦しい、閉鎖された空間の中で耐える。

出発の直前は、いつもそうだった。

部屋すら満足に与えない先兵の団員 所詮、『使い捨て』
の待遇はそんなものだった。

蠢く、人間の気配。

少女には、ある二人が逃げようとしているのが何となく判った。

それと同じ光景を、彼女は過去に何度か目撃したことがある。

炎団の掟は厳しく、作戦前に逃亡すれば命は無い。

「 なにしとんねん!!!」

少女は、あえて声を張り上げて言った。

「.....ほ、ほっといてくれ!!!」

「オレたちや、賊なんて向いてないんだ!!」

すぐに返ってくる反応。

「脱走したら、殺されるで!!」

暗闇の中で掴む。

柔らかく小さな手に、二人は思わず立ち止まった。

「軽い気持ちで入団したのが間違いだったんだ……」

「こんなことなら……田舎で細々と暮らしていりゃ良かった……」

恥も外聞も捨て、二人は情け無い声で言葉を洩らし始めた。

「所詮、オレ達は何もとリエが無い鼻つまみ者……」

「炎団で存在すら認められてないから……服だって……」

さらに、涙声で訴える。

そこで握りが強くなる少女の手。

「……《炎・生》ホララ・キ」

彼女の言葉と同時に生まれる、ぼんやりとした照明代わりの火。
何気なく生み出された術に、二人は驚く。

さらに驚いたのは、少女の青い服だった。

「そ…その恰好……あんたも……!？」

「一緒にすんな!

あたしは逃げへんで!！」

勝気な声が二人を貫く。

「どんなに差別されても、虐げられても……そこらへん、おまえらとは絶対的な差があんねん!！」

手の上に浮かんだ小さな火を揺らしながら、少女は続けた。

「…だけど、何も無いなんて言うな!!
誰にだって平等に…『ある』んや!！」

二人の心臓に、握った拳が順に当てられる。

「おまえも…おまえも!
生きとるんやろ!？」

そない泣き言は、いっぺんでも死ぬ気でやった奴のセリフや
「

二人は、弱い自分達に心の内を撒^まけて喋る、その少女のことがいっぺんで好きになった。

エア・ファンタジスタ
A i r・F a n t a g i s t a

・

第二章

天へ往くため地を駆けて

・

第五話 『宴前』

1

「やったわね!!」

「そっちこそな!!」

格納庫でバーグとミーサが手を高く合わせ、打ち鳴らす。

「副長の見事な作戦！」

私は指示に従っただけ!!」

彼女は興奮して、まるで自分のことのように誇った。

「……ブリッジの様子はどうか？」

「私は、こっちに真っ直ぐ戻ってきたから……」

さらにバーグへと答えながら、ミーサは戦闘騎に視線を移す。

世羅が術で作った氷によって繋がれた三機。

それらの事後処理を考えると、勝利の味に酔いつつも、少し憂鬱になった。

「ジン!!」

そんな中、響いたのは世羅の高声。
思わず身を強張らせる二人。

「…ねえ…ちょっと…！
……あれ、ヤバくない！？」

機体から戒によって引きずり出されるジンの姿を見ながら、ミーサが呟いた。

「…おい……！
なんだ…こりゃあ…！？」

慌ててバーグが駆け寄り、血の海と化しているジンの操縦席を覗く。

「神経性の毒を…受けてしまって……意識を保つには、これしか…」
床に横たわらされながら、呻く^{うめ}ジン。
腿からのおびただしい失血のため、彼の全身は白みを帯びていた。

「自分で撃つたの！？
信じられない！！」

ミーサも包帯を手に駆け寄る。

「なんとかならねえのかよ!？」

戒に向けられる、バグの強い視線。

「耳も足も… 肉が飛んでんだ…」

この状態で傷を塞ぐと……二度と再生できなくなる。
自然に任せた方が… いいかもしれねえ…」

ぐつしよりと湿った、彼の患部に締められた血止めのリボン。
それを解きつつ、戒は言葉を濁した。

「……はい。」

…命にかかわる傷ではありませんから……止血だけしてもらえば充分でしょう。」

ミーサの応急手当を受けながら、当のジンは冷静に言う。

「……それより… 勝利の報告を……」

「そうですよ! ブリッジも皆さんの元気な姿、待ってますよ!！」

頭上から突然かけられた声に、反応する全員。

彼等を二階から見下ろしていたのは、イールの姿だった。

「…報告……か。」

バーグが呟く。

「……はい。」

天井を仰いだまま、頷くジン。

言葉は少なくとも、彼と戒の二人は察し、場を離れて階段に足をかける。

世羅だけはジンの傍を離れずにいたが、その視線は彼等に注がれていた。

「世羅さんも……どうぞ。」

ジンは微笑みながら、そんな彼女に促す。

「……うん……」

世羅は少し迷った後、立ち上がり、階段を駆け上がる。それを床から横目で追うジン。

遠ざかる世羅の姿。

彼女が戒の手をきつく握ったのが見えた。

ジンは、強く瞼を閉じる。

やがて立て始めた、彼の薄い寝息にミーサは胸を撫で下ろした。

そして換えの包帯を取りに立ち上がるところで気配を感じ、彼女は中腰のまま動きを止める。

積み上げられた弾薬の箱の隙間から現れる猫

梅の姿。

「……どうしたの？」

「……こんなところで……」

手を差し伸ばして問いかける彼女を無視し、その視線は上の階へと向けられている。

黄色い獣の瞳がギラついていた。

「 ギルチ提督。」

早い三度のノックの後、ドアを開けて神妙な面持ちで入ってくる中年士官。

短い口髭を震わせながら、彼は直立で敬礼する。

「申し上げます。」

当直の警備隊が、国境付近にて飛翔艦の姿を補足 「

中王都市南部、ブレオルン市の郊外に在るゴーベ国境警備軍本営。普段は穏やかな深夜の駐屯地も、その日に限っては違っていた。

「第三補給部隊所属、ルベランセか。」

…既に耳に入っている。」

ゆったりとした椅子に背をもたれながら手元の資料を眺め、答える若い男。

机ごしに、体を緊張させている士官へと声をかける。

「鉄都より、鋼材を運搬してきた飛翔艦だったな…」。

艦長は副指令の息子…ペツポ大佐…」

その名を口にしたところで、頬が緩んだ。

ギルチにとつては、それだけである程度のトラブルが予想され、思わず笑いがこみ上げる。

上層部による圧力的な人事であることは明白。

それゆえに、目の前で震えている人事部官が気の毒に思えてならない。

「……予定より3日ほど遅延して帰還か。」

「……申し訳ございません。」

ただ、規定では10日を越える遅延でなければ、報告の義務は無く…」

相手は腰を直角に曲げ、油汗を垂らしながら申告する。

「問題なのは、軍規の違反云々ではなく、今このタイミングで中王都市の空域を侵しているということだ。」

どうせ遅れるならば…もっと大幅に遅れて欲しかったものだな。」

ギルチは軽く笑った。

「しかも、同艦が帰還してくる方角……山の国境付近で爆発を確認したという。

嫌な予感がしないか？」

そして彼が続けるうち、聞いている側の顔は青ざめていく。

「総員、第二種戦闘配備だ。

同時に、作業班を敷地外にも展開。

…何かあった時に対処させてくれ。」

「了解……いたしました。」

短い返事と共に、たえられずに中年士官は逃げるように退室した。

「……よりによって、臨時会議の直前に厄介ごとを持ち込んでくるか……」

それを嘆息混じりに眺めた後、ギルチは複雑な顔で報告書を机上に投げ出す。

「君らしくない『目立ち方』だな……」

その書類に記された乗組員の名簿。
フィンドルの名の部分を指でなぞりながら、彼は呟いた。

「……できた……！」

腰を抜かしたままイールが呟く。
目の前には、自分が生んだ炎の塊。

「お……オレもやるぞっ……！」

ムールが手を前に突き出す。

「空に散りたる数多なる源よ……我に力を貸し給え……！」
《炎・生》ホララ・キ……！」

生まれて初めて使った術は。
本当に小さな炎だった。

それでも彼らにとつては、限りなく大きい。
二人は童心に返って喜んだ。

「……まあまあやな。」

シャロンはつられて、鼻をこすりながら得意になって言った。

「その程度の術、詠唱抜きで使うのが普通や。ま、いずれ出来るようになるやろ。」

そして、満足そうに笑う。

「コツさえ掴めば、もっと攻撃的な術も出来るようになる。あとは本とか読んで勉強せえ。地道にやれば、出世も夢やないで。あたしと違って……な。」

それだけを言うと、少女は唐突に立ち去ろうとした。

「ま、待ってください!!」

慌てて、二人が叫ぶ。

「…あんたは、オレらの師匠だ!!」

「……お礼に、子分になつて働きます!!」

「…はあ？ 現金なやつちゃ。」

まんざらでもない表情で、シャロンは足を止めて笑った。

「オレらに希望を与えてくれた……この恩を返さなきゃ……」

「男じゃねえですから!!」

振り向けば、嘘のように笑顔を取り戻した二人の姿がある。

「まず…『師匠』はやめえや。
なんか、こそばゆいわ。」

どんな絶望の中でも、やはり人の心根には笑顔がある。
少女には、それが心底嬉しかった。

「あのフィンデルって人……見事な指揮官ですねえ。
有能だし、みんなに信頼されてる。」

「……？」

何をいまさら。

三人は廊下を歩きながら、そんな表情でイールの顔を見返した。

「…お前達、ブリッジに居たのか。」

「ええ。」

急に戦闘が始まったのが恐くて……とにかく人が集まっている所
へ……」

戒の問いに、イールが怯えた様子で答える。

「まあ、いい判断だな。」

しかめ面で、バーグが嚙んだ煙草に火をつけた。

「片割れとお嬢ちゃんも、ブリッジに居るのか？」

「ええ……こちら、いつも一緒ですよ。」

イールは長い鼻をこすり、大きな口を横に広げて笑った。

細い筒の先に火種を乗せて、反対側から息を吹く。
風に扇がれた火は、みるみるうちに赤から青へと変色した。

「意外やろ？ 火つてのは、赤よりも青い方が熱いんや。」

シャロンは言った。

「普通の炎でも、タイミングよく三方から当てれば、何倍も熱く……
青い炎をつくる事が出来るはずや。」

二人はぼかんと大口を開けて、シャロンの説明を聞いている。

「まあ……難度といえば、中の上くらいやな。」

最後に、彼女は眼前の大木の幹に片手を付けた。

「オレらに……出来ますかねえ？」

「学なんてねえ……文字すら満足に書けねえオレらに……」

「頭の良さなんて関係あるかいな。」

出来るかどうかは気合や！」

シャロンの威勢に、身体をピンと張る二人。

「熱い熱い、青い炎を想像してみいや!!」

「う……」

口を尖らせながら、木に触れるイール。

「熱い……青い……炎……」

ムールもそれに倣^{なら}う。

二人は瞼を閉じ、彼女を失望させたくないことだけを思う。

むせ返るような異臭。

支えを無くし、空を切る己の手。

次の瞬間、気化している大木に我が目を疑う。

「……できるやん。」

煙を払いのけながら、シャロンが言った。

「……力を手に入れるって……こういふことなんですネ……！」

調子に乗った二人が、声を揃えて言った。

「あほ。」

その熱のこもる眼差しを、シャロンが受け流すように笑った。

「三人いれば、恐いもんは無いつてことや。」

そして、二人の肩を抱く。

「炎団『青組』の誕生や。」

彼女の言葉は　　。

いつしか、三人の口癖のようになっていた。

（恐れ…恐れなあ…）

少し前に行くバークの、背にかけられた大剣を後ろから見詰める。

（…きっと…油断なんて無いんだろうな…こういう人ってのは…）

相手が丸腰で来るのを少しでも期待していた自分が恨めしい。

彼は見た目通り、百戦錬磨の剣士だった。

（…あんなので斬られたら…きっと死ぬなあ…）

目の前の戒が、率先して重い扉を開けた。

広がる、ブリッジへと続く最後の長い廊下。

（やだなア…痛いのは…）

そう、と気取られないように歩調を緩めるイール。

（ああ…）

心配とは真逆に、三人は安心しきって彼の前に行く。
油断はしていないが、信頼されていたことをはっきりと感じた。

世羅の華奢な背中わさやを眺めながら、出発前に一緒に遊んだのを思い出す。

これからの自分の行動に、彼女は一体どんな顔をするのだろう。

前傾の姿勢。

自らの視線を覆うように両手を前に突き出す。

「あ！」

正面から小躍りしながらやって来るムールの姿を見て、世羅が声を上げた。

「やりましたねえ！」

上げられる、長い両手。

「おう。」

バグも思わず、片手を上げて勝利を示した。

やがて距離が狭まり、三人が彼の真正面まで来た時だった。

「我、右王に座せし、守護の炎。

願いはひとつ……青き戦意の名の下に力を求む。」

「我、左王に座せし、守護の炎。

願いはひとつ……青き戦意の名の下に力を求む。」

前のムール。

後ろイール。

二人が同時に発した声は、相当に奇妙な音に感じた。
普段のように、へつらうような雰囲気は微塵も無い。

「ホララ・レイズ
《炎・壁》。」

同時に重なる言葉。

一杯に広げられた彼等の長い手から発する、通路の空間を覆う赤く波打つ壁。

その二枚の壁に挟まれた、中の三人にとって。

さしずめ、そこは炎の檻の様に思えた。

次へ

2

「どうした、クウ？」

教会を目前にした路地の途中、夜空を見上げたまま固まる彼女にマクスが声をかけた。

「……いえ……何でも……ありません……。」

クウは自分の右肩を強く掴み、苦しそうに喘ぐ。

怯えた彼女。

二人が同時に何かを言いかけたところで、前方で松明^{たいまつ}の火が踊った。

近付くにつれ、それが緑華の騎士達のものだとすぐに判る。

「……戻ってきたのか？」

その中で唯一、馬上の者が声を発する。
それはシザーだった。

「ヂチャードはどうした？」

二人の顔を交互に見ながら、彼女は言い。

「泥酔しておりましたので。」

「……賢明だ。」

マクスの答えに、苦笑する。

「何か……あつたのですか？」

「国境付近が騒がしいとの報だ。

……詳しいことは分からない。

だが、先ほど軍隊側が早馬で、会議時間の繰り上げを知らせてきた。」

「繰り上げ？」

「騒ぎと関係があるのかは分からん……が、警備の範囲を広げて損はなかるう。」

丁度いい、お前達は教会の中を守れ。」

彼女の言葉に、同時に頷く二人。

「大団長も…先ほど到着なされた。
……気を抜くなよ。」

馬首を返しつつ、シザーは付け加えた。

「いったい…何の真似だ……？」

常人ならば直視できないほどの憤怒の形相でバークが睨みつける。

「……こういう…ことです。」

半透明な赤い壁の寸前で、彼に真正面から凄まれているイールは、抑揚の無い声で返した。

彼の表情は、かけている分厚いゴーグルが全てを覆い隠している。

「^{だま}騙したのか。」

今度は戒が、反対側のムールに言った。
その脇で世羅がわずかに反応する。

「……すみません。」

感情を押し殺して返される声。

両手からは、高出力の術が放たれ続けている。

「少しだけ……時間を下さい……。」

弱々しい声が、壁の中の三人の動きを止めた。

「あと少しで……きっとブリッジは降伏する……。」

お嬢に……勝利を下さい……。」

「あんた達の命は……奪わない……だから……手柄を……！！」

そして続けられる、脅迫ではない言葉。

「お嬢は……頑張ってるんです……。」

「ただ……人がいいから……ツキを逃すだけで……！！」

「……だまれ……炎団のクソ野郎……！！」

複雑な怒りと共に、腹中の言葉を吐き出すバグ。

「……ブリッジが降伏するとか言ったな……。」

その横で、確認するように戒が口を開いた。

「むりやり戦ってる…優しい人のことは良くわかる…。
…きつと…あの艦長さんは…もう心が持ちません。」

「……………!!」

イールの返した言葉の後、左手を前にして一歩出る世羅。

「……………?」

その行動に、目を見張るムール。

「や…やめっ……………!!」

叫ぶのも間に合わず、衝撃が走る。

赤い炎の壁に小さな手が触れた瞬間、黒い繊維が舞った。

「世羅ッ!!」

弾かれる彼女の身体を受け止める戒。

世羅の長い手袋は全て燃え尽きていた。
だらりと力無く下ろされる左の腕には、代わりに黒い紋様が露になる。

「……おとなしく……してて下さい!!」

ムールが叫ぶ。

彼女の黒い腕は焦げたものではなく、入れ墨の様であることを確認し、彼は胸をなで下ろした。

「……い……」

戒の胸の中で、世羅が呻く。

「……行かなきゃ……」

「……なおさら尚更な。」

バーグがそんな彼女の頭を撫でて、大剣を構えた。

「無理だ……この術は中からは絶対に破れません!!」

叫ぶイールの影が、上へ向かってわずかに揺れた。

その時、屈んだ態勢の戒は『その様子』を偶然にも瞳に入れる。

これも術の一種かと、最初は見紛う

元来、平面でしか在り得ない影が。

確かに立体的な、三角錐^{すい}を相手の足元で形成し始めていたのだ。

そして一呼吸もおかずに、その黒い錐の先端は伸び、目の前のイールの胸を背中から斜めに突き刺していた。

同時に反対側のムールにも、同様の一撃。

二人の容姿が似ているため、それは一対の鏡を合わせたような、不思議な光景だった。

炎の壁は無言で消滅し、二つの影は彼等の胸から突き抜けた直後、三人の目の前で引き寄せられる。

それは螺旋状に絡まり合い、瞬く間に凡雑な人間の形を作り上げた。

頭頂部とおぼしき部分は割れ、つるりと大きな目玉が前方に滑る。視線だけで臓腑を掴むその視線。

恐ろしい圧力を放つ、まるで悪夢に出てくるような忌まわしい姿。

その足元で、口から泡を噴きながら受身も取れずに床に倒れ伏すイールとムール。

だが不思議なことに、先の鋭い影が突き抜けたはずの彼等の背には外傷が無い。

「精神^{うが}を穿てば……人など脆^{もろ}いものだな。」

その戒の視線に答えるかのように、影が呻く。

「何者だ……!？」

人でないものに詰問するにはおかしな言葉と知りながら、バークが訊いた。

「目視できるほどの、強力な思念体とでも名乗っておくか。」

子馬鹿にするような口調に、戒は顔を歪める。

「……ルベランセ。」

手に入らぬのなら、いつそ……ここで消えてもらおう。」

影が口にした言葉が、床の世羅を再び立ち上がらせた。

天井を仰ぎながら、艦長席から滑り落ちそうになるフィンデル。

リードは咄嗟に、その肩を抱いた。

その行為に対し、シャロンは何も反応しない。

そして、彼女が向けている銃口にも何の意味があるのか、もはや誰にも解らなかった。

彼女の手下の二人がブリッジを出て、だいぶ経つ。

戦闘騎で出撃した戒達は、空中戦でかなり疲労しているはずである。

フィンドルは、心の中で不安が膨張していくのが分かった。

歪む視界。

その先で、見かねて白い槍に手をかけるザナナが見えた。

「……！」

それを手で制するフィンドル。

だが、伸ばした腕が急に落ち込んだ。

「……！？」

続けて、全員が妙な重力を感じ、そこで艦内の異常に気付く。

「……高度が……下がっているんですけど……」

他人事のように、タモンが呟いた。

「馬鹿言え！」

…源炉は……もう持ち直して……！？」

視線を移したリードが狼狽する。

座席では、メイが念通球を手にしたまま気を失っていた。

「何だ……！？」

慌てて持ち場へと戻る彼。

艦内を制御する念通板にはめている自分の念通球に触れるまでもない。

計器の針が全て『0』を指しているのである。

「……どういうことだ……」。

飛翔艦の全ての操縦系統が……初期状態に戻っているぞ……！！」

気付くや否や、白目を剥いているメイが掴んだままにしている念通球を奪って、彼女の念通接続を強制排除する。

「手で源炉を動かしてくれ！！」

……ミーサ……！！」

そして素早く声通管を取り、目一杯叫ぶ彼。

だが、それと同時に艦体は顕著^{けんちょ}に傾いた。
加えて機関室からは反応も無く、彼の顔は一気に絶望の色へと変わる。

「…堕ちるんか……この艦は…」

シャロンが大きく呟いた。

「何だ……!？」

傾いた足場に、バークが叫ぶ。

「初期に造られた飛翔艦は、念通回路の仕組みが単純でいい。
侵入も破壊も容易だ。」

目の前の影が淡々と答えた。

「炎団の連中より、なかなか合理的^{スマート}な方法だろう?」

「……!」

その言葉に、半身を突き出すバーク。

「……まさか……てめえ……か!?
裏でコソコソ系を引いてやがる……クソ野郎は……!!」

影が答える前に、剣を大きく振りかぶる彼。
それに合わせ、弧を描く戒の蹴り。

それぞれの攻撃が命中し、影は飛散した。

「……!……!?!」

だが逆に、攻撃を与えた二人の身体を襲う虚無感。

挫折。
失望。

種類の違う負の感情に満ちた、深い沼に沈むような感覚だった。

途端に自律を失い。
両手を床について這うバグと戒。

「……その氣勢だけは……誉めてやろう……俗人共……」

一方、一度は飛散したものの、影はすぐに舞い戻り、元の人型を取り戻す。

危険を肌で感じ、両手を広げて二人の前に素早く立ちはだかるのは、先ほどまで床に伏していた世羅。
その姿は、あまりにも健気であった。

「ほう………？」

しかし、影はそれとは全く別の理由で彼女の前で動きを止める。
そして大きな目玉が、その細腕を食い入るように見詰めた。

瞳の光沢に映る、黒く渦巻く紋様。
影の全身に、一瞬にして小さな目玉が増殖する。

「…これは………！」

影が退き、嬌声と共に全身を震わせる。

「…炎団はおるか………奴でさえ手を焼くはずだ………」

独り言と共に世羅を見下ろしながら、上へと伸びて廊下の天井に
へばり付く影。

それは、もはや人の形は留めていない。

「フフ…とても手に負えぬ。」

今は…回る天命の輪に…身を委ねるとするか………」

身勝手な言葉を並べ。

影はみるみるうちに天井の隙間へと溶けていき、最後に何も残さなかった。

戒が唇を噛む。

天命の輪は繋がりだした。

それを止めるのではなく。

全てを絡め、回し続けるのだ。

彼の頭に、何故か懐かしい。

そんな言葉が鳴り響いた。

「貴殿がクレイン教徒とはな。」

背後に迫った聖騎士 マクス＝オルゼリアが言った。

生けるものが、神父に罪を告白する免罪の間。

クレイン教の創始者を模した像の前に、肩膝について祈りを捧げるような姿勢のままの黒騎士。

「似合わんか？」

彼はマクスの皮肉を返し、立ち上がった。

腰から抜かれている、五つの念通球が埋め込まれた漆黒の剣。マクスはすぐに、この部屋で自分の認識とは異なることが行われていたのを察した。

「先ほど、大団長がお着きになった。」

「…予定の変更は聞いている。」

早歩きで部屋を出た黒騎士にマクスは続き、簡潔に答える。

「ミシユードハカレイ、その他の者は後ほど合流させる。」

そして、明日の会議は予定どおり、大団長と緑華の団長……私の三人で行く。」

甲冑を互いに鳴り響かせながら歩く廊下の先。

おそらくは、大団長が控えると思われる部屋の扉の前で、黒騎士は歩みを止めた。

「大団長の傍は、常に私が守る。」

貴殿は、命があるまで待機せよ。」

「了解した。」

マクスも歩みを止め、踵を返す。

「……貴殿の逃した魚は、存外大きかったぞ。」

その背にかけられる、仮面の隙間から漏れ出す声。

「……！！」

銀髪が揺れる。

ただの一言で、マクスはその意味を知ることとなった。

乱暴に開かれる扉。

「……くそが……！」

目的地を……目の前にして……！！」

大きく傾斜した艦内。

混乱状態のブリッジに入るなり、戒が前方へ駆ける。

「……傑作やな。」

「……ここまでやって……何にもならへん。」

その姿を見た直後。

ゆっくりと銃を下ろすシャロン。

「何か……暗闇で目立つ物を……!!」

フィンドルが叫ぶ。

「そうか!!」

……こっちの存在を……駐留軍が気付いてくれれば……着陸地点を……
きつと誘導してくれる!!」

すぐに応えるリード。

「いや……無理だ……!」

この暗闇……生半可な合図じゃ、向こうが気付いてくれる前に地上に激突するぞ……!!

そんな大きな合図を出すもの……すぐに用意できるものか……!
!」

だが直後、頭を叩いて自分自身を怒鳴りつける。

「なんや……ほんなら、簡単やん。」

彼の言葉を脇で聞いていたシャロンが言った。

「でっかい炎でも、ええやろ?」

「……………!!」

顔を上げるフィンデル。

「なんつー顔しとんねん。

あたしかて、死ぬのは嫌や。」

前に進み、前面のガラスに身を乗り出していた戒とすれ違つ彼女。

「邪魔や。

これ、全部こわしてええか？」

ザナナが無言で槍を振った。

先の戦闘で大きくひびの入ったガラスは、全面砕け散る。

「さて………どない詠唱にしようか。」

ブリッジ前部の出っ張りに飛び乗り、そこに胡坐あぐらをかいて、膝に手を乗せて夜空を見上げる彼女。

気分の盛り上げは大事だった。

普段使い慣れている言葉は瞬発と安定性があるが、威力に欠ける。

シャロンは一瞬振り向き、フィンデルの姿を見た。

「………中天に瞬く千の星よ。」

ここに、勇気ある者あり。」

周りに発生した黄色い粒子が赤く染まっていく。

「この命の流れのわずかな時に、ささやかな残照を求む……」

ブリッジの全員が息を呑む中、徐々に下への角度がきつくなる艦首。

座るシャロンの、落ちかけた身体を四本の腕が揃って後ろから支えた。

「……遅い！」

前を向いたままの、彼女の叱咤。

「……へい！」

「すみません!!」

イールとムールが、生気の無い顔で笑って応えた。

気絶していた二人を連れて来たバークが、その背後で剣を鞘に納める。

仲むつまじい彼等の姿を見ると、何故だが、止めようなどとは思えなかった。

「陽を模する我の業をどうか許したまえ…。」

終わる詠唱。

両手に、凝縮した炎の塊が浮かび上がる。

「…!!」

意を決して、青い布を出すシャロン。

「お嬢……!!」

息を飲む、イールとムール。

これから放たれるであろう、源法術を保つには、何らかの媒体が必要だった。

シャロンが一枚の青い布切れを広げる。

「上がその気なら、逆に炎団をこの色で染めたるわ。それで見返したるって……どうや。」

「そりゃあ、いい考えです、お嬢!!」

二人は声を揃えて言った。

「おまえら……ほんまに協力してくれるんか？」

「いまさら何をおっしゃっているんです、お嬢？」

「……前にも言ったやろ？」

あたしは、個人的な理由で炎団にいる。

兄貴に力を認めてもらったら、それでええ。

それから先はわからへんのや。」

「たまに不安になるんですかい？」

「アホ抜かせ……おまえらが不安になるかもしれんから……先に断つとんねん……」

シャロンは、既に二人には素性を明かしていた。

それを承知で、それに付き合うと言った彼等。

「それじゃあ、お嬢の目的が達成したら……そこで青組を独立させま
せんか？」

指を立て、歯を出して笑う。

「そしたら、二代目ジルルメツシュー一家の誕生です。」

「だ、ダメや！」

それは兄貴が目指すもんやから……」

「じゃあ、新・ジルルメツシュー一家ということで。」

「……ん。
……ええな、それ。」

彼等の夢みたいないな提案に、少し考えた後で彼女は頷く。

いつの日か、それが叶うまで。

三人はその青い布を手放さないと心に決めていた

「……行くで……!!」

息を吸い込む、シャロン。

「馬鹿野郎。」

そんな布切れじゃ…景気よく燃えねえだろうが。」

脇から、戒の低い声。

それと共に、目の前に布の束が差し出される。

「……お前……そんなのどこから……」

背後でバークが呟いた。

「　　うわあっ！！」

思わず、声と片足を上げるリード。

足元で転がっているペツポが、いつの間にか身包みを剥がされて裸になっているのである。

「普通……自分のを使うだろ！！」

それを見たバーグは、笑いながら叫んだ。

「俺様のは一張羅なんだよ！！」

同じく、笑顔で返す戒。

そんな光景に、シャロンは青い布で自分の涙を拭いて、それを胸元にしまう。

「……《炎・陣》。
ホフラ・ラビストリ」

両手から盛大に燃え盛る炎。

それは戒の手から離れた服に燃え移り、四散してブリッジ前部全面を覆う。

「……さすが……オレらのお嬢だ……格が違らあ……」
「……ああ……」

窓の全体はガラスの代わりに炎で覆われ、それでいて火の粉はブリッジ内には僅かばかりも入らずに、ギリギリの箇所で固定されて揺らめく。

その術の見事さに、イールとムールは胸を奮わせた。

やがて数秒後。

ひとつの小さな明かりが眼下に灯り。とも

また一つ。

また一つと増えていく。

それは、戦闘騎の滑走路場に並べられる光の列。
松明を持った、兵士達による誘導であった。

その誘導の先に照らされた場所は、遮蔽物の無い草原。
進む方向は、偶然にも合っている。

指を鳴らすシャロン。

巨大な炎の膜は赤い粒子となって、一瞬で消えた。

改めて開かれた視界に姿勢を直し、舵を強く握るタモン。

傾き、制御さえ失った艦体。

さらに、地面をブレーキ代わりにして艦体を止めなければなら
ない。

責任ある操縦に思わず、手が汗ばむ。

微調整のカーブに、皆が上体を揺らした。

ザナナとバーグは、各々の得物を床に差し込んで身体を踏ん張り、
空いた手でメイと世羅をそれぞれ抱えた。

戒とフィンドルは猛速度の中、目を開いて状況を逃すことなく見
詰めている。

青服の三人は心配することを諦めたように、まだブリッジの先頭
で一緒に座っていた。

「……保安念通士……失格だな……」

二回も連続で……艦を不時着させるなんて……」

リードの苦笑と共に、ルベランセは大地を難^ないだ。

地上から投げられる、対艦アンカー！

あまりに強引な不時着の衝撃で、皆、宙を何回転したか分からな
い。

気付けば、土砂や石が自分の周囲に入ってきていた。

そして遠くから聴こえる怒声。
叫び。

色々なもの。

機械やガラスの破片が飛び散った床。
そして、そこで横たわる仲間達を無機質に乗り越え。

戒は半身を外気にさらす。

彼が、ある時からずっと思い描いていたもの。
それがそこにあった。

見える範囲、全てが街並み。
星空と対称に輝き続ける、その国の明かり。

それは、この世を虫のように彷徨^{さまよ}う人間達を、全て飲み干してしま
いそんな魔天のように思えた。

戒は、自分の知らない空気を目一杯に吸い込んだ。

「……何があつた？
…事故か？」

サーベルを腰にかけた、白い髭をたくわえた初老の兵士が訊いた。
フィンドルの手は引かれ、艦長席の下に沈んでいた身体が上がる。
彼女は無言で頷いた。

目に飛び込んでくる、中王都市軍の制服達。
スコップやツルハシ片手の、小部隊。

その喧騒の中、シャロン達三人が窓際で蠢く。

部隊長とおぼしき初老の男は気付き、彼等の動向を注視した。

「…怪我人が格納庫にもいる。」

そこでフィンドルの後ろから現れた戒が、親指で後ろを示す。

顔を向き直す軍人。

その隙に、窓があつた場所から地に身を投げるイールとムール。

「わかった。」

すぐに救護班をまわそう。」

「……感謝します。」

言いながら、フィンドルもそれを黙って見届けた。

初老の男が直接指揮を執るため一旦その場を離れると、一人残ったシャロンが、距離を保って戒と対峙する。

「……おまえ……勘違いしてるで。」

森で協力したったんは、ルベランセに取り入るためや。」

その辛辣な言葉にも、彼は無言で見詰め返していた。

やがて我慢出来なくなり、耳を赤く染めて下へと飛び降りる彼女。

地平線の向こうから本物の陽が昇り始める、中王都市。

照らされた三人の影は、素早く。
寄り添ったまま走り続けていた。

次へ

「ちよつといいかしら。

……バーグ？」

まだ呼び捨てすることに慣れていないのか、たどたどしい口調でフィンデルが訊いた。

乗組員の殆どが、疲れから眠りに沈んでいる正午。

その中で誰よりも早く目が覚めてしまったバーグは、何気なく格納庫をうろついていると、そんな彼女に上から手招きをされる。

「…なんだい、副長？」

すぐに応じ、階段を昇っていく彼。

「…まるで……今回の戦いを象徴しているみたいね。」

何かを言いかけたフィンデル。
そこで下に目にする戦闘騎の様子に、言葉を変えた。

三機を一つの塊として接合している氷は、溶けずにその形を留めている。

彼女が何気なく口にした言葉。
それが本題でないことを察しながら、バーグは近寄った。

「戒くん、世羅ちゃん、ジンさん……そして、バーグにミーサ……それとブリッジのみんな……」

やつれた表情で、目を細める彼女。

「誰か一人欠けても、現在は成しえなかった……。
そう思えるわ。」

「……近くに宿舎があるつてのに、みんなボロボロのこの場所で寝てる。」

そいつあ、この艦が好きだからじゃねえのか？」

バーグが自分の腰に両の拳を当てて、続けた。

「……だからまあ……堅苦しいこと抜きにしようや。」

そう言っつて、満面の笑顔を作る彼に、フィンデルも笑って応えた。

「用件は何だい？」

バーグが切り出す。

そこで、ようやく気付く彼女。

「実は…今、こういう話をするのも悪いんだけど…」

「堅苦しいこと、抜きって言ったろ。」

苦笑する彼。

フィンドルは頷いた。

「リジャンの財産のことで相談があるの。」

「財産？」

バーグは素っ頓狂な声を上げた。

これは予想しない話である。

しかし戸惑ううちに、札束の入った封筒を目の前に差し出される。

「さっき、彼の部屋を少し片付けていたんだけど……けっこうお金を貯めていたみたいで…」。

彼、身元を引き受ける人間がないから、財産は軍隊に没収され

てしまおうわ。

だから……」

黙って聞き入るバーグに、フィンドルが伏せ目がちに口を開く。

「友人の貴方が受け継いでくれれば一番と思って。」

「……いいのかい？」

酒に消えるかもしれんぜ。」

両手を広げておどける彼。

フィンドルは何も言わず、その右手に封筒を握らせる。

「……どうでもいいが……あんた、少し休んだ方がいいんじゃないか？」

一転、彼は真面目な顔で言った。

おそらく一睡もせずに、今まで作業をしていたに違いない。

体温の低くなった手を彼から離し、頷いて背を向けるフィンドル。

「しかし……軍人らしいのか、軍人らしくねえのか……わからん人だな。」

バーグは手すりに肘をかけて笑い、ふらつきながら歩いていく彼女の様子を見送った。

振り向けば。

大きく開け放たれた扉から見える軍の駐屯地、広い停留場。

そこから見える振動の無い世界は、疑わしいくらいに長閑のどかだった。

中王騎士団側に三名。

中王都市軍側も同じく三名。

長いテーブルを挟み、互いに沈黙が続いていた。

スタンドグラスから差し込む光。

そしてその両脇高くに置かれた、背から羽根を生やした美形の彫像。

彼等は、頭上からそんな人間模様を見守っている。

進行すらままならない会議において、初めに行動を起こしたのは、中王都市軍・副司令官グツソ中將であった。

儀礼用の軍服に身を包む彼は、顎髭に拳を付けたまま、あからさまな『咳』をして大柄な体を揺らす。

「随分と遅いではないか！

王室側は……！！」

脇でその様子を見た子男が、慌てて甲高い声で鳴いた。

その声は全員が耳に入れたはずだが、この議場で応える者は誰も居ない。

「摂政ゼン、ここに。」

それ故、予期しない所から返されたタイミングの良い返事にハツとする一同。

ステンドグラスの真下の緞帳でんちやうから、白い手が覗き、重い幕が上がる。

不意にその中から現れる、櫛かじの木の車椅子。

そこには、斜めに首を折ったまま口を半開きになっている、身なりの良い若い男性が乗せられていた。

「陛下……ご機嫌うるわしゅう……！」

その患者に向かって立ち上がり、うやうやしく礼をする軍隊側の三名。

それになぞった形で騎士団側も立ち上がり、胸に手を当てて、揃って一礼をした。

「そなたらの忠節を、陛下も嬉しく思っておられる。」

その車椅子を押す、白髪の瘦躯。

摂政のゼンは、堂々とした笑みを浮かべて言った。

深紫の法衣に身を包み、誰にもまして丁寧な物腰。

彼は部屋の空気を隙無く眺めた後、テーブルの片方に視線を移した。

中王都市軍、中核を担う存在のグッソ〃ハル〃ガーランド中将。
その腰巾着と目されるサネトロ〃シズン少将。
若手指揮官達の台頭、ギルチ〃スウェーイン大佐。

次に首を動かす方向は、反対側。

中王騎士団最高権力者、大団長ザイク〃ガイメイヤ。
その軍師と目される、黒の皮鎧に全身を包んだ騎士。
そして、五つの小団長の紅一点、シザー〃クエルトフ。

ゼンは満足げに頷くと、六名は同時に座った。

「…本日は、臨時の提案にも関わらずお集まりいただき、有難うございました。」

早速、会議を始めたいのですが……」

ギルチは、先んじて問いかけた。

ゼンの右目にかけられた、透明のガラス。
そこに描かれた時計の針の絵。

それは、『今日は』六時の場所を指している。

ギルチは、冷静に観察できていると自分で思った。
初めは奇抜に思えた容姿も、幾分慣れた証拠だろう。

アルドの叛乱後期。

10代半ばで従軍医師として官軍に参加。

その後、経済学者へと転身し、王室政府に重用される。

執政の最高官であるリエディン＝フィラサンスカ五世が病となつた後、摂政として抜擢。
今に至る。

それがギルチが調べ上げた、彼の全てであつた。
容姿も異例であるが、遍歴も同様である。

「よろしくお願い致します。」

返される、若々しく人懐っこい笑顔。
陛下の車椅子から手を離さずに、ゼンは言う。

「あらかじめお伝えしております通り。
この度は、中王騎士団の軍備における国家費用の削減について…
具体的な案を持って参りました。」

立ち上がり、書類を片手に述べるギルチ。
それを、脇の二人は暇そうに下から眺めた。

「現在各地に展開中の　　赤華、黄華、蒼華、白華、緑華の五小
団。」

この中のたった一団さえ、遠征を取り止めていただければ当面の
目標を達成できるかと。」

「ご冗談を。」

中王都市の威光を弱めると仰るのか。」

声を発する、正面のシザー。

座ったままだが、相変わらず凜^{りん}とした声質だと、ギルチは感じた。

ちら、と中將が自分を見上げるのが判る。

「……問題無いかと存じます。」

元々、他国の紛争鎮圧の為に中王都市の財を使つということ自体
が、悪習なのですから。」

「……それは、愚弄ですか？」

ガイメイヤが静かに反応した。

「中王騎士団特有の、特異なる騎士道とやらを汚すつもりは……一
片ありません。」

老練で強い眼力を退けつつ、ギルチは続ける。

「ただ、現在優先すべきは国土防衛だということ。

軍事組織が統一されていない我が国にとって、経済のバランスを柔軟に変移させることは宿命でもあります。」

「貴殿の考えは、アルドの叛乱以来、50年以上も続けてきた大陸の頂点から降りることと同意義であるぞ。」

「叛乱は既に過去のもの。」

この15年あまりの平和の訪れに乗じて、周囲の国々は戦いを求めて始めておる。」

そこでグッソが、腕を組んだまま切り出した。

「近隣諸国は次々と戦闘用の飛翔艦を製造、その人員も着々と各地から呼び集め……。」

その中でも特に隣国、帝都ヴァルトハウゼンの動きは不穏だ。

このままでは、いかに我々が列強七国の筆頭としても足元をすくわれかねん。」

「大体だな……！」

続いた、急なサネト口の高声が全員の耳を突く。

「即、国力に繋がる完全源炉の製造は、騎士団の管轄であつたはず

…。

国内にある三箇所の精製場から、今季になって一基も上がっていない理由を聞かせていただこうか！！」

「……………！」

片眉を上げるガイメイヤ。

この会議における、軍隊側の真の狙いを理解する。

「完全源炉の精製には…非常に時間がかかるもの。

……………ご理解いただきたい。」

代わりに答えたのは、シザーだった。

「説明が不足であるぞ！！！」

頭から怒鳴りつけるサネト口。

「…ふむ、^{いかが}如何か。」

そこで、ゼンが優しい声で双方に声をかける。

「国土防衛は、理にかなっております。」

軍隊側を見て。

「それに比べれば、今、他国への出兵は優先すべきではない。だがこれは、情勢さえ変われば、また元に戻せば良いことではありませぬか？」

次に、騎士団側。

「急に派兵を止めれば、各国にいらぬ疑いをかけられますぞ。」

ガイメイヤは、低い声を洩らした。

「ご心配あらせられるな。」

中王都市は、文字通り大陸の中心にある。列強との外交さえ疎かおろそかにならねば、他国の目など気にする必要は無い。」

グツソは言い放った。

それがとどめとなり、静まり返る室内。

「……承知いたしました。」

現在派遣中の一団を選別の後、呼び戻すよう善処いたします。」

そこで、黒騎士が初めて発言する。

完全源炉の情報が洩れ、それを盾に取られては交渉の余地は無かった。

初めから、あらゆる選択肢は塞がれていたのである。

年齢のためか、屈辱のためか。

腕をにわかに震わせながら、ガイメイヤは無言で席を立ち、場を後にした。

「穏便にまとまって良かった。

陛下も、たいそうお喜びになる。」

それを追いながら、ゼンは唇を結んで笑ってみせた。

茶番に自然と目を背け、シザーと黒騎士も大団長に続く。

（やけに……あっさりとしているものだ……）

そんな様子を眺めながら、騎士団側の反抗を看破するために用意していた書類をギルチが畳む。

長々と優越に浸ることもなく、グッソとサネトロも軽く礼をして、さっさと退室した。

「摂政様。」

やがてギルチも立ち上がり、深く礼をする。

「……いかがされた、提督。」

その態度に何かを感じた、ゼンが問う。

「この度、会議の時間を繰り上げたことは、まことに失礼を」

「謝罪には及びませぬ。」

摂政は、目をさらに『線』のように変えて笑って見せた。

「昨夜は国境付近が騒がしく、その用心で予定時刻を変更した……と聞き及んでおります。」

そして、手の平を広げて左胸に付ける彼。

「それについては…取るに足らない……我が軍の飛翔艦が一隻、帰還しただけでありました。」

「別に、怪しみませぬよ。
そう先手を打たずとも。」

「!?!」

身体を硬直させるギルチ。

「中王都市軍、きつての若提督に国境を任せているのです。
何の心配がありませんようか。」

白鳩の羽根のように軽い。
透き通るような彼の佞言ねいげんは、どこか不快で恐ろしかった。

「…その用心深さは、国の宝になる。」

「お褒めいただき、恐悦至極……」

摂政からわざと目を逸らすために再び頭を下げるギルチ。
自然と湧く、得体の知れない汗。

途切れた集中と精神。

それが不意に視線を感じとり、脇へ目を向ける。
薄く開けられた扉。

その隙間に見えるのは、先の黒騎士。
彼はギルチの視線に気付くと、マントを翻ひるがえして去った。

改めて前を向けば。

目の前にいたはずのゼンと陛下も、いつの間にか姿を消していた。

「傑作よの。」

ガイメイヤの奴、何も言い返せなかったわ。」

聖堂の大理石の廊下を、靴を大きく鳴らして進む。

「加えて無礼でもありますな。」

重大な会議の共に、女と得体の知れぬ不気味な騎士とは。」

グツソの後ろにぴたりと付きながら、言葉を並べるサネトロ。

「騎士団もロクな人材がおらんと見える。」

……ところで、今宵の予定であるが……」

「ぜひとも参上させていただきます。」

聞けば、ご子息様が御帰還なされたとか。」

サネトロは早口で言った。

「ペツポのやつめ。」

鉄都までの遠路を見事、任務を遂行させて帰りおったわ。

一回りも二回りも成長したあやつに、これから会うのが楽しみだわい。」

こらえきれない大笑いを噛みしめるグツソ。

「将来がまことに楽しみでございますな。」

「しれたこと。」

我が一族が代々、軍の要職につけば、国家は1000年の安泰ぞ。

「

「全くでございます。」

ところで……その帰還祝いの幹事は……」

卑しい期待の笑みに加え、グツソの前へ回り込み、揉み手で迎えるサネトロ。

「ギルチに任せておる。」

……手配は完璧だな？」

「は。」

後ろから追いついたギルチは、短く答えた。

「ギルチ提督ならば、安心ですな。」

さぞかし、盛大なパーティになることでしょう……」

「どうした？」

恍惚の表情を浮かべるサネトロとは対照的な、固い表情のままのギルチにグツソは声をかける。

「この度、露骨な圧力をかけられた騎士団の、次の出方を案じてお

ります。」

「そのようなことに気に病むでない。
戦争においても、飲み水さえ止めてやればいずれ、相手は抵抗も
できずに死に至る。

最低限の労力で、最大限の効果……これぞ策というものよ。」

そう言い放つ、軍の副大将の顔には一片の曇りも無い。

それがギルチを余計に不安にさせるのを、彼は知らなかった。

「さよう！」

水が飲めなければ、いずれ汗も涙も枯れ果てよう。」

続くサネトロの言葉。

（……汗？

涙が…枯れるだど？）

ギルチは其中で拳を握り、足を止めた。

（生きている限り、血は枯れぬではないか。）

心に渦巻く焦燥。

（……この程度を策と称す、軟弱な集団に…奴等の血を飲み干すこ
とが果たしてできるか？）

前に行く二人が言葉を踊らせながら扉を開け、陽気な様子で教会の門をくぐるのを冷めた目で見詰める。

（…そろそろ…本格的に動かねばならぬ時が来たのかもしれない…。

）
ギルチの決意は、教会に漂う沈静の香でも鎮めることは出来なかった。

「…いま何時だ……？」

呻きにも似た声。

戒が、寝惚けきつた表情で階段を降りてくる。

「ちょうど3時だけど。」

問われたミーサはバケツを片手に答えた。

途端に、血相を変えて階段の半ばから飛び、格納庫に着地する戒。

「何やってんだ！
起こせよ、バカ！！」

「バ……？」

暴言に言葉を失う彼女。

「まったく…随分な物言いだな！

ブリッジで勝手に氣イ失って寝てたくせに……」

そこでバーグが世羅を連れ、外から大声でやって来る。

「しかも艦内全体に響き渡るくらいのイビキでよー！！」

彼の言うことが本当なのか。

確証は無いが、氣が付けば自分は瓦礫のブリッジで大の字だった。

しかし、別に恥ずかしくも何ともないので、戒は何も言い返さない。

「……それより今よ、近くで祭がやってるんだよ。

さ、これから行こうぜ！！」

「……はあ？」

バーグの唐突な号令に、いち早く間抜けな声で反応したのはミイサだった。

「中王都市、到着記念だ。

打ち上げつてことで、皆で楽しもうぜ。

……金はある。」

胸ポケットから札束を取り出して示す彼。

「どうしたのよ、それ。

いつも金欠のあんたが。」

「……天から降ってきた。」

その不可解な答えに、ミーサがさらに不思議そうな顔をする。

「バカ言うんじゃない。」

そこで、戒が冷めた調子で言う。

「俺様に、そんな暇な時間があると思ってるのか。」

「夕方まではな。」

バーグは答え、紙幣とは別の紙を取り出して戒の胸に押し付ける。

それは列車のチケットだった。

「……何のマネだ？」

「この辺りは俺の地元だぜ。」

彼は誇らしげに言った。

「神学校の大学部があるのは、ここから北へ二駅のデイベイディオ市。

だが、そっち方面の列車は夕方まで無え。

……まさか、徒歩や馬車で行こうとしてたわけじゃないよな？」

バーグの言いように、今度は戒が言葉を失う。

よもや中王都市がこんなにも巨大だったとは、思いもしなかった。大学への道のりさえ、考えの外にあったのだ。

「それに急がなくても、学校は逃げやしねえよ……」

バーグは不気味な微笑を浮かべながら、戒の顔面に近付いた。

「貴重だつて解るけどな……おまえの時間……あと少しだけ世羅にくれてやれよ。」

そして彼の首に太い腕を絡めて、耳打ちする。

「余計なことを……!!」

両手を後ろに回して、ただ突っ立って自分を眺めている世羅に目を配りつつ、戒が小声で喚く。

二人は、ついさっきまで共に行動していたように見えた。バーグが彼女にも余計なことを吹き込んでいるのではないかと、彼は心中穏やかではない。

「ね、行こうよ？」

そんな戒の気も知らずに、世羅は無邪気に笑う。リボンを失って解けた長い髪以外、いつもの彼女だった。

激しい戦闘で焼けた手袋も、今では予備の物をしっかりと装着している。

「？」

じろじろと眺める自分の視線を、透き通ったエメラルドグリーン
の瞳で見上げる彼女。

そして、バーグの言葉。

これが最後だという刻の事実^{とき}に。

戒は結局、背中を押されてしまった。

風通りの良くなったブリッジの窓際。

その付近で、リードは床に散乱した書類をまとめ、その紙面に付いたガラスの破片を丁寧に払う。

「参ったな……これは元の状態に戻すのに、十日はかかるぞ……」

「まあ、のんびりやるっすよ……」

その落ちた破片を丁寧に集めて、袋に詰めるタモン。

彼の呑気な言葉に、リードは溜め息をつきながら艦長席に座る。そして、シートの隙間に挟みこまれた数枚の紙に気付いた。

フィンデルの筆跡で、沢山の数字と文字が書かれている。時には絵も交え、紙上での緻密な作戦がうかがえた。

彼は書類を無感情に指でめくり続ける。

後から思えば。

昨晩の戦いのほとんどは、彼女の頭中の作戦通り。

初めから相手の全滅を目論んでいた。

その証拠と現実を、直視するのは少し辛い。

フィンデルは急場の指揮官として、当然の行動をとっていた。

その時、自分は仲間であるにも関わらず、彼女に対し一種の恐れを抱いたのは事実であるし、弁解のしようも無い。

どんなに畏怖の感情を思わないよう努めても、それが出来ない自分がいいた。

だが、普段穏やかな彼女が当時、どのような気持ちで残酷な作戦を立てていたのか。

その過程を見た途端、何も役に立てなかった自分が非常に情けなく思えてくる。

彼女にとって自分は、あまりにも不甲斐無く、頼り無い存在なのだ。

「……！」

背にした扉から、当のフィンデル本人が入ってくる。

思わず、体を強張らせて、その書類をシートの隙間奥に押し込むリード。

「……寝過ごしたわ……！！」

慌てながら寝癖を直し、服装もままならない様子で飛び込んでくる彼女。

その姿は完璧な人間とは程遠く、リードはどこか安心した。

「…メイは!？」

「まだ、サイア商会の息子さんと軍部の医務室に。」

フィンドルからの問いに、タモンが答えた。

「じゃあ、そろそろ二人も宿舎で休んで頂戴……」

ブリッジの中央で見回し、何かを探しているフィンドル。

「副艦長どのが、軍部への報告を終えてからな。」

リードは彼女の背から、あらかじめまとめていた報告書を手渡す。

「ありがとう。」

今回の任務…色々あったけど、皆には被害が及ばないように、私で食い止めるから安心して。」

優しい笑顔で、フィンドルは早口で言った。

表情も控えめで、完全に普段の彼女に戻っていた。

「…死なばもろとも…って命令。」

けっこつ悪くないと思ったんだぜ?」

リードは現金な自分を感じつつ、彼女の肩に触れた。

「い、今さら、気にするなっことさ……」

野次馬的にその様子を凝視するタモンが視界に入り、慌てて言い直す。

「……私は、いい部下を持ったわ。」

フィンドルは書類を少し上げて、和やかにブリッジを去った。

色々な言葉を頭の中に並べ。

口を開け閉めしながら、リードがそれを見送る。

「自分…邪魔だったすかねえ？」

舌を出すタモン。

「うるさい。」

それに対して、彼は真っ赤になって返すのだった。

至るところを街路樹に挟まれた郊外。

通りには所狭しと屋台が並び、商人達が勝手に食べ物や玩具を売

る。

民衆も、家族や友と共に場所を選ばず、適当な沿道に座り込み。各々がマイペースに祭の雰囲気を楽しんでいた。

自然体で気取らない。

毎年同じように楽しんでいる彼等の姿が想像できる。

「いい祭だろ？」

食べて、飲んで、楽しむ。

それだけだ。」

バーグの言葉が、陽気な笛の音と混ざった。

中王都市の南部の民は、農耕を主にして暮らす。

暮らしも派手で無い。

この祭で互いの労をねぎらうと言う方が格好良いのだろうが、単に鬱憤を晴らしているというのが事実だろう。

「…普段の辛い日々を忘れようってなあ…」

「おいしい!!」

感慨にふけるバーグの目を覚ます、世羅の大声。

彼女が持っているのは、小麦粉を蒸して、表面を焦がした手の平大の砂糖菓子。

噛むと、中に入った熱々のカスタードクリームが溶けるようにして口の中に広がる。

世羅は今食している物がまるで、この世の物ではないかのように目を輝かせて夢中で頬ばっていた。

「……………甘い…」

満面の笑顔の彼女に対して、戒はそれを片手に渋い顔。

「郷に入りは郷に従え……………か。
子供達は柔軟だな……………」

片手に抱えた小壺に詰められたイカの足の酢漬け。
そこから出した一本をかじりながら、バーグが苦笑した。

「私……………こういう場所は苦手なんだけど。」

彼の背中で、ミーサが呟いた。
同時に人ごみに肩を押され、心底嫌そうな顔をする。

「無理矢理つき合わせて悪かったよ。」

バーグは素直に謝った。

「……………」

こうなると、ミーサは何も返せない。
理由や状況はどうであれ、彼から誘われるのは今まで無かったこと。

嬉しくないと言え、嘘になる。

そこで前に行く戒と世羅の間に、人波が割り込んだ。
にわかに二人との距離が離れる。

「ね、これって……おせっかいじゃないの？」

「ん？」

その隙を見て、ミーサが言った。
バーグは呆けた顔で訊き返す。

「私の目から見ても、あの二人の関係って何でもないと思うんだけど。」

「そう思うか？」

前の二人を、楽しそうに見詰めるバーグ。
傍にしながら、今日は全く触れ合わない二人の手が見えた。

「まだまだ子供ですな、ミーサくん。」

「何それ。」

彼に小馬鹿にされ、そっぽを向くミーサ。

不意に笛の音が止まる。

「……あ……」

そして思わず洩れ出す、民衆の声。

見上げる青空に、火花が大輪をさかせている。

大きな音が、空気を震わせた。

二人は楽しんでいるように見える。

胸ポケットに大事にしまった例の大金の重さを感じながら、自分の行動が間違っていないことを願う。

残された財産は、飛翔艦を買うにはまるで足りないが、その可能性を思わせる額だった。

友は、本気で再び自分の飛翔艦を持とうとしていたのではないか。勝手な解釈だが、そんな感慨が心を支配する。

それ故、この財産は受け取ったものの、どうも自分の物にしようという気にはなれない。

明日は銀行にでも行つて専用の口座を作り、この金をブチこまなければ、どうも気が気でなかった。

空に上がり続ける、真昼の花火はどこか物悲しく。

こんなめでたい場で死者に思いをさせさせたのは、そのせいかもしれないと、顔を上げたままバーグは思った。

とても薄くて、はかない光。
その中で。

バーグは一步後退する世羅の姿を見た。

「……………!？」

そして、戒が目を離れた隙だった。

世羅は突然に横へと飛び出し、押し寄せる人波に紛れた。

三人は暫く呆然としていたが、まずバーグが人を割って追う。
ミーサもそれに倣^{なら}うように踏み出た。

しかし、まるで追う気の無い戒を見詰めて止まる。

「……………なんだかねえ……!」

白けてしまったように眩き、彼女は人の中にゆっくりと潜っていた。

（やれやれ……。

何が…時間をくれてやれ……だ。）

一人とり残された戒は、両手をポケットに深く突っ込んで、彼等とは逆の方角へと体を向けた。

古い博物館の入り口付近では、本の出店が中心に並んでいた。適当に布を広げ、その上に重ねられた本や巻物。

そしてそれを求める客の多さに、戒は驚いた。

果物や野菜の出店は見たことがあったが、このような光景は今まで見たことが無い。

大陸中央圏の文化の高さを改めて突きつけられる思いがした。

ロープを目深にかぶった子供が大量の本を抱えて目の前を横切る。

「あ…！…すみません…」

戒の膝に、自分の肩がかすめたことに気付き、謝る子供。

「……………」

だが、そんな些細なことは、今の戒にはまるで眼中に無い。

子供は怪訝な顔でそんな彼を眺めつつ、そのまま素通りした。

「何をお探しで？
修道士さま。」

自分を見下ろしている、長い影に気付き。
老いた商人が、首を上げる。

「……………どうして判った？」

戒が若干の驚きを見せて返した。

「……………それ、レティーン of 修道着でしょ。」

若者の妙な反応に、肩を揺らして笑う。

「わかりませあ。
あつしは、この祭にや毎年来てんだ。」

戒が近寄ると、彼はそれになぞり、頭を上へ向けて反らした。

「この時期は、いつも大陸中の学生さんが来てくれる。
おまけに、今日は天気もいいさね。」

諸手を空に突き出して、上げる。
大袈裟な動作に、戒が思わず苦笑した。

「で、何をお探しで？」

「……エア・ファンタジスタ 天命人に関する本はあるか？」

冗談交じりに、戒は言ってみた。

「悪いねえ。」

さっき売れちゃった。」

しかし、またも意外な返事。

「さっきの子供……だったかな？」

つい、さっきまで……あつただけど……」

ぶつぶつ呟きながら、背にある本の束を物色する彼。

「おい……別に探さなくていいぜ。」

元々、買う気など微塵も無い戒は、その動きを止めようと手を伸

ばす。

その時、本を縛る赤い帯が目が付いた。

「……これは？」

「？」

手にする、その太い帯。

「ああ、そりゃあ、売るほどのもんじゃ……」

「じゃあタダでくれよ。」

はつきりと物を言う青年に対し、老商人は満面の笑みを浮かべる。

「そっちは、本の煤すすだらけ。
新しいの、切ってあげますよ。」

そして彼は、ロール状にまとまった赤い帯を取り出した。

次へ

このプレオルン市の駐屯地は何度も使っているものの、その中の司令部まで入るのは初めての経験だった。

複雑に作られた通路を二度、三度と迷い、ようやく行き着いた先に、ようやく執務室が見える。

「久し振りだな…フィンデル。」

守衛の指示で入室した直後、飛び込んでくる知り得た顔と声。

「ギルチ!!」

フィンデルはドアノブを持ったまま叫んだ。

「いえ…ギルチ提督。」

だが、慌てて言い直す。

「ずいぶん他人行儀なんだな…。
旧友に対して。」

机上で、ゆつくりと手を組み合わせる彼。

「この南部の国境警備を任されているのは、私だということ…噂く
らい聞かないか？」

一応、最年少の新記録レコードなんだが。」

「上官の配置なんて興味無いもの。」

彼女の言いように、彼は思わず笑った。

「少しは興味を持ってくれないか。
あとわずかの任期を無事に終えれば、私には准将の地位が待つて
いるんだ。」

「……！！」

まさか…今回の件で……」

「気に病むことは無い。

この程度では、私が今まで築いてきたものは揺らがないさ。」

そう言って、襟を直す彼。

フィンデルには記憶の中の彼よりも、今の彼は少し太ったように
見えた。

「先ほど、報告を読ませてもらったよ。
…内容は非常に興味深い。」

「……………」

懐かしい気分もほどほどに、旧友の口から出される、事務的な言葉。

それに反応できない自分がいる。

「私からの沙汰としては、君に対して『申し訳ない返事』と『嬉しい返事』と『厳しい返事』を用意した。
何から聞きたい？」

「……………順番に。」

彼女の淡々とした口調に、微笑を洩らす彼。

「では、まずは『申し訳ない返事』から。
報告にある、中王騎士団とその戦闘騎についてだが……………」

フィンデルは身体を強張らせた。

「君達が遭遇した一連の事件の内容を、騎士団に面と向かって突きつけるのは無理がある。」

君も知っているとおり、連中と我々は犬猿の中。

それに、彼等が炎団と組んでルベランセを^{たほ}拿捕しようとした言うのは、著しく現実味に欠ける。」

非常に慣れた口つきで弁論する。

これまで彼に相当の苦労があったことが容易に想像できた。

「特に証拠が無いのは痛い。

これらの報告を突きつけたところで……それがたとえ事実であろうと、連中にとっては『しら』を切り通せば済む問題だ。」

「分かっています。」

まるで返答を予想したかのように、フィンデルは一言発する。

「……そうだな。」

その時ギルチは、この答えを彼女は予想していたのだ、と確信した。

「だが、この報告自体には、私は興味がある。

そして……調査に値すると思う。

軍全体の規模では無理だが、私個人の調査隊に調べさせよう。」

「ありがとうございます。」

またも、平然と挨拶を述べる彼女。

「……これでは、君の意のままか。
たまには勝ちたいものだ。」

苦笑しながら、二枚目の書類を手に取る彼。

「次に『嬉しい返事』だな。
君に、昇格の知らせが届いている。
晴れて大尉というわけだ。」

その報告を聞く彼女の無表情さ加減は、さながら仮面を付けているかのようだった。

「無能な艦長を押しつけた、『侘び』ということかな。」

ギルチは言いながら、自嘲めいた笑いを浮かべる。

「……無論、この恩賞にルベランセが炎団の飛翔艦三隻を撃破した戦果は入っていない。

これが事実なら、二階級特進も在り得たのだが……これは、私の方で握りつぶした。」

そして彼は、書類を拳に小さく丸めて納めた。

「表向き、ルベランセは任務中に空獣の群に巻き込まれたことにある。
である。」

目立たないように生きるのが……君の望むところなのだろう?。」

「…お礼を申し上げます。」

「……もう…他人同士なのだな。
我々は。」

彼女の堅い口調に、ギルチは頭を掻いた。

「それにまったく……軍隊で『功績』を揉み消して喜ぶ人間は、君
くらいのものだ。」

傍にある水差しを取り、コップに注ぐ。

「昔から…そうだったな。」

学生時代の頃……いや、『あのとき』以来ずっとか。」

その水をフィンデルに薦める素振り。

だが彼女は手の平を前にして拒絶したので、彼はそれを自ら口に
運んだ。

（……『天・地・人』…兵法八十一計で敵艦を撃破する君の姿が、
目に浮かぶよ。）

瞼を閉じる最中。

自分の中のわずかな武人の血が騒ぐかのようにだった。

「まあ……あんな艦長の下、よくやってくれた。」

そして、瞳を開けて笑う。

「可笑^{おか}しいな。」

ペッポの奴も今回の任務で昇格。

准将となつて、軍の重要なポストにつく。」

空のコップを置き、丸めた書類は机の脇のくず箱に投げられた。

「私が10年近くかけて、ようやく登りつめた地位に、だ。
これが生まれの差というやつかな。」

再びの彼の自嘲にも、フィンデルは黙っていた。

「…殴つたんだって？」

急に、ギルチは簡単に言った。

「!?!」

途端に、真つ赤になって対面を凝視するフィンデル。

「風の噂で聞いたよ。」

あの君がねえ。 ふふふ……」

彼は、彼女がようやく見せた人間らしい反応に喜んだ。

「正直、胸がスカツとした。」

そして自然と笑顔になるのがわかった。

「…だが、軍に在籍している者としては、最低だ。

これが最後のひとつ……君にとっては『厳しい返事』だな。」

書類を一枚取って見せる。

「今回、フィンデル大尉には間違いなく寿命が縮む、忌まわしき地への派遣を命ずる。」

「…何処……でしょうか？」

先の余韻の苦しげな表情で彼女は尋ねた。

軍の駐留地点に、そんな場所などは記憶に無い。

ドアが開かれ、若い女性士官が入室する。

目に付いたのは、彼女が手に抱えてきた派手な色の服だった。

「ドレス……？」

机に置かれた『それ』を見て、フィンデルは自然に呟いていた。

「今夜、パーティが行われる。
誰の主催だと思う？」

首を小刻みに左右に振る彼女。

「なんと中王都市軍副指令、グッソ閣下。
社交界にも、大々的に息子のペツポ殿をお披露目するつもりなの
だろう。」

「……………」

フィンドルは目をパチクリさせていた。

「急遽準備させたため、君の趣味に合わないかもしれんが我慢してくれ。」

「わ、私のドレスなの？」

「言っただろう？
忌まわしき地への派遣を命ずるって。」

あからさまにからかうような笑みを浮かべ、ギルチは藍色あいの光沢
を放つドレスを手に持った。

「昔からパーティというものは、男女一組で行くのが慣わしだ。」

私も丁度、相手に悩んでいたところでね。

……二人で、道化を演じに行こうじゃないか。」

その言葉に、無言で首を横に振り続ける彼女の動作が大きくなっ
ていく。

彼は笑顔のままだったが、それだけはとても許してくれそうにな
かった。

荷物をまとめ、一息つく。

あたえられたカビ臭い部屋は、意外と休むことが少なかった。

修道着の裾を上げ、戒はベッドに座る。

「……？」

足元からのぞく棒状の物体。

それは 綺麗な装飾の刀鞘。

思えば、これが世羅との旅の始まりだった。

この刀を輸送する名目でルベランセに乗り込み、ここまで来たの
だ。

今の今まで忘れていたことが、可笑しくて仕方が無い。
戒は肩を震わせて、穏やかに笑う。

自分にはもう必要が無くなった刀。

後は世羅がギルドへと運び、ひとりで報酬を手にするだろう。

ふと脇に目を移すと、半透明の姿をした少年がベッドに座っている。

まばたきを一度すると、消えた。

それは。

他に何か、『ここ』に忘れ物がある。

そんな暗示に思えた。

またいつもの錯覚だと笑い、戒は立ち上がって扉を開ける。

廊下では、ザナナが待ち構えていた。

「……………もう……日が暮れるぞ……………」

情け無い声。

落ち着かない様子で格納庫を右往左往するバグ。

あれから、世羅の搜索に何時間も費やしたが、全く成果は無く。
一抹の望みを託してルベランセに戻ってきたものの、それも裏切
られる結果となった。

「あんたがいくら心配しても、どうしようもないでしょ。」

ミーサがスパナで戦闘騎を繋いでいる氷を叩く。

「……それにしても、全然、壊れないわね、この氷！」

「……おい、俺様の機体……もっと丁寧に扱え。」

二階から、戒の声。
思わず見上げるミーサ。

「もう、あんたのじゃないっての……！」

そして、重そうなトランクを片手に階段を降りてくる彼に吠える。

「行くのか？」

バークが急に背を向けたまま言った。

「行くけど……なんだよ。」

「最後に一言……言わせろや。」

呟く彼。

「自分と他人との関係を……必ず『帳消し』にしようとする。
戒、そこが、お前の悪い癖だ。」

「あ？」

急に説教を始めた背中に、戒が顔を歪める。

「人間ってやつはな、割っても割り切れねえんだ。
いつか……お前にも分かる時が来る。その時、一緒に酒を飲もう。」

それは彼が振るう剣身と同じ、真っ直ぐな別れの言葉だった。

戒がトランクを引きずって進む。

目の前の大きな背中に幾度助けられただろうか。

はじめに出遭った時は、誤解から乱闘になった。

次は、炎団の飛翔艦内で白兵戦。

森を脱出する戦いでは、彼が先頭に立ち。

最近では、共に空で。

頼りになる男だった。

戒は自分の両親のことは、幼少時に別れたために殆ど印象に無い。だが、父親というのは、こういうものなのだろう。

黙って遠ざかっていく足音を聞きながら。

一方のバークは一切振り向かないまま、首の鎖をいじっていた。

指令部からルベランセの駐留場に戻ってきたフィンデルは一息もつかずに、次の仕事にかかっていた。

ある意味それは、最も辛い仕事だった。

「まだ…医務室で寝ていた方が良いのではないですか？」

「いかなる理由であれ、これ以上軍隊に厄介になるのは良くありません。」

中王都市にも…いたるところにサイア商会の支店があります。

私は、そこで傷を癒します。」

フィンデルに答える、松葉杖をついたジン。

彼の強い意思を留めることは出来ないこと、彼女は解っていた。

「では、機体は修理後にそちらへ送らせますね……」

「ありがとうございます。
あんな古い機体でも……私には格段の思い入れがあるものですか
ら。」

ジンは遠い目で礼をする。

「本当に……平気ですか？」

「もう毒は抜けて、足も自分で撃った傷です……サメにかじられる
よりはマシといったところですね。」

「その冗談……笑えませんか……」

フィンドルは苦笑した。

続いて、準備を整えた戒が荷物と共に格納庫から降りてくる。

「貴方は……てっきり、ルベランセに残るものだと思っていました
が。」

彼にはまず、ジンが声をかけた。

「俺様にも都合がある。
文句あるか。」

「……貴方を一発殴ってやりたいですよ。」

「何だ、そりゃあ？」

間抜けな声と共に肩をすくめる戒。

「……もう、時間がねえ。
俺様はそろそろ行くぜ。」

意識せずに周囲を見渡しながら、彼は言った。

「今までありがとう、戒くん。
本当に……」

フィンドルは複雑な笑みを浮かべて、戒に声をかける。

本来は握手でも交わすところだろうが、突き刺す針のような彼の
雰囲気はそうはさせない。

それだけは、最後まで変わらないところだった。

「もっと、楽に到着できるかと思ったんだがな。」

彼女の感謝の意を途中で切るように、戒は悪態をつきながら大股
で歩く。

「世羅ちゃんのことには任せて。
約束は……ちゃんと守るから。」

「…心配なんか…してねえよ。」

出会って数日の仲だというのに、フィンドルは彼の言葉に胸を締め付けられた。

「貴方らしくない……言葉でしたね。」

そんな戒の姿が完全に視界から消えてから、彼女はジンに訊く。

「……私は、悔しいのです。」

ジンは答える。

「『あの時』……正直、敵わないと思いました。
私には、空中で誰かの為に身を投げたり……ましてや、それを受けとめることなんて出来ないでしょう。」

松葉杖が動き、小石が跳ねた。

「初めは、空の恐ろしさを知らない蛮勇の成せるものかと思いました。
た。」

だが時が経つにつれ、私のその気持ちは嫉妬へと変わった…。
このことが示している事実は何でしょうか。」

彼は上半身を前に、苦しそうに続けた。

「本心を言えば、私は世羅さんを連れて帰りたい。
ですが、今の私にはその資格も価値も無いようです。」

この青年の発言には、時折どきりとさせられる。
フィンドルは、ただ聞き入るばかりだった。

「……暫くは空も飛べません……。
その間、商売でも学んでみますよ。」

「リ・オンさんに宜しくお伝え下さい。」

彼の殊勝さに感心しながら、彼女は深く頭を下げる。

「……はい。」

上着を直し、松葉杖を前へ突くジン。

（父には……本当に人を見る目がある……。

……父の言い知れぬ予感とやらも……私は信じる事が出来るな……）

独り微笑みながら、不器用に歩く。

（……また、いつか何処かで逢いましょう。）

街へと繋がる長い道の途中で。
ジンは一度だけ振り返った。

騎士団に与えられた、先の会議場とさほど離れていない、教会の
別棟。

「……いやあ……昨夜は失礼した……。
調子は……ますます最悪だよ……」

苦笑しながら、ヂチャードが二人に寄る。
無論、昨晚の乱行と後悔につき、顔面は蒼白だった。

「……そろそろ……帰っても……いいかな？」

会議中は何とか『もった』ものの、後の警備までは付き合いきれ
ない。

そんな様子で腹をさすりながら哀願する彼に、マクスとクウは互
いに顔を見合わせた。

「だめだ。」

お前は、頼りになる奴だからな。
どんな理由があっても、最後までいてもらおう。」

「……へ？」

マクスの意外すぎる言葉に、ヂチャードが呆然とする。
彼は、何も言わずに帰してくれるのを期待していた顔のまま止まった。

「これでいいのだろうか？」

マクスの言葉に、脇のクウは静かに微笑む。

そのやりとりに一人だけ、理解できていないヂチャードだったが、もよおす吐き気に我慢できず座り込んだ。

「神聖なる場所で『やらかす』なよ。」

「わ……わかってるっての……」

上から浴びせられるマクスの冷たい言葉を返しながら、ヂチャードは上を向いた。

「ん！？」

その時、巨大な影が前方を横切り、思わず廊下に尻餅をつく。

「……おい……あれって……！？」

吐き気も忘れ、警備の中を平然と歩いていくその人物の背中を指差す彼。

頭上のマクスも言葉を失っていた。

「……世羅。」

部屋の前の壁で白い槍と背をもたれながら、ザナナが呟く。

薄暗い廊下を、そろそろと歩いてきた世羅は思わず足を止めた。

「戒が、ずっと捜していた。」

「……！」

肩を震わす、世羅。

「……ごめん。」

彼女は複雑な笑顔をして部屋に入る。

誰も居ない部屋。

ベッドに置かれた、赤い布が目についた。

「聞いたぞ!!」

あんな小娘だったシザーが、生意気にも結婚して退役とはな!!」

下腹に響くような大声。

「……ファグベール様？」

半ば信じられない様子で、彼女は声を上げた。

最後の扉の前から、思わず三步前へ出る。

背は低く、横幅のある初老の男。

それはまるで、だるまのような背格好。

はちきれんばかりに脂肪を詰め込まれ、丸みを帯びた彼の鎧。
それにはシザーの緑と違って、赤い線が入っている。

「赤華は……現在、派遣の任に……」

早朝の会議で一小団の任務中止は決定したが、たった数刻のうちにそれが遠方へ伝わる術など無い。

軍隊側に、騎士団の内情が洩れていた事実。

そんな中タイミング良く現れた遠征中の小団長の姿に、嫌な予感がした。

「細かいことを申すな。
はっははは！！」

彼女の心配をよそに。

パン、と分厚い手の平で腹部の鎧板を叩くと、彼は絨毯をのし
しと踏みつけて前を行く彼。

「お待ち下さい、今、大団長にお取次ぎを……」

「お前が居なくなるのは…本当に惜しい。

先ほど聞いて、騎士団の未来を…少し憂いたわ。」

彼女の脇で囁き、そのまま足を止めずにドアを開ける彼。

「……………ファグベール様？」

シザーが振り向くことが出来たのは、数秒経った後だった。

「遠征の任を放り、ここまで何の用か。
ファグベール。」

薄い幕の奥で、ガイメイヤが問う。

「は。

まずは…人払いをお願いいたす。」

ガイメイヤの脇で彼の顔に墨を入れていた、彫師がおごそかに退室する。

ファグベールの脇に立つ黒騎士 ディボレアルは、動く様子を全く見せなかった。

「…これで、周りには忠臣しかおらぬ。
構わず申せ。」

「……では…失礼つかまつる。」

その場からガイメイヤへと半歩近付き、肩膝をつく彼。

「我が赤華^{せきか}の軍師にして総務番、レイキⅡモンスロンが出奔いたしました。

姿をくらまして早10日。

いまだ行方すら掴めぬ始末。」

たった一人の緊張の言葉に、張り詰めていく室内。

「彼奴^{きやつ}は、騎士団全ての機密を知っている身。

これを逃したのは、失態の極み。

我が首をもって、お詫びいたそうと参上した次第。」

「……首だと？」

薄布を挟んで、交わされる言葉。

「は！！！」

豪快に笑い、ファグベールは首の装甲を両手でもって外す。

「普段は行水すら半月に一度の拙者が、今日はしっかりと首を洗って参りましたぞ！！！」

そして、手でその太い首をさすって見せる。

ガイメイヤがわずかに動いた。

ディボレアルが無言で剣を抜く。

「何か言い残すことは無いか。」

「願わくば、現在の我が隊の副長、センチルを拙者の後任に据えて頂きたい！！！」

土下座の態勢をとるファグベール。

その頭上に、黒い剣は振り上げられ、風を切って落とされる。

「！？」

砕ける大理石の床。

耳元を振り切られた黒い剣に。

そして、いまだ繋がっている己の首に狼狽する老いた瞳。

「命を捨てる覚悟あらば、捧げる覚悟もあろう。」

ガイメイヤが言った。

「挽回の機会を与える。」

ディボレアルに、そなたの命と飛翔艦全隻を貸せい。」

「は!!」

大柄な鎧が、素早く床に伏す。

「その裏切り者の行き先には……心当たりがある。」

貴殿に、同胞だった者を躊躇無く殺す気概があるか？」

問う黒騎士に対して上げた顔。

彼の眼球は滾たぎっていた。

（おつとと……先客かよ……）

咄嗟に壁際に身を隠し、おもむろに煙草に火をつけるバーグ。

そこは空が見渡せる大きなガラスが張られた廊下。

ルベランセで最も見晴らしの良い場所の一つだった。

そこでじっと、夜空を眺める世羅が居る。

「……ここは、リジャンがお気に入りだったところだぜ。」

「うん、知ってる。」

意を決して近寄るバーグに対し、普通に答える世羅。

彼女の髪は、真新しいリボンで束ねられ、ポニーテールに戻っていた。

「……戒が前に話してくれたことがあるんだ。」

やがて世羅が搾り出す言葉に対し、バーグは煙草を口から離れた。

「この世界で、たった一人、救いたい人がいるんだって。」

「あいつは……自分で言うほど、そんなケチな野郎じゃねえよ。」

「わかってる。」

また、世羅はすぐに答えた。

「だから…戒のこと応援してあげなきゃって……思ってたんだ……」

ガラス越しに見る世界。

中王都市の遠い街並みに、少しずつ夜の明かりが灯り始める。

たとえ地上でも、そこでの景色の眺めは健在だった。

「……言いたいことも……たくさんあったんだ……」

小さい両の手の平を窓に付けて呟く。

「でも、何故かボク……戒の顔見れなくて……！」

大窓の棧さんに大きな雫が落ちたのを、バーグは見た。

「……今までありがとって一言も……言えなかったよ……」

「……ああ、そういうもんだ。」

歩み寄るバーグ。

こらえきれず、その胸に飛び込み、彼の腰に両手を回して世羅が震える。

「……馬鹿だな……。
無理じゃがってよ……。」

くしゃくしゃに頭を撫でてやると、彼女の中のせきが崩れた。

車内の座席に座ると、戒は旅の疲れに一気に襲われた。

利き手ではないので鉛筆は握れるだろうが、空中戦で負傷した手首が痛む。

この旅は後悔することばかりで。
そして、この身体的苦痛は明らかな『損』だった。

この旅先に、それを帳消しにするくらいの恩恵があることを彼は本気で祈る。

「
おい。」

対面の座席に積まれた、大量の本。
その脇にちょこんと座っている、小さな子供にドスの効いた声をかける彼。

目深にかぶったローブの隙間から、その子供は戒の顔をうかがった。

しかし直後、彼の目つきの悪さと頬の傷に嫌な予感を覚え、思わ

ず席を立つ。

「おまえだよ、ガキ。」

だが戒は長い足を突き出し、その退路を塞ぐ。

子供の方は、いきなり浴びせられた、親兄弟にも使われたことのない乱暴な言葉に、声を失った。

「ティバイディオンまで、どれくらい時間がかかる？」

「え……1時間半くらい……ですけど。」

身を縮こませながら、子供は反射的に答える。

「じゃあ、俺様はそれまで眠る。
着いたら起こせ。」

そう言ったきり、目を閉じる彼。
突然のことに、子供は啞然とした。

「……起こさなかったら……承知しねえ……ぞ……。」

ごろごろと動き出した、線路のレールの振動は、まるで飛翔艦にいた時のような感覚を与える。

いつの間にか、慣れていた。
あそこは安息の場。

色々な感情が噴き出す前に、彼は睡魔に身を任せた。

「あの戒のバカ野郎を見たら！？」

貯蔵庫から拝借したワインをラッパ飲みしながら、バーグは強い口調で言った。

「森の時といい、最後のブリッジと時といい、めっちゃくちゃじゃねえか。」

無理矢理、その酒の相手をさせられているザナナが、わけもわからずに頷く。

「……でも何とかなっちまう。
これが若さよ。」

一転、おどけた口調に変わるバーグ。

続けて、しゃっくりをする彼の背中を横のミーサがさすってやる。

食堂の被害も甚大で、彼等が座る椅子やテーブル以外は、ほとん

どがひどい有様で一箇所に偏って潰れていた。

「少し、格納庫も寂しくなるわね。」

彼女が、そんな惨状を眺めながら頬杖をついて呟く。

「……………あん？
機体のことか？」

うな垂れていたバーグが返す。

「……………乗る方も、よ。
ちゃんと人員補充されるのか、心配だわ。
今までも充分じゃないのに。」

ジト目で、バーグの全身を見回すミーサ。

「おいおい！
俺の操縦は確かに頼りねえかもしれないけどよ……………」

彼女のあからさまな視線に、困ったように頭を掻くバーグ。

「こうなったら、ザナナ。
てめえが操縦しろ。」

「無理だ。」

素っ気無く即答する豹頭。

「……………新しい人員ねえ……………」

その反応に、大口を開けたまま、バッグが椅子を傾けながら天井を仰いだ。

手鏡や、かんざし。

口紅や、ハンガーのかかったままのスカート。

古今東西、色々な物を投げつけられながら、部屋から廊下へと転がり出てくる男。

「……………世話になったね、元締め。」

彼は服についた埃を払いながら、きつく閉められたドアを未練がましそうに見上げながら言った。

声をかけられたのは、その廊下の壁際で煙草をふかす、露出度の高い派手な服を着た女。

やがて男は立ち上がると、飄々（ひょうひょう）と彼女に近付いた。

「どこか、行く当てはあんのかい？」

女は気だるそうに、顔をしかめて返す。

手の平の形に真つ赤に腫れた、男の片頬。

長めの髪と同じ淡い茶色をした、口から顎にかけて生える綺麗な髭面。

それが、ぐつと距離を狭める。

「ここの軍隊に古い友人がいてね。

今夜、お偉いさんの集まるパーティで、ようやく雇い主を紹介してもらえそうなんだ。」

「そいつは良かった。

じゃあ、今までの宿代……頂こうか？」

「あいにく今、一文無しでね。

良かったら身体で払うよ。」

冗談混じりに、襟元をはだける男。

垂れ目がちの目尻が、余計に下がる。

「あんだねえ……文無しで、しかも娼館に一月も寝泊りする男なんて……普通じゃないよ。」

女は呆れて言った。

「そうかい？」

じゃあ、僕は特別な人間なんだろうね。
そんな僕……素敵と思わないかい？」

彼女の顎を優しく持って、瞳を近付けて男は言った。

「……なんでこの期に及んで、まだ口説きにかかるのかねえ……あんたは。」

彼の顔面に、吸った煙を浴びせる女。

「しかも……『嘘つき』だ。」

男のはだけた胸元に見え隠れする、黄金の拳銃。
その彼女の視線に気付いた彼は、子供のように照れくさそうに笑った。

「早く行つちまいな。」

そろそろ、ウチの子達が皆起き出すよ。
もしもあんたが旅立つことがバレたら、その頬に紅葉もみじが増える。」

「有難う。」

煙草は……『ほどほど』にね。」

彼ははにかんで彼女の煙草を奪い、軽く口付けをしてその場を後にした。

床に落ちた煙草が全て灰になるまで、女は男をいつまでも見つめていた。

背のびをしながら遠くに臨む、駐留中の飛翔艦 ルベランセ

月夜にたたずむ その鉄塊の美しさに、男は運命の流れ始めを予感した。

第二章
第五話 『宴前』
了

2 - 6 「天へ往くため地を駆けて」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 2

「It runs on ground to go to
the heaven」

The sixth story

'It runs on ground to go to
the heaven'

久方ぶりの深い眠りだった。
身を揺らされるまで、泥のように眠っていた自分。

思考がまどろむ中。

自分の二の腕を掴んでいる、ローブの少年の小さな手を払った。

「…到着…したのか。」

戒は薄目を開けて、停車した列車内を見回す。

慌しい乗客の姿を背景に、目の前の少年は頷いた。うなず

そして自分の役目を終えた彼は、自分の座っていた席に置いてある大量の本を両脇に抱えて離れていく。

列車の外では、早くも出発の号令がかかっていた。

戒も荷物を手早くまとめ、乗車してくる客を掻き分けながらそれ
に続く。

降車すると外は肌寒く、既に空はほの暗い。

列車の到着場は都会らしく、なかなか綺麗で落ち着いているよう
だった。

だが、戒にとっては未開の地。

先導してくれる者もないこの街で、彼は暫くは立ち尽くすしか
なかった。

（……この人…もしかして…この街、初めてなのかな…？）

先の少年は、ある程度の距離を置いてから、そんな戒の様子を
気に留めた。

(……でも……怖い……)

だが、すぐに彼の粗暴さを思い出して、踵きつすを返す。

「パンリ。」

そこで、聞き慣れた声が響いた。

少年は反射的に、声のする方へ向く。

長い錫杖しやくちやうを片手にした男が、辺りをうかがっていた。

「……ここです。」

ウェンウェンさま！」

途端に少年は戒から完全に目を離し、小走りで彼に寄った。

「頼まれた御本、ありましたよ。」

「すまないね、明日は大事な試験だというのに。」

男は、少年の被るフードに大きな手を乗せた。

「私が頼んだ本以外も……また、たくさん買ってきたものだ。」

そして慣れた手つきで、そのまま少年の肩を掴む。

「本には目が無くて……つい。」

それを合図に、少年は男の足に合わせてゆっくり歩を進めた。

「しかし、後からついてくる……彼は……誰だ？」

「えっ……？」

男に言われ、振り向く少年。

頬に傷のある、先の男がひどい目つきで二人の後をついてきているのだ。

肝を潰すのも、無理はなかった。

「パンリ、君の知り合いか？」

「そ、そんな……知りません……」

ただ……列車で同席で……」

男にしがみ付きながら、少年は背後の戒の様子を観察する。

「ああ……！ 思い出した……」

あの人……確か、プレオルンの古本市で会った人です……！」

「？」

「その時、身体がぶつかって……だから、怒ってるのかも……。
ていうか、いつも怒っているような顔してて……」

怖い……。」「

「……ふむ……」

深く呻^{うめ}き、少年の肩から離れる男。

彼は手にした錫杖を地に小刻みに当てながら、今来た道を戻り始める。

「え……ウエンウエンさま……！？」

語尾を小さく萎^{しぼ}ませながらパンリが呟いた。

丁度、人気の無い闇深の路地だった。

腰を屈め、杖について迫り来る男の影に、戒の方が逆に立ち止まる。

後ろで束ねた髪の毛の一本一本がいきり立つ感覚。

「……難儀だ……」

異常な緊張感の中、その男の口がゆっくりと動き始めるのが見えた。

「難儀だねえ……」

言葉に与えられた衝撃、その刹那。

戒は全身を強張らせて、男の襟元を掴んだ。

「……てめえ……占い師か……!？」

「……どうして、そう思う？」

襟元を上げられたことで、曲がった腰が伸びる男。

背丈には自信のある戒だったが、それを遥かに越えた長身。

目にあたる部分に紫の草模様の厚い布を巻き。

地を探るための錫杖を片手にした、それは盲目の男だった。

顔が隠されているため、年齢は不詳。

さらに袈裟服けさふくという身なりも、彼の不思議な印象に輪をかけている。

「ばばあが……占い師をしていた……」

腕から力を抜きながら、言葉を洩らす戒。

「ふふ……同じことを言われたことがあったか…」

自嘲するように笑い、男は袈裟を直して背を向ける。
その後ろの戒は、暫く動くことが出来ずにいた。

「……どうしたのです?」

戻ってきた男に、再び肩を貸した少年が訊く。

「ウエンウエンさまが…占うなんて。
どんなお金持ちでも、相手にしないのに。」

「私はねえ、パンリ。
このとおり、普通のものが見えないんだ。」

目元に巻いた布に触れる男。

「その代わり、普通でないものが見える。」

その布下が、わずかに動いた。

（そう……それは、大陸に煌く星の光だ…）
またた

彼の視覚の漆黒の間。

その中で揺れる、青白い光輪。

そして、奔流の如く押し寄せては引いていくイメージの波頭。

彼はいつものように、未来をわずかに見た。

「きみ、名前は？」

わずかに後ろに首を傾^{かたむ}けて、声を発する男。

「……戒だ。」

その背中に言葉を返す戒。

「わたしは、ウェンウェン。
この子は、パンリという。」

笑いを含みながら答え、遠くに見える街並みへ向かって歩き出す男。

「おい……」

戒は前の二人を見失わないうちに。
地面に置いた荷物を急いで持ち上げて、その後ろを急いで追った。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第二章

天へ往くため地を駆けて

・

第六話 『天へ往くため地を駆けて』

1

（しかし……）

戒はしかめ面で大通りを歩きながら、すれ違つ若者達の様子に目を見張る。

彼等は皆、片手で本を持ち、それを読みながら歩いていた。
器用なもので、それでいて誰も他人にぶつかることもないのだ。

（なんなんだ……このガリ勉共は……）

中王神学校の在る都市、ディバイディオン。

さすがは学びの街といったところだろうが、それでも度が過ぎ
ていると、戒は頭を振る。

通りの両端には、魔導技術の光が施された街灯が規則正しく並び、
足元に敷かれた、大通り一面の石畳にはゴミひとつ無く、よく整
備されている。

そこは今まで訪れたどの街よりも、毒気の薄い几帳面な環境に見
えた。

「毎年、この街は試験が近いと賑やかだ。」

ウエンウエンが雑踏に耳をそばだてて言った。

「……試験の日って、いつだ？」

「……え？」

突然の戒の問いに、少年が聞き返す。

「も、もしかして、貴方も試験を受けに？」

「…ああ。」

だが、時間の感覚が無えんだ。」

戒は眉間にしわを寄せて呟く。

「……明日ですよ。」

その様子を、半ば呆然と眺めながら少年は答えた。

「…明日？」

……もう明日だと!？」

それを聞くなり、すぐに神妙な面持ちに変わる戒。

「…さて、着いた。」

そんな会話はそっちのけで、ウェンウェンが立ち止まる。

そこは大通りに面した、細長くて高い一階建ての建築物。

円錐えんすいの形状えんすいをしており、それは巨大なとんがり帽子のようにも見えた。

その屋根に下がっているのは看板だろうか。

年季の入った板の上を、『ウェンウェン占庵』と流麗な書体で描かれている。

「誰がてめえの店に案内しろと言った。
俺様は泊まれる宿をだな……」

「もう、どこの宿も満室だ。
泊まれるところなど一つも無いよ。」

答えながら、ウェンウェンが扉を開く。
その背後で戒は、そこから洩れるわずかな埃と古い本の匂いを感じた。

暗い中へとまずパンリが進み、慣れた手つきでランプに火を灯す。
途端に、開ける視界。

屋内は巨大な螺旋階段が壁を沿って天井へ向かって造られており。
それはあたかも、巻貝の中に入ってしまったような奇妙な感覚に
人を陥れる。おとし

「……すげえな……」

戒は頭を垂直に向けて、息を飲み込んだ。

目を凝らせば、天井には、満点の夜空の絵が描かれているのがわかる。

それは、幻想的な空間をさらに演出していた。

「……わたしは職業柄、大陸中を旅していてね。」

ほぼ中央にある高い番台に陣取り、ウェンウェンは言った。

「各地には、趣味でこさえた家が沢山ある。

『ここ』は使わない間、管理をパンリに任せているわけだ。おかげで、ここはいつも快適な状態だよ。」

錫杖を手元に置き、胡坐あぐらをかくウェンウェン。

「ここで勉強すると、はかどるんです。

住むところに加えお金もいただけるし……私にとっても、ありがたい仕事ですよ。」

パンリは抱えていた本を棚に整頓しながら言った。

「ところで、この街は気に入ったかい？」

「来たばかりで、そんなこと判るか。

だが、本を読みながら歩いている奴等は異様だな。」

ウェンウェンの問いかけに、戒が荷物を降ろしながら答えた。

「あはは。

普段から、そういうわけじゃないんですよ。」

パンリが笑いながら言った。

「この時期だけ、特別なんです」

「任務遂行中の小団長が直々に現れるなど……何か不測の事態が起きたとしか思えん。」

「……そんなこと、どうでもいいから……俺は寝たいよ。」

マクスの懸念を、欠伸^{あくび}でかき消すデチャード。

「本気で言ってるんですか。」

不遜な態度の彼に、クウが真面目な表情で訊いた。

深夜の教会は、警備役の緑華も既に撤収し、常駐の聖職者達も寝静まり。

今の彼等の会話を除いては物音ひとつ無い。

「本気も本気さ。」

今、俺にとって大事なことは、この二日酔いの頭を回復させること。

大体、俺は昔から騎士団も騎士道も興味無いの。」

彼女に説明しながら、デチャードは前方から歩いて来るシザーの姿を認め、急いで背筋を伸ばした。

「シザー小団長…一体、何が起きたのですか？」

早速のマクスの問い。

「赤華の重鎮が逃げたそうだ。」

それに対し、シザーは不機嫌そうな顔で答えた。

「逃亡？」

「まさか、俺達に追いつてわけじゃないですよね？」

同時に急ぎ立てるクウとヂチャード。

「それに関しての指示は、まだ出ていない。

上が判断するまで、このことは他言無用だ。いいな？」

淡々と言葉を並べ、シザーは三人を見回す。

「…それよりも、また問題が発生した。

今、軍隊主催の夜宴への招待の馬車が来ているのだ。」

「…危険ではないのですか？」

「現在の情勢ではそうかもしれん。

だが、誘われた以上、たとえ建前でも応じなくては無礼に値する。

本来はそれどころではないのだが、仕方なく私が騎士団を代表して行く運びとなった。」

「では、我々が護衛に。」

マクスが機先を制して言った。

「ああ、助かる。」

マントを羽織りながら、シザーが返す。

「あの…すみません、教官…俺は……」

申し訳無さそうに、声をかけたのがデチャードだった。

「付き合ってられない、と顔が言っているな、デチャード。」

「…いいですか？」

苦笑しながら、彼は言った。

「そうだな、本来の教会警備も終わりだ。」

「ここから先は任務外だろう。 ゆっくり休め。」

「……いやあ、すみません。」

口では謝罪しつつ、デチャードは意気揚々とした足取りで宿舍へ

と引き上げる。

「そう恐い顔をするな、クウ。」

そんな彼の後姿を凝視している彼女に、シザーが声をかける。

「不真面目な人だと思います。」

「思想が一边倒になりがちな組織においては、ああいう人間は貴重だ。」

そうだろう、マクス？」

「…はい。」

聖騎士はそう言って、相当に複雑な笑みを浮かべたのだった。

「こいつら……みんな、受験生かよ。」

呆然と窓の脇から外を覗く戒。

言われてみれば、確かに賢そうな若者達が右へ左へと流れている。

簡略だが、戒はパンリから試験の実態を聞くことが出来た。

中王神学校大学部の一般入試は、一次試験と二次試験に分かれており、一次試験に合格した者のみがさらに後日の二次試験を受けられること。

一方、推薦入試にも一応の筆記試験があり、それを一般の一次試験と合同で行っているというのだ。

合否基準等は違えど、大陸最高峰ともいわれている難度の試験は同じ物を使用するという。

それを聞いただけでも、戒はかなり落ち込んでいた。

「くそつたれ!!」

八つ当たりで壁を叩く戒。

お茶を運びながら、揺れる天井を不安そうに見上げるパンリ。

「……で、どれくらい難しいんだ？」

「私は五年も挑戦してますが…恥ずかしながら、一次試験を受かったのが最初の一年だけで…。」

生気の無い顔で訊ねる戒に、照れくさそうに答える少年は、かなり知的な印象を受ける。

そんな言葉を聞き、戒は訊ねたこと自体をすぐに後悔した。

「パンリ、家の中では帽子くらい脱いだらどうか。」

出された茶をすすりながら、ウェンウェンが言う。

「え……でも……」

困惑した顔で、戒の顔を眺めるパンリ。

「隠していても仕方あるまい。
それに……彼なら大丈夫だ。」

「……はい……。」

恥ずかしそうに、目深に被っていたフードを後ろにずらす彼。
そこで露になったのは、色白で美しい少年の顔だった。

ライトイエローの、丸い瞳と髪の毛。
そして、ずいぶんと小顔である。

「……」

だが、戒の目を釘付けにしたのは、そこから現れたのは茶色の大きな耳。

それは少年の肩にかかるくらい垂れていて、ふさふさした毛が生えている。

「……なんだ、このヘンテコな飾りは？」

だが次の瞬間には、それほど動揺もせず、彼の両耳を堂々と両

手で掴む戒。

「…お、驚かないんですか？」

白い頬を赤く染めながら、上目づかいで様子をつかがうパンリ。

「珍しいアクセサリとは思うが。」

むんず、とその耳を握ったままの状態で戒が答える。

その感触から、付け根が異常にしっかりとしていることが判る。

「…ん……もしかして…」

伝わる体温。

不意に想像して、その小動物のような耳から戒は手を離れた。

「本物か？」

その問いに答えるように、パンリの長い耳は根元から小刻みに動いた。

「知らないのも無理は無い。

たれみみ
垂耳は希少民族だからな。」

錫杖を布で拭きながら、ウェンウェンが呟く。

「でも普通は、言葉を失いますよ。
今では周りの人も、慣れてくれてますが……」

「……言っただろう？
彼は普通じゃないんだ。」

口元を歪めて笑うウェンウェン。

「人を変人みたいに言うんじゃないよ。
いちいち、この程度で驚いていたら、身がもたねえ。」

否定する戒。

「……ふむ。
不思議には慣れている、ということかな。」

ウェンウェンは、心底おかしそくに肩を震わせる。

「それでは……不思議、慣れっ人ですね。」

そしてパンリは、表情を輝かせて言った。

（なんだそりゃ……。）

彼等の交わす、マイペースな雰囲気、今度は戒は何も言い返せなかった。

「ところで、パンリ。」

さっそく、買ってきた本を読んで欲しいのだが…」

「ウエンウエンさま……すみません。」

今夜は、おかみさんの店に行きたいんですけど…。

明日の試験の前に、フウシン先生が最後の講義をして下さるそうで…」

「そうか……すまなかった。」

わたしは先に寝るが、時間は気にせず帰ってきなさい。
今日は有難う。」

ウエンウエンは、笑って手の甲を振って促した。

「はい！」

フードを被りなおし、外へと走り出るパンリ。

「…じゃあ、戒、君が代わりに読んでくれ。」

「断る。」

くだらん、付き合ってられるか。」

戒はウエンウエンに対し愛想の無い言葉を吐いて、だらしなく床

に足を伸ばしたまま、窓の外を何気なく眺めた。

通りを横断してすぐの、向かいに面した料理店に入っていくパ
ンの姿。

「垂耳か……。」

「肌をさらすのを、あまり良しとしない、貞節な部族だよ。」

戒の呟きに、ウェンウェンが答える。

「そしてパンリは……神様に恋をした少年だ。」

卓上の筆を取る彼。

「彼の純朴な心と、稀^{まれ}なる感受を、わたしは気に入っている。」

その脇のパレットには、コバルトブルーの絵の具が撒かれていた。

「一年は、400日あり。」

筆はパレットへ突かれ、すぐに離されて無造作に振られた。

「一日には、昼と夜を、それぞれ守る神がいて。」

青い雫が、白い紙へと飛ぶ。

「代わる代わるに大陸を守る。

合わせて800。

……天命の輪と同じ……800。」

作業を続けながら、ウエンウエンの口から紡がれる言葉。
それは詩のように連なり、心を貫く。

「春の季節、98日目の夜を守るは、猫頭を持った神。
ある日、あの子は、彼女に恋をした。」

筆が止まる。

ウエンウエンは絵を描き終えた紙に、満足そうに顔を近付けた。

「……天命の輪が800あるって、誰が調べた？
そんなもん、占い師どもが勝手に創った妄想だ。」

祖母の言葉を思い出し、早口で言葉を散らす戒。

「……まあ、そう慌てるな。」

紙一杯に滅茶苦茶に描かれた、青い線。
おぞましい、円律。

ウエンウエンは戒に向かって、それを突きつける。

「今の、君の心の中の風景を、描いてみた。」

「……悪いが……俺様も出るぜ。」

気分を害した戒が、思わず席を立つ。

（…神だと……？

天命の輪だと……！？）

壁に手を這わせ、扉に向かう。

（今の俺には、何も関係無えだろうが！！）

目の前の得体の知れない占い師の言葉に、戒は何故か苛つきを憶えていた。

「明日からのルベランセ修繕作業に伴い、ともな作業員が沢山やって来る。それと並行して、輸送してきた鉄鋼などの搬出も開始だ。念のため格納庫側だけでなく、正規の入り口付近も大きく開けておいてくれ。」

「……了解。」

食堂を訪れたそばから事務的な言葉を並べ続けるリード。
それには、ミーサが対応していた。

「ところで……いくらオフに入っただけでも…ほどほどにしておいてくれよな。」

酔いつぶれ、目の前のテーブルで寝ているバーグを、リードは蔑んだ目でにらむ。

「あはは……」

引きつった笑いで誤魔化すミーサ。

そんな彼女が目線を泳がせた先。

梅が食堂の入り口に座ったまま、死角を見上げていた。

「？」

その視線の先で、薄布が揺らめく。

そして、それを追い払うために振られる細い手。

だが、その行為は逆に猫の関心を買うのみ。

ちよいちよい、と梅はそれに合わせて前足を伸ばす仕草で対抗する。

それらの様子を不審に思ったミーサとリードは、同時に座る位置

をずらした。

すると、通路にいるフィンドルが、食堂の前を横切ろうと機会を覗っている姿が見える。

そして驚くべきは、その姿だった。

「え……フィンドル？」

リードの眩きと共に、彼女が身を硬直させた。

「ど、どうしたんだよ、その恰好……！？」

胸元が大きく開いた、藍色の光沢の派手なドレス。
そんな彼女の装いに驚く彼。

さらに予想以上にふくよかなバスト。
細くて長めのスカート部分は、身体にぴったりと張り付き、ヒップのラインを官能的に強調している。

「副長…大胆……！」

リードは照れから思わず目を背けたが、ミィサはその姿に目が釘付けになっていた。

「お願い…見ないで…。」

そして……何も言わないで……。」

観念して現れる、魂が半分抜けた表情のフィンデル。
彼女は壁に頭を擦りながら、廊下をふらふらと歩いていく。

「……ど、どこに行くつもりなんだよ!?」
もう夜遅いぞ……!？」

どこかに行くからこそ、この装いなのだろう。
そんなことは解っていないながら、リードは訊かずにはいらなかった。

「……みんな、今日は適当に帰って頂戴。
今夜はもう戻らないかもしれないから。」

言い残し、彼女は早足で去って行く。
瞬時に凍りつく、それを聞いた二人。

「……どこかのお金持ちとデート？」

残った妙な空気の中で、ミーサが言葉を洩らした。

「……馬鹿を言っな……!」

動揺して震えるリードの指先が、テーブルのコップを弾く。
倒れたそれは転がって、だらしなく寝ているバーグの額に当たった。

「…副長、意外と格式のある人間にモテる節があるし。」

「そうなんだよ……。」

あのサイア商会の会長から、援助してもらった経緯つてのも…いまだに謎なんだよな……。」

腕を強く組みながら、呟くリード。

「…って、そうじゃない……！」

『今夜は戻らない』ってどういうことだ!？」

「…言葉の意味…そのまんまじゃないの？」

さばさばとミーサは返す。

「…あの…なんか……。」

ルベランセの外に、高級そうな馬車が留まってるんすけど……」

そして所用から帰艦し、不意に食堂に入ってきたタモンが、彼にとどめを刺したのだった。

「…今夜は仕事は休みだ。」

どんな地獄でも、楽しいと思えば、楽しく思えるぞ。」

馬車に乗り込んだ直後にかけられる、ギルチが発する根拠の無い言葉。

フィンドルはスカートを乱暴に折りながら座り、まだ軍務を与えられた方がましだと思った。

「もつと若くて美人の部下と行けばいいのに…。」

貴方は偉いんだから…」

彼女は膝上に両手を乗せて、不機嫌そうに目を閉じたまま口を尖らせる。

「無理な注文で、部下の信頼を失うわけにはいかん。」

彼は真剣な表情で返した。

「下の者に押し付けてばかりでは、いずれ忠誠を失うからな。」

「…私も……部下のように。」

「君は友だ。」

「……少なくとも、私はまだそう思っている。」

ギルチの言葉に、フィンドルは何も答えなかった。

彼はかたくなな彼女の態度に微笑んだ後、前で馬を操る御者に手で合図を出した。

「はい、いらつしゃい！」

店に入った瞬間、威勢の良い声が響く。

戒の前に現れる、健康的な体格の中年おかみ。

薄暗い店内は、あいかわらず真面目そうな学生で席が埋め尽くされている。

給仕役は、目前のおかみだけのようだった。

店内を見回せば、目深にローブを被った少年の姿は、すぐに壁際に認めることが出来た。

「何だい…あんた、パンリさんのお友達かい？」

その視線に気付いたおかみが言う。

「あの方はご自分の受験もあるつてのに、暇があったら、うちのバカ息子の勉強も見て下さっているんだ。

しかも無料だね。」

強引に手を引かれ、その席へと案内される戒。

「おかみさん…私は、それほど大したことしてませんよ。」

それを聞いたパンリは、戒に笑いかけながら言った。

「じゃあ、これくらいさせておくれよ。」

あんたのおかげで、あの子のこの前のテストの点が上がったんだ。

「

そう言っで、豪勢な料理の入った大皿をテーブルに叩きつけるお
かみ。」

「うちの名物、煙鳥のから揚げさ。」

パンリさんの友達なら、あんたもたっぷり食っとくれよ。」

戒は促されるまま、席につく。

「明日、頑張るんだよ、パンリさん。」

「ありがとうございます!!」

おかみの励ましに、パンリは快活に答えた。

「しかし…戒くん、いいんですか？
休んでなくて。」

「……………」

戒は無言で腕を組む。

（きつと、ウエンウエンさまにからかわれたんだ…）

状況が容易に想像でき、パンリは思わず微笑んだ。

一方の戒は、その店における客同士の異質な会話に耳を済ませていた。

今の政治について、議論を戦わせている者。
大陸各地における、経済の推移。
源法術や錬金術の独自理論など。

およそ、普通の酒場で繰り広げられるような、下世話な話は一片も無い。

そのような場の雰囲気慣れない戒は、自然と伏せ目がちになった。

これでは、これから受ける試験も噂どおりの至難に違いない。

さらに目の前の少年ときたら、このような地に五年以上も居るといふのに、それでも突破出来ないのだ。

戒にとっては、これが推薦で受けられるという事だけが唯一の救いであった。

「ここは、お気に入りの席なんですよ。」

すぐ脇の壁に掛けられた絵画を見詰めながら、パンリが言った。

「これは、レプリカだけど……。」

…子供の頃、中王美術館で見たこの神様の絵は…本当に素晴らしかったんだ。」

額縁の中にいる、異形のもの。

それは美しい女性の肢体でありながら、猫の顔を持ち、背に美しい蝶のような羽根を広げていた。

右手には果実。

左手は、極端に横に寄った構図上、描かれていない。

「それから、夢が出来たんです。

……私は、いつか神に会いたい。」

「…だから神学を学ぶのか？」

「すみません！

よこしま
邪な理由で。」

「別に……。」

人それぞれじゃねえのか。」

顔を真っ赤にして何故か謝るパンリに、戒が呟いた。

「でもな、てめえの考えは絵空事だぜ。」

「はは……厳しいなあ……不思議、慣れっこ人なのに。」

「……………」

笑うパンリに対し、恐い顔で返す戒。

「でもね……神が実際に存在してなくても、会えなくても…構わない。」

私の想いは……………」

パンリの言葉を聞きながら、遠くで白い法衣を纏う中年の男が前の壇上へ出るのが見えた。

直後、店内の誰もが彼に注目する。

彼は厚い本を片手に、そして何の前触れも無く喋り出した。

一瞬にして、それに集中する周囲。

それは、今まで幾度と無く繰り返されている、ここでの情景なのだ
だと戒は理解した。

主宴場には既に地元の役人や高貴な立場の人間が集まっており。

中央の巨大なシャンデリアの下では、グッソとペッポが並び、親子で次々に訪れる客人と杯を交わし続けていた。

「グッソ中将。」

寄せる挨拶の波がひと段落したところを見計らい、ギルチが二人に声をかける。

「このたびの飛翔艦ルベランセの任務において、ペッポ准将を補佐したフィンデル＝バーディ大尉でございます。」

彼のうやうやしい紹介に預かり、後ろで会釈をするフィンデル。

「……ほう、そなたが。」

グッソ中将は、彼女の頭から爪先まで一通り眺めてから呟いた。

「道中、ペッポが世話になったようだな。」

「彼女は、なかなかいい働きだったよ、パパ。」

平然と言うペッポの言葉に、少し違和感を覚えながらフィンドルは再度敬礼をして、後退した。

「彼女も拝謁できて、光栄だと言っております。」

すかさず付け加えるギルチ。

「ふむ。」

息子はこれより更に重要な艦への配属となるゆえ、もう接点はないと思う。

だから、他の乗組員にも大儀であったと伝えておいて欲しい。」

「はい、必ずや伝えておきます。」

終始無言のフィンドルに対し、ギルチはまたもしても代わりに答える。

流石に間が持たないので、最後に深く礼をして、二人はその場を後にした。

去り際に聞こえる、彼等親子に媚びへつらう人々の賛辞。
それをフィンドルは本当に嫌な気分で聞き流していた。

「……で、どういふことなの?。」

「何がだ？」

フィンドルが上げた疑問の声に、ギルチが返す。

「私は……彼を殴ったはずなんだけど。」

「ああ、そのことか……。」

あからさまな苦笑を浮かべる彼。

「ペツポの奴、不時着時のショックで最近の記憶が無いそうだ。」

「……………」

フィンドルは呆れ果てて言葉を失った。

「しかもまあ都合が良いことに、自分が見事に指揮をして無事に生還したと思い込んでいる。」

「……まあ、放っておけ。」

「……………そうね。」

肩を落としながら、彼女は答えた。

久方ぶりの公の場に、昨日までの疲れが一気に甦ってくる。

「……………後は終宴まで、適当にくつろいでいてくれないか。」

ギルチはそう言っ、彼女から離れた。

「幹事は賓客への対応に忙しくてな。

帰りはちゃんと送るから、安心してくれ。」

自分勝手に言い連ねて主宴場を去る彼。

一人残されたフィンドルだったが、このような場所では寛くあてなどは無かった。

巨大な宮殿を目の当たりにし、クウが思わず緊張の色を浮かべた。

「武器を預からせていただきます。」

近付いた給仕に言われた通り、早々に自分の銀の剣を抜いて渡す脇のマクス。

それを真似して、彼女も続く。

「今は…もっぱら戦闘騎の操縦だけをしているらしいが…。
剣の腕はなまっていないのか、マクス？」

自身の腰の剣を抜くシザー。

「確かに、最近はあまり…」

「ならば今度、お前にも稽古をつけてやろう。」

「ぜひとも。」

その時は、手加減をお願いします。」

彼は不敵に笑みをこぼした。

少しも怖気つくこと無く、普段どおり会話を交わす両者を見て、クウの緊張は余計に高まる。

何せ、格式高い所に来た経験など、生まれて一度も無い。任務とはいえ、目の前の恐ろしく場違いな空気に、ついてきたのを少し後悔する。

やがて通されたのは、柔らかい絨毯が一面に敷き詰められた廊下だった。

羽毛のような踏み心地の中、両脇に並んだ給仕達に次々と礼をされながら三人は前へと進む。

その中で、シザーのみに耳打ちする一人の給仕。

「マクス、クウ。」

悪いが、二人で時間を潰しておいてくれ。」

彼女はその言葉を聞いた後、呟いた。

「手間が省けた。
今夜は、早く帰れそうだ。」

「やあ、先に一杯やらせてもらってるよ。」

階段の隅で顔をほんのりと赤く染めて、ギルチに向かってワイングラスをかざす優男。

「ひどいじゃないか。
せっかく従兄弟が尋ねてきたのに、今日まで一ヶ月も放ったらかしなんて。」

「いざ来ても、まるで構ってくれないし。」

「……すまん。
今夜の相手はおまえだけでは無いのだ。
それに、今はゴタゴタが特にひどくてな。」

ギルチは苦勞のにじんだ表情で答える。
相手は大して気にする様子も無く、手にしたワインを再び口にした。

「……ロディ。
今まで、何処にいた？」

そこで素朴な疑問を口にするギルチ。

「中王都市の人は親切だったよ。
美人だし、スタイルもいい。」

それに対し、嬉しそうに答える男。

「……やはり、女のところまで厄介になってたか。」

ギルチは諦めたように呟いた。

「しかし、こりゃ、素晴らしい宴だね。
やっぱり提督となると違う。」

「……まだまだだ。
目指すべきは、遙か上にある。」

「あまり……急いで権力を求めるなよ。
いつの時代も、出る杭は打たれるものさ。」

「わかってる。」

ギルチは、階段に一步踏み上がった。

「己の未熟さは、学生時代に嫌というくらい思い知らされた。
私に油断は無いはずだ。」

「昔から優等生の君が、かい？」

「今でも彼女の才覚に嫉妬しているのかもしれないな。」

私がただ一度として、模擬戦で勝てなかった相手なのだから。」

「そんな将の噂、聞いたことないねえ。」

たとえ学生時代のことでも、君に勝るほどの頭脳の持ち主なら少しは評判に上がるはずだが。」

男は口髭を撫でながら、興味津々の様子で聞いていた。

「……言い方が悪かった。」

勝てなかったが、負けもしなかったということだ。」

ギルチは続けた。

「彼女は自分の実力を隠すため、誰とも引き分け続けたのだ。それは勝ち続けることよりも難しいことだと思わないか？」

「…それは大したもんだ。」

「……いやはや、一生に一度は、そのような人の下で働いてみたいね。」

男は肩をすくめて言った。

「無理だな。」

お前に軍隊は似合わない。」

「そうだね、自分でもそう思う。」

そして、笑う彼。

「何より、お前のようなタイプを彼女は一番…」

言いかけたところで、ギルチは少し唸る。

「……すまん。」

これからまだ、賓客の相手を山ほどをしなくてはならんだ。

「ん。」

「…某国の重鎮が腕の良い操縦士を探している。

後で、必ず彼と会わせよう。

それまで、じっとしていてくれ。」

「持つべきものは、良き親友かな。」

男はそう言つて、摘んだグラスを軽く持ち上げた。

そして、ふらりと歩き出す。

「……じっとしていてくれよ。」

「そう警戒しないでくれ。」

……生理的現象を解消しに行くだけさ。」

男は笑顔で、空になったグラスをギルチに手渡した。

「……ふう。」

端で一息つくフィンデル。

主宴場は腰掛ける所も無く、気が休まらなかった。

造られた、きらびやかな光景。

天井から吊られた沢山のシャンデリア。

その下で宝石や貴金属を照らす光の反射は、普段目になっている陽の光とは全く違う異質を放っている。

身体の内まで滅入るような空気の中。

何気なく泳がせた目線の先に、彼女はそこで信じ難い光景を目にした。

厚い人垣を抜けた、視界の遠く。

どこかの格式ありそうな人間とグラスを傾けている鎧の男。

その身を包んだ、銀の鎧。

それは宴場の隅とはいえ、記憶にあれば気付かざるをえない存在感。

そして 見紛うはずもない。

彼女の喉が鳴った。

聖騎士マクス＝オルゼリア。

彼との邂逅は、バークからの報告を彼女の頭脳に呼び覚ます。

彼が本当にリジャンを討ち、炎団の艦を墮としたのか。

そして、本当にルベランセを謀り、捕らえようとしたのか。

素早く思いを巡らせるうち、やがて聖騎士は一人の女性騎士を連れて主宴場を後にした。

フィンドルの足は自然とそれを追う。

いかに危険があろうと、真実を確かめるという使命感の前では、それはかすんでしまった。

高鳴る動悸を抑え、彼女は魔窟を抜け出した。

「今朝の会議では世話になったな、シザー小団長。」

通された宮殿二階の一室。

「……ギルチ。」

彼女は扉を開けてすぐに呟いた。

「『あれ』を会議と呼ぶのか？」

騎士団を、随分と苛めてくれて。」

「学友のよしみで、手加減しろとでも？」

「…そんなことは言わん。」

ただ」

シザーは歩み寄ったが、用意されていた安楽椅子には腰を下ろさずに続けた。

「死人しじびとのような王を操る摂政と、『今度は』騎士団を潰す計画か。愚策の極みだ。」

「認識を誤っているぞ、シザー。」

去年の親王隊の粛清……あれは軍隊の意志とは無関係だ。」

対照的に椅子にゆつたりと座り、足を組んで、口元を締めるギルチ。

「『それ』を行った軍警察は、軍の名を冠しているだけにすぎない。存在そのものを軍隊と混同させる……それ自体が、既に摂政の狙いだと何故気付かん？」

「……さらばだ、ギルチ。」

今宵はお招きに預かり光栄の極み、積もる話も数多くあるうが、今は共に居れる立場ではない。」

厳しく背を向ける彼女の鎧が音を立てた。

「……そう慌てるな。」

君には、ひとつ、どうしても言いたいことがあったんだ。」

「……何だ？」

扉に手をかけたまま、シザーが訊いた。

「成婚の祝辞さ。」

お相手のヘリオドス卿は素晴らしい人格者だと聞く。心から祝福するよ。」

「風の噂というものは、どこにでも吹いているものだな。」

鼻で笑う彼女。

「……もう鎧を纏うのはよせ。」

……お腹の子供に障る。」

その瞬間、不意にギルチは言った。

「！！」

狼狽して、下腹部を無意識に触れるシザー。

「何故……それを…」

騎士団の者にさえ、誰にも教えてない秘密。
驚きのあまり、彼女は立ち尽くす。

「君が、自分の都合ごときで戦場を去る人間ではないことを、私は知っているつもりだ。」

いやに遠くから響き聞こえる彼の声。

「すぐにでも表舞台から去れ、シザー。」

中途半端な君の姿など、もう見たくはない。」

友の辛辣な、それでいて哀れむような言葉に押し黙る彼女。

「…胸に留めて置こう。」

そう言い切った瞳からは、既に色々なものが消えていた。

（我ながらひどい男だな、私は。

体の良い言葉で、友を蹴落として。）

その小さくなった彼女の背を眺めながら、ギルチは思う。

「この会場にフィンドルも来ている。
良かったら会わせるが。」

そして最後に投げかけられた彼の言葉に、彼女は足を止めた。

「無用だ。
いまさら、話すことなど何も無い。」

「まだ根に持っているのか…？
一度も勝てなかったことを。」

ギルチは笑った。

「勝てなかったことではない。
手加減をされたことに、だ。」

目を閉じ、二人が同じく思うのは。

三人で仲良く歩いていた、士官学生時代のお互いの姿だった。

「すみません……」

中庭で夜風に当たりながら、クウが呟いた。

「無理もない。」

私も初めての社交場では、緊張で気分が悪くなったものだ。」

マクスは淡々と声をかける。

「貴方が……ですか？」

「今でも、そんなに得意ではないな。」

「でも……上手く立ち振る舞っているように見えました。」

「要は『慣れ』だ。」

マクスは呟き、植えられた針葉樹の葉に触れた。

庭を後にしようとする二人の姿を、フィンドルは目を凝らして追う。

そして、いざ中腰の姿勢から立ち上がるとした時、彼女は固まった。

そこで思いがけないアクシデントが発生していることに気付いたのだ。

身を隠すために寄り添った小さな剣士の銅像。

なんと、その像が持つ剣が、自分のたるんだスカート部に引っ掛かっている。

考えられないような不覚。

だが悔やんでいる時間は無い。

（何故、ドレスは、人を追うのに、こんなにも機能的じゃないのかしら！！）

意を決して、スカートの裾を引き裂くフィンデル。

だが同時に、その像の剣も呆気なく折れてしまう。

それにより発生した金属音に驚き、気付かれたのではないかと、彼女は視線を二人に戻した。

だが、聖騎士達の姿は既に視界から失われていた。

（…しまった……！！）

彼等の進む方向を予測し、疾風の如く廊下に踊り出た彼女だったが、時は既に遅く。

誰も居ない、幾つも分岐している廊下を呆然と見詰める羽目になった。

ここは構造を知らない宮殿内である。

途方に暮れ、踵を返して振り向くフィンドル。

だが追っていた二人は突然に、その眼前の廊下から現れた。

方向感覚が狂った彼女は、こともあるうちに、彼等の正面側に出てしまっていたのである。

思いがけない遭遇に、フィンドルは言葉を失っていた。

一見して、マクスは動じていない表情。

女性の騎士は、自分の破れたドレスを注視しているようだった。

「……失礼。」

まるで何事も無かったかのように、彼女を横切る聖騎士。

「……待って下さい。」

マクスさん。」

その平静を装う彼に、一声かける。

「失礼だが……どこかでお会いしたかな？」

抑揚の無い声だった。

「お忘れですか…？」

飛翔艦ルベランセ副艦長の……フィンドルです。」

「…悪いが、記憶にない。」

変わらぬ彼の姿勢に、フィンドルは直感で理解した。

バーグの予想は、大きく外れていない。

「嘘をおっしゃらないで下さい！」

以前、貴方は戦闘騎でルベランセを訪れ、補給を受けたはず！！」

フィンドルは去ろうとするマクスの銀の手甲ガントレットを強く掴んだ。

「ろ、狼藉者……！」

事情を飲み込めないながらも、マクスを守るため、クウが袖に隠していた短剣を突きつける。

だが、眼前のフィンドルは動じる様子は無かった。

彼女の鬼気迫る表情。

短剣を彼女に伸ばしたまま、クウも何かを感じとる。

「！？」

そんな中、足元で空気が弾けた。

絨毯に付いた弾痕で、ようやく撃たれたことを悟る三人。

「おめでたい席で……よくないね。
そういうの。」

髪を掻きあげながら、曲がり角から現れる優男。

「……ぜんぜん、素敵じゃない。」

手にした黄金の銃。

その銃口からは、不思議と硝煙は上がっていない。

「ときに、御仁は聖騎士殿とお見受けいたすが、
理由はどうあれ……自身の目の前で婦女子達に手を向けさせ合う
ことが、君の騎士道というものかい？」

優麗な物言いに、場は静まり返る。

彼のただならぬ気配をいなすように、マクスは背を向けた。

「行くぞ。」

そして彼の号令に黙って従うクウ。

「今までの戦いで……人が……大勢死にました……！」

彼等を追うために一歩踏み出て、フィンドルは嗚咽と共に声を洩らす。

「貴方は、いったい何のため……人の道を外れるのですか！？
マクス……オルゼリア……！」

その寛恕無い言葉を背に受けて、彼はわずかに彼女に顔を向ける。

「私も君も、戦いを旨とする集団で生きると決めたのなら……あらゆる覚悟を決める……そういうことだ。」

「覚悟とは、手を汚す覚悟ですか！？」

彼女の問いに、マクスは何も答えなかった。
そして、今度こそ彼の姿は遠くへと消えていく。

「ちょっと……君……」

その彼等の様子を暫く眺めた後、乱入した男は拳銃を胸にしまい、優しい手つきでフィンドルの震えた手を握った。

「……く……っ！」

今までの流れによる鋭い目つきで、彼の顔を睨んでしまう彼女。
外の月に照らされたお互いの瞳孔が、交差した。

「……………!!」

そこでフィンデルは我に返り、改めて自分のスカートの惨状に気付く。

「……………どうしよう……………!?!」

顔を真っ赤にして、露になった腿を隠し、焦点の合わない視線で辺りを見回す。

「……………待った。」

ちよつと、じつとしてて。」

自分の肩掛けの一端を噛み、慣れた手つきで縦に裂く男。

そして彼女の腰元に腕を回してそれを縛り付けると、破れた部分は見事に隠れ、アレنجジを加えられた別物のドレススカートが出来上がる。

「……………!!」

その手際の良さに、啞然とするフィンデル。
だが恥ずかしさのあまり、自分の口元に手をやって、彼女は半分

混乱しながらその場から逃げだしてしまった。

男はそんな彼女を眺めつつ、先ほどの殺気を含んだ視線を思い出
し、味わっていた。

「……素敵だ。」

そして一言、呟いた。

「本当に……知らない女性なのですか？」

早足で廊下を先に行くマクスに対し、クウが訊いた。

「いや。」

先日、我々の手で捕獲しようとした飛翔艦の士官だ。」

「……ほ、捕獲？」

「あの件で、デチャードは最高の仕事をした。
だが、私と他の連中の不手際のせいで、余計な恨みを買っている
のだ。」

冗談のようなマクスの言葉に、クウは沈黙した。

「これから……どうするのですか？」

「数日は教会で待機となるだろう。」

マクスは立ち止まった。

「クウ。我々の任務は、通常における騎士団のそれとは大きく違う。」

今日は、それが良く解ったはずだ。

君は深く考えるべきだと思う。

なし崩し的に流されてはきつと後悔するに違いない。」

クウには何故か、マクスがその言葉を自分自身に言い聞かせているように思えた。

「許されるのなら……一度、故郷に戻らせていただいてもよろしいですか？」

「…構わない。」

「任務の前に…行っておきたいのです。」

……母の墓に。」

その言葉にマクスは頷いた。

しかし、それから先は、お互いに何も口には無かった。

白い法衣を着た男の、店内での講義が終わった。

学生達は誰もが暫くの間、黙ってその余韻に浸っている。

「フウシン先生！」

その男が各テーブルを挨拶で回り、そして自分の傍に来た時、パ
ンリは嬉しそうに声をかけた。

「パンリ君。

調子はどうかね。」

それに答えるよう、彼は笑い返した。

「良好です。

明日の試験……必ず受かってみせます！」

「私も楽しみだよ。

君が、私の研究室に来てくれる日が近付くと思うと……」

男は、戒の顔を見て言葉を止める。

「……おや、君は見た事が無い顔だな。」

「戒くんと言います。」

実は彼も、今年の受験を……」

そのパンリの言葉を聞くなり、男は顔色を変える。

「君、受験の申し込みは？」

「何のことだ？」

彼の言葉に、戒は素の表情で答えた。

「出してないんですかつ？」

パンリが驚きながら叫ぶ。

「出すも何も……俺様はさっき、この街に着いたばかりだろうが。」

「残念だ。」

それでは、受験資格が無い。」

表情を曇らせる男。

だが、もっとも曇らせているのは他の誰でもない、戒自身である。

「試験を受けるには、最低でも三日前までに大学側に書類を提出し、受理されなくてはならないのだよ。」

「ま、待て……。」

そんなバカな話があるか……！」

「……学校の推薦状はあるのかね？」

「……ある……こいつだ……。」

気を動転させながら胸元をまさぐり、長旅でしわくちゃになった封筒を取り出す戒。

フウシンはそれを受け取り、少し伸ばしてからそれを開けた。

彼が無言で中の書類を読みふけるその間、戒とパンリの二人は緊張しながら待ち続けた。

「レティーン神学校……首席合格者……とあるが……」

「……ああ。」

戒が今度はポケットから赤い十字架を取り出して見せる。脇のパンリはそれを見てすぐに、大口を開けた。

「証拠は？」

「……………」

無言で十字架を握り、力を込める戒。

その先端がゆっくりと伸び始める。

「なるほど。」

わかった、もう結構だ。」

フウシンは見慣れている様子で、すぐに制した。

「すごい……初めて見ましたよ……
本物の聖十字……。」

好奇の目で見詰めるパンリ。

「聖十字は、一番初めに発動させた者以外には反応しない。
本人に間違いないようだが……。」

男は推薦状を再び一通り眺め、顔をしかめたまま皿の上のナイフ
を手にした。

「……！」

そして、その刃を自分の指先にあてがい、引いた。
テーブル上に滴る鮮血。

「何やってんだ……！」

戒の腕が咄嗟に伸び、彼の指を掴む。

「なるほど……」。

これが、てんめいだいこのくらい天命第五位『犠牲の月獣』……か。」

戒から手を離し、瞬時に治癒された、切れたはずの指を不思議そうに眺めながら男は呟いた。

「え!？」

仰天して、目を見張るパンリ。

戒の左の指の付け根には青白い輪が光っている。

「……学校の奴等……そんなことまで書いているのか。」

苦々しく、戒が言った。

「ああ、君について、詳しく書いてあるよ。」

頷きながら続ける男。

「……いいだろう。」

明日は大学に来たまえ。

これは、特例で私が受理するよ。」

そしてカップを手にとり、果実酒を口に含む。

「すごい、すごいよ、戒くん!!
君が…天命人だなんて!!」

無闇に高揚した声で、パンリが身を乗り出した。

「ぜひ…握手して下さい…!!」

「よせ、気持ち悪い。」

近付いた彼の顔面に、軽い平手を浴びせる戒。
全く聞かずに、少年は目を潤ませながら感動を続けていた。

「レティーンの神学校を首席卒業、それだけでも素晴らしいのに!!」

声上がる瞬間、店内の客は皆、読んでいる本を下げて二人のテ
ーブルを見詰めた。

「…いや…それほどでもねえよ…。」

その痛いほど真摯な彼等の視線を避けるように、戒は身を縮ませ
る。

「一体、今まで何をしていたんですか？」

こんなにギリギリに到着して……今回は先生のご好意で何とかな

ったものの…。」

「イヤ…まあ…色々あってよ。」

「まあ…レティーン首席の成せる技かもしれませんが…油断は禁物ですよ…」

「私はそろそろ失礼しよう。」

フウシンは咳払いをして、おもむろに立ち上がった。

「……先生！」

…種族の異なる私でも…中王都市の神学者になれるでしょうか…
…？」

パンリも立ち上がって、それを送る。

「クレイン教の恩恵は全てを越え、万物に与えうるよ。」

返すフウシンは優しく微笑んだ。

「……少しはマシのようだな。
…この教師は。」

脇目でそのやりとりを眺めながら、戒が呟いた。

「レティーンも同様でしょう?」

「いいや。」

「どいつもこいつも、自分のことばかり考えるクズ野郎ばかりだったぜ……。」

声の調子を下げる彼。

「そろそろ戻るぞ。」

「明日のために……休まねえと。」

詳しい話になる前に、戒はそこで切り上げた。

マクスとの邂逅^{かいこう}から、もう数刻ほど経つだろうか。

気を静めるために飲んだアルコールの効果も薄く、落ち着かない時間が続く。

空白の時間が訪れる度、先程スカートを直してくれた男のことがフィンドルの頭には浮かびまくっていた。

傍に近付く、ワインを運ぶ給仕。

気を紛らわせるために、彼女は再びそれに手を伸ばす。

だが、そこで他人と指先が触れ合い、フィンドルは驚いて手を引いた。

「あ、すみません…」

「いや、こちらこそ…」

向かい合って謝る二人。

一度頭を下げてから、同時に顔を上げる。

「え？」

フィンドルは間抜けな声を洩らした。
それこそまさに頭に浮かべていた、廊下で逢った男だったのだ。

「おや。」

目尻を下げながら、心底嬉しそうに笑う彼。

フィンドルは同様の表情になっている自分に気付いて、下を向いた。

胸の鼓動が早くなるのを感じる。

「あ…あの！

さ、先ほどはどうも……。」

声をうつわずらせながら、礼を言うフィンデル。

「さっきは驚いたよ。」

特に事情は聞かないけどね…。」

「すみません…。私…お礼も言わずに…」

「お礼はいいよ。」

それよりも…二人の刺激的な出逢いと再会に、乾杯しないか。」

「え……?」

給仕からグラスを二つ取り、傾ける男。

それを受け取って、彼女は言う通りにした。

「いや、友人がこの宴の中に居るんだが、実に忙しい奴だね。」

僕はとづくに待ちくたびれてしまってる。

…だけど、ここで良い話し相手が出来て、本当に良かった。」

「…わ、私も似たようなもので……。」

奇遇ですね…。」

フィンデルは伏せ目がちに、今度はしっかりと男の姿をうかがった。

細身の身体と、男性の割には長い髪。

その髪は淡い茶色で、口元に生やしている髭は、よく手入れが行

き届いていた。

何よりも礼服を着こなしていて、高貴な印象を受ける。
そして目が合うと、彼は垂れ目がちの目元を一層に下げて微笑んでくれるのだ。

「おや、結んだ所が少しほつれてるようだ…」

会話の途中、男はフィンドルの下に屈んだ。

「あ…」

スカート部分の布を結び直してくれる彼に対し、緊張してそのまま直立で硬直するフィンドル。

「…！」

彼のしなやかな手の平が、彼女の内腿に触れた。
急な感触に、びくり、と身体を振るわせる彼女。

初め、それは不可抗力の偶然だと思った。

だが、腰に回されたはずの彼の手は下がり始め、ついでには妙な動きへと変わる。

フィンドルは、みるみるうちに鳥肌が立つのが自分で分かった。

女性の金切り声に、宮殿内が騒然とした。

「何だ……！？」

今のニワトリを絞め殺したような声は！？」

丁度、全ての用件を終え、主宴場に戻ってきたギルチが叫ぶ。

駆け足で向かうその先には、既に人垣ができ、その中心には怯えて座り込んでいる女性。

フィンドルの姿があった。

ギルチは客人達に謝りつつ、かきわけて前へ進む。

「……どうした？」

震える彼女の肩を抱き、彼は声をかけた。

「こ……この人が……！」

震える指。

その先には、飄々（ひょうひょう）として肩をすくめる男。

「……ロディ、お前か……」

彼を見ながら、ギルチが呆れ声を洩らした。

「……ギルチ……この人……知って……!？」

「場所を変えよう。」

目を白黒させて放心状態のフィンデルの手を引き、男にもついてくるよう命ずるギルチ。

やがて、騒ぎの当事者が去ることによって、場は平静を取り戻していった。

「……紹介しよう。」

主宴場を抜け、廊下を早足で進みながらギルチは言った。

「元、ガザン王宮銃士隊。

ロディッサー＝ファリールデン殿だ。」

ギルチの言葉に、一歩前に出る男。

「ロディと呼んでくれ。」

さらに、おどけながら礼。

「こちらは、フィンドル「バーディ大尉。」

その合図で、フィンドルは無言のまま、胸の動悸を抑えながら軽く会釈をした。

三人は人気の無い廊下を抜け、夜風が涼しいバルコニーへと出る。

「一体、何があった？

宴の席で、みっともなく大声を上げるなんて…君らしくないぞ。」

予想はついていたながらも、ギルチはそこで二人の顔を交互に見ながら訊いた。

「この人が…私の…」

顔を真っ赤にして、うつむくフィンドル。

「…スカートの中に手を入れてきて…！」

恥辱と共に搾り出す、彼女のためらいがちな言葉に、ギルチは溜め息をついて頭を下げる。

「ロディー…！」

そして、子供に接するような態度で叱るギルチ。
だが、対する相手は、相変わらず肩をすくめて笑っている。

「いやあ、つい。」

「つい、じゃないだろう!」

「何を目くじらを立てているんだ。
まだ、おしりしか触ってないのに。」

「!?!」

問題の部分を両手で押さえて、フィンデルが唇を震わせて睨んだ。

「帰らせていただきます!」

それは完全に怒り心頭の様子。

「まあ、誤解はあると思うが。

根は悪い奴ではない。許してやってくれ。」

無理を承知で、ギルチが引き留める。

「このロディとは、国は違えど遠縁だな。
子供の頃からの付き合いなんだ。」

フィンドルは背を向けたまま、振り向かず足を止めた。

「彼はこう見えても、王宮銃士隊で最高峰の栄誉表彰を受けている。騎馬の名手にして戦闘騎の操縦の達人……。かつて、『空駆ける天馬』と名を馳せた男だ。」

彼に対しての賛辞を、必死に並べ連ねるギルチ。だが、彼女は疑いの目を向けている。

「悪いところも全部話さないと、信じません。」

そして、フィンドルは断言した。
ギルチが頭を強く掻く。

「……だがこの通り、こいつは女グセが異常に悪くて……。裏では、『空駆ける種馬』と囁かれていたのも事実だ。」

「僕は、誉め言葉と受け取っているがね。」

ロデイが、全くもって勘違いの笑みを浮かべた。

目の前のフィンドルは当然、冷めた目つきのまま睨みつけている。

「こいつは、ガザンの第三皇女をすっかり妊娠させた挙句、駆け落ち。」

そのくせ、今は独り身だ。

彼の現在がどういう状況か……それで大体、察してくれ。」

ギルチは齒を食いしばって、いたたまれない表情で事実を口にす
る。

「……………」

それを聞くにつれ、彼女のロディに対する視線は、やがて汚物を見
るような目つきに変わっていった。

「フィンデル大尉、ところで今夜これからの予定は？」

「……………非常に有益な情報、ありがとうございました、ギルチ提督。」

ロディを無視し、ツカツカと乾いた足音を響かせて去って行くフ
インデル。

「おい、本当に帰るのか？」

「もう一秒たりとて、ここにいたくないの。」

彼女の突き刺すような視線で、ギルチの背筋に悪寒が走った。
こうなると、もはや引き留める術は無い。

「……………だから……じっとしててくれと言ったんだ……。」

彼女が姿を消した後、ギルチが呟いた。

「…反省してるよ。」

ロディが軽く返す。

「ちなみに…彼女が、さっき話した私の同級生だ。」

「へえ。」

偶縁、奇縁だねこりゃ。」

「言っておくが……君を雇わせるのは、別の人間だぞ。」

「……何で？」

「水と油は、決して馴染まないからだ。」

「さあ、どうだろうね。」

ロディは指を立て、左右に揺らす。

「その喩えは、男と女には……当てはまらない。
一見して合わない者同士ほど、以外と相性はいいものさ。」

その自信に満ち溢れているロディの横顔に、ギルチは再び呆れ返っていた。

そんな中、バルコニー前を小走りで通り抜ける太めの男。

「サネトロ少将。

貴方自ら…どういたしました？」

「おお、ギルチ殿。

ここに居られたか。」

ギルチから声をかけられると、彼は立ち止まり、息を切らせながら近付いてくる。

「グッソ中将がお呼びだ…。

少し、来てもらいたい……。」

彼は血相を変え、顔中から玉の汗を噴き出していた。
それは、尋常ならない空気だった。

「すごいんです！

戒さんは、天命人なんですよ！！」

帰るなり、パンリが興奮して第一声を出す。

「それも、レティーンレティーンの神学校を首席で卒業なされて……」

ところが、ウェンウェンは既に横になり、寝息を立てていた。
袈裟けさは脱ぎ捨て、身体には薄布を巻いている。

「この野郎……変な奴だな。」

そんな彼から不思議と匂い立つ、中性的な色気を感じながら、戒
が言った。

「まあ…確かに変わってる方ですね。」

このあたりに住んでいる人達に比べますと。」

パンリは言いながら、毛布を戒に手渡す。

「でも、ウェンウェン様さまは物知りだから、色々と楽しい話を聞
かせてくれるんですよ。」

そして、目を輝かせながら少年は続けた。

「大聖典では、凶獣に支配された大陸を解放するために『創る者』
が神様に力をいただくという
くだりがあります。」

ウェンウェン様さまによれば、その時、神様は姿を変えて人に乗
り移ったとか。

それが天命の輪の起源で……」

「まともに、変人の妄想に付き合ってたんじゃないよ。大聖典に書いてあることが事実だと思ってたのか？」

「あんなのは、昔の奴が教徒を支配するために作り上げた創作だぞ。」

戒は座りこみ、自分の身体に毛布を巻きつけた。

「貴方は修道士なのに教義を信じないんですか？」

「クソくらえだ。」

「そんなもの、何の救いにもなりやしねえ。」

「……戒くんって、ずいぶん擦れた性格してるんですね。」

「本当の話だ。」

「神がいるっていうんなら、その証拠、今すぐ示してみろ。」

その言葉に何も答えられず、パンリは窓のカーテンを閉めた。そして、消灯してから横になる彼。

「……私、今年の試験を最後にしようと思っているんです。」

そして、闇の中で少年は言った。

「最初の受験から、もう五年になりますし……。故郷の村長からも、そろそろ帰って来いって……」

その言葉に何も答えず、戒は寝たふりをした。

「だから……明日…頑張りましたよね…お互い…」

途切れ途切れになる、言葉。

そして長い沈黙が訪れた。

「来たか。」

お前に、とても素晴らしい知らせがある。」

ギルチが部屋に入ると、そこで待ちかねていたように、グッソは笑った。

「今朝の会議、何故、我々が騎士団に関する情報を得ていたのか、不思議ではなかったか？」

「……向こうに…内通者でも？」

答えるギルチに対し、いやらしい顔で笑うグッソ。

「…惜しいな。」

だが、流石だ。いいところを突いている。」

ギルチは横のサネト口の視線に注目した。
いつもグッソの動向ばかり気にする腰巾着が、今に限っては落ち着かない様子で、あらぬ方ばかりを見詰めている。

「事実、『彼』は今日という機会をものにするため、この情報を我々に流したのだからな。」

「……彼？」

「見よ。」

我が軍は、ついに騎士団を廃する切り札を手に入れたぞ。」

嫌な空気を肌に感じつつ、ギルチはグッソの視線を追った。

「紹介しよう。」

部屋の隅。

影になった部位から、現れる一人の男。

視界に入り始める、薄汚れた鎧。

まず、その胸元には一本の赤い線が入っているが見えた。

「中王騎士団、赤華軍師、レイキⅡモンスロン殿だ。」

その言葉を合図に、疲れきった表情で会釈した小柄な男。

(…これほどまでに愚かとは　　！)

反射的に礼をするために頭を下げるギルチ。

心中では狼狽しており、床をきつく見詰める。

(…何故、すぐに拘束して騎士団に送り返さない！？
これでは、連中の狩りの獲物を…自らの腹中に招き入れたことになるのだぞ　　)

ギルチは、腐臭とも似つかわしい匂いを鼻腔に感じた。

それは飛び切り強烈な、内乱の匂いだった。

3

「準備はいいですか、戒くん？」

その朝は、温かなスープの香りとパンリの声で目覚めた。

半身を起こしながら、自分の調子をうかがう戒。

ここ数日で天命の輪を使った代償の痛みも、完全に消えている。

少し前までは夢見は最悪だったのに、それが今では嘘のように抜群に良い。

床での雑魚寝だったが、身体は思い切り休めることが出来たようだった。

「朝食を食べたら、出ましょう。」

ここから、大学までは歩いて10分ほどですから、ゆっくりと。」

炊事を終え、てきぱきと床に軽食を並べるパンリ。

しかし、その置かれた食事の脇では、いまだにウエンウエンが寝転がっている。

「……………いつまで寝てるんだ、こいつ。」

その無防備な背を眺めながら、戒が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「ウエンウエンさまは、いつも気が済むまで寝ます。」

「…いい身分なことだぜ。」

こんがりと焼かれた小さなパンをつまみながら、二人は同時にスープを飲み干す。

「ねえ、戒くん……」

パンリが何かを言いかけたところで、不意に立ち上がる戒。

「なるようにしか…ならねえだろ。」

彼は両手をポケットに入れ、窓の外を見詰めた。

「……ちっちゃいお嬢ちゃん、あんたがホントに、これを運んで来たのかい？」

小馬鹿にするような口調で、プレオルン市のギルドの親方は言った。

そして、一振りの刀と添え付けられた書状を互いに見ながら、机の高さにも身長が満たない目の前の少女を
怪訝けげんそうな目をする。

「……そうだ。」

何か、文句、あるか？」

そこで、世羅の肩に手をかけて、後ろのザナナが野太い声で代わりに答えた。

「……い、いえ……。
それじゃあ、報酬ですね。」

その威圧感に、態度を一変させる親方。
彼は前歯の無い歯を見せて愛想笑いを浮かべると、いったん机の下へ潜り、報酬の入った封筒を出す。

そして世羅は、背伸びしながら、両手でそれを受け取ったのだった。

「……嬉しくないのか、世羅？」

ザナナが訊いた。

「え？ 嬉しいよ？」

少女が返すそれは、間違いなく笑顔のように見えた。

「……そうか。」

ザナナが胸を掻きながら言う。
そして用件を終えた二人は、自然に足を外へ向けた。

「あ、待った！ お嬢ちゃん！！」

そこで、後ろから主人が慌てて叫ぶ。

彼は、別の書状を振り上げ。

さらに驚くことに、届けたはずの依頼品をもつ片方の手に握っていた。

バーグは、リジャンの残した財産を預ける手続きを、一足先に銀行で済ませていた。

自分ですら利用したことのない施設を、まさかこのような形で使うとは思わなかった。

そんなことを思いつつ煙草を吹かしながら、柱に凭^{もた}れ、雑踏の奥のギルドを何気なく眺める。

「…バーグさん…すまねえが、そりゃ無理だ。」

手にした新聞で顔を隠した小男が、バーグの背の柱越しに言った。

「騎士団の最近の動向を探るなんて……情報屋なら、わけないだろ？」

「それ自体はねエ…。」

返される、煮え切らない彼の言葉にバーグは眉をひそめた。

「なあ、そこをどうにか頼むぜ。
昔のよしみで…」

「わかつてるだろ、バーグさん。
確かに、あんたにや世話になったが……ギルドのブラックリスト
に載ってるあんたを助けたとバレたら、
おれは商売が出来なくなっちまう。」

そこへ、ギルドから出て来る世羅とザナナの姿が見えた。
すかさず、バーグは彼等に向かってわずかに手を上げる。
情報屋はそこで初めて、バーグの全身を真っ直ぐに見た。
そして、意外と軍服が似合っていることに、笑いを洩らす。

「悪いけど、もう行かねえと。
最近……こつちの世界も忙しいんで。」

「何か…あつたのか？」

「裏路地に貧民街があるでしょう？
最近、そこを流れる川の下流で、国籍不明の死体が沢山上がった
んだ。」

情報屋の声が低くなる。

「それも全員、一刀の下で斬り伏されている……。調査した警官の話によれば、殺った奴はかなりの手錬だそうだ。どこかの犯罪組織の内輪もめだって噂もあるが…詳細は分からねえ。

物騒な世の中さ。」

その話に、バーグの眼光は鋭くなった。

「そうか……わかった。

俺がそのブラックリストってやつから外される日が来たら、また頼むぜ。」

「へへ……そりゃ、無理でしょう?。」

そう言って、情報屋は鼻をこすりながら離れた。

それと替わるようにして、バーグと合流する二人。

「…どうした?。」

だが、世羅が抱えて戻ってきた刀を見て、彼は声を上げる。

「仕事が達成できなかったのか?。」

「うっん……よくわかんないんだけど……」

はつきりしない世羅の手から奪う書類。

その上には、次の仕事の内容が走り書きされていた。

「……運んできた品を…また別の場所へ運べだど!？」

それを一目見た瞬間、肩を振るわせて怒るバーク。

「色々な地点を中継して運ばせるなんて…まるで、密輸みてえな仕事じゃねえか……!!」

…この刀の仕事……ちよいとキナくせえぜ…。」

直感で物を言い。

「ちょっと、ひとこと言って来てやる…。」

彼は血相を変え、ギルドに一步近付いた。

「……む。」

しかし、直後に立ち止まる。

(俺は……立ち入り禁止だったな…)

上下の歯を強く噛みしめ、昔、ギルドの主人の頬を捉えた拳の感覚と葛藤するバーク。

「ボクやるよ。」

最後まで、やると決めたことだから。」

そこでタイミング良く、世羅が言った。

「……まあ……そうだな……」

バーグがもう一度、書類を眺める。

「……今度は日時に指定がある……」

依頼主は、20日後に中王都市の首都にて待つ……か。
随分と時間が空いてるな……。」

煉瓦で造られた正門。

大学を囲む、権威ある壁。

中王神学校大学部。

だが、いざそれを目の前にしても、もはや現実感薄い。

何故ならば、その建物はあまりの大きさに、地上からその全てを
目視することは不可能だったからである。

校舎正面の一部を視界に捉えるだけで精一杯な、その途方もない巨大さは、戒に驚く余裕すら与えない。

「こつちですよ、戒くん。」

慣れた足取りで敷地内に入り、既に先へと進んでいるパンリが促す。

他の受験生と同様、戒はその大学の門をくぐった。

「一般入試は、第二から第四学棟……。」

戒くんは推薦入試だから…第一学棟ですね。」

パンリが掲示されている案内を指しながら説明を施す。

「……じゃあ、試験終了後にまた会いましょう。」

「……ん……ああ。」

一方の戒は、虚ろな顔で答える。

数歩行ったところで、パンリは不安から振り向いた。
周囲を見回しながら、戒は危なっかしい足取りで進んで行くのが見えた。

(……本当に平気かな?)

慣れている自分と違い、戒は明らかに戸惑っている。

筆記用具など、試験の準備は万端だろうか。

パンリに他人のことを気にしている余裕などはないのだが、つい心配になってしまう。

だが、そんなことを思っているうち、大学側の係官らしき人物が戒に近付き、何やら話し始めたのが見えた。

そして、彼等に案内されるように進んでいく彼を見届けてから、パンリはようやく歩き始めた。

「あれは？」

ザナナが、路地の隙間を注視しながら言った。

細い道の奥に、みすばらしい身なりの人間が集まっているが見える。

その集団の中には、数名の不笑人ふせわいじんの姿も認めることが出来た。

「……貧民街スラムだな。」

中王都市には、至るところにある。」

通りの脇にあったベンチに腰かけて、バークは答える。

「……何か、ザナナが力になれることがあるだろうか。」

「そりゃまあ……」

豹頭を見上げながら、彼は濁した。

「……ザナナ、行っちゃうの？」

世羅もバーグの横に座りながら、首を傾げて訊いた。

「困っているものがいたら、助ける。
それがザナナの生きる道だ。」

平然と答えるザナナ。

「いちいち堅苦しいんだよ、おめーはよ！」

ベンチの背もたれを強く押しながら、胸元から煙草を出すバーグ。

「森で凶獣にやられた傷も、まだ完全に癒えてねえんだろ。
自分の信念を貫くのももっともだがな、もう少し落ち着いて生き
ろや。」

「……世羅は、これからどうする？」

バークの言葉で思い出し、自分の腹をさすりながらザナナが訊いた。

「お師匠には…好きな場所を決めたら、住むところを探せって。」

「……いいか、都会には悪い奴が沢山いるんだ。それこそ、女の子にとっちゃ、害虫みたいな野郎がうじゃうじゃいる……」

一人暮らしってのは、想像以上に危険なんだぞ……」

娘に説教するような口調の自分に気付くバーク。
思わず口をつぐんだ。

「バーク？」

世羅とザナナは揃って顔を見合わせて言った。

「……ああ……そうか。」

この感覚……なんだな。」

一人、納得してバークは立ち上がる。

「おい、一回戻ろっや。
……ルベランセに。」

静かな緊張感を漂わせた廊下を、少年は早足で進んでいた。
行く教室、教室を覗き込み、戒の姿を探すパンリ。

結局、あれからまた不安になり、彼は推薦入試が行われる棟まで足を伸ばしていた。

試験の開始時間まで余裕も無かったが、着席した戒の様子が確認できるまでは、どうも落ち着かない。

気が付けば、自分の受験場を飛び出していた。

そしてやはり、どこの教室も、誰もが席を離れずに本や参考書を読みふけている様子。

各階の廊下や便所。

当然のことながら どこを探しても、この期に及んで油を売っている人間など誰も居ない。

(……戒くんが……いない……?)

不安が現実になったことで、パンリの足は段々と速度を増していく。

(…きつと、あの後…迷ったんだ……)

やがて鳴り響く、試験の開始間近を知らせる鐘。
無情な時は、過ぎつつあった。

大学敷地内の庭を通り、案内されるまま着いたのは離れの建物。
戒が通された個室は整頓されていて、ほどよく小奇麗に保たれていた。

そこへ聞こえる、大きな鐘。

先の鐘と違い、音量も大きく、長い響きだった。

とりあえず椅子に腰掛け、首を曲げて窓の外をうかがう戒。

今、自分が居る所は、試験を行う場としては、やはりどうもおかしい。

この離れに着いてからというものの、受験生らしき人間と一度も出くわしていないのだ。

「 本日中に、こちらへ荷物をお運び下さい。
戒様。」

「!?!」

唐突に、背後に揃っていた三名のメイド達に声をかけられ、戒は

驚いて立ち上がった。

「私どもが今日から貴方様の身の回りの世話をさせていただきます。

」

「ちょ、ちよつとまで!」

続けて伸ばされる彼女達の手をかわすことも出来ず、服を掴まれる戒。

彼は身を擦^{よじ}って抵抗するも、あっさりと上着の修道着を脱がされ、別の服を瞬く間に着させられる。

「なかなか、似合うぞ。

戒「セバンシュルド教授。」

掛けられる声。

その部屋を通りがかった白い法衣の男が目の前に居た。

それは昨夜店で対面した大学講師、フウシンであった。

気が付けば、強引なメイド達は皆、彼に向かって深々と礼をしている。

「……教授だと?」

着せられた、紺色の法衣を直しながら、戒が訊く。

「驚くことはない。

その待遇で、大学は君をむかい入れたのだ。」

「……大学じゃなくて……てめえが、だろう？」

戒の言葉に、笑うフウシン。

「察しが良いね。」

「何を企んでやる？」

「……何も企んでいないさ。」

懐疑の眼差しを受け流しながら、彼は涼しい表情で答えた。

「……早かったな。

もう、試験の方は終わったのか？」

帰ってきたパンリに対し、床に横になっているウェンウェンが後ろを向いたまま声をかけた。

「……戒くんは……戻って来ていませんか？」

「いいや。

どうしてだ？」

「試験会場の何処を探しても、いないんです。
だから…忘れ物でもしたんじゃないと…」

「……君の試験はどうした？」

「私は何回も受けているから、いいんです。
それより、はるばる遠くからやって来て、才能がある戒くんの方が心配で……」

あちこちを探した回った疲労から、座り込むパンリ。

「…そうか。

あいかわらずだな、君は。」

姿勢を直し、ウエンウエンは彼の方へ身体を向けた。

「もしも、それが君の思い過ごしで、実は彼はうまくやっていたら、
どうするつもりだ？」

そして訊く。

「もしそうだったら、それに越したことはありません。」

パンリは、はっきりと答えた。

「……とりあえず、休みなさい。
相当、息が上がってるぞ。」

ウェンウェンは言った。

パンリは彼に従い、その直後に力尽きて、だらしなく床に倒れこんだ。

戒は先の場所が、選ばれた者達のための特別寮であることをフウシンに説明された後、研究棟を順に案内されていた。

礼拝堂。

大小の講義室。

そして、膨大な資料量の図書室。

それらを一通り巡った後、最後に源法術科の研究室の一つを覗く。

そこでは、額を寄せ合って、議論する者達。

また、辞書を片手に頬をこすり付けるようにして、机で執筆作業をしている者達。

誰もが何かに取り憑かれたかのように、勉学に励んでいる。

「みんな、熱心だろう?」

フウシンは言った。

「……《重・針》ガン・ピア。」

そして唐突に手の平を壁に付け、原法術を唱える彼。

「…彼らが見つけた新種の源法術だ。」

その手を離すと、針のような無数の穴が壁に空き、手形を造っていた。

「だが、この程度を一つ編み出すのに丸三年がかり。所詮は、凡夫の仕事だな。」

「……?」

フウシンの口調に、戒の表情が曇る。

「君の紺の法衣は、この白の一つ下だ。」

フウシン本人は、自分の纏う布を摘んで笑った。

「白の上は、最高位の紫の法衣しかない。君の破格の待遇が解ってもらえたかな?」

「……そんなことより、俺様の試験は!？」

「君に試験など必要ない。」

言い切る彼。

「見ただろっ。」

あの学に対して、盲目的にひたむきで、苦心する学生達の姿を。」

視線を再び研究室に向ける彼。

「どんなに頭の良い者が集まろうと、既に貪りつくされた学問を拓くことは容易ではない。」

フウシンは、戒の胸板を指先で突いた。

「そして現実はこちらだ。」

一握りの才能あるものだけが、努力無くして地位を手に来る。」

「それが俺様だというのは。」

戒が吐き捨てるように言った。

「君のその才能があれば、中王都市のどこでも重用される。」

口利きは、私が行おう。

私は幸い、顔が広いからな。」

「……その手に乗ると思っっているのか？」

目を閉じ、眼鏡を外す戒。

「……。」

フウシンは、押し黙った。

「用意が良すぎるんだよ。」

既に俺様の役目が決まっているかのように聞こえるぜ。」

「いやいや……全く……。」

思っていた以上に賢いようだな、君は。」

笑みを浮かべ、彼は続けた。

「摂政……ゼン閣下を知っているかな？」

「……知らん。」

「この国に来て間もないから、無理もあるまい。」

フウシンは自分の手を背に回し、廊下を進んだ。
戒もそれに続く。

「いずれ耳にするだろうが、今この国で最も権力のある人物と憶えておくといい。」

……その御方が所望している人材に、君が適役というわけだ。」

「俺様を売って、お前は何を得る？」

「……地位と、研究の費用だ。」

いささか現実的な話で申し訳ないが。」

「お前は今までそれを繰り返してきたってわけか。」

「送り出す機関は、毎年それぞれ違うがね。」

平然とした口調でフウシンは答え続けた。

「てめえ……人を物か何かと勘違いしてるんじゃないかねえのか？」

「綺麗ごとを言うのはよせ。」

君は望みを叶えるために、ここに来たのではないのか？」

「……………」

戒が足を止める。

「ならば、手段など選ぶべきではない。」

「俺様は地位や金なんざ興味はねえ。」

必要なのは、ここの大学の書庫と知識だ。」

「……ほう。」

小馬鹿にしたような目つきで、振り向きざまに戒を睨むフウシン。

「俺様には、救わなければならない奴がいる。それだけのために、ここまでやって来た。」

「確かに……あの推薦状には、呪術科の志望とあったな。だが、一研究生となったとして……君はいつたい何年かけてそれを成すつもりだ？」

「それは……」

「学問を甘くみてはいけない。君の目的への早道は、人の上に立ち、人を使うことだ。」

フウシンは再び前を歩き出す。

「それに……君が持ってきたあの推薦状の中身は、君に対する誹謗中傷だったのだぞ。」

「……何!？」

彼の発した言葉に、戒が言葉を荒げた。

「戒「セバンシユルド。」

勉強も口々にせず、教師に対する暴言・暴力の連続……。

おまけに、脅迫で首席の地位と推薦を得たこと……。

女教師との不純な交友があったこと……。」

内容を思い出し、読み上げるフウシン。

「……黙れ。」

戒は思わず、彼の襟元を掴んだ。

「なるほど、よほどひどいことをしてきたことが予想できるな……。

加えて、あの書類には君のことを問答無用で不合格にして欲しいとも嘆願してあった。

彼等の……最後の反抗というわけだ。」

「あの……野郎ども……！」

「だが、安心したまえ。

このフウシン。

レティーンの間中よりも、器は遥かに大きい。」

戒の手を掴んで離し、彼は言った。

「君がいかに傍若無人な者であろうと、私は受け容れてみせる。

そして、君の才能を余すところなく、使わせてやろうではないか。」

戒の目の前で、彼の腕は大きく開かれた。

「君が君自身を生かすために、ここに来たのは、全く正しい！
中王都市へようこそ、戒〃セバンシユルド！」

そして講義で養われた、彼の高らかな声が廊下に鳴り響いた。

昨晚の酔いが今日になって回ってきたのか。

フィンデルはあまりの体調の悪さから、胃薬を片手に食堂の厨房内をうろついていた。

「ここに居たのか、副長さんよ。」

そこで、バーグに声をかけられる。

「……飲み過ぎか？」

丁度、粉末状の薬を口を上にして飲む寸前の彼女を見て、彼はさ
らに言った。

「まあ…そんなところ…ね。」

フィンドルが照れ隠しに笑う。

「……ちょっと見てくれ。」

手頃な高椅子に腰掛け、カウンター越しに厨房に手を伸ばすバグ。

「これって……!!」

差し出される一枚の紙は、身元引受人の証明書だった。
署名欄には、バグの汚い字が殴り書きされている。

「こういうわけだ、頼む。」

世羅を……もう少しだけここに置いてやってくれ。」

豪快に頭を下げる彼。

「ここで働くうち、気持ちも整理がついて、落ち着ける場所も探せるはずだ。」

「ここなら、あいつの目標としている飛翔艦乗りも近い。」

「……わかりました、受理します。」

あっさり答え、水で苦い粉末を一気に喉へと流し込むフィンドル。

「貴方が申し出てくれなかったら…私がやったと思うわ。戒くんと約束したから。」

そして、手を拭きながら言った。

「そ…そうか。」

良かった…。」

一方、安堵の表情で一杯の彼。

「でも、どうして…」

「他人なのに、そこまで面倒を見るのかって？」

バーグは笑った。

「俺には、世羅と同じ年頃の娘がいてよ…。」

だが、そいつには手間がかからなかったせいか、どうも父親の気持ちにはなれなかったんだ。

その分、今になって手間ってやつを味わいたくなったのさ。」

彼の心意気に感心し、フィンドルは頷いた。

「……そのことについては、後は任せて。」

ところで、バーグ…騎士団のことなんだけど…。」

「ん？」

ああ、無理はしなくていいぜ。

あんたは軍隊の士官、限界ってのがあろう？」

「…いや、そうじゃなくて…」

彼女は昨夜の件を言いかけてやめた。

結局のところ、真相はうやむやにされてしまったことは否めない。それに下手に教えてしまえば、バークの性格では、近場に居るといっただけで騎士団の駐留場まで乗り込んで行きそうな恐れもある。

この件に関しては、時が経つことで好転するのを待つしかなかった。

「ところで、ルベランセは…少しの間ここに居るんだろ？」

「ええ。」

修理もあるし、しばらくは…」

バーク自らが話題を変えたことで、フィンデルはその気持ちをそっと胸にしまった。

「なら、今から自分の家に顔を出してきてもいいか？」

……世羅とザナナも一緒に。」

「？」

彼の言葉に、彼女は不思議そうな顔をした。

「俺の性格じゃあ、新しい職場で仲間もないんじゃないんじゃあねえかと、娘が心配してたんだ。

…世羅のことを説明しなきゃならんし……あとザナナの奴も、まだ本調子じゃねえみたいだ。

あそこには森もあるし、都会よりは癒されるだろ。

……まあ、ちよつとした旅行気分で申し訳ねえけどよ。」

バーグの早い口ぶりから、踊る心がうかがえた。

「それについては…許可するけど…。

…ミーサは連れて行ってあげないの？」

フィンドルは微笑みながら訊いた。

「今、整備士を連れて行ったら、ルベランセが困る。

それに、休暇を羨ましがるだろうから、俺達はこっそり出かけるぜ。」

だが何も気にせず、笑い混じりに即答するバーグ。

「……そうね……。」

至極もつともな理由を返され、フィンデルも納得する。

十中八九、後から知ったミーサの怒る顔が想像でき、また少し気が重くなった。

「……おかえり。

試験はどうだったかね？」

ウエンウエンの問いかけに、荷物を取りに戻ってきた戒が動きを止める。

彼の目が見えていれば、説明がなくとも、自分の今着ている法衣で気付いたかもしれない。

奥の床では、パンリが毛布をかけて寝ているのが見えた。

「……俺様は……大丈夫だ。

それより、あいつの方はどうだった？」

「……ふむ。

そのことなんだが……試験の最中、彼は君を探していたと言うのだよ。」

「…なんだと!？」

「だが、おかしいな。

試験中、どこにも居なかったはずの君は、大丈夫だと言う。」

その言葉に構わず、ウエンウエンに掴みかかる戒。

「……あのバカ。

俺様のために、一年の努力を棒に振ったってのか？」

震える手に込められた激情。

盲目の身でも、彼の表情が伝わる。

「……ふざけるな……！」

せつかく今回は…誰の犠牲も無く、自分の力だけで上手く行つたのによ……」

「君がさだめを変えようと『もがいているさま』は、よくわかるぞ。」

戒の態度に、ウエンウエンは悟ったような口調で続けた。

「……では聞こう。

パンリが悪いのかね？」

「悪いわけ、ねえだろうが!-!」

戒は扉を蹴り開け、強く閉めて再び外へ飛び出していった。
張り詰めた空気を感じ、パンリは一度寝返りをうった。

「……零式じゃないか。」

格納庫にふらりと入ってきた一人の優男が、整備中のミーサに声をかけた。

「これ……現役？」

ジンのために輸送する予定の戦闘騎。
それに気安く触れる彼。

「…乗ってた人は、ここには居ないわ。」

作業しながら答え。

「……って、あんた誰よ？」

すぐに気付いて、目を剥くミーサ。

「いやいや…実に興味深い格納庫だね。」

新旧混在…この統一性の無さ……ある意味、素敵だ。」

周囲を見回しながら、彼は続けた。

「こっちのベイン系の機体も……うまくカスタマイズされてる。
駆動系にホール社のベアリングとは、いい判断だ。
あそこ、このメーカーは相性がいい。」

「ん。」

ミーサが思わずにやける。
誉められて悪い気はしない。

「……定石を外さずに……オーソドックスな仕上がりを見せている。
いい腕だ、君が整備してるのかい？」

「そうだけど……」

優男の相当の目利きに、彼女が疑問に思いながら言った。

「ん。」

「こっちは、整備に愛を感じるね。」

「えっ？」

「特にこの機体……この操縦士は、幸せだと思う。」

バーグの機体に触れながら、全てを見透かしたように男は言った。

ミーサはついに、一気に体温が上昇するのを感じた。

「ところで……僕、こちらの指揮官殿に会いに来たんだけど。」

「指揮官?。」

「背が高めの、水色の長い髪の女性。」

「……副長のこと?。」

「そ。たぶんそれ。」

初対面にも関わらず、成立している会話。
ミーサの警戒心は、完全に消滅していた。

「ちょっと待ってて…今…呼びに行くから。」

螺旋の階段を昇る彼女。

「…うん。よろしく。」

そのすぐ後ろに、男は付いていく。

「……お、これは安産型だね。」

そして、目の前の彼女のヒップに、両手で自然に触れる彼。

「……………」

その瞬間、全身を硬直させるミーサ。

「ロディ……………!?!」

「ロディ!!」

偶然、その場を通りがかったフィンデル。
格納庫側から入ってきたギルチ。

その二人が同時に叫んだ。

その時、当の本人は。

丁度、ミーサの一撃によって階段から吹っ飛んでいる最中だった。

「いやいや……………平手や鉄拳は経験があっただけ、スパナは初めての経験だよ。」

ロディは首をさすりながら、笑って言った。

「……………別に……………謝る必要無いわよ、ミーサ。」

消沈している彼女に向かって、フィンドルが声をかける。

「…なんか嫌われているみたいだね、僕。」

「『みたい』じゃないだろう。」

ギルチが眉間にシワを寄せて言った。

「だから、常に私と共に行動しろと言ってるんだ。
目を離すと何をしでかすか、本当に分かん奴だな。」

「何で？……一体なぜ、どうして！？
どういう経緯でここに！！？」

フィンドルは保護者役のギルチを捲くし立てる。

「彼を、とある国まで送ってやって欲しい。」

「……やです！！」

詳しい事情も聞かずに即答する彼女。

「およ。」

握手の為に伸ばした手をそのままにして、間抜けな声を上げる口

ディ。

「貴方は、ルベランセに今度は天然危険物を運べと言っの！？」

フィンドルは声を荒げた。

「いやいや……参ったね。

そうとんがらずに、よろしく頼むよフィンドルちゃん。」

「ちゃ……！？」

「こいつの頼みはともかく、これから話す内容は立派な任務だ。
フィンドル。」

一旦間を置いて、激しく動揺している彼女に対してギルチは一層
真剣な顔で諭した。

そして、後ろに控えていた者に合図を出す。

一人の従者と共に現れる、初老の男。

白髪混じりの、ちりちりの頭髪。

彼は中王都市の軍服ではない、どこでも通用しそうな中庸的な礼
服を纏っていた。

軍人関係というよりも、部屋にこもって研究でもしていそうな雰
囲気を持っているように見える。

「この御方は、レイキ＝モンスロン卿という。」

「…よろしく。」

気さくに差し伸べられた手。

フィンドルもつられて手を伸ばす。

「……この方は、つい最近まで中王騎士団に在籍していた。」

「！？」

しかしギルチの一言で、彼女の動きは止まる。

「何故…騎士団の方が……？」

「わたくし、亡命を希望しております。」

突拍子も無い彼の言葉。

フィンドルは息を飲んだ。

「ここ数日の逃亡生活でいささか疲れました…部屋をお借りしてもよろしいかな？」

「は、はい。」

「……ミーサ、お願い。」

指示をされたミーサが、その男を連れて二階へ上がる。

「彼には、有益な情報を軍に流してもらうつ見返りに、タンダニアへ逃がす。」

その姿が見えなくなったところで、ギルチが言った。

「タンダニア……。」

「至高の槍……タンダニス王の大国だ。」

「知ってるわ。」

聡明な人物だと評判が高いらしいけど……」

「かの国は中立性が強く、中王騎士団も絶対に手が出せない。」

……これは、彼のたつての希望でもある。」

そこでギルチは一息つく。

「……でも危険だわ。」

あの騎士団が、このまま亡命を黙って見逃すはずがない。」

「解っている。」

だが、これはグッソ中将の命令だ。上官には逆らえん。」

フィンドルの危惧に、すぐさま答えるギルチ。

「概要だが、計画を説明しよう。
まずは、カモフラージュと万が一に備え、飛翔艦部隊を中規模で
編成。

北の国境付近まで、軍事演習という名目で進む。」

彼女の厳しい目が差し込んだ。

「そして、ルベランセはその延長で、両国の友好関係を深めるため
の進物をタンダニアに届ける任務を
与えられる手筈になる。」

「それは、大体…理解したけど……。
ところで……この…ロディッサ…さんは…？」

「ロディで結構。」

ギルチの横で微笑む男に、再び悪寒を感じるフィンドル。

「…タンダニアに着く直前に降ろして欲しいのだす。」

その時、またもや外から、今度は小男が現れた。

「いやいや、失礼。

拙者は、ブド共和国の軍事総監のガツチャと申す。
戦闘騎部隊の強化のため、ロディ殿の腕を買ったのだす。」

少し呆気にとられたフィンデルに挨拶する彼。

「ブブド共和国？」

「中王都市やタンダニアに比べれば小さな国ですが、これから大きくなる予定であるのだすよ。

費用節約のため……いや、戦闘騎を幾つか輸送するために協力して欲しいのだす。」

彼女の問いに、小さく咳払いして答える小男。
それにしても、訛りがひどい大陸語だった。

「そうですか……。」

「ホントは、この艦に就職したかったんだけどね。
お金無いから……選択の余地無し、だよね。」

「とほほ……。」

それはあんまりだす、ロディ殿。」

切ない顔で彼にすぎるガツチャ。

「……詳しい話は、また作戦前に改めて話そう。
後の問題は、ルベランセの新艦長の就任だけだが……それについて、ちよつと話がある。」

一層陰しさを増したギルチの顔に、フィンデルは嫌な予感がした。

「……ウエンウエンさま……私は……？」

床で擦れた頬をさすりながら、パンリが訊いた。

「良く眠っていたな。
もう昼過ぎだ。」

「……すみません！
今すぐ、ごはんの支度を……」

少年は立ち上がり、そこで止まった。
ウエンウエンは小さな荷物をまとめ、遠出の装いをしていたからである。

「以前、中空に瞬く八つの星が見えたことがあった……。
先ほど、それが流れたところが見えてね。
私は……そこへ行きたくなったのだ。」

「……そうですか……。
……では、またしばらくのお別れですね……。」

ウエンウエンが思い立ったことをすぐに行動を移すのは、さほど珍しいことではなかった。

パンリは驚くことも無く言葉をかける。

薄着の上に袈裟を纏い、扉を開けるウェンウェン。

「……そうだ。」

もしも、戒……彼がこの先迷うことがあったなら……天に往くため地を駆けて、この家の南にある草原を素早く抜けるよう伝えて欲しい。」

「……………」

ウェンウェンの不可解な言葉に、わけも判らずパンリは頷く。しかし、彼は同じ言葉を二度とは繰り返さずに笑うのみであった。

「私も……一緒に出ます。」

先生に借りた参考書を返しに行かなくちゃ……」

そう言って少年も本棚を探した後、家を出て扉を閉めて鍵をする。ウェンウェンには、彼のその行為が少し寂しく感じた。

「……では、お気をつけて……」

遠ざかるパンリの声と、小さくて軽い足音。

ウェンウェンはその方へ向き直り、錫杖を片手に笑みを浮かべながら、顔に巻いた布を上へゆっくりと上げた。

本来 目があるべき箇所には黒い紋様が渦巻き。
それは、彼の精悍な顔の肉を喰らい、歪ませていた。

4

「それだけは……断ります!!」

フィンドルが机を打ち鳴らし、叫んだ。

「何故だ。」

君には人望も経験もある。」

ギルチも対抗して、だが少し控えめに机を叩く。

「今回は、急遽であることに加えて、重大機密の作戦でもある。
これらを踏まえた場合、今、ルベランセの艦長を任せられる人材
は、君をおいて他にない。」

彼の言葉に、フィンドルは唇を噛んで黙り込んだ。

「それに、艦長のペツポが艦を降りたんだ。
副艦長がそのまま押し上がるのは道理だろう。」

「嫌なものは嫌なの!!」

「どうしても?」

「どうしても、よ!!」

それでもやれっていつのなら、私は軍隊をやめさせてもらいます
!」

「フィンデル!!」

諭すような、叱りの口調。

「…そんな子供のようなこと、言わないでくれ。
……頼む。」

この一回だけだから、どうか我慢してくれ。」

「……だったら…この仕事を終えたら、私を二度と要職に配置しない
って約束して。」

頭を下げて頼み込むギルチの姿に、フィンデルは渋々と条件を出
した。

「…いいだろう、約束する。」

それに大丈夫だ、途中までの艦隊指揮は別の者にやらせる。

君に責任は、一切発生しない。」

ギルチはそれだけを述べて、扉を開けて退室した。

そして廊下に出たところで、傍の壁際にロデイの姿を認める。

「やるねえ。

『最後だから、一回だけ』って拝み倒すの……僕もよくやる手だよ。」

「お前と一緒にしないでくれないか。とても悪いことをした気分になる。」

ギルチは視線を落とした。

「なあ、中王都市の軍隊では……艦内恋愛は禁止かい？」

「聞いて、どうするんだ。」

「それは野暮ってもんだろっ。」

ロデイは笑った。

ギルチに残された不安要素は、むしろこの男の笑顔と言っても過言ではなかった。

「もう一度、パンリに試験をやらせてやってくれ。」

「何を言っている？」

フウシンは書庫で本の整頓作業をしながら、戒の言葉に応えた。

「俺様のせいで試験を受け損ねたらしい。

それもこれも、てめえが分かりづらい手配をしたせいだ。
その責任をとれと言っている。」

「……それは、聞くわけにはいかな。」

「俺様は特別なんだろう？」

それくらいの無茶、どうってことねえはずだ。」

棚の本をなぞるフウシンの指が止まった。

「……違う。」

どちらにせよ、パンリ君は試験に落ちる、と言っているのだ。」

「やってみなくちゃ、わからねえだろ。」

あいつは、相当努力してきたんだ。」

「そうだ、彼は優秀だ。」

入学すれば、我々、人間の地位を脅かすほどになるだろう。」

「……………!？」

戒は彼の言葉尻に、言いしれぬ不安を感じた。

大学の管理課に事情を説明し、フウシンに本を返すために、校内へ入ることを許可されたパンリ。

目的の研究室へ行く途中の廊下だった。

非常に聞き覚えのある声同士が言い争う声が聞こえる。

少年は頭のフードをずらして、長い耳を傾けた。

「まさか……………てめえ……………？」

「垂耳なぞという蛮族を、中王都市における学問の中枢部に入らせるわけにはいかん。」

声の先の書庫では、戒とフウシンの姿。

その話の内容に、パンリは思わず動きを止めた。

「五年の間も……………無駄な努力をさせていたのか？」

「勝手に努力したのは、彼のほうだ。」

それに、五年間も諦めないなんて、それこそ愚劣極まる。この人間社会の中で、己の身をわきまえていない証拠だ。」

戒の顔がみるみるうちに怒りの形相に変わること、やたらとおかしさを感じたフウシンは思わず笑う。

「しかし、今年の受験生は小物ばかりだね。
正直なところ、彼の才能は欲しかった。」

そして喉を鳴らしながら、笑いをこらえる彼。

「一つ、面白いことを教えておこうか。
君さえ昨日の晩に現れなければ、今年はパンリを入学させている
はずだったのだ。」

「……どういうことだ……？」

「詰まるところ、パンリの道を閉ざしたのは、君なのだよ。」

壁に寄り添って会話を聞いていたパンリは、力の抜けた腰を床に
落とした。

目を強く閉じ、彼等の様子をそれ以上見ることなどしない。
開かれた耳だけが、会話を聞き続けた。

「私にとっては、一年に一人、然るべき機関に人材を送れば事足り
る。」

今年は君だ。

パンリではなくなったのだ!!」

響く哄笑。

「君の『犠牲の月獣』は、周りに常に犠牲を生み出していくという……。」

ここまで『さだめ』の通りだと、実に興味深いな!!」

聞こえるフウシンの言葉が、自分を確実に絶望の淵に追い込んでいるのを感じる。

呪いの言葉が湧いてくるのが恐くて、少年の思考は止まっていた。

だが、そこで鈍い音と共に。

飛んできたひとかけらの何かが、彼の足元に転がったことでパンリは我に返る。

まずはそれを凝視し、無意識に拾い上げると、それが『齒』であることが判った。

急いで、室内を確認するパンリ。

フウシンの顔面にめり込んでいる拳。

そして、彼の後頭部が本棚を倒し、別の本棚も次々と巻き込んでいる、まさしく衝撃の光景だった。

「俺様の入学を今すぐ取り消せ…。

そして今すぐ、代わりにパンリを入学させる……。」

「……がずあ……なに……？」

見るも無残に腫れ上がった顔で、床に手を付いて膝を落としたフウシンが呻く。

「二度も言わせんじゃねえぞ……！」

戒はすぐさま、その首根を片手で掴み上げた。

「ま、また暴力に頼るのか!？」

「ここはレティーンの田舎とは違うぞ……そんなもので解決すると……思うな……!!」

フウシンは慌てて叫んだ。

「あいにく、『気に入らないことは殴っても変える』って教えられたんでな。」

弓を引くように、大きく腕を振りかぶる戒。

「そ、そんなバカな……!!」

フウシンの視界は、すぐに拳で覆われた。

「……ぐ……！……は……！」

や……やめ……死ぬ……！」

上半身をのけぞらせて悶える彼。

だが、戒はその喉元から手を離さずに再び引き寄せる。
そして、その怯えた顔に、照準を合わせた。

「安心しろ。」

死ぬ直前に、俺様が、ちゃんと治してやる……！」

言葉に合わせ、二度、三度と彼は拳を振るった。

「お前が従うまで……何度でもな……！」

その都度に壁に打ち付けられフウシンの頭。
やがて、その鮮血で周りの床と本は赤色に染まっていた。

「……わ……わかつ……わかつたから……許して……！！！」

何回も折れた鼻柱に、さらなる一撃が加わる寸前の懇願で、戒は
ようやくその手を止めた。

「どうする？」

「パンリを……入学させる……」

震え上がり、即答するフウシン。

「それだけか？」

「いあ、今までの……非礼も……詫びる……！！」

「……で？」

「……何にも……不自由させない……絶対だ……約束する……！！
だから……もう……」

「やめて下さい。」

背後から声が響いた。

「戒くん……もういいよ。」

か細い声に、ゆっくりと振り向く戒。

書庫の入り口から現れたパンリの姿を認め、フウシンを掴む手が
緩んだ。

「ひいう……！！」

だらしなく床に落ちた彼は、四つんばいのまま、パンリの足元ま
ですがり寄る。

「…す、すまなかった!!」

…今までの試験は……本当は及第点だったのだが……その…中王都市の国柄が君を…認めないのだ…」

それは、あの講義の姿からは想像も出来ない、哀れなフウシンの姿だった。

「しかし…特例で……君の入学を認める!

…試験は無しだ!! 私が無条件で…」

「すみませんが…お断りします、先生。」

無表情で、借りていた本を両手で差し出すパンリ。

「!?!」

それを渡されるがまま、呆然とするフウシン。

「私だけ特別に待遇されるのは……他の受験生の方々に申し訳ありません。

毎年、誰もが同じように、たった一日の試験のために頑張っているんです…」

「た、頼む!!」

君が入学してくれないと、私が…こいつに殺されまう……!!」

「……戒くん……」

もっいいいですよね？」

パンリは彼の代わりに許しを請い、和やかに笑った。

「バカじゃねーのか、お前。」

最後に、後ろからフウシンを蹴り飛ばす戒。
そしてそのまま、書庫を出ようとする。

「俺様のやったことが、全て無駄になったぞ。」

「すみません。」

パンリは駆け寄って、彼の横に並んだ。

「それどころか、おまえの五年間も全て無駄だ。」

「…無駄じゃないです……。」

「無駄だ。」

「無駄じゃありません!」

顔を紅潮させてパンリは否定した。

「私は学問より大事なものを…知り得たのだから……。」

少年の言葉を受けながら、戒は口に笑みを浮かべ、自分の纏う法衣を破る。

そして、一度も振り返らずに、それを後ろの書庫へと投げ捨てて去ったのだった。

フィンデルは一応の挨拶のため、レイキ・モンスロンの部屋を訪れた。

「……ああ、すみません。
これから暫くご厄介になります。」

ベッドに横になってくつろいでいた彼は姿勢を直す。

軍と騎士団、その関係を知りながら、大した神経を持っていないと彼女はそれを見て感じた。

「…貴方は、騎士団の要職に就いていたと聞きます。」

「はあ、不肖ながら、一個師団の軍師をしておりました。」

腰を曲げ、額に手を乗せて情け無い顔で応える男。

「…何故……タンダニアへ亡命を望むのです？」

「タンダニス卿ならば、私の行動を御理解いただけたらと思っていますからです。」

「…貴方を踏み切らせた騎士団は……一体、何を企んでいるのですか。」

「それは、わたくしの安全が確保してから教えるという約束なのですが……」

「……失礼いたしました。」

尋問のような、妙な空気が流れる。

さすがにこれ以上話すことも無くなり、退室しようとするフィンデル。

「ちなみに……私がこの艦を選んだのは、他でもありません。貴女の実力を知っているからです。」

「？」

彼女は反射的に、彼の顔を見た。

「ハンデン・ハンデオルム事変以来の……手腕を見せてくださいな。フィンデル」バーディ大尉。」

先と同じ緩やかな顔つきだが、眼光だけは極めて浮き出していた。

（彼は…知っている……！！？

あの時の私を……！！）

途端にフィンデルは、タイで締めた自分の襟元がきつく、息苦しく感じられた。

「では、タンダニアまで宜しく。
艦長殿。」

最後に彼は、柔らかな言葉で閉めくくった。

「準備できたか？」

飛翔艦から降りるなり、バーグが言った。

「うん、出来た。」

リュックサックを背負わせてもらい、昇降口から飛び降りた世羅が笑う。

その後ろからゆっくりと降りて来るのは、槍を片手にしたザナナ。

「ザナナ、てめえには森で世話になったからな。今度は俺が、もてなしてやるよ。」

言いながら、早くも前を歩きだすバーグ。

「……バーグは何が楽しい？
どうして、あんなにも笑えるのだ。」

「そうだね。」

ザナナと世羅は、そんな彼を可笑しそうに眺めた。

バーグの説明では、徒歩で約2日の距離に行く。
あえて、馬車などの移動手段は使わず、行楽気分での旅。

急な話だったが、世羅は行くことを決めた。
ザナナは、半ば強引に連れられた形となる。

三人はそれぞれの思いと共に、ルベランセと大空を眺めてから大地へと足を踏み出した。

「さて……どうするか…。
何もかも失っちゃったぜ。」

ウォンウエンの家に戻ってきた戒が、開口一番に愚痴を洩らす。
パンリも勿論、後先を何も考えていなかった。

だが、二人に後悔は無かった。

妙に晴れ晴れとした戒の表情を見上げるパンリの頭に、先の言葉
が浮かぶ。

「もしかして……、今、迷ってますか？」

「どん詰まり、だな。」

パンリからの質問に、戒は苦笑しながら答えた。

「
なら！！」

「何だ、おい！？」

突然、その小さな身体からは想像できないような力で戒の手を引
く彼。

「急いで！……行かなきゃ！
戒くん、急いで！！」

「……まで……どこへ……！！」

叫びながら家を飛び出し、裏道に入ると、そこは下り坂。
一気に下り、草原が見えるところまで飛び出す。

「駆けて！

駆けて行こう！！」

草原まで入ると、斜面はさらに急になる。

物理法則にしたがつて、必要以上に回り始めた足はもう止まらない。
い。

「お……い……！

……前……つて……崖……！！？」

地面の無くなった地面を前方に確認しつつも、もはや制御は不可能だった。
パンリと戒は互いにもつれながら、何も無い空に放り出された。

宙を舞いながら、青空と雲が旋回する。
虚空を泳ぐ互いの手。

だが、背から落ちた二人は、柔らかな感触に救われた。

そこは一面の干草の上。

農家が一般的に使うような、荷馬車の上だった。

前方で汚い口バを操っている老人は、上から降ってきた彼等を全く意に介していない。

「……いらつしゃい。」

そして、二人は脇から声をかけられた。

彼等と同様に、干草の上に座っているウエンウエン。

戒とパンリは、同時に顔を見合わせた。

「パンリ、君まで来たか。」

君も、大きな流れに巻き込まれたようだな。」

感付いた彼が、大いに笑う。

「……さて、行こうか。」

平然と言うウエンウエン。

荷を引く口バの速度が増した。

「……何処どこへ行くってんだよ。」

「何処でも良からう?」

戒に答え、天を錫杖で指す彼。

「ああ……その通りだな。」

戒は頭を干草に埋め、どこまで伸ばしても手が届かない
果てしない空を見上げて呟いた。

第二章

第六話 『天へ往くため地を駆けて』
了

It progresses to epilogue...

第二章 エピソード

ゴシックロリータ調の服を着た少女が、ギルドの階段を降りながら。

「……ダメ。」

一足遅かったわ、ユーイ。」

自身の縞模様ニーソックスを直しつつ言った。

それを、下で待っていた青年。

褐色の肌。

立てた金髪に蒼眼。

彼は黒いスーツのいでたちで彼女を迎える。

「直接受け取らないと、次の場所まで流れちゃう仕組みみたい。」

いくら貴重品だからって……まったく……うちの兵器担当ったら、ホント使えないわよねー。」

青年は少女の言葉に無言で頷き、歩みかけた。

「ユーイ……！！」

そこで息を飲んで、青年の背後を見上げる少女。

夜の街。

高い建物の上に潜む影。

「……ユイウス」ノーツ……。」

その者から発せられる毒気のある言葉。

「……貴様さえ……いなければ……！
……同胞の仇……死ね……！！」

人気の無い深夜の街で。

青年はそのスーツに不似合いな 手にした一振りの刀を抜く。

月光に照らされる、透き通るような見事な刀身。

相手の動きを確認しながら、見守る少女は平然と分析を始める。

予想通り。

一太刀。

相手の下半身が地面を跳ね、あとの残りが鈍い音と共に落ちる。

「……し……死ね……！」

業深き……者よ……！！」

その肉片の、最期の叫び。

「天が俺の行動を正しくないと判断した時……俺は死ぬ。
だが、それまでは絶対に死なん。
……それが『さだめ』だ。」

彼はそれを見下ろしながら、呟いた。

「竜の……さだめだ……」

そして、吐いた言葉が息と共に夜空に消える。

月に向かって構えた刀。

雨の雫が落ちるように、光がその白刃に美しく流れた。

第二章
了

Thank
you
for
having
you
read
.
to
be
continued

第三章 『中王都市の飛竜』 プロローグ

A i r・F a n t a s t a
エア・ファンタジスタg i s t a

第三章

プロローグ

私は、多くの光に看取られるだろう。

大聖典 第六章 二十節 『創言』

中陸を分かち戦いが始まる。
もはや止められない。

大聖典 第十六章 九節 『魔窟』

生まれ落ちたる我が子を葬ること。
これ以上の苦痛はない。

大聖典 第十九章 一節 『爛れた世界』

彼の背徳。

それは、『創る者』にも予期できるものではなかった。

大聖典 第五章 二十節 『最期の弦』

畑のそばで、野垂れ死んでいる者がいる。

早朝に仲間から聞いた、噂話だった。

その農夫は真偽を確かめるために外を出ると、案外すぐに『それを自分の作業場付近の高い丘に見つけることが出来た。

距離を遠く離れていてもわかる、鳥が集^{たか}っている地点。

前もって死体と解っている、やはり嫌なものだ。

そうして、近寄るのを躊躇していると、目の前を少女が横切った。

非常に背が低く、フリル付いた黒のドレスを纏っている。
まるで骨董人形のように。

そんな彼女は宙を浮いているような軽い足取りで、目の前の丘を登っていく。

足音によって小鳥は散って、その跡には一人の長身の男が残されていた。

「起きなさい、ユーイ。」

まるで母親のように、優しい声を地の男にかける少女。

眺めていた農夫は、そこで腰を抜かしてしまった。

あれは死体などではない。

少女の呼びかけに応え、立ち上がる。
しかもその手には、黒塗りの鞘刀が力強く握られているではないか。

頭に一匹。

肩口に一匹。

逃げない小鳥を乗せたまま

「……眠い。」

半眼で呟く、その青年。

黒いスーツに金髪碧眼。

褐色の肌。

若輩特有の、血の気に満ちた顔立ち。

「目を離すと、すぐこれなんだから。

もう充分に眠ったでしょう？」

少女は笑い、まだ目を開けきれていない彼の頬を指で軽く突いてから、手を引いた。

「……『久遠』の召集がかかったわ。」

そしてかけられる一声で。

彼に乗っていた小鳥は全て飛び去った。

ここに、神は全て死んだに等しいことを記す。

大聖典 序部 『創る者の言葉』

この物語を記す機会が存在すること、読んでくれる貴方に感謝。
筆者

3 - 1 「同級生」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 3

「Wivern in central kingdom ci
ty」

The first story
「Glassmate」

「
おい！ シュナッ！！」

厨房に響く、野太い叱咤の声。

いつものこと。

そう分かっていながら、その場のコック達は全員、作業の手を止めてその光景に目を向けた。

「なんだか、今日は客の入りが悪いみたいだなあ！！」

声の主　料理長のボングは、閑散とした店内を覗きながら、そのようにわざと大声で喚き、厨房の隅にいる娘を睨みつける。

「……だから…何？」

カチューシャで締められた薄茶色の髪を掻き上げ。

床を磨いていたモップに体重を預けて、不遜な態度で言い返す彼女。

「…おいおい、鈍い奴だな。

もう掃除はいいから、客引きでもして来いってことだ。」

「嫌よ。　何で私がそんなこと…」

「けッ！！」

おまえ、何のために、そのでけえ胸を二つもぶらさげてんだよ！！」

下品な言葉と共に、まな板に包丁を突き立てて指差す彼。

そこで流石に、周りの者達も気の毒そうにお互いの顔を見合わせる。

「…好きで、でかくなったんじゃないわよ!!」

売り言葉に買い言葉。

尻ポケットにねじ込んでいたコック帽を、床に叩きつける彼女。

「ほお……神学校って所は、よほど礼儀を教えないと見える。

いっちょ前に意見する前に、『どんな仕事でも喜んでやらせていただきます』って言え。

お前の出戻りをお許しになった、ご隠居とこの店に感謝する気持ちがあるんなら、な!!」

「~~~~~!!」

自分を完全に見下している彼の視線と言動に対し、彼女は半ばヤケクソ気味に腰のエプロンと上の調理着を脱ぎ捨てて、黒のタンクトップ姿になる。

そして途端に揺れ踊った豊満な胸に、目を奪われる若いコック達。

彼女はそれらを一通り睨み回してから、足踏みを強めて厨房を後にした。

「……ちよつと、シユナちゃんに厳しすぎませんか、料理長…。」

脇にいた一人がボングへと近付き、囁く。

他の者も皆、口に出さないまでも迫り寄って、同じ意を示していた。

「……いいんだよ。」

それらを遮るように答え、ジャガイモの皮むきを始める彼。

「それよりも、くだらんことを考える前に手を動かせ。
俺たちや、料理人なんだからよ！」

そしてごつい体格にも関わらず手先器用に、切った皮を山盛りにしていく。

嫌に淡々とした彼の態度を眺めるうちに、周囲に集まった者達も観念して、何事も無かったかのように自分の持ち場へと戻っていった。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第三章

中王都市の飛竜

・

第一話 『同級生』

1

「いらっしゃーい！」

おにーさん、寄っていつてー!!」

顔を思い切り引きつらせながら、営業スマイルの彼女。

「ふむ……」

それに対するは。

偶然に店の前を通りがかった、髪をポマード油できっちりとし分けにした身なりの良い青年。

エンジ色の礼服に、金と宝石の散りばめられた肩飾りと胸飾り。
絵に描いたような貴族風のいでたちをした彼は、真剣な顔で目の
前の大きなバストをじっと見詰めだす。

(…この野郎……あからさまに見やがって……!!)

シユナは死角で拳を握り、こめかみと口角を痙攣させながらも、
作り笑いを演じ続けた。

「高貴な私にとっては品位不足も甚だしい、みすばらしく汚い店だ。
しかし、これも庶民に対する『助け』と思えば、特別に使ってや
るのも悪くはないだろう……。」

男は彼女の胸から店の外観に目線を移し、気取って呟く。
そして続けざまに、後ろに連なる、ごろつきの集団に向かって号
令をかけた。

だが聞こえていないのか、その集団は全く動く様子を見せない。

「……いいですね、テツジさん？」

数秒後、その集団の中心でたたずむ着物の男に、うかがう彼。

「…好きにしろ。」

その男の呟く一言で、集団は途端に色めきだつ。

「今度は上等のワインがあるといいわねえ。

前の町の酒はドブみたいに臭くて、とても飲めたモンじゃなかったから。」

集団から頭を出し、先陣を切って店に入るのは、厚化粧と口紅をした気味の悪い長身の男。

あちこちが網目状になっている服が、その不気味さに拍車をかけている。

「おいら、今日は沢山食べるぞおおお!!」

次は、陽気な小人の禿げ男。

そんな二人に、先の着物の男を加え、三人組になった彼等が先んじて入店。

その後を追うようにして、ごろつきの集団はようやく中へと入っていく。

脇で完全に取り残された貴族風の男は、面白くなさそうに鼻息を荒げながら一番最後に入店した。

かくして、総勢で二十名は越えるだろうか。

彼等のおかげで、店内はひとまず満席近く埋まったようである。

役目を終えたシユナは足元の石ころを蹴り飛ばしながら、傍に置いてある酒樽に腰掛けて頼杖をついた。

「……………むかつく。」

男達が乗ってきたのであろう。

夕日を背に。

店の前の川岸に堂々と陣取って停泊する『飛翔艦』が、何故か無性に腹立たしく思えてならなかった。

一挙に客が押し寄せたため、その反動で途端に忙しくなる厨房。

それは、ボングが大慌てで皆に指示を出している最中であつた。

「急な申し立てですみません。」

今晚、まだ空いている部屋はあるでしょうか。」

「んん!？」

突然、裏口から声をかけてきた鎧姿の女性に、彼は目を丸くする。

「あまりにも急いだために、馬を走らせすぎてしまいました。今日は……この町で宿をとろうと思ひまして……」

彼女が困った視線で示す先の大木には、疲れ果てた馬が一頭、綱でくくられていた。

「……悪いが、ここ、料理店なんだけどな。」

それを呆気にとられたままの目で追いながら、ボングは声を洩らす。

「……え？」

でも、確かこの店は……」

「おまえさん、名前は？」

そこで話に割って入るのは、裏口から庭を隔てて建てられた小屋から出て来た、小さな老人だった。

「……ご隠居……！」

予期せぬ人物の登場に、作業を全て放り投げて、思わず身乗り出すボング。

「ボングよ。」

まだ、お前が小さい頃じゃったから、憶えておらんのも無理はな

い。

実は昔、この店は料理を出すだけでなく宿も兼ねておった。」

「……はあ……。」

え、そうなんですか？」

「おまえさん、名前は？」

話が見えていない表情で頭を掻くボングをよそに、老人は彼女に再び問いかける。

「……クウⅡハウドと申します。」

正面から返される、真つ直ぐな言葉。

「……ボング。」

早く、適当な部屋を用意せい。」

「もしかして、本当に泊めるおつもりですか、ご隠居お。」

老人の指示に対し、ボングは信じられないといった様子で声を洩らす。

「ええから、言つとおりにしておくれ。」

「は、はい……。」

おい、シュナっ!!」

向こうで、ようやく持ち場に帰ってくる彼女を確認し、早速呼びつける彼。

そして面倒臭そうに歩いて来る彼女は、すぐに事情を説明され、また雑用かとボヤきながら店の二階へ上っていく。

その姿を眺めつつ、老人はクウに近付いた。

「バーグ殿は元気かの？」

「……父とは、最近会っておりません。」

急な質問にも動じず、冷淡な口調で即答する彼女。

「あれからもう10年は経つのか……
懐かしいのう。」

あん時は、ほんに世話になったわ。」

「水棲の凶獣が……こちらの川に迷い込んだ時……でしたか。
それとも……賊の討伐で……？」

「両方じゃ。」

……あんたの親父さんは、ほんとうに強かった。
この町の漁師よりは勿論のこと、どの傭兵よりも……」

「失礼、馬を診て来ます。」

話も途中に、背を向けるクウ。

「あの時の傭兵の子が……今は中王騎士団か……
時の流れは早いものよ……」

己の記憶と、大きく成長した彼女の背丈とを重ねながら、老人は自分の腰を叩いて深く息をつくのであった。

夜へ向けて、辺りの景色はうつすらと暗みがかつてくる。

夕焼けの朱をその身に移す、広い河川。

空気に漂う、道端屋台の焼き栗の香り。

漁師が網を畳みながら川から帰還する情景。

馬車の荷台の上から覗くその街並みは、いかにも都会的なディバイデーションよりも穏やかで落ち着いた、
田舎っぽい印象を受けた。

同じ国内で数刻南下しただけなのに、それぞれが全く違う顔を見せているのは、戒にとって興味深い。

そして一方のパンリは、脇を流れる大河が中王都市南部を横断するスレイド川だということを知っている。

あくまでも書物で得た小さな知識だったが、実際に旅先で巡ってみると一層に感慨があつた。

「戒くん……あれ……！！」

パンリが指差した、その先にそびえる大きな影。

幅広い川岸に連なつた漁船に混じつて停泊している、それは一隻の飛翔艦だつた。

「む。」

それを見て、複雑な表情で唸る戒。

「私……飛翔艦をこんな近くで初めてみました！想像していたよりも、全然おつきいですね……」

「……ふん。」

あんなもん、ルベランセに比べりゃ小物だ。」

「ルベ……何ですか？」

聞き返すパンリをよそに、戒は腕を組んだまま、ただ漠然とその飛翔艦を眺めていた。

自身の言葉どおり、その飛翔艦の大きさは、ついこの間まで乗っ

ていたルベランセの半分程度である。

だが、底面から両脇にかけた装甲部の装飾は見事で、金の模様の縁取りなどは豪華の一言に尽きた。

そして戦艦というよりも帆船に似た外観で、平らな甲板がむき出しになっており、そこからマストの代わりに伸びた、風を調節するプロペラ柱が無駄に多く設置されいているのが特徴的だった。

「…しかし、どこの成金野郎だ。

こんな悪趣味な飛翔艦に乗っている奴は…。」

理由は解らないが、癪に障るのだろう。

自然と毒づく。

一方のパンリは、そんな戒の表情を不思議そうに見上げていた。彼に飛翔艦や戦闘騎に乗った経験があることなど、知る由も無いことである。

「……………何、じろじろ見てやがる。」

「す、すみません…。」

そして互いに気を許せる仲になったなどと、パンリは一方的に思い込んでいたが、それが勘違いだとすぐに悟った。

ちよつと時間を置いただけで、戒は初めて出逢った頃の、まるでハリネズミみたいな『とっつきにくい人間』へと戻っている。

そこで、自分達が腰を沈めている藁^{わら}ぶきの荷台が不意に止まった。牽引役のロバが足を休め、それを御していた農夫が人懐っこい笑顔で振り向く。

「ここを曲がつちまうと、ウチの畑への一本道なんだあよ。あんたら、どうするね？」

「……ん……ああ、すまない。じゃあ、ここで結構だ。」

そう訊かれる間際まで寝ていたウェンウェンが、だらしなく欠伸^{あくび}混じりに答えた。

それを合図にパンリが率先して馬を降り、錫杖^{じやくぢやう}についておぼつかない足を地に降ろす彼を下から支える。

「……そんなんで、よく旅が出来るな。」

全く手を貸そうとせず、上から言い放つ戒。

「私は普段、高い場所には慣れてなくてね。」

目元に巻いた布を直しながら、ウェンウェンは笑った。

「さあて……お腹が空いたな。どこかに食べる処はないか。」

そして続けられる彼の言葉に、空腹感を呼び覚まされて、自然と辺りを見回す二人。

川沿いに伸びている大通り一帯は、仕事帰りの漁師達で混雑をしている。

…が、偶然、それらの間を縫うようにして一つの店看板を目にすることが出来た。

「……『中河亭』ですって。

川の近くだからでしょうか？」

それを指しながら、ころころと笑うパンリ。

「何だっていい。とつとと行くぞ。

こっちは昼間っから何も食ってねえんだ。」

戒は腹を擦りながら返し、人波を掻き分けて行く。

パンリはウエンウエンの手を引きながら、その後に続いた。

「さ、三名様で？」

入店と同時に、額に汗した若いコックが、三人を見回して声を掛けてくる。

「ああ。」

「えっと、じゃあ……奥のテーブルへお願いします。」

頷くうなず戒に対し、彼は早口で告げた。

「繁盛してますね、このお店。
流行っているんでしょうか……」

その案内に従い、ウェンウェンを誘導していたパンリが、途中で声を失う。

店内は満席に近かったが、その大半は見てからにガラの悪い連中が陣取っていた。

その中で、俗的な店内の空気にそぐわない貴族風の男が一人、やたらと目につく。

先頭を歩く戒も、それを同じように注目していた。

「さて……適当に頼んでくれ。」

二人の危惧をよそに、錫杖と小さな荷物を小脇に置いてから、早速、席でくつろぎ始めるウェンウェン。

「言っておくがな、俺様の懐ふところを当てにするなよ。」

戒は乱暴に椅子を引きながら、切り出した。

「何のことかな？」

「きつと…お金のことを言っているのでは…」

不思議そうに訊くウェンウェンに、小声で補足するパンリ。

「結構、細かいのだな。

戒は。」

「……占い師のように俗世を離れてる奴は、金銭面で信用が置けねえだけだ。」

瞼を半分閉じながら、戒は言った。

「おまえ、さっきの馬車のオヤジにだって、何も払ってなかったじゃねーか。」

「人の好意に対して、払えるのは敬意のみだよ。」

テーブル上のメニューを手探りで掴み、パンリに手渡すウェンウェン。

「もっと……人間同士は信頼し合っても良いのではないのかね？」

彼はさらに笑う。

「お前みたいな野郎が、今まで良く生きてこれたもんだな。目が不自由なくせに。」

「不自由だからこそ、あのように助けてくれるものがある。」

「いいや、てめえは、今までは運に恵まれていたにすぎねえ。所詮この世に自分の味方は自分だけ。」

人間ってのは、いざとなったら自分のことしか考えねえ生き物なんだからな。」

言いつつ、戒はパンリの手からメニューを横取りをした。

「へえ、あなた、騎士団の人なんだ。」

「……………はい。」

クウは少ない荷物と大剣を、二階客間の床に置きながら答えた。

「そんな身分ある人に対して失礼だと思うけど、即席で我慢してくれる？」

「ちょっと待ってて、あと少しで出来るから。」

手際よくシーツを伸ばし、寝所を用意しながらシュナが笑う。

「色々とすみません。」

それで、部屋代の支払いはどちらで……」

「さあね。」

「ご隠居に聞いてよ。」

彼女は首を傾げて、テーブル脇に座った老人に目を向ける。

「…今は、このとおり料理専門じゃて。」

サービスも何も無い部屋で金を取るわけにはいかんよ。」

「しかし、そういうわけには……」

そんな彼の言葉に、クウは困った顔をして迫った。

彼女はやたらと気真面目な人間なのだと、シュナは脇で作業を続けながら察する。

「気にせんでおくれ。」

昔、お父上に世話になった御礼が出来ると思えば、安いものよ。」

だが次の瞬間、彼女は目を見張った。

彼の厚意の言葉に対し、その女性騎士は喜ぶかと思いきや、逆に表情を曇らせたのだ。

「アルドの叛乱が終結した直後は…各地からの流民で、それはそれは治安が荒れたもんじゃ。」

その態度に気付いているのか、そうでないのか、懐かしそうな表情で続ける老人。

クウも自然と対面の席につく。

「…そんな情勢にもかかわらず、中王騎士団はあいも変わらず他国へ遠征。」

軍隊は軍隊で、全くの役立たず。

当時、わしら庶民の暮らしを守ってくれたのは、傭兵達だけじゃった。」

彼はテーブルに置いたポットから紅茶を注いで、差し出した。

「なにぶん昔のことですから……私には、あまり憶えが……」

それを両手で受け取って、彼女は静かにカップに口をつける。

「バーグ殿とは、あまり話をせんのかね？」

「…はい。」

「そうか……。」

まあ、後で料理でも食べに下りて来てくだされ。

弟子達に恵まれてのう、このとおりワシも隠居させられるくらいですからの。

味は保証いたしますて。」

言い残し、老人は腰を曲げたまま部屋を後にした。

「ご隠居の知り合いに、若い女の騎士なんてねー。」

その様子を見届けてから、シュナが思わず笑う。

「鎧、外したら？」

「……あ、はい。」

クウは言われるままに、自身の肩と胸部を繋いだ金具に手をかける。

重そうな鎧が床に降ろされると、中はシェード生地服で、すらりとした彼女の長身にぴたりと付いていた。

「ところで……何故、そんなにゆつくりと……」

一息ついたところで、シュナの動作を暗に指摘するクウ。

彼女はシーツのシワ伸ばしだけを熱心に、しかもものんびりで行っていた。

寢床の確保だけならば、既に完了しているのである。

「今、厨房に戻りたくないのよねー。」

頭の固いバカのせいで、来る日も来る日も雑用ばかり。いつまで経っても、包丁を握れないのよ。」

そんな彼女の言葉に対し、シュナは返した。

「こう見えても私、昔この店で天才って……」

「？」

だが、言葉も途中で話を切る彼女。
クウは訝^{いぶか}しそつに見詰め返す。

「何でもないわ。」

行きずりの人間に話すことじゃ、ないものね。」

シュナは自嘲するような寂しい笑みを一瞬だけ顔に出して、そのまま、取りとめも無い作業を反復し続けた。

「禁断の文明が誕生して十余年……」

終始、酒ジョッキの音が響き渡る そんな宴会場と化した店内に不釣合いな、演説。

「……ついに飛翔艦の時代が来たる……と。」

そして、その高らかな言葉を、一人の記者がペンで写していた。

「なるほど、なるほど。」

ところで、ずばりお聞きしたいのですが……あなた方が、その時代に成そうとしている事とは何なのでしょう？

ラックホルツ伯。」

「一言で説明するならば、ロマンだ。」

質問に対し、親指を上げて、きらめく齒を爽やかにのぞかせる彼。

「……ぼ、凡人にも分かり易く、ご説明を……」

「ふむ……。」

私など地位も名誉も充分であるにもかかわらず、あえて各地に危険と任務を求め、万民の助けになろうと、大空を旅している。

これをロマンと言わずしてなんと言おうか。」

前髪を振り、それをすかさず大袈裟に直す仕草。

「……なるほど。」

ロマンですな、確かに。」

馬鹿正直に繰り返し、記者は続けてペンを走らせる。

中王新聞社の片田舎の支部に左遷されて早5年。
そんな平穏な地において、突如とした飛翔艦の来訪は、退屈な日

々の連続に眠っていた事件記者の嗅覚が
呼び覚まされる思いであった。

「そして私は、この我等の呼称を『ラックホルツ空挺騎士団』
と名付けたのだ。」

「騎士団……ですか。
国に属していないのに？」

そんな彼は、疑わしい表情で、ごろつき共が囲む各テーブルを見
渡す。

「愚・問・だ・な……君イ。

空に国境が存在しないとはいえ、空を隔てるものがある。
それは飛翔艦だ。

ならば、それらを『国』と言っても過言ではなからう。

…我々は、その内外の秩序を守るために、あえて騎士団と名乗る
のだ。」

記者の視線など微塵も気にすること無く、当のラックホルツは口
元のチョビ髭^{ひげ}を直しながら続ける。

「空を制するものこそ、大陸を制する。
空から、手に入らないものなど無い。

この『正義』と共にあるラックホルツ空挺騎士団こそ、自由と平
和を掴んで見せるぞ。」

自信満々に胸を張り、またも綺麗な歯並びを見せる彼。

離れて酒を飲んでいた着物の男がそれを聞き、静かに鼻で笑った。

「　　本当か！？」

だが、にわかに背後から上がる声。

笑顔のまま、ゆっくりと振り向くラックホルツ。

そこには妙に目つきの悪い修道服の男が立っていた。

「……それは、本当かって聞いてんだよ。

このポマード野郎！！」

前菜に出された野菜スティックを口から吐きながら迫る　　それは戒。

さらに、ラックホルツの頭部をわし掴み、髪をもみくちやにする。

「ポ、ポマ……？」

狼狽しながらも、乱された髪を急いで直す彼。

あまりに突然の出来事に、記者もその脇で固まっていた。

「おまえ、さつき……『手に入らないものなど無い』とか言ってたな？」

「ああ…そうだ。」

空において、地上の国境や法律など関係無い。
あるのはロマン、ただ一つだ。」

「……………！！」

その言葉に何かを気付されたように、ラックホルツから離れる戒。

「ロマンはともかく……飛翔艦の圧倒的な『力』だ。」

…そうだな。

……ああ、そういうことだ。」

ぶつぶつと呟き。

さらに夢遊病の患者のようになり、浮いた足取りでゆっくりと席を去っていく。

「なんだあれは……ひどく失敬な輩だな。」

「この町の者じゃあ、なさそうですね。」

ラックホルツの嘆息を、その場でメモを取りながら返す記者。

「…取材を続けてもよろしいでしょうか。」

先ほど川岸で、飛翔艦から荷物が沢山降ろされていたようですが、あれは一体…」

「……その奴、そろそろ消えろ。」

酒が不味くなる。」

見かねて、遠くから刺すような睨みをきかせる、着物の男。

「テツジの兄貴は、静かに飲みてえんだよっ!!」

顔を酒で赤くした周りの連中も、表情を凄ませて息巻く。

「こ、これは、すみません…!」

…色々と質問にお答えいただき、有難うございました。
今日はこれで、失礼いたします…!!」

次第に増えて、波のように押し寄せる怒声に恐怖を覚え、早々に
退散しようとする記者。

「…せいぜい、いい記事を書いてくれたまえ。
遠慮なく明日の一面記事を飾ることを許すぞ。」

ラックホルツは軽くウインクし、彼の去り際に声をかけた。

「…いい、一応、努力します。」

一面記事は保証いたしかねますが…。」

そして、そんな苦笑が返された。

これ以上ベッドの手配だけで時間を潰すのは、流石に誤魔化しきれないと感じたシユナは、客間を出てから、極力足取りを鈍くして厨房へと戻ろうとしていた。

木製の手すり越しに、階下の客席を何気なく眺める彼女。

先ほど招き入れた客以外は、ほとんどいない。
それもそのはずだった。

誰も彼も人相の悪い顔。

外見で人を判断するのは良くないが、それこそ過去に一回でも人殺しを経験していそうな相^{そう}ばかりである。

今では大酒を飲んで出来上がっているせいか、余計にタチが悪いようであった。

「お……勇氣ある奴らもいるじゃん……」

そのように混沌とした空気が充満した店内にも関わらず、離れた一角のテーブルにつく一般人らしき三人。
目を凝らすため、彼女は自然と身を乗り出した。

彼の姿をはっきりと認めたのは、その直後だった。

「……戒くん、どうしたんですか。
急に席を離れて…」

「便所だよ。」

興奮冷めやらぬ様子でパンリに答え、再び席に深く座る戒。

「何だ。」

料理、まだこねえのか。」

そして、早々に文句を言う。

「まだ、オーダーすら取りにきてくれませんよ…。
どうやら…彼等が原因のようで…」

先客達に視線を向けるパンリ。

戒は、その中に先ほどの記者の姿が既に無いことを目に留めた。

そして周りで男共がくゆらせている煙草の煙を何気なく追うと、
不意に、上階から見下ろしている人間と目が合う。

その姿に、彼の背筋は凍りついた。

「アッ!!」

突然放たれた高い大声に、パンリとウェンウェンも頭上へと顎を傾ける。

「あ…あんだ……戒…!？」

「……!!」

目を見開いて、立ち上がる戒。

その驚いた彼の表情に、対するシュナは軽く目眩めまいを感じた。

だが、それを打ち払うように勢い良く階段の手すりを滑り、目当てのテーブルまで走り込む。

「…ちよつと……表に出ろ……!」

……戒Ⅱセバンシユルド!!」

そして愛らしい顔を恐ろしい形相に変え、戒の襟元を掴み、凄まじい力でそのまま持ち上げる彼女。

傍らのパンリはその剣幕に怯え、椅子から立ち上がることをさえ出来なかった。

店の裏路地。

荒い砂利の地面に、勢い良く撒けられる生ゴミの入った樽。

「…………ぐっ…！」

それらと共に思い切り叩きつけられた背中をさすりながら、戒は片膝を付いて態勢を戻そうとする。

「何で今、あんたがここにいるのよ…！
…大学の試験は！？」

そこで彼の首根を掴み、顔を引き寄せて迫るシュナ。

「……………受けるのをやめてやった。
……………あんなところ……………クソくらえだ…！」

顔を背けて小さく呟く彼。
その態度に、彼女は余計に激昂する。

「ま、待った！

暴力はいけません！！」

振り下ろされかけた彼女の手を止めるのは、ようやく二人に追いついたパンリの声だった。

「事情を知らない奴は、引っ込んでなさいよ！」

「事情は知りませんが、引っ込みません！

戒くんは……私の大事な友達なのですから！！」

「友達い！？」

一歩も退かない、さらに意外な言葉に、シュナは動きを止めた。

「……それよりも……やめたとか、良く簡単に言えるわね！？

それじゃあ、あんた！

一体、何のために、私から首席の座を盗んだわけよ！？」

だがすぐに気を取り直し、戒に言葉をぶつける彼女。

「本当なら、今頃、私が大学に入って……」。

こんな……肩身の狭い思いをする必要なんて……なかったんだから……！！」

「……………！」

涙をにじませての彼女の訴えに、状況を察したパンリは胸がしめつけられる思いだった。

「まさか……お前の故郷に辿り着いちまうとは……。ついてねえぜ……。」

一方の戒は、彼女との邂逅に、いまだ心あらずといった様子である。

「……………！！」

そんな呆けた横っ面に叩きつけられる平手。

「……………この、馬鹿……！！」

続けて何発も打たれ、みるみるうちに赤くなる戒の頬。その間も、彼は反撃しようとせず黙している。

やがて不意な一撃で眼鏡が外れ、地に飛んだ。

「……………あんななんて！
他人の気も全然知らないで……！！」

しかも、それを一気に踏みつける彼女。

その光景に、パンリは度肝を抜かれた。

「な、なんてことを……！」

これは、あんまりですよ……！」

大声でわめきながら、折れ曲がったフレームと粉々になったガラスを掻き集める彼。

「あんまりなことなんて、何もないのよ！」

こいつ、伊達メガネなんだし。」

「え？」

「昔、『その方が賢く見える』とか言われて……バカみたいに嬉しそうにして……言うとおりにしてんじゃないわよ……！」

「……………」

耳を塞ぎたくなるような罵声の連続。

そして何故ここまでされながら、戒ともあるうものが少しも反論しないのか、パンリにはそれが疑問でならなかった。

「……………気が済んだか？」

なら、俺様は戻るぜ。

腹……………減ってた……。」

血の混じった唾を吐き、頬を拭って立ち上がる戒。

「そんな風に喋り方まで真似して……あんた、あいつの代わりにでもなっ たつもり!？」

シユナは彼の背に向かって吠えた。

「いつまでも……死んだ人間にとらわれて!!」

その言葉に一旦足を止めたが、彼は振り向かずに再び歩み始める。それを、シユナはずっと睨みつけていた。

「あの……」

その傍らで、恐る恐る声をかけるパンリ。

「……何よ?」

「どうやら、私は…貴女に謝らなければいけないようです…。」

低い声で聞き返す彼女に、彼は声を詰まらせながら語り始めた。

事情を聞いた後、彼女は幾分落ちついた様子に戻っていた。

「……お分かりいただけたでしょうか。
今回の件で、戒くんに落ち度はありません。
彼が大学に行けなくなった原因は全て、私にあるといっても……」

フードを取って、自分の垂れた耳を露にし、力説するパンリ。

「……………」

それに対し、眉間にしわを寄せて考え込む彼女。

「あ、あらかた分かったわよ。
でも……それは『今』の問題でしょ。」

私は別に、戒が大学に入れなかったことを怒ってるんじゃないの。
あいつが卒業の時、私を裏切ったことに怒ってるのよ!」

「本当に、そうなんですか!？」

パンリは汚れの無い瞳でシュナの目を見詰めた。

「どういう事情があったか知りませんが、確かに、戒くんは貴女から首席の座を強引に奪ったようです。」

しかし、無事に大学に入れていれば、貴女は戒くんを許していた……。

先ほどの会話は、私には……そういう風に聞こえたのですが。」

さらに彼の真摯な言葉に、彼女は唇をきつく締めて、顔を上気させる。

「子供のくせに、小賢しいこと言って！
あんた、すっごいむかつくわ！！」

突然、パンリの耳を両手で掴む彼女。
思い切り引っ張られるのを覚悟して目をきつく閉じた彼女だったが、
すぐにその手が離されるのが分かった。

「……ちょっと……あれは、やりすぎだって言いたいんでしょ……」

シュナは、まだ痺れの残る自分の手を眺めている。

「最近……辛くてさ……。
鬱憤が……溜まってたのかも……」

そして、頭を押さえ、うつむいた。

「そ、それなら……一緒に謝りに行きませんか？
戒くんなら、きっと許してくれますよ。」

「それは嫌。
あいつに頭下げるなんて、絶え対つ……い・や。
天地が引っくり返っても、ありえない。」

彼女に即答され、良い提案をしたと思い込んでいたパンリは目を丸くした。

「確かに、殴ったことについては非を認めるわよ。

でも、謝るのなら、不義理をしたあっちが先でしょ。

それがスジってもんでしょーよ!!」

「た、確かにそうですが……相手に謝らせる余裕を与えなかった方も悪いような……」

パンリは左右に視線を泳がせながら、息を飲んだ。

「それは、何!？」

私のことを言っているつもり!？」

彼の肩を軽く突き飛ばし、シユナは一方的に言い残して踵を返す。

「ど、どこに行くんですか?」

「仕事に戻るのよ。

一応、私、ここの店員だし。」

「そ、それじゃ……戒くんに謝るのは……」

「だから、絶対、謝らないって言ってるでしょ!……!」

「ヒッ!……!」

一喝されて、腰を抜かすパンリ。

やがて彼女は、大股で店の裏口へと向かって消えていく。
仕方なく、彼も嘆息と共にフードを被り直し、店内へ戻ることにした。

最後にもう一度振り返ってみたが、彼女が気を変えて戻ってくるような気配は微塵も無かった。

「おい！」

あいつ、またどこかでサボってやがんな？」

戦場さながらの厨房で、握った包丁を宙で小刻みに動かしながらボングが叫ぶ。

周りのコック達がそれをなだめようとした矢先、裏口から顔を出す彼女の姿を見留めた。

「て、てめっ、シユナー！！」

おまえ、このクソ忙しい中、また一体どこで油売ってやがっ……」

「6番テーブル……！」

稲妻のような彼の叱咤を真正面から返す、大声。

「な、なんだよ、急に？」

「6番テーブルの料理、私が作る！！」

その威勢に驚くボングをよそに、シュナは両手を水で濯^{すす}いで準備を整えようとしている。

「な、なに勝手なこと抜かしてやがる……そんなこと許可してないぞ……」

「……やらせて！ 今日だけでいいから！！」

だが、彼女の熱のこもった瞳に、彼はさらに気圧された。

「きよ、今日は忙しいから……特別だぞ。
おい、誰か包丁かしてやれ。」

「はい！」

彼に命じられ、コックの一人が嬉しそうにシュナに包丁を手渡す。

調理場に鍋と共に吊るされた注文表。

彼女はそれを一通り見てから、片手に握った包丁を器用に回して目を閉じる。

そこから溢れ出る気迫に、全員が目を見張った。

「おい、レシピ……」

「いない！！」

ボングの言葉を、途中で遮るシユナ。

彼は紙束を差し出した姿勢で凍りついた。

「い、いらねえだとお！？

なら、どうやって……」

「黙ってて！

気が散るんだってば！！」

彼女はすぐさま、氷で満たされたボウルに漬けてあった鮮魚をまな板に載せ、ためらい無くその腹に包丁を差し込み、引く。

加えてその刃を抜く時に、手首のスナップのみで内臓^{わた}を取る、見事な手際。

それを連続で10匹以上も繰り返したのだから、その場の全員は手を止めて見とれてしまった。

「バカヤロウ！！

てめえら、手エ動かせ！！」

自分も同じ状態であったことを棚にあげ、怒鳴るボング。それを皮切りに、静止していた厨房は再び時を刻み出す。

振り返って見れば、彼女はそうやって素材の下準備を整えた後、既に調味料を片手に味の仕込みを始めている。

決まった型に掬われず、それでいて早い。
本能を剥き出したような料理だった。

ボングは終始、彼女の技巧を複雑な表情で見守っていた。
さらに、そんな自分を厨房の奥で眺めている老人の姿に気付き、彼は赤面して自分の作業へ戻っていった。

「『中王都市風・川魚の甘酢あえ』でございます。」

熱い湯気が高く立ち昇る大皿を、テーブルに載せるコック。

「わあ！！
おいしそうですね！！」

テーブルから乗り出して、パンリが思わず叫ぶ。

片栗粉に包まれてカラッと上げられた小魚。
それに絡んだ、とろみのあるタレの甘酸っぱい香りが上気と共に
広がる。

散々待たされて空腹も極まった戒が、無言のまま喉を鳴らした。

「続きまして、チーズチキングラタン。

こんがりと焼いた、薄めのパンと一緒に召し上がり下さい。」

もう片方の手にした深皿をテーブルに沈め、うやうやしい礼をして去るコック。

三人は、すぐに彼の言うとおりにしてみると、香ばしいチーズの熱によって、乾いたパンの表面がじゅ、と鳴った。

「……絶品……！」

早速食べてみたパンリが感想を洩らす。

「……おいしいねえ。」

美味しさのあまり、口元を震わせるウェンウェン。

戒は片肘をついて、黙々と食べ続けていた。

やがて各々の手は止まらなくなり、自然と無言になる。

そんな至福の時間の中。

パンリは、店の隅でどこちなくモップがけをしているシュナの姿

に気付いた。

覚られないようにそれを注目していると、彼女は作業をしながら、自分達のテーブルをしきりに気にかけている様子だった。

こちらの食事の様子を、脇目で盗み見ては満足げな顔をする。
そんな彼女の雰囲気、パンリはどこか安心した。

「戒くん……もしかして、この料理……」

「…あん？」

口を開けたまま、パンリの言葉に耳を傾ける戒。
目配せして示す彼の視線の先では、シュナがモップがけに勤^{いそ}しんでいる。

「きつと……あの方が作られたのでは？」

「あいつが……？」

向けた視線と、彼女の瞳とが不意に交差する。
不自然に顔を逸らす両者。

「きつと、これは謝罪の意味で……」

「……フン。」

途端に意地を張って、戒はこれ見よがしにフォークを放って両腕と足を組んだ。

「だとしたら、もう食べねえな。」

「何ですって……!」

そんな態度と言動を聞きつけ、シュナは顔色を変えてあっさりと近寄って来る。

「出された料理は、ちゃんと残さず食べなさいよ!」

「誰が作ったのかは、あえて訊かねえ。
だが何でそんなことまで、店員ごときに指図されなきゃならねえんだ。」

そっぽを向いたまま呟く戒。

「……ちよつと会わないうちに、随分と好き嫌いが増えたみたいじゃない……!」

「違うな。」

さっき誰かに殴られたせいで口の中を切ったから、しみるだけだ。
「

戒は、もっともらしい言い訳を述べて、意地悪く口を斜めに歪ま

せる。

そんな二人のやり取りの中に放置されているウェンウェンは、説明を求めるようにパンリに顔を向けた。

「二人は……同じ学校のお友達だそうで……」

「あんた！ 冗談でも、そんなこと言わないでよね!!」
「……殺すぞ。」

直後、シュナと戒に同時に否定されて、椅子ごと突き飛ばされるパンリ。

「……って！」

こつちが嫌がるのならまだしも、何であんたが嫌がるのよ！
嫌がられる筋合い、無いんだから!!」

「うるせえ、黙ってる。」

互いに牙を剥いて、相手の肩口を掴む。
彼の握力に、彼女は思わず表情を歪めた。

「……あら？
さっきは手を出さなかったのに。
ようやく昔のあんたらしさが戻ってきたのかしらね？」

唇の片端を上げて、シユナはわずかに笑って言う。
それに気付かされるように、戒は手から力を抜いた。

「その口を、もう俺様の前で二度と開くな。
今度、あいつが死んでいるとか抜かしてみろ。
ただじゃ……」

「死んだも同じよ。」

忠告する前に返されて、閉口する戒。

「……あいつは……眠っている……だけだ……!!」

彼は怒りを抑えて、わずかな声を搾り出すので精一杯だった。

一方、パンリは二人の交わす会話に、重い空気を感じていた。
それはウェンウェンも同様で、聞きながら口を強く結んでいる。

「どっちにしろ……大学に入れなかったのなら、あれを治す手掛かりだって……もう見つからないでしょ!!」

強い口調で、素早く手の平を差し出す彼女。

「……だから、^{イデイス}聖十字を返しなさいよ。

もうあんたに必要無いし……それは本来、私のものなんだから!!」

「…何言ってやがる？」

これは俺様以外に使うことは…」

「使えなくても、構わないんだってば！

ただ、あんたが……それを持っていること自体、不愉快なのよ！
」

「……………！！」

彼女の言葉に触発されたのか、戒は立ち上がり、自身のポケットに勢い良く手をつ込む。

そして、テーブルに赤い十字架を叩きつけると、乱暴に店の外へ飛び出していった。

「…か、戒くん！」

立ち上がるパンリ。

だが次に見るのは、うな垂れたシュナの姿。

「……………目を覚ますのは……………あいつじゃなくて……………あんたよ……………戒。」

残された十字架を両手で拾い、握り締める彼女。

聖十字は持ち主を記憶し、別の人間に使うことは出来ない。

クレイン教の奇跡として、聞かされた通り。

震わせる手の中で、どんなに強く思おうと、それは何の反応も無かった。

やがて彼女も踵を返し、その場から立ち去ろうとする。

「おい！」

そっちが終わったんなら、こっちにも酌しやくしに來いよおー！」

そこで、その後ろで大声を上げて絡んでくるごろつき。

「うるさい！」

私は酒場の女じゃない、料理人よー！」

「いででー！」

その男の足を思い切り踏みつけ、去って行く彼女。

「ちくしょ……何だってんだ、あの女……くそ……！」

男の酔いは一気に醒め、身体を折り曲げながら恨みがましく呻うめく。

そして丁度、その目線の高さに、ウェンウェンが置いている荷物が入った。

「どうやら……因縁浅からぬ関係のようだったが…」

ウェンウェンは、果実酒を口に運びながら言った。

「はい、実は……」

乾いた唇をコップの水で湿らせから、説明しようとするパンリ。

その時だった。

「アッ!」

先のシュナと同様、上から響く大声。

「ま、またですかあ…!？」

不安な面持ちで、顔を上げるパンリ。

上階には、やはり自分達のテーブルを指差す女性がいたのだった。

「まさか…ウェンウェン殿……ではありませんか？」

だがそれは、部屋で少し休んだ後、老人に言われた通り部屋を出てきたクウ。

言葉を洩らしながら、階段を下りて来る。

「……おやおや。」

奇遇という名の町があるとしたら、まさしく『ここ』のことなのだろうな。」

グラスを持って、声の方へと掲げるウェンウェン。

パンリはすぐに立ち上がり、空いた一つの椅子を引く。

すぐに彼女は会釈して、その席についた。

背は高く、落ち着いた印象。

だが、その瞳がひどく興奮しているように見える。

「……輝きが増したな……クウ。」

対照的に、そんな彼女に声をかけたウェンウェンの顔には、驚きの色が全く無い。

「……か、輝き……ですか？」

若干、照れながら身を縮こませる彼女。

「……お知り合いですか？」

ウェンウェンの袈裟の裾をつまみ、パンリが小声で訊く。

彼は軽く頷いて示した。

「まさか、この地にいらつしやるとは……」。

私は常々、いつか貴方にお詫びをしたいと思っていたのです。

あの時、取り乱してしまったことを……」

「クウは相変わらず、真面目だ。」

涼しい顔で答えるウェンウェン。

「……貴方が仰られていたこと……ようやく最近になって正面から向き合えるようになりました……」

「私は、きっかけを与えたにすぎない。

それはクウ自身が元から持っていた強さなのだろう。」

会話を交わす二人。

その間、パンリはぼんやりと、彼等の顔を交互に見詰めていた。

「いえ……」。

あの時、貴方によって自分の『さだめ』を知らされなければ、今頃、私は大変な思い違いを続けているところだったのです。」

「ふむ……」。

自分の顎先に触れながら笑うウェンウェン。

そこで、椅子が床を引きずる音が連続して響いた。
三人が顔を向けると、店内を占拠していた集団が一斉に店を出るところであり、それは閉店の時間が近付いている
ことを意味していた。

「…よろしければ明日、私の家へいらっしやいませんか？
色々とおもてなしをしたいのですが。」

「……お言葉に甘えようか。」

「いいんですか、ウエンウエンさま。
そんなに簡単に決めてしまつて。
どこか、目的地があつて旅をしてるのでは…？」

自分の方を向き、能天気になつて彼に対して、パンリが不安そうな
声をあげる。

「平気だよ、パンリ。」

「……ということで、今日はそろそろ休もうか。
お勘定を……………おや？」

席の脇をまさぐるウエンウエンの手が泳ぐ。
そこには空気以外、何も無い。

慣れ親しんでいた杖と一切の荷物が消えていた。

「……と言われましてもねえ、困るんですよ、お客さん。」

閉店後。

詰め寄る二人を前にして、ボングが頭を掻きながら言った。

「でも、ウエンウエンさまの杖と荷物が！

店内で盗まれたんですよ！？」

「ええ、確かにそうかもしれませんがね……。」

ですが、ウチもそこまでは責任もてませんよ。」

パンリが感情的に主張するも、相手からは淡々とした言葉が返されるのみ。

「さっきまで店にいた連中、素行が悪そうでしたね。」

……おそらく…犯人は奴等のうちの誰かでしょう。」

鎧姿になって、上階から降りてくるクウ。

大きな剣が背負われている。

「ど、どうするんですか。」

静かではあるが、彼女の放つ厳しい雰囲気恐々としながら、パ

ンリが訊いた。

「聞こえてくる話の内容では、彼等は外にある飛翔艦の乗組員だとか…。」

場所が分かっているのなら、取り返すまでです。」

平然とした言葉。

それに対してウェンウェンは無言のまま首をかしげて、彼女の方を向いた。

「何度も繰り返しますが…貴方には、大変な御恩があります。このくらいはさせていたきたい。」

「…危険な真似は、して欲しくないな。」

私はお金や荷物よりも、命の方が大事だと思うのだが。ねえ、パンリ。」

「……ど、同感です。」

ウェンウェンの問いかけに、パンリは大きく頷いた。

戒にしろ、先のシユナにしろ、どうしても暴力的に物事を解決しようとするのか。

学問の中に身を置いていたことで、そのような場面にほとんど出くわしたことが無いパンリには、もしかして世の中の人間のほとんどが、そんな風に短絡的思考で動いているの

ではないか、そんな錯覚を覚えるほどだった。

「大丈夫です。」

危険なことなど、ひとつもありません。」

そう自信をもって答え、そびえ立つ長身は一層に大きく見える。

「今宵、お二人は私の代わりに部屋でお休みになって下さい。
こちらの二階を借りていますので。」

「……やれやれ、だな。」

ウエンウエンは首を左右に振って諦める。あきら

その様子を見届けてから、クウはまるで小事を済ましに行くかの如く軽い足取りで店を出た。

「…ウエンウエンさま！」

もっと真剣に止めてあげて下さい！ 危険ですよ！！」

「いや……心配すべきは…」

目元の布に静かに触れるウエンウエン。

彼にしては珍しく、難しい表情で頭を垂らしていた。

「お客様に…何かあったのか？」

一人、厨房でたたずむ老人が、戻って来たボングに声をかける。

「……いえ。」

その件は、もう収まりました。」

神妙な面持ちでコック帽を取り、うかがう彼。

「それより、ご隠居。」

…どうかしましたか。」

「……なあに、おまえと少し話したいことがあったのう。」

珍しく視線を泳がせる彼。

その様子に、ボングも何となく察する。

「他の弟子達からも聞いておるのだが……あの子に対して、厳しすぎんか？」

仮にも、この店で兄妹のように育った仲ではないか。」

「もう……四年前とは違うんですよ、ご隠居。」

彼は肩をすくめて返した。

「こちとら、急にあいつの代わりを押し付けられて、どれだけ苦労をしたと思ってるんですか。」

それに……一人を特別扱いしては、他の人間に示しがつきません。」

「愛ゆえに、厳しく……か。」

「な、ななな、何言ってるんですか、ご隠居!!」

「違うんか?」

老体の言葉に負け、そばの椅子に座り込むボング。
手の中の帽子を、くしゃくしゃに丸めて口で噛む。

「あいつには才能がある。」

だからこそ、そこに胡坐あぐらをかいているところがあると思うんです。
今、ここで甘やかせば、絶対にためになりません。」

「……一理あるのう。」

「正直言つて、本気で勝負をしたら……足元にも及びませんよ。」

だからこそ五年前……まだ子供だったあいつが料理長に就任した時も自分は納得しました。

それが年頃になったら、急に店を辞めて神学校に行くなんて突拍子もないこと言い出して……自分勝手も甚だしいです。」

限りなく静寂に近い空気の中、流しに溜まった水が音を立てた。

「流民だったガキの頃……シュナと一緒に、この店に拾ってもらっ

て。

俺はご隠居のことを本当の父親だと思ってますし、一生かけても感謝しきれません。

その恩を返すつてのは当然だし、そう考えて当然だと思うんですよ。」

「……わしゃ、別に気にせんがのう。」

老人は目を細めた。

「個人差はあるが……料理人には技術の訓練以外にも、世界各地の見聞が必要じゃ。」

それを思えば、神都での苦労は決して無駄では無かつたろうて。」

その言葉を、ボングは苦虫を噛み潰した表情で聞き入る。

「証拠に、今日のシユナの料理は独創性にあふれておった。昔と比べ、ちいとばかり『精度』は落ちておるがの。」

「……やはり、しっかり見てらっしゃるんですね。」

「わしとて、おぬしらは実の子同然。

大事に思う気持ちはお前と同じじゃて。」

「俺は……」

厨房の窓の外を遠く見詰める彼。

店裏の空き地で、大弓を構えているシユナの後ろ姿が見える。
神学校で習得してきたという『それ』を、夜中、気晴らしに練習
している姿が最近では目立っていた。

店で包丁が握れない悔しさは、料理人として痛いほど理解できる。
だからこそ、まずは包丁を使わせない罰を科したのだ。

嫉妬するような才。

目を閉じれば、先の彼女の調理風景が思い起こされる。

愛していればこそ、その嫉妬すら、どこか心地良いものだった。

3

深夜。

学生寮の食堂。

彼は空腹を満たすため、いつものように厨房へ侵入する。

だがその日、そこでまず目撃したのは、床にうずくまっている女子生徒だった。

「……おい、誰だ？」

俺より先に夜食を漁っている奴は……」

寝惚けた表情のまま、カウンター越しに自分勝手な言葉を投げかける彼。

だが、対する彼女は右手を押さえ、震えているばかりである。

薄い暗闇の中、やがて目が慣れて気付くのは、一面に広がった血の真紅。

その鮮やかな色に眠気を飛ばされて、彼の視界は途端に広がった。

無造作に放られた包丁。

血痕はまな板の上から飛散して、床の血の海と繋がっている。

「……これじゃあ……もう……」

そして、その光景を前に、彼女は呆然と呟いていた。

「……わたし……！」

……一生…料理が…できな…い……！」

手に負った傷は深いものの、痛みは麻痺している。

だが、その代わりに。

良く研がれた刃で『やった』瞬間に、嫌な音を立てて断裂した、親指と人差し指の付け根の『腱』の感触。それが何度も自分の中を巡っていた。

「…あゝあ、こいつはひでえな…。」

まあ、動くなよ…。」

いつの間にか目の前に立っていたその男が、呆れた顔で呟く。

不意に掴まれる手首。

だが、あたたかな温もりの後に、それはすぐに突き返された。

「こんな夜更けに…何、バカやってんだ。

いいか、この床の血は自分で拭いておけよ。」

そうして、彼は何事も無かったかのように彼女を通り過ぎ、貯蔵庫の扉を無遠慮に足で開け、その中を物色し始める。

「……？」

彼女は涙を拭いて、彼に握られていた自分の手を見た。
真一文字に開いていた傷が、今では何故か、元通りになっている。

「ちっ……ロクなもん残ってねえな。
あの食堂のババア、まったく気がきかねえ…」

乾燥したパスタの束と一切れのハムを取り出しながら、再び貯蔵庫の扉を蹴り飛ばして閉める彼。

そこで初めて、互いの視線がぶつかった。

「包丁の練習だあ？」

笑いを必死にこらえながら、その男は言った。

「な、何がおかしいのよ…！」

顔を上気させてテーブルを叩く彼女。

「そういうことは、料理屋でやれ。
……違うか？」

また、身を振^{よじ}らせて笑う彼。

「…ねえ、それよりさっき、私の身体に何したの？
あの傷が一瞬で治るなんて……非常識だわ……」

「……。」

挽き肉を和えてある出来立てのパスタを口に運ぼうとした彼が、
そのままの態勢で止まる。

「そのことは、もう忘れる。」

「…む、無理だつて!!」

顔を真っ赤にして、大声をあげる彼女。
その声は、無人の食堂全体によく響いた。

「他人の痛みを移すと……傷が治せる。
何故か、俺は昔からそういうことが出来るんだよ。」

冗談のようなことを真面目な顔で言う、そんな彼は左手でたどた
どしく料理を食べている。

「……もしかして、あんた……
え……？」

それよりも、移すつて……今……右手……!!?」

「ああ、すげえ痛え…。」

料理の練習するにもな、思い切り良すぎだぜ。」

「こゝ、ごめんなさい…！」

「…いいんだよ。」

こういうのは、慣れてる。」

愛想笑いも浮かべず、彼は目の前の料理に没頭していた。

「…しかし…うまいな。」

「…………へ？」

今、なんて？」

下げていた頭を上げ直し、聞こえていながら、もう一度聞き返す彼女。

「うまいって言ったんだよ。」

今度から食堂のババアの代わりに、おまえがメシを作ったらいい。」

「む…無理言わないでよ…！」

…それより、美味しいって…ホント？」

「ま、腹が減っているせいも…あるかもな。」

自分に出された皿を全て平らげた後、おもむろに立ち上がる彼。
彼女が慌ててハンカチを取り出そうとすると、彼は自分の袖で乱
暴に口元を拭った。

「俺の能力のことは、誰にも言っなよ。
面倒だからな。」

「……………うん。
……………手のこと…本当にありがとう…。」

その感謝の言葉にも、彼は背を向いたままで肩をすくめる。

「…あとは、貧血に注意しろよ。
『あれ』じゃあ、失った血までは補えねえんだ。」

「だ、大丈夫…！
ちゃんと食べて治すから……………！！
もりもり食べるから……………食べるからっ、私……………！！」

大急ぎで、自分用に作った豚肉のレバー入り野菜炒めをがつつく
彼女。

そんな様子に、去りゆく彼は少し目を細めたように見えた。

「…あ……………名前…聞くの……………忘れた…。」

誰もいなくなった食堂で、しばらくしてから彼女は呟いた。

当時、シユナは通常の学業活動の他に、『青年聖弓隊』に所属していた。

それは教会の有事に備えた学生ボランティア団体の一つであり、そこへ所属している者は自然と学校からの評価も高くなる。

「黒い長髪で、背が高く、表情は怖い印象があるけど……まあ……結構、男前だったかな……。」

隊の訓練場の更衣室で、彼女は数人の学友を前に、照れ笑いを浮かべながら語った。

「もろ、運命の出会いってやつ……感じちゃったんだわよ、これが。」

得意になって頭を掻く彼女の肩を、一人の生徒が背後から叩く。

「……もしかしてそれ……『戒』セバンシュルド』のことじゃない？」

「戒？」

「そついう名前なんだ、彼……」

「……悪いけど……その人にあんまり……近付かない方がいいよ。シユナ。」

「え？」

聞き返す彼女に、その学友は首を振りながら続けた。

「聞いたことないの？」

あの人、この学校の創立以来、最悪の不良って言われてるのよ。」

「授業にだって、滅多に顔を出さないって言うし。」

「普通の礼拝にさえ、一度も来たことが無いって。」

人づてに聞いたような風潮を次々と並べたてる友人達に対し、シユナの目は次第に反抗の色を帯びていく。

「……そんなの、ただの噂でしょ！」

見た感じ、悪い奴じゃなかったし……」

認めたくない気持ちと共に、言葉を吐き出す。

「あのねえ、火のない所に煙は立たないの。」

悪い奴じゃなかったら、『貧民街で小さなギャングの大將を気取ってる』とか……そんな噂、絶対出ないって。」

「ねえ……やめなよ、本当に……。」

関わりと……口くなことにならない……そう思うよ。」

「…か、関わることなんてしないわよ。」

続けられる忠告に背を向け、彼女は早々に着替え終わると、急いで更衣室を後にした。

緊張した弦を離し。

酒樽の上に置いた林檎を、放った矢が真っ直ぐに貫く。

シユナは残身の構えを解いた後。

白を基調に赤いラインの入った、制服のミニスカートを直した。

これは古臭くて野暮ったい修道着よりもずっとモダンで、学生達にも人気があったのを思い出す。

それでも、わずかなお洒落のために、訓練の厳しい青年聖弓隊にすすんで入ろうなどという変わり者は少なかったが。

（また……大きくなったな……）

皮製の胸当てに窮屈さを感じながら、再び大きく弓を構える彼女。

（むかつく。

こんなところ、いくら成長したって…何の役に立たないし……！

いつそのこと…男に生まれてくれば良かった…！！）

的を逸れる、次の矢。

「……あ……」

そこで肩の力を抜いて、大弓を降ろす彼女。

矢の軌道は、自身の心鏡であると教えられた。

まさにその通りである。

戒と再会してからというもの、振り切ったはずの過去をやたらと思いついて出している自分。

…四年前、周囲の反対を押し切って店を飛び出し、歴史ある神学校を選んで入学した。

しかし結果は、夢破れて出戻るといふ、ひどく恰好の悪い生活。

ようやく、それにも少しずつ慣れてきたというのに、また何処か遠くへ逃げてしまいたくなっている。

矢を拾うために歩を進めると、彼女は遠くの土手を駆ける少年の姿を認めた。

（…こんな夜更けに、何やってんだろ……あの子。）

心の中で呆れつつも、その方向へ足を傾ける。

自分の理解の及ばないところで、心に連想するのは彼の影。再び、胸の中がざわついていた。

大きなマストがぎしぎしと不気味な音を立てて、ひしめき連なる闇の中。

最初に見た記憶通り、大きな河川の縁^{へり}では、一隻の飛翔艦が漁船と並んで停泊していた。戒は周囲に誰もいないことを注意深く確認してから、そこへ向かって慎重な足どりで進む。

悠然というよりも優雅という言葉が良く似合う、艦の姿。

そして、その入り口へと向かって、足場として架けてある橋のすぐ脇には、艦内から降ろしたと思われる荷が積んだままになっていた。

作業はそこで中断されているもようだが、見張りさえ配置されていない無防備さである。

酒のせいだろうか。

先ほどの店内の様子を思い起こせば、ありえない話ではない。

(……………)

ふと妙な予感を感じ、積荷箱に触れてみる戒。

そして、釘が打ち付けられた箱のフタを無理矢理こじ開け、彼は中身を確認した。

そこには葉巻の有名銘柄の箱がびつしりと詰められていたが、それを二つほど持ち上げると、その下には粗末な紙に包装されただけの物体が詰め込まれている。

それらの一束を拾い上げて破ると、中から出てくるのは乾燥した葉。

すぐに噛んで味を確かめると、予感が的中したのを知る。

「……………っ！」

だが、彼は同時に、喉元に触れる冷たい金属の感触に息を飲んだ。

「…ま、待て……………俺様は別に……………これを盗もうとしたわけじゃ……………」

全身を緊張させたまま、声を洩らす戒。

喉に突き付けられた大剣の刃は、わずかに振り向くことも許されない程の殺気を帯びていた。

「貴様等が飲食した店で、客の荷物を盗んだ奴がいる。知っていることを全て話せ。」

しかし、背後から囁かれるのは、意外な言葉。

「なに？」

「……何のことだ？」

戒は前を向いたまま、本気で問う。

その返答に、刃は限界近くまで押し付けられた。

「とぼけるな。」

貴様は、目の前にある飛翔艦の乗組員だろう。」

途端に怒気を孕みだす 女性の声である。

「……誤解だ。」

俺様はこの艦とは、何も関係ねえ。」

「では、何故、ここにいる？」

再び返される質問。

少しの静寂が流れた。

「……とりあえず、これを見ても。」

戒は先ほど積荷から入手した草を、握った手から落とす。

「麻薬の類いだ。」

「……麻薬？」

背後から殺気が外れて、ようやく振り向くことが出来た戒。彼は、初めてそこで声の主の姿を確認した。

乾燥した草を拾い上げて、それをまじまじと見詰めている、鎧に身を包んだ長身の女性。

大剣の切っ先をこちらに向けたままの、その締まった顔立ちに思わず気圧される。

「俺様は『ただの通りすがり』で、偶然これを見つけたただけだ。だから、誤魔化さずに正直に教えてやった。こんなゲスな仕事とは、一切関係無いぜ。」

眼前の彼女は、その説明にはあまり納得がいかない様子だったが、ようやく剣を下ろす。

「……ここから、すぐに去りなさい。
邪魔になる。」

そしてすぐに彼を横切り、川と飛翔艦の間にかけられた橋を渡り始める彼女。

「邪魔……だと……!？」

そんな彼女を一旦は追った戒だったが、浮かんだ一つの思惑によって足を止めた。

今は行動すべきではない。

先ほどの積荷箱の上に座り、頭を夜風に当てて自分を静める。

そんな夜の河川を充分に見回すことが出来る高い視線の中、戒はやがて土手から駆け降りてくる人影を見た。

「……戒くん！」

どうしてここに？」

驚きの声を上げる、それはパンリ。

「……それは、こっちの台詞だ。」

戒は冷めた目で、静かに答える。

「そ、それよりも、ここへ鎧姿の女性が来ませんでしたか？」

「……その飛翔艦に入っていたぞ。」

「やっぱり!!」

すぐさま、飛翔艦に繋がる橋へと足を踏み出すパンリ。
だが、彼はたったの半歩で動きを止めた。

「……でもどうしよう…勝手に入るわけには…」

「別に、構わねえよ。」

こういうのは、扉に鍵をかけない方が悪いと決まっている。」

おもむろに積荷箱から腰を上げ、戒はパンリの脇から平然と橋を渡る。

「だ、だめですよ!!」

ウェンウェンさまは、杖と荷物は諦めなさいって…!」

「杖と荷物? 何だ?

知るか、そんなもの。」

彼は言葉を短く切って、薄っすらと笑みを作りながら徐々に飛翔艦へと向かっていった。

「丁度いい機会だ、お前にも一応断っておくぜ。」

実は、あの女が中の連中を引き付けてくれている間に、俺様がこの飛翔艦をいただくことにした。」

「え」

後ろからついてくるパンリの、大きく開いた口を塞ぐ戒。

「名案……だろ？」

笑いを堪えきれずに、彼は肩を震わせた。

神都の貧民街スラムにたたずむ、とある廃墟。

『このアジトの周りを嗅ぎ回っていた、不審な女を捕まえた。』

その日の深夜。

戒は、敷かれた獣の皮に寝そべったままの姿勢で、そんな報告を受けた。

「……女？」

その場に突き飛ばされる若い娘を見て、誰かが呟いた。

「お、おい、聖弓隊の制服じゃねえか……！」

数秒後、さらにざわめく男達。

緊張が高まり、誰もが身構える。

「ほんと……だったんだ…ギャングやってたって……。」

彼女　シュナは投げ出された床で両足をきつく閉じながら、
涙目で呟いた。

「ギャングう？」

黙したままの戒の脇で、吹き出す数人の男。

「…おい女！
その逆だって。

俺たちや、ギャング潰しだぜ？」

「……え？
でも、噂じゃそういうことになって…」

呆然とした顔を上げる彼女。

「まあ、やりかたが少々、荒っぽいからな。」

「この前だって、俺らが行きつけの店を地上げに来たクソ野郎を半
殺しにしてやったしな。」

刃物を研ぎながら、物騒な言葉を吐き合う別の男達。
その言葉に、皆が爆笑する。

「帰れ。」

それらの中心にいる戒は寝転んだまま、迷惑そうな顔で一言だけ
呟き、顔を逸らした。

「俺に関わると、ロクなことにならねえ。」

「そうそう、言うとおりだ。」

あんたとは住む世界が違うんだぜ、お嬢ちゃん。」

相槌を打つ、脇の男。

見れば、彼も修道着を着ていて、そういった連中も幾人ばかりか
居る。

「この神都って呼ばれる場所にも、裏では暴力がはびこり、そのス
ジの秩序つてもんがある。」

それを、俺たちが守ってやってるんだ。」

その戒の仲間と思われる学生は、胸を張って言った。

「喧嘩がめっぼう強いんでな。」

こいつには、無理を言って参加してもらっている。

口と人相は悪いが、人間的には信用のおける、いい奴だ。」

別の男が言った。

「しかしモテモテだなあ、戒。

この前も偉そうな口調の女教師が一人、同じように血相を変えて来たっけか。

確か、結界師だとか……あの後、彼女とはどうなったんだよ……」

「くだらねえ世間話はそのくらいにしておけ。」

戒は軽口を叩く友人を睨みつけ、上体を起こしてシュナに向き直った。

「いいか、もう俺に関わるんじゃないぞ。

ここへは二度と来るな。」

「……で、でも……」

その時、シュナには伝えたいことや、訊きたいことが山程あった。

以前、怪我を治してくれたお礼。

どうして自分を避けようとするのか。

そして、戒の友人が口にした女性のこと……

だが、その後に続いた一言が、全てを封じてしまった。

「どこをどいつか、知らねえが。」

「……待て。」

戒が体勢を屈めながら、横に並ぶパンリの腕を取って止める。

先の廊下に転がっている靴。

さらにその奥で、伏されている男達。

薄闇の中で、数えること五人。

「俺様の思ったとおり……あの女、相当腕が立つようだぜ。」

そろり、と気絶している男達の脇を用心して進む戒。

誤算があるとすれば、例の女騎士は予想よりもずっと大雑把だったことだろう。

後始末がこれでは、見回りの者が異変に気付くまで、あまり猶予は無さそうである。

「……ところで、戒くん……シュナさんのことなんですけど……。」

足元の凄惨な光景から気を紛らわすように、震えた声でパンリが訊いた。

「なんだよ。」

こんな所で、そんな話をするんじゃないよ。」

手を壁に触れて進みながら、戒が返す。

「…あいつとは、ただの同級生だ。」

「本当にそれだけですか？」

「いつの間にか、まわりつくようになってよ。」

まあとにかくおせっかいな奴だ。

…はつきり言って、迷惑なんだよ。」

「……迷惑……」

「ああ見えてもあいつ、学校では生徒会長をやったりしてよ。」

…成績優秀で運動神経も抜群だった。

本来なら、首席は間違いなかっただろうな……」

「どうにか、仲直りしてもらえませんか。」

……言葉にして謝らないのは卑怯ですし、私もすっきりしないと
いうか……」

思わず言葉を洩らしたパンリは顔色を変えた。

目の前では、戒が拳を握りこんで震わせている。

「てめえ、ひよつとして、この俺様に説教を垂れているつもりか？」

「じ、ごめんなさい……！」

「ち……！」

彼は振りかぶった手を結局のところ下さず、面白くなさそうに足早に前に行く。

「戒くん……そこまでして……君は一体何を……しようというんですか？」

少し距離をおいて、パンリは訊いた。

「……やかましい。」

どうして、お前までそうやって俺様に付きまとうんだ。」

「友達だからです。」

これ以上の質問責めは勘弁と、戒は閉口した。

頭からフードを深く被って隠しているものの、相手の表情が至って真顔なのが判断できる。

「しかし……初めて入るのに、飛翔艦の構造が分かるんですか？」

「……大体な。」

別の質問をぶつけられたのを機に、それに短く答え、戒は歩を早めた。

やがて長い廊下が終わり、大きな吹き抜けに到達する二人。階下を見ると、木板の床地が広がっていた。

「艦長室は、多分ここだ。」

吹き抜けを一周している四方の壁で最も目立つ、重厚な両開きの扉の前に立つ戒。

その脇には、観葉植物と無駄に格式高い彫像が飾ってある。

「バカが権力を持つと、自己顕示欲が強くて困るな。」

「……ここからどうするんですか。」

「ちょっとした『交渉』を行う。
手伝え。」

後ろ手で相方の細腕を握り、片側の扉に手をかける戒。

押すと簡単に開く。

続けて、もう片方の扉を押したパンリも同様だった。

「……戒くん……ところで、誰の手を握っているんですか？」

そして問いかけるパンリ。
見れば、彼は両手で扉を押していた。

「……………」

後ろで何かを握った自分の手を確認する戒。

「うお！」

「うわーっ！！」

彼の急な大声に驚き、それよりさらなる大声で飛び上がる貴族風の男　　ラックホルツ。

「てめえ！」

まだ寝てなかったのか！！」

「……………トイレだ。」

戒の質問に律儀に答える彼。

そこで二人は互いに、同時に手を離す。

「ん、君は確か……………料理屋で会ったな……………」

そしてラックホルツは、すぐに落ち着きを取り戻して続けた。

「そうか。あの時の私の演説に感動し、配下になりたくて、明日を待たずして思わず侵入してしまったのだな。」

安心したまえ。

我がラックホルツ家の家訓にも『来る者は、いかなる者でも歓迎せよ』とある……」

話も途中、頭突きが一閃。

そのあまりにも鈍い音に、後ろでパンリが顔をしかめた。

「アホが。」

寝言は寝てからほざきやがれ。」

額を押さえて床にしゃがみこみ、涙目で呻いている彼を見下ろしながら、戒は言い放つ。

「な、なんと、無礼な……」

「無礼で結構。」

礼儀など、クソの役にも立たん。」

胸を大きく反らしながら言葉を吐く戒。

「では……君は一体、私に何の用なのだ。」

立ち上がり、負けじと尊大な態度で訊き返すラックホルツ。

「俺様が親切に教えてやろうと思ってな。
……お前は利用されていることを。」

「利用……だと？」

彼の表情が曇る。

「この飛翔艦が運んでいる積荷の中身、知っているのか？」

「下賤なことは、全て配下に任せてある。」

傲慢ではないが……私は生まれてこのかた、フォークとナイフ以上
に重いものは持ったことが無い！」

再び、頭突きの音が響いた。

「本当に傲慢にならないことを、威張って言うんじゃないか。」

「……わ、わかったから、もう頭で殴るのはやめてくれないか……」

両足を痙攣させながら、再び額を押さえて呻く彼。

「お前が助かる道を、一つだけ教えてやるから、有難く思え。」

……それは、この飛翔艦を俺様に預けることだ。

俺様ならば、あのごろつき共を一斉に統率してやる事が出来る。

「

「む、無茶苦茶なことを…」

後ろで、パンリが真つ当な言葉を呟いた。

「ふむ……だが、確かに君の言うことも道理だな。

最近の彼等の態度には、少々、手を焼いていたところだ。

こういうものは、専門家が統率するのが正しい。

私の腹心になることを許すぞ。」

「だから、寝言を言うな。

お前だけは、ここで艦を降りるんだ。」

「はい？」

戒の返答に、ラックホルツは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。

「そ、そんな不条理がまかり通るのか、俗世間では!？」

我がラックホルツ領ではありえんことだぞ!！」

「……まで。」

「うぐ!」

突如、ラックホルツの大声を殴って止める戒。

続けて、口を人差し指で押さえる仕草。

静けさの中。

周囲をうかがって唇を噛む。

気が付けば、妙な香水の匂いが漂っている。

「……やっぱり、俺様の読みは当たっていたな……。
頭を監視する配下なんて……いないぜ……！」

戒がラックホルツに耳打ちすると同時に、廊下の角から姿を見せる一人の男。

厚化粧の気味悪い長身。

腰にかけた鞭を手に取り、しならせて鳴らす。

「参ったわねえ……こんなに早く計画が潰れるなんて。
早く、テツジのお兄様に報告しないと……」

彼の気味の悪い女言葉に、戒が顔を歪めた。

「あら、ところで貴方……好みの顔だわ。」

その表情に見入って、歩み寄る彼。

「ただ残念ねえ……その頬の傷さえ無ければ、ねえ。」

「……じゃあ、この傷に感謝するのは……これで二度目だぜ。俺様も、オカマ野郎には興味はねえからな。」

唾を吐き、怒りを誘う戒。

「……なぶり殺してあげる。」

その顔の傷、何倍にも増やしてね……！！」

相手は、握った鞭を静かな言葉と共に振り下ろす。

(……こんな奴、普段なら構わねえが……！
今はお荷物が多すぎる……！！)

戒は脇で啞然としているパンリを押し込みながら、耳の奥から響く別の音を聞く。

「……！？」

突如、脇の壁を破壊して突き抜けてくる物体。

不意の衝突。

戒は理由も分からずに手すりごと吹き抜けまで飛ばされ、脇にいたラックホルツを巻き込みながら、階下に転落する。

「か、戒くん!？」

すぐさま下の様子を確認するパンリ。

「くそっ……………今度は何だ!？」

だが戒は平気な様子で、すぐさま立ち上がり、共に落下してきた太めの小人を視野に入れる。

スキンヘッドに、短足。

そんな彼は小さい身体で目一杯に肘を伸ばして前に両手を交差して構えた。

訓練された武術の動きである。

「……………えへえ。

マジのあにき、こいつやったら、こぼつびくれる?」

子供じみた言動と共に、上階に顔を向ける小人。

「たっぷりあげるわ。

でもね、そいつは半殺しよ。

とどめは、後で私がいただくから。」

恍惚とした表情で、上階から見下ろす彼。

「さあて……。」

まずは、坊や……あなたの番よ。」

「……！」

そこでパンリは気付く。

完全に孤立した自分。

逃げる手段を考える前に、風を切って放たれる鞭が頭のフードを跳ね飛ばした。

「あら？

……珍しいわねえ……。」

そこで露になるパンリの獣のような長い耳を眺め、マジは舌をなめずった。

「垂耳ちゃんってば、闇市場で高く売れるの。」

でも、その前に……お兄さんが、たっぷり可愛がって……あ・げ・る。」

気味の悪いアクセントと共に告げられる、淫魔のような言葉。

「……！！！」

背をむけて一目散に離れようとするパンリ。

だが、地を這う蛇のような鞭ですぐに足をすくわれてしまう。

転がるパンリの手の甲に、続けて浴びせられる一撃。

「え……！？」

……いた……！？」

「うふふ……」

みねうち……よ。」

軽くミミズ腫れになったパンリの白い肌を見て、快感に全身を震わせるマジ。

いったん鞭を丸めて畳み、それを噛んで笑みをこぼす。

一方のパンリは、『痛み』という害意を与えられることに対して慣れていないためか、ただ床にへたれ込み、気を動転させていた。

外見的な容姿も相成って、それがマジの劣情をさらに煽る。

「……なんで……こんな………つあつ！？」

今度は頬に襲いかかる痛み。

ひどい屈辱と共に、周囲の景色は現実感を失っていく。

「……フフ……！」

笑みと共に鞭を後ろに振りかぶる。
だがその軌跡は、そこであらぬ方向へと持っていかれる。

「!？」

鞭を弾いたのは大剣。

パンリの背後の廊下から現れた、クウであった。

彼女は握った大剣を真っ直ぐ、両手で水平に構え、油断なく相手をうかがっている。

「……あら、今度は中王騎士団？
面白い日ねえ……。」

マジは彼女の鎧をしばらく凝視してから呟いた。

「……窃盗に密輸……そして傷害か……。
……やはり、ロクな集団ではないようだな。」

「……良く知っているじゃない。
……じゃあ、殺さなきゃね。」

瞬時に波打つ鞭打。

先のパンリの時とは違い、今度は巻かれている鉄の部分がしっかりと相手側を向いている。

クウはそれを寸でかわすものの、さらに返して襲い掛かる二撃目に剣の柄を絡み取られた。

「……………!!」

だが冷静に、すぐさま腕を縦に大きく振る彼女。その剛力に、マジは身体を持っていかれる。

そして勢いで弾かれた鞭は、脇の壁際まで飛ばされてしまった。

「……………大した馬鹿力じゃない。」

それと痺れる己の手を眺め、少し驚いたように呟く彼。

「……………立てますか?」

その隙を見て、クウがパンリに手を差し出す。

「あつ……う……………はい……」

泣き顔でその手を取り、痛む頬を押さえながら、のそりと立ち上がる彼。

「早く、ここから逃げてください。」

とても危険です。」

「……でも……戒くんが……まだ下に……」

その言葉に、クウは無言で顔を横に振った。

「……！！」

……わかりました……すみません……」

彼女の頑なな態度に、パンリは自分が足手まといなことを悟り、踵を返す。

「運が悪いわね、あなた。」

私、女には容赦しないのよ。」

マジはそんな二人の様子を余裕の表情で眺めながら、先ほど拾い上げた鞭を素早く振るう。

瞬間、足元の床板が弾け飛んだ。

「……それは……後腐れなくて、むしろ好都合だ。」

それに対し、クウは指を鳴らして応えたのだった。

「……この野郎……不意の一撃くれやがって……!!」

憤慨して、完全に立ち上がる戒。
転落時、咄嗟にラックホルツをクッションにしたおかげで、自身に大した怪我はない。

足元で気を失っている当の本人は、骨の何本かは折れているかもしれないが、そのことなど
戒にとっては何の足枷かせにもならなかった。

とりあえず、彼をその場に放置したまま、脇に見える廊下へと走りこむ。

それに合わせて小走りでついてくる小人。

「いちげきじゃすまないよお。

おいら、このひしょうかんの、けーごやくだからさあ。」

(……『警護』だと?)

自分の腰程の身長。

そんな小人の頭の弱そうな言葉に対し、戒が眉をひそめて嫌悪を示す。

相手は体格の割に馬力がある。

それは、先ほど存分に思い知った。

用心のために走って距離を取れば、その小さな体は飛び、そこか

ら縦の回転に移行。

直滑降で床板を粉碎し、そのまま追いかけて来る。

「く……!!」

駆けながら、それと衝突する寸前に脇の廊下へと転がり、退避する戒。

見たところ、相手に刃物を使う様子は無い。
だが、全身の肉が凶器のようである。

戒はその追撃を必死に振り切り、しばらく走るうち、気が付けば
広い倉庫へと抜け出ていた。

積み重ねられた木箱。
並べられた樽。

食料があるのだろう。
その空気は、塩辛い匂いや甘い香りが入り混じっている。

「……………」

そこで観念した戒は、直立したまま向き直る。

肉弾から通常的身體へ戻り、またも小走りで追いついてくる小人。

「素手で喧嘩かよ…」

あいつに出会ったと思えば……やたらと、昔と似たようなことが起こりやがる…!!」

戒は無防備に突進し、素早い拳を、小人の顔面を軽く当てる。

「ふふ……きかないよお……」

平然と笑いながらそれを受け流す彼。

だが、戒の拳は完全には握りこまず、緩やかに開いていた。

「いひ!？」

その親指が、彼の右目の端に突き入る。

「調子乗ってんじゃねえぞ……小デブが……!」

非情にも、その目端の骨を握ったまま、横へ押し込む戒。

「いい!？」

いたい!

いたいよお…!!」

喚きながら、小人は首をその方向へと抵抗せずに任せる。

戒は訴えを全く意に介さず、無表情でその横顔を壁際に押しつけ

た。

「雑魚が……引っ込んでろ!!」

そのままの態勢で、側頭部への頭突き。

衝撃の瞬間、逆方向へ同時に指を引き抜き、掴んでいた骨を砕く。

あまりの痛みに意識を失い、崩れ落ちる小人。

戒は続けざまに、彼の肝臓のあたりに膝を入れ、完全にとどめとした。

昔ならした喧嘩の手段だった。

さらに用心のため、その白目を剥いた顔面に向けて足を振り上げる戒。

「殺す気かよ？」

最近のガキってのは恐ろしいな……加減つてものを知らねえ。」

その場に、入ってくる人影。

床に擦れる、着物の裾の音。

「外で飲み直して帰って来れば……まさか弟分がリンチ喰らっているとはな。」

「正当防衛だ。」

腕を組みながら呟く着物の男に、戒は平然と答えた。

「若氣が有り余っているようで、羨ましいぜ。

見張り番の有様といい……やることが随分と過激じゃねえか。」

「……。」

勢いを止められた足は寝転んで気絶した小人の顔面に軽く乗り、そのまま踏みにじられる。

だが、男はその様子に眉一つ動かさない。

「じゃあ、てめえは加減してくれるのか？」

鼻を鳴らしながら、不敵に挑発する戒。

「しないさ。」

俺は傭兵……ガキの喧嘩にゃ付き合う義理がねえ。」

青眼に構え、腕を下げる男。

その裾の奥から、小太刀が飛び出した。

「　　どうして……あんたが…そんな怪我をしてるのよ…」

貧民街の小さくて汚い診療所。
扉を開けるなり、目に飛び込んだ光景に、シュナは呆然と呟いていた。

「　　……またおまえか…。」

ベッドに埋もれたまま、戒はまるで彼女を見ずに呻く。
口元を逃して顎部に巻かれている包帯で、喋るだけでも苦しそうだった。

卒業を間近に控えた頃。

神都の各地に現れた、凶獣除けの結界を破り続ける得体の知れない連中。

それらと戒のグループとの衝突は日々、激化していた。

そんな中、彼自身が重症を負ったという噂を聞きつけ、シュナは

飛んできたのだった。

「……………帰れ。」

低い声で、戒は再び呻いた。

「あの女の……………せいね……………」

彼の身体に被せられたシーツを掴み、目を剥く彼女。

「おまえ……………」

「あんたの仲間に、何があつたか聞いたの。
全部…知ってるんだから!!」

遠く離れて見守っていた戒の集団に、いつの日か、一人の女教師
が加わっていた。

そばにいる。

自分が決して許されなかったその光景に、今度は、ただ落胆を覚
えた。

それも、法王庁指定の強力な結界師だという。

二人が愛し合うことは元より、その事実がさらに彼女を嫉妬させ
た。

「あいつを……自分の代わりに怪我させれば良かったのよ……。
他人の傷なら簡単に治せるんでしょ！！
なんで、そうしなかったの！！」

理由は解っているのに、シュナは言葉を止められなかった。

今にして思えば。

いつそのこと、それを罵り返されることの方が、幾分ましだったろう。

だが無言で横たわる戒の表情は、『自分の愛した女性を一瞬でも傷付けたくなかった』と。

そんな風に物語っていた。

その後。

生徒会主催による、賑やかな卒業前夜祭。

無数の負傷者と死者を出し、誰もが忘れない。

忌まわしい事件の日が訪れる。

神学校と教会の一部が傭兵達と癒着し、長年に渡り、凶獣除けの結界の質を意識的に抑えていたという事実。

その日、それを知ったレティーン貧民街の有志と教団の暗部との衝突は、さらなる結界の歪みを生み。

押し寄せた凶獣によって、貧民街の殆どと校舎の一部が失われた。

だが、それが明るみになることは無く、時の司教達によって握りつぶされる。

そのことは、ごくわずかな人間しか知らない。

そして世間は、それを『レティーンの悲劇』と一種の自然災害のように騒ぎ立て、認知したようであった。

あの時も、やはり彼は病み上がりでありながら、彼女と共にいた。

涙を流して診療所を後にしたあの日。

仲間達が傷付き、愛する学校が破壊された日。

彼がその身を挺してまで守った女性が、永遠とも知らぬ謎の眠りについた日。

そんな奔流の中で迎えた卒業式。

今年の首席、該当者なし。

そんな神学校側の報は、大いに生徒達の間で物議を醸したが、そのことが彼の失踪と重なって、彼女にはある程度の予想がついたのだった。

「見つけたぞ　　侵入者……あ!？」

艦内廊下の一本道で弓を構え、飛び出した相手の足を瞬時に射抜くシユナ。

半分酔っぱらっている男達を撃退するのには、それだけで充分だった。

(……何やってんだか、私は。

また、こんな風にトラブルに巻き込まれちゃって……)

大半はまだ寝ているようで、敵の人数は極めて少ない。

そこでまた、廊下からの足音に、照準を合わせる彼女。だが、矢を離す直前で、その指は止まった。

「あんたは……!!」

「あ……ああ……」

フードを乱しながら廊下の角から現れ、彼女にすがりつくのはパ
ンリである。

まだ完全に把握していない飛翔艦内を闇雲に走り回った拳句、よ
うやく見知った顔に逢えた安堵から、
彼はその場に腰砕けになった。

「少し様子を見ようと思って来たら…一体何なの、この騒ぎは？
説明しなさい……よ、つとー！」

そこで逆方向から現れた、今度は間違いない敵の姿に、シュナは
矢を放つ。

「…で、でも、シュナさんは、どうしてここに？」

「何でって……そりゃ……」

口を開けたまま、目線を上に逸らす彼女。

「…もしかして…私の後をついて来たんですか？」

「そ、そうよ。」

弱そうなあんたが夜中に出歩いてるのを見て……心配になったの。
そしたら案の定、おかしなことに巻き込まれてるじゃない。」

「……巻き込まれ……」

そ、そうだ……戒くんが大変なんです……！」

「あいつがどうかしたの!？」

そこでシユナは、改めて彼に詰め寄った。

「彼も…心配……なんですよね？」

上目づかいで、パンリは恐る恐る訊く。

「……あのねえ…。」

何で、私があんな奴のこと…。」

答えてから、目をきつく閉じる。

「あ~~~~もう、めんどくさい!

同級生の心配して……何が悪いっての!~!」

だが、急に膝頭を大きく叩いて叫ぶ彼女。

その本音に、パンリが思わず笑顔をこぼした。

「昔から、いつも無茶ばかりして……!!

ずくと、昔から心配してんだから!!

私の場合は、あんたと違って三年越しの筋金入りなのよ!~!」

赤面して横を向きながら、彼女は壁に向かって言葉を続ける。

「でも、どんなに心配したって、何も言ってくれないのよ、あいつ。……卒業の時だって、何の説明もなく一人で背負いこんで、勝手に消えちゃって……。」

「……それは……」

憂いを帯びるシュナの指先を、小さな手が取った。

「私は大学の件で聞いてしまったんです。彼の天命の輪には、特別な迷信があって……それで他人を不幸にするかもしれない、と。」

「……あいつの……能力……そうなんだ……。」

その言葉に、パンリが頷いて応えた。

「彼には、他人との触れ合いを避けることが、自然と身についてしまっているのかもしれない。」

だからこそ、何も言われなくても、友達が支えてあげなきゃ……。いや……支えたいと思わせてくれるんです、戒くんは。」

「あんたねえ……。」

それ程の価値があいつにあると、本気で思ってるの？
まだ知り合って間もないくせに……」

彼女は呆れ顔で言った。

「知らない過去があっても、構いません。

彼のおかげで、私は救われた……それだけが真実ですから。」

「……そう。」

屈託無く、彼のことを語るパンリを前にして、シュナは呟いた後で立ち止まった。

「薄々気付いてたけれど……何となく、わかっちゃったわ。

私と、あんた達との違い。」

「え？」

「……私って、バカだ。」

一人で納得したように呟いた彼女は、再び押し寄せる足音を前に、また静かに弓を引いた。

「どう？」

この鞭に打たれると、皮が破れ、肉がはじけて、傷は骨まで達するの。」

鞭に編み込まれた鉄に巻き込まれ、挟まれる壁。

「やがて、そんな患部は腐り初めて、虫がわく。
……楽しいじゃない？　美しいものが崩れていくのって!!」

引き出される床板。

数分もの間。

マジの繰り出す攻撃によって、クウは後退を強いられていた。

「あらあら、近寄れないからって、ヤケは良くないわよ?」

「はッ!!」

その嬌声を気にせず、明らかに間合いの外から、懸命に剣を振り続けるクウ。

マジは一切油断することなく鞭を器用に自分の周りに打ち続け、
ゆっくりと近付いてくる。

後ずさりを続けるクウの踵と背に、壁が当たった。

そこは艦内の袋小路。

「追い詰めちゃったわね…」

これで、仕舞いよ。」

最後とばかりに、鞭を大きく振りかぶる彼。

その時、対面のクウはおぞましく笑う。

「 追い詰められたのは貴様だ。」

ここには既に、私だけの間合いが作られている……」

「 ……何ですって……? 」

マジは腕を後方に伸ばしたまま、小さく呟いた。

「 ……来い。」

『二匹目のシャーリ』。」「

大剣を鞘に収めるクウ。

刹那、剣の形をした無数の影が周囲の空間に浮かび、先の彼女の剣閃を全て再現してマジに襲い掛かる。

「 イツ……! ? 」

声を潰し、身を縮めたが。

彼は無残に切り刻まれ、廊下一面に血煙が舞った。

鞭が生き物のような動きで手を離れて壁に飛び、黒ずんだ染みを作って床に落ちる。

「肉親との別離をさだめに……私が生まれ持った力だ……。」

飛び続ける血の玉を背にしながら、彼女は自分の両肩の寒気を抱きながら呟いた。

「……すごい……!!」

パンリが壁際で身を守りながら呟く。

目の前には、大弓を力強く引き、さらに器用に二本同時に矢を放つシュナの姿。

異変に気付き、押し寄せてくる男達の手足に、それがことごとく命中するのであった。

「巨族って知ってる？」

私の身体には、その巨族の祖母の血が入ってるんだって。

……クォーターなのよ。」

シュナは攻撃の手を休めずに言った。

巨族とは、生来の怪力で広く知られる蛮族の一種。

パンリには、その力強さも頷ける。

だが、彼等の皮と骨の強度は狂獣さえ凌駕したため、多様な物品

の素材になることから乱獲された。

そんな迫害の歴史を、同時に彼は思い出した。

「幼い頃、私達は北の果てから流れてきた…。

いつも貧しくて、何も食べるものが無かった。

そんな時、聖都の大聖堂で定例の施しがあったの。」

彼女は顔を振って汗を散らすと、すぐにヘアバンドを直し、前を突き進む。

「でも、大人になってから、それが教会のアピールだったってことを知ったわ。

それがただの一時しのぎで、貧困層への根本的な解決にはならないってことも良く解ってる。」

押し寄せる男達も一段落したようだった。

「だけど……飢えは実際に人の心を荒ませるわ。

一歩間違えてたら、私は強盗や殺人に手を染めてたかもしれない。

それが、たった少しの料理で人は救われる。

だから……それって素晴らしいって、そのとき思った。」

大弓を肩にかけ、小走りになる彼女。

「そして、私の夢になったの。

クレイン聖堂お抱えの料理人になることが。」

だがそこで、全く背後を追って来ないパンリに足を止めて、振り向くシュナ。

「……感動……しました……」

彼はロープで涙を拭きながら、むせていた。

「ちょっと……やめてよ。」

何、マジになってんのよ!!」

それを笑いとばす彼女。

「……それは、もう終わりなんだってば。教会との繋がりも切れちゃったし。」

そして、肩をすくめて彼の頭に触れる。

「でも、あんたみたいに、未練を完全に捨て切れてないのよね。……羨ましいな、男同士って。」

そうやって……ちょっとの時間で分かり合えるんだから……」

「シュナさんは……違うんですか？」

「……私は、一人の同級生の気持ちも察してやれなかった。過去の過ちも、理由は知ってるのに、許してやることも出来ずに

いる。

そんな、心の狭い奴なのよ……」

彼女はパンリと同じ目線まで屈んだ。

「首席を逃したことを割り切れなくて。

もちろん、それから神都で一から頑張ろうとしたけれど孤独に負けて。」

顔を寄せて言葉を洩らす。

「恥をかいてまで店に戻った……その拳句に、まだ後悔してる。」

パンリは聞きながらうつむき、彼女の両膝が力無く廊下に付くのを見た。

「道は……自分でしか切り拓けないの、知ってるよ！

でも、私ったら……振り返ってばかり……ちっとも前に進めないの……！！

何か、靄もやのような物がつかえて……！！」

胸元から取り出す、赤い十字架。

死ぬほど欲しかった証は、今その手に取っても虚しいだけ。
心の挟間を埋めることが出来ず、余計に戸惑う自分がある。

「間に合う……かな？」

今さら……前へ行くの……。

……走れば……ねえ……追いつける？」

涙と問いが、廊下に落ちる。

自分は、優等生で生活しなくてはならなかったから。

ずっと後悔していた。

それで別の女性に先を越されたことに？

違う。

本当は、彼の力になればそれだけで良かったのだ。

だが、感情と夢を、天秤にかけて。

後者を選択したら、全てを失った。

その判断を下した自分を、ずっと罵っていた。

しかし、同じような挫折を味わっても。

戒とパンリは、今もずっと前を向いている。

再び、嫉妬のような、重苦しい苛つきが自分の中を駆け巡っていた。

それは学生時代にずっと煩っていた感覚だということを、彼女は唐突に思い出した。

「シュナさん。」

唐突に彼女の手を握る、小さな手。

床に付いた彼女の足は、不思議な力に引き上げられるかのようだった。

乾いた音までもが聞こえそうな、暴力的な空気の緊張が辺りを支配していく。

「傭兵の本質は殺し合いだ……それを思い知らせてやろう。」

手に固く握られた、短めの刀。

小太刀。

男がその抜き身を傍の柱に素早く擦ると、軽く火花が散った。

「これは無銘だが、いい刀だ。」

「!？」

会話の途中の、突然の一閃。
戒は反射的に半身の体勢をとり、初撃を『かわせた』ことに、心から感謝する。

その背後では、堅い木箱がまるで包丁で切られたチーズのように見事な断面を作り、中身の果物を露にしていた。
さらに驚くことに、鮮やかな切り口はその果物にまで到達しており、表面に果汁を滴らせている。

「どうだ、拔群の切れ味だろう？」

刃物に反射する相手の顔は、先ほどの飄々（ひょうひょう）としたものから、明らかに変化していた。
常人のフリをしていたが、それは血に飢えた獣なのだ戒は察知する。

「……傭兵だなんて偉そうに名乗るんじゃないねえ。
密輸入風情が。」

間合いを取りつつ、声を放つ戒。
それは相手の気をそらすため、そして己の呼吸を整えるためであった。

「フ……賢く生きているんだよ。
戦っだけが能の傭兵稼業じゃあ、儲けなんてたかが知れている。」

良く稼いで、良い得物を持ち、それでいて楽しく酒が飲めさえすれば、俺は何だっていい。」

余裕があるのか、ことのほか乗ってくる相手。

「……時代は良くなった。

飛翔艦なら、昔とは段違いで手間が省ける。」

「それで、あの貴族を利用したってワケか。」

「あいつは馬鹿だ。

この飛翔艦も宝の持ち腐れだからな、俺達が有意義に使ってやっている。

そののどこが悪い？」

「バカ言え。

……てめえらにも大した宝の持ち腐れなんだよ。」

やがて両者は、天井近くまで積み上げられた荷物を間に挟む。

「くつくつく……！」

口の減らねえ……っ！！」

心底おかしそくに笑ってから、再び手元を一閃する男。

また、反射的に身を屈める戒。

すぐ頭上の積荷を貫通しながら、刃がかすめていく。

(どうする……!?)

刀の切れ味は本物。

それを前に、半端な障害物で身を守る行為など、全くの無意味である。

「フン。」

大口を叩いた拳句……逃げ腰なのは、どうかと思うぞ。」

さらに、彼の動きは今まで相手にしてきた賊と比べて、遥かに洗練されていた。

だが、そのはずなのに、自分にはまだ幾分の余裕があった。

考えを巡らせる間も、心が恐怖に支配されることはない。

自分より何倍も大きな凶獣との死闘。

死線を越えた、空中戦。

それらの経験で、自分の中の恐れへの許容が大きくなっているがわかる。

そして何よりも、相手より遥かに強かった剣士を知っている。

「そら!!」

正面から、気声と共に樽を薙ぐ相手。

その裂け目から、中に詰まっている油が噴き出した。

「……あんまり汚すんじゃないねえ！」

これから、俺様の飛翔艦になる予定なんだからよ！！」

「はっはっは！ 本当に口の減らねえ野郎だ！！」

そして、何て自分勝手なんだ！！ 気に入ったぜ！！」

まんざらでもない表情で、刀を振りかぶる男。

「禁制密輸入の傭兵 『テツジ』といやあ、裏では結構有名なんだぜ？」

てめえも、その弟分にしてやる。

だから、そろそろ降参しろ。」

そこで、空いた片手で戒を呼び寄せる仕草。

「……………やなこった……！」

戒は返答の代わりに、傍の樽を蹴り飛ばす。

その樽の中身の油はまだ半分ほど入っており、テツジはそれを着物の裾に被ることになった。

だが彼は気にせずに踏み込み、刀を斜めに下ろす袈裟斬りを放つ。

身体を捻り、またも寸前でかわす戒。

「…偉そうに…傭兵だなんて…名乗るんじゃない！」

狙いが外れ、床に突き刺さった刃。

その腹をめがけて、思い切り蹴りを放つ。

真鍮入りのブーツの一撃だった。

「しま…ッ！」

金属同士の衝突は火花を呼び、床に飛散した油に引火する。そして、炎は瞬く間にテツジの着物へと辿り着いた。

「う…あ！？」

た、助けてくれ…！！！」

素早く床を回り回る彼。

だがその程度では、身を包んだ炎の勢いはとどまらない。

「…『ヒゲ』ほどじゃあ…ねえんだよ……てめえはな。」

視界の脇を赤く染めながら、戒は背を向ける。

直後、自然と『彼の事』を口にしたことを照れ、自分の頬を叩いた。

(……………しかし……これじゃあ、この飛翔艦……ダメになっちまったな……………)

床に燃え移った炎が広がるにつれ、嘆息と共に肩を落とす戒。

背に腹は変えられなかったとはいえ、これだけは惜しい気がした。

だが、欲をかいて炎に囲まれる前に脱出の目途をつけなくてはならない。

すぐにでも

「チス・キ
氷・生。」

背後の声。

静かに振り向き、戒は目を向ける。

そこには、先程と違い、直立して余裕の構えを見せているテツジ。着物の膝元の裾までは、薄っすらと白い霜が降りていた。

「……助けてくれ……だつてよ。
冗談が過ぎた演出だったか？」

彼の唇が、自嘲にゆがむ。

「……………!!」

状況を理解した戒が、目を大きく見開いた。

「ちょっとした先入観だな。」

剣技と源法術の両立もありえる。」

「てめえ……！」

「痛いだろう？」

勝利を確信した後の絶望ってやつは。」

彼の言うとおり、戒の足は床に吸い付いたように動かなかった。

「だが、一番痛いのは、この俺だ。」

これで積荷も飛翔艦も失うんだ。

…しかし…まあ…いいか。」

命のやり取りを弄ぶ瞳が、狂心を増して泳ぐ。

「素質はあるが……残念だな。」

今回の損失は…お前の首で、落とし前つけさせてもらうぞ…。」

業火を背に、刀が振り上げられる。

「戒！」

頭上から聞こえる、声。

壁の上方に備えられた、空調用の小さな隙間。

そこから、足を大きく広げて踏ん張り、弓を引いて構えているシュナの姿。

「あんた、まだ旅の途中でしょ！

こんなところで負けたら、承知しないから！！」

「……シュナ……？」

呟く戒の手の平に、全く逸れることなく収まる若干の痛み。それは、聖十字だった。

「フフ……ッ！

そんな飾りで、一体何のマネだ！」

テツジの刃が、背後に迫る。

体を返し、握り締めた手を、その斬撃に合わせる戒。

「神よ！！」

シュナは初めて目撃する。

神を最も信じない男が、その名を口にして起こす奇跡。

「……ッ!？」

十字架の中心から菱形に広がる、赤き膜。
それとの衝突の瞬間、中心からガラスのように碎け散り始める刀身。

加えて、テツジに伝わる両手の痺れ。

それは頭頂まで到達し、全身の細胞を硬直させる。

「……はっ!？」

続けざま、眼下に会心の笑みを浮かべて拳を握り締めている戒の姿を見た時、テツジは自分の口から
嫌にとぼけた声が洩れるのが分かった。

顎を突き上げる衝撃。

眼球が引っくり返るほどの一撃は、浮き上がる身体と共に彼から意識を完全に奪っていった。

「やったわ!！」

脇のパンリと手を合わせ、シュナは今まで見せたことの無いような笑顔で喜ぶ。

「……もうじき……炎がまわる。
とつとつ、ずらかるぜ。」

一方の戒は礼すら言わず、ぶつきらばつに頭上の二人に向かって声をかけた。

「……うん。」

嫌に素直な同意の言葉が自然と洩れる。

あの痺れたような感覚は、身体のどこを探しても、もう見付からなかった。

飛翔艦が三分の一ほど炎上したところで、なだれ込む現地の警官隊。

そしてごろつき共は、禁制品の密輸に加え、治安を乱した罪により、一斉に検挙であった。

「これは、とんでもないことになったな……。」

悪夢のような光景を遠くから眺めながら、顔中を煤で黒くしたラックホルツが呆然と呟く。

(…こいつのこと、完っ全に忘れてたぜ……。)

いつの間にか、ちゃっかりと脱出を完了させていた彼を、背後からうかがう戒。

「…ぷっ……あんた、髪が……変よ……。」

「？」

シュナが吹き出しつつ指差した、自分の頭部をさするラックホルツ。

「おほお！？

私の高貴なヘアースタイルが何故！？」

彼の髪は、やたらとポリウームのある、ちりちり頭になっていた。

(きつと……髪を固めていた油に引火したんだ……)

その隣で気の毒そうに、パンリが眺めている。

「それにしても、私たち、まだまだガキね。こんな無茶して。」

「ああ……。
燃えちゃったな……全て。」

「……そうね。」

シュナと戒が、遠い目で言葉を交わした。

「勝手に話をまとないでくれないか！

あれは、私の飛翔艦なのだが！！」

そこでタイミング良く、水没する飛翔艦。

それを背景に、ラックホルツが必死に訴える姿が実に間抜けである。

「一から出直しだな、アフロ。」

その彼の肩に、爽やかな笑みと共に手を乗せる戒。

「あんなごろつき共に頼り切って旅をした、おまえが悪い。」

「そうね、自業自得ね。」

「な、なんと無情な……」

戒とシュナに挟まれ、そのうえ一方的に言い攻められて、ラックホルツはその場にへたりこんだ。

「だが、こんなことで挫ける私ではないッ！

故郷へと帰還すれば、土地と財産は余るほどあるッ！！」

「そ、それなら、安心ですね。」

まるで他人ごとのように、パンリは気楽に声をかけた。

「……………」

握りこぶしの体勢のまま、数秒。

「誰か、帰りの交通費をかしてくれないだろうか？
財布を飛翔艦に忘れてしまっ……」

直後、ラックホルツは全員に土下座した。

「だから、その他人任せをやめなさいよ！
雑用だったら、ウチの店、常時募集してるから紹介してあげるか
ら。」

その側頭部に膝を入れるシュナ。

「私に労働しろというのか！？
ナイフとフォーク以上、重い物を持ったことの無い、この私に！
？」

「だから、威張って言うんじゃない！」

尻に向かって、今度は戒が蹴りで喝を入れる。

ラックホルツは無様に土手を転がり、偶然そこに出っ張っていた石に頭を打ち付けて失神した。

そんな光景にパンリは苦笑を浮かべながら、爆笑している二人に近付く。

「……だから、ついてくるなって言ったんだ、バカ野郎。」

彼の腫れあがった頬に気付くと、戒が呆れたように言った。

「……すみません……」。

でもあの後に、運良く、クウさんに助けていただいて……」

視線を泳がせるパンリ。

遠くで、警官隊の一人に事情を説明している鎧姿の彼女。
パンリの視線に気付くと、ほどほどに話を切り上げて歩み寄って来る。

「行きましょう。」

皆さんの事情聴取は、何とか勘弁してもらえました。」

これも中王騎士団の威光と信頼だろうか。

クウはいともたやすく、現場からの解放を警官隊から得られたようだった。

さらに彼女は、取り戻したウェンウェンの錫杖をしっかりと手に携えている。

「……おまえ、あいつと何の関係があるんだ？」

「昔、お世話になったことがあるのです。」

「……たつたそれだけのために、乗り込んだのか？」

「……そうですが何か？」

クウは返しながら、背負った大剣の鞘を締め直す。
その仕草といい豪気さといい、戒には記憶の端に引っ掛かるものがあつた。

「……まあいいか……パンリ、そろそろ出発するぞ。」

「今からですか？」

「あいつらの気が変わらねえうちに町を出るんだよ。
面倒に巻き込まれるのは御免だ。」

まだ夜も明けぬ時間。
だが、松明を片手に慌しく動いている警官隊達に目配せする戒。

「賛成です。」

私も……できるだけ早く、用を済ませて騎士団に戻らなければならなりません。

そのためにも、今から出立した方が都合がいい。
申し訳ありませんが、ウェンウェンさんを私の馬に乗せて連れて来てもらえませんか？」

「は、……はい。」

パンリは彼女に錫杖と荷物を手渡され、言われるまま店へ向かって駆け出す。

「……貴方も……ついでにもてなしますから、安心して下さい。」

横の戒の目線に気付き、付け加える彼女。

「……ついで、ねえ。」

クウの正直すぎる言動に、彼は口元を歪めて笑った。

「ここから、そう遠くありません。

わずかに南下して、フスの町の郊外にある……」

「……おい！」

そこで、横で聞き耳を立てているシュナに気付く戒。

「おまえ、いつまでそこにいるんだ。
さつさと店に戻れよ。」

氣付いた戒が不満そうに息を吐いた。

「い、言われなくても、今から帰るところよ！
その前に！　ん！！」

手を突き出すシュナ。

「何の真似だ？」

戒が訊いた。

「返しなさい、聖十字。」

「……え。」

「『え』じゃない！　当たり前でしょ！！

さつきは、ちよつとかしたただけなんだから！！」

「……くそつたれ……」

悪態をつきながら、聖十字を取り出し、乱暴に投げつける戒。

彼女はそれを受け止めた後、両目を閉じてそれを力強く握り締め、
静かな足取りでその場を後にした。

「…変わった別れの挨拶……ですね…？」

そんな二人の様子を交互に見て、クウは不思議そうに呟くのだった。

昨晚の外界の喧騒を露とも知らぬ、中河亭の早朝。
鼻歌混じりに、小さな布巻きを片手に廊下を歩いていく料理長ボング。

（あいつが昨日作った料理……悔しいが、ありやあ良く出来てた…。
そろそろ包丁を握らせてやってもいい時期だろう…）

老人の言葉に負けたのか、それとも「きっかけ」を待っていたのか。

自分の気持ちは良く分からない。

（これまで、俺の『いびり』によく堪えたしな。

ま、あいつも…それなりに覚悟して戻ってきたってことだ…）

シュナの部屋の前で、ノックしようとする手が止まった。
早朝にもかかわらず、異様な物音がする。

「……おい、シュナ…!？」

わずかにドアを開いて中を覗くと、彼女は荷作りの最中。それも、自身は完全な下着姿である。

「……す、すまん……!」

いや、そうじゃなくて!!
何やってんだ、おまえ…!」

「…今まで世話になったわね、ボング。」

扉の裏に退避した彼に、まるで気にせず着替えを終えたシュナが声を掛ける。

「出て行ってやるのよ、こんな店。
いつまでたっても厨房に立てないし。」

「……どこへ行こうってんだよ？」

途端に心配そうな顔で詰め寄り、彼女の両肩を掴む彼。

「あんたに関係ないでしょ!!」

「…ああ……確かにな。」

突き飛ばされたボングは半笑いで、自分の胸元を搔いた。

「言っておくがな、おまえ。」

昨日の料理、最悪だったぜ。

やっぱり、長年のブランクが大きいことが良くわかった。」

「……何よ。」

これから去るって人間に、まだ説教？」

「もう絶対、ここには帰って来るなよ。」

親方も俺も、そんなに優しくないんだからな。」

「こっちから願い下げだつての！」

「へっ！ こいつは今までの給金だ。」

達者で暮らしな——！」

ポングはそう言つて、尻ポケットから財布を取り出す。

「あと……それで足りねえ分は、現物支給で我慢しやがれ——！」

そして、共に、布で巻いた小物も一緒にベッドに投げ捨てる彼。

部屋の床は大きく踏みつけられ、扉は強く閉められた。

（フン、だ。

私は何とか、自分の道を見つけてやるんだから……。

とりあえず今は……あいつに会う理由も作つたしね。）

シユナは笑顔で、赤い十字架を胸の間に忍ばせた。

「ん？」

そして何気なく、彼が投げた財布の中身を確認する。

（……何これ？

めちゃくちゃ入ってる…）

続けざまに、布巻きを拾い上げる彼女。

（げ、現物支給って……！？）

包まれていたのは、ぴかぴかに磨かれた一本の包丁だった。

「……………！！！」

跳んで、扉のドアノブを握る。

だが、先程の彼の心中を思えば、それを捻ることは出来なかった。

「……………ばか……………！！！」

そして彼女は、扉の板に頬を擦りながら、その場にへたりこんだ。

「……………」
よく我慢したのう。」

厨房のカーテンをわずかに開き、離れていくシュナの姿を窓越しに見詰めながら呟く老人。

「だって……ご隠居お……言っただじゃないっすかあ……！
あいつあ、世界を旅して、もつと見聞を広げた方がいいって……
！！」

流し台に両手を突いたまま、鼻声でボングは呻いた。

「俺あ、そばにいて欲しかったけどよお……！
今、これがいい機会だと思ったんですあ……！！！」

拳を握り締め床を叩き、大粒の涙を流しながら彼は胸の内を吐く。

「あれは賢い子じゃ。
今頃、おまえの思いは、きっと伝わっとるよ。」

丸まった大きな背中に手を乗せて、老人は言った。

「…さて、今日の仕込みを始めるか。
ウチは料理店じゃからのう？」

「……………はい……………」

涙を拭い、必死に笑って見せる。

再会の期待を胸に。

彼は以前と同じ、退屈な日常の訪れを歓迎した。

中王都市の地下深く、人知れず建造された地下迷路。

任務を与える部屋。

任務を終えた者達が会話を交わす廊下。

食料と武器を調達する倉庫。

宿舎や訓練場。

それらの施設が大陸各地に存在するなど、地上に暮らす殆どの民は知る由も無い。

さらに驚くべきことに、その文化には数百年の歴史の重みがあった。

そこへ舞い込んだ、一つの事件。

その日の執務室は、深夜からずっと閉め切られ、立ち入り禁止となっている。

「…大変なことだぞ……」

口にくわえたパイプを手を取ったまま、後退した髪の毛を弄りながら呟く背広の男。

「…この文書に記されていることが事実だとすれば……近いうちに中王都市は真つ二つになる。」

彼は自分の吐き出した煙で満ちた、低い天井を見上げた。

「……まずい…非常にまずいな……」

そして、ポケットから取り出した一粒の錠剤を、デスクに置かれた緑茶で喉に流し込む。

「心配にやあ及ばんでしょう。」

この報告が上がってから、もう随分経つ。

先日から行われている『絶対審判』は、今にも判決を下しますっ

て。」

部屋の隅で、冗談めいた軽口と共に笑う、黄色と黒の縞スーツの男。

さらに彼は、同柄のバンダナと赤みの深いサングラス装着している。

「……確かに、早急に『久遠』全体の意思を決めてしまえば……被害は最小に抑えられよう。」

目を見開き、そんな彼と対面する男。

「しかし解せんぞ……」。

これほどの機密が流出するなど……あまりにも不自然だ。騎士団か軍隊……どちらかが意図的に情報を漏洩した^{リーク}としたしか思えん。まるで……我々に介入しろと言っているかのようだ……」

「踊らされてるって？」

バンダナの男が肩にかけている、大きな鎌の刃が開いた。

「まあ、真偽がどうあれ……動かないわけにもいかんでしょう。」

「……わかっているが、しかし……！」

他国からの脅威ならまだしも、まさか同士討ちとは！

これでは我々は……一体何のために……裏で手を汚し続けてきたというのだ……！」

「お怒りはごもつともさん。

でも、来たるべき事態に備え、役者は揃えないとね。

…それも天命人^{エア・ファンタジスタ}級を。」

「……天命人か……」

苦虫を噛み潰したような表情で、目の前に飛散した書類を掴む彼。

「今すぐに動ける者は……执行官：『音速のギユスターヴ』、それと……おまえだ。」

「オレっち、本職は実動隊じゃないんですがねえ。」

肩をすくめる男の軽口に対し、胃痛は増してくるばかりだった。

「いちおう、確認しておきますぜ、ノディア支部長。

この国の未曾有の危機だ。

絶対審判では、必ず、二つの勢力のうちのどちらか片方を潰すという採決が取られるでしょう。

その時は絶対に躊躇しないでもらいたい。

火事場においては、火元を一気に潰さないと手遅れになるって……」

「私が何年、この仕事をやっていると思っっているんだ……！」

彼は、とうとうパイプを叩きつけた。

だが、その恫喝に臆することなく近寄るバンダナの男。

赤いサングラスを外さないまま、目元に寄る。

「……躊躇するなって言っただろ？」

その時が来れば、こたびの執行部隊には遠慮せず、中王都市の『特級執行長』の名を加えておいて下さいよ。」

「まがりなりにも……国の軍事組織を……大罪人扱いするというのか……。」

「オレらの尺で測れば、大陸の平和を乱すものこそが最も罪が重い。それには充分に値してるんじゃないんですかねえ？」

一転、歯を剥き出して笑う彼。

願わくば……何かの間違いであって欲しい。

そう願いつつ。

「至急、ノーツの寝ぼすけを呼び戻せ。」

部長は執務室の扉を開け、外の秘書に重々しく告げた。

第三章

第一話 『同級生』

了

3 - 2 「大悪名に触れる」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 3

「Wivern in central kingdom ci
ty」

The second story

It touches in Big notoriety

揺れる湖面の小船の上で。

「…へえ…飛翔艦が、大火事で沈没だって…。
物騒だなア。」

先ほど、新聞売りの小僧から買った新聞を開きながら、バーグがのんびりと声を洩らす。

「しかも…隣町だぜ。」

空いた片方の手には、釣り竿。
しかし、水面に垂らしたその糸が引かれる様子は、全く無い。

「……バーグ…。」

背中越しに、慣れない手つきで竿を握り締めているザナナが呻いた。

「いいんだよ、釣れなくても。
この、のんびりした雰囲気を楽しめりゃあな。」

だが、何か言いたげな彼を先回りして、緩みきった表情で答える
バーグ。

「魚が…釣れなくてもいい？
わかん。」
では、この行為に何の意味があるのだ？」

「全てのことに、意味を持つとするな。
肩がこってしょうがねえ。」

そして、頭を左右に大きく振って首を鳴らす。

「……フ……フウウ……ウウウウウウ……」

「…おい、どうした!？」

突然の唸り声。

バグがそんな背後の異変に振り向くと、既に大きな影が頭上を飛んでいた。

「…あゝあ……」

そして湖面に広がる高波と泡を見詰めながら、呆然と呟く彼。

「バカ野郎。」

せつかくの、まったりとした雰囲気台無しだ…」

「……………」

当のザナナは、極めて平静な様子で水面から顔を出す。
その横から突き出した槍の先端には、大魚が貫かれていた。

「見てみる。」

こっちの方が早い。」

「…そういうことじゃねえんだよ…まったく…」

バーグは苦笑して頭を掻き、湖のほとりに作った焚き火で獲物を待つ世羅の方を眺めた。

そつと青空を仰げば、雲はゆっくりと流れている。

長閑な昼下がり^{のどか}は、まだ始まったばかりだった。

エア・ファンタジスタ
A i r・F a n t a g i s t a

第三章

中王都市の飛竜

第二話 『大悪名に触れる』

1

初陣で緊張する新米騎士に、先輩が一番最初に語ってくれる話があった。

「その昔、我が騎士団には疾風よりも速き名馬があった。」

「その馬は戦場で傷付き、前足を一本失ったにも関わらず、伝令を背に乗せて遙か遠方に援軍を求めたという。」

「結果、我が騎士団は勝利を納め、長きに渡る国の礎を築くこととなり。」

「己が命と引き換えに勝利をもたらした馬はその後、騎士団の御旗にその魂を注ぎ込まれ、何代も続く我々の誇りとなった。」

戦場の中空には、細長い黒煙が幾つも立ち昇り。

大地には敵味方の残骸。

それらを高い馬上から見据えて、彼は言った。

「このアルドの叛乱より、ずっと昔の話だがね

」

「殿。

…ファグベール殿。」

脇から、黒騎士の低い声が聞こえる。

「……すまぬ。

呆けていたか？」

ファグベールは巨体を揺らしながら答えた。

そして心中を隠すように、恰幅の良い身体を、鎧ごと手の平で叩く仕草。

昼夜を通して、中王都市の最南端から戦闘騎での強行縦断。

現在地は国領最北端の街ゴルゴート市であった。

つい夢想してしまったのは、そんな旅の疲れからもあったが、久方ぶりに大団長の厳しい気配に

直面したからに違いない。

老将は、そう感じ入っていた。

大陸全体から見れば、北国と呼べるほど気候は荒くない中王都市北部だが、その山間部となれば話は別である。

吐く息も即座に白く変わり、熱く鼻先をかすめていく。

山岳の洞窟内部を大きく切り貫いたその地は、さしずめ要塞。

それも、赤華の長たる自分ですら知らない騎士団の施設が、辺境に建造されていたのである。

そしてそこには、運びこまれた大量の飛翔艦と戦闘騎を整備するにはぎりぎりの人数であったが

完全なる秘密部隊とされる黒華が、かなりの規模で動いていた。

「アルドの叛乱の勝利に多大な貢献をもたらした列強七国は、今に至るまで絶大な権力を大陸に誇る事となつたが……」

この秘密裡の建造物が前線基地として充分に通用することを認めた上で、ファグベールは言葉を発した。

「……こと中王都市に関しては特に、その傲慢と平穩さが内部に腐敗をもたらしたのは間違いない。」

弾薬の詰まった木箱を運ぶ男達を、視界の遠くに据える。

「しかし今、我が目に映るのは、それらを一切廃した、乱世の景色ではないか。

平穏とは……つくづく遠いものだ。」

そして最後に全景を見回しつつ、締めくくった。

「この慌しさは、しばらく辛抱していただきたい。

小団長殿ともあるう御方を、充分にもてなすことも出来ず非常に心苦しいが……」

「なに。

自らが望んだこと。 選べる立場に無いわ。」

ディボレアルの殷懃いんぎんな言葉に、軽く答える老将。

「しかし……我が赤華の騎士達がこれを見たとしたら、何と思うか。

」

彼は苦笑した。

改めて下から見上げる、見慣れている飛翔艦たち。

そして、床岩に敷き詰められた戦闘騎群。

今ではロール型の形状をした機械が、その表面に『黒』の塗装をかけている最中である。

「……ご注文どおりでしょう、僕が作った魔導人形は、塗装機能のみに秀でた特別製です。」

背後から、疲労困憊の面持ちで現れる少年。

洞穴内の露出した岩肌に擦れ、純白だった白衣はところどころ茶色く薄汚れている。

「年端もいかぬのに、ミシュレイ殿は実に大した技術者よ。」

……赤華自慢の飛翔艦全隻と戦闘騎を、こつもあつさりと黒塗りに変えてくれるとは。

ただでさえ団員達は、作戦途中の理不尽な退却と休暇命令に目を丸くしておったのに、さらに

これを見たら、腰を抜かすであろうな。」

「何を仰っているんです。」

ファグベールさんも、僕くらいの年齢には既に大陸十字軍に参加していたと聞きましたよ。」

「……む。」

それは四度目の遠征よの……もう五十年前の話だが」

顎の下から見上げる少年に対し、微妙に得意げな表情を浮かべる老将。

「その頃、大団長殿は既に一軍を率いておった。」

拙者はその時に旗持ちを任され、それ以来の腐れ縁よ。」

「ものの数日で全軍を撤収できるのは、規律が行き届いている証拠。ファグベールさんの統率力には、感服いたしますよ。」

今度は飛翔艦を見上げて、ミシュレイが笑う。

「……あまり誉めんでくれ。」

それに……子供がお世辞を使うのは、聞いていて心地良いものではないぞ。」

それを眉間にしわを寄せて返す老将。

剛直な彼にとっては、妙に行き届いた少年の言葉は少し鼻につくようであった。

「……これは失礼。」

肩をすくめて会釈するミシュレイ。

「ところで、ディボレアルさん。」

僕はもう紅茶も飲まずに一眠りしますよ。

もう5日も徹夜なんですから、そろそろ解放して下さい。」

「例の機体の改装は、済んでいるのか。」

相変わらずな、黒騎士の言い様。

一旦は彼を横切って過ぎた少年は、ぴた、と足を止める。

「この前はいくら調整段階だったとはいえ、マクスはずいぶん苦戦したそうじゃないですか。

でも僕が造った機体に乗る限り、もう二度と『そんなこと』を理由にさせませんよ。

……いずれ彼は相手を選ばなくなる。」

「仕上がったというわけか。」

「……まだまだ、改良の余地はありますけどね。」

眼鏡の奥の瞳を光らせ、不敵に笑みを浮かべる少年。

「了解した。」

聖騎士は、三日以内に合流させる手配をとっている。
それまでは、ゆっくりと休むがいい。」

「………やれやれ。」

終始、上から物を言う彼の調子に辟易しながらも、ようやくの解放にミシュレイは心底安堵した。

「……ところで、軍師殿。」

ミシュレイの小さな姿が洞穴の一つへと完全に消えてから、ファグベールは言葉を発した。

「黒華とは、これが全てか？」

黙々と作業を行っている、黒い皮鎧を着込んだ者達。

それらの人数は多いとは決して言えない、自分の指揮下である赤華人員の十分の一にも足りていないだろう。

「優先すべき任務の無い者は、全て集合させているが。」

「拙者には解せぬ。

整備ならともかく、本格的に我が赤華の軍備を使うには、あまりに人手が少ない。」

「その点は既に対策済みだ。

貴殿が懸念する必要は無い。」

話をかわして、前を歩くディボレアル。

ファグベールは、その黒い甲冑の鈍い光を一瞥し、目線を横へと流した。
いちべつ

（…臭うな……。

…大団長は…このような用兵を好む御人ではない…）

そして、目元を陰しく細める。

そんな老将の気配を感じ取ったのか、黒騎士は立ち止まり、彼に向き直った。

「言わんとしていることは解る。」

不服ならば、遠慮なく意見を頂こう。

それだけの権利と地位が、貴殿にはあるのだ。」

「意見だと?」

あの時、死を覚悟して望んだ大団長の御前。

「今の我が首は、身体から離れていると同じ。

ガイメイヤ殿の慈悲で生き延ばされたこの身命、既に考える頭など持ち合わせておらぬわ。」

ファグベールは、腹の底から笑い声を飛ばした。

「しかしながら……我が赤華を脱走したレイキⅡモンスロン……。

実は黒華が既に奴の足取りを掴んでおり、それを承知で泳がせていたこと。

さらに、その報告を少しばかりもして貰えんとは……本当は地位なんぞ、何とも思っておらんのだろう?」

皮肉めいた調子で、黒騎士を睨みつける彼。

「最近は、我々も非常に立て込んでいた。その点は容赦してもらいたいものだな。」

「……なに、元はといえばこちらの失態。
文句の言える立場ではないのは、そのこともある。」

ファグベールは言いたいことを言い終えた後、改めて顔を引き締めて思考を正す。

「この度の戦^{いくさ}は……拙者をただの一兵卒としてお考えいただきたい。」

「それは無理な話だ。

軍師というものが一たび戦場へ出れば、目の前の猛将と己の知謀とを天秤にかけて量らずにはいられない。」

そして頭を下げる老将に返すディボレアル。

「……世辞はいらんと言ったはずだ。
それよりも、今作戦……指揮は全てそなたが執^とられると申されるのか。」

「いささか、僭越であるが。」

彼の淡泊な一言に、ファグベールは息を飲んだ。

「拙者はそなたを知らぬ。 実力も素性すらも。
だが……大団長が真に国家と国民を愛していることは知っておる。
あの方が決めた者に間違いはあるまい。 そなたの命は、大団長の命と心得よう。」

ここへ来る直前、教会で別れたガイメイヤの姿を思い浮かべる。
お互いに歳をとったと笑い、首都での公務に戻ると言って去った
彼の背中。

「…だが、それもあくまで、『中王都市国家のため』であるならば
の話だ。

この先、それをしっかりと見極めさせてもらうぞ。」
それはいまだに剛毅な背であった。

「ますます、望むところ。」

黒騎士は低い声で笑い、マントを翻す。ひるがえ

（同国の軍隊と剣を交える……この背徳。
だが日頃の遠征以上の、この心の奮えは何だ？
……所詮、私も只の戦人いくさじんで御座りますか、大団長殿。）

ふと脳裏に浮かんだのは、互いの若き姿。
凱旋時の母国情景。

あの頃の旗印は、今でも老将の心にたなびいていた。

視線の向こうの野原の斜面に並ぶ、山羊^{やま}の大群。
そして段々畑の一面の緑が、綺麗に青空と地面との境を分けてい
る。

この町は今まで訪れたどこの町よりも、何とも牧歌的であった。

そんな小道を歩いていく一行。

早朝からの歩き通しにも関わらず、馬を連れて軽快に前を往くのは鎧姿のクウ。

彼女は自分の家まではそう遠くないと話していたが、それはあくまでも個人的な思い込みであり、運動に慣れていないパンリは息を切らせて、足は既に棒になっていた。

そして意外なことに、戒は自分よりもさらに重い足取りで最後尾をふらついている。

だがさして気にも留めず、パンリは汗を拭って顔を前に向け直した。

けたたましい音が聞こえたのは、その直後だった。

「…か、戒くんっ!？」

振り返れば。

野道から足を踏み外して、用水路ともいうべき道脇の小川に片足を突っ込んでいる戒の姿。

「くそ……！」

「……い……て……えな……！」

そして彼は真つ赤な顔で^{まぶた}瞼をきつく閉じ、その場から全く動けないでいる。

「どうしたんですか、急に……！」

クウの馬から一旦離れ、戒の腕を取って道に戻すパンリ。同時にバランスを崩した彼を咄嗟に支える。

感じる吐息と重量。

「……これは……すごい熱ですよ……！！！」

その叫びに、クウが馬を止めた。

「……具合が悪いのですか？」

「……………あ？」

近付いた彼女の問いに、息を荒げながら答える戒。

耳の聞こえも悪いようで、返答に要領を得ていない。

「昨晚の無茶で、きっと体調を崩されたのではないでしょう…！」

「……素人が下手に戦うからです。」

パンリと対照的に冷淡な態度で、クウは馬上のウエンウエンに近付いた。

「よろしいでしょうか。」

彼を先に連れて、私の家で寝かせて来ようと思います。
その後、改めて迎えに来ますので、どこか……」

周囲の縦横に走っている小道を見回す彼女。
そこで農家が共同で使っている小屋を確認する。

「あそこで休んで待っていて下さい。
必ずお迎えに参ります。」

「…ああ、彼をよろしく頼むよ。」

ウエンウエンが馬を降りた後、代わりに乗せられる戒。

彼はぐったりと前のめりに馬の鬣たてがみに寄り掛かり、その後ろにクウが飛び乗った。

そしてそのまま手綱を握り、馬を一気に走らせる彼女。

二人はすぐに、駆け上がった斜面の頂上から見えなくなった。

「……大事に至らなければ良いのですが……」

パンリの呟きの後、すぐ後ろから迫ってくる牛車。

頭毛が多く、頭からうねりのある角を生やした大きくて黒い牛を先頭に。

後ろには十数匹の乳牛を引き連れている。

彼はその様子を見とれるように注視した。

牛達が引いている荷台車には、大きな鉄瓶が大量に載っている。狭い道ではそれらが通るのがやっとで、やがてパンリは道外に押し出されるような形になった。

「やっぱり、外界は刺激的ですよね……」

ディバイディオンは自然が殆どありませんでしたから……。」

驚きと共に、最後尾の黒牛に近付くパンリ。

そのもじやもじやとした堅めの頭毛を撫でながら笑う。

しかし同時に、誰からも返事が無いことに気付く彼。

「……ウエンウエンさま？」

誰もいない道端。

目の前では牛の尻だけが列を連ねていた。

「おや、バーグさんでねえか。」

小屋を通りがかった彼に、その中から声をかけてくる農夫。

「おう。」

じいさん、元気が。」

バーグは片眉を上げ、歯の隙間に詰まった魚の骨を抜きながら近寄った。

「今から、家に帰るのかい？」

どれ……ちようど採れたてがある、持っていておくれよ。」

農夫は足元の籠から適当に野菜を見繕って、ずた袋に入れて手渡す。

「いつも悪いなあ。」

「なあに、いいってことよ。」

礼を言うバーグに笑いを返し、農夫は景色を眺めながら、再び酒瓶を手にとった。

「……これで俺の娘に何か作らせよう。
結構、料理が上手なんだぞ。」

「うん！」

後ろで、頷くザナナと世羅の笑顔。
バーグは、それを見る自分の表情も自然と綻ほころぶを感じた。

「……ああ、そうだ。」

一足先に行って準備をするから……二人は、しばらくこの小屋で時間を潰してくれよ。」

「ザナナには、理解が出来んど。」

再び、豹頭が低い声で不満を洩らした。

「後でどうせ一緒に行くのなら、今、一緒に行けばいい。」

「色々あるんだよ。」

まだ何も説明してないのに、客をいきなり連れて行ったら娘が驚くじゃねえか。」

ザナナと世羅を、交互に見ながら答えるバーグ。

「フ族とは、面倒なものだな。」

「ああ、そうだよ！」

血を分けた親子だったのに……えらい面倒くせえんだ、これが！
」

そして、自嘲気味に笑う。

「じゃあ、ちよつくら行ってくるから。」

二人とも、おとなしくここに居てくれよな。」

先の袋を抱え、小走りで彼は行った。

それを見届けた後、同時に顔を見合わせる、残された二人。

世羅が何かを含んだ笑みをこぼすと、ザナナは無言のまま頷いて返した。

「あの、こう……目元を布で覆って、杖をついた人……見ませんでしたか？」

道端で農夫や行商を捕まえては、必死な表情で訊ねるパンリ。

そもそも往来の数も少なく、見知らぬ土地ということもあり、い

つこうに大した情報も集まらない状況に、
彼は打ちひしがれた。

「…ねえ、それってもしかして…。
戒と一緒にいた人のこと？」

そんな絶望感に、いよいよ足が震えだしてきたその時、後ろから
若い女性の声が掛けられた。

「え！

何故、そのことを…」

期待の笑顔で振り返ったパンリの表情が固まる。
目の前にいるのは、大きな荷物を抱えたシュナだったのだ。

「シュナさん、何故ここに！？
お店は……どうしたんですか？」

「辞めちゃった。

…ん、やっぱりド田舎は空気が美味しいわね。」

辺りの景色を見回して、涼しい顔で答える彼女。

「それに、やっぱり幸運ってのは、おのずと自らやってくるものだ
わ。

……戒達はどこ？」

「あ。」

彼女の言葉で、彼等ともはぐれてしまう可能性に気付くパンリ。だが、先程の場所へ戻って待つよりも、今はウェンウェンを探すことの方が優先である。

彼は盲目ということもあり、見知らぬ土地で一度離れてしまえば、搜索が困難に陥るのは明白。

そして何よりも、付き添い役の自分が目を離してしまったこと。その後ろめたさが、一番強かった。

「……ウェンウェンさまを……どこかで見ませんでしたか!？」

「へえ、迷子なの？
どっちが？」

シュナはとりあえず荷物を地面に置いて、小馬鹿にした様子で近付いて来る。

途端に目の前に迫る、彼女の大きな胸。

「……うっ……」

それを見て、一転、涙を瞳一杯に溜めるパンリ。

「……うっ……うっ……」

「はあ？

な、なによ、急に。

失礼ね……！！」

咄嗟に胸元を隠して身を退くシュナ。

「わわ…私が…私が悪いんです…ふと目を離れた隙に…。
あまりにも…牛さんの行列が珍しかったから…」

「……もーわけわかんない！！
とにかく、泣かないでよ！！」

急に感極まった様子の彼を前に、困り果てて叫ぶ彼女。

何処からか家畜達も寄り集まって、そんな二人の様子を不思議そうな瞳で見上げていた。

薪割り道具の一式が置かれた庭を経て、森の中に建つ一軒屋に到る。
まき

重めの檜で作られた玄関扉を開けて大広間を通り、廊下を越えた
かし
先の自室。

「あの飛翔艦の中で、高い場所から落下した？」

彼の肩を支えながら、クウが言った。

「なるほど、その時の全身打撲と疲れですね……」。

こんな状態で黙ってるなんて、無茶も甚だしい……」

彼女の言葉も途中に、膝を大きく落とす戒。

二人は諸共、もちろんベッドに倒れこんだ。

「あの…大丈夫………ですか？」

「…ああ…あ………」

なんとか言葉を返す戒だったが、後背筋と腕に全く力が入らない。
彼女に覆い被さったままの姿勢で、情けなく腰を動かす彼。

ベッドが大きく軋んだ。

「落ち着いて………ゆっくり………」

「ああ………わかってるって………」

お互い耳元で囁き合いながら離れようとする。

「…え……………」

そこで、彼の身体ごしにクウが呟いた。

いつの間にか、部屋の扉に人影。

それは、あろうことか、大剣を引き抜く父の姿だった。

陽の光を背に、彼の顔が作る陰影は恐ろしく無表情である。

「……………そいつ……………誰だ？」

「お…お父……………帰っ……………」

口を半開きにしたまま呆然と呟く彼の様子に、心なしか僅かな殺気を感じるクウ。

「これは違うの……………ッ！」

だが、言葉が間に合わないと踏んだ彼女は、咄嗟に戒を突き飛ばす。

彼のいた空間をすぐに、光る刃が斜めに薙いだ。

「…ああ…わかってる……………。
俺は冷静だ…」

クウが俺の留守中に男を連れ込むような娘じゃないってこと、よくわかってるぜ……」

剣を振り降ろした姿勢で、据わった目のまま独り言のように呟くバーク。

無論、今の彼には相手の姿などは見えていない。

「……うぐ……暴漢か……？」

すぐ傍にあつた収納箱チェストを手探りで触れ、それを支えにして立ち上がる戒。
頬を伝う脂汗を拭いながら、必死に薄目を開けて相手を確認しようとする。

「……暴漢はてめえだろ……！」

親父の居ぬ間に、娘に手エ出そうなんてな……！」

バークは迫り、戒の胸倉を掴んで引き寄せ、そのまま壁に叩きつける。

そこで、二人は肩口を衝突させてお互いの顔を確認した。

「……じゅうねん……はや……いあ……？」

一旦は彼の喉元に突きつけられた剣は床に落ち、乾いた音が響き渡った。

「いやあ、逆上して、ついすっかり。」

今度は目の前にはつきりと。

照れ笑いと共に、頭を掻くバグがいた。

「ふざけんなよ……」

すっかり殺されてたまるか……」

厚くシーツを重ねてもらい、ベッドに沈んだまま呻く、一方の戒。

「大学に進むのを急に止めたって？

それで、プレオルンで別れたはずのお前が俺の自宅に居る。

……そんなこと、夢にも思わねえだろうが。」

「だからって、いくらなんでも限度つてもんがあるだろ。

…問答無用で剣を抜く癖、いい加減直せよ、てめえ。」

同時に、初めて会った時のことを思い出して苦笑する彼等。

「…二人が知り合いだなんて……ものすごい偶然もあったものね……」

ざつくばらんな口調で話す二人の様子に、クウは相当に複雑な表情を浮かべて言った。

「まあ……こいつとは色々あつてな。」

だが、不意に娘が彼と知り合いになっている事実、自然と煙たい顔を作るバーグ。

「しかし……あれがまさか、てめえの娘とはな。」

そう言われてみれば、無茶なところがそっくりだぜ……」

水差しを片手に薬湯の準備をするクウに視線を移しながら、戒が呟いた。

その一言に血相を変え、バーグは彼女に一気に詰め寄って肩を掴む。

「……クウ！」

お前まさか、危険なことをさせられてるのか!？」

「!？」

急な肩口の痛みに顔を歪ませ。

「……何も危険なことなんて……私はただ……」

ほどほどに、父親の手を振りほどく彼女。

「もう…騎士団に関わるのはよせ。
奴等…裏で何をやっているのか…」

そこで、バグが言いかけていることを察する戒。

何度もルベランセが窮地に立たされたのも、中王騎士団が絡んでいる確率が高い。

「彼の言っている事と騎士団は関係ありません。
それに…たとえ関係があつたとしても……」

そんな事情を知る由も無いクウは言葉を濁し、水差しを持って戒に寄る。

頭の中に銀髪がちらついた。

「…どうぞ。 解熱と沈静効果のある薬です。
これを飲んで暫くおとなしくしていれば、いずれ回復すると思います。」

彼女は床に膝を付いて、戒の首の後ろに手を回し、少し浮かせて口に薬を差込んで傾けてあげる。

「お、おい…何もそこまでしてやる必要は無いだろ。
重症じゃねえんだ、そこらへんに置いとけば勝手に飲むって!」

そんな娘の丁寧な介抱の様子に、バグが喚いた。

「彼は一応、客人の一人ですから。」

淡々と一連の作業を終えた彼女は立ち上がり、抵抗するような眼差しを返した後、すぐに扉へと向かった。

「おい、まだ話は終わってないぞ!!」

「私、まだ用事があるの。」

あと…騎士団のこともそうだけど……何でもお父さんの物差しで測らないで。」

つれない素振りで、クウは部屋を去っていく。

「……冷めてるな。」

お前があれだけ心配してた娘の割には。」

「う、うるせい。」

それより……」

痛いところを突かれ、バグは思わず唾を飛ばした。

「仕方ないから少し休ませてやるが、絶対にこの部屋を出るなよ。」

そして、戒の鼻先に人差し指を伸ばす彼。

「……？」

ベッドに身を沈めたまま、彼は疑問の視線を投げかけた。

「世羅とザナナが近くにいるんだ。」

「……なんだと？」

思わぬ一言に、重い半身を一気に起こす戒。

そこでバーグはその頭を片手で掴み、強引に枕へと押し戻した。

「実はな、いま俺達は休暇でこっちに來てるんだよ。
会つのが俺やザナナならともかく、世羅は……」

「べ……別に、何でもないだろうが。」

腑に落ちない表情で、戒が返す。

「馬鹿野郎。」

バーグは拳で、そんな彼の額を軽くこづいた。

「あいつは、お前との別れ方をずっと後悔してるんだよ。
それでも……ようやく最近、落ち着いてきたんだ。
せっかく吹っ切れてきた矢先に、お前と会ったら……」

その言葉に、戒は意識して顔を背けた。
普段は元気一杯で沈んだ様子など他人に見せない世羅だが、繊細な部分も知っている。

戒が無言になると、自然と室内に静寂が流れた。

薬が効いてきたのか。

一気に睡魔に襲われた彼は、ベッドの中で体勢を更に深くする。

「…お前、どうセルベランセには戻らないつもりなんだろ。」

「…………ルベ…ランセ？」

そして、上からかけられた不意な一言に、戒は聞き返した。

「だから…どうせまた別れるんなら、中途半端に会わねえ方がいい
と思ってな。」

一人で話し続けるバーグの言葉を、うわの空で聞く。

（…ルベランセ…………。

そうか…………その手があった…………な…）

そして目を閉じ、寝息を立て始める戒。

バーグは苦笑を浮かべながら、扉へ向かった。

一度振り向き、娘の部屋を一望する。

戒がいること以外は何も変わらない。

そこは自分が出立前に記憶した、殺風景な部屋のままだった。

家族が増えると思って購入した、広間の大きなテーブルは、結局、三人で使うことしか出来なかった。

今では一人減り、さらに大きく感じている。

既に窓際のカーテンは開け放たれ、そこは温かな陽の光で一杯になっていた。

我ながらよく気が利く娘だと思う。

戦争が終結した直後に建てた、南向きの家。

自然を近くに望める立地は、心からの休息を求めて。

バーグがそのような思いに耽^{ふけ}ていると、窓の端から、ひよっこりとはみ出る物体が目についた。

黒くて丸っこい、もさもさとした物体は小刻みに怪しく動いている。

「！？」

バーグは嫌な予感に仰天し、廊下を駆けた。

急いで玄関を出で、庭を見やると、着物姿の長身が腰を屈めて屋内をうかがっている。

さきほど見えたのは、やはり、そのザナナの豹頭だった。

「……お。

やはり、ここが、バーグの家か……」

「何で、おまえがここにいるんだよっ……！」

平然とした調子の彼に、地を踏みつけて怒鳴りつけるバーグ。

「おとなしくしてろって言っただろ……！」

「……待つのは、もう御免だ。」

釣りすらおとなしく出来ない者に動くなと言う方が、どだい無理な話だったのだろうか。

バーグは絶望と共に、深い溜め息をつく。

「世羅が考えた、バーグの家探し競争。どうやら、ザナナの勝ちのようだな。」

一方、少し満足そうに頬を擦る彼。

「おまえ……ちょっと、こっち来い!!」

そんな豹頭の耳を強く片手で鷲掴みにし、連れて行く。
目の前の窓越しには、ベッドで寝ている戒の姿。

「……何故、ここに……戒が寝ている？」

「俺だって驚いてるんだよ。」

両手をガラスに付けて驚くザナナに、答える彼。

「……と、いうことは……。」

バーグの家が、戒の言っていた『大学』と呼ばれるところなのか。

「ちげーよ!!」

容赦なく放たれる馬鹿馬鹿しい勘違いに、バーグは声を荒げた。

「詳しい理由は知らんが、あいつは大学へ行くのをやめたそうだ。
そして偶然、ここに流れ着いちまったらしい。」

「……いいか、世羅には絶対にこのことを言うなよ。」

「……どうし……」

言いかけた豹頭の口を押さえ、人差し指を立てて自分の唇につけるバーグ。

「つべこべ抜かすな。

世羅には内緒だ。

『ぬか喜び』させちゃあ、ならねえ。

『戒はここには居ない』、いいな？」

「……む、わかった。」

ザナナが両腕を堅く組み、唸る。

「あー、ボクの負けだあ！」

「ヒイツ!？」

だがその瞬間。

タイミング悪く、後ろの藪やぶから現れた世羅に、バーグが飛び上がって腰を抜かす。

「……バーグ？」

どうしたの？」

不自然な様子の彼に、彼女は声をかけた。

「よ、よお……世羅……」

ダメだろ？ おとなしくしてろって……言っただじゃねえか……」

続いて彼は、震える指先で胸ポケットから煙草を取り出し、半笑いで世羅の前に立ちふさがる。

同時に目で合図されたザナナが蟹^{かに}歩きで、窓を隠す位置へと移動した。

「……世羅、ここに戒はいないぞ。」

「バカ野郎!!」

あさつての方向に顔を背けて言うザナナの後頭部に、すかさず肘鉄を打ち込むバーク。

「……いくら隠せって言っても……それは露骨すぎるだろ……!!」

「……?」

詰め寄って小声で叱る彼に、首を不自然な方向に曲げたままの豹頭。

「……二人とも変だよ、どうしたの?」

やはり、世羅は不思議そうな顔で迫る。

そんな場面に、クウは疲れきった馬に角砂糖を与えながら、その手綱を引いて来た。

「……お父さん……その方達は？」

予想した通り。

彼女は訝しげな視線を、異形のザナナと幼ない世羅へと向けている。

「……あ……いたいた!!」

さらに、そこで北側の丘から響く声。

「ほら、言ったとおりでしょ？」

騎士団の人が住んでるのに、それを知らない地元の人はいないって。」

誇らしげに胸を張りながら、草原で出来た坂を下りてくる若い娘。フードを目深にした少年　　パンリも小走りにして駆けて来る。

「……この子、ウエンウエンって人とはぐれちゃったらしいのよ。だから闇雲に探すよりも、まずは土地勘のある貴女の住んでいる所を聞いて回ったわけ。」

「……はぐれた？」

あの状態で、ですか？」

まず彼女の言葉を聞き、次に疲労しきった様子のパンリを見詰めるクウ。

「す……すみません！
私としたことが……！！」

何度も頭を下げる彼。

だが彼女は特に気にする様子もなく、涼しい顔を斜め上方の空へと向ける。

「大丈夫。

あの方のことです……また、ふらりと現れますよ。」

彼女は両手で、パンリの片手を優しく包んだ。

「……クウ。
誰だ、そいつらは……」

そんな、急に現れた子供と若い娘に、睨みを利かせて近付くバグ。

「お父さん、失礼の無いようにして。
この方も私の客人なのだから。」

クウは毅然として答えた。

「こ、こいつらだって、俺の客人だぞ！」

片手を勢いよく水平に振り、改めて世羅とザナナに目を向けさせるバグ。

「そんなこと一言も……」

「聞いてねえぞー!!」

だが、お互いの客を完全に無視して、親子は睨み合った。

「……何で、急に喧嘩なわけ？」

呆れ顔でシュナが言葉を洩らす。

「そつえば、貴女は……確か……」

そこで改めて、彼女に気付いたクウが声をかける。

「昨日のお店の従業員の方ではないですか。
どうしてここに？」

「ちょっと……ね。」

戒に……その……用があつて、わざわざ追ってきて……あげたの
よ。」

「……あが……!!」

その一言に、バーグが口を大きく開けたまま凍りついた。

「……かい？」

その傍で、状況を飲み込めない世羅が小さく呟く。

「あ！」

か、貝はやっぱり新鮮なうち、生で食うのがいいよなあ？」

そして、咄嗟に脇のザナナに話を振るバーグ。
勿論、気の利いた返事は返ってこない。

「プッ!!」

その代わりに、シュナが唇を突いて吹き出した。

「おじさん、何言ってるの？」

…ひょっとして今の…駄洒落のつもり？ おっかしー！」

笑い涙を浮かべて、パンリの背中を強く叩く彼女。

「私が言ってるのは、戒〓セバンシュルド。

人の名前よ。

今、ここに居るんでしょ、あいつ。」

既に事情はパンリから聞いている。
何の疑いも無く、シュナは続けた。

「あは……。」

だ、誰のことかなあ……？」

「……お父さん。

その部屋で介抱している……頬に傷の、あの男の人のことじゃないの……？」

無謀にも、そのまま誤魔化そうとしたバーグが、大口を開けたまま動きを完全に停止する。

この時ほど、おせっかいな自分の娘の口が恨めしいと思えたことは無かった。

世羅と戒は共に落ち着かない様子で、虚空に目を泳がせていた。お互い隣の席に座らされても、120度くらいの微妙な角度で顔を合わせようとしなない。

（何なの？ このムードは…）

そんな二人の様子に何かを感じとりながら、パンリの隣に席をとるシユナ。

「いやあ、このテーブル、初めは大きすぎると思っていたが…。
このサイズを買って正解だったな。」

場を取り繕うように、両手を広げてバーグが笑う。

（自分で部屋から出るなどか言ってたくせによ……。
あっさりバレてるじゃねえか…）

無言のまま、彼を睨みつける戒。
彼が下手に誤魔化そうとしたおかげで、余計な空々しさが生まれているのだ。

「……おい、ところで、ウェンウェンの奴はどうした。」

戒は向きを変えて、だるそうに頬杖を突きながらパンリに訊いた。

「……あの……どこかに行っちゃって……。
見つからないんです。」

「別れの挨拶も無しかよ。
勝手な野郎だな。」

「別れだなんて……まだ、そうと決まったわけでは……」

「さて、どうだか。」

放浪している奴つてのは、人間が出来てねえ奴が多いからな。」

戒は口元を歪めて言う。

直後、目を伏せる世羅を見て、自分の発言のまずさに気付いた。

「……戒こそ、学校はどうしたというのだ？」

そこで対面のザナナが訊く。

「……そうだそうだ。
自分の考えをコロコロと変えるような奴が、人間の質を語って良いものかどうかな。」

その脇に座ったバークも、苦笑しながら続いた。

出されたミルクのカップを両手で持って、上目づかいに変わる世羅。

「…そ、それはですね……」

誤解の説明しようと、パンリが立ち上がる。

やはり戒は特に弁明しようともせず、そっぽを向いているままなのだ。

「はいはい!!」

面倒だから、私が簡単に説明しちゃうわよ!!」

パンリを押しつけ、強引に話に割って入ってくるシユナ。

「こいつってば、ご破算にしちゃったのよ。」

私とパンリを犠牲にしてまで立てた、大学入学作戦の全てを。」

「黙ってる、てめえ。」

自分を指差すシユナに牙を立てる戒。

だが彼女の方はまるで構わずに、胸の谷間から赤い十字架を取り出して、全員に見せびらかすようにして更に笑みを増す。

「おい……!!」

それって……!!」

それを見て、最も目を剥いたのはバーグだった。

「^{イデイス}聖十字、神学校の首席の証です。
これって、本来は私の物なんですよ……」

「馬鹿野郎ッ！！！」

シユナが得意になって語る途中、かつて聞いたことのないような怒号が響き渡った。

それは、にわかにか屋を震わせる。

あまりの剣幕に椅子ごと気圧される彼女。
その脇のパンリも、思わず耳元をフードごと押さえて縮こまっている。

だが、彼の怒りの矛先が自分ではないことに、シユナはすぐに気が付いた。

「あ……あれほど大事にしろと言っただろうがっ！
そんな簡単に手放して………どういことなんだ！！」

バーグがテーブル越しに掴み上げるのは戒の胸倉。

「……ああ！？」

戒は理由もわからずに、彼の怒りに身を任せていた。

「お父さん！ 彼は病人！！」

騒動に気付き、台所から顔を出した娘の言葉により、バーグは腕の力をようやく緩めてシュナに向き直る。

「……事情は全く分らん。

だが、そいつを戒に返してやってくれねえかな。

……頼む。」

「えっ？」

そしてテーブルに両手を付いて深く頭を下げる彼に、彼女は逆に尻込みした。

「よ、よして下さいよ……私、別に……」

「聖十字はな……！！」

シュナの言葉を遮り、バーグは続けた。

「使える人間が持たなけりや意味がねえし、自分はもちろん、他人の命を守ることの出来る素晴らしいものだ。

かけがえの無い……ものだ。

だから……」

下げられた頭が上がることは無い。

「……えつと……。」

「……戒からも何か言ってよ！」

どうにもいたたまれない気分となり、弱声を上げるシュナ。

「……ヒゲ……前から思っていたんだが……どうして、お前がそんなに詳しいんだよ。」

だが戒は、少し別の視点から疑問を投げかける。

その言葉に応じ、バークは自分の首元をまさぐり、掛けている細い鎖を見せた。

世羅と戒は、今まで度々目にしていた彼の装飾だった。

鎖の隙間に作られた、細くて小さなロケット状の部分。

バークはその蓋を開けて、彼は赤い欠片をテーブルに落とす。

「……それは……」

「……嘘でしょ？」

戒とシュナは立ち上がり、同時に呟いた。

「まさか……聖十字……？」

「母は修道士でした。」

湯気の立つ大皿を持って、台所から広間に入るクウ。
彼女は虚ろな目をしていた。

「……そう。」

昔、あいつが戦場で幾多もの仲間の命を救ってくれた聖十字。
その成れの果てだ。」

「待つて、待つて!!」

教団によれば、聖十字は絶対の物なのよ。
そんなに簡単に壊れるなんて聞いてないわよ……」

言葉を続けるバークに対し、シュナが口を出す。

「それほどの激戦だったんだよ。
アルドの叛乱って戦争はな。」

テーブルを軽く叩いて、遠い目で返すバーク。

「特に……最後の掃討戦は熾烈を極めた。
初めて飛翔艦が投入されて爆撃を行った時なんぞ、敵も味方も無
かったんだぜ。」

回想するバークの瞳に、その光景を想像し、広間は静まりかえっ
た。

「あいつは、俺を…仲間を必死に守った。

それがこの代償だ。

思えば…その時、あいつは寿命も縮めたのかもしれない…」

さらに動いた目線の先。

その暖炉の脇には、女性物の修道着が丁寧に掛けられている。

「あの時以来…身体が病弱になってな…まあ、あれだ。
一年前、死にしまったよ。」

バーグが言い切った所で、大皿をテーブルに置くクウ。

彼女は再び台所へと戻る。

「…わかったわ。

それじゃ、返す。」

「……なんだと？」

さらに重苦しさを増す空気の中、戒の前に放られる十字架。
やけにあっさりとしたシュナの態度に、彼は顔をしかめた。

「…何よ、受け取らないの？」

「……いや……」

彼女の笑顔の裏を探るように、おそろおそろ手を伸ばす彼。

「んもう、じれったいわね!!」

そんな戒の手を取り、シュナはの上に勢い良く十字架を押し付ける。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔で、彼は再び自分の手に戻ってきた『それ』を無言で眺めていた。

「…それなら、これでお前の役目は終わったな。もう帰っていいぞ。」

そして、台無しの言葉をかける。

「何ですって!?

まだ終わってないわよ!!」

掴みかかるシュナ。

「……他にもねえ、あんたの眼鏡…弁償してやろうと思ってここまで来てあげたんだから。」

「そういえば、今日はかけてねえようだな。どうした?」

「私が誤って壊しちゃったんですよ。」

訊いたバーグに対し、舌を出してシュナが笑う。

(…あれが……誤ってですか?)

店裏で戒をボコボコにしていた彼女の姿を思い出しながら、その横でパンリは苦笑した。

「…いらねえよ。」

あんなもん無くたって、別に支障はねえ。
何を企んでる? さっきから、妙に…」

「あら? 遠慮は一切無用よ。
だって私達、学友じゃない?」

「……う！」

……てめえ……!？」

テーブル下。

自分の腹に押し付けられたフォークの感触と共に、戒が彼女を睨みながら呻く。

「持つべきものは友達だな。
いい子じゃないか。」

すっかりと騙され、コップを片手に取るバーグ。

そこで、ビール瓶に手を伸ばすが、先にシュナに取られてしまう。

「おじさん、私がお酌してあげますよ。」

「お、おお……すまねえな。」

少し照れながら、彼女からの酌を受け取る彼。

シユナはその後も一切手を休めずに、大皿から塩茹でされた空豆とトウモロコシをそれぞれの小皿に分ける。

「塩茹での野菜だなんて、シンプルだけど美味しいのよね。
つまみに最高かも。」

「…こんな粗末なものですみません。
とても、本職の方に出せるものでは無いのですけど。」

クウが酒の追加を両手にしながら再び返ってくる。

「いやいや。」

本職ゆえに、他人に作ってもらうのが嬉しいものなのよねー。」

首を傾げて力無く笑う彼女に対し、シユナは本心で答えた。

一方、その脇のザナナは、アルコールの薄い果実酒の入った杯を片手に無言でいた。

その半眼で、そわそわと手で自分の腿ももを擦っている世羅の様子を

見た後、その口に付けられた杯が
一気に傾けられる。

「……戒は、これから、どうするつもりだ。」

そして、両腕を組んだまま低い声で呟く。

世羅はそう言ったザナナを一瞬見上げた後、戒に視線を移した。

パンリはそれを注意深く観察しながら、戒と彼等との間に、また
シユナのような因縁があるのではないかと恐々とする。

「……これからどうするなんて、俺様の勝手だろうが。」

「そうはいくか。」

送り出してやった俺達が納得できるような目標をここで示しても
らうぜ。」

戒の返答に、赤ら顔になったバーグが突っ込む。

「色々な事情があつて、気が変わったんだよ。」

二人が醸した、逃れようのない空気。

面倒臭そうにしながら、戒は口を開く。

「……俺様は飛翔艦乗りになる。」

そして、その唐突な言葉に、一同が哑然とした。

「ほんと？」

ぼんやりと世羅が訊く。

「……ああ。」

襟を引き、胸元を緩めて答える彼。

「コツコツと勉強する時代じゃねえんだ。

これからは、欲しい物は全て空から手に入れる。」

一瞬、パンリとシュナの方を向いて彼は笑う。

「正面から喧嘩を売って奪ってやるのもいい。

それとも大金を稼いで、学校や図書館を丸ごと学者付きで買ってやるか。」

「……ちよつとちよつと。」

寝言は寝てから言いなさいよ……。」

驚きのあまり、シュナが無表情のまま返した。

「なるほど……。」

お前らしい、馬鹿げた考えだな。」

バーグがテーブルに置いていた煙草の箱底をつまんで叩く。

「だからそのためにも、俺様がルベランセに戻ってやるから有難く
思え。」

手にしたナイフで彼を指す戒。
途端に、世羅が笑顔に変わった。

「……おいおい。
そりゃあ、ダメだぜ。」

だが先程より少し醒めた様子で煙草をくわえ、その口から大きく
煙を吐くバーグ。

「…戒、そんなに甘くねえぞ。」

そして彼を凝視しながら続けた。

「男が一旦、啖^{たんか}呵切^かつてるんだからよ。
それを覆してまで『戻らせて欲しい』っていうんなら、艦の責任
者にはそれなりに詫^わびを入れるよな。」

「侘^わびだと?」

「そうだ。面倒かけてすみませんってな。
それがスジってもんだ。」

「……馬鹿言え。
即戦力になる俺様が戻ってやると言ってるんだ。断る理由など
あるはずがない。」

「甘えつつってんだろ。
それこそ、『下働きから空の勉強をさせて下さい』っていう気概
が伝わらねえとな。」

案外、あの副長さん、そこらへんしっかりしてると思うぞ。」

彼の言葉に、顔を歪める戒。
そこで、シュナが思わず立ち上がる。

「おほほほほっ！
あなたも出戻りの屈辱を味わうがいいわ！！」

そして口元に手の甲をつけて、急にけたたましく、高い声をあげる彼女。

「くくく……いい気味！！」

「ほんと性格悪いな、おまえ。」

それを齒軋りしながら下から睨みつける戒。

「まあ、まずは副長さんには俺から伝えてやるよ。それから謝った方が、都合がいいだろ？」

そこで、バーグが穏やかな瞳で言った。

「ボ、ボクも一緒に謝るからっ！！」

さらに横からは、熱心に寄ってくる世羅。

「だから……きっと大丈夫だよ……。」

大きな瞳で、彼女は一心に訴える。

その勢いに流されて、思わず無言で頷く戒。

「……だったら、私も行かせてもらおうかな。」

シュナが、そんな二人の様子を面白くなさそうに眺めてから言った。

「はあ？」

戒が世羅から目を離し、すぐさま彼女に言葉を向ける。

「お前は『本当に』何も関係が無いだろうが。それに、ルベランセは軍艦なんだぞ。」

「私、当面やること無いし。」

高慢なあんたがへこまされるところを見物するのも悪くないわ。」

広間の片隅に置いた、自分の大荷物を横目で見るシュナ。

「まあまあ、そうと決まったら……食べ、飲め。
まずはめでたい。」

「バカ、何も決まってねえだろ、ヒゲ。」

バーグは戒に対する笑いを押し殺しながら、手を小刻みに震わせ
てビールのグラスを取った。

「ルベランセの連中はどう反応するかはともかく、俺は歓迎して
るんだぞ。」

「フン……
どうだかな。」

鼻で一笑する戒。

「ささ、おじさん、おかわりは？」

「お、気が効くねえ。」

再びビール瓶を構えるシュナに、もう慣れた感じでコップを突き

出すバーグ。

「ほら、世羅も借りてきた猫みたいにしてるのはもう止めて、沢山食べよ。」

「うん!!」

右肩上がりの彼の調子に、世羅も元気良く笑って食器を取った。

「はは……こうしていると、何か家族が…急に増えたみたいでいいな…」

「お酒の追加、取ってきます。」

バーグが視線を向けると、クウは急に立ち上がって席を外す。

「ふざけんな！」

誰がヒゲの家族だ！ バカ、死ね!!」

「いいじゃねえかよ！」

なあ、みんな!!」

ドアを閉めて、背にした扉越しに聞こえる、大きな笑い声。

家では見たこともない父の笑顔がそこにあった。

「なめやがって、畜生が!!」

バグが握り拳を振ると、先ほど指に食い込んだギルドの親方の前歯が飛んだ。

「容態が悪化したら、すぐに知らせるって約束だろ……！」

…このクソ野郎!!　だましやがって!!」

「じ…仕方無がったんだ……。」

…今あんたに拔げられると、前線が崩壊するって聞いていたが
ら……」

口と鼻から血を噴き、半壊した机に全身を沈ませながら答える親方。

「話が違う……契約が違うじゃねえか!!」

収まらない怒りを、手当たり次第にギルド内の備品に向けるバグ。

彼を取り押さえるべきギルドの護衛の面々は、既に床でのびている。

「バグさん！」

馬車の用意が出来たぞ！！」

入り口の扉を勢い良く開けて、声を張り上げる友人。

「ああ……！！」

バーグは最後に、振り向きざま、うずくまる親方の顎を殴り飛ばした。

「もう……ママ、いなくなっちゃったよ。」

病で死んだ者はその日のうちに火葬される。
それがこの町の風習であった。

空のベッドの上には、温もりも何も無い。

「……ママが最後に口にしたの……お父さんの名前だった。」

「……！！」

薄暗い部屋。

そのベッドの傍らで呟き続けるクウの様子と言葉に、バーグは啞然とする。

「ママが最後の熱にうなされ始めてから……私の名前なんて一度も呼んでくれなかったのに……」

娘は力無く、だが何故か笑みをこぼしていた。

「本当にそばに居て欲しかったのは、お父さんだったんだよ？」

そして、胸に深く突き刺さる言葉。

「どうして……帰ってきてくれなかったの!？」

「……あの時、俺が戦いを止めていたら……多くの人が苦しんだんだ……。
だから……」

その時の自分の声は、ひどく、言い訳のように響いて聞こえた。

「……嘘だよ。」

お父さんは……単に戦うことが好きなんですよ……」

「……!」

言葉を奪う娘の言葉。

確かに、幾度と無く、強引に戻ろうとすれば戻る機会があった
ろう。

妻への思いを強引に封じ込め、戦いに興じていた自分を完全に否定するなど出来ない。

いつのまにか成長していた娘は賢く育ち、自分の弱さを見透かしたような、きつい視線を浴びせている。

「どうして、ママと一緒にになったの？」

「あんな気持ちで死なせるのなら……どうして、一緒になったのよ……」

視界から消える彼女。

やがて間もなくして、彼女は騎士団に入団した。

父である自分に相談の一つも無かった。

また止める理由も資格も、自分には無いように思えた。

親方への暴力と施設の破壊により、ギルドには出入り禁止となり。いつしか、自分は酒に溺れるようになっていた。

そんな廃人寸前の人間に声をかけてくれたのが、旧友のリジャンだったのだ。

「俺様はもう休むぞ…。」

時間も周りの様子さえも分からない宴の最中。
アルコールでぼやけた視界の中で、戒が立ち上がるのが見えた。
さらに世羅がその背中を目で追うのが見える。

「…世羅。」

バーグは深く椅子にもたれて笑いながら、彼を顎で指した。

「……うん…」

頷いて立ち上がる彼女。
それに合わせて、何かに気付いたシュナもテーブルに手をついて
腰を浮かせる。

「……っと、お姉ちゃん、待った。
もう一杯……くれよ…」

だが咄嗟に、その彼女の手を取ってコップを差し出すバーグ。

「……え？」

あ……、でも……はあ……わかりました…」

先ほどから、赤ら顔でだらしない様子の彼だったが。

その手の力は、酔い潰れた人間のものではない。

それが解ると、シユナは諦めるしかなかった。

(…変わってねえな……まったく……どいつもこいつも……)

手で壁を押さえながら、ふらつく足取りで廊下を歩く戒。

飲んだ薬の効果も切れ始め、再び熱を持ち始めた頭が一刻も早く休息を必要としているのが分かる。

日中に運び込まれた寝室に入る戒。

深く溜め息をつき、後ろ手でドアを閉める。

そこで、背中に軽い衝撃。

「うお……！？」

感じる人肌の温もりと石鹸の匂い。

「何だ、世羅か。

驚かせやがって!!」

そして自分の腰に回される細腕を確認し、慌てて叫ぶ彼。

「このままで聞いてよ。」

「……ん？」

さらに腰を締め付ける細い両腕。
戒は思わず踵^{かかと}を上げた。

「この前は…逃げちゃって、ごめん。」

「……………」

背骨に、彼女の額を感じる。

「…気にしてねえよ。」

腰に回された手を解き、振り向く戒。

「ほんと？」

少しうつむいたまま答える世羅。

そのポニーテールを結んだ赤い帯に、戒は自然と触れる。

「…それより、俺様も…偶然だが、お前と同じ目的になっちまった。」

「……うん。」

「だから言いてえことは、はつきり言え。
これからも遠慮は無用だ。面倒くせえからな。」

「…うん。」

世羅の笑顔を置いて、戒はぶつきらばうにベッドに入る。

「ボクね……。」

まだ使ってないんだよ。」

「？」

そんな彼の枕元に近付いて来て、ズボンのポケットをまさぐる世羅。

「これ……。」

それは封に入った報酬だった。

「だって……二人でやった仕事なんだもん。」

そのままの姿勢で、彼女は呟いた。

「余計な気遣いしやがって……。
また会えると思ってたのか……？」

「ううん。」

彼女は腕を背中組んで、身体を左右に揺らした。

「会いたいと思ってたんだ……」

心地よい彼女の言葉に自嘲気味に笑い、彼は目を閉じて睡魔に身を任せた。

目元がうずく。

自然の岩場の高台に胡坐をかいて、ウェンウェンは息をつく。

両手で錫杖を真上の月に向け、一回り。

深い夜。

草木さえ眠る暗黒では、浮かぶ星光が良く見える。

その中の恐ろしくまばゆい一点に顔を向けて、彼は錫杖を真つ直ぐに岩に突いた。

3

当時の彼は、大陸における真理・歴史への探究心を、一切の人間の中で最も多く有していた。

それが『それら』を招いたのである。

「ぐウ……………！！！」

鼻から額にかけて激痛。
走る、異物感。

寸前まで記憶しているのは、自分の顔面に漆黒の楔を打ち付けた黒き手。

「……だ……誰か……っ！」

知識のみを追い続けてきた瞳は何も見えず。

「……誰か……助けてくれ……！！」

ずっと飽くなき探訪を行ってきた手足は、岩と同化したまま動かない。

砂中に沈んだ遺跡の中で迎える、悠久の静寂。

彼にとって、その未来永劫とも思える静止した時間は、地獄に等しかった。

いずれ虚しくなり、彼は痛みを訴えることをやめた。

チクタクと、金属の衝突音。
そんな整然としたリズムが、耳の奥に響く。

戒は目を開くと、自分が夜空を仰向けに浮かんでいることを知った。

《 何が見える？ 》

頭の中を響く声。

「星が……見える……。」

《 いくつあると思うね？ 》

答えた自分に、再び返される質問。

「……わからない……。」

浮いたまま、思い通りにならない身体。
ましてや、中天の全てを見渡すことなど叶わなかった。

「でも少ねえな……。」

これは…本当に星なのか……。」

《 ふふ……星に見えるのは、私の『感覚』を通して見ているからだ。 》

「おまえ……誰だ……？
いや……それより……。」

言葉を止める戒。

（これらが星でないとするならば……一体…何なんだ……？）

《太古の人間が『神』と呼んだ摂理。

そして今は、とある人間により、その『仕組み』のみを抽出された存在
》

「！！」

熱くなった自分の左手の中指。
青く光り輝く、その付け根。

それが一気に膨脹し、飲み込まれる。

《そう。天命の輪だ。》

戒は、言葉の伝えた衝撃に跳ね起きる。

蒸し暑い空気。

手を付いた床から伝わる、機械の重低音。

それらが飛翔艦の機関部の音であることを、今の自分なら確信で

きた。

すぐ傍にも、立ち尽くす長身がいる。
それはクウの姿だった。

「……ここは……!？」

呆然として訊く彼女。

「……俺は以前、見たことが……ある……」

一方、独り言のように呟きながら答える戒。

「私は……部屋で寝ていたのですが。」

「……俺だってそうだ!」

呆けたまま言葉を続けるクウに対し、裏返る大声。

途端に頭まで鳴り響く、心臓の鼓動。
忘れかけていた謎の呪縛に、再び捕らわれたことを身体が悟っていた。

突如、破られる左舷の窓。

その外には、二人が見慣れた空は無く。
灰色の景色の中、巨大な円形盤がそびえていた。

盤は金属で出来たような三枚が上から小さい順に重なって、
ゆっくりと回転しており、
それぞれに宝石の如く光る粒がちりばめられている。

そして、それを地で支えているのは、盤から真下へと突き出た手
足の束。
各盤の隙間の軋轢あつれきから、絶えず新しい四肢が生み出されている。

あらゆる生命の縮図のような、神々しさだった。

「見えるかね？」
あれが、私の天命の輪。
先程、君が星と思いこんでいたものだ。」

「!？」
突如、背後から現れたウェンウェンの姿に、驚愕の表情を浮かべる二人。

「…今まで、どちらにいらしたのですか。
おもてなしを受けていただけると仰っていたのに…」

「すまない。」

だが、人の成長を見届けるこそが、私の好物だ。
……君からのお礼は、それで充分だよ。」

交わされる、現実からかけ離れた場所での、日常的な会話。

「……待て。さっき……自分の天命の輪とか……言ったな。」

おまえが^{エア・ファンタジスタ}天命人……？

いや、それよりも……あれが天命の輪だというのか！？」

そんな多くのギャップに戸惑いながらも、戒は訊かずにはいられない。

「驚くのも無理はないな。」

天命の輪の真の姿を、現実の世界で目にすることは、滅多に無いだろうから。」

「……！！！」

知った風な口ぶりのウエンウエンに、掴みかかる戒。

「ワケわかんねえこと言ってんじゃねえよ……。」

さっきの変な夢も……全部てめえの仕業か！？」

彼が続けた言葉で、脇のクウは現在の景色を改めて見回した。

今いるこの場所こそが、まさに夢の世界ではないのだろうか。
そんな疑問が、ふと浮かぶ。

「今、我々は『感覚』を共有させられているのだ。
私は先程、それを少し利用させてもらったにすぎない。」

ウエンウエンは掴まれた戒の手を解こうともせず、伸ばした長身の上から言葉を投げかけた。

「ここは感覚の他にも、心・精神などと呼ばれる世界。
それを完全に支配できる存在は、ただ一つ。」

艦内の空間が捻じ曲がり、速度を増す。
自分達は全く動かぬままに、周りの景色が平行に移動していった。

視界の奥から忍び寄る物体。

「来たぞ……。」

やや緊張した面持ちで、ウエンウエンが呟いた。

「……まさか……！」

その禍々しい気配に感付いた戒は、抑揚の無い叫び声を上げる。

「…思い……だした……！
おまえは……！！」

身体に染み付いた悪寒。

彼には子供のように喚くことしか出来なかった。

《少しは強くなった……か？
『犠牲の月獣』。》

迫り来る大きな流動体から声が発せられ、それはやがて七色の光を持つ鎧に変化する。

（…何故、俺を……天命の輪の名前で呼ぶ！？）

その様子を、目線を逸らさずに睨みつける戒。

（俺は……俺だ！！）

そんな彼の気迫にも無機質な様子で、鎧は悠然と両腕を組み、三人の前に立ち塞がった。

《この世の全ては、生まれながらにして、既に腐敗している。
その中で唯一無二なる永久不変、それが我》

「天命第一位『逃れえぬもの』。」

鎧の言葉の続きを連ねるのは、ウエンウエン。

《天命第一位『星詠』……貴様か。》

彼に反応し、表面の光を流動させる鎧は、懐かしそうに呻いた。

その声色に触れて、戒は途端に頭痛に襲われて片膝を床に落とす。

《なんじ 汝の名は？ 》

次にクウの方を向き、訪ねる鎧。

「……わ、私は……ク……」

そこで声を震わせて言葉を止める彼女。

「……！……」

そして、戒と同様にうずくまる。

「……天命第三位……『二匹目のシャリー』……。」

「おい……！」

なに……言っただ……おまえ？」

無表情で答えた彼女に、思わず駆け寄る戒。
頭を押さえる彼女の全身から、黒い靄もやが剥離して重なった。

「ケケ……」

そして戒の手を振りほどいてから、犬のように両手足で立ち、不気味に笑うクウ。

「ソージャ…ネエノサア……！」

端正な少女の顔を異形に歪ませ、眼球を回転させながら笑う。
その視線は戒で止まり、不気味な光を放った。

「アンタ……ハ……！？」

ハハッ……眠ッティヤガルノカ！？

……『犠牲ノ月獣』、眠ッティヤガル、ザマーナイネエ！！
全然ッ！！認メラレテ無エーイワケダ！！」

《『二匹目のシャーリー』、わきまえよ。》

目の前の鎧から、淡々とした声が洩れた。

「……ケケッ……」

その言端に怯えたように跳び退いて、ウエンウエンの背に隠れる

彼女。

身体に重なる黒い靄は、特に背中から長く伸び、羽根のように広がっている。

そして先程の彼女からは想像できない程の下卑た晒^やい^らに、戒は言い知れぬ恐怖を感じた。

《『星詠』。

汝に伝えることがある。》

言葉と共に、鎧の右の手甲が落ち、そこから、どろりとした大きな雫がこぼれた。

その中で蠢くのは、小さな人影。

「『逃れえぬもの』は、様々な精神を支配する。

この記憶もその一つだ。」

「…記憶……だと？」

ウエンウエンの説明に興味を持ち、その雫に近寄る戒。

（…もしかして…この場所も……誰かの記憶なのか？）

色褪せた飛翔艦内。

ブリッジの景観は、ルベランセのものとは違う。

そんな考えに耽るうち、雫の中では揺らめく人影が鮮明に映り出

した。

それはパンリと同じく、垂耳と呼ばれる種族。

だが、彼の場合はその身を隠そうともせず、恐ろしく長く発達した耳を己の首に巻きつけている。

纏っている服装も、着物ともドレスとも似つかない、特別に稀な恰好であった。

《 世羅の師として幾つばかりか申しつける。
しかと記憶するがいい。 》

その者は正面に堂々と向かって、まず、尊大な言葉を発した。

(……世羅の…師匠!?)

雑音混じりの声と映像に、戒は釘付けになった。

同時に。

放たれた世羅という言葉に、何かが頭の中で繋がる思いがした。

《 ウェンウェンよ……お前がこれを見ているということは、……

既に世羅に出逢っているというわけだが…。

あれの様子は……どうだ。元気にしておるか。》

そこまで言うと、彼は何かに気付いたように言葉を不意に止めた。

《……まあ、元気だろうがどうだろうが、わたしには関係ないことじゃがの。》

そして、大きくて派手な扇子せんすを袖から出して開き、口元にあてがって笑う。

「…はい。」

直立したまま、相槌を打つウエンウエン。

《確率的には……『星詠』を持つ貴様が、天命人で一番最初に世羅と出遭う確率が大きいと踏んでおる。
だからこそ、この記憶を残した。》

「ふふ……」

ウエンウエンは微笑を唇に帯びて、戒に顔を向けた。

《命令じゃ。

もしも世羅が迷っておるならば、導け。》

「……あいかわらず、自分勝手ですね。
だいあくみよつ
大悪名殿は。」

《 同じ神呪の者同士、理由は言わずとも分かるじやろ。 》

そんな言葉にも、ただの記憶の存在のみである眼前の垂耳は続けていく。

（同じ…神呪…？）

一方の戒は、二人が交わす言葉に目の色を変える。

「残念ですが……お断りいたします。
私よりも先に出会い、私よりも強くそのさだめの輪に、己を絡めた者がいるのです。」

垂耳の映像に歩み寄るウエンウエン。

それは、映像の側に立つ鎧にも同時に語りかけている様でもあった。

「彼等の行く末の過酷さ、そのさだめを『星詠』は承知しております。

ですが、それでも私は委ねようと思うのです。」

ウエンウエンの返答を知ってか知らずか、雫の中の垂耳は再び笑った。

《 ことづけはこれだけじゃ。

……必要とあらば、各地のわしの弟子を訪ねても構わん。
では、さらばじゃ…… 》

消えゆく声。

役目を終えた雫が、その光を失って床に溶け込んだ。

「 ……今のは何だ……？

世羅の師匠とお前が……どうしたって……！？」

動揺と怒りに身を震わせ、戒がウエンウエンに問う。

「 ……てめえらは……一体、世羅の何なんだよ……！」

次に、鎧へ向けて慟哭する。

「俺は……世羅のやつに会ってから、何度もこういう夢を見せられてきた。

中王都市に来る寸前に……飛翔艦の中で、てめえに似たような奴に襲われたことがある。

……悪の根源は……てめえじゃねえのか！？」

《 我に善悪を問うか。 》

七色の光沢が鎧の曲面を流れた。

《 汝はその身を保つため、大陸でどれだけの命を奪い、食してきたというのだ。 》

人間の判断で悪を決めると云うのなら、それこそが… 》

「うるせえ！ それは生きる物のさだめだ！！
どんなに変えたいと思っても、決して変えられない……」

自らの言葉に違和を感じ、戒は動きを止める。

《 気付いた……ようだな…… 》

鎧の小さく唸る声と共に、足場は消え去り。

途端に何も無い空間へと放り出される戒。

水の中のような奇妙極まる重力の中、思わず泳ぐような態勢になる。

「 かつて…君と同じことをふと思った……そのような人間がいた。 》

彼は生きる物が常に縛られている、そのさだめを憂い。

神と称されるこの世の摂理法則を紐解き、天命の輪なる『さだめの大元』を抽出することに成功したのだ。」

彼の上方から言葉を発するウェンウェン。
その背には、いまだに不気味に晒^{わら}い続けるクウの姿も掴まっ
てい
る。

「だが、悲しいかな……天命の輪は人外の力を帯びていた。
彼はその力をもって生きる物のさだめを変えるよりも、目先の覇
権を選択してしまった。
そして凶獣を追い払うという功績で、大陸中の人々に己を信仰さ
せたのだ。」

彼は昔話を語る老人のように。

「天命の輪は、『さだめ』の他に『意志』を持っていた。
彼の野心が膨れ上がるにつれて、それらは摂理の中に『還りたい』
と願うようになった。」

楽しげな口調で続けた。

「彼に使役され、抑圧され続けた天命の輪。
ある時、その中でも天命第一位と呼ばれる最も強力な20の存在
が彼の中で抵抗した。
己の力を封じるばかりでなく、逆転をさせ、恐ろしい呪いと化す
ことで彼を止めたのだ。」

周囲を軽やかに浮遊して、述べていく一言一句に、戒は黙って聞
き入る。

「……だがそれによって、他の天命の輪が元の摂理に還る術は永遠に失われた。」

そこで、それらは代わりとして人間に絶えず宿することで、新たに摂理を保つことにしたのだ。」

言葉が途切れ、訪れる静寂。

「……呪いとなった…天命の輪は…その後…どうなったんだ？」

一抹の不安と共に疑問を投げかける戒。

「すぐ後に、その者の狡猾さを知ることとなった。」

ウエンウエンは、彼の鼻筋近くまで寄り、再び言葉を紡ぎ出す。

「彼は全てを想定しており、あらかじめ、弟子達に天命の輪を切り離す術と与える術を教えていた。」

それらを他者に移し、再び人間というものを認めさせることで天命第一位の本来の力を復活させ、再び手中におさめることまで企んでいたのだ。」

「……その結末は……」

「まだ着いていないさ。」

不意に笑い、目元に巻いた布を解き始める彼。

「見よ。」

いまだに渦巻く、この怒りの形を。

果たしてこれが人を許す日が訪れるのであろうか

そこに露になった、彼の肉に食い込み蠢く黒き紋様。

戒は絶望を覚えた。

「これらは人間を器とし、長い年月をかけて中身を量り続けている。そう……私ですら、まだ『奴等』が収穫するべき実ではないのだ。」

眼前のウェンウェン、その後ろのクウ、そして自分。

ここに集められた者は全てが天命人。

それらの事実を知らせようという作為の元、選ばれた者達がここにいる。

空間を垂直にして、下降する身体。

現れた地に足をつけると、目の前に物言わぬ鎧が再び現れた。

戒は、その鎧の主を理解した。

それは世羅しかない。

そして、彼女の身体にある紋様は一つではない。

《 そう。

『星詠』は気づいているだろうが……私の他にも六体が入っている。 》

鎧は先んじて言葉を発する。

「 ……あんまりだ……どうして……世羅なんだ……」

虚無の中、戒は言った。

《 ……生まれ出でた時から特別な器だからだ。 》

「 ……なら……どうして……この場に世羅がない？ 」

《 …………。 》

「神呪だろうが何だろうが、ウエンウエンの野郎は存在してやがる。だが、どうして世羅がいないんだ。」

押し黙る相手。

「教える……！」

……もしかしたら、あいつを助ける鍵になるかも……しれないんだ……！」

「……戒。

どうか『逃れえぬもの』を信じてやってくれないか。」

懇願するように叫ぶ彼に、上空に浮いたままのウェンウェンが言った。

傍らのクウの手を優しくとり、彼は上へと昇り始めている。

「…そして気をつける。

一度、この世の摂理を手中にした者は、自分を自然そのものだと思っている。

自然に反する理然…。

そのようなものが全盛するこの時代を、たまらなく敵視しているのだ。」

見上げる戒に、早口で語りかける彼。

「自然に抗うものは全て破壊し、摂理に近づく者を決して許さない。さらに力に対する執着と貪欲さは類を見ず、あらゆるものを目的のための手段とするだろう…

それは…国家であつても…例外でなく…」

やがて、聞き取れなくなる言葉。

風船が高い空に消え往くように、二人がぼんやりと視界から消える。

とり残された戒は、独りで鎧と対峙することとなった。

（天命の輪を自由に……そんなことが出来る奴がいる……？
皆……そいつが元凶だというのか……あいつも……その犠牲にな
ったというのか……？）

流れる色の光沢を眺めながら、彼は思う。

（輪の怒りの姿だと言ったが……この鎧は正常に見える……。
いや……むしろ……手を貸しているように……だが、信じるという
のか？）

鎧は、目の前で無言のまま微動だにしないでいた。

そんな中、不意に浮き始める戒の足。

「……おい……！」

目が覚めても……もう記憶を消すんじゃないぞ……！！
クウの奴はともかく……俺の記憶だけは、絶対に残せ……」

別れの予感に、慌てて叫ぶ彼。

《……良いのか？

このような事実を明確に憶えてしまえば、苦しむただぞ。》

相手は、少し驚いたような口調を初めて聞かせる。

「こちゃこちゃ言つな！」

《……知るからには、それなりの覚悟の上であろつな。》

「……ああ！！」

《ならば、ここで誓え。

必ず『世羅を護り続ける』と。》

「……………」

無言のまま、目で応える戒。

下に向けた視線から遠ざかる鎧。

《よかろう。

『誓約』は、『成立』した。

破らぬ限り、我も貴様を護ろう。》

辺りは次第に白みがかかり、段々と上へと引っ張られる間隔が加速する。

《宿主でない者と結ぶのは、極めて異端の行為であるが……》。

否、世羅の存在…また、我自身の異端さを思えば……それもまた…
》

目に映る全てが消えていく中、言葉もまた消える。

「…いいか！ 俺がてめえらの『さだめ』とやらに従ったわけじゃねえ！！」

てめえらが俺の後をついてくるんだ！！」

対象の無い、戒の叫び。

《 ありがとう。 》

それに応じて、鎧の胸部が左右に開き、中からただ一言を放つのが一瞬だけ見えた。

それは幼い声だった。

教会の庭園の朝露さえ乾かぬうちの出立だった。

「……似合わんだろう?」

両手一杯の花を軽く持ち上げて、自嘲するシザー。

「いえ……」

貴女がいかにか部下に愛されていたのか…先程、再認識させていた
できました。」

傍らのマクスは目を閉じて、数刻前に急遽執り行われた緑華の送
別式に思いを馳せる。

「以前約束した、稽古もロクにつけられず……すまないな。」

「それは、またいずれ……別の機会に。」

マクスは気を遣わせないよう、平静を装って彼女の言葉を流した。

「しかし、せめてクウが戻るまで……待てないのですか。」

「今は会わせる顔が無い。」

なにせ彼女を騎士団に誘ったのは、私なのだからな。」

彼女は力無く笑うと、いよいよ振り返り、正門へと近付く。

「あの夜宴の最中、一体何があったのですか。」

マクスは思わず訊ねた。

今日の彼女の退団は、あまりに急な決断であった。

ここ数日で彼女が心変わりした時があるとすれば、中王都市軍が主催した宴の間しか思い当たらない。

「鋭いな……。」

シザーは向き直り、穏やかな笑みを初めて見せる。

その右手は慈しむように、己の鎧に包まれた下腹部に当てられていた。

「……………！」

眉をわずかに上げ、察する彼。

「所詮は……私も人の子だったというわけだな。
いや、この場合は人の親というべきか。」

そして、シザーの発する言葉の端々から理解した。
あの夜以来、彼女から伝わる違和感。

既に、彼女は心の剣を置いている。

「勝手な物言いだが、クウのことを頼む。
騎士団で未練があるとすれば、あれのことだけだ。」

「お任せ下さい。」

マクスはその場で足を止め、再び頭を下げた。

去り行く彼女は馬にすら乗らず、ゆっくりと徒歩で視界から消えていった。

「教官：もう行ったか？」

教会二階のテラス。

デチャードは庭の全貌を見渡せる場所に立ち、両腕を柵に掛けながら上から訊く。

「心配ならば、送別式に出席すれば良かっただろう。
……一体、どうしたというのだ。」

マクスは彼を見上げ、珍しく不満を表情に露にした。

「今、面と向かったら……何だか、言葉を選べそうになくなってな。」

「どういうことだ？」

彼の問いに、ヂチャードが複雑な苦笑を浮かべて目線を逸らす。

「あの人、俺らには散々きついことを教えてきたのに……自分の事となると簡単に一線を退いたじゃないか。
随分、虫がいい話だっと思ってさ。」

「……………自分の事だと？」

「大方……血生臭い戦場よりも、急に旦那の所が恋しくなったんだろ
うな。」

「……ヂチャード。」

あの方を貶めるような言葉は、私が許さん。」

「……！？」

惘然としたマクスの言葉に、彼は一切の動きを止めた。

「……おい、何だっというんだよ？」

足早に離れようとする銀の鎧を見据えたまま、ヂチャードが問う。
だが一方のマクスは、そのことに対して答えようとする様子は全く無い。

「……ところで、お前。

本気でクウの奴が戻って来ると思っているのか？」

これ以上の詰問は無駄とばかりに、諦めて話題を変える彼。

「過酷な任務と知ってて来るはずないだろうぜ。

女つてのはよ……やっぱり、そういうもんじゃないのかね。」

先のマクスの態度もあり、ヂチャードは慎重に言葉を選びながら本音を洩らす。

「…彼女が戻ったら、私の屋敷に来るように伝えてくれ。」

「……なんだと？」

「ここでの任務も一段落した。

次の任務へ移る前に、私も生家に顔を出してくる。

せっかく近くまで来ているのに、父上に会って行かねばどやされてしまう。

誕生祝いも口クにしてもらえないのか、とな。」

「……そうか。

もうそんな時期か。」

即座に理解するデチャード。

この季節に、学生時代に一度、マクスに連れられて行った経験を思い出す。

名門のオルゼリア家の広大な敷地と邸宅の全景は忘れようもない。

記憶の片隅にあった、今まですっかり忘れていたあの景色は、確かに今いる教会からそう遠くない。

（どんな時でも、生家、家族ってね……。まったく、人間が出来ているこった。）

公私混同を侵しても、それこそが貴族的な感覚なのだろうとデチャードは思い、こういった部分に大いに価値観の相違を感じるのであった。

「……って……！」

もしかしてあの子を連れて行くつもりか？

それって、親に会わせるってことだよな！？」

「何を言っている？

当たり前のことだろう。」

本気表情で答えるマクス。

その言葉には、呑気なほどに裏が無い。

「お前は簡単に同僚を紹介するような感覚だろうがな…。
それに付き合わされる女は、気が気でないと思うぞ……。」

もしもそうなった場合のクウの心持ちを想定して、彼女に気の毒さを感じながら、チチャードは
身を乗り出して呟いた。

「…とにかく、そう彼女に伝えておいてくれ。
私は先に行って、色々と準備をしなければならん。」

馬が繋がれている小屋へと向かうマクス。

「それとも、お前も来るか？」

その際も彼は真顔で言うので、チチャードは素早く首を左右に振った。

「いいや。」

俺はすぐにでも『北』へ向かうように、あの黒いヤツから言われているんだ。

だが、彼女の事はちゃんと誰かに伝えておくから、安心してくれ。

「……ディボリアルから、私への指示は？」

「お前は三日以内に駆けつけろとだけ、伝えるように言われている。」

」

「……そうか。」

釈然としないながらもヂチャードの言葉に頷き、マクスは銀の鎧を揺らして離れていく。

下の階から聞こえる礼拝の歌が、妙に悲しげに響き渡っていた。

「……………」

戒は目を覚ましてから、上半身のみを起き上がらせた。

頭痛は無い。

冷えた自分の左手をシートから出して握ると、力も戻っている。

虚空に世羅の姿を思い起こし、さらに彼女の長い左手袋を想像して触れた。

（ずっと……語りかけていたのか……。）

初めて逢った時。

炎団と戦っていた時。

失っていた記憶を掻き集め、それを心の中で繰り返す戒。

「……………どうして……………お前は普通でいられるんだ？」

目を瞑り、世羅の笑顔と彼女の身体を蝕んでいる黒き紋様を交互に思い浮かべる。

(……………知るべき秘密が……………沢山だな……………)

窓の外へと視線を流す。

庭先から聞こえるのは、風を切る素振りの音。

薄着から覗く、しなやかで美しい上腕。

振り切った大剣と共に散る汗の雫。

クウは部屋の窓から投げかけられている戒の視線に、やがて気が付いた。

「……………お加減はいかがですか。」

息も整えず、剣を上下に振りながら問う彼女。

「悪くねえな。」

それより……憶えているか？ 昨日のこと。」

窓を開けて身を乗り出し、そのまま外へ出る戒。

「……私は、それほど記憶力が悪い方ではないつもりですが。」

それを無表情で返すクウ。

「お前の力……使い過ぎると……何かヤバいことになるんじゃないか
って。」

……思ってたんだがな。」

「力？」

「天命の輪のことだ。」

その言葉に、長い髪から汗を散らせ、素早く向き直る彼女。

「何故、私が天命人だと知っているのですか！？」

「……いや、俺様だつて驚いている。」

それより、やっぱ憶えてねえじゃねえか。」

「え？」

試問の結果に満足げな顔をする戒に、クウが言葉を返す。

「まあいい。
気にするな。」

「？」

益々、怪訝な表情を強める彼女。

「ともかく…使い過ぎるのは良くねえ…。
理由はわからねえが…そんな気がするんだよ。」

戒は昨日の不思議な空間内での、彼女の変貌を思い出しながら言
った。

一方のクウは、そのことは彼がウェンウェンからでも聞き出した
のだろうと納得する。

「まさか…貴方も…天命…」
「そのことをヒゲは知っているのか。」

説明を求める素振りを見せた彼女に対し、即座に新たな問いを叩
きつける戒。

「…あ…いえ。」

それには、すぐに視線を地面に落とす彼女。

「私が天命人ということとは…最近まで、私自身も知らなかったのです。」

母が亡くなった後の、遅い覚醒でしたから…」

言いながら、自然と自分の肩口を撫でる。

「さだめは……『肉親との別離』。

そうウェンウェンさんに教わりました。」

「!」

戒は目を見開いた。

「……そうとは知らず…母が死んだ時、私は父に酷い言葉を浴びせてしまったのです。」

きつと、この私のさだめが原因だというのに。」

「待て、言い切るんじゃないよ。」

天命人が一生そんなものに振り回されなきゃならねえ道理なんて

……」

「ならば貴方は、抵抗できると思いますか？」

急に寄るクウ。

視界に現れた抜き身の大剣に、戒が一步後退した。

「す、すみません。」

汗を拭いながら、クウは剣を背にしまう。

「訓練をしていたもの……で。」

「朝っばらから、殊勝な心がけよねー。」

背後から急に声をかけて出てくるのは、シュナだった。

「……何の用だ。」

それを、あからさまな嫌悪の表情で迎える戒。

「別に？」

朝の散歩がてら騎士様の訓練ってやつを見物しようと思って。」

「見ても、別に楽しくないと思いますが。」

「いいのいいの。」

素っ気無く返し、次は森の方へと歩を進める彼女に続いて、戒の手を強引に引くシュナ。

「お前のせいで大事な話の腰が折れたじゃねえか。」

……昨日から周りをまわりつきやがって、何を企んでやがるんだ。」

「大事な話だなんて何事なの？」

…あの騎士さんと何かあったわけ？」

「……何もねえよ。」

戒は渋い顔つきで答えた。

「女の子を手当たり次第……良くないと思うな。」

「歪曲するな。」

シュナの襟元を捻って掴む戒。

迫真の形相で凄む彼に、彼女は安堵と疑問を抱く。

彼は迷いの全く無い、やたらと晴れた表情をしていたのだ。

「…素振りの後は、この裏手にある大岩に向かって大剣を振るうのが日課なんです。」

そんな中、前から二人に声をかけるクウ。

「大岩？」

「いつか、両断できる日が来るだろうと思ひまして。」

「刃物で……そんなの無理でしょ？」

彼女の冗談に、笑って付き合うシユナ。

「斬れたその時こそ一人前だと、子供の頃に勝手に決めたんです。思い出というか…そんなところですよ……。」

バーグに剣技を教わろうとして、叱られた幼い自分を思い出す。以来、全てを我流で学んできた。

だが、嬉々とした表情から一点、目の先の光景に足を止めるクウ。その長身の背から覗き込む、戒とシユナ。

静止した彼女の目線の先に、見慣れた三人の姿を確認することが出来た。

「世羅さん……これは…いくらなんでも無理なのは…」

「大丈夫だよ。」

世羅が余裕の表情を見せる。

その前には、自分の身長を遥かに上回ったサイズの大岩。

「あれ？」

「……これは…？」

パンリはその岩の表面に、何か人為的に作られたような直線を見つける。

傷のような薄い線が幾つも入っているのだ。

「危ないから、離れてた方がいいよ。」

「え……あ、はい……」

世羅に言われるまま、その場を引くパンリ。

すう、と息を吸う彼女。

パンリ、そして後ろで見物しているザナナを含め、途端に緊張する空間に彼等は鳥肌を立てた。

周囲に浮かび上がる、光の粒子。

「フェルト・ド
《源・衝》」

言葉と共に発せられた光弾が、伸びた小さな手の平から飛び出し、衝突する。

一瞬、中心をへこませて、すぐに粉々に砕け散る大岩。

「う、うわーっ！ー！」

顔に飛んでくる石粒をロープで防ぎながら、声を上げるパンリ。

「……………い、一番……………弱い源法術で……………この破壊力……………ですか？」

そして腰を抜かして、その場でへたりこむ。

息もつかせぬ間。

ザナナが彼の前に立ち、わずかな山として残った岩の残骸に対してゆっくりと白槍を構える。

「……！」

槍の中心を握りこむんだ両手の指が細かな動きを見せると、先端が一气にはじけ、唸りを上げて

無数の鞭のように、飛び散った岩の残骸に襲い掛かる。

回転を基礎とした槍の猛攻に、大岩の残骸は更に砂塵と化す。

「……………お……お見事です……………」

力の抜けた両手の平で、気の抜けた拍手を送るパンリ。

「……あなたたち……何を……やってるんですか……………いったい……………？」

そんな中、三人がいる坂の上へ駆け上がるクウ。
その背後では、神妙な顔つきで頭を押さえている戒とシュナが
いる。

「世羅さんとザナナさんが訓練をなさるといので、ちょっと拝見
を。

ところで……どうかされたんですか、皆さん。
顔が真っ青ですが……？」

何も知らぬパンリが、間の抜けた表情で彼等に訊いた。

「……お前ら。
とんでもないこと……しでかしてくれたな。」

言葉通り、顔面蒼白の戒が何とか言葉をひり出す。

「……いや、何というか、これは……」

そして踵を返し、無言でその場を去ろうとするクウに声を掛ける
のはシュナ。

「いいんです。」

必死に取り繕うとする彼等に、彼女は振り向きもせずにとんと返
した。

「やはり、岩は単なる岩にすぎなかったということでしょう。逆に……くだらない迷いを断てました。感謝しております。」

さらにクウは半身で答えると、全員に会釈する。

「おい、シュナ……」

戒の言葉にシュナは頷き、彼女は斜面を下りていくクウを追った。

「あの……本当に、どうされたんです?」

呟くパンリ。

当の世羅とザナナの二人も同様、その後ろから呆然と眺めている。

「やっちゃったもんはしょうがねえな。このことは、もう忘れちまえ。」

吐き捨てるように、戒は言った。

「ところでザナナ……お前、もう体はいいのか。」

「……そうだな。」

腹部をさする彼。

空いた方の手で、槍の握りを確かめる。

「いいようだ。」

吸い込む空気。

懐かしい新鮮な緑の香りがする。

使い慣れた得物を、いつものように扱えるほど回復していた。

「しかし、お二人とも……凄いですね……。
驚いてしまいましたよ……。」

着崩れたローブを直しながら、パンリが言った。

「ここに来る前も、大きな亀とかと戦ったんだよ。」

「大きな亀……ですか？」

無邪気な世羅の言葉に、口を大きく開けて聞き返す彼。

「他にも、飛翔艦が不時着したり、墮とされたりな。
よくよく考えてみれば、まだ命があるのが不思議だぜ。」

しみりと付け加える戒。

「でも、楽しかったよね。」

手をとって、戒とザナナを笑顔で交互に見上げる世羅。

「生きてるから言えるセリフだろ。」

そんな彼女に、苦々しく答える彼。
だが、その表情は普段より緩めている。

「……………んっ…！」

急にそよいだ風に、パンリが思わず目を閉じて自分の両腕を抱えた。

叩かれたような衝撃と共に頭に浮かぶ、冒険の景色。
それと共に、目の前の彼等の横顔がとても輝いて見える。

「……………そ、そうなんですか…。
私には…縁遠いというか…何というか…」

パンリは愛想笑いを浮かべて姿勢を正し、ロープを直した。

（どうして…だろう…。
…恐いけれど…今、確かに…私は…そんな冒険をしたいと思
った…）

三人は仲むつまじく歩き、遠く離れていく。

高鳴る鼓動を抑え、それを見ていることしか出来ない自分。

背後で、草木を掻き分ける音がした。

そして、踏み出す足がそれらから覗く。

驚きに全身を硬直させるパンリ。

不意に森の中から姿を現した者は、ウェンウェンだった。

「昨日は言いそびれちまったんだが……」

広間で二日酔いの頭を押さえ、バグがテーブル上で手を組みながら切り出した。

「実は…リジャンが戦死したんだ。」

「……リジャン…おじさんが…？」

広間で出立の準備をしていた最中のクウが、その手を止める。

「俺の力が及ばなかったせいだ。」

続けるバーグ。

それまで二人のすぐ傍に居たシュナは、思わず一旦席を外した。

「……それで何故か成り行きで……あいつの遺産を受け取ることに
なっちまって……」

クウはゆつくりと振り向き、彼の手に一つの小さな鍵を見た。

「中王銀行の個人金庫を借りた。
これを預かってくれないか。」

「……ダメよ。
私……次の任務で……また家を離れるから……」

「クウ。」

バーグは真剣な表情で言う。

昨晚、皆の前で見せた表情とは変わって、それこそが彼女にとつ
ての普段の彼のイメージそのものだった。

自分に対する時は、いつもそうだ。

男の美学なのかどうなのか知らないが、母と接していた時も、お
よそ愛情の欠片も見せようとしなない。

本当は夫である父の仕事を手伝いたかったろくに、彼は『心配』

という理由だけで母を家事に縛りつけたのだ。

どうせ長く生きられなかったのなら、もっと二人の時間を大切に
して欲しかった。

一年近く経った今でも、そう思えてならない。

「騎士団は……辞められないのか？」

そして語り続ける彼は、今度は自分をも縛りつけようとしている。

「…どうして、お父さんがそんなことを気にするの？」

放った声は、自然と震えていた。

「うまく言えないが…あそこは……どうもおかしい。
俺も奴等と対抗している軍隊に所属しちまったし、出来ることな
ら今のうちに…」

「関係……ないでしょ…。」

またも不意に思い出されるのは、聖騎士の姿。

（進んでしまえば……もはや戻れない。）

さらに、彼の言葉。

「心配……なんだよ。
親として当然じゃねえか……」

それに覆い被さるように、父の声が続いた。

「……いつも……ずるいよ。
……都合が悪くなると、そういうこと言って……」

とても他人が聞き取れないような小さな声で呟いた後、彼女は完全に背を向ける。

「……クウ……」

そして通り過ぎていく騎士団の鎧を脇目に、バーグは頭を垂らした。

「すみません、痴話喧嘩をお見せしてしまって……」

クウは廊下の壁に背をもたれていたシュナに、すれ違いざまに声をかけた。

「うっん。

羨ましいわ。」

「？」

そのまま後をついて来る、そして返されるシュナの言葉に、彼女は目を丸くした。

「昨日だって、バーグさんが話すのは貴女のことばかり。たった一晩で、もう耳にタコが出来るくらい。」

シュナは笑ったまま腕を背中組んだ。

「おせっかい焼く気は無いけれど、世の中の親連中と比べたら、かなりマシな親父さんだと思うよ。」

私なんて、子供の頃に捨てられちゃってるから余計にそう思う。」

前髪を上げながら、軽口で言う。

「分かっています。」

「……ありがとう。」

そして、素直に礼を述べて玄関を出るクウの態度に、今度は逆に彼女の方が固まった。

「もう少し大人になってから、父には謝ろうと思います。」

クウは早足で庭先へ赴き、大木に繋いでいた馬を離して飛び乗る。

大剣を背に締めた凛々しい姿。

轡くわに乗せた足をぴんと張り、伸ばす長身。

（父の優しさは……貴方の仰る通りでした……。

故に、私は再び貴方と言葉を交わしたい……それが、二度と戻れない道だとしても。）

彼女は急いた気持ちを手綱に乗せて、馬に一步を踏み出させた。

戒達が戻って来たのは、彼女が出立した丁度その直後だった。

「なんだ。

あいつ、もう出掛けたのか。」

「うん。

……あの人、カッコイイわよね。

同じ女だけど憧れちゃう。」

彼女の影を目で追う戒に、シュナが返す。

「だったら、向こうについていけよ。
こっちは迷惑してるんだ。」

「まだ言つの、あんたは。」

「当たり前だろ、この……………ん……………?」

再び罵詈雑言の応酬になる寸前。
クウが出た小道の奥に現れる影。

遠目では、彼女の馬が引き返して近付いてくる来るようにも見え
た。

「……………あいつ、忘れ物か?」

呟く戒の言葉をよそに、近付いてくる物体は予想よりも大きい。

それは馬車。

道が無くなる寸前で、馬上の御者は慌てた素振りで車輪を止め、
鞭を片手に降りて駆けて来る。

「……………失礼、中王都市軍の者ですが。
バーグ様の御宅はこちらでしょうか。」

「……………あ、ああ。」

呆氣に取られながらも、戒は呟いた。

「お迎えに上がりました。」

準備さえ宜しければ、すぐに御帰還願いたく存じます。」

「おじさん……見かけによらず、偉い人なんだ。」

肅々とした御者の様子に、シュナも啞然とする。

「何かの間違いじゃねえのか？」

真顔で返す戒。

「フィンドル少佐の手配です。」

休暇中、申し訳ありませんが、至急に駐屯地へお戻りいただきました
とのこと。」

寝たままの姿勢で目を見開き、顔を上げれば。
そこには背の低い垂耳が一人。

幾何学模様の特徴的な柄の服。
その肩口と背からは、細い金属の装飾が伸びている。

瞬間。

再び色を失い、消える視界。

「……ああ……あ……!!」

途端に黒い紋様に締め付けられる、己の目元とこめかみ。
岩盤ごと己の顔面に打ち込まれた黒き楔を思い出し、全身を恐怖で震わせる。

そして視界は再び、漆黒の闇が支配していた。

「何百年……おったんじゃ、おぬし。」

その垂耳は、それまでウエンウエンの頭部を覆っていた
は既に風化している石の粒を
指でこねながら言った。
今

「何……百年……?」

地に両手両足を付きながら呻く彼。
その目元を覆って蠢く、黒い輪。

「神呪が、ようやく定着したようじゃの。」

垂耳は腰帯に差していた扇子を引き抜き、手元で一閃して開く。
そして、笑みを浮かべた口元をそれで隠した。

「……神呪？」

聴覚だけを頼りに聞き返すウエンウエン。

「なに、わしが作った定義じゃ。

だが岩と同化させられていた事例^{ケース}は初めて見たわ。
難儀じゃの。」

返す垂耳は、横の岩に思い切り自分の拳を叩き付ける。

「ッ!？」

砕ける石を顔面中に受けながら、上半身を跳ね上がらせる彼。

「だが、鉄の類じゃなくて良かったのう。」

軽い笑いが、さらに耳の奥に着いた。

「……何を呆けておるか。

わしの名は、アルドじゃ。

アルド＝セイングウェイ。

普段なら、お主から名乗らねばなんのじゃぞ。」

それは、ウエンウエンが久方ぶりに聞いた他人の言葉だった。

「早速じゃが、わしの吉凶を占ってもらえぬか。
その『星詠』で。」

先程、記憶に焼き付いた彼の姿が動いた。
まるで戯れるような言葉。

「ほし……よみ？」

「そうじゃ。」

天命第一位『星詠』。それを与えられた者よ。」

天命第一位。

何故か心が打ち奮わせられる、その語句。

それは確かに、自分が遥か昔に追っていた知識の片鱗だった。

「私が……？」

「何を驚いておる。」

おぬしは出遭ったのではないのか？ 『奴』に。」

「…あ…ああ………！」

記憶を辿り、恐怖に嗚咽するウエンウエン。

差し伸ばされる黒い手の平。

掴まれる目元。

この遺跡で自分の全てを奪われたあの日。

「何処のどなたか……存じませんが……私は単なる神学者。
人を占うことなど……！」

悲観の言葉の後、ウェンウェンの眉間に走る閃光。

脳内を駆け巡るそれは、遙か昔に見た故郷の夜空の星々の如く。
大小の光が旋回して輝いては消える。

その中で浮かぶ、様々な人の形をした幻影。
それらが口々に言葉を交わしているのが見えた。

「……！？」

「どうれ……見えたか？」

笑みを浮かべるアルド。

「……はい……」

「どうじゃ？」

わしは、この先、どうなる。」

「……いや、しかし……」

「どうした。遠慮せず申せ。」

口をつぐむウェンウェンに笑いながら問いかける彼。

「……『大悪名』……」

……いつか……大陸中の人間が……貴方のことを……そのように呼ぶ時が……」

「むはあっ!!」

そんな呟きに、アルドは思わず笑いをぶちまけた。

「わしは、これから先、そのように呼ばれると申すか!」

「……確かに……そのように聞こえました……」

彼の満足げな空気に不自然さを覚えつつ。

そして自分の感覚に疑いを持ちながら、ウェンウェンは頷く。

「今、わしは己を高められる地を探している途中なのじゃが……。
人の行く末など、わからぬものよのう。」

扇子をぴしゃりと閉め、それをウェンウェンに向けるアルド。

「貴様。」

これから先は、地を這ってでも生きるが良い。」

「……しかし！」

この目では……！！」

「もうわかっておろう。」

代わりに、貴様には普通の目に見えぬものが見えておることが。」

「……………」

「その星を追い、道を示すだけに生きよ。
それを探求の代わりとするが良い。」

知識を満たすことが生きがいの全てだった。

「おぬしにはそれが出来よう。」

星詠は長い年月をかけ、既に認めておる。
悠久の時間を重ねても、一切朽ちぬ身体がその証よ。」

だが、それを奪われた虚無感は、彼の言葉で満ちていく。

「では、縁があったら、また逢おうぞ。」

「お待ち下さい…。」

貴方は…」

「なに、貴様と同じような者じゃ。」

短く切って捨てた、その言葉。

地面を両手でまさぐるウエンウエン。

自分があの時抱えていた荷物は、長年の間ずっと、そのままに転がっていた。

触れるだけで崩れ落ちてしまいそうに古い、一枚の羊皮紙。

「これは、遙か昔、私が学者だった頃に研究した……古代文書の一枚だ。」

「……………?」

それをウエンウエンから受け取ったままの姿勢で、パンリが分からない、といった顔をする。

「……………これが…？」

紙面には、自分が全く知らない文字が記されていた。

「一番初めの語句は、『^{フエル}源』と書いてある。」

「……………！！」

まさか…これは…神語…なのですか？」

声を震わせるパンリ。

「そんな……………！！」

改めて凝視する、羅列された単語。
それは、源法術の鍵となる言葉。

大陸において学術研究に携わる者ならば、おそらくは誰もが喉から手が出るほど欲しがる文献であろう。

「君は、神に逢いたいのだろうか？」

ならば、そこに記された叡^{えいち}智を調べてみるといい。
無論、人々が千年以上をかけても未開の部分だ。
その道は困難だとは思うが。」

「い、いただけません！
こんな貴重な……………！！」

だが、そういう断り方をするパンリに、ウエンウエンは黙って笑う。

「確かに、私はそれを『知り得る』ために膨大な時を使った。そして莫大な代償を払うこととなった。」

目元の布を直す彼。

「だから、今となつては……それは私にとつてもはや無用のものだ。それに……広い大陸で、受け取るのに相応しい人間に、次にいつ会えるか分からない。」

「しかし!」

羊皮紙を返そうと差し出すパンリ。
彼は微笑んで、その動きを制する。

「さだめを変えるには、さだめの『外』にいる者の協力が不可欠なのだ。」

「……さだめ?」

パンリは息を飲んだ。

「彼等はとても強いが、弱くもある。」

これから訪れる過酷な運命に立ち向かうためには、君のような『支え』が必要となるはずだ。」

「そんな……私には何ありません……。
出来ることなんて……何も無いんです。」

「 無いのなら、これから作ればいい。
この世に、遅いことなどありはしない。
君のその胸の高鳴りこそが、始まりの合図だ。」

ウエンウエンは、最後に笑って言った。

「いつも、私のために本を読んでくれてありがとう。
君の声は、非常に優しくかった。」

「……もう逢えないのですか。」

いつも以上の真剣な眼差しで、少年は言った。

「ウエンウエンはいつでも独り旅だ。
身の底の悲しみは、どうか糧に」

飄々（ひょうひょう）として、杖を振り上げて。

彼との別れは、やはり突然だった。

自分の顎を摘みながら、空を見上げるバーク。
かなりの高度で一機の戦闘騎が飛んでいる。

それに続き、飛翔艦も数隻。

「北へ向かっているな……。
なるほど、軍隊の方で何か急な動きがあったか……。」

ざわめく周囲の木々と草花。

風が世羅の髪をなびかせる。

それを押さえる彼女と、戒は不意に目を合わせた。

懐かしい、旅の予感が身を支配する。

「……おう、ようやく来なすったか。」

そこで丘を降りて来るパンリの姿を見止めて、バークが声を掛けた。

「……何か……あったんですか？」

クウ以外の全員が集まっており。
さらに傍には馬車の姿。

そんな異変に、彼が訊いた。

「駐屯地に急いで戻れとお達しだ。
軍人つてのも辛いねえ。」

冗談交じりに答えるバーク。

「…と、いうわけだな。」

ここまで見送りご苦労だったぜ、パンリ。」

続いて、その脇の戒が素っ気無い言葉を口にした。

「…あの……私も連れて行ってもらえませんか。」

それに対し、パンリは遠慮がちに視線を下ろしたまま言葉を返す。

「いや……だから、見送りなら別にここでいいんだぜ。
わざわざ、こっちに来ることもねえよ。」

だが、見当違いの言葉をかけ続ける彼。

「……あ、あの……そうではなくて……」

「まあ、いいじゃねえか。
とりあえず、来たらいい。」

バーグは大きく笑い、ごつい片手で彼の小さな背中を押した。

「昨日言ったとおり、私も行くわよ!」

手を上げて元気良く声を上げるシュナ。

「……よし、じゃあ出発するか。」

パンリと同様、彼女の背も軽く押すバーグ。
そして微笑む世羅、その後ろのザナナ、正面の戒、それぞれに向
き直って笑う彼。

「てなわけで、ちよっくら予定より大人数だけどいいかい?」

待ちぼうけを食らっていた御者に、後ろから声をかける。

相手は苦笑しながら、彼等全員を指折り数えたのだった。

全面をステンドグラスで造られたドーム状の屋根。

蜥蜴^{とかげ}がへばりつくような体勢で、全身を黒スーツで固めた青年はそこから施設の内部を覗く。

とある街の片隅にある聖堂。

周辺の治安の悪化から、そこは既に教会の管理から離れ、マフィアの忌まわしき奴隷市場として使われていた。

「……とても間に合わないわ、ユーイ。

至急の帰還命令が出てるのよ。

一刻も早く首都に戻らないと……また部長さんの雷が落ちるわ。きつと。」

「……………」。

傍らの少女の声に、青年はおもむろに立ち上がり、手にした刀の鞘の先をコツ、とガラスの表面に当てる。

「……………まさか…行くの?」

「俺達の時間と比べて、今、貴重なのはどっちだ?」

鋭い眼光で、建物内の一端を示す彼。
幾つもの狭い檻に詰められた、全裸の子供達がそこで蠢いている
のが分かる。

「…取引直前の相手は、ピリピリしてるわ。」

それに…集まった客を根こそぎ始末するのが本来の任務なのよ…」

「ならば、『強権』を使って俺を止めるか？」

「まさか。」

初めからその気は無いとばかりに、少女が軽く笑う。

それを皮切りに、青年は素早く刀を鞘から抜いて、直立のまま僅かに空を跳んだ。

一直線。

熱帯林の豪雨のように落下するガラスの破片。

陽光の乱反射の中、瞬時に銃を懷から抜く護衛の男達。

遙か頭上から落ちてきた青年は、落下の衝撃に膝を曲げ、その足元は逆円形状に床が潰れていた。

守るべき主人は既に、その下で潰されて、肉塊と化している。
それでも、青年に反射的に向けられる男達の銃口。

即座。

感じる風圧と共に、彼等の拳が刎ねられて飛んだ。

さらに一回転した刃で、皆のそれぞれの上半身が飛んだ。

それらの鮮血を全身に浴びて、檻の中で怯える無数の目。

血煙の隙間から、それを眺める青年の眼は爬虫類のように瞳孔を縦に尖らせている。

「……それじゃ、あとは……処理班に任せましょうか。」

やがて壊れた天井から、フリルのついた傘でゆっくりと降りて来る少女。

「……………」

その言葉を合図に、檻の中で怯えたままの子供達から目を離す青年。

右手にした刀身の血潮を一度振ってから鞘に収め、背を向けて歩きます。

「……………時間はとうだ。」

普段の眠たい目に戻って、問う。

「余るくらい。」

お互いに、ね。」

少女は笑みを浮かべて返した。

第三章

第二話 『大悪名に触れる』

了

3 - 3 「黒色絵具」(上)

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 3

「Wivern in central kingdom ci
ty」

The third story
「Black distemper」

その日の囚人護送列車内は、蒸し窯のようであった。

突然の急停車の後、最後尾に嚴重に閉められた扉が解放されると、夜の冷気が吸い込まれた。

囚人達は身を縮ませながら、闖入する数名の気配と、周囲の警官隊の短い呻き声を聞いた。

「……貴様……名は何という？」

事態を理解していない彼等が一樣に怯える中、一人だけ余裕をもつて胡坐あぐらをかいている男に問う声。

「運び屋のテツジといやあ、少しは名が通っているんだがな。」

顎を上げて答える彼。

頭に被せられた麻布の袋越しに、蠢く影がうつすらと見えた。

「……ほう？」

興味があるような素振りで、影と声が近付く。

「だがな……今はヘマをやらかして、このザマよ。」

その威圧感に対して、彼は笑った。

「しかし、あんたも大胆だねえ。」

この護送列車に、捕まった仲間でもいたのかい？」

そして、おびただしい血の匂いを鼻腔に感じつつ問い返す。

「いや……仕事を依頼するべき人間を探しに来たのだ。」

「随分、面白いこと言うじゃねえか。」

淡々と述べる眼前の声に、思わず笑いを洩らすテツジ。

「犯罪者をスカウトするために囚人護送の警官隊を全滅させたって？
イカれていやがる。」

「何と思われようと、それで結構だ。
運び屋。」

「へ……。」

テツジは後ろ手かけられた枷^{かせ}を鳴らした。

「……貴様にさばいて貰いたい『品物』がある。
この先のゴルゴート市で列車を止めさせる。
そこにある源炉の施設を訪ねるがいい。」

「源炉だつて……？」

「そいつは専門外だが……」

「品は、それではない。
……行けばわかる。」

簡潔な言葉の終わりと共に、軽くなる全身。
両手足の枷が全て外れていた。

「あんた……何者だい？」

残された漆黒の闇と、警官隊が沈む血溜まりの中で、テツジはただ一人で呟いていた。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第三章

中王都市の飛竜

・

第三話 『黒色絵具』

「あんたが、お祈りかよ？」

チチャードは岩肌に背をもたれ、両腕を組んだまま言った。

案内された山岳内の基地施設の中で、小さく拓かれた区画。

本来の基地でいうところの、室内なのだろう。

黒騎士はそこで抜き身の黒剣と共に、片膝を折り曲げて壁際に佇^{たたず}んでいた。

「……半日の遅刻だ。」

そして、おもむろに立ち上がる彼。

「あのなあ、これでも急いだ方なんだぜ？」

それにマクスにはゆっくりさせて、俺だけ『早く来い』だなんて不公平だ。

大体、一番南から一番北まで来いって注文自体、馬鹿げてる話だ
つての。」

「……。」

黒騎士は愚痴をこぼす彼に黙ったまま歩み寄り、剣を腰に納めて
から一枚の紙を手渡した。

「…何だよ、これ。」

「この山岳の麓下に位置する街の地図だ。
そこにある源炉精製所に行ってもらいたい。」

「早速、任務かよ。」

あからさまに不満を口にする彼。

「源炉の精製は、その工場に全てを委託しているのだが、最近に
なつてその定期報告が途絶えた。」

貴様には視察と確認を…」

「どうして、黒華の俺なんだ？」

知られちゃまずい事でもあるのか？」

「何らかの理由で、源炉の精製が不能になった恐れがあるからだ。
そして、各地でも少し前から同じ現象が起こっている。」

「なるほどな。」

騎士団が秘密裏に、ルベランセみたいな小物を襲った理由が……
解ったような気がするぜ。」

真面目な顔を作り、対面するヂチャード。

「一体いつからだ。」

そして何故、公表しない？

それは『中王都市にとって重大な事態』じゃないのか？」

「だからこそ、それをより正確にするための調査だ。」

黒騎士が短く返答する。

ヂチャードは、上手くかわすものと臍^{ほそ}を噛んだ。

「大体、分かった。」

だけども……知ってて俺に頼むのか？」

「……何のことだ。」

苦虫を噛み潰したような表情で地図をひらつかせる彼に対し、黒
騎士が聞き返す。

「……このゴルゴート4番街が俺の出身だって。」

「……偶然だろう。」

「故郷でこういうシケた仕事ってのは、かなり気分が乗らねえものだぜ。」

肩をすくめ、やがて何かに気付いたように黒騎士の顔へと視線を流す。

「おまえ、出身はどこだよ？」

「……この騎士団で私にそれを訊ねてきたのは、貴様が初めてだよ。デチャード。」

鼻で笑いながら、黒い兜は呻いた。

「……そうかい。」

あんだ、不気味だからな。

誰も友達になりたくないんだろう？」

「……フツ。」

ならばついてこい。

不服ならば、別の仕事も用意してある。」

「……やれやれ。」

それは有難いが、ご用意の良いことで……。」

彼は呆れたように呟き、前を行く黒騎士の後に続いた。

「 軽率なんだよ、フィンドルは。」

拳銃を真正面に構えたまま、呟くリード。

「 ……分かってるわ。」

フィンドルは、消沈した面持ちで答えた。

朝、駐屯地の訓練場。

数発の銃声が鳴り響いた後の静寂。

「 ……いいや。」

君は事の重大さを、全然わかってないな。」

「 だから、何回も謝っているでしょ? 」

語尾を強め、フィンドルは顔を向けた。

「 ……保安通士の俺に一言の相談も無く、兵士達に休暇を取らせるなんて非常識すぎる。」

対するリードは、呆れたようにして返す。

「……それは……ルベランセの修繕がこんなに早く終わるなんて想定外だったから……」

「違う。」

言葉を短く切る彼。

（……俺が相談すらされない程度の男だって、その認識が重大なんだよ。）

そして顔を赤らめ、唇を強く噛んで言葉を飲み込んだ。

「バーグは現時点におけるルベランセの唯一の正当な操縦士だぞ。戦闘騎は、実際に乗る人間が調整作業に加わらなくっちゃ何も始まらないだろ。」

「だから、すぐに彼の家に馬を走らせて対応したじゃない。」

「対応すれば、それで済む問題か？
軍規を正してくれないと、また……」

「スパイに侵入される。
そう言いたいよね。」

フィンドルは子供のように頬を膨らませて顔を背けた。

「……………」

そんな様子を見て、リードは口を滑らせたことに後悔する。

「まあ、ガードが甘いのは女性だけでいいってことだね。」

突然、中央を割って響く男の声に、フィンドルとリードは目を剥いた。

いつの間にか優男が二人の間で、的へと銃を向けて立っていたのだ。

「……ロディ……ッサさん！」

……どうして、ここに……」

「つれないね。」

フィンドルちゃんてば、さっき約束したのに、いつまで経っても格納庫に現れてくれないんだもの。」

怪しげな微笑を浮かべ、返す彼。

リードは自然と耳を傾ける。

「あ……」

何かを思い出したように、口元を押さえる彼女。

「いやいや、気にしないで。」

男にとっては、じらされる時間も楽しいひと時さ。
それと……僕の名前は、ロディで結構。」

彼は涼しい顔で付け加えた。

「約束って……なんですか？」

リードは口を尖らせて訊く。

彼のことは、フィンデルから僅かに説明を聞いていた。
だが、これも自分の知らない所で決められていたこともあり、
どうも気に入らない。

「上司に頼まれて戦闘騎の買い入れをしててね。」

ルベランセに搬入したまでではいいけれど、最後に責任者のサイン
を貰わないと終われない。」

「……わかりました。
すぐに行きます。」

先のリードの愚痴もあり、疲れきった表情でフィンデルは練習用
の拳銃を台に置いた。

「そんなに慌てなくてもいいさ。
もっと他愛の無い話を楽しもうよ。」

彼は銃を構えたまま的に照準を合わせ、動きを静止する。

「たとえば、こんな昔話とか。

…かつて銃によって、ガザンの一大国家を建造したウエズター公は死ぬ間際、こう言ったそうだ。

『銃は神に見捨てられた…』ってね。」

「…何ですか、それ。」

二人は同時に訊いた。

「二人とも既にご存知だろうけど、銃弾ってのは微妙な空気の流れで軌道が変わってしまう。

至近距離じゃないと、そうそう標的に当たるものじゃない。だが昔はそんなことは無く、命中率も殺傷力も遥かに上だったらしいよ。」

ロディはわずかに肩をずらして、姿勢を修正する。

「急に自然の摂理が変わる……そんなことがあるのですか？」

「さあねえ。

なにぶん昔のことだからね、僕にはなんとも。

…だけど、とにかく、過去に銃の時代は終わった。

しかし飛翔艦と戦闘騎の登場によって、また世界のバランスが大きく変わり出している。」

立て付けの悪い壁の隙間から、軍隊の敷地を見回す。

「自然と理然とは、常に回り続けているみたいじゃないか？
何か……無限の輪のように。」

そして含みのある表情で、彼は続けた。

「その英雄は、後世へとそのことを伝えようとしていたのかもしれないね。」

「ご高説、痛みいります。」

その話が一段落したところで、リードがわざとらしく肩をすくめた。

「どちらにせよ、現状のルベランセは深刻な人手不足だ。
フィンデルもこれからは副長じゃなくて艦長なんだから、一層に
気を引き締めてもらわないとな。」

「……………」

リードの言葉にフィンデルは視線を落とした。

「さつきから二人とも表情が暗いけど、何かあったのかい？」

それを見かね、横目で訊ねるロディ。

「スパイに二度も侵入されているんですよ。」

「……ふうん。」

でもそれは、保安を司る者の責任じゃないのかな？」

「……！」

リードはロディの何気ない一言に驚く。

「何が何でも危険を察知して、阻止する。」

それが保安責任者の仕事さ。

たとえば、上司がどうであれ、そこは譲っちゃいけないな。」

ロディは軽い口調のまま続けた。

リードは注視する。

「……ず、随分と知ったようなことを言うじゃないですか。」

「それでも、王室警護の任に当たっていたことがあってね。」

「……一体何者なんだよ、フィンデル。」

わざと大声で訊くリード。

「さあ……良くは知らないわ。」

そう呟くフィンドルに対し、ロディは人懐っこい笑顔を返す。

（　だがこのとおり、こいつは女グセが異常に悪くてな…）

彼女も複雑な表情で視線を返すが、そこに重なるギルチの言葉。

（こいつは、ガザンの第三王女をつつかり妊娠させた拳句、駆け落ち。
ち。

そのくせ、今は独り身だ。）

それらと共に、嫌悪感が全身に戻り始める。

不意の6連射。

全弾を発するロディ。

両脇の二人は思わず、耳を押さえた。

「……いい銃だ。

高価な火薬も弾も沢山ある。

中王都市は物が豊かで、士官達は幸せだよ。」

銃口から昇る硝煙を吹いて、その銃身を台に置いて向き直る彼。

「では、お先に。

フィンドルちゃんは、お借りするよ。」

そして間もなく彼女の肩を抱いて、強引に連れて行く。

「なんなんだよ、あのキザな男は……」

独りボヤきながら、先の自分の射撃の確認のために的に近付くり
ード。

ひどく散乱した銃痕の穴。

己の射撃の腕に、肩を落とす。

そこでふと目にした、脇のロディの的。

銃痕は中心を穿っているものの、わずかに一つ。

「あいつも言う割には……大したことないな……」。

こみ上げる笑いを抑えながら、さらに歩み寄った彼は、次の瞬間
に愕然とした。

「……………うそだろ……!？」

的を貫通したロディの銃弾は、その後ろの壁の同じ箇所に、六個
とも埋まっていたのである。

岩畳に染みた、血の臭い。

そのドス黒い染みに両膝を折って鎮座している人影があった。

「おい……騎士団において、拷問は御法度のはずだぜ。
たとえどんな相手でもな……。」

それを眼前に口元を押さえながら、呟くデチャード。

いくら裏の仕事をこなしているとはいえ、これほどの惨状には滅多にお目にかかれない。

血管が収縮し、血の気が引いていくのが自分でも良く判る。

視界の端に、切断された左手首と両足首をネズミがかじっているのが見えた。

一方、座らされている男に目を向けると、その患部は縫合すらされず傷が膿み始めている。

さらに荒糸で縫合された目元。

この残虐性は中王都市のものではないだろう。

「騎士団の流儀など知らぬ者がやったことだ。」

不気味なほど、平坦な口調で黒騎士は続けた。

「…赤華を脱走したレイキ」モンスロンは この者を介して、
タンダニアと通じていた。」

「そうかい。」

それで、俺にどうしろというんだ？」

この凄惨な状況から、ついに目を背け、早口で訊く彼。
そして少しの後悔の念と共に、言葉を吐き出す。

「この者の姿に成りすませ。」

貴様とは丁度、背格好も同じほどだ。」

「おいおい……待てよ。」

わずかに想定していた悪い冗談が現実^に耳に聞こえ、思わず半笑
いになりながらヂチャードは答えた。

「おまえ……なんか、俺の能力を勘違いしてるんじゃないか？」

確かに俺は自分の顔つきを変化させることは出来るが、『特定の
誰か』に『化ける』ことなんて出来ねえ。

^{エア・ファンタジスタ}
いくら天命人^{エア・ファンタジスタ}って言ってもな、俺の天命の輪は最下位の第六位な
んだぜ？」

おどけた素振りで、彼は続ける。

「これは潜入には便利な能力だが、本格的に誰かに成りすますなんて不可能……」

「勘違いをしているのは、貴様の方だ。」

黒騎士は笑い返した。

「……なんだと？」

「自分を過小評価するのは、やめた方がいい。

素質に関して言えば……こと中王都市のように、既に構築された社会を制するには、マクス＝オルゼリアなどの能力よりも、貴様の方が遥かに向いている。

貴様のようなものが道を創っていけるのだ。」

「はあ？」

大口を開けたまま、自分に手をかざしている黒騎士に対峙するチャード。

（……おれが……マクスよりも……上……だと？

急になにを……何を言っているんだ、こいつは？）

そして視線を泳がせながら、そこに並べられた言葉の端々に思わず表情を歪める。

「勘違いは、さらにもう一つある。

それは貴様自身が己の能力に、限界を勝手に定めていることだ。
ひたむきに『それ』を信じることもせず。」

「……………」

「確かに高位の天命の輪は、強力だと言えよう。

だが『制御する』という面においては、低位のものほどいい。」

「おまえは……何故、そんなに天命の輪に詳しい？」

デチャードは、胸に湧いた率直な疑問をはばからずに口にする。

「知識など、学べば手に入る。」

「…………へっ。」

とにかく、勘弁だな。」

真面目に答える気配の無い彼に、デチャードは肩の力を抜いてすくめた。

「そうか。

ならば、まだ楽には出来んな。」

眼下の、無残な男の姿を一瞥する黒騎士。

だらしなく座りこんだ彼の封じられた口から、唾液と共に声ならぬ声が呻き洩れた。

「……今、この者の生命と右手は最期に一筆したためさせるためだけに残してある。」

それさえ終えられれば、一思いに葬ってやれるというのにな。」

「そんな風に同情を買おうたって無駄だぜ。」

俺はお人よしじゃない。

見ず知らずの人間がどうなろうと……知ったこっちゃねえのさ。」

鉄格子の扉を片手で開くヂチャード。

「こっちは止めた。」

自分勝手に悪いが、さっき話していた任務へ行つて来るとするぜ。」

そして、彼はおどけながら言った。

「お前さんはせいぜい、その優秀な頭脳で別の方法でも考えてろ。やる気の無い『ヂチャード』エニーさん」の力を借りなくても済む、もつといい考えを、な。」

「ふ……。」

一度だけ肩を震わせる黒い鎧。

（お前は必ず、ここへ戻つて来る。）

そのさだめが……そうさせるのだ。

『賢く宵闇を飛び回る』 『千の顔を持つ梟』よ。（

総勢7名もの人間を乗せて、夜通し地を駆けての帰還。

いくら訓練を積んでいるとはいえ、無理が祟ったに違いない。
その馬車馬は汗だくになって足元をふらつかせながら、ふらふらと歩いて帰っていった。

「やれやれ……いいかげん腰が痛いな……」

それを見送りながら、バークが腰を叩きながら伸びをする。

数日ぶりの中王都市軍の駐屯地。

一同は彼に続き、整備された道を一直線に歩く。

「これが……皆さんの乗る飛翔艦……」

パンリは戒と世羅の視線の先を追い、そこに駐留している一隻の飛翔艦を見上げながら呟いた。

「大きいけど、思っていたよりも地味ねえ……」

シュナが後ろから声をかける。

「……やばいな。」

ここにあれだけ駐留していた飛翔艦が半分もねえ……何よりも……」

俄然、早足になるバーク。

「ルベランセの修繕が終わってやがる。
よほど急がせたに違いねえぞ。」

そして彼は独り言のように呟いた。

バークを先頭に、慣れた様子で大きく開け放たれた格納庫に踏み込む戒と世羅とザナナ。

シュナは、たちこめる冷氣と油の匂いに、少し戸惑いながらそれ続いた。

白い猫が不気味に積荷の上から、様子を覗いている。
最後尾のパンリは、それに少し見とれながら歩む。

そこでは、懐かしい鉄の作業音が響いていた。

「おいつす、ミーサ。」

「……………」

整備中の彼女は、バークの呼びかけに振り向いたが、目深に帽子

をかぶったまま冷淡な視線。

さらにその後ろの戒や他の人間にも気付いた様子を見せるものの、次の瞬間には興味が無さそうな様子で無言のまま作業へと戻っていく。

「……元々愛想の無い奴だったけど、しばらく見ねえうちに磨きがかかってるな。」

「はは、忙しい中を黙って休暇に出ちゃったからな。」

戒の言葉を、苦笑混じりに返すバーク。

「ちゃんと仲直りしておけよ。」

あれでも、俺様達の命を預かってるんだからな。」

「ああ……腹いせに戦闘騎のネジを外されでもしたら、たまんねえや……」

「それだけは絶対にしないわよ……!」

そんな彼等の陰口に対し、きつい怒声を放つ彼女。二人は思わず、背を縮めた。

「……地獄耳め……大声出しやがって……ん?」

戒が呟きながら進み、様相が随分と変わった倉庫内を見回す。

ルベランセに納められている戦闘騎の数は、格段に増えていた。
勿論バーグの機体もある。

だが、肝心の自分の機体が無い。

「……おい……俺様の戦闘騎が見当たらねえが……」

「ああ、あれ……軍の方で徴収されたわよ。
性能が良いからって、実戦部隊に配備されるとか……」

「何だと!？」

何気なく答えるミーサに、血相を変えて詰め寄る戒。

「どこだ？」

「どこのどいつの所だ？」

「もついないんじゃないのか？
駐屯地の部隊も結構、出撃したみたいだしな。」

バーグは、興奮する彼をなだめるように呟いた。

「でも、その部隊……ルベランセの守備につくって言ってたから、
まだ発着場にいるとは思っけど。」

「……取り返してくるぞ。」

「え!？」

そんな無茶なこと…」

ミーサの静止の言葉も途中に、戒が搬入口へと振り向いた途端、搬入口から入ってくる女性と視線が合った。

「戒くん？」

放たれる、フィンドルの驚きの高声。

「…どうしてここに!？」

「……………」

心の準備が出来ていなかったこと。

そして足早に歩み寄ってくる彼女の予想以上の強い視線に、思わず後退する戒。

そんな女性軍人の迫力に、パンリとシュナは咄嗟に彼の背に隠れた。

「……何でこんな時に『女の子』を新しく二人も連れて来るの!!」

「……………」

強く床を踏みしめたまま、そんな二人に厳しい目を向けているフ

インデルに、戒は拍子抜けした声を洩らした。

「あの……私は女の子じゃ……」

「おまえ、俺様が戻ってきたことに怒っているわけじゃないのか？」

パンリが訂正する前に、戒は続けた。

「誰も怒ってません！」

理由は分からないけど、こっちは人員不足で願っても無いんだから……」

目を吊り上げたまま、フィンデルは感謝とも叱責ともつかない言葉を叫ぶ。

(……??)

戒はわけも判らず、口を開けたり閉めたりしながら呆けていた。

「とにかく、二人をどこかに隠して頂戴……！」

そんな中、フィンデルがシュナとパンリの手を素早く取る。

「良かったね、戒。」

笑顔で戒を見上げる世羅。

だがすかさず、フィンドルは続けて彼女の手も取るのであった。

「ほら！

世羅ちゃんも…こっちに隠れ…」

「いやいやいやいやあ……素敵だなあ……」

だが、そこで背後から響くロデイの声。

フィンドルは背筋の悪寒に身を硬直させ、事が既に遅いことに気付く。

「この軍隊、女性隊員が物足りなかった気がしたけど……ねえ？
まだ、とびきりが、こんなにも残ってるじゃないか。」

何の臆面もなく、緩みきった台詞を呟きながら近付いて来る優男
を目の前に、戒が顔をしかめた。

そして、さつきからのフィンドルの態度を理解する。

「よろしく、僕はロディツサ＝フリーデン。

ロデイと呼んでくれ。」

持っていた大量の書類を放り投げ、早足で接近し、長年の友人を
待ちわびたように両手を伸ばす彼。

呼びかけられた彼女達は、反射的に手を伸ばして応える。

「素手で触ると妊娠するわよ。」

だが、その直後にフィンドルが小さく呟いた。

「っ！ー！！」

彼へと伸ばした手を咄嗟に上へかわす、蒼ざめたシュナ。

一方の世羅は、両脇を戒に抱えられて身体ごと離されている。

「やだなあ、冗談だよ。」

…ねえ、フィンドルちゃん？

………ね？

「………どうでしょうか。」

ロディが苦笑しながら同意を求めた彼女は素っ気無く答え、全く目を合わせずに返した。

「…あ、あの………ところで、私は…男なんですけど。」

彼の直視してくる熱い視線に耐え切れず、パンリが声を洩らす。

「ああ………そうなんだ…これは失礼。」

途端に残念そうに肩をすくめるロディ。

そして素早く彼を横切り、改めてシュナに寄る。

「ところで 君は紛れも無く女の子だよね？」

「あの……初対面でかなり失礼な目線なんですけど。」

思わず一步退いた彼女が、自分のバストに突き刺さる視線を気にしながら半眼で返した。

「いやいや、これほど立派なモノは凝視しないと逆に失礼にあたる。この魅力的なる肉体を創造せしめたる神様に感謝だね。」

だが、顎を擦りながら真顔のまま返すロディ。

さらに手を合わせて拝み始める彼の滑稽さに、シュナは呆れて物も言えない。

「そしてこちらは……」

続いて彼は、世羅の身長まで屈んでその容姿を隅々まで見渡して微笑みながら言った。

「……いわばダイヤの原石。」

初めまして、美しいお嬢さん。」

「？」

世羅は不思議そうな顔で、そして大きな瞳で彼を見詰め返す。

「世羅がダイヤで、私がおっぱいなのか？
納得いかないんだけど。」

「まあまあ、いいじゃないの。
どちらも素敵なことには変わらないんだし。」

シュナに突っこまれたことに、嬉しそうな苦笑を浮かべて弁明するロディ。

(…なるほどねえ、副長殿がご機嫌ナメなのは、こいつのせいか……。)

バーグは渋い顔で腕を組みながら、彼の軽薄加減を見詰めていた。

「……アホか。
行くぞ、世羅。」

奪われた俺様の戦闘騎を取り返すのを手伝え。」

戒は、面白く無さそうに世羅の手を強く引いて行く。

「……………」

離れていく彼女の背と黒い手袋、揺れるリボン。
それを、ロディは細めた目で追った。

そんな自分の様子を注視しているバーグと、ふと視線が交わされる。

「よろしく。」

君がルベランセの専属の操縦士かい？」

「……ああ、バーグだ。」

手を軽く上げるロディに、バーグは同様に返した。

「ん……不笑人……かな。
君は。」

その背後に立つザナナとも目を合わせる彼。

「……………」

豹頭は厳しい目つきで、上から彼を凝視していた。

「……これは面白いメンバーだね、フィンデルちゃん。」

軍隊の中では気張らないといけなくなっただけで心配してただけで、これなら僕も浮いてない。

いやあ……安心したよ。」

「……そうですか。」

肩を落とすフィンデル。

そこへ、すかさずシュナが歩み寄った。

「すみません。」

早速ですが、お願いがあるんですけど。」

「……はい、何かしら？」

「この艦長さんに会わせていただだけませんか。」

彼女は一度床に置いた自分の荷物を抱え、情熱のまなざしを送っていた。

2

バーグの危惧どおり、駐屯地は全体が閑散としていた。

故に、戦闘騎や荷が集積している地点は遠目でも非常に目立つ。

戒はそれらに向かって一直線に突き進んだ。

「……世羅。」

「ん？」

途中、不意に声を掛けた彼に、大股で歩調を合わせている彼女が見上げる。

「お前はよ……今の自分のことをどう思ってる？」

「ボクのこと？」

質問に不思議がつて、世羅は聞き返した。
対する戒は、仏頂面のまま小さく頷く。

「……とっても幸せ。」

たくさん仲間ができて、いつも誰かがそばに居てくれるんだもん。
お師匠は、外の世界は怖い所だって言ってたけど……全然そうじゃない。」

「……外の世界？」

お前の師匠は何処に住んでんだ？」

冗談交じりに訊く彼。

頭の中では、あの夢のような光景を思い返している。

「えっと……」

世羅は自分の下唇に指を当てながら、珍しく難しい表情をした。

「すごく高い山に囲まれているところ。」

そして白い歯を見せて、大きく両手を開いて笑う。

「……本当はね、普通の人が行くには大変な場所にあるんだけど……ある日、何故かボクが流れ着いてたんだって。全然おぼえてないけどね。」

「……随分、無責任じゃねえのか。そんなお前を一人で旅させるなんて。」

「うっん。」

お師匠は最後まで反対してたから。」

世羅の言葉に、戒は口をつぐんだ。

「そこで修行してたみんなも、心配してくれたっけ……」

「どうして、そこまでして飛翔艦乗りになりたいんだよ。」

「……ボクが憶えていた、たった一つのことだから。」

一言。

あまりに単純で無垢な心からの一言に、戒は何とも言えない気分になった。

「もしも…何かを他にも思い出したら、真っ先に俺様に教えるよな。」

「戒に？」

嬉しそうに見上げる彼女。

（ウエンウエンの奴は視力を……世羅は記憶を失ってる。

あいつは……何を……）

戒はその笑顔に重ねて、レティーンの神学校のことを再び考えていた。

（…まさか、このまま二度と目覚めることが無いっていつんじゃない？
ねえよな……）

「…今日はどうしたの、戒？」

「ああ？」

世羅の言葉で、現実へ引き戻され、大口を開けて返す戒。

彼女は身体を左右に揺らしながら、さらに笑みを強めていた。

「何か、いつもと違うよ……」

「違わねえよ。」

俺様は俺様だ。」

あえて否定するのも妙だなと思いつつ、戒は口走る。

傍らで伸びをして、面前で整備中の機体にもたれかかる世羅。

その髪と溶け込むような錯覚を覚える、濃い紫のメタリックカラ
ーの戦闘騎だった。

「……今日はあつたかいね。」

そうやって目を閉じる彼女の肌は、そこから反射した陽の光を浴
びて輝いている。

「……」

だがそこで、鈍い音と共に世羅の身体が飛んだ。

「俺の『クモサ・クアターナ』に触るな。」

彼女の肩を突き飛ばした少年が、腕を伸ばしたまま上から睨みつ
けている。

着用したツナギにかなりの余裕がある、線の細い身体。
その目元は落ち窪み、異様な雰囲気放っていた。

「……あ、ごめんごめん。」

地に屍餅を付いたまま彼を見上げ、半笑いで返す世羅。

「今度からは、気をつける。
クソガキめ。」

そして彼は悪態をつき、手にした布巾で彼女が背中をもたれていた部分を神経質に拭き取り始める。

途端、横に激しく揺れる戦闘騎。

「
？」

彼が視線を泳がせた先。

両手を修道着のポケットに突っ込んだまま片足を上げ、土が付いたブーツを戦闘騎の腹に
めりこませている戒の姿。

「お……おまえ!!」

一気に逆上した少年が詰め寄る。

戒はそこを狙って、彼の襟元を絡めとってくびり上げた。

「あんまりナメた真似すると……殺すぞ。」

こめかみを痙攣させながら、尋常ではない視線を降ろす戒。

「……ふざけんな。」

死ぬのは、てめえだ!」

だがその少年は、まるで臆さずに腰から拳銃を抜くと、戒の脇腹に銃口を押し付ける。

「……撃ってみろ。」

だが俺様が死ぬ前に、てめえの首をへし折る。

絶対、へし折るからよ。」

「戒!

ボクは大丈夫だよお!!」

世羅は何度も小さく飛び跳ねながら、それを必死で止めようとした。

だが、両者は膠着したまま動かない。

「……あゝ。」

すんませうん、こいつ、礼儀知らずで。

また、何かやりましたかあ？」

そこへ、のっそりと近付いて来る、太った男。
ポップコーンの入った大きな容器を手にし、その体に似合わず、
口ぶりは軽い。

「向こうへ行っている、マルリツパ。
俺の問題だ。」

その声に、初めて気を逸らす少年。

「コルツう、喧嘩は良くないよ。
……ねえ？」

太った男は世羅に近付き、その頭上に手の平を乗せて同意を求める。

世羅は無言のまま、何度も大きく頷いた。

「……命拾いしたな。」
「それは、てめえだろ。」

やる気を削がれ、同時に離れて唾を吐く二人。

「新しい機体の調整、完了したのか。」

その中でコルツのみは向き直り、問いただした。

「うん。」

いい感じだよ。 僕のベイン＝ザートロ。」

そして返すマルリッパの目線の方角に、戒が顔を向ける。

見慣れた機体が、弾薬と積荷の奥に覗いていた。

「あれは……俺様の……」

呟き、機体へとにじり寄る戒。

コルツは、怪訝そうな顔でそれを追う。

「……む!？」

こ……この……野郎」

だが、戒はすぐに戦闘騎から離れ、帰って来るなりマルリッパに掴みかかった。

「操縦席に菓子のカスが散らばってるじゃねえか!！」

「え？」

だってこれ……僕が使っていいって言われたから……」

目を大きく見開き、口の周りについたポップコーンの粒を舐め取る彼。

「ふざけんな!!」

「さつきから、ふざけてんのはどっちだ。

突然やってきて…一体、おまえ達は何者なんだ。
正規軍ではないようだが…」

今度はコルツが両者を引き離す。

「義勇兵だ。」

「……義勇兵だと?」

彼は、小馬鹿にした表情で戒を睨んだ。

「…マルリッパ!

そんな戦闘騎、返してやれ。

四枚羽根でオートジャイロ付きだなんて、素人くさくて俺の部隊
には相応しくない。」

「うーん……結構、気に入ってたんだけどなア……。」

彼は、本当に残念そうな顔で答える。

「つべこべ言わず、ヘタレの軍人どもは黙って俺様の言うことを聞
きゃあいいんだよ。」

一方、戒は尊大な態度を崩さない。

「おい、おまえ。」

俺の部隊を他の連中と一緒にするなよ。」

聞き捨てならないとばかりに、深い灰色の腕章を撫でながら、コルツは返した。

「……デスタロッサ隊は、戦闘騎のエリート集団だ。
しかも、隊長の俺は、天命人なんだぜ？」

「なんだと？」

「へへっ……」

おもむろに袖をまくり、誇らしげに腕の紋様を見せる少年。
だが、それは明らかに『ただの刺青』であることが、真の天命人たる戒には判る。

（こいつ……！？）

さらにその上の腕から覗く、赤ずんだ幾つもの斑点を認める彼。

それは昔、貧民街でよく目にした注射器の針の跡であった。

自分が同情するような顔つきに変わっていくのを感じ、戒は顔を背けた。

「…………行くぞ。」

あとでちゃんと、この機体はルベランセまで戻しておけよ、ブタ。

「

マルリツパからポップコーンを分けてもらっていた世羅の腰のベルトを掴んで持ち上げ、踵を返して
去り行く戒。

「ブタ…………」

彼は鼻を鳴らし、さらに苦笑しながら頷いた。

「くそ…………あんな素人が幅をきかせるなんて、中王都市軍も堕ちるところまで堕ちたぜ。」

しかも、今度の任務は輸送艦の護衛とか言ってるやがる。」

「まあ、うちらはうちらで頑張ればいいんじゃないかな。
普段どおりに。」

「チツ…………」

舌打ちと共に、片手で頭を押さえる彼。

「大丈夫かい？ コルツ。」

「うるせえ！

薬が切れちまって…イライラしてるんだよ……。

売人の野郎……トラブルで予定の仕入れが出来なかったとかぼざきやがって……」

「……これを機に止めた方がいいと思う。

もしも、デスタロッサ卿に知られたら……」

「クソ親父のことは言っんじゃねえ!!」

コルツが声を昂らせる。

「……一度仕事に出たら何年も家に帰ってこねえような野郎に、今さら口出しなんてさせるか。」

息を荒げながら、彼は続けた。

「ああ……頭いてえ……。

こんな時に……戦場じゃなくて護衛だと？」

軋む、熱をもった額。^{ひたい}

「……殺し合いしねえとよ……この疼き……止まらねえじゃねえかよ……」

彼は呻いた後、自分の機体に生爪を立てた。

「……なんか色々あったけどよ…世羅も元気出たようだな。
お前はどっ思っ？」

機体の脇で屈み、大きなネジを手で転がしながらバーグが言った。

「…不思議だ。」

白い槍を肩に乗せて、厚い鉄で出来た格納庫の壁に寄りかかった
まま返すザナナ。

「笑うことにも、たくさん種類があるようだ。」

世羅の笑顔は……戒が帰って来る前と後では…どこか違うような
気がする。」

「へえ……良く見てるじゃねえか。
気が付けば、随分と言葉使いも上手くなっているしよ。」

そこでバーグは煙草を胸ポケットから取り出すが、格納庫では厳
禁であることに気付いて元に戻す。

「…詰まるどころ、どうなんだ。
戒も世羅も…成り行きでお前を連れ回しちまった形だが、このま
まルベランセと共に行くつもりはあるのか？」

俺としては……お前が艦内に居てくれりゃ、心強いが。」

「ザナナは無理矢理、連れ回されたとは思ってない。
迷惑とも思ってない。

それは、これから先もずっとだ。」

「……………」

無造作に立ち上がり、無言でザナナの背中を強く叩くバーク。

「……………」

何の意味がある？」

「意味なんてねえよ。」

問う豹頭に、彼は笑いを噛みしめて背を向ける。

そこで、搬入口から戻って来る世羅と戒、二人の姿を認めた。

「おい、世羅あ。」

ザナナの奴、もつとお前の笑顔が見たいって。

これからも一緒だよ。」

「……」

その言葉で駆け寄って、世羅は勢い良くザナナに抱きついた。

「……………」

彼は目を丸くして、ずれた着物を直し。

彼女を見下ろした後、すぐに顔を天井へと向ける。

「それはそうと……戒、戦闘騎は取り戻せたのか？」

「…何とかな。」

それより、他の連中はどうした？」

バーグに答え、さらに問い返す戒。

「ミーサは機関部の最終調整だ。」

副長…いや、フィンデル艦長は客室にいるぜ。

何やら、面接がどうだとか…」

「面接だと？」

「いや、驚いたぜ。」

艦長になつてたとは。」

「役職なんざ、どうだっていい。」

それより…」

独りで呟くバーグを横切り、嫌な予感と共に螺旋状の階段を見上げる。

艦内の廊下へと続く扉の前には、そわそわしているパンリの姿。

「…あ、戒さん……大変なんです、シュナさんが！」

戒の様子に気付いた彼は、いやに慌てた様子で言った。

「シュナの奴がどうした？」

「……ルベランセ専属のコックになるために……今、面接を……」

「何だとお！？」

戒は一気に青ざめて、階段を駆け上る。

「待て、待て待て……」。

あんな女に居つかれたら、俺様の平穏な空の旅が脅かされるぞ……

……」

「……でも、そんなに簡単に軍隊で採用されるでしょうか……」

「馬鹿！ あいつの処世術を甘くみるな。」

お前も知っているだろ、あんな飲み食い処で沢山の客を相手にしていたんだ。

こここの軍人をたぶらかすことなんて、造作もあるか。」

そんな彼の言葉に、息を飲み込むパンリ。

「……あ、あの……それじゃ……戒くんはシュナさんがここで働くの

は反対なのですか。」

「…お前には、これが歓迎しているように見えるのか!」

足を止め、睨み付ける戒。
パンリは思わず萎縮する。

「そ、それじゃあ、例えば……。」

いや、あくまでも例えばの話なんですが
…いいですかね? 私の方が…都合…

「んん?」

若干の静寂。

「お前……もしかして、ルベランセに乗りたいのか?」

「そ、空に……ちょっと興味があります……かな、なんて……」

もじもじとして、今にも消え去りそうな声を出すパンリ。

「早く言え!

……早く言えっ!」

彼のフードをわし掴みにして、戒は廊下を引きずって行った。

「…つまり、料理の腕に自信あり、と。」

「さらに艦内の防衛にも役立つって？」

卓を挟み、フィンデルとリードが続けざまに声を上げた。

「はい。」

教会の聖弓隊に属してましたから。」

水色を基調にしたギンガムチェックの柄のスカート、そして襟。

非常に若く、瑞々しい、対面に座る彼女 シュナはわざわざ

着替えて面接を受けている。

「それって…やっぱり、弓が得意ってこと？」

「大陸全体で見ればそうでもないでしょうが、隊の中では一番の腕でした。」

おまけに神学校では生徒会長もやってましたし、人格にも自信があるつもりです。」

大弓を片手に握ったまま、大きな胸を張るシュナ。

言葉とは裏腹に、眩いばかりの自慢と自信が全身から滲み出ている。

「と、ところで聖弓隊の制服の丈って、そんなに短いのか？」

フィンドルが何気なく訊いた。

「え？ そんなに短いですかあ？」

元気良く答え、急に片足を振り上げて大袈裟に弓を構えるシュナ。

「わ！？」

短めのスカートが目の前でひるがえり、リードは思わず顔を下に向ける。

「あ……見えちゃいました？」

笑って、スカートを抑える彼女。

「み、み、み、見てない、見てない！！！」

前を向き、慌てて否定するリード。

だが、シュナはその眼前でさらにスカートを全開に捲くり上げる。

「ふふっ……残念ー、下はスパッツです。」

舌を出して笑う彼女。

「あ……う……!!」

咳き込みながら、リードが呻く。

「……で、どうするの？」

保安の責任者さん。この子を採用するわけ？」

その横で、明らかに冷たい視線を突き刺すフィンデル。

「いいわよね、若いし。」

そのうえ美人で、制服も可愛いし。」

トゲのある口調で彼女は続けた。

「か、勘違いするなよ、誰がこんな子供に……。」

リードは口を動かしながらも、その視線は確実にシュナの肢体へと注がれている。

「……でも……見たところ怪しい人間じゃないと思う。」

それに、食事が良いと乗組員の士気也大いに盛り上がりそうじゃないか……!!」

両の目を強くつぶって、彼は最後に叫んだ。

「それじゃあ、決まりですね？」

満足そうな表情で微笑み、立ち上がるシュナ。

「
待て。」

俺様に断りも無しに、何を勝手な密談をしているんだ、お前らは

」

そこでノックも無しに扉を開き、部屋に乱入するのは戒だった。

「ルベランセ搭乗志願者は、一人だけではないというのに。」

「はあ？」

私以外、誰がいるっていうのよ？」

「ところが、いるんだよ。」

シュナと真正面から対峙する彼。

その背中から恐る恐る顔を出すのは、パンリだった。

「誰だ、君は。」

途端に警戒する視線を投げかけるリード。

「わ……わたっ……パンリとっ……言いまっ……」

「おどおどするんじゃないねえ！」

戒が勢い良く、彼の後頭部を叩いて押す。

バランスを崩して、前につんのめるパンリ。

そのせいでフードが外れ、毛の生えた長い耳が露になる。

「……蛮族……！」

それを見た途端、リードが低く声を発した。

「……垂耳というらしいが、文化はそれほど俺様達と変わらん。

その性の悪女よりも、こいつの方が馬鹿正直だから信用がおけると
思うぞ。」

「お、お願いします……」

戒の紹介に預かり、深々と頭を下げるパンリ。

「……今は、特別な任務の途中でな……別種族の者はちょっと……」

動揺を抑え、リードはやんわりと言った。

「……正直に言いますが、私も巨族の血が入ってます。」

種族が信用に関わるんですか？」

シユナが頭のカチューシャに触れながらこぼす。
対する彼は、顔を難しい表情に変えた。

「…普段ならともかく……今回の作戦は、なるべく中王都市の人間のみで構成したい…」。

だからこそ、この艦で働く蛮族も全て転属させたんだ。
スパイ防止ということを視野に入れた時のリスクを計算するとそうなる…」

「計算だあ？」

それじゃあ、ザナナの奴も乗せられねえって言うのかよ。」

戒が凄んだ。

「ゴーベ越えの一件で、彼には信用がある。
だが、彼等にはまだ…」

それに答えた後、二人を見るリード。

「もちろん、何かを企んでいるようには見えないけど……。
そうやって、過去に二度も騙されているからな…」

「…ところで貴方は、何が出来るのかしら？」

「え？」

そのような問答の中でのフィンドルの発言に、パンリが反応する。

「あの……実は私、これといって何も……」

「こいつも料理が作れる。」

家庭的な味だが、まあまあいけるぞ。」

まごつく彼の前に出て、すかさず戒が言った。

「料理……!？」

「ですってえ？」

パンリ自身の驚く声に混じり、シュナの馬鹿にしたような声が響く。

「……わかったよ。」

そうなる……どんなに妥協しても、どちらか一名だ。
この飛翔艦に料理人は二人も必要ない。」

肩を落としつつ、脇へ目配せするリード。

「……問題は……どちらを取るか、よね。」

その先のフィンドルが、暗い面持ちで返した。

オルゼリア領は広大である。

敷地の殆どを占める、切り拓かれていない森林。
その豊かな緑の中心部に、目的の屋敷は在った。

先日、軍隊による夜宴が開かれた宮殿よりも遥かに小さい建物である。

そこで待つ銀鎧の姿を認め、手綱を引いて馬を止める彼女。

「……急な呼び出しですまない。
長旅で疲れているというのに。」

マクスは近付き、綺麗な装飾の入った円盤状の容器を開ける。
そして、そこから角砂糖を摘み出し、クウの馬に食べさせてあげた。

「……いえ、平気です。」

久方ぶりの彼との対面に、彼女は緊張した面持ちで下馬をする。

「お預かりしましょう。」

すると、屋敷に面している馬車小屋から、粗末な服装の男が出てきて声を掛けた。

それに従うようマクスが示すので、手綱を渡す彼女。

名家と称される割に、盛大な門が出迎えるわけでもなく、質素とも思える住まいだった。

古めかしい音を立てて玄関扉が開くと、目の前に広がる、薄い絨毯が敷かれた廊下。

想像以上に使用人も少なく、稀に見かけても、年配の者のみが雇われているらしい。

二人が無言のまま辿り着くのは、とある一室。

クウは、ここが目的の場所だということを察した。

「マクス様、帯剣はあまりにも失礼では……」

そのまま入ろうとする彼の様子に、彼女が声を上げる。

貴族の礼儀対策として、既に荷物は馬と共にした。

さらに服装は散々悩んだ挙句、鎧姿はあまりに失礼と思い、皮のパンツとブラウスという軽装を選んだのだ。

「私には、『これ』でなくてはならない理由がある。」

「？」

彼女の視線をかわしながら、そう言っただけは扉を叩いた。

アルドの叛乱時には、今の大隊長ザイク・ガイメイヤと共に大陸十字軍の遠征に初回より参加し、勇名を馳せ。

以来、10年前まで白華の小隊長に在任。

さらに、その以前から由緒ある家柄として領地を守り続け、民心を治めてきた人物。

ジェダス・オルゼリアは、上半身のみをベッドから起こして書にふけていたようだった。

「……おお……マクスか。

良く来たのう。」

開いた扉を横目で確認し、手にしたペンを一段落させて呟く彼。いかめしい顔つきを隠していた老眼鏡を置いてから、改めて向き直る。

「ん？」

そして、銀の大鎧の傍らに侍るクウの姿を目に留めて、彼は思わず身を乗り出した。

「急ぎで参りましたゆえ……これといった祝いの物が用意できず、申し訳ございません。

せめて挨拶だけでもと思い……」

「よ……よいよい!!」

丁寧に頭を下げるマクスに対し、歓喜の声を上げる彼。

「オルゼリア家いちの堅物が……こんなにも若い女子を連れてくるとは……！」

それが何よりも祝いじゃ!!」

「……あ、いえ……あの……」

興奮してまくしたてる彼の言葉に、クウが口ごもる。

「何を仰っているのですか、父上。」

「……?」

淡々としたマクスの反応。

その様子をさすがに不思議に思い、彼はゆっくりと腰を落ち着けた。

「彼女は、これから任務を共にする、私の新しい『仲間』です。父上にもぜひとも紹介を、そう思いました。」

「仲間……？」

「……何じゃ、つまらんのう。」

ジェダスは呟いた後、窓の外の景色を遠い目で眺めてから、急に二人の方へ向き直った。

「わしは長男には地位を、次男には名誉を、三男には財産を遺してやれる。」

だがマクス、お前には何も遺してやれん。

そればかりが心残りと思っておった。

せめて女房くらい、何とかしてやりたいのじゃがどうか。

ん？」

その早口と視線に、彼女は顔を上気させて、遂には完全につつむいた。

「あまりからかわれますな、父上。」

それを見かねて、呟くマクス。

「……ホントに堅い奴じゃな。」

まったく聖騎士の鎧が良く似合っておるわ。」

一方、年甲斐も無く口を尖らせるジェダスの姿に、思わずクウは笑いを洩らした。

それを見て、彼も会心の笑みを返す。

この名家の当主は何とも気さくであり、ごく自然な形で胸襟を開け広げていた。

初めての出会いであるというのに、どこか心を許してしまう。
無い者には絶対に得られない、ある種の人望というものをクウは肌で感じた。

「ところで不自由は無いか。

聞くところによれば、大団長の独断で白華を離れさせられたそうではないか。」

「……はい。
ですがそれは……」

「何か文句があれば、ガイメイヤの奴には、わしからきつく言っておいてやるぞ。」

息子に対する目も威風があり、大らかだった。

「よいか、お前は聖騎士なんじゃ。
正直な話、有事の時には騎士団の体面なぞどうでも良い。
常に己の正義と信念を貫くことを忘れるのではないぞ。」

「肝に銘じます。」

一礼をして、踵を返すマクス。

「…何じゃ、ゆっくりしていかんのか？」

「申し訳ありません。
任務が差し迫っておりますゆえ。」

「長男のユビタスは、相も変わらず白華の任務。
他国へと養子にもらわれた次男は易々と来れんときとる。
寂しい限りじゃ。」

あえて、クウに説明するように訴える老人。

「ここには、いつもルータス兄様がいるではありませんか。」

「あれは本の虫じゃて。
…やれやれ。」

この身体が、いつそのこと危篤にでもなれば、もっと心配される
じやろうか。」

「冗談が言えるうちは、まだまだ壮健でしょう。
では。」

マクスは首を軽く傾げ、扉へと向かう。
後へ続くクウには、それを見送るジェダスの安らかな顔が印象的

だった。

「すまないな。

たかだか、このようなことのために呼び出してしまった。」

廊下を歩みながら、マクスが言った。

「……いえ、私もお暇を頂きましたので……」

クウは、そこまで口にしたところで思わず言葉を止める。

ここへ来たのは、何も休暇の見返りのつもりでは無い。

だが自分の口を出たのは、皮肉とも捉えかねられない語句。

「しかし……すみません……」。

結局、母の墓へ行くことは出来ませんでした。」

「？」

話題を逸らすために発した彼女の言葉に、マクスは片眉を上げた。

「父に構っていたら、忘れてしまって……」。

せつかくお暇をいただけたのに……申し訳なく思っております……」。

「口では何と言つても、君もまた父上を好いていると見える。」

微笑みかける彼。

「わかりません…それだけは。」

それに対して呟く、クウの横顔。

父親の話に及ぶと、彼女はひどく哀しい目をする。

マクスは、それを随分と前から気付いていた。

「……すみません。」

この感情は、きっと良家の生まれの方にはわからないと思います。

「

彼女は続ける。

無論、貴族にも沢山の苦勞があるに違いない。

だが、それは優雅な生活や奔放な生き方と代替することが出来る。

平民からすれば、肉親との確執は人生や性格を変える問題なのだ。

いわば人生の選択肢の差が、余裕に繋がる。

先のマクスとジェダスが互いに交わす空気を見ていれば、クウにはそれが良く解った。

「……ふ……」

そんな彼女の目の前で、マクスは微笑みを増す。

「……何ですか？」

現在、正確には部下と上司の関係では無いが、身分の違いと格の差は歴然。

だが面と向かって笑われる道理は、流石に無い。

彼女は彼の態度が理解できぬまま、強い口調で聞き返した。

「学生の頃、デチャードにも同じようなことを言われた経験がある。」

和やかな口調で述べた後、一瞬、間を持つ彼。

「クウ。」

私は…オルゼリア家に生まれた者ではない。」

「………？」

クウは無意識に、廊下の壁をなぞる銀の指先を追う。

「完全な養子……それも叛乱軍の国の子だ。」

「!？」

彼は冗談を言ったのであろうか。

彼女はあまりに唐突にかけられた言葉に戸惑った。

「私は戦火の中で拾われ、父上の慈悲で生き延びた身なのだ。」

「それは……」

「騎士団の中では、デチャード以外は知らん。」

暫し、お互いに言葉を止める。

「……何故……そんな大事なことを私に話すのですか。」

「それも、デチャードが同じ事を言ったな。」

静かに目を閉じる彼。

「単純に……信頼を得たいからかもしれん。」

「私の……ですか？」

「そうだ。」

可笑しいか?
おか

「信じられません…」

それに解らない……聖騎士様がそんな…」

クウは、表情を何も作れないまま呟いた。

「その聖騎士が、この重苦しい鎧を窮屈に感じると言ったら……もっと可笑的だろう？」

甲冑に包まれた自分の右手を上げて言う彼。

流した視線は、窓の外のただっ広い草原へと放たれていた。

「……はい。」

その脇で、彼女は正直に返す。

「私は、およそ父上が言うような正義も信念も持ち合わせていないと自分で思う。」

……今となつては、そう言っていられないのだが。」

彼は冗談と共に、再び廊下を進んだ。

そして、突き当たりに扉。

開けば、そこは馬小屋へと繋がっていた。

マクスは白い駿馬に近寄り、手甲を外した後、素手でその顔を撫ぜる。

「はじめ……私が何故、帯剣したのか不思議だったろう？」

その彼の言葉に、クウは頷いた。

「父は足を病んでから、最初の誕生日に、その私の出生の秘密を語ってくれたのだ。」

彼は続けながら、腰にかけた銀の柄を握り締める。

「以来、こうして年に一度、『斬る機会』を与えてもらっている。変わった人だろう？」

「あの方を仇として、復讐の念を抱いたことは……全く無いのですか？」

「真実を聞いた瞬間は……何とも言えない心地がした。初めは知りたくなかったという気持ちだ。だがやがて、真実を教えて下さった父上に感謝できた。」

問う彼女に、マクスは毅然とした視線で返す。

「当時の情勢で、しかも名門の者が急に赤子を連れ帰って来る……。その覚悟がどれほどのものか、想像には難くない。」

そして、口に仄かな笑みを浮かべた。

「現に、父上は私を連れてきた直後、妻に離縁を突きつけられたそうだ。」

続けざまに、心底おかしそうに聖騎士は笑う。

「ひょっとしたら彼は、私の親兄弟を殺したのかもしれない。だが、この心の何処を探しても、あの人を殺すという考えは微塵も見付からぬ。」

「血の繋がりが無くとも、父というものは私にとっては、それくらい掛け替えの無いものなのだ。だから、本物の親子というのは、さぞかし絆が深いのだろうと単純に思う。」

「……間違っているのなら、言って欲しい。」

「……血が繋がっているからこそ……かえって、わだかまりがある場合もあると思います。」

クウは淡々と返した。

「私の父は、女には夢よりも義務を押し付けます。そういった愛情を、私は好きになれません。」

「夢？」

「女でありながらも、父のように強くありたい……そう願うことは悪いことでしょうか。」

そんなクウの声を聞きつけ、彼女の馬が向こうの柵から顔を出す。
マクスはその様子を見て、目を細めた。

「クウの気持ちと、その父親の気持ち。

私はどちらも理解できる。

それを量り、一方を選ぶ事はとても困難だ。」

「でも、無理にでも選ばなければ人は生きてはいけません。

貴方も聖騎士という道を選ばれたのだから、お解りになると思います。」

「血の繋がりが無い方が視野が広がり、よりお互いをいたわれることもあるというわけか。

……君と話していると、ためになる。」

その言葉に、クウは下を向いた。

彼を見ていると、自分がとても小さい人間で、情けなく、恥ずかしく思えてくる。

「……いいえ、私の心は醜いのです。

一つもためになることなどありません、聖騎士様。」

瞳を一点に固めて、小屋の中の虚空を見詰める彼女。

「私は母を病で亡くした時、家庭を顧みなかった父を罵りました。ですが、その後……分かったのです。

本当は天命人であった私の所為^{せい}だということが。」

その言葉の端々から伝わる苦痛に、マクスが振り向く。

「だから私は……自分が天命人だということを父に話していません。恐いのです。」

母の死に目に会えなかったことを今度は私が罵られる番だ、そう思うと。」

乾いた瞳が、そこで潤っていくのが伝わった。

「でも、いつか近いうちに……このことを正直に明かして謝ろうと思っていました。」

ですが……この間、連れて来た客人に対し、まるで家族のように振る舞う父を前にして……。

私は……激しく嫉妬し、その場から逃げることで精一杯になりました。――

ブラウスのボタンを上から外し、襟からはだけ、右肩を露にするクウ。

肩からわきの下を通り、縦に一周して光る輪。

彼女が怯えているのを察し、マクスは近寄った。

「自分がもがけばもがくほど、この天命の輪の『さだめ』のとおり、肉親とはどんどん離れていく。」

貴方は……天命人として……さだめを背負い……恐ろしいと思ったことはありませんか？」

声を振り絞る彼女。

「私は…聖騎士に選ばれた時、さだめ以上のものを背負った。さだめを恐れたくないのなら、それさえ忘れてしまえるような大事なものを作ればいい。」

マクスは言葉を強く発した後、優しく彼女の肌に触れた。

「……また、私は簡単に言っているだろうか。」

彼の眩き。

続く、たとえよしの無い間。

「いえ……」

彼女が何かを口にする寸前で、不意に扉が開かれる。

「帰ってきたんだって？」

マクス……！」

突然現れる笑顔の男性。

だが、彼の目に飛び込んでくるのは、上着をはだけたクウの姿。

「す、すまん!!」

叫び、すぐに退散する彼。

「あ、あの方は……」

「…兄上だ。」

慌てる彼女を制し、マクスが軽く笑う。

「いや……まさか堅物のお前が…馬小屋でそんなことしてるなんて……」

扉越しに眩き、二人の様子をじつくりと確認しながら、うかがう彼。

細身で眼鏡顔。

いかにも書生といった、袖や襟にひらの付いた薄服。

そして片手には、学者を絵に描いたように厚い本を抱えている。

マクスは困ったような顔つきで、だが特に弁明もせず、彼の袖を扉越しから引いた。

「紹介いたします、兄上。」

私の新しい仲間のクウ＝ハウド殿です。」

「…あ、ああ。」

このオルゼリア家の三男、ルータスだ。
いつも弟が世話になっている。」

「いえ。」

こちらこそ……。」

クウはしっかりと上着を直した後、一礼をした。

「何の御用でしょう、兄上。」

「…ん？」

だが、お楽しみ中の弟の邪魔をするわけには…」

からかい半分のルータスの口調に対し、マクスは軽く咳払い。
彼はそれに思わず身を縮ませる。

「そうだな……いいか。」

おい！ ちょっと来てくれないか。」

呼びかけると、廊下の一室から飛び出して来る男の姿。

「聖騎士殿！！」

若く猛々しい、短髪の健康そうな青年がマクスを目にするなり猛烈な勢いで近付いてくる。

身に纏った鎧には赤のライン。

「自分は、赤華所属のヒュベリと申します！」

「私の友人だ。」

お前が帰還していることを教えたら、ぜひ会いたいと騒いでな。」

ルータスは付け加えた。

「ご存知ありませんか！」

この度、急に我が軍が撤退させられた理由を！」

それを皮切りに、赤華の彼は早口で捲くし立てる。

「我々はこの度、急に遠征の任を解かれ……どの団員も戸惑っております！」

飛翔艦全隻、およびその武装、戦闘騎。

全てを北のゴルゴートへ撤退ですよ……！」

「……ゴルゴート？」

聞き返す素振りを見せるマクス。

そこは、次の任務先と聞いていた。

「はい！」

理由も告げられず、全員が長期の休暇を申し付けられました。

しかも誰も知らぬ基地施設にです!!
これでは納得がいきません……。」

ヒュベリはうつむき、震える拳を握りこむ。

「大団長の命で、ごく少数の武装を貸し出すことは良くあることです……が……。」

こんな大規模で無遠慮なやり方は前例が無い!」

「……私は何も存じません。
すみません、お力になれず。」

聖騎士は低い声で返し、会釈のように小さく頭を下げた。

「あ!
いえ……自分も少し感情的になりすぎております。
聖騎士殿が知る由も無い……それは分かっているのですが……どうにも納得が……。」

そのような態度が、幾分彼の興奮を和らげたのか、ヒュベリは鼻から大きく息を吐いて言葉尻を小さくして呟いた。

そして無言のうち、クウと視線と合わせるマクス。
胸に浮かんしたのは、自分に先駆けて旅立った、一人の親友に対する危惧だった。

日中だというのに、ほの暗い。

老人の如く痩せ細った四肢のような枯れ木の枝が、空に向かって伸びる沼地の森。

鳥の羽音かと思って耳を澄ますと、強弱のついた口笛のような音が反響していた。

思わず見上げる先に、枝に止まった一匹の梟ふくろうと目が合う。

「……おまえか？」

その梟は、呟くヂチャードに向けて、首を傾げて見詰めていた。

「鳴き声が……違うよなあ。」

梟は『ホー、ホー』だ……。」

小さく呟いて笑い、再び灰色の地面を一步踏み出す彼。

そこで背後から、かすかに動物の吐息を感じた。

ヂチャードは完全には振り返らず、そばの太木に寄りかかり、背後をうかがう。

遠くの木々越しに見える、頭から外套を被った不気味な集団。
急に自分の姿を見失ったことで、彼等は少し動揺しているように
見えた。

（……真つ昼間から、賊かよ。
……この治安の悪さも極まったな……。）

屈み、枯葉と雑草を掻き分けて、道無き道を進むデチャード。

元々、市の中心部から離れた4番街だったが、その距離はさらに
遠く感じた。

数十分もの間、その体勢のまま森を抜け、粗末な教会をようや
く目に留める。

息をつき、差し足を緩める彼。

相変わらず敷地はそれなりにあるものの、そこは自分が世話にな
っていた頃よりもさらに痛んで見えた。

そばの畑で野菜を掘り出す作業をしている子供達。
その中の一人が自分を発見すると、場がにわかに色めきだつ。

デチャードは服の汚れを叩き、笑みを浮かべて軽く手を上げた。

3 - 3 「黒色絵具」(下)

3

「…これ、何の騒ぎよ?」

いやに騒がしい、食堂前の廊下。

入り口に群がる彼等を見付け、ミーサが油に汚れた軍手をポケットに捻じ込みながら近寄る。

「何か、妙なことになってきやがった。」

苦笑して、そう返すのはバークであった。

「これより、料理対決を始める。」

彼の目線の先には、厨房の前で片手を広げ、高らかに宣言する戒の姿。

「これは、どちらが『ルベランセの料理人』に相応しいかを決める

勝負だ。

二人とも用意はいいか。」

その言葉の後、戒が背にした厨房から、余裕のある表情で出てくるシユナ。

一方、緊張した面持ちで出てくるパンリ。

二人は既に調理服に着替えていた。

そのすぐ前方に一列に並べられた席。

そこではブリッジの面々が、半ば呆れたような態度で座っていた。

「……これは……一体、何のショーっすか？」

それに、何で艦を降りたはずの彼が仕切ってるっすか？」

「俺に聞くなよ。」

苦々しい口調で、タモンに答えるリード。

「さて……集まっていたいただいたルベランセの士官諸君には、この勝負の審査をしてもらう。」

もう片方の手を広げて、不気味な笑みを浮かべた戒が迫る。

「なんなんだ、この茶番は。」

……俺達に何をさせるって？」

「公明正大なる審査と言ったろうが。」

こういうのは、舌が肥えている奴の方がいいと思ってな。」

リードに答えた後。

立ち入りを禁止した世羅とバーク、ザナナ達を一瞥^{いちべつ}する戒。

「何か企んでいないか、彼は？」

リードは警戒を解かずに、フィンデルに耳打ちする。

「まあ……美味しいものが食べられるのなら、いいんじゃないかしら。」

「ねえ？」

だが返されるのは脳天気な言葉。

「おいしいの、食べたいの。」

メイもその脇で終始笑顔でいた。

「…困るんだよな……」。

まだ出立の準備も途中だったのに……」

そんな女性陣の呑気さに頭を抱えるリード。

「それでは、ルールを説明する。

…といっても、単純に審査員4人に、より多くの指示を得た料理人の勝利だ。

勝利した者に与えられるのは『ルベランセ専属料理人の権利』

」

戒がフィンデルの方を向くと、彼女は反射的に頷いた。

「なお、制限時間は三時間。

調理できる場所はこの厨房のみ。

だが食材は、何を使っても良しとする。

ここにある物は無論のこと、個人的に街で仕入れても構わん。」

「えっ!？」

戒の説明を聞いていたパンリが思わず、声をあげた。

「んゝ、成る程ね。」

戒の設定したルールに、ほくそ笑むシユナ。

あらゆる食材を吟味できれば、充分な料理のレパートリーを頭に浮かべることが出来るだろう。

勿論、それが解らないパンリではなかった。

一方的に色々な事象を定めた戒へ、すぐに不安そうな視線を向ける。

「……しかしながら、本職と素人では勝負にならん。
ハンデとして、審査員の支持数が『引き分け』の場合はパンリの
勝利。」

さらに『俺様が協力する』ことを許可してもらおうか。」

「いいわよ。」

その程度でハンデが埋まるか分からないけどね。」

軽く返事をして、舌を出すシュナ。

「……そ、そのとおりですよ！」

戒くん……これでは……」

「なんだ、俺様では役者不足だと言いたいのか？」

「……そ、そのとおり……。」

あ、いや、そういうわけでは……」

口元をもごもごさせながら、パンリはうつむき加減で言った。

「とにかく、さっさと始めて、料理が出来たら呼んでくれ。」

この茶番が終わったら、ルベランセはすぐに出発するからな。」

早口でまくしたてた後、リードは席を立つ。

「じゃあ私は早速、街へ食材を探しに出るわ。」

時間は有効に使わなきゃ、もったいないもの。」

早足で厨房を出ていくシュナ。

「バーグさん。

荷物持つの手伝ってもらえるかしら？」

「…俺？」

すれ違いざまに掛けられる彼女の言葉に、バーグは呆気に取られながら自分を指差す。

「物持ちくらい、誰かに手伝ってもらってもルール違反じゃないでしょ？」

「勝手にしろ。」

その要求に、戒は簡単に応えた。

かくして、バーグの腕を絡めとって強引に連れ出すシュナ。始終、ミーサはその光景を憤怒の表情で睨みつけていた。

「で、では、私もっ…!!」

それに続き、手足を慌しくバタつかせ、外へ飛び出そうとするパ
ンリ。

「……待ちやがれ。」

お前はここの食材だけで料理を作るんだ。」

そんな彼の手を取り、小声で囁く戒。

一方の手で開かれた貯蔵庫の扉。

中には乾燥したベーコンと、わずかな野菜が入っているのみ。

「!？」

それらを見て、パンリは凍りつく。

「あ、あのう……つかぬことを聞きますけど……」

「何だ？」

両の拳を握り締め、彼は必死に背伸びをして戒の顔に近付いた。

「戒さんは、シュナさんに勝たせたくないんですよね？」

私が勝った方が都合が良いんですよねっ!？」

「……当たり前だ。」

同じ事を何度も言わせんな。」

半眼で手を伸ばし、パンリの頬をつねくる戒。

「…ひよ、ひよれでは……も、もひかひて…街に罾とか、何かの仕掛けとかを張って？」

「馬鹿め。」

そんな姑息な手段で、ルベランセの連中に認めてもらえると思っているのか。

正々堂々と勝ってアピールするんだよ、お前は。」

「ええーっ!？」

叫びと共に、捻って外れる戒の手。
その衝撃と痛みにうずくまるパンリ。

「……でも……これだけ向こうに有利な条件ですと……」

「有利な条件？」

意地の悪そうな笑みを浮かべて、戒が顔を歪める。

「確かに。」

「一見、有利に見えるよなあ？」

彼は確信を持った表情で、卓上の砂時計を逆さに向けた。

「お久し振りね、ヂチャード。
貴方が直接来るなんて珍しいこともあるものだわ。」

修道着姿の初老の女性が笑う。

孤児院も兼ねている教会。

礼拝堂奥の広間で、互いに挟んだテーブルには白湯さゆが出されている。

「…悪いな、シスター・エルジャ。

今日は連絡も無しに突然で。

あと……何年も来れなくてよ。」

ヂチャードは少し照れながら答えた。

「おにいちゃん、国の仕事してるんだって？」

「すげーよな。」

そんな彼に二人の少年が寄り、揃って言う。

「…大したこと……してねえよ。」

ヂチャードは身に纏う黒い皮鎧の襟元を開き、視線を伏せながら笑って追い返した。

自分が騎士団の諜報員であることは、このエルジャ院長以外に語っていない。

「前も話したけど…みんなで首都の方に来ればいい。

豊かな暮らしの保証は無いが、環境は少なくともここよりマシなはずだぜ。

手引きくらい、俺が何とか…」

「いいえ。

やっぱり…自分が生まれた土地ですから。

それに、この街で増え続ける孤児を放っておくことは出来ませんよ。」

彼女は言った。

「でも、ここは借地なんだろう？

こんな環境で、地主に金を払い続けるのも馬鹿馬鹿しいと思うがな…」

「しかし、それはこの世の規則です。

信仰心のみで、子供達の命は救えるとは思っておりません。」

「ああ…分かってるよ。

綺麗ごとだけじゃ生きていけないってのは。

……神様は何も救っちゃくれねえってこともな。」

薄汚れた室内、崩れかけた信仰の象徴
『創る者』の像を眺めるチチャード。

机や椅子にしてみても、ここにある物でまともな物は何一つ無い。

「……意見しちまって、すまねえ。」

シスター、あんたは昔から色々と大変な思いしてるんだもんな。そういや、俺ごときが口出し出来ることじゃなかったぜ。」

今でこそ大分鎮まってるようだが、ヂチャードが子供の頃は素行の悪い孤児も沢山いた。

過去にそういった者達が起こした問題で、この教会が母体であるクレイン教から見放されて久しい。

目の前の老婆は、それでも小さな命達を見放さずに笑顔を保ち続けているのだ。

「……暫く来ない間に、子供の数も増えてる。」

本当、あんたには頭が上がりねえよ。」

「いいえ、ヂチャード。」

私の苦勞など、何ということはありません。

もっと辛い人間が、世の中に沢山いるはずなのだから……」

「謙遜はよしなよ。」

あんたみたいな人間こそ、本当に天国に行けるんだろうな。」

「……………」

そこで何も言葉が返らないと、ヂチャードも思わず言葉を止めた。彼女は、ふ、と寂しそうな瞳を見ているのだった。

「……ところで、ここへは何か用があつて来たのではないのですか？」

「あ……ああ……」

「ちよつと、源炉の精製所の調査でな。」

「……それでは、マーミリオン様のお屋敷へ？」

院長は少し驚いたような顔を見せ、少し声を上ずらせて訊いてくる。

「……あんな奴に、『様』なんて付けるんじゃないよ、シスター。」

デチャードは、含みをもたせて言い返した。

「……この土地がおかしくなったのは、元はといえば奴の鉱山が原因じゃねえのか。」

「……原因は定かではありません。」

「……そうと決め付けるのは良くないですよ。」

「俺の両親は、山で採掘中に死んだ。」

「それで鉱物が尽きたら、次にあそこに出来たのは源炉精製所だ。」

デチャードは早口で言った後、目の前のテーブルに置かれたカップを指でなぞる。

用意された白湯には一度も口を付けていない。

そこから発せられる『さびた匂い』が、そうさせないのである。

彼が物心つく以前から、この故郷の水は汚れており。

そして廃鉱に源炉の精製所を建造した頃、環境は更に悪化したのだ。

「……悪い。」

そろそろ向かうとするよ。」

チチャードは、仕事の前に教会へ立ち寄ったことを少し後悔しながら、席を立った。

「子供達には、外で遊ぶ時は気をつけるよう言ってくれ。」

その辺を、妙な連中がたむろっている。」

「この町では、誰も襲われませんよ。」

襲っても、得る物がありません。」

去り際の彼の言葉に対し、院長はそう言って笑っていた。

その笑顔を眺めていると、幼い頃の記憶がかすかに頭をよぎる。

「でも、昔……人さらいが……出たことあったよな。」

「そうだったかしら、チチャード。」

曲がった腰を押さえ、立ち上がる彼女。

「ああ……俺がずっと子供の頃だったけどよ。
……ん……記憶違いかな。」

この孤児院に居た子供達も何人か……」

「……。」

「……そんなわけねえよな。
大体、そんな昔のこと、憶えてるわけないか。
ガキの頃の記憶ほど……当てにならないものは無いってな……」

デチャードは肩をすくめ、わずかに歯を見せる。

目の前の院長はそんな彼を、いつもの穏やかな表情のままに眺めているばかりだった。

「ただいま！」

この街は食材が多くてね、たくさん目移りしちゃったわ。」

両手に食材を抱え、厨房に威勢良く帰還するシュナ。

そこに置かれた砂時計の砂が、既に半分近く落ちていることを確認。

さらに奥の火元の一つには、鍋がかけられていて、蓋がコトコト動いて鳴っているのを見る。

パンリは緊張した面持ちで、そんな自分の料理の様子を一心に見詰めていた。

（…見た感じ…大したものを作っている様子は無いけれど……。用心して、全力を尽くすのみよね。）

シユナは調理台の端に品物を置いて、前掛けを着ける。

「…なあ、おい……これも、この辺でいいのか？」

巨大な紙包みを抱え、おぼつかない足で厨房に入るバーグ。

「はい、そこに置いておいて下さい。」

彼が言われるままにすると、調理台全体が揺れた。

中からこぼれて見えるのは、色とりどりのフルーツと野菜。そして、さらに鮮やかな色の鱗をもつ大魚だった。

「ありがとう。」

助かりました、バーグさん。」

礼儀正しく頭を下げる彼女。

「……あ、ああ。
いいってことよ……」

バーグは重くなった肩を鳴らしつつ、思わず笑顔を返した。

「用が済んだら、さつさと厨房から出て行け。
関係者以外、ここは立ち入り禁止だ。」

厨房の隅。

小さな貯蔵庫の中を漁っていた戒が急に立ち上がり、言い放つ。

「なあ……別に俺はどちらの味方ってわけじゃ……ねえんだけどよ……。
なんていうか……」

冷淡な態度の戒、そして相方のパンリに気を使いつつ。
さらに脇のシュナの顔もうかがい、どうにも頭を掻き乱しながら
バーグは厨房を去る。

「フン。
裏切り者めが。」

悪態をつきながら、調理に専念しているパンリに接近する戒。

「ちょ……ちょっと!!」

あんた、まさか『それ』を勝負に使うわけじゃないわよね!？」

そんな彼の様子に、いち早く目を剥いたのはシュナだった。
何しろ、戒が手にしているのは、埃まみれで薄汚れたパスタである。

「文句あるか。」

ここにある食材は自由に使っていいって言っただろ。」

「そういう問題じゃないでしょ!」

平然とした戒の調子に、歩み寄るシュナ。

「品質には、問題は無い。」

「……まだ食えるぞ。」

パスタをかじって、わざと大袈裟に音を鳴らす戒。

「か、勝手にしなさいよ!」

シュナは怒ったまま、背を向けて自分の食材へと向かった。

（さすが戒さん……料理人のプライドを刺激させて、ミスを誘う作戦なんですね……。）

そんな二人の様子を横目で眺めつつ、パンリは鍋をかき混ぜなが

ら人知れず笑みを浮かべる。

一方、気を取り直したシュナは、床に置いた荷物から良く磨かれた包丁を取り出す。

それを凝視しているパンリの視線に気付き、正面から目を合わせる彼女。

「…パンリ。」

悪いけど私、本気で行くからね。」

「……あ、はい……。」

さらに不意に声を掛けられ、背筋を正す彼。

「この包丁を使う限り……絶対に負けられない。
送り出してくれた恩人に対して、顔向け出来ないから。」

「……！」

その決意が極まる横顔に、パンリは息を飲んだ。

彼女と比べ、自分はまだあまりに何も考えていない。
完全に戒の言うとおりに動いているのみである。

途端に言い知れぬ不安に包まれていく。
それを象徴するように、彼の手先は止まった。

「パンリ!!」

そこへ戒の一喝。

「は、はい!」

我に返り、虚空に対して大声を上げる彼。
その眼前に伸ばされる戒の手に掴んでるのは、先程の古い Pasta だった。

「こいつの埃を丁寧に落としておけ。」

「え?」

呆氣にとられたまま、パンリは聞き返す。

「鍋の方はもういいだろ。」

時間一杯まで、あとは弱火で煮ておけば……」

「いやそうじゃなくて!」

ほ、本当に使えますか、これを……!!」

一応、Pastaを受け取ってから、パンリは嘆く。

「何で使わない食材を探すために、俺様が埃まみれにならなきゃい

けねえんだ！！」

パンリの脇腹に膝を一撃入れた後、戒は乱暴に足元の小椅子に腰かけた。

その先に、包丁を動かしている最中のシュナを見据える。

肘を始点に動く彼女の腕。

彼女の一挙一動に、厨房の空気が引き締まる思いがした。

尾びれに左手を添え、微塵の迷いもなく大魚の腹に入れられる刃。その腹中で彼女が拳を軽くスナップさせたと思うと、颯爽と抜いた包丁と共に、ずるり、と滑るように臓物が抜ける。

いつの間にか足元に置かれている鉄のバケツにそれらを放りこむと、その脇の新鮮な真水に握った包丁をさつと浸す。

そして水滴と共に振り上げ、そこから流れるような動きで、次々と肉をさばいていく。

その様子は、食材を『切る』というよりも『解体』に近い。

魚の仕組みを熟知している動きであった。

戒もパンリも魚の鱗を処理していないことに気付くが、その理由はすぐに判明する。

彼女は、ごくわずかな、脂ののった部分しか使用しないつもりなのだ。

そして、それらの肉切れはボウルに浸した酢に、どンドン放りこまれていく。

その作業を終えてしまうと、今度はすぐに小袋を空ける彼女。

中から出て来るのは、米。

すぐに別の容器で炊飯の準備に取り掛かる。

彼女はその途中、オーブントレイを片手に取っており、さらに次の動作にも取り掛かれるようにしていた。

順序に全く迷うことなく、狭い厨房内での緻密な動き。

脇には、それを傍観しつつも明らかに感嘆の色を帯びた戒の瞳がある。

パンリにとっては、不安で堪らない瞳であった。

「!」

感じた気配と音に、振り返るデチャード。

再び、笛の音のような、高音を耳にしたような気がした。

言い知れぬ不安が振り向かせるのか、それらを確認するように彼は目を凝らす。

だが、小高い丘を踏み、身体を傾斜させたまま眼下に見えるのは、ゴルゴートの街並み。

過去には鉱山の御足元として栄えた4番街のみが、今は廃墟に近い。

これから訪問するマーマリオンが、その一帯の地主である。彼は目の前の鉱山の所有者であり、その山を源炉の精製所として改修した後に、騎士団に業務を委託されていた。

険しい岩地を少し昇ると、山中を切り拓いた大口が待っていた。その門は開け広げられており、内部は洞穴が崩れないよう太い添え木が組まれているのが見える。

彼はまず、そこに門番がないことに不審を憶えた。

皮ズボンのポケットから小型のランタンを取り出し、火を点けて中の様子をつかがう。

人気の無さが、気温を何倍にも下げているのを感じる。数分も歩かぬうちに、彼は進むのをやめた。

特に大きく割り貰くかれた大部屋。
壁際で土気色した施設は、既に稼動していない。

無論、人員の姿も無く、足元に張った蜘蛛の巣を確認した時点で、
彼は踵を返した。

(……一体、いつ頃から動いてないんだ……？
引き払って数日とかいうレベルじゃねえぞ……)

気持ちを抑え、出口へと向かう。

(…騎士団も……随分と日和見ひよりみだよな……。)

騎士団に入れば、単純に裕福になれると想像していたが、現実はどうか。

一般騎士の褒賞や賃金などは思った以上に安く、立場や身分などは、いまだに家柄が重んじられている。

さらに貴族にとって騎士業が『仕事』という認識は薄く、それは生活とはかけ離れた『責務』や『誇り』であった。

彼等の収入の大半は、統治する荘園や領地の税収から。
そんな安泰の生活基盤の中、騎士として誇りを守るためだけに戦

う人間の蔓延。

それらが形成した集団は、志こそ高いが、その目は万民に向けられてはいない。

（……ひどい野菜だったな。

ここは土も森も…どうしようもなく腐れ果てちまってやがる。）

子供達が育てていた作物を思い出す彼。

ずっと昔に捨ててきた焦燥感が、再び甦る思いがした。

騎士団にさえ入れれば、卑しい身分の自分も、何か尊いものになれるのではないか。

何もかも上手くいく、そう思っていた。

それが勘違いだと気付いたのは、士官学校へ入ってすぐのこと。

そこで、貧しい自分と等身大に接してくれたのは唯一マクスだけだったが、彼と違い、貴族社会に頼りも

コネも無い自分には、まっとうな道など用意されていなかった。

（ここの子供達の境遇は…誰が悪いんだ？

底辺に住んでいる人間の貧しさは、どんなに頑張ろうが何年もずっと変わっちゃいねえ。）

暗闇の中、大きな砂利を踏む。

（そもそも、国を動かしている連中は、改善する気なんて無えんだ。ならば、こたわりなんて……捨てちまった方がいい。その方が…楽しく生きらあな。）

そのような彼の『ぼやき』も、心の中の院長はただ笑顔で返すばかりであった。

外に出れば、既に夕刻。

落ちゆく陽を浴びながら、崖下の屋敷を見下ろす彼。

施設の主には直接、問い正さなければならない。

だが、屋敷内は明かりが点いている様子は無かった。

その代わり、今まさに巨大な馬車が、門を開けて出て行くのが見えた。

行き先は、なんと教会の方向である。
デチャードは息を整えずに走り出した。

「いやいや、素晴らしい段取りだすな。」

さすが元王宮銃士隊、『大空を駆ける天馬』ロディ殿。」

廊下を歩きながら、受け取った書類の束を一枚一枚目を通していくガツチャ。

「まあ、売ってもらった戦闘騎の型はどれも若干古い型だけど、操縦士を養成するには充分だと思う。」

後は無事に運搬出来ることを祈るのみ……」

その脇で説明するロディが、ふと足を止めた。

「何かな、この騒ぎは？」

通りがかった食堂に、思わず近寄る彼。

「何だか、美味しそうな匂いだすな。」

鼻を小さく動かしながら、ガツチャも寄る。

「……ロディ？」

彼等の気配に敏感に気付き、振り向くミーサ。

「どうしたの、みんなが集まって。」

食堂内を凝視して動かないバーグ、世羅とザナナの上から覗き込む彼。

その中は現在、数名の士官が席を並べ、異様な緊張感と共にある。

「何だかね…勝負とか言ってるのよ。」

えーと…パンリとシユナ……だっけか。

ルベランセの料理人の座を賭けてとか何だとか。」

「へえ……面白そうだね。」

興味のある素振りで、前へと移動する彼。

そして、バーグに並ぶ。

「でも、そんなケチケチしないで、二人とも雇ってあげればいいんじゃないかな。」

「ところが、そうはいかねえ事情があるんだよ。」

脇の彼は答えた。

「これから先は、特殊な任務らしくてな。
信用を重ねた人員でないとダメなんだと。」

「なるほど、料理人一人つてのが最低限の譲歩ってわけだ。」

ロディは口髭を撫でながら笑う。

「…それで、戦況は？」

「シュナはプロ。」

パンリの方は……一人暮らしが長いようだが…」

バーグの言葉も途中に、口笛を鳴らす彼。

「ぜひとも、勝ってもらいたいね。」

シュナちゃんに。」

「……あんた正直だなあ。」

バーグは顔をしかめながら、思わず吹き出した。

「よしっ、完成！！」

シュナの高声に、パンリが振り向く。

「ねえ…まだ、制限時間の前だけど、審査員の人には出来たてを食べてもらいたいよね。」

台の上にある砂時計を気にしながら、戒に対して言う彼女。

「先攻、私でいいでしょ？」

「……いいぜ。」

椅子に座ったままの態勢で、面倒臭そうに低い声で返す戒。

パンリは、その脇で両肩を落ち込ませた。

戒の提案で料理勝負が始まったというものの、相当に投げやりな発言が目立っている。

ここまでくると、彼が本気でシュナを潰しにかかっているのか非常に疑わしい。

そんな猜疑さぎの目を伏せながら、パンリは辺りを何気なく見回す。すると、シュナが捨てた野菜くずが目についた。

「お待たせしました。」

生魚と新鮮野菜の和え物。そして、ホタテの海鮮リゾット。共に、プレオルン風味です。」

シュナの出す料理皿から湯気が立ち昇る。

途端に鼻腔をくすぐる芳香を感じ、ブリッジの面々からは、一様に感嘆と溜め息が洩れた。

「いやぁ……凄いつすね…。」

鮮やかに盛り付けられた各料理を前に喉を鳴らしつつ、タモンが言った。

「これほどまでとは……思わなかったよな。」

左右に目移りさせながら、自然とフォークを手に取るリード。

「と、とにかく、それじゃ……いただきましょうか。」

料理の醸し出す熱に圧倒され、フィンデルが促す。

（今回作ったのは、私の得意料理……。
万に一つも…負けるはずないわ。）

自信に満ち満ちたシュナの笑顔の前で、初めは乗り気でなかった面々が次々と手を動かしてしている。

「う…美味しい……。」

オリーブオイルをあしらった魚の身を口に含んだ途端、呟くフィ

ンデル。

「昼食抜いてて、良かったっすね。」

「ああ……忙しくて良かった……。」

タモンとリードはリゾットが止まらない。

「あと、女の子にはサービスです。」

メイに対しては、隠していたプリンをそっと出すシュナ。

「わーい！

プリンなの……！」

顔を輝かせる彼女。

「……シュナさん……いつの間にデザートまで……。」

そんな食堂の反応を、パンリは厨房から羨望の眼差しを送る。

目の前の砂時計の砂が完全に落ちたのは、ちょうどその頃だった。

「ねえ……ボク達も食べれるよね？
後で……」

心配そうな顔で世羅が訊いた。

「おまえは、さっきからそればかりだな。」

バーグが苦笑して答える。

「……だけどよ……決まっちまうんじゃないかねのか……これ。」

「そうだよねえ。」

そして彼の呟きを、ロディが続けた。

「ただでさえ、料理勝負は先攻が圧倒的に有利。
人は空腹に近いほど、食べ物美味しく感じるからね。」

視線の先には後の事を考えず、目の前の料理に対して全く手を休めないブリッジの面々がいる。

「フルコースでも、出される皿は薄味から始まる。
後に出す方は相当、味を濃くしないと印象を残せない。
その点も踏まえて、この順番は決められたのかな？」

「……さあな。」

バーグは言った。

「ねえ……ボク達に分まで残してくれるかな……みんな……」

涙目で訴える世羅。

「はは……たぶん……な。」

バーグは、もう呆れ顔になって言った。

「……それにしても……。
ものすごく……気になるんだよね。」

「何が？」

呟くロディに対し、ミーサが訊く。
シュナが優勢なはずなのに、彼は終始、険しい表情をしていたのだ。

「いやなに、あまりにワンサイドゲームだからさ。
本当にこれ、ただの料理の勝負なのかな？
僕は途中から見たから、分からないんだけど……」

「その……はすだけど……」

「動きが、あるみたいだ。」

それまで、黙っていたザナナが呻く。

料理を両手に携えたパンリが厨房から姿を見せたのは、まさにその時であった。

「あの…皆さん……よろしいでしょうか…」

申し訳なさそうにパンリが声をひり出すと、皆の手が止まった。

「あ……い、ごめんなさい…。」

そこで料理に夢中になっていた自分に気づき、照れ笑いを浮かべながら口をハンカチで拭うフィンデル。

「すっかり…これが料理勝負だったこと…忘れてたっす。」

「……俺もだ。」

呟き、フォークを置くタモンとリード。

メイに至っては、パンリを全く無視してプリンを食べ続けている。

「これが…私の料理です…。
良かったら…ご賞味下さい…。」

「!？」

目の前に出された皿に、全員が驚愕した。

平凡なコーンポタージュ。

そして胡椒をまぶした白く乾いたパスタ、野菜を刻んでカップに詰めたコールスロー・サラダである。

「……これ…なのか？」

思わず問いかけるリード。

「す、すみません。」

これくらいしか…私には…」

「まあまあ、食べてあげたら？」

シュナは余裕の笑顔で、相手を擁護する。

「ふむ…」

若干冷めている、塩で味付けされたパスタ。
そして、その中の具は同じく塩味のベーコン。

美味たる料理の後では喉元を通る量に限界がある。
一口食べてから、皆が一齐に手を止めた。

「うーん…悪くないとは思っくんすけど…」

タモンはパンリのパスタとシュナのリゾットを交互に食し、審査員の真似事を一応やってみる。

「…！」

だがそんな中、何気なくサラダを食べていたフィンデルが、突然何かに気付いたようにパンリの方を向いた。

そして、奥の厨房から不敵な笑みを浮かべながら出て来る戒と目を合わせる。

「それでは……審査をしてもらおうか。」

「……そ、そうね。」

フィンデルは、静かに答えた。

「では、どちらが『ルベランセの』料理人に相応しいか」

彼の、特別なアクセントを置いた言葉。

それまで、難しい表情をしていたタモンとリードが素早く顔を上げた。

「そろそろ示して頂こうか。
まずは…」

彼等の様子を確認してから、満足そうに続ける戒。

「先攻のシュナ。
こいつの方が相応しいと思う奴は手を上げて示せ。」

その言葉の後、勝利を確信して既に笑みがこぼれていたシュナが凍りつく。

一人。
メイのみ。

この現実と光景に驚いたのは、彼女だけではなかった。
遠くで見守っている者達も、対戦相手のパンリでさえ我が目を疑っている。

「えっと……みんな…何の冗談？」

唇に笑いを残したまま、シュナが呟く。

「『お前の負け』だってことだろ。」

「はあ？」

ちよつと待つてよ…何？

これ、もしかして、出来レース…？」

戒の言葉に顔すら向けず、審査員の面々を睨む彼女。
その視線をかわすように、全員は目を背けている。

「どうなつてんの？」

私の方が美味しいに決まってるじゃない！

こんな料理と比べたつて…」

シユナは、パンリの作った料理を乱暴に掴んで口に運んだ。
やはり、想像以上の味は無い。

「…そうだ。」

君の方が味では勝っている。」

取り乱す彼女に対し、無口になっていたブリッジの面々。
責任感からか、先んじて声をかけるリード。

「じゃあ…なんで!？」

「俺様は『味で勝負』だなんて、一言も言っていなかったよな。」

その戒の言葉で、背後のパンリは理解することが出来た。

「戒さんは…』どちらがルベランセの料理人に相応しいか』と言った……そういうことですか…」

彼の呟き。

それに同調するように、タモンとフィンデルが軽く頷いた。

「何それ？

意味がわからないんだけど。

そんなの料理が上手に作れるってことと同じ意味でしょ!？」

全員に向けて、言葉を続けるシュナ。

皆、目を泳がせる中、戒が彼女の肩を強く掴んだ。

「まだ分からねえのか。」

そして彼女の腕を強く引き、厨房へと導く彼。

「何よ、そんなに強く掴まないでよ!

痛いじゃない…」

「見る。これがお前の出したゴミだ。

そして、汚した箇所。

これを綺麗に後始末するのに、水をどれだけ使わなきゃいけない?」

魚の匂いに塗れた、まな板。
その臓物の入ったバケツ。

彼女はそれらを前に、まだ理解できずに黙っている。

「そして、パンリの方は……」

「！！」

戒が向けた視線の先。
そこは調理前と殆ど変わらない状態で、整頓されていた。

「ようやく気付いたようだな。」

驚きの表情を浮かべる彼女に対し。

「空で最も貴重なのは水。

使った水の量、そして後始末に使う水の量。

それらを考えると、今回のお前の調理は地上の仕事だが、パンリの方は既に空での仕事……そういうことだ。」

戒が断言する。

「水だけじゃねえ。

限られた食料の中で料理を作れるという点で、パンリはお前を大

きく上回っている。

……それに、いったん空に出れば、皆が揃って食事が出るわけじゃねえ。

冷めたリゾットを誰が食う？

痛みやすい生魚なんて、もってのほかだ。」

「だって！

そんな専門的なこと、知らなかったんだから仕方ないでしょ！！
分かっていれば、私の方が上手に作れたわ！！」

叫ぶ彼女の声が、食堂全体に響き渡った。

「確かに、あらかじめ知っていたら、お前の方がいい仕事をするに決まってる。

だがな……ちょっと考えれば、こんなことすぐに分かるはずなんだけ。」

客を一番に考えていれば、な。」

「……！」

その一言で、圧倒的な敗北感に襲われるシュナ。

そんな中、自分が食材を捨てたバケツの中の一つの異変に気付く。

「ちなみに、あの細切れにしたサラダに関しては、お前が生ゴミとして捨てた野菜の断片で作った。

これは俺様の指示じゃない。」

誉められたパンリが、食堂側で申し訳なさそうに頭を下げる。

「……決まり……ということかしら。」

沈痛な面持ちでフィンデルが場を締めた。

空気を讀んだリードが席を立ち、タモンがメイを連れて食堂を去る。

「……くっ……！」

唇を噛んで足早に去ろうとするシュナ。

「もしも、今日お前が作ったものが……あの時、学校の食堂で作ってくれたような出来合いの料理だったなら……やばい勝負だったかな。」

横切った瞬間、戒が言った。

「……あんだ……！」

……そんなの憶えが無いって……」

シュナの言葉に対し、それ以上の返事は無い。

「……そっか……嘘だったのね……」

肩から力を抜き、ゆっくりと厨房を後にする彼女。

「……艦長。」

他のみんなの分も余分に作ってありますから、食べてもらって下さい。」

最後にフィンデルに近付き、食堂の外で見守る者達を眺め回してから、シュナがコック帽を脱ぐ。

「勝つものだと言ったから、お祝いに……と思って。ほんと馬鹿ですね。」

目に溜めた涙が今にもこぼれそうなのを見て、フィンデルはかける言葉を見つけることが出来なかった。

「調理場は……ちゃんと綺麗にしてから帰ります。だから……水……汲んできますね。」

言い切ってから、集まった人垣を分けて逃げるように去る彼女。

「これだけ制限時間をもうければ、あいつの性格なら、必ず全力を出してくると読んでいた。それが敗因だな。」

「……すみません。色々と疑ってしまつて……。」

戒が疲れた様子のパンリの肩に手を掛けた。

「全ては俺様のためだ。」

それよか、勝ったのに嬉しくねえのかよ、パンリ。」

「……戒さんだつて……嬉しそうな顔、してないじゃないですか。」

瞳を上に向ける彼。

「……俺様は、元々こういう顔だ。」

「……………！」

とぼとぼと消えていく彼女の背中を見るうち、パンリはたまらなくなつて前傾する。

そこで行く手を遮る太い腕。

「勝った奴の言葉は、慰めにはならねえわな。」

食堂に入つて来たバーグが、煙草を噛んだまま言った。

艦長室で小さなテーブルを囲む四名。

「…いや、もつたいない。

私のために、このような部屋。」

モンスロンは、仰々しく周りを見回してから恐縮する。

「……いつまでも臨時の部屋では疲れると思ひまして…。

ここは遠慮なく、自分の部屋のようにお使い下さい。

私も艦長になったものの、正直、部屋まで替えるのは面倒だと思つていましたから…」

答えるフィンデル。

駐屯地の残務も途中にルベランセへと来訪したギルチが、その脇で頷く。

「くれぐれも、モンスロン卿には、タンダニアに着くまでは不自由の無いように計らつてくれ。

万一の事態には……ロディ、君も護衛に当たるように。」

「僕が？」

彼の言葉に、さも意外そうに目を丸くするロディ。

「君をルベランセに乗せているのは、密かに『その意味』でもあるんだ。」

しっかりと働いてくれよ。」

「……はいはい、了解であります。
提督殿。」

「ふふ、よろしく願います。」

欠伸あくび混じりに答える彼の様子に、つられて笑うモンスロン。

「ところで、これからの予定だが……知つての通り、他の艦隊を北へと向かわせた。」

君達も速やかに、これを追ってもらいたい。」

ギルチは咳払いをして気を取り直した後、フィンデルに言葉をかけた。

「前回話した作戦に大きな変更点は無い。
向こうの指揮官には全てを伝えてある。」

それに従っていれば、事は自然と運ぶはずだ。」

「……わかりました。」

その目を見ずに、うわの空で答える彼女。

「なお、ルベランセには特殊部隊を護衛につかせている。」

少しクセのある連中だが……軍隊において唯一、実戦経験が豊富な者達を呼びつけた。」

ギルチは構わずに続けた。

「隊長は、コルツィデスタロッサ少尉。

かなり若いが腕はある。

機会があつたら、挨拶しておいてくれ。」

「……はあ。」

だが返されるのは、またも溜め息交じりの返事。

「どうした？」

さつきから妙だぞ、フィンデル。」

ギルチの口調はついに、咎めるような厳しいものになった。

「まさか、早くも艦長が重荷になったというんじゃないだろうな？」

「……違うわよ。」

だが言葉とは裏腹に、心あらずといった彼女の様子。

ギルチは眉をひそめる。

「……ロディ……おまえ……！」

あれほど注意したのに、また何か問題を起こしたな…」

「してない、してない。」

慌てて手の平を顔の前で左右に振り、否定する彼。

「理由無しに気合が入っていないのは、もっと困るぞ。
モンスロン卿を護衛する任務は軍をあげての一大…」

「いやいや、どうぞお気楽に。」

そこで、モンスロン自身が後頭部を掻きながら笑った。

「どうぞ、私の扱いなど適当でお願いします。
変に気負ってもらうと、私まで息苦しくなってしまうすゆえ。」

「…しかし、騎士団の動向を考えれば、そういうわけには…」

「人間……どんなに気を付けても、死ぬ時は死んでしまいますからねえ。」

あっけらかんとした口調と語句だったが、彼の一言に場は静まり返る。

「…おっと失礼。」

出立前に、これは縁起が悪すぎましたな。」

気付き、にこやかに笑う彼。
やはりどこか食えない初老の騎士に、ギルチは難しい表情を隠せないでいた。

「…とにかく、何か悩みがあるというのなら、旅立つ前に私が処理しよう。」

遠慮なく申し出てくれ。」

「いいわ。」

そういつのじゃないのよ。」

フィンドルは素っ気無く返した。

「…ただ、誰もが…幸せになる方法って無いのかしらって……」

そして呟かれる言葉に、何も知らないギルチは、ロディに意見を求める視線を投げかけた。

「まるで乙女の恋の如き、甘く苦しい幻想かな。。」

気取ってかけられる軽口。
思わず、唇をきつく閉めるフィンドル。

「まあまあ、そんなに恐い顔しないで。」

しかし、このあたり……兵法に照らし合わせるとどうですか、
軍師殿。」

ロディは続けて、試すような口ぶりでモンスロンに訊いた。
「ギルチも静かに目を向ける。」

「誰もが幸せに……ですか？」

困ったように瞳を閉じ、くせの強い髪の毛を掴んでこねくり回す
彼。

「……随分と意地の悪い問いかけですな。
それは兵法とは最も対極ではございませぬか。」

「あはは、確かに。」

ロディは笑い、両手を叩いた。

そこでフィンドルは怒ったようにして、席を立つ。

「……私は数日後には、異動になる。
そうしたら、また暫く会えなくなってしまうだろう。」

留まるよう、すかさず声をかけるギルチ。

彼女は扉を半分開けたままの姿勢で、わずかに首だけを振り向けた。

「いよいよ中王都市の首都……中枢に乗り込めることになった。」

モンスロン卿の亡命にせよ、ロディの件にせよ、これら他国への『繋がり』が効いてくる。」

真剣な眼差しのまま続ける彼。

「君にも色々と不満があるかもしれないが、逃げてばかりいても何も解決しない。

我々の世代が意識を持って軍隊を変えなくていかなければ、国の将来は危うくなってしまふばかりだ。」

静まる空気の中、響き渡る小演説。

彼は一呼吸、間を置いてから、続きを述べるための口蓋を開いた。

「もういい加減、自分の才覚を出し惜しみするのはよしてくれ。

この任務の後……君が私の良き右腕として働いてくれることを、私は切望している。」

「……お、ずるいぞギルチ。

僕をさしおいて、そんな素敵な殺し文句……」

そこでふざけながら口を挟むロディに、ギルチは睨みを効かせる。

一方、対するフィンデルは漫然とした瞳で室内全体を望んでいた。

「……それは……」

だが、何かを言いかけた時、廊下を通りかかるシュナと出くわし

てしまう。

「あ……艦長……」

不意に現れた彼女は荷物をまとめており、既に帰り支度を済ませていた。

「……ごめんなさい、もう行くわ。」

とにかく、この任務は全力でこなしますから。」

早口を室内へ残した後、素っ気無く扉を閉めるフィンドル。

「……見事にふられたな、ギルチ。」

ロディは歯を剥いて笑った。

「諦めないさ。」

こう見えても私は、お前よりもよっぽどしつこいんだ。」

「……これはこれは……とても一流の紳士とは思えないお言葉だね。」

緩やかな時間が流れる空気の中、互いに立ち上がる二人。

それから彼等は、多くを語らずに堅い握手を交わし、軽く肩を叩いてから別れたのだった。

教会へと伸びた坂の前で、馬車が止まっていた。
規模としては、中型の装甲馬車に近い。

周囲に気を払い、注意深く身を隠しながら荷台部分を覆う幕をめぐると、中は檻おりであることが判った。

猛獣を入れるような厳つい様相。

おとなしくしている馬達の間を抜けて、空の御者の席に登る。

檻の前に設置された小部屋。

その中を覗けば、奇麗な寝台とテーブル、家具などが置いてある。

人間が簡単な生活を送れるようなスペースだった。

これだけならば、ただの小さなサーカス団とでも思いたいところだったが、中に見知った人物

シスター・エルジャの姿を認めたことで、彼の判断は混迷を極めた。

「…それでは、院長。」

「…取引はいつもどおりで…」

そんな彼女と対面している老人。
贅沢なローブ姿。

その人相を確認できた直後、デチャードは脇の支柱を二回叩いた。

「……む？」

どなたですかな。」

勢い良く、振り向く彼。

「中王騎士団の者だが。」

「……これはこれは……。」

うやうやしく笑う。

その老人こそ、探していたマーミリオン本人であった。

「…デチャード……！」

一方、外から現れた彼の姿に驚きを見せるエルジャ。

「院長も人が悪い。」

貴女に騎士団のお知り合いがいるなんて、初耳ですぞ。」

マーミリオンはきつめの視線を、そんな彼女に浴びせる。

「…そんなもの、お前に教えて何の得がある。」

テーブルに向けて、ナイフを放るデチャード。

「……確かに。」

柄に三本の足の馬が刻印されている、そのナイフを手にとって確認する彼。

「俺は源炉の様子を見に行けと言われて、ここまで来た。」

「これは失礼。
行き違いになってしまいましたか。」

老人は、喉の奥で笑いを嚙み殺した。

「…視察というわけですな。」

今期の完全源炉がいつまで経っても出来上がらない、騎士団は疑っていらつしやる。」

「話が早いな。」

「そして、貴方は既に実情を把握した……と。」

「…そういうわけだ。」

施設がもぬけの殻になっている理由を説明してもらっぜ。」

「まあ、立ち話もなんです。

……どうぞお掛けになって下さい。」

椅子を引く老人。

デチャードはおとなしく、それに従った。

「紅茶なぞ、いかがです？

美味しい茶葉が手に入りましてね……」

「遠慮する。

悪いが、この水は他の地域と比べると、相当に不味い。」

自分が吐き出す言葉により、デチャードは己が激していることを知る。

「そうですか。」

一方、わずかばかりも表情を変えずに陶器を置くマーミリオン。

「……ところで、デチャード殿。

ご存知ですか？ 完全源炉というヤツがどのように精製されるか。

「

「知らねえな。

出来た物は少しだけいじったことはあるが……」

わずかに思い出す、ルベランセ潜入時の記憶。

「簡単に説明すれば、長い月日をかけて『源を生み出す^{フェル}』ことを『機械』へと憶えこませる行為…。

錬金術で作った、特別な金属媒体にすな…。

そう、あれは念通球の集合体。

一定の記憶を封じることが出来る、魔導人形の脳幹にも使われている技術です…。」

「成る程な。」

デチャードは、陶醉したように勝手に話し出す老人に対し、適当に相槌を打った。

「だが人形と明らかに違う部分は、源を抽出してエネルギーに変えるという単純な動作のみを金属に

記憶させるところ、そして永久機関となると話はもっと別です。

いわば、鋼鉄の心臓を造り上げる感覚と申しましょうか。

ああ、確か、そんな怪物の伝説が聖書の物語のどこかにありましたかね…。」

指先を小刻みに動かして、病的に笑うマーミリオン。

そんな理解が及ばない様子の相手に、デチャードはさらに嫌悪を感じるのであった。

「御託なんて並べなくていい。

とにかく、今期の源炉が一基も上がらない理由だけを答えろ。」

「こつちも報告があるんでな。」

促す彼に、マーミリオンは瞳に失望を浮かべた。

「……そもそも…完全源炉とは、一基を製造するのに丸半年かかります。」

技術者……いや、この場合は源法術士も兼ねているのですが。

…彼等が丁寧に、同時進行で数百基程度を製造。

そして、実務に堪えられる動きをする物がわずかに一基完成すればいい……それくらいの低い確率、

デリケートな作品なのです。」

「だが、それでは…『いつかは完成する』と聞こえるな。」

ガキの使いじゃねえんだ、そんな言い訳を報告する気はねえぜ。何度も言うが、俺は『理由』を聞いている。」

「理由……ですか。」

「こちらが聞きたいくらいですよ。」

「?」

その時、面前のマーミリオンの瞳から、狂信的な光が消えた。

「…全くの原因不明。」

「こんなことは初めてです。」

そして物事を冷静に述べる彼。

「理由も無しに……ある日突然、完全源炉が産まれなくなったので
す。」

我々にとっては、『1+1』が『0』になったようなものですよ。
」

「事態の解明すら、全く出来ていないってことか。」

そして両手で頭を抱え、テーブルに擦り合うくらいに近づけて震
える彼に、ヂチャードは声をかける。

小部屋の中に、一瞬の静寂が流れた。

「……ええ……」

ですから、私は全てを手放すことにいたしました。」

「……………何？」

彼の言葉を問い返すヂチャード。

「この件で騎士団は、私に責任を追及するでしょう。」

はつきり申しまして、これからも源炉完成の目途は立っておらず、
罪を免れません。」

目をはつきりと開き、妙に晴れ晴れとした表情。

だがヂチャードには視線を合わせずに、その老人は虚空に向かっ
て話している。

「各種の調査のため、私が生涯に蓄えた財産もその殆どを使い果たしております。」

そして、土地も家も全て根こそぎ置いて逃げるわけですから、その前に街からは奪えるものは全部奪っていいこうと思ひましてね。」

「……!?」

そこでようやく、デチャードは立ち上がった。

だが、背後から首元に押し付けられる冷たい刃。生命の危機を感じた身体が、一斉に硬直する。

「……そんな中に、お前が来た。」

やはり私はついている。

ぎりぎりで、私の判断が競り勝ったのだからな。」

椅子と調子を一転させて、マーミリオンは笑った。

「……道中、ボディーガード料はサービスしておくぜ。
お客さん。」

背後で呟く、着物の男。

彼が抜いた小太刀から伝わる殺気に、デチャードは両手を挙げた。

「良かったら……時間一杯まで、艦内を見ていつて頂戴。」

「……いいんですか。」

脇で並んで歩くフィンデルに対し、シュナは伏せ目がちに言った。

「……ごめんなさい。」

戒くんの知り合いなのに、ロクに構うことが出来なくて。
それに……」

「すみません、気を遣ってもらって頂いて……。」

彼女は、元気の無い表情で笑う。

「……大丈夫です。」

戒の奴が……どうして私を突き離すのか、分かっているつもりですから。」

「……危険だから、ね。」

フィンデルの言葉に頷く彼女。

「ああ見えて、あいつも気を遣うみたいです。」

「いい友達ね。」

「…今度こそ、手伝ってやろうと思ったんですけど…また無理みたい…。」

小さく続けられる、彼女の言葉。

フィンドルは彼女の若さに気を取られ、何かしらの目的意識を持っているのを見逃していた。

戒の口車に乗り、競わせたのは早計だったと後悔する。

そんな中。

二人は、廊下の曲がり角の先に人影を見止めた。

「…君の言っていることは、無茶苦茶だな！」

そして響き渡るリードの怒号に、自然に身を隠す。

「わかってます…」

その足元。

床に両手を付けたまま答えるのはパンリ。

「…勝負で勝った君が、自分の代わりに負けたあの子を乗せてくれ
と言う。」

全く道理が通ってないぞ。

ああそうか、君は、あの勝負を本当の茶番にするつもりか。」

リードは、更に語気を強めながら彼を責めているようだった。

「……君の申し出は却下する。

民間人とはいえ、このルベランセに乗る以上、軍人の扱いになる
ということをお忘れな。

今は離陸前で忙しいんだ。

これ以上邪魔をすると、軍法会議にかけろぞ。」

脅しをかけ、そして離れようとする彼の足元に、パンリはしがみついた。

「お願いします！」

……気付いてしまったんです……自分は覚悟が足りないって
本当にふさわしいのは……きっと……彼女の方で……！！」

「だああ！」

離せと言っている……！！」

パンリを片足に乗せたまま、ぶんぶんと振り回す彼。

「……あいつ……余計なことを……！」

こんな……情けをかけられて、私が喜ぶとでも……！！」

目の前の思いがけない光景に、飛び出そうとするシュナ。
それをフィンデルが制した。

自分達と同様に、反対側から顔を覗かせて落ち着かないようにしているミーサの姿を見止めたのだ。

「……ちょっといいですか。」

やがて、通路から姿を現す彼女。

「……何だ!？」

今、いそがし……なんだ、ミーサか……」

パンリのおかげで腰まで下がったズボンを慌てて上げつつ、振り返るリード。

「えっと……やっぱりですねえ、人員が不足なんですよ。」

私、ようやく源炉のことが少しずつ分かってきて、いじれるようにはなっただけど……そっちに

付きつきりになると、まだ格納庫の仕事まで手を回せなくて……。

もー、猫の手も借りたっていうか。」

「……梅さんがいるじゃないか。」

「それは、ホントの猫でしょ。」

リードの精一杯の冗談に、真面目な顔で返すミーサ。

「とにかく、どうしても雑用係が欲しいんですよ。」

「……なんで、そういうことを出発直前に言うかな!」

苛々した様子で、手に持った書類を手の甲で叩き鳴らす彼。

「まったく…今さら人員確保なんて…」

「じゃあ、この子でいいんじゃないですか。」

パンリを見下ろして笑みを浮かべ、ミーサは言った。

「……食堂の一件は知ってるだろ？
この子はコックに選任された。」

「だから、コックは、あのシュナって人を呼び戻せばどうですか。」

「!」

彼女の提案に、二人は同時に動きを止める。

「……さっきの話、聞いてたのか。」

「私だって、鬼じゃないんですって。」

こんな風に言い争っている現場を前にして、黙って通り過ぎられないじゃないですか。」

困った表情を隠さないミーサ。

そしてパンリの表情は、みるみるうちに笑顔に変わる。

「……わかったよ……フィンデルに相談する。

とりあえず、シュナを探して来てくれ。

もしかしたら、まだ近くに……」

「私が……！」

私が行ってきます……！」

リードが言うが早い、パンリは矢のように駆けて行く。

それを目で追いながら、ミーサも穏やかに笑いを洩らした。

「……いい乗組員達でしょう？」

きつと、楽しい空の旅になるわね。」

「……！！！」

廊下の角で、シュナが涙をこぼす前に彼女を胸に抱き寄せるフィンデル。

そこでようやく、リードは彼女達の所在に気付いた。

「……軍隊で一連の沙汰を人情で覆すなんて……あつてはならない。でも、どうしてもそうしたいのなら……黙認する。

あの戒とかいう小僧には、君が説明するんだぞ、俺はもう知らない

いからな。」

彼は呟いた後、横を向いた。

「わかってるわ……。」

それが艦長の務め…責任だものね。」

フィンドルは残った一番の問題を前に、力無く笑って返すのだった。

「…どうする？」

口封じなら殺すのが一番だ。

……女ならともかく、この歳の男なんて買い手がつかんぞ。」

テツジは抜いた小太刀を構えたまま、デチャードを前にして言った。

「ふ、手荒な真似はしないでくれよ。」

中王騎士団は大切なオーナー『だった』のだからな。」

下卑た笑みで、手にしたカップを向けるマーミリオン。

そこで静かに垂れ幕が上がる。

「…なら、私に頂戴な。」

騎士団の奴には『借り』があるのよ。」

車内に入る、女口調の男。

露出の多い服装、だが肌には生傷が目立つ。

そしてその背には、まだ多くの屈強な男達が並んでいた。

「…マジ、ガキ共の値踏みは終えたのか？」

「そうね。」

一人あたり5万から6万つてとこかしら。

ただ、器量がある娘だったら10万にはなりそう。」

彼はテツジに返ししながら、手を上下に振った。

「……どういう…ことだ？」

それまで、保身のために沈黙していたヂチャードが問う。

「なんだ、こやつには教えていないのか、シスター。」

「おやめになって下さい。」

「マーミリオン様。」

笑うマーミリオンに、懇願する視線を向ける彼女。

「教えてやればいい。

我々は…もう長い間、定期的にこういう『取引』をしているということを。」

「……………！！」

鈍重な空気が、頭からのしかかる思いがした。

「貴様、少しもおかしいとは思わんかったのか？
誰も援助しない孤児院が成り立っていたことに。」

続けられる老人の言葉に、院長の視線は下がっていく。
真実は、その反応が示していた。

「……………シスター……………エルジャ……………。
あんたは……………！！」

首元に突きつけられた刃に、自ら前傾して触れる。
デチャードはそれくらい、噴き出す感情を抑えることが出来ずにいた。

「…人さらいが……………まさか教会の中にいるなんてよ……………！！」

「……………デチャード……………」

彼女は全身を震わせたまま、言い訳を語らない。

一方のマーミリオンは、そんな様子の二人をさもおかしそうに眺めた後、テツジとその仲間に顔を向ける。

「しかし……値踏みの話だが……」

それなら、全員で150万Yは下らんな。」

「……全員……!?!」

エルジャが声を上ずらせた。

「そんな……約束が違います……」

「一人も二人も……この際、全員も変わらんだろう? 何を取り乱している?」

マーミリオンは返す。

「あんたも、もういい歳だ。」

これで私がこの街を去る饑^{せんべつ}別として、あの教会と土地はくれてやる。

老後を達者で暮らすがいい。」

「……それでは……子供達があんまりではありませんか!?!」

「あんまりだと!?!」

己の保身のために、その子供達を売り続けてきたこの畜生が何を言うー!!」

恫喝。

そしてその言葉に対し、ヂチャードですら否定の言葉を吐きもせず、恨みの念を向けている。

彼女は力無く、その場に膝を落とした。

「…では、この教会の子供を全て積み終えたら、次は外れの屋敷だ。あそこの貧乏家族も、子沢山でな。あり余っているぞ。」

そんな中、マーミリオンは嬉々として言う。

「仰せのままに、いたしましょうか。」

テツジが手下に目を向けつつ、それを命令の言葉に変えながら言った。

そこで右目に包帯を巻いた小人が中に入り、彼の代わりにヂチャードを押さえつけて拘束する。

「くつく……私にはツキがある。

逃亡を決行しようとした矢先に、偶然、お前達のようにこの筋に詳しい者が協力してくれるのだからな。」

「……何を言っている。

先に使いをよこしたのは、あんたの方だろう?」

入れ替わりで部屋を出ようとする直前、テツジは笑う。

「護送列車と警官隊を襲わせてまで、俺達を…」

「言っている意味がわからんな。

だが、もしも通常では考えられん不可解なことがあったというのなら、それはきっと……神のおぼしめしというやつよ!!」

そこで、マーマリオンはテーブルに置いてあった騎士団のナイフをデチャードの片足へ突き刺した。

「……ぐっ……!!」

膝を折り、床に伏す彼。

その上に、さらに小人が乗りかかる。

「……ロクな死に方しないぜ、あのじじいはよ。」

その光景を尻目に、小さな声で呟くテツジ。

「お兄様、ホントに手を組むわけ?
あんな奴と…」

「まあ、各地に顔は効きそうだ。
しばらくは酒と金にありつける。」

さらなる小声で囁くマジに対し、テツジが鞘に収めた小太刀を振り上げた。

「……マー……ミリオン……!!」

離れ行く者達。

激痛で朦朧とする意識の中、それらを追いながらデチャードは怨嗟の声を上げる。

「安心しろ。」

こんな腐った土地で虚しく死んでいくよりも、私の糧になった方が子供達も幸せというものよ。」

「……ふざ……けるな……貴様……!!
土を……水を……腐らせたのは……てめえの山だ……」

「吠えるな、野良犬。」

片目だけを開き、侮蔑を込めた言葉を上から浴びせる老人。

「ここ一帯は、私の力で保ってきたようなものだ。
預けた財産を返してもらっただけのこと。
そのどこが悪い……!?!」

次の瞬間、椅子を転げ、大きな音を立てる。

外へ向かおうとしたテツジ達は足を止め、車内へと向き直った。

「お……………おお…お前だれだ…！？」

マーミリオンと同様にうろたえて、思わずヂチャードから手を離す小人。

彼の横顔は、目元が醜く腫れ上がり、口が恐ろしく裂けた異形の顔面である。

「う……………うわ…！！」

そして、その口から唾液を噴き出して威嚇する姿に、ついに彼等は後ろへ飛び退いた。

「…おまえ…その顔は一体……………！？」

形相が変わり果てたヂチャードに対し、言葉を呟くテツジに向かって、飛ぶナイフ。

彼は瞬時に仰け反り、命中する寸前で小太刀の鍔で弾く。

さらに眼前に伸ばされた腕。

手首のみで投げる一閃。

それさえもテツジは身体を反転させながらかわし、姿勢を直した直後に相手へと斜めに抜き身を切り上げる。

「　　っつおおー!!」

それを気迫の声と共に取り出したナイフで受け止め、勢いを流すヂチャード。

そのナイフは衝撃に耐え切れず、柄を残して碎け散る。だが彼は瞬時に、代わりの得物を皮鎧の胸元から抜き出して再び両手に取り、地を転がって集団を抜けた。

「逃がすかあ!!」

背後。

両手を前に突き出して追いつく、先ほどの小人。

「…………どけ。」

ヂチャードは急停止し、逆手に持ったナイフを彼の眼球に突き立てる。

「いっ…………がやああああああああああ!!」

小人は顔面からナイフの柄を生やしたまま叫びを上げて、部屋の中を転げ回った。

「あ……ららら……」

ゴジちゃんつてば、残ったもう片方の目もやっちゃった……。ついてないわねえ……」

家具や小物を散らばらせ、やがてうずくまって痙攣する彼に、呆れ顔で呟くマジ。

その先では、勢い良く飛び出して脱出して行ったデチャードが、外で待機中の手下達を斬り進んでいく。

「……デチャード……」

後を追うように小部屋から飛び出すシスター・エルジャ。

だが彼は一切振り向かず、出血した足を抑えながら、ひたすら坂を駆け上がっていた。

（ガキの頃に悪さした、こんな『人を驚かせる顔』が役に立つとはな……！）

駆けながら、順手に握り締めたナイフに力を込める。

そして、その右手の小指に光った輪が消えると、元へ戻りゆく彼の顔。

(……しかし、全員を連れて逃げられるか……?)

思い返すデチャード。

現在、教会にいる孤児達は20は超えていた。

建物に辿り着いた後、窓から中の様子を用心して覗く。

(……!!)

途端、彼は愕然とした。

武器を手にした、かなりの数の男達が、まだ教会内に留まっていた。
そして子供達は彼等に怯えきったまま、中央で寄り添うようにして固まっていた。

(…万事……休すか!!)

目に見える範囲だけで、相手の人数を量ったのは愚かだった。
騎士として、諜報員として、この程度の予測は出来て然るべきなのだろう。

振り返れば、坂下から追って来る男達。

事態が教会の中に知れば、子供を盾にされて状況は更に不利となるのは明白。

チチャードは、まず下から押し寄せる相手に向かうため、痛めた足で地を蹴った。

「……！！」

急に戻って来る自分に氣にとられた一人を蹴り飛ばし、続けざま別の男に肘鉄を食らわせる。

この程度なら、不意を突けば、素手でも充分渡り合える。
だが、リーダー格の着物の男はどうか。

「……貴様！」

…死に戻ってきたか……！！」

乱れる集団の中。

小太刀を向けて、青眼で構えるテツジ。

その凶刃を前に、足へ再び激痛が走り。
体内の齒車が狂う。

坂の傾斜も加わり、崩れる態勢。

そして、視線を戻せば。

既に自分の懷に踏み込んでいる相手の姿に、ヂチャードは死を予感する。

中天に舞う血。

斜めに斬り捨てられて、肉塊が飛んだ。

「……っ!？」

直後、自分の代わりに体を落ち込ませる修道服を、抱きとめるヂチャード。

「ちー!」

人間を斬り抜いたものの、仕損じたことを悟り、テツジは舌打ちをする。

「……なぜだ…シスター…!？」

「……う…」

ヂチャードに上体を起こされて、血と泡を吹きながら口を動かす彼女。

「……ごめ…なさい…。」

「！！」

エルジャは、最期の際にまで笑顔を絶やさなかった。
そのことに、デチャードが目を見開く。

（私の苦勞など、何ということはありません。

もっと辛い人間が、世の中に沢山いるはずなのだから……）

今日、かけられた言葉の意味を理解する。

マーミリオンが言うような、己の保身などではない。

彼女はずっと悔いていた。

それでも笑顔で隠し、誰も心配させまいと気を使っていた。

思えば自分は、貧しいのは解っていたにも関わらず、孤児院として機能していたこの教会を一度たりとも

不安に思うことは無かった。

彼女の笑顔には、それだけの力があつた。

断腸の思いで、より多くの命を生かすためにとつた残酷な手段。
心優しい彼女が一体どのような気持ちで、売り渡す子供を選別していたのか。

そして、どれだけ苦しみながら生きていたのか。

気付かなかった自分に、彼女を責める権利など本当に無い。

「……………お……………あああああ……………」

やがて背後から迫る男達によって、嗚咽する彼は取り押され。彼女の身体から離されて地べたに押さえつけられる。

「……………ふん、老いぼれが。」

すでに片足をつっ込んでいた墓に、自分からもう片方をつっ込みおったわ。」

刀の血糊を払うテツジの後ろから、マーミリオンが顔を覗かせる。

「……………なにこいつ、泣いてるわよ。」

チチャードに近付き、蔑んだ目で見下ろすマジ。

「……………ああ……………そこを……………どけ……………」

血走るチチャードの瞳が、泥の上で動かなくなった修道着に向けられている。

「……………あんたねえ……………自分が置かれている状況……………よく考えなさいよ?」

「さて……」

テツジは刀を収め、楽しそうなマジを押しつけてから、その鞘先で地べたの彼の頬に一撃入れた。

「こいつ……どうする。」

向けられる反抗的な目を睨みつけながら、彼は続ける。

「……始末するのは、現在の騎士団の内情を吐かせてからだ。こやつ以外に、何かしら別の手段を講じられていたら、たまらんからな。」

マーミリオンは放置された老婆の死骸を一瞥、口元を襟で押さえつつ言った。

《…殺す……》

地面の砂利を含んだまま、睨み上げて硬直するヂチャード。その口元だけが異様な抑揚を呟いた。

《……殺してやる……ウ……きさまら……》

顔面の形は既に元に戻っている。ところが、その右額に不気味な小さな人面が浮かび上がった。

「ああ　　！？」

驚き、一步退くテツジ。

そのすぐ背後のマジとマーミリオンをはじめ、周りの連中はそんな彼の様子を不思議がる。

続いて異変が起きたのは、自分の周囲だった。
焦げたようにくすんだ灰色の鳥の羽根が、舞い散り始めているのだ。

手下が抑えたヂチャードの腕は翼が重なり、彼の後頭部を半透明の大きな鼻ふくろっの頭が覆った。

その鼻の顔は壊れた発条仕掛けの人形のように、がたがたと首を傾げるように動き。

黄色く光った丸い瞳の周囲に、数百もの人間の形相を浮かび上がらせ笑っている。

「　　っおおー！！」

恐怖をもって再び、ヂチャードを強く殴りつけるテツジ。
そんな彼の様子に、今度は皆は顔を見合わせた。

「……どうしたのよ、兄貴？」

マジの言葉で、他の人間が周囲の異変に気付いていないことに気付く。

冷汗がテツジの頬を伝い、拳に滴った。

「……おまえ……！」

いま……何をしようとした……？

妙な真似……！　するんじゃないねえ……！」

「………？」

強引に立たされ、さらに浴びせられる詰問に対し、デチャードはうなだれたまま腫れた片目をわずかに開いた。

「何をしようとしたのかって、聞いているんだ……！」

異常な激昂。

恐怖。

それが全員に連鎖し、不穏な空気に変えていく。

（……さ、錯覚だというのは……！？）

もう、デチャードに重なっていた異形の鳥はいない。

だがテツジの中では、本能が警鐘を鳴らし続けていた。

「やはり殺す!!」

ついに小太刀を抜き、刃を向ける彼。

「ちょっと…兄貴…?」

マジが脇で驚く。

テツジがこのように怯えた感情を剥き出すのは、非常に珍しい。

一方のデチャードは、何度も殴られたショックで意識を朦朧とさせていた。

その生死の際に頭をよぎるのは。

整列した中王騎士団の団員達を背後から眺めている自分。
何度が潜入した、軍隊の飛翔艦・戦闘騎群。
そして、聖騎士の背中。

(…… どうして…お前たちは…それだけの力を持ちながら、世界を変えようとし…ない…?)

弱った瞳で、地べたから眺める、恩師の骸。むくろ

(力を…持たない者は……どんなに頑張っても…報われないというのに……。)

どうして……）」

定まらない前後の記憶から、孤児達の姿を手繰り寄せ、目を閉じる。

そこで自分の口の中に感じる血と土と金属の匂いに気付かれ、再びゆっくりと目を開けた先に見えたのは、テツジの背後に降り立つ人影だった。

「！？」

その者は瞬時に、細い三日月の形をした刀を彼の喉笛にあてがう。

そして続けざま、続々と頭上の木々から降下する者達。

その全てが外套で深く身を包み、鼻から口元までを布で覆い、眼光のみを鋭く光らせている。

「……！？」

不意に音も無く現れた人間の群れに、あっけなく拘束される賊徒達。

たとえ気配を消していたとしても、このようなことに気付かないということがあるのだろうか。

いまだに数人の人間が、頭上の森の木々に張り付いたまま、下の

様子を窺っていた。

「…………お前らは…?」

賊徒達の命を掌握した彼等に、問うデチャード。

集団の中の一人が近寄り、指を曲げて口にくわえ、長短の口笛を鳴らす。

それを合図に木々から顔を見せている連中は姿を消した。

その音に、デチャードは肩の力を抜く。

「…その口笛……。」

この辺りをうろついていた連中……あれは…お前らだったのか…」

「貴方様に仕えるよう、ディボレアル様より仰せついております。」

その者の外套の中から聞こえるのは、低い女性の声だった。

「…あの時は、貴方が警戒されておりましたので、合流に遅れました。」

「…………あ、ああ……」

揺らぐ身体。

一団を指揮している彼女は、咄嗟に彼を片手で支え、外套から半

身をのぞかせた。

灰色の肌。

頭髮は半分は長く、もう半分は剃り上げている。

裸足で、足首には金属の装飾物。

服装は胸部と腰部の布巻きのみ。

そして、他の者と同様に腰にぶら下げた三日月刀が不気味に光っている。

明らかに騎士団の人間ではない。

だが、それらを束ねているという黒騎士の名。

チチャードは自心の奔流を、猛速度で感じた。

廊下を歩く二人の足に伝わる、微量の振動音。

「何とか、無事に飛びたてたな。」

「なに言ってやがる。」

この艦は、いつも離陸だけは無事じゃねえか。
問題はこれからだ。」

安堵の声を洩らすバーグに、戒が厳しい顔つきで言った。

「まあ俺としては、せっかく操縦の何たるかを掴みはじめたからよ……体が勘を失わないうちに実戦に出たいんだが。」

「ヒゲ、おまえ……ふざけんなよ。」

低い声で、さらに睨み付ける彼。

「戦わずに済むなら、それが一番じゃねえか。
……死ぬ可能性が無い。」

「若人よ、俺より考え方が老けててどうする。」

「中年のくせに好戦的な奴よりマシだ。」

「……あのな……」

食堂を通りがかり、そこでバーグは言葉と足を止めた。

「……それにしても……本当に良かったのか？」

「あ？」

「あの料理人の娘のことだ。
お前の友達だったんだろ。」

「農民は畑を、漁師は海を離れるなっただよ。」

戒はそのまま食堂に入り、一番隅のテーブルに席を取る。

「あいつにはもっと、相応しい場所がある。」

「わかるけどな…さっきの、あの落ち込みよう……不憫でならねえ。」

バーグも倅^{なら}い、椅子を引いて腰を落ち着かせた。

「お前は赤の他人だろうが。」

「同じ年頃の娘を持つてみる！
そんな言葉、絶対に言えねえからな！！」

むきになる彼に、戒は閉口する。

そして何気なく見回す食堂内。

床をモップがけするパンリ、ザナナと世羅が談笑する様子。

「まあ、とにかく……」

そして、厨房にて笑顔で働くシュナの姿を見留める。

「……む。」

さしもの俺様も、疲れているな。
幻覚が見えるとは……」

戒は、両の目元を強く押さえ込んだ。

「あれ……あの娘じゃねえか……？」

「やっぱりか！」

やっぱりお前にも見えるのかヒゲ！

なあ、おい！！」

バーグの言葉に吹き出し、途端に頭に掴みかかる彼。

そこで待っていたかのように、廊下側からフィンドルが顔を現す。

「……フィンドル！」

これはどういうことだ！？」

「あ、戒くん……さっきの催しは……まあ、なんというか……

結果として最高のコミュニケーションになったわ。

艦内の結束もより一層固くなったというか。」

「??？」

わざとらしい彼女の言葉に、戒は口を開けて呆けたまま何度も瞬きをした。

「ついさっき、更なる人手不足が発覚しちゃって。

結局、二人とも雇うことにしたの。

もちろん当人達も同意してくれたし、他のみんなも賛成だって…」

「馬鹿言ってんじゃねえよ!!」

それじゃあ、あの勝負は何のためにやったんだ？」

「あら？」

詰め寄る彼に対し、フィンドルは指を自分の唇に当てて、不敵な笑みを浮かべる。

「最初は、戒くんも世羅ちゃんと大喧嘩したじゃない？」

「……………!!」

「若い頃って……ぶつかりあって絆を深めるものよね。
今じゃ、二人とも仲良しなもの。」

凍りつく戒。

同席したバーグは震える頬を必死に押さえ、早々に退散した。

「…お前はズるい。

……ズるいな。」

そして一言、呟いた後。

彼も渋い表情で立ち上がり、面白くなさそうに食堂を後にする。

「……ごめんなさい。」

フィンドルは苦笑して、独りで頬を搔いた。

過去を引き合いに出したこと。

人の為とはいえ、そのやり方に関しては決して罪悪が無いわけではない。

「なかなか……大した裁きだ。
フィンドルちゃん。」

後ろから歩み寄ったロディが、軽く肩を叩く。

「それは皮肉ですか？」

「いや……素敵ってことさ。」

彼は、自分に対して警戒を解かずに離れていく彼女に対して、首を左右に軽く振った。

「ただ…指揮官としてはどうですかな。」

「おや、モンスロン殿。」

近付いた猫背に、ロディが気付く。

「じっとしているのも退屈でしてね、実は……今日は一部始終を楽しませてもらってましたよ。」

彼は目を細めながら続けた。

「今回の彼女の判断は、艦長として著しく適当でない。
何故、この艦が炎団の猛攻を幾度も退ける戦果を挙げられたのか、
興味があつたのですが……」

「随分とお詳しいようで。」

「ギルチ提督から……色々伺っております。
まあ……その他にも……」

「？」

ロディの興味の視線を感じたところで、モンスロンは一転して踵を返す。

「いやいや……独り言です。」

さて……北は、ここより冷えますぞ。」

一瞬で逆転した立場に、賊徒達は黙ったまま怯えていた。
蛮族相手に生半可な交渉が通じないことを、彼等は理解しているのだ。

「……どうなさいますか？」

そんな中、老婆の亡骸なきがらを抱え、半ば放心状態のヂチャードへ訊く女。

「……頼む……」

「……こいつらを皆殺しにしてくれ……」

自分でも驚くような言葉が、口を突いて出た。

「……頼む……!!」

震える唇から血を流しながら、さらに哀願するヂチャード。

「残念ながら、それでは出来ません。」

目の前の彼女は、平坦な調子で返した。

「……やっぱり……な……」

「……俺ごときに……仕えるだなんて……何かの間違いだって思った……」

ぜ……」

苦笑いと共に立ち上がるが、ふらつく彼。
だが、それを女性は肩を強く掴んで支える。

「いいえ。

我々は確かに、貴方に『仕える』と申しました。

故に、それなりの態度で『ご命令』をくださいませ、デチャード様。」

気が付けば。

外套の者達は、全員が同じ瞳で命を待っている。

(……これがチカラだ。

……圧倒的な……誰にも頼らないチカラではないが……)

何かが自分の内側に語りかけた。

先ほどまで自分を追い詰めていたテツジを見る。

その手下達。

そして、マーミリオン。

今では彼等は皆、救いを求めた顔で自分を凝視している。

デチャードは一旦、全ての具象から目を離し、星空の奥を見詰めた。

凍える夜気が体温を奪っていった。

「謀主、マーミリオンの首を刎ねろ。」

途端。

女は、自分が脱いだ外套をデチャードの半身に被せる。

「たっ、助け……!!」

その繊維の奥で、マーミリオンの鈍い声がした。

布越しに感じる、大量の血飛沫。

「……加えて、その謀主の人身売買に加担した者、全員の息の根を止めろ。」

彼の合図で、蛮族達は泣き叫ぶ賊徒の口を塞ぎ、手にした刀を一斉に横に構える。

(……………これが偶然？
神様のおぼしめし？
……ありえんな……………)

テツジはその中で。

(……何者か……とんでもない奴の手の平の上で踊らされたんだぜ……俺ら……)

手下、それらを囲む蛮族、地面に転がったマーミリオンの死骸、これまで一切の接点の無かった者達を眺めて思う。

「……刑務所の方が、マシだったか……。
てめえら、覚悟を決めな。」

最期に言っと、掴まれるその顎先。
彼等の喉の皮が突っ張り、次々と鈍い音が響いた。

「……あの教会は四方を囲んだあと、誰も逃さずに焼き払え。」

ヂチャードは傍らの女性に告げる。

そこで離れていた一人が彼女へと駆け寄り、何かを耳打ちした。

「……あの中には、賊以外の人間も多数いると申しておりますが。」

「それがどうした。」

ヂチャードの返答に、動きを止める彼女。

「今の俺には、金も地位も無い。

たとえ命が永らえても、あの子らを待つ陵辱と恥辱に塗れた未来は変わらない」

言葉を発し。

「ならば焼き払い、俺はその魂にかけて復讐を誓う。」

彼は目で制すると、外套の男達は直立して整列した。

「……驚いております。」

「あの方が仰っていた以上に、我々と順応なさる。」

「黒騎士か。」

デチャードの呟きに、彼女は無言で頷いた。

「それでお前らは、俺の見張り番も兼ねるというわけだ。」

「……いいえ。」

我々ロ・ネ族は、同時に一人の主にしか従いません。」

「その言葉、信じていいんだな？」

彼女の握った、血に塗れた外套を奪い取り、羽織る彼。

そして、濡れた土くれの中を進み、まだ痙攣している四肢を踏み潰して進む。

推して黙り、続く彼女。

命を含んだ口笛が、壊れた街に悲しく響き渡った。

「大馬鹿者ッ!!」

爆発する怒号。

それは地下施設全体を揺るがせると錯覚するほど。
外で書類を整理している秘書達は、震える執務室の扉を注目していることだろう。

「……………う。」

褐色の肌の青年は、ようやく、だらしなく斜めに首を傾げながら
瞼だけを上げ始める。

「支部長……お叱りはごもっともなんですが……」

その脇で、耳栓を外しながら、小さな少女が意見した。

「一応……申し開きしても宜しいですか。」

「お前らの言いたいことは分かっている。」

一人納得したように腕を組み、男は苛ついた様子で歩み寄る。

「久遠の戦士たるもの、目の前の犯罪を見逃せないのは当たり前だ。」

そしてネクタイを直し、宣言する彼。

「だがな、我々は厳格なる組織。」

上からの命令を無視することは、最も悪と知れ。」

少女を一目だけ見下ろし、そして青年の黒服のスーツの襟元を強く掴む。

「だから、帰還しろと言われたら、帰還しろ。」

トイレの途中でも帰還しろ!!」

「はい、今度から気をつけます。」

少女だけが笑顔と共に返事した。

「……しかし支部長……」。

このところの中王都市各地での奴隷市場の横行は、目に余るものがありますね。」

彼女は愛嬌のある円らな瞳だったが、稀に奥では鋭い光をのぞかせる。

「……有史以来、この手の犯罪が増え出すと、それは国家の衰退を意味していると言われています。」

「その通りだ。
マピット＝フォルス。

それゆえに、この支部の全力をかけなければならぬ事態が訪れようとしている。」

「国家レベルの危機ですか?」

「……そうだ。
だからこそ……ユイウス、貴様の投入の他にも……」

目の前で、鼻提灯が膨らんでいた。
立ったまま器用に眠りこける青年の姿に、彼はこみ上げた怒りで

右手を震わせる。

そして急いで、ポケットから取り出した沈静効果のある錠剤を口に含み、デスクに置いた水差しからコップへと水を注いだ。

「……だから…貴様のような、ウスラ馬鹿でトンチキな寝ぼすけの他にも、中王都市きつての使い手を待機させることが決まっている。」

「音速のギユスターブ、ですか？」

彼の言葉も途中に、抑揚の無い声で少女が言った。

「そうだ。」

卓上のコップを持ち上げる彼。

だが、少女が強い力でその手を止めた。

「正気ですか？」

狂人と聞いてます。

彼とユーイと組ませるなんて。」

「…噂はよく耳にしているようだな。だが……これは審議会の判断だ。」

彼は口内で溶け始める薬の苦さに、顔を歪ませた。

「審議会……。」

それだけ、この危機には信憑性があると見てよろしいんですね？」

「そ…そうだ。」

……勘弁してくれ…マピット…！」

離れる手。

彼は勢い良く水をかき込んで、むせる。

「し…暫くはこの態勢で、中王都市支部は戦況を見守る。」

…別命あるまで二人は待機。

以上だ。」

「了解です。」

少女が凜とした声を上げる中、脇の青年は白目を剥いている。

「……無理だ。」

もう……これ以上は食えん……」

そして、その寝言を発した顔面に対し、コップの残った水が浴びせられた。

第三章
第二話
『黑色絵具』
了

3 - 4 「ムーベルマ会戦・前編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 3

「Wivern in central kingdom ci
ty」

The forth story
「Battle of Mubelma・First part」

1895

「
フィンデル殿！
いちぢらですー！ー」

焦げ付いた残骸の上で、一人の兵士が叫ぶ。

「……かろうじて、あの者のみが生きているようです。
他に、敵の生存者は見当たりません。」

「わかりました。」

周囲に立ち込める、蒸発した人間の脂で、駆けつけた彼女は胃の底からむせる思いがした。

こうやって導かれる最中も、まるで現実の心地が無い。

「……………ユ……ガ……」

そしてその者は、大勢の仲間の死骸と鉄屑の中に埋まるようにしていた。

彼女には、もっと近寄るよう、瞳が訴えている。

「……危険かと。」

「わかっています。」

フィンデルは、脇の兵士の制止を流しつつ、歩を進めた。

察した周りの兵士達は、辺りに散らばっている手足を無造作に放り投げて、そこまで道を作る。

「……………サ……」

「…何ですか？」

相手の震える口元に、顔を寄せる彼女。

「……サ…サーデユス……ルア…アフハ…」

瀕死の口から語られたそれは、互いに通じ合える言葉では無かった。

意味を問う前に。

自分の腰元に伸ばされ、さばかれた手に気付く。

「……！！」

拳銃を奪われたと気付いた瞬間。
飛び退くフィンデル。

銃声が、遠くで屍肉を啄^つばんでいた凶鳥達を一斉に退散させた。

エア・ファンタジスタ

・

第三章

中王都市の飛竜

・

第四話 『ムーベルマ会戦・前編』

1

「大丈夫かい？」

目を覚ますと、眼前には爽やかな笑顔の優男がいた。

「…随分と、うなされていたようだけど。」

「……大丈夫……。」

ただの夢……」

髪をかきあげながら、フィンドルはベッドから半身を起こす。

「……え？」

ロディ！？」

そして一度は彼から逸らした視線を、物凄い勢いで戻す彼女。

「な……なんで、私の部屋に貴方が！？」

「いや、何度もノックしたのに返事が無かったから、心配で……さ。」

そう言っ、彼は背後のモンスロンに同意を求めた。

「……どうかされたのですか、モンスロン卿？」

「ああ、いえ。」

暇でしてね……また、本を貸してもらおうかと。

昨日お貸りしたモノはもう読んでしまいましたので……。

ありがとございました。なかなか面白かったですよ。」

微笑みながら、3冊の本を差し出す彼。

「……お早いですね。」

「部屋に閉じこもりですと、何もすることが無くて。」

「……しかし、読書家なんだねえ。」

フィンデルちゃんは。」

不意に本棚に近寄るロディ。

「あ！」

それを止めようと慌てて跳ね起きた彼女が、ベッドから転落する。

「……軍事関係以外にも、恋愛小説とかもある。」

こつこのどうですか、モンスロン殿。」

からかうように勝手に何冊を取り出して、ロディが訊いた。

「いやいや、もうこの歳では流石に。」

さらに笑って返すモンスロン。

「……やめて下さい！」

女性の部屋を勝手に漁って！！」

真っ赤になってうつむきながら、フィンデルは言った。

「……それはそうと……軍事関係の本は、ここにあるだけが全てで？」

「……実家には、売るくらいありますけど……。」

彼女は乱れた髪を直しながら、モンスロンに返す。

「艦長は、兵法がお好きですか？」

「……好きも嫌いも……無いと思いますが。」

「なるほど、その通りですな。」

顔を背ける彼女に、自分の頭を軽く叩いて笑う彼。

「では……また適当に貸していただいても宜しいでしょうか。」

そして、既に何冊かを手に携えていた。

「はい……構いません……。」

用を済ませて立ち去ろうとする二人に、そこで何かを思い出したように向き直る彼女。

「あ……ところで、ロディさん……。」

「ん、何だい？」

廊下に一步出た直後。

珍しく呼び止められ、彼は嬉々として振り向いた。

「宜しければ……暇な時にでも、当艦の操縦士を鍛えてもらえないでしょうか？」

「いいよ、フィンドルちゃんの頼みなら。」

ロディは深く考えずに、あっさりと答える。

だが、その返事に血相を変えて現れたのは、部屋の外で張つていたガツチャだった。

「な、なりませんぞ、ロディ殿。」

「ん？」

「何か様子がおかしいので、心配でつけてみれば……！」

貴方はもう、我が国の人間なのだす。

いくら中王都市には恩があるとはいえ、謹んでもらわなくては！

「！」

「まあまあ、堅いこと言わないで。

いいじゃない、少しくらい……」

「なりません!!」

懷から取り出した一枚の書類を、全員の前に見せる彼。

「これを御覧下さい！」

「これを……って、貴国と僕との契約書じゃないか。」

「記された条項が見えるですか？」

『いかなる場合も、他国の人間に情報を流すべからず』。

それは『あらゆる戦闘行為』や『戦闘騎の使用も含む』とここに

……」

書類に記された幾重にも連なる事項を、ガツチャが続けていくうち。

フィンドルは半眼になり、ロディに呆れたような視線を送る。

「ありやゝ。」

全然、読まずにサインしちゃったよ。」

その書類の端を両手で握りながら、当の本人は素で笑って言った。

「どうしよう。」

これじゃあ、モンスロン殿を護衛する役目さえ難しいかも。」

「まあ、いいんじゃないですか。」

これを機に、私のことなぞお気になさらず、ロディ殿は艦内で自由になされば。」

全く気にする素振りも見せず、答えるモンスロン。

「……じゃあ、そうさせてもらおうかな。」

そして露骨に笑みを浮かべながら、それを真に受けるロディ。

「……いい加減ですね。」

これで彼などは、この艦に対しては百害あるのみで、まるで役に立たない。

そんな風に失望しつつ、フィンドルはドアノブに触れた。

「でもさ、ガツチャ殿。

『他国の女性と恋に落ちてはならぬ』という条項は無いでしょ？」

「は？」

「……はあ、左様ですが。」

「いやいや、良かった。

……良かったねえ、フィンドルちゃん。」

呼びかける彼。

「さぞかし、奥さんも子供も不自由してることでしょっね。
こんなに不貞な性格ですと。」

だが彼女は低い声で返し、それとほぼ同時に部屋の扉が閉められる。

「……奥さん？」

ロディ殿、『あのこと』は彼女には話しておらんのですか？」

「……まあね。」

特に言う必要も無いかと思つてさ。」

彼はあつけらかんと言ひ放ち、そこで伸びをした。

「……卵つて、意外と汚れ落ちが悪いのよね……。」

水を沢山使わないと、落とせない感じ……。」

シユナは呟きつつ、フライパンから皿に料理を盛る。

「……でも『焼く』のなら、まだこびりつきが少ないかな。」

そして、使つた器具を眺めながら、メモを取る彼女。

「……んじゃ、はい。」

あゝんして。」

「あ~~~~ん……」

笑顔で大口を開ける、傍らの世羅。

シユナは無造作に、そこへ皿上の玉子焼きを流し込んでいく。

「…おいひい……」

口内に広がる甘みに、幸せそうに頬を押さえ、呟く世羅。

「じゃ、次、いくわよ……」

「何、やってる。」

そんな二人の様子を見かねて、戒が思わず背後から声を荒げた。

「おまえ……こいつの腹をゴミ箱か何かとカン違いしてるんじゃないのか!?!」

怒りの形相で、世羅の両脇を持って彼女から離す彼。

「だって捨てたら、もったいないでしょ。」

どうせなら、食べてくれる人にあげた方がいいじゃない。」

同じように彼女の脇をとって、奪い返すシユナ。

「…やめろって言ってるんだろ。
食料と水が貴重だってこと、まだ解ってねえのか。」

「だからこそ、空で有効な料理の研究が必要なんだってば。
それに、いいの。」

すぐに補給を入れるから、それまで沢山使っていいって、もう艦
長から許可を得てるんだから。」

そんな口の減らない彼女の様子に、戒は閉口した。

「何でも、あと一日半くらいで駐留地点に着くらしいわよ。
だから少しくらい無茶しても大丈夫。」

「…駐留地点ってどこだよ。」

「ティドンとか言ってたかしら…。
中王都市の中でも北側の街ね。」

「嘘つけ。
一番南から、そんな短時間で着くものか。」

「嘘じゃないわよ。
領内では哨戒動作を省くから、全速を出せるって、リードさんか
ら聞いたもの。」

厨房の中へ戻りながら、彼女は声を荒げた。

(……すっかり、その気でいやがる。)

早くも乗組員から専門知識を吸収している、彼女の順応性に恐れを抱く戒。

「行く」。

格納庫のバーグさん達に夜食届けてあげましょ。」

そして手を引いて、世羅を連れて行く彼女。

「……ったく、好き勝手やりやがって……!」

戒は苦々しく見送りながら、椅子に座ってテーブルの上に足を投げ出す。

「……ああ……。」

そこで遠くから彼等の様子を眺めていたロディが、何やら呟きながら、入れ替わりで近付いて来る。

「……たまらないねえ、彼女。」

あのわがままな肢体にしゃぶりつけたら、どんなに幸せなことだろう……」

元々垂れ気味の目尻を一層に下げながら、両手で自分の胸のあたりに大きく球を描きつつ、彼は戒の脇に座った。

「…何の用だ、バカ野郎。」

「急に、えらい暇になっちゃってさ。

息抜きにカードでもどうだい？」

そして、テーブルの上に札の束を投げ出す。

「賭けごとには、興味ねえな。」

「いや、単なるババ抜きさ。」

「……………二人でか？」

戒はしかめ面で返した。

「……………まるで、鏡を見ているようだ。

エア・ファンタジスタ

天命人というのは、まことに恐ろしいものだ…。」

男は冗談めいた言葉と共に、四肢で唯一残された右手からペンを置いた。

自分と同じ顔の人間に、目の前で監視されるという異様な光景の

中。

したためた一枚の紙切れを、伝書鳩の足の小さな鉄管に詰め、鉄格子の隙間から外へ目掛けて飛ばす。

そこで牢内へと侵入する、黒い皮袋を被った屈強な男が二名。彼等は、血で錆び付いた牛刀をその手に携えている。

男はようやく、この苦痛からの解放を予期し、涙さえ浮かべて喜んだ。

「上手く化けたではないか。
デチャード。」

男達の後ろに控える黒騎士が、声をかける。

「……何とかな。
だが、声質や仕草までは無理だ。」

身体を支える松葉杖を脇に挟み、片足を引きずりながら答える彼。

「……こんな俺が、タンダニアに潜入しても役に立つとは思えねえ。
連中をおびき出すエサならば、さっき送った文書だけで充分だぜ。」

「そうだな。」

黒騎士は当然とばかりに、素早い相槌を打つ。

「だが、用心とは重ねて功を奏するものだ。」

牛刀の一撃の音。

そこで背中であらゆる低く低い呻き声に、チチャードは顔半分を歪めた。

「……貴様はこれから、陸路を進んでタンダニアに入国しろ。その足を癒しつつ、な。」

「……………」

二人は共に牢を離れ、冷たい岩の回廊を進む。

その終着、エンジンの大振動で空気を震わせながら、目の前に鎮座する一隻の飛翔艦。

チチャードは暫くの間、何気なくそれを眺めていた。

「私もこれより任務だが、心配は無用だ。命令は追って知らせる。」

「別に疑ってはいねえさ。」

肩をすくめる彼。

「……ところで、源炉精製所の件は……」

「そのように機能を失っていたことは、大体予想していた。
……それとも、あの貴様の報告以外にも何かあるのか？」

「お前ほどの奴の耳に、入っていないわけが無いと思うがな。」

「……所長のマーミリオンの殺害。」

そして、教会の件か。

だが、私は貴様個人のやり方を詮索する気などは無い。」

黒い仮面が、顎を上げて続ける。

「それだけの権限を与え……任せたつもりだ。」

「なら、これから先も、お前がよこしたあの蛮族達は自由に使って
いいんだな？」

……俺の私兵として。」

デチャードは息を飲みつつ、訊いた。

「奴等は忠誠を誓わなかったか？」

一方のディボリアルは、彼を残して飛翔艦へと進んでいく。

「いや……」

「ならば……そういうことだ。」

短く切った言葉と共に、艦内へ続く足場タラップが鳴った。

「順調つすね。」

「ああ……そうだな。」

タモンの言葉に、リードが眠そうな顔で答える。

横へと顔を向けると、ザナナは相変わらずブリッジの景色が気に入っているようで、窓にへばりつくようにしてそこに居た。

本人は容貌に似合わず至って無害なので安心なのだが、そんな彼の肩に四六時中乗っかかっているメイの神経には疑うものがある。

「……トラさん、トラさん。」

無邪気に笑いながら、ザナナの頭の獣皮を叩き、その口の中にさえ無造作に手をつ突っ込む彼女。

「……豹なのだが……」

そして呟き返される彼の言葉には、傍で見ている方が恐々とした。

中王都市への帰還の際、彼に救われたことで妙になついたのである。
うか。

リードは、以前の件を思い起こしながら、顔を正面に向け直す。

「……タモンも、少し寝てきたらどうだ？」

「いいんすか？」

「ああ、休めよ。」

航行中に操舵手が抜けるのは危険ではあるが、既に針路も定まっている領内では大丈夫だろう。

「それじゃ、遠慮なく。」

そのことはタモン自身も承知しているので、彼は舵を固定してから、おとなしくそれに従った。

だがブリッジを出る直前、浮かない顔のままのリードを目に留める。

「……どうかしたっすか？」

「いや、フィンドルが心配だな。」

「え？」

「正式に艦長に就任してから、何か具合が悪そうだな。

……元気が無いんだよな。

普段から明るい方じゃないけれど……最近余計にさ……」

リードは振り向かず答え、ガラスに映り込んだ空の艦長席を眺めていた。

「はい、どうぞ。

夜食です。」

「お、すまねえ……」

バーグは戦闘騎の下から這い出し、上から伸ばされたサンドイッチとシュナを同時に見上げた。

汗と油に塗れた頬を、腕で拭う彼。明らかに苦戦しているのが判る。

「いつも自分で整備するんですか？」

「…普段はもつと任せるんだがな。
なんだか機嫌が直らねえんだよ、あいつ。」

同じく、戦闘騎を作業するミーサへと、視線を泳がせる彼。

そんな二人が一緒にいる様子に気付いた彼女は、突如として工具を大きく鳴り響かせる。

その音に、バークは大きな体を反射的に縮ませた。

「……………機嫌…ねえ。」

「きつと、俺達が勝手に休暇をとったことが、相当、気に入らねえんだよ。」

彼女を観察しているシュナに、小声で囁く彼。

「でもなあ……………あんなに作業帽を目深に被っちまって……………。
まるで、昔に戻っちまったみたいだ。」

「昔？」

「いや、なに。」

一応、女の子だからよ。
帽子取った方が可愛いぜ、って言ってやったことがあったんだよ。
それからは、ずっと外してたんだがなあ。」

素の表情でサンドイッチを一切れ摘み、それを口に放りつつ続ける。

「……俺、もう上がるわ。」

ロディの奴にゲームに誘われててよ。

……残りは、あいつにやってくれ。」

そして彼は強張った体を伸ばしながら、ついには階段を登って去ってしまった。

シユナと共に格納庫に来た世羅は、先ほどから棚の上で寝ている一匹の猫に気をとられているようだった。

その隙を見計らい。

何かを思いついたように、彼女はそろりとミーサに近付いた。

「ねえ、もしかして……これに戒が乗ってんの?」

「……………」

一瞬の無言の後。

「……………」

あの野郎、プライドが高くてうるさいから、居ない時こそそり整備してやってんの。」

ミーサはぶっきらぼうに返した。

「あ、それ解るわ。」

苦笑するシュナ。

「で、どうなの？
実際のところ。」

「……あいつ、役に立ってる？」

「…乗り始めて日が浅いわりには、よくやってる方だと思うけど。
でも、何であんたが気にするの？」

そんなミーサの問いには答えず、シュナはただ笑みを浮かべるばかりだった。

「ところでねえ、あなた。
もしかして、バーグさんに惚れてたりする？」

「はあ？」

いったん、呆れたような顔で返すミーサ。

「なに言ってるの？
何で、あんな……」

そして何食わぬ顔をして、床の工具箱からネジを取ろうとする。

「何で…あんな男に…いたっ！」

だが、その脇に入れてある釘に思い切り指を刺す彼女。

「わかりやすいわね。」

シユナは思わず、口元を押さえて笑いをこらえた。

「……で、いつ頃から？」

他に知ってる人はいないの？」

そして好奇の言葉と共に、隣に屈む彼女。

「か、関係無いでしょ、あんたには……！」

「何よお、せっかく相談に乗ってあげようとしてるのに。」

顔を背けるミーサに、さらに回り込む。

「でも、それってヤバくない？」

バーグさん、私達くらいの年齢の娘がいるでしょ？」

「……う……よく知ってるわね……。」

「だって家でご馳走になった時、実際に会ったんだもの。」

その言葉に、ミーサは悔しそうな顔を隠さなかった。

「確か、まだ１７歳って言ってたかしら。
騎士団に入っているんだけどね…結構しっかりしてるのよ、これが。」

シュナは続けた。

「バーグさんはバーグさんで、話すのはあの子のことばかり。
あれは相当、親ばかね。」

「……わかってるつもりよ。
…娘より若い女が、そういう対象じゃないって。」

目を逸らしながら、ミーサは呟く。

「うわ、ミーサって可愛い。」

そんな彼女の頬を指で突くシュナ。

「からかわないでよ！」

大袈裟に飛び退いて、返す。

「…あ、あんただって……！」

本当は、あの戒が目当てでこの艦に乗ったんでしょ!？」

「へえ、そういう風に見える？」

シユナは意地悪っぽく笑みを浮かべて言った。

「…一般人が軍艦に乗りたいたなんて、普通じゃないもの。」

「ふふつ。」

まだまだ、お子ちゃまね。」

「…な、何よ!！」

「悪いけど、私、『中古』には興味無いの。」

「……！」

中古って…ひどいこと言うのね…。」

呆れて、言葉を止めるミーサ。

「あ、別に他の女性の使い古しが悪いってワケじゃないのよ。単に、これは個人的な趣味だと思って。」

シユナは手首を返し、それを胸元に触れて気取ってみせた。

「まあ確かに、昔はあいつに対してそういう感情の時期もあったわ。だから、あなたの言っていることも、あながち外れてないかもね。」

そして、薄く瞼を閉じる。

「でも、今は好きとかいう感情とは程遠いの。

今はただ……友人として、あいつの助けになりたい。

あいつがやりたいこと……少しは理解してるはずだから。」

「……。」

「あとは自分の修行つてとこかな。

違う環境で腕を磨くとなると、色々と刺激があるし。」

心の内を惜しげも無く話す彼女の姿に、ミーサは警戒を少しずつ解いていった。

「……まあ、せいぜい頑張りなさいよ。」

「あなたには借りがあるからね、色々と協力してあげる。だから、もっと素直になったらどう？」

真一文字に口を閉じた彼女の帽子を、笑顔で取るシュナ。

「……よ……余計なこと……しないでよ……！
好意だけ……受け取っておくから……。」

ミーサは取られた帽子をそのままに、作業へと戻る。

「バグさんみたいにね、父性に溢れて頼れる男もいいけれど……もつと汚れの無い、誰の手にも

触れられてないような男が好みなのよ、私は。

でも、純粹だけど根はしっかりしてる、そんな奴。

……どこかにいないかしら？」

その作業の様子を脇で眺めながら、シュナが語りかける。

「……パンリとかどう？」

素直で優しいじゃない。」

「冗談！

背も低いし、ひ弱だし。

大体、簡単に他人に土下座するような奴、全然好みじゃないわ！
！」

少しむきになりながら、シュナは腕組みしてそっぽを向いた。

「助けてもらっておいて、ひどいわね。」

ミーサが笑う。

そして、それにつられてシュナも吹き出した。

「　　つくつしゅ!!」

クシャミの後、鼻をすするパンリ。

「風邪か？」

先ほど、右の席に座ったばかりのバーグが言った。

「いえ…大丈夫です……。」

答え、彼の手札から一枚抜き取る彼。

「…まったく、お前みたいなお人好しは風邪でも引いて、いつその」と、くたばっちまえ。」

「……………すみません。」

戒の暴言ときつい目線に、目線を伏せるパンリ。
勿論、テーブルの下では軽く蹴りが入っている。

「…早くも飛翔艦の中が女臭くなってきて、かなわねえ。」

「何言ってるの。」

華やかでいいじゃない。」

その戒の手札から、一枚取るのはロディ。

「ひどいものなんだよ？

通常の軍隊は。

それに比べたら、ここは極楽…」

「あんた、軍隊に居た事があるのか？」

バグがロディの構える札から一枚取りつつ訊いた。

「…まあね。」

「そうか。」

俺も傭兵として戦争に参加してたからな、何となく解るぜえ。」

しみじみと呟く彼。

「戦場で、女つてのは本当に貴重なんだぞ。

俺が美人妻をモノにした時は、みんな悔しがっていたもんだ。」

「大した女でもねえのに、周りが酷いから良く見えるだけだろ…。」

少し自慢の入った口調に、正面の戒は露骨に嫌悪の表情を浮かべた。

その間に、パンリがバーグの札を取り。

「あ、いち抜けです……。」

揃った組を捨てる。

「……何だよ、ババ残すんじゃないよ。」

彼の残った一枚を取り、戒は睨みつける。

「いいよねえ、戦場に吹き荒れる恋の嵐、か。
素敵だなあ。」

おどけながら、ロディは再び戒の札を取った。

「……おっと、僕も上がりだ。」

そして彼は揃った組を捨て、残った一枚をバーグへと差し出す。

あとは、二人の応酬を残すのみだった。

「……ババか。」

取った札を睨みつつ、バーグは煙草に火を点けて構える。

そんな対面の手札へ、腕を伸ばして一枚引く戒。

「……またババかよ！」

ババばかりよこすんじゃないやねえ！！」

「ババ、ババ、うるせえな！」

そういうゲームだろうよ！！」

互いに大量に札を構えたまま、熱を上げる二人。

(……この二人は分かりやすいんだよねえ……)

笑顔を含ませた表情で、ロディは不意に立ち上がった。

「……さて、まだ終わりそうもないし……今のうちにトイレでも行つておこうかな……」

そして、眼下のパンリに視線を投げかける。

「どう？」

君も一緒に。」

「……？」

問いかけるように彼が見上げたロディの顔は、不気味に鼻と耳が小刻みに動いていた。

「……シャワー室も改装してくれたんですね。」

ドアを開き、真新しいタイルと水道管を一望して、ミーサが満面の笑顔で言う。

「ええ。」

今までひどい有様だったから、修理のついでに簡易だけど、この脱衣所も設置してもらったの。」

フィンデルが軍服の上着のボタンを外しながら返した。

「補給するから、お湯、たくさん使っても平気なんですよね?」

そして、脇のシュナの確認に彼女は頷く。

「……にしても…」

ミーサは汚れたツナギを手首まで脱ぎかけたまま、シユナの肢体をまじまじと見詰める。

「ああ…私、巨族の血が入っているの。」

余計なところが大きかったり、人より髪も大目でしょ？」

その視線に構うこと無く、頭のカチューシャを外して首を振る彼女。

続けざまに片足を上げて、勢い良くショーツを脱ぐ。

「なるほど、いいとこ取りなわけね。」

自分の身体と見比べつつ、恨めしそうに近付くミーサ。

「おつきいから、てつきり垂れてるかと思ったんだけど…。
しっかり先つちよが上向いてるし。」

「あ！」

そんな強く握っちゃだめだって…」

「ものすごく柔らかいです、艦長。」

そして、笑顔で敬礼をする彼女に、フィンデルはつられて笑った。

「こうやって一緒にシャワー浴びようって提案も、要するに自慢したいわけ？」

「何言ってるの。」

お互い気を許しあうならば、まずは裸の付き合いって相場が決まっているんだから。」

両手を腰に当て、仁王立ちするシュナ。

「ほんと、うらやましいわ…。」

最近の若い子って発育が良くて…。」

「ええ、どうせ、その中でも私は育ってない方ですよ…。」

「……あ、そういう意味じゃないのよ。」

ふくれるミーサに苦笑して近寄るフィンデル。

「あのね。」

胸なんて大きくても、何の役にも立たないのよ。
変な男どもに言い寄られたり、肩がこるだけで。」

シュナがしみじみと呟いた。

「…そういうのを嬉しい悩みっていつのよ。」

「そう?」

彼女はミィサに返ししながら、フィンデルに目を留める。

「でも、艦長だつて…実は、プロポーションがいいってこと、気付いているんですよ、私。」

「え!？」

な、何言つてるの…?」

咄嗟に、自分のバスタオルを押さえつけて誤魔化す彼女。

「脱がしちゃえ!」

「了解!!」

「ちょ、ちょっとちょっと!!」

協力して飛びかかる二人。

「待つて待つて……!」

ホントに20代も半ば過ぎるとね、肌が荒れたり、二の腕のたるみとか…」

彼女らの魔の手をかわし、フィンデルは室内の隅の方で小さくなつて苦笑する。

「そんなことないですって。」

「まあまあ、今日は許してあげましょうか。」

笑うミーサ。

そして、口惜しそうにシャワー室に向かうシュナ。

(…このノリに……ついていけそうにないわ……)

それらを眺めながら、フィンデルは肩を落とした。

「…いやいやいやい…。」

…黄色い声が何ともそそるね。」

針金をドアノブの鍵穴に刺し込みながら、扉にぴたりと付けた耳をそばだてるロディ。

「あの、一体何をしていらっしゃるのでしょうか…」

そんな傍らで行われている行為を、理解出来ずに訊ねるパンリ。

「安心するんだ。」

この艦に来てからというものの、シミュレーション予行演習は、もう何度も行ってい

て完璧さ。

……この…バネを………よつと。」

小さな金属音と共に、開く錠。

「いや、そういう意味ではなくて…。

ここは、他の人に入られたくないから……錠がかかっていると思うんですけど…。」

「君も、なかなかお堅い男だねえ。」

「せ、性格の問題でしょうか…。」

会話も途中に、扉は開かれる。

そして室内にある、もう一つの扉。

その奥からは豪雨のように、勢いある水の音が鳴り響いていた。

「……えっ？」

一方のパンリは、足元に置まれている女性物の衣類に啞然とする。

「…ろ、ロディさん、これは一体…。」

そして全身をガチガチに緊張させながら、共に口を開く彼。

「決まってるじゃないか。」

「こっそり……」

「ま、まずいですよ……!」

その言葉で、怪しく体を屈ませながら、さらなる扉へと突き進んでいたロディが止まる。

「君は、女の子の裸に興味無いの?」

「は、はだか!?!」

きよ、興味どころか……婚姻した者同士じゃないのに、肌を晒すなんて考えられない!」

「垂耳は古いねえ……。」

フードの両脇を掴み、深く引っぱって顔を隠すパンリの姿に呆れながら、彼は呟いた。

「人は、進歩と探求のために、どんな苦労も犠牲も顧みてはいけな
い。」

一番初めに、空を飛ばうと考えた者は、何と勇気のあったことだろうか。

「…そう思わないか?」

そして近寄り、身長の高いパンリに視線を合わせながら諭す。

「初めは誰もが無理と思っただろう。

でも、現在は当然のように人が鳥のように大空を飛べるんだ。

君は今、女性の裸を見るなんてとんでもないと思っているだろう？

……同じさ。

それくらい常識を覆す……君もそんな勇気の一步を踏み出すんだ。

」

「……ええ、えとえと……そ、それは……そうですが……」

無駄に壮大なテーマに飲み込まれ、一步退く彼。

「ゆ……勇気と関係が……あるというのなら……同意します……」

「よし。

よくぞ決意した、相棒。」

ロディは齒を剥いて、その肩を軽く叩いた。

(……相棒……)

これほど嫌な響きのある言葉とは思ってもよらなかったパンリが、前を進む彼の背中に仕方なく続く。

「……きつと、驚くよ。

男と女じゃ、身体の仕事みが全然、違うんだ。」

「……そ、そうなんですか。」

緊張から喉を鳴らす少年の初々しい反応に、満足げな表情を浮かべるロディ。

「……あの……ところで、何故……私を誘ったんです？」

その問いに対し、彼は黙ったまま笑みをこぼした。

（だってさ、万が一捕まった時、共犯がいれば心強いじゃない。）

そしてポケットから、別の針金を取り出し、最後の砦へと差し込むのであった。

「……ところで、世羅は仲間はずれ？」

「ううん……一応、誘ったんだけど。」

後で一人で入るからいいんだって。」

首から下を隔てている薄壁越しのミーサの問いに、シュナが答える。

「……へえ。」

なんか見られたくないものでもあるのかしら？」

「あの手袋の下とか？」

二人は何気なく、フィンドルを見た。

「あ、あれね……」。

前の旅で、私も少しだけ見たんだけど……」

湯気の中で、視線を泳がせる彼女。

「左腕に真っ黒な……刺青っていうのかしら。

……そういうのが施されてて。

悪いから、詳しくは聞いてないけれど。」

「そういや、私も見覚えがあったわ。

腕だけじゃなくて、確か全身にも広がってたような……」

ミーサも言う。

「ふん……」。

ああ見えて、あの子も何かワケありってわけなのかしらね。」

髪のを振りながら、シュナが呟いた。

「！」

扉に張り付いていたロディが、そこで少し驚いたように退いた。

「どうされたんですか？」

「いや……」。

…今の僕の顔…変かい？」

自分を凝視しているパンリに、目を細めて笑いながら問う彼。

「…ええ。真っ青ですけど…」

「ひよっとしたら、風邪かもしれないな。」

…僕は、もう戻るとするよ。」

「え？」

「…悪いけど、空を飛ぶのは、今日は君だけにしておいてくれ。」

立ち上がり、パンリに針金を託すロディ。

そして彼は部屋を出るまでずっと、気分が悪そうに目元を押さえ
ていた。

(……こんなもの渡されても……困るのですが……)

パンリは受け取った細い針金を見詰めたまま考える。

一人にされた空間から、妙な罪悪感が滲み出てくるようであった。

(……やっぱり……私も戻ろう。)

素早く廊下へ走り、外からドアを閉める彼。

「……………」。

だがそこで、何度かノブを回転させて、あることに気付く。

(……ここ……閉めないと……まずいんじゃない?！?)

「聖騎士殿、こちらです!!」

洞穴にいち早く乗り込み、その中から太い両手を振って大声で呼ぶ若い男。

彼　マクスの兄の友人であるヒュベリは、このゴルゴートの地まで、半ば強引に案内役としてついてきた。

「冷えるな……平気か、クウ。」

「はい。」

マクスに答えて進み、洞穴内部の広大さを見回しながら返す彼女。

「騎士団がこのような場所を基地に……？」

「ここを訪れるのは、私も初めてだ。
あるということ自体、知らされていなかったのだが。」

「秘密裏……ですか？」

「元々、一介の騎士へ報告の義務など無いがな。」

妙に納得したような顔つきで続けるマクス。

最近は特に、団内の不明瞭な部分を間に当たりになっているのだ。
自分の感情が平坦になるのも無理はない、と内心笑う。

「……あれっ？」

その時、前方で、廊下を先陣切って抜けたヒュベリが間抜けな声を上げる。

「我々の軍備が……全て無くなっている！」

奥でさらに上へと高く広がっている敷地は、完全にもぬけの殻で

あつた。

「何処かへ移されたというのか。」

虚ろな表情を浮かべる彼の横に、立ち並ぶマクス。

クウは彼等の後ろで、そこに大きく広がった遠くの夜空を見上げていた。

「……いや、でも……」

移動するといつても……あれだけの規模を誰が……」

人の気配をまるで感じない敷地内を、隈なく見回すヒュベリ。
だが、マクスはその中で、一つのうごめく人影に気付く。

覚えのある歩。

そして仕草。

彼には、奥の闇から近付いて来るその者が、デチャードであることが瞬時に判った。

「任務か？」

その顔は。」

「……まあな。」

見慣れないが、少しありふれた中年男性の顔をしている彼は、足

を止めずにすれ違う。

「……どうした？」

その態度。

そして彼の握る松葉杖と、引きずる片足に目を留めて、マクスはさらに訊ねた。

「何がだ。」

無表情で返したヂチャードは瞳を全く微動だにさせずに、先程三人がやってきた道へと向かう。

「……一体、どうした？」

マクスは、振り向いて一歩寄る。

「おい、ヂチャード！」

「……マクス。」

背後からの大声に、立ち止まる彼。

「……踏みとどまれよ。」

平民の後を追うなんぞ、聖騎士の名が廃る。」

かすかに首を振り向かせ、微笑みを浮かべる友の姿。
マクスは急に目の前に広がった違和感に驚き、全身の動きを止めた。

「……そのまま奥へ進め。
お前の戦闘騎とミシユレイが、首を長くして待ってるぜ。」

デチャードは、再び歩を進めながら、軽く思い出したように言った。

「俺は、今から別の任務に行ってくる。
……それと、そこのお前、今は関係者以外は立ち入り禁止だ。
帰りな。」

そして最後に、ヒュベリを一瞥した。

「……なんですか、あれは……。
失礼な奴だ。」

当の本人は、険しい顔つきで呟く。

「……いや、ここまで案内ご苦労だった。
君は街で一息いれてくれ。
後は……」

「聖騎士殿、そりやないですよ！」

「ここまで来て!!」

だがマクスからも意外な一言を浴びせられ、喚く彼。

「……我々以外の者が、ここの状況を知ると立場が危つくなる……そう忠告しているのですか。」

「デチャードさんは……」

「おそろくな。」

クウの言葉に、マクスは表情を変えずに答えた。

(……それだけではないような気がする……。
今のあの人は……何か変だ……)

僅かな視線さえ合わせてもらえなかった彼女。

先程のデチャードからは数日前に会った時と比べて、明らかに違う印象を受けた。

付き合いが短い自分にさえも判る、言い知れぬ奇妙な緊迫感。

そんな彼に一度詰め寄ったマクスは、今も平静さを装ってはいるが、自分と同じものを感じているに相違なかった。

カードの束を手にして、いまだに睨み合っている戒とバーク。
そして、そのワングームが終わるのを、身を縮こませてひたすら
待っているパンリ。

「あんた達、ちょっといい？」

そんな食堂のテーブルへ、芳しい香りと湯気を立たせた女性陣が
シユナを筆頭に訪れる。

「……犯人は誰？」

「ああ！？」

彼女の一言に、戒がそれを横目で睨みつけた。

「シャワー室がおかしかったの。」

私達が使っている時は確かに鍵をかけたはずなのに、出る時には
何故か開いてたのよ。

それに良く調べたら、鍵穴に何か引つ搔いたような跡が。」

「……………！」

さらなるフィンデルの真面目な言葉に、パンリは生きた心地がし
ない。

「つまり、どういうことだ。」

「のぞき……誰かしたでしょ？」

戒に答えるミーサ。

途端にバーグが、思い切り吹き出す。

「……冗談よしてくれよ。」

そして鼻をすする彼。

「悪かったわね、魅力が無くて!!」

即、その頬にミーサの鉄拳が入る。

「……そついや……そんなことを一番やらかしそつな奴をさつきから、ずっと見ねえな。」

なあ、パンリ。」

鼻血が飛散して使用不能になったカードを置いて、戒が静かに言った。

「……ど、どうした!？」

顔が紫色だぞ、おまえ。」

さらに自分の出血も顧みず、心配そうに顔を覗きにくるバーグ。

「ななな……何でもありません……」

そっ、それよりも一体、どこへ行ったんでしょね、ロディさん
ね……」

大きく深呼吸して、汗を拭いながら、パンリは答えた。

「確かに、あの人なら……ありえるわ。」

顔をしかめるミーサ。

「……ともかく、二人はもう寝てちょうだい。」

犯人にはきつく言っておくから、後は私に任せて。」

フィンドルの溜め息混じりの言葉に、彼女達は頷いて従った。

「大変だなあ、艦長も。」

二人を見送りながら、バークが笑う。

「……まあ……そうね。」

適当に相槌を打つ彼女。

その目の前で、戒がおもむろに立ち上がった。

「あの野郎を……探しに行くのか？」

「ええ、そうだけど……」

……手伝ってくれるのかしら？」

苦笑して訊ねる彼女に対し、彼は険しい表情を変えなかった。

「ああ。」

ちよつと、引つかかつてるからな。」

一連の動向を心配そうに眺めているパンリの背後を通り、この席を抜ける。

「……そもそも、あのロディって野郎は本当に信用できるのか？」

早足で食堂から遠ざかり、廊下に顔を出す。

戒は他の人間に聞こえない距離を確認してから、すぐに訊いた。

「え？」

フィンドルはしっかりと聞こえていながら、聞き返す。

「随分とスパイのことで神経を尖らせているくせに、新参者ばかり乗せやがって。」

……今、艦長室を使っているあの変なオヤジもそうだ。」

「……あの人は……特別なよ。
ちよつとね……」

鋭い質問をはぐらかし、彼の前に行く彼女。

「……そのことについては、いずれ話すわ。」

「お前の飛翔艦だからな。
何をしようが、別にいいけどよ。」

戒はそんな彼女の背中に漠然と語りかけた。

「ごめんなさいね。
色々と問題抱えちゃって、皆のことまで気が回らなくて……」

「だったら、抱えねえように改善しろよ。
人をもつと使えばいいんだ。」

フィンドルの予想外に力の無い謝罪に、気まづくなった戒が歩を
早めてさらに前を行った。

「……戒くん……ここ。」

足を止め、一室の前で呟く彼女。
戒は慌てて戻る。

「大体な…こんな小せえことまで自分でやるから疲れるんだよ。てっぺんは、てっぺんらしく、どっしりと構えてろ。」

ロディ個人に与えられた部屋。

手を伸ばすフィンドルの手を制し、戒はノックもせずいきなりドアノブを捻って押し込んだ。

呆気なく扉は開く。

「…いねえな。」

そのまま無人の室内に入り、少し見回して再び廊下へ出る彼。

二人は自然と、同時に早足になった。

遮るものの無い上空で輝く星。

そして眼下の雲海では、月に照らされたルベランセの陰影が追って来るようだった。

「素晴らしい景色だ。」

「…うん。」

飛翔艦後部。

見晴らしの良い甲板近くの廊下の大窓に、夜光を浴びるようにして世羅が居た。

自分が近付くことにまるで気も留めずに答えた、そんな彼女の煌きわめく美しい肌と髪に、声を掛けたロディは暫し見惚れる。

「遠くの国にね、相棒がいるんだ。

君くらい小さくて若いけど、物凄くしっかりしてる。」

彼は近付き、窓に肘を付けて寄りかかった。

「この間ねえ、彼と一緒にやっていた仕事でしくじっちゃってね。まだローンの残ってる戦闘騎を失ってしまったんだよ。

それで、『たくさん稼いでくるまで戻って来るな』って追い出されちゃったんだ。」

そして笑いながら言った。

「戦闘騎って高いの？」

「…僕のは特別製だからね。

まあ、一般的にもかなりするけれど。」

「飛翔艦も……高い？」

「目が飛び出すよ。」

個人で買おうと思ったからね。」

冗談混じりに返すロディ。

だが、世羅は興味と真摯しんしの入り混じる瞳で自分を見詰めていた。

「……きみ、飛翔艦が欲しいの？」

「うん。自分のが。」

「……はは。」

若いのに偉いね。」

真面目な顔をして話す彼女に、彼は声を詰まらせて笑った。

「これまたどうして？」

「……飛翔艦乗りになりたいから。」

「……そう、それはシンプルだ。」

浮かんでいるロディの笑みは、馬鹿にするような笑いでは無かった。

「……途方も無い額だよ。」

目一杯、稼がないと。

それに……君のために働いてくれる仲間も必要だね。」

「……仲間。」

彼女は小さく反復した。

「……ありがとう。」

たくさん教えてくれて。」

「いや、この程度だったらいつでも。」

返すロディに、そこで目を伏せる世羅。

「もし……君が本当に飛翔艦を得たら、ぜひとも僕も乗せて欲しいな。」

「ほんと？
乗ってくれる？」

彼女は表情を一転させて、笑顔で訊く。

「勿論、条件次第だけどね。」

「……でも、君はどうして飛翔艦乗りになりたいんだい？」

「なりたいうてことだけ、憶えてたから。」

彼女の即答に、ロディは片眉を上げた。

「君のその記憶は……本当かい？」

そして、背を向けて呟く。

「……記憶の無いフリだとしたら、なかなか面白い話だ。
飛翔艦乗りになりたいだなんて。」

「？」

聞き取れないほど小さい呟きに、世羅が首を傾げて見上げた。

不意に彼が取り出すのは、腰に下げた気付け用のブランディ。

「一杯：どうだい？」

瓶の蓋を取り、逆さにして、そこに注ぐ。

「お酒？」

「飲んだことないかな？」

「……うん。」

答える彼女の前で、ぐい、と一気に飲み干す彼。

「…若い子には、苦すぎる。
でもね、こつやって魔法の砂糖をふりかけると…」

もう一度酒を注ぎ。

さらに片方の手で取り出した粉末を、蓋の中に振り掛ける。

ロディはそれを彼女の前に差し出した。

「……………ん…」

立ち込める甘い香り。

それを嗅いですぐに脱力した世羅は昏倒し、勢い良くロディの腕に収まる。

「……………おつとつ…！」

寝ていると、ちつちやくても流石に少し重いねえ…」

彼は呟きながら彼女の身を支え、慣れた手つきでその左腕の長い手袋をわずかにずらす。

そしてそこに現れた、全ての色光を吸い込むような黒き紋様の姿に顔をしかめた。

「……クレインに聖十字。
イーデイス
フレイトス
ガザンには黄金銃あり。」

銃身を構えたまま、彼は抑揚の無い声を発した。

「お前を滅する銃だ。
今度こそ、これがお前の身体と魂を穿^{うが}つ。
観念して正体を現せ。」

大窓の下壁に寄りかからせた、すこやかな寝顔の世羅へと顔を近付けるロディ。

(……どうした。
反応……しないのか……?)

自らの光る銃口を見詰め。

(……あれから10年だ……。
これくらい成長してても……おかしくないはず……)

緊張した手を彼女の額に乗せ、前髪を上げる。
そこには、白い肌のみが覗いた。

「……やはり……人違い……か。
もしか……と思ったんだがねえ……」

大きく息をつき、腕を下げて肩から全身の力を抜く彼。

「何が、『人違い』だと？」

背後からの殺気。

「！！！」

それを覚^{さと}り、振り向いたロディの頬に、背後から飛び込んだ戒の拳が一閃。

同時に、フィンドルも駆けて出る。

「世羅ちゃん……！！」

彼女の半身を抱えて叫ぶ。

だが返事は返らずに、力を失った細腕が垂れるのみであった。

それを脇目に、壁際へと吹き飛んだロディに馬乗りになる戒。

「てめえ……！！」

いま…何をしてた……！！？」

握った赤い十字架が伸び、首に突きつけられる。

「聖十字……！！？」

「これまた、奇遇だ……」

「答える！」

「何をしてたんだよ……！」

戒の怒りに反するように、ロディは笑った。

「……君こそ、教えてくれないか。」

「彼女が何者なのか。」

「……何だと……？」

「今、確かめようとしたのだけれど……結局わからずじまいだ。」

彼は残念そうに、顔を左右に振って言う。
押さえつけた肩からは、抵抗は伺えない。

「……てめえ……何か知っているのか……？」

「……しらばつくないでくれよ。」

「あれは天命の輪じゃないか。」

「……！」

戒は反射的に、フィンデルへ視線を移す。

彼女はその言葉を前にしても、表情を変えずに努めていた。

「…何故………それを知っている…。」

言葉を腹からひり出す彼。

「…今は亡きガザンの王家に伝わる天命の輪があつた。」

ロディが口を静かに開く。

「強大なる力と引き換えに。

取り憑いた者と、その血族を未来永劫に呪い続ける天命第一位、
その名を『異端王』。
いたんのおう」

「……………！」

その言葉と同時に、急に身を離す戒。

「僕はそれを追ひ、討つために生きている。」

一方のロディは襟元を直しながら、床に上半身をもたれた姿勢で
廊下の天井を見詰めて呟いた。

「信じろと言うのですか。」

フィンドルが猜疑の眼差しで言う。

「…はは、無理かな。」

力無く笑うロディ。

目の前の彼女は床に転がった黄金の銃を拾い上げ、その銃口を自分へと向けていた。

「ロディッサーフリーデン…。」

貴方を拘束します。」

国境付近で宿を取り、室内のベッドに仰向けに沈む。

「…足の傷が痛い。」

熱もあるようだ。」

チチャードは開口一番、弱音を洩らした。

「だが、少し休憩したあと出立……だな。」

…大きめの馬車を手配してくれ。

タンダニアまでは、寝て行きたい。」

「はい。」

部屋の中までついてきた女は、外套の中から答える。

そこで上方から微かな物音を聞く彼。

「あと、天井裏に潜んでいる奴に伝えておけ。
四六時中、護衛されてちゃ、気が滅入るって。」

「…はい。」

女は、その言葉にも頷いた。

「他の連中にも伝える。
時が来たら集合をかける、それまで自由行動だ。」

「自由？」

戸惑うように聞き返す彼女。

「お前らだって、たまには気を抜かなきゃ生きていけないだろ？」

「……………いえ、そのようなことは。」

「休息しないのか？」

「…我々はそのようなことは、あまり考えませんが。」

「だったら、これからはそうしろよ。
世の中にはもっと楽しいことがあるから、それを覚えてよ…。
まあ…辛いことも……………沢山あるけどな。」

わずかな静寂が室内を支配した。

「心配するな。」

少しくらいズルしたって、給料が減ることはねえ。
上の方には、きちんと俺に仕えているって報告するから。」

「貴方は……不思議な方ですね。」

「何がだ？」

「普通だろ。」

目を丸くするヂチャードに再度頷き、口笛を吹く彼女。
瞬く間に、上方からの気配が消えた。

「お前も、どっかに行っていいぞ。」

「お傍に居なければ、いざという時にお役に立てません。」

「いいのか？」

男と密室に二人きりだぜ。」

相手の手首を掴み、引き寄せる彼。

「伽とぎをお望みですか？」

「……だとしたら、どうする？」

「訓練は受けておりませんが。」

すぐさま外套を脱ぐ彼女。

目の前に晒される、灰色の裸体。

「……冗談だ。」

悪かったな、からかって。」

デチャードは途端に目を伏せ、脇の窓の外へと視線を移した。

「お気に召さないのは……種族の違いですか？」

「……そういうわけじゃねえ。」

「冗談だって言っただろ。」

下に見据えた夜の街並み。

酔いどれの往来を眺める彼。

「私は今後、どのようなことがあっても、貴方にお仕えいたします。そう決めました。」

「……もっと適当に生きればいい。」

自分の手を枕代わりに、さらに身を沈ませながら彼は答えた。

「そついや、まだ名前……聞いてなかったよな。」

「『^{ルラル}根無し草』とお呼び下さい。
チチャード様。」

彼女は答え、彼の痛む足に優しく触れた。

「……………」

パンリは大口を開けたままの表情。

バーグは渋い顔で、長くなった煙草の灰を床に落とす。

就寝しようとして部屋に向かっていた彼等は、廊下でロディが連行される光景を呆然と眺めていた。

「のぞき程度で……？」

「はは。」

両手を自分の頭に付けて、彼は腫れた頬のまま照れ笑いを返す。

神秘的な面持ちでその後ろに付いているフィンデル。
その後ろの戒は、寝息を立てている世羅を抱えていた。

「ヒゲ、ザナナを呼んで来い。」

「あ？

……ああ。」

ただならぬ戒の言葉と気迫に、思わず従う彼。

「ルベランセには独房がありませんから……。」

訪れたのは、再びロディの部屋だった。

「貴方は既に他国の人間のため……これは外交問題として処理します。」

私の一存で処罰は下しません。」

「……ガツチャ殿が悲しむかな。」

「全て、貴方の迂闊^{うかつ}な行動が招いた事ではありませんか。」

相変わらず他人事のような態度に、フィンドルは静かに叱責した。

「いや……こいつが世羅を襲った理由は……おそろく……」

そこで、後ろから投げかけた言葉を止める戒。

「……いや……何でもねえ。」

「……くそ、冷静になれ……。」

「……ふ。」

独り言を呟き、悩む青年の姿に、ロディは微笑みかけた。

「君は、何か訊きたいことがあるようだね？」

「……ふざけるな。」

まだ殴り足りねえって、そう思ってるだけだ。」

世羅を片腕に抱き替え、片方の拳を相手の顎あごに付ける。

「……彼女に謝っておいてくれないか。」

きつと何も憶えていないとは思っけどね。」

「………！！！」

戒はそばの壁を思い切り叩き、大股でその場を去って行った。

「貴方の処置は………目的地に着いた後で行います。
それまでは……。」

彼を部屋に押し込んだ後、フィンドルは言う。

「……いいのかい？」

「この両手を自由にして。」

「……………」

フィンドルは彼の黄金の銃を手にしたまま、後ろへ顔を向ける。
わずかに開いたドアの隙間から、黒い豹頭が覗いた。

「……………なるほどね。」

観念したように、彼は肩をすくめてベッドの上に座りこんだ。

3

「……やっぱり……………北は寒いな……………」

顔面に刺さるような風の冷たさに。

両の肩を擦りながら、ブリッジの窓から顔を出すリード。

「じゃあ……留守を宜しく頼むわね。」

フィンドルが、降り立った地から見上げて言った。

中王都市の北の果て。

ティドン駐屯地の土と寒風は、乾いた歓迎をしてくれた。

南部と比べると風景の色合いも薄く、灰味がかった周囲の山岳風景と街並みは、静けさと落ち着いた印象を与えている。

「フィンドルも…気をつけてな。」

見送るリードに、小さく頷く彼女。

彼を含め。

ルベランセの全ての乗組員には、ロディの件を一切知らせないでいた。

そのことにより生じる混乱が、艦内でどのような波紋を広げるか想像もつかない。

彼の雇い主であるガツチャにさえ知らせるかどうか、決めかねている。

何故か解らないが、自分の中の勘がそう働いた。

「……こちらへ。」

同じように駐留中の飛翔艦群を抜け、一際大きな建物の前で待ち構えていた衛兵が、礼をして導く。

「はい。」

フィンドルは取ってつけたように敬礼を返し、その後ろに続いた。

「おい、ちよつくら戦闘騎でも飛ばしに行こうや。
この補給の間も時間が惜しいからな。」

バーグの大声が、部屋の外から響く。

室内のベッドで寝ていた世羅は、その声で目を覚まし、傍らに付き添う戒の姿を見留めた。

「…先に行つてろ、後で行く。」

振り向かずに、後ろの扉に向かって答える彼。

「…………おつ。」

そこに寄りかかっていたバーグは、小さく呟いた。

深夜の騒動から、既に一日以上が経過している。

艦内の目に付く所からロディの姿は消え、フィンデルも戒もどこかよそよそしい。

気にはなるが。

必要される時にいつでも働けるよう、自分は備えているだけだ。

そう思いつつ、彼は部屋を後にした。

「…………ボク、寝てたんだ…」

世羅がベッドの上で転がり、体を変えながら言った。

「…………世羅。」

「ん？」

戒の言葉に、顔を向ける彼女。

「…あの廊下で…………あいつは…お前に何をした？」

「ロディのこと？」

「…飛翔艦のことについて教えてくれただけだよ。」

それに合わせて、勢い良く上半身を起こす世羅。

「寝てろ。」

彼はその両肩を押さえつけ、押し付けた。

「……!!」

「俺様の言うことがきけないのか。」

その腕の力に驚く彼女の瞳。

戒は顔を背けずにそれを見詰め、無言で制した。

「……マルリツパ!! エングスと申します。」

ルベランセ護衛のデスタロッサ隊、ただいま到着いたしました。
隊長のコルツは体調がすぐれなくて。

とりあえず……僕が挨拶に。」

会議室に飛び込み、早口で挨拶をする太った男。

「わざわざすみません。」

室内の末席で、頭を下げるフィンデル。

「ご苦労、まずは座ってくれたまえ。」

議場の中心の男が立ち上がり、指示をする。

「あなたがルベランセの？」

……『艦長さんは』優しそうな人で安心しました。」

「え？」

「いえいえ、こつちの話で。」

フィンデルの横に、大きな尻をきつそうに椅子にねじ込む彼は、笑みを浮かべて言った。

「噂の、デスタロッサ卿のご子息の戦闘騎部隊か。」

対面の男が口角を歪めて、言葉を発する。

「クモサ・クアターナ、リッツァー・ゲルガ。
共に専用機。」

そして、その他の4機も性能が格段だと聞くが。」

「性能がいいのは、操縦士です。」

マルリツパは自信の表情で返す。

「どちらにせよ、短い道中に出番は無かるう。せいぜい、艦内でゆっくりしているのだな。」

その者の嫌味が一段落したところで、咳払いをする別の男。

「……とにかく、これで全艦揃ったことが確認できた。皆の者、どうか？」

中立地帯を抜ける寸前に全艦隊は帰還。

その後、ルベランセのみは単独でタンダニアへ入国してもらう……
 ……それだけのことだ。

こんな猿でもわかる簡単な作戦に、議論など必要無いと思わぬか。

その言葉に、拍手が沸き起こる室内。

「その通りだ、もう閉会で良からう。」

一人が席を立ち、それに続く者が後を絶たない。

脇のフィンドルは終始、目を伏せており。

このような雰囲気の場合に遅刻したマルリッパは罪悪を感じた。

「ぎそう
… 艤装は済んだか？」

「艤装など真面目にしてどうするといふのだ。

面倒くさい。」

見れば、誰もが見た目だけの勲章を胸からぶら下げており、緊張のかけらも無く談笑して去って行く。

「しかし、実に馬鹿げているな。

よりにもよって、騎士団側の人間の亡命とは！」

「無礼も甚だしい。

正規軍の艦隊を何ところえているのか！！」

わざと聞こえるように放たれる、廊下からの大声。

「初めから知らされておれば、こんな辺境まで来んかったわ！！」

「さっさと終わらせて、帰るぞ！

このような任務！！」

彼等は恐らく、この地に着くまで任務の内容を知らせていなかったのだろう。

各々、不満を全く隠すことなくぶちまける様は、武人の姿とは程遠い。

確かにこの様子では、事前に知らせた場合、作戦の参加自体を拒否する者が出てきてもおかしくはない。

そついった意味では、このギルチのやり方は誤っていなかった。

フィンドルは自分にそう言い聞かせ、気持ちを落ち着かせる。

「大尉には不愉快な思いをさせてしまって、お詫びの言葉も無い。」

そんな彼女へと近寄る、議場の中心に居た男。

「……いえ。」

ネウ提督も大変でしょう。」

「うむ。」

彼女が既に事情を飲み込んでいることに気づき、口髭を伸ばして
目元を緩める彼。

この駐屯地の最高責任者である彼も、南からの貴族将校達を御し
えていないのである。

中王都市軍の腐敗の実態は、まさにこの姿にあるようだった。

「…だが我慢などいくらでも出来る。」

中王都市の平和のためだと思えば、な。

早くギルチの代に替わり、ああいう連中が一掃されることを祈ろ
う。」

「ギルチ准将とは…お知り合いなのですか。」

「ああ。」

思想を共にしている。

歳こそ大きく離れているが、尊敬しているよ。」

そう言っただけ、初老の顔が輝くのがフィンデルにも解った。

「私は……自分があの年齢の時、あそこまで国のことを考えていなかったよ。」

自嘲するように笑い、今度は年相応の思慮深い眼差しを送る彼。

「ギルチから作戦の概要は聞いているね？」

「はい。」

そして軍帽をきっちりと被り直した彼に、彼女は姿勢を正して答えた。

「……では今から、それを詳しく説明しよう。」

「……というわけで……」

卓上に地図を広げて、皆に示すフィンデル。

「……我々の艦隊は『演習』という名目で、聖都のあるクレイナ湖のすぐ北側に位置する、このスガト荒野を横断してタンダニアを目指します。」

そして言葉を重ねながら、図上に合わせた細い指を、各所へ滑らせる。

「ただし、ルベランセ以外は国境手前で反転、全艦帰還。当艦のみはそのまま進み……」

その場の全員が、彼女の仕草に注視した。

「タンダニア領内へと進入します。」

地図上のその国に、円が描かれる。

「……距離的にはどうなんだ？」

「二日から三日程度だ。」

独り言のようなバーグの疑問に答えるリード。

「実はもう既に、スガト荒野に入っているからな。」

そして彼は、窓の外の流れる雲の景色と、わずかな振動が伝わる床を踏み鳴らした。

「途中、ムーベルマ渓谷をまたぎますな。」

地図を見詰めながら、モンスロンが呟く。

「…この辺りはお詳しいのですか？」

「ええ…昔、よく旅行をしたものです。」

カヌーでの河渡りとか……良い思い出ですよ。」

彼は気恥ずかしそうに頭を掻いて答えた。

「ところで艦長殿。」

…陣形が……少し密集しすぎているようですが。」

そして自分に目が向いたのを丁度いい機会とばかりに、外の様子を覗きながら彼女に訊く。

「…最右翼から最左翼まで目視できる範囲での飛行…。」

これだけ密集しては、もしも何かあった場合に対処が難しい。危険極まるかと。」

「すみません。」

騎士団と違って実戦とは程遠い人達です。

先の会議でも、皆、作戦には耳を貸そうとも…。」

「…するとこれは陣形ではなく、適当に進んでおいで？」

「恥ずかしながら…。」

フィンドルは視線を落とす。

「ただ、最後尾に当艦と旗艦を据えて、それを特別な戦闘騎部隊で護衛する配置にはなっています。」

「いえいえ、何も責めているわけではございません。」

必死に弁明する彼女に、モンスロンは笑いかけた。

「それにしても、すごい献上品ですな。
これもタンダニアに？」

そして話題を変えるように、室内の隅に置かれた荷物を眺める。
中身は金塊と宝石類ということを先程確認した。

「表向きの理由を親善訪問にしたとはいえ、ギルチ准将はこれを機にタンダニアと本格的に友好を深めようとしているようです。」

「国王のタンダニス陛下は剛直な御方。
かえって機嫌を損ねなければ良いのですが。」

モンスロンは苦笑しながら言った。

「……はい。」

それと…あと……二人にもおみやげがあるの。」

その後、機を見計らって、バグと戒に向かって包みを差し出す彼女。

「戦闘騎用の操縦服よ。」

これなら防寒効果も十分だと思うわ。」

「こいつぁ、助かるぜ。」

嬉々として受け取るのはバグ。

「さっきの短い補給時間でも惜しんで、かなり訓練を頑張っているそうね。」

ミーサから聞いたわ。」

「まあな。」

こちらら半人前の操縦士だからよ。」

早速、自分の体にツナギを合わせてみる彼。その一方で、戒は動きを止めたままだった。

「心配しないで、新品だから。」

「…ああ。」

少し躊躇しながら、戒は彼女の手から受け取った。
本格的に軍隊の象徴を手にするのに、今まで修道士であった彼に抵抗があるのは解らないでもなかった。

「しかしなあ……なるほど、要人の亡命の手伝いか。
どうりで大掛かりなわけだぜ。」

腕を袖に通しながら、戒に同意を求めるようにバーグが言った。
二人にしてみれば、ここで初めて明かされた事実である。

「そうね。
これは、ここにいるメンバー……そして各艦の艦長しか知らない
ことになっているの。」

リード、バーグ、戒、モンスロンと、順番に見回す彼女。
一瞬、この場にはいないロディの顔も頭をかすめる。

「だがな……中王都市に入ったあの時…ブリッジは気付かなかった
ようだ　　妙な…影のような奴が出た。

…相手にあんな奴が居たら、こっちの行動は筒抜けだろうぜ。」

「いや、異常はあった。

念通士の精神が侵され、制御を狂わされて…」

戒の言葉に、呼応したのはリードだった。

「君が危惧しているのは……今回の作戦も、既に何者かに知られている可能性が高いということだろう？」

「そうだ。」

「でもね、中王都市軍の内部にスパイを直接送り込めるくらい、騎士団の諜報は優れてる。

モンスロン卿がこちらの駐屯地に逃げ込んだこと。

亡命先にタンダニアを選んでいることも、既に知られている可能性は高いと思うわ。」

「……それを承知で泳がせていると考えても、いいかもしれねえな。」

話に割って入ったフィンデルの言葉に続くバーク。

「でも、たとえ読まれていても大丈夫なように、ギルチは作戦をここまで大掛かりにしたのよ。

ルベランセが一隻の時とは違う。

ここまでの規模にすれば、おいそれと手は出せないでしょう？」

彼女は、皆に納得させるように話した。

「しかし、念のため聞きたいんだが……騎士団に、そういう怪しげな術を使う人間はいるのか？」

「騎士団は大きく分けて五つの小団：そして諜報部隊が存在しております。」

それぞれは独立して活動しており、自分が所属していた『赤華』以外のことは良く分かりません。」

「当てにならねえ、おっさんだな。」

睨みつける戒。

後ろで彼の肩を抑えるバーグも、顔つきは険しい。

「大体……こいつの亡命自体が嘘だったらどうする？」

「虎穴に入る……ってことだよな。」

「……戒くん！」

そして、バーグも。」

そんな二人に対し、フィンデルは思わず声を上げた。

特に彼等には、今作戦の詳細を話したのがつい数分前のことであり、少なからず動揺しているのが伺える。

炎団との戦闘のこともあり、騎士団への不審が特に根強い二人からの反発は十分に予想されていたが、作戦の性質上、直前での報告しか方法が無かったことも事実であった。

「……すみません。」

モンスロン卿。」

「いえ。」

そのようにお疑いになるのは、ごもっともでしょう。」

彼女に対して軽く手を振る彼は、伝書鳩からの紙切れを取り出して見せる。

「……身の潔白になるか分かりませんが、『準備は全て整った』との、タンダニアの伝達役からの書状です。

彼にしか持ち得ない印章も、確かに捺印されています。」

「これは、本物だと確認がとれてるわ。」

フィンドルが皆を見回して付け加えた。

「それに……もし私が中王騎士団の刺客として、皆さんを騙すとするならば……引き合いに出すのはタンダニアのような大国ではなく、もっと遠い別の小国を選びますよ。」

騎士団に及ぶ影響を考えれば、非常に危険ですからね。」

そんなモンスロンの言葉に何も返せず、戒とバークは黙り込んだまま、腕を組んだ。

「ただ、艦長殿が言われたように……こちらの行動が読まれていると仮定した場合、相手の中央騎士団が

このような大艦隊に対する選択肢は、二つでしような。
やはり完全に傍観するか……」

彼は自分の四角く平たい鼻に触れながら、少しずつ、小さく言葉を洩らしていった。

「それとも、真正面から抗争に持ち込むか。 」

中王都市とタンダニアの間に位置する、痩せた土が広がる地帯。

棲息する生物も植物もごくわずかな、その荒野に設けられた帷幕^{いはく}。

「……そうだな。
これは、こうだ。」

その中で卓上の編成図を指しながら、傍の黒華の者達に命令を下すファグベール。

そこで不意に開かれる内幕。

「……ディボレアル殿。」

黒騎士の姿を見留め、低く呟く老将。

「先程、陣容を見せてもらった。
現時点の兵力での最良、見事な編成だ。」

「……元々は自分の艦隊だ。
見くびってもらっては困る。」

そんな無然としたファグベールの言葉に頷き、漆黒の甲冑は乾いた金属音と共に歩み寄る。

「上空においては、全艦隊は半月形に展開。
初期配置高度は雲上。
両翼を大きく広げつつ前進する。」

そして彼は上座に入るなり、言葉を発した。
時が来たことを実感し、全員が姿勢を改めて直立する。

「……この度の戦における、それぞれの役割を申し渡す。
ディボリアルⅡマシース、ならびに副将ファグベールⅡホウ
マウ。

旗艦『センドルホーン』に。」

「……！」

自分の役職に驚き、振り向く老将。
だが黒い仮面の横顔は、無感情に言葉を続けていった。

「準旗艦として、重巡洋艦『センドルアイン』。艦長はシアレンティーナ。」

「は！」

目の前の兵士の短い返事。

「次、第一軽巡洋艦『ルガーツ』、艦長……」

次々と挙げられていく艦と人員の名前、そして返事。

（……！？）

ファグベールは自身の登用以上に、各指揮官達の登用に理解出来ないでいた。

彼等、黒華の者達は単独任務や裏方の任を主としており、將軍級の働きなど期待出来ようはずもない。

「……以上。」

総員、早急に配置に……」

「待たれよ、ディボレアル殿。」

ファグベールが全員の動きを止める。

「無謀だ。」

黒華は実戦経験が薄く、そして圧倒的に人数が不足しておる。総動員してなお、艦隊をここまで運んでくるだけで精一杯だったのだ。

実兵がおらねば、何も始まらない。」

「兵ならば…すでに集まっている。」

手で指示を出し、衛兵に東の外幕を開けさせるディボレアル。

そこに現れる、小高い丘上の軍勢。

「！！！」

ファグベールは身を乗り出し、目を剥いた。

「蛮族……！！？」

馬鹿な……一体何処から……！！！」

半裸で屈強な男達を先頭に。

全身に棘とげのある民族衣装の者達。

さらに、犬の皮を被った不笑人の姿。

そのほか、幾つもの様相で混成されている人群。

「これは一体……！！？」

目の前の事態に対し、全員に臨戦態勢をとらせようとするフアグ
ベル。

「早まるな、『味方』だ。」

それを黒騎士が、片手を水平に広げて制した。

「……もしや、騎士団に蛮族を組み込もうというのか？
それはどんな理由であれ、あのアルドの叛乱を収めた『歴史』に
背いておるぞ……！」

彼の経験と年季が焦りを消して、一旦は冷静にさせる。
だが、それは余計に頭に血が昇るような推測をさせた。

「……これだけの数をどこから……かき集めた？」

「……四年前の聖都動乱。」

呻く老將に、ディボレアルは答える。

「……当時は、我が赤華も親王隊と共に守護の任に当たっていたが……」

「如何^{いか}にも。」

哄笑の声で、黒い仮面が動いた。

「あの時、空から直接に聖都と法王を狙い、飛翔艦で奇襲をかけた賊徒達がどういった連中であつたか？」

「……アルドの叛乱の残党、と聞いておる。」

「そう。」

そして彼等は……それらの子、および親族。
動乱後に国境を越えさせ、今までこのスガトの地に大団長殿がかくまっておられた。」

「馬鹿な！」

詳しく説明してもらおう――！」

「その必要は無用だ。」

帰還してから、本人に直接聞くがいい。」

激昂して詰め寄るファグベールを軽くいなして、彼は開いた外幕へと歩む。

「……よもや……ガイメイヤ大団長は、あの時から腹に一物据えておられたのではあるまいな？」

「否、慈悲のほか無い。」

この度の彼等の立兵は、その恩義に応えたまで。」

苦しむような更なる呻きに、黒騎士は短く答えた。

「だが大団長自身は、これが今の中王都市の在り方に、最も怒りを表すことが出来る兵士達であるとお考えだ。」

「…その矛先がこれからの未来、騎士団に向けられる可能性は考えぬのか。」

残党のさらに残党。

その溜め込んだ屈辱と怒りは計り知れないものであろう。

「それさえも許容しようという、そのような御心は解せぬか。」

だが、黒騎士の一言が老将を沈黙させる。

「……やはり、違うようだな。
わしのような凡夫とは。」

臉の裏に映る大団長の決意に、今まで躊躇していた覚悟が自然と決まる。

そして同時に理解した。

これは、単なる亡命阻止の作戦ではない。

騎士団は中王都市軍に対して、れっきとした戦いの火蓋を切ろうとしている。

「……しかしこれは…あの聖騎士の小僧は知らんのだろう。」

「……………」

「知らせぬ方が良からうな。

あの動乱の殊勲により聖騎士に任命されたというのに、肝心の騎士団がこれでは、大した道化だ。」

いまだに身体が状況に追いつけず、不快な表情を露にしたままファグベールが言葉を洩らす。

「たとえ道化でも、余りある地位と名誉だと思うが？」

目の前の黒い仮面は全く憚らず、冷淡に言い放った。

「…それよりも…」

さあ、これより奴等に仕込むぞ。」

「……何を？」

その後ろを、ファグベールは半歩遅れて追いかける。

「戦闘騎を初め、我等全ての兵器の使い方だ。」

呆気にとられている老将を尻目に、黒騎士は息巻く軍勢へと向かっていった。

軟禁されてから時間の感覚が無い。
どのくらい経ったのだろうか。

扉が僅かに開く。

その隙間から、眼光きつく睨む豹頭。

さらに脇から、別の一人が入ってくるのが横目で見えた。

「……やあ。

また、必ず来ると思っていたよ。」

室内の天井を見詰め、呟くロディの前に。

戒は緊張した面持ちで立っていた。

「……世羅ちゃんの様子はどう？

……あのことは……」

先に声を発したのは、ロディの方だった。

「話してねえよ。

憶えてないなら……あえて話すことはねえ。」

戒は答える。

「優しいんだね。」

「…面倒なだけだ。」

吐き捨てるように答え、彼はにじり寄った。

「あんまり…痛いのは好きじゃないんだけどねえ…」

ロディはわずかに起きてベッドに腰かけ、片膝を抱くようにして笑った。

「…殴りに来たわけじゃねえ。」

「それじゃあ、何の用だい？」

彼が分かっているながら訊き返していることに、戒は少し苛立ちを覚える。

「…お前の行為は…フィンデルには理解できねえだろうが……。
以前、同じ行動を取った俺様にはわかる。」

「なるほどね。」

ずっと考え、気持ちを整理したのだろう。

ロディは、昨夜と見違える戒の冷静な表情をじつくりと観察した。

「あいつは……あの時、怯えていた。恐がっていた。」

彼は顎を下げたまま、小さく呟く。

「あいつ自身は、本当に何も知らねえんだ。だから……」

「ああ、すまない。」

戒の言葉の途中。

真剣な面持ちで、ロディが素直に謝った。

「どうやら……僕達は追いかけているものに共通があるようだね。そして君は、境遇が似ている同士……意見や情報を交換したい、そんなところかな。」

「……………」

戒はその言葉に全く動じず、ただ彼を見下ろしている。

「君になら、信じてもらえるかもしれない。ここから西方。」

今は亡き、ガザンと名の付いた小さな独立国家の……昔話を。」

ノックしかけた手を寸前で止め、フィンドルは扉の前で聞き入っていた。

「
貴女は？」

だらしなく、薄服の半分をはだけたまま。
寝惚けた顔で寢室の扉を開き、彼は問う。

「
……ねえ、誰よ…？」

背後から全裸の女性が、ベッド上から起き抜けに呟いた。

「知らない人さ。」

答える彼。

「ロディッサーフリーデン殿……ですな？」

宵闇の残る早朝。

その老婆は見るからに高貴な装いで、しかるべき身分であることが暗がりの中でも容易に判別できた。

「王宮銃士隊隊長にして、名だたる戦闘機の名手……『空駆ける天馬』。」

「ああ……その通りだけど。」

「貴女は？」

「三ヶ月前、城で開催された夜宴を憶えておいでか。」

「……いちおう。」

ちぐはぐした言葉を返す老婆に、ロディは眉をひそめる。

「一晩の過ちを犯しましたな。」

「過ち？」

老婆の背後。

薄暗い路地脇から現れる、口元をレースで覆った女性。

そして身を包んだローブから僅かにのぞく『きめ』の細かい肌に、彼は思わず軽く口笛を鳴らす。

「無礼者。」

だが目の前の老婆が、その襟元を掴み引き寄せて凄んだ。

「ガゼン第三王女、キャエル様であらせられるぞ。」

「……あ、ああ。」

そつえば……遠くから何度か……ご尊顔、たてつかまった憶えが……」

その名に驚き、たどたどしく呟く彼。

「……それで、一介の軍人の私めごときに、何の御用でしょう。……キャエル姫。」

「愚か者め。」

何も憶えておらんと申すか。」

「はい？」

目を伏せ、一言も言葉を発さない、王女。

そして、老婆の叱責。

その言葉どおり、全く憶えを持たないロディは、情けない返事を洩らすので精一杯だった。

「この間の夜宴の時、貴様が姫様に何をしたか。」

「憶えてないなあ……僕としたことが、あのときは酔いつぶれてしまつて……」

答え、自然と言葉が止まる。

「もしかして……過ちというのは……?」

そして指を王女に向ける彼。

「無礼だと言っておろうが!」

「いたた!」

その指を掴みあげ、無理な方向に捻じ曲げる老婆。

「すでに王女は、御腹に赤子をもつけられておる。

無論、貴様の子。

どう責任をとるつもりじゃ。」

「…あ、あのねえ……何かの間違いじゃございませんか。
流石の僕も…王族に手を出すまで…」

「王女が貴様にたぶらかされた以外に、不貞をしたと疑うのか。」

「い、いや…そういうわけじゃ…」

老婆の気迫に思わず圧される彼。

「聞くところによれば、貴様は無類の女好き。
酔った勢いで相手も確かめず、手を付けたのであろう。」

「……うん。」

ロディは自らの頭を押さえる。

「このことが国王に知れたら、二人共、ただではすまぬぞ。死刑は免れぬ。」

「……う。」

「……死ぬのはやだなあ……。」

「そうであろう。」

ゆえに、わしは姫様の乳母として、最善の方法を持ってきた。」

「……ぜひとも聞かせてもらえませんか？」

「駆け落ちせよ。」

それしか二人が助かる道は無い。」

その突拍子の無い言葉に、ロディは一瞬にして生氣と言葉を失った。

対する老婆は、辺りを確認しながら、素早く彼から離れる。

「よいか、決行は三日後。」

その日の深夜、城街の南門を突破する手はずを整える。それまで早まるでないぞ。」

そして王女の手を引いていく。

彼女は静かにお辞儀をして、闇へと消えていった。

「……あらら。」

僕の人生…どうなっちゃうのかねえ…？」

寝室の中からの厳しい視線を背中に浴びながら、ロディは独り呟いた。

年齢18の時、王宮銃士隊内の騎馬獵兵大会にて最年少で勲章を授与。

その二年後。

彼の勤めるガザン王朝は、時代に則り、^{のつと}騎馬に代わる主戦力として戦闘騎技術を取り入れた。

射撃の腕を買われた彼は、そこで試験的に組織された幾つかの部隊の中の一つを任されることとなる。

やがて各戦地において自らが撃墜王として名を馳せた後、王室警護の一翼に昇格。

それが王宮銃士隊の成り立ちであった。

時代の流れに柔軟に対応出来た彼は、地位や名誉にも固執せず、国家への忠誠も特に強くない。

ただ雲のように自由に生きる毎日。

妻と娘を持つ男以外は誰もが、彼のそのような生き方を粹に感じ、
気に入っていたという。

「ロディ隊長は、だまされています!!」

二人きりの詰所で、少女が自分の両手を握り締めて叫んだ。

「いや、僕もね……こんなことになるなんて夢にも思わなかったよ。」

やつれた顔で答える彼。

「その王女は自分の不貞で出来た子を……隊長の風評を利用したに
違いありません!!」

少女は叫んだ。

「だって……その……隊長は……」

そして恥じらいながら口を開く。

「全く避妊しないっていう噂じゃないですか!!
それって……」

「そう、それでも出来たことが一度も無い。
だから、僕は子供を作れない体質だと思ってた。」

彼女の手を軽くとっていなしながら、続ける彼。

「でも……そうじゃなかったのかなあ……」

そして椅子に体重を乗せて、首を傾げながら溜め息を吐く。

「……当夜もね……王女に会った記憶は無いんだ。
でも泥酔してたから、100パーセント『そういうこと』が無か
ったって言い切れないんだよ、実は。」

「何を呑気なことを！」

どうするんですか、命じられるまま本当に駆け落ちを！？
そんなのダメです！！」

少女は食い下がる。

「でもねえ……もう日時まで決められちゃってるし……」

「隊長はその王女のこと……何も知らないのでしょうか！？
好きでないのでしょ？」

「……うん。」

でもね、彼女のお腹にいるのが誰の子であれ……」

彼のたるんだ表情が、少し真顔になった。

「僕を頼って来てくれたことに変わりはないから、僕は行くことにするよ。」

「……………!!」

その無邪気な表情を前に、固まる彼女。

「本当……………隊長はバカです……………!!」

「いめんよ。」

こういう性分で。」

最後に彼は、自分の襟元から隊章を取り、彼女の手に握らせた。

道中、馬車の中では、共に無言が続いていた。

「……………えっと……………キャエル姫。」

「もう……………私は姫ではありません……………」

「あ……失礼。」

少し哀しそうな表情で、遠ざかっていく王宮を眺める彼女に、
つが悪そうに謝る彼。

「怒って……いらっしゃいますか？」

彼女は虚ろな瞳で訊いた。

「僕が……怒って？」

「だって、憶えていらっしゃらないのでしょうか？
否定すれば宜しいのではなくて？」

「いやいや、男は責任は取らないとね。」

明るく努める彼。

「それに……こんなに可愛い奥さんが急に出来て、嬉しいよ。」

「……………！」

その言葉が意外だと言わんばかり表情を、
対面に座る彼女は見せた。

「えっと……いいんだよねえ？」

子供が出来たから、夫婦になるって……」

恐る恐る訊くロディ。

「……はい。」

妙におどけた彼の仕草。

彼女は可笑しおかそうに、初めて笑う。

そして国境を一つ越えることに、彼女の笑顔は一つずつ増えていった。

やがてガザンから遠く離れた自治街に落ち着き。

ロディはその自警団の銃砲訓練士として雇ってもらったことができた。

今までとは全く異なる環境。

妻をあまり心配させないよう、毎晩早めに帰る生活。

世間一般で言うところの健康的な営みがごく自然に行えること、それはロディ自身でも驚きであった。

ついこの間まで全く知らなかった女性を驚くほど愛することができ、やがて生まれてくる子供の誕生を、
楽しみで仕方がない毎日を送る自分がいる。

これは不幸ではなく、幸せが転がりこんだのだと、彼は今まで祈ったことも無い神に感謝した。

そして国家から逃亡して数ヶ月後のある日。
彼は一つの噂を耳にした。

ガザン王朝。

国王崩御の末、分裂。

その国王には男児はおらず、第一王女、第二王女が共に後継を主張。

互いの派閥は、それぞれを戦闘国家ガトランザとレンセン共和国の援助を受け、武力衝突。

そして、膠着。

完全に疲弊した国は、援助を受けていた両国に領土の半分づつを乗っ取られる形になり、ついにガザンはついえた。

彼女の腹が見違えるほど膨らみ、大事をとって入院した季節。

大衆酒場の窓から覗く夕暮れの雲を眺め。
消えた故郷を思いながら、随分とあつけないものだ、彼は思った。

「ロディ。」

お客さんが来ている。」

それから数日後。

彼は兵舎で帰り支度をしていた中で、同僚に呼びかけられた。

「若い娘だ。」

奥さんと産まれてくる子供を泣かすなよな。」

「?」

疑問に思いつつも、訓練所の出入り口へと向かう。

目の前に居たのは、自分の部隊にいた、あの少女だった。

「……君は……!」

ガザンがあんなことになって……心配してたよ。」

「……隊長……」

「！！」

それまで、何でもないように立っていた彼女の身体が地に崩れる。咄嗟に支えると、その服の脇から大量の出血が溢れた。

「この傷は……！？」

今すぐ手当てを……。

病院へ行こう……すぐ近くに……」

「……憶えていらっしやいますか……？」

……城内に封じられた……地下の一室を……。」

「？」

血の気の失せた唇を震わせる彼女の言葉に、彼は眉をひそめた。

「……ああ、憶えているけど。」

一度だけ、部隊の数名を引き連れて訪れたことがあった王宮の東塔の地下。

幽霊話の噂を聞きつけ、皆でからかい半分で訪れた場所。

だがしかし、化物の呻き声が響く、地獄のような一室は確かに存在していた。

堅牢で厚い櫓の扉の隙間越しに見た、太い鎖に体中を縛られた男

の姿である。

そしてそこで背後から近付いてきた、食事を持った召使いの老人の気配に驚き、全員は逃げ出したのだ。

後に王宮側からきついお叱りを受けたのだったが、あれは罪人を入れた牢だったのだろうと、皆で勝手に納得していた。

目の前の彼女は。

何故このような急時に、懐かしくも愚かしい昔の話を持ち出すのか。

「あれは……あれこそが世にいう天命人……エア・ファンタジスタだったのです。

中でも、あの天命の輪は……圧倒的な力と引き換えに理性を奪い……

……一族を根絶やしにするまで……

……乗り移り続けるのだとか……。」

か細い声が、彼の記憶を引き裂いていく。

「あの地下に……幽閉されていた者は……初代国王の息子……ミエマサット王子……。」

宮殿内に到達したガトランザ軍により、あれは鎖につながれたまま……首を刎ねられました……。」

(ミエマサット王子……?)

ロディは、彼女が怪我のために混乱をきたしているのかと疑った。

その名はガザンの歴史に刻まれる、勇者の名。
圧倒的な武力で兵を指揮し、勝利を導いたことにより、ガザンは
2000年に及ぶ独立を勝ち取ったとされている。

「ですが……その天命の輪は次に、投降中の王族の枢機卿に発現。
暴走したそれを止めるために、大半の駐屯兵が犠牲となりました。」

彼女の息が荒くなる。

「現在……その呪いの恐れから、ガザンの王族は全てが根絶やしにされようとしています……。」

今日明日にも……全て……処刑が完了……。」

そこでさらに大きく態勢を崩す。

「待て……君は……。」

……天命人？ 天命の輪？

……誰に、そのことを聞いたんだ？」

ロディは意を決して訊いた。

「城の乳母の方に……。
……必ず……隊長に伝えろと……。」

彼女の口元に一筋の鮮血が流れる。

「……キャエル様を……今、撃たなければ……危ない……これを……」

そして胸元から取り出される、彼女の血に濡れた黄金の銃。

「乳母様から……預かりました…。

王家に伝わる…最後の手段……。

…『あれ』を解き放つてはならぬ……と………」

そこで役目を終えたように、彼女は息絶えていた。

駆ける。

胸騒ぎがした。

走る最中。

だが。

どこを探しても、その拳銃には弾を入れる箇所が無い。

我に返れば、そこは既に病院の目の前だった。

(……撃つ?)

この不可思議な構造をした銃で撃てばいいのか。
まるで解せないまま、息絶えた彼女の言葉に背中を押されて、妻
に会いに院内の廊下を進む。

「ロディさん!？」

途中。

馴染みの医師が顔中に汗を光らせて、彼の顔を見て驚いた。

「……先生、僕の奥さんは？」

「ちょ、ちょうど良かった……！」

今……呼びに行こうと……思っていたんだ……」

「……?」

その鎮痛な面持ちと途切れがちな言葉に、ロディは瞬きを止めた。

「……落ち着いて聞いて欲しい……。」

実はつい先程、容態が急変して……」

開く口元。

彼はその目の前で放たれようとする言葉を止めたいと、心底から
願った。

「手当ての準備で少し目を離れた隙に……自ら命を……!!」

だが、それは叶わず。

視界に移る全てのものが暗転した。

4

死者を送る、教会の鐘。

ゆっくりと鳴らし続けられるそれは、寂しい音色だった。

「もうすぐ、埋葬作業が終了いたします。
よろしいですか、ロディツサ殿。」

裏の緑丘に寝そべる彼に対し、背後から神父が静かに声をかける。

「夫として最期のお別れを…」

「ああ…いいんだ。」

銃の感触を胸に抱いたまま、漠然と眼下の海と白雲を眺めている彼。

「もう…どうしても、ね。」

前祝いを何度も開いてくれた同僚達。

産まれて来る子供のために、おさがりの服をくれると笑った食堂のおかみ。

そして、亡くしてからまだ時間の経っていない妻の顔が、順番に頭に浮かんだ。

（…あの王家の話と…関係あるのかい？

…何か…君は自分の身体に異常を感じて…）

手の甲を目元に乗せ、力を抜く。

たった数ヶ月のうちに、故郷をはじめとして、あらゆるものが消え。

まるで自分だけが現実から隔離され、別の時を生かされているような心地がした。

いつの間にか、辺りは夜になっていた。
丘でそのまま眠りこけていたロディは、冷え切った全身を擦りながら立ち上がる。

今夜、教会では定例のミサが行われているはずであった。

それなのに、やけに静かで。

普段のおごそかな礼拝の歌が無い。

もう終わってしまったのだろうか。

それでも帰る前に一言、神父に声を掛けていくのが礼儀に違いない。

彼は何気なくそう思い、様子を確かめることも含めて教会に歩み寄った。

小破している正面の扉。

それを目に付けて、嫌な先触れと共に足が止まる。

彼は扉の際に身を伏せ、その隙間から月光を利用して中を覗いた。
質の悪い街道の水たまりのように、所々に血が溢れた絨毯。
その血痕は、壁はおろか天井に至るまで広がっている。

そして教会内に入り、目が慣れるにつれ、血液のみでない。人間の死体が縦横無尽にして転がっているのが分かった。

砕け散っている肉片と礼拝の長椅子。

そのおぞましい混成を調べていくうち、それらの断面が毛羽のよ
うに逆立っていることに気付く。

肉塊が、視界の端で蠢いた。

そいつは、まだ人肉を喰らっていて。
まだ、そこに居た。

ロディは目の神経を集中させ、直後に後悔をした。

それは、土くれが付着した赤子の姿。

咄嗟に胸元に仕込んでいた黄金の銃を構える自分。

(…何を……？)

僕は……あれを撃とうとしているのか!?)

意識の外にある動きだった。

それはまるで、銃に動かされたような感覚。

自分を抑えこみ、再び銃を胸にしまい直して逃げる。
その音に反応するように、転がっていた死体の首が飛んだ。

一度、二度。

床を叩きつけるようにして恐ろしい地響きを鳴らしながら。

赤子とは思えない歩数で追いつかれる。

足首を捉われたと思うと、螺旋を描いて壁に激突する自分がいた。

(……凶獣……？

……いや、違う……!!)

血痰を吐き捨て、無理にでも立ち上がり。

正面の赤子の額に、黒い文様が広がっているのを見た。

だがそれは、すぐに闇の中に紛れ、自分の視界から消える。

爆発するような動悸の中。

息を荒げ、腰に下げていた扱い慣れている方の銃を構える。
床を這う音に向かい、勘を頼りの発砲。

散る火花。

赤子の極小の右手が弾き飛ばし、その弾道を逸らしたのが、その

一瞬に見えた。

「!？」

そこからは、幾つ撃とうが、同じだった。

やがて肩に乗り掛かられ、喉の脇元に取り付かれる。
そこで満腹を示す、あい気を吐き出す赤子。

血肉の匂いが鼻腔に入る。

大空を駆け、幾多もの戦いを経験してきたロディツサッフアリー
デンが、恐怖から気を失うのはこれが初めてであった。

自分も、血溜まりの中に転がっていた。

朝の陽の光に照らされた、神を模した像は破壊しつくされている。

裂かれた首の出血は全身を濡らし、その他の全身も痛みがたまる
ない。

その中で唯一、左胸のみが全くの無傷で済んでいた。

何か執念のように小さな赤い手の平が、その服の周辺に幾つも付いていて、それでも手出しが出来なかったことが見てとれた。

まさぐると、滑り落ちる無傷の黄金銃。偶然に心臓を護ることが出来ていたのか。

這うようにして立ち上がり。
墓地へと向かう。

そこには、想像していた通りの光景があった。

妻の墓の土は盛り上がり、小さな穴が空いている。

それは掘り起こしたのではない。
中から何かが這い出したような跡。

彼は怒りに任せ、手にした銃を地に向けて引き金を引いた。

放たれた沢山の赤い粒子が、地を舐めるようにして飛んだ後に恐ろしい変化で曲がり。

猛烈な速度で上昇して空へと消えていった。

瞬間、彼は理解した。

この銃は、人ではない『何か』を殺すために作られたのだ。

そして、その『何か』は、先ほど目の前にあった。

「……ああ、そうか。
そういうわけか。」

彼は狂気的な微笑と共に、全てを受け容れた。

室内から響いた鈍い音に、それまで息を潜めて話を聞いていたフィンデルが飛び退いた。

慌ててドアを開けると、そこには拳を振り切った戒の姿。

「……ひたつてんじゃないぞ……この野郎……ッ！」

彼の震える右腕を、フィンデルは思わず抱える。

「そんな物語を話せば……世羅を襲ったことを正当化できると思っ
てんじゃないだろうな……！」

「……いや。

正当化も美化も……しようなんて思っていないさ。」

殴られた頬を横に向けたまま呟くロディの瞳には、怒りも悲しみの色も無い。

「……自分のガキかもしれないものを殺そうとするくらいなものな！」

戒はフィンドルの手を乱暴に振り払い、すぐに部屋を出た。

「……すみません。」

流石に気の毒になり、彼女は咄嗟に手にしたハンカチでロディの切れた唇の血を拭う。

まるで戒の保護者のような、そんな口調に、彼は微笑んだ。

「……いや。

少々、手荒いけれど、どうやら彼はこれで許してくれたようだよ。

「

そして、痛む頬を擦りながら答える。

「きつと…似た境遇の者でしか、分かり合えないんだろうね。
彼はまだ若いし……物事を受け止めるのに時間を掛けるタイプな
んだよ、きつと。」

不可解そうな表情の彼女に対し、彼は悟ったような眼差しで続けた。

「…それより……聞いてたんだ、今の話。」

「……え?」

そこでようやく、室内に居る自分に気付くフィンドル。

「すみません…!」

盗み聞くつもりは…」

「……いや。」

むしろ聞いてくれていたおかげで、話が早いよ。」

彼は手を差し出す。

「悪いけど……返してくれないかな。
…僕にとって、大事な物なんだ。」

「……………」

フィンドルは僅かに躊躇した後、その真摯な瞳に従うようにスカートのポケットから黄金銃を取り出す。

そして銃身を持ち、持ち手側を彼に向けた。

「謝ります。」

この前は……奥さんと子供のこと……何も知らずに酷い中傷を。」

そして深く頭を下げての謝罪に、首を左右に振る彼。

「……ありがとう。」

優しいね、君は。」

「！」

指先の触れ合いに驚き、反射的に身を引く彼女。

「……傷が癒えた後、僕はガザンの地へと戻り、廃墟になった王宮を目の当たりにした。

そして、そこに隠されていた文献を調べていくうち、色々と学んだよ。

この黄金銃が無限の弾を放つ武器だということ、そして既に僕以外の誰にも扱えなくなっていたこと……」

彼は慈しむように受け取った銃を撫でながら、呟いた。

「…まるで、聖十字のような……？」

「そう。」

しかし……機構こそ似ているけれど、クレーンのは数が多過ぎる。
『これ』とは違い、本物ではない気もするけれどね。」

含みを持たせて笑いかけるロディ。

「…ガザンの伝承を裏付ける、恐ろしい天命の輪と力を与えた者…
そして、それに対する武具を過去に蒔いた者がいるのは確か
なんだ。」

…にもかかわらず、制限が設けられているのは何故か。

これはあくまでも推測だけど、それらを与えた者は同一かもしれない。」

「……………」

「僕は、そんな何者かの作った運命に絡め取られた、悲劇的な男
のさ。」

どう？ 惹かれない？」

「……………」

場を明るくしようとおどけて話す彼に、彼女は暫く無言であり続
けた。

「貴方は……逃げたいと思ったことは無いのですか。」

「逃げる？」

「…せっかく命拾いしたのですから……放っておけばいいじゃないですか…。」

それに…自分の子供かもしれないものを撃つなんて…」

彼は首を傾けながら、唐突に放たれる質問に口元を緩ませる。

「後悔して、苦しくなるのなら……逃げない方がいい。

僕の場合…それが判っているから。」

その言葉で、彼女の表情がより強張るのを感じた。

「…でも、逃げること自体は否定しないよ。

そうしなければ自分が壊れてしまうのなら……逃げてもいいと思う。」

「そうですね。」

何故か申し訳なさそうに視線を落とし、彼から離れるフィンデル。

「でもね……こういう人生でも良いこともあったんだ。」

彼女の背中を眺め。

「男は、少し影がある方がモテるから。」

ロディは小さく呟いた。

「 コルツ。」

密閉し、光を落とした格納庫内。
マルリツパが戦闘騎の操縦席で寝そべっている少年に近付く。

「昨日の会議の報告なんだけど…」

「報告なんていらねえよ。」

「ルベランセの艦長に会ってきたよ。」

「……それが？」

ぼんやりとした虚ろな目で、何も無い空間を眺めている彼。
その足元に落ちている、注射器と空の薬瓶に目を止めるマルリツ
パ。

「薬は止めなつて。」

「うるせえ……」

「やっぱり、昨日の街で買ったんだね？」

「お前には関係ねえだろ……。」

頭を深くもたれながら文句を言う反面、彼は恍惚の表情を見せた。

「やめとけよ、マルリツパ。」

見かねた隊員が、背後から声をかける。

「どんなに言っただって聞かないんだ。
放っておけよ。」

他の者も冷ややかに言い放ち、格納庫を後にする。

「……そうさ。」

「……どうしても止めさせたいって言うんならよ……」

コルツが浮くような心地の中で呟いた。

マルリツパは耳を傾ける。

「……ブツ殺してもいい敵を、たくさん呼んで来い。」

しわがれた低い声が、操縦席の中で反響して聞こえた。

「夢のような場所で、半ば強引に聞かされたから……その『存在』は少しだけ疑問だった。

だが…あいつのおかげで、確信できたぜ。」

戒は自分の手の平を見詰めながら呟いた。

「……………その、天命第一位というのは、一体何なのだ。」

食堂の片隅の席。

聞き役に回っているザナナが訊ねる。

戒はその視線をかわし。

だが、口元を引き締めて言った。

「ある時は、力を与え…。

そして人の記憶を奪ったり……………自由を奪う…。

関わった奴が、どんどん不幸になっていくのは確かだ。」

「それは、許せん。

どこにいる、そいつは。」

槍を構え、息を巻くザナナ。

まるで内容を理解していない様子だが、それだからこそ戒は話していた。

要するに、心中を誰かに話せれば気が済むこと。
彼はその役には適任である。

そんな中、厨房で作業をしていたシユナとパンリが、同時に視線を一点に投げかけた。
それを追う戒。

何事も無かったかのように、飄々として食堂を訪れるロデイの姿がある。

「大丈夫だったんですか…？」

真っ先に駆け寄って行ったのは、パンリだった。

「ああ、気にしないで。

…もしかして、心配してくれてたのかい？」

「勿論ですよ！

でも、私よりもガツチャって人の方が、ずっと探してましたけど…」

「はは。あとで謝っておくね。

……それと『これ』は、君とは無関係だから安心していいよ。」

青アザになっている頬を擦りながら囁き、彼は笑顔をつくる。

「…よ、良かったです…。
私は、てつきり…」

「…で、どうだった？
生まれて初めての女の子の裸は？」

「……見てませんよ。」

ロディの小声での質問に、少年は恥ずかしそうに呟いた。

「何？
何の話よ？」

そこへ厳しい目つきで、迫るシュナ。

「い、いえ……何でも…」

「ちょっと、パンリ！」

そこへ、通りがけのミーサが廊下から大声で呼ぶ。

「格納庫に来て。
今から、ちょっと整備を教えるから。」

「…あ…はい……。」

「大変ね。」

雑用係も……」

「全部、てめえのせいだろうが。」

駆けていくパンリを他人事のように遠い目で見送るシュナに、近寄った戒が毒づく。

「いつまでも、細かいことを…小さい男ね。」

しかも、のぞきくらいで暴力を振るうなんて、最低。」

彼とロディを交互に見ながら、彼女は言った。

「そうそう。」

見られても減るもんじゃないしね。」

「調子に乗らない。」

軽口を叩くロディの傷を、持っていた菜箸さいばしで突くシュナ。

「いたたう!!」

そして、もんどりうって床に転ぶ彼を笑い、彼女は再び厨房の奥へと向かって行った。

「……凝りねえ野郎だな。」

女よりも、もっと他にやることがあるんだろうが。」

「…確かに、ね。」

呆れたように呟く戒に対し、ロディは答えた。

「…もう、あれから10年だよ。」

いつかいつか、決着をつけようともがいているうちに。」

「その思いは……変わらずにいられるものなのか？」

「そんなにカッコいいもんじゃない。」

このことに関してだけは、僕の中の時計の針が止まっている……それだけさ。」

その真剣さをかわすように、ロディは言った。

戒は手を伸ばし、彼の襟元を掴んで床から引き上げ、顔を近づけて歯を食いしばる。

「その部分だけ……尊敬してやる。」

そして乱暴に手を離す。

その彼の様子に、ロディは声に出さずに笑った。

「……圧倒的に時間が足りぬわ。
長年やっているが、このような強行錬兵は経験が無い。」

あからさまな不満を声に洩らしつつ、ファグベールが自分に用意された席へと腰を下ろす。

「戦闘騎には、わずかに乗りこなせる者が出た程度。
たとえ相手が何であれ…これでは苦戦は必至。」

そして、艦長席に座るディボレアルに視線を送る。

「さぞかし素晴らしい、策があるのでしょいうな。
軍師殿。」

「……策などはない。」

くぐもった声で返す彼に、疲れた鼻息を一気に吐き出す老将。

「せめてこれが自分の軍備でなければ、もっと気楽なものなのだが
……」

「斥候機から報告。」

前方距離3万Mの空域において、敵艦隊第一陣発見。」

彼のぼやきの最中、傍らの念通士が報告を上げた。

ファグベールは、息を止めて窓の外を見る。

「……陽の沈む前か。」

せつかくの黒い塗装だが、今の兵士達の技量では夜襲はかえって不利。

機はここか。」

老将が返した視線の先。

剣を片手に立ち上がり、即座に念通管を取るディボレアル。

《 全艦、全機、全兵士に告ぐ。 》

空域に響き、放たれる、凜とした声。

(…この男の念通術……尋常ではない…！)

ファグベールは驚嘆して全身を強張らせた。

《 諸兄らには、苦渋の数年間だったろう。

同じ大陸に生まれ、生きる者が、何故このように虐げられるのか。

だが、破れし者らに選択する権利など無い。

勝者に従い、次代を生きる……それが摂理であることも事実。

しかし、それが正しいとされるのは、より良き時代を作る気概が

国家に認められる時のみ。

親兄弟の流した血、築いた屍を無駄にしてはならぬ。

諸兄の叛乱を阻止し続けたこの国は近い将来、中枢の腐敗によって揺らぐであろう。

その原因は、現中王都市の王室政府の執政……そして軍隊の専横にある。

あの時、幼くして戦に出れなかった無念。
残ることを選択させられた無念。

それら、諸兄らの人生の全てを騎士団の翼に乗せ、存分に挑むが
いい 》

ディボレアルの言葉の全てを待たずして。

咆哮。

泣き声。

叫びにも似た声が、空域に響き渡る。

どの艦からも立ち昇るその気炎に、ファグベールも黒華の者達も
一様に驚いていた。

どれだけの者が大陸の公用語を理解しているのかは解らない。
だが、ディボレアルの伝える言葉に、彼等が応えたのは疑いよう
が無かった。

《 以上。》

諸兄らの新たな主となる中王騎士団・大団長ザイクⅡガイメイヤの宣言をもって、開戦とする。》

終えてすぐに、席につく黒騎士。

「……大した男だ。

全て、貴様が作った言葉であろつ。」

「この戦いの後も考えれば、これが望ましい。」

皮肉めいたファグベールに答えた後、ディボリアルは再び、念通管を口元に寄せた。

《 上げるべき首級は、売国を企み、国家の混乱を誘うレイキⅡモンスロン。》

……および、その謀に組する中王都市軍艦隊全隻…》

今度は宣言では無く、各艦へと向けた伝達であった。

《 これより、歴史に残らぬ戦いを始める。》

中王騎士団『黒華』全軍 出撃。》

固唾を飲んで見守る中。

飛ぶだけでやっとであった蛮族の操縦する戦闘騎達が、何の迷いもなく雲を切り裂いて飛んでいく。

「……奮^{ふる}えるな、これは。」

生まれて初めて体験する、先の読めない戦場を前に。
老将は笑って呟いた。

漂う硝煙。

滴る脳漿。

（……逃げるだと……？）

目を開くと。

自分を見下ろした男が、砕かれた側頭部に拳銃を当てたまま見詰めている。

（……そんなことが許されると思っているのか？
……いまさら……。）

顎の外れた口元が動いた。

（…お前があの方に背負った罪…。
…それは…ずっと背負っていくべき大罪……）

聞いていた彼女は堪らずに、自分の耳を引きちぎった。

胸につかえた息苦しさで目を覚ますフィンデル。

「……………？」

気付けば、艦長席に座る自分を注視しているブリッジの面々。

「…ごめんなさい。」

ちよっと居眠りをしてたみたい…」

照れ隠しに笑う彼女だったが、皆はつられて笑顔にはならなかった。

「メチャクチャ、うなされてたっすよ。」

「ほんとに？」

フィンドルは、冗談交じりにタモンに聞き返す。

「なあ、本当に平気か？
お前が居眠りなんて…」

リードが近付いた。

「平気よ……もうちょっとの辛抱だもの。
それより、周辺の様子は？」

だが、気丈なフィンドルの命令に、渋々と定位置へと戻る彼。

「索敵は、艦隊前方の偵察に任せている。
これだけ周囲が味方だらけじゃ、こっちからは探れないよ。」

「…そうよね。」

襟元を緩める彼女。

軍服の下が妙な汗で濡れていた。

艦内外の全ての『引っ掛かり』は解消されたはずなのに、不安が拭えない。

ついに、彼女は寝室で一睡もとれない状態になっていた。

窓から見える軍艦隊。

脆弱な陣が展開するこの空域に、少なくとも地と人の利は無い。

彼女はそこで、常に頭の中で絶望的な戦場を展開させている自分に気付いた。

「こちらは…」

「あ、だめよ、触ったら。」

戦闘騎の機銃に触れようとしたパンリに、ミーサが声をかけた。

「封^{シール}が貼つてあるでしょ？」

これを破ると、重大な条規違反なの。」

「…弾薬も燃料も空にして、全てに封をする……なるほど、徹底してますね。」

見れば操縦桿にさえも封がしており、使用できないようになっていた。

「この機体達は既に中王都市の物じゃないから、ヘタに使うと問題

になっちゃうのよ。

ブブド公国に着くまでは、絶対にこの状態ね。」

そう言って、先程パンリが燃料を詰め替えた小さな缶を二つ、両手で持ち上げる彼女。

「どちらにせよ…操縦系統の調整が全然出来てないから、このまま出撃しても戦力にならないけど。」

「…調整ですか……。」

それは私には、まだ出来そうにないですね…」

ミーサに倣い、パンリもふらつきながら缶を運ぶのを手伝う。

「でも、なかなか覚えが早いわ。

これで私が格納庫に居ない時でも、弾薬と燃料の補給くらいは出来そうね。」

「ありがとうございます。」

「…だけど、ちょっとくらいは戦闘騎を乗りこなしてもらいたいわ。」

「わ、私ですか？」

「操縦士がいない時でも、戦闘機を移動させなきゃいけない時もあるでしょ。」

「…そ、それは確かに。
では…また今度の機会に教えて下さい。」

パンリがお辞儀をすると、弾薬を積んだ箱の脇で寝ていた梅が、不意に目を覚ました。

尻尾を上げて、耳を小刻みに動かしながら天井を眺め、鼻をひくつかせ、階段を段々と跳ね上がり。

そして颯爽と廊下へ向かい、小走りに去っていく。

急な彼女のその様子に、それを眺めていたミーサとパンリは顔を見合わせた。

中王都市軍艦隊、最前部。

雲のわずかに下の位置。

そして、遠くの渓谷の絶景を眺めながら、ブリッジで杯を交わす士官達。

鮮やかな色の果実酒が入ったグラスを傾けて、重ねる。

「……平気ですか？」

雲上の哨戒機から、定期報告が遅れているようですが。」

「この陽気だ。」

居眠りでもしているのかもしれないな。」

艦長の冗談に、一同が笑った。

丁度、雲の上から下降し、飛翔艦と並んで飛行する渡り鳥の一団。その風流さに紛れて、一際大きな影が横切った。

「あれは、どこの艦の機体だ。
勝手に演習か？」

「……フン、随分と熱の入っている部隊もいるものだ。」

脇の念通士の呟きを、小馬鹿にしたように笑う士官。

空気の切れる音。

そして、一瞬の閃光。

すぐ横でその表面を炎上させる、味方の飛翔艦の姿。

「！？」

目を剥くブリッジ内の全員。

誰もが、不慮の事故を想定して疑わない。

「……おい……事故……か!？」

今度は別方向より、二機の黒い戦闘騎が、ブリッジ脇を通り抜けた。

途端。

犬の顔面をした数名が厚い窓を突き破り。

次の瞬間には、彼等の両手にあつた鉦なたが念通士達の喉に突き立っていた。

密集の陣形の中で。

揺らいだ一隻が、列をなぎ倒した。

ゴルゴート市の小劇場。

北部においての数少ない娯楽施設であり、さらに人気劇団の公演

日ということもあり、席は満席である。

目下の喧騒をよそに。

三階席の一区画を貸し切りにして、その二人は居た。

「おひさしぶりっ、ユーイ。」

そんな中、椅子に深く腰掛けて半分寝むりこけていた青年に、急に後ろから冗談交じりに声をかける男。

「何であんたが来るのよ、赤メガネ。」

二人きりの時間を邪魔されたことに、あからさまに不快な表情を浮かべ。

少女はオペラグラスを外して、口を尖らせる。

言葉どおりの赤いサングラス、黄色と黒の縞スーツ姿という、少し個性的な風貌の彼は、片手で頭のバンダナを直す。

「おチビちゃん。」

あいかわらず、お人形みたいな恰好だなあ。」

小馬鹿にしたように、上から見下ろす彼。

対する本日の彼女は、いつもの黒系統でない、派手な赤系統の口リータファッション服であった。

「……彼を『ユーイ』って呼ばないでって何度も言ってるでしょ。その名で呼んでいいのは、私だけ。」

「別に……いいじゃんねえ？
ユーイ。」

青年の頬に気安く頬を重ねて、訊ねる彼。

「げー、気持ち悪い！
男同士で……！」

「……はいはい。
で、待機の時間は終わり。」

男はすかさず、向けられたオペラグラスを笑顔で取り上げる。

「……まさか、双方が臨戦態勢に？」

手を中空に投げ出したまま、少女は声を洩らした。

「すつとぼけちゃダメだよ。
両軍の艦隊が駐屯地から出発したの、遠くから見てたでしょ？」

「……まあ、そうだけど……」

認めてしまえば、それは休暇の終わりを意味している。

だらしなく再び眠りに入ろうとしている、青年の顔を彼女は横目で見た。

「移動するの、明日でもいいでしょ？」

「だゝめ。

もう始まってしまふよ。」

人差し指を立て、男は言った。

「…審議会の大勢が、決した。」

そして口調を一転。

彼は神妙な口調で呟いた。

「全会一致で、中王騎士団に味方することになったよ。」

「…あまりにも早計で極論ね。」

完全に厳格な監査官の言葉に戻っている彼に向かい、彼女も真面目に返す。

「どちらかの政権が中王都市にとって良い未来か考えれば、その結論に達するということさ。」

「詭弁はいらないわ。」

どうせ、騎士団のガイメイヤから根回しされていたんでしょ？」

その凶星に、何も包み隠さない笑みを浮かべる彼。

「これを中途半端に止めれば、事態は混迷を極める。

腐った部分を切り捨てなければ、死んでしまっただよ国も。」

「流す血の量が少ない方を選ぶのね。

流さない方法を探すのではなくて。」

「そう。

それが『久遠』の仕事であり……」

「役目なのだろう？」

寝言のように低く呟き、半身を起こす青年。

褐色の肌が劇場の闇に紛れ、唯一、金髪と蒼い瞳が輝いている。

「そういうこと。

さ、移動してもらおうか。

今回は国外の仕事だから、オレっちが道案内させてもらうよん。

それから、現地で他の執行部隊と合流してもらうから。」

「私達、二人きりじゃ……ダメなの？」

「相手は巨大なんだって。

危ないっしょ？」

「……せつかく…ユーイと…二人きりで…」

恨みがましく、背後で怨霊のように呟く彼女。

「何言ってるの。」

相変わらず何も進展が無いくせに。

…まずは、彼を寝かせないくらいの色気を身につけたら？

あと、身長も胸も足りないし。

それから…その服！ センスのカケラも無い……」

三階席から人が蹴り落とされたのは、その由緒ある劇場では、初めてのことであった。

第三章

第四話 『ムーベルマ会戦・前編』

了

3 - 5 「ムーベルマ会戦・後編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 3

「Wivern in central kingdom ci
ty」

The fifth story
「Battle of Mubelma・latter par
t」

アルドの叛乱の終結後。

各国は飛翔艦という新たな兵器による絶大なる効果を目の当たり
にし、軍隊の再編成を余儀なくされた。

その時より中王騎士団においては、赤華と蒼華が完全に空戦主体へと移行。

地上における戦力は黄華に集約させ、残る緑華と白華の戦力も徐々に空へと対応してきている。

確実に空を征するために、彼等は積極的に大陸各地の紛争地域で、研鑽を積んできた。

まさしく中王都市の威光。

その一翼を担う赤華艦隊15隻。

今は漆黒を纏^{まと}いて、荒野の空域に展開し。
機をうかがうように、同国の艦隊20余隻と遠い距離を経て見^まえ
ていた

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

第三章

中王都市の飛竜

・

第五話 『ムーベルマ会戦・後編』

1

「……戦況は？」

……何が何だか……わからないぞ！」

手にした念通管を握り締め、リードが叫ぶ。

しかし、それを接続していた他艦の念通士からは、初めの一声以外の応答は無く。

それから先は、ただ雑音と怒号のみが遠くから聞こえていた。

「……くそっ！」

管を乱暴に叩き付け、唇を噛んで前を向く彼。

『何か』によって艦隊の一部が混乱に陥り、それが今では全体へと波及している。

とにかく今は、目視できる範囲で状況を判断するしか無い。

「フィンデル！」

…ここは、戦闘騎を展開して様子を……」

「緊急戦闘配備。

戦闘騎部隊は、すみやかに出撃せよ。」

彼女は自分が想像している以上の冷静さで、既に格納庫へ命令を下していた。

「ルベランセ自身の動きは、なるべく周辺の流れに任せて。とりあえず、今は。」

「りよ、了解……」

タモンが強張った表情で返した。

艦隊の最後尾のルベランセは、いくぶん身動きが取れる状態ではある。

しかし陣の中ほどにいる艦は何も出来ずに、視線の先で炎上し、傾いては堕ちていった。

その光景に、誰もが気が気ではない。

「……………黒いのが、お空を飛んでるの……」

そんな中、メイが念通球を握りながら呟いた。

脇のザナナとリードが、その言葉になぞられて窓の外を見詰める。
堕ちていく飛翔艦の周りを、縦横無尽に蠅のような粒が飛び回っていた。

「恐れていたことが現実かよ……………」

バグがボヤきながら上着のファスナーを上げて、格納庫へ辿り着く。

「相手はまた炎団……………ってことはないわよね？」

「わからねえな。」

とりあえず、命令どおりに出撃だ。」

心配そうなミーサに笑って返し、彼は履いているブーツをきつく締めた。

「戒は？」

「……まだだ。」

「……でも、また文句言うんだろっな……あいつ。」

その顔を苦笑に変えて何気なく見上げると、螺旋階段をゆっくりと降って来る戒の姿。

彼は既に操縦服を着用しており、その精悍な顔つきにバークは驚く。

「……着たのか。」

「ああ。」

問いに答えた戒は、淡々と近付いた。

そして、二人が見慣れない操縦服を着て並んだ時、ミーサは言い知れぬ不安を感じるのであった。

「待って！」

続いて、小走りで駆けてくる世羅が上階から跳び、軽やかに下に降り立つ。

「……………」

それを一目見てから、無言のまま自分の戦闘騎へと向かう戒。

世羅も、それをずっと追った。

バグとミーサは離れて、彼等に好奇の眼差しを送っている。

「……何やってんだ、早く乗れよ。」

戒はその注目を煙たがるような素振りで、後部座席を顎あごで示した。

「うん！」

元気良く答え、すぐに彼の背から戦闘騎に飛び乗る世羅。

「ちょっと……その恰好じゃ寒いわよ！」

その様子に、ミーサが笑みをこぼしながら忠告する。

「俺様の服がある、羽織っておけばいい。」

彼の言うとおり、乗り込んだ席には既に修道着が用意されている。
それが一層嬉しく思えた。

「……おまえ、世羅を乗せるからにや、絶対に墮とされるなよな。」

「てめえの心配をしてろ、ヒゲ。」

無愛想に返し、戒は操縦桿の遊びを確かめた。

そして両肩を固定するベルトを締め、まっすぐと格納庫の扉を見詰めている。

「……まったく子供ってのは、成長が早いもんだ。
……年を取るわけだぜ。」

バーグは呟き、自機に乗り込む。
そして、戦闘騎と床を繋ぐ下部ストッパーを外すため、脇に掛けられた鉄棒を振るった。

重い扉を、ミーサが全身の体重をかけて両手で開く。

「それじゃあ、行くか？」

バーグのその問いかけを。
戒は、長いまばたきをする間に答えた。

カリカリ、と乾いた物音に気付き、モンスロンは扉を開けた。

艦内の皆に梅と呼ばれている猫が、前足の爪を立てて自室の扉を搔いているのだった。

「……どうかしたのかな？」

深い睡眠にぼやけている頭を覚ますように、彼は呟き。
そしてふと、抱き上げようと伸ばした手を、彼女はするりと体を
かわして廊下を進んでいく。

「……？」

廊下に一步踏み出す彼。

外の空気に漂う、煙の焦げ付いた匂い。

張り付くように窓に密着し、遠い距離を飛行している機影達を目
撃する。

(…シュゲルツにアーリマ……？

まさか……！！)

赤華が来た。

塗装こそ黒一色に変えられているものの、自分の所属した部隊で
採用されている戦闘騎を見紛うはずもない。

猫はさらに廊下を前に進み、何度も振り向いて、彼を導いていた。

（なんだこれは…？）

威勢に乗って、ルベランセから飛び出したバーグ。

だが、そこで目にした光景は、上下左右にびっしりと詰めて展開された味方の艦隊。

今まで飛んできた空とは違う。

それはまるで立体的な迷宮を思わせた。

「…どうやって…戦えばいいんだ…！？」

その迷宮に、敵機は深く潜りこんであり、取り分けて統率されることも無く飛び回っている。

戒はそれを呆然と眺めながら、頭上から突進してくる黒い戦闘騎とすれ違った。

次の瞬間。

のしかかる重量と共に、目の前に現れる人影。

「……なに！？」

先のすれ違いで戦闘騎前部に跳び乗ったと思われる相手は、足の長い指で機体の外表に張り付いており、既に手にした槍を振りかぶっている。

半裸に、顔に塗りたくられた化粧。
明確な敵意を持った眼差し。

見たことも無いような敵が、突如目の前に現れ。
弾を撃ち込まれるならまだしも、空で白兵戦を仕掛けられるとい
う非常識に。

自分の手はまだ、操縦桿を離すことが出来ないでいる。

「……《源・衝》^{フェルド}！！」

すかさず、後部座席の世羅が放った光弾。

吹き飛ぶ相手。

「……………！！」

戒は暴風ゴーストを一旦外して首にかけ、身を乗り出して、落下
していく相手の姿を確認した。

「……む……無茶が過ぎるぞ……こいつら……！！」

バーグの叫びに周囲を見渡せば、蛮族達はいたところで跳んで
いる。

目測を誤り、そのまま地面へ向かって真っ逆さまに落ちていく者
さえもあった。

これは、正気の沙汰ではない。

「っ!!」

そこでさらに、両肩を後ろから掴まえられ、戒は驚く。

だが、それはすぐに世羅の手だということに気付き、安堵した。

「…お…驚かせるな!」

「大丈夫だよ。

ボクが守るから…」

「…………!!」

彼女の健気な言葉と吐息を受けて、大きく首を左右に振る戒。

深呼吸をして気持ちを切り替え、そして前方を飛ぶ敵機に向けて、改めて照準を合わせる。

「…………くっ!」

だが同時にその背後にある飛翔艦が目に残り、機銃のスイッチを押し込むことが出来ない。

そこで、別角度からの射撃によって、落ちる敵機。

戒と世羅はその方向へと顔を向けた。

「素人が!!」

戦闘騎の機銃が当たった程度で、飛翔艦が墮ちるかよ!!」

目の前で紫のメタリックカラーが流れ、眩しく光る。

「どちらにせよ、敵だろうが味方だろうが、弾に当たって死ぬ奴はマヌケってことなんだぜ!」

その機体から顔を出したのは、中王都市の駐屯地で出会った生意気な少年。

「落ち着いて、よく見ろ!

奴等、操縦の方はお粗末だ!!」

今は奇襲の混乱に乗じて攻勢だが……訓練を積んだ軍隊が息を整えだしたら、じきに通用しなくなる!!」

喋りながら、すぐ目下の相手の右翼から左翼にかけて、機銃で打ち抜く。

その時の乾いた炸裂音が、心地良く彼の脳内に響いた。

「……くくつ……」

いいぜいいぜ……!!」

そして、恍惚の顔を浮かべる彼。

「……コルツ、出すぎだよ!!」

僕たちの任務は、ルベランセを守ること……」

後方からその脇へと並び付くのは、マルリツパ。

彼の体格に相応しい、大型の戦闘騎に乗って現れる。

「ルベランセ……?」

護衛は四機もいりやあ十分だろ!!

せっかく獲物が目の前にあるんだ、ここで狩らなきゃ損だぜ!!」

異様に神経を昂らせているコルツは、前へ前へと加速をつけて飛んでいった。

「いつも……勝手なんだから……さ!」

マルリツパも速度を増しながら、操縦桿の脇のレバーを引く。

すると敵機の固まったところを目がけてポッドが射出され、その集団内で中の弾頭が炸裂した。

「……うお!

あんな兵装……見たことねえぜ……!!」

連続して起こる爆風を横目に、バークが呟く。

「あいつら……そこそ腕はあるみてえだな……。」

周囲の敵が一掃されたことで、戒も落ち着きを取り戻していた。

背後を振り返れば、少年の言うとおり、四機の戦闘騎がしっかりとルベランセの周りを旋回している。

「……俺達も遊撃だな。」

何かを守るとか、そんな技術もねえし……。」

バーグが機体を傾けて行く。

奇をてらった白兵戦を除けば、炎団と比べて組みやすい相手ではあった。

激戦を抜けて経験を積んだ自分達ならば、戦える。

その時までは、二人はそう信じて疑わなかった。

黒い戦闘騎が至近距離を通過する。

その度に、心忪が凍りつくくらいに寒気を覚えた。

リードは額の汗を拭い、再び交信を試みるため手元の念通球を配置替える。

「……ワンちゃん……
わんわん……。」

「メイ、ふざけている場合か。」

脇の彼女の呟きに、リードが念通管の接続部を操作しながら軽く注意した。

「……ううん、ワンちゃんなの！
ほら、そこ、飛んでるの！！」

そして、嬉々として示す指が上がる

同時。

厚いブリッジの窓が突き破られ、転がってくる。
犬の顔をした者が二名。

「……………こお！」

危険を逸早く察知したザナナが瞬時に飛び込み、突然の事態に硬直しているリードに向けて槍を突く。

「！！！」

驚く彼の顔面すれすれで、白き槍は幾つにも分かれ、背後の敵の
みを貫き。

「……豹族、邪魔、するか……！」

鉦なたを両手に構えた残りの一名が、かろうじて判別できる言葉でた
どどしく呟き、突進する。

だが、それに合わせて床と平行に跳び、蹴りをカウンターで浴び
せるザナナ。

「うおっ……！」

さらに、咆哮と共に投げ出す槍。

その一撃が壁際で背をもたれた相手への止めとなった。

「……………」

ザナナは平静な足取りで槍を回収し、貫いた相手を外に放る。
そして今度は、破られた窓に向かって構えた。

脇で舵を握りながら、タモンはその姿に安心を覚える。

一方、フィンデルはそんな突然の来襲にもまるで無頓着で、前のめりで静かに集中していた。

その瞳は戦況の隅々まで食い入るように動かしている。

「…おい…フィンデル…」

腰砕けになっていた体を立ち上がらせながら、不安な声を洩らすリード。

彼女はその雑音を制するように、手の平を彼に向けてかざした。

(……読めない……！

向こうの意図が……)

そして残った方の手で自分の頭を掴み、震わせる。

(これが作戦といえるの？

各機の統率は、ほとんど見られない……)

ザナナに葬られた不笑人の死体に目をやる。

(でもこの艦隊に対して、最大の効果が出ていることは疑いようの無い事実……。

…この、でたらめな戦闘の背後にあるものは何？)

床に広がった血液に、高鳴る心音。

(…見当たらなくても考えて……相手の策を。
そして、早くこちらも…それに対抗する何か策を…立てないと…
…!!)

縦横無尽だが、広がらない戦域。

自軍のだらしない陣立ては、既にところにより偏狭して、崩壊
しかけている。

(…わからない……！
読めない…敵の策が……全く…)

死を恐れずに怒涛の如くせめて来る相手に、己の思考は何も色を
発さなかった。

(一見……無為無策のように見えて……)

床の血が自分の足元まで流れ、靴に付着する。
彼女はそれを見て、ふと動きを止めた。

(……無策……？
まさか……!!)

自分は、大きな思い違いをしていた。

（…何故……今まで気付かなかったの…！？）

そして気付いた時、一気に絶望の淵へと追われる。

（…はじめから、相手に作戦なんて無い……！

相手が望んでいるのは、ただの……総力戦……。

このまま……ここで戦えば……道が残らないということに……！）

薄れる意識の底で、彼女はリードの呼び声を聞いた。

「フィンデル！！」

「…リード。」

…この後…すぐ第二波が来る…。

そして、第三波は…」

「第三波は飛翔艦本隊。」

かすれた視界の中、ブリッジの扉を開いてモンスロンが姿を現していた。

艦内を駆けてきたのか、肩で息をしているのが分かる。

そこで、梅が彼の足首をすり抜けて去った。

「…飛翔艦の……本隊だって？」

「ええ。」

展開している戦闘騎の数から察するに、およそ15隻程度。
…これは騎士団の赤華と一致しております。」

「騎士団……だと!？」

モンスロンの返答に叫ぶリード。
フィンドルが大きく口を押さえ、咳き込んだ。

「あ、相手は蛮族だぞ……」

「蛮族を部隊に組み込んだ事情は分かりませんが、その予測し難い戦力を利用して、戦局を動かしている者がいます……。」

「……そんな……!」

「恐らく、第二波ではもつと確実にこちらの飛翔艦の数を減らしてくるでしょう。」

そして数的に不利のまま、敵の第三波……艦隊戦に移行すれば、勝ち目は無い……!」

歩み寄るモンスロン。

それと同時に、彼等の目の前でフィンドルが艦長席から崩れ落ちた。

「策が無いとは良く言ったものだ……。」

念通士達の戦果報告に口角を歪ませ、ファグベールが言った。

「蛮族のあり余る白兵戦能力を、よもやこのような形で利用するとはな。

たとえどんな軍略家でも、もともと無い作戦を覆すことは出来ない。

…ディボレアル殿、拙者は感服しましたぞ。」

「……この『無策』は兵法に通じる者ほど、大きく穴に落ちることだろう。

こちら戦果を予想できぬことが、玉に傷ではあるが。」

黒騎士は、肘掛けを指で叩く。

「第二陣、出撃用意。」

そして、間髪入れずに呟く。

その剣に埋め込まれた念通球が思念を増幅させ、命令を全艦に伝えた。

（……各艦に配置した艦長は全て念通士。

無策を支えるのは、戦局を直接動かす自分というわけか。

…確かに、これならば指揮上の不利は無くなる。）

ファグベールは、小刻みに震える彼の様子を横から見詰めていた。その黒い手甲の隙間からは、汗が滴っている。

（ただし、指揮元の負担も数倍。
こやつも…外には見せぬが、これだけの覚悟で臨んでおるという
ことか。）

彼は両肩を上げ、鼻から大きく息を吐いた。

「暫し休まれよ、ディボレアル殿。」

「……まだ始まったばかりではないか。」

黒騎士は低く、くぐもった声で返した。

「第二陣が出れば、後は総力戦に移行するのみであろう。」

「……………」

「何も部屋へ戻れというわけではない。

しばらく気を抜いていただきたい、と言っているのだ。」

ファグベールは続けた。

何のための副将かと、その目は訴えている。

その堅い意志に観念したディボレアルは厚いネッカチーフを直し、剣を傍らに置いて席に背を深くもたれた。

「…準備の出来ている部隊から出撃。

あと、こちらからの命令を待つばかりでなく、随時各艦から報告を入れさせる。

それを旗艦の判断材料とする。」

そして、付近の念通士に指示を出すファグベールの声を聞き、安心したように徒手を組む彼。

そこへ一人の諜報員が音も無く近付き、耳打ちをした。

「……ルベランセ……？」

その内容を聞いた後、ディボレアルは呟き、仮面をつまんで直す。

「いかがされた？」

「…完全源炉は惜しいが……ここで加減は出来まい。」

「？」

独り言を続ける彼に、ファグベールは眉間にしわを寄せた。

「縁……^{えん}……だな。

よもやモンスロンも……あの艦に……。

…ありえるか。

……ならば、なおさら、おもしろい。」

黒騎士は依然として呟き。

その仮面の下で笑っていた。

2

「待った。」

発進口は^{ハッチ}すぐに開けられるようにして待機だ。」

大慌てで錠を扉にかけようとするパンリを、ロディが制した。

その隙間から洩れる、風切り音が鳴り響く。

ミーサは弾薬と燃料を棚に置く手を止めて、息を飲み込んだ。

「外によく注意を払って、もしも戦闘騎が帰って来たら開けてやって。」

……ミーサとシュナは、機関室の守りを。」

「…はい。」

手にした大弓を肩にかけ、シュナが汗を拭いながら姿勢を正して返事をする。

「ろ、ロディ殿！

あれほど、戦闘行為は禁止だと……！！」

あまりの事態に部屋に居ることも出来ず、格納庫までついてきたガツチャが派手に喚^{わめ}いた。

「呑気だねえ、こんな状況でも契約の話なんて。

…それに、指示してるだけなんだから、契約違反じゃないでしょうに。」

シュナの矢に撃ち抜かれた数々の蛮族達の死体を見下ろしながら、肩をすくめるロディ。

外に吹く風の質が変わったことに、ここでは彼だけが気付いていた。

軍艦隊もようやく態勢を立て直し、相手の戦闘騎と互角になった頃。

第二波とおぼしき、敵の援軍が到着した。
今度の操縦士達は棘^{とげ}のついた重厚な鎧を着ており、今までの者よりさらに狂信じみた瞳が印象的だった。

そして密集した戦場にも関わらず、一切速度を落とそうとしない様子は、他とは明らかに毛色が違う。

バーグは、妙な懐かしい空気を肌に感じた。

ある思想に基づいて一丸となり、全く死を恐れない。
アルドの叛乱後期に、敵から感じていた匂いと同様だった。

「……!!」

突如として耳をつんざく爆発音に、操縦桿を思わず離しそうになる。

わずかな記憶にふけている間。
相手は凄まじい速度で通り過ぎ、付近の飛翔艦と激突したのである。

轟音が鳴り響き、それまで大きく動いて展開していた戦場の時が止まる。

「おおっ!?!」

その爆風の閃光と衝撃に煽られる戒。

「爆発が普通じゃない!!」

遠くでマルリツパが叫んだ。

「……気をつける!!」

第二波の奴等……「ご大層にも機体に爆薬を積んでやがる!!」

呼応して、接近するコルツ。

「……やばいぞ……!!」

特攻をしかけて来るつもりか……あいつら全部!?!」

「撃ち落とせ!!」

全部当てられたら……艦隊が全滅する!!」

そのバーグの言葉を聞いた後、迫る機影を数え、戒が反転。

「……わかってんだよ!!」

素人が指図するんじゃない!!」

それまで攻撃のみに興じていたコルツも並ぶ。

「……まったく喧嘩してる場合じゃないのに。」

そんな彼の様子に、肩をすくめるマルリツパ。

だが、その視線の先に入ったものは、予想だにしない光景だった。

隊列をはぐれてしまったのだろう。

そこには、自分達が乗ってきた艦が孤立しており。

やはり炎とともに傾いていた。

「……コルツ……あれ!!」

「畜生!!」

コルツもそれに気づき、機上で悪態をつく。

「輸送艦を墮とされるなんてよ!

何やってたんだ、俺の部下は!!」

「……きっと、ルベランセを守るので精一杯なんだよ!!」

マルリツパは口を引き締めて、周囲を遠く見渡した。

「……戦況が……良くない……」

撃墜が間に合わずに、抜かれていく防衛線。

次々と戦闘機達に特攻され、大半が墮ちかけている艦隊。

一時は盛り返しの兆候を見せていた軍隊全体の動きも、士気の低下から当初の状況に戻されている。

「これは……もう……ダメだと思う……」

「勝手にあきらめてんじゃねえ、ブタ!!」

冷静に分析するマルリツパに、脇から戒が叫んだ。

「でも、とりあえず退路を確保しないと……」。

その剣幕に大柄な身体を反らせながら、彼は答える。

「言えてるぜ。」

「……ここは一旦、退くべきだ。」

戦場というものを良く知るバークが促した。

「ただ退くだけってのは性に合わねえ。」

「一匹でも多く殺してくる。」

「……素人達の指揮は、てめえに任せた!!」

自然と集合する中。

ただ一人だけ向きを変えたコルツは、それだけをマルリツパに言い残して加速した。

「必ず合流してよ!!」

送られる言葉に、片手を軽く上げる彼。

まるで散歩でも行くような雰囲気、思わず溜め息が洩れた。

「…それじゃあ…ルベランセに……!!」

守るべき艦の位置を確認し、三機が順番に反転した。

灰色の硝煙に満たされた空の中。

小破した両脇の艦隊の飛行速度は低下。

自艦も同様である。

背後から不意打ちを与えた謎の飛翔艦達が、背を向けて離れていく。

「これより『追撃』します。

後退する艦は、たとえば味方であっても撃ち墮とすと伝えなさい。」

見逃してもらえたことに安堵する味方の気配に、逸早く気付いた彼女は口を開いていた。

士官学校生徒の、まるで歴戦の将のような厳しい命令に、ブリッジの全員が目を見張る。

それも各国の混成艦隊においては、余りに乱暴な発言であった。

「…当艦は旗艦に指定されているが、そこまでの権限は無い!!」

彼女に対して、念通士が叫んだ。

「私は今、全権と指揮を委譲されています。」

しかし、重症の艦長を足元に。

その上の席で頬杖をつき、不敵な笑みさえ浮かべる彼女。

「今、この空域の全てのものが、我々が手負いであることを信じて疑わない。

だからこそ、少々無理をすることが意外性を生み、作戦の成功に繋がる。

……この機会を逃してはなりません。」

その不退転の表情はさながら、敵と錯覚するようだった。

「全艦に通達。

一斉射撃用意。」

頭の中で、素早く駒が動く。

同時に、命令を飛ばす腕が振られた。

喜悦の高潮を、彼女は全身で感じていた。

「 フィンデル！
フィンデル！！」

床に崩れ落ちた彼女を支えながら、その名を連呼するリード。

何故か、彼女の口元には不釣り合いな笑みが浮かんでいた。
だがそれと裏腹に、覆った目元からは涙が落ちている。

「……おい、フィンデル！
……しっかりするんだ……！！」

「失礼……！」

モンスロンは混乱しているリードを押し分けると、彼女の襟元を
緩め、顔を横に向かせて気道を確保した。

その胸は激しく隆起し、動悸が伝わってくる。
意を決し、手にしたハンカチで彼女の口を塞ぐモンスロン。

「なっ、何して……！」

「あんだ！ 殺す気か！？」

「……大丈夫。」

「ゆっくり……息をしなさい。」

仰天するリードをよそに、彼女に囁きかける彼。

「取り乱さないで。」

「……ただ過呼吸に陥っているだけのこと。」

「それより……念通士は戦況に集中を。」

「……！！」

その言葉に、ブリッジの全員が気を引き締められる。

（これは極度の緊張状態……加えて、ストレスも原因か……
とにかく……この状態で指揮は到底……）

容態が安定してきたフィンデルをそのまま床に。
モンスロンが立ち上がって、リードに向き直る。

「副艦長は、どなたが？」

「……い、いませんが……一応……自分が……そのつもりで。
……しかし……戦術の知識は乏しく……」

リードは、情け無い声を出す自分が悔しく思えて仕方なかった。

気持ちだけでは補えない状況が、今、目の前にある。

「ならば、臨時として…私の指示に従ってもらえるでしょうか。」

「貴方の!？」

途端、リードの瞳に躊躇の色が覗いた。

「しかし…貴方は騎士団の人間…」

「信じてくれとは言えません。」

だから少しでもおかしな真似をしたら、殺してくれて結構。

…どちらにせよ、何もしなければ、このまま死んでしまいますからね。」

「!?!」

リードが止めることも促すことも出来ないうちに、艦長席へと着座するモンスロン。

中空と窓の外をわずかに眺め、その後に唇を開く。

「……艦の進路を、北から続く溪谷へ。」

「溪谷?」

その命令に、タモンが反復した。

「くれぐれも慎重に下降しつつ。」

戦闘は一切考えずに、とにかく航行に集中せよ。」

とても慣れた口ぶりで、指揮する彼の姿。

それは普段の冴えない様子からは全く想像出来ない、安心と信頼を湧き上がらせる不思議な姿だった。

「ルベランセ、突出しています!!」

軍隊側の陣内、中盤に位置した旗艦。

圧倒的不利の戦況に戸惑うブリッジの喧騒の中で、念通士が叫ぶ。

「…何だと!？」

全艦隊の提督であるネウが、窓外の様子を追った。

「ムーベルマ渓谷へ入るだど……?」
どうして、こんな退路を…?」

見渡す限りの荒地を、北から伝う大きな河川。
崖の傾斜は厳しく、その水流は早い。

「…水……そうか…！」

既に当初の三分の一ほどになった艦隊を振り返る。

思えば、その中の殆どの将軍が自分よりも階級が高く、年齢も上であつた。

そして、無駄に勲章を軍服にぶらさげて威張り散らすが、ろくに実戦の術を持っていない。

そんな彼等への侮蔑と同時に、どこかで諦めていた自分がいる。統制すること自体を嫌い、怠っていた己も同類ではないかと、彼はここへきて自嘲した。

「……当艦はこれより、ルベランセのみの退路を確保する。いいか、あれを絶対に堕とさせるな。」

艦長の言葉に、皆が頷いた。

乱戦と化した戦場を、ぐんぐんと速度を上げて北へと抜けるルベランセ。

それに、つき従うように後ろについた旗艦を、モンスロンは確認する。

「提督殿……察してくれたか。」

それは、希望の光のように目に映った。

「流れる河川ぎりぎりを飛んでいきます。

高度をさらに下げてください。

ただし、角度を誤らないように。」

「あ、危ないっすよー!!」

自分に言い聞かせるように叫び、舵を回すタモン。

長年の浸食により、溪谷は階層を作っており。

さらに下を流れる河川に沿うようにして、蛇のように曲がりくねっている。

突き付けられた相当の無茶な難題に、舵を取るタモンの鍛えられた両腕は悲鳴を上げていた。

「あっ!!」

大きく傾斜した際に、横たわせているフィンデルの頭部が固い機器の角にぶつかった。

思わず声を上げたリードはすぐに駆け寄り、彼女を守るように抱きかかえる。

「……艦体を安定させなさい。」

念通士は、バランスと源炉出力のサポートを。」

思わず仕事を放った彼にも、そして怪我を負った彼女にも、何の視線も投げかけない。

真っ直ぐと前に向けた瞳のままで、モンスロンがメイに指示を飛ばした。

(……生きる道を……)

彼はただ、目の前で流れ続ける景色のみを追うことに集中し。わずかな一つまえ、見逃さまいとしていた。

敗北感など感じている暇も無い。

目下を恐ろしい勢いで流れる川のように、戦局もまた動いている。

「様子がおかしい！」

ルベランセから離れるな!!」

「わかっている、ヒゲ!!」

前に行く自艦を追い、バークと戒の二機が飛び続ける。周囲に気を払いつつ、後続するのはマルリッパ。

「おい！ おまえらの艦！！
何で、こんな所を飛んでんだよ！？」

そこへ上空から彼等に追いつき、崖からはね返る激流の飛沫を浴びながら、コルツが叫んだ。

「俺様が知るか！！！」

半ば八つ当たりのように叫び返す戒。

上流に向かう緩い傾斜に従って、彼等の不安は除々に高まっていた。

「……弾幕を絶やすな。
突っ込まれる前に撃ち落とせ。」

ネウの命令によって各砲座から放たれる小弾。
しかし、その爆炎の幕をかくぐり、視界から消える戦闘騎が一機。

衝撃と共に、大きく傾く艦体。
だめ押しで、二機がさらに迫る。

全員が身を屈めた直後、爆炎がついにブリッジの扉を破壊した。

「提督……」

気温が一気に上昇した中、念通士が呟く。

さらに5機。

背後から迫っていた。

「……対地用ゾンド弾を全弾発射。

…未練の無いようにな。」

ネウは静かに瞳を閉じて、呟いた。

背後でルベランセを守るように飛んで付いていた飛翔艦が、火を
噴きながら大きく傾く。

突然に開いた、その艦体脇部からは、びっしりと敷き詰められた
弾頭が見える。

機雷。

その判断を瞬時に出来たコルツとマルリツパが速度を上げる。
戒とバークは、慌ててそれに倣った。^{なら}

一斉に落とされた機雷が河川に沈む。

それは僅かな時の後に、高い水しぶきを上げて霧を作り、前方のルベランセを隠す。

そして機雷は同時に、両脇の崖に向けても射出され、追ってきた戦闘騎の全ては、崩れた岩に巻き込まれた。

「……………！」

それらと共に、ネウの艦は崖に触れ、完全にバランスを失い河川に飲み込まれて爆発した。

バーグは僅かに振り返ったまま、小さく敬礼をとる。

「…くそ…！」

操縦桿の脇を、拳で叩きつけるコルツ。

「……………戒…！」

そこで、戒は髪を世羅に強く引かれて、前を向いた。

「……………フィンドルの馬鹿野郎…！
何やってんだ…！」

そして彼の咆哮に、全員が前を向きなおす。

信じ難い光景。

進んでいる天然の回廊の行き着く先には、高い『滝』が待ち構えていた。

ここまでして切り拓いた退路にも関わらず、そこへ頭から突っ込んでしまっているルベランセの尻が見える。

そして、落下する凄まじい水流に負けて、吹き飛ぶ装甲。

突如として生まれた前後の残骸に、全員の思考と動きが止まった。

「大勢が決したか……」

ブリッジ正面の下方。

鉄屑の荒野を望み、ファグベールが呻いた。

「よもや、ここまで正規軍が弱体化しているとはな。
いや…こちらの兵士達が予想以上の働きをしてくれたこともある
が…」

飛翔艦本隊が交戦地に到達した時、その場に残されていたのは負傷した蛮族兵と彼等の戦闘騎のみだった。

中王都市軍は、その慌てふためく姿さえ残していない。

「被害は？」

「戦闘騎が24機です。」

問うディボレアルに、答える黒華の兵。

ブリッジ全体からは、既に小さな歓声が湧き上がっている。

その様子に、ファグベールは思わず眉をひそめた。

圧倒的な勝利は、心に間隙を作る。

「損害は決して小さくないが、対艦戦へ移行させるまでもなく相手は全滅。」

上出来と言っべきなのだろうな。」

「そのことなのですが…」

冷静に努めようと自分にも言い聞かせようとするファグベールの言葉に、その場の念通士は反応した。

「わずかに一隻、撃墜の確認がとれていない艦が。」

「一隻？」

「諜報部によると、第三補給部隊所属『ルベランセ』に間違いないかと。」

「ルベランセ……？」

老将の呟きに、デイボレアルの甲冑が鳴った。

「知っておられるのか？」

「……いや。」

それよりも撤収の用意を。」

「その艦の確認と追討はいかがする。」

完璧な勝利に唯一浮かんだ汚点を、まるで気にもかけずに命を下す彼に対し、不満のように口蓋を見せるファグベール。

「ただの一隻でさえ、モンスロンが生存している可能性は否定できん。」

「ここは追討隊の編成を。」

そして、頑として譲らない姿勢で上申した。

「いくらここが不毛の地とはいえ、この艦隊規模で留まることがいかに危険か、貴殿も解っておろう。

我々があくまでも第三の勢力という姿勢をとっているのは、一体何のためか。

それを思えば撤収は急を要する。」

「ただ見逃せと言われるのか。」

「……小団長殿がそこまで言うのなら、追討を一任しても良い。現戦力の半分程度になるが……」

「充分。」

老将は短く切って答えた。

「……ならばこの時点より、総大将の全権をファグベールに移行する。部隊選別の後、本体は中王都市へ帰還。ただちに準備にとりかけ。」

その返事を待っていたかのように、言葉を紡ぐディボレアル。

「これを、例の二人に。」

そして続けて、傍らに立つ諜報員に小さな紙切れを二枚渡す。

その紙に書かれた内容を確認し、怪訝そうな表情で周囲に聞こえないよう小声で聞き返す彼に、黒い仮面が無言でわずかに頷いた。

「お、お、お……おどろかせやがって!!」

戒をはじめ、操縦士達が揃って叫んだ。

冷気のこもる、暗がり。

岩壁を伝う雫。

先の怒声は、そこで幾度も反響した後に消えた。

「いや、申し訳ない。」

それらの感情を前にしてもなお、苦笑いと共に頭を掻くモンスロ
ン。

思わず脱力してしまう、その憎めない表情の背後で、青いベール
が轟音と飛沫を立てて下りている。

滝の裏側に大きく開いた洞穴。

その奥にルベランセは静かに留まっており、手前には戦闘騎が8

機、乱雑に置かれていた。

「よく、こんな隠れ場を知っていたな……。」

回避が間に合わず、滝に突っ込んだ際に濡れた服を絞りながらバ
ーグが訊いた。

「先日の会議で申し上げたとおり……このあたりは昔、知った場所
なんですよ。」

ここではキャンプなど張って、遊んだりしましてね。」

懐かしそうに、昔そのままにした焚き火の跡を足でいじるモン
ス
ロン。

「まあ……実際はこのように、戦闘で使える地形を探すことも兼ね
ていたんですが……。」

まさか本当に使う羽目になるとは思いませんでした……」

そこで、ふと。

付近を通る轟音に、皆が腰を屈める。

滝越しに、大きな飛翔艦の影が横切った。

それに加え、戦闘騎も周辺を旋回しているようである。

「……しばらくは、この滝の裏で我慢するとしましょう。
時間が経てば、相手は搜索の範囲を広げざるをえない。」

我々が何か出来るとするならば、それからです。」

モンスロンは小声のまま続けた。

「それにしても…まさか、艦長さんが不調とはな…」

「疲労です。」

しばらくは安静かと。」

バーグに対し、彼は表情を変えずに極めて短く答えた。

「肝心なところで、使えねえ女だ……」

戒の物言いに、脇の世羅が無言で彼の袖を強く引く。

「本来なら先頭切って戦う軍人が、どいつもこいつも肝心なところで役に立たねえじゃねえか！」

…俺様の言っていること、間違っているか!？」

「まあな、そりゃあ……そうだけだよ……。」

バーグも、今回は彼をなだめる側に回る。

「相手は単なる空賊じゃなかった。
あれは…どという連中なんだろう?。」

「……兵器を見る限り、中王騎士団。
それも赤華で間違いないでしょう。」

マルリツパの問いを、モンスロンは力無い笑みで返した。
にわかに、全員の動きが止まる。

「……何言ってるんだ？
昔、何度か戦場で一緒になったことがあったが……あんな部隊じやなかったぞ。」

腕組みをしたまま、顎を突き上げてコルツが言った。

「それどころか、連中……ほとんどが蛮族のようだったぜ。」

戒が続く。

「この地域から推測して……もしかしたら、あの兵達は聖都動乱の残党かもしれません。」

歴史をさかのぼれば、アルドの叛乱の残党……となるのでしょうか。

「

「騎士団とアルドの残党だって？
余計にありえねえ組み合わせだ。」

バーグが声を上げる。

「ええ、恐ろしい用兵です。
考案した者は、敗北と怨恨というものを良く知った者に違いない……」

深い闇を瞳の中に浮かべながら、モンスロンは独りで思いに耽^{ふけ}た。
だが、直後に我に返る。

「……と、まあ、小難しい話は後にしましょう。
操縦士の皆さんは、とにかく一息入れて下さい。」

そして気の抜けそうな笑顔の号令で、溜め息混じりにルベランセへと向かう面々。

その中で戒とバークだけが最後に残り、モンスロンと共にゆっくりと歩き出す。

「しかしあんた、見事な機転だったぜ。
人は見かけによらないよな。」

内ポケットから煙草を取り出し、それを噛みながらバークが言った。

「いえ……ただもう、助かりたい一心で。」

髪の毛を掴み、ぐしゃぐしゃにするモンスロン。

「正直言って、後悔はあります。」

あの時は咄嗟に自艦だけが生きる道を選んでしまった。
後から思えば、もっと良い方法があつたのではないかと。」

「…難しいな。」

艦長つてのは、いつもそんな葛藤をしてやがるのか？」

「…そうですね。」

バーグの問いかけに、彼は表情を曇らせた。

「考えれば考えるほど、わからない。」

だから本当は、考えない方が良いのかもしれませんが。
過去に戻る手段など、一切無いのですから。」

そしてはつきりとは言わないが、その言葉からは犠牲にした艦への追悼と、不調のフィンデルへの心配が伝わる。

「…詰まるところ、利己主義ですよ。」

飛翔艦を駆る者の思考なんて……ね。」

「利己……か。」

戒が呟き、背後にそびえる物言わぬルベランセを眺める。

「確かに、飛翔艦つてのは圧倒的な力だとは思つが……それはあくまでも戦争屋の思考だろ。」

そんな青年の若い口調に

「…そうだね。」

君の言つとおり、戦争以外にだけ使える日が訪れれば良いね。」

モンスロンは穏やかな表情で微笑んだ。

艦内に戻るとすぐ、モンスロンは用事があると告げて、各個室が並ぶ区画へと向かつて行つた。

二人はそのまま、慣れた通路を進む。

「何だ、この強烈な匂いは…」

食堂の前。

通りがかりに鼻を突く刺激に、戒が声を上げた。

「…食欲を誘うな。」

安堵のためか、急に空いてきた腹をさすりながら答えるバーク。

「…ああ…二人とも！
よくご無事で…！」

二人の姿に気付き、前掛けを締めたパンリがすぐに駆け寄って来る。

「…シュナはどうした。」

空の厨房を見回し、戒が訊いた。

「食事の用意をした後、ここを私に任せてフィンドルさんの部屋へ…。
他の皆さんも無事です。」

「…そうか。」

深く息をつき、彼はパンリの肩を軽く叩く。
そしてまじまじと、その顔を見詰めた。

「…しかし、意外と普通だな。」

「何がです?」

「お前のことだから、もっと怯えて縮こまっていると思ったんだが…。」

「……はは。」

パンリは乾いた声で笑った。

「麻痺…してるだけですよ……たぶん…。
あまりにも……今までの生活からかけ離れすぎて……」

「いやあ、それでも立派だぜ。」

バーグは大きな手の平で彼の背中を強く叩き、食堂の中へと大股で進んで行く。

（大半が……まだそんな状態だろうな。
だが時間が経つにつれ、恐怖ってヤツは増してくるんだ。
長丁場になったら、きついぞ…）

彼は硬い表情のまま、既に中央付近のテーブルの席にいる世羅に目を合わせた。

「バーグ！ 戒！！」

二人の姿を確認するなり、手を振って呼ぶ彼女。
そして招かれた彼等の前で、皿を掲げるようにして見せる。

そこに盛られているのは、スパイスの効いた強い香りの料理。

「カレーだよ！」

「……………」

二人にとって馴染みが無いその料理を、世羅はよく知っているよ
うだった、

「…フン。」

最後のカレーにならなきやいいけどな。」

そんな彼女の笑顔に反するように無愛想に立ち上がり、食事を終
えたコルツが食堂を去る。

「お前のところの、あのクソ生意気な野郎…。
何とかならねえのか。」

鯨の如く凄まじい勢いで料理を口にかき込んでいるマルリツパの
背に向けて、戒が椅子を引きながら言い放つ。

「…ん、あれでも隊長だから、従うまでだよ。」

コップの水を飲み干し、一息ついてから、目元を緩めて答える彼。

「隊長が隊長なら…部下も部下だな。」

見れば、他のデスタロッサ隊の面々は、隅の隅がりで食事をとっ
ていた。

その顔からは覇気が無い。

だが不気味な笑い声と共に、撃墮した戦闘騎の数の自慢話が聞こえてくる。

「…まあ、僕は部下というより、幼馴染かな。」

マルリツパは、そんな戒の目をさして気にすることも無く、平然として答えた。

「あいつの父さんは、大陸中を回って活動する政治家なんだ。その3番目の奥さんの子供も……色々大変みたいで……」

「どちらにせよ、麻薬をやっているような奴は信用できねえな。」

そう呟いた、戒の顔を凝視する彼。

「どうしてそれを……あ、もしかして専門家……」

「専門家じゃねえ。」

いつものように誤解の目が、特に頬の傷の辺りに向けられるのを感じ、戒は彼の手首を思い切り強く掴み上げる。

「でも戦闘の時は、あいつにとってはそれが麻薬みたいなものだから、信用してくれてもいいですよ。」

それでもマルリッパは笑顔を返し、戒を一層不満そうな表情に変えるのであった。

「…解らないでもねえさ。

戦いつてのは、クセになる。」

スプーンを置いて、呟くバーク。

「何はともあれ、食えるうちに食って……寝れる時に寝る……。

それが兵隊の役目だ。

麻薬をやつてようが何してようが、あんたのところの隊長さんは良く解つてゐたいじゃねえか。」

そして背伸びをして立ち上がる。

「お前も、もつと食つとけよ。」

一向に減らない皿で心中を見透かされた戒は、そんな彼に背中を叩かれたのだった。

「艦長……」

「ごめんなさいね…情け無い姿を見せちゃつて。」

血のにじむ包帯を巻いた頭を枕に沈めたまま、フィンドルは声をかけたシュナに背を向ける。

「ごはん持つてきました。

おかゆですから、体調が悪くても平気ですよ。」

「いらないわ…食欲が無いの。」

「いいえ、無理にでも食べてもらいますからね。」

彼女は笑顔を見せ、手にした皿からスプーンでよそつ。

「……………」

しかしフィンドルは、その粥の熱気と香りだけで口元を押さえ、うつむくのだった。

「大丈夫ですか!？」

「へ…平気……………」

シュナは慌ててすぐに皿を置き、むせながら涙目で答える彼女の背をさする。

「…ごめんなさい。」

せつかく作ってくれたのにね……」

「いいえ、すみません！

私こそ……無理に……」

いたたまれなくなつて、シュナはそのまま後ずさる。

フィンデルの身体は想像よりもずっと冷たく、生気を失っていた。

「……僕も出撃したかつたんだけどね。」

でもガツチャ殿が、戦闘騎の封を破ると面倒なことになるって。まったく、そういう事態じゃないと思うんだけど。」

「いや、確かに手出しをしなければ、見逃がしてもらえる可能性も僅かにありますう。」

「……やれやれ、ルベランセが墮とされたら同じなのになあ。」

廊下の壁に背を付け、片足をぶらつかせながらロディが言う。

「とりあえず……フィンデル殿の容態については、なるべく他の方には知らせないように。」

士気に関わりますゆえ。」

対するモンスロンは、神経をすり減らした表情を隠さないでいた。

「容態って……ただの疲労でしょう!？」

それまで黙って沈みこんでいたリードが声を上げる。

だがそれは予期せず廊下に響き渡ってしまい、彼は慌てて口をつぐんだ。

「肉体的に疲労しているだけならば、短時間で回復の見込みはあります。」

だが彼女の場合、精神的な疲労が慢性化しているのです。

おそらくそれは……10年もの時間をかけて、彼女の身体を侵し続けてきたでしょう。」

「あなたは騎士団にいたくせに、彼女の何を知っているって言うんですか!」

自分だって分からないのに、仲間のような顔をしている。

そんな悔しさを噛み締めながら、だがリードは訊かずにはいられなかった。

そこで部屋のドアが開かれ、シュナが出てくると三人の会話が一瞬止まる。

彼女越しに覗く室内のフィンドルは、再び眠りについていた。

やがて、モンスロンに投げかけられる周囲の視線。

「彼女は全く憶えていないようでしたが……私は過去に二度、彼女と会っているのです。」

彼は複雑な心境を、吐息に反映させながら口を開いた。

三人は一言も発さず、それに聞き入る。

艦内の静寂が増すようだった。

「私は生え抜きの騎士団の人間ですが、それでも彼女とは不思議と接点がありましたね。」

……最初の出会いには士官学校の試験当日。

当時、私は面接官として呼ばれていました。

彼女は試験において特に目立つものはありませんでしたが、面接時に暗記していた兵法を読んでくれたのです。

初めは変わり者だと思いましたが、良く聞いてみれば恐ろしいくらいに、その先人の教えを噛み砕いて吸収していた。」

彼女の輝いていた表情を、瞼の裏に浮かべる彼。

「ところで、中王都市の士官学校では入学後……。」

すぐに研修として各地の飛翔艦に乗せてもらい、航行を見学する風習があります。」

その言葉に、経験のあるリードのみが頷いた。

「それは各国が合同で行う式典のようなもので、あの時は北西諸国

が集まっていたと記憶しております。

そう、私が所属の『赤の隊』も数隻、他の生徒達を乗せてその任務に当たっております。

私と彼女の二度目の出会い……それは、ハンデン・ハンデオルム事変。

闇に葬られ、誰にも知られない闘争がそこにはあったのです

ー

アルドの叛乱中期。

劣勢を盛り返した大陸十字軍が初めて陥落させた、叛乱軍の要所がハンデン・ハンデオルムであった。

蛮族は古に伝わる神殿を要塞とし、最期まで抵抗したと言われている

中王都市から北西に位置する、そんな土地は、かつて十字軍として手を組んだ周辺諸国の演習場となっていた。

再興の見込みが失われた地を奪還することに、意味こそは無い。

だが、見えないところで燦り続けていた叛乱の炎が十分な蓄えを迎えた時。

そこが目標になったのは、そんな過去の遺恨から当然のことでもあった。

後になってこそ、モンスロンは回想する。

いくら戦争の終結から久しいとはいえ、油断をもって背後から急襲されるなどあってはならぬこと。

だがそれは、現実のものとして行われてしまった。

そして。

あの時、それ以上に、味方の反撃は異様に上手くいきすぎたのを憶えている。

合同演習時はその都度、旗艦を選出する国を変えていたが、その日は良く知っている提督の番だった。

鎮圧部隊として、共によく戦場に出たことで手腕も良く知っている。

奇襲を受けた後、不利な態勢から見事に持ち直し、さらに迅速な指揮によって攻めに転じ、蛮族の飛翔艦を次々と撃破した時も違和感は無かった。

ただ、その日。

ハンデン・ハンデオルムの地は、再び全てが焦土に覆われていた。

それを飛翔艦のブリッジから眺めた時、彼は妙な不安を感じたのだった。

「……何と……！」

提督殿は先の戦闘で重傷を！？」

「は！」

まだ熱の残る溶けた鉄屑の地を、急ぎ足で突っ切るモンスロンに
並んで答える念通士。

「では、先程の指揮は一体誰が？」

「……中王都市の学生だと聞いております。」

「我が国のですか？」

それは興味深い……」

目先の喧騒が増す。

その人垣を急いで掻き分け、モンスロンは顔を覗かせた。

自国の仕官学校の制服を着た女性。

その前方で半身を起こした蛮族が、彼女の腰から拳銃を抜き取り、
それを自分のこめかみに当てがうところであつた。

「……サーデユス・ルア・アフハ……。」

そして彼が、独特の言葉で呟いたのを聞いた。

モンスロンは駆け寄る途中、妙な心地を与えてくる語感に思わず立ち止まる。

そこで銃声と共に放たれた弾は、無残にも言葉の主を貫き。返り血を浴びて放心状態の彼女のみが、目の前に残されていた。

聖都に対する襲撃の予行であつたとされる、ハンデン・ハインドオルムの部隊への襲撃。

北の蛮族達は、その全く予期せぬ完全な敗北と損害により、次の乱を起こすまで7年もの歳月を費やすこととなる。

「……すなわち、それが彼女にとっての人生の分岐点だったということですか。」

廊下の床にだらしなく座ったまま、ロディが呟いた。

「それでも私は当時のフィンドル殿の手腕から、卒業後には是非とも騎士団に欲しい人材と思っておりました。

……が、彼女はそれきり、頭角を現さずに埋もれてしまった。再び会うまでは信じたくありませんでしたが、あの時、やはり心

に深い傷を負っていたということでしょう。」

「つまり、艦長はそれを悔やんでいるということですか？」

シユナがさらに質問しようとした矢先。

「……そう。

きつと、おそらくは……」

彼は瞼を長く閉じる。

「罪悪。」

モンスロンが似たような話をしている時、周囲の人間は不可思議
そうな顔をする。

やはり、この時も同じだった。

彼自身も、それは十分に承知している。

同じ境遇でなければ、到底理解には及べない。

多くの者の命を扱う人間の心には、並々ならぬ暗い深遠がある。

「……ですが、その罪悪にも思い込みの部分もあります。」

しかし今、私が何を言っても、その傷を癒すことは出来ないで
しょう。

あの様子ではね。」

やがて、彼の声は哀れむように細く変わった。

「……戦いの虚しさというものを、若くして彼女は知ってしまった。勝利が、多数の命を下敷きにしていること。仲間の歓声も、その裏には畏怖があることを。」

解りやすく発せられる彼の言葉に、リードは拳を握り締めて思わず目を伏せた。

その言葉どおり。

炎団との一連の戦いから、フィンデルに対しての言い知れぬ畏れは、ずっと消えることが無かった。

近くにいて、そんな感情を汲み取れないほど、彼女はきっと鈍くない。

やがて、おぼつかない足取りで廊下を進んでいく彼。シユナも顔を伏せながら、その後続いた。

「……モンスロン卿。

貴方は優れた軍略家のようですが、女の子のことはそうでもないみたいですなえ。」

一人残り、彼等を見送りながら明るい口調で言うロディ。

「……どういう意味ですか？」

「彼女とは、中王都市の夜宴で素敵な出逢いがありましたね。貴方に勝るとも劣らない関係がある。」

ま、そういうことです。」

目を丸くするモンスロンに対し、彼は肩をすくめて応えた。

時間の境も分らない状況の中、一夜が過ぎ去った。

「…まだ、あっちこっちで偵察機が飛んでやがる。」

ザナナと共に見回りから戻ってきたバーグが、食堂に居る全員に聞こえるように言う。

「チッ！」

ブツ殺してきてやる！！」

椅子を並べ、そこに寝そべっていたコルツが机を蹴って立ち上がり、息巻いた。

「やめてよ。」

危険だし、僕達まで見付かったらどうするの。」

それを必死でなだめるマルリツパ。

「しかし、味方の姿は全然ねえな。

このまま潜伏しても、救援は絶望的だぜ、たぶん。」

バーグの言葉は切実だった。

「……これが、裏切りに対する報復ってわけか。

騎士団ってのは、随分だな。」

戒がモンスロンを横目に言う。

「……いえ、これは中王都市軍そのものに対する宣戦布告と見てもいいでしょう。

我々のように生き残る者がいて、赤華の存在に気付く者がいてもおかしくはない。」

「つまり、てめえが亡命すること自体には責任はねえってことか？
違うだろ。

引き金にはなっているはずだ。」

「……面目ない。」

さらに極まる厳しい目線に、モンスロンは視線を下ろす。

「今さら、そんなこと言っただって仕方ないよ。

…」

この人にも、それだけの犠牲を払っても亡命する理由があるから
「何だと……？」

彼を擁護するマルリッパに、迫る戒。

「くだらねえ議論より、この状況を何とかすることを考える。
過酷な戦線は嫌いじゃないが、ここは極端すぎる。」

コルツが深く椅子に腰掛け、今度は嫌に冷めた目つきで二人を眺めた。

「戦力的には、圧倒的に不利。
行くことも退くこともままならないこの状況……さて、どういた
しましょうか。」

少しずつ湧き出してきた各々の不安を見計らい、大きな紙をテ
ブル上に広げるモンスロン。

それは空図ではなく、付近の地形が記されており。
それぞれの目には、周囲を網目のように流れている川が印象的に
映った。

「まずはご覧下さい。
このムーベルマ溪谷は曲がりくねった深い谷間が特徴です。」

長い月日をかけて水流が岩を削り、各地を段にして……最下層に流れる川は多岐に分かれている。」

その予め用意されていたような周到な言葉に、誰もが注目する。

「確かに戦力が明らかに不足しているとはいえ、地の利だけは、若干ですが我々にあります。

水に沿って移動すれば、向こうの念通士に探知される確率は非常に低い。」

そして、艦長室から拝借した箱を取り出すモンスロン。

「幾つにも分岐している河川は、想像以上に使えます。

これを飛翔艦が進める限界まで伝って脱出することが、おそらく今、一番現実的な作戦でしょう。」

彼はその箱の中から、ルベランセを表す小さな駒を手にとって現在地に置き、もう一方の手で

東側のタンダニア方面に大きな駒を置いた。

そこで遠くから眺めていただけただけのパンリが突然、思いついたように口を半分開ける。

「パンリ君といったね。

何か言いたいことがあるようだ…」

その表情をうかがうようにして、モンスロンが訊いた。

「い、いえあの……もし私が相手だったら、もっと兵力を分散するんじゃないか……と。」

「こいつは素人なんだ。
話なんて聞いても無駄だぜ。」

口ごもる彼のフードを軽く小突きながら、戒が口を挟む。
だが、意外にもモンスロンは首を左右に振った。

「相手の気持ちになることこそ、兵法の基本。
彼の言っていることは、あながち外れておりません。
つまり……」

小さな駒をつまみ上げ、周囲に動かす彼。

「どこへ逃げるか分からないネズミを一匹を捕まえるのに、獅子を一匹だけ配置する者などいない。
こういう場合は……」

手前の食器棚の上で耳を掻いている梅を見上げながら、モンスロンは地図上の大駒を取り除いた後、
中駒を片手一杯に取り出して渓谷全体を囲むように配置する。

「『猫』をいくつか配置することで……確実性が上がります。
おそらくは現在、これに近い状況になっていることでしょう。」

「…な、なるほど。」

パンリが呻いた。

「どうすんだよ。」

既に周囲に飛翔艦を展開されているのなら、逃げ場は無えぜ。」

「……逃げ場が無いのなら……つくればよろしい。」

モンスロンのあっさりとした言葉に、戒は閉口する。

「そんな簡単に……」

「発想を変えてみましょうか。」

彼はそう笑い、今度は小さな駒を幾つか取り出した。

「相手はネズミが一匹だと信じ切っている、その『思い込み』を突くのです。」

ネズミは増やせばいい。」

そして地図上の渓谷周りに、その手中の小駒を配置していく。

「意味がわからねえ。」

ルベランセに代わるものなんて、ここにはねえぞ。」

バグが呟いた。

「……実際に飛翔艦など無くても、良いのです。皆さん、とりあえず、今だけ相手側に立って考えてみて下さい。そう。」

たった一隻のルベランセを血まなこになって搜索している、相手に。」

彼の呼びかけで、目を閉じる全員。

「……この厳戒態勢の中で、不意に戦闘騎を見つけたら、どう思いますか？」

「……それは哨戒機。
きつと、その近辺にはルベランセがいると……推測します。」

マルリッパが呟いた。

「そう。」

それこそが、この作戦の要。」

皆が目を開ける。

モンスロンが小駒の一つを、溪谷の北へと動かす。
それにあわせて、その付近の中駒が引きつけられて固まっていく。

さらに南。そして西。

「西の中王都市へ尻尾を巻いて逃げるか。

南の聖都へかくまってもらうか。

北の地へ身を隠すか。

……一体、ルベランセはどこに逃げるのか。

きつと相手は、どの可能性も捨てきれないはず。」

最後にルベランセを表していた駒が、はつきりとした音を立てて地図上に置かれた。

「だが、我々の本命はやはり東のタンダニア。

この地へ行き着く為に、西・南・北へ向けた戦闘騎を^{おとり}囲にして突破を図る作戦を……私は提案します。」

唯一の光明か、途方も無い愚策か。

その作戦の成否は、誰もすぐには判断出来なかった。

「この計画で『もの』をいうのは時間差。

まずは目的地から最も遠い、西の敵を。

その次は北と南を同時に引き付けてもらいます。

そして、全てを終えた後、本隊が東を一気に突き抜ける……」

「その作戦……乗ったぜ!!」

説明の途中、もはや何も考えず、勢いだけで応えるバーク。

全員の士気がもちこたえている間に行動せねばならない。
偶然にも、それはモンスロンの心情をも汲んでいた。

「しかし、各方面の囹の選別は？

使える戦闘騎の数は限りがあります…」

「マルリツパ。

お前の機体は、火力と装甲はあるが機動性に難がある。
やはり、ルベランセの護衛が適任だ。」

それまで興味の無さそうにしていた、コルツが急に口を出す。

「北の敵は配置数が少ないだろうから、適当に誘ってやればいい。
南は……やばくなったら最悪、非戦闘区域の聖都に逃げ込めば済む。」

これらの役目は、ルベランセ側の使えねえ二機だ。」

「…この野郎！

昨日から、黙って聞いてりやいい気になりやがって…！」

たまらず、彼に掴みかかる戒。

「…でも、残った西が一番危険だよ。

もしかしたら中王都市側からも挟撃される恐れがあるし、東のタ
ンダニアに一番遠くなる。」

…一体、誰がやるんだい？」

「俺に決まってるだろ。」

不安そうなマルリツパの問いに、コルツはすぐに自身を指して言った。

その襟元をくぶり上げていた戒が、思わず力を緩める。

「……なんだよお前ら、そのしけた顔は。」

俺のクモサ・クアターナのスピードなら、何の問題も無い。ついでに、相手の飛翔艦を何隻か墮としてきてやる。」

そして、彼は呆氣にとられる全員を見回しながら、大言を吐いた。

「他のDESTARUSS隊の全機は、敵陣突破の際に使え。」

…これでどうだよ、あんた？」

「現時点で最良の戦法になります。ありがとうございます。」

モンスロンは厳しい顔で礼をした。

「コルツ…」

「マルリツパ。」

俺がいなくても、しっかりと指揮をしろよ。」

「何言つてんだよ……いつも僕がやらされているじゃないか。」

「ふん。」

それだけを言い残すと、コルツは準備をするために率先して食堂を出る。

その余りの忙しさに。

危機という名の魔物が押し寄せていることを、全員が感じ取ることとなった。

銀の戦闘騎の帰還を見届け、観察場の高台から降りてくる白衣の少年。

「乗り心地はいかがでしたか？」

「……素晴らしいな。」

これ程の機体は、乗った経験が無い。」

マクスは手甲を興奮で震わせ。

兜を脱ぎ、上気した顔を覗かせる。

「ミシユレイ。」

これの大抵の操縦と武装はおぼえた。
だが、これは何だ？」

そして座席の後ろの、兜に合わせた窪みに目を向けながら訊ねる
彼。

「最高速を出す時は、必ずここに頭を固定して下さい。
延髄を痛めますので。」

対する少年は、笑いながら答える。

「そういう大事なことは、あらかじめ説明をしてもらいたいものだ
が……」

「危険ではないのですか。
この機体は。」

呆れるマクスの背に、心配そうな面持ちで声をかけるクウ。

「……護衛役きどりですか？」

急に話に割り込んできた彼女に対し、ミシュレイは小馬鹿にした
ように軽く睨みつけて言った。

「ミシュレイも、私を殺そうとしているわけではないのだろう？」

そこでマクスからの、二人をいさめる言葉。

「無論ですよ。」

眼鏡を直して答える彼。

「聖騎士さまの功績は、僕の功績。
ただ、そのための努力を惜しみたくないだけです。」

「その言葉。」

まるで、脅迫だな。」

マクスは笑って返した。

「今回のセッティングで、この銀の戦闘騎もひとまずは完成。
ペルテシノ・ステイオンという名を付けました。
意味は、『大天使の威光』です。」

「…過ぎる名だ。」

「釣り合うように頑張らせようと、あえて付けたんです。」

「…………ふ。」

マクスは表情を苦笑に変えつつ機体から降り、慈しむようにその
外曲面を撫でる。

彼も気に入ったようであり、その点でも設計者のミシユレイは満

足している。

「ところで、あなたは戦闘騎に乗る気は無いんですか？」

「私が？」

続けざまに声をかけてくる少年の言葉に驚いて、クウは聞き返した。

「まさか戦闘騎も乗らないで、聖騎士様のお供はないでしょう？」

「……でも……しかし……」

クウは、不意に頭上の空から下降してくる一機の黒い輸送騎に言葉を止めた。

「！！」

着陸した機体から出てくる黒華の者達 そして黒騎士の帰還
に、誰もが動きを止める。

（ディボレアル＝マシーアンス……。）

その仮面の奥底から感じる視線に、彼女は背筋を張って対抗した。

「……どこへ行っていた、軍師殿。」

「なに、小用だ。」

マクスに短く答え、歩み寄り、対峙する彼。

「貴殿に、おあつらえの任務が出来た。
今すぐに出発してもらおう。」

「……何処へ。」

「スガト荒野……ムーベルマ溪谷を西から東へ抜け、騎士国家タン
ダニアへ。」

「!?!」

その発言に皆が一樣に表情を強張らせる中、ディボレアルは脇の
騎士から差し出された書簡を手にとって向けた。

「大団長殿より、タンダニス王への書状だ。」

「何ゆえ、私が?」

「かの王と貴殿の父・ジエダス卿は、アルドの叛乱時からの旧知と
聞く。」

使者として、これ以上の適任はなかるう。」

一応は誰が聞いても合点のいく説明である。

だが、マクスの心にはどこか引っかかりがあった。

「第一に優先すべき任務はあくまでも、この書状を届けること。それ以外は…貴殿の判断に任せる。」

「承知した。」

言葉で従いつつも、彼は気迫の表情で踵を返す。

「機体の調整は。」

「ええ、さきほど。」

その背で、ディボレアルに即答するミシユレイ。

「クウ。 君は……」

マクスが言いかけた、その時。

「クウ…ハウドは、これから私と共に首都へ参じてもらおう。大団長の護衛として。」

「……………」

突然かけられたディボレアルの言葉に押し黙るクウ。そんな彼女に対し、マクスは頷いて促した。

「…旅立つ前に、宿にいるヒュベリに声をかけ、陸路からタンダニアへ入るよう伝えて欲しい。」

だがすれ違いざまに、耳打ちをする彼。

黒騎士とミシュレイの様子をうかがいながら、クウも返事の代わりに小さく頷いた。

そして二人は、それ以上に無駄なやり取りを全く見せずに、離れていく。

「……ディボレアルさん、帰還が早すぎませんか。」

まさか…全滅したとか？」

ミシュレイは輸送騎と、そこに乗っていた兵の人数を眺めながら呟いた。

「いや、させたのは我々だ。」

飛翔艦は、別地へと既に送っている。」

「用意周到ですね……。」

しかし、無理がありませんか？

交戦をマクスに隠したまま……あの空域を突破させるなんて……」

「それしきのものか？

奴と、この戦闘騎の能力は。」

ディボレアルの言葉に、ミシユレイはムツとした顔を持ち上げる。

「説明しないことで、後ほど困らないのかって言っているんですよ。」

「それは運に任せよう。」

「……本当、心にも無いことばかり言いますよね、あなたは。」

心底嫌悪した様子で言い、少年はマクスの機体の最終整備へと向かった。

「…各種の信号弾を持って行け。」

格納庫から持ってきた箱を前に、コルツによって戦闘騎の操縦士全員が並ばされていた。

「青の信号弾は作戦の開始。
今作戦では俺だけが使用する。」

彼の言葉に、マルリツパが頷く。

「そして作戦が順調な時は、この緑の弾を撃ち上げて知らせるんだ。」

「

「こっちの赤は？」

バーグが赤く染められた筒を片手に持ち、訊いた。

「援護が必要な時だ。

普通、これを見た仲間は、撃ち上げられた所へ必ず駆けつけるようにする。」

「そうか。

アルドの叛乱の時と変わってねえんだな……。」

彼は懐かしそうに笑う。

「だけど、今回の作戦では相応しくない。

これを使うくらいなら、くたばって死ね。仲間を巻き込むくらいならよ。」

自分の部下を見回して言うコルツ。

極論だが、的を射てはいる。

この作戦は元々、小を捨てて大を生かす作戦なのだ。

「戦場には崖が多い。

命綱も持つて行った方がいいだろうな。機体の固定にも役に立つ。」

そしてコルツは、先端にフックが付いた、長めのロープを順に全員へと配る。

「？」

世羅に手渡した時に、違和を感じて止める彼。

「そついえば、お前の相方はどこへ行つた？」

そして呆けたまま訊くが、彼女は笑顔のみを返すのだった。

「……！！」

シユナは換えの包帯と水を持ってフィンデルの元に向かう途中で、戒とロデイが神妙な顔つきで、その部屋から出てくるところに出くわした。

「あ、何やってるのよ、あんたたち！」

目を吊り上げて、迫る彼女。

それに驚き、二人は反射的に背筋を伸ばす。

「…な、何でもねえよ。」

そして吐き捨てるようにして、廊下を去る戒。

「……あいつのことだから、どうせ小言とか文句を言いに来たんですよ。」

今が大事な時だって知っているのに、何で止めてくれないんですか。」

顔を引きつらせて笑うロディに、シュナは口を尖らせて、室内へ入る。

「……………!!」

あいつ…どうして!?!」

だが、その直後。

持っていた物を何もかも捨てて、急いで廊下へ飛び出す彼女。

「いや…僕も驚いたよ。」

あれこそ、まさしく、神様の賜物だね。」

「そうじゃない!!」

感嘆するロディに対し、シュナは色々な感情が入り混じった表情で叫んだ。

「あの能力はタダじゃないのよ！
それなりに代償があつて…」

「大丈夫さ。」

彼にも僕と同じく、果たすべき目的がある。

……必ず戻ってくるよ。」

涙を浮かべる彼女を抱き寄せて、悟ったようにロディは伝えた。

ルベランセの外では、機体の整備が佳境に入っていた。

それまで互いにあらゆる方向を向いていた全機が、今は一斉に滝の方を向いている。

「久しぶりだな。」

にかつと笑つて、自分の機体の右翼を叩くバーク。

エンジン部の調整を行っていたミーサが、気付いて顔を上げた。

「源炉の整備と…艦体の修繕を……ずっとしてたから。」

「一人だと大変か、やっぱり。」

「ううん。

パンリにも手伝ってもらってるし……」

「そうか。」

「…みんな墮とされたんだってね。」

「ん……ああ。

そうだな……。」

バーグは視線を泳がせ、横の戦闘騎に乗っている世羅に手を振った。

彼女は戒の乗るべき操縦席で、操縦桿を片手に遊びながら、手を振り返してくる。

つられて自然に笑顔へ変わる自分の顔だったが、それをミーサは作業を止めて見入っていた。

「おい、どうした？

なんか……らしくねえぞ。

俺達はいつでも、ピンチを乗り切ってきたじゃねえか。」

「だって……！！

全滅……みんな死んだって……！！

艦長も調子崩してて……。」

そして急に取り乱した彼女の様子に、彼は時間が経つにつれ己の感情の起伏が無くなっていることに気付いた。

「別に、怖いことねえだろ？
肝っ玉のミーサさん。」

動揺を抑えながら、「冗談を続ける。

「怖いよ……！」

なんか……いやな予感がする……」

「見送る側つてのは……大体そんなもんだ。」

さらに、軽い言葉を被せる自分。

「お前はまだ若いんだから、絶対に死ぬなよ。」

「……歳のこと言うの、ずるいよ。
年齢を一気に増やすことなんて、絶対に出来ないんだから……！」

「はは。
なにムキになってんだ。」

バーグは笑ってあしらい、その場を離れると、ルベランセから降りてきた戒、そして
艦内の防衛を任せるザナナにも手を振った。

（……それなりに、今までの人生に満足しているってことかな。
こいつらのためなら……いつ死んでもいいって気がしやがる。）

共に死地に向かう連中は、自分の半分も生きていない。

きつと先に逝った友も、同じことを思うだろう。

皆に振りまいた自分の明るさの理由を知った時。
彼の心は、妙に晴れ晴れとしていた。

4

北の荒野には、黄土色の岩肌をした小丘が幾つも立ち並ぶ。
戒はそのうちの一つに戦闘騎を留めていた。

高所を吹き荒ぶ乾風は、遠方の匂いを孕んでいる。

そして、どこまで見渡しても変わり映えの無い景色。
遙か遠くまで往けば、自分達の全く知らない世界があるに違いな

い。

惜しむらくべきは、今はそんな感慨を実行に移す余地が無いことだった。

「…擦つて歩くんじゃないよ、一張羅だつて言ってるだろ!!」

機体の前。

崖に足を投げ出しながら腰掛けて一息入っていた戒が、自分の修道着を羽織つて歩き回る
世羅の様子を目の端に認めて叫ぶ。

「あは、ごめん。」

裾を捲くり上げ、おかしい態勢で近寄る彼女。
それと共に感じる、普段とは違う、別の匂い。

レティーンレティーンの修道着には、香の原料となる繊維を編みこんでいる。
穏やかな匂いを放つ繭まゆである。

自分が着ていた時はまるで意識の外だったが、そこで戒は世羅を通して自分のことを知った。

人はこうして他人と知り合い、自分を知るのか、と。

いまさらながら。

死地を前にしてそれを思うのは、気持ちが高まっているせいである

う。

「戒も飛翔艦乗りになりたいんだよね？」

じゃあ、しばらく一緒にいられるよね、ボク達…」

不意に物寂しげな表情になる、珍しく少し陰った瞳を見せる世羅。それすらも、自分の緊張が伝わったのだと、戒は思った。

「…馬鹿か、お前は。」

そんなもの、保証なんてねえよ。」

そして、本心をありのままに言う。

「人が一緒にいることなんて……な。」

「そんなことないよ！」

神経質な指使いでピアスをいじる彼に対し、世羅が声を張る。

「シユナが作ってくれた料理、よくお師匠も作ってくれたんだ。そしたら、急に、お師匠がそばにいる感じがした。」

「……おい、それは…」

言いかける戒。

だが、それをよそに、彼女は言早に続けた。

「この前ね、ロディがね、飛翔艦のことについて教えてくれたんだ。そしたら、その時はリジャンがそばにいたような気がしたよ。」

「……………あのなあ。」

嘆息と共に、水の入った皮袋の先端をくわえて口に含んだ後、世羅に手渡す。

それを彼女は遠慮なく一気に飲み干した後、わけもわからずに笑顔を返した。

「いったい、どこにいるってんだよ？」

「ここだよ。」

無垢な表情のまま、両手を自分の胸の中心にあてがう彼女。

「哀れなことってんじゃないねえ。」

……………人がいるとしたら、それはこっちだ。」

戒は遠くを見つめたままで、彼女の頭を軽く叩く。

（そっぴゃあ……………あの夢を見なくなったな…）

そしてそのまま、景色を漠然と眺めながら思う。

世羅と共にあることを決めてから、以前のように不快感に苛まれ
ることは無くなり、今では
むしろ気分が落ち着くようだった。

何も語りかけない、彼女の中に棲む天命の輪は自分を試すつもり
だろうか。

その沈黙が、かえって不安にもさせる。

「……お前は……どうして俺様を選んだ？」

「？」

世羅は、前を向いたまま呟いた戒の様子を注視する。

遠くの空に作戦を告げる閃光弾が上がったのは、それと同時だった。

「……どういうことだ……」

ブリッジの卓に広げた地図。

周辺にくまなく並べられた搜索済みの印を睨み付けながら、ファ
グベールは焦れた唸りを放つ。

「なぜ、いつこうに見付かる気配が無い？

短時間でこれほどまでに遠くへ行けるものか…？」

ルベランセの本格的な搜索に費やした時間は丸一日。

初手で飛翔艦と哨戒機を各方面に飛ばし、遠方への離脱を警戒させたが、今のところ成果は皆無であった。

「…それとも、このムーベルマに飛翔艦を隠せる場所があるというのか。

ならばこれからは、谷間や岩場などの物陰を重点的に…」

言いかけた直後。

周囲で声が上がると共に、西の空に突然現れた閃光へと注目が集まった。

「……確認を急がせる。」

ファグベールは瞳だけを動かして、その光を追いながら命を下す。

「西で戦闘騎……」。

あ、いや……同時に北でも敵機を発見との報告！」

早速、一人の念通士が叫ぶ。

途端に浮き足立つブリッジ。

「…本艦も移動いたしますか？」

「いいや。」

双方にそれぞれ、ルガーツ艦を送ってやれ。

それに対応させる。」

傍らで進言した念通士に、冷静に返すファグベール。

「まだ南からの報告はありませんが…こちらは如何いいたしますか。」

「……これ以上、戦力を分散させるわけにはいかん。

そこは、配置してある艦に任せる。」

既に、この空域に残るのは自艦を合わせて二隻のみである。

「奴等、一体、何のつもりでしょう？」

「陽動のための……囧か。」

配下の疑問に対し、ファグベールは顎を擦りながら呟いた。

「この空域から脱出するだけならば、どの方角もありえる。
捨て置くことは出来ん……」

突然に動き出した戦場に流されぬよう最大限に気を払っているものの、何かの思惑に操られている自分がいる。

「……しかし……なんだ、この違和感……
この、ファグベールの性格を知り尽くした作戦は……」

ぼやけていた標的の存在を確信し。
拳を握り、急に立ち上がる彼。

「本陣はここで固定。

周辺に潜んでいると思われる敵艦の捕捉に、全力をあげて備えよ。

」

老将は低い声で命ずる。

（……この作戦の立案者は貴様だな……。

やはり生き残り、『そこ』にいるのだな……。

モンスロンよ……！）

赤華の軍師たる彼を直接の艦長に任命したことはないが、彼が乗り込む艦が悪い戦績を残したことは無かった。

どんな若手の艦長でも、知恵の浅い艦長でも、常にその傍らで辣腕^{わん}を静かに振るう男。

決して目立つことは無い。

しかし、善^よく人の支えになる人間だというのを知っていた。

だからこそ信頼し、赤華における勘定から軍備にいたるまで、団

体の生命線ともいえる財務の長も任せていた。

それゆえ、彼によって大団長からの信頼と面子を潰されたのは、ファグベールには強い屈辱であった。

（…必ず首を取るぞ。

我が汚名は、もはや貴様の血でしか拭えぬのだ。）

死を覚悟して、つひまへ跪いた日の誓いを思い返す。

腹に据えた煮えたぎる思いが、老将にわずかに残っていた情を振り払った瞬間でもあった。

（ファグベール殿……。

あれだけの赤華艦隊を指揮するには、小団長たる貴方抜きには考えられない。

おそらく、前線へ出ているのでしょう。）

自らを守る滝の洞穴を抜けた直後。

晴れ渡った昼空の下で、モンスロンは複雑な心境にいた。

赤華の軍師を長年務めたとはいえ、ファグベール本人には直属したことは無い。

（貴方と正面をきって戦うことになろうとは思いませんでした。

個人的な思いで背信したのであれば、私はとつくに諦めたかもしれません。

しかし、中王都市が…そしてその民が戦火を免れるために、まだここで死ぬわけにはいかないのです。」

お互いがただ同じ組織にいて、ただ任務を遂行していた。

人づての評判や戦場記録の上でしか、お互いを知り得ない関係。

だが軍人ならば、それだけで人となりというものが良くわかる。

（貴方は剛毅で実直。

そして、何よりも忠誠を重んじる騎士の鑑だ。^{かがみ}

大団長の変心にも、ただ応じるのみでありましょう。）

瞼を開き、暗闇を抜ける。

「 微速前進。」

小さく抑えた声だが、モンスロンはブリッジの皆に聞こえるようはつきりと言った。

「タンダニアまでは、かなり距離がありますが…」

対して、声を震わせるリード。

「時が来るまでは、潜みながら進みます。」

デスタロッサ隊の行動に合わせて……離脱の隙を逃さないように。
源炉の様子は？」

「大丈夫、安定してるの。」

軽く答えるメイ。

「最後には全速を出さねばなりません。
操舵手。」

その時まで緊張せず、余力を残しておきなさい。」

「は、はい!!」

さらに気を配るモンスロンに、タモンが答えた。

「万一、先の戦闘のように白兵戦に持ち込まれた場合は、貴方だけが頼り。」

お願いします。」

「……頼りにしろ。」

続けられる彼の言葉に、ザナナは腕を組んだまま低い声で答えた。

この局面での沈着ぶり。

表情は相変わらず何を考えているのか分からないが、モンスロンの言葉は確実に皆を安心させている。

これが『指揮』という力だとするならば。

悲しいかな、一朝一夕で身につくものではないだろう。

リードはそれを脇目に、己の不足さを切に感じていた。

戦闘騎から大きく半身を乗り出して、空から大地を調べる。

「……………うむ。」

その無理な体勢のままで唸る、バーグの真下の飛翔艦は全く微動だにしない。

飛翔艦が戦闘騎を感知できる範囲など、彼が詳しく知る由も無かったが、これだけの接近にまるで無反応なのは不自然であった。

（……………なめられてんのか…？

いや、まさか…そういうわけじゃねえよな…）

旋回する範囲を狭めながら、一気に下降する彼。

もはや戦闘騎の飛行音は聞こえ、目視さえ可能な距離のはずである。

さらにブリッジ付近を横切るといふ、普段なら自殺に等しい挑発行為も、相手はまるで意に介さない。

（……トラブルか？

いや…人の気配が無い……！？）

思った直後の目端の気配に、反射的に顔を向ける。
敵艦の窓の奥で、何かが蠢いたような気がした。

（！！）

次は、離れた窓際に人影。

だがやはり、すぐに視界から外れてしまう。

（……！？）

今度は外の高い岩場に視線を感じた。

バ―グが振り向くと確かに一瞬見える、頭に青い羽根飾りを付けた長身痩躯。

「……………？」

だが、それをはっきりと『人』と認識する前に、それは再び姿を消し。

以降は、全くの静寂。

動かない飛翔艦と荒野が広がるのみであった。

バーグは深く瞼を閉じて姿勢を直し、騎士団が蛮族と結託したことを思い返す。

もしかしたら、内部で衝突があったのかもしれない。

(…よりによって、俺が一番ついているなんてよ…!!)

全く浮上する様子の無い飛翔艦を一瞥し、見切りをつける彼。

(どうする?)

他の地点も気になるが……とりあえず、ルベランセまで戻るか…?

そして、忙しく自問を繰り返しながら機首を返す。

気配を感じた地点に点々と続いた小さな血痕に、彼は最後まで気付くことはなかった。

「撃ち墮とせつ!!」

怒号。

そして弾幕を縫って、一陣を突き抜ける派手な紫の機体。

その機上で、背後へ向き直るコルツ。

今度の相手は混成部隊。

敵部隊を指揮しているものは、言葉の調子からして、おそらく中王騎士団の人間であった。

この追討隊は、先に行われた戦闘から指揮系統が変えられている。

若干の不測を感じつつ、速度を上げて雲を切り抜けていく。

その速さに追いつけず、距離が開き始めた敵機達を確認してから、小さく旋回したのち下方正面へ回りこむ彼。

「……ザコが。」

十分な射程と間合いに引き付け、相手の死角から機銃のスイッチを押し込む。

銃器独特の振動の感触が左腕から肩に伝わり、快感が頭を支配する。

その手首から覗く、刺青^{いれずみ}。

幼い頃、母に無理矢理に入れられた墨だった。

特別であれ。

子が天命人ならば、仕事にばかりかまけている夫も、それを産んだ私に見向きもするのだろうと。

そうやって、他の妻に負けないよう、出し抜こうとしたのだろう。母は狂人だった。

自分の他に父には子供が居ないことを知ったのは、そんな彼女が自殺を遂げてからであつた。

それからというもの。

ただ日々を過ごすだけで、左手が疼き、頭を痛みが襲う。

その度に麻薬で散らさねばならないが、興味本位で軍隊に入った時、それが人を殺した時だけ、同様に静まることが分かった。

デスタロッサの姓のおかげで、軍内部では自由に振舞うことが出来た。

部隊を組織し、他国へ支援を行う遊撃軍の許可を得ることなど容易かった。

このように、戦闘時には、いつも過去に陶醉する。気付けば、相手は鉄屑になっていた。

今日も全く同じだった。

速射された弾に撃ち抜かれ、虫のように敵が落ちていく。

今日も楽しい。

快樂だ。

あらゆるものが一段落した後。

相手の飛翔艦との距離を測った。

こんな気分の時は、いつそのこと大魚を狙いたくなる。

操縦桿を軽く傾けて、優雅に旋回する彼。

部隊を一掃した今、余裕を持って、これからの行動を練ることが出来る。

その時、見えない圧力が彼の下腹を襲った。

『それ』は、僅か下方の雲中から、何の前触れもなく目の前に現れた。

音を全く発さない銀の戦闘騎。

その操縦士はフルフェイスの銀兜を装着しており、彼もまた突然の出会いに、自分を凝視していた。

だが兜の隙間から覗くその瞳は、魂を穿つような恐ろしい気を放っている。

飲み込まれたコルツは、先制の銃撃も出来ずに自機の下をくぐられた。

（……………何だ……………？

…敵…？

…無視…しゃがって……………）

首を反対側へ向け、一気に離れていくその機体後部から放たれている青白い炎を目で追う。

全く動けなかった恐怖を息と共に吐き捨て、コルツはペダルを踏み込んだ。

東。

その銀の戦闘騎が向かう先も、非常に嫌な方角だった。

マルリツパが片手を上げて、背後に並列して飛んでいる4機に呼びかける。

（大胆な作戦だなあ……………）

冷や汗が頬を伝った。

下方、水面ぎりぎりを飛行するルベランセ。

そして今、自分達の眼前の崖と河川は、二股に分かれている。

ここから、ルベランセは北へ。

自分の部隊は東へ。

実際のモンスロンの作戦は、コルツの意図とは少し異なっていた。

途中までは合同で進んでいたが、ルベランセの守りを担うべきデスタロッサ隊の5機ですら、最後の陽動として使う。

これで相手の裏をかけなかった場合、肝心のルベランセを守るものは何も無い。

まさに捨て身の作戦である。

このような策を思い切るモンスロンの豪胆ぶりには感嘆したが、それ以上に彼の執着と覚悟を感じるのだ。

危うく、そして恐ろしいまでの

そう思っているうちに、ルベランセはさらに細く狭い、崖の奥へと消えていく。

それを気が済むまで見送ってから、マルリツパは先頭を切って東へと飛び出して行った。

「本艦西方、約1800Mの地点…！」

「来たか！」

待ちかねた一報と思い、歓喜にも似た声を上げるファグベール。

「いえ……戦闘騎が現れました。」

「…また陽動だと…！」

一転、風を切った拳が唸りを上げて、卓に打ち下ろされる。

先の戦闘騎の出現から暫く経ったが、依然としてルベランセ捕捉の報告は無い。

「…しかし……今回は5機ほど一度に…」

老将の怒迫に押され、萎縮気味に続ける念通士。

「5機…？」

その言葉に、ファグベールは途端に興奮を静める。

「……なるほど。」

最後の力を振り絞り、一気に突破するつもりか……。ならば、こちらの実数を削ぐための、他の地点への陽動もつなずける。」

ファグベールは腰に下げた剣の柄を握り締めた。

「前軍に呼びかける。」

おそらくは、それが本命。

……まずは戦闘騎を展開。

しかるのち、本艦も移動して殲滅に加わる。」

己の発する言葉により、さらに加速する戦場。

熱に絆^{ほた}された老将の視線は、まだ見ぬ相手の命の一点を睨みつけていた。

遠目の低空に飛翔艦が一隻。

だが想像以上に大きく、異様に見える、その威圧感に指先が震えた。

(適当に誘え)

先のコルツの言葉が響き、その言葉が戒の戦闘騎を動かしている。

後方、合計6機からの爆裂音と共に、銃弾が通り過ぎた。

「くっ……!!」

汗で滑り、戒の手から操縦桿が踊った。

「わっ!!」

急にあらぬ方向へと泳いだ機体に、驚きの声を上げる世羅。

「掴まってる!!」

ペダルを踏み、加速を上げて無理矢理に上昇。

やがて機体の機構により、自然にバランスが立ち直る。

だが、相手は指揮された動きで、数機がしつかりと回り込んでいた。
た。

彼らは既に、蛮勇のままに戦っていた部隊ではない。

先の一戦、さらにルベランセを搜索するという細かな神経を使う
操縦を経て、彼等は恐ろしい速さで成長を遂げ。

前よりも遥かに洗練された動きで、自分を包囲し始めていた。

急に響き渡る、エンジン音よりも大きくなった自分の内なる鼓動。

排気の煙も熱い。

戦闘騎を手足のように思い通り動かせない、自分への焦燥。

「！！」

上空から現れた二機。

それに気を取られている隙に、別の二機に左右に回り込まれ、挟まれる。

さらに後方から、迫る別機。

戒の額の痛みが、大きな唸りとなった。

初めは自分の目を疑った。
荒地を半分ほど抜けた空域での戦闘。

それも、見慣れた部隊。
マクスは内心で驚きながらも、冷静に状況を分析しながら飛行していた。

（色こそ違うが、あの機体…そして、飛翔艦……。赤華の徴収は、このためか。）

オルゼリア家における、ヒュベリの言葉を思い出した。

（ともすれば、相手は……）

十中八九、中王都市軍で間違いない。
だが、今は考えている暇などは無かった。

「…!!」

すぐ背後まで迫っている戦闘騎に気付く。
先程遭遇した派手な紫の機体は、驚くほど速度を増していた。

振り切れるとばかり思っていたマクスは、若干面食らう。

（この機体もまた……疾^{はや}い!!）

相手を褒めた矢先に、ミシュレイの怒り顔を不意に思い出し、口元に笑みを浮かべる彼。

二機は、空気の抵抗全てを貫くようにして、新たな戦場に到達した。

「…コルツ!？」

その二機の登場に、初めに驚いたのはマルリツパだった。

（このまま…振り切るのは……危険か……！！）

一様には敵味方が入り乱れているが、乱戦ではない空域。
マクスの瞳には、戦場を支配している5機が一瞬にして見分けられて映る。

「？」

高速で追いかけるコルツの目の前で、小刻みに揺れる銀の戦闘騎。
それは突如として鋭い回転に変わり、仲間の隊列へと銃弾を撃ち込んだ。

一瞬の出来事。
離れて指揮していたマルリツパ以外の、仲間の四機に小さな火花が散った。

（！？）

そして中破の後、爆発。
それらはおそらく、先端に爆薬の詰まった甲榴弾であろう。

今までの全てを否定するかのように、眼前で散る自分の部隊。その残骸のつぶてを喰らい、コルツの機体が揺らぐ。

（この攻撃さえも…狙ってやったというのか！？）

速度を上げて追っていたため、あらゆる物が強烈な凶器へと変わって襲い掛かる。

顔を守るため上げていたコルツの左手に、飛んできたプロペラが直撃した。

「！！！」

続けて、エンジン部へ。

機体の急落と共に、視界から遠のいていく銀の戦闘騎。

機体の差ではない、恐ろしく厚い技術の壁がある。

完敗に、コルツが赤黒く膨れ上がった手首で自機の表面を叩きつけた。

（ コルツが死んでしまう！ ）

その惨劇に、暫し呆気にとられていたマルリツパが操縦桿脇のレバーを引いた。

機体が沈み始めたコルツへ止めを刺すため、旋回しかけた銀の戦闘騎へと、弾頭が射ち込まれる。

それは至近距離で爆発するが、マクスは寸でのところで見切つて離れ、そのまま深追いはせずに北東へと針路を修正して空域を離脱していく。

難を逃れたコルツの機体は、高度を著しく下げながらも、しばらくは飛べる様であつた。

おそらく、彼の腕ならば不時着できる。

これを好機と見たのか。

敵飛翔艦からは、さらに戦闘騎が4機ほど出撃した。

ルベランセに物資が無かつたため、自機に搭載された特殊弾は残り少ない。

「……痩せちやいそうだよ……」

マルリツパはそんな自分の状況を嘆き、呟いた。

戦場を抜け、マクスは一旦速度を落として一息つく。
搭載された火気の仕上がりも上々で、この戦闘騎の優秀さを改めて感じる事となった。

そして事情の掴めない戦場に、長居は無用。

あとは命令どおり、このままタンダニアに抜けるのみである。

無論、この説明は後にディボレアルに問い正さなければならない。

…とはいえ、一筋縄ではいかない相手である。

おそらくは、一寸も本心を洩らさずに自分を言いくるめようとするだろう。

腹の探り合いや心理戦など、マクスには苦手な部分であった。
そんな気の重さを手に込めて、操縦桿を傾ける。

人間達のおかげで殺伐としているとはいえ、周囲の自然はやはり美しかった。

川は思ったよりも澄み、自機の左右を流れていく岩山の景色も趣がある。

彼は、わずかに緑が茂った崖下を何気なく見詰めた。

眼下の狭い隙間に潜む、飛翔艦。

崖にぴたりと付くように息を潜め。

じっと耐える、緊張した息遣いが聞こえてくるようであった。

（ルベランセ…！？）

その運命の感触に。

過ぎた中空で、マクスが思考を停止する。

（……これを…私が見付けてしまうとはな…！！）

呪いの言葉を浮かべながら、胸の前で十字を切るマクス。

自分に狙われる相手の不憫さは、やはり同情すべきものがある。
できれば、任務優先を理由にして見逃してやりたい。

だが、そうすれば同胞は窮地に陥るのだ。

細い溪谷の網目をくぐり、再びルベランセへと向かう時間。
それは彼にとって、とてつもなく長い旅路のように思えた。

崖の窪みにひとまず停泊し、十二分に機をうかがう。

「フィンドルの様子を…見てきても良いでしょうか…」

何とも言えない緊張感の中を数分過ごした後、リードが意を決して訊いた。

「……………気になりますか？」

モンスロンは着座したまま答え、そのまま同様の心境と思われる
タモンとメイの視線を受けた。

「ここから先は、きっと余裕が無くなります……………。
せめて、一回……………」

「……………そうですね、実は私も気になっていました。
今のうちに。」

穏やかな笑みを持って頷き、皆に返す。

「あ、ありがとうございます！」

「いえ……………」

だがそこでモンスロンは、リードが話している途中、彼の手元の
念通球が念通板から離れているのを見た。

「……………リードさん……………!!」

「え!？」

急に自分の背後へと向けている、モンスロンの驚愕の表情に、リ

ードは驚く。

わずかに減少する、陽の光。
揺らぐ陰影。

リードは振り向いた先に出現した戦闘騎に向かって、漠然と口を動かす。

ブリッジ真正面の空中に静止している妙は、通常の戦闘騎ではない。

だが、それは少し記憶にある。

そして、バグの報告にもあった戦闘騎。

それらの印象が錯綜し、入り混じって完全に消えた。

長馬ながうまと呼ばれている、通常の馬よりも二倍の足の長さを持つ動物に揺られ、三名が到着する。

川岸には同じく長馬が二頭繋がれており、既に合流すべき仲間が到着していることは明らかだった。

「…遅えぞ。」

川辺に張られた小型のテントの中から、一人の男が這い出して咳く。

「あんな変人と組まれて、しかも二人きりだ。勘弁してくれよなア。美人の女ならともかくよ。」

下品な笑みを浮かべ、胸毛を弄り回しながら、男は続けた。

「ギユスターヴは、もう来ているのか？ ババルザン。」

それに対し、赤いサングラスをかけた男は下馬するなり訊いた。

「おい、音速のー！」

対する彼が付近の高台へ呼びかけると、膝を曲げて遠くの空を見つめている長身の男が立ち上がる。

目元を隠すのは、鼻部が鋭角に伸びた赤茶けた仮面。

その仮面頂部に刺された孔雀^{くじゃく}の羽が背中まで伸びている。

右肘から下は、緩やかな曲線を描いた刃物が足元まで伸びている
『腕刀』。

薄い上着はボロボロに擦り切れていて、肩口から開いており。
ズボンも膝丈までしかなく、靴すらも履いていない。

そして彼は、馬上に乗ったままの二名に向けて視線を下ろし、何かをぶつぶつと呟いていた。

「本当に、この作戦に使うのか？」

…あいつは、本当に頭がおかしいんだぜ。

戦う以外はまるつきりだ。

ついさっきも、どこかで遊んできたらしい。」

「遊んできた…?」

呆れ声と不満を同時に並べるババルザンの言葉に、サングラスを指先で上げる男。

「冗談はよしてくれよ。」

これから、一戦あるかもって時に。」

「……冗談なもんかよ。」

さっき昼寝から目が覚めたら、あれだ。」

首の骨を鳴らしながら崖を降りてくるギュスターブを指差す彼。

絞られる肉の音。

その左手には、多数の『耳』が握られていた。

「……と……とつ……取てきた……」

いまだに血が滴っているそれを噛み切り、口に含む彼。

「他人の趣味には、とやかく言わないけど……これはちょっとな……」

男は呆れ顔と共に、馬上の二人を伺う。

案の定、ロリータ服の彼女は相当に引いている様子だった。

「……だが……この荒野で、どこにあれだけの人間が……」

そうして呟く途中、頭上に黒い伝書鳩が到達する。

「……まさかな。」

彼は手馴れた手つきでそれを招き寄せると、その足に付けられた管の中から文書を取り出した。

「……おいおい……マジかよ。」

あいつ、依頼主の艦、やっちまったんじゃないの？」

「依頼主？」

どうしようもない苦笑と共に肩を落とす彼に、ババルザンが文書を覗くようにして訊いた。

「いや、何でもない……」

隊員達の不始末を片付けるのも、オレっちの仕事よ。

……とりあえず出発しよう。」

「出発だって？」

「ここで様子見じゃねえのか？」

ババルザンの何気ない言葉に、男の顔は渋く変わった。

「状況つてのは、絶えずに動いてるんだ。

このまま、タンダニアに急行するぞ。」

後ろの二人に合図し、馬に乗り込んで早々に進み始める彼。

要するに、テントの片付けは手伝ってもらえないのだろう。

ババルザンは眉をしかめながら、川に唾を吐き捨てた。

脇では、ぽかんと口を開けたまま、天空を見つめているギユスタ
ーヴ。

「し…『紫電』に良く似ている……。」

そして長い手を伸ばし、風に乗って飛んできた紫色に光った金属かけらの欠片を取る。

「おい行くぞ、手伝えよ。」

呆れ顔で、馬に荷物を載せ始めるババルザン。

それを聞いたギユスターヴは、左手にこびり付いている血痕を長い舌で絡めて舐めた。

第三章

第五話 『ムーベルマ会戦・後編』
了

3 - 6 「中王都市の飛竜」(上)

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 3

「Wivern in central kingdom ci
ty」

The sixth story
「Wivern in central kingdom ci
ty」

空中に静止した、二枚の翼を擁する銀の塊。

その下部から伸びる、一基の機銃。

そして、瞬の焰花。

「皆、伏せなさい！！」

モンスロンの絶叫に、全員が反射的に従う。

先日の戦いでガラスを失っている窓を抜け、飛んでくる散弾は拳大。

それが激しい音と共に、ブリッジ全体を貫いていく。

そのあと訪れる数秒の沈黙を、リードは椅子の下に潜ったまま、じっと耐えていた。

だが、長く続くと思われた攻撃は、予想に反して短い。

それを感じた直後、彼は真っ先に立ち上がり、窓に身を乗り出して外を確認したが、周囲には既に何も無かった。

索敵しようにも、念通板自体が粉碎されてしまっている。

悔やみ、天を仰ぐ彼。

あの銀の戦闘騎は、たったの一撃を加えて退散した。

友軍に知らせるためか。

それ以前に、あれは哨戒機なのだろうか？

いや、確か過去に似ている機体を見たはずだ

混乱するリードの頭に、数々の事象が重なってくる。

「全員…無事……だよな？」

ぼんやりとした思考の中で、一人一人を確認する彼。

タモン、そしてメイを庇^{かば}うようにして覆いかぶさったザナナも、
飛び散った機器の破片によって
若干の血を流してはいるが、軽症で済んでいる。

その途中。

彼は、重く蠢^{うご}く音を聞いた。

「……！！」

リードは振り向き、愕然とした。

敵機からの攻撃を限界まで見極めたため、自身は回避が遅れたのである。

モンスロンは艦長席から崩れ落ち、おびたらしい血溜まりの上で
うずくまっている。

「……大丈夫。」

これは跳弾……直撃ではない……」

皆の視線を遮るように呟くが、その言葉とは裏腹に、挟られた右の上腕からは血が噴いた。

「少し…痛いですが…ね…」

蒼白の面持ちで強がりと言った直後。

傷口を押さえながら一瞬だけ立ち上がった彼は、必死の形相のまま前のめりになった。

エア・ファンタジスタ
Air・Fantagista

・

第三章
中王都市の飛竜

・

第六話 『中王都市の飛竜』

「演習なんでしょう？」

それならば、いつそのこと、艦を指揮させてくれればいいのに。」

飛翔艦の搭乗を前日に控え、無邪気な様子で言い放つフィンデルに、入学式で知り合ったばかりの学友二人は苦笑を返した。

「それは無理だろう。」

校舎の庭に設けられたテーブルで、ギルチは澄ましたまま本に栞しおを挟む。

「いくら士官候補生とはいえ、まだ階級も無い我々に従ってくれる兵士など、いないさ。」

それに、君はいつでも、さぞかし自分なら出来るような調子で事

を論ずるけど……少し、自惚れが過ぎるんじゃないか。

そんなことでは、意地の悪い教師達に目を付けられてしまつぞ。」

彼は、昔から慎重派だった。

「自信はあるわ。

私の頭は、いつでも戦局と策を動かすことが出来るの。

実戦でもきつと、その通りになるはずよ。」

「本で知り得た知識と、実戦は違う。

そう思うがな。」

シザーは紅茶の入ったカップを置き、神妙な面持ちで言う。

「人間同士のやることだ。

目に見えないものというものは多分にある。

こと戦いというものは、単純に戦力の応酬……そういうものではない。」

騎士の名家で育った彼女は理論派ではあったが、そこへ更に軍人の心情を解して加えていた。

「目に見えない、不確定な何かがあるというのなら、それこそ直に触れて勉強したいものだわ。」

彼等に比べて、自分は何も分からない子供だった。

書物から得た知識を頭で空想し、何でも出来ると思っていた。

愚かで哀れな子供だった。

戦いの本質とは。

兵士の本懐とは。

ハンデン・ハンデオルム事変は、その片鱗に触れさせて。

死者は生者を、暗い深淵へと引きずり込んだ。

当時、覚悟の無かった自分の心は、いまだに身体に戻って来れずにいる。

だから、そのまま惰性で軍に籍を置くのは、ただ生活のため。ずっとそう思っていた。

だが最近では、他に違う理由があるのではないかと感じている。いつまでも情けなく、だらしなく、戦場が手の届く所にしがみついているのは何故なのか。

炎団の艦を墮とした時も、平静を装う外殻の中身は、確かに高揚していた。

自分はもっと、己の知謀を使役したいのではないか。そしてその為の、深淵に落ちた心を引き上げてくれる救いの手を、

いつも求めているのではないか。

そんな資格など無いのに

(……止まった……?)

不自然な艦の停止を感じ。

フィンドルはベッドに横たわったまま、頭を沈めている枕を直した。

夢は、心地良い逃避では無かった。

全身にかいた嫌な汗がそれを物語っている。

生きるにしろ、死ぬにしろ、目が覚めたら全てが終わっていたらいいのに。

そんな後悔を思っ止まない。

「……気分はどう？」

顔色、少しは良くなったかな……」

「……!」

そこで自分の顔を覗き込むロディに気付き、飛んで離れるフィンドル。

彼女は慌てて、はだけていた胸元を隠した。

「なんか…ブリッジで異常があつたみたいだねえ。」

彼は閉められた扉の方を向きながら呑気に言う。

一方の彼女は、何もしないで反対側の壁をじっと見詰めた。

「なぜ、来たのです。」

……貴方は、逃げてもいいと言つたじゃないですか。」

「そうだね。」

返される言葉尻で、見なくとも彼の普段の笑顔が伝わった。

「…聞いたよ、モンスロン卿から。」

君は過去の経験から、戦う意欲を失つたつて。」

「……やはり…あの人は…私のことを…。」

でも…それを知りながら、どうして…まだ私なんかに構うんですか…。」

「君が素敵だからさ。」

肩に軽く乗せられる、彼の手。

フィンドルは、自分を覆ったシーツの中が熱くなるのを感じた。

「…好きなことに夢中になっている女性は、宝石のように、いつも輝いているんだよね。」

初めて会った夜。

君もそうだった。」

「……………」

「相手に向かう君の瞳。

自分が狙う目的のものを、何が何でも絡め取らんとする、その奥底にある闘争。

…背筋が凍るような荒々しさだった。

僕は。そういう君が好きだ。」

フィンドルは呆れてものも言えなかった。

彼はこのような状況で、詩吟のような口ぶりで、まだ人を口説こうというのか。

だがその異常とも思える行動が、いま確かに、妙にいとおしく思えた。

それは只なる錯覚ではない。

自分は。

彼から綴^{つづ}られようとしている、言葉を待っている。

「やめて……下さい。」

本心と逆の言葉を、彼女は呟いた。

「君は争いを嫌悪などしていない。
むしろ、欲しているはずだ。」

「やめて……！」

堪らずに半身を起こして向き直る彼女。

だが、待ち構えていたように、ロディは素早くその両肩を掴んだ。

「言葉として伝えなくても……ただ傍そばにいただけで、伝わることがあるよ。」

彼は視線を外さずに言った。

「だから……戒も、君に賭けたんだと思う。」

「……賭けた？」

ぼんやりと尋ねる。

そして彼女は、はっとして、傷を負っていたはずの自分の額に触れた。

頭痛で歪む視界の中、操縦桿を握る戒の手が痺れた。

両脇を戦闘騎に挟まれ、その摩擦で立ち消える速度。

さらに上空。

そして背後から迫る敵機の圧。

自機も敵機も入り混じったまま、雲へと突入した。

水蒸気の息苦しさに、むせる。

脇へ目配せすれば。

いつの間にか翼へと飛び移った、犬の頭の不笑人。わらわずびと

彼等は今にも自分達の首を刈らんと、瞳に殺気を爛々と輝かせ、口には刃物を噛ませている。

それを目の当たりにした緊張と焦りで、指先が踊った。

(……思うようにならねえのは何故だ……！？)

揺らぐ機体。

戒はたまらずに、ペダルを踏み込んで加速をかける。

鈍い音が奥歯で鳴った。

空はとてつもなく広く、高すぎる。

届かないところは、どう足掻こうが届かないのではないか。

不笑人の裸足は着実に翼上を踏み進み、暴風の中をゆっくりと操縦席へと近付いて来る。

だが、戒はこの危機を内心で『しめた』と思う。

自慢の拳を叩きつけられる、またとない好機。

後ろの世羅が、息を吸った。

彼女の源法術も支援してくれるだろう。

だが同時に、彼は自己に苛さいまれた。

なんと未練がましいことか。

自分の足は大地から、既に離れている。

ここで生きる方法を見つけなくてはならない。

不意に、前を往く戦闘騎の軌跡が見えた。
昔見た、リジャンの戦闘騎だった。

あの時、彼は自分と世羅を背負い、どのような心境でいたのだろうか。

ペダルを踏む足の甲を、もう一方の足で更に強く踏み込む。
その更なる急加速に追いつけず、敵機が離れた。

翼に付いていた不笑人は体を煽られて、味方の戦闘騎へ逃げるようにして再び宙を舞った。

全てを振り切って、白い筋を描き、戒の機体は垂直で上空へと消えていく。

一本の軌跡の頂点。
やがて高度は限界へと達した。

機体前部のプロペラを天に向けて、回転する戦闘騎。
身を包んだ青色景色が、白い千切れ雲を巻き込んで、踊った。

(……空つてのは……おかしい場所だよな……)

戒は両手を操縦桿から離し、大きく広げて空に委ねた。
後ろの世羅も、その動きを自然と真似る。

風の音が耳の奥を吹き荒ぶ、鳥も飛ばない高度。
大きく膨らませた肺に入る空気も、極めて薄い。

身体を照らす陽は、今までの何処の陽より何倍も近かった。

(……最も大事な命^{もの}から……手を離さねえと……強くなれねえ気がする……)

斜転。

推力を失った機体がいよいよ落下を始めると、機体の平衡機構が働き、機首は真つ直ぐに下方へと向いた。

急激な気圧の変化に耐え切れず、戒の鼻からは血が噴き、顔から離れた汗は球となって周囲を浮く。

内蔵が浮く感覚を、世羅も必死に堪えている。
かける言葉は出ない。

縮小して霞む瞳孔の中。

先の密集した相手を、集中力が捉える。

射ちこんだ弾丸が、中央の敵機を貫き、更にそこを突貫する戒。
他の敵機は、更に後から到達した空気の衝撃に、煽られて散った。

その爆音に一瞥もくれず、戒は飛行を続けた。

世羅は自分を固定していたベルトを外して立ち上がり、後ろから戒の頬を拭う。

彼はやはり何も答えない代わりに、その小さな手に自らの手を重ね合わせた。

機体は雲に紛れ、静かに南東へと針路を取っていた。

ただでさえ、経験が浅い彼。

僅かな痛みでさえ、それが操縦に及ぼす影響は想像に難くない。

自分が至らないせいで、戒に治癒の能力を使わってしまった。

どこまでも不甲斐ない自分に責任を感じ、フィンドルは肩を震わせた。

「なんで…私なんか…」

今にも消えそうになる、衰弱が著しい声。

「お互いを知った瞬間から……始まる絆があるんだ。」

だが目の前のロディは、肩に手を乗せたまま答えてくれた。

「戒と僕が知り合ったことも同じさ。」

たとえば、僕が志半ばで倒れたとしたら、僕と似た境遇の彼がそれを果たしてくれるかもしれない。

いや……それが叶わなくとも、彼を通じて、それは他の人に伝わるかもしれない。」

励ますように、続ける。

「命と意思は、繋がっている。」

この世界で影響し合わないものなどないよ。

生きている限り。」

その言葉を聞き、フィンデルは顔を覆って首を振った。

誰も傷つかない方法は無いのだろうか。

いつか、自分はそう言った。

あの時も、誰もが呆れるような戯言を、彼は一笑してくれたのを
思い出す。

それ以上何も言わずに、ロディは彼女の後ろ髪を優しく撫でた。

「…そう。」

そのとおり…かもしれない…」

目線の先で、震える声と共に開く扉。

そして、視界に飛び込んでくるモンスロンの姿。

彼はリードに肩を支えられている。

「……その傷は…！」

「いやいや…少しやられちゃいまいましたね。」

自分の容体に息を飲む二人に対して、気丈に笑いかける彼。

扉を挟んで僅かに聴いた会話。

そして憑き物が落ちたような彼女の表情で、彼は瞬時に読み取っていた。

「……フィンデル艦長、恐れてはいけない。

暴君になる可能性は、指揮官の誰もが孕んでいるのです…。

しかし……その葛藤は通過点に過ぎない。」

モンスロンとて、独りで彼女の気持ちへと到達できたわけではない。

諦めることなく、常に彼女の傍らにいてくれたロディがあつて、初めて気付くことが出来たのだ。

「……私には命を賭してまで、戦うという気持ちが解りませんでした。

そして、この世の争いというものが、あれほどまでに悲しいものならば、いつそのこと全てから目を背けて生きたい…。

あの時から、ずっとそう願っていました。」

フィンデルは、視線を僅かに下に向けて呟いた。

「……サーデユス・ルア・アフハ…」

対して発せられる、モンスロンの言葉。

それが、再び彼女の記憶を呼び覚ます。

「…これは…あの蛮族の言葉でね…」

『汝に・未来を・託す』という意味…らしいですよ…」

彼は機を逃さずに言った。

目を見開く彼女。

「…あの時の、あの相手の自決は、一将としての責任の形でしよう。だが、言葉が通じないと知りながら、敵である貴女へと送った言葉は決して恨みのあるものではない。

……彼もまた貴女の強さに平和の夢を見た、その一人だった……そう信じて欲しい。」

傷口を掴んだ手を引き締め、片目を苦痛に閉じながら、彼は渾身の言葉を吐き出した。

「そして、私は……ずっと伝えたかった…このことを…」

当時、そのためにモンスロンが時間を割いて、蛮族の言葉を調べ上げたことは誰も知らない。

だが、その場の全員がそれを察することが出来た。

「今なら……受け止められます。」

彼女は、凜として答える。

「よろしいでしょうか…。」

これから先、私に命をお預けていただいても。」

感を耐え切れないはずなのに、その表情に涙は無い。

「…ええ。」

ルベランセに乗ると決めてから……元より…そのつもり……」

そんな彼女を前に、満足そうな笑みを浮かべたモンスロンの上体は沈む。

脇のリードはさらに足を踏ん張って、彼を支えこんだ。

あの頃に持てなかった覚悟は今、あるだろうか。

心が、自問する。

「総員……」

返答を用意する前に、ベッドから抜けて立ち上がり、壁にかけてあったタイを取って首元にきつく締める彼女。

「改めて戦闘の用意をさせてくれるかしら？」

同時に、素早くリードに下す言葉。

彼は、入れ替わりにモンスロンをベッドに横たえると、無言で敬

礼をして即座に退室した。

「おかえり、フィンドル。」

そして、壁の向こうで呟く。

続けざま、ザナナに手を引かれて廊下を駆けて来るのはシュナ。その手には、薬箱と包帯の束を抱えている。

「誰か、大怪我をしたって……！
ああ……！」

まず重傷のモンスロン、次に起き上がっているフィンドルを交互に見て、素っ頓狂な声を上げる彼女。

「彼の介抱をよろしく。
シュナちゃん。」

ロディは笑いかけながら、フィンドルの手を引いて共に部屋を出ようとする。

「ロディさん……もしかして……！」

「ああ、出撃しよ……！」

シュナの歓喜の声に、意気揚々と手を上げた彼。

「　　だっ、だ、ダメだよ、ロディ殿!!」

だがそこに水を差したのは、突如として室内に乱入し、契約書を全員に突き付けるガツチャだった。

この騒動を聞きつけて、シュナの後を追って来たのである。

「貴方は、我が国と契約してるんだす!

いま参戦すれば、国家の大問題になるのだすよ!!」

「　　……ああ……しまった。

……勢いにまかせて……すっかり忘れていたよ……。

ごめんね……」

彼は一転して情けない顔に戻り、全員に対して頭を下げる。

しかし、それと同時に、千切れた紙片が鳥の羽毛のように部屋中を舞った。

紙を奪われた手をそのままに、放心状態のガツチャ。

「本当に、ごめんね。」

ロディは満面の笑みのまま、立ち尽くす彼の肩を軽く叩いて横切った。

踏み出た廊下。

「国家の雇われ兵士の前に、僕は一人の男みたいだ。」

彼はそこで振り向き、胸に片手を当て、腰を曲げて恭しく一礼をする。

それを傍観していたザナナが、その背後に立ち塞がった。

ごりごりと指を鳴らす彼。

だが、ガツチャのように彼の出撃を咎めるのではない。

沸き上がり始めた戦場の匂いに、鼻息を荒くしている。

毅然と彼等を見据えて、軍帽を被るフィンデル。

かくて、新たな策を告げる、その唇が開かれようとしていた。

味方が全て墮とされてからというものの、神経をすり減らす操縦がずっと続いている。

マルリッパは相手から付かず離れず、銃撃をいなすだけで精一杯だった。

自身の駆るリツアー・ゲルガは、長期戦には向いていない。

火力が他より秀でる代わり、その機動性や速度は並より劣る。

その頼みの銃器類でさえ、ルベランセで十分な補給が得られなかったために既に撃ち尽くしていた。

だが爆薬の詰まった特殊弾を、一発だけは残している。

マルリッパは旋回しながら、首を傾けて眼下の敵艦に狙いを定めた。

いざとなればこの機体こそが、最後の武器となるのだ。

よくよく自機の外表を見れば、撃たれた弾痕の跡が無数に付いている。

自分の操縦服も所々が焦げていた。

それでも、なまじ身体が無事なだけ、決心がつかない。

散開した敵機達が、上空に広がった。

影に覆われた視界。

疲労から、マルリッパの反応が遅れる。

穏やかな表情で目を閉じ、ペダルに足をかけた瞬間、別の機影が上を泳いだ。

敵機達もそれに気を取られ、寸でのところでマルリッパを逃してしまう。

「…バーグさん!？」

マルリッパはその機影に下から並び、思わず暴風ゴーグルを外して叫んだ。

「あんちゃんよ。

今、ひよんなこと考えてたろ。」

バーグは操縦席から、苦笑と共に言った。
同じような苦笑を返す彼。

「…南の敵は…？」

「相手側のトラブルで、陽動するまでも無かった。
理由は分かんぜ。」

彼からの問いを、バーグは隠さずに答える。

「…それで、死に急ぐ若者がいるんじゃないかってな。
心配で戻って来たってわけよ。」

そして冗談を交えた言葉は、マルリッパに勇気を与えてくれた。

「……デスタロッサ隊は、僕を除いて全滅です。」

「……そうか。」

だが、感傷に浸っている暇は……」

「はい。」

作戦は続行しないと……ルベランセのために。」

マルリッパはゴーグルを再び装着し、顎を引いた。
その様子を見て、安堵するバーク。

二人は機上で合図を交わし、前方より再び迫り来る戦闘騎達に向
かって行った。

「北の方角……」

300Mマイトから、戦闘騎、接近!!」

「……何だと。」

どうして今まで気付かなかった!」

旗艦進軍の矢先。

突然に上がった報告に、ファグベールが怒りを露にした。

「こいつは速すぎます！」

距離、100…50…!!」

「く……。」

対空砲火用意……!!

撃ち落と……」

命令が届く前に、頭上を越えて過ぎていく銀の機影。

(…あの戦闘騎……!?)

ファグベールは、それがゴルゴート基地にあった特別な一機ということを知っていた。

「…味方だな？」

そして、特に誰を選ぶこともせずに訊く。

「は、交信に応えております。」

……『北東の谷間にルベランセあり』と。」

奥の念通士より、返される言葉。

「…北東……だと？」

先に現れた5機の戦闘騎の位置と比べ、予想だにしない方向。標的は自分の予想より、遙かにタンダニアへと近付いている。

ともすれば、戦闘騎とは初めから別行動。完全に出し抜かれていたのだ。

「戦闘騎、そのままタンダニア方面へ抜けます！」

「…今さら…何のためにだ!？」

その疑問には、誰からも返事は無かった。

(…このファグベルが仕切る戦場を、遠方から動かすつもりかっ
……あの黒騎士め!！)

手柄を現地の部隊に譲ることは、戦場の作法なので、理解できる。だがこれ以上の勝手な作戦は、全てを任されたと思っていた自分にとって、許容出来ない屈辱であった。

「今の報告のとおり、本艦はただちに北東へ進路を取れ。
至急、各艦にも場所を知らせ! 囲いを狭めるのだ!！」

早口で撒くし立てる老将は、今まさに臍を^{ほぞ}噛むような心地で、怒りの矛先をルベランセに向けようとしていた。

北の陽動を終え、帰還の途に着いていた戒と世羅。

だが、荒地に転がっていた残骸を上空から発見し、低空で迫ってみれば。

そこには不時着したコルツの機体があった。

「……おい……」

傍に着陸し、駆け寄る。

コルツはその接近にすぐに気付いたが、小破して傾いた機体の中で上空を仰いだまま虚ろだった。

「ちょっと見ねえうちに、随分しょっぱくなっちゃったものだな……」

戒は、涙と汗で濡れた、そんな彼の襟元を捻り上げ。

「どうなってんだ……戦況は……！」

絶望を肌を感じつつ、低い声で問い直す。

「……失敗だ。」

部隊はほぼ全滅……。

それに、一機……西に逃した。」

短く答えるコルツ。

「失敗だと……！」

この俺様がここまでしてやったんだぞ、てめえ……！」

「……知るかよ。」

お前がいかに張り切っていたってな……。

どうにもならねえものは、どうにもならねえ。

それが戦場だ。」

「どうにもならねえだと……！」

荒野に、大声が虚しく響く。

「俺様もあいつも、絶対に飛翔艦乗りになるって腹ア決めて、ここまでやってきたんだぞ……！」

意地でもどうにかしろっ……！」

戒の凄まじい剣幕に、戦闘騎で待っている世羅が思わず身を乗り出した。

「無理だつて、言ってるだろ……！」

そこで隠していた片手を出すコルツ。

その手首は深い青紫色に変わり、内出血によって二倍近くに膨れ上がっている。

「……そんなもん……かすり傷じゃねえか。」

戒は特に表情も変えず、言い放った。

「な、なんだと！」

人の痛みも知らねえで……ぐうつ!!」

骨折した患部を掴まれて、悶える彼。
だが、その激痛は一瞬であつた。

「……!？」

不思議と治っている自分の手。

そして、戒の指に光る輪を見て、コルツは驚愕した。

「……本物の……エア・ファンタジスタ……天命人……?」

困惑した顔のまま、口をだらしなく開け広げる。

「……そうか……全部、知ってんだな。」

……それじゃあ、俺の刺青を見て、さぞかし可笑しかっただろ?
滑稽だっただろ?

はっ……ははは……!!」

涙を散らしながら、コルツは慟哭した。

「…黙れ。」

てめえには、これから高い治療費を払ってもらおう。」

だが戒はそんな言葉を無視した拳句、彼を掴み上げたまま荒野を歩く。

そして、その掴んだ身体を、停めていた機体の操縦席に捨てるように放り込むと、自分は世羅に後部座席を詰めるように手で示した。

「な、何で…俺が、お前の戦闘騎に…！！」

すぐに立ち上がり、降りようとするコルツ。だが、戒は彼を一発殴り、それを許さなかった。

「さっき、天命の輪がどうだかって言っただな。…それがどうした。」

加えて、額を付き合わせて凄む。

「今必要なのは、てめえのように上手く戦闘騎を操れる技術だろうが！！」

その一喝は、コルツの全身を硬直させた。

「これ以上、駄々こねやがると、ここでブツ殺すぞ。」

冷淡な瞳で見下ろし、そのまま後部座席へと身を潜らせる戒。

見れば、今度は彼が震える手を隠すようにして。

傍らの世羅は、不安そうな顔でそれを一生懸命にさすっている。

「……おまえ……！？」

その手は……」

「いいから、前を向け。

操縦しろ。」

「……その手は……どうしたっていうんだよ……」

「てめえも一度は、空で生きる覚悟、決めたんだろうが……！」

「……！！！」

粘着した感情を、吹き飛ばす気合だった。

思えば、自分も一部を献策した作戦である。

友のマルリッパも、それを信じたまま、この空域で戦っているのだ。

そしてあるうことが、素人同然の人間に発破をかけられた。

そのことが、さらに叛骨の怒りとして闘争を再び奮い起こさせた。

操縦席のベルトを自分の身長に合わせて、慌てて締める彼。

慣れた動作で各機器を確認し、ペダルを踏む。

そして置き去りにする愛機に、必ず戻ると心の中で告げてから、コルツは初めて後ろに人を乗せて飛び立った。

2

「…遠路はるばる、よくぞ参られた。」

ねぎらいの言葉と共に、大きな人影が揺らいだ。

座の一面に掲げられた薄い紗幕を間に挟んで、あのタンダニス王がいる。

「このように礼を欠いた出迎えを許したまえ。

……『狩り』の汗と土を拭わなくては、落ち着かなくてな。」

さらに奥で揺らぐ、従者の動きと水の音。

「是非ありませんね。」

むしろ…急な訪問にも関わらず、ご拝謁の機会をお与えいただき
…まことに恐悦に存じます。」

マクスは緊張が解けるはずも無く、ただ堅い言葉を並べ連ねてい
た。

「聖騎士ともあろうものが、自ら使者になって来られるとは、些^{いさや}か
驚いておるが。」

「……父上が、戦中にお世話になったと聞き及んでおりますゆえ。」

出立前、自分に同様のことを言ったディボレアルを思い出す。

事実、彼にはそれ以外に自分が派遣された理由が見出せていなか
った。

他に強いて挙げるとするならば、先のルベランセに対する一手と
してだが、いくらあの軍師が
先見の目に秀でているとはいえ、あそこまでの偶然は想像しえない
だろう

「成る程。」

…して、ジエダス卿は如何しておられる？」

「近年では、病の床に伏しております。」

「……そうか。」

旧友がよろしく言っていたことを、お伝え願いたい。」

「父もきつと喜びましょう。」

挨拶も一段落したところで、マクスの背後を通り、紗幕の内に入る者がいた。

「失礼いたします、陛下。」

透き通った声を伴った、若年の美男である。

「いただいた書簡の方は、さきほど拝読……そして、早急に対処させていただいた。

よろしかったかな？」

その彼に耳打ちされた直後に、タンダニスは言った。

「対処…と、言われますと？」

「なに、風が運ぶ噂では、中王都市の騎士団と軍隊は仲を違えていと聞いたものでな。

それがなかなかどうして…絆は固いではないか。」

「？」

マクスは、己の運んできた書簡の内容を知らない。

大団長の書と聞いていたが、中身は恐らくはディボレアルの胸下三寸であろう。

そして今更、使者の自分が『それ』を問うのも甚だ無礼である。このように、もはや彼は書簡の内容を知る機会を失ってしまったが、非常に嫌な予感がした。

「それにしても、あの時の赤子が随分と大きくなったものよ。ジェダスは、まこと良き養父であるな。」

「いえ……いまだ未熟者にて、オルゼリア家の恥にならぬよう、日々精進あるのみです。」

「……家名だと？
聖騎士とはそういうものではなかるう？」

笑いを含んだ声が響いた。

（父と同じことを仰られる……。）

義父であるジェダスが、戦下の反乱軍の陣地で自分を拾った時、若き日のタンダニス王も共にあったという。

ともすれば、このようなある種の所縁^{ゆかり}に、立場も忘れて甘えて見たくもなるのが人間の常であった。

「陛下は……若き日に聖騎士を辞退されたと、かねてより父から聞き及んでおります。」

それは何ゆえでしょうか。」

マクスは、つい素朴な疑問を口にする。

「無論、重たいからよ。」

大陸の秩序、使命など……なんと面倒なことではないか。」

だが、それを臆面も無く返す相手。

「しかし……その後、余も予期しない民を得て、それよりも遥かに重身になってしもつたがな。」

そして続けられる愚痴に、マクスは自然と唇に微笑を携え、気色を良く変えるのであった。

《 絶え対っ！ とめなさい！！ 》

機関室からのミーサの怒号に、パンリは耳に当てていた声通管を思わず管を離す。

《とめなさいよ!!

そんな戦闘騎なんかに乗せたら、あんたも、後でただじゃおかないからね!!》

「で、でも……もう…ああ!!」

思わぬ怒りの煽りを食らったパンリの脇で。

戦闘騎の操縦桿にされている封を親指で破るロディがいる。

「平気さ、これは僕は独断の暴走なんだから。」

《そういう問題じゃない!

そんな機体じゃ、まっとうな操縦が出来ないっての、分かってるでしょうに!》

そんな彼の軽口に反応して、痛そうな金属音が管を伝わって聞こえた。

《ちょっと待ってて!

今から、そっちに行くから!!》

「ごめん。

もう、時間が無いんだ。」

彼は笑って、管を置く。

すると、格納庫は途端に寂となった。

「…生きて帰る自信……あるんですね!？」

不意に、パンリが作業するロデイの手を止める。

「心配してくれて、ありがとう。

大丈夫さ。

…少なくとも僕の任務は、彼より危険じゃない。」

そう言って、背後に立つ豹頭を見上げる彼。

「あのように頼まれたら、断れん。」

対するザナナは、まんざらでもないような口ぶりで虚空を見詰めて返す。

「はは。

乗り気じゃなかったら、降りてもいいんだよ。」

「……。」

その言葉に視線を正面に向け直した彼は、何も答えずに用意された戦闘騎に登り、後部座席に陣取った。

「悪いね、パンリ。

帰ってきたら、一緒に叱られよう。」

ロディは終始笑顔で、外への扉を開けるように手で示す。

二人の悲壮な決意を肌で感じているパンリは、ただ涙ながらにそれに従うのみだった。

フィンデルはブリッジの皆に一度、深く謝罪してから再び艦長席についた。

元来、気質の穏やかなブリッジの連中は、それを責める感情などあるはずも無かったが、その後の彼女の様子には息を飲んだ。

弱った全身に少しでも栄養を送るために、残飯をかき込むフィンデル。

さらに時間を惜しんで、そのまま地図を片手に考えを巡らせる様子は、鬼気迫るものがある。

「タモン！」

突然、名を呼んで、作業を終えた地図を放り投げる彼女。

「は、はい!!！」

彼は受け取ったそれを広げ、確認する。

現在地より、まだ北東。

その河川一帯に、長い横線が引かれていた。

「その線上のどこでもいい。」

ルベランセが南側の崖に身を隠せる所まで行って頂戴。」

「了解……！」

幸い、先の攻撃で艦の駆動系統はやられていない。

タモンが舵の脇のレバーを引くと、飛翔艦はブリッジ内を軋ませながら再び動き出した。

「メイ、主砲発射用意。」

リードは彼女の代わりに、艦体制御に全力を。」

小気味よい彼女の命令に、念通士の二人も素早く従ってくれる。

このルベランセは被害を受けながらも、まだ生きていて。

それも、壊滅した軍の中でただ一隻

尋常でない『運』がある。

久方ぶりに、ブリッジから迷いが消えた瞬間だった。

遂に出撃を果たした空。

遠ざかっていた操縦の勘が戻るまでは、もう暫くかかるだろうか。

ロデイがそのように思っていると、背後の下方から加速してくる機体があった。

「おや……」

それを見た彼は緊張させていた表情を一転、思い切り緩める。

飛んできた戦闘騎は、操縦席にコルツ。
後部座席には戒と世羅の姿。

ロデイはその目に映る状況をもって、彼等も色々と苦戦したのだ
ろうと察したが、同時に健勝だと感じた。
それはとても喜ばしいことだった。

「ルベランセは無事なのかっ!？」

まず訊いたのは、コルツである。

彼は、逃した銀の戦闘騎をいまだに気にかけていた。

「ああ。この北の谷間に潜みつつ、東へ進んでいる。一度、襲撃は受けたけど、その後は何も無い。だから、余計に…大きな波が来るかもしれないね。」

「それって、もしかして…あれじゃねえか。」

戒が呟きながら、指で示す。

南の空から迫り来る、漆黒の飛翔艦。

今まで見てきたどの戦艦よりも、禍々（まがまが）しく見えるのは、決して気のせいではないだろう。

「……陽動しきれてないってことは…！！
やっぱり、あの戦闘機がルベランセの居場所を知らせたに違いねえ。」

くそっ！！」

コルツが叫んだ。

「ブリッジには、フィンデルが戻ってるんだよね？」

思ったよりも冷静に戒が訊いてきた。

ロディは、静かに頷く。

「……じゃあ、平気だよな。」

笑顔で呼応する世羅。

「何が平気なんだよ！」

『万事急す』とは、このことだろうが！！」

コルツは相変わらぬ調子で喚いた。

だが後ろの二人からは、驚くくらい、何の緊張も感じない。

「…弱虫だけどな、あいつは、やる時はやるんだよ。」

「うん。」

額の鈍痛を押さえ、口を尖らせて答える戒。
それに彼女も頷いて、賛同する。

「……………」

コルツは、もはや口を真一文字に結んだ。

後ろの二人の思考は、自分の理解を超えていた。

悪く言えば、あまりにも他人を信用しすぎている。

常に戦場で神経を尖らせ、たとえ仲間と呼ばれるものが傍らに
ようと己が道を行くのみだった彼は、
違和感を覚えずにはいられなかった。

その時、脇を飛ぶロディの戦闘騎のエンジンが大きな煤^{すす}を吹き、一瞬だけ機体が落ちこんだ。

「……大丈夫かよ！
あんたのそれ……」

「ああ、五分もあれば慣れるさ。」

コルツの心配に対し、ことも無さげに答えるロディ。

「……策を教える。」

あいつが何も考え無しに、そんなオンボロを出撃させるわけねえ。

「……………」

だが、戒の問い凄んだ問いに、彼は黙り込む。

「大丈夫だ。」

戒達には、関係ない。」

その後に座ったザナナが、代わりに呟いた。

「ザナナ……！」

そこへ大声を発したのは、世羅だった。

彼女は同時に、機体から大きく身を乗り出したので、皆もぎよつとする。

「関係ないって……そんなことない!!」

その気迫に圧され、瞳を逸らすザナナ。

「今まで一緒に戦ってきたのに……ひどいよ!!」

「……わかった。

……戻れ、危ないから……」

やがて、ぼつぼつと豹頭が声を洩らす。

見たことも無い彼のそんな様子に、戒は思わず歯を見せる。

「まったく、敵わないね。」

肩をすくめたロディは、互いに話しやすい距離まで、さらに機体を近付けた。

と、数分もかけずに、小さな会議が空中でとり行われる。

「バカか……!」

死ぬ気か、おまえら!!」

聞いた作戦の概要。

それに加え、戒達が機上で話し合った末の結論に、コルツが口を挟んだ。

その途端、彼の後頭部に固いブーツが命中する。

「うろたえるな。」

何も、死に行くわけじゃねえ。

……俺様はな、他人のために犠牲になるなんてまっぴらなんだ。」

「？」

背中を蹴られたままの姿勢で、呆氣に取られるコルツ。

振り返れば、戒と世羅の二人は、お互いの額を寄せ合って、狭い座席の中で何やら細かい作業をしていた。

「……いつものことだもんね……」

「ん？」

笑いながら囁く世羅に、返す戒。

「……こういふことするの。」

「嬉しそうに言っくんじゃねえ。」

彼女の頭に握った拳を乗せる。

そうしながら、戒はさらに自分の胸倉をまさぐった。

「……知らねえからな、俺は。
こんな作戦、訓練も無しにうまくいくはずがねえんだ。」

コルツが言葉を吐き捨てる。

「……いや。」

案外、行けるかもね。」

脇を飛ぶロディが言った。

「空戦において、『死中に活』以上の処方はない。
なかなかどうして、二人はよく心得てるじゃないか。」

「……。」

後ろのザナナは、彼の言葉を黙って聞いている。

「何も無い代わりに、何でも出来る可能性があるってことさ。
空ではね。」

「わからんな。
だが……」

豹頭は呟き。

「全力を尽くすことは、いい。
それだけは、わかる。」

背にした槍を握りしめた。

迫る飛翔艦を前に、二機は同時に旋回する。

間合いを計るように大きく。

そして、あるポイントに達すると、その頭頂部めがけて一気に接近した。

「前方に敵機確認。

その数、2機。

目視可能範囲に入ります……」

判断を仰ぐ、念通士。

ファグベールは直立したまま、窓外に泳ぐ戦闘騎を確認する。

「我方の戦闘騎は？」

「…まだ戻りません。」

現れた5機の戦闘騎に、先行して仕向けたためだった。
すぐにあれが陽動と気付いてさえいれば、とファグベールは悔し

がる。

「たかが二機。

このセンドルホーンの対空性能と装甲ならば、さほど気にする必要は無い。

弾幕で散らしておけ。」

迷わずに命を下す彼。

だが対空放射をもとめせず、弾と弾の間を縫うようにして、相手の二機は艦の頂部であるブリッジまで達した。

黒華の騎士達は、その操縦の美技に恐れおののき、窓の外を縦断する彼等をただひたすらに目で追っていた。

（なんだ……この音……？）

ファグベールの耳が、風を裂く高音を感じ取る。

その音が最高潮に達した時、正面から碎けた窓。

赤い透明の膜を前面に張った青年。

その背にかじりついた少女と共に、転がってくる。

続けて、その横の窓から、全身を縮めて突入してくる豹頭の蛮族。こちらは、生身のまま。

「……………!?!」

まなしり
眦を決して驚愕する、ブリッジの面々。

砕けたガラスの破片が、舞った着物の裾に巻き取られて吹き飛ぶ。

（犬族にできて、ザナナに出来ぬことなど　　）

そして鋭く左右に伸びて散り踊る、ザナナの後ろ手にした白槍。
彼はフィンドルの頼みを思い起こしながら、ブリッジの両脇に備えられた念通版を一気に屠^{ほふ}る。

続けて両腕を頭上に上げ、槍を大回転させて咆哮すると、念通士達は途端に縮み上がった。

驚く彼等に畳みかけるよう、突如、黄色い粒子が空気中に発生して浮く。

「《源・衝^{フェルト・ド}》!!」

全身の毛がよだつ、あまりにも大きな圧力と光。

「　　ッ!!」

今度は中央のファグベールも筆頭に。
全搭乗員が大きく目を見開き、体を大きく仰け反らす。

わずかな時を経て、天井から多くの埃が落ちた。
背後から吹き込む風。

振り向けば、そこには大穴と外の景色が広がっている。

そして、視線を前に戻すと、少女は細腕を前にしたまま自分達に
向けていた。

歴戦の将もこれには、ただ啞然とするしかない。

「……どうした……？」

鳩が、豆鉄砲食らったような顔してよ……」

それまで床に四肢を付け、衝撃の痛みに悶えていたが、髪型を両
手で直しながら立ち上がる戒。

そして、手にしていた赤い十字架を胸元にしまい、全員を見回し
て言う。

「……元は、てめーらが先に使った作戦じゃねえか。
あ？」

憎々しい口調だった。

「……小僧……!!」

憤怒の唸りを顔中の血管に踊らせて、ファグベールが一步踏み出

す。

対する戒は、その必死な様子を嘲^{あざけ}るように。

「慌てるな、じじい!!」

哄笑を浮かべながら、片手を広げて前にかざした。

「...?」

腰に下げた剣の柄に手をかけたまま、動きを止める老将。

「この俺様が、何の準備も無く、てめえらの猿真似をすると思うか？
とくと、見る。」

そう言い放った彼の全身を、ファグベールは初めて眼^{まなこ}を凝らして見た。

青年の腰元に巻かれて垂れ下がっている、一本の綱。
見れば、脇の少女も同様である。

「...いかん!! 逃すな」

唾を散らして叫んだ刹那、綱に引かれて、ブリッジ内の床を擦りながら外へと引きずられる二人。

その身体に繋がれた長い綱の先は、ずっと上空を飛ぶ戦闘騎へ伸

びている。

彼等は突入した窓からそのまま飛び出し、その後を追って豹頭も跳ぶ。

「つかんで!!」

彼に向かって手を伸ばす世羅。

ザナナはそれを強く握り締め、もう一方の手を蛇のように撓めく網へ絡ませて固定した。

それらを上から確認したコルツは、上昇を止め、まんまと敵艦の死角へと逃れていった。

ごくわずかな後、歓喜の雄叫びが戦場に小さく鳴り響いた。

一方。

黒華の者達は、空に消えた三人を見上げた姿勢で、暫し呆然とたたまだった。

「……被害は…?」

まずは怒りを頭の端に追いやり、極力冷静に努めて声を振り絞る

ファグベール。

「ブリッジからの砲身操作、索敵が不能!!
加えて……!」

そして、背後の風穴を見詰める念通士の一人。

「……おそらく、長くは飛べません!」

「まだまだだ!!」

一喝。

ファグベールは、さらなる指示を下す。

「いまだに姿が見えんということは、ルベランセは崖下に潜んでお
る!

ならば上昇し、こちらから発見して先手で撃つ!!

主砲は手動で用意!!」

逆境の鼓舞は慣れていた。

老練な彼の言葉に、ここまで従っていた黒華の者達も良く応え、
威勢を持ち直す。

「手動だ!

手動で動かせ!!」

声通管に向かって叫ぶ、念通士。

その意気を見て、ファグベールは満足そうに前を向いた。

逃がした戒達には一瞥もくれず、ただ進む飛翔艦。

高い岩台も草木も一片も無い、平たい荒野を抜け。

その先に大地を横に裂いた崖へと差し掛かる。

（ここだ…この崖下……！

もはや、隠れるべき場所は、このあたりしか無い……！！）

ファグベールがそう確信した時。

突然、眼下の地表に穴が開き、土がはじけ飛んだ。

斜めに射出された砲弾は、旗艦センデルホーンの下腹を直撃する。

「！？」

弾道から見て、崖下から貫通した一撃に相違なかった。

（…な……………？）

死角である時、念通術の索敵のみを当てにした砲撃は現実的でない。

闇雲に大砲を撃つことで、自分がいる位置を相手に知らせること

は下策。

それが、空戦の定石である。セオリー

ゆえに飛翔艦同士の戦闘は、互いに目視してからが勝負というのが常だった。

（…なぜ……こちらの位置が……知れている？）

茫然とした視界に、陽の光と、天空の青を反射した河川が入り込んでくる。

その水の表面に映るのは、自艦の先端部。

（…しまった…！

河を…鏡に…！！）

傾く艦体。

それを前に、ついにルベランセが崖下から姿を現す。

ただし、それ以上の攻撃は無く、加速するのが見えた。出鼻を挫いたにもかかわらず、逃げの一本槍である。

ルベランセもまた限界であり、正面切って挑むほどの余力は無い。老将には、大いに伝わるものがあった。

しかし、ここで敵の眼前を突っ切ってまで逃げるのは、明らかに失策。

「…こちらの主砲どうした！
横っ腹に当ててやれ！！」

ファグベールは経験から、自然と右手を振りかざしていた。

飛翔艦最下部。

使命を帯びた砲手が、ある一画に駆け込み、傍の柱に剥き出しになった歯車にL字のクランクを入れて回す。

彼を乗せたまま砲台が旋回し、照準と向きがルベランセに合った。

続けて、数人がかりで、砲身に巨大な砲弾を込める兵士達。
十分な訓練も無く、ぎこちない動きだった。

「早くどけっ！！」

作業をようやく終えた彼等に、砲手が上から怒鳴る。
同時に解除される安全装置。

今まさに横腹を見せつけて東へ進行しているルベランセが、完全に射線に入る。
躊躇は許されない。

「 発射！！ 」

合図と共に両手で、引き金となる固い装置を思い切り引く彼。

巨大なバネと撃鉄が唸り、雷管の爆裂音を響かせて、轟弾は射出された。

だが硝薬の匂いも嗅がないうち、砲手達は目を疑った。

馬の曲乗りは話に聞こえど、戦闘騎の曲乗りなど、夢にも見たことがない。

川を流れる木の葉のように、すい、と視界の脇から流れ出た男。

彼は操縦桿に片足首をかけたまま逆向きにぶら下がり、構えた黄金の拳銃を自分へと真っ直ぐ向けている。

（…この『報復の策』の締めは、僕だ。

プレゼントは倍返しつてのが…常識でしょ
）

弾を放つ、ロディの微笑。

砲身に吸い込まれる赤い一線が、まだその内部を駆けている弾頭に触れ、乾いた音を響かせた。

二発の轟音。
そして振動。

初めの方は、明らかに自砲が発射された時に発生した『それ』と分かる。

だが、それに重なるようにして続けざまに聞こえた音。
それは初弾より遥かに大きく、衝撃も大きい。

艦体が、今まさに真横に向かって傾いていく。

「……………!？」

目の前を行くルベランセが無傷であることを目の当たりにしながら、
ファグベールは思考を完全に止めていた。

ブリッジ内の適当な突起に指をかけ、大きな巨体が転がらないよう支えるだけで精一杯である。

「総大将！

脱出を……………!!」

「……………脱出…だと？」

脇の騎士の当然の進言に、老将は繰り返して、口を歪ませた。

「追撃は、味方に任せましょう！」

また別の者が北西の空を指差す。

「おお……」

それを見て、歓喜の言を洩らすファグベール。

それらは北部で陽動されていた、味方の飛翔艦。
先の報せに応え、ルベランセを捕縛せんと、敢然たる勢いでこの
空域まで戻ってきたのである。

「あ、あれを……」

しかし、別の誰かが声を上げた。
東の空から迫り来る、一団。

それは、飛翔艦とおびただしい数の戦闘騎であった。

「うう……伏兵か……」

リードが唸る。

フィンドルも前傾して、前方の一団に臨んだ。

脇では広がりきった花卉に成り果てている敵艦の主砲。

今、この戦場を支配しているのは自分であり、モンスロンの前策である。

相手に、この上を行く策は無い。

彼女はそう信じて疑っていなかった。

正面から悠然と押し寄せてくる一団。

目を凝らし、やがてその先端の艦に掲げられた紅の旗を確認するフィンドル。

「……あれは…タンダニアの艦隊…。」

そして彼女は呟き、全身の力を抜いて艦長席に沈んだ。

「…タンダニア紅甲騎士団だと…！」

拳を床に打ち付けるファグベール。

「もはや、これまで。
ただちに、全軍撤退を各艦に通達せよ。」

ここで中王騎士団の姿を晒すわけにはいかない。
彼の命令で、念通士達が無言で作業に入る中。

「何をされるのです！」

腰から抜いた剣の刃を、己の首に付きつけるファグベールに、傍にいた者達が群がる。

「離さんか！ この度の失敗は我が血で拭う！！」

「只今、脱出用の戦闘騎を用意させております！」

「生きて、これ以上の恥をさらせと言うのか！？」

「小団長の御命は、恥で捨てられるほど軽くありません。」

ファグベールの気骨が染^{うつ}つたのであろうか。

僅かな錬兵の時間だったにも関わらず、黒華の騎士達の顔は見違えていた。

今では本来の部下である赤華のそれと、何ら遜色が無い。

「諸君等は……」

「我々は、もはや逃げられぬこの旗艦を川底に沈めるという任務が。」

逃げようともせず、口々に言う。

「…この首が、一兵卒のものであれば!!」

彼等の言葉を聞き容れた老将は、己の頭を血が出るまで何べんも殴りつけ。

両脇を抱えられて脱出する最中もずっと、目の前の艦隊に埋もれていくルベランセに向かって慟哭していたという。

3

レイザンピーク自治街。

そこは不毛の荒野に囲まれながらも、タンダニアと西方諸国を結

ぶ玄関口として、交易で栄えていた。

だが街そのものの防衛力は皆無であり、外からの様々な脅威に対しては、国境付近に駐屯しているタンダニアの騎士団に完全に依存している。

そのタンダニア本土から街の中心を貫き、西へと伸びている赤黒い道は、特に『サ・ラーク血道』と呼ばれていた。
アルドの叛乱直後、凶獣の跋扈する未開の土地を、タンダニス王らが切り拓いた道である。

中王都市の面々は、自らの目でそれらを見留めた時、ようやく心から安堵することが出来た。

まずはじめ、ルベランセと戒達の戦闘騎が、タンダニア紅甲騎士団にそのまま保護される形となり、この街へと強制的に駐留させられた。

戦場に取り残されたままになっていたバークとマルリツパは、非常な苦戦を強いられていたものの、相手側の急な撤退により一命を取りとめ、末にルベランセとの合流を果たしたのである。

そして疲れ果てた彼等は、喜びを分かち合う余裕も無く。
瞬く間に夜を眠り明かしてしまった。

だが、そんな僅かな休息にもかかわらず、次の日の早朝から出立を企てたのはコルツとマルリッパであった。

彼等の部隊で唯一残った機体、リッツァー・ゲルガを適当に修繕した後、早速乗り込む二人。

「何も、そんなに焦らなくてもいいじゃないか。」

操縦役のマルリッパは、出発の寸前まで愚痴をこぼしていた。

「こうしている間も、俺の機体が荒野で空っ風にさらされているんだぞ。」

修理道具に埋もれるようにして、後部座席から顔を出すコルツ。

「…それに……仲間の墓も作ってやらねえとな……」

「え？」

予想だにしない彼の言葉に、マルリッパは思わず聞き返した。

「いいから、早く行くぞ。」

表情に複雑な照れを浮かべつつ、コルツはベルトを締める。

「…じゃあ……」

そういうわけですので、僕達は機体を回収してから、そのまま中王都市に帰ります。

簡単な報告は、こっちでやっておきますから。

艦長さんや他の皆さんにも、よろしく伝えてください。」

「おう。」

くれぐれも気をつけてな。」

ちょうどその傍で座り込み、朝日を浴びていたバーグが、そんな二人の見送り役となった。

「なにか…忘れ物？」

だが離陸の間際まで、注意深く周囲を見回しているコルツに、マルリツパが訊く。

辺りにはまだ、他の人間の姿は無い。

「いや……出してくれ。」

気のせいではない。

やはり彼の物腰は柔らかくなっていた。

戦いとは別に、何かの成長を遂げたのかもしれない。

そんなことを嬉しく思いながら、マルリツパがゴーグルを装着する。

煙草をふかしながら、それに手を振るバーク。

彼は戦闘騎が消えていく空を見上げたまま寝そべり、それからずっと、何も無い遠くの地平線を眺めていた。

「まずは、陛下にお目通りを願いたい。」

「……まさか。」

「………タンダニス王に？」

一方。

タンダニア側の使者から掛けられた一言に、度肝を抜かれるフィンドル。

ルベランセが駐留したすぐ脇に帷幕が設けられ、艦の代表者として彼女はそこへと招かれていた。

薄暗い幕中で待っていた人物。

それは国境警備の兵士かと思いきや、意外にも女性で、しかも彼女は『タンダニア親衛隊長』のリアネと名乗った。

だが、物々しい役職とは裏腹に彼女の外見は可憐な乙女であり。

装飾を結んだ、亜麻色のショートヘアー。

そして白い肌は、およそ戦場に似つかわしくない。

上半身は重厚な真紅の鎧。

だが、下は純白のフレアスカートという麗しさで、腿の部分からは、完全に素足をさらしている。

そんなアンバランスな彼女のいでたちに、フィンドルは若干、気後れした。

「…なにか？」

そんな彼女の目線に対して不思議そうに訊ねる、当のアリアネ。

「あ……いえ！」

ところで、何故、タンダニス王に直接？」

フィンドルは慌てて返した。

「実は、要人の亡命が行われるとは聞いておりませんでした。それゆえ、私だけでは判断を下せないと思ひまして。」

「……………」

「無論、こちらが中王都市の軍艦であるということは疑う余地がありません。」

ただ、その件に限りましては、我が主に直接判断をいただいた方が話が早い、と。」

「しかし……直接会うとなると、あまりにも時間がかかりすぎるのでは……」

「いいえ。陛下は現在、国境付近の宮殿におわします。馬車を用いて、半日もかかりません。」

「……そこまで気を遣っていただけるのなら、行かないわけには参りませんね……」

フィンドルは恐縮して、両膝を握りながら下を向いた。だが、すぐにその表情を曇らせる。

「……しかし、わずかの間といえ、ここは安全でしょうか。今の我々では、満足な警備も用意出来ませんし……」

「貴艦の安全は、心配に及びません。」

帷幕の入り口に立つ衛兵に合図をする彼女。するとすぐに、一人の青年が呼ばれて幕内に入ることとなった。

「彼はアイザックの傭兵団の者です。ちようど、この地に滞在しておりましたので、彼等に貴艦の警護を依頼しようと思っております。」

それは大陸で最も有能とされ、国家間におけるしがらみが少なく、極めて中立的な傭兵団である。

このようなものを用意されれば、意見のしようが無かった。

「…モンスロン卿の待遇はどうなりますか？」

怪我を負っていますので、あの方だけは早急に十分な治療を受けさせたいのですが…」

「まずはこの街の郊外、陛下の親戚にあたるディオール伯のお屋敷に。」

あそこなら警備も厳重で、療養も可能です。」

さらに続けられる、信頼できる名。

ようやく、フィンドルは胸を撫で下ろすことが出来た。

そこで話が一段落したのを見計らい、先程呼ばれた青年が何かを言おうと口を開きかける。

「…艦長殿の了承が得れた。」

君達と契約しよう。」

それを察したアリアネの一言に、青年は微笑み、歩み寄った。

「よろしくお願いいたします。」

「こちらこそ。」

軽く握手を交わす、彼とフィンドルの両者。

そこから青年は、加えて深く礼をしてから椅子に腰かけた。張った背筋と真っ直ぐに向いた顔からは、清廉さと潔癖な印象を受ける。

「彼は若輩ながら一団を任されております、ミラ＝ホ口殿。こちらはルベランセの艦長……」

「おい、フィンドル。」

アリアネによる、互いの紹介の最中。そこで衛兵を押しつけ、幕を乱暴に上げて、ずかずかと場に乱入して来たのは戒だった。

「これから、どうすんだ。」

「ええ、今その段取りを取っていたのよ……」

「彼は？」

すぐに、アリアネは彼に目をつけて訊いた。ルベランセの中で最も厄介な人物への視線に、フィンドルは返答に困り果てる。

「…彼はクレインの修道士です。
ちよつとした事情で…この艦に…」

「それは素晴らしい。
陛下への謁見の際は、ぜひ彼にも出席を。」

「え!？」

フィンデルは思わず声を上げた。

「何も驚かれることは無いでしょう。
クレインの修道士が乗っているというのなら、さらに信用が増す
ことと思いますが。」

「そ…それは余計に……こじれる…気が…しないで…」

ももごと口の中で言葉を呟くフィンデル。
だが、もはや『その気』になっているアリアネの圧力に勝つこと
は容易ではなかった。

「さつきから聞いてりゃ、何を偉そうに勝手に決めてやがる、この
小娘…」

そして予想どおり、彼女に向かって噛み付こうとする戒。

「そ、それでは、必ず二人で一緒に参りますので!…」

フィンドルは慌てて、彼の口を押さえ込んで叫んだ。

「……では、失礼いたします。」

そちらの準備が出来次第、声をおかけ下さい。」

アリアネは満足そうに立ち上がり、去っていく。

「……。」

残されたフィンドルは、脇の戒からただならぬ殺気を感じていた。

強引に話を進めすぎたかもしれない。

だが、本国から離れた地で孤立しているルベランセの状況を思えば、個人の意思などは二の次である。

そうしているうち、先のアリアネと入れ替わるようにして、戒の後をつけて来た世羅が帷幕を覗いた。

その彼女の姿を一目見て。

それまで黙って席についていたアイザックの青年が、急に椅子を飛ばして立ち上がる。

「君は神呪の子……！？」

「？」

きょんとしたまま、彼を凝視する世羅。
戒とフィンドルもまた同様であった。

「俺だよ、憶えていないか？」

早口で首から下げたメダルを取り出し、それを見せる青年。

「え……。」

隊長……？」

そこでようやく、世羅も思い出したようだった。

戒もすぐに、鮮明な記憶に思いを馳せる。

世羅と初めて出会ったレバーナの港街。
その周辺にある森林地帯での出来事だった。

大雨で結界が崩れ、凶獣があふれ出た時。
それを退治したのも彼等、アイザックの傭兵団。

当時の世羅は、それに所属していたのである。

「この広い大陸で、何という偶然だ……！
ああ、神様……！」

声を高調させる青年。

戒は彼の人相までは深く記憶していなかったが、その口ぶりから何となく二人の関係を知った。

「実は、私達は旧知の仲なのです。

ちよつと、彼女をお借りしてもよろしいでしょうか。」

さらに顔を上気させて、息も荒く申し出る青年。

「…彼女は軍人ではありませんので…私の了承はいらないですよ。」

その勢いに、フィンドルが苦笑しながら答える。

「ちよつと話がしたい。

いいかな？」

「…うん。」

途端、世羅の手を強引に取る青年。

彼女も深慮せずに、まるで近所の庭にでも遊びに行くように無防備に同意してしまっている。

戒はその様子に何か引つかかっていたが、すぐに思い出したようにフィンドルに向き直った。

「ところで、おまえ。

…あの最後の作戦だけだよ…」

そう切り出した彼に、すぐに顔を引き締める彼女。

「ザナナの奴に……あんな危険な役目を回しやがって。」

両のポケットに手を入れたまま、戒は睨んだ。

対するフィンデルは、何かを言おうと口をわずかに開く。

「今回は偶然、俺様が駆けつけてやったから良かったようなものを……」

だが彼は構わず、一人で続けた。

「とにかく、お前が初めからしっかり指揮を執れていれば、楽勝だったんだ。」

今度からは気をつける。 分かったな？」

そして指を突きつけ、一通りの言葉を吐き出し終わると、すぐに踵を返して背を向ける。

「あの……それだけ？」

「もっと、文句を言って欲しいのか？」

再び睨みつける彼に対し、彼女は大きく首を横に振った。

きつい一撃を覚悟していたフィンデルは安心したが、そこで重要なことを思い出して立ち上がる。

「…あの、戒くん。」

幕が出る直前にかけられた言葉に、また足を一旦止め、彼は彼女の方へゆっくりと向いた。

「ありがとう。」

私の頭の傷を治してくれたのよね。」

「なにを今さら言ってたんだ…。」

お前あつてのルベランセだろ。」

彼は呆れた顔で言い残し、間もなく去っていく。

「…かなわないわね……。」

椅子に再び座り直し、ようやく休息につくフィンデル。

慣れない他国との交渉などは、疲労した体に堪えるものだった。

そしてことさら、時間の感覚。

タンダニア艦隊に保護されるまでは、その一秒一秒が恐ろしく長く感じたものだが、今では急な坂道を転げ落ちるように間が無いものに感じる。

フィンドルは卓に肘をついて焦燥を鎮め、その指先を額の前で交わした。

別れの時は、刻一刻と近付いている。

到着後に多忙を極めたのは艦長だけでない。

ブリッジ破損の処置にあたる、リードをはじめとした仕官達。

それ以外の人員も、ただ休息を続けるわけにはいかなかった。

ガツチャの帰還するブト公国の一団が、このわずか北方、民間の発着場で既に待機しているという報せが届いたのである。

彼等への協力は本来の目的の副儀的なものだが、無闇に邪険にするわけもいかず、ルベランセの格納庫は
にわかに忙しくなっていた。

「えっと、あの……確か契約の方、破棄してしまったんですよね……？」

戦闘騎の部品を両手に抱えたまま、パンリが素朴な疑問を投げかける。

「あはは、それがねえ……」

笑顔で一枚の真新しい紙を取り出すロディ。

「今回の僕の働きで、より一層、雇いたくなっただって。前回の三倍の値段で再契約さ。」

そして、離れた所で輸送用の装甲馬車の手配を仕切っているガツチヤを見ながら言った。

これで当初の予定どおり、数時間後には彼も、中王都市軍から買入れた戦闘騎と共に旅路に出ることとなるだろう。

「……最初から狙ってたんですか？」

「さあて、どうだか……。」

彼は含みをもたせた笑みと共に、肩をすくめて言った。

「あのガツチャって人、随分いい加減じゃない？ あんなに契約とか規則とか、うるさかったくせに。」

そこへ、パンリと同様に作業を手伝っていたシュナが声をかける。

「仕方ないでしょ。」

あれだけの働きを見せられちゃあ。」

後ろから口を挟むミーサ。

「あんたは錆だらけの包丁や、穴の空いた鍋でまともな料理作れる？
ロディがやったのは、そういうことよ。」

「ふーん……」

「この機を逃したら、あれだけの操縦士とは、二度と出会えないでしょうね。」

彼女の言葉に、シュナは小刻みに首を頷かせながら黙った。

「お褒めいただき、恐縮です。」

いつの間にか二人の背後に回り、歯を見せて笑いながら、双方の尻に向かって手を伸ばすロディ。

だが、その両手はスパナと鉄拳によって阻止されることとなる。

「ただ……この性格さえ許せば、ね……。」

そして身を屈めて悶絶する彼を見下ろしながら、二人は同時に呟いた。

ルベランセの停留は、商業広場の片隅を使わせてもらっていた。

そこは主に交易の荷降ろしに使用する区画であり、そのためか、裏手には不要になった空の木箱などが無造作に山積みになっている。

その内の一つに世羅は腰掛けて、彼は背をもたれていた。

「えっと……隊長……」

「名前で呼んでくれよ。」

「ミラでいい。」

「ミラ……」

世羅は言うとおりに呟く。

照れや儀礼を抜きにして、その名前を本当に忘れていただけなのだが、青年はまるで気付いていない。

「俺があげたメダル、大事にしてくれているか？」

アイザックには、世界的な信用がある。

あれは色々な局面で使えただろ？」

「ん……」

頷いた世羅は、自分の全身をまさぐって探した。

「えっとね……どこ……かな……」

だが直後、誤魔化して笑う彼女。

(……おいおい……)

失くしたのかよ……)

戒が帷幕から出た後。

二人の様子を偶然に発見した彼は、高く積まれた貨物箱の裏に身を隠し、その様子をうかがっていた。

だが、終始とぼけた態度の世羅に、思わず顔を片手で覆う。

悪気は無いとはいえ、相手に見てみればショックであろう。

「実は……君に話したいことがあるんだ。」

しかし意外にも、彼はそれを全くものともせず、明るい表情のまま世羅と向き合っていた。

「ボクに？」

彼女は訊いた。

一旦間を置き、喉を鳴らす彼。

「良かったら、また一緒に……旅をしないか？」

「？」

「君が飛翔艦乗りになりたいってことは、前に聞いた。だから、その…」

「……俺が、飛翔艦乗りにしてやる。」

さらに、ミラは言い切る。

彼の急な申し出に、世羅はしばらく呆然としていた。

勿論、それを隠れて監視していた戒も、顎が外れるくらいに大口を開けている。

「突然なことで、すまない。

だが、どうしても伝えたくて。」

その顔は大真面目だった。

「別れてから気付くもんだよな、こういう感情は。

わずかな間の一緒の旅だったけど……何ていうか……忘れられなくて。」

俺は、今までアイザックで剣士として身を立ててきたけど……それを全部捨ててもいいと思っている。」

「……ボクを……飛翔艦乗りにしてくれるの？」

「ああ。

男に二言は無い。」

「…それで……ミラはどつするの？」

「ん？」

思いがけない質問に、彼は目を丸くした。

「そうだな……俺は、一介の剣士であれば、それでいい。」

「……………」

世羅はふと視線を落とし、両膝を抱えた。

「あ、いや……そんなに重く考えないでくれよ。」

嫌だったら、断ってくれ。

まだ時間もあるだろうし……ゆっくりと考えて、答えを出してくれればいいんだ。」

「とんでもない所に出くわしちゃったな……」

「うおっ！？」

急に後ろから湧いて出てきたバーグに驚き、飛び退く戒。

「なに驚いてんだ。」

同様に身を屈めながら、バーグは近寄る。

「ヒゲ……！」

何で、お前がここにいるんだ。」

戒は姿勢を戻して、不満そうに小声を洩らした。

「煙草を吸おうと思ってな。

火薬のある作業場だと、色々とつるせえからよ。
それより……」

不意に、バーグは前に出た。

「……こいつは、けしからんよなあ。」

その背には、いつもの大剣が装備されている。

「…戒。

お前がボヤボヤしているから、ああいう悪い虫が寄ってくるんだぞ。

……どれ…代わりに、おじさんがいっちょ『ヤキ』でも入れてやる。」

「お、おい……！」

泡を食って、身を乗り出す戒。
バグは片手で背の大剣の柄を取りながら、二人に近付いていくのである。

（あのバカ……！

何をするつもりだ……？）

戒は仕方なく体を戻して、再び状況を見守ることにした。

「……バグ……。」

やがて、ゆらゆらと近付いて来る彼に気付き、呟く世羅。

「お前さん、アイザックなんだって？」

片方の眉と口角の端を上げて、詰問する彼。

対するミラは、その態度に何かを汲み取ったらしい。
その穏やかな目つきを、途端に陰しく変えた。

「護衛のことは、さっき艦長から話は聞いたぜ。
だが悪いが、腕を試させてもらえないか。」

「……失礼。」

依頼主からは、もう了承は得ているので。」

「ここを任せられるほど、強いのかって聞いているんだよ。」

バーグの強い言葉に、ミラは姿勢を正す。

「俺も元傭兵でね。
つまり……」

「要は、強さの証明が出来れば、よろしいということでしょうか。」

「流石は、隊長さん。
話が分かるじゃねえか。」

互いに剣を抜く二人。

「喧嘩……するの?」

世羅の問いに、バーグはミラを睨んだまま。

「いいや、これは剣術の稽古のようなもんだ。」

笑って答える。

それを聞いて、世羅も興味半分で二人の様子を見守る姿勢をとった。

「……ヒゲの野郎、単に自分が暴れただけじゃねえのか。」

身を隠す箱にかじりつきながら、戒は半眼で感想を呟く。

しかし二人とも紛れも無く真剣を抜いていて、否が応でも周辺の緊張は高まっていた。

（いつそのこと、相討ちして死ね。

アホ共……）

ふとした考えが過ぎると同時。

金属をかち合わせる音が鳴り響いた。

視線を戻すと、バークの振り下ろした一撃は、青年が頭上に構えた剣に落ちている。

「……ヤバくなったら、寸止めしてやるよ。」

そのままぎりぎりと、自分の得物を相手の刃に噛み合わせたまま力を込めて、肘を震わせる彼。

「なるほど。」

真剣での稽古とは……粹ですね。」

ミラは笑い、その勢いを逸らして剣を弾き、退いて間合いをとる。そして、息を大きく吸った後、諸手^{もろて}で上段に構えるのであった。

「いい型だ。

どこで習った？」

「…中王都市、九報雷亭道場。

……免許皆伝。」

「いいね。

いかにも生ぬるい、剣術ごっこの匂いがしやがる。」

バークが目を光らせて晒^{わら}う。

「せいっ！！」

今度は、ミラからの剣閃。

バークは剣を縦にしてそれを防ぐ。

一合、そして一合。

次々と技を繰り返す彼等。

「！！」

やがて同等の衝撃に、二人は同時に手を痺らせる。

「昔から、アイザックの奴等は気にいらねえんだ…。

いかにも『自分たちが正統派』ってツラして、集団で仕事を掠^{かす}めていきやがる。」

その上、民衆からも慕われてな……！」

わざと至近距離で鍰^{つば}を合わせ、蹴りを放つバーク。
だが、相手は足をしっかりと折り曲げて、膝の堅い部分でそれを
防御していた。

「あなたは…元傭兵だと言いましたね……！」

「まあな……！」

返される刃を半身でかわし、反撃に全体重を乗せるバーク。
それをも、ミラは受け止めた。

「そっちの、いかつい方を抜きな。
遠慮せずに。」

再び刃を合わせたまま、バークはミラの腰に残された一振りに目
をつけながら言った。
幅広の鞘に包まれ、その鍰は異様に大きく、拳全体を覆えるよう
になっている。

おそらく特注品であろう。

「こちらは……人間用ではないので。」

淡々と答える彼。

その余裕が憎らしく思え、バーグはすぐに大剣の連打を放つ。

「くっ!!」

その粗暴な攻撃を、巧みにかわしていくミラ。

「……とどめだ!!」

最後に剣を頭上に振り上げて、大きく溜めをつくるバーグの巨体。隙だらけの姿勢だが、迂闊に手を出すことは出来なかった。

覚悟を決めたミラは、両の手で柄を握り締め、真っ向から振り下ろされる大剣に耐える。

「……………」

傍で見ていた世羅のリボンが揺れた。

その眼前で。

青年は渾身の一撃を、地に膝すら付かずに受け止めている。

噛み合わせた奥歯を解き、剣を下ろすバーグ。

同様に、構えを解くミラ。

「いやいや!

本当に強えじゃねえか、兄ちゃんよ!!」

一転して、バークは嬉しそうに相手の肩に腕を回した。

「さすがは、アイザック。

精鋭揃いは昔から変わらねえな。

しかも、あんたが仕切る部隊なら、ここを守らせても安心だ。
気に入ったぜ。 いっちょ頼むわ。」

その態度は、さっきまでとは嘘のように全くの対照的である。

（あの単細胞野郎が。

何が、ヤキをいれてやるだ。

ヤキが回ってんのはてめえだろ……）

不満そうに立ち上がり、ようやく彼等の前に姿を見せる戒。

「戒？」

世羅はそれにいち早く気付き、二人は向かい合った。

「貴方は先程の…修道士さん。」

「……チッ。」

だが、その視界に入る爽やかなミラの雰囲気、戒は地に唾して
悪態をつく。

「なあ、戒。

この兄ちゃん、けっこう強えぞ。

これなら任せても大丈夫そうだな。

ルベランセも世羅も……おぶっ!!」

軽い口調で言うバーグの喉に、戒の手刀がめり込んだ。

「いつまでサボってんのよ、バーグ!!」

さらにそこでタイミング良く、遠くの柵越しからミーサの音が響いた。

「お、やっべえ……そろそろ出発か。
もう行かなきゃな……。」

「？」

呟くバーグを、世羅が見上げる。

「これから、ロディ達と一緒に北まで行ってくるからよ。
まあ、本気で警護の方を頼むぜ。」

そんな彼女とミラの顔を交互に見て、彼は告げた。

「バーグも行っちゃうの!？」

「あ、いやいや!！」

心配そうな顔を露にする世羅に、バーグは大袈裟に手を振る。

「人手が足りなくなてな、ミーサが手伝いに行くんだと。それで、このまえ遊びに行った時、あいつだけ置いて行っちゃまったろ？」

その埋め合わせで、俺も一緒に手伝ってやることにしたんだ…」

先の戦闘とは全く対照的、疲れた顔で肩を落とす彼。

「俺達は、向こうでの作業を終えればすぐ帰ってくる。でもまあ、ロディの奴には当分会えないだろうな。」

「…大変だ!！」

座っていた箱から降りて、急に駆け出す世羅。それも、先程の帷幕へと向かって行く。

「おい、遊びで入るんじゃねえぞ! あいつだって疲れてるんだ、ゆっくりさせてやれ。」

そんな戒の静止も聞かずに、彼女は幕中へ潜っていった。

「世羅とは…どういう関係なのですか。」

傍らでミラが訊いた。

「てめえの考えているような関係じゃねえから、安心しろ。」

口元を歪ませて、戒は答える。

「そうですか……。」

では、私も警護の用意がありますので…」

ミラは剣を収め、会釈してその場を去った。

腰に下げたため、二本の剣に繋がれた鉄鎖。

それらが重なり合う音が、戒にとっては妙に耳障りだった。

「フィンデル。」

ロディが行くんだって。」

「そう……。」

わざわざ伝えてくれた世羅に対し、彼女は気の無い言葉を返した。

「いいの？」

世羅はじっと見つめている。

「……どうして、そんなことを聞くのかしら？」

フィンドルは椅子から離れ、彼女の目線までしゃがみこんだ。

「……『ありがとう』って、ちゃんと伝えた方がいいよ。
ボク、戒に何も言えなかった時、ものすごく後悔したもの。」

その言葉を聞いた時、フィンドルの右目からは予期せずに、一筋の涙が滑っていた。

「どうしたの……フィンドル！？」

「……馬鹿みたいだわ。
何もかも、馬鹿みたい。」

彼女は頬を拭って、また笑いかけた。

「世羅ちゃんの澄んだ瞳は鏡ね。
見ていると、意地を張っている馬鹿な自分に気付かされるの。
……ありがとう。」

彼女を軽く抱きしめ、後ろの幕を上げる。

ちょうど真上に昇った陽の光が、燦々（さんさん）と輝いていた。

「やあ、艦長……。」

その陽を背に、目の前の影が揺れた。

「最後に挨拶をしようと思ってね。」

それはまさに、いま会いに行こうとしていたロディであった。

彼は初めて出逢った時と同じように、笑顔の絶えない優男のままだった。

「今回は本当にありがとうございました。」

艦を守ってくれたのは勿論……私を過去から解き放ってくれたのは、貴方です。」

晴れ晴れとした彼女の表情と言葉に、ロディは少し驚いた顔を見せる。

「いい顔してる。」

素敵だ。」

「……そうでしょうか。」

フィンデルは、自然と自分の髪に指を触れた。

「どうだい？」

戦うことは、まだ恐いかい？」

「…ええ、まだ少し。」

「君がもし道を踏み外し、暴君になったとしたら」

ロデイがおもむろに黄金の銃を抜いて構える。

「その時は、いつでも僕がやって来て、君を殺してあげる。
だから……これからも思い切りやってみるといい。」

「…どうして貴方は…そんな無責任なことを言うんですか。」

彼女の叱るような言葉に、彼は憂いを帯びた表情になった。

「だって、貴方には…撃つべきものがあるのでしょうか？
しかもそれは…自分の血を分けた子供かもしれない…。
さらにこの上……他人の命を背負わすことなんて…出来るわけありません。」

「僕は本気だよ。」

「……私だって……」

フィンドルは、そこで声を詰まらせた。

その肩を軽く抱き寄せるロディ。

「今はお別れだけど……必ずまた逢えるよ。」

次こそ、僕を雇ってくれるとありがたいな。」

「考えておきます……。」

「手厳しいね。」

彼は両手を腰に当てて、体を反らしながら笑う。

「ロディ殿！」

そろそろ出るだすよ……！」

脇に止まる、装甲馬車。

その中から、ガツチャの音が聞こえた。

「……じゃあ、また。」

ロディは顔を寄せ、フィンドルの口元に自分の唇を近付けた。

だが硬直する彼女の様子とその瞳を見て、彼もまた止まり、方向を変えて、耳元に口付けをする。

そして名残惜しむようなことはせず、彼は素早く馬車の荷台に乗

り込み、最前へと進んだ。

「……これからも思い切りやればいい……か。」

ぬくもりの残る手の平を見つめ、独りで呟く彼。

「やれやれ……さよならのキスもさせてもらえないとはね。
相当、僕も本気だよ。」

「……私どもの軍隊を鍛えるのも、それくらい本気で取り組んでもらいたいのだが……」

ようやく着席したロディの横で、汗を拭きながら訴えるガツチャ。

「うんうん、ところで……ブブド公国って、美人は多いのかな？」

彼は両手を枕にして目を薄く閉じ、冗談交じりに訊ねるのだった。

「俺様達も、そろそろ出発しないとまずいだろ。」

装甲馬車を見送ったまま放心していたフィンデルに、戒が見かねて声をかけた。

「…そうね。」

これ以上、タンダニアの方を待たせるわけにはいかないわ。」

「まったく勝手に決めやがって…。」

これでご馳走の一つでも出さなかったら、承知しねえからな…。」

「え、ご馳走!？」

その呟きに、後ろの帷幕から反応する声。

二人は同時に顔を見合わせた。

「……予定では、二人のはずでは？」

「いや…なんか…すみません。」

不可解だと言わんばかりの態度のアリアネに対し、申し訳なさそうに答えるフィンデル。

戒と共に連れて来た笑顔の世羅は、餌を待つ子犬のように尻尾を振っているような錯覚を受ける。

「…まあ、いいでしょう。」

どうぞ、こちらへ。」

タンダニアが用意していたのは、小型の馬車だった。
屋根も無い、人も三人乗るのがやっとの粗末な物である。

まずは世羅が乗り込み、戒が続く。

「気をつけて行くんだぞ、世羅。」

ミラは丁寧にも、それを見送りに来た。

先程の軽装と違い、警備のため左上半身と腹部に鉄甲を装着して、
顔も一層に引き締めている。

「外交に関わる重大な役目だ。

防衛はくれぐれも慎重にお願いする。」

「たとえタンダニアの親衛隊がお相手でも、三日は持ちこたえられますよ。」

アリアネの言葉に、ミラは大真面目な表情で答えた。

彼の部隊と思われる20名ほどの屈強な男達も、既にそれぞれの
持ち場についているのが見える。

フィンデルはその喧騒の中、モンスロンと向かい合っていた。

「この度は、色々とり計らっていただき……。
艦長には、感謝の言葉もあります。」

彼は、いつものように頭を掻きながら言う。

「それでは、これから我々がまずタンダニス王に拝謁します。そこで今件の裏がとれ次第、亡命の準備をとっていただきますので。

それまでは、デイオール伯のお屋敷で待機を願います。」

「…この度の軍隊の犠牲は、私の不徳です。

代わりと言ってはなんですが、亡命後の働きは必ずや…成功させます。

いささか、月並みな言葉で申し訳ありませんが…。」

儀礼的な言葉を真顔で全て言い終えてから、彼は笑った。

「貴女の水鏡の陣と報復の策…… 本当に見事でした。もつと兵法や軍事について、語り合いたかったですな。少々、名残惜しい。」

「…きっと別の機会がすぐに訪れます。

私も、もつとゆっくり、貴方にお礼が言いたいですから。」

フィンドルの言葉に、彼は暫し目を伏せて黙り込んだ。

「……しかし結局、最後まで訊ねられませんでしたね。私が何のため亡命するのか、気になりませんでしたか？」

「情報というものは、一人が知れば十人が知るのが常です。」

「やはり、貴女で良かった。」

彼が呟くと、彼女は会釈して、戒と世羅が乗る馬車へと進んでいく。

モンスロンにも、別の馬車が待ち受けていた。
反対側の、長い道を歩く。

先を、真つ黒な物体が横切った。
彼は足を止め、その方向を見る。

「さようなら、梅さん。」

軽く挨拶して去る彼の様子を、梅は背中を丸くして凝視していた。

黄色い瞳の中の黒目が、その小柄な体を映し、細長く収縮した。

「……っもう！」

「……っもう！、どういことなのよ……！」

両耳から湯気を噴き出す勢いで、仕事を終えた格納庫に突進して

くるシュナ。

「聞いた？」

戒のやつ私達を差し置いて、艦長と宮殿で豪勢な食事だって。」

「はあ…世羅さんも一緒にみたいでしたけど…」

すれ違ったパンリを捕まえて、不満をぶちまける彼女。

「だいいち、あいつは中王都市の国民でもないし。

正式な仕官でも無い、中途半端なくせに。

いったい、どういう経緯なんだか…」

「……いいじゃないですか……。」

お二人でしたら…艦長の警護にもなりますし…」

「なんで、そんなに物分りがいいのよ。」

「えっ。」

「むかつくわ。

ちょっと、来なさい。」

「えっえっ？」

パンリの手を強引に引いて、彼女は格納庫を飛び出す。

「私達も対抗して、これから街へと繰り出して遊び倒すわよ。」

「??？」

「あんただって、どうせ暇なんでしょ？」

「ええ…まあ…。」

でも、どうせなら、本屋とか寄っていただいけると有難いんですが…」

「考えておくわ。」

早足で、厳重な警備の中を歩いていく。

既に、駐屯区画の出入り口では、傭兵達が代わる代わる見張り番を置いていた。

その彼等により、外出証明の札を受け取る二人。

だが柵を出たすぐ付近で、右往左往と、さまよっている着物姿の男を発見する。

「あれ？」

ザナナさん…何やってるんですか。」

「む……。」

呼びかけられた声に対し、紙切れを握り締めたまま振り向く豹頭。

「…『しよーとけーき』というものが、どこで手に入るのか、教え

て欲しい。」

シュナとパンリは、その口から最も似合わない語句が飛び出したことに狼狽した。

「こんな所じゃ、どう頑張っても、手に入らないですよ。街に行かなきゃ。」

「むむ……。」

「ちなみに、クリーム？」

そして、さらに声を揃えて訊いてみる。

「わからん。」

赤くて、小さい果物が、乗っているらしい。」

「イチゴだ。」

二人は、顔を見合わせて笑った。

「じゃあ、行きましょ。」

ザナナさんも一緒に。」

軽く手をとるシュナ。

「いいですね。
ぜひ行きましょう。」

少し躊躇した彼の手を、さらにパンリも取る。

澄み切った青空を背に、いまだ感じたことの無い風を身体に受けるザナナであつた。

「これより、タンダニア領です。」

白馬で馬車に並走するアリアネが言った。

国境を兼ねた質素な関所を抜けると、途端に緑の眩しい畑に囲まれる。

そして緩やかな坂が、行く先に延々と続いていた。

それから暫く、馬車は田舎道の土壌を進むことになった。

そして暖かな陽気といつまでも変わらない風景に退屈し、戒は眠りに落ちていたが、不意に止まる馬の足に目を覚ます。

見れば、前方を羊の群れが横切っていた。

先導の牧民は馬車に向けて頭を下げた後、のんびりと仕事を続けている。

「親衛隊の前を横切らせるのか。」

戒が声を上げた。

「タンダニアにおいては、民と農牧は宝なのです。
何かおかしいことでも？」

「いいや……別に。」

馬上から平然と答えるアリアネに、彼はそれきり口答えしなかった。

隣に座っていた世羅とフィンデルは、それから馬車の心地よい振動で眠りに入ってしまったままだった。

とりわけ、フィンデルは疲れが相当に溜まっていたらしく、時折、物凄いいびき鼾をかいている。

やがて斜面も中腹にさしかかると、それまでの風景には無かった建築物の丸型の屋根が、前方から見えてくる。

小宮殿と呼ぶにふさわしい、慎ましくも古い建物であった。

速度を上げた馬車は、すぐに小ぶりの門をくぐる。
すると、そこでは一つの軍勢が道を挟んで左右に分かれ、待機していた。

アリアネと同じく、紅い鎧を纏う女性達。

彼女らが手にした棒を上下に揺する。

すると、それらは大きな音と共に、大きな騎槍へと姿を変えた。

先程までの緑の景色とは、うって変わって、物々しい光景である。

「……ん」

フィンドルも、漂う異様な気配に起こされた。

「よだれを拭いてから、降りろよ。」

馬車を降りる直前、意地悪く忠告する戒。

彼女はすぐにハンカチで口元を覆いながら、寝ぼけ顔で後に続く。

そして最後に半分眠ったままの世羅が戒に両手で抱えられる恰好で馬車から降ろされ、三人はアリアネに導かれた。

木で作られた正面の扉を開けると、古めかしい空気が鼻腔に入ってくる。

「……アリアネ様！」

そこへ早速、血相を変えて走って来る女性。

「騒々しいぞ。」

国賓の方々の面前で。」

「す、すみません。実は……」

そこで初めてフィンデル達の目を気にしながら、その女性はアリアネに耳打ちをした。

すると途端に、彼女まで顔を同様の色に変える。

「失礼、ここでお待ちいただけますか。」

少し火急の事態が……！」

説明の言葉も程々に、駆け出すアリアネ。

先の女性も、反対側の廊下へと駆けて行く。

三人はあつという間に、勝手の分からない場所に置いていかれてしまった。

「何なんだ……？」

「さあ……」

戒とフィンデルはお互いの嘆息を混じらせながら呟いた。

同時。

廊下の角に設置された巨大な植物の影から気配を覚え、世羅が目を見張る。

そこから現れたのは、白い褌ふんどしを腰に巻いた以外、一切何も纏っていない男。

突然の裸体の登場に、フィンドルは思わず顔を背けた。

ここが小宮殿でなければ、どこかの浮浪者と見紛うところだろう。

だが冷静に見てみれば、まるで彫刻のように無駄の無い、隆々とした筋骨。

そして胸元まで伸びた、艶やかな漆黒の顎髭。
露出された肌の端々からは、不思議な気品を漂わせている。

そんな黙とした視線が集まる中、男は薄目のまま片手に持った酒瓶をくわえて飲み干した。

「……おい、そこのおやじ……」

戒が呼びかける。
だが

「何じゃ、カイ。」

逆に自分の名前を返されてしまったため、彼は閉口してしまった。

「……なんで、俺様の名前を……」

戒が全てを訊く前に、男はまるで目線を違えて、廊下の奥を見据えていた。

角を曲がつて来るのは、真つ黒な顔をした白い毛の小猿。それは二足で立ち、その両手に酒瓶を抱えている。

「おかわりとは、気が利くのう。
ほんに、カイは偉い子じゃ。」

男は、その猿を慈しむように頭を撫でて褒めてやった。
そして瓶を受け取ると、代わりに自分の持っていた空き瓶を渡す。
どうやらカイとは、その猿の名前のようである。

「おまえも…使用人だろ。
客が来たんだ、案内しろ。」

その事実には、戒はあからさまに不快な顔を作つて訊いた。

「客？」

それが事実なら、随分と、横柄な客人よのう。」

男は彼の態度を一瞥して、酒瓶の蓋を抜く。

「すみません、我々は中王都市から来た者です。
アリアネさんにここまで案内されたのですが、急な用事があった
ようです…」

そのフィンドルの言葉を聞いて、男も警戒を解いたのか、改めて全員を見回した。

緊張した面持ちのフィンドル。

横の戒は腕を組んだまま、そっぽを向き。
もの珍しそうに、男を見上げている世羅。

「タンダニス王に、何か御用か？」

男はたずね、不意に近付いた。

青年と呼ぶにはもつと年季の入った顔だったが、生気に溢れんばかりの健康的な日焼け肌。

さらに相当の威丈夫で、戒よりも遥かに身長がある。
それが見下ろすように迫って来た為に、三人は思わず身構えた。

「……まあいい。」

こちらへ来るがよろう。」

振り返って前に行く男。

若干の抵抗があるものの、三人はそれに追従した。

そんな中、脇の小猿が長い手を伸ばしたので、世羅も手を伸ばす。
意外に強い握力だったが、彼女もそれを気に入ったようで、ずつと手を繋いで廊下を歩いていた。

その微笑ましい様子を見て、フィンデルも肩の力を抜く。

だが、目を前に戻せば、入ってくるのは尻を向けた男。

鍛えられ、良く引き締められた尻であったが、それは所詮は男の尻であった。

眺めていて、気分のいいものでは決してない。

国民性がまだ掴めないタンダニアだったが、フィンデルはこの全裸に等しい姿に、相当に気分を害していた。

そんな奇妙な案内役に従って到着したのは、大扉の前。
彼女は、ここが謁見の場なのだと悟った。

「か、戒くん……くれぐれも、礼儀作法には注意してね？」

《キ？》

だが、それに答えたのは小猿。

「あ、いや……あなたじゃなくて……」

フィンデルは思わず破顔した。

「くだらん心配するんじゃないねえ。」

さあ、開ける。」

静かに憤慨しながら、命ずる戒。

男は言つとおりに、重い扉をその両手で開く。

見上げれば気が遠くなるほどの、高い天井。
元の色すら判らない、年季の入った絨毯。

そして奥には、座がぼつと一つだけ置いてある。

出発直後のアリアネの話では、タンダニアが遷都を行う以前は、
この場所が首都だったという。

これが昔の玉座であるということは、想像に難くない。

そして、その傍らには、薄布を着こなした美青年がいた。
彼は無表情だったが、三人の方を見た直後、少し驚いたように眉
を上げる。

「あの……我々は……」

「中王都市の方ですね。」

言いかけたフィンデルに対して彼は一礼し、小鳥のさえずりのよ
うな綺麗な声をかけた。

加えて、あらゆる機知を内包した瞳で貫く。

「アリアネは一緒ではないのですか？

貴女達のご案内をさせたはずですが…」

「急ぎの用で…何処かへ…」

「そうですか。」

大切な使者を置きざりにするとは、全く困ったものです。」

「いえ…」

「そして、また貴方は、そんなお戯れを……」

言いかける青年。

「陛下アーツ！！」

そこで咆哮と共に、猛然と走りこんで来る者がいる。
今、まさに噂していた、アリアネであった。

さらにその手には何故か、大きな白い布が携えてある。

「陛下？」

戒が呟いて、青年の方を見た。

「お召しものも纏わずに……あまりにもひどすぎます！！
国民に対し、示しが付きませぬぞ！！」

「…湯浴みの後は、裸に限る。
ここが暑くてたまらन्दの。」

だが、彼女に平然と答えたのは、今は後ろにいる案内人の大男。
しかも彼は欠伸あくび混じりに、股間の布をはためかせた。

「あ？」

振り返る戒。

何事も無かったように、大布を片手で受け取り、前へ向かって進む男。

そして途中、それを広げてから肩に回し、巧みな手つきで巻いて結び、薄衣トイガと呼ばれる着物にして着座する。

「さて……お初にお目にかかる。
このタンダニスに、何の御用かな。
お客人。」

彼は足を大きく広げ、頬杖をつき、長い顎髭あごひげを手で伸ばしながら言った。

久方ぶりの地上。

中王都市に勝るとも劣らない活気ある歓楽街の観光に、シュナはだいぶ機嫌を直したようだった。

「まだ……見るんですか……」

だが、パンリはいい加減うんざりしたように呟く。

店という店をもう何十軒と回ったが、彼女は何を買ったということも無く、ただ商品を眺めているだけなのである。

「あんだ、女の子の買い物は甘くみたわね。

この程度で根を上げるなんて。」

「まともな買い物、まだ一つもしてないじゃないですか……」

珍しく、負けじと返すパンリ。

「ただ、見るだけってのが楽しいんじゃない。

そして、目星をつけた物を、明日買いにくるってわけよ。」

「なんか、非効率的ですね……」

言っているそばから、さらに繰り返される寄り道。

「早く、用を済ませたいのだが……。」

これには、ザナナまで愚痴を言う始末だった。

「あとで、よ。」

今、食べ物を買ったら途中で腐っちゃうでしょ。」

彼女は、観光を続ける態度を崩しそうにない。

それに引つ張られるように、男二名はついて行くのみだった。

（平和なものだな……）

街中のベンチに腰掛け、首を青空に向けたまま。

脇目で、若者達が楽しそうに歩いているのを見る。

彼等だけでなく、この大通りを行き交う人々には、笑顔が絶えない。

飛びぬけた裕福さは無いが、ここには秩序と平和がある。

もしも自分がこの国に生まれていたら、どのような人生を送れたであろうか。

そう思えば、嫉妬の心は隠し切れなかった。

視界の端に、羽ばたく黒い小鳥。

近づく外套の彼女。

さらにその手から伸ばされる小さな紙切れに、ヂチャードは目を通した。

「……このことを、他の連中には？」

「既に申し伝え、手筈は整っております。」

「じゃあ、俺達も行くか。」

淡々と、腰を上げる。

「…すぐに、よろしいのですか。」

「ちょうどいいのさ。」

彼女の問いに、ヂチャードは呟いた。

足の怪我の痛みが和らぐにつれ、何気ない日常の平和に肌が慣れるにつれ。

身に染みたはずの屈辱や悔しさが消えようとする。

それくらい簡単に甘蜜を求めてしまうほど、自分はどつしよつもなく凡小である。

いつそのこと、何も考えられないくらいの強い奔流に押し流してもらいたい。

彼は今、本気でそう願っていたところだった。

「……ルラル。」

なあ、お前はこの国に生まれていたら、自分はどうなっていたと思う？」

「それは、どういことでしょう。」

頭から被った外套の奥から、彼女は小さな声で訊いた。

「質問を少し変えるか。」

…もしも、この国に生まれ変わることが出来るなら、お前はどんな人生を送りたいと思う？」

「やはり、貴方に仕えたいと思います。」

「それは……同情から言っているのか？」

「……………」

黙り込む彼女の、外套に隠れた顔に近づくデチャード。

「…すまない。」

つまらない質問だったな。」

そして、その中身を確かめて彼は力無く笑った。

今に血に濡れるであらう、両の手をスポンに強く打ち付けて、砂を払う。

視線は、地平線から伸びてきた黒い雲へと注がれていた。

3 - 6 「中王都市の飛竜」(下)

4

「御覧なさいませ、陛下。

貴方のお戯れのせいで、使者の方が肝をつぶしているではありませんか。」

怒りに震える自分のこめかみを指先で押さえながら、アリアネが苦い表情で言った。

「あ……貴方が……？」

その脇でひどく動揺しながら呟くフィンデル。

大陸十字軍 最強の将にして。

騎槍ひとたび持てば、貫けぬもの無し。

『至高の槍』と敵味方に言わしめ、それを慕う流民によって、不毛であったこの地に国家を一代で築き上げた勇レザントⅡフォンドールⅡタンダニス。

宮殿内を案内させた無礼をなじることもなく、ただの空気のように。
彼は穏やかな表情をたたえたまま、目の前で静かに座についていた。

並外れた緊張感に吞まれ、フィンデルは思わず内股になる。

「……おい、こんな所で漏らすなよ。」

そんな彼女の後頭部を、軽口と共に平手で叩く戒。

「こつちだって、ガキの使いで来たわけじゃねえ。
毅然としてりゃあいい。」

そしてとる、挑戦的な姿勢。
こちらは全く、いつもの調子である。

「その若者の言つとおりじゃ。
楽にせよ。」

して、もっと近こう寄つとくれい。」

タンダニスも歯を見せて笑い、長い顎髯を指先で巻きながら招く。

「……！」

従って、ゆつくりと近付けば、フィンドルは彼の若々しさに改めて驚いた。

士官学校で学んだ近代史を思い辿れば、彼の年齢は80をゆうに超えているはずである。

だが、どう見ても、その姿は30代前後にしか見えず。肌には僅かな皺しわも無く、ほのかな日焼けまでしていた。

「失礼ですが……タンダニス様のご子息では……？」

「正真正銘、本人じゃが？」

首を傾げ、即答する彼。

「大抵の方は驚かれます。」

無表情で、その傍らの美青年は言った。

「この若さに秘訣があるとすれば……狩りと『これ』よ。」

冗談交じりに、手に持ったままだった酒瓶を見せるタンダニス。先程の小猿がそれに合わせて、その肩に駆け登った。

「陛下。」

先程も申し上げましたとおり、彼女らは中王都市の正式な使者。

どうか早急に、お言葉使いを改めますよう。
それでは示しがつきません。」

「もう無理じゃ。」

わしは堅苦しい言葉を使うのは、三日に一度が限度じゃもん。」

ゆったりとした袖で、自らの顔を扇あおぎながらアリアネに答える彼。

「陛下!!」

そうなると彼女は、愛らしい顔を鬼のような形相に変えて喰らいついた。

「おまえの小言は、ほんに母親にそっくりよのう…。」

生来『がさつ』なわしが、どれだけ『礼よ、格式よ』と矯正されたか…。」

半眼になりながら、対する彼は呟く。

「あれには、さっさと引退してもらって良かったわい。」

母娘揃おやぢって小言を言われ続けたら、流石のわしも、いつか耳が腐る。」

「…その言葉、一字一句違えず、しかと母上に伝えておきます。」

「じよ、冗談じゃ。」

「冗談じゃて。」

タンダニスは青くなって言った。
先程までの壮嚴さは皆無である。

「まったく、融通が効かんのう……」

やがて彼は、そのやりとりを眉間にしわを寄せて聞いている戒の視線に気付いた。

「おお、すまんすまん。」

まさしく、これこそが『みつともない姿』というものじゃな、はっは。

まずは、客人の用件を聞かねば……」

「早速ですみません。」

モンスロン卿とのつながりのある人物と会わせていただきたいのですが……」

アリアネへと再び顔を向けたタンダニスに、フィンドルはすぐさま言った。

すると、にわかにその彼の動きが止まる。

「……そのような用意はしとらんぞ？
なにせ、わし等がここにいるのは、偶然なんじゃからな。」

「え？」

「のう、オンヒルデ。」

「は。」

陛下の気まぐれにて御座います。」

短く切って言う美顔。

「どういうことでしょうか？」

貴国の一連の働きは、卿と交流のある方の手引きでは……」

フィンドルの強い言葉に、正面の二人は顔を見合わせる。

「いや……わしらは本当に、ただ狩りを楽しむためだけに、ここに
来ておるのじゃ。」

そもそも、そのような公務を忘れるためにのう。」

自慢の脾肉ひにくを掴み、タンダニスが笑った。

「まあ、あのように救援を求められたら……わし自身が下知するま
でもなく、誰かしらが対応したじやろつて。」

余の家臣は、まこと優秀じゃからな。」

「求め？」

フィンドルは表情を曇らせる。

「うむ。」

他国からの使者が領空付近で空賊に襲われたと聞いて、それを助けぬ薄情者など、我が国にはおらぬ。」

「失礼ですが……陛下は本当に、卿の亡命のことを御存知ありますか？」

収まりの悪い反応を見せた彼女の様子に、タンダニスは半口を開けたまま、暫く固まっていた。

そこへ、オーンヒルデが耳打ちする。

「先刻訪れた、聖騎士殿のことは伏せておられますよう。何か……妙です。」

「む。」

確かに、どこか話が食い違っておるな。」

タンダニスは髭を伸ばし、上体を反らして呻いた。

「実は……我が国の宰相筋から、亡命のことは軽く聞いておった。じゃが、それが今日とは急な話よ……」

とりあえず、立ち話もなんじゃ。

腹に何か入れながら詳しく聞こうではないか。

さて、料理をここに。」

タンダニスは、ぶ厚い両掌を叩いて轟かせた。
遠くで待機していた給仕が深く礼をして、小走りで退室する。

(……どうということ……？)

亡命の受け入れ準備は……十分に整っていなかった？)

一方のフィンデルは、不安に駆られていた。

これまで水面下で慎重に進んでいたとばかり思っていた亡命の話を、まさに寝耳に水といった様子で聞いている彼等。

モンスロン自身が入国に至らず、仮初の地に待機となったこと。

さらに、ムーベルマにおける救援のタイミングも、何か得体の知れない力が働いたように感じられる。

それらを統合して鑑みれば、不安な要素は多い。

だが、国首を前に、事を無闇に荒立てるわけにはいかなかった。

現在の彼女の立場は、一介の軍人ではない。

中王都市軍がこうむった被害も、騎士団との軋轢さえも、隠さねばならない義務がある。

「ご馳走かな!?!」

思案の没頭から醒めるような大声が背後で響いた。
声の主は、当然ながら世羅である。

「せ、世羅ちゃん……!!」

大声で過剰に反応した彼女を、フィンドルが顔を真っ赤にして必死に抑えこむ。

「ははは。

ご馳走とまでは、いかんかもしれんな。

我が国の料理は質素で通っておるからの。」

タンダニスは彼女達の様子を見て愉快そうに笑い、両膝を叩いて席から離れた。

「今頃……もてなしが始まっている頃っすかねえ……」

ブリッジ正面の窓から夕暮れを覗きながら、虚ろな顔でタモンが呟いた。

「……ああ。」

腰掛けた椅子を鳴らしながら、小さく答えるリード。

「何で、残ったんすか？」

一緒に行けば良かったのに。」

「…艦長が不在だからこそ、ブリッジを守る人間が必要だろ？」

タモンの何気ない一言に、彼は目を剥いた。

「守りなら、今は充分じゃないっすか。」

開かれた扉へ、顔を向けるタモン。

そこでは屈強な男達が、油断無い目つきでブリッジに続く廊下を往来していた。

「そういう意味の『守る』じゃない。

ルベランセの搭乗員としてだな…面子めんつを…」

つまらない言葉を吐きそうになるのを、必死に抑え。

「お前、何とも思わないのか？」

今のルベランセは攻守共に、外部の人間に頼りきりなんだぞ。」

そして言い直す彼。

だが、対するタモンの白けた目は いつもの愚痴が始まった、

その程度にしか受け止めていない。

「それに俺はな……自分の弱さが、ほんと嫌になったんだよ。」

リードは構わず、腰に提げていた拳銃を抜いて示す。

それは、ロディに対する明確な対抗意識だった。

短期間でフィンデルを理解し、さらにルベランセの窮地を救う活躍を見せた彼。

それに比べ、戦闘技術で及ばないことは勿論だとしても、彼女の心の支えにすらなかったという自分の不甲斐なさ。

その悔しさと懊惱おうのうは、時間が経過してから強く襲ってくるものだった。

「もっと楽に考えられないっすかねえ…。
外部外部って邪険にしないで、みんな仲間と思えば…そんなこと
気兼ねする必要も…」

「そういう考えに、甘えたくないんだ。」

これ以上は無駄とばかりに、台を軽く叩くリード。

「……どこかで、本格的に訓練しなきゃな…」

そして拳銃を両手で構え、照準を合わせて見せる。

モンスロンが怪我を負った責任の一端も、自分の心の弱さにあった。

何かしらを鍛え、自分に自信をつけなければ、また同じことの繰り返しだろう。

彼はそう反省していた。

「別にそんなに無理しなくても…。」

「そういうことは専門家に任せて…」

「現実的かどうかは、この際は置いておいてくれ。
気持ちの問題なんだからな！」

ぴしゃり、とタモンを黙らせる一声を放ち、腰を上げる。

「ん？」

リードはそこで、視界の端の床を注視した。
小さな球体が、無造作に転がっている。

「……メイ。」

自分の念通球くらい、ちゃんと管理しておけよ。」

「？」

念通板で艦内検査に当たっていた彼女は、板にはめてあった念通球を手にとってみせる。

「…ん？」

「お前のじゃないのか。」

リードも、自身の球をまじまじと見ながら、再び視線を背後へと

戻した。

そこにあつたはずの球体は、既に無くなっている。

「…難しいこと考えているから、疲れちゃうんですよ。」

強くまばたきを繰り返す彼の肩を、わざと力いっぱい揉みながら、タモンが笑った。

「あとでザナさんが、ケーキを買ってきてくれるらしいです。それで休憩するつすよ。」

「そうか……じゃあ、あとで紅茶でも淹れないといけないな……」

つられて思わず口から出た能天気な言葉に、リードは赤面して自分の唇を押さえた。

クレイン教が今日まで崇める『創る者』の理念は、大陸における永遠の平和であつた。

今から約1200年前。

その創る者の傍で、血肉を浴び続けた武人がいた。

『永遠』と同意義の言葉。

『久遠くおん』の名を享け賜った男である。

彼は卓越した戦闘術で凶獣の殲滅・反抗者の暗殺など、血生臭い仕事を一手に引き受けていた。

まさに久遠は、現在の大陸における偉大な功績者の一人であつた。だが、創る者亡き後、教団は彼を冷遇した。

指導者を失った直後の教団は、安定した地盤を固める必要に迫られており、さらなる厳格な規律と崇高な思想を早急に世に示さねばならなかった。

それらを前にして、久遠が行ってきた残忍な所業の数々は、まさに覇道を塞ぐ大岩である。

やがて自身の命運を悟った彼は、教団側からの処刑を待たずして、出奔した。

何も知らぬ後世の神学者は、口を揃えて、彼のことを『比類なき背信者』と呼ぶ。

『永遠』と同意義の言葉。

『久遠』の名を享け賜った男である。

何も知らぬ後世の神学者は、口を揃えて、彼のことを『比類なき背信者』と呼ぶ。

狩る側から狩られる立場になったその男は、いずこへ消えたのであろうか。

初代の聖騎士達による粛清。
自殺。

当時は、さまざまな憶測が飛び交った。

だが真実。

かろうじて生き延びた彼は地下に潜み、わずかな一族のみに自分の得た戦闘術の全てを教えこんでいた。

誕生した組織は、彼と同じ名を付けられた。

そうして『久遠』は、今日まで思想を生き永らせることに成功したのである。

「おい、何の肉だ？」

出された料理を前に。

両手にフォークとナイフを握ったまま、戒が警戒する。

目の前の大皿には、表面を程良く焼かれたブロック状の肉塊が乗せられており、それをアリアネが手際良く何枚にも下ろして小皿に分けていた。

「鹿じゃ。」

「ここへは毎年、鹿狩りに来るのが慣わしでの。」

「鹿……か。」

「ならばよし。」

タンダニスの言葉に安心した戒が、一切れを口に含む。

甘めのソースが絡み、中まで火が通っている。

脂身も生臭さは全く無く、まるで口の中で蕩けるようであった。

「……どうじゃ？」

取りたての肉は美味かろう？」

王は自慢するように笑い、自身は生肉を大量につまんで喰らっていた。

「うぐうぐ。」

世羅もそれに負けじと、何枚も頬張る。

その旺盛な食欲に、アリアネは目を剥きながら凝視していた。

肉を小皿に取り分けるそばから、飲み込んでいく。
いや、吸い込んでいくかのように彼女は錯覚した。

「……中王都市の民は、その殆どが裕福だと聞いておりましたが…」

「こ、この子は、特別なんです…」

そんな視線を気にしつつ、ソースが付いた世羅の口を拭ってやる
フィンデル。

「それにしても……この近辺の田畑の不作ぶりはひどかったのう。
残りの肉は、民に施しを。」

年貢も例年の半分で良い、そんな触れを出しておいてくれぬか。」

「御意に。」

オーンヒルデは待ち構えていたかのように、静かに返事をした。

「……ところで、もっと最近の中王都市について聞かせておくれ。
かの国には、とんとご無沙汰なのう。」

その後すぐ、好奇に表情を変えてタンダニスが訊く。
フィンドルは言葉を選んだので、すぐには答えられなかった。

「軍隊は…うすのろばかりで、頼りねえ連中ばかりだ。」

それを見かね、代わりに返す戒。

「ちなみに、ルベランセで一番まとまなのが俺様になる。」

自信満々に続ける彼に、絶句するタンダニアの面々。

「…中王都市ジョークです……皆さん……」

フィンドルが泣き顔で否定するも、それは返って信憑性を高めて
しまうようだった。

「列強七国の筆頭にあり続けた中王都市のイメージと現状は、かけ
離れているようですね…。」

相当な人手不足、経済薄弱のように思えます。」

齒に衣着せない言い方で、アリアネは呟く。

「オーンヒルデよ。」

……今、中王都市を攻めれば獲れるか？」

タンダニスの戯れの言葉に、フィンデルは食事の手を止めた。
問われた青年も、その返答には難色を示した様だった。

「酒の席じゃ。」

中王都市の士官を前に、お前の軍計を示すのも一興じゃろうて。」

「……軍計というほどのものなど持ち合わせておりませぬが……
では……」

オーンヒルデは水を含み、口を湿らせて前を向きなおす。

「タンダニアの精鋭ならば。」

全軍にて奇襲の後、中王都市の領土の三分の一を10日にて。」

「策は？」

「必要ありません。」

正攻法のみで充分かと。」

王からの問いに、美顔は平然と続ける。

戒もフィンデルも、そのやりとりに呆気にとられていた。
国宝として扱われてはいるが、何の憚りも無く目の前で、その国
を獲る談議が行われているのだ。

「ただし、『そこまで』でしょう。」

「それは、何故か。」

「中王都市の軍隊と騎士団は一枚岩でないものの、その強大な兵力は決して侮りがたく。

10日も過ぎれば、この事態に一致団結することでしょう。

ゆえに、その後の戦線は膠着。

地の利無きタンダニアの軍勢は、じきに不利になると存じます。

」

簡潔な予測。

だが、実能的を射ている部分に、フィンドルはある種の戦慄を覚えた。

裏を返せば、軍隊と騎士団が本格的に不仲に陥った時、それは中王都市の傾国を意味する。

周囲の国々が、そんな情勢を虎視眈々とうかがっていても、何ら不思議は無い。

「む、どうしたのじゃ？」

この土地の料理は、口に合わぬか。」

タンダニスの屈託無い笑みも、今では不敵な笑みに変わって見えてしまう。

フィンドルは思わず、視線を落とした。

「てめえらが、あまりにも無礼だからだろ。」

バカにするのも大概にしやがれ。」

喧嘩腰で凄む戒。

国王とその重鎮達を目の前にして、彼の態度はまさしく強胆の一言であつた。

だが意外にも、その途端に、対する彼等の様子は晴れたものへと変わる。

「おお、いい反応じゃな。」

この挑発にこうまでも言い返すのなら、れっきとした中王都市の者で間違いあるまい。

彼等は信用できるのではないか？」

「そのように思われます。」

涼やかに言い、給仕に出された茶をすするオーンヒルデ。

そこで試されていたのだと気付いた戒は、いかにも面白くなさそうに椅子に深く腰かける。

フィンデルにとっては、単なる鎌かけにも思えない問答だったが、この時ばかりは彼の気性が幸いしたようであつた。

「…しかしながら、この若輩の頭脳は優秀であろう？
この調子で、わが国も乗っ取ってくれば、わしも肩から荷が降りるのじゃが…」

「陛下！」

脇で目を吊り上げるアリアネ。

「ヴァルクハルトの交換人質が、革命など扇動出来るはずが無いではありませんか。」

そして、陛下なくしてタンダニアはありませんぬ。」

彼女が言うまでもなく、オーンヒルデ自身が答えた。

（人質を喉元に据えて執政させるなんて……。）

フィンドルは思った。

隣接した大国同士が親族を人質として交換するというのは、よくある話である。

大概は教会や学校などに入れて監視するものだが、それを国の中枢で執政させているというのは聞いた事も無い。

それも、若い。

彼にしる親衛隊長を任されているアリアネにしる、その若さが意味していることは、国の機関が上手く新陳代謝をしている証拠であつた。

それをまとめる、底の知れない王。

彼女には、ここまで他人の心が全く読めないのも珍しい経験だつた。

「…申し訳ありません。

本来の目的は、我々の身の証明にあつたはず。

それが成された今、よろしければ、そろそろ戻らせていただきた
いのですが…」

「ふむ……機嫌は損なつたままか。
少し、悪戯がすぎたかのう……」

「いえ！

決してそうではなく…少し気になる用事を残しておりまして……」

フィンドルは眉を広げて、必死に否定した。

「私達が運んできた例の物は……中王都市軍からのお近付きの印と
してお納め下さい。」

「中身は、貴重品でした。」

アリアネが付け加える。

「……有難く頂戴しよう。」

平坦な表情のまま、タンダニスは儀礼的な調子で言った。

「ありがとうございます……では……」

だが、フィンドルが席を立った途端。

窓の外が光り、地響きが起こる。

身を僅かにすくめながら外を見ると、高い木々が左右に大きく揺れ動いていた。

「…雲行きが怪しいとは思っていましたが、どうやら雷雨のようですね。」

これでは馬車は出せません。」

「？」

オンヒルデの言葉に、驚いたように顔を向けるフィンドル。

「レイザンピーク方面の土は粘着質なので、雨の日は馬が嫌がるのです。」

馬車の車輪も、たちまち泥濘ぬかるみに捉われましょう。」

アリアネは誤解を解くように付け加えた。

「…今夜は泊まっていかれるが良からう。」

最後に、タンダニスが静かに笑って言った。

フィンドルは暫く泡を食ったように立ち尽くしていたが、やがて観念するように再び客宴の座についた。

クレイン教は正義の名の下に、国家の騒乱や戦争の間に入り、いさめることがある。

稀にその交渉が決裂に及んだ場合に、聖騎士部隊が介入することを除けば、大方がそれで解決する。

平和を盾にした権力は、何よりも勝るのである。

だが、久遠の存在は、それとは全く対称的であった。

大陸の平和を保つには、実力行使　　諸悪の粛清のみでしか成し得ないものと考えている集団である。

独自の機関のみで調査した情報を、独自の機関のみで裁判し。一方的に死という名の制裁を与える。

彼等の短絡思想は大変に危険ではあったが、それに救われたことにより一生の支援を誓う者は後を絶たなかった。

結果、大陸上で最も高い技術力と戦闘能力を持つ組織となり。

1200年あまりの歳月を彼等もまた、教団と同様に大陸を見守ってきたのである。

そして、その尖兵達は大陸中の地下に散らばっていた。

たとえば、数刻前にルベランセと同じ地に降り立った五名。

彼等の担当は中王都市周域であるが、標的の動向を追ううちに、このように長い道のりを辿ることは決して珍しい話ではない。

今回の異国での任務も、普段と変わらぬ日常にすぎず、彼等はそう信じて疑わなかった。

一人目。

ババルザンの今日の得物は一風変わった手斧。それに鎖を介して反対側の先につながれているのは、分銅であった。

さらに彼は、後ろ背には平刀を巻いて備えている。武器を選ばない、万能の執行人である。

二人目。

その後ろで背を曲げて進むのは、ギユスターヴ。

彼の容貌を隠すのに、この突然の豪雨はまさに絶好であった。

極度の長身瘦躯に加え。

顔面の鼻から上を異形の仮面で覆い、その頂部に鮮やかな孔雀の羽根飾りを差して揺らしている奇人。

普段の並外れた狂暴な振る舞いは無論のこと。

右手の肘から伸ばした巨大な腕刀を、平時でも外さないため、味方からもすこぶる評判の悪い男である。

三人目。

マピット＝フォルスの外見は年端もいかない少女。

フリルの多いゴシッククロリータのドレスを身に纏い。

同色の可愛らしいパラソルを手に携え、彼女はその雨を避けていた。

四人目。

ユイウス＝ノーツ。

金髪碧眼、褐色の肌の青年は、その丈夫そうな身体を黒のスーツと白いワイシャツで固めている。

彼は刀を一本だけ腰に差して、雨の只中の雲を見上げていた。

「ピットちゃん。」

そろそろ中の様子わかった？」

このままじゃ、オレっち達、みんな風邪引いちゃうよお。」

五人目。

スズメバチ

まるで雀蜂のような黄色と黒の縞模様の派手なバンダナを頭に締める彼。

ハ・ラシンは寒さに震えながら、猫撫で声で問う。

目元に装着した赤いサングラスもさながら、他の面々とはあまりに対照的な、原色の多い奇抜ないでたち。

そして軽々しい口は威厳を損ねているが、彼こそが他の四名を収集した張本人でもあり、またその権限を有する立場の者であった。

「…警備の傭兵は、約20名。

ブリッジまでの道のりは、この子が記憶したわ。」

答えるマピットの周りを、艦内から戻ってきた小さな球体が飛び回る。

「へえ。

これが言霊ことだまってヤツか。」

ババルザンは胸元を掻きながら、がに股で近付き、さも興味のある素振りで言った。

中年に差し掛かった彼の容姿は、すでに繕つくろう姿勢が見られない。

頭髮もろくに手入れせず、齒は黄ばんだまま。

服も何日着替えたか分からないようなものを纏い、およそ防御の面からも程遠かった。

「『言霊使い』ってのはそれだけで、高い『格級』につけていいよなあ。」

ババルザンは、さらに妬むような目で続ける。

「だが、その端末を埋め込むには、かなりの大手術だって聞くぜ？
なあ、痛かったか？

その小さな身体に無理矢理ねじこまれてよお？」

いやらしい顔で寄る彼。

マピットは無表情のまま、面と向かって対応はしない。

「言霊ユニットの人体への適合確率は10万分の一よ。
それを思えば、この待遇は妥当じゃなくて？」

自分の細い片手を伸ばし、それをなぞりながら続ける彼女。
対するバルザンは、難しい顔に変わる。

「御免なさい。

あんまり数字のこと言っても、あんたのマヌケな頭じゃ理解出来
そうにないわね。」

「ま、まぬけだっ！」

ユイウスとマピットを除いては、普段からお互いに組むことなく
急場に混成された部隊。

いわば雑軍にも等しい彼等の間には、早くも不穏な空気が流れて
いた。

「あのねえ…言い争いしてる場合じゃ…ないっしょ。」

手にした大鎌を二人の間に降ろし、ハ・ラシンが仲裁に入る。

「……ところで、あんたも来るのか？」

監査官が任務に参加するなんて、聞いたことがねえぞ。」

「別のデリケートな任務があるもんでね。

そっついの、あんたらには向いてないだろ？」

「……ああ、違いねえ。

戦う以外に、面倒なことは御免だ。」

肩をすくめて、そそくさと離れるババルザン。

「ところでみんな。

一応さ、途中まではオレっちが先導するけど、この隊のリーダーはユイウスだからね。

彼の言うことには、ちゃんと従うんだぞ。」

「それは納得いかねえ！

部隊を率いるとなれば、話は別だ。

ベテランの俺が、こんなガキに従う道理が……！……大体、こいつは、本当に強えのか？」

揶揄しながら、ババルザンは青年を指差して睨み付ける。

「まだ一緒に行動して日は浅いが、性根つてのは分かるもんだ。

こいつはずっと、食っちゃ寝、食っちゃ寝と……どうしようもなく、だらけていやがった。

これが噂の『特級』様の姿とは、俺には信じられねえな。」

「はいはい……」

だが、ハ・ラシンはそれを無視して、マピットと詳細な打ち合わせを始める。

「……ふん。」

参謀役まで、ガキかよ。

久遠つてのは、ほんと変な組織だぜ……。」

ババルザンは面白くなさそうに地に痰を吐きかけ、そっぽを向いた。

執行兵。

執行員。

執行官。

執行長。

特級執行長。

この久遠の格級は、順を追うごとにその数は減り、身分も高くなる。

ババルザンは物心つく前に久遠に拾われ、訓練して戦ってきたが、執行員以上の身分になったことが無かった。

中でも執行長以上は、黒と白を基調とした葬送服を支給されるエ

リート。

報酬や日々の待遇も、下の身分とは雲泥の差があった。

自分も若い日に任命されれば、こうまでも擦れた性格にはなってなかったはずだ、彼は日々そう妬んでやまなかった。

「情報によれば…今回の標的、ルベランセは1隻で、その何倍もの戦力を相手にしてきた実績がある。

……けっこう油断ならない相手らしい。」

「それって、空の話でしょ？」

あの飛翔艦っていう…」

ハ・ラシンとマピットの打ち合わせも、最後の詰めに入ったようだった。

「いやあ、白兵戦闘でも…相当な手練がいるらしいよ。」

それまで我関せずと、付近をぶらついていたユイウスとギユスタ―ヴの二人は、その言葉に反応して耳を傾けた。

マピットは焦る。

「さっきから『らしい、らしい』って……一体どこの情報なのよ。まさかこの作戦自体、その情報元だけを完全に信頼しているってことじゃないわよね？」

「まあ、それはいいでしょ。」

「誤魔化さないでよ…」

「絶対審判が下ったんだ。」

オレっち達には、もう選択肢は無いよ。」

「……………」

それきり、マピットは頬を膨らませて口をつぐんでしまった。

国の命運を左右するような大きな任務には、10名から構成される、久遠の最高審議会の決定が組織全体の総意となる慣わしであった。

文字通り、その決定には絶対の権限がある。

「ううむ、わかったよ…。」

納得できる理由を話すから、ちゃんとヘソを曲げずに戦ってくれないかな。」

だが、言霊の扱いは精神状態に左右されるのを、ハ・ラシンは知っている。

彼女の頭のツインタールを両手で軽く引っ張りながら、彼は御機嫌をとるように笑って言った。

「……実は、中王騎士団のガイメイヤは、近いうち反旗を掲げる予定なんだ。」

しかも、既に、両者はムーベルマで激突した。

表沙汰にはならない方法で。」

「……!!」

彼女は思わず、その手を払った。

「すなわち、この仕事の依頼主と情報源は、中王騎士団。

ピットちゃんが薄々気付いている通り、オレっち達は既に共同戦線を張っているのさ。

そして今回は、彼らが獲物を逃した場合の『保険役』を頼まれている。」

その払われた手でバンダナを直し、笑っていた唇を結ぶ彼。

「今の王室政府と軍隊が統治する中王都市、それに対して、騎士団のみが統治する中王都市。

二つの未来を比べた時……久遠は、後者を選んだ。
理解してくれよ。」

「……これから、たった一隻を葬るくらいで、何かが変わると本気で思ってるの?」

「大きな変わりは無いだろうさ。

ただ、『久遠が全力を尽くして、味方につく』……これを騎士団側に示さねばならない。

そういう意味で、大事な初戦と言える。」

ハ・ラシンが爪先で泥を飛ばし、前を歩き出す。

それに続く、男三人。

暫くして、黙ったまま下を向いていたマピットも続いた。

「標的はルベランセの全搭乗員、およびその護衛すべて。

今回、君らは久遠の目や口になる必要は無い。

手足となれば、それでいいんだ。」

冷淡な言葉の先に、柵を挟んで大きな飛翔艦が見えた。

「さすればいずれ 大陸に永遠の平和が訪れるだろう。」

食後、戒と世羅は早々に宴の場から離れていた。

廊下の奥にあるベランダ。

そこから覗く外は、まるで水を一杯に溜めたバケツをひっくり返したような雨模様であった。

「……ちょっと、こっちに来い。
話がある。」

ベランダの屋根は大きく張っており、雨を避けるには充分である。そしてあらかじめ置いてあった椅子に腰掛けて、珍しく戒から声を掛けた。

すると、食べ疲れた様子で、ゆっくりと歩み寄って来る世羅。それを確認してから、戒は何気なく外の庭を見下ろした。

「何だ、ありゃあ……？」

思わず、感想を洩らす。

宮殿の門前では、この天気にも関わらず、一本の大木を何十名もの農民達が必死に運んでいる光景だった。

よく目を凝らせば、それは木ではなかった。枝分かれしているという点のみが酷似した、人の何倍もの大きさの角である。

そして次に運ばれていくのは、同じく巨大な首の無い獣だった。わずかに切り取られた腿と胸肉の痕跡を見るに、先程の晚餐時に出たものに違いない。

「……あのフンドシ野郎……
ただの鹿肉だって言ってたのに……」

既に手遅れだが、戒は心なしか重くなってきた胃のあたりをさすった。

不意に、その肉塊は世羅と初めて出会った時に見た、凶獣に重なって見える。

特に決れた腹部。

銃創でも斬傷でもない。

そこには大穴が開いていた。

「……フィンデルは早く帰りたいみたいだね。」

「……ああ。」

だが、まあ……焦つてもしょうがねえだろ。」

戒は、うわの空で返した。

その頭には、世羅と出逢った時もこのような強い雨だった、そんなことばかり思い浮かべていた。

「……それより、話つて？」

世羅が訊く。

彼はそこで、自分から誘ったことを思い出した。

「お前、これからどうしたいんだ？」

「……ルベランセを降りるのか？」

「えっ？」

どうして!？」

「……………」。

握った両手を自分の胸に当てて驚き、膝に迫る世羅に、戒は黙り込んだ。

「聞いたんだよ。」

あのミラって奴との話をだな…。

ひよっとしてお前、あいつの言うとおりにした方がいいんじゃないかねのかって…」

「……？」

「だって、楽じゃねえかよ。」

それなら、黙ってても飛翔艦乗りにしてもらえるだろ？」

目を逸らして苦笑しながら、肘掛けに片腕を乗せる。

「ヒゲの野郎だって、フィンデルだって、あそこまでお前のことを真剣に考えてねえぞ。」

誰だって、自分のことで精一杯なんだからな。

それなら、いっそのこと…」

「一緒がいいな。」

世羅のぽつりと呟いた一言に、戒の言葉が止められた。

「してもらったより……一緒になる方がいいよ。」

「…なに？」

続けて、間抜けな声を出す戒に、世羅が真正面から向き直る。

「ボクは、戒と一緒に飛翔艦乗りになりたい。」

「…何でだよ。」

俺様は、お前の力を利用するただけに、一緒にいるかもしれな
いんだぞ。」

そんな世羅の告白に対し、戒はむきになって言っていた。
特に言わなくてもいいことまでが、口から飛び出すような恰好だ
った。

「……………！」

だがやはり、戒はすぐに口を止めてしまった。

世羅は迷いの無い顔で、ただ微笑んでいたのだ。

彼女の危うさは思わず庇護したくなるが、到底、籠の中で飼える
ものではない。

戒は理解し、そして自分と同じ匂いを、彼女の中に認めていた。

心を、精神を支配する。

そして何故か、占い師・ウェンウェンの言葉の断片を思い出して

いた。

すると、傍にある無垢な笑顔が、少しだけ空恐ろしく見えたような気がした。

戒は、それを錯覚だと願った。

「おい見ろよ。」

気持ち良さそうに寝てるぜ。」

格納庫入り口付近の木箱の上で寝そべる梅の姿を見ながら、見回りの中の傭兵の一人が言った。

「幸せだな、猫ってのはよ。」

一日中、寝て暮らせてさ。」

苦笑しながら返す相手。

だが、その言葉に気を悪くしたのか、そうでないのか。突如として梅は起き上がり、耳をぴくぴくと動かした。

そして尻尾を丸め、毛色は白から茶に変えて飛び跳ね、その場を去っていく。

そんなあまりに急で不思議な光景を、傭兵の二人は呆然として眺めていた。

「なんか…珍しい猫だな…」

「ああ……」

答えた途端、左の男は後ろから鎖に首を絞められ、右の男は飛んできた斧に脳天をがち割られる。

苦悶する猶予すら与えない。

ババルザンは死体の背後から身を縮めるようにして、先頭を切つて格納庫に侵入した。

駐屯場の柵の警戒を突破し、続けて傭兵達の詰所となっていた帷幕を殲滅。

後方の憂いを絶つた後に、五名はルベランセへと至ったのである。

「ゆくぞ……！！」

ハ・ラシンの号令。

地獄の道をそぞろ行く悪鬼の如く、彼等は連なつて進入を開始する。

「油断は絶対にしないように。

彼等が雇つた、この傭兵部隊……なかなか配置がいい。」

そして、中央に二機の戦闘騎が見える所まで進むと、そこで見回

りについてゐる敵の気配に身を隠す。

「…だがこちらとしては、ここの守りがタンダニアの軍隊でなくて、かえって都合が良かった。

これは、あくまでも中王都市だけの問題だからね…」

彼は呟きながら、それらの排除を仲間に対して手で示した。

「何だ？」

ミラが上階から疑問の声を投げかける。

眼下の格納庫では、今まさに同胞が斬り伏されている瞬間であった。

「……賊か…！」

状況の判断も程々に、気を上げてくる彼。

それに気付いた五人は、動じずにそれを受け流していた。

「そこを動くな。

すぐに始末してくれる…！」

「…いい気迫だ。」

張り上げた声で自分達を威嚇する彼を、ハ・ラシンは見上げたままサングラスを直して呟いた。

「言うほどでは、なかるうて。」

血油で切れ味の鈍った手斧を捨て、背の平刀を抜くババルザン。

それを見計らって、ミラは足元の仕掛け綱を一気に引いた。

同時に、壁に立てかけてあった沢山の矛が、階下へと降り注ぐ。だが、不意を衝かれたものの、五人はさほど驚くことなく各々で避ける。

「小細工を……」

態勢を立て直したババルザンの言葉が止まる。

一本の剣が、その彼のうなじから喉を破り、胸心まで貫いていた。

ミラは矛の後に、自らも落下していたのである。

目先の危険のみに注意を逸らしたのは、ババルザンの重大な過ちであった。

「悪いな。」

五対一では俺もきつい。

汚い手だって、少しは使わせてもらっつ。」

剣を引き抜いて、その死体を彼等へと突き返し、ミラは言った。
その口が語る間も、床に散乱した矛を両手で投げつけるのを忘れない。

瞬間。

空気が弾けるようであった。

その投げられた矛を握り止めた右手を、興奮に震わせているユイウス。

一方、晒うギュスターブも、それを腕刀で後ろへと弾いている。

二人はまるで、積年の恋人に期せずして再会したような興奮を外に放出していた。

その四つの瞳は一心にミラの体を見据え、爛々（らんらん）と輝いている。

「…へえ、用意周到。」

この部隊を仕切っているのは、ひょっとして彼かな。」

ハ・ラシンは口笛を吹いてから、足元に転がったババルザンの死体を端へと蹴り飛ばす。

その様子に、眉をひそめるミラ。

（…………おかしな連中だ…）

…ただの賊ではないな…………）

奇襲に対する備えを見せつけ、動揺を誘う算段であったが、相手は落ち着き以上のものを見せている。

「しかし、幸先良くないぞ。

本格的な突入前に、早くも一人失ってしまうなんて……」

「ならば、先に行け。」

ハ・ラシンの言葉を遮り、前に出るユイウス。

「……何言ってるの、ユーイ！

あなた、リーダーでしょ……！」

それを咎める、相棒役のマピット。

さらに、意外な方向から咎める者もいた。

ユイウスの横っ面に深くめり込んでいる、それは仲間のはずのギユスターヴの拳。

ミラは、言うまでも無い。

マピットとハ・ラシンでさえ、その奇行に愕然とする。

「お、おれの……敵……だ……！」

殺すぞ……おまえ……！！」

ギユスターヴが乱暴にこねる駄々に、ユイウスは横目で睨み付け

たまま何も返さなかった。

「おいおい…勘弁してよ。」

さらに、仲間割れなんて。」

うんざりして、彼等を引き離すハ・ラシン。

「ギユスターヴ、ここはユイウスに任せよう。」

この先には、もっと強い奴がいるかもしれない。

そいつは、お前にあげるからさ。」

そして、なだめるように言い、再びサングラスを指先で直す。

「ユーイが残るなら、私も残る!!！」

「それは、ダメでしょ。」

案内役さん。」

「…ちょー！」

離しなさいよ、赤メガネ!!！」

暴れるマピットを強引に抱えて、ハ・ラシンは上階へ一気に跳躍する。

先の言葉で少し落ち着いたギユスターヴも、それに続いた。

「……………」

対するミラは立場上、それを指をくわえて見ていることなど出来ないはずだった。

だが彼は、今の二人の身のこなしを見て、彼等を同時に相手しなくて良くなったことを逆に幸いと判断した。

この幸運を生かし、まずは目前の敵を早期に決着させ、彼等の背後を突くことが上策。

そう腹を決めて、居残った敵へと対峙する。

アイロンが良くかけられた、スーツをわずかに捻り、斜に構える相手。

黒塗りの鞘。

そこから引き抜かれた刃には鉋にえも無く、ただぼんやりとした光を携えている。

そして恐ろしく薄い刀身は、業物を感じさせた。

「……!？」

ミラは驚愕する。

それに対して自分が咄嗟に腰から抜いていたのは、凶獣用の剣であつた。

完全に無意識の行動である。

「…俺は、ミラ」ホロ。
お前は？」

「呑まれ始めた気を紛らわすため、彼は名乗った。」

「ユイウス」ノーツ。」

無表情のまま答える相手。

粗野な名乗り合いであったが、それだけで二人は互いに武人であることを深く認識する。

さらなる挨拶代わりの初撃は同時だった。

踏み込んで放つ太刀筋も、ほぼ同じ。

加わった力も同等にて、二人は床を踏みしめて一歩退く。

「……………！！！」

相手の存外の^{じょりょく}臂力に、喜悦の顔を増すユイウス。

だが、ミラの方は、たったの一合で大きな不安を積もらせていた。

相手の力は、決して圧倒的ではない。

昼間に剣を合わせた、バークの方がまだ豪気さがある。

「……貴様！」

だが、この男とは一秒たりとも、同じ空気を吸ってはいけない。

ミラはそんな奥底に湧いた感情を握力に変え、詰め寄って相手の刃を思い切り弾く。

その気迫の凄まじさに酔いしれ、ユイウスはさらに口角を歪めた。

（何故……笑う！？

そんな余裕は……無いはずだ！！）

相手の表情に躍起となり、さらに仕掛けるミラ。

正確には、不安に背中を押されて飛び出した形でもあった。

意識した、接近戦。

鐔を競り合わせ、柄を相手の胸部へめがけて押し込む。

さらにミラはそこに顔を近付け、自分の剣の柄から飛び出ている小さなピンを噛んで引き抜いた。

「……！？」

ユイウスは、その見慣れない仕草に全く反応できなかった。
熱い空気が、下腹からせり上がる。

瞬間。

ミラの剣の大鐔に仕込まれた爆薬が、炎を噴いて胸部付近で爆裂した。

この対凶獣用爆符。

石造りの壁とて、たちまち塵に変える代物である。

その反動にミラ自身も飛ばされ、床を転げ回った。

一方、固定されていた戦闘騎の右翼を巻き込み、吹き飛ばす相手。そのまま受身も取れずに固い鉄壁へと突っ込み、その上半身は炎上したまま周囲を焦げ付かせていた。

ミラは最後まで見届けず、階段へと走る。

今、先の三人を追えば、予定通り後方から突けるだろう。

「……！」

だがちょうど一歩、階段に足をかけたところであった。

迫り来る圧力に背筋を襲われ、視線を戻すミラ。

硝煙の中、むくり、と体を起こし。

上半身で唯一、首元に残っていた黒いネクタイを破り捨てて振り向いた相手は、まだ笑いを浮かべていた。

丸みを帯びた、曲線の麗しさが女の肢体というならば。厚みのある、筋の輝く逞しさが男の剛毅とするならば。

その両方を兼ね備えた、人として完璧な肉体がそこにあった。

しなやかで柔らかく、それでいて力強い。
つやのある褐色の肌。

そして、その胸部から背までを巻いたように浮かぶ、爬虫類の鱗のような紋様。

ほのかな緑光を帯びている。

醒めるような彼の蒼瞳は次の瞬間にも、髪と同じ金色へと変わっていた。

生けるもの全てを飲み込もうと、その細長い瞳孔が収縮する。

その時のミラは、まだ知らない。

それこそが『中王都市の飛竜』と呼ばれている男の、本性だということ。

（目エ…さめたかい…？）

…ねぼすけエ……）

しわがれた哄笑が響く。

ユイウスⅡノーツは、不思議な声を聞くことがあった。
己の頭中のみに響く、誰にも聞こえない声だ。

その一番初めは、幼少時に剣奴船で見世物になっていた頃。

声は、自らを『眠れる竜』と称し。

彼の体内から比類無き力を湧き起こして、そこから自由の身にしてくれた。

以来、久遠に拾われてからもずっと、守ってくれている。

（……おまえには……今までの主よりも……遥かに才能がある……。

大陸……最強になるまで……このような場所で……死ぬことなど許さん……。

このわし……と共に……なるのだ……）

決まって同じ文句が繰り返された。

最強という言葉は実感が涌かず、よく分からない。
だが、それが持つ闘争心だけは共感できた。

自分は強靱な肉体を持て余し、いつでも全力で闘える相手を探している

不意に、刀を鞘に収めるユイウス。

「？」

それを訝しむミラ。

相手は柄と鞘の間を軽く握ったまま、構えている。
俗に言う居合いの構えとは違う、無防備に力を抜いた構え。

踏み込みは、格納庫に一陣の神風を吹かすようだった。
彼を中心にして消し飛ぶ、くすぶっていた焦煙。

「……久遠流剣闘術・『紫電』」

瞬時に眼前に迫っている相手が、胸の奥底から吐き出した重い言葉。
葉。

その握った柄は、一直線にミラの顔面へ向かう。

鉄槌を横から振り切られるような圧。

とてもかわせる速度ではない。

瞼の中で、^{へきれき}霹靂が散った。

久遠は、その長い歴史の中であらゆる殺人術を考案していた。

その中でも様々な武器に対応する、汎用的な技の一つ。
紫電。

初撃を眉間へと叩き込み、怯ませ、続けて人体の三十六箇所へ瞬時に『突き』を打ち込む秘技。

くらう者はその激痛の中に紫光を垣間見、また、その攻撃を打ち込んだ者も、同じ光を見るとされる。

衝撃による一種の快楽。

それを覚えた久遠の戦士には、紫色を盲愛する者が絶えないという。

ミラには、分からなかった。

どうして自分が空に浮いているのか。

全身の傷から吹き出た血が舞い。

体は天井に付くくらいの高さで、何度も回転している。

そこへ、さらに脅威が迫っていた。

至上の悦びを表情を浮かべたユイウスは、浮いた自分に狙いを合わせ、さらに宙を踏んでいる。

中空にもかかわらず、一切の姿勢が乱れることのない美しい型。
今度こそ真正銘、居合いの構えであつた。

ミラは僅かに腕を動かせたが、既に方向感覚を失っている。
その中で触覚のみが、相手に向かって巻き込まれていく空気の流れを感じていた。

この男と闘っていたことを強烈に思い出す瞬間。
ミラは腹部から右肩までの悉くを、逆袈裟に斬り抜かれた。

その一刀は、さらに戦闘騎や格納庫の壁をも貫通し、大地を風いだ。
だ。

飛竜の翼が羽ばたけば、全てを吹き荒らす。
己以外の存在を、決して同じ空には認めない。

それは孤高の怪物の業だつた。

ブリッジで最初に異変に気付いたのは、リードだった。

わずかな振動を足に感じたことで、念のために艦内を検査すると、格納庫のイメージがひどく脳内で崩れる。

「どうかしたっすか？」

「いや、故障かな…」

格納庫の反応が……無いんだが…」

リードは不思議そうにタモンに答えながら、メイと目を合わせる。彼女も同じような顔で見返していた。

ブリッジの扉付近に張り付いていた傭兵達も、何かを示し合わせた後に、慌しく奥の廊下へと駆けて行く。

胸の鼓動が、一気に高鳴った。

艦内廊下を駆けるマピットとハ・ラシンも、その振動に足を止め、わずかに間を計った。

しかし、元より二人はユイウスの勝利を信じて疑っていなかった。この分ならば、彼はすぐに追いついてくるに違いない。

むしろ、予想外の問題はギュスターヴ、この野獣の扱いであった。

彼には話が全く通じず、わずかな時間を待たせることも叶わない。

さらに、強烈な突破力を備えている。

各所廊下は瞬く間に、一方的な殺戮の世界と化した。

今も廊下の曲がり角で、鈍い連発が聞こえている。

覗き込めば、既に物言わぬ死体の顔を何べんも殴りつけ、眼底を砕いている彼の姿があった。

「お、おれのオ……獲物……なのにい……!!」

既に何かを覚っているのか、泣き声にも似た声で喚く彼。

艦内の傭兵達の配置、備えは充分だった。

しかし、圧倒的な『速さ』の前では何の役にも立たない。

剣すら抜けず、一発の銃弾さえ放っていない死体の群。

奇しくも、この惨状がそれを証明しているかのようにだった。

しばらくしてギュスターヴは黙り込むと、零れ落ちた眼球をその手の平から口にすすり、浮いて進む言霊を追うようにして再び進みだした。

「こいつはひどいな……」

数歩離れて、苦笑するハ・ラシン。

「いかれてるってば……」

どうすることも出来ず、マピットも他人事のように呟く。

ここに来る途中。

ムーベルマにおける中王騎士団の南軍を、戯れに壊滅させてしまったのは彼、ギユスターヴであった。

それが今度は、ルベランセで人を屠^{ほふ}っている。
これには皮肉な運命を感じた。

(……この圧倒的な身体能力は、興味深いけどねえ……)

ハ・ラシンは思った。

久遠の倫理観は、世間から見れば、相当に外れている。

その歴史から言っても、久遠がまず滅ぼすべき仇敵はクレイン教になりそうなものだが、その存在の大陸における抑止力を認め、正面から衝突することは無い。

要は、大陸の永遠の平和にさえ辿り着ければ良いのである。

その線上には、手段も人格も何も無い。

だが、任務に支障をきたすくらい狂ってしまったのでは、少し認識を改めなくてはならない。

それが執行人達を監査する者としての、務めであった。

「おっとつと。ここだ。」

思惑の中、危つく通り過ぎそうになるところを、発見して立ち止まる彼。

そこは機関室だった。

「そんじゃオレっち、ここに用があるから、ここでお別れだ。
あの男とブリッジの方はよろしく。」

「はあ?」

おどけた仕草と共に出た、ハ・ラシンの急な一言に、立ち尽くすマピット。

「そこに、何があるっていうの?」

「まあまあ。」

さっき、デリケートな任務…って言ったでしょ。」

彼が言葉を濁している間も、ギユスターヴはさらに前へと進んで

いく。

マピットも、それ以上は食らいつかず、その後を走って追った。

二人の気配を見送った後、ハ・ラシンは唇を締め、手にした大鎌の先で脇の壁を何度か軽く突く。

すると、すぐに天井の一部が外れて落ち、その奥の闇から外套の者達が這い出して降りた。

「作業の用意は？」

ハ・ラシンの問いに、無言で三日月刀を裾から見せる彼等。

「……結構。」

扉を開く彼。

中には、大きな装置があった。
そして完全に静止した室内は、不気味な寂じやくに満ちている。

そして、そこへ次々と流れ込んだ外套の者達は、手にした刀で繋がれたパイプや管を派手に断っていった。

闇の中を、血飛沫のように散る油。

心臓を抉り、切り刻むような光景に、ハ・ラシンはさらに目元をひそめた。

（こういうのは、あんまり好きなやり方じゃないんだがねえ。
…お前は少し強引すぎるぞ……ディボレアル。
オレ達は『尊い命を約束された者』なんだから…焦ることは無い。
なに一つ……な。）

不安がブリッジを包み込んでいた。

メイは推し黙り、タモンは居ても立ってもいられないようだった。

様子を見に行った傭兵は、誰一人として戻って来ない。

リードはたまらず銃を抜き、突然、窓に向かって撃ち込んだ。

「な……！」

修理したばかりなのに…何やってるっすか!？」

タモンが叫ぶ。

風に強い、強化ガラスである。

着弾した部分は僅かにひび割れただけで、ほとんど碎けていない。

リードはさらに、力の限り、そこを拳銃の握りで叩きつけた。

「お前も手伝え。

いざとなったら……ここから逃げる。」

「!？」

彼の必死な表情は、タモンに伝えるものがあつた。

すぐに適当な整備道具を片手に、彼も窓に一撃を加える。

「でも……ここから地上まで……結構、高さがあるっすよ……」

「運が悪くても、骨折くらいで済むだろ。

その時は、メイも一緒に……!!」

リードはそこで作業を中断し、振り向いた。

状況が良く見えるよう、開け放った扉。

その奥の廊下に、一人の影が見えた。

「……!」

だが、それはいつの間にか視界から消えている。

リードは、すぐ傍から漂ってきた血の匂いに、ぎよっとして顔を横に向けた。

口に千切れた腕の切れ端をくわえ、見下ろしているのは、狂人の

目。

朱に塗れた鬼の形相は、血に慣れていない三人を怯えさせるには充分だったといえる。

「…な…何すか…え…!？」

狼狽して手を止めるタモン。

窓は、人が出られる程にはまだ充分に壊せていない。

「待ちなさい、ギユスターヴ。
様子がおかしいわ。」

彼等が退路の確保に気を取られているうち、続けてブリッジに到達するマピット。

彼女はまず、冷静にブリッジを見回した。

「ど、どれ……だ？
強いヤツ……どれ…だ？」

一方、マピットに止められたため、ギユスターヴは四つんばいになって床を這い回り始める。

「……騎士団の者が…？」

その隙に、リードは少女に向かって恐る恐る訊いた。

「……………」

無言で、彼等を観察する彼女。

一人が銃を携帯している以外、他の二人は完全に丸腰であった。それも、柔軟に交渉に応じようとしている。

「…赤メガネかユーイが来るまで、様子を見ましょう。」

この任務、ちよつと疑問があるわ。

直感だけど…………この人達は…」

彼女が言い終わらぬうちに、頭の孔雀の羽を一本抜くギユスター
ヴ。

「もう無理にでも飛び降りろ！」

タモン！！」

何かを予感したリードが叫ぶが早いか、その羽は指から離れた。

音も無く。

周囲の床と壁、天井に浮かぶ、無数の赤い足跡。

深く、巨大な腕刀がタモンの身体を貫いていた。
背後で一本足立ちしたギユスターヴの足首には、細い光の輪が浮かんでいる。

そこで先の羽が、ひら、と床に落ちた。

「!」

リードは^{りっぜん}慄然とした。

「ギユスターヴー!」

そしてそれは、同胞であるところのマピットでさえも同じだった。

「よ、よわい……。」

ちがうな……こ、こいつら……ちがう……ひ……」

唾液を垂らしながら、瞳の焦点が合っていない眼球を回す彼。

「……メイ……!」

リードは、タモンを諦め、咄嗟に叫ぶ。
だが、向いた先は空席であつた。

「……メイ……?」

呟きながら、ゆっくりとギユスターヴに向き直る彼。
貫かれたタモンの大きな身体の後ろから、彼女の小さな手が見え

た。

絶望する。

先の一撃は、尋常な速さではない。

否、一撃ですらなかったのだ。

タモンとメイとの間の距離は、自分を挟んで、かなりある。
信じ難い速度。

そして、リードのみを生かした理由は、もっと醜悪だった。

「クククッ……」

タモンと一緒に貫いているメイの髪を掴み、その死顔を彼に見せ
付けるギユスターヴ。

彼は舌と歯を出して笑みを浮かべていた。

優越感を満たすため。

「ッ！」

リードはそれを理解した瞬間、銃を抜いて構えていた。
だが、その銃口さえも、相手は嬉々として見詰めている。

引き金を引いた瞬間、掴まれる顔面。

放たれた弾丸は、すぐに下から腕刀に弾かれていた。

そこでわずかに遅れた銃声が、ようやく耳元で鳴り響いた。

雨はやがて小降りになり。

戒と世羅は寄り添いながら、その間もずっと、今までの冒険について語り合っていた。

互いの過去などではなく、出逢ってから苦楽だった。それは尽きないように思えた。

そこで、宴の席を終えて廊下に姿を現すフィンデル。

彼女は雨の上がった空を見上げ、軍服の襟元を正している。

どうやら、この宮殿で夜を明かす様子ではない。

戒は苦笑を浮かべ、世羅の頭を叩きながら立ち上がった。

全身を覆う痺れの中。

真っ暗な帳とほりに閉じ込められたような、心細さだった。

(…ああ……どこまでも…保安の責任者として…失格だな。
……俺は。)

伏したまま、薄目で、住み慣れた空間を眺める彼。

(…こんなにも……ブリッジは目茶苦茶じゃないか。
…同僚もロクに守れていない…)

瞼は落ちる寸前であった。

(…何もかも…遅すぎたのかもな…。
…もっと……強くなっていれば……なんて…今更だよ…)

遠くでは、ブリッジを蹂躪した者達が何かを言い争っていた。
今やその声のみが、リードの絶ちかけた意識を繋いでいる。

やがて、彼を置いて視界から離れていく彼等。
足音からして、先程よりも増えている。

そこでリードが最後に危惧したのは、彼等が今後、フィンデルと
接触する可能性だった。

彼女だけでない。

彼女が認めた者達。

士官ではない、バグとミーサ。

戒をはじめ、世羅やザナナ。

今思えば、羨ましかったのかもしれない。

きっと自分も、彼等と同じように、彼女に『仲間として』認められたかったのだ。

(…こんな…俺が……。

…虫の…いい話だけど…どうか………彼女を…)

リードの手は、床に落ちた羽根を自然と握り締めていた。

音も無く、梅が近付いて来る気配。

寄り添うぬくもりは、死の恐怖を和らげて。

彼は抜けていく力に、穏やかに身を任せていた。

第三章
第六話 『中王都市の飛竜』
了

It progresses to epilogue...

第三章
エピローグ

同刻。

「ルベランセの時もそうでしたが…もつたいないことです。」

通された豪奢な部屋に、モンスロンは腰を低くして畏まる。

「警備の者が、絶えず見張っております。」

何かありましたら…このように合図下さい。」

彼の担当を任された警備兵長が、卓上の遊戯版から王駒を取り、軽く持ち上げて示した。

窓の外では、それを見た武装の男が敬礼を返している。

常時、私兵を多く抱えているデオール伯の邸宅。

ここは異国の地なれど、その警備の厳重さによる安心感は何処とも比べようが無い。

「ありがとうございます。」

この度は、ゆっくりとさせていただきます…」

退室する兵長を見送るモンスロン。

彼は一息ついて、ベルトの金具の中から一つの小さな書簡を取り出した。

ここに、中王騎士団の私物化を謀る、大団長ガイメイヤの罪の証拠が記されている。

各小団の帳簿を緻密に偽装して、自分の領地へ流していた兵器と

金の量を一字一句違わず。

さらに彼に与していると思われる、主な団員の類。

ガイメイヤのような年配の士がこのように腹を肥やす目的は、歴然である。

私的な兵器を大規模に運用し、それを国家に隠しているのは、由々しき事を企んでいるに他ならない。

だが、それだけならば、政府への密告で済む話であつた。

ちようと、近年では王室政府直轄の『軍警察』なるものが設立され、その選択肢もあつたはずだつた。

(…急がなければ……。)

モンスロンは暫しの思考の後。

窒息しそうな己の息づかいに、思わず襟を緩めた。

彼を押し留めたのは、その政府自身の反意の噂だつた。

今の政府と軍隊は強く繋がっており、騎士団と王族を除いて新政府を立ち上げようとする動きが見え隠れしている。

この情報を洩らしたところで、専横のネタに利用される恐れがあった。

今の中王都市のどこへ行っても、おそらく解決の糸口は無い。

それがモンスロンが最終的に下した結論だった。

目前に控えたタンダニア。

この国を通じてクレイン教に介入してもらえれば、最善の結果となる。

そのために軍隊を利用する形になったが、中王都市を戦火から守るにはやむを得ない行動だった。

元々、財産も家族も少ない身である。

今後、いかなる誹謗を受けようが、彼は微塵とて後悔しないと誓っていた。

「モンスロン様。」

ノックの音。

呼ばれた彼は、ベッドから身体を引き起こし、無言で扉に近付いた。

「少し…よろしいでしょうか。」

声の主は、先程の兵長である。

「どうかされましたか？」

妙な感じを受けつつも、扉を開くモンスロン。

「…貴方に面会を求めている方がいらしているのですが…」

「面会？」

おかしいね。

今、私がこの場所に居ることを知る者などいないはずでしょう？」

続ける彼の言葉に、兵長が無言で頷いた。

「私も同じ意見です。

ですが念のため、確認していただけますか。」

窓を目線で示す彼に従い、モンスロンは用心深くカーテンで身を隠しながら外を覗き込む。

植物が几帳面に整備された庭。

その緑の細い回廊を、一人の中年の男が二人の衛兵に挟まれて尋問を受けていた。

モンスロンは、さらに目を凝らした。

「……おお……」

そして歓喜の声を洩らす。

「御存知の方で？」

兵長は訊いた。

「いわば、この亡命の手引きをしてくれた人物です。
私の恩人だ……」

「それでも、妙ですな。」

この屋敷の手配は、急遽決定したものと聞き及んでおります。
あのような方の話は聞いておりません。」

「しかし、彼にお礼を言わないわけにはいかない。
何とか通してもらいたいのだが……」

「一切、誰も通すなと言われておりますが……仕方ありません。
くれぐれも油断なきよう。」

兵長の働きで、その男はすぐに部屋へと通された。

「……ニジャク殿。」

モンスロンは駆け寄り、感極まって、涙すら浮かべて再会を喜んだ。

その様子を見て、邪魔してはいけないと、再び退室する兵長。

「ご無事で何よりです。」

一方の相手も喜声を返すが、それほど感情は表には出ていないように見えた。

「君のおかげで、この通り亡命を成功出来た。
感謝の言葉も無い。」

「なに、我々の仲ではありませんか。」

「……ところで、何故ここにいると分かったのです？
この場所は、誰にも秘密だと聞いておりましたが……。」

「タンダニアも、初めから要人を通すことなど、容易たやすくありません
まい。」

彼は微笑を浮かべる。

「卿とは中王都市で最後に別れてから、なかなか出国できず……タイ
ミングが乱れまして。」

おかげでこのとおり、段取りが少し悪くなってしまったというわけ
です。

ただ、このあたりで貴方をかくまえる場所は、ここしか無いと思
いましてね。」

「相変わらずのご慧眼です。
恐れ入りました。」

モンスロンは頭を掻いた。

「それより…そのお声。
調子を崩されましたか？」

「……ええ。
少し、寒さに喉をやられまして。」

彼の返事に、わずかに動きを止めるモンスロン。
だがそれを悟られないよう、すぐに室内を歩き出して距離を置いた。

「風邪ですか、それは珍しい。
貴方の故郷は、ここよりもっと寒いでしょうに。」

「はは、違いない。」

迷うことなく答える相手。
モンスロンは、南国出身のはずの彼にはありえない返事だと思った。

確かに知った顔ではある。

理由は分からない。
だが彼が、自分の知っている男とは、全くの別人ということは明白だった。

「どれ、久しぶりに一局、どうですか？」

モンスロンはさりげなく盤上に近付き、先の兵長の説明のとおり
に駒を上げて示す。

「いいですな。」

相手は、微笑を浮かべたまま、歩み寄った。

モンスロンの目が泳ぐ。

自身の合図に気付いた兵士達が声を上げるかと思いきや、その耳
は何も捉えない。

自然なふりをして窓に顔を向ける彼。

だが、その目と鼻の先には、外套を広げた人間がいた。

薄暗いフードの中に見えるのは、おそらく女性。

灰色の肌と裸足も、その最下部から見える。

そして、その背では、血溜まりの中に沈んでいる警備兵達。

既に、モンスロン自身も両腕を極められている。

そこへ抱きつくように、前から覆いかぶさるニジャク。

否、その顔をした、別の男。

「……惜しかったな。」

うちの軍師の一手が…上をいつてたってことだ。」

彼は横目で遊戯板を眺め、耳元で呟いた後。

モンスロンの腹部に深く差し込んだナイフに、大きな捻りを加える。

そして、彼の喀血^{かっけつ}を避けるようにして、軽やかに離れた。

その皮手袋は、真っ赤な血に塗れていた。

周囲から真っ白に染まっていく視界、そして全身の筋肉が緩むのを感じるモンスロン。

ナイフが突き刺さっていた腹を、押さえ込む。

「……何ということを…。」

本物の…ニジャク殿は……ご無事……で……。」

そこで、大きく背中を跳ねらせた直後、モンスロンは動かなくなつた。

「最期に他人の心配とは、おめでたい奴だな。」

顔を『自分のもの』へ戻しながら、はっきりと言うチチャード。

そしてすぐに屈み、彼の服をまさぐり、書簡を取り上げる。
一瞬、その蓋を開けかけたが、彼は止めた。

「この中に、俺の成果が入っている……ってことか。それだけで充分だ。」

俺が価値を知る必要は無い……その価値を決めるのは、大団長様なんだからな。」

「では、すぐに脱出を。」

ヂチャード様。」

「ああ……長居は無用だ。」

漏れが無いよう、モンスロンの死体を素早く調べ尽くした後、ヂチャードも踵を返す。

だが、急に何かを思い出したように足を止める彼。

「ヂチャード様？」

問いかけるルナルにも応えず、彼は血に塗れた己の右手を見詰めたままであつた。

「……大丈夫だ。」

俺はきつと正しい。

なあ、おまえら？」

瞼の裏に焼きつけた孤児院の色も、鮮血に赤く染まっていた。

そんな風景に、彼はずっと自嘲を浮かべていたのである。

第三章
了

Thank
you
for
having
you
read
.
to
be
continued

第四章 『飛翔艦時代到来』 プロローグ

A i r・F a n t a s t a
エア・ファンタジスタ
g i s t a

第四章

プロローグ

真の女神は、ためらわずに嘆きの腕を振るう。

大聖典 第四章 三節 『コウリース』

対の鈴が一つ落ちると、
その片割れは、地を大きく鳴動させた。

大聖典 第十五章 一節 『葬礼』

群は舞い踊り、狂宴が開かれる。

笛を吹く羊飼いは何処だ。

大聖典 第十四章 九節 『界』

空気のように軽く。

だが、重く大地を風ぎ払う。

大聖典 第八章 一二節 『架の風』

雑林を歩き通して、もう何日か経つ。

薄手の修道服を身に纏った男は、しゃがんだままの姿勢で、上から聴こえる野生の咆哮へと顔を向けた。

崖に沿って、野犬が一行に連なっただけ歩いている。

それらが特に危険が無さそうなのを確認してから、男は足元の植物を根元から摘んで、肩に提げた鞆に丁寧に仕舞い込む。

すると、遠くで、自分に対して怒る声がした。

途中、目に付いた薬草をことごとく採取するのを、二人の娘は快

く思っていないらしい。

彼は汗を拭い、それに向かって苦笑すると。
細身の槍を背に、彼女達も微笑み返した。

良く見れば、その後ろの風景には、街並みが広がっている。

あと少しこの獣道を我慢すれば、中王都市の国境に差し掛かるだろう。

ぎらぎらとした陽の光を左手で遮り。
首に下げた赤い十字架を右手に取る。

男は足を上げ、地に落ちた枝葉を踏み潰した。

ここに、神は全て死んだに等しいことを記す。

この物語を記す機会が存在すること、読んでくれる貴方に感謝。
筆者

4 - 1 「一つの邂逅」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The first story

・Reading of encounter・

中王都市の首都 リエディン。

民主制が取られる以前の国名を残したそこは、世界でも有数の大都会として知られている。

そして、中心部にそびえる王宮の程近い場所に設けられた、中王都市軍：総本部。

この日の執務棟は、今までにない慌しさ包まれていた。

東方へと派遣した、北部艦隊の壊滅。

これは五日前にデスタロッサ隊によってもたらされた、最初の報である。

だが、唯一の光明としてルベランセは生存し、モンスロンの亡命が相成ったという事を知り、ギルチは胸を撫で下ろしていた。

ところが、彼の人生で最悪の報告は、唐突に訪れた。

三日前。

タンダニアより、緊急の使者の来訪。

彼等は戦闘騎から降りるなり、すぐに神妙な面持ちで旨^{むね}を告げた。

モンスロン卿、ディオール邸にて暗殺。

近隣の街に駐留していたルベランセも、何者かの襲撃により中破。

かろうじて危機を逃れた乗組員達は、おって送還することになった。

ギルチはそれからというもの、生きた心地がしなかった。

軍の上層部にも、事の次第は当然ながら届けている。

対策のための会議が催されるのも、時間の問題だった。

己に責任問題が波及することは勿論として、それ以上に、彼には心に掛かっているものがある。

それは、無理を押して今回の派遣に参加してもらったフィンデルのことであった。

このような事態を、繊細な彼女は受け止めきれているのだろうか。情などをかけている状況ではないが、それを考えると、どうしても仕事が手につかなかった。

「……失礼いたします、准将。」

「ああ、入ってくれ。」

思案の最中、執務室の扉の向こうからの呼びかけに、彼はすぐに応じた。

「タンダニアの飛翔艦、ただいま到着いたしました。」

「……来たか。」

呟き、重い腰を上げるギルチ。

そこで、対面した秘書官が大量の書類を抱えているのを目にする。

「…それは？」

「使者より預かりました、フィンデル大尉からの資料だそうです。」

「彼女が？」

言われるまま受け取り、彼はそれに目を通す。

「その者が申しますには……大尉は寝る間も惜しんで、その報告書を作成していたと。」

そして、こちらが…」

さらに取り出された、一枚の封筒。
ギルチは横目で、それを見やる。

「共に預かりました、退役届けです。」

そして続けられる言葉に、一瞬呆ける彼。

「…受け取った…のか……！？」

直接、彼女からの意思も確認せずに……！」

「……は……！」

もう、姿がありませんでしたので…どうしようもなく…。
何か不都合が…ありましたでしょうか…」

詰め寄った怒りの形相を目の前に、相手はしどろもどろになる。

「もついい…下がれ。」

「…よ、よろしいので…?」

「下がれと言っている…!」

唾を飛沫させて叫ぶ、こんなにも感情を露にするギルチは、珍しい。

秘書官は脱兎の如く、その場から退散した。

(…この良く出来た報告書…。

…本気で戻らないつもりだな…フィンデル…。)

やがて静けさを取り戻した執務室で、ギルチは手元の書類を何度も繰り返し読みながら、彼女を想っていた。

そこから更に時が経ち、再び執務室の扉を叩く音が訪れる。
問うまでもない、今度は会議召喚の報せであろう。

彼は机の上で書類の端を叩いてまとめ。

わずかの間、瞳を閉じた。

訪れるのが早過ぎた大一番に、用意した答えも、緊張する間もない。

ただ、覚悟だけが決まっていた。

エア・ファンタジスタ
Air・Fantagista

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第一話 『一つの邂逅』

朝靄^{あさもや}の中。

良く整備された石畳の街道を、馬車が行き交う。

それも、田舎道を走るような汚い荷馬車ではない。

れっきとした社交人が利用する、上品な装飾の施された小馬車である。

2395

その背景には、数多も立ち並ぶレンガ作りの建物と塔。

雑多な人の往来。

それらが全て混ざり合って、都会という空間を演出している。

シユナが気分を変えるべく見上げた青空も、思ったよりずっと小さなものだったので、彼女は思わず目が回りそうになった。

自分のとおきおきの、胸元が広く開いた白のワンピースも、ここではそれほど目立つ物ではないと身の程も知る。

「ごめんなさいね、歩かせちゃって。
もう、そんなに時間は、かからないから。」

前に行くフィンドルから、かけられる言葉。
それを聞いてシュナは我に返り、駆け足で追いついた。

「いえ…。
ちよつと珍しくて……」

都会の景色の他にも、軍服でない彼女の姿を見るのは、まだ慣れなかった。

外見上は元気があるように見える。

しかし、シュナはそれを額面通りには受け取っていなかった。
ここへ来る間も、取りとめも無い会話を少々交わしたが、魂の入
っていない言葉というのは、何となく判る。

「あら、見て。
ここ……いい場所だと思わない？」

休憩ついでに立ち止まり。
フィンドルが示した指先を、シュナは追った。

そこは角地の建物。

大きな扉、日よけのオーニング。

一面、ガラス張りの窓から奥を覗けば、厨房とダイニングテーブルが見えた。

どうやら、空き店舗のようである。

その旨を知らせる札が、扉に掛かっていた。

「ねえ、ここで、お店をやってみない？」

「え？」

彼女の唐突な申し出に、気の抜けた声を洩らすシユナ。

「私ったら、手に職が何も無いでしょう？」

でも、お金は結構貯めてるの。

だから出資人^{オーナー}になって、貴女にお店を提供する。

……勿論、メニューとか経営方針も、全て任せるわ。
貴女の料理の腕なら、きっと成功間違い無しよ。」

フィンドルはそこで、無表情のまま立ち尽くしている相手に気付いて、照れながら言葉を止めた。

「…あ、ごめんなさい。」

自分だけ先走っちゃって。

もちろん、嫌なら断っていいのよ？」

「いえ、嫌だなんてそんな…。」

でも……」

胸の高鳴りを抑えつつ、シュナは口ごもる。

料理人にとって、こんな話は千載一遇の機会と言ってもいい。

何しろ、世界的に有名な街に、自分だけの店舗が構えられるのだ。

そして何よりも、心から信頼出来る人間と手が組めるというのは大きい。

「……そ、その話……」

口先に、自然と緊張が走る。

だが、彼女は寸でのところで思い留まった。

「……フィンデルさん……おかしいですよ。

急に……どうして、そんな風に……」

「……?」

(割り切れる……はず……ない……か。)

フィンデルが見せる、乾いた笑顔の前で、言葉を飲み込むシュナ。

「とりあえず……その件は、ゆっくり考えさせて下さい。」

「そうね。」

でも、立地がいいから、先に誰かに買われなにかしら。
ちよつと心配。」

彼女は名残惜しそうに。

そして、その物件を舐めるようにして眺めながら、再び前を歩く。

それから、大通りの脇道の一つに入り、その先を進むと細い坂があった。

きつい傾斜を上げば、その坂をなぞるようにして建築された住宅群が姿を見せる。

シュナは少し緊張しながら、フィンデルの後に続くのであった。

一方、その二人と自ら進んで軍に残ることにしたミーサを除く他の面々も、特に軍隊に拘束されることも無く、
身柄を解放されていた。

彼等はいりあえず、疲労した身体を休めるため、付近の宿屋で部屋を二つ、半日ほど借りることにした。

乗ってきたタンダニアの飛翔艦では各個室に別れてしまい、何も話し合うことすら出来ずに、それぞれは
狭い部屋で鬱々と過ごしていたのだ。

今では。

それと対称的に、よく陽に干されているベッドのシーツの匂いが心地良い。

「もっと…行動が制限されるかと思ったんだがな。やっぱり、あそこの軍隊はどうかしてるぜ。」

「バカ言え。」

表向きに発表するどうかは知らんが……あのムーベルマに派遣された部隊は、『演習中の事故で全滅』ということにするらしいぞ。」

一息ついた後。

早速、こぼし始める戒に、バークが説明する。

「さらに、俺達を送り届けたのも、非公式らしい。タンダニアの連中が、そう取り計らってくれたそうだ。」

「……あいつらが？」

戒は思い返した。

数日前には、かの国の古い宮殿で、王とその重鎮達に謁見したのとまでは憶えている。

だがその後は、自分のことだけで手一杯の状態に陥り、完全に考えの外であった。

ただ、自分たちが帰還する際、彼等は姿を見せなかったの、さほど気に留められていないのだろうと思ひ込んでいた。

「もし生きている人間がいるってことが、騎士団側に知られてみる。きっと俺達も……これもんだぜ。」

首元に自分の人指し指をあてがい、横に引くバーク。
脇でそれを眺めていたパンリが、唾を飲み込んで固まった。

「…そして軍としても、今後も個人をいちいち監視するとなれば、面倒だろ？」

幸い、生き残ったお前らは民間人だからな。
いっそのこと完全に放流しちゃった方が、利口ってやつさ。」

「つまり、俺様達は初めから、ルベランセに乗っていなかったことにしろ。」

「そういうわけか？」

「そういうわけだ。」

バークが皮肉のように言い、紙幣の入った袋を取り出して顔をあおぐ。

「だからこそ、こんなにも口止め料をくれたんだろう。
後は、上層部の問題……組織同士の争いさ。
もう俺達には、どうにもならん。」

「だけど、てめえは正規の軍人だろ。
むざむざ辞める必要は……」

「艦長……いや、フィンドルと同じように、いい機会だと思ってよ。
俺はやっぱり、剣でも握っているのが性に合っているらしい。
リジャンの奴にも……そう、さんざん言ってきたがな。」

「……………」

「しかし……お前にしちゃあ、いい判断だったよ。」

バーグは悟ったような表情に変えて、ソファに半身を委ねた。

「何がだ？」

訊き返す戒。

「シユナを、彼女に付き添わせたことだ。」

こついう時でも、女同士だったら少しは気が紛れるかもしれねえ。

「

「人に取り入るのが上手いからな、あいつは。」

「……気が強すぎるのが少し不安だが……」

戒は、この部屋まで代わりに持ち運んだ、彼女の大弓と荷物を眺めた。

大学を目指して、やってきたこの地。

彼女やパンリと出会い、ルベランセに戻ったのが、ついこの間の出来事なのに。

そこで過ごした日々は、いやに遠く思えた。

「世羅には…あのあと、全部話したのか？」

壁越しの部屋で寝ているであろう世羅を思いつつ、バーグが訊ねる。

「あいつも子供じゃねえんだ……いちいち言わなくても分かるだろ。」

「…そうだな。」

だが、せめて…俺がルベランセに残ってりゃ、少しは…」

バーグが拳を手の平で打ち鳴らしながら、言葉を洩らす。

それまで、部屋の隅で気配を潜めていた、ザナナの周囲の空気が震えた。

「…自惚うぬぼれてんじゃねえよ。」

てめえなんか居ようが居まいが、きつと結果は同じだったぜ。」

だが、戒は低い調子で言い放った。

「冷静に思い出してみろ。」

あのルブランセの異常なブツ壊れ方…普通の人間の仕業か？

だから、無駄に気にやむな。

俺様達は、命が助かっただけでも運がいいんだ……ザナナ、てめえもだぞ。」

黙したまま虚空を凝視している豹頭にも声を向ける彼。

それと同時。

扉が勢い良く開く音と廊下を走る凄まじい音が、世羅がいるはずの隣の部屋から響いてきた。

「戒、大変だよ!!」

飛び込んでくるのも、やはり彼女自身だった。

「…何だよ。」

大変なのは、わかってるっての…」

呆れたように、戒は呟く。

「違うよ！

これ、これ!!」

それに対し、刀を差し出して大袈裟に喚く彼女。

「…どうして、まだ『そいつ』がここにあるんだ？
依頼は終わったはずじゃ…」

「ああ、それか。」

「そーいや、もう一回届けてくれるよう、ギルドから言われたそう
だ。」

「……そろそろ、約束の日だっけか？」

一人で納得しつつ、バーグが呟いた。

そのあたりの事情を知らされていなかった戒は、世羅が刀と一緒に
手にした添え付けの書類を取り、そこに目を通す。

「…丁度、このへんのギルドが受け取り場所になってやがる。
しかたねえ、行くか…」

「うん、行こうー!!」

彼女は既にバッグを背負い、外出を催促する恰好になっていた。

「やれやれ……全然、こたえてねえんだな世羅は。
休んでなくて、平気か？」

バーグは、苦笑混じりに言う。

「だって、くよくよしてても、仕方ないもん!!」

ねえ？」

明るく答え、今度はザナナの裾を強引に取って部屋を出ようとする彼女。

「ヒゲ、お前はここで待機だ。

案外早く、シュナの奴がやって来るかもしれないからね。」

「あ、ああ……。」

去り際の戒の命令に、バークは頷く。

「……まいったな。」

そして、世羅に半ば強引に連れ出されていく二人の姿が消えた後、頭を掻く彼。

「……どうしたんですか？」

同じく、それらを呆然と眺めていたパンリは不思議そうに訊いた。

「さっきからの、戒の言葉だよ。

いつも憎まれ口を叩いている野郎が、気を遣ってやがる。

……ってことは、『そういう事態』なんだろうな。

それを再認識してよ、おじちゃん、ブルーだぜい……。」

冗談めいた深い溜め息と共に、バーグは天井を眺めた。

「……パンリ、これからお前さんはどうする？」

「ど、どうしたらいいでしょう……」

失意の中、訊き返すパンリ。

「……この件からは、なるべく遠ざかった方がいいと思うぜ。」

だが期待しているような、慰めの言葉は返らなかった。

「いや、何も面倒だから邪険にするわけじゃねえ。

ただ、荷が勝ちすぎて……」。

今すぐに結論を出す必要はねえけどよ……それは念頭に置いておいてくれや。」

「はい……」。

彼の気遣いに対し、パンリも無理矢理に笑って応える。

しかし、とぼとぼと遠ざかっていく小さな背を、バーグは脇目で眺めていた。

喪失感が胸にあるのは、同じ思いだろう。

（……偉そうだったかな。

俺でさえ……似たようなもんなのによ……。）

ルベランセの惨状を思い出しつつ、瞳を閉じる。

イメージの中で得体の知れない相手と戦えば、戒の言っていることは本当だった。

あの場に自分が居たとしても、そこで仲間を守れた保証など無い。

（過ぎ去ったことは、どうにもならないとしても……。

…今、あの子達に俺が出来ることは……無いのか……？）

彼は首に巻いた細い鎖を取り出しては、同じ問いを何日も、心の中でずっと繰り返していた。

玄関先に荷物を降ろし、フィンドルは懐かしむようにして、家の中を見回していた。

自分が任務中でも定期的に掃除をもらっているせいか、埃や塵一つ落ちていない。

余計な物も無く、快適そうな住まいだった。

廊下からは、幾つもの個室とリビング、二階へと長細い階段が伸びていて。

一人で暮らすには、少し大きめな印象を受ける。

「……ここ、実家なんだけど、両親は別の所で暮らしているの。都会暮らしから離れたくなっただって。」

フィンドルは訊かれる前に、自分から語りだした。

「なんとなく、わかるような気がします。」

あの雰囲気、早くも気が滅入りそうですよ、私も。」

シュナがそう返し、玄関扉を閉めようとした矢先。

その隙間からすると、小さな猫が侵入する。

「……?」

はっとして、二人は同時に振り返った。

「……梅さんじゃない!」

笑顔で駆け寄り、その脇を抱えて持ち上げるシュナ。

《……なあー》

梅は丸っこい顔を向けて、軽く鳴いた。

「軍の敷地からついてきたの？」

艦長のこと、よほど気に入ってるのね……」

そのまま抱え、シュナはフィンデルへ体を向ける。

「よして！」

「？」

だが、彼女の突然の叫びに、思わず止まる足。

「……私は……もう艦長じゃない……」

それも……近寄らせないで……」

「……すみません……」。

気持ちが少し過敏になっている程度だろうと、彼女は思った。

「……でも、何も知らない動物に当たるのは、よして下さい。
当たるなら……私に。」

そのために、ここに居るんですから。」

「……いいえ。」

謝るのは、自分の方だわ。

……どうかしてるのね。」

ばつが悪そうに、フィンドルは顔を逸らしながら早口で言う。

「…そうだ！」

「ここでお店を経営するのもいいですけど……気分転換に、ロディさんの国に行きませんか？」

「……慰めてもらって？」

「せっかく、あの人も新しい道を歩きだしたのに……その足枷になつてどうしろというの。」

「向こうがどう思つかなんて、行ってみなければ分からないじゃないですか。」

「押しかけちゃえば、こつちのものというか……」

「私は……貴女みたいには、生きられないわ。」

体を返し、出入り口へと戻る彼女。

「……何処へ行くんですか……!？」

「わかったの。」

「他人と一緒に居ると、嫌な思いをさせるだけだつてことが。」

震えた唇で作る笑顔に、シュナは胸が痛んだ。

そこへ、抱いた梅のぬくもりが敏感に伝わり、そのまま一步も動くことは叶わなかった。

宮殿からの送りの馬車から、駆け下りる三人。

時刻は、陽が昇る前である。

だが、ルベランセの格納庫は、辺りの全てを明るく染めるほど、業火に包まれていた。

随所に展開している作業員達が、他の部分に火が回らないよう、ハンマーでそれらを必死に壊している光景。

「　　待て、ここは立ち入り禁止区域だ。

関係者以外は…」

発見するなり、彼らは険しい顔つきで呼び止める。

「関係者だ！」

それを一喝して退け、戒は世羅の手を強く引いて進んだ。

「……………！！」

戒くん……！」

やがて、行く手にある簡易の休憩所で座り込んでいたパンリが、

立ち上がる。

普段以上に青白い顔をして、彼の膝はずっと震えていた。

「…わ、私達が帰ってきたら…こんなことに…
こんなことに…なるなんて…!!」

説明を求めることなど、出来る状態ではなかった。

「…ひどいもんだ。」

「ああ。」

「…他国の艦だっけか…?
もうダメだろうな…」

そこで作業の人垣から、聞こえてくる会話。
戒は世羅から離れ、パンリの肩を強く掴んだ。

「……他の連中は？」

「シユナさんとミーサさんは…向こうで休んでいます…」

「わかった。」

お前も…世羅をつれて、そっちで休め。」

戒はそう言い残し、今度は全力で駆けた。

ルベランセの脇腹に、臨時で設けられたタラップ。
そこから艦内に踏み込むと、廊下は至る所に赤い染みが広がって
いた。

焦げた匂いが充満している方向へ進み、上から格納庫を見下ろす
と、戦闘騎の残骸が手付かずのまま放置されている。

愛機だったものの大半は溶けており、もう見る影も無かった。
戒は諦めて、逆側へ走る。

暗がりの細い廊下を、作業をしている人員。
彼等は、傭兵の遺骸を手押し車に積んでいる最中だった。

途中、やはり注意を促す者が沢山いたが、それらを強引に押しの
け、一直線にブリッジへと突入する。

半壊した扉をくぐると、彼は直後に何か柔らかい物を踏んだ。
手で触れてみると、指先から甘ったるいバニラエッセンスの香りが
した。

やがて目が闇に慣れるにつれ、床にケーキの箱が叩き付けられて
いることが判る。

その無造作に転がる苺の先には、ザナナが居た。

「……無事だったか。」

安堵して近寄るが、戒は思わず動きを止める。
見た目こそ普段と変わらない背中だったが、力を込めて握られた
槍先は異様なまでに震えていた。

「!」

そこで、急に脇から沸いた気配。

暗闇の中、煙草の火に照らされた白い眼が、妙に映えている。

憤怒を押し殺した、バーグの顔だった。

「ヒゲ、てめえも無事か。

…悪運の強い野郎だぜ。」

戒はそれを確認してから、表情だけをほころばせた。

「…これは…騎士団の連中の…仕業なのか？」

「まだ決まったわけじゃねえ。

だが、大いに関係しているだろうな。

さつき、早馬が知らせに来たんだ。

…モンスロンのおっさんも殺されたって…な。」

そこまで言い終えると、バーグは煙草を一気に吸い込み、大きく
煙を吐き出した。

「……冗談、だろ…？」

「冗談言えるほど、気なんて回らねえよ。

しかし相手は、どんな奴にしろ、あのアイザックの連中を軽々と越えて、ここに達したようだ…。

かなり、殺しに手馴れた集団ってことは間違いないだろう…」

「……ミラは…！？」

「ここの守りを仕切っていたあいつは、何処だ？」

戒は思い出し、バグに詰め寄った。

「まだ、死体が発見されてねえ。

だがおそらく…あいつらと同じように…」

顎あごの動きで示しながら、彼は答えた。

その背後の先、毛布をかけられて床に横たわる、三つの人影がある。

「……！！」

先程から、視界には入っていた。

認めたくなかった。

だがやはり、あれはブリッジの連中なのだ。

その事実を彼から突き付けられた戒は、息を呑んだ。

「…ところで、艦長も無事なんだろうな。」

バークは抑揚の無い声で問う。

「とにかく彼女だけは、どこかで留めておいてくれ。
これは見せられ…」

止まる言葉。

そのフィンデルが、既に戒の背後に達していた。

「以上、報告を終わります。」

眼前の円卓に並ぶ重鎮達を前に、言葉を締めくくり。
一旦、席につくギルチ。

軍隊の上層部と称される連中。
どれも將軍階級の老人達は、渋い表情を浮かべたまま、終始無言であつた。

そんな中、ギルチはフィンデルからの報告を包み隠さずに、詳細を報告した。

場違いな感想だが、何か喉につかえていた物が取れ、どこか妙に晴れ晴れとした心地さえする。

「そのモンスロンという男の亡命……確かに許可をしたが……」

「だから、この話は危険だと言ったであろつ。」

「また、政府に追加予算を申請せねばな……頭が痛いのが。」

誰かが呟くと、それに連鎖するように、次々と言葉が噴出した。

「それで、ギルチ准将。」

報告の最後の部分だが……我々、中王都市軍の艦隊を襲撃したのは『騎士団』の仕業が濃厚だというが……それは真実なのかね？」

だが、議場の中心に座る老人 総司令：バスーティ大将の言葉に、静まる空気。

「確たる証拠は無く、様々な状況による予測に過ぎません。」

そんな具合で、臆面も無く答えるギルチに、場はすぐさま騒然に立ち戻る。

「それが事実だとしたら、由々しき問題だぞ。」

再び、誰かが言った。

「この作戦の、元々の立案者は誰だ？
騎士団の連中をいたずらに刺激して……何の得があったというのだ？」

言う通り、一連の作戦が非常にリスクの高い賭けであることは重々承知していた。

ゆえに、ギルチに羞恥は一切無く、この屈辱を作業的に耐えるだけであった。

もはや頭を垂らして、罵詈雑言を浴び続けるしかないだろう。

「こたひ此度の失敗の責任は、現地の指揮に当たっていた、ネウ提督にあり。」

(！？)

だが、不意に耳に飛び込んできた一言に、彼は頭頂を素早く上げた。

「作戦自体は、実に良く練られていた。
それこそ完璧を絵に描いたような作戦といえる……それが失敗となると、現地の指揮能力を疑わざるを得ない。

たとえ10万の軍を率いたとしても、それを統べるのが赤子の大將ならば、大敗するのは必至。
違いますかな？」

注目が集まり、ここぞとばかりに立ち上がって小演説を始めたのは、副指令官のグッソである。

ギルチは、はじめ、その光景に目を疑った。

元はといえば、グッソが命じた作戦であつたが、それは公式の仕事ではない。

失敗したならば、トカゲの尻尾を切れればいいだけの話である。

彼があえて己の立場を危うくする発言など、無用のはずだった。

それが、一介の若い將軍にすぎない自分を、身を挺してかばうような行動をとっている。

しかし、その裏に内包されている意味には明らかで、ギルチはすぐさま勘付くことが出来た。

グッソは、以前から総司令の座を欲している。

これを見返りに、本格的に協力せよと暗に語りかけているのだ。

以前から特別に目をかけられていたことが、こういった狙いの伏線ならば、実に巧妙で狡猾な軌道修正である。

ギルチは奥歯を鳴らした。

自分の才覚をそれだけ買われていたという事実は喜ばしいが、こんな形で弱みを握られることなど望んではいない。

だが彼としても、功績を長年に渡って積み上げて、ようやく得たこの立場を、安いプライドなどで失うわけにはいかなかった。

「…中将の…仰せの通りです…」。

失敗の原因があるとすれば…ネウ提督の采配に他なりません。」

自分には軍隊と国家の正常化という、確固たる大志がある。
それらが、ギルチの口を自然と動かしていた。

「艦隊の指揮者選任は、貴様であろう！

自身に責任は無いと申すか！！」

配られた書類を手の甲で叩きながら、正面の将校が怒号を飛ばす。

「彼をこの本部に呼んだのは、我々ですぞ！！

そのような辞令さえ無ければ、ギルチ殿本人が指揮を執っていたに違いない。

…これは彼にとっても、正に苦渋の選択だった、違いますかな！
」

代わりに反論したのは、やはりグッソだった。
その剣幕で、相手は途端に萎縮する。

「グッソ殿…いやに、ギルチ殿をかばいますな。」

かけられる、総司令の言葉。

「いかにも。

彼の才覚は、私が認めるところですからな。」

途端に、場は静まり返った。

ギルチは、グッソの軍隊中枢における権力の大きさを、改めて知った。

それ以降、流れに抗うような空気は全く生まれなかったのである。

「このような事態になることは、私ですら予想しえなかったことです。

ならば、神にも知り得ないことでしょうとも。」

「……だが、誰かが責任はとらねばなりませんぞ。
今回の作戦で殉職した名家の人間も多い。
何かしら示さねば、彼等の遺族は納得しませんからな。」

神経質そうに肩を揺らしながら、別の将校が呟く。

それをあしらうように、両の手の平を下げて、グッソは口を開いた。

「このたび刻む戦没碑の名簿に、ネウ提督の名を除外。
並びに、彼の殉死による階級の特進無効を提案する。」

「……ふむ。」

それが妥当か。」

総司令の一言に、一同が頷いた。

「それでは、これにて今回の会議は閉会……」

「待たれよ。」

その言葉を遮るグッソ。

「まだ何かあるのかね？」

「お分かりになりませぬか、総司令。」

彼は、全員を睨み付けて言った。

「一連の顛末^{てんまつ}から見て取れる、用意周到な騎士団の備えを。

これは、此度の亡命の話の有無に関わらず、牙を剥く準備があったということ。

それに対抗するため、我が方でも軍団・軍備の再編成を提言いたします。」

「……確かに……！」

彼の熱気に^{ほた}絆されて、議場では気運が高まっていた。

戦意旺盛な騎士団に対抗するには、高齢の総司令では、甚だ役者

不足である。

そんな中で、グッソからは頼りになる指導者のイメージを感じさせるものがあった。

この会議でギルチを糾弾する印象は薄れ、それだけが極まる結果となったのは、果たして幸か不幸か。

結局、この日の会議では、騎士団への主な対応策はまとまらなかったものの。

近いうちに、彼を中心とした組織が出来上がるに違いない。

そんな近い将来を思わせるには、十分な会合となってしまうた。

議場の末。

独りで席に残るギルチは、虎穴に進んで雌伏する策を練り上げていた。

この先の自分の働きは、友の汚名と引き換えにする価値があったものにしなければならぬ。

それは彼にとって、己の志以上の絶対の課題となった。

彼女は、ただ歩いていた。

目的も、何も無い。

街を歩く人は誰も、自分のことを知らない。
また、知ろうとも思わない。

それが、驚くくらいに気休めになった。

陽が真上に達した頃。

彼女は、妙な不安に襲われた。
精神的ではない、肉体的な不安である。

強い視線、そして何者かが、自分の後を追ってきている気配。

それは直感だった。

だが、事実だとしたら、大胆な行動である。
この街中の人目も憚ることもなく、この高陽も厭わないというの
か。

用心のため、身を隠すようにして、小道に入る。

だが運悪く、その物陰で待ち構えていた人影がそこで飛び出して、
彼女の背中に張り付いた。

続けざまに肩口に突きつけられる、堅くて細い円筒状の物体。

「…フィンドル大尉……ですね？」

同時に、くぐもった声が耳元に囁かれる。

「今では、ただの民間人です。」

逃げることを諦め、淡々と答える彼女。

「はは。」

こいつは…お早い。

もう、退役なされたので？」

男は嘲るように笑い、背中越しに続けた。

そこで不意に、突きつけられた得物が放される。

フィンドルが慌てて振り向くと、それは単なる万年筆であることがわかった。

対面した中年の彼は、それを器用に回転させて胸ポケットに仕舞うと、目深に被っていた平たい帽子を片手で上げて、会釈をする。

「なあに、私は怪しい者じゃありませんぜ。

仲間には『遠目のオーロン』と呼ばれている、しがない『アイアン・ウォー誌』という新聞の事件記者です。

少し過激にプロパガンダや民族運動などを、主に扱っているけど

も……まあ、見識者には、全く相手にされん三流新聞ですがね。」

「……記者の方が……何の用ですか。」

「すつとぼけなさんな。」

……飛翔艦ルベランセの艦長殿。」

「……なぜそれを……」

「けつこう以前から、目を付けているんですよ。」

あの日和見^{ひよりみ}な軍隊に在りながら、南の方で派手にドンパチして来たあたりからですかねえ。」

そこで彼女は、口をつぐんだ。

「そして、今回の件も含めて……」

民間の者にも、もっと知る権利があるんじゃないかと思ひまして。

」

そんな彼女の反応を、鋭い目つきで観察しつつ、彼は続ける。

「一体、東では何が行われたんです？」

表向きは演習だったらしいが ただの一隻だって、戻った様子が無いじゃありませんか。

他国の物らしき飛翔艦に乗って、帰還した貴女方を除いて。」

「……。」

「やれやれ…私は既に、中王騎士団の不穏な動きも嗅ぎ付けているんですよ。」

長年の軍隊との確執と合わせて考えれば、おのずと一つの可能性が見出されると…」

「その件について嗅ぎ回るのは、おやめなさい。貴方も命が惜しいでしょう。」

「いいえ！」

やめるわけにはいきませんねえ。
これも野次馬記者の性でして。」

彼は手に取った万年筆のフタを噛みながら、興奮した口調で言った。

「貴女にだって、義務があるはずなんですよ。」

この国に迫る脅威というものを、国民に知らせる義務が、ね。」

「当事者でない人間に、何が解するというんですか…！」

「理解など出来ませんよ！」

そりゃあ。」

細々と喋る彼女を威圧するように、オーロンは声を張り上げた。

「だけど…それを僅かでも理解したいから、記事というものがあるんです。」

どうしても、お気持ちは変わりませんか。」

「……もう何も考えたくない。
もう、その件には触れたくないんです。」

「ふむ…逃げるおつもりで。」

「腰抜けは所詮、ただの腰抜けです。」

あの時、自分は変わることが出来たのだと思いました……人間、
そう上手くはいきませんよ。」

「？」

事情を何も知らない彼は、眉をひそめた。

悟ったようであり、諦めたようでもある複雑な面持ちで、彼女は
脇を過ぎていく。

「……おっとと、待った……！」

「何ですか。」

「連絡先です。」

私は、ここの酒場で情報屋もやってるんですよ……」

オーロンは作り笑いを浮かべながら、一枚のコースターを差し出
す。

「必要ありません。」

「まあまあ、そんなこと言わずに。
身の安全は、情報から。」

これは貴女のためにもなりますよって……」

それを無理矢理、彼女のポケットに捻じ込む彼。

半ば振り切るように、フィンドルは駆け足で路地を抜けようとする。

ほんの一瞬であった。

正面の大通りを横切る、とてつもない速度の馬　　大きな個室
付きの馬車。

その開かれた扉から飛び出した太い腕が、彼女の身体をさらって
いく。

「……！」

オーロンはすぐに後を追ひ、路上に出て周囲をつかかった。

だが、逆側から走りこんでくる、別の馬車。

咄嗟に飛び退いた彼は、尻餅をついたまま視界に落ち込んだ自分の
帽子で額の汗を拭う。

心臓の鼓動を落ち着けると、自分の聴覚は間もなく周囲の普段の
喧騒を感じていた。

まるで、彼女は別の世界へ忽然と吸い込まれ。
自分だけ置いてけぼりにされたかのよう。

他の人々は、何にも気付くことなく、生活を続けている。

一連の事件を象徴しているような今の体験に、彼は余計に苛立っていた。

2

「見事に……こつぴどくやられたもんだよなア……」

隅に積まれた荷箱の上に胡坐あぐらをかき、頬杖をついたまま。
戒は他人事のように呟いた。

視線の先のルベランセでは、昨夜に引き続き、大量の人間が群がっている。

中でも、格納庫の被害は壊滅的だった。

彼等はフィンデルの了承を得た上で、倒壊の恐れがある箇所の撤去作業に取り掛かっているらしい。

反面、艦のブリッジや居住区画における物的損害は、ごく微量だった。

だが通路の一部は酷く痛んでいて、まるで巨大な獣がそこで大きな牙を研ぎ、暴れ回ったような

『破壊の痕跡』^{たと}としか喻えようのないものが、壁や床に幾つも残っていた。

そして機関部においては、『源炉』が根こそぎ持ち去られていることが、後になって判明したのである。

ルベランセは、もう飛べない

そんな噂話が、遠くの作業員達から聴こえた。

昨晚の豪雨とはうって変わり、莫迦^{ばか}みたいに晴れ渡った日中では、それらの様相があまりにも明らかにすぎた。

眺めていると、自分が陵辱を受けたかのような、惨めな気分さえなった。

そしてやはり。

そのような光景を進んで眺めている物好きな乗組員など、世羅と自分くらいだった。

誰しも目を背けたい光景なのだ。

…なのに、その様子をじっと凝視している世羅の様は。
まるで、その澄んだ大きな瞳で、景色や思い出、全てを焼き付けるかのようなだった。

戒は傷心のままにルベランセから目を逸らし、そんな横顔を見詰めていた。

ギルドで依頼品の受け渡し手続きをする最中、戒はずっと考え込んでいた。

(……あれは絶対に、物盗りの手口じゃねえ……)

いま卓上に置かれた、レバーナ自治港から因縁のある刀も、
全くの手付かずである。

（取られたものといえば……源炉…飛翔艦の部品か……。
これらに執着してるとなると…これまでどおり、炎団が騎士団の
仕業って考えるのが妥当だが…）

虚ろな表情のまま、目を薄く閉じる彼。

「はい、おまたせ。

……悪いけど、この品物。

ちよつと問題があつて、受け取れないんだよねえ。」

そこで丁度、奥の部屋から戻ったギルドの主人が、とぼけた口調
で言ってきた。

「…何だと？

言っておくが、どこも壊してねえぞ。」

意識を現実に戻し、戒は強い口調で返す。

「いや、そうじゃなくて……。

あんたら、約束よりも早く着いただろう？

こいつは特別な品物でねえ…改めて指定日に、依頼人に直接手渡
して欲しいんだが。」

「やたらと面倒くせえな。

…どういうことだ？」

「理由は不明だよ。」

「あ？」

顔を強張らせて、思わず詰め寄る戒。

「…もしかして、本当にヤバイ品物なんじゃねえだろうな？」

「詳しいことは分からない。」

でも、数ある輸送の仕事の中でも、ここまで用心してる依頼人も珍しいと思うよ。」

それをなだめるように、相手は卓上に置かれた刀を指差す。

「…珍しいもクソもねえっての。」

これ、前回は入れ違いだったらしいぞ。」

「と、とりあえず、依頼主に連絡しておくよ。」

時間が合えば、すぐに取りに来ると思うから。」

「すぐっていつだ？」

「向こうの都合もあるから、正確には答えられないけど……」

「いつそのこと、この刀……ここに捨てていくか。」

「そ、それは困る……！」

主人が顔を青くしたその時。

戒の後方で、それまでおとなしく待っていた世羅が脇に並ぶ。

「じゃあ、ボク待つよ。」

「…いつになるか、わからねえんだぞ。」

戒は前を向いたまま、呆れ声で言った。

「待つ。」

だが、にっこりと笑顔で返す彼女。
目を一瞬だけ、下に向ける戒。

「…おい、おっさん。」

ここで待つてりや確実なんだな？」

「ああ、それは勿論。」

一転して、まとまりかける話に、主人は安堵を交えて答えた。

「わかったぜ。」

なら…俺様は暇つぶしに、しばらく辺りでも散歩でもして来るか

…」

言いながら、背後の壁際で待っているはずのザナナに視線を向け

る戒。

だが、その彼は、おもむろにギルドの扉を開けて、外へと出ようとしている最中であつた。

「あの野郎、勝手に……！」

世羅、お前はここで待つてろ。」

戒は彼女に刀を渡し、急いで後を追う。

「おい！ どこへ行くつもりだ！？」

そして、決して早足ではないが、既に目の前の大通りを横断しているザナナに向かい、彼は叫んだ。

「わからん。」

その答えは、足も止めず、背に抱えた白い槍の僅かな振りと共に返される。

「だが、世羅の用件、済んだ。
ザナナの用も、ここで終わりだ。」

戒がようやく追いつくと、彼はさらに告げた。

「……まだ何にも終わってねえだろ。
こんな所で、消えるつもりか。」

「……あのことは、気にするなって言っただろ。」

彼の背中に向かい、戒は息を切らせながら言った。
だがザナナは黙ったまま、歩調を早めていく。

「もしも、あの時とか。」

ああだっただら……こうだっただら……とか、過ぎたことを後悔しても
どうにもならねえんだよ!」

何処へ向かうということもなく。

裸足の乾いた音が、良く整備された地面を鳴らして行っただ。

「それに……お前、ブリッジの連中と、そんなに親しかったわけじゃ
ねえだろうが!」

叱咤の声に、音は停止する。

戒も動きを止め、眼前の着物の肩越しに振り向いた豹頭を睨み付
けた。

「人は、いずれ死ぬもんだ。」

あの森で、俺様にそうやって偉そうに説教垂れたよな、てめえ。」

「……そうだったな。」

獣皮の口から、低い声が漏れる。

「だろ？」

「だったら……」

「あのとき、ルベランセに残っていたのが、もしも世羅だったら。」

さらに零^{こぼ}される悲痛な声に、対する戒は言葉を失った。

「何が、笑顔を見たい、だ。」

「こんなにも、ザナナは弱い。」

そして、着物の左胸を掴みながら、天空を見上げる彼。

「フ族の社会で、ザナナの守る力など、無いに等しい。
それが、よく分かった。」

「！」

戒は気付いた。

一瞬の油断が、全てをもぎ取っていく恐ろしさを、ザナナが知ったこと。

そして、今までの自然の中での営み・死生観から、彼の環境は明らかに変わってしまった。

それに引きずり込んでしまったのは、自分にも責任の一端がある。

「……だからって、世羅から逃げれば済むことか？
お前が急にいなくなったのを知ったら……あいつは、きっと悲しむぞ。」

それでも、ザナナの前に回りこみ、わざと意地の悪い言葉を投げかける彼。

だが、何も返らない。

錆び付いた鐘を叩いた音のように鈍重な。
そんな、曇った眼差しだけが返されていた。

「……弱いだとか守る力が無いだとか……らしくねえことばかり抜かしやがって……
もう勝手にしやがれ。
俺様は初めから、ついて来てくれなんて、一言も頼んでねえんだからな。」

「……そうさせてもらう。」

大した応酬も無く、二人は交差する。

だが、何歩か進んだ後、わずかに振り返る戒。
しかし、そこにザナナの姿は無かった。

「くそっ！」

「どいつもこいつも!!」

直後に、足元の石を蹴飛ばして八つ当たりをする。

「!？」

その膝頭をかすめて、疾走していく一台の馬車。
驚きのあまり、戒は道の真ん中で尻餅をついてしまう。

「あ……ぶねえーな!!」
「……畜生!!」

見知らぬ街。
道。

（……潮時か……。
もう、ここにいても……何もねえ……。）

景色が巡り、回っていく。

（……人数なんて……少ねえ方が楽かも……。
今……世羅以外の奴と、一緒にいる理由なんて無えんじゃねえか
……。）

彼は改めて、街を見渡した。

数多の人々は、殆どがそれぞれ別の方向に向かっている。

他人をいたわるほどの余裕は、あまりに自分らしくない。

それが、苛ついている原因なのだと、彼は気付かされたような気がした。

同刻。

重厚な鉄扉を軋ませ。

ユイウスは狭い部屋から解放された。

「久しぶりの…反省房の居心地はどうだった？」

それを廊下で待っていたマピットは、明るい口調で声を掛ける。

「寝ていたから、わからんな。」

「まあ、半日くらいじゃ堪えないわよねえ…」

彼に寄り添い、右腕に巻かれた包帯をほどく彼女。

「もう……問題児なんだから。」

そして軟膏を取り出すと、彼の青痣あざの出来た箇所箇所に優しく塗りこんでいく。

「奴はどうしてる？」

「ギユスターヴのこと？」

「ああ。」

自分の手の甲に残った齒型の跡を眺めたまま、彼は言った。

「拘束したまま、懲罰房に入れてるわ。
あっちは無期限だけど。」

「……………」

「…なんかねえ……………」

額を押さえて、苦い表情を作る彼女。

「もう精神が崩壊しかけてるの、上層部も承知だったみたい。
あれじゃあ、もう任務に耐えられないってのを再認識したようね。
部長も、いま対策を考えているわ。」

「処刑するのか。」

「最悪の場合……そうなるわね。」

あ、でも、ユーイはもう、その件には関わらないで。」

「何故だ？」

「そりゃそうでしょ、あんなことになって…。」

あの野蛮人、相当頭にきてるんじゃないの？

何が起こるか分からないから、金輪際、あれとの接触は絶対禁止ね。」

そう言って、マピットは指で彼の腰をこづいた。

「ところで、さっき首都のギルドから連絡があったの。」

ユーイの新しい装備が届いたらしいわよ。」

「……。」

「あまり嬉しそうじゃないわね。」

「今の刀より、良い物など無い。」

「ダメなのよ。」

久遠の人間は、ちゃんと組織が指定した物を持たないと。

特に、上の人間がモグリの武器を使っているのは、示しにならない
いうこと。」

表情を、より一層不満そうにする彼に、彼女は忠告した。

「とにかく、部長に挨拶してきて。

……恩情で早く出してもらった御礼を、しっかりね。

私は地上で、一足先にギルドで用を済ましておくから
例のお店で落ち合いましょ。」

「ラソーネル？」

「そ。

今回の任務の打ち上げをするから。」

「ハ・ラシンも呼んだのか？」

「呼ぶわけないでしょ。

あんな奴。

大体、またどっか行っちゃって、音信不通なの。」

「そうか……」

「あと、もう我慢できないだろうから……はい、お弁当。」

「！？」

突如、彼女の両手から差し出されたバスケットに驚き、たじろぐ
彼。

「どうかした？」

「……いいいや、何でもない。」

「そう？」

……あと、ちゃんとお風呂も入って来てね。

あそこは、上品な店なんだから。

……他人の目もあるし……私の彼が不潔なんてイメージつけないもの……」

「……………」

独りで自分の世界を作り、呟きながら去って行く彼女との距離を見計らい、ユイウスは受け取ったバスケットの蓋を、
そうつと開いてみる。

案の定。

そこからは、強烈な臭気を放つ、焦げた謎の物体が顔をのぞかせていた。

これは、たとえ100日間絶食した直後に出されても、食すことが出来ないだろう。

そう断言できる代物であった。

深く続く、螺旋階段。

その眼下では、今はもう使われていないはずの祭壇に火が灯され、数名の影が揺らめいていた。

「おや、珍しいねえ。」

紅蓮^{くれん}ちゃんじゃないの。」

そこを大股で降りながら、途中で気付いたハ・ラシンがおどける。

「…騒ぐな、鬱陶しい。」

赤黒いラバースーツに全身を包んだ女性が、それに反応した。

その顔に付けられた平たい仮面の奥から、低めの声が囁かれるた
び。

各関節部に備えられたシリンダーと管が、上下に動く。

「やれやれ……こうなると、どこの仮装集団だよって感じだよ。
なあ、デИБオレアル。」

自身で揶揄^{やゆ}した通り、今はハ・ラシンも顔を仮面で隠している。

「無駄口はよせ…。」

各々の用件だけ済ますぞ。

まずは、前回の…。」

奥の闇から、腕を軽く組んだ黒い甲冑が動く。

「素材だ…素材が欲しい。」

私のさらなる『絶頂』の追求のためには、素材が足りぬ。」

そんな流れを無視し、自分勝手に口火を切る紅蓮。

「……この間、大分よこしたはずだ。
あの量で、まだ足りんのか。」

「今度は、『生きている素材』が欲しい。
とびつきり、良質の素材が。
…私を興奮させる程の素材は無いのか。」

彼女は己の肢体を悩ましく擦じらせ、狂気を孕ませて語った。

「贅沢を言う…」

そのディボレアルの言葉の直後。
地面が、大きく破碎された。

「……私の可愛い傑作が、ゴーベ山脈で死んだ。
死んだ。
誰のせいかな？」

出来た穴から、腕を抜く紅蓮。
その拳からは無数の金属と液体が飛び出ており、搭載されたシリ
ンダーから緑色の煙が立ち上っていた。

「炎団では、以前の件で被った損害で、騎士団への不満を口にする者も少なくない。」

それなりの覚悟をしておくことだ。」

「おいおい、あれだけこき使っておいて、フォロー無しかよ。騎士団もお寒いねえ。」

軽口を挟むハ・ラシン。

「元々、成功報酬という約束だ。

無能な者達にくれてやる褒美など無い。

紅蓮：貴様個人には感謝しているがな。」

己の腰に下げられた、念通球が埋め込まれた剣の柄に触れながら、彼は言った。

「……そんなもの、我が技術の、ほんの『さわり』に過ぎん。オモチャも同然……」

精神体技術学とは、まさに芸術なのだ。

永遠の命……それに直結する芸術……そして、それは母性にも似た……」

「ああ、それよりさあ。」

難解な話が長くなりそうなのを見込んで、ハ・ラシンは話題を変える。

「ディボレアル……骨が折れたんだぜ、今回は。
タンダニアまで、わざわざ行って……」

「源炉、確かにいただいた。
礼を言う。」

「……それだけ？」

やはり^{わづ}勞いの欠片も無い、儀礼的で平淡な言葉に、閉口する彼。

「しかし何故、ルベランセを必要以上に破壊した？
そんな必要は無かっただろう。」

「ああ、それか。
……不確定要素が混じったのさ。」

その鋭い問いに、彼は言葉に笑いを混ぜて誤魔化した。

「久遠ほどの連中が、何に手こずったというのだ？」

「実は今回、『決闘者』の素質がある二人を引き合わせてみたんだ。
前々から機会が欲しかったからね。」

「なるほど、それである結果か。」

「そういつこと……」

彼は顎を下げ、仮面を指で押さえた。

守備隊を殲滅の後、ルベランセのブリッジを蹂躪^{じゆうりん}。

完全なる制圧につき、これ以上の滞在も、戦闘行為も無意味だった。

「……よ……弱い……
弱いな……」

「だが、横たわるルベランセの搭乗員の遺体を踏みつけ、ギユスタ
ーヴが喚^{わめ}く。

「やめなさい。
もう任務は終わったのよ。
さもないと……」

彼の異常性に、敵意をむき出して、戦闘体制に入るマピット。

「……か、かわりに……お前が……くれるのか？」

視界の隅に入る、その少女の殺気は、彼を心地良くさせた。

「……どうした、ピット。」

そこで、ユイウスもブリッジに到達する。

少々の苦戦があつたのだろうか。

露にした褐色の上半身に、^{すす}煤を残した姿。

彼はブリッジの惨状よりも、両者の鬼気迫る空気に、少し驚いたような表情をしていた。

「任務は……無事完了。」

でも、彼が撤退命令を聞かないの。
危険だわ。」

「つ、次は……おまえ……たたかえ……。
まだ……血が……足りない……」

「……貴様と戦う理由はない。」

彼の刃を向けての申し出に、^{あわ}憐れみを持った瞳で応えるユイウス。

「ブルウ……ブルウ……ヒイ……!!」

直後、ギュースターヴは獣のように鼻を鳴らし、両手足で床を駆けて襲い掛かる。

骨の激突する音。

両者の左拳が、互いの間で炸裂していた。

その衝撃の後。

新たに踵^{かかと}を踏み締める二人。

そして再び、ほぼ同時。

今度は水平に激突する。

刃を噛み合わせ、力を込める。

宙で拮抗する二つの身体。

それが落ちる一瞬、ギユスターブが素早く身を丸めこみ、ユイウスの肩に蹴りを放つ。

そして、離れざまに、顎^{あご}。

最後に、鼻柱を爪先で跳ね上げる。

「…………ッ…!？」

顔を天井に反らしたまま、硬直するユイウス。

「ヒヒヒイ…!!」

恍惚の表情で、ギユスターブは晒^{わら}った。

(…ユーイが…押されてる……!?)

マピットが、手の甲に付けた端末を紐解く。

「…手を出すな!!」

だが、それを拒んだのは、ユイウス自身だった。

言葉の最中も、眼前に飛び込んでくる腕刀。

横に一回転し、空を薙ぐギユスターヴ。

だが、瞬時に腰を落としたユイウスの刀の柄が、その腹にめり込んでいた。

「グウ!？」

激痛に驚き、床を跳ね退いて、廊下へと退避する彼。

ユイウスも直ちに駆けて、それを追う。

両者がその狭い空間を疾走する間も、互いの数撃は続いた。

天井、壁、床。

それらを全て利用し、身体を跳ねらせながら、斬合していく。

そして、進む道々を削ぎ落とす。

パイプが露出し、タイルが砕け、それが肌を擦っても、二人は動きを止めなかった。

笑みを浮かべ合い、まるで戦闘に興じるようであった。
疲れなど、微塵も無い。

ルベランセでの戦いが準備運動だったかのように、二人は生き生きと、死合つ。

連撃に次ぐ連撃を制したのは、ギュスターヴであった。

ユイウスの得物を横に弾くと、肘を弓なりに引き、腕刀の切っ先をその眉間へと一直線に飛ばす。

だが、間一髪で顔を横にかわされ、それは壁に深く突き刺さった。

「……ウ…ッ!？」

その怯みの隙。

ユイウスは、彼の頭を仮面ごと掴む。

そしてそのまま体を入れ替え、相手の身体を壁際へと追い込んだ。

途中、手に相手の歯が食い込むが、構わない。

逆に離れないのが好都合とばかりに、さらに押していく。

壁が、ひび割れたのが一瞬。
すぐに全てが砕かれて、その先の廊下へと抜ける。

同時に、ユイウスの脈動する胸筋には、緑光した鱗の紋様が浮かんでいた。

「り、竜………！？」

掴んだ手の奥から漏れる、眩き。

「…うう…ブルルルアアアア！！」

刹那の間に、それは悲鳴へと変わる。

ユイウスは片手で彼を掴んだまま、引き摺って屠り、床にこすりつけて、さらにそこを深く抉^{えく}っていった。

そして静寂が訪れてから、ようやく足を止め。

動かなくなつたギユスターヴを無造作に壁に放り投げると、とどめの右拳を握りこむ。

「よし、そこまで。」

その首元に、大鎌の刃が触れた。

「なーに、やってんの味方同士で。」

もし、私闘でそれ以上やるんだつたら、ただじゃすまんよ。」

両者の間に潜り込んだハ・ラシンは、片眉を上げながら伝えた。

しかし、蒼瞳を爛々と輝かせ、笑みを浮かべているユイウスは、手を引かなかった。

脇から飛び出す、金属の球体。

そこから伸びた鎖が、ギョスターヴに絡みつき、瞬時に拘束する。

「もう気絶してるわ、ユーイ。」

奥から追ってきたマピットが付け加えた。

彼女の操作する言霊の、数ある能力の一つである。

ユイウスはゆっくりと声のする方に向き直り、そこでようやく手を下ろす。

そして、彼の胸から背に浮かんだ天命の輪も、同時に消え失せるのであった。

「まったく……どういうことだい？」

何となく、予想ついてたけど、それ以上じゃないか。」

ハ・ラシンは惨状を見回し、苦笑して言う。

「とにかく帰還しよう。」

ギユスターヴはその恰好のまま連れて行く。
喧嘩の処分は、その後かな……」

ことのほか、嬉しそうに告げる撤回。

普段から、似たような調子の彼である。

その調子の微妙な変化に、マピットが気付くことはなかった。

「それで、どうなのだ？」

「まだ判断が付かないね。」

二人とも、いまだ未覚醒の状態だと思っし。」

紅蓮の問いに、ハ・ラシンは答えた。

「でもまあ、あそこには源炉以外に回収する物は何も無かったんだ
ろ？」

別に気にすることは……」

「『七つの器』が、在ったかもしれん。」

「!？」

独り言にも似たディボレアルの言葉に、二人は目の色を変える。

「なん…だって？」

それは…初耳……………隠していたのか？」

半笑いで、呟くハ・ラシン。

「話す暇が無かっただけのこと。」

「……………ふざけてるのか…？」

赤い手が伸び、ディボレアルの首元を掴む。

「殺すぞ。」

いくら同志でもな。」

紅蓮の、怒りに塗れた赤手だった。

「もう一度訊く。」

本当に、その艦に……………在ったのか？」

「……………確証は無いがな。」

彼は平然と答え、小さく頷く。

「やはり死ぬか、貴様。」

構えた手首を返す彼女。

「…落ち着けよ。」

あそこで死ぬようなら、到底、その素質は無かったってことだろ。

「

ハ・ラシンは大鎌の先端を、小さく地面で鳴らした。

「確かにな。」

だが、初めに決めたはず。

この『結束の八人』の間では、隠し事無しだ、と。」

紅蓮はその方向へ、わずかに仮面を傾けて言う。

「だからこそ、今こうして包み隠さずに話している。」

その耳元に、囁かれるディボレアルの声。

「まあまあ、紅蓮ちゃん……どうせ殺すなら、オレっちにしない？
君に殺されるなら、本望……」

「馬鹿め。」

貴様など、殺したいほど興味が無い。」

ハ・ラシンに浴びせた言葉と共に、気も削がれた紅蓮は、そこで

ようやく両肩を下げる。

「その情報、『あの男』には教えたのか？」

「確証が取れてからだ。

奴もまた、忙しかろう。」

彼女から続けられる問いに、ディボレアルは答え、顎を引いた。

「『黒騎士』

『時の亡者』

『偽りの聖職』

『収穫人』

『決闘者』

『技工医師』

『蟲の王』

『七つの器』。」

やがて、紅蓮が両手で頭を抑え、苦しそうに呻く。

「集めろ……必ず……この地で……」

「案ずるな。

『全員』は、黙っていても集まる。

これまでのようにな。

……そういう運命に、なっているのだ。」

その背に向かい、ディボレアルは応える。

「だが、どのように集まるかまでは、『あの預言』には無い。全くの努力無しというのも、都合が良すぎる話だろうよ。」

幾分、気が落ち着いてから、彼女は呟いた。

「だからこそ、オレは引き続き『決闘者』候補を監視するよ。」

ハ・ラシンが大鎌を構え、威勢を放つ。

「いいだろう。」

しかし、くれぐれも裏切るな、ディボレアル。さすれば……死、だ。」

「安心しろ。」

私とて、『尊い命』は欲しい。」

そんな彼の言葉を聞き届け、紅蓮は階段に足をかけた。

「あれま、もうアジトに帰んのかい？ ゆっくりしていけばいいのに。」

「暫くは滞在するさ。」

だが、ここには招かれざる客がいるようだな……。」

わずかに天井を仰ぎ。

首元の管から緑煙を吐き出しながら、彼女は言った。

「なんだって？」

慌てて、それを探そうとするハ・ラシン。

その肩を押さえつけて制するのはディボレアルだった。

「……わざと……か。」

それも良かるう。」

紅蓮は笑い、闇に消えていく。

「…相変わらずだね、彼女。」

「…さつきから出てる、あの煙……有毒ガスじゃないかな？」

ハ・ラシンが苦笑しながら、語りかけた。

だが、それも僅かな一瞬で、すぐに唇を固く結ぶ。

「…ところでさ、さっきの『器』の話、マジかい？」

「言っただろう。」

「確証は無いと。」

「……。」

「外見は子供の姿だったが…この私をもつてしても、手出しは叶わなかった。」

我が思念体を通じ流れ込んでくる、あの異物感は尋常ではない。」

「……少し、調べる必要がありそうだな。」

「うむ。」

そう言うと思っていた。」

ディボレアルは懷ふところをまさぐり、書類を手渡した。

「何だい、これ？」

「当時のルベランセの搭乗者名簿だ。」

この後、艦を降りたと思われる人間を徹底的に洗え。」

「…ヤブヘビかよ。
人使い荒すぎだぜ。」

彼は辟易しながら、肩をすくめて示した。

「この件においては、騎士団の人間は使えん。
貴様だけが頼りだ。」

「わかった、わかった。」

彼は仮面の下から長い舌を出して笑う。

「…オレたち……友人だもんなあ？」

そして、釘を刺しているとも解釈できるような、不気味な言葉を残していった。

「え？」

あの子が輸送の仕事を？」

マピットは思わず、率直な感想を口から洩らしていた。

ギルドの主人が指で示す待合席には、椅子で座ったままだらしく昼寝をしている世羅の姿がある。

半信半疑で近寄り、その身体を揺する彼女。

「ちょっと…あなた、起きてくれる？」

「う……ん!？」

瞼を開くと、前には目の覚めるようなピンク色のドレスを着た少女が居た。

世羅は思わず、抱えていた刀を落としそうになった。

「……こういう仕事では、初めてだわ……私くらいの年齢の娘を見たの。」

興味深々の様子で、さらに顔を寄せてくる彼女。

「？」

その視線を、世羅は見下ろした。
人を見上げない形になったのは、およそ初めての経験である。

そのくらい、相手も少女だった。

「私が依頼人よ。」

正確には、組織の代表としてだけど……品物を受け取るわ。」

「……あ、うん。」

そこでようやく、世羅も状況を把握し、刀を取る。
そして、相手に両手でしっかりと手渡した。

「ありがとう。」

じゃあ、これ報酬なんだけど……」

肩に提げたポシェットから封筒を取り出しかけて、そこで手を止めるマピット。

嫌に作業的な会話と、間。

何か面白くなかった。

普段だったら、絶対にそんなことは思わない。

自分は社会の闇に生きる者である。

決して、陽の当たる場所で生きることが出来ない運命だと割り切っていた。

そしてそう、ずっと理解してきたつもりでいた。

「…ねえ、あなた、甘いもの好き？」

だが、そんな思考とは別の言葉が、口から勝手についていた。

「??？」

突然の申し出に、相手は無反応。

「こ、これから、甘いもの食べに行かない？」

仕事で面倒かけたお詫びに、おごってあげる。

この近くに、行きつけの美味しいカフェがあるの。」

照れからか、思わず早口になる。

「行く!」

今度は、二つ返事で彼女は答えてくれた。

警戒されなかったと安心すると同時に。

マピットには、その屈託の無い様子に、何か心がおど躍るものがあった。

3

首都における、貴族邸宅が建ち並ぶ一等区画。

その中の一角にあるデスタロッサ家では、主の久々の帰還に、異様な緊張感に包まれていた。

「それにしても、この参加人数の少なさはどうにかならんか。これでは、『大会』の形を成さんぞ。」

書斎机の上に様々な書類を散らかしたまま、身なりの良い中年の男が呟く。

「も、申し訳ありません。
チバステイン様。」

その対面。

腰を鋭角に曲げ、床に付いてしまいそうなほど深く頭を下げているのは、秘書役のウェイールネント。

中流階級の出身である彼女は、大学を卒業後、こうして中王都市政府の議員である彼の元で修行をしている。

…とはいえ、彼の外交・巡遊に同行することは叶わず、留守と庶務を任されている程度。

だが、その仕事ですら、彼の求める水準には達していないようだった。

「謝罪など要らん。

君も本気で政治家を目指すつもりがあるならば、とにかく足を動かしたまえ。

これなら、私自身が手配した方が、まだマシだったというもの…」

「と、とりあえず、このビラを大量に作成しましたので。

現在、各方面にばら撒いております。

ちまた巷は近日中に、この話題で持ちきりになるかと。」

「……仕事が遅い。」

彼は言い放つ。

「どうせやるなら、最低でも半年前から根回ししたまえ。
早急すぎる政策は、民を余計に混乱させることが多々ある。」

その語りは、政治家らしく、理屈が鼻につくところがあった。

「とにかく……こうなってしまったら、人数の面で体^{てい}を成していれ
ばいい。」

頼むぞ。」

「か、かしこまりました!!」

そこでようやく頭を上げ、ずれ落ちていた眼鏡を直すウエイ。

「そのビラは、何枚かよこしたまえ。
私の方でも色々と当たってみる。」

「あ、はい……」

彼女は彼が指示するまま、机に近付いて、紙を一束置いた。

（何だよ……結局、使っんじゃん……！
これからラストスパートかけようって時に、タイミング悪く帰っ
てきやがって……。）

小言だけは多いんだからよ…さっさと引退しろ…。）

そして、心の中で恨み嘆きを繰り返す。

（大体、こんな子供だましの企画がウケるわけねえっつの…）

さらに手元に残った紙面を眺めながら、彼女は顔をしかめた。

「…そうだ、私は忙しくてな。

一連の催しにも、初日と最終日に少し顔を出せる程度なのだ。
全日程の現場進行は、君に任せる。」

「……………は？」

彼の突然の申し出に、彼女は思わず素に戻り、間抜けな言葉をひり出すことしかできなかった。

「この企画の趣旨を知る人間も少ない。

まあ、これも政界修行の一環だ。
人脈も広がるし、悪くはなかるう。」

「し、しかし、私は、こんな野良仕事は…」

「頼んだぞ。」

「りよ、了解しました……………」

一人で勝手に話を進めていく彼に対し、吐き出しそうになる唾をこらえて、今度こそ彼女は退室する。

だが、その際に開けた扉の先に、廊下を歩く軍服姿の少年。再び苦手とする人物との出会いに、深く礼をして顔を逸らす彼女。

「お、お疲れ様です…。」

「コルツ……お坊ちゃま…。」

その震える声に、室内のチバステインは視線を上げた。

「今日は、コルツも居たのか。ちよつとこつちへ来なさい。」

調子を少し穏やかに戻して、息子へ呼びかける彼。
コルツは渋々、共に居たマルリッパに背を押され入室する。

「ムーベルマでの事故の話は聞いた。
…お前の部隊も、随分と被害があつたそうだな。」

彼は鞆から厚い書類を出し、それに目を移しながら言った。

「今回の件で、内務官僚はてんてこまいだ。
逆に、こちらはやりやすいが…。」

「……………」

コルツは終始、何も反応しなかった。

真実を話しても、どうにもならないことが分かりきっている。

「それで、お前の部隊のことだが…。

もしも新しい人員や機体が必要なら、また私が口利きを…」

「いらねえよ。

俺は軍隊の一員なんだ。

そういったものは、自分で陳情する。」

息子から返される一言に、父親は目を丸くした。

「そうか。

色々あったのだな、お前も。」

「……！！

そんな知ったふうなこと…あんたに言われる筋合い…」

言いかけたまま、口を止め。

コルツは、そこで体を反転させて勝手に退室する。

「…マルリッパ君。

これから、息子のことをよろしく頼むよ。」

チバステインは、それを咎めることもせず、残った彼へと声をかけた。

「……はい。」

一礼して、すぐに踵を返すマルリツパ。

「ああ、待った。」

ちよつと、これを持っていってくれ。

参加人数が、著しく不足いちじゅうしていてな。

君の知り合いに手頃な人間がいたら、ぜひとも勧めて欲しいのだが。」

「？」

差し出された紙切れを、言われるがまま受け取る。

そして急いで廊下へ向かうと、コルツが先を歩いていた。

「……人の顔もロクに見ない奴の政治が、国を良く出来るなんて思えねえな。」

大体、報告に上がった文字や数字だけで、現場の実態がつかめるわけねえだろうがよ。」

マルリツパが追いつくと、小馬鹿にした態度で肩をすくめる彼。

「親父さんだつて、親父さんなりに一生懸命なんだよ。」

そこは、認めてあげなきや。」

「バカらしいぜ。」

これから先…この国が戦争になっても、どうせあいつら政治家は、

自分が傷つかない場所で書類と格闘だ。」

「……………」

あからさまに窺^{うかが}える親子の溝に、マルリッパは、もどかしい思いがした。

「それにしても……………何だよな。」

そんな中、少し歩を緩めてから、切り出すコルツ。

「あれだけ努力しても、報われねえこともあるんだよな……………」

「…タンダニアでの件かい？」

「ああ……………」

「仕方がないさ。」

結果はどうあれ、僕らはやれるだけのことはやったじゃないか。」

一応、事件の当事者であった二人には、モンスロンの暗殺のことが耳に入れられていた。

これは軍隊の判断である。

「しかしよ……………どうにも、やりきれねえというか……………」

「もしかして、ルベランセの人達のことか心配？」

「……！」

違うって。

だが、あいつら、落ち込んでいるんじゃないかと思つてよ。」

「世間では、それを心配と言つただけどねえ……。」

「う、うるせえ。」

「……何か……元気の出ることでもあればいいけど……」

二人は立ち止まり、廊下の窓から、若い緑葉が生い茂る庭園を眺めた。

「……ところで何だ、その紙は？」

コルツはそこで、マルリツパの手に握られた書類に初めて目を付ける。

「さあ……親父さんの仕事関係みたいだけど……」

「……なに……『大会概要』？」

ビラの表の説明文を、うさんくさそうに眺めるコルツ。
そして、それを何気なく裏面に返す。

「……親父の野郎……さんざん偉ぶりが……」

今、こんな下らねえ仕事を…してんのかよ…」

興奮に肩を震わせるコルツ。

マルリツパはそのまま、彼の両手に握られた紙面を読み取った。

「……………！！」

でも…これは…もしかしたら……………」

「いいかもな。」

二人は同時に目を合わせ、頷き、駆け足になる。
そして素早く外出の支度をして、飛び出していった。

カフェ・ド・ラソーネル。

首都を突き抜ける大通りの小枝。

15番路と銘打たれる道の先に、その小さな喫茶店はある。

店内の照明は、いつも明る過ぎないように保たれており。
どっしりと落ち着いた大人の空気を醸し出していた。

夕方から夜にかけて、そこで甘いひとときを過ごす恋人達も少ない、隠れた人気スポットでもある。

玄関先では、コーヒー豆が詰められた樽が、挽く以前から香ばしい匂いで歓迎してくれる。

そして鈍く鳴る、扉にかけられた鈴の音は、客の入店の合図だった。

「こんにちは。

この時間、いいですか？」

いかにも利発そうに挨拶をする、世羅を後ろに従えたマピット。すると、カウンター奥で黙々と皿を拭いている、妙に体格の良い壮年紳士が軽く会釈を返した。

他に、店員も客も居ない。

この店はまもなく、一旦休憩する時間帯である。

それに構わず、マピットは慣れた足取りで、カウンター近くの窓

際 四人用の席へ向かい。

そこへ世羅も招かれた。

「私は、マピ……じゃなくて、ピットね。」

フリルの付いたスカートを巧みに畳みながら対面に座る彼女は、流石に本名を名乗るのはまずかろうと、咄嗟に判断して言った。

「ボクは、世羅。」

「世羅……。」

ふふ、面白い名前。」

「……かな？」

そう言つて微笑みかけられると、マピットは彼女を誘ったことに、後悔の念を少しも抱かなかった。

「ねえねえ。」

世羅は、けっこう食べる方？」

「……うん。」

その質問の真意が分からないため、世羅は遠慮がちに呟く。

「じゃあ、マスター。」

いつもの『ジャンボ・パフェ・ノワールスペシャル』、二人前！。

」

カウンターへ向かい、マピットは大袈裟に手を振って注文した。

「食べ切れなかったら、残してもいいからね？」

「なに頼んだの？」

世羅は不思議そうな表情で訊く。

「それは、きてからのお楽しみよ。

…こういった店は初めて？」

「そうだね……こういった所で食事したことないや。」

「……世羅は、どこに住んでるの？」

「決まってないよ。

…最近、住んでたところ…無くなっちゃったから。」

「……！」

平然と答える世羅だったが、マピットは一方的に気まずさを感じた。

（ああ……それで合点がいったわ…。

この歳で、こんな仕事するなんて……きっと、家庭が苦勞してるのね。

難民とか…そういう関係かしら…）

そして、全くもって勘違いした思いで、彼女は相手を凝視していた。

そんなことも露知らず、当の世羅は物珍しそうに窓外の街景色を眺めている。

暫しの時間が流れた。

沈黙を破るには都合の良い、大きなパフェグラスを持って、マスタールがテーブルに近付く。

マピットは、それらを受け取って、世羅と自分の前へと置いた。

細長いグラスの頂点には、アイスクリームとウエハース。

一層目はクリーム、二段目はフルーツ、三層目はコーンフレークが敷き詰められている。

そして、『ノワール蜂』の巣からとれる甘いシロップを、この上からかけて食べるのが、このスイーツの流儀であった。

「これ、食べていいの？」

「召し上がれ。」

一連のやり方を世羅のパフェに施してあげて、マピットは笑顔で言った。

「……ここ、いい場所ですよ。」

中王都市に住む気は無いの？」

「うん？」

世羅は長いスプーンをグラスから抜いて、彼女の質問に顔を向け

る。

「…？」

そこでマピットは、半分になった世羅のパフェに気付いた。

「まだ、わかんない。」

「そ、そうなんだ。」

水を飲んで口直しをしながら、生返事をするマピット。
その間、何度もまばたきをする。

（あ…あれえ？

こんなに…：少なかったかな…：このパフェ…：）

そして、その隙にも、空になるうとしている世羅のグラスと、自分の残ったグラスとを比べてみる。

マスターが運んだ二本は、確かに同じ量だった。

自分が受け取ったのだから、間違いは無い。

（普段は、一時間くらいかけて食べるものなんだけど…：）

マピットはパフェのクリームを穿^{ほく}り、下のフレークと混ぜながら、考えていた。

だが、せつかくの機会である。
くだらないことを思うのは、やめにした。

「ねえ…世羅。」

「……いま好きな人とか、いる？」

「…沢山いるよ？」

「あ。今の無し！無し！！

そういう軽いニュアンスじゃなくて…」

慌てて手を目の前で振り、ピットは赤面する。

「？」

「鈍いわねー、恋人がいるかってこと。

そういう気持ちは、女の子の必需品よ！」

「え……？」

「よくわかんないよ…」

気圧されたまま、難しい顔をする世羅。

それを恥じらいと間違って捉えたマピットは、好奇をそそられる。

「私にはいるんだ、そういう彼。

そろそろ、来る時間なんだけど…」

彼女が自慢げにそう呟くと同時、店の扉が鈴の音と共に開かれる。

黒いスーツを着た青年 ユイウスⅡノーツ。

彼の青い瞳は、すぐに世羅に目をつけていた。

「どうしたの？」

ユイイ？」

「！」

彼はマピットの呼びかけで、ようやく視線を彼女に移す。

「……お前の方こそ…どうした。
その子は？」

きつと、自分の他には誰もいないと思っていたのだろう。
そこへ見知らぬ少女がいるのだ。

彼の反応は、至極当然だと、マピットは思い直した。

「紹介するわ。

この子、世羅っていうの。

依頼で面倒かけちゃったから、そのお詫びを兼ねて…ね。」

「……そうか。」

近寄る彼。

だが、彼女達の席にはつかずに、そこに程近いカウンター席の端に座る。

世羅は、その様子をずっと目で追っていた。

「ピットの友達？」

「いや、私の未来の旦那様……」

「同僚というか……仲間だ。」

彼は、マピットの言葉に素早く重ねて言った。

「ユイウス＝ノーツという。」

「な……！」

何でそうやって、簡単に!？

私、こんなに気を遣ってるのに……」

そして、無頓着な彼の名乗りに、立ち上がって顔を怒張させる彼女。

「名前など、どうでもいい。」

それより、マスター。

いつものをくれ。」

「……いいのかい？」

ふだん寡黙なマスターが、一言だけ呟いて訊いた。

「今日は腹具合がいい。」

記録を更新できそうな予感がする。」

不敵に笑い、ユイウスは言い放つ。

「ちょ、ちよつとユーイ！」

今日は……それ、遠慮してよ……」

「最近、ロクな物を食べてなかったんだ。」

それに、遠征した後は、これと決めている。」

「ぶう~~~~~」。

だから、お弁当渡したのに……この食いしん坊!!」

手足をバタつかせながら、マピットは叫んだ。

(……あんなの食えるか……)

先程、それだけは止めてくれと懇願する部長の机に、半ば強引に置いてきたバスケットを思い返ししながら、彼は半眼になる。

「何？」

ボクも食べたいな……何か分からないけど……。」

「お嬢ちゃん…悪いが、遊びじゃねえんだ。」

好奇心で近付く世羅に、マスターは首の蝶ネクタイを外しつつ、渋い声で呻いた。

「この裏メニューはよ……いわば、この店の命がけの所業なのさ…」

そして、上着とワイシャツを脱ぎ捨て、筋肉隆々の上半身を見せ付ける。

「これを作った後は…匂いが店内にこびりついちまって、三日は営業できねえんだ。

それくらいの覚悟、推して知ってくれってもんよ。

……だからこそ、俺が心底、『漢』^{オトコ}と認めた人間にしか出さねえと決めてる。」

白い口髭の下に薄笑い、そして、やけに遠くを見詰める目元。そんな達観した表情で、彼は恍惚と呟いた。

「そ、そうよ、止めた方がいいわ。

あのメニューだけは、本当に…!!」

マピットも必死になって止める。

「まあ……いいだろう。」

実際にこれを見れば、きつと挑戦なんてしようとは、決して思わな……」

「マスター……どうでもいいから、早く作ってくれ。」

うんざりした顔で、割って入るユイウス。

「おつといけねえ。

腹ペコだったんだな。

今すぐ、用意するぜ。」

マスターはカウンターから、隠された鉄板を引き出し。

「むん……！」

《火・生》（ホワラ・キー）……！」

その真下に備え付けられている大窯に、無駄に暑苦しい源法術で火をくべる。

そして火が安定する間、奥の保冷庫から携えて来たのは、大きな肉の塊だった。

「驚いたかい、お嬢ちゃん。

これがウチの裏メニューのスペシャルステーキの材料だ。」

「……………すごい。」

「おっと、ただのステーキと違うぜ。

質も最上級だが、厚さが他の店とは比べもんにならねえんだ。」

彼は肉切り包丁を取り出し、目の前で厚く捌さばいてみせた。

「どうぞ。

こんな、長靴の底のようなクソ厚いステーキ肉を……あんた、見たことあるかい？」

世羅はぶんぶんと、首を左右に振る。

それに気を良くしたマスターは、誇らしげに、油の敷いてある鉄板に肉を投げつけた。

「そして、この上に、搾りたてのニンニクをぶっかけて焼く。

これが、漢のロマンってやつよオ!!」

言うとおりに、取り出したニンニクの束を素手で重ね、鉄板の上でゴリゴリ潰す。

それが生のまま落下していくと、独特の、むせ返るような香りが店内に立ち込めていった。

一方。

ここが喫茶とは全くそぐわない雰囲気に変貌してきたことに、立ちくらみを起こすマピット。

「ハッ！

女子供には、一生かかってわからねえだろうなあ。

肉汁と血がしたたる、こんなニンニクまみれのステーキをかぶりつく漢のロマンを……」

「ねえ、世羅……離れましょうよ……」。

油がはねるし、髪に臭いがついちゃう。

それに、このハイテンション状態になったマスターは、超・危険なんだから……」

カウンター席から、身を乗り出して調理を眺めている世羅の二の腕を、彼女は引いた。

「これ、食べたいよお……」

だが、それに全く動じることなく、世羅は切なさうに呟いた。

「ふ。」

ただの興味でそんなこと言っちゃあ、ダメだぜ。」

そんな彼女を無視し、マスターの手からユイウスに差し出されるステーキ。

湯気がたちこめる鉄板皿には、例の肉が二枚ほど乗っかっている。

ユイウスは手にしたナイフで、それをすぐさま何切れにも分ける。切れ目から湧き出た肉のスープが、さらに食欲を増すようだった。

「……………」

その後、至福の時を満喫するユイウスだったが、
食べる最中、ずっとそれを凝視している世羅の眼が気になって仕
方なかった。

何か、心地の悪いものがある。

「…しょうがねえ。

常連の友達じゃあ、特別だぜ。

一枚だけだ、無理はするなよ？」

「……」

見かねて料理を差し出したマスターの言葉に、世羅は跳んで喜ん
だ。

「いただきます……!」

ユイウスとは違い、肉を大胆に半分に切る。

そして、その一片をフォークで突き刺すと、まだ熱い肉塊を一杯
に広げた口の中に放り込む彼女。

「……!」

脇で食べていた、ユイウスの手が止まった。

対照的に、もう一度手を動かした世羅の前の皿は、空になってい

る。

「……何だい、そりゃあ？」

呆氣に取られたまま、マスターは呟いた。

「すごい、手品？
手品……だよな？」

マピットは笑顔を引きつらせて、世羅の全身を、特に腹の辺りを重点的にまさぐる。

「く、くすぐつたいよ……」

彼女は苦笑して言った。

「……タネや仕掛けは……？」

「……。」

マスターの眼差しを、マピットは首を振って否定する。

「この子、食べちゃってる。」

「当たり前じゃないか。」

…これ、おかわり欲しいな。」

世羅は反論と催促を同時にした。

「……何ですと?」

肉焼きフォークを軽く握ったまま、マスターが呟く。

「こんな美味しい肉、はじめて。
おっきいのがいいよね。」

「……。」

彼女の率直な感想に、マスターは目に涙を浮かべて天井を見上げていた。

そこで、玄関の鈴の音が鳴る。

甘い香りを期待していた、年頃のカップル。

だが、店内に充満した煙と香りに、あからさまに困惑の表情を浮かべる。

「あの…ここ…ラソールですね?」

女性が口を開くと同時。

「すつこんでろい、素人が！
今日は、店じまいでい！！」

返される、突然の恫喝。

哀れ、カップルは逃げるように去っていく。

「俺としたことが、すっかり忘れてたぜえ……！
ピットちゃん、閉店の札、玄関にかけといてくんなー！」

マスターのエンジンは、さらにかかっていたようだった。

「ふえ……なんで、私が……。
ていうか、なんで、こんな展開なのよ……」

泣く泣く、言うとおりにする彼女。

「嗚呼……10年前を思い出すぜ……。
当時、マニアクすぎたオレの料理は、誰にも理解されず、店の
経営は傾いた。

そして泣く泣く、生活のために、こんな軟弱な商売を始めたんだ
っけなあ……」

完全に夢の世界に旅立ってしまったている表情で、マスターは独り
言を呟きながら、肉を焼き続けている。

「だが、年月を経て、ここで女子供に理解されるとは思わなかったぜ。

今日はとことん……………焼いちゃうよ!!」

そして、不気味なスマイルと共に、手を返す勢いは増していく。

一枚、一枚とそれまで順調にこなしていたユイウスも、それには手が鈍った。

だが、脇の世羅は平然と食べ続けている。

それも、楽しそうだった。

「ユ、ユーイが押されてる……………!?!」

やがて事の重大さに気付いたマピットは、青ざめて呟く。

「マスター……………もう一皿……………」

悪夢を振り払うかのように、ユイウスは休まずに注文した。

「いいのかい？」

あんだ……………相手のペースに調子を崩されていやじゃないか?」

「!?!」

マスターからもたらされた図星に、彼は目を見開く。

「…氣遣いは、無用。
勝負…!!」

死体のような表情で呻くと、既に用意されていた肉が、容赦なく目の前に置かれる。

彼の意識とは別に、胃が躊躇するのを感じた。

そしてここまできると、彼は自分の皿ではなく、世羅の皿をしきりに気にするようになっていた。

現在、丁度同じ枚数なのである。

「な…なんで、張り合ってるの？
相手、女の子なんだよ？」

その様子を見かねて、小声で囁くピット。

「……だからこそ、負けられん…。」

口元を押さえつつ、彼は呻く。

「…ごちそうさま。
もつ食べれないや。」

だが、終戦は唐突に訪れた。

満足と余裕の入り混じった顔で、ナイフとフォークを置く世羅。

途端、ユイウスは強張っていた全身を緩める。

（……た、助かった……。）

そんな彼の心の声を。

傍らでマピットも聴こえた錯覚さえした。

「ボク、そろそろギルドに戻らなきゃ。

二人が帰って来てるかも。」

「あ……仲間と一緒にだったの？

そうなんだ……。」

世羅を見送るため、彼女も立ち上がる。

「ありがとう。

今日は楽しかった。」

「……私もよ。」

「また、会いたいね。」

「この店、よく来るから。」

今度は落ち着いて…」

世羅の背景では、マスターがカウンター越しに親指を立て、汗ばんだ顔を輝かせていた。

「今度こそ、落ち着いてお茶しましょ？」

笑みを引きつらせ、マピットはそこを強調する。

「じゃあ…」

世羅は別れ際、椅子でだらしなくのびているユイウスの方を見ていた。

やがて扉が開けられ。

鈴の音と共に、消えていく。

「…また、会いたい…か。」

でも、私が殺し屋みたいな仕事しているなんて、あの子が知ったら…軽蔑するだろうな…。」

「ピット…お前、本当は…」

席に戻った直後のマピットの小さな呟きに、ユイウスは椅子に背をもたれたまま言った。

「ち、違うの！」

別に、仕事が嫌とかじゃなくて!!
これは、仕事とは別……だから。」

心配させまいと、必死に言い繕う彼女。

「でも、ちょっと、はしゃぎすぎだよね。
今まで一度だって無かったから……」

同じ世代の子と、触れあうこと。

他愛のないおしゃべりだって……全然……」

「すまん。」

「ユーイが謝ることない!!」

彼女は赤面しながら、叫んだ。

「私が……無理矢理……組織に押しかけたんだもん。
ユーイは……悪くないよ……」

「……。」

「私、ユーイのために……生きてるんだもん。」

「……それは、つまらん生き方だぞ。」

ユイウスは、表情を変えずに言った。

「…仕事に支障が無ければ、これから、たまに会ったらいい。」

「いいの？」

その言葉に、彼女は本当に真剣な顔で訊いた。

「いいさ…。」

だが、彼はテーブルに置かれた空のパフェグラスを眺めている。

「俺にとつても、久しぶりに燃えられるライバルだからな…」

「…あのねえ……。」

それはマピットにとって安心と同時に、複雑な心地であった。

「そうだ、これ、依頼関係の書類なんだけど…」

「そろそろ帰ろう。」

満腹になったら、眠くなってきた。」

帰り際。

能天気な彼の呼びかけに、マピットは封筒を取りかけて、やめる。

「ま、いつか…」

刀と一緒に、封を重ねる彼女。

その中の書類にルベランセの名が記されていることを、この時の二人は知る由も無かった。

やがて、夕暮れが街を支配してくる。

ザナナはとりあえず、森が見える地点までは進みたかった。

だが土地勘の無い彼。

行けども行けども、息のつまりそうな景色は変わらない。
感覚だけを頼りに、自然と寂れた方へと足が向く。

やがて行き着いた先は、貧民街のようだった。
ボロを着た子供の一人が、寄ってくる。

「女神が……裁きの手を下す……
愚かな人間と獣の……土地……」

そして頼んでもいないのに、決して上手いとは言えない歌声を勝

手に披露する彼。

さらに路地の裏からは、別の娘が古ぼけた果物を差し出してくる。

豹頭はずっと、それらを冷めた目で見下ろしていた。

子供達は怯えながらも、果物を買ってもらおうと必死に腕を伸ばす仕草。

「……。」

根負けしたザナナは、思い出し、自身の袖の中をまさぐる。

そこには、まだ小銭が入っていた。

バーグが以前、どこかで必要になるだろうと、持たせてくれた貨幣だった。

その全てを握って取り出し、それを子供達に渡す。

彼等は驚いたような表情で、差分を返そうとしたが、ザナナは受け取らなかった。

そんな貧民街の路地を抜ければ、その先には一台の荷馬車が停まっていた。

つぎはげだらけのテントが乗った馬車。

その後ろには鉄環で繋いだ、車輪つきの大きな檻がある。

結果と鋼鉄の棒で出来た柵であった。

中を覗くと、小型の凶獣が生きたまま閉じ込められている。

「なんだい、あんた。」

人様の売り物をジロジロ見ちゃってさ!!」

威声と共に、荷台の影から飛び出してくる大きな狐の顔。
流暢なフ族の言葉ぶりだが、彼も不笑人だった。

一瞬。

二つの獣の顔が、向かい合う形となる。

だが、ザナナは特に言い返しめせず無言で顔を背け、そこから離れようとした。

「お、なんだ。」

アンタも不笑人かい……なら、ちょっと待ちなよ。」

口調を一転、引き留める狐頭の彼。

ゆつくりと、わずかに振り向く豹頭。

「オレは凶獣を専門に扱っている肉屋なんだ。」

そんでもって、名はンマー口。

よろしくな、兄弟。」

「……ザナナだ。」

伸ばされた握手に応じないまま、彼は呟いた。

「……ザナナ？」

待ってくれよ、どつかで聞いたことある名だなあ……」

彼の白槍と着物をまじまじと見直す。

「ああ！？

もしかして、あんた、東方の黒豹族のザナナかい？」

「……………」

そして彼が放つ嬌声にも、ザナナは無反応の態度を示した。

「あんた、こつちの世界じゃ結構な名人なんだぜ。

何でも……ゴーベ付近で、あの難攻不落だった『蠢く森』を突破したって言うじゃあねえか。」

「違う。」

ザナナは、相手の高揚を遮る。

「あれは、ザナナ一人の、成功ではない。」

「へえ、良い仲間でもいたのかい？」

「……………」

その時、ンマールは相手の瞳に流れる、暗い影を見逃さなかった。

「いま身が空いているんなら、一緒に仕事をやらないか？

実は、ものすごく大きな仕事が入っているんだよ。

とてもじゃないが、手が足りない。

あんたが加勢してくれるなら、百人力なんだがな。」

そして、賢^{さか}しそうな顔で、にじり寄る。

「…………無理だ。」

「そんなことねえって。」

笑い返し、馬車にかけられていたテントの外幕をめくるンマール。

その中には、別の不笑人たちが座って待機していた。

ザナナは驚き、それらを見回す。

「お前さんに何があったかなんて、あえて聞かねえさ。

だがな、こっちの社会に出て、こっちの人間に触れて、疲れたり傷ついたりする同胞を目にするのは、珍しくないんだ。」

彼の言葉どおり、不笑人たちは誰もが、生気の抜けた目を患っていた。

「オレたちの本性はよ、純粋な闘争の中にのみ、あるんじゃないのかい？」

それを、フ族ってのは、妙なしがらみを背負わせて……面倒くさくしやがってよお。」

薄目になりながら、ンマー口は続け。

「オレはな、それらを癒せれば……って、不笑人の仕事と保護を約束してんだ。」

ほれ、あんたも乗りなよ、兄弟。

騙されたと思ってさ。」

半ば強引に、ザナナの背中を押す彼。

懐かしい匂いに吸い寄せられるように。

その馬車に乗り込んでいく獣の顔をした彼を、付近の住民は誰も不思議に思わなかった。

「今日は……どれだけ、俺様が待ちぼうけ食らったと思ってんだ。ギルドに居ろって言ったのに、勝手に出歩きやがって……。
あいつ、一体どこに行ってたと思う？」

「わからねえな。」

戒とバグは、宿の窓際で座りながら話していた。そこから差し込む赤い夕陽は、外の街道や建物さえも自身の色に染めている。

「依頼人に、何か奢^{おご}ってもらったらしいぜ。
こんなに腹を膨らませやがってよ。」

大袈裟に、自分の腹上を半円描いてみせる戒。

「はは。」

世羅だって、ああ見えても年頃の女の子なんだぞ。
自分で判断して、誰かと一緒にメシ食うだろうし、デートだってするだろ。」

バグはからかいながら、視線を流す。
部屋の奥のベッドでは、世羅が頬を膨らませて、枕を抱いてそっぽを向いていた。

「……まあ、そんなことは重要じゃねえな。
……本当に『ザナナは、役立たずだから追い払った』って説明し
ちまったのか？」

改めて訊いてくるバグに、戒は無言のまま頷いて示した。

「…お前、損なことしてるよなあ。」

苦笑して、煙草を灰皿に押し込む彼。

「馬鹿野郎、本当のことが言えるか？」

あいつが自ら望んで、去ったことなんてよ。」

「だからって、お前一人だけ泥をかぶりすぎだぞ。世羅に嫌われたらどうするんだ。」

「別に…構わねえよ。」

一緒に居なきゃいけない理由なんて、無いんだからな。てめえらとも、そうだ。」

戒は、やけに拗^すねた口調と態度で呟いた。

「お前……本当、どうかしてるぜ。」

会った当初は、目的のためなら手段を選ばない感じの小僧だったじゃねえか。

まあ、あの頃から、根は良い奴って感じだったけどな……それが今は……」

またからかうような笑みを浮かべ、バークは言う。

「目的なんてどうでもいい……そんな感じに見えるぜ。」

「ふっきれてなんか、ねえよ!!」

だが、戒は過剰に反応した。
軽い気持ちで言ったバーグは、完全に呆気にとられている。

そして、その大声に。

同じ室内に居た世羅、そしてパンリも、驚きの眼差しで顔を向けていた。

「俺様には…やるべきことがあるんだ…」

今は…少しだけ、暗礁に乗り上げているだけだ、諦めてなんかいねえ…。

諦めてなんか……」

それらから目を背け、言い訳のように戒は呟く。

だが、それらの語句が、彼の本音を少なからず語っているようでもあった。

頼みの綱だったルベランセと、そのコミュニケーションの崩壊。
彼にしてみれば、大きな挫折に違いなかった。

「なあ、俺は別にな…お前に巻き込まれたなんて、思っちゃいねえぜ。

むしろ、若いうちは、周りを巻き込むくらいで丁度いいんだ。
ザナナだって、そこは同じだと思うがな。」

「……………」

「人生なんてな、うまくいくことの方が少ねえのさ。
生き残った人間は、それを糧にしていくしか……」

バーグの慰めも、今の戒には重い。

そして、暗い空が景色の奥から見え始めた頃。
不意に、部屋の扉がノックされる。

「……誰でしょう？」

扉の傍にいたパンリが、不思議そうな顔で全員を見回す。

「シユナか……？」

扉を開けるよう、顎で示す戒。

「……どうも……おじゃまします……。」

それは意外な来客だった。

棒キャンデーの詰まった大きな箱を抱えて現れたのは、マルリ
ツパ。

その背後で腕組みをして、居心地悪そうにしているのは、コルツ
である。

「どうしたんだよ、懐かしい顔じゃねえか。
ここが、よく分かったな。」

真っ先に立ち上がり、バグは戦友の来訪に歓迎の狼煙を上げた。

「ええ、この辺の宿は限られてますから。」

それでもマルリップは、室内の空気の重さを肌で感じ、神妙な顔つきで答える。

「…大した用じゃねえんだが…。
てめえらが、落ち込んでいると思つてな…」

コルツは、あさつての方角を見ながら呟いた。

「それを分かつて、冷やかに来たのか。」

窓枠に肘をつき、自嘲めいた笑いと共に睨む戒。

「ああ、そうさ。
ざまあねえなつて…！」

「そうじゃないだろ、コルツ。
ちゃんと用件を言わなきゃ…」

「だったら、お前から説明しろ。
俺はこういうのは苦手なんだ。
用件を終えたら、さっさと帰るからな!!」

「？」

いまいち話の见えない二人のやりとりに、戒とバークは眉をひそめた。

マルリッパは急かされて、一枚の紙切れを差し出す。

「実は……コルツの親父さんは、政治家でして。
中王都市の盛り上げを図るため、こういうイベントを企画したら
いいんですよ。」

良かったら……皆さんで、参加してみたらどうだろうって……。
気分転換にもなるんじゃないかな？」

「……イベントだと？
……なめんなよ……。
そんな子供だましで……気分転換なんてするはず……」

それを受け取りながらも、戒は気の乗らない表情で紙面を眺めた。

「……がっ！
おい……これって……!!」

だが直後、驚きの声を上げて、椅子から転げ落ちる彼。

宙に舞った紙切れをキャッチし、それを読むバーク。

さらにその背後から、世羅。

「ほう。

これは、すごいな……。」

「うん……。」

にわかに興奮する彼等。

そんな様子を見て、マルリッパは安堵し、脇へ顔を向けた。
すると、誰もいない。

だが、既にこの喧騒を後にした彼も、宿の外で笑顔のはずだろう。

そんな事を思いつつ。

マルリッパも静かに部屋を出て、扉を後ろ手で閉めた。

幾多もの、王族の馬を引き。
己は徒歩にて、武人が独り。

衛兵の制止を振り切り、帷幕^{いはく}へ到る。

迎えるは、各国の将校たち。
彼に向く、美麗な鎧。

親兄弟も。
恋人も。

全て振り切り。

対峙する。

たった独りの大偉丈夫。

眼の大きな大偉丈夫。

後世にアルドの叛乱の『中期』と呼ばれる時代にさしかかった頃。

当初に比べ、大陸十字軍の勢いは上向きつつあったが、戦線は各

地で膠着していた。

叛乱軍が縦割りで統率されているのに比べ、十字軍は混成部隊である。

集まった将達は、それぞれ別の国から軍勢を率いており、皆を纏める盟主もこれといって存在しない。

それ故、各将は損得勘定が見え隠れする戦闘を繰り返しては。万事、決め手に欠けていたため、戦場を長く支配することが出来なかった。

さらに各地で断続的に発生する難民の問題も深刻であり。

この時節も、大陸中西部におけるシエルツビク会戦の後、とある小国へと10万を超える難民が流れ込んだ。

かの王は温情でこれを受け容れたが、いずれその領土も戦場に陥ると、難民達はたちまち暴徒へ変わったという。

王宮・市民・農民へ対しての、略奪と陵辱。

そして暴虐の限りが尽くされる

男は、自身の鎧に巻きつけて守っていた赤子や子供を地に降ろしながら、そうして、まさに『地獄』を語るようだった。

だが対面。

それに聞き入る帷幕の将達は、迷惑そうな表情を隠そうとしない。

目前の叛乱兵でさえ、手を焼いているのだ。

これ以上、面倒を抱える余地などは微塵も無かった。

「それで…貴殿は、何をお望みかな？」

やがて、一人の将が重い口を開く。

男の身なりは、ひどく卑しい一般兵に見えた。

適当な褒美さえくれてやれば、気が済むことだろう。

「……王族の安全を。」

だが意外にも、彼は、崇高すうこうな言葉を呟いて返した。

「…それくらいなら…お安い御用だな。」

気圧されて薄笑いを浮かながら、別の将が言う。

そこで丁度良く。

外の衛兵が入り口の垂幕を広げ、中を覗いた。

「おそらく、長旅で疲れているであろう。」

こちらへ案内しなさい。」

「それが…」

口ごもる衛兵。

「馬上の人間は……すでに、屍しかばねとなっておりますが。」

「……！」

諸将の驚愕にも、当の男は無表情で立ち尽くしていた。
見れば、彼が地に降ろした赤子達も、既に息を引き取っている。

瞬時に、帷幕には憎悪にも似た感情が渦巻いた。

「……貴様が、唯一の生き残りというわけか。
余計な真似をしてくれたものだ……。
暴徒どもめ、きつとここに押し寄せるぞ。」

そして誰かが指摘した言葉に、立ち上がる数名。

「い、今すぐ、この陣を引き払え！」

撤退だ……いま正面の叛乱軍と挟撃されれば、無事では済まぬ！
！」

そう、慌てふためく彼等に。

「……敵は皆殺しに。」

男は虚空を見詰めたまま、再び小さく呟いた。

「全て……殺して参りました。」

視線が集まる中。

呆けた声と共に触れる、彼の右腕。

土と砂と血に塗れ、焦げ付いた二の腕の皮膚に、微かに光る紋様が見えた。

事の真偽はともかく、そこから男がもたらした始めた妖気は、確実に各々の心地を悪くする。

「……対策は、明日に練ることとしよう。」

……今宵の軍議は、これまで。」

議長役の将の一言で、次々に男を横切り、その場を後にする彼等。

その間。

自軍の陣を引き払い、夜逃げの考えを巡らす者も少なくない。

やがて夜の砂漠に囲まれた帷幕は、人気を失ったことで、より冷たい空間と化した。

男は、直立した姿勢のまま動かなかった。

ようやく湧いてくる、同胞を守りきれなかった無念。

そして、己の所業への慟哭を胸に秘め、爪先に震えが訪れた頃

「おぬしも休むが良からう。」

肩にかけられる、温かい手。

振り向けば、気さくさに溢れる笑顔があつた。

「もう、何日も寝ておるまい。」

……良ければ、私の陣に迎えたいが。」

それは帷幕に残った若い将。

「しかしながら、自分は、たかが一兵卒……」

「だが、最高の騎士よ。」

男の言葉を遮った彼は、地に放置されていた、赤子の亡骸を抱いて外へ向かう。

自然と、男はその背中を追った。

赤子達も、馬上で息絶えていた者達も、皆、王家を表す絹で包まれていた。

それは、矢傷などを全身に受けた男の身体とは対称的に、外見が美しいまま。

彼等の命は、戦場となった灼熱の自然に耐え切れなかっただけなのだ。

将はただ独り、男の真意を解し、その日のうちに、彼等を安全な地で手厚く葬った。

その行為に。

この下賤の出身の男は、痛く感服したという。

「それから、彼の元で叛乱軍の殲滅に当たり…。
友と一緒に、功を立てたものよ。」

フィンドルが目覚めると、夢の中で見ていた昔話が、頭上から続けられていた。

まず判ることは、自分が柔らかい所で横たわっていること。

頭を動かさずに、目のみで見回す。

そこは小さな密閉された部屋のようなだった。

すぐ傍に、カーテンで覆われた窓らしき部分もある。

遠く的位置に一人。

対面には、座した二人が会話を続けており、自分の足元にも一人の気配を感じる。

室内が暗いため、総じて、外見までは判断できない。

「……リエディン・フィラサンス力四世……
聡明な御仁だったようですね……。」

先の語りに応える、若い女性の声がした。

フィンドルは、目覚めたことを、彼等に悟られないよう努めた。

自分が路上でさらわれたのは、おぼろげながら憶えている。

全身に感覚を広げると、手足は拘束されておらず自由のままになっていた。

他の箇所も、特に暴行を加えられた様子は無い。

……そのことが余計に、相手の魂胆を読みづらくしている。

下から見上げる室内の窓は、小さい。

四人もの相手の隙について、そこから逃げることは、かなり難しい気がした。

当面は、気を失っているフリを続けているのが得策だろう。

(……………?)

そんな窓に注目していると、薄めのカーテンにも関わらず、中に漏れてくる光量が少ないことに気付いた。

辺りはおそらく、夜になっている。
これだけは、自分にとって有利か。

(!!)

そこで足先から不意に、顔に近付いてくる刺激臭。

アルコールだが、酒の類ではない。
足元の男が全身に巻く、消毒液に漬けられた包帯が、その原因のようだった。

彼は腰に剣をさげているものの、左腕を肩から失っており、さらに左足も満足に動かせない様子で迫ってくる。

フィンドルは、その這うような不気味な動きと様相に、恐れを抱いた。

目測が確かでない窓から逃げ出すかどうか。
その『賭け』を考えた矢先。

「…………お静かに。」

包帯の奥からのぞく鋭い眼光で、彼女は先に動きを制された。

（…………！？）

さらに、見覚えのある白い小猿が、肩に登って来る。

（…これは…………まさか…？）

それを理解した時、彼女は思わず跳び起きてしまった。

次の瞬間に目に映る、知った顔。

「お気付きになりましたか。」

「…アリアネ…さん？」

恭しく会釈する少女に対し、呆然とその名を呟くフィンデル。
続けざまに、大きな影が正面を向いた。

「しばらくぶりよの。」

「　　タ……タンダニス王!？」

その金切り声に苦笑して、長い髭を撫でる。

彼は、古き宮殿で謁見した時と同じ、白い薄衣トイガを纏っていた。

「…これは…どういふことです……!？」

「……………」

フィンドルの問いには答えず、タンダニスは無言で窓へ目を向けた。

その脇のアリアネからの指示で、前にいる男が鞭を鳴らす。

すると、ゆっくりと動き出す室内。

ここは馬車の中であつた。

「昼間は手荒な真似をして、すまんかった。

驚かせるつもりは無かつたのじゃが…。

ただ、いきなり姿を見せて、先程のように騒がれると厄介と思つてのう。」

「す、すみません。」

彼の言葉に、フィンドルは赤面して口元を押さえた。

「……だいぶ疲労されているようじゃな。
だが無理もない。」

馬車の車輪が、石畳に音をたてる。
彼は、揺れ動くカーテンの先端をつまみ、そこから外の景色を眺めていた。

「中王都市の街並み……か。
こうしてゆっくりと見物するのは、初めてになる。」

その言葉で、フィンドルは実感する。

当然ながら、眠っている間にタンダニアへ連れ出されたわけではない。
身体に感じる振動からして、夢でもない。

この中王都市の首都で。
一国の王とその親衛隊長が、自分と同じ車内にいるのである。

「あの長い戦争の後、いつか挨拶に来ようと思っていたうちにな……。
結局、それを果たせぬまま、かの王は崩御なされてしまったよ。」

「……………先代の……？」

フィンドルは無意識に訊いていた。

「うむ。」

その後も、この国には全く目もかけてやれんで……いまだ、あの時の御恩を返すことも出来ずにおる。」

独り言のような、寂しい、感傷の呟きだった。

彼女は、それに余計な口を出してしまったことに恥じた。

「……今回の件も……まことに申し訳なかった。」

「!？」

だが突然、話の流れは、思わぬ方向へ進む。
タンダニスが目の前で、深々と頭を下げたのである。

「あの事件の後、わしは、おいそれと国を離れるわけにもいかず。
アリアネも、事後処理に追われてな。

しかし……おぬし等を送り帰した後、いてもたってもいられなくてのう。

こうして、すぐに追ってきたというわけじゃ。」

「あ……あの……」

国王の頭頂が目前では、どんな頭脳も回転しようがない。
何も意味しない言葉が、ただ彼女の口から突いて出るばかりだった。

「この度の顛末^{てんまつ}は、全て、わしの不手際。どうしても一言、フィンデル殿に謝罪を申したくてな。」

「そんな…それだけのために……！？とにかく、頭をお上げください！！」

「いや、あの時。

モンスロン卿を…すぐに我が国に招いていれば、そして厳重な保護をしておれば……そう悔やんでやまぬ。」

「それを申されるならば……！

現場を任された自分に責任がございます。

陛下ではなく、この私の判断こそ罰せられるべき！」

そこで堪らず、一緒になって頭を下げるアリアネ。

「や、止めてください！

二人とも……！」

押し寄せる彼等を、もう視界に入れないよう、フィンデルは瞼をきつく閉じながら叫んでいた。

「…国を任される人間が、一時の感情で…そういうことをなさるのは……。」

間違っているかと…存じます。」

そして、呟かれる彼女の正論に。

二人は共に顔を上げた。

「それに、何より…」

大声を出したせいで、吹っ切れたのか。
フィンドルも少し落ち着きを取り戻し、背を深く車内の椅子にもたれつつ口を開いた。

「私は、お二人にかばっていただく価値があるほど、出来た人間ではありません。」

……ルベランセの艦長にさせられたのは、半ば強制的でした。
タンダニアへの任務も、そうやって望まないまま、渋々承知したのです。」

彼女の告白に、車内は静まり返る。

「かけがえの無い仲間を失ったのは、そんな私の優柔不断さと油断が招いたこと。」

そして、モンスロン卿の成そうとしていたことも、何一つ手伝えないまま……無駄に死なせてしまった…。

私に、彼ほどの愛国心があれば…結末は違ったのかもしれないが……」

「……無駄…か。」

タンダニスが呟いた。

「…だが、それは違うんじゃない。」

その言葉に、顔を向ける彼女。

「違うんじゃないよ、フィンデル殿。
立派な行いだっただの。
おぬしらの行動はな。」

小さく畳まれていた紙を、彼は目の前で取り出した。

「モンスロン卿の襟えりの中に、隠されてあった文書じゃ。」

「あの方の……！？」

「これは、服の縫い目に沿って丁寧に施されておつての、見ただけ
ですぐには判らん。」

おそらく、こういう事態になるのを見越して…であろう。」

「……！」

フィンデルは震える指先でそれを受け取り、すぐに文面を読み進めた。

「そこに全て、詳細に記されておるよ。
騎士団の内情と野心……そして、この国に迫っておる危機がの。」

「…………無駄では…………なかつた…………？」

一通り読み終えた後、書を胸に抱きしめる。

「…そう。

それも、わしがここに来た、もう一つの理由じゃ。」

彼は一呼吸、間を置いて言った。

「そこに記されている事が真^{まこと}かどうか。

…中王騎士団の長、ガイメイヤに直接問いただそうと思ってな。」

「へ、陛下!？」

そこで、目の色を変えて叫ぶアリアネ。

「…そのような話、私は聞いておりません!

ならば、国家間の厳肅なる手続きを踏んで、お望みただかねば

…」

「旧友に会うのに、理由がいるのか?」

彼は厳しい目つきで、彼女を圧倒する。

その空気に、車を引く馬も一瞬、焦るほどであった。

「…こつこつわけじゃ。」

フィンドル殿：分かるかね？

おぬしらが、どれだけの事を成したのか。」

自身を指で差し、大きく笑う王。

かなり道を外したやり方だが、確かにこれは、国を動かしたことに等しい。

フィンドルは、それを素直に嬉しく受け止めていた。

「おそらく、モンスロン卿は初めから『覚悟』を決めていたのだよ。だから自分を責めることはしないでおくれ。おぬしの仲間もきつと……」

「……いえ。」

だが、その慰めの言葉には、甘えかける自分を戒めるように、フィンドルは首を振った。

「いくら大事のためとはいえ……犠牲は極力減らすのが務め。私が至らなかったことに、変わりはありません……」

「至らなかったのは、艦長、貴女ではない。」

突然、それまで黙っていた包帯の男が呟く。

「……陛下。」

そろそろ、こちらで降ろしていただけますか。」

「君は…まだ安静でない…」

そのアリアネの言葉に、首を左右に振る男。

「俺は……もう長く無い。

どうせ限られた時間ならば…有効に使いたいです。」

そして、彼は左腹部をさすりながら、さらに言った。

「貴方は一体……？」

「彼は……ルベランセの護衛についていた、ミラ殿」

フィンデルの疑問に呼応するように、タンダニスが口を開いた。

「……ご無事で……！？」

「敵に半身を持っていかれ……無事と呼べるかどうか。」

包帯の中から、返ってくる皮肉。

「しかし襲撃の後、タンダニアの救護班に命を助けられたのは事実です。」

「…このような身体になってしまったゆえ、どうか世羅達には内緒にしていたきたい。」

馬車が止まり、彼が扉を開くと、外の冷気が車内に勢い良く吸い込まれた。

「もう、俺は彼女を飛翔艦乗りにすることは出来ないでしょう。ならば、せめてその障害になりえる要素を…できるだけ排除しておきたいのです。」

指の皮が溶けて癒着した右手を広げるミラ。

フィンデルは理解する。

あの眼光の正体は、狂気にも似た、復讐の炎。

「貴方は……まさか、彼女のことを…!？」

「……。」

「止めるのは、野暮じゃな。」

タンダニスの呟きに、黙ったまま首肯するミラ。

「このご恩、忘れません。」

それと艦長、貴女のお仲間の無念。

必ず、このミラ＝ホ口の『贖罪』として晴らさせていただく。」

そして、おぼつかない足取りで、彼は夜の街に消えて行く。

「常軌を逸している……。
あんな身体になってまで……！」

彼が言い残した言葉に、彼女は身震いした。

「やはり、私が歩んできた道は、このような悲劇しか生まなかった……？」

ただ流されて……あの時、士官学校さえやめていれば、こんな運命には……」

「……フィンデル殿。
貴女も、ご自宅まで送りましょう。」

いたたまれずに声をかけるアリアネに応え、フィンデルは朦朧とする意識の中、御者に行き先の指示をした。

「わしは……何も顧みず戦場を駆けてきた。
戦いが終結しても、建国のために、それはずっとな……。」

しばらく馬車が進んだ後。
それまで、何かの考えに耽^{ふけ}っていたタンダニスが、不意に呟いた。

「我が右腕に宿る厄災を……人は『至高の槍』と、もてはやしたが……。
後ろを振り返れば、そこはいつも血に塗れた荒野じゃった。」

普段から傍にいるアリアネも、その言葉に聞き入った。

それほど、彼は珍しいニュアンスで語り続けている。

「敵味方を問わず、幾万の魂が、わしの足に絡みつき、ひきずろうとする錯覚。」

あの感じは、わししか解らぬと思っていたが……」

「陛下には……戦う力があります……」。

……非力な自分とは……重ねられるべくありません……」。

フィンデルがそう返すと。

「戦う力だけを振るっていたならば、わしは単なる馬鹿力としてのこの世を生きただであらうな。」

彼は、さらに即答した。

「じゃが、わしは幸い……『前』を向いた時にいる、民や仲間の思いこそが大事なことを知った。」

それらに必要とされ、それらを守る力ならば……どんなにおぞましい力であっても良い。

そう結論づけておる。」

「……かもしれません。」

馬が停止すると、フィンデルはすぐに車を降りた。送るべく、タンダニスも続く。

「必要とされれば、ですね。」

でも、私は…だめです。

死んだ仲間も生きている仲間も……。

私のこんな姿に…もう呆れてますよ、きっと誰もが。」

「……それは…」

タンダニスは何かを言いかけて止めた。

そして彼女越しに、正面の坂を凝視する。

自宅の玄関前の小さな階段で、シュナが座っていた。

大きな荷物を横に置き、その上では梅が丸まって寝ている。

フィンデルはそれに気が付くと、早足で近付いて行った。

「シュナ……」

ばつが悪そうに声を掛けるフィンデル。

「さっき、戒達が来たんです。」

彼女は待っていたかのように、すぐに立ち上がって言った。

「…皆が？」

意外そうに訊くフィンドルに対し、シュナは頭を深く下げる。
それが先程の光景を思い出させ、彼女は思わずたじろいだ。

「すみません。」

あの料理店の話……お断りさせてもらいます。」

「え？」

あ、あれね……。

いいのよ、私もどうかしてたわ……。

こんな時期にね、あんな話……。」

いかにも拍子抜けしたようなフィンドルの言葉尻に、シュナの方が内心驚いていた。

少し会わないうちに、彼女は普段の冷静さを取り戻している。

「私、やることが出来たんです。」

それを思ったシュナは、もう遠慮することはなかった。
続けて、一枚のビラを差し出す。

「……中王都市で……？」

フィンドルはそれを読み、紙面そのままを口に使っていた。

第一回 『中王都市 大競技会』開催
飛翔艦時代の到来へ向けて、有志を募集
来たれ、腕に自信のある者

年齢・種族・性別・経験不問
三人一組にて、競技に参加されたし

種目は、ケンリントンの村から首都へ到る競争形式
詳細説明は、同村の選手会場にて

優勝の組には、イマツエグ社の新造飛翔艦を進呈
第二位と第三位には、ムーゼングレタ社の中型飛翔艦
そのほか、上位入賞者には副賞多数
参加のみでも特典有

主催：大陸ギルド、中王都市政府
協賛：バラーク商会、ムーゼングレタ社、イマツエグ社 他

その紙には。

いまいち要領の得ない説明で、充分に推敲されないまま書かれた
ような文が羅列されていた。

「…それ、三日後に行われるそうです。
これから、私達……スタート地点の村に向かいます。」

「貴女も、参加…するの？」

「どんなメンバーで出るとか、詳しいことは決めてないです。自分達の中で厳選した一組で行くかもしれないし、二組で出場するかもしれない…」

「…そう。

…なかなか、良い話だね。」

彼女は、まるで他人事のように苦笑する。

だが、それをあらかじめ予想していたのか、シュナは表情一つ変えずに、車輪の付いた荷物に手を掛けた。

「戒は、自分のため。

世羅のために……飛翔艦を必ず手に入れるって言っていました。」

瞬く間に横切る彼女。

その彼女が作る風に紛れ、建物の隙間から吹く夜風も、辺りに荒んだ。

「あと、フィンドルさんのために。」

少し進んでから、シュナは立ち止まって言った。

「……どうして……？」

風にあおられた、自分の長い髪を押さえながら、訊き返す彼女。

「わかりません。」

でも、みんな、妙に納得しています。
それはきっと……」

景色が乱れて、揺れた。

「もう一度、ルブランセのような飛翔艦に乘りたい。
そう願っているから。」

「!?!」

フィンデルが思わず振り返ると、シュナも顔を向けていた。

「フィンデルさんさえ良ければ、応援に来て下さい。
じゃ……私、そろそろ行きます。」

全て言い終えると、彼女は再び背を向けて。
大弓をかつぎ、梅が上に乗ったままの荷物を押しながら坂を下っ
ていく。

恨みも、憐れみも、何も無い。
爽やかで純粋な彼女の笑顔に。

何もフィンドルは、自分の考えを動かされたわけではなかった。

ただ、身体の奥底にある何かが、ここ数分のうちにかけられた言葉と混じり合い、天秤にかけられたように儚く揺れていた。

路地で佇みながら、それを眺めていたタンダニスは、シユナとすれ違ってから馬車へと舞い戻る。

「フィンドル殿は……もうよろしいのですか？」

アリアネは心配そうな表情で訊いた。

「無能の烙印とは、自分で押すものではない。

……わしは、そう信じておる。」

長い顎鬚に触れながら呟く彼。

「昔のわしが、それで救われたように。

いま、あの子にも……そんな仲間達がおる。

これ以上、何をする必要があるのか。」

そして、まとわりつく風を振り払い、薄衣を畳んで扉を閉める。

「……ガイメイヤの前に、もう一人の我が親友に会いたくなった。

どれ……ここからは、忙しくなりそうじゃな。」

口元に笑みを携えて、行き先を示唆した後。

王を乗せた馬車は、夜の街に消えていった。

「いやはや……。」

凄いなえ、流石は兄弟！」

狐頭のンマー口は、すこぶる上機嫌で馬車を降りるなり、付近でたむろう使い走りの少年を口笛で呼んだ。

「生け捕りつてのは、なまじ殺すより難しいんだぜ？

なのに、こんなにスムーズにいくなんて思わなかったっての。

酒は飲むかい？

いま買ってこさせるけどさあ……」

駄賃の小銭を子供に渡しながら、嬉々とした早口で呼びかけ続ける彼。

「……。」

しかし、ザナナは全く反応せずに、近くの塀の上に腰掛けながら、

無言で自身の手の平を見詰めていた。

右肩に掛けた槍を転がし、檻に詰まった小型の凶獣を脇目にする。

闘争は、ある程度の充実感を与えてくれる。
昔は、確かにそのはずだった。

だが今では、どこか虚しいだけである。
見上げた月に問うようにして、彼は、その虚しさが何処からくるのか考えていた。

砂利を踏む音に、耳をそばだてる。

貧民街の方向。
そこへ視線を移すと、遠くで、多くの子供達が自分を指差している。

さらにその奥で、戒が立っていた。
横に待るのは、世羅。

「……見付けたぜ。」

「おおっと、フ族の兄ちゃん。
何か用かい？」

近付いてくる戒の姿に、何かを感じ取ったンマーロが立ちはだかる。

それを一瞥し、テントの中に消えるザナナ。

世羅が追おうとしたが、戒はそれをひとまず制した。

「……ここらへんじゃ、不笑人の有名な溜まり場らしいな。探すのは、大して手間じゃなかったぜ。」

「そうか。」

あんたら、ザナナの連れかい。」

大体を理解した表情で、今度はンマーロから歩み寄る。

「……あいつを連れ戻すって言うんなら、やめときな。不笑人ってのは、純粹な奴等なのさ。そして……お前たちが思っている以上に、繊細なんだ。」

「……………」

「もう解放してやれよ。」

「……あいつらはな、心が傷つくことに慣れていない。なのに、このフ族の社会は、色々な物を背負わせやがる。住む世界が違っただよ、お前らとはな。」

ンマーロが言い放つ、心からの同情の言葉に、偽りは無さそうだった。

だからこそ、戒は全く言い返すことが出来なかった。

「こんな言い方もなんだが…不笑人の『世渡り』はオレの方が慣れっこなんだ。

…悪いようにはしねえさ。」

そうして、彼は締めくくる。

戒は聞きながら、馬車のテントの隙間から覗く、うな垂れた豹頭を見るうち。

「……信じていいのか。」

それだけを言うだけで、精一杯だった。

「ああ、任せておきな。

でも別れの挨拶は無した。

もう会わないでやってくれるのが、一番…」

「やだ。」

世羅が短く切って言った。

そして、素早くンマー口の脇をすり抜け。

駆けながら身を小さくし、テントの幕の隙間をぐぐり抜ける。

「……!？」

その様子にはザナナは驚いて、立ち上がった。

「ボクは、ザナナと旅がしたい。

こんなところ早く出よう。

辛いこともあるけど……楽しいことも、きっと沢山あるよ!！」

「……………」

下から叫ばれる言葉に。

豹頭は、湧き上がる言葉を飲んで、直立したまま黙って横を向いていた。

「…また、ザナナに助けて欲しいことが出来たんだよ…!

今まで、じゅうぶん助けてくれたのに…また、助けて欲しいんだ
!！」

「世羅…………？」

「全部終わったら…最後に、ボク、いっぱいお返しするから…!
それまで、一緒にいてよ!！」

考えもなしに、言いたいことを言っている。

彼女は、内から湧いた言葉を、何も包み隠すようなことはしない。

「…そんなことは…いい。」

ザナナはもう……」

諦めて欲しい。

そう願う、彼は再び着座しようとした。

だが、そのスペースを遮るように、他の不笑人が陣取る。
周りの不笑人達も、腕を組んだまま、無言で彼の帰還を遮った。

今まで死んでいたように何事にも無頓着だった彼等の変貌に、外で目を剥くンマール。

(…ザナナの居場所…ここではないと言うのか……!?)

見回す豹頭の瞳に、彼等は応えるようだった。

「…誰も役立たずなんて、思っ
てないから!!」

戒は……そう言ったらしいけど、ボクは……大好きだよ……!!」

「!!」

抱きついた世羅を着物に埋ませたまま、今度は外へ目を向けるザナナ。

戒は、その視線から顔を逸らす。

「……戒。」

どうやら、迷惑を、かけたようだ。」

「黙ってる。
らしくねえぜ。」

その返答に頷き、ザナナは颯爽と馬車を降りる。
世羅は涙を見られないように、その着物に抱きついたままでいた。

「行くぞ!!
…まったく…いつもこいつも、何も考え無しに行動しやがって
…」

それを分かっている戒は、不満そうに背を向けて、二人に促す。

「考えてたら、明日になっちゃうよ!!」

世羅は顔を振ると、ザナナの手を握り。
もう片方の手で、後ろから戒の手を繋いだ。

「やれやれ。
なんて、わがままなお嬢ちゃんだよ……。」

それらを眺めながら、ンマー口は呆れ果てていた。

「フ族ってのはよ…相手に、もっと気を遣うもんだろ…?」
少々、恨みがましく。
だが、清々とした声だった。

「あーんな、相手のことなんて全く気遣わないほど、大きな思いをぶつけられちゃあ…。」

心に響いちまうってーの……」

堪らずに鼻をすすっていると、そこで酒を買いに走らせた子供が戻ってくる。

「兄弟…悪かったな、俺の思い違いだったよ。」

あんた、フ族のように、ちゃんとした『目的』を見つけてたんだな。

ただ、それを少し忘れてただけなんだ。」

その酒瓶を手に取り、傾ける彼。

(……すまん。)

遠くで、ザナナが横顔を向ける。

「いいんだ……ああ、いいのさ。
だけどなあ……」

ンマー口は、夜道を共に帰る、そんな仲むつまじい三人の後ろ姿を視界に据えて。

「……へへ。」

まさか、別れ酒になっちまうとはなあ。」

彼は、大きな月の下で、酒を一気にあおっていった。

第四章

第一話 『一つの邂逅』

了

4 - 2 「群狼」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The second story
‘Wolves’

2551

首都の郊外。

中王都市軍の管轄にある古い発着場。

その敷地の末端の格納庫は、配属されている人間もまばらで、警備も薄かった。

「飛翔艦が手に入るんだよ!!」

昇る朝陽に照らされて、庫内が蒸し暑く温度を上げる中。
バーグが、大袈裟な身振りと手振りで叫ぶ。

「あのねえ…」

軍手で汗を拭い、ミーサは整備の手を止めた。

「勝手に敷地に乗り込んでくるなり…そんな馬鹿げた話、しないでくれる?」

「ん?」

歓迎されるとばかり思っていたバーグは、その冷たい反応に面食らった。

コルツとマルリツパが持ってきた、飛翔艦が賞品という『大レース』の情報。

バーグは、人がその話に乗るのは当然だと思い込んでいる。
だからこそ、これから彼女を伴って現地に行き、戒達と合流するという算段まで立てていたのだ。

「私もね……生活があるのよ。」

軍隊で整備やつてる方が安定しているのに、そんな大博打ばくちに乗れるわけないでしょ。」

「あ、そうか。」

そうだな、何も今すぐ軍隊を辞めなくたっていいよな。

飛翔艦が手に入ってから、来てくれればよ……」

「……………」

「え、何だ？」

それも反対なのか？」

「当たり前でしょ！」

個人が飛翔艦を持つたなんて、そんな夢みたいな話……持つてこないですよ……！」

彼女は火中で弾けた栗のように、怒って言った。

「……まったく、おめでたいというか、世間知らずというか……」

「わ……悪かった。」

全部、俺の……空回りだ。

そつだよな………今の話、忘れてくれ。」

バーグは見てからに沈んだ様子で、それだけを言い残し、去っていく。

だが、そんな別れ際の言葉にも、彼女は何も返さなかった。

「…ミーサ曹長。」

その一部始終を格納庫の奥で眺めていた、一人の女性士官が近付く。

「あ、どうも…。」

ミーサは、部外者と接触していたことを言われるのではないかと、愛想笑いを浮かべて身構えた。

「いい腕ですね。」

貴女の整備なら…この部隊の仕事の効率が、従来から3割は増す。

「

だが彼女は、庫内の戦闘騎を一望してから言った。

ミーサが新しく配属された部隊の隊長は、また女性だった。

かなり背は低めで、線も細く、軍人らしくない。

しかし、細かい部分に神経が行き届く、抜け目の無さそうな雰囲気がある。

「このように腕の良い整備士が、今まで輸送艦などに配属されていたとは驚きですよ。」

「ありがとうございます。」

彼女の言葉に安堵したミーサは、適当に返し、作業へと戻ろうとした。

「貴女の志願は『今後タンダニア方面へ派遣される調査団』のことでしたから、ちょうど我が部隊への配属になりましたが、本当に良いですね？」

我々としては、例の件の当事者がいるのは、大変助りますけども……」

「はい。」

「かつての仲間にも憎まれても？」

「……………」

手を止めるミーサ。

やはり、彼女を欺くことは出来なかったようだった。

「……どうしても……回収したい物があるんです。」

瞼を閉じて、胸に思い起こしながら呟く。

「それは、思い出？」

「……ある意味では。」

「良い働きを期待しています。」

それだけを言い、隊長は踵を返す。

ミーサは、その背に向かって感謝の敬礼をした。

変わって、首都中心部にある中王都市大聖堂。

そこは今日、先のムーベルマにおける戦没者の合同慰霊を催していた。

……だが、大半は遺体の還らない慰霊である。
集まる遺族も、相当に少なかった。

モンスロン暗殺に関わる一連の事件だが、現在の軍の執行部の意向は、タンダニアへの調査団の派遣のみに留まり。

ムーベルマで失った部隊の残骸や、人員の遺体回収は見送られた。

それというのも、近隣諸国への配慮に他ならない。
列強国の筆頭が、内部で争っているなどという弱味を見せるのは、愚と判断したのである。

事件の真相は闇に葬り、世間の知るところではない。

中王騎士団の関与が濃厚だと判っていても、軍がそれを圧倒する力を蓄えるまで、懲するのを待つ。

それが、今の方針であつた。

教会内で儀式を終えた、仰々しい装いのクレインの司教と神官達が帰る時刻。

その門とは、反対側の柵。

二人は、そこで顔を合わせていた。

「一体……どの面をさげて……会いに来たというんだ。」

軍服の胸に喪章を下げているギルチが、ネクタイを緩めながら、あからさまに不満そうな表情を見せつける。

「恥を忍んで。」

鉄の格子を握り締め、フィンドルは答えた。

「その割には、堂々としているものだな。」

思わず肩をすくめて、眼鏡を直す彼。

「君は、既に軍の関係者ではない。
私が教えられることは、何一つ……」

「解ってます。
でも……すぐりたいのです。」

彼女は柵へとさらに近付き、真剣な眼差しを送った。

「すぐるだと？」

……もう、何もかもから背を向けたのだろうか？」

「……自分でも……解りません。」

「真実に近付きたいという欲求は、理屈ではないということか。」

ギルチはゆっくりと視線を下げ、砂利を踏んでいる地面を静かに見詰めた。

「退役することを……どうして、私に相談してくれなかった。
君は昔から、いつもそうだな。」

そして小石を靴先に当てながら、早口でまくし立てる。

「本心を、何も明かさない。
仲間が近くにいるにも関わらず。」

「……………」

「…私は軍の新しい体制を築くため、これから多忙になる。もう一般人とは、おいそれと会えまい。」

突き放すようにして、彼は背を向けた。

フィンドルは、初めから覚悟していたように、それに頷く。

「だから、これで…最後だ。」

彼は、穏やかに足を止めて言った。

「リード少佐の遺品に、一つ。

妙な物が紛れ込んでいた。

詳しい者が言うには……それは『孔雀』という種類の鳥の羽らしいが……」

そんなものは、ルベランセで飼ってなかっただろう?」

フィンドルは息を飲み、顔を上げた。

「今は、軍の保管施設にある。

君の名前で受け取れるように、後で手配しておこう。」

「良いのですか……?」

「残念だが……」

私は早急に軍隊の足並みを揃えるため、騎士団の動向を探ってい

る余裕が無くなったのだ。」

「…恩に着ます。」

すぐに、フィンドルは振り返った。

何も目に入らない様子で、ただ真っ直ぐに進んでいく。

「そうやって…君はいつも……だな。」

彼は、寂しそうに呟いた。

自分とて、彼女に謝りたい気持ちがあった。
だが、今回も、それすら聞いてくれる間は無かった。

頭上で。

死者を送る鐘の音が、悲しく鳴り響いていた。

エア・ファンタジスタ
A i r・F a n t a g i s t a

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第二話 『群狼』

1

小高い砂丘から、戦場を見下ろす二頭の駿馬。

「我等の軍勢に、あの者が加わってから……。
今までの苦戦が、嘘のように優勢ではないか。」

ジエダス「オルゼリアは鞍上で、驚嘆を込めながら言った。

「ただ… あれは自分勝手すぎる節がある。
これが全体の士気に関わらねば良いが。」

冷静に答えるのは、彼と鎧あぶみを並べたザイク「ガイメイヤである。

二人はリエディン騎士団の双壁として、遠征当初から軍勢を率いていた。

当時、騎士団員の数は少なかったものの、それに付き従う農民出身の兵卒は多かった。

豊富な兵を幾つかの班に分け、そこに戦い慣れた騎士を頭として据える。

それが彼等の兵法である。

だが、そんな工夫など。

圧倒的な『武』の前では、まるで意味を成さないと、二人は思い知らされていた。

その日も、彼等が戦況を改めて確認していると 敵陣から飛び出す大男。
砂埃を立てて、瞬く間に、こちらの砂丘まで一気に駆け上ってくる。

右手で手綱を引き、彼は二人の前で急停止。
続けざまに、左手で握っていた敵将の首4つを、無造作に放って
よこした。

「敵陣、崩れ申した。
総攻撃の合図を…」

「下馬されよ！」

報告の対面、ガイメイヤからの叱責。

「お、これは……失礼…」

気付き、慌てて馬を降りる彼。

「何ぶん、田舎者にて、こういう儀式事には慣れておらず…」

「最低限の礼儀を『儀式事』と申すのか。」

その態度に、ガイメイヤは眉尻を吊り上げて続けた。

「…貴殿は、王自らが招かれたということ……何か勘違いをして
はおらぬか。

私だけならば、いざしらず。」

こちらはリエディンの名家、オルゼリア卿なのだぞ。」

「まあ、よいではないか。」

苦笑して、ジエダスは止めた。

そして彼もまた下馬し、自ら男に寄って、労をねぎらう。

「あの見事な戦いぶりに、私はただ感心するばかりだ。
豪傑とは、まさに貴殿のためにある言葉よ。」

「は。」

恐縮する素振りを見せながら、男は背筋を伸ばした。

「…そなたはもう、本営へ戻るがいい。
獲得した首級の報告は、こちらでしておく。」

「いや、まだ夕刻には時間がありますゆえ……自分も総攻撃に参加
いたしまする。」

命令を下すガイメイヤに対して、男は一礼し。
外衣を返して、再び馬に跨った。

そして、迅雷の如く戦場へと帰っていく様は、今度は戦神と見ま
ごうかのようにだった。

「あの男……まだ手柄が足らぬというのか!」

「欲しているのは、手柄ではなかるう。」

憤慨するガイメイヤに対し、ジエダスは呟いた。

「なあ、ガイメイヤ。」

「何だ？」

「お前は一介の騎士の身分から、『叩き上げ』で將軍の地位を掴んだ。」

その努力は皆知るところだ。

だから、特別扱いされる者に辛く当たるのは良く解る。」

「……………」

「しかし、もっと寛大な心で物事を捉えてみんか？」

あらゆる垣根を越えて……我々は、友になれると思うぞ。」

砂を踏み、丘の先端へと到る。

「見ろ、あの男……」

たった一人で、この戦乱を50年は縮める気だ。」

そして、彼は眩しそうに眺めていた。

押し寄せる津波の如く、たった一騎で敵陣をなぎ払っていくその雄を。

ベッドの中で、ジェダスは薄く目を開ける。

見慣れた室内。

だが、脇には、普段いるはずのない大男がそびえ立っていた。

「いま、夢の中で会って来たばかりだというのにな。」

冷静に呟かれる言葉。

「やれやれ…少しも驚かぬとは。
相変わらずよの。」

タンダニスは苦笑して、その脇に腰を下ろした。

「おぬしの友人だと名乗ったら、ここまで簡単に通してもらえたぞ。
これが、名家の屋敷の守りとは恐れ入ったわ。」

「老いぼれを守る必要など、無いではないか。」

ジェダスは笑い、ゆっくりと上体を持ち上げる。

何気ない動作だったが、驚くくらい遅い。

タンダニスは感慨深げに、老いた友を見詰めていた。

「そんな顔をするな。」

そんな上からの視線に気付いている彼は、苦笑して言った。

「憐^{あわ}れんでなど、おらぬわ。」

しかし……わしが来ると思っておったのか？」

「いずれな。」

老体の、猫背が揺れた。

「……大団長のことであろう。」

だがその眼光だけは、衰えを感じさせなかった。

「察しておったか。」

タンダニスは続ける。

「だが……わしは信じたくない気も半分じゃ。
あれは決して、私利私欲に走る男では無かるう。」

「その通りだ。」

奴は、自己にも他者にも厳しい男よ。
だからこそ、今まで騎士団を率いてこれたのだ。」

強い口調で、ジェダスは拳を握って言った。

「…だが、中王都市の政府と軍隊が腐り過ぎた。
奴が変心したとしても、不思議は無いくらいにな…。」

「……。」

「会うつもりか、今のガイメイヤに。」

「そのつもりであるが…」

タンダニスは片手で顎鬚を遊ばせながら、困ったように呟いた。

「この国の実情は…見えたのか？」

ジェダスが窓の外の景色に目を移して、問いかける。

オルゼリア領の、色濃い新緑。
青葉の茂る、逞しい木々を見るうち、彼の顔の血色は良くなって
いった。

「……ふむ？」

まだ、来たばかりじゃて。」

その視線に倣いながら、タンダニスは笑って誤魔化した。

ムーベルマからの一連の事件を、ジェダスはまだ知らないだろう。もはや騎士団の関与は決定的であり、その点に関しては、なまじ中王都市の軍隊よりも確信がある。

だが、モンスロンが遺した文書に記されていない要素も、否定はできなかった。

文面だけを信用して、ガイメイヤと対峙するのは、まだ何か足りない。

己の豪気さゆえか、ここまで身を動かしてきてしまったが、いま立ち止まって、深慮する必然は、大いにあった。

「そうじゃ、この間。

息子の聖騎士殿に、お会いしたぞ。」

それらの考えを、とりあえず頭の端へと送り。

一転してからかうような口調で、タンダニスは言った。

「そうか。」

口を真一文字に結ぶジェダス。

「人の成長は、実に早い。」

よくぞ、あそこまで立派に育てたな。」

「……そうか。」

何かの含みを持たせて、彼は同じように呟くばかりだった。

「どうした、何が気になる？」

「……この家名が、マクスには重いのではなからうか。前々から、そう思っておつてな。」

「…重荷じゃと？」

「家の歴史と名誉、聖騎士の責務。」

これらに、板ばさみになってはおらぬかと。」

「親ばかりめ。」

あれは、まだ若いのだ。

気の済むまで、苦悩させれば良いではないか。」

「お前は、他人ごとのように…」

「はは、他人ごとではないぞ。」

わしとて…あの子と……因縁が浅からぬわけではないからな。」

「…それ以上は言っな、タンダニス。」

ジェダスは真摯^{しんじ}な眼差しで、彼の言葉を止めた。

二人の脳裏に、記憶がよみがえる。

もう、何度目の遠征を数えただろうか。

叛乱軍が核になる人間を失った時期。

それらは同時に、当初の勢いをも失い、減衰の一途を辿っていた。

その頃。

ザイクⅡガイメイヤは中王都市と名を変えた母国で、改めて編成された騎士団の長に任命。

それを補佐するように、ジェダスⅡオルゼリアは白の隊の筆頭となっていた。

タンダニスも招かれたが、頑なに現地に残り、転戦を繰り返す。様々な功績から、自身さえ辞退しなければ、聖騎士になっている程だった。

そのように十字軍による殲滅戦が主な時代になると、中王騎士団

の本隊が参加することは稀となった。

だが、その日に限って。

ジェダス率いる白の隊が、殲滅隊に加わっていた。

再会の喜びを味わう間も無く、彼等は共同して、抵抗勢力があった『とある村』の一つを焼き払った。

そしてその後、二人は確認のために、村内を練り歩いていた。

地と泥に穢^{けが}れた廃屋を、馬で踏んで進む。
そんな戦場になった生活の場を巡るのは、いつでも胸が悪くなる
思っていた。

その時、二人は赤子の泣き声を耳にした。

声のする方へ馬首を返した矢先。

目の前の家屋の屋根が、大きく崩落する。

二人は安全な場所に退避して、その全てが落ちるのを待った。
だが、すぐに異常さに気付いて、身を乗り出した。

泣き声は止まなかったのである。

幻想的な風景。

赤子の周囲では、崩れ落ちた瓦礫が銀の粒子へと変わり、降り注いでいた。

「神の奇跡か……？」

それに導かれるようにして、馬を降りたジェダスが歩み寄る。

拾い上げる赤子の、薄っすらと生えた髪の毛は艶やかな銀色で、玉のような肌も煌めいていた。

だが、その右腕に、奇妙な紋様が浮かんでいることが解ると。タンダニスは迷わず、手にした槍を赤子の首元に向けた。

「……！」

それを遮るように子を抱きしめ、ジェダスは彼の前に立ちふさが
る。

「許せ。私のわがままを。」

その遠征の直前、ジェダスは第三子を病で亡くしていた。

タンダニスはそれを知っていてなお、もろとも貫かんとばかりに、彼の背に槍先を突きたてる。

「気持ち解る。

だが、その子はいかん。

ここで息の根を止めねば、後の世に大きく仇を成す、叛乱の芽となろう。」

その忠告にも、ジェダスは動じなかった。

彼は、もう疲れ果てていた。

悲しみにも。

そして、戦乱の世にも。

結局。

『至高の槍』と呼ばれた勇でも、そのように巡り逢うべくして巡り逢った親子に、手を下すことは叶わなかった。

その後。

多数の難民の心を掴んだタンダニスは、それらと共に東方へ流れ、不毛の地で建国することとなる。

そして現在まで、二人が顔を合わす機会は無かったのだ

給仕の女性が、桶に溜められた水を月桂樹の枝葉ですくい、焼けた石に飛ばし、定期的に湯気を発生させる。

タンダニアでは、このように薰り立つ蒸気風呂が、公衆浴場として定番とされていた。

「いいんですか、こんな公の場で鎧を外されても。」

……聖騎士殿。」

「……。」

不意に隣に座ってきた男の言葉に、顔全体に被せていたタオルを上げるマクス。

「…探しましたよ。」

クウさんに言付けるだけで、人をここまで呼びつけて…。
まったく。」

「すまないな。」

そうして確認したヒュベリの横顔に向かって、マクスは微笑んで言った。

「今は、何をなさっているんです？
本国に帰還もせずに。」

「教会で捕まっている。
しかも、これから各地を説法に廻って欲しいと頼まれてな。
それに…すぐに帰還しろとは、命令されていない。」

「なるほど。
物は言いようですか。」

ヒュベリは、外部から特に親しいと見られないように、終始正面を向いたまま喋る。

「タンダニアの国境付近の様子はどうか？」

「ええ、驚きましたよ。
レイザンピークでは現在、わが国のルベランセという輸送艦が解体作業中です。
何でも賊の襲撃に遭ったとか…」

その報告を、マクスは複雑な気持ちで聞いていた。

「…彼等は、モンスロン卿の亡命の手助けをしていたのだ。
卿自身も、同じ頃に暗殺された。」

「なんですって…！？」

彼とは同じ隊に属していたヒュベリが、手で押さえた口の奥から、

驚きの声を上げる。

「私も、つい先日タンダニアの関係者から聞かされてな。おそらく、これも騎士団の仕業…」

「いや、そうじゃなくて！

モンスロン卿は、どうして亡命なんか！？」

「私とて、詳しい理由はわからない。

だが…騎士団が不利になる情報を握っていたのは確かだろう…。」

「……いま、騎士団では何が起こっているんですか。」

ヒュベリは、憤りを隠さなかった。

「最近の不穏さは、尋常じゃありませんよ。

聖騎士殿が、こういった行動をとる理由が分かったような気がします。」

そして表情に一抹の野心をのぞかせて、彼は小声で近付く。

「もし、聖騎士殿が立つつもりならば、私もお供しますよ。」

「やめてくれ。」

マクスは鼻で笑った。

「柄じゃない。」

それに、もしもそうしたら、君と同じようなことを言い出す人間が、もっと多く出てきそうだ。」

「それはそうでしょう。」

下っ端の騎士ならば、大半が私と同意見になるはず。

オルゼリア家が立ち上がれば、他の名家……ハイランドとメルステンも黙っていないでしょう？

この御三家が手を組んで、中王騎士団の先頭に立つというならば……」

「おいおい。」

「騎士団だって、一枚岩じゃありません。」

名家出身でない大団長への不満は……若く、末端の者ほど、強く根付いているのでは？」

「……………」

マクスは押し黙った。

子供の頃、父のジエダスが昔話をしてくれた時、彼は常にガイメイヤへの賛辞を欠かさなかった。

だが、今の時代では、それを伝える者も少ないようである。

「それに……国内戦争を強行するかのような今の騎士団の姿勢に、『大義』は無いですからね。」

誰だって、同じ国民同士で殺し合いなんてしたくないでしょう……」

「だがもしも、それを手に入れたらどうなる？」

「……大義を？」

彼は途端に口ごもる。

「ヒュベリ。」

しばらく、聖騎士をやってみる気はないか？」

「は？」

「互いの服を交換して、ここを出よう。」

マクスは、おもむろに立ち上がる。

「何を言ってるんですか。」

自分が貴方になりすませるわけ……」

タオルで股間を隠し、それを慌てて追うヒュベリ。

「聖騎士といっても、皆、銀の鎧しか見ていないさ。」

タンダニア国内の教会を適当に巡回するだけでいい。」

「自分は、大聖典の一文だって憶えてませんよ。」

「私だつて似たようなものさ。」

彼は笑つて、前に行く。

「つまり……『マクス＝オルゼリア』が『ここ』に滞在していた、という事実があれば良いわけですか。」

「その通りだ。」

戦闘騎は操縦できるな？」

「少しならば。」

「……よし。」

頃を見計らつて、私の機体でオルゼリア領へ歸つてくれ。
あそこなら、怪しまれずに済む。」

「どちらへ行かれるおつもりですか。」

「……あの軍師を騙すには、相当の裏をかねばならん。」

精悍な眼差し。

ヒュベリはそこから、ある種の人間しか持ち得ない、天賦の資質を感じた。

すぐに脇に置かれた水桶を取り、そばの焼け石に放つ彼。

発する、濃い蒸気。

そして、風呂内がそれから明ける頃には、二人の姿は無かった。

2

オルゼリア邸門前の木陰で、タンダニスは既に待ち構えていた。

「遅れてしまい、申し訳ありません……！」

「首尾はどうじゃ？」

目前で停止した馬車から、慌てて降りて来るアリアネへ尋ねる彼。

「…これといった有益な情報は得られませんでした。

やはり、今回の事件は民間に広まっていないようです。

御用の方は、もう終えられたのですか？」

「……うむ。」

「陛下？」

薄目のまま報告を聞き、返事もつわ言のように呟くだけのタンダニスに、彼女は近付く。

「やはり…国の問題は、その国で収めるのが流儀なのかもしれぬ。」

彼は、先程のジェダス＝オルゼリアの態度を、何度も思い返していた。

「ここまで来て、迷うとは。」

「…このわしも、歳をとったものじゃ。」

そうやって自嘲する彼の足元に、後から馬車を降りて来た小猿が寄り添う。

「なにやら、このあたりで評判の店より購入いたしました…。」

しかし果たして、陛下のお口に合いますかどうか……。」

面前では、アリアネが照れた表情で、紙袋を両手で差し出していた。

言われるまま、その袋を開く彼。

そこには小さくて丸いパンが、沢山詰められていた。

「まだ温かいのう。
どれ…。」

それを一つ掴み、千切って口に運ぶ彼。

現地に着いてからというもの、何も食していない腹の底に。
ほのかな小麦の香りと、砂糖に漬けられた胡桃くるみの味が染み渡る。

「空腹は…考え方を貧しくさせるもの、か。
すっかり、忘れておったわ。」

「……陛下におかれましては…何事も独りでなさらずに、もっと従しもへを使われますよう…切に願います。」

「わしは果報者じゃな。」

小猿を肩に乗せて、ひざまずくアリアネの手を取り、彼は歩み出る。

「もっと、この国を知ろう。
それから改めて、あやつに対峙しても……遅くはあるまい。」

「…は！」

小気味良い彼女の返事と共に。
上空では、幾つもの輸送騎が、音を立てて飛んでいく。

王は興味のこもった瞳で、それを暫く眺めていた。

ケンリントンは、湖に面する小さな村である。

首都は程近く。

湖を挟んだ反対側に、その街並みを僅かに確認できる。

村の唯一の広場にて、大会の説明と受付が行われるのは、夕刻の予定であった。

それを見越し、続々と集まる参加者達。

さらに、それらを格好の獲物とする各種屋台の出現で、会場は芋の洗い場と化している。

「……………」

そして戒は、口を半開きにして、愛らしいというよりも『珍妙な彼等』の様子を不思議そうに眺めていた。

周囲の混雑も顧みず。

広場では、大勢の『クマの着ぐるみ』が大道芸を披露して、空気を和ませているのだ。

「あれって、コーラルサーカスじゃない。
えっと…確か…マスコットキャラクターの……」

思い出しながら、言葉を止めるシユナ。

「『ジャグマー君』だな。」

それを補足したのは、意外にもバーグだった。

「く、詳しいんですね……。」

「あのサーカスはよ、昔は戦場で慰労の活動してたんだ。
娘がまだ子供の頃……あれのキーホルダーとか買ってやったんだ
ぜ。」

若干引き気味の彼女に、誇らしげに続ける彼。

「喜んだか？」

「いや……あんまり記憶にねえな……。」

戒の疲れたような問いに、バーグは頭を掻いた。

広場の流れを逐一確認できる、付近のパブのテラス。

彼等は時が訪れるまで、そこで席を取り、待機することにした。

だが、本番を明日に控えているというのに、会場には未だ手の及んでいない箇所が多く。

アーチや柵の設置を急いでいる連中が、忙しく目の前を横切っている。

「でも……フィンデルさんとはかく、ミーサまで来ないとはね……」
それらを眺めつつ、シユナは暗い声調で切り出した。

「バーグさんが誘えば、確実だと思ったのに。」

「…何でだ？」

火の点いた煙草たばこを片手に、素の表情で訊く彼。

「…それは…その…」

「来ない奴のことを、いつまでも気にしてたって仕方ねえだろうがよ。」

言葉を濁す彼女に対し、戒がテーブルに頬杖を突いたまま言った。

その視線の先には。

早速、食べ物屋台の行列に並びながら、脇の大道芸を見物してい

る世羅とザナナがいる。

「ザナナさんにべったりね。」

それに目をつけて、シュナが半眼で呟く。

「私、てつきり、あの子は戒のことが好きなんだと思ってたけど…」

「適当なこと言ってんじゃねえぞ、お前。」

戒は、思わず立ち上がった。

「なに動揺してんだ。
座れよ。」

小馬鹿にした笑みを浮かべ、その肩を掴むバーグ。

「やきもち焼くくらいなら、いつそのこと、お前がザナナをかばってたのを教えちまったらどうだ？」

その反動で、もっと好きになってくれるかもしれねえ…ぞつ。
いてっ、いててっ…」

肘鉄を頬に喰らいながらも、彼はからかい続けた。

「あのねえ……ふざけてる場合じゃないのよ。」

受付が始まる前に、早く最良の組み合わせを決めておかないと。」

鼻息荒く、足元に置いていた大弓を片手にとるシユナ。
そしてその弦を何度も引いて、鳴らしてみせる。

「組み合わせ？

何のことだ。」

「大会は三人一組での参加なんだろ。

俺たちは、今ちょうど、六人いるわけだ…。
なら絶対、二組で出た方が有利じゃねえか。」

訊き返す戒に、バーグが答えた。

「だから、各人の力のバランスを考えて…」

「バカか。

俺様とザナナと世羅で、もう決まりだ。
やりたけりゃ、残った連中で勝手にやれよ。」

さらに話に輪をかけようとするシユナを、戒は冷たくあしらう。

「パンリみたいな戦力外と組む方の身にもなりなさいっての…！」

脇に当人が座っているにも関わらず、叫ぶ彼女。

「まあまあ、俺たちで上手くフォローすれば、意外に何とかなるんじゃないねえか？」

競技の内容にもよるけどな……」

それをなだめる余裕を見せながら、バーグは笑った。

「……！」

だが次の瞬間、表情を一変させて硬直する彼。

その視線は、広場の端に集まっている身なりの良い一団へと向けられていた。

「……悪い。」

ちよつと、予備の煙草が切れちまってたんだ。

買ってくるわ。」

そして唐突に、くわえていた煙草を潰して立ち上がり、彼は正面の人混みの中へと消えて行く。

「何だ？」

あの野郎……」

「様子が変だったわね。」

戒の疑問に、シュナも同意する。

「あの…すみません……。
私も少し、宿へ戻っていても良いでしょうか…。
ちよっと気分がすぐれなくて…」

そこへ、さらに続けて、パンリが深刻な表情で言った。

「ああ、いいけどよ…」

「では……。」

戒の言葉に頷き、自分の荷物を背負って、とぼとぼと歩いていく
彼。

「…お前が悪いんだぞ。」

あいつが頼りないとか言うから…」

「なによ、事実でしょ？」

その姿を目で追いながら、再び二人は言い争う。

「ここ最近、あいつ口数少なくなえか？」

「知らないわよ、そんなの。」

「……………」

「……………」

もう面倒になり、お互いが無言になる中。

行列に並ぶザナナと世羅の姿が、若干、前に進んだ。

その後ろへ、さらに食料を求める集団が加わっていく。

「しかし…まあ、当然だよな。」

呆れたように呟きながら、広場の先の湖へと顔を向ける戒。

停泊している、飛翔艦の数々。

そこから、次々と参加者達が押し寄せているのである。

「そうね。」

今すぐ新しい飛翔艦を欲しい人達って、既に扱える人達ぐらいなものね…。」

「ズブの素人だけが参加するわけねえか…。」

この分だと、かなりの人数になりそうだぜ。」

シュナの指摘に、戒は苦笑した。

どんな内容の競技が行われようが、個人的な能力が試されるのなら、それほど臆するものは無い。

だが、組織を相手にするのは、厄介だった。

何と言っても。

飛翔艦の乗組員達が、複数の組を作り協力し合えば、個人で参加した組が入賞できる確率は極端に減ってしまう。

大会で、この点を規制するルールが定められているのか、非常に気になる場所であった。

「……ん？」

そのような考えの最中。

戒は、二隻の奇妙な飛翔艦に目を付ける。

「どうかした？」

「…いや、どうってことはねえけどよ。」

彼女の問いに、指で示す彼。

その二隻は、並んで停泊しており。

お互いに面した、『脇腹』
砲門などが備えられている部分

が著しく損傷して、真っ黒に煤^{すす}けていたのである。

「これまた、随分とボロいわね。」
辿り着いたのがやっとの感じじゃない。」

「あれは……なんか臭うぜ。」

率直な感想を洩らす彼女に、戒は煮え切らない表情を作る。

その時だった。

さらなる一隻の飛翔艦が、湖の奥から、大型船に牽引されて姿を見せたのである。

後部に付いた、四門の噴射口。
両側面で、美しい傾斜を描く翼。

大砲の類は一切外に出ておらず、それらが格納されている部分の継ぎ目が、装甲の至るところに走っていた。

真新しい鋼鉄の光沢を美しく輝かせ。

悠然と水面に波をたてて、迫り来る圧巻の景色に。

自然と湖のほとりに出来上がる、人の壁。

当然だった。

皆、これを目的に集まっているのだ。

その様子には、列の二人も釘付けになっている。
特に世羅は、純粹に飛翔艦だけを食い入るように見詰めていた。

戒は、その横顔に見入っている自分に気付き、慌てて対面のシュナに視線を戻す。

彼女は呆れた表情のまま、今度は何も言わなかった。

そんな広場の喧騒を横切りながら。
パンリは、首都へと戻る道を急いでいた。

装甲馬車でも鉄道でも、何でもいい。
とにかく、遠くへ行きたい。

このところずっと、そんな考えに支配されていた。

本来なら、世話になった仲間達に断りを入れてから旅立つのが筋だろうが、大会に向けて意気の上がり始めた彼等に、水を差してはいけない。

そう自分に暗示をかけるが如く。

今はただ、逃げるようにして足を動かしていた。

違和感は、ルベランセに搭乗した当初からあった。

そもそも、そこに乗りこんだ理由が、興味本位といっても過言ではない。

他の者と比べても、気持ちの面で劣っていた。

そして過ちもあった。

それは、空という別環境に身を置くことで、自心の劇的な変化を期待したことである。

現実の空では、暴力という風が吹き荒れて。
生命を無遠慮にもぎ取っていく。

そのように過酷な場所での生活など、弱い自分の姿を、余計に浮き彫らせただけに終わった。

備えが無いということが、こんなにも罪だとは思わなかった。

今回は、周囲に有能な人間がいたおかげで、助かったにすぎない。

だが、それをバネに自身が強くなってやろうという思想は、パンリには無かった。

肉体的や精神的に、『向いていない』ということが、自分で良く

理解しているからである。

ならば、初めから守られる必要の無い、平穏無事な暮らしを求めればいい。

それが、最後に行き着いた答えだった。

過去にウエンウエンは、自分は友に対して、何かの手助けが出来るような存在だと占った。

頭の片隅で、少しだけ信じていた。

だが今、そんな根拠や可能性は、この臆病な身体のどこを探しても見当たらない。

そのことに対して、少し恨みにも似た感情も芽生えた時、彼は全てから逃げることを決めたのである。

急ぎ足にも疲れた頃。

広い農道の真ん中で、頭上が急に断続的な影に覆われた。

パンリが顔を上げると、道端に連なった風車小屋の屋根で、何かが飛び回っている。

少し集中してその動きを追うと　　目を疑うような景色だった。
沢山の人間が、小舟で使う櫂かいのような不思議な棒の上に立ち、空
を飛んでいるのである。

驚きのあまり、パンリは足を止めて、身を強張らせていた。

そこで地面に訪れる、激しい衝撃。

「いつでえ……！！」

太い呻き声だが、女性。

それが、パンリの脇で、しこたま打ち付けた尻の砂を叩きながら、
立ち上がる。

丸みを帯びた体の曲線がくつきりと浮かぶ、薄いツナギを纏った、
良質な体躯。

目元は防風ゴーグルをかけているので、表情はうかがえない。
だが、後ろで結んだ群青色の長髪と合わせて、なかなか端整そう
な顔立ちをしていた。

「くそっ……！」

風に……乗り損ねちゃった……」

舌打ち交じりに、手にしていた棒を放す彼女。

良く見れば。

その棒の平たい先端部には、無数の布が、何かの法則性をもって結ばれている。

しかし、詳しく分析している場合ではなかった。
慌ててその場を離れようとするパンリ。

だが既に遅く、その棒と同様の物で頭上を飛んでいた集団は、落ちてきた彼女を追いかけるように次々と地に降り立ち。
あつという間に、その周りをパンリごと囲む。

「きつたねエぞ、コルスス！
今は、停戦中のはずだろうが！！」

「ははっ！
油断を見せる奴が悪いんだろうがよオ！！」

彼女の咆哮に対し、囲みから一步前に出る男。

人相が悪い系統の顔は、さんざん見慣れていたはずのパンリだったが。

その彼の三白眼が醸し出す気配は、相当に肌寒いものがあつた。

「おとなしく降参して、オレの女になりやがれ。
痛い目を見ないうちにな。」

「もう飽き飽きだね、そのセリフ。」

彼女は不敵に笑って返し、すぐ脇で震えているパンリに目をつける。

「…それにさあ。」

あたしにや、もう別の『男』がいるんだ。」

「な、なんだとオ!?
いつの間に!？」

大袈裟なりアクションと共に叫ぶ相手。

「
え?。」

次の瞬間。

パンリは軽々と抱きかかえられ、彼女の大きな胸に埋もれていた。

「こいつが、あたしの男さ。
わかったら、もう諦めるんだね。」

「う、うそつけ!
そいつは、単なる通行人だろうが!！」

「ああ、そうさ。

だが、たった今、『一目ぼれ』した。」

ゴーグルの中から、琥珀色の瞳が僅かに覗いた。

「…悪い。

話合わせてくれや。

それと…」

同時、耳元で囁く彼女。

続けざまに、パンリは股間を強く握り締められる。

「良かったぜ。

ちよつと、女じゃねえかと疑ってた。」

「!!!?」

下品に笑う相手に対し、恥ずかしさと恐怖に混乱したパンリは、黙って頷くことしか出来なかった。

「あたしやねえ、こんな可愛らしい顔した年下の子が好みなんだよ。てめえみたいな、極悪人まるだしのツラした野郎が、一番嫌えなんだ!!!」

とつとと失せな!!!」

「う……ぐ……」

さらに飛び出す罵詈雑言に、コルススは悔しそうに齒茎をむき出しにしたまま固まる。

「…こうなったら、力ずくだ。

てめえら…痛い目を見せてやれ。

その男は……特にボコボコにしろ。」

だが暫くして、その怒りに震えた彼の口から、パンリは恐ろしい言葉を聞いた。

「ちっ！

そう来るか！！」

咄嗟に、かばうように身を乗り出す彼女。

男どもは不思議と、先程のように、棒を利用して飛んでは来ない。普通に、ナイフを片手に襲い掛かってくる。

彼女はその凶刃の軌道を読み、パンリを地に押し付けると。

突っ込んできた相手の手首を簡単に取って捻り、掴み上げる。

「……ッ！」

もがく暇も無い、一瞬だった。

「
《雷・創》！！」
グエ・ルフ

彼女の言葉と共に。
鼓膜を襲う裂音。

そして目の前で起こる局所的な発光に、パンリは思わず目を細める。

動物が焼けたような臭気の煙の中で、敵影が揺れる。

「
……！！」

その惨状が判った時、パンリは気を失いかけた。

全身の穴から煙を立ち昇らせ、眼球が蒸発した顔面から地に伏す相手。

彼女は彼の手首を握っており、その先端は木炭のように真っ黒に焦げていた。

気味の悪い臭いは、そこから放たれているのだ。

「次に死にたい奴… かがってこい。」

その手首を無造作に放り投げ、彼女が挑発すると、途端、男どもは遠巻きになった。

「二代目!」

形勢が傾きつつあるそこへ、さらに若い男の声が響く。

その彼は、皆が注目する中。

例の棒に乗って器用に風車から風車へと渡り、彼女の元に着地した。

「ベルツサス。」

パンリには、その名を呼んだ彼女の声が、少し安堵したように聴こえた。

「遅れてすみません。」

言いながらゴーグルを下ろし、集団へと向かい合う彼。

「もういい加減にしろ、兄貴。

亡き師が、あの世で嘆いているぞ!」

「うるせえぞ、この腐れ弟が。

……
《風・脈》ハイ・パウル。」

それをいなすように自身はゴーグルをかけ直し、唱えるコルスス。

すると突如、彼の足元に風の力場が発生する。

そこで初めて、彼等は手にした棒に乗り、その風を利用して飛ん

で行くのであった。

「……ここは一旦、引いてやる。

だが……てめえのツラ……忘れねえからな……。

ぜってえ八つ裂きにして、ぶち殺してやる。」

コルススは去り際に、厚いガラスの奥から恐ろしい瞳相をのぞかせて、それらを呆然と見上げているパンリに告げた。

平穏無事な暮らしを求めた矢先の彼だったが。

それとは程遠い運命が、待ち受けていたものであった。

広場の裏手に設けられた卓。

そこでワインとチーズを囲み、談笑するギルドの関係者らしき一団。

バーグは付近の茂みに隠れ、その面々を確認していた。

案の定、その中には、傭兵時代に知った顔の人間が何名かいる。

そして、忘れようとしても忘れられない、一つの顔。

自分が過去に殴ったギルドの主人であった。

（こいつも、来賓^{らいひん}として呼ばれているのか…）

込み上げて来る、恨みとも怒りとも分らない、不思議な感情。

（わざわざ確認しに来て良かったぜ。

…シユナには悪いが、俺はこの大会には出れそうにねえな…。）

ギルドの出入りが禁止されている身である。

たとえ入賞しても、それが理由で、取り消されるのが目に見えていた。

バーグは拳で地を叩き。

自分の過去の所業を、そこで初めて呪った。

「いやはや、大変な催しになりましたな。」

そんな彼の絶望をよそに。

彼等は、酒を互いの杯に注ぎながら、労をねぎらい合っていた。

「しかし、これは費用がかさんで仕方がない。

本部は何を考えて、こんなものを企画したのやら。」

「いや、滅多なことを言わないほうがいいですよ。」

それは……」

一人の愚痴を、誰かがいさめた正にその時。

「チバステイン」デスタロッサ男爵、お着きです。」

給仕人の報告で、全員が反射的に背を伸ばした。

そんな緊迫した空気の中を、外行きの装いで現れるデスタロッサ。彼は神経質そうに、ステッキを片手に集団を見回し。

そして、目当ての人物　ムーゼンクレタ社の会長へと近付き、握手を求めた。

「先程、到達した飛翔艦を拝見させて貰った。これまた随分と新しい物を、ご尽力いただけたようだ……。」

「いえいえ。」

微笑んで応える相手。

「お礼でしたら、まずはギルドの皆様に。彼等の協力なくして、このような規模の大会はありませんからな。」

そして、全員を見回す。

「中王都市の今後の方針を取り入れれば、各国のギルドも忙しくなりますよ。」

その発祥の場所に立ち会えるなんて、皆様もさぞかし光栄でしょう。」

「？」

そんな彼の言葉に対して、各街のギルドの主人達は一様に困惑した表情を浮かべた。

「これはこれは。」

どうやら皆様は、この大会の趣旨を理解していないご様子。男爵。

いかがですか、ギルド総本部の意向を動かした名演説を、今ここで披露されては。」

恩に着たばかりの人間にそう促されては、引けなかった。

「……これは随分と前から協議されているのだが　中王都市は、個人の飛翔艦乗り達に対して、『特権』を授けることを検討している。」

咳払いと共に、デスタロッサはグラスを卓に置く。

「具体的に説明すれば、軍の施設を利用でき、そこで武器・食料な

どを調達させて貰えるということだ。

『ギルドに認められ、そこで正式登録された飛翔艦乗り』を限定
にな。」

絶妙なアクセントを入れて、説明を続ける彼。

「…この法律が適用されれば、モグリの飛翔艦は淘汰され。

さらに、依頼の達成率の向上にも繋がることは、疑いようがない。

」

初めは漠然と聞いていた各主人達も、そこでようやく事の重大さに
気付き、色めきだつ。

「何よりも……個人の飛翔艦を、実質的に政府側へと取り込む事が
出来るのは大きい。

有事の際に、彼等を予備軍として使えば、単純に国力の増強に
も繋がるだろう。」

デスタロツサは、そこで言葉を止めなかった。

「そして今大会は、飛翔艦文化の高盛をアピールする絶好の機会と
共に。

あらゆる身分や種族の垣根を越えて、その門を大きく開け広げた
という点において、重要な意味合いを持つ。

…これは、まだ小さな波だろうが、将来、確実に大きくなるだろ
う。

皆様、中王都市の永遠の安寧のため、どうか手を貸していただき

たい。」

そして話の締めくくりに、帽子を外して会釈する。

万雷の拍手は、すぐに巻き起こった。

（…つまり、これから先…飛翔艦に乗る限り…。

ギルドとの関係は…切っても切れなくなるってことか…？）

だが、それを隠れたまま聞いていたバーグは、さらに愕然としていた。

「……………冗談じゃねえ。」

その場から中腰のまま離れ、泥の中を歩くように重い足を引きずる。

（…これから先、もう一緒に居れないな…。

だが最後に、せめてこの大会だけは…何とか、あいつらに勝たせてやりてえ…………。）

首にかけて妻の形見の鎖を握り締め、祈るような思いで目を閉じたその時。

彼は脇に、荷車が置いてあるのを発見した。

近寄って覗いてみると、おそらく予備であろつ。
例の大道芸人達の着ぐるみが、大量に置いてある。

抜け殻のように萎んだ胴体部は元より。

固い材質で造られた頭部は、見れば見るほど、粗末な顔のつくりだつた。

クマを模しているといつても、黄土色をベースの楕円形に半円の耳を繋ぎ、目と口を付けたのみである。

だが、その中の一つが。

何かを訴えるように、自分の方へと向いているように見えた。

「……ジャグマー君か……」

そんな黒いガラス玉で出来た瞳を眺めているうち。
彼は誘われるように、それを手に取っていた。

「おい、そのあんた。」

「!?!」

そこで、背後からかけられる声。

焦ったバーグは、手にしていた着ぐるみの頭部を、反射的に被つてしまう。

「いま荷物が届いたから、手伝ってくれ。」

振り返れば、大会の雑用係らしき男が、別の荷車から手招きをしていた。

「……………」

そこで逃げれば怪しまれると思い、クマの頭部を着けたまま歩み寄るバグ。

「これを、夕方になったら、参加者に渡してもらうからな。そろそろ他の連中も呼んできてくれ。」

荷車には、ずた袋が山のように積まれていた。

「…それにしても、コーラルサーカスも大変だよなあ。この大会の運営中、ずっと手伝うんだろ？」

それらを降ろしながら、しみじみと呟く彼。

「…ずっと？」

バグは着ぐるみの中から、小さな声で訊いた。

「何だ、下っ端か。」

おまえら、大会の『雑用』と『監視員』をするんだろ？

詳しいことは、後で団長さんにでも聞くんだな。

……ちなみに俺は、このスタート地点だけのバイトだから楽だがね。」

相手はそうして、自慢するように歯を見せて笑った。

3

「……ダメ。」

二人とも、宿にいないわ。」

息を切らせながら、シュナが席に戻る。

空も湖も、既に夕暮れのせいで朱色に染まっていた。

慌しかった周囲の様子も整いつつあり、いよいよ大会の幕が上がろうとしているのを感じる。

「バーグさんの荷物はそのままだから、どこかをウロついているんだろうけど、パンリは戻った様子すら無いのよ。」

ずっと前から、逃げる算段をしてたんだわ……あの卑怯者!!」

「…ま、仕方ねえだろ。」

戒は、齒の隙間を掃除していた肉料理の串を皿に置き、それをテーブルの端へと寄せた。

「体力面から考えても……あいつにとつては、それが賢明じゃねえか。」

そして落ちかけた陽を眺め、納得したように呟く。

「どうして、そんなに平然としていられるわけ？」

あんたたち、友達じゃなかったの？」

「……………」

「私は、友達のもりだったわ。」

だからこそ、こうやって真剣に怒ったり、心配したりするのよ。」

シュナは胸に手を当てながら、そこから随分と離れたテーブルにいる、ザナナと世羅の方を見た。

ご丁寧にも皿を別にして、二人きりで食事をしたような様子が見とれる。

「…私たち、完全にバラバラじゃない。
こんな状態で、本当に勝てるの？」

「知らねえよ。」

意気の消沈と疲労でテーブルに伏せる彼女を、戒は視界に入れな
いようにした。

《お集まりの皆様に申し上げます…。
広場中央の壇上にご注目下さい…》

そこで、妙にエコーがかった声が広場に響く。

「…二人のことは諦める。
どうやら、タイムアウトだ。」

立ち上がる戒。

《只今より、第一回リエディン杯、中王都市大競技会を開催いたし
ます…。》

広場の真ん中に設けられた、高い演壇。

そこに立つのは、煌びやかなドレスに身を包む魔導人形だった。

背中に、玩具のような白い羽根の飾り。

それとは対照的に、無機質な表情には、妖艶な赤いルージュとアイシャドウが引かれていた。

そしてさらに、その首の脇に、もう一つの首。

青のルージュの顔が、眠ったように瞼を閉じている。

《進行は私、『真実を伝える魔導人形』、ハーニャンが務めさせていただきます。

以後お見知りおきを。》

口内に装備した拡声器で、周囲に呼びかけ。

礼儀正しく、お辞儀をする。

だが双頭の人形とは、何とも面妖で悪趣味だと、誰もが感じつつ、そこへと足を向けた。

《このたびは、記念すべき第一回目の大会となります。

まずは、競技をこの地で行う由来についてご説明いたしましょう。

……自らの名を冠した『リエディン王国』を『中王都市』と改名された先代の王は、稀代の名君と誉れ高い方でありました。

このケンリントンの村は、その美しい景観から、かの王が生前に、特に愛した地方と言い伝えられております。》

柔らかい手振りで景色を示しながら。

《時は流れ…今、大陸における飛翔艦文化は、最高盛を見せようと

しております。

中王都市が、その世界の流れに遅れをとらないのは、まさにかの王の偉業無しには語れないところであります。

…この地での開催とあいなりましたのは、それを偲ぶためでもあるのです。》

人形は流暢じょうちゆうに言葉を続ける。

《さて、既にご存知かとは思いますが……。

本大会では公報した通り、入賞した上位三組に『飛翔艦』が進呈されます。

ご覧下さい、あの雄姿を…》

そうして、勢い良く手で示す湖面。

だがそこに停泊しているのは、先程到着した飛翔艦が一隻のみで、さきほど感動を味わったばかりの、人々の反応は薄かった。

そこでスーツ姿の女性が壇上へ駆け上がり、耳打ちをする。

《 の予定でしたが、思いのほか運搬に手間取っているようです。

ゆえに今はまだ、一隻しか到着しておりませんが……最終日には首都にて、その雄姿を拝めることと思います。》

直後、淡々と付け加える人形。

白けた空気が、若干の不安を運び込んだ。

《特典は、こればかりではありません。

上位入賞された各組には、首都の宮殿におきまして、王室政府主催のパーティーへご招待など、様々な副賞が御座います。

どうぞ振るってご参加下さい……。》

「……よし。」

喜びを思わず口走ったような、呟き。

戒がそれを聞いたのは、進行役の人形が『宮殿でのパーティー』の話に及んだ時であった。

（飛翔艦よりも、そっちに興味を示す奴もいるのか……。）

声が聴こえた方へ目を向けると、そこはすっかり混雑しており、誰がその言葉を呟いたのかは全く判断がつかなかった。

《なお、賞品である飛翔艦の扱いについて、自信の無い方もご安心下さい。

本大会では、飛翔艦乗りの人口を増やすことも、活動の一環としております。

そのような方々が賞品を獲得された場合、ギルドが責任をもって訓練させていただき、立派な飛翔艦乗りへと仕立てて差し上げます。》

「……!!」

続く説明に、思わず踵を浮かせる世羅。

「良かったな、世羅。」

「うん!!」

ザナナがかけた言葉に、彼女は眩しい笑顔を向ける。

「……………」

いかにも楽しそうな二人を、戒は取り残されたようにして眺めていた。

《続きまして、競技内容の説明に移ります。》

そんな中、魔導人形の話は本題へと移る。

《まずは、指針を。

この大会では……飛翔艦乗りにおいて、特に大事とされる三つの要素。

『勇氣』と『知恵』と『体力』を競っていただきます。》

「……勇氣と知恵と体力だって？」

「そんなの、誰が決めたのよ。」

人形から飛び出した常套文句に、所々で沸く嘲笑。

《選手の皆様には、この湖の対面に位置する首都を目指し、半円を描くように西の陸路を進んでいただきます。

詳しいコース説明は、スタート直前まで控えさせていただきますが：前半はケンリントンの森、後半はアルチャーユ洞窟。いずれも、言わずと知れた難所が、待ち構えております。》

同時。

演壇の脇に、簡易的な地図が係員によって設置される。

《それでは。

参加を希望する各組の代表者は、お近くのジャグマー君から、こちらの袋をお受け取り下さい。》

さらに、『その時』は唐突に訪れた。

ずた袋を手に取り、高々と掲げる人形。

それを合図に、同様の袋を両手から提げたクマの着ぐるみ達が、演壇の影からコミカルな歩調で広場に進行する。

予想だにしない、その急な出来事に、人々は半分パニックの状態で殺到した。

「こ…このタイミングで出すのか…？
何考えてやがる…！」

背後から押し寄せてくる人波に飲まれ、戒が叫ぶ。

他の三人も、そばを離れないでいるのがやっとであった。

《一組につき、一つです。
慌てないで下さい。》

人の濁流を眼下に、淡々と口を開く魔導人形。

《それと……もう一点。
大事な約束事がございました…》

やや低音の口調に。
一瞬、広場全体の動きが止まる。

《本競技におきまして……我々主催者側は、『参加選手の命の保障
を一切いたしません』。

皆様におかれましては、袋を受け取った時点で、それに『同意』
したとみなさせていただきます。》

目を見張る全員。

一転、奇妙な静けさが、辺りを包み込む。

「そりゃあ一体、どういうことだよ！
人形のねーちゃん！！」

その寂を破るように、演壇の真下から、酔いどれが酒瓶を片手に
大声で喚いた。

《うるせーよ、バカ！！》

彼に目を見開いて答えたのは、魔導人形のもう片方の首、青いル
ージユの顔であった。

《てめーらは、いわば、飛翔艦という餌に目が眩んだ亡者ども！
これから始まる地獄で利を得るには、それなりの覚悟が必要だっ
てことだ、アバババ！！》

興奮のあまり、口から謎の液体を振りまきながら、首を回転させ
る人形。

だが右手がクッキーを取り出し、口元までに運ぶと、それをむさ
ぼるようにしてかじりつく。

《大変、失礼いたしました…。》

青いルージユの顔が、そのクッキーに夢中になっている隙に。
淡々と進行する、赤いルージユの顔。

《残念ながら、『競技』に関する質問には、一切お答え出来ません。

ただし、参加自体は、明日の正午　　スタート直前まで受け付ける予定です。

只今から行う説明を聞いてから参加を決められても、遅くは無いかと存じます。》

その言葉で、各所から安堵の声が漏れた。

そしてそれからというもの、ほとんど誰もが、袋には手を伸ばさなかった。

あのような脅しをかけられては、当然である。

「……。」

だが戒は、それらの言に、どこか引つかかるものがあつた。

「後でも参加が許されるだ……？」

だったら、何でこんな……あえて混乱を招くような真似をしたんだ？」

自問のような戒の問いかけに、世羅とザナナは全く反応を返さない。

彼は仕方なく、シユナに目を向ける。

「知るわけないでしょ。」

私は、大会の関係者じゃないんだから。」

「……くそつたれ。」

こんな時に、フィンドルがいりゃあ……」

彼は口惜しそうに唇を噛んだ。

「悪かったわね！」

怒り、そつぽを向くシユナ。

その彼女の向こう側。

大半の人間が動かないのに対し、確信を持った表情で、迷わずに袋を取りに行く者達がいた。

戒はそこで、注意深く周囲を観察してみる。
すると、そもそも、クマの着ぐるみ達が持つ袋の数が、少なすぎることに気付く。

「……まてよ。」

あの人形……質問が『競技』に関するから、拒否をするって言っ
たな……！」

呟きながら、ようやく駆け出す戒。

だが寸前のところで、最後の一袋を目の前に、割り込まれてしま
う。

「へっへ。」

悪いな、にいちゃん。

これは、おれの……ぶッ!？」

相手が勝利の笑みをこぼした瞬間、前方で勢い良く反転したジャグマー君から、見事な裏拳が炸裂した。

「……？」

男が吹き飛んだ後、何事も無かったように、戒の目の前に差し出される袋。

（なんだ、このクマ……!？

……あいつを妨害したように見えたが……）

警戒しつつ、それに手を伸ばす彼。

周囲も皆、異様な空気に吞まれまいと必死である。
個人の些事には、誰も気付く様子が無い。

《当面の参加希望者達に、袋が行き渡ったようです。
では続けて、競技内容の説明に移ります。》

壇上から再び放たれる、魔導人形の言葉。

反射的に見上げ、聞き入る戒。

気が付けば、袋がその手に持たされていた。

振り向くと、着ぐるみ達は集結して、再び広場の端へと引っ込んでいく。

不審なものがどれなのか、今となっては区別がつかなかった。

「どうしたのよ、戒。」

彼を追いかけてきたシュナが、後ろから訊く。

「別に、慌てなくてもいいんでしょう？」

説明の後からでも参加できるんだから。」

「ああ……それは嘘じゃないだろうな。

だが、あえて『謎かけ』に乗ってやったぜ。」

「？」

不可解だと言わんばかりの表情を浮かべる彼女をよそに、戒は再び壇上へと視線を向けた。

《さて、参加を決断された勇氣ある方々は、ぜひ私の説明と共にご作業願います。》

続けられる説明。

《……まずは、袋をお開き下さい。

番号が刻印された、この『リーダー・ブレスレッド』が入ってい

るかと思っています。

これを参加登録後に紛失されますと、組ごと失格となってしまいますので、ご注意ください。》

「…これか。」

戒も腕輪を取り、眺めてみる。

そこにはしっかりと、『18番』の刻印がしてあった。

《…次に、このホルダーを、手にお取りください。》

今度は、細い皮製のベルトを取り出して、頭上に掲げる人形。

十数個のリング状のものが、連なって通っている。

色の他に、装飾すら無い。

口径は、小指にはめるのがやっとのくらいであった。

《内訳は…金のリングが1個、銀のリングが5個、白のリングが10個です。》

言葉に合わせて、人形はそれらを丁寧に数えて見せる。

《これらは、金ポイントが100P

銀は10P、白は1Pとなっております。》

「……？」

広場全体に訪れる、一瞬の考えの間。

《大会ではア、ゴール地点まで集めたポイントの、総得点を競うんだよ！！

このバカチンども！！

それくらい、すぐに理解しろれら！！》

クッキーの欠片^{かけら}を吹きながら、再び青いルージュが口を開く。

《…そう。

本競技の勝敗は、ゴール地点に到達する順位を争うものではありません。

ゴールに到達した組が所有する、総得点で決まるのです。》

そこで理解の溜め息が、広場を包み込んだ。

《ちなみにこのリングは、各コースでの課題をクリアすることによって、大量に獲得できます。

他にも、コース上のあらゆる場所に落ちておりますし、また、別の組が所有している物を奪うのも有効な手です。

様々なことに挑戦して、より多くのリングを集めて下さい。》

手にしたホルダーを掲げたまま、人形は続けた。

《…これらは同時に、金銭の代わりにもなっております。》

競技中に必要な道具類は全て、各特設場にて、このリングとの『交換』という形をとらせていただきます。

ゆえに、武器の持ち込みは一切禁止。

水や食料も同様とさせていただきます。》

その言葉に、ザナナが反応する。

彼ばかりでなく、腕に自信のある者は、大抵が動揺しているようだった。

《ちなみに、1Pは大陸通貨の100Yヤクスに相当します。

それと同価値の品物と、交換が可能だとお考え下さい。》

《つまり、競技で楽をするには、リングを使わなくてはならぬ！。

だが、それを節約しないと、勝つことが出来ぬ！。

このバランスが重要ってことだよオーオーな！！

バヒヤーヒヤツヒヤツ！！》

青いルージュの顔が、高い壇上から見下して、けたたましく下品に笑った。

《なお、先のブレスレッドとリングに関しましては、最も重要なルールがございます。

自分達の物は勿論のこと、他の組から奪った物も全て、必ず、『他者から見える箇所』に装着して下さい。

荷物に紛れ込ませたり、地中に隠したりするなどの悪質な反則行為は、監視員によって発見され次第、失格とさせていただきます。》

《それらは、錬金術で出来た特殊な合金だ！
重量の面では、ほとんど差し支えねーから、どんどん集めやがれ
！！》

（　だが、目立つ……な。
つまり『狩りすぎた組』は、そのぶん標的にされるってことだ。
…それなら、確かに公平か。）

試しに着けてみた腕輪を眺めながら、頷く戒。

そのうちに、壇上では係の者が、説明に使っていた袋と道具類を
片付ける。

広場は、暫し休息の気配を見せた。

「…ちよつと、ザナナさん。
どこへ行くんですか。」

そこで、場を抜けようとする豹頭に、強い口調で声を掛けるシュ
ナ。

「先に、宿へ戻る。」

ザナナは背を向け、そこで寝息を立てている世羅を二人に見せて、
淡々と述べた。

「…話が難しすぎて、寝てしまったようだ。
実はザナナも、良くわからん。
後で、わかりやすく、頼む。」

「…あ、ああ。」

戒が生返事をする間に、彼は足早に去って行く。

「いいの？」

シユナが小声になって訊いた。

「仕方ねえだろ。」

まったく、ガキなんだからよ…。」

「違うつてば。」

…宿に二人つきりになるのよ?。」

「想像力、はたらかせすぎだぞ。」

戒は顔を引きつらせ、空を見上げた。

「でも、男と女じゃない。」

随分と仲がいいみたいだし…。」

「たとえそういう関係だってな、俺様には関係ねえんだよ。」

「明日からのレースには、影響しないわけ？
あんたの気持ち的に。」

「…もう、次から次へと問題を提起するな。
ただでさえ、明日のことで頭が一杯なのによ…。」

うんざりして、重い息を吐く彼。

「それだって、あんたが一人で抱えることないのよ。
あのパートナー達は、何も考えて無さすぎだわ。」

「だからこそ、俺様が頭脳役なんだ。
あいつらには明日、存分に体で働いてもらう。」

「…やっぱり、私、バークさんとパンリを探してくるわ。
二組で協力した方が絶対、楽になるだろうし。」

「……おい……」

離れていくシュナに向けて、戒は自然と腕を伸ばしていた。

この辛い時に一番の頼りになるのが、邪険に扱ってきた彼女だという事実が、重く押し掛かった。

《…それでは、次も重要な項目、『中立地帯』について説明いたします。》

遠くで、人形の説明が再開する。

《中立地帯とは、このスタート地点、各チェックポイント、コース
中間の選手村……そして、ゴールのことを指します。

これらの場所での戦闘行為も、発覚した時点で失格となりますの
でご注意下さい。》

一呼吸置く、人形。

《ただし、それ以外での戦闘行為は、全て有効となります。
そこに関するルールも、一切ございません。》

その言葉が巻き起こしたのは、この夜、一番のざわめき。

広場の各所で議論が沸き起こる。

《コースについての詳しい説明は、スタート直前のお楽しみという
ことで、今日はお開きだぜ！

諸君、これが最後の夜になるかもしれねーから、せいぜい心残り
の無いようになー！！

ギャワハハハハ……！！》

収まらない騒ぎの中、片方の頭が不吉な事を口走りつつ、演壇を
降りる人形。

それと入れ替わって壇上に現れるのは、例のクマの着ぐるみ達。
ここから参加を決めた希望者達に、袋を配る作業を、大々的に行
うようだった。

「つまり……凶器攻撃、急所攻撃。

相手を怪我させようが、殺そうが何でもオッケーってことか。
とんでもねえ、大会だな……。」

「ええ、まったく……。」

苦笑しながら、前の二人が呟いた。

「あわわ……。」

その背後で、震える顎を押さえながら、失神寸前になるパンリ。

「今からブルってて、どうするんだよ。

ま、今夜はとりあえず飛翔艦に戻って、ゆっくり作戦でも練ろう
や。」

彼女は陽気に、指で袋を回しながら彼の肩を叩く。

そして湖へと、足を向けた時。

「……！」

パンリは、人混みから抜け出てきたシュナと、鉢合わせをした。

「……………」

無言のまま指の骨を鳴らしながら、歩み寄る彼女。

「…あんた…………何してるの…」

おかげで、こっちは大変な思いしてるってのに…」

「いやそのお…」

殺意に満ち溢れる形相を前に、弁解の余地は無いように思えた。

「…知り合いか？」

頭を掻きながら、後ろから訊くゴーグルの女。

シュナは一瞬、それを睨みつけてから、一気に近付いた。

「戻るわよ！

これからバーグさんも探して、参加の準備をしないとイケないんだから…」

そして、パンリの腕を取り、強く引く。

だがそれは、想像よりも強い力で抗ってきた。

「……すみません。」

実は……この人達と競技に参加することになってしまった。」

「!？」

そのまま細く呟かれるパンリの言葉に、彼女は困惑する。

「私も……今度こそ、この厳しい環境の中で……強くなりたいんです。」

……いや、強くなってみせます……。

だから……私のことは……しばらく……放っておいて下さい。」

気弱な彼は。

語る間、決して顔を合わせようとしなかった。

だが、恐れながらも、精一杯に意を示そうとするその姿に、シュナは思わず気を取られていた。

「……申し訳ありません、二代目。」

奴等、停戦協定を無視してくるとは……。」

「いってことよ。」

あたしも、まさか会場の村で襲撃してくるとは思わなかったしな。」

風車前のあぜ道に腰掛けて、汗を拭い。
呑気に笑いながら、女は応えた。

「あ、あの……わた……八つ裂きにつて……どういつ……」

だが、先の争いごとの毒気にあてられて
その傍らで気を動転させているパンリが、彼女の裾を引く。

「ああ、悪イ悪イ。」

あたしのせいで、恨み買っちゃったな。」

「この少年が……どうかしたのですか？。」

男がその尋常でない様子に驚いて、訊いた。

「コルススの野郎が、あんまりしつこいんですよ。
当面の恋人役にしたんだが……見事に逆上させちゃった。」

「……それはそうでしょう。」

軽い冗談のように笑って言い放つ彼女に、彼は眉間を押さえて、
肩を落とす。

「……貴女たちは一体、何なんですか……！？
見たところ……」

「先に断っておくけど、賊やマフィアの類いじゃねえぞ。たまに間違えられるけどな。」

何かを言いかけたパンリの機先を制する彼女。

「『カジェット空挺団』っていう、空の何でも屋さ。」

そして、あたしは、頭領の二代目：カジェットⅡセイルクロウ。よろしくな。」

そこでようやく、ゴーグルを首まで下ろす彼女。

続けて、無理矢理、パンリの手をとって握手をする。

「私は……パンリといいます……。」

見とれながら、呟く彼。

目の前で露になった彼女の顔は、粗野な言葉とかけ離れた、美人そのものだったのである。

「君も巻き込まれてしまったからには、知る権利があるでしょう。」

……説明いたします。」

その間ずっと、脇で難しい表情を浮かべていた男は、意を決して言った。

「……実は、あれは仲間同士の抗争です。」

「仲間同士？」

「ええ。」

我々、カジェット空挺団は、二隻の飛翔艦を有しています。

一隻は頭領として二代目が任され、もう一隻は、副頭領として、あのコルススが任されてました。」

そこで一度、彼は語尾を弱め。

「ところが先日、すでに病にて引退していた……先代が亡くなられたのです。」

感慨深げな表情を浮かべて、唇を強く噛む。

「それを好機とばかりに、血気盛んなコルススは、組織の乗っ取りをかけてきました。

我々は当然、抵抗し……そして全面抗争に。」

「うわぁ……」

思わず顔をしかめるパンリ。

「その拳句、奴は自分の力をさらに誇示しようと、二代目を妻に娶^{めと}るうなど……まさに言語道断です。」

男は、さらに怒りの拳を震わせていた。

「……状況は把握できました。
でもそれがどうして、この村に？」

「ああ、それか。」

その問いに、今度はカジェット自身が口を開いた。

「初めは何でもなかった小競り合いが、日々を重ねることにエスカレートしまつてよ。」

ついには飛翔艦同士でドンパチやったら、お互いにヤバイくらい壊れちまつて。」

「……………」

照れながら答える彼女に、パンリは絶句する。

「そこへ、飛翔艦が手に入るといふ大会の情報を聞きつけたのです。私達は一旦、停戦の協定を結び、この村に到ったのですが……」

「……なるほど……………」

それで、あの場面に繋がるわけですか……………」

パンリは溜め息混じりに、呟いた。

「それで、私は、これからどうすればいいんです？
せつかく、この国を出ようとした矢先なのに、いつ襲撃されるか

…」

「困ったねえ…。」

あたしも、大会に参加しなくちゃならんし。
でも、そうすると、あんたを守れないだろ…?」

「ならば、二代目はお控え下さい。

我々だけで、飛翔艦を勝ち取ります…。」

男は真剣な眼差しで、二人の間に割って入る。

「ベルツサスよ、そりゃあ無理だ。

確かに、お前はウチの艦ではナンバー2の腕前だけど、あのコルススにや勝てんぜ。」

「……く…。」

悔しそうちに、自分の拳を風車小屋の壁に叩きつける彼。

「貴方は確か…彼を兄と呼んでいたようですが…。」

その様子に同情しながら、パンリが訊いた。

「…はい。

あの男は、私の実の兄なのです。
恥ずかしながら。」

ベルッサスは再び、苦しそうに唇を噛み締める。

「まったく……亡き師に顔向けできません。」

「あんまり、気に病むなつて。」

「てめえは生真面目すぎんだよ。」

豪快に笑い飛ばしながら彼の背を叩き、それを慰めるカジェット。

「…なあ、パンリ。」

「こつなつたらさあ、おまえも大会に参加してくれねえか？」

「……どういふ…ことでしょう？」

そして急に思いついたような彼女の言葉に、彼は半身を引いて返した。

「おまえを守りつつ、飛翔艦を手にするには、この方法しかねえ。
頼む！！」

見返りとして、このカジェット流の源法術、みっちり教えてやるから！！」

目の前で拝むようにして手を合わせ、巨体を迫らせる彼女。

「二代目！」

「それは……門外不出……」

「背に腹は変えられねえだろ!!」

ベルッサスの制止にも、彼女は頑として言い張った。

「…あの、それって、さっきの飛行術みたいなのですか？」

興味のまま、訊いてみるパンリ。

「ああ。

『素質』があれば……それも、だな。」

彼女は光る唇に含みを持たせて、誘うように笑った。

「……どうしても、自分を変えたいんです。

私は、強くなりたい!!」

パンリが、目一杯の大声で叫ぶ。

「もう…肝心な時に役に立たないなんて、嫌なんです!」

「……パンリ……。」

その決意の言葉に、シュナは諦めたように肩の力を抜いて、髪をかき上げて背を向けた。

「何があつたか知らないけど……わかつたわ。

あんたが自分の力の無さを、そんなに思い詰めてたなんて知らなかった。

「もう勝手にしなさい。」

「シュナさん……」

表情をほころばせる彼。

だが、その油断した顔面をめがけて、再び向き直った彼女の手が飛んだ。

「なんて、言うわけないでしょ!!」

『強さ』つてのは、日々の鍛錬の積み重ねなの!!

しかも、こんな危険な競技の最中に……なめてるんじゃない!!」

「い、いだだだだだ!!!!」

頬を思い切り抓られ、悶絶するパンリ。

それを見かねて、カジェットがシュナの手を取る。

「……言ってることはもつともだが……」。

パンリは、もうあたしの弟子同然なんだ。

勝手に折檻しないで欲しいね。」

そして挑発的な笑みを浮かべ、大きな胸を突き出す彼女。

「それに、そんなに頭ごなしに恫喝したら、まともな判断なんて出来やしないだろ？」

「部外者は引っ込んでなさいよ。」

真正面から対抗し、その胸の下から、さらに自分の胸を突き上げるシュナ。

(…すごい人だな…)

あの二代目と張り合うなんて…)

ベルッサスは若干の距離を置きながら、そんな二人のやりとりには喉を鳴らす。

「…もう、いいわ。」

だけど、最後に一つだけ聞かせて頂戴。

あんたは……こいつらに脅されているんじゃないくて、自分の意思でそこにいるのよね？」

このまま相手と睨み合っていても埒が明かないと思い、シュナはパンリに訊いた。

「……はい……」

……ごめんなさい……ごめんなさい……」

……でも、決めたんです……！」

下を向いたまま、嗚咽する彼。

「……あんたも……あの時の戒と同じだわ！
何の相談もしないで、勝手に……！！」

次の瞬間。

堪えきれなくなった彼女も、三人から顔を背け、走り去る。

「本気で怒ってたなア……。」

カジェットは半分呆氣にとられながら、それを見送り。

（……いい友達じゃねえか。）

傍で震えてい彼の小さな肩を、優しく抱いてやった。

まるで祭の後のように閑散とした広場を、縦断し。

「……失礼する。」

主催者側の詰所となっているテントの、入り口をくぐる二人。

無骨な挨拶をした、細身の若い剣士。
幅広の甲冑で、全身を固めている男。

彼等に共通しているのは、腰に下げた剣とマントに施された、七つの菱型ひしがたの紋章だった。

大陸に列強七国が成立した時。
その拠をレンセン共和国に移した時に創られた、ギルド総本部の証である。

彼等は普段なら、諸手を挙げて歓迎される身分だったが。
今のテント内は、既に人もまばらで、静けさが返ってくるばかりだった。

「……………」

それをむしろ好都合とばかりに、刺すような鋭い眼光で、一人一人を確認する剣士。

「…待て、男爵殿がいらっしゃる。
ご挨拶を。」

そこで気付いた甲冑の男は会釈をし、彼に促す。

「構わんよ。」

遠くから、デスタロッサは手で遮るような素振りを見せた。

《ご苦労です。

勇士、ドウナガン。

重闘士、セアムリッヒ。》

その代わりに接近するのは、先の進行役の魔導人形であった。

それが彼等と同様の紋章が入った書簡を携えていたため、二人は即時に理解する。

「極めて不快だ。

本部からの急な要請で戦地から駆けつけてみれば、このような茶番を見せ付けられ……。

我々に、何をしろというのだ。」

だが臆面も無く、言い放つ若者。

「私からも、正当な理由を説明いただきたいな。
せつかくの余暇が台無しだよ。」

甲冑の男も、嘆きの声をあげる。

《…解析、終わりました。

あの広場にいた者……ルサシウル系・トラル人、204名。

亜ルサシウル系・トラル人、43名。

スラリック系・シウル人、16名。

蛮族の類、9名。

その他・人種識別不明、13名。

計285名……最大で95組の参加が見込まれます。》

それまで、黙って演算作業を行っていた、青いルージュの首が告げる。

《…よろしい。

そのうち、20組に先行配布した『上位』の腕輪は、ギルドの手の者で8割を回収しました。

98%の確率で、我々は上位を独占できます。》

それに答える、赤いルージュの首。

「……？」

一方、得体の知れない問答に、対面の二人は顔を見合わせる。

《御二方には、優勝することを前提に、この大会に参加していただきます。

これは勿論、ギルド総本部の正式な依頼で御座います。》

魔導人形は口元に微笑をたたえながら、『1番』の刻印が入った腕輪を差し出した。

「失礼、私は席を外させてもらつよ。」

そこで、おもむろに立ち上がるデスタロッサ。

「お気を遣わせて申し訳ございません。」

首すら向けず、魔導人形は返した。

「……出立なされるのですか？」

彼に付き添う秘書のウエンが、テントを抜けてから言った。

「予定が詰まっていますな。」

最終日には、何とか首都に顔を出せるようにする。

…後は任せたぞ。

まあ、あれだけギルドが何もかもやってくれるのなら、特に問題も起こるまい。」

「はい。」

皮肉のように付け加える彼に、彼女は内心で辟易しながら返事をした。

「ところで、デスタロッサ様。

これは……出来レースなのですか？」

何も聞かされていなかった彼女は、出来るだけ声を小さくして訊く。

「飛翔艦は非常に高額だ。

こうでもしなければ、企業もギルドの連中も、首を縦には振るまい。

こちらは大会の開催という、当初の目的が達成できれば良い。」

彼は、いとも平然と答え。

「それにしても、総本部め。

七星剣を与えた傭兵を使うか…。

やり方を任せた身としては、文句は言えんが……」

唇を歪ませながら、歩を早める。

そして広場出口のアーチで、通行人とすれ違った時。

彼にしては珍しく、両目を剥くほど狼狽し、背後を凝視した。

感じる威厳。

それは、薄着の大柄な男だった。

だが、すぐさまデスタロッサは首を振り、再び視線を前に戻す。

「どうなさいました？」

「私も疲れているようだ。

…到底、このような場所に見えられるような御方ではない。」

彼女からの問いに対し、彼は己を嘲るように笑った。

4

ケンリントンの夜は冷えることもなく、穏やかであった。

戒は一人。

パプのテラスへ戻り、明日の作戦を立てる。

魔導人形の説明では、自分が期待していたような、各組の協力を規制するようなルールは無かった。

ポイント制 この競技の特性が、個人参加に向いていないのは明らかである。

運営側は、いかにも素人を歓迎するような文句を述べていたが。これは端頭から、飛翔艦を扱える組織力を試しているといっても過言ではない。

気が付けば、目の前の広場にはもはや、一時の活気は消えていた。何の対応策も思いつけないまま、時間ばかりが過ぎていくようである。

「 まいっちゃうわ、まったく!!」

暗沌した思案の中、戒の前に再び姿を見せるシュナ。

そして席につくなり、彼が手にしていたグラスを奪い、それで乾いた喉を潤す。

「何よこれ、アルコール入りじゃない。

…まさか、『ヤケ』を起こしてるんじゃないでしょうね?」

「バカ、夜はこういうのしか出さないんだとよ。

……それより、どうした？」

半ば凶星を当てられたのを誤魔化すように、彼は早口で訊いた。

「パンリを見付けたの。」

口を拭いつつ答える彼女。

「でも、あいつ……妙な連中と一緒にあって、
そいつらと組んで、この競技に出るとか言ってるのよ。」

「…何だと？」

「パンリのくせに生意気でしょ？」

「あいつが本当に、俺様の敵に回るって言ったのか。」

「…別に、そこまで露骨じゃないけど…。
何だか…『強くなりたい』とか言ってたわよ。
そんなに甘くないのにね。」

「強く……？」

シュナの言葉を反芻はんすうしながら、思わず宙に浮かせた腰を椅子へ戻しつつ、目を泳がせる戒。

だが途中、その視界に入る。

演壇の傍をうろつく大男。

その彼はしきりに、地図と大会規約が貼られた掲示板を、興味深そうに眺めていた。

「……………！？」

戒は、その長い顎鬚と、体に纏う薄布という、極めて特徴的な風貌に釘付けになり。

座りかけた尻を椅子から外し、床に転げ落ちる。

「何やってんのよ、あんた！」

その失態を大いに笑うシユナ。

だが戒の方は、ほんのわずか口にした酒が、こんなにも早く回ったのか。

そんなことばかりを真剣に考えていた。

「…やべえな…。」

…タンダニアの…………ふ…フンドシ野郎が…見えるなんてよ…。」

そして床に座り込んだまま、虚ろな表情で呻く。

「タンダニア…？」

彼女は怪訝な表情を浮かべた。

「あ、いや……何でもねえ。

こんな場所に……いるわけねえんだ……。」

その言葉と裏腹に、身を隠すように前傾する彼。

「でも……タンダニアっていえばさ、あそこに行ってからというものの……わたしたち……。」

ついてないわよね……!!」

何も知らない彼女は、冗談混じりに大声を上げた。

「ほほう、随分な言われようじゃな。」

そこで突然の背後からの気配に、戒は硬直する。
前の広場を見れば、既に男の姿は無い。

「……誰……この人？」

……知り……合い？」

圧倒されながらも、それを凝視している対面のシュナの瞳に映る
偉丈夫。

「陛下アゝ!!」

さらに、情けない声を張り上げて、広場の隅から猛然と駆けて来る若い女性。

その両手には、手の長い小猿を抱いていた。

「……もう……酔いのせいじゃねえな、これは……」

観念し、戒は気を落ち着かせながら片膝を立てる。

それだけ、どこか記憶に新しい彼等の姿は確定的だった。

「おう、アリアネ、どうした。」

「どうした、ではありません！」

まったく……目を離せば、すぐどこかに行ってしまうのですから……！」

一方、傍で繰り広げられる二人のやりとりを、シュナは漠然と眺めていた。

「お前がさっき言ってた……その国の王様と、親衛隊長だよ。」

言葉少なげに、囁いて教えてやる戒。

「パンリだけじゃなく……あんたまで、私をコケにするつもり？」

それに対し、彼女は冷淡に返す。

「冗談で、こんなバカげたと言えるか…。
大方……来賓で呼ばれたんだろぅが…」

「いやいや、そうではないぞ。」

小声にも関わらず、タンダニスはそれに反応して答えた。

「じゃあ……どうして…」

血相を変えて立ち上がる戒。

「この通り、わしは地獄耳でう。
首都で、その娘が艦長殿と話しているのを聞いてしまったのじや。」

「艦……まさか、フィンデルに会ったのか…？」

「うむ。」

実は、此度の件を直接、謝ろうと思って…な……！？」

飛び出した戒の拳が、喋っている途中のタンダニスの頬を捉えていた。

その強靱な首は、びくともしなかったが。
突然の凶行に、脇のシユナは両手で口元を覆う。

「……殴るぞてめえ!!」

続けざま、その胸襟を掴んでくびり、背を伸ばして迫る戒。

「……もう殴っておるではないか。」

タンダニスは、少し驚いた様子で呟いた。

「ぶ、無礼な……!」
陛下に向かって……!!」

それまで呆気にとられていたアリアネが、ようやく腰の細剣を抜く。

「うるせえ。」

てめえも『陛下、陛下』とか、連呼してんじゃねーよ。
この田舎モン丸出し女。」

戒は据わった目つきで、一瞬だけ彼女の方を見やる。

既に、通行人やテラスの他の客の視線が集まりだしていた。

「……謝るだど?……余計な事を……。
てめえらみたいな身分の連中がノコノコやって来たら……。」

あいつのことだ……また責任を感じて、背負っちゃまうだろうがよ……！」

だが、そんな周囲の様子に目もくれず、再び淒む。
タンダニスは、ただ、その言葉に目を伏せるばかりだった。

「……すまぬ。」

少し、後先を考えておらんかった。」

「何でもかんでも、詫びを入れりや済むと思ってるのか!？」

「よしなさいよ、戒。」

さらに激昂していく彼に、静かに告げるシュナ。

「……私も基本的には、あんたと同意見よ。」

でも、フィンデルさんは……少し元気を取り戻したように見えたわ……。

きっと、王様が会いに来てくれたおかげで。」

「……！」

「……そういう立場の人間が、こんな所まで来るなんて……今はまだ、半信半疑だけど……。」

謝罪以外の他意が無いのは判る。

裏の無い、真っ直ぐな心だから……きっと、フィンデルさんなら、なおさら感じ入ったはずだわ。」

彼女は無感情を装いながら、淡々と続け。

「ありがとうございます。」

さらに畏まり、彼等に頭を丁寧^{かしこ}に下げる。

立つ瀬の無くなった戒は、タンダニスから手を離し、勢いよく席に座り込んだ。

「それと、すみません。」

こいつ……ホントにバカで……歴史にも疎いから、陛下がどんなに偉大な人物なのかも理解せずに手を……」

「こんな奴等に、謝ることなんかねえ！」

「……まだ言つの、この……！」

シュナが叱り飛ばすと、彼は不満そうに顔を背ける。

「……剣を収めよ、アリアネ。」

そんな二人を眺めつつ、タンダニスは呟いた。

「……しかし、陛下に手を上げたのは重罪に値します……」

眉をひそめながらも、その命に従う彼女。

「いや……むしろ、救われたよ。」

だが彼はそう洩らし、感じ入ったように頬をさすった。

「アリアネ。」

わしに残されておる時間は、幾日じゃ？」

「……いくらオンヒルデとはいえ、陛下の不在を隠し通せるのは、10日程度が限界かと……」

「充分じゃな。」

「……何が……でございますか？」

アリアネは嫌な予感を感じつつ、尋ねた。

「中王都市の事柄に触れる絶好の機会が、目の前にあるのじゃ。これを逃す手はない……参加しないわけにはいくまいて。」

「……あ？」

耳に入る彼等の言葉に、まず反応したのは戒だった。

「待てよ。」

てめえらは負い目があるから、俺様達の手助けをしたいとか、また単純に考えているんだろっがな。

……そんな同情は、まっぴら御免だ。

色々と問題になる前に、とっとと自分の国に帰りやがれ。」

そして、慚然として言い放つ。

「早合点するでない。

もう、そなたらのする事に水を差そうなどは、思っくらん。」

「何？」

「こっちはこっちで、勝手にやらせてもらうつもりじゃ。

ついでに最新の飛翔艦を持ち帰れたら、軍事大臣も、さぞかし喜ぶであろうな。」

その言葉に、今度はアリアネも飛び上がった。

「ば、馬鹿げてる…！」

そんなことが、本気で許されると思ってるのかっ!？」

「そうですよ！

お考え直し下さい、陛下!！」

そして意図せずに言葉を共にする、戒と彼女。

「いやじゃ。

さっきの一撃で吹っ切れたわ。

わしはもう、とことん楽しむぞ、この祭を。」

だが、その王の面の皮の厚いこと、この上なかった。

「こ……こうなったら……」

説得を無理と悟った戒は、そこで反転し。

「てめえら、良く聞きやがれ！
ここにタンダニアの」

テーブルをわざと騒がしく打ち鳴らして、大声で叫ぶ。

だが直後、その口に差し込まれる酒瓶。
それを握っているのは、なんとシュナであった。

「……ん……んぐ……！？
……ぐ……う……」

その勢い開いた喉へ、大量の酒を一気に流し込まれ。
戒は凄まじい勢いで顔面からテーブルに突っ伏した後、ぴくりとも動かなくなる。

「そ……その方は……仲間ではないのですか？」

「ええ、仲間よ。」

そのあまりに乱暴な扱いに驚くアリアネの問いに、笑って答えるシュナ。

「……でも今回は、そちらに協力いたしますわ、陛下。」

続けて、彼女はこうも言った。

「……ほう。」

それはまた、何故じゃ？」

「色々と事情がありまして……私は参加できなかったんです。そちらも、ちょうど一人足りない様子ですし。」

……お互いにとって、悪い話ではないと思いますけど……。」

「この件、そなたに利益は無いぞ？」

「だって一国の主にわざわざ御足労いただいて、ただでお返しするのは礼儀に反するじゃありませんか。」

「……面白い女子おなこよの。」

全く物怖じせずに提言するシュナに対し、タンダニスは思わず破顔した。

「よかるう。」

交渉成立じゃな。」

「陛下！」

まさか、この女を信用なさるおつもりで!？」

声を荒げて、横槍を入れるアリアナ。

「ちょっと、親衛隊長さん！」

それに萎縮するどころか、シユナは向き直って言った。

「あなた、そんなに簡単に『陛下』なんて口にしていたら、すぐにボ口を出すわよ。」

「な…ならば、どのように呼んだら良いと……」

「それ、口癖のようなものだから、すぐには直せないでしょう？
だからいつそのこと、陛下には大会中、『ヘイカ』という偽名で
参加してもらいます。」

いざという時も、これなら言い訳もつきますから。」

「妙案じゃ。」

おぬし、頭も切れるな。」

シユナは早くも、タンダニスの評価を得たようだった。

「そのお召し物も、目立ちますね…。」

ちよっと夜も遅いですけど、服を見に、店へ繰り出しませんか？」

「…つむ。」

そこで肩に飛び移る小猿を連れ、彼女と共に行く彼。
アリアネは齒軋りしながら、渋々、その二人の後を追う。

後に残されたのは、酔い潰された戒という惨状のみ。

大きな月の下。

これでは、明日の策の発案どころか、夢を見ることさえも許されないようであった。

湖に停泊した半壊の飛翔艦。

その焦げ付いた嫌な匂いは、内部にも届いていた。

飛翔艦自体に良い印象が無いパンリは、特に緊張しながら、カジ
エットの背にぴたりと張り付くようにして、足を踏み入れる。

その通路はルベランセと比べ、幅の余裕が無く、圧迫感があった。

「…二代目。」

先ほど、確認を取ったのですが…。」

途中。

帰還してすぐに姿を消したベルッサスが追いついて、神妙な顔つきで報告してくる。

「奴等の奇襲によつて、多数の負傷者が出ております。明日からの競技の組分けは、どういたしましょう？」

「そうだなア。」

カジェットは歩みを止めずに、応えた。

「少しでも体調に不安がある奴は、出ないよう伝える。あと、腕に自信が無い奴もな。」

「そうしますと……2、3組ほどしか出場できませんが……」

「それでいいよ。」

あのルールじゃ、半端な奴だと死んじまう。」

「了解です。」

「……おそらく、苦しい戦いになりますね。」

「まあな。」

あえて苦境を望まんとばかりに、何故か含み笑いで返す彼女。

「あと……そいつらには、何も心配せずに養生しろって伝えておい

てくれや。」

「了解です。」

それを聞き終えてから、ベルツサスは軽く礼をして走り去る。パンリはずっと、その両者の機敏なやりとりを眺めていた。

「どうした？」

その視線に気付き、カジェットが訊く。

「いえ……何だか……すごいなあつて。」

遠慮がちに呟くパンリ。

「あ？ 何が？」

「大変……なんででしょうね……頭領の仕事って。」

でも、あんなにテキパキと指示を下せるなんて……。」

「え、そんなことかよ。」

拍子抜けしたように、彼女は苦笑を浮かべた。

「慣れだよ、慣れ。」

指示って言うには、あたしのは大雑把だし。」

細かいところは、ベルツサスの奴がやってくれる。」

そして歩を止め、廊下の壁に手を触れる。

「この艦を一つ飛ばすんだって、あたし一人の力じゃ無理だ。それは何事も、みんな同じさ。」

少しずつ、仲間が力を出し合って支えているんだよ。」

「まるで役に立たない人とか……いないんですか？」

「お前の言いたいこと、何となく分かるよ。」

先の彼とシュナとのやりとりを思い返しながら、彼女は頭を掻いた。

「でもな……必要ない人間だったら、はじめっから乗せねえさ。それだけ、空は危険なんだ。」

「……そういう……ものですか……。」

「……ああ。」

お情けじゃ、絶対に乗せたりはしないな。」

彼女は自身の言葉に頷きながら、再び進み、廊下奥の一室の扉を開く。

脱ぎ捨てられた衣服がそのままのベッド一台と、少し散らかった床。

覗くのは、そんな殺風景な室内。

「……っと。」

「ここが、あたしの部屋だ。」

「……………」

「なに、ボーっと突っ立ってんだ。
遠慮せずに、早く入りな。」

先に入室したカジエツトは、早速ツナギを上だけ脱いで、下着姿
になって言う。

「ええっ！」

「あっ、相室……なんですか!？」

「我慢しておくれよ。
部屋の数が少ないんだからさ。」

それが何事でもないような顔で、彼女は続けた。

「こ、困りますよ……私……………」

「普通、女の台詞^{セリフ}だろ、それ。
あたしがいいって言うてんだから、いいじゃんか。」

「し、しかしですねえ……………」

「こんなことで揉めてる時間は無えんだぞ。」

そして本棚から、使い古した本を取り出して放る彼女。

「とりあえず、源法術の基本は暗記からだ。
今夜中に、憶えられるだけ憶えろ。」

「あ……は、はい！」

一転、急にらしくなってきた展開に、パンリは元気よく返事をした。

「本当は、お前に術を覚えさせるのは、あくまでも『条件』だし、
後回してもいいかなって思ってたんだ。

でも……ちよつと考え方に相違があったみてえだな。」

「…すみません。」

何だか…利用するみたいで…。」

「いいさ。」

お前がさつき、友達に見せたような根性……あたしは嫌いじゃない。
」

爽やかだが、厳しさもこもった目でカジェットは見詰めてくる。

「でもな……まがりなりにも、この短期間で人並みの術者になろう

ってんだ。

常人がするよりも100倍の努力をしろ。

ま、明日からは、実戦には事欠かないシチュエーションだし…才能があれば、上達も早いかな。」

「……はい…。」

その脅しともとれる言葉で、今度は全身を強張らせるパンリ。

「本当に、自分の部屋だと思って楽にしてくれよ。その暑苦しいフードも取っていいからさ…」

「!?!」

だが、彼女が優しさから服に触れようとした矢先、彼は即座にその手を振り払った。

「す、すみません…このままでいいです…。
もっ…暗記に集中したいものですから……。」

その行為に啞然とするカジェットに顔を背けて、呟く。

拒絶したのは、反射的だった。

垂耳だということを明かして、幸福になった試しなど、今まで無い。

そんな恐れが、手を動かしたのである。

カジェットの方はといえば、それで気を悪くすることも特に無く。

そのことを、その時は、まるで気にも留めていなかった。

参加者達にとっての夜。

そして迎える早朝までの時の流れは、とりわけ早く過ぎ去っていくようだった。

正午を間近に控え、パプのテラスまで迎えに来たシユナは、既に聖弓隊の制服を身に纏っている。

「てめえだけ、ちゃっかり準備万端してんじゃねえよ！あかげでこっちは、二日酔いの頭を抱えてるつてのに！！」

一方、ぼさぼさの頭で、死んだ魚のような瞳で喚き散らす戒。そのままテラスで夜を明かしてしまい、体力的にも精神的にも、完全にグロッキー状態である。

「そりゃ、大変だわね。
飲みすぎは体の毒よ？」

「てめえ……。」

俺様が、昨夜のことを憶えてないとしても……思ってたのか……!？」

彼女に迫ったもの、すぐに反対側へ走り、道端で嘔吐する彼。

「平凡な服も、とってもお似合いで……素敵です……陛下。」

「そうか？」

どうにも、きつくてかなわんのう……」

その向こうから。

瞳を輝かせたアリアネに付き添われながら、現れるタンダニス。

彼は昨夜のうちに、なめし革のジャケットにズボンという、無難な軽装にさせられていた。

「……おう、若いの。」

どうじゃ、調子は？」

「何でお前ら、まだここにいるんだ？」

まさか本当に参加を……」

そして股ぐらを直しながら、当然の如く声をかけてくる彼に、戒は面食らう。

「実は私もね、陛下の組に入れてもらったの。」

…世羅とザナナさんにも、事情は説明してあるから安心して。」

「な…!?!」

補足するシュナの言葉に、思わず後ずさる彼。

「それと、私達の荷物と梅さんは、お二人が乗ってきた馬車で運んでもらうから。」

「…お前の行動力には……ときどき、恐ろしくなるんだが…。」

そして後は、ただ溜め息ばかりが口から漏れていく。

「楽しくなりそうじゃな。」

年甲斐もなく、ワクワクしてくるわい。」

スタート地点とされる村のはずれへと向きを変え、タンダニスは晴天に向かって笑う。

それを先頭に、彼等は歩き出した。

「……もう何も言わねえ。」

せめて、敵にまわるなよ。」

戒はこぼしながら、後ろからタンダニスの装着した腕輪の番号を見る。

(…フンドシ野郎は、174番か…。)

続けて、彼は自分の腕輪も確認した。

(俺は18番…。)

あいつらが参加を決めたのは遅かったとはいえ……随分と開いているな。

そんなに人数がいたようには、思えなかったが…)

「……戒、今のうちに渡しておくわ。」

そこで、背後から声をかけてくるシユナ。

彼女は新品の眼鏡を手に使っていた。

「王様の服を選んでた時に、ついでに買ってきたの。お互い…もう二度と会えなくなるかもしれないし。弁償するっていう、あの約束……今のうちに。」

「よくも、そんな不吉なことを、ぬけぬけと…」

彼女の改まった言葉に口元を引き締め、戒はそれを受け取ってポケットに忍ばせる。

それから間もなく。

遠くに見え始めた門に、戒のおかげで待ちぼうけを食らわされている、世羅とザナナの姿が見えた。

一面の森を前にして、嚴重な柵が設けられていた。

選手以外の人間が立ち入れないよう、たった一つの入り口となっている門では、不正を防ぐボディチェックと参加者の登録が行われている。

登録方法は至って単純。

腕輪の番号が記された紙に、三名の手形を押すのみ。

そして、その後の身体検査を通過すれば、物品の保管所へ案内されることになる。

整然と並んだ長い机の上に置かれているのは、各種の武器・道具類。

先日の説明どおり、どれにも値札が付いており、それと等価のリングと交換できるようである。

（こういうのは……わからねえな。）

試しに、手頃な剣を手にとってみる戒。

刃の付き具合はともかく、メーカーの名前が、かなり大き目に刃の腹に刻印されていた。

「何だよこれ……宣伝じゃねえか……。」

他にも、槍、斧、飛び道具など、武器の種類は多様に渡っていた。ザナナ本人からは弱音らしきものは聞いていないが、普段の彼の槍が使えないことが、どう響くかは未知数である。

「ええ？」

それでいいんですか？」

そんな中での、シュナの大声。

戒は自然と、そちらへ顔を向けた。

「……他国では穩便に済みたいからのう。

わしは、これで良い。」

木剣を右手に携えて、答えるタンダニス。

「賛成です、

陛下ほどの武芸者ならば、どのような武器でも遅れをとるはずがありません。」

アリアネも同様の物を手に取り、断言した。

「でもお……見たかったです……。」

世に聞こえる、陛下の『至高の槍』の腕前を。」

甘えた声で残念そうに、自分は安物の弓矢を取るシュナ。

「はっは！」

それはまた、別の機会にの。」

おだてられたタンダニスは、上機嫌であつた。

そんな楽しそうな彼等の様子に、戒は引き寄せられる。

「…なあ、おい。」

何か考えてるのか、今日の作戦？」

「作戦？」

そして背後から、シュナに向かって小声で訊く彼。

「…別に無いわよ。」

ただ、『楽しくやりましょう』ってのは約束したけどね。」

さらに三人分の水と携帯食料を両手に抱え、彼女は返した。

「…おいおい、序盤からそんなに散財して……。もっと節約しろって。」

「あんたの方こそ、そんなのでいいの？
水と食料、一人分だけなんて。」

「それくらい現地で調達する。
何と言っても、こっちにはサバイバルの達人がいるんだからな。」

自信に満ちた顔で振り返る戒。
だがそこには、目的のザナナはおるか、世羅の姿すら既に無い。

代わりに、ここでも雑用としてかり出されているジャグマー君が、
リングを所望して、手を伸ばしていた。

「…もうとつくに、武器を選んで出て行ったわよ。
森の中、あんただけ置いてけぼりにされないように、せいぜい気
をつけなさいね。」

舌を出して笑うシュナも、一足先にタンダニス達とその場を後に
する。

「……くそつたれ……。」

焦りながら、急いでリングを清算する戒。
だがそこで、新たに入ってくる別の組にパンリの姿を見て、動き
を止める。

「……あ。」

ど、どうも……戒くん。」

シユナが上手く説明していることを祈りつつ、引きつった表情で手を上げる彼。

「……よう、裏切り者。」

だが、皮肉をたっぷりと込めた笑みで近付いて来る戒に、淡い期待は早くも打ち砕かれる。

「何だ、その棒切れは。」

森の中で舟でも漕ぐつもりか？

そして三人が手に携えてきた物体を見て、彼はからかうように笑った。

「馬鹿にしないでおくれよ。
ウチの伝統の『風来棒^{ふうらいぼう}』を。」

怯えるパンリをかばうように、立ち塞がったのはカジエツト。

「それ、武器になるんじゃないのか？
ルール違反だろ。」

「チェックは通ったんだ。
これ以上、イチャモンつけやがると、承知しねえぞ。」

握り拳を作り、彼女は参加を示す腕輪を突き出す。

「……やめとくぜ。」

競技開始前に争っても、失格になるだけだしな。」

このまま一触即発かと思いきや、それは意外にも、戒の方から離れて行った。

「…コルススほどじゃねえが、あいつも恐い顔してんなア。」

気張った息と共に、感想を洩らす彼女。

「でも、ああ見えても…根は優しいんですよ……」

パンリは青褪めた表情で、説得力に欠ける言葉を呟くので精一杯だった。

静寂の後。

気に障る金属音と、砂利を踏みつけを耳に受けて。

それまで門に寄りかかり、腕を組んで待機していたドウナガンは刮目する。

「やあ、お早う。

ご機嫌いかがかな。」

案の定。

目の前に到着したセアムリツヒは、全身に甲冑という、昨夜のま
まのいでたちだった。

「……いいんですか。」

特別な傭兵であることが割れてしまうような物品以外は、互いに
身に着けていないとはいえ。

ドウナガンは、それを見るなり呟いていた。

「この鎧か？」

それとも、この肥満の体型かね？」

だが相手は微笑を浮かべながら、上げられた兜のバイザーを摘む^{つま}。

「……両方です。」

「この競技は、レースのような形式だからな。
君が不安に思うのも無理はない。」

「……。」

「しかし、杞憂だ。」

私のこの姿も体型も、昔から少しも変わっていない。
今でも、半日に3万Mは走れる自信があるよ。」

「それは心強い。」

ドウナガンは素っ気無く返すと、腰のベルトから垂らした短い鎖を指で弄りながら、再び傍の門柱に背をもたれかけた。

「ところで……まだ、『三人目』は到着していないのか？」

「ええ。」

あの魔導人形との打ち合わせでは、ここに来るはずなんですがね。

「

セアムリツヒの問いに、頷く彼。

既に自分達を除いた全ての参加者がこの門をくぐっていることは、周囲の気配からして明らかであった。

「……ところで、聞いたかね？」

どうやら、あそこに停泊している、三位賞品の飛翔艦……。
3000万Yもするらしいぞ。」

だが、甲冑の彼は、呑気にも遠くの湖を指差して笑う。

「あれでも飛翔艦の中では、まだまだ小さい部類らしい。
優勝賞品のやつは、ゆうに1億を越えるとか言っている。」

「…重大じゃないですか。
我々の任務は。」

それでも興味無さそうに感想を述べるドウナガンに、彼は苦笑して甲冑の肩口を擦った。

「この件でギルドの息がかかった者が優勝できた場合、賞品は返却する。」

だが、それが出来なかった時は、買い取りだ。

二位と三位の賞品も同様。

まったく……いくら大会を盛り上げたいからといって、馬鹿な取引をしたもの……」

「白昼堂々と本部批判ですか……流石は、七星剣の方々は違いますねえ……」

彼の愚痴に被せるように、門の内から言葉を割りこませる小男がいた。

「…誰かね、君は。」

「ロメスって言うもんです。」

「……『三人目』か。」

ドウナガンの詰問に頷き、小男は書類の束を片手に持ったまま近付く。

「ロメス……聞いたことがない名だが。」

「ええ。」

そうでしょうとも、そうでしょうとも。

おたくらと違って、あっしはチンケな傭兵ですから。」

呟くセアムリツヒに、前歯を剥き出す彼。

「……ただ、記憶力だけは、誰よりも自信がありましてね。
今も、参加者の顔とブレスレットの番号を一致させて憶えてたんですよ。」

ちなみにコースの地理や、隠されたリングの配置も、全て頭に入っています。」

そして、自分の側頭部を指で突いて得意げに話す。
その様子を、ドウナガンは無言で睨みつけた。

「まあまあ。」

そんなに、恐い顔をしなさんな。

何も、不正をするわけじゃあないんです。

正々堂々、こうやって参加するわけだから。」

「正々堂々だと？」

「よしたまえ、ドウナガン。」

君もだ、ロメス。」

セラムリツヒは、強い口調に変えて言った。

「我々の任務は、ただ優勝することのみ。

各々、私情を捨て、尽力しようではないか。」

そして甲冑の音を響かせながら、自ら率先して門をくぐる。

（流石は、上手にまとめなさる。

セラムリツヒ……42歳……か。

ガトランザの剣闘士を引退後、傭兵業で名を馳せる。

場数も踏んでいるようだし……リーダー的な資質も充分のようだ。

）

それを追いながら、ロメスは頭の中で、ギルドから提供された資料を繰り返す。

（一方……こっちの、ドウナガンは19歳……。

各国の紛争地域などに赴いている、遊撃専門の剣士だが……それは単独任務が主で、社交性にはやや欠ける。

しかし、私とこの二人の組み合わせは……本部がそう判断を下したように、意外と上手く噛み合う感じがするな……！！）

そして、脇の青年を横目に、手ごたえを感じていた。

彼もまた、この任務の手柄によって、ギルドからの信用と評価を

得ることを目的とする。

夢を見る、獣であつた。

門を抜ければ、そこは柵の外。

前方に深い森林を挟み。

血気盛んそうな参加者達が横に並ぶ中、戒は先に出た二人を探していた。

《 それでは、競技の開始前に…前半コースの説明を簡単にいたします。》

響きわたる声の後に、内門が閉められる軋音。

皆がそれに目を向けると、柵外の高台から、前夜の双頭の魔導人形が姿を見せていた。

《すでに地図からも推測されている方も多いかと存じますが…。》

前半のコースとなるのは、この目の前に広がるケンリントンの森。まず皆様には、その途中にあるチェックポイントで『課題』をクリアしていただき、中間地点の『選手村』を目指していただきます。

《

逃げ場を失い、囚人のような心持ちになる参加者達に対し。

冷淡に言葉を続ける人形の様は、まさに牢獄を見下ろす看守である。

《ここで、昨夜は触れなかったルールを明かしたいと思います。
これは決して、組同士の争いを増長するわけではありませんが…
各リングだけでなく、皆様のリーダー・ブレスレッドも『ポイント』として加算させていただきます。》

そこで、割れんばかりの喚声とざわめきが、一帯を支配する。

《ただしこれは、ゴールに辿り着いた組が所有するブレスレッドに限定します。

かなりの高得点となっておりますので、それらを集めることこそ、最も優勝への近道かもしれません…。》

少し緩やかな調子で、人形は付け加えた。

(…得点だと…本当にそれだけか？

他にも何か…秘密があるはずだ。

…確か、パンリの組は15番だったな…。)

人垣を掻き分けながら、戒は思い返す。

彼がパンリに絡んでいったのは、それを確認するためでもあった。

(…番号と組の数が合ってねえのは、明らかじゃねえか。

このスタート地点にいるのは、せいぜい300人……100組だ。
フンドシ野郎達が最後の組だとしても、数がまるで合ってねえ。
どうなってやがる……。」

そうやって、自然と各組に目を向けるうち。

（……二桁以下の番号が……ほとんどねえのか……！？）

彼は気が付いて、足を止めた。

（ならば、昨日……初めに渡されたブレスレッドが、二桁の番号……。
だけど肝心な部分がわからねえ……。それらに何が隠されているっ
ていうんだ……。？）

スタート直前の急な種明かしによって、大抵の組は、自分達の腕
輪が『ポイントになる』としか認識できていない。

それらの『番号』自体について深く考えている人間は、まだ少な
そうだった。

《なお、後半のコースにつきましては、選手村にて説明させていた
できます……。》

《それまで、何組の参加者が残っているか、判らねえがな！
ガハハハハ！》

人形の片側の顔が目を開き、また高らかに笑う。

そして、その脇に、競技の開始を知らせるための大砲が運ばれてくるのであった。

（シュナの言うとおり…こんなバラバラの状態じゃ勝てねえ…。）

かくて本気の目へと変わりだす人間達の間を、さらに駆け足で進み、目を凝らす戒。

戦いのルールが無いということで、やはり参加者は、強力な連中に厳選されている。

空で味わってきたものと同等の殺気を肌で感じ、戒の焦りは一気に噴出した。

準備不足の組など、どこにもいない。

自分の方はいえ、仲間の居場所を探し、闇雲に駆けずり回っている有様である。

《それでは、競技開始まで、5分前…》

人形によるカウントダウンが始まった時。

戒はようやく、列の最右翼でリボンと着物姿を発見する。

（なんで……あんな端っこにいるんだ！
スタートで出遅れるぞ……）

鈍痛の残る自分の頭を叩き、さらに表情を険しく変えて、二人へ迫る。

「……いい加減にしろ。」

そして遂に、彼は小さな肩を掴んでいた。

「一体、何が気にいらねえんだ。」

驚いて振り向く世羅に対し、怒鳴るわけでもなく、諭すように、穏やかに言う。

「前に、約束…しただろ…。」

これからは、何でも正直に言えって…。」

俺様とお前は、同じ目標のはず…。」

「？」

しかし彼女は全く動じずに見詰め返してきたので、やがて調子が狂いだす言葉。

（まさか……それすら忘れてんじゃねえだろうな……。
こいつの頭なら、ありえる……）

その堂々とした態度を前に、冷や汗を垂らす彼。

「戒の言ってくれたことなら、全部おぼえてるよ。
あたりまえじゃないか。」

だが、やがて彼女は言った。

「……そ、それなら、何で避けるんだよ。」

自分の言葉に、複雑な気持ちを感じながら、戒は問う。

「だって、少しでも離れたら……。」

……ザナナが……また、どこか行っちゃみたいで……。」

「!？」

だが、そこで遠慮がちに呟かれる彼女の言葉に、戒は驚愕した。
ザナナもその後ろで、困ったような目を向ける。

「ただ、そんな理由なのか？」

……昨日の夜、寝てたくせに……?」

「だって……話が長いんだもん……」

痛いところを突いた言葉に、世羅は赤面して俯うつむいた。

自分の思い違いと、その様子が可笑しくて、みるみるうちに脱力して笑う戒。

「紛らわしい……っての!!」

そして、世羅の髪を強めに撫でる。

「……？」

口を開けたまま、その一連の行為に呆けている彼女。

「…飛翔艦乗りになるんだろ？」

こいつは、お前のその願いを叶えるため、戻って来たんだぞ！
それが、いなくなるわけ!」

代弁する戒の肩を、ザナナは無言で触れた。

「ないぞ。」

そして何も無い、横へと顔を向けながら、短く切って言う豹頭。

「え……そう……なの？
ほんと？」

真摯な表情で、世羅が再度聞いた。
彼との別れが、よほど辛かったようで、いじらしい。

「…そういえば、まだ聞いていなかったな。これから、何を、どうすればいい？」

その照れを隠すように、今度は戒に詰め寄るザナナ。

「どうせ、小難しいこと言っただって、てめえらには理解できねえんだろっよ…。」

苦労するぜ、まったく…。」

戒は苦笑と共に、前髪を両手で上げて直す。

「とにかく、全てを蹴散らして前へ突き進め。」

そして続けられる、自信に満ちた言葉に、二人は躊躇せずに頷いた。

「……後は、俺様が帳尻を合わせてやる。」

ここには、他の参加者達のような、『全』は無い。
ひたすら『個』があるのみである。

それでも何故か。

戒の心から、気の後れは無くなっていた。

《競技開始まで、3分前：》

開始までの僅かな時間を告げていく魔導人形。

「なるほど、ギルドが描くシナリオはこうか。

競技中とはにかく、ギルドの息のかかった各組が、リングとブレスレッドをかき集める。

そしてゴールの間際で、選ばれた組にそれらを渡す。」

その声に隠すように、セアムリツヒは仲間の二人へ囁いた。

「…その前にこちらが、手当たり次第に敵を潰して、ポイントを独占してしまえば良いんじゃないんですか？」

「いけませんよ。」

ドゥナガンの短絡的な意見に、ロメスは厳しい口調で咎めた。

「お二人とも存分に力を発揮したいでしょうが、今回はあまり目立たぬように。」

ゴール直前まで、ポイントはなるべく分散させて、煙に巻くプランなんですから。」

「故意に、他の組に狙われないようにするわけか。」

「ええ、安全策だそうです。」

どうしても倒したいならば…突出して稼いでいる『優勝の恐れがありそうな組』に限定して下さい。」

そこで奪ったポイントも、私が記憶している組達に分けて渡しますんで。」

ドウナガンとセアムリツヒは、顔を見合わせた。

ここで初めて、ロメスの存在価値というものが把握できたのである。

ギルド側の上位独占を図るには、終了間際でのポイント調整が必要不可欠。

その上で、味方の組を完全に識別できることの優位性は、計り知れない。

しかも情報は一人に限定しているため、この不正ぎりぎりの行為も、発覚しにくいという利点もある。

だが同時に。

セアムリツヒは、その作戦が持つ弱点に気が付いた。

「……これは、私とドウナガンには、全く心配は無い点だが…。
万が一、君がやられてしまったらどうする?。」

「私とて傭兵のはしくれ。」

身のこなしにも、それなりに自信がありますから。
それは、本当に『万が一』ですよ。」

ロメスは少し自尊心を傷付けられたように、むっとして。
だが、直後に笑い直して言った。

列の先頭に陣取るのは、自信の表れか。

カジエットの組は、そこに陣取っていた。
ただし、艦の仲間達とは別れて、単独である。

「何をなさっているんですか？」

彼女が足で地に円を描いているのを見て、傍のパンリは訊いた。

「二人とも。」

スタートしたら、この円の『内側』で動くなよ。」

「え？」

それはどういう……」

「了解です、二代目。」

困惑するパンリをよそに、それだけで通じたように返事をするべ

ルッサス。

「……？」

そろそろ…始まってしまいますけど…？」

パンリが危惧した直後、放たれる大砲。

開始の合図の轟音に。

列の先頭は初め、ためらいがちに足を動かす。

やがて、それを追い立てるように迫り来る、無数の地響き。

「！！！」

それらとは、全く別の意図をした動きに、パンリは気付いた。

ナイフを片手に、人波の隙間から這い出して来る男達。

それは、コルススからの刺客である。

「
《轟・渦》ガルス・ラス！！！」

だが、それを見越し、カジェットが迎撃として待ち構えていた術
足で描いた線から外に発生する衝撃が、彼女を中心にドーム
状に広がっていく。

「《土・葬》^{ダー・ナン}。」

続けて、両手を地に付けて唱えるベルツサス。

土が怒れたように唸りだし、地すべりを起こしていく。
それも全て、円から外の部分に効果をもたらしていた。

平静を装っていたが。

二人の傭兵に侮られたことが、よほど堪えていたのだろう。

ロメスは単独で飛び出し、列の中腹の集団を抜けていた。

しかし突如として目の前で広がった術の衝撃に、それが完全に失敗だったことを悟る。

（え！？

こんツ……こんなの、避けれるわけねえ……っ！？）

陥没しながら流れる土に軸足を取られ、跳ぶことも逃げることも叶わない。

先ほど大口を叩いていた風景が、走馬灯のように脳裏を流れた。

この仕事のため、故郷においてきた妻の笑顔が、嫌に懐かしい。

直後。

先の祝砲よりも、幾段も大きな音が顔面で弾け。

そして全身の皮に、何かが波紋のように広がっていく感覚。

「ロメス！！」

用心して距離を取っていたドウナガンは、陥没していく土の前で止まり、大きく宙を舞う彼を目で追った。

周囲では。

彼ばかりでなく、その他の人間も、かなりの数が巻き込まれている。

(…まずいな……！)

同様に難を逃れていたセアムリツヒは、いち早く、彼が飛ばされた地点に駆け寄っていた。

しかし。

(…万が一が……起こってしまったぞ。)

木の幹に引っかかった。

ぼろくずのような彼を前に、兜を掻いて立ち尽くすばかりだった。

第四章

第二話 『群狼』

了

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

4・3 「二つの聖十字」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The third story
『Double Closs』

垂耳の集落では、生まれた子は全て、長の元おさに預けられる伝統で
ある。

そこにおいて、『 ああいう立派な人間になりなさい』など、

目標を提示するような育て方はしない。

極力、他の民族と文化を避けてきた退嬰^{たいえい}的な歴史からか。それとも、生来の穏やかな氣質が作った知恵か。

そこにはただひたすら、漠然とした教えのみがあった。

『 他人に迷惑をかけるような人間になってはならない』と。

競技開始の合図と共に、参加者達の列は折れるようにしてV字形に展開した。

真ん中に突如として発生した土煙は、事態の確認よりも、身の安全の確保が先決だと思わせる。

瞬く間に抜け出ていく両翼の集団。
彼等の予想通り、後方は地獄だった。

放たれた術によって、様相を変えられた景色。
助けを求めるように空へ伸ばされた、土に埋まった負傷者達の手。

そして、大混乱の首謀者 カジエット「セイルクロウは、舞
上がった粉塵の中心で。

悪鬼のように目を凝らしていた。

「…出遅れるのは氣にくわねえが……まア、いいか…。
ちよっとした、準備運動にはなるだろ。」

ゆつくりとした彼女の言葉と共に、徐々に晴れゆく視界。

すると周囲からは、無数の怨嗟の目が向けられていることが明らかとなり、パンリは腰を抜かしそうになった。

「おいおい。

ベルッサス……ひでえなア。

お前の術のおかげで、やる気になっちまったみたいだぜ。」

カジエットはおどけた表情で、編んだ後ろ髪を振り上げながら、
皆に伝わるよう、大声で言った。

仲間を傷つけられた恨み。

痛烈な源法術への畏怖。

それらは次第に、大きく渦巻いていく。

「すべて私のせいですか……二代目。
ただ、『手助け』をしただけなんですがね。」

両瞼を閉じ、彼女と背中を合わせたまま、まるで小事のように呟くベルッサス。

カジエツトが敢行した、全方位を攻撃する源法術に加え、土を陥没させる彼の術。

それらは複合されることにより、相乗効果を生み出し、個々で発するよりも何倍もの被害を与えていた。

事前の打ち合わせすら必要としない二人の息は、既に円熟の形を見せており、頼もしいことこの上ない。

だが、眼前にいる人間達の憎悪、そして無念を、そ知らぬ顔で受け流している『気質』だけはいただけなかった。

パンリは、不意に疑う。

強くなりたいたがため、カジエツトの話に乗ったものの、彼女たちの善悪までは視野に入れていなかった。

当面協力する関係というだけで、そこはずっと甘い認識でいた。否、考えまいと努めていたのだ。

いま目の前に広がる惨状を見ながらも。
二人には、罪悪感が何処にも無い。

自分と彼等は、明らかに、棲む世界が違いすぎている。

エア・ファンタジスタ

A i r ・ F a n t a g i s t a

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第三話 『二つの聖十字』

1

「…おらあッ!!」

かかってきた相手の顎を目がけ、カジェットがその巨体から振りかぶった掌打を入れる。

見た目通り。

彼女は腕つぶしも、かなりのものだった。

中途半端な男達では、たとえ一山いようが、彼女を止めるには足りないくらいである。

一方のパンリは、全ての動きが鈍い。

心の表れは、早速そういった形で体现されてしまっていた。

そして、ひとり何も出来ないでいる中。

戦況が動くにつれ、頼りのベルツサスまで背中から離れていく。

「パンリ！」

おまえ、後ろの奴な!!」

前方で人を捕まえて、その頬を殴り抜いているカジェットに急に命ぜられ。

自然と身を返すパンリ。

そこには、震えた両手でナイフを構えた、必死の形相で向かってくる痩せた男。

彼はどうやら、カジェットの仲間と見られるパンリも、相当の使い手だと勘違いしているようだった。

「わ…私がやるんですかあ!？」

一拍子遅れてから、自身の置かれた状況に気がついて、情けない声を上げるパンリ。

その間も、当然ながら相手の足は止まることはない。

「う…う…う…!!」

勇気を振り絞り、それに向かって両手をかざす彼。

「ふえ…《源・衝》^{フェル・ド}!!」

「!」

情けない声で唱えられた術に、一瞬、先ほどの惨劇が脳裏により

がえり、相手は怯む。

そして、それを横目で追っていたカジェットも、別の意味で動きを止めた。

「……………んん？」

何も起きていない自身の体を見回す男。

その背後から、ベルツサスの飛び蹴りが延髄に決まる。

「あ……あ……ありがとうございます……。」

パンリは彼のおかげで事なきを得たものの、突き出した腕を収められないまま、全く身動きできずにいた。

「てめえ！

死にてえのか！？」

そこへすかさず飛ぶ、カジェットの叱責。

「……二代目。」

実戦に不慣れの彼では、無理ありません……。」

ベルツサスは、それをかばうように言った。

「仕方ねえ。

…それじゃあ、お前たちは、ブツ倒した野郎どものブレスレッドとリングを奪え！

このへんで、撤収する！！」

時が経つにつれ、カジエットの強さを見かねて、逃げ出す者が続出していた。

現場に残ったのは、戦利品と負傷者が殆どである。

「あたしらのモノを横取りする奴ア、容赦しねからな！！」

諦めきれずに周囲を徘徊している少数の輩を睨み付けながら、さらに彼女は威嚇する。

気の昂った彼女の態度は、まるで盗賊団の頭目。

そしてパンリもやはり、それらの手下になったような心地だった。

今までの人生の殆どを、本や机にばかり向かってきた彼にとって、それはそれは惨めな体験である。

「……………」

そんな彼の落胆をよそに、カジエットは注意深く周辺をうかがっている、遠くの木々に目を留めた。

高い枝葉の上に立ち、自分たちを眺めている集団。

その中心の、コルスス。

彼は、開始時に^{けしか}嗾けた手下の仇をとろうとする様子もなく。そして、彼女の高調した様子に逆上することもなく。

まだ序盤とばかりに余裕の笑みさえ浮かべ、森の奥へと消えていった。

この競技大会は第一回目ということもあり。

参加者達の動向、設定した競技内容や規則^{ルール}が引き起こす事態。それらは、主催者側にも甚だ不鮮明であつた。

デスタロツサ男爵が、この試験的な意味合いを承知してまで開催を推進したのは、あくまでも今後へと繋げるため。

次回、また次回と、良い参考を重ねることが出来れば、御の字である。

しかし、本大会の資金の殆どを捻出したギルドは、その思惑とは別に、たった一点だけ筋書きを用意した。

上位三賞の独占である。

大会中にどのような不確定要素が働いても、そこだけは守りきらねばならない。

また、絶対条件でもあった。

はじめ、各企業は中王都市側に、本大会の賞品として飛翔艦の寄付を、単独で申し入れようとしていた。

その口を初期の段階で止めたのは、他の何ものでもない、ギルド総本部であった。

ギルドという組織を飛び越えて、企業が国に対して発言力を得ることを、彼等は極端に恐れていた。

ただでさえ、最近は特に飛翔艦技術を利用した企業の成長は著しい。

新勢力の『はびこり』を、今まで大陸上で利益を独占してきた者達は、何よりも脅威に感じていたのである。

幸い、賞品である飛翔艦は、ギルドが買い取することを前提とし。その手の者が獲得した場合は返却するという条件を、企業側は飲んだ。

失敗すれば、莫大な費用がかさむ、危険な賭けである。だが、ギルド総本部も、偏屈な言い分と面目のみで戦うわけでは

なかった。

大会には、口の堅い傭兵を50人近くもかき集め、参加させ。

さらに今作戦の要として、彼等が子飼いとされている『七星剣』すら二人も擁し、万全の布陣で臨んだのである。

だが、そんな総本部の期待を裏切る事態は、なんと競技開始の頭に発生していた。

大陸で仕事を請け負っている最大の組織が、絶対の信頼を置いて作り上げた、最も手堅く優秀なる一組が。

初っ端から蹴つまずくなどという展開は、誰が予想しただろうか。

「……何だ？」

源法術によって吹き飛ばされたロメスを地に寝かしつけ、セアムリッヒが介抱する最中。

スタート地点の柵外から、双頭の魔導人形がステッキを片手に、自分たちへ向けて何かのサインを送っている様子に気付く。

「戦場で使う『旗信号』に近いようですが。」

ドウナガンは一目見て、そう答えた。

「私には馴染みが無いな。

あの人形…何と言っている？」

「『息はあるのか？』だそうです。」

「あるにはあるが……全身を強く打ち、気も失っているぞ。」

セアムリツヒは屈み、ロメスの額に手を当てて言う。
そのままの言葉を、ドウナガンは剣を用いて伝えた。

「『ならば、競技を続行しろ』……だそうです。」

そして、返された信号の意味を言い終えてから、唾を吐き捨てる
彼。

「流石は、ギルド総本部の人形様だな。

まるで感情を持っているようじゃないか。」

柵へと視線を戻し、そこで人形がステッキを叩き折るのを鼻で笑
いながら、セアムリツヒは呟いた。

「どうします？」

ああは言っていますが、続行は無理でしょう……」

「いや。」

ギルドの命令とあらば、続けようではないか。」

「……正気ですか？」

平然と返される言葉に、ドウナガンは目を剥いた。

「彼は、私が運んでいく。」

その非難の目から逃れるように、セアムリツヒは兜のバイザーを降ろし、反転する。

「俺はギルドに恩はあるが、手先じゃない。」

あんたは、そこまですて報酬が欲しいのか。」

思わず、声を荒げるドウナガン。

セアムリツヒは甲冑越しに、その若者の本性を強く肌を感じた。

「……勘違いするな、これは金の問題ではない。」

続行を希望する理由は、ただ一つ。

私は……これまで任務の失敗によって、ギルドを失望させたことが無いからだ。」

「今は人命に関わる。」

信用などを気にしている場合じゃない。

俺は降ろさせてもら……」

「それは困るな。」

我々のうち一人でも欠けるのは。」

肩の甲を響かせて、長斧の刃先をドウナガンに突きつける彼。

「貴様……！」

「私の背中に、鉤になっかぎている部分があるだろう。
そこにロメスを引っ掛ける。」

あと何かロープのような物があれば、巻いて身体を固定させてくれ。」

「…軽蔑するぜ、あんた。」

「構わんよ。」

セアムリツヒは森の先へと視線を向けて、平淡に呟いた。

どうやら、初めに全力で駆け抜けた組と、足止めを喰らった組とでは、距離に相当の差が出たらしい。

森を進めば。

鳥のさえずりが際立つほど、そこは静けさに包まれていた。

だが、ここでも我が道を行くカジェットは微塵も焦らずに、傍の
適当な切り株に腰掛けて、二人に対して休憩を命じたのであった。

「……術が発動しなかったのはいい。

あたしが解せないのは……よりによって一番弱い《源・衝》フェル・ドを使っ
たことだよ！」

「す、すみません……！」

勘違い……してました……。」

それは説教のためでもあった。

パンリは、その間ずっと何も言い訳もせず、草むらに正座して謝
り通す。

「でもな、これはまだ『注意』だ。
いいか。

あたしは今、もっと怒っている別のことがある。」

カジェットは顔を深刻な表情に変えて、きつく腕を組んだ。

「……お前、まだ覚悟を決めてないだろう。」

「き、決めてますよ！」

もう、自分だけが安全だなんて思ってますん！」

「そうじゃねえ。」

声を上げせながら否定するパンリと対称的に、彼女は静かに呟く。

「他人を傷付ける覚悟だ。」

「…え？」

「たとえば！」

カジエットは先ほど戦利品として得た、小振りのナイフを脇のベルツサスの首元に突きつける。

その鋭利な刃は、首の皮がへこむくらい強く付けられていた。

「いま、とびつきり凶悪な強盗が現れたとする。」

そいつが、お前が一番大切な人間を刺し殺したと思え。」

その鬼気迫る雰囲気。

パンリは食い入るようにして、彼女の様子を眺めた。

「もしも大切な人間を、こんな目の前で殺されたら、おまえはどう思う？」

「そ、それは……実際にそういう風にならないと、何とも言えませんが……」

「違うだろ!!」

煮え切らない言葉を、ぼそぼそと洩らす彼に、彼女は突っかかる。

「もしもそうになったら!

お前は、そいつに対して逆上する。

当然だろ?」

「い、いや……でもお……一概にそうとは……」

「あーもう!

男なら当然なんだよ!!」

それともあれか、お前が股間にブラさげてる、あの立派なモノは飾りか!?!」

彼女は牙を剥きながら、卑猥な動作を手で示した。

「なっ、なっ……なに言ってるんですか!!」

対し、パンリは真っ赤になって言い返す。

そんなやりとりを、ベルッサスは非難に満ちた目で、はたから眺めていた。

「とりあえず、お前の股間の話は置いておいて……」。

仇を討ちたい人間は『何が何でも』、『自分と刺し違えてでも』、

『相手を殺したい』と願うもんだ。

…戦いでは、そういう奴こそ一番恐い。」

唇を苦々しく歪めながら、カジエツトは続けた。

「いいか？」

世の中には、『怒りは技を鈍らせる』なんて、もっともらしいことを言う奴もいるが……実際はその逆だと思う。

戦いにおいて、それこそが一番の武器さ。

なぜなら……尋常でない怒りの時ほど、普段は見えない部分が見えてくるもんなんだ。」

再び、ナイフを目の前に突き出す彼女。

「そういう状況に置かれた奴は、ものすごい集中力で、相手を確実に殺せる箇所を探している。

相手のどこを傷つけたら、死に至らすことが出来るか。

相手の武器は、どうかわすべいか。

それとも、相手にこの身をわざと刺させ、首を絞め上げるか？」

そして、さらに早口で捲くし立てていく。

「それは、たとえば自分が素手だろうが、相手が大きな剣を持っていたような。」

術が相手より弱かろうが、勝ろうが……そんなことは大きな問題じゃねえ。」

仕上げに、ナイフを傍の樹木の幹に叩きつける彼女。

乾いた音が森の中を響き渡り、驚いた鳥たちが羽ばたいていく。

「…重要なのは、相手に危害を加えようとする『必死さ』なんだよ。でも、そういった気持ち、お前から微塵も伝わってこねえのは何故だ？」

そこでカジェットは立ち上がり、背を向けて歩きだした。

「源法術なんざ、平たく言やあ、一種の殺人術だ。

相手を傷付けることをそんなにビビッてちゃ、一生経っても身につかねえ。

「……もう、このへんで諦めろ。」

「二代目！

そう言われましても…人には、持って生まれた性格というものが…」

辛辣なカジェットの意見によって、見てからに消沈していくパンの様子を気の毒に思い、ベルツサスは進言した。

「持って生まれた性格なんざ、あたしゃ信じねえよ。」

だが彼女は、振り向きもせず言い放った。

「鼠だって、追い詰められりゃ猫を噛むんだ。」

そうしなきゃ、強くなるなんて……夢のまた夢だぜ、パンリ。」

そしてさらに足早に、二人の前方に行く。

「……すみません。」

ベルッサスは申し訳なさそうに、その場に座り込んだままのパンリに小声で囁いた。

「元はといえば、二代目が貴方を巻き込んだというのに……」

これでは……。」

「……いえ。」

才能がある方には……やっぱり弱者の気持ちは理解されないんですよ……」

震える唇で答え、膝を握り締める彼。

「それに、自分で言い出したことですから……」

これくらい……我慢しないと……」

他人を傷付ける覚悟はあるのか。

先ほど、彼女は言った。

その詰問は、確かにパンリの心の核を貫いていた。

言われたことは、頭ではどうにでも理解は出来る。
だからといって、人間がすぐに変わるものとは思えない。

生来の人格までも否定され。

自分はどうしたらいいのか、不意に目標を失ってしまったようだった。

「フェル・ド
《源・衝》」

失意の中。

すぐ脇で、小さな空気の破裂音が鳴る。

目を向ければ、そこではベルツサスが、両手で円を作っていた。

そこで、もう一発。

同じ術を放って見せる彼。

黄色く光る、わずかな衝撃が、その両手の小さな空間に生まれていた。

「確かに二代目には才能があり、気質も戦闘向きです。

だからこそ、自分には簡単なことが出来ない、そんな貴方をもどかしく思っている。」

ベルツサスは言いながら、前方の彼女を、遠く見詰めた。

「…ですが、やはり源法術というものは、一般人には容易くなど出来ません。」

練習はこうやって、目で見たイメージが一番。
それを繰り返して発動するのが、二番とされています。」

「イメージ？」

「つまり、頭に印象が強く残っている術ほど、成功しやすいのです。その反対に、一度も見たことのない術は、本などを読んだだけでは、まず発動することは出来ないでしょう。」

パンリの疑問の眼差しに答えるべく、彼は続けた。

「《源・衝》というものは、このように……さっき君が言ったほど、本来は凄まじい威力のものではない。
だから、発動できなかったとも言えます。」

「な、なるほど……。」

カジエットの精神論と違い、ベルツサスの説明は理にかなっていた。
た。

「二代目の責任は、自分の責任でもあります。
差し支えなければ……術に慣れるまでは、私が代わりに教えてさしあげますが……。」

「そ、それは、ぜひとも…願ってもないですよ！」

しかも、言葉は丁寧で物腰も柔らかい。

気が付けば、パンリは二つ返事で同意してしまっていた。

ベルッサスは、いつも無表情で淡々としているので、とっつきにくい印象がある。

だが、その実は違うらしい。

何につけても乱暴なやり方しか出来ないカジェットとは、段違いである。

(……………!!)

しまった……。

どうして、私はいつも…こうやって…)

そして、一度は彼に慰められて一緒に歩を並べたパンリだったが、直後、再び足を鈍らせてしまった。

少し親切にされたくらいで、どうしてまた、彼を善い人などと判断してしまったのだろう。

自分の人の良さが恨めしい。

外面ばかり繕って、心の中では相手を蔑んでいる人間は多いのだ。

むしろ気取らない気質　戒やシユナのような者達の方が、付き合っていくには清々しい。

これまでの苦い経験から得た、当然の帰結である。

「…ところで、君が見たという、その威力のある『源・衝』…。どれ程だったのですか？」

「え……。」

お、大きな岩が…こなごなになるくらいでしたけど…」

そんな思考の中、ベルツサスから声を掛けられ、思わず正直に答えてしまうパンリ。

「……それはそれは……。」

一度…見てみたいものですね…。」

案の定。

彼は、まるで嘘を言いふらす子供を見るような冷めた眼差しで、苦笑を浮かべていた。

開始と同時に駆け出した集団は、深い森を進むうち、糸がほつれるようにばらけていった。

そして次に、参加者達の歩を拒んでいたのは、獣道である。

樹木の間に、また樹木。

常人ならば、その先の見えない、険しい自然の連鎖にうんざりするだろう。

加えて、視界も悪い。

敵が潜んでいないか、木の隙間さえも、常に注意深くしていなければならぬ。

これは、精神的にも辛いものがあつた。

そんな過酷な環境の中。

参加者たちの獲物でもあるリングの通ったホルダーを、斜めに肩から掛けて。

か細い手首に似合わない、ぶかぶかのブレスレッドをつけた少女が一人でうろついていたならば。

十中八九、罠だと思うだろう。

「ま、まさか、こんなところで、ガキがうろちろしているなんてえ……！」

ぼくちゃん、ツきまくり……！！

そして、儲けもんですなァ……！！」

だが、焦りから思考力を奪われていた愚かな大男は、直情的に彼女に襲い掛かっていた。

少女は少女でも、それが世羅では相手が悪い。

「…あ、あでえ!？」

不用意に突き出した手の薬指と中指を取られ、反転して宙を舞う彼。

「えげへッ!！」

一瞬にして、背中から地に叩きつけられる。

「ひぎいいいき!！?」

さらに、その耳にブーツの踵が突き刺さる。

「……こんなアホみたいな罠にかかりやがって…。
ブレスレッドとリングを置いて、さっさと消えろ。」

見下ろし、踏みつけたまま、面倒くさそうに脅しをかけて最後を飾るのは、戒であった。

さらに仰向けになった男の視界に飛び込む、彼の仲間二名。
ザナナの槍の先に、服の襟を吊るされて運ばれてくる。

危険を承知で大会に参加したとはいえ、やはり命は惜しいようで。
男どもはあっさりと降参し、逃げ去っていった。

「……そろそろ、先に進むか。」

彼等の醜態を目で追いながら、世羅のホルダーに奪ったリングを
通す戒。

代わりにブレスレッドを返されて、それを再び装着する。

まずは、順調な滑り出しであった。

スタートは喧騒を予想し、徹底的に森を前進。
そして途中、見晴らしの良い地形を選び、先のように世羅を餌に
して、二組を降している。

現在、得た腕輪は三つ。

リングも、木々の高い枝に隠されていたものをザナナが適度に回
収して、余裕のある数が集まっていた。

慌しい時間帯は終了し、各組もそろそろ警戒態勢に入る時間でも
ある。

前へ進むには、丁度いい頃合だろう。

(そういや……)

世羅の肩口で、ホルダーをきつく締めてやりながら、戒は思い返す。

(こいつ…素手でも、俺より強かったんだよね…。)

それは、飛翔艦の搭乗を巡って争った過去。

体格差を物ともしない彼女の不思議な体術に、自分は手も足も出せなかったのだ。

「…なあ、さっきの体術も師匠に習ったのか？」

「うん。」

「多分、『てこ』とか『こま』の原理なんだろう？
なあ…あの技のコツ、俺様にも教えるよ。」

「え……？」

んと…えっと…」

「理屈ではないのだろう。」

困った表情で首を捻ってばかりの世羅に代わり、答えるザナナ。

「ザナナだって、身体で覚えた。
きつと、世羅も同じことだ。」

そうして彼は、安物の竹槍を構えた。

「冗談だつての。

俺様には、これさえあれば充分だからな。」

戒は苦笑しながら背筋を伸ばし、アクセサリーと称してチェックを抜けた聖十字を手についた。

「!？」

：そんな雑談をしていると、傍で不気味な音を立てる草むら。
戒はぎょつとして目を向ける。

だが、そこから姿を見せたのは、主催者側から案内を課せられているクマの着ぐるみだった。

大きな矢印看板を携えて、木々の間から自分達を凝視しているのである。

その示された方角には、小高い丘がそびえていた。

「ん？」

早速、そこを目指して足を踏み出すと、何故か世羅だけは足を止める。

「どうした。」

「…なんか……バグの匂いがする……」

促す戒に、鼻を小刻みに動かしながら答える彼女。

「気のせいだろ。」

彼はその手を取って引きつつも、一応、周囲を確認した。

後ろには、顔の向きを変えずにいる、先ほどのクマの着ぐるみ。

視線を向けられたそれは、案内のためとはいえ。

不自然なほど、固まって直立していた。

「世羅。」

…あんなド馬鹿野郎のことなんか思い出させるんじゃないやねえ。勝手に行方不明になりやがって…。

まあ、いてもいなくても、誰も困らねえけどな！」

「……。」

苦々しい表情で不満をぶち撒けると、そのクマは肩を一瞬だけ震わせる。

その様子を訝しげに観察する戒。

「前に、何かあるぞ。」

だがそこで、先行したザナナが二人に呼びかける。

丘の向こうでは、高いポールが規則正しく、横に並べられているのが見えた。

一気にそちらへと興味が移った戒と世羅が丘の頂点まで駆け登ると、眼下には数組の参加者たち。

そして、双頭の魔導人形。

再びスタート地点と同じように、物品の交換所も設置されていた。

どうやらそれらは、輸送機で先回りをしているようである。

「あそこがチェックポイント……か。」

さて、どんな課題が待ち構えてやがる……」

慎重に坂を下りながら、呟く戒。

それに、世羅は続いていく。

丘を境として、景色は明らかに変わっていった。

これまでは高い樹木の連続だったのに対し、急に視界は開け、代わりに膝丈まで葦が伸びた湿地帯が出迎える。

地面は、少し水分を含んでいるらしい、粘土質。

体重をかけると、ある程度沈むため、それだけで体力を奪われそうな予感がした。

「……！」

戒は、そびえたポールに近づくにつれ、その真下の土から覗いている物体に仰天した。

目を疑う光景。

それは。

凶獣除けの結界の一部であった。

双頭の魔導人形は、間近で見ると、もっと強烈な印象で不気味だった。

《選手様方への前半戦の課題。

それは、こちらに放たれた凶獣を捕まえることでございます。》

だが、赤いルージュを唇に引いた首は、集まった彼等の、そんな好奇の視線にも全く動じることなく。

肘を軽く曲げて、ボールの内側を指し示しながら淡々と説明する。

「つまり、狩りをしろってのか？」

それを前にして、戒が人混みの後ろから言った。

《はい。

：各組のノルマは一匹、獲物の生死は問わず。

選手村直前のチェックポイントにて、課題のクリアを確認の後、初めて村内に入ることが可能となります。

さらに先着した10組には、5万Pの『ボーナス・リング』を進呈いたします。》

特典の話に差し掛かって、集まった選手達は、一様に表情を曇らせていた。

《皆様の不安は、痛いほど解ります。

今回は特別に許可を得ているとはいえ……ここは、本来なら人の立ち入りを一切禁止している区域なのでから。》

「『特別に』って…。

これは、やりすぎだろ…。」

呆れながら、小さく呟く戒。

《仰るとおり、この先は相当の危険を伴います。

もしも自信が無いようでしたら、ここでのリタイヤも可能です。左手の湖畔にて、首都行き的大型船を用意しておりますので…。》

それを聞いた人形は、その方角を示しながら言った。

《なお、標的としていただく凶獣は、『^{ファバロ}丹足』という種類です。

見本は、あちらの檻に入れておりますので、ご確認下さい。

…手強いので、くれぐれも怪我のなきよう……。》

話が終わりに差し掛かっても、選手達は誰も動けずにいた。

《ちなみに、課題をクリアした各組は、三日後の早朝に選手村から同時にスタートとなります。

その時刻までに村へ辿り着けなかった場合、自動的に失格となりますので、あらかじめご了承ください。》

異様な雰囲気の中、一礼をして締めくくる人形は、最後まで機械的な説明だった。

（レースの後半は三日も先か…。

このチェックポイントを早く抜けさえすれば、そのぶん、かなり休憩が出来るな。

…しかし、裏を返せば、それだけ厳しい課題なんだろうが……。）

不安を覚えながら、先に人混みを抜けて檻へ向かう戒。

世羅とザナナも、それに続いていく。

その途中、脇の長机に陳列された道具類、各種武器に加え、今回は罠の類まである。

さらに用意された食料と水の価格設定は、スタート時よりも遥かに高い。

それでも、長期戦を想定した組が、干し肉や缶詰めなどに殺到していた。

三人は不意に、小柄な人間とすれ違う。
振り向く、お互い。

「なんだ？

兄弟じゃねえか。」

そして、狐の頭が口を利いた。

「……ンマール……？」

ザナナが小さく言葉を洩らすと、彼は嬉々としながら寄って来る。

だが世羅は、反射的にザナナの着物の裾を引いて、彼から離そうとした。

「安心しなよ、お嬢ちゃん。

俺はもう、ザナナを連れて行ったりなんてしないよ。」

「……………」

だが、彼女は警戒したまま、ザナナの背から彼を睨み続けている。戒も同様に、厳しい目つきであった。

「ははあ、オレも嫌われちゃったねえ……。」

その様子に、ンマールは頬を掻く。

「実はさ。

この間、あんたにやってもらったのは、この大会の仕事なんだよ。まさか参加してたとは………ついてるなア、兄弟。

頑張れよ。」

そして、ザナナに手短に言い残し、彼は少々の名残惜しさと共に、

停めてある馬車へ向かっていく。

三人が改めて檻の方を見ると、その中には一匹の凶獣が鎖に繋がれていた。

まるで狼の如き顔。

身体の殆どが、その大きな顔で、首の根元に短い後ろ足だけがついている異形。

前足が無いというのに、休むことなく檻内を跳ね回っており、確かに獰猛そうだった。

「……ここに放された凶獣って……もしかして……？」

「うむ……」

一度、ザナナ達が、捕まえたやつだな。」

訊いた世羅に対し、答える豹頭。

「……！！」

もらったぜ、この競技。

いや……むしろ楽勝じゃねえか……！！」

周囲に誰もいないのを確かめてから、興奮のあまり、思わず拳を小さく握りこむ戒。

「これなら、世羅が源法術を使えなくても関係ねえ。
速攻で終わらせてくれ。」

ついでに、ボーナスってやつもいただこうじゃねえか。」

「世羅……？」

そうか…世羅……か。」

そして、すぐにでも区画内に飛び込もうとする戒に、ザナナは後ろで何やら口ごもりながら呟いていた。

らしくない、その素振りに。」

「……なんだよ、世羅がどうかしたのか？」

横の彼女を見やりながら、戒は聞く。

「……『ファバロ丹足』は、人間のメスの匂いに、敏感なのだ。」

彼の傍にゆつくりと近寄り、耳打ちするザナナ。

「人間のメスが近くにいると、地中深くに潜り、隠れてしまう。」

「……女らしくなくても、メスになるのか？」

「おそろくな。」

戒の冗談に、豹頭は真剣に頷いた。

一方、何も知らない世羅は、密談する二人を不思議そうに見上げている。

「どうする、戒？」

「くっ……！」

「まてまてまて……いま考える……。
……ちよつと、ここで待つてろ。」

ザナナが急に提起した問題に、戒は二人から距離を置いて、頭を抱えた。

このチェックポイント周辺では、比較的、大勢の組が残っている。そのようにして、たむろっている連中は、目の配り方や仕草からして、一癖も二癖もある印象を受けた。

だが不思議なことに、彼等は本当に何もせず。
ただひたすら、周囲に気を払っているだけなのである。

戒は、何かしらそこからヒントを得ようと、必死になって彼等を見回していた。

「迷ってるんだろ？」

そんな折、唐突に声を掛けてくる男。

「課題をクリアするため、凶獣が放たれた危険な道を通るか。安全だが、遠回りなうえ、課題もクリアできない迂回路を通るか。」

「……！」

振り返った戒の表情が、全てを物語っており、男は笑う。

「だがよ……この課題には、ひとつだけ抜け穴があるんだぜ。」

「なに？」

「獲物を得た組を『待ち伏せ』して、強奪すりゃあいい。」

「あ……。」

盲点に気が付かされて、戒は口を大きく開けて呆けた。

「どの道を通ろうが、各組は必ず、選手村を目指すんだ。後はわかるだろ？」

まあ……無論、同じことを考えている奴等と競争するハメになるかもしれないがな。」

「……いいのかよ、そんな役に立つ情報を教えちゃって。
……何か裏があるんだろ？」

「裏だつて!？」

戒の詰問に、思わず笑いを噴き出す男。

「ぷっ……」

「ククク……」

さらに、それを後ろで堪えている、彼の仲間と思われる二人。

「……何がおかしい。」

「いや、すまんすまん。」

余裕はあるが、本当に裏は無いんだぜ。」

相手は、まだ口元に怪しげな笑みを湛^{たた}えたまま言った。

「お前は、あの程度のメンバーと一緒に、本気で勝つつもりでいるわけだ。」

それが可笑しくつてな。」

そうして、向こうにいる世羅の容姿を眺めてから、肩をすくめる彼。

「……バカにしてるのか？」

戒は思わず、にじり寄った。

「まあ、気を落ち着けて聞けよ。」

両手を軽く前に突き出して、彼はそれをいさめる。

「どうにかして選手達を急かそうとしている、あの人形の話に惑わされるな。」

選手村に先着した10組にだけ貰えるボーナスなんぞ、それほど重要じゃない。

後半で失格したら、そんなもの、全くの無意味になっちまうんだからな。

……つまり、ここで肝心なのは、どれだけ『体制』を作れるかだ。

「

饒舌な男だった。

戒の怒りも質問も、向ける暇を全く与えずに、知識を自慢するように喋り始めていく。

「それというのも、参加者の中には、明らかに動きがおかしい連中がいる。」

目に見えて結託している様子は無いが、この前半戦、明らかに『勝ちに向かっていない』奴等だ。

これは、それなりに戦場で揉まれていないと、なかなか気付けないと思うがな。」

「…そいつらつてのは…もしかして……」

戒は、自分の腕輪に視線を移した。

「ああ。

おそらくは昨晚、初めに出された腕輪を取りに行った連中と見て、間違いないだろう。

お前らのように一般参加にも関わらず、それを偶然に得た組もあるだろうが……大体、20組程度と見るね。」

その腕輪の番号を、男も確認して言った。

(…こいつも……腕輪の事に気付いてたのか……)

驚きに変わる戒の表情に対し、相手は当然だとばかりに、再び肩をすくめて見せた。

「…そいつらの目的は何だ？」

「完全には分からんが、何か裏があるんだろう。

ルールで定められていないのをいいことに、奴等はきっと、後半まで戦力を温存した後、上位を独占するつもりだ。

……おそらくな。」

男は続けて、周囲に目を向ける。

「要するに、最終的に勝つためには、『それ以外の連中』と『同盟』を結び、対抗勢力を作る必要があるってことだ。

いま行われているのは、まさにそのための……高い技量を持つ者達の睨み合い、腹の探り合いさ。」

辺りで錯綜している、視線と視線。

彼の説明で、ようやく戒は合点がいった。

待機している組は、それぞれの動きを見張り、試しているのだ。こんな場所で、素人丸出しの動きをしていては、自分達が小馬鹿にされるのも頷ける。

「だから……お前らなんて、誰の眼中にも無いんだよ。

組として貧弱すぎるし、仲間にしても足枷になるだけだからな。」

言いながら、男は胸ポケットに六本装備している、太い缶を手にとって見せた。

「そこで、俺が調査した爆裂缶だ。

これさえあれば、用途は色々だし、戦力も幾らかマシになるだろう。」

買うなら、売ってやるぜ？

「一つ5000Pでどうだ？」

「いらねえよ。」

偉そうに講釈たれてたのは……結局、そうやってセコい商売をしたいがためか？」

「親切のつもりなんだがな。」

即、申し出を突っぱねた戒に対し、さらに肩をすくめる男。

彼等はここでポイントを稼いで、ゆくゆくは他の組との交渉を優位に進めるつもりなのだろう。

今後、ポイントの取引　すなわち、数に限りあるリングの価値が上がっていくことは必然で、それは容易に想像できた。

男の言っていることは、正しい。

しかし戒は、彼等の見下した態度には怒りを覚えていた。

だが、ここで争っていても、何の得にもならないことは分かっている。

（裏で動いている連中も気になるが…。

まずは当面の障害をどうするか、だな。）

その場は憤りを抑え、世羅とザナナの元へと向かう戒。

（世羅と一緒にいたままじゃ、課題をクリアできねえ。

だが、『ルールの穴』の、迂回ルートで獲物を強奪する方法が、必ずしも成功するとは限らねえ。）

頭の中で考えながら、彼は一点に引つかかった。

（…ルール……？

…穴……？）

そして、ひらめきが訪れる。

「そうだ！！」

戒は思わず、手を叩いて叫んでいた。

「ルールで決められてなけりゃ、何でもありなんだよ！！」

「！？」

その様子に驚く、世羅とザナナ。

「ならば、穴は一つどころじゃねえ。

思いついたぜ……この状況を切り抜ける方法をな……！」

笑いをこぼしながら、戒はまた二人を置き去りにして、今来た道へと走って行った。

「おい、お前。」

「何だ、気でも変わったか？」

あつさりと引き返して来た戒に対し、いやらしい笑みを浮かべる男。

「いらねえって言うてんだろ、そんなもの。」

だが、取り出された爆裂缶に目もくれず、戒は言い放った。

「じゃあ、何の用だい。」

「てめえら、この場所にどのくらい居るんだ？」

「妙なことを聞く奴だな……」

俺たちは、先頭グループだったからな、初めの方からいるさ。」

「全体から見て……俺様たちは、どのくらいの位置にいる。」

「まあ中盤だろうな。」

「こんな、長いヒゲを生やした野郎は来なかったか？」

戒は顎をつまんで、それを腹の方まで下げる仕草を示す。

「いたよ。」

急に彼等三人は、同時に驚いた顔つきになった。

「疾風のように、森の中へ入って行つたぜ。そついや、若い女を連れてたようだが…」

「じゃあ、大女の組は通つたか？」

言葉の途中に、さらに重ねられる質問。

「大女つて……どんな奴だよ。」

彼等は呆れて返す。

「名前は知らん。

だが…変な棒を持った…」

「アレじゃねえの？」

男の仲間が示す、その先。

先程の自分達と同じように、人形の説明を聞いている彼女達がいる。

パンリの姿もあるので、見間違いは無い。

「……しめた。」

それを見て、戒は礼すら告げず、すぐに踵を返して去っていく。

「何なんだよ、あいつ。」

男達は憮然として、それを眺めていた。

「よう。」

「戒くん……?」

いきなり背後から声を掛けてきた戒の姿に、パンリは驚く。

愛想良い笑顔の彼は、大層不気味で、逆に恐ろしかった。

「景気、良さそうじゃねえか。」

さらに彼は、カジェット達が身に付けてきた、おびただしい数のリングを眺めながら言う。

「ええ…なんとか…ぼちぼちと…ですね。」

覇気の無い顔で、パンリは答えた。

「ああ!？」

よりによって、凶獣地帯での課題かよ……参ったな…。」

そんな中、魔導人形から説明を聞いていた彼女が喚く。

「…きょう…じゅう…?」

その忌まわしい語句に、凍りつくパンリ。

「いかがしましょう。」

源法術が使えない場所では、我々の力は半減……凶獣に限らず、他の参加者との戦いも苦戦は必至ですよ…。」

比較的、冷静に状況を述べるベルッサス。

「そこで、俺様が良い話を持ってきてやったわけだが。」

「……オイオイ、怪しいな。」

そして、合いの手を入れて割り込む戒に、カジェットは一応、聞いてみる素振りを見せた。

「いいのか？」

未来の恩人に、そんなこと言つて

「

怪しさ極まる笑みと共に、戒は自分の考えを彼等に明かした。

(…ああ、やってらんねえよな…)

バーグは手近の岩に座り、大きなクマの頭部を小脇に抱えて煙草をふかしていた。

(四六時中、被りものしてる不笑人つてのは偉いねえ。

暑いわ、きついわ……それに、くせえ。

たまんねーぜ。)

そして欠伸と共に、鼻から煙を吐き出す彼。

完全密閉の、蒸した着ぐるみの内部のおかげで、頭から汗だくであつた。

そして、雑用の連続。

仲間達に手助けが出来たといえ、昨夜に参加のための袋を渡したことと、道案内くらい。

思った以上に成果が無いのが現状だった。

（それにしても…世羅には驚いたな…。

犬並みの嗅覚を発揮しやがって。

危うく正体がバレそうになったぜ……もう、重要な時以外は、近付かない方がいいな…。）

彼にしてみれば、今はどうであれ、いざという時に手助けできれば良いと考えている。

ただ、そのような状況がいつになるか。

そして、運良く自分がそばにいれるか。

それは分からなかった。

（しかし…戒達とはかく、パンリやシユナまで知らねえ奴等と組んで……みんな…平然と参加してたなあ…。

もしかして俺……いなくなっても、あんまり心配されてねえのか…）

それはそれで少し寂しさを感じながら、彼は視線を落とす。

「ハイ！

ジャグラー人形の皆さん！！

半分は、これより輸送騎で選手村へ移動です！

もう半分は、ここの後始末を！！」

隠れている藪の裏側では、開催側の役員とおぼしき眼鏡の女性が、両手を叩き。

声を張り上げて命じていた。

（……………いけねえ。

サボるのも、このへんにしておかねえとな。）

バーグは煙草を岩に擦り付けて火を消してから、再びクマの頭部を装着する。

だが、辺りの様子が一変しているせいで、すぐに歩を止めた。

なんと先の女性に、クマの着ぐるみ達が一斉に迫り、囲んでいるのだ。

「な……なんですか……！！？」

彼女 ウェイールネントは、デスタロッサに現場を任されていて、必要以上に気負っていた。

「何が気に食わないのか知りませんが……あなた方は、雇われているんですよ？」

私に従わないと、中王都市の偉い人が怒りますよ……！！」

秘書としての自負もある。

下働きの連中に舐められまいと、言い返す。

だがそれに対し。

唯一、腕に赤い腕章をした着ぐるみが、頭部を外す。
露になる、壮年の厳しい顔。

そこには無数の傷があつた。

(…!?)

覗き見ていたバーグは、歴戦の傭兵を連想する。

「……だから、一体、なんだと!!」

彼等の無言の圧力に負けじと、ウェイは訊いた。

「…『ジャグラー人形』ではなく、『ジャグマー君』です。」

男は彼女の手を乱暴に掴み、低く、野太い声で叱りつけた。

「これは、子供達にも受け容れやすい名前にしようとした、我々の誇りです。

二度とお間違いなきよう…!!」

それはまるで、捕虜に対する拷問のような、背筋も凍るような調子だった。

「それに、彼等への命令は私が下します。部外者は、余計なことはしないでいただきたい。」

ウェイが地にへたりこむと、その男は再び頭部を被り直し、用意された輸送機へと向かう。

その後を追い、無言で行進していくクマの着ぐるみ達。

「事前に決めた組分け通り……総員、搭乗用意!!」

そして、先の男の号令で散開し。

手と足を真っ直ぐに、機敏に駆けて乗り込んでいく。

一糸も乱れぬ、美しい行進であった。

(…コラールサーカスってのは、変わってんなあ…。
ヘタな軍隊より、よっぽど行き届いてるんじゃないかねえか…?)

バーグはその様子に感心しながら、自身も輸送機に潜り込もうと整列に加わる。

(しかし、こいつら…こんなにギスギスした連中だったっけ…)

そしてタラップに足を掛けつつ、昔の記憶を必死に手繰り寄せて

いた。

どこの地方だったか憶えていない。

周囲には、沢山の傭兵仲間。

家屋は壊され。

田畑は焼かれ。

荒れ果てている。

が、死体は無い。

戦争や内乱。

それらが終わりを告げる時、世界は何処でも同じような景色を見せる。

コーラルサーカスは、そんな枯れた人々の心を癒す存在だった。

優れた大道芸や奇術、手品などで、悲しみを一時は忘れさせてくれる。

だが、実のところ、それを楽しめたのは、勝利した兵士達だけだったのかもしれない。

一般の民はといえば、これから、瓦礫の山の中で、一からのやり直しが強要されるのだ。

バーグは当時。

娘のクウを連れて、一度だけ戦場を訪れたことがあった。

無論。

自分のついた軍の勝利が殆ど決まり、安全を確保してからである。

その幼娘への溺愛ぶりに。

傭兵仲間には、『あのバーグが丸くなったものだ』と、からかわれたものだった。

「ほら、ジャグマー君のキーホルダーだぞ。」

サーカスでは、募金も兼ねた、子供だましのようなグッズも販売されていた。

バーグは早速に入手して、娘に持って来る。

「いない。」

だが、そう答える娘の視線は、バーグの背負う大剣に注がれていた。

「……こ、こっちはダメだぞ。
…まいったな…。」

彼は焦り、何も無い空を見上げた。

今にして思えば。
どうやら、彼女の興味は、幼い頃から剣術にあったようだった。

(……あれ？)

席に座り、機内でうつらうつらとしていた最中、バーグは不意に目を見開く。

(…『いらない』って……なんだよ。
…おれ…返されちまったのか……。)

おぼろげな記憶に、問いかける彼。

（おかしいな……誰かにやったような……記憶があつたんだが……
どこの、どいつだったっけなあ……）

焼け野原の戦場。
難民の子供達。

バグは、戦場を去る間際、それらに近付いていく自分の姿を思い出す。

だが微弱な風景は、そこで途切れてしまった。

（もう10年以上も前のことだ……思い出せねえのも無理ねえか。
……まあ、いいや。）

そうして彼は、疲労した身体を休ませるため、今度は席に深く頭をもたれた。

選手達の最後尾は、奇しくもギルド本命の組だった。

初めの出遅れを挽回することもなく、静かな森を進む。

セアムリツヒは、口では余裕を語っていたが。

森の道は意外と険しく。

怪我人を背負い、足元に注意を払って駆けるには適していない。

それでもドウナガンは、手を貸すつもりは全く無かった。

むしろ、一刻も早く音を上げてくれるのを願っている程で、後方から渋々ついていくのみである。

「……………う。」

緩やかな斜面の半ば。

身体を伝う振動に、セアムリツヒの背に掛けられたロメスは、目を覚ました。

「…ここは…………？」

後ろ向きに景色が流れている異常に、繋がっていく意識。

「ようやく、お目覚めか。」

打ち所が良くてな……………傷は意外に浅かったぞ。」

セアムリツヒのかける気休めの言葉に、ドウナガンは吐き気さえ覚えた。

彼はそうやって、自身の名誉のため、怪我人をおだててまで競技の続行を促そうとしているのだ。

「すび……ません……」
「ドジ……こきました……」

その背でロメスは、息を詰まらせながら、消え去りそうな謝罪の声を洩らす。

「喋るな。今は休んでおけ。」

「……いくらなんでも……私を背負ってのハンデはきつい……」
「……今すぐ棄権を……」

ロープで完全にセアムリツヒと固定、一体化された身体。自分の状況を、ようやく全て理解してから、ロメスは言った。

「今さら、一人分の重量が加わったところで、私なら平気だ。君が苦しさから解放されたいと言っのなら、話は別だがな。」

足を止めずに、セアムリツヒは返す。
両脚の甲を地にめり込ませながら、必死に踏ん張っている。

「……うちの……カミさんがねえ……」
最近……四人目の子供が出来たんでさあ……」

「……？」

急にロメスが呟きだす脈絡の無い言葉に、ドウナガンは耳を傾け

た。

「絶対に…この仕事を…成功させて…。
これからも…もつともつと稼がないと…いけないんで…」

大粒の涙が、甲冑を滑り落ちる。

「おいおい、喋るんじゃないと言ってるだろう。」

進行速度を緩め、いたわるセアムリツヒ。

(……！)

一方、ドウナガンは完全に足を止めていた。

(俺達にとっては、些細なことだが…。

ロメスが、この重大な任務を失敗させたとなれば……ギルドは二度と彼に仕事を回さない…。

……そういうことか…。)

二人の会話を傍観しながら、ドウナガンは自分の浅慮を恥じるように、腰のベルトから垂らした小さな鎖を手で握った。

「…先頭、行きます。」

そして、ぶっきらぼうに言い放ち、前に走り出る彼。

「後についてきて下さい。」

その先導により、足場を選ぶという負担は軽減され、セアムリッヒは走りに集中できる。

ロメスが彼に顔を向けると、涙で滲んで見えなかった。

「勘違いするな…。」

俺は、他人に足を引きずられるのも、他人の引きずるのも……まっぴら御免だ。

だから戦場では、単独での遊撃を好んでいる。」

その視線に対し、ドゥナガンは厳しい言葉を返す。

「だが……子供達には、罪は無い。」

そう思った…だけだ。」

「優しいじゃないか。」

流石は、『勇士』と呼ばれる男。」

すかさず茶化す、セアムリッヒ。

「からかわないで貰いたい……そんなんじゃないんだ。」

「ますます、奥ゆかしいな。」

森の中に響いていく笑いが、予期せずに一丸となった彼等を押し
よっだった。

「……世羅、これからお前は、こいつらと一緒にだ。」

選手村までの限定だがな。」

待機させていた彼女とザナナに、開口一番に告げる戒。

その背後には、カジェットの組。

「…パンリ？」

それに世羅は、驚いたように声を発する。

だが、他は知らない人間なので、若干戸惑っているようだった。

「相手するのが凶獣だけならばまだしも、参加者達もいるからな。
世羅を連れて行くのは、やはり危険だ。

ここは、安全策をとる。」

戒は続けた。

「ザナナ。」

俺様とお前だけで結界の内側に入り、凶獣を『二匹』捕まえてくるぞ。」

「?」

そして急な申し出に、目を丸くする豹頭。

「勝手に話を進めるのは結構だがなあ、それが成功するって保証はどこにあるんだ?」

「無い。」

背後のカジエットの質問に、戒は振り返りもせず answers。

「もしも凶獣を捕り損なった場合、どう責任を取るつもりなんだって聞いているんだ。」

「だから、責任なんて取るつもりはねえ。」

そしてやはり、きっぱりと言い放つ彼。

「だが、もしも一匹しか捕まえられなかった場合は、てめえらに優先でくれてやる。」

それでいいだろ。」

「……………」

カジエットとベルッサスは、無言で視線を交わした。そして、さらにその後ろで、パンリは不安そうに状況を見守っている。

「こっちの条件は、選手村の直前まで世羅を無事に送り届けてくれりゃあ、それでいい。」

美味しい話だろうが。」

「あたしらがそのガキを人質にして、裏切る可能性もあるんだぞ？」

「まあ……それは平気だろ。たぶん。」

カジエットの脅しに、背を向けたまま戒は笑い、真面目に取り合わなかった。

「…わかった。」

なら、その条件でいこう。」

「二代目。」

根負けしたように答える彼女に、ベルッサスは少し咎めるように言った。

「私は賛成できません。」

他の組の者と行動を共にするということは、逆に我々も寝首をかかれる恐れがあるということ……」

「男なら小せえことをグダグダ抜かすな。
それに、この話……こっちにも重大な利点があるだろうよ。」

カジェットは正論を両断して言い放つ。

「この期間、特訓だけに集中できるのは大きい。」

そして、パンリの方を見る彼女。
だが、先ほどの激しく叱咤されたこともあってか、ばつが悪そうに目を逸らす彼。

「……それは…失礼いたしました。
確かに、パンリさんが今の状態のまままで戦場にいるのは、危険ですからね。」

これには、ベルッサスも納得したようだった。

「決まりだな。」

自分の思い通りに事が運んだ勝利の笑みを、口元から消してから、
そこでようやく振り返る戒。

同時に、世羅の肩を抱いて、引き渡すようにカジェット達に向けて押す。

だが、その足取りは重い。

「……何か不満か？」

「だって、ボクだけ仲間はずれだし。」

膨らませていた頬を解いてから、呟く彼女。

「お前が危険なのは、さっきちゃんと説明しただろ。それにな、凶獣の捕獲は大変な作業なんだぞ。あっちこっち、汗と泥だらけになっちまう。」

根拠の無い嘘でなだめる戒。

「ここでは当分、風呂も入れないのに……それはきついだろ？」

さらに彼は、彼女に効き目のあるツボを心得ていた。

「じゃ、じゃあ、パンリ達と一緒に行くね。」

一転して、誤魔化すように彼女は笑いながら、離れていく。

「世羅。」

反対に、戒は一言、彼女を引き止めた。

「何かあったら、空に向けて術を撃て。」

どこにいても……すぐに、ザナナが駆けつけるからよ。

……ついでに俺様もな。」

「うん!」

力強く、世羅は返事をした。

「……やれやれ。」

信用されてるもんだな、お前も。」

そうして離れていく四人を暫く見送り、戒は横の豹頭に洩らす。

「信用されているのは、ザナナではないだろう。」

着物の両袖の中で、腕を組み直しながら呟く彼。

「……どういうことだよ?」

さらに返す戒に。

ザナナは無言のまま、軽い足取りで、足元の結界をまたいで越えた。

チェックポイントの湿地帯を避け、西へ迂回すると、コース序盤に良く似た鬱蒼とした森が続く。

カジェット達はそこから更に、勾配こうはいのきつい獣道を選んで進んでいた。

「わかった…二代目には伝えておく。
無理はせず、課題のクリアを目指してくれ。」

列の殿しんがらを歩くベルツサスが、そう告げる。
すると、先ほど追いついてきた男は一礼をして、すぐさま道を引き返していった。

「今のは…」

「我々の仲間です。」

彼等に、コルスス達の動向を探らせていましたので。」

問いかけたパンリに、ベルツサスは素早く答えた。

「報告によると、奴等も迂回を選んだようです。我々よりも随分と先に進んでいるとのこと……。」

「そうですか……。」

当面、彼等との接触の危険が無いことに、パンリは胸を撫で下ろした。

「ところで……あの……。」

頭領は、本当にカジエットさんなんですよね？」

気持ちに余裕が生まれたため、興味本位のまま訊いてみる彼。

「ええ、そうですが？」

「昨日から感じていたんですけど、部下の皆さんと彼女って……何か距離がありませんか？」

カジエットの手下達は何故か、一切、彼女に近付こうとしない。彼等の窓口になっているのは、もっぱらベルツサスの方で、彼が全てを取り仕切っているといっても過言ではないのだ。

規模もさほど大きくもない組織にしては、少し奇妙だと。
パンリは時間が経つにつれ、考え始めていたのである。

「……二代目は若干、皆が近寄りがたい存在であることは確かです。
あの通り、自由人ですし。」

「そ、そんなことで頭が務まるんですかね……？」

ためらいがちに、パンリはさらに突っ込んでみる。

「……………」

だが、その一言に対し。

黙り込み、上から見下ろすベルツサス。

「す、すみません……！」

出過ぎたことを言ってしまった……」

「いや……そう見られても、仕方ないのかもしれない。」

だが彼は一転、遠くの山の景色へと目を向ける。

「……ですよねえ？」

もしも人を率いるのならば、ベルツサスさんみたいな方がいいんじゃないかと……思っんですが。」

肯定されたのをいいことに、パンリも調子に乗って続けた。

「それは…どうでしょう。」

絶対的な力や才能に、人は惹かれるものです。

私には、二代目ほどの、そのような資質はありませんよ。」

「では……貴方のお兄さんは……」

「ええ。」

あれも才能に恵まれた……ですが、危険な男です。

亡くなった先代を敬わず、受け継いだ術を己のためだけに使おうと企んでいる。

…多くの弟子たちも、奴の甘言や脅しに屈服してしまった。」

「甘言……ですか。」

「力で捻じ伏せて、弱者から富を手に入れるということ。それでは、空賊と同じでしょう。」

ベルツサスの凄味は、語るうちに増していった。

肉親を語るにしては、何か別の確執がありそうな気配さえある。

「先代の教えは、己が技術を磨くことこそが本懐。

必要以上の殺生や利益は、決して許しませんでした。

そして、その『偉大なる教え』を後世に伝えていくことこそ、我々の使命なのです。」

「な、なかなか高尚なんですネ…。」

カジェットさんを見ていると……全然、そんな風に思えませんけども……」

「あの方は、特別ですから。」

「またも、彼はさらりと言い放った。」

「先代の方は……どうして彼女を二代目に選んだのでしょうか？
私は正直、あの人が他人にモノを教えることが上手いとは思えないのですけども……」

「理由については、二代目だけが遺言を聞かされたので、私には分かりませんよ。」

「ちょ、ちょっと待って下さい！

当人同士の話し合いだけで決めて、第三者は誰も聞いてないんですか？

まさか、文書も残っていないとか……？」

泡を食って慌てるパンリに、ベルツサスはさほど重要でない、といった顔つきで返す。

「……その通りです。」

しかし、皆がそれほど納得できないことではないでしょう。
先代が死すまで……結局、あの『風の術』を受け継ぐことは、門弟の中で三人しか出来なかったのですから。」

「三人というのは……」

「二代目と私、そして兄です。」

その話を聞いて、パンリには、コルススの執着が解るような気がした。

密室で行われた継承者の決定。

弟子の気持ちになってみれば、そんな二代目決定の事柄に対する不快感や憤りは、想像に難くない。

ベルツサスは、カジェットに対して、何か特別な感情があるのかもしれない。

だからそのあたりの、ごく常識的な感覚が麻痺しているに違いないのだ。

「…貴方は……後継者になれなかったことを悔しく思わなかったんですか？」

「逆にホッしましたよ。」

自分には重すぎますからね。」

そう返すベルツサスは、生真面目で、何事も難しく考えるタイプに見える。

「それに、どちらにせよ…私は、後ろで彼女を支えたいと思ってい

ました。」

さらに、感情のこもった瞳で、カジエットの背を見詰める彼。

「あの……間違ってたら、ごめんなさい……」

もしかして、彼女のことを……好き……なんですか？」

パンリは『やはり』と思い、探りを入れてみた。

「そういう感情とは、少し違うと思います。」

だが対する彼は、思いのほか平坦な顔で答えるばかりだった。

「二代目とは長年、共に修行を積んできた仲だからこそ、です。」

彼女はご覧の通りの粗忽者そこつですが……人の道を外すことは無いと、それだけは信用できますから……」

「おい、二人とも何くっちゃべって、ノロノロ歩いてやがるんだ。」

早くこっちへ来い!!」

話も途中に。

だいぶ距離の開いてしまった前方から、カジエットが呼んでくる。

世羅の方も、彼女の後を無心で付いていったようで、その傍らでおとなしく待っているのが見えた。

「は、ただいま参ります…」

彼女らに向かい、二人は共に駆け足で斜面を駆け登る。

そこは、見晴らしの良い丘だった。

岩肌を露出している山の壁を西側に据え、遙か眼下には一面の森が生い茂っている。

「ここなら障害物も無いし、『風』に乗れるだろ。
風来棒で、近道をするぞ。」

「？」

カジエットの言葉に反応し、パンリと世羅は崖から身を乗り出してみた。

真下の崖は堅そうな岩場続きで、ほぼ垂直に切り立っている。

「世羅さんは二代目と。」

パンリさんは、私と行きましょう。」

だが、ベルツサスにも異論は無いようで、背の棒を手に取りながら答えた。

「え……？」

あ、あの…本当にここから？」

「《風・脈》ハイ・バウル。」

カジェットはパンリの質問を無視して唱え。

世羅を小脇に抱えたまま、早くも空へと飛び出していく。

先ほど術によって発生させた風圧に、棒の腹はぴたりと張り付いて、さらにその上で器用に風を乗りこなすのである。

「う……わっ！

すごい、すごいよ！！」

奇怪な棒と術だが。

今まで体験したことのない感覚に、興奮する世羅。
生身に直に感じる風は、戦闘騎の飛行とは、また一味違う感覚があった。

「あれが……カジェット流の秘術…。

確かに…使える術ですよね…。」

「それだけに危険が伴う。

使いようによっては、悪しきことに有用でしょう。」

先行する彼女らを眺めながら呟くパンリに、ベルッサスは苦々し

い表情で答えた。

深い葦あしの群生から、頭だけを出して。

「……………」

戒は不機嫌きわまる表情で、辺りに気を払っていた。

標的の凶獣を捜してからというものの、軽く三時間。
目立った生き物の気配は、いまだ全く無い。

「…お前、アレを何匹くらい捕まえたんだ？」

「……50は、あつただろう。」

戒の横で、彼と同様に葦に浸かっているザナナが返す。

「それじゃ、数としては、全ての組には行き渡らねえよな。
だが、先発の奴等に根こそぎ奪われる数でもねえ。
一体、どうなってんだ…。」

二人はまず、一つの巨木に遭難防止のための目印を付け、そこか

ら中心に円を描くように周辺を探索していた。

「こうして、ご丁寧にメスの匂いってやつも消してんだぞ。何か：やり方を間違ってるんじゃないの？」

水位が膝まである沼一帯を選び、全身に泥を塗りたくっているのは、ザナナの意見を取り入れたのである。

「ザナナが、狩りを間違うと思うか。」

「現にこうして、一匹も捕まってねえじゃねえか：。」

彼等は言い合いながら、一旦、目印付近の岸まで戻り、すっかり疲労しきった身体を休ませることにした。

その間も、深い藪やぶを背にして警戒を怠らないようにする。

「…畜生。」

まさか、本当に泥まみれになるとは思わなかったぜ。」

ずぶ濡れの一張羅を摘みながら、不本意な状況への愚痴をこぼす戒。

「少し休んでいろ。」

しばらく、ザナナだけでやってくる。」

「ああ、頼むわ。」

若干の責任を感じているのか、すぐに狩場に戻ろうとするザナに対し、彼は大いに甘えた。

二日酔いという具合の悪さも手伝って、やる気は完全に削がれている。

（もしも、このまま成果が無かったら……世羅に、どうやって説明すんだよ……）

自分の腕を枕にし、仰向けに転がる戒。

（いや、あいつには誤魔化しが効くから、まだいい。

問題は…パンリと組んでる、あの大女だ。

失敗したと知れたら……きっと…あの棒で頭をかち割られるぞ……）

陽の傾きが顕著になりだした空を見詰めながら、怖気たつ。

（他の組から獲物を強奪する線も、視野に入れとかねえとな…。

最悪、いざとなったら、世羅を連れて逃げる算段も……）

そんな考えを巡らせていると、藪の側から、草を掻き分ける音。

「ずいぶん早かったな。

…獲れたのか？」

戒は大して期待もせず、空を見上げたままの態勢で訊いた。

だが返答は無く。

地を伝う足音が、急に速度を増す。

「……………！？」

そして視界に飛び込んでくる、刃物。

戒は気付き、寸でのところで地を転げてかわす。

だがそれでも、鋭い痛みを顎^{あご}に感じ。

一気に醒めた眼差しを向ける。

そこにはザナナではなく、少女が二人。

同じ顔　　双子の姉妹は、二人とも細身の槍を携えていた。

先端に一つ、その両脇に二つの刃が付けられた十字槍である。

かわしたつもりでも、横に飛び出た刃に、戒は顎をかすめられていたのだ。

「や…やったわ………！」

ずっと隙を狙ってた甲斐があつた……!!」

得物を伝わった確かな手ごたえに、少女は笑っていた。
彼女の方だけは、額当てを装着しているため、それで見分けをつけることが出来る。

「エリス、見てやりなさい。

あの傷……かなり深くえぐってやったわよ。」

そして勢いづく彼女は、その背後で縮こまる、もう片方の少女に言った。

「ああ!?!」

顎を手の甲で拭い、思わず睨み返す戒。

どうやら相手は、頬の『目立つ古傷』を、自分でやったのだと勘違いしているようである。

「おい、クソガキども……こっちは、いま付いた傷じゃねえぞ……。」

「ふん!

負け惜しみを……!」

高い声で威嚇しながら、槍の切っ先を斜め下に向け、体を斜に構える相手。

そんな少女を前に、戒は不用意に近付くことを止めた。

歳の割に、熟練した構え。

油断のならない相手だということが、それだけで伝わる。

さらに、自分が流した血液の香りも伴って。

戒は複雑な高揚を感じた。

「……レン……。」

お父さんは……お父さんは、おとなしく隠れてなさいって言ったのに……」

見ると、前の少女と対称的に、後ろの少女は怯えきった顔つきで呟いている。

「今さら止めたって遅い！

もう、賽^{さい}は振られたの。

…それにどうせ、こんな所で呑気に寝そべっているバカが相手なら、楽勝よ。」

「お、おい……！」

…誰が……バカだって……？」

おどけたふりをしてポケットに片手を入れ、その中で十字架を握り締める彼。

「おっと、おかしいマネしないで。

二対一だから、もうあんたに勝ち目は無いわよ。

もつとも、その腕輪さえ置いていけば、命だけは助けてあげるわ。
神の名のもとに、ね。」

地を強く踏み、脅しをかけてくる彼女。

「どこだ……レン！ エリス！！

……どこにいる！？」

互いが出方をうかがう最中。

さらなる藪の奥から、男の大声が響き渡る。

「……お父さん！？」

途端に二人の少女は、驚きと喜びが入り混じった様子で叫ぶ。

（お、親父だと？）

戒にとつては、油断だった。

この三人目の存在は、競技の規則ルールや彼女らの会話からも、予想して当然だろう。

少女二人が相手なら、どうにでもあしらうことも出来る。
そんな余裕が、心にあったのだ。

だが、今の声の主が相手側に加わってしまえば、状況は一気に絶望的になる。

「……レン！」

エリスウウ！！」

嫌な予想通り。

気迫充分に、娘の名を呼びながら藪の奥からのぞく人影。

詳しく観察している暇など無いのだが、相手の筋肉質の太腕には、腕輪が三つ見えた。

数だけならば、自分らと同じである。

その目が戒の姿を確認するなり、枝葉を蹴散らし、白布が掛けられた肩口を向けて突撃をしてくるのだ。

しかも動きは、恐ろしく俊敏。

戒は一瞬で懐の深くに、潜り込まれたため、回避はもはや間に合わない^{ふとこ}と悟った。

「^{イデイス}聖十字！！」

ポケットから手を抜き、切り札としていた聖十字の加護を早くも発動させる彼。

(……！？)

だが直後、その赤い壁越しに、重い鉄槌を落とされたような衝撃。あつさりと膝を崩された超重の負荷に、戒は相手が人間ではないような錯覚をおぼえた。

これは 娘への脅威に激する、親の迫力だけではない。

(……！

バカな……！！)

戒は改めて前を向き、茫然とする。

聖十字の防御を前に、相手の得物は碎けていない。

それどころか、より発光を増す男の手元。

自分と同じ、赤い十字架である。

だが、それを覆う膜は、『壁』ではなく『斧』のように変化しているのだ。

「イデイス聖十字……か……？」

やがて男の方も、自分に向いている十字架に、愕然とした様子を見せる。

戒はそこで、相手が纏う白い衣が、良く見れば教衣であることに気付いた。

不意に動きを止める男。

しかし、その理由は、停戦を申請するためではなかった。

藪の中に身を隠したザナナが、彼の背に槍を突きつけていたのがある。

「……お父さん……！」

着物姿に豹頭という、その容貌に恐れを抱き、咄嗟に槍を構える少女。

「みんな、動くな。」

ザナナがそう告げるまでもなく、誰もが互いに身動きとれずにいた。

「そ、そっちこそ、動かないで……！」

あんたの仲間の命は、こっちが握っているんだから……」

だが気丈にも、今度は戒に槍を向け、少女は睨み返す。

「そうではない……！！」

その位置から、さらに槍を突き入れ、放つザナナ。

「あ……お父さんッ！？」

娘の危惧をよそに、父親の脇を通り抜け、泥に埋まる槍。
するとそこから、黒い影が浮かび上がる。

それは大魚だった。

口を一杯に開き、その内に多くの牙を見せる。

それがザナナの一撃により、全身をはねらせて、もがき苦しみ。
振られた巨大な尾びれが、武器となつて宙をさまよっていた。

「きゃ……！！」

その様子に、慌てて散る二人の少女。

だが、一方の彼女は、少し鈍いようである。

進む道を誤り、ぬかるみに足を取られ、すぐに身動きが取れなくなってしまうていた。

「おい！」

何やってんだー!!」

無意識で駆け、その小さな手をとる戒。

だが彼自身もバランスを崩し、二人は共に倒れこむ。
その際、戒は自分を下に、彼女を泥から庇^{かば}った。

「……あ……」

四つんばいになって、自分の状態に気付く彼女。
思わず、戒の顔を見詰める。

「!」

そこで、彼女は興味深そうに古傷を指で撫でたので、戒の方が驚いて退いてしまった。

「す、すみません……」。

助けて……いただいて……」

伏せ目がちに、そう謝る彼女は。

世羅よりも、ずっと幼いようである。

「いや…別に、助けたつもりはねえんだが…」

口ごもりながら、顔を背ける戒。

一方の大魚は、そこで断末魔の叫びの代わりに大きく痙攣したかと思えば、急に動かなくなり、こと切れたようだった。

「沼に棲む凶獣のようだな。」

「こんな危険なものがいるんなら、先に言えよ！
当てになんねーな、お前も！！」

ザナナの淡々とした態度に対し、胸に少女を抱いたまま叫ぶ戒。

「……ザナナとて、初めての狩場だ。
そこまで予想は、出来ん。」

呟き、彼は魚の巨体から槍を引き抜く。

「…どうやら、君たちに救われたようだな。
礼を言わせてもらおう。」

やがて、服に付いた泥を払いながら。
一番に立ち上がったのは、先程の男。

「と、その前に…… エリス！
敵と、いつまで抱き合ってるの！！」

続いて、もう一人の少女が口やかましく叫んだ。

強襲してきた時とは、ひどい変わりようであった。

「私の名はウベ＝ルッター！。

クレイン教・ニグ派の…… 神父をしている。

不可抗力とはいえ、同志に刃を向けたことを許していただきたい。

」

もみあげから繋がっている、くせのある髭。

それが特徴の、幅広い顔が笑みを作ると、和やかな印象を受ける。

「君は見たところ、修道士のようだが……」

「ああ、俺様は…… 戒＝セバンシュルドだ。」

ウベが胸元で十字を切り、握手を求められても、信仰心が薄い戒の表情は冴えなかった。

「何が俺様よ。」

お父さんは神父なのよ。

修道士なら、敬語を使って敬いなさい！」

「いいんだ、レン。」

信仰とは聖職を崇めるのとは違う。

我々は、神の代弁者にすぎないのだから。」

わめく娘の方を向きながら、父親は諭す。
（さと）

「どうでもいいがな……。」

てめえら、今のままじゃ永久に、課題をクリア出来ねえぞ。」

そこで、心底うざったそうに、戒は呟いた。

「何ですってー！？」

今度は、そんなデタラメを言って惑わすつもり！？」

「……それは、どういうことだろうか。」

ぜひともし詳しく聞かせてもらいたいな。」

そんな彼の態度に逆上する彼女に、制止をかけるウベ。

「実は私も、妙に思っていたんだ。

標的の凶獣を、ずっと『この周辺で』探していたのだが……全く
出合いが無い。」

「……それが理由だよ……。」

戒は襟を直しながら、今度は呆れたように言う。

「あの凶獣は、人間のメスの匂いから、逃げる習性があるのだ。」

そして、付け加えるザナナ。

「なるほど、そうだったのか。」

それは……重ね重ね、すまなかったなア。」

ウベは苦笑しながら低頭し、彼等二人の手を取った。

「チツ……わかったなら、どっか行けよ。」

お前らはずっと、俺様たちの邪魔をしてたんだからな。」

だが、すぐにその手を振りほどく戒。

「……いや！」

しかし、困ったぞ。

それが事実ならば、これから我々は、どうすればいいんだ？」

「そうよ。」

私達の課題はどうなるのよ!？」

ウベに続き、その傍らでレンが騒ぎ立てる。

「そんなこと、てめえら家族の問題だろうが。自分で考える！」

そして、さっさと消えろ！！」

「待ってくれ。」

どうだろう、ここは我々と協力してみないか？」

「足手まといは……必要ねえよな。」

戒は、わずかにザナナの顔を見て言った。

「…だが、今日はもう陽も落ちる。」

夜になれば、他の選手達の襲撃にも備えねばならないだろう。多人数の方が有利だぞ。」

「あんな……こっちは、ただでさえ面倒なことを背負ってんだ。俺様たちの分とは別に、もう一匹もっていく約束をしちまってよ……。」

「この際、二匹も三匹も変わらないんじゃないか？」

彼は引き下がらなかった。

「どうしても、お願いできないかな？」

ウチは…この通り、娘も若いから……実は困っていたんだ。」

「いやだね。」

「……ならば、このままずっと、君達に張り付いていよう。」

「そんなことしたら、こっちも凶獣が捕まえられねえじゃねえか！
」

大きく目を見開き、彼の発言に驚く戒。

「ああ……それは困るだろうな。」

「お父さん、頭いいわ!!」

そして、父娘は笑う。

「畜生……悪知恵を働かせやがって……」

交渉は結局、戒の方から折れる形となった。

「だが、ただで手助けしてやるわけじゃねえぞ。
狩りの間は、俺様に全面的に従ってもらう。
いいな？」

「感謝する。」

「これも、神のおぼしめしだな。」

ウベは口走りながら、今度は額を二回叩いた。

だが、その行為に、戒は少し違和感を抱く。
神学校では、神官や司祭の類を嫌というほど見てきたが、知らない身振りだったのだ。

「…そうと決まれば、まずは夜へ向けて準備しなくてはな。
たきぎ薪に使う枝を取ってこよう。」

「おいおい！！」

とつと凶獣を捕まえるんだろ？
寝る準備なんて、後にしろ…」

「君は、自然の厳しさを知らないようだな。
野宿するなら、今から準備をせねば、とても間に合わんぞ。」

「そ、そうなのか…？」

振り返ると、ザナナは無言で頷いていた。
戒は、急に気恥ずかしくなって、そこで目を伏せる。

「私達、野宿は慣れっこなの。
良かったわねエ、一緒に組めて。
都会の人。」

恩着せがましく、レンは言った。

戒にしてみれば、弱味を見せたくない所での先制攻撃である。
悔しさも倍増であった。

「あの……すみません……
お父さんが……強引で……」

そこで、戒の服を引いて背後から囁く、エリスと呼ばれていた少女。

レンに比べて控えめであり、気配があまりにも薄いので、彼も存在を忘れかけていたほどである。

「ご迷惑……おかけします……」

「もういいってんだ。」

透き通った声の小さな謝罪に、戒は無感情のまま返した。

夜の訪れた森は、暗闇の支配下にある。

陽光に守られていた昼間と違い。
脆弱な生き物は、そこでは息づかいさえ改めねばならない。

もはや、後続は無いと思われ。

落胆と共に、魔導人形のハーニャンも輸送騎で場を後にした直後。

「……さて……と。」

ぼちぼち、最後尾から、挽回といきますか。」

交換所から離れたセアムリツヒが、バイザーを下ろす。

両肩の甲冑にランタンをぶら提げて、夜戦仕様は万端である。

「追討戦は、背後を突く側が圧倒的に有利ですよ。」

茂みの奥から応える声。

セアムリツヒが茂みをランタンでかざすと、瞳が光を反射する。

そこには、集団を地に伏し、鬼人のように猛けた顔のドウナガンが佇んでいた。

「なればこそ、夜を待つ、か。」

なあ…君たち。

うちの勇士さまと同意見だったのは見事だったが……どうやら、欲をかき過ぎたようだな。」

兜の下を笑顔に変えて、セアムリツヒが唸る。

伏している集団の中の一つの手から、不発の爆裂缶が坂を転がっ

ていった。

4

「……傷は平気かね。」

「それほどでもねえ。」

ウベ神父に軟膏を処方された顎に触れながら、戒は焚いた種火に小枝を放り込む。

「良く効くでしょ？」

お父さんは、腕のいい薬師でもあるのよ。」

そこへ、頭上から枝の束を乱暴に降ろしてくるレン。

「なにせ、中王都市に来る間も、これで路銀を稼いでいたんだから。」

「お前たち…この国の人間じゃねえのか？」

「ああ。」

戒の素朴な疑問に、彼は照れるように笑みを重ねた。

「国境そばの小さな村落で暮らしているんだ。

一応、教会は持っているんだが、やはり信仰だけでは生活が苦しくてね…」

「それで、賞品に目が眩んだってわけか。」

「…平たく言えばその通りさ。

私は、もしも飛翔艦を得ることが出来たなら、それをすぐに売ろうと思っている。

……娘たちに楽な暮らしをさせたくて。」

再び薪を採りにいく娘の姿を眺めながら、臆面もなく言う彼。

「別に、いいんじゃないか？

理由なんて、人それぞれだしよ。」

「……そう言ってもらえると、有難いな。」

二人の喧きと共に。

火にくべていた枝が弾け、乾いた音を響かせる。

「君にも何か、心を支える目的はあるかね？」

「まあな。」

「……俺様は……」

だが、そう戒が言いかけたところ。

「お父さんはね、薬の知識だけじゃないのよ。」

こう見えても若い頃、色々な功績を上げて聖^{イデイス}十字を得たの。
すごいでしょ？」

早くも戻ってきたレンが、再び興奮気味に口を挟んでくる。

「……誰も聞いてねえよ。」

それより俺様の……」

「聖十字よ？」

すごいでしょ！？」

「すごくねえよ……」

俺様だって、このとおり、同じの持ってたからよ……」

あまりにもしつこく自慢してくる彼女に苛だち、自分の十字架を出して突きつける彼。

「……さっき見たから、知ってるわよ。」

でも、あんだのは、どこから盗んできた物よね？」

「失礼なことやってんじゃねえ！！」

「正真正銘、俺様のだ！！」

「彼の言う通りだぞ、レン。」

聖十字が、持ち主を二人選ぶことはありえない。

……神様は、いつでもお見通しということだ。」

真っ向から反論する戒とは対称的に、ウベは穏やかな口調で娘を諭した。

「今の時代なら…大方、君は神学校の主席卒業生といったところかな？」

「主席い？」

だが、続けられる父親の言葉に、レンは頭から疑ってかかる。

「お、おつよ…。」

そしてそれらの話題に移ると、戒も急に視線を泳がせるのであった。

「じゃあ試しに、簡単な問題を出してあげるから答えてみなさいよ。大聖典に書かれた前文は…」

「それより、明日からの作戦を立てねえか？

やはり今は俺様のことなんかより、競技に専念するべきだろう。」

「なに都合のいいこと言ってるのよ。

もしかして、それ……まだ所有者がいないうちに盗んだんじゃない？」

「……主席つてのはな、今日び勉強だけでは取れんのだ。

……俺様の場合……品性良好なる、この人格が……すこぶる高く評価されてだな……。」

戒は必死に取り繕った。

教師達を脅し、半ば恐喝して得たなどと　　本当のことは、
とも言えるわけがない。

「見苦しいわね……。」

盗賊の言いわけも、ここまでくると。」

「レン、もうよしなさい。

我々は共同戦線を張っているんだ。

お互いを疑い、争っていても仕方がないぞ。」

「だって……お父さん……こいつ、あまりにも……」

「いいから。」

ウベが指を鳴らすと。

それに一瞬怯えたように反応して、途端におとなしくなる彼女。

「……。」

そのやりとりに、戒は、ただ気を取られていた。

いくら父親とはいえ、娘に妙な躰しづけを施しているものだ。

「……あの……火の用意……できました？」

場が収まったところで、先ほど仕留めた大魚の頭部を担いだザナナと、その切り身を刺した枝を両手に抱えたエリスが、並んで現れる。

「エリス！」

さつきから見ないと思ってたら……何してんの……！」

「お手伝い……」

「あ、あれと二人きりなんて……危険すぎるわよ……！！
不笑人わらわすびとって、人間の子供の脳みそと内臓が好物だって、おじい
ちゃんの書斎にあった本に書いてあったじゃない……！！」

父の目があるため、レンはなるべく小声になってから彼女の手を取り、引き寄せる。

「そ…そうなんだ…」

でも…悪い人とは…思えなかったけど…」

その剣幕に押されながらも、エリスは魚の串を丁寧に地面に降ろした。

そしてザナナは、黙々と、それを手際よく焚き火の周囲に設置していく。

彼女らの偏見に満ちた視線にも、当の本人は別の境地にいるように無頓着であった。

「これを食べたら、出るぞ。」

「…そうだな。」

私もザナナ氏に遅れを取らぬよう、頑張ってくる。
だから…いつも通り、おとなしくしているんだぞ。」

やがて、彼が切り出した言葉にウベは賛同し、娘たちに向けて告げた。

「何だ、何の話だ？」

彼等の様子に気付き、それまで地面で横になっていた戒は、慌てて飛び起きる。

「実は、先ほど打ち合わせをして……この夜のうちに、私たち二人

で狩りに出ることにしたんだ。

その間、君には娘たちを守ってもらいたい。」

「ふ、ふざけんな!!」

「冗談でしょ、お父さん!？」

それを耳にした直後、同時に悲鳴を上げる戒とレン。

「はい、二人とも、いちいちテンション上げない。

納得のいく説明は、ちゃんと用意してあるんだからね。」

いきり立つ彼等を前に、ウベは続けた。

「まず、狩りが得意なザナナ氏に単独で行ってもらうという選択肢があつたが、他の参加者もいるここでは危険すぎる。

だから、私が補佐を願ひ出た。

そして獲物の性質上、レンとエリスは動かずに、ここで待機しているのが望ましい。」

「だからって、どうして俺様が護衛せねばなんのだ。」

その説明の途中、戒は口を尖らせて意見する。

「君も、一応は聖十字を使いこなしているようだし……たった一晩くらい、子供二人を守ることなど造作も無いと思つたのだが……」

「ふざけんな！」

俺様だって、夜は寝てエんだよー!!」

そして、全く恥じることなく吐き出された本音に。

「……あんだ…何となく予感してたけど…最低な男よね…」

レンは脱力し、もはや声をひり出すだけで精一杯だった。

「そっちの役目が嫌だと言うなら、ザナナ氏と代わってもらうことになるな。」

こっちは…寝れないどころか、死ぬ危険もあるがね。」

「……う。」

見張りは、交代制だ。

それなら手を打ってやろう。」

またもや挑発的なウベの取引に、戒は、今度は絶対に引き下がるまいとする。

「…お父さん。」

私も見張り、頑張るから……。」

そこで、ぼそりと呟かれたエリスの言葉が決め手となった。

「じゃあ、それでいいこう。」

満面の笑みを浮かべ、あっさりと了承するウベ。

一方の戒は、どうにも面白くない。

先程からどうも、相手の計算通りに、事が進んでいる思いがしたからである。

ただでさえ自分の組が二手に分かれた状況で、さらに分断されてしまつのは如何なものだろうか。

「……ならば、寝る順番は、俺様が一番な。」

だがそのような危惧も、疲労の前では塵に等しかった。

カジエットの余裕と自信は、決して荘言ではなかった。

『風来棒』と『風を生む術』は、想像以上に便利な代物である。

それらは、戦闘騎のように速いわけでもなく。
また、飛翔艦のように圧倒的でもない。

だが。

地上での小事を済ますには、本当に丁度いいものだった。

異文化の技術で作られた棒は、軽やかに風に乗り。

しばらくの空中散歩を楽しむうち、カジェット達は、選手村の門が見える丘陵まで一気に到達していた。

『空を飛ぶ』という究極の近道で、森林を進む選手達を一体どれだけ抜き去ったのか。

それさえ把握できない程である。

到着した丘陵の中腹で、彼女たちはまず、キャンプに適した平坦な土地を発見した。

周囲に草木も多く茂っていて、余所からは見えにくい。

そのうえ、選手村周辺の様子は逐一、見張ることが出来る絶好のポイントだった。

早速、彼女らがそこで焚き火を作ってから数時間後。

「……どうだ？」

初歩の術くらいは出せるようになったか？」

奥の茂みを割って現れたパンリとベルッサスに向け、カジェットは口を開けた缶詰を放り投げる。

「あの……それが……」

「まあ、いいや。」

メシでも食って、ちよつくら休憩しろ。」

直後、彼女は言い直す。

対するパンリの、浮かない表情が全てを伝えていた。

「……面目ありません。」

きつと、私の教え方が悪いせいで……」

そうやって取り成すベルッサスでさえ、失望の色は隠せない。

彼が知りうる限りのコツを教え、そこへさらに修練を重ねても、パンリの源法術は微塵も上達しなかったのである。

「パンリ、源法術の練習してるんだ。」

重くなる一方の空気の中。

一人、事情を知らない世羅が、無邪気に訊いた。

「ええ……まあ……はい。」

「それなら、ボクも一緒に教わりたいな。
まだ苦手だし…」

「……！！」

…どうして、そんな嫌味を言うんですか!？」

それまで、虚ろな表情で返していたパンリが、急に声を荒げて立ち上がる。

「おいおい……なにブチ切れてんだよ、パンリ。」

修行がうまくいかないからって、他人に当たっても仕方ねえだろ。

「

彼の豹変ぶりに、三人は一様に呆氣にとられていたが、カジエツトだけはすぐに気を取り直して言った。

「…だって…世羅さんは……あんなに才能があるのに……。
そんな風に言うなんて…あまりにもひどいですよ…。」

「さいのう?」

正論で諫められ、ばつが悪そうに座り直すパンリに、世羅が不思議そうな顔で近付く。

「もしかして、昼間の話は……この子のことなのですか?」

それに続き、少し驚いたようなベルツサスの問いに、彼は頷いて示した。

「では…世羅さん、あとでこのベルツサスと練習いたしましょう。」

「うん、いいよ。」

その申し出を、すぐさま受ける世羅。

「しばらく、パンリさんの修行は二代目をお願いします…」

「パンリは元々、あたしが面倒見るって約束だろうが。」

一人だけ話から弾き出されているカジェットは、苦々しい面持ちで返した。

「…とにかく、明日が勝負だ。」

中立地帯の選手村にも、できるだけ早目に入った方がいい。

そのぶん、心置きなく修行に時間を費やせるからな。」

そして、おもむろに立ち上がり。

世羅の脇に席を移す彼女。

「…あの戒つて野郎……ちゃんと信用できるんだろっな？
あいつがしくじったら、あたしらも苦しくなるんだぞ。」

「大丈夫だよ、きつと。」

「そうか…。」

「ならいいけどさ。」

大きな笑顔を前に、さらに懷から缶詰を取り、差し出す彼女。

「二代目。」

もしかしてそれらは……我々が高いポイントを払って交換した食料に見えるのですが…気のせいでしょうか。」

世羅の足元に転がっている、空き缶の山にも目を付けながら、ベルツサスは呻いた。

「今後のため、もっと節約していただきたい。」

非常に申し上げにくいのですが…彼女の食欲は…ちょっと…」

「どっからどう見ても、育ち盛りの子供だろ？」

「……いえ。」

「どこからどう見ても、力士並み…」

「せこい野郎だな、おい！」

村だつて目の前だし、いざとなれば、そこらに生えているペンペン草でも食って繋がりゃいいだろ…！」

与えられた食料を無遠慮に平らげていく世羅の頭を撫で回しながら、言い放つ彼女。

「……。」

何なのでしょう。

この、差別感ほ。」

その様子を呆然と眺めながら、パンリはベルツサスに囁く。

「…二代目は、可愛いものには目が無いんですよ…。」

同様の表情の元、もはや諦めた様子で返す彼。

「この大会で雑用している、あの着ぐるみ人形たちも、いたく気に入ってたようですし…。」

「…だからあの時、すぐに袋を取りに行っ たんですか。」

パンリは納得して呟いた。

ゆえに、彼女の着けている腕輪は、若い番号なのである。

だが現在の自分にとって、大会そのものは既に重要ではなくなっ
てしまった。

簡単な源法術が、どうやっても発動しない。

そのもどかしさと悔しさで、気持ちが一杯なのである。

勉学において、つまづいた事は無かった。
それどころか、こと憶えることに關しては、人並み以上に出来る自信がある。

だが、術を扱うことに關しては、何か別の作用が働いているのではないかと疑うほど、手も足も出なかった。

初めにカジェットから忠告された通り、ある程度の厳しさは予想していた。

それでも、勉強のように努力すれば、何とか詰め込めるのではないかと、たかをくくっていたのだ。

明けない夜は無い。

パンリは両手を焚き火に当てながら、それを頭上に輝く星々に祈るような気持ちだった。

ようやく、寝静まることが出来た真夜中。

「
つてえ!!」

尻に強い刺激を感じ、戒は飛び上がって目を覚ます。

「いつまで寝てるのよ！」

とつくに、見張りの交代の時間は過ぎてるんだからね!!」

下を覗けば、ハンモックの布越しから、レンが槍の刃を突き立てているのが見える。

「お…おまえ…ふざけやがって…」

ケツの穴が二つになったら、どう責任とってくれるんだ…この…」

声にならない声と共に、渋々とハンモックを降りる彼。

「下品なこと言っでないで、さっさと見張りの準備しなさいよ!!」

見ると、彼女が握る短い松明の炎は消えていた。

これを目安に、交代の間隔を決めているのである。

「くそ…まだ寝たりねえ…」

明日も競技は続くってのに…」

「状況はお互い様でしょ。

こっちは子供なのに、対等に仕事してやってるだけ、少しはマシって思い知らなさい。」

「…お前、いくつだ。」

「まだ14よ。」

「……お前らの親父、どうかしてるぜ。」

戒は冗談を交じえながらハンモックを降りきり、大きな欠伸あくびをする。

「あと、私が寝ている間に、エリスに変な真似したら……今度は心臓を貫くからね！」

「うるせえ！」

わかったから、さっさとくたばりやがれ……！」

ハンモックに昇る間際のレンの悪態に、戒は応戦しながら焚き火に向かって歩いていった。

周囲の森闇に感覚を向ければ、聞きしに勝る不気味さで。

夜鳥の鳴き声が、絶えず響いている。

野宿の経験が乏しい彼には、それらが一層に奇異なものとして感じられた。

「…交代だ。」

向こうで、しばらく寝てろ。」

周囲の見物もそこそこに、エリスから遠い位置に腰を下ろす彼。

「でも……見張りは二人制だつて、レンが……」

燃えさかる火の向こうで、彼女は小さく答えた。

「一人だけ起きてりゃ、充分だろ。」

あれは小さなハンモックだが、子供なら二人くらい余裕で寝れるぞ。」

「……。」

「そうか。」

二人制にしたのは、監視のためか。」

自分の厚意に対し黙り込む彼女を見て、戒は納得し、苦笑した。

「……いえ！」

レンはまだ疑ってるけど……私は決して……。」

「別に、言い訳しなくてもいいぜ。」

こんな状況で、お互いを信用しようつてのが偽善だ。」

先ほどの神父の言葉を何となく思い返しながら、呟く彼。

揺らめく、大きなオレンジ色の炎に目を移す。
眺めていると、眠気以外の感情が溶けていくようであった。

「でも…さつきは…助けてくれましたよね…？」

「あ？」

今まさに落ちかけようとしていた意識が、脇からの質問によって
舞い戻る。

「……どうして、私が大きな魚に襲われた時…助けて下さったんで
すか？」

敵同士なら…見捨てることも出来たでしょうし……」

「あのかなあ…。」

いつの間にか傍に座っていたエリスに言い寄られ、戒は、いちい
ち相手をするのにも面倒な様子で返した。

「あんな巨大な魚が暴れ回っている状況で、考える余裕なんかあつ
たと思うか？」

「じゃあ、体が自然に…？」

「…悪いかよ。」

「い、いえ…！」

ぶつきらばうに答えると、少女も穏やかな笑顔に変えて、焚き火に目を移す。

「しかし……お前、運動神経わるいだろ。

選手村に着いたら、そこで棄権した方がいいと思うぞ。

大体、あの親父も親父だ。

自分ところのガキ連れて、こんな危険な大会に参加するなんてよ

…」

「お父さんのことは…悪く言わないで下さい。

私達のことを思つてのことなんです。」

「だがな、もっと方法があるだろうよ。」

「そうなんですか？」

素直に訊き返してくる彼女を、戒は目を見開いて凝視する。

「『そうなんですか？』……じゃねえよ。

世間のことを、何も知らねえのか？」

「はい。

私…世間に疎いんです。

今まで一度も、教会の敷地よりも外に出たことが無くて…」

「一度も…か？」

「はい、教義で決められてましたから。」

「…随分と厳格だな。」

「…普通は違うんですか？」

「まあ…同じ教徒でも、地方によって色々の違いがあるんだろうな。…とは言っても、俺様は教徒でもねえけどよ。」

「教徒じゃない？」

「修道士なのに？」

エリスは、驚きの眼差しを向けた。

「神なんざ、生まれてこのかた、一度も崇めたことがねえ。」

「……え。」

胸を張る戒に、戸惑いと興味の入り混じった複雑な表情で、その横顔を見詰め続ける彼女。

「しかし、そんな厳格な所で育った割には、お前の姉はヤンチャしてやがるな。」

さつきも…」

「……姉は、私なんですが…。」

「そうか。」

全然、見えねえ。」

はつきりした言葉に、今度は落ち込んだ様子で頭を垂らす。

「…こんなに頼りないんじゃない、お姉さんの資格…ありませんよね…。私、あの子には、いつも押されっぱなしだし…。武術もさっぱり…」

「いや、ガキが武術を学んでいる時点で、何か妙だろ。仮にも教会なんだからよ…」

「おかしい…ですか？
ニグ派というのはクレインの中で、武門を司っているらしいんですけど…」

「…肉派とか野菜派とか言われても…俺様には分かんない。だが、お前らの親父がマッチョな理由は理解できた。」

そんな戒のぼやきに、彼女は微笑んだ。

「お父さんは、とても強いんです。
この大会中も、私達を安全なところにかくまってから…常に一人で戦ってるんですよ。」

「たった一人でか？
確かに、ひでえ馬鹿力だったけど…あいつ、化け物だな。」

「ふふ…」

そこで少女が初めて見せる、肩の力の抜けた笑顔。

「聖十字つてのはよ、ああいう風に使うことも出来るものなんだな。少し勉強に…」

「あの…すみません。
喋っていたら…眠くなってきたやつて…」

茫とした顔で呟く彼女の言葉に、戒も自然と話しこんでいた自分に気付く。

「やっぱり…寝ても…いいでしょうか…？」

「ああ、だから言ったじゃねえか。
あつちで寝てろつて…」

直後、戒の肩に寄り添う、絹糸のような髪。

「おい……。…」

制止も既に届かず、彼女はそこで無防備に寝息を立てていた。

今の自分に、寝る暇は無い。
そんな思いから、パンリは疲れた身体を奮い立たせ、術の修行を
続行していた。

具体的な術を教える前の段階である。
カジェットも一切口出しをせず、傍の岩に鎮座して、それを見守
っていた。

「う…《源・衝》^{フェルト}…。
…あ…う…。」

やがて、パンリは終始、地面に崩れこんだ状態になる。
それでも、口だけは止めなかった。

「さ…参考のためにお聞きしたいのですが…。
…カジェットさんは…初めて術を出せた時…どのくらいで習得で
きましたか…？」

「入門した、その日のうちに出来たさ。」

腕を固く組んで見下ろす彼女は、うつかり言ってしまうてから、
慌てて口を押さえた。

「そう…ですか…」

「あんまり気を落とすなよ。」

ある時、急に出来たりする奴もいるもんだ。」

「私も…そうなれば…いいんですがね…。」

「ああ、そうだな。」

流石に、彼の喘ぐ^{あえ}姿を不憫に思ったのだろう。

カジエットも以前よりは、意識して優しい対応を心がけてくれているようである。

「それに…もしかすると、お前は体質的に使えないだけかもしれないねえしな。」

だが、慣れない慰めをかけたせいだ。

またしても口を滑らせたことに、彼女は気が付かなかった。

「……？」

「……源法術は、誰でも練習すれば使えるわけではない…のですか？」

パンリは目の色を変え、自問のように呟く。

「…まあ…な。」

体質的なものに限定すれば、源法術の才能は、半分の人間に潜在しているって言われている。

だが実戦クラスの術をこなせる所まで行ける奴あ…そこら、

せいぜい二割程度だろうな。」

もはや、はぐらかせないと悟り、カジェットは腹を決めて打ち明かした。

「そ……そんな……！」

だって、あの時……いかにも強くなれるような口ぶりで誘ったのに……」

「別に騙したわけじゃねえよ。

お前があの話に乗ってくれたってことは、少しは術に覚えがあるからと思っただ。

まあ、すぐに素人って気付いたけどよ。」

「ならば、どうして、その時すぐに言ってくれなかったんですか？ 私に才能が無ければ、こんなことやっただって全くの無駄じゃないですか……！！」

「おい。」

今まで溜めていた不満を一気に噴き出すパンリを、カジェットは思い切り握み上げる。

「あたしに対してなら、ともかく……一生懸命教えようとしているベッルッサスに対して、同じ言葉を吐いたら……承知しねえぞ。」

「……あなた達は、この競技に参加したいがため、私と仕方なく取引をしたんでしょう？」

上手くいく保証が無いのを黙って…。

その必死さだって……飛翔艦が欲しいから…違いますか？」

胸倉を下から押し上げられた態勢のまま、パンリは目に涙をたたえて呻いた。

「見くびられたもんだな…！」

弟子に『才能が無い』なんて前提で教える馬鹿が……どこにいつてんだよ…！」

カジェットは、そんな彼を乱暴に突き放す。

「弟子…ですって……？」

さも意外そうな表情で喉元を緩めながら、パンリは自嘲気味に呟いた。

「二代目。

少しよろしいですか。」

そんな折。

草むらの奥から現れるベルツサス。

カジェットは気付くと、すぐさま平静を装って歩み寄った。

「どうした。」

そっちは、もういいのか？」

離れた場所で、彼も世羅に付き合っていたはずである。

「少々、つかぬことをお聞きます…。」

二代目から見て、私の才能はいかほどでしょうか。」

「あん？」

今日はどいつもこいつも…才能がどうたらってよ……。
一体何があつた!？」

その言葉に、沸々と怒りを胸に還らせながら、問いただす彼女。

「…どう思われますか。」

だが彼は全く怯まずに、訊き返してくるばかりである。

「はつきり言つて、凡庸だよ。」

お前は基本に忠実すぎて、面白味がねえ。

でも、他人に術を教えるには、丁度いいんじゃないのか?。」

仕方無く、カジェットはそれに付き合つた。

「…仰る…とおりですね。」

……だからこそ、私は今まで…羨望という感情を抑えてきたつもりでした…。」

「？」

「…しかし…あんなものを見せられては……。今まで…自分が学んできたことは…いつたい…」

得体の知れない語句を呟きながら、徐々に彼の肩は左右に揺らいでいく。

「おい、気をしっかり保て！」

「お前らしくもねえ！！」

「…！！」

彼女に頬を張られ、そこでようやく目の焦点が戻るベルッサス。

「…今日はもう休め。」

「お前らはきつと、この大会の毒気にあてられてんだよ。明日になりゃ、少しは頭も冷えるだろ。」

カジェットは言い残すと、彼の代わりを務めるため、草むらを分けて進んでいく。

「……………」

その場に残された二人は、互いに何とも言えない表情で視線を交わし。

今宵、それ以上は何も語らなかった。

平たい坂を最奥まで登ると、そこは丘陵の頂上。

浅い洞窟の傍で、世羅が一人で佇んでいた。

「あれ…ベルツサスは？」

さつき、5分だけ休憩って言われたんだけど…」

まだ動き足りない。

そんな様子で、元気良く駆けて来る彼女。

「あいつ、ちょっと気分が悪くなつてな。

その代わり、あたしが見てやるから安心しろ。」

「…うん。」

「まずは、おおその技量が知りたい。

何でもいいから、術を見せてくれよ。」

彼女をなだめつつ、傍の大岩にどっかりと腰を下ろし、カジエツトは軽い気持ちで言った。

「ボク、二つしか使えないんだけど…」

「得意な方でいいさ。」

彼女は指示を続けながら、背を後ろに反らして伸びをする。

（ベルツサスの野郎、何を見たってんだ？

… たったの二つじゃ、今のパンリと大差ねえじゃねえか。）

月が、ちょうど真上に昇っていた。

その鈍く射す光に、目を細める。

「じゃあ、さっきと同じのでいくね。

フェル！
《源……》

「…ン！？」

だが、世羅の言葉が聞こえた瞬間、空気は一変する。

周囲に突如として発生する、大量の光の粒子。

さらに全身から力が抜けていく感覚に、カジエツトは思わず前傾姿勢で構えた。

一瞬のまばたきの後。

そこには、月よりも煌々と輝く、少女の姿があった。

「なァ、最強の源法術ってのは何だと思う？」

「…わからないっす、すみません。」

「じゃあ、最弱は？」

「それはもちろん…《源・衝》フェルドじゃないですか。」

「普通は、そう答えるだろうねエ。」

「違うんですか？」

「いやいや。」

当たってるよ。

だが、同時に間違ってもおる。」

「……ずるいつすよ。」

あたしが、複雑な問答が苦手と知ってるくせに……」

「悪イ、悪イ…。」

だがな、わしの師匠に会えば、誰もがきつと同じ結論に辿り着くさ。

《源・衝》フェルドこそが、最強の源法術だってな」

「　　どうしたの？」

懐かしい記憶の次に、目の前へ飛び込んできたのは、心配そうに見上げてくる世羅の顔だった。

浅かった洞窟は、さらに深さを増している。

粉塵は夜空に立ち昇り、先ほどの幻想的な光は既に無かった。

カジェットはゆっくりと立ち上がり、散らばっている真新しい石の欠片を拾い上げる。

「…自然に出来た穴じゃねえのか…
これを…『源・衝』^{フエル・ド}で……。」

そして、手にした石と洞窟を、交互に見ながら呻いた。

達人になればなるほど、己の限界を知る。

技や術の持つ限界もまた、然りだった。

ゆえに、目の前のこの光景は。

己に研鑽を積み重ねた者ほど、強い衝撃を受けかねない。

自分も『あの記憶』が無かったなら、卒倒していただろう。

「…その術…それで最大の出力か？」

彼女は、自分の中で早まる動悸を感じながら、問いかけた。

「もっと大きくする？」

世羅は応じ、大きく息を吸い込む。

「天に達する山の如き…」

真剣そのものの表情で、今までと違う声質で言葉を紡ぐ。

間違いなく、誰かに教え込まれた詠唱であった。

「…源の理を頂くアルド」セイングウェイの名において…」

「あ、悪イ。

もついいぜ。」

「えっ？」

確信に満ちた言葉で、制止を求める声。

世羅が驚いて腕を下ろすと、再び周囲に集まる源は消えていった。

「5分休憩な。」

「ええー!?」

そしてカジエットに告げられ、またも即刻で終わった修行に、世羅は不満の声を上げた。

「弟子が、師匠に対して出来る一番の『孝行』ってのは、何だと思
う?」

「…想像もできませんねえ。」

「それは、弟子に『教えてもらっ』ことさ。」

「そりゃ矛盾してますぜ、師匠。
技量が高い方が、教える側なんだから。」

「やあれマア。
相変わらず頭が悪いねエ、お前さんは。」

「…へえ、すみません。」

「腕が劣つていようがよオ、そこは心意気よ。

弟子から何かしら教わる気分つてのは、いいもんらしいぜ。
お前もぜひ、そうなってくれや。」

「はあ。」

「それで、私が自分の師匠に再会できたなら、ぜひとも教えたい術がある。

術というか……まあ、既存にある術の応用だ。
長年の修行の末、思いついたわけさ。」

「……。」

「でもなあ……わしは老いぼれだしな。

もし、それが生きているうちに叶わなかったら、代わりにあんなにお願いしたいんだが、いいかね？」

「……どういうことです？」

「代金は、この、カジェットの名でさア。」

「……よして下さいよ。

二代目を継ぐのは、あたしなんかより、コルススかベルッサスが
相応しいでしょう？」

「いいや、お前しか考えておらん。
それに……。」

そこで突然、師は鈍い咳をする。

「もう、時間が…無エんだよ。」

唇を覆う手の平。

そこから漏れた血の跡を見て、彼女は悟った。

まだずっと先の話だと、思い込もうとしていた事態が、すぐ目の前に迫っていたことを。

あの時。

カジエットはすぐに、その名を訊いた。

（…他の弟子には…ナイシヨにしておくれよ…。

何せ…あの御方は、大悪名で世間を通ってるからなア。）

その声は今でも、鮮明な音で聴こえてくる。

（……アルドだよ。

…アルド…セイングウェイ。）

初めてそれを、弟子に打ち明ける師の言葉は、存外に嬉しそうだ
ったのを憶えている。

（何も、本人でなくていい。
誰か…ゆかりのある者に…頼むわ…）

「わかってますって。
たぶん、ありゃ…そうでしょ…。」

さらなる願いの言葉の途中。
それを振り払うように、カジエットは思わず声に出していた。

「でも…どうすれば、いいんですか…？
あたしには…今もう一つ背負いこんでる問題が…」

その問いに。
師の亡霊は答えない。

カジエットは思い切り、夜空の月に向けて小石を蹴飛ばしてやっ
た。

第四章

第三話 『二つの聖十字』

了

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

4 - 4 「以心変心・前編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

「Coming in flight warship age」

The forth story

「Understand・First part」

早朝。

鳥よりも早く目を覚ましたベルツサスは、丘上の岸壁の湧き水で
口を潤し、天空より運ばれる涼風を吸い込んだ。

競技の最中ゆえ、五感はずっと緊張しているものの。
自然のあらゆるものが、それらを癒すように、一抹の清感をもたらしてくれる。

彼がそのような心地で居ると、ふと脇の茂みから出でる、カジエツトと世羅の姿。

両者とも、ひどく薄汚れた恰好だった。

「…二代目？」

……何をされているのですか…？」

「見てのとおりだ。」

呆氣にとられるベルツサスをよそに、砂に煤けた顔を湧き水で流しながら、歯を見せるカジエツト。

「世羅！」

ちよつと休憩したら、またすぐに続きだからな！！」

そして彼女の言葉に、世羅はただ無言で頷いて、離れていった。
目つきはしっかりとしているが、どうやら喋る気力までは無いらしい。

「…まさか、一晩中…彼女と…？
これは、どういふことですか。」

ベルッサスは、いつにも増して険しい形相で、カジェットに詰め寄った。

『どのような修行を施しているのか』などは、この際、問題ではない。

『なぜ、世羅に対してなのか』、それが彼には理解できなかった。

今の状況で、早急に対処せねばならないのは、パンリの方であつたはずである。

「いくらあの娘が気に入ったからといって、本題を忘れていただいでは困ります。

我々は、この競技に勝利すべく……」

「悪いけど、パンリは、お前が面倒見てやってくれ。今、そっちに構っている余裕が無えんだ。」

彼の言いたいことを見透かしたように、即答する彼女。

それは妙に悟った表情で。

視線は、世羅が消えた方向にずっと定まっていた。

「……いつもながら……勝手な御人ですね……。」

納得いかないながらも、承知しかけた矢先
言葉を抑めるベ
ルッサス。

カジェットが彼の凝視する方を追うと。
木々の間に、フードが揺れていた。

「パンリさん!!」

呼び止めるベルツサスの声を振り切って、その小さな影は森の奥深くへと消えていく。

「…あの様子だと、まずいところだけ聞かれちゃったようだな。」

「すぐに追いかけてませんと…!」

「……放っておけ。」

どうせ、遠くには行けねえさ。」

逸るベルツサスに、カジェットは渋い表情で呻いた。

「あいつには、考える時間が必要だから、ちょうどいい。
今のままじゃ……あたしが何を教えても吸収できねえ。」

昨夜、自分に向けられた、不審に溢れたパンリの瞳。

彼女の記憶には、それが焼きついて離れていなかった。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第四話 『以心変心・前編』

1

人間はいつだって、才能のある者に惹かれる。
今までの経験で、そう割り切れていたはずだった。

だが、身中に渦巻く、悔しさという感情。

これは到底、慣れることが出来るものではなかった。

痛む心を抱えて夢中で駆けるうち、丘の絶壁まで到り。

パンリは、その景色で我に返る。

すっかり我を忘れて飛び出してしまったが、ここは競技のコース範囲とはいえ、孤島とも言つべき切り立った高い丘なのだ。

選手村は崖下。

目に届く位置に見えるものの、今の自分にそこまで辿り着く手段は無い。

彼は後悔しながら、その場に座り込んだ。

初めは辺りの山肌を眺め、やがて空に流れる雲の動きを、何気なく視線でなぞっていた。

（弟子に『才能が無い』なんて前提で教える馬鹿が……どこにいるってんだよ！）

頭の中で、昨夜のカジエットの叱責が聴こえ、彼は自嘲した。

（見限ったくせに……。）

恨み言を募らせながら、膝を抱える。
すると、全身の節々が痛んだ。

昨夜は、岩の上で寝るのを余儀なくされたからだった。

「驚いたぜ。

合図で来てみれば…本当に単独行動とってやがるとはな…。」

「!？」

そこで頭上から掛けられる気安い声に、パンリは顔を上げる。

高い樹木。

枝葉の中で三白眼が座り、葉を揺らしていた。

「何を驚く？

ベルッサスの野郎だって、手下共を使い、こちらの動きを監視していただろ。

俺も同様のことをしていたまでよ。」

慌てて、逃げの態勢をとる相手に差し向け、コルススは続けた。

「……!!」

パンリは思わず、足を止めるパンリ。
相手の余裕と口ぶりは、既に周りを包囲していることを匂わせて

いた。

だとすれば、もはや逃げ切ることは不可能である。

「あ……あの……」

そこで一転、覚悟を決めて向き直る彼。

「私と……取り引き……していただけないでしょうか……」

その悲壮な声調に、コルススは表情を変えた。

障害物の無い、見晴らしの良い平地で、カジエットと世羅は互いに距離をとって向き合っていた。

「《駒・雨^{ダイ・リ}》。」

カジエットが摘まんで投げた小石に、青い膜がまとわり付き、銃弾のように変わって放たれる。

一方の世羅は、光球を身の回りに展開して、それを防いでいた。

「何ですか…？」

彼女の、あれは…」

両者の邪魔をしないよう離れて静観していたベルツサスも、訊か
ずにはいらなかった。

「《源・衝^{フェル・ド}》の中に、入ってるんだよ。」

カジエットの答えは、簡潔だった。

「…それは…私の理解を遥かに超えているのですが…。」
額を押さえ、顔をしかめる彼に。

「あたしも、同じ気分さ。」

彼女は軽く笑い飛ばし、足元の砂利から小石を五つほど握る。

「さて、さつきよりも多いぜ。
《駒・雨^{ダ・リス}》」

「……！」

そして空に振り撒かれ、今度は複数になって襲い掛かる小石の礫^{つぶて}

に、世羅は少し動揺した。

一つの弾が膝のあたりをかすめ、血を滲ませる。

「集中を切らすな!!」

お前は、そこに入っている限り安全なんだ。

球で自分を余すことなく包むようなイメージ!

《源・衝^{フェルト・ド}》は放つもんだってという固定観念を捨てろ!!」

「ん!!」

語気を強めるカジエツトに、世羅は少しもためらわず、全身を大の字にして素直に従う。

次いで、彼女を包む光は強まっていった。

「…どうなっているんです…。
こんな修行……あれ程の《源・衝^{フェルト・ド}》が作れるという前提が無ければ、考え付くわけがない……」

ベルツサスは更に訊ねた。

「詳しいことは…後で話すさ。

これで最後なんだ。

あいつ、『四極^{よんきよく}』は、一晩で完璧に覚えたからな……」

「『四極』を教えたのですか!?!」

「ああ、参るぜ。」

団内でも、あたししか上手にこなせねえ……自慢の技だったんだけどよ。」

そう言って、彼女は溜め息をつく。

だが不思議と、悔しそうな様子ではない。

（この短期間に……二人には、長年の師弟関係と同等の信頼がある……。）

両者の一途で健気、そして不乱な様子に。

ベルッサスも理解を超えて感心しようと努めていた。

だが、いくら豪気なカジエツトとはいえ、今の域に達するには、様々な苦労があったはずである。

それを、ただ気に入っただけからといって、赤の他人に、何ら惜しげもなく極意の数々を伝授できるだろうか。

世羅に対する彼女の思いは、おそらく、その才能だけに注がれているものではない。

それだけは、うかがい知ることが出来た。

「…取り引き……だと？」

敵を前にして、正気の沙汰とは思えぬパンリの提案に、コルススは訊き返した。

「はい。」

今度は据わった瞳に変えて、パンリは言う。

「私の持つリングを全部さし上げます。」

その代わり、選手村の付近まで連れて行っていただけませんか。」

「……たった一人で何をするつもりだ？」

「この競技を棄権します。」

首に提げたリングホルダーを外しながら、パンリは続けた。

「一人でも脱落すれば、カジェットさんの組は失格します。」

貴方にとつて、賞品の飛翔艦を狙うことが、それでかなり有利になると思いますが。」

「お前らの関係は…その程度なのか？」

こんな大会にまで一緒に参加してやがるもんだから…俺はてつきり……」

困惑した様子で呟くコルスス。

「私は、騒動に巻き込まれただけで…何も関係無いんです。
この競技だって…半ば強制的に参加させられて…」

「……やはりな。」

あの女、昔から強引なところがあってよ。
そのうえ、他人の気持ちを全く考えやがらねえ。」

静かに怒りの声を露にするパンリに、彼は納得したように肩をすくめて見せた。

そして両者は、ゆっくりと歩み寄る。

「だから、お前さんがただの被害者だってのは…信用できる。
こっちこそ、この間は悪かったな。」

あの女の前だと、ついつい俺も頭に血が昇っちゃまうんだ。」

「？」

パンリは、少し戸惑った。

外見に似ず、彼の柔らかい物腰は、弟のベルッサスを彷彿とさせたからである。

「俺だって、本意じゃねえ。」

同じ組織の中の『いがみ合い』なんてよ。

こっやって、他人に……迷惑かけるだけだからな。」

整然とした口調で、続けられる言葉。

その最後のフレーズは、パンリの心を傾けるのには充分だった。

「うちの『いざこざ』について、聞いているか？」

「はい、一応……。」

「俺たちの後継者問題は、まだ終わってねえのさ。

組全体に、あの女に対しての不信感が残っている限りはな。

……弟の奴も、ある意味じゃあ被害者なんだよ。

あいつは真面目で、頭領に従うことに忠実なゆえに盲目になってんだ。」

歯噛みしながら、彼は言葉を洩らす。

「出来れば……全部……平和的に解決していただきたいですけど……」

「お前さん、いい奴だな。

おまけに……胆も据わってやがる。

この俺と面と向かって話せる男なんざ、今までいなかったぜ。」

コルススは、そこで初めて笑みを見せた。

なかなか、人当たりの良い表情だった。

「では……早速、選手村まで……お願い出来ますか？」

リングホルダーを渡そうと、手を差し出すパンリ。

「ああ、そうだな…。」

あの村までなら、俺の源法術でひとつとびだぜ。」

コルススも快く、それに応じた。

確かに、彼を初めて見たあの時。

彼は極度に興奮しているように見えた。

だがその実は、人の上に立つ者だけあって、意外と思慮深い人間なのかもしれない。

（ 弟子に『才能が無い』なんて前提で教える馬鹿が……どこにいるってんだよ！ ）

そこで再び、頭の中にカジェットの声が鳴り響く。

彼女の方はどうだろうか。

そもそも、出会って数日。

仲間と呼べるのかさえ疑わしいのに、一人で勝手に師匠のつもりでいた。

気持ちの空回りも良いところだ。

こちらは、色々と辛い仕打ちを受け。
体と心が傷ついただけで、何の得も無い数日間だった……

「でも、やっぱり面倒だなア。」

コルススの手は、パンリの持つリングホルダーをすり抜けて。
強く握られた拳が、彼の腹にめり込んでいた。

「……！」

「…え……！！！」

すぐにその場に崩れ落ち、胃液を吐き散らしながら、のた打ち回るパンリ。

「…『取り引き』だア？」

そんなものが成立すると本気で思ってたのか！？」

頭の上から響くのは、野蛮な高笑いだった。

「いいか？」

そっけつなのはな、お互いが対等の立場で初めて成立するんだ。
こんな風に、強者と弱者がはつきりしてる場合……」

「…あぐー！！！」

さらに横腹にめり込む蹴りに、少年の肋骨は悲鳴を上げる。

「弱者は搾取されるだけの運命なんだよ！！
バアカ！！」

地を転げるパンリの目に、自分のリングホルダーを握っているコルススの姿が映った。

「……た…たすけて…」

反抗する気は、微塵も湧かなかった。
ただ震えて、哀願するばかりだった。

「何だそりゃ…見下げた野郎だな…。」

その醜態が、更に相手の機嫌を損ねたのは明らかだった。

右手を背後に構え。

低く態勢をとるコルスス。

その行動に、パンリは、ただひたすらに嫌な予感がした。
本能的に危機を脱するため、背を向ける。

「ハイ・ソン
《風・走》」

コルススが唱えた直後。

藪の奥から、鳥のつがいが、勢い良く空へと舞い上がる。

一瞬、それに気を取られるパンリ。

初めは、動物の取るに足らない行動だと思った。

次の瞬間、視界が揺れて。

パンリは勢い良く、地面に膝をついてしまった。

背後から足音が迫る。

黄色く発光する手をかざし、悪どい笑みを浮かべるコルススの姿が迫っている。

「……!？」

だがパンリは、どうしても立ち上がることができなかった。

真っ直ぐに、立てない。

左足に違和感がある。

「……?」

見れば、その足首は、皮に付いているだけで、今にも取れそうになっていた。

鋭利な刃物で切られたハムのような、真紅の肉を見せる断面。
一瞬にして、全身の血気が引いていく。

「……う……うそだ……！
こんなの……」

「嘘じゃないねえ。」

狼狽しているパンリの反応を、コルススは心底面白おかしそうに眺めていた。

「あの時、言つたろ。
てめえは『八つ裂きにして、ぶち殺してやる』ってよ。」

さらに手の平を向ける彼。

「……うああああ……！」

パンリは遂には、地を這っていた。

「おい、待てよ。」

……まだ、『二つ裂き』なんだからよ。」

コルススが追う態勢を見せた刹那、その小さな標的は目の前から忽然と消える。

真下には。

植物が視界を覆う、深い窪みがあった。

「……かあ、面倒なところに落ちやがったな。」

彼は足元を望み、群生している深緑を軽く一瞥しただけで、踵を返す。

そこは、選手村とは真逆の位置。

何の憂いも無い。

「……頭。」

このまま、二代目を攻めますか？」

そこでようやく、周囲に潜んでいた手下達は姿を見せ、そのうちの一人が訊いてくる。

「待ちな。まずは、あの女の手下からだ。」

外堀を埋めてから、ゆっくりといたぶってやるうじゃねえか……。この俺を小馬鹿にした後悔を、じっくりさせてやる。

はははは!!」

身を擦じらせて悶えるコルススに。

手下達も怖気を感じつつ、その哄笑に順じていた。

2

目を覚ますと。

木々で出来た円錐。えんすい

自分は、その底で寝そべっていた。

頂点へ向けて伸びる幹。

先に覗く、僅かな青空。

戒は半身を起こし。

土に座ったまま、改めて回りの景色を眺めてみる。

早朝の森は一種の爽やかささえ感じるほど清々しく、昨夜の陰鬱とした気配は無い。

そして近くの木に吊るされたハンモックには、自分と同じく呆けた顔を向けている少女がいた。

「…見直したわ。」

交代せずに、ずっと見張っててくれたなんて…」

信じたくない気持ちからか、願望を口にしつつ、そこから降りて来る彼女。

確か、名をレンという。

寝惚け半分の戒にしてみれば、それが精一杯の認識だった。

「まあ…こう見えても…俺様は、けっこう責任感が強い方だからな…。」

彼女の目から、あからさまに顔を背けつつ、呟く彼。

「でも徹夜した割には、あんまり眠くなさそうね？」

「……ある程度まで達してしまえば、逆に眠気が無くなるもんだ。」

目やにの付いた瞼を、しばしばと開閉させる。

そんな態度に、レンは確信を抱いて詰め寄った。

「絶対、さっきまで寝てたわよね…あんた。
ここが何処だか解ってる？」

血に飢えた凶獣や、野蛮な連中がひしめいている森なのよ！？
それがよくもまあ…ぬけぬけと…！」

彼女は一通り、わめき散らし。

「最低！！」

最後に雷を落とした直後、はっと気がついて立ち止まった。

「エリスは……？」

「リスがどうしたって？」

「ちょっと……いい加減、目覚めなさいよ！
何でいないの…？」

「…まさか…誰かに…！？」

途端にうるたえだす彼女。

さらに、その背後の茂みから、不意に何かの気配が伝わる。

「ひッ……！」

レンは先程の威勢を捨てて、思わず戒の背で身を縮めた。

昨日、この付近で大魚に襲われた恐怖感は、いまだに心を蝕んでいる。

「い、行け！

お前が先頭に立って戦え！！
俺様は丸腰なんだからな！」

しかし頼みの戒も同様で、さらに彼女の背後へと回り込んで叫ぶ有様だった。

「なに言ってるの！

あんただって、お父さんと同じ武器を持ってるくせに！！」

「あんなに器用に扱えるか！」

「だったら男らしく、せめておとり囲くくらいになってよ！！
その間に私が逃げるから！！」

不毛なやりとりをしているうち。

茂みを割って、鼻先を見せる二匹の大きな獣。

いよいよ恐怖が極限まで達したレンが、祈りの言葉と共に両目を閉じて槍を構え、突撃の態勢になった時。

「や、待て……！！
あれは……」

戒は、慌てて彼女の首根を押さえつけた。
茂みを掻き分けて現れたそれは、既に討ち果たした凶獣を肩に担いだザナナだったのである。

「…何してるの？
二人とも。」

しかも、その隣にはエリスまでもいる。
途端、腰砕けになる二人。

「…お、驚かさないでよ…！
なんで、二人が一緒に帰ってくるわけ？」

「昨日から何も飲んでないでしょ？
だから、この辺りで果物を探してたの。
ザナナさんとは…偶然、そこで。」

エリスは、水分が多く含まれる果実を両手に抱えていた。

「まさか……こいつの代わりに、あなたが一晩中…見張ってたの？」
レンは感心し、戒のブーツを踏みつけながら言う。

「ううん。
昨日は私も疲れてたから…」。

起きたら、もう朝だったわ。

……私達ついてるみたいね。」

だが、舌を出して答える彼女。

「おいおい……ヘタすりゃ、皆殺しの目に遭っていたんだぞ。」

その様子に呆れつつ、戒は自分の首を切る素振りと共に、大きな溜め息をつく。

「たえそうになったとしても、あんたの場合は自業自得ですよ。……ところで……お父さんは……？」

平静さを取り戻したレンが、ザナナに訊いた。

「歩くペースが、あれではな。
おかげで、到着が遅れてしまった。」

豹頭の呟きは、複雑な心境を内包していた。
一斉にその視線の先へと向く、三人の目。

「ああ……あれは、お父さんの悪い癖だわ……」

レンは、すぐに顔をしかめて返した。

両の後足を縛った獲物を背負い。

古びた本を片手に、草根の束をもう片方の手。

象のように鈍い足取りで歩いて来る、そんな父 ウベの姿。

「や…この辺りは、生態系が独特でね…」

稀少な薬草が多いものだから……… ついつい採集に熱が入ってしま
つて…。」

彼は辿り着いてから、ようやく周囲からの非難の空気に気付き、
すぐに弁解した。

「ふざけてんのか？」

そこへ、苛ついた口調で詰め寄る戒。

「他の連中と競ってるんだぞ。」

チェックポイントで説明を聞いたたる？」

「選手村に先着10組までは、ボーナスが貰えるというあれか。
たぶん、間に合わないと思うがな…。」

「間に合わないかどうかは、てめえが判断することじゃねえ。」

「…うつむ。」

確かに、これは私に非があるようだな。」

「別に謝らなくてもいいのよ、お父さん。」

なにせ、こいつだって、ついさっきまで寝てたんだし。
まったく…言われたとおりの仕事もこなせず、口ばかりは達者な
んだから…」

二人の間に割って、レンが告げ口をする。

「む…そうなのか…？」

白い目で返すウベに。

急遽、鼻歌混じりで視線を逸らす戒。

「ふふ……。」

彼等のやりとりに、エリスが小さく笑った。

「では、みんな。

少し休んでから選手村に向かうでしょうか。

戒の言うとおり、急ぐに越したことは無いが……さすがに足がパ
ンパンだ。」

そこでウベは、渋い表情で自身の腿を叩きながら提案する。

「あの野郎……妙な真似、しなかったか？」

自分そっちのけで場を仕切り出す彼、それに自然と従う娘二人を
苦々しい顔で見据えながら、戒はザナナに近付いて囁いた。

「腕は、なかなかいい。」

豹頭は簡潔に述べ、傍の岩に座る。

「一匹は、あの男が自分の手で獲った。

ザナナのやり方を見ただけで、コツを掴んだようだ。
それに……」

「？」

「誰かみたいに、うるさく騒がないのがいい。」

「ああ、そうかよ。」

前日の狩りで浴びせた文句を、違った形で返してきた彼の調子に、
戒は苦笑した。

一方。

世羅の修行は、途中で終わることを余儀なくさせられてしまった。

その後、やはりパンリのが気になったベルツサスが、周辺の
哨戒を行ったところ

「…付近の様子が妙です。」

「どうやら、我々以外の人間がいるようで……足跡が所々に…」

それが焦りの表情で戻って来たのである。

「折れた枝も沢山落ちています。」

「もしかしたら、コルスス達がこの辺りに来ている可能性も…」

「…ここまでだな。」

世羅、お前なら後は自力で何とか出来るだろ。」

カジエットの対応は素早かった。

その一言により、世羅を取り巻いていた源法術の光が、一瞬で飛散する。

「悪かった。」

無理を言って、覚えてもらってよ。」

いたわるようにして、その両肩を抱くカジエット。

「…ううん。」

ボクも……すごくためになったし。」

「そうか。」

じゃあ約束どおり、いつか機会があったら伝えてくれよな。

…カジエット「セイルクロウの名前と共に。」

(…?)

ベルツサスは二人の会話に違和感を覚え、動きを止めた。

まるで、これらの修行は、カジェット自らが願い出たように聞ける。

逆だとばかり思い込んでいた彼は、認識を改める必要があることに気付いた。

「おい、パンリを捜しに行くんだろ？」

「…すぐに参ります…！」

そこへ当人から呼びかけられ、我に返る彼。

彼女が何を隠し、どんな密約らしきものを交わしたのか。それは、さらに見当がつかなくなってしまった。

だが今はパンリの搜索が最優先である。

「世羅は、昨日メシ食ったところで休んでろ。敵と遭遇しても、絶対に一人で戦うなよ。」

「…うん。」

その言いつけに頷いた彼女は、疲れた足取りで坂を下りて行く。

カジェットとベルツサスは、それを見送った後、空へ向けて飛び立つのであった。

世羅は途中、湧き水が飲める場所へ寄り道をした。

岩壁から染み出した冷たい水で、汚れた顔と手足をすすぐ。だが、続けてそれを口に含んだ時、彼女は思わず吐き出してしまった。

「……？」

少し鉄っぽい、変わった風味。

良く見れば、水は微妙に赤く染まっている。

「……………！」

世羅は水が滴っている天然の壁を見上げ、目を凝らし、息を飲んだ。

その頂に、群生した植物に紛れて細い手が伸びている。

彼女はすぐさま脇道を駆け登り、それが見えた箇所裏手へ回ると、嫌な予感的中していた。

「……パンリ……？」

窪みの奥で、うつ伏せに倒れているロープ姿の人物。

一目でその服装に見覚えがあった世羅は、何も考えずに斜面を滑降する。

「パンリ！」

「ねえ！！！」

再三に呼びかけても、返事は無い。

唯一、外から見える場所まで、必死に這って進んだのだろう。彼のロープの腹は土で汚れており、浅い水面に頬を浸けている顔は蒼白だった。

そして近づくにつれ、世羅はさらにその惨状を目にすることとなる。

「……！！！」

まさに皮一枚で繋がっているにすぎない、彼の足首。

「……た、たいへんだ……！！！」

口走りながら、その場で右往左往する世羅。

彼女は、カジェットらと呼ぶよりも先に、パンリを救わねばならないと感じた。

まず自分の長い手袋を脱いで、それで患部をきつく縛る。
出血させたままよりは、いくらかマシになるだろうと思いつた。

次に、辺りに落ちている固い枝を添えて、切れた足首を合わせて固定。

その上からさらに、自身の上着を被せて巻いた。

これは誰に教わったわけでもなく、彼女なりの勘での処置だった。

（あとは…ここから出なきゃ…）

パンリの体温の低さが、彼を抱えた左腕から伝わる。
もはや、一刻の猶予も無い。

だが、そんなことを考えていると突然、二人分の重量に耐え切れずに崩れだす足場。

「…い…ぎ…っ…!？」

滑り落ちないよう、咄嗟に蔓^{つる}を握った右手が痛む。
よく見れば、その蔓は棘^{いばら}の生えた茨であった。

半分宙に浮いた態勢のまま、真下を見れば。
そこは自分が水を飲んでいただけ場所だが、相当の高さがある。

落ちてしまえば、自分だけならともかく、重傷のパンリはただでは済まない。

(…戒だったら……！)

世羅は身動きとれないまま、左腕で抱いた彼の足を見る。

(…戒だったら……助けられるんだ……！！)

その一心で。

意を決した世羅は、自らの膝を茨で巻いて、空かせた右手を空高く構えた。

それは、何気ない会話の最中に起こった。

「…なに？」

急に恐い顔して…」

正面、戒の引き締まった表情にレンが驚く。

その問いに答えずに、北西の方角を凝視したまま、傍で座していたザナナの肩を突く彼。

豹頭が厳しい目に変えて見上げると、遠くの高い木々の間に再び光が煌いた。

「……………！！」

そして次の瞬間、戒は無言で脇を駆け抜けていた。
同時、ザナナも槍を口にくわえ、高い木々の間を飛び移って行く。

「え？ えっ？」

あまりに唐突な彼等の挙動に、レンとエリスは困惑する。

「あ、あいつら、逃げる気よ！！
ずっとチャンスをつかがってたんだわ…」

「いや…………それなら、これを置いて行くのはおかしい。」

中でも怒り心頭のレンに、ウベが地に転がったままの獲物を示す。

「あの様子からして…彼等の仲間に、何かあったんじゃないか？」

彼は冷静に、駆け抜けて去った二人の様子が、あまりにも無防備だったことを気にしていた。

他の選手がどこに潜伏しているか判らないこの地では、危険極ま

りない行為である。

「お、追いかけてあげないと…」

エリスは自分と同様、そのことに気付いた様子だった。
そして残された三匹の獲物は、自分ならば運べない重量ではない。

「…わかった。

二人とも、頑張っついてくるんだ。」

追跡の態勢に変わる父の姿に、二人の娘はやはり迷わずに従った。

そこは、大会前半の終着である選手村に程近い場所。

小高い茂みから立ち上がり、大きく手を振って示す世羅の姿が、
すぐに確認できた。

「世羅ッ！！」

それを見た戒は、すぐに走りを加速させて彼女と合流する。
一呼吸遅れて、頭上の木からザナナも着地した。

「どうしたんだ……その恰好は……」

下着のシャツ一枚になっている世羅に、まず驚く二人。

「怪我……してるわけじゃ……ねえのか？」

彼女の肌は、所々が赤く腫れているものの、かすり傷に見えた。

戒が安堵した直後、奥で横たわっているのはパンリを目に留める。
そこには、カジェットとベルツサスの姿もあった。

彼女たちもまた、源法術による合図に気付く。

窮地の二人を救出した後、世羅に言われるまま丘陵を降りてきたのである。

「……た、大変なんだ。

こんなことになっちまって……！

お前なら助けられるって……世羅が言うから……」

カジェットは、ひどく取り乱した様子で戒に駆け寄った。

「それに……こいつ……何か耳まで変な形に……」

「うるたえるな、バカ！

それは元からだ……！」

パンリの獣のような耳を指す彼女を、戒は声を荒げて突き放す。

そこへウベも、息を切らせる二人の娘と共に到着した。

（…彼女たちが、戒に獲物を頼んだ組か？
見たところ…親交があるようだが……）

カジエットらの様子を観察しながら、背負ってきた三匹の獲物を降ろす彼。

「おい…誰だ。」

この処置をした奴は。」

一方。

パンリの容態を確かめている戒が早口で訊いた。

「もしかして…ダメだった…？」

両手を後ろに組んで、不安そうに肩を揺らして答える世羅。

「いや……でかした。
これなら助かるかもしれねえ。」

そこで戒に乱暴に頭を撫で回され、一転して彼女は嬉しそうな表情に変えた。

(…………なに……？
あの子の肌……)

その様子を、遠巻きに見詰めるレン。

彼女の左腕に浮かんでいる黒い紋様が、不気味に思えてならない。

だが脇のエリスは、それよりも二人の関係が気になっているようだった。

そんな中、戒は治療にとりかかるため、パンリの足に結ばれた服をほどこき始める。

「……うわ……………！」

戒の背中越しに見える惨状に、レンは思わず顔をしかめた。

「これは……一刻も早く、選手村に連れて行った方が良いかもしれんぞ……。」

ウベも薬草の鞆に手を半ばまで入れていたが、途中で言を呈する。

少々医学の知識のある彼には解っていた。

これほど重傷な者に対して出来ることは、あまり残っていない。

「静かにしてろ……………気が散る。」

戒は両袖を捲くり、瞑想するように目を閉じる。

その張り詰めた空気に、いつしか誰もが一言も発さずになり、固唾を飲んで見守るようになっていた。

（…俺だって、こんな状態の人間を治したことなんてねえんだ…）

可能性のことなど、考えたくもなかった。

今はただ、自分が授かった力を信じるしかない。

（幸い…それほど時間も経ってねえし、失った部位もねえ…。
何とか…繋がってくれ…！！）

この能力を使う時は、いつも同じような気持ちになる。

普段は、その『さだめ』に振り回されているかもしれない不安を、
感じ。

都合の良いときだけ、頼り。

最終的に、特別な力を生まれ持ってきたことを、感謝する。

この巡りは。

自分が死ぬまで、永久に終わらないのではないかとさえ思う。

戒はそんな恐れを抱いた細い心で、同じように彼の細い足を握り

こんでいた。

右手の中指に浮かぶ、青い光。

それは螺旋を描き、さらに先、二の腕まで到達する。

世羅とザナナは、戒の天命の輪の輝きが、そのようになるのを見たことがなかった。

勿論、戒自身は目を閉じているため、その異変には気付いていない。

「
エア・ファンタジスタ
……天命人……！」

無事、見事に修復されていく少年の足。

目の前の奇跡に、ウベは驚嘆の言葉を洩らしていた。

「……どういうことだ……？
それで……パンリは……治ったのか……？」

一方のカジエットをはじめ、その他の既知でない者は、呆然とするばかりである。

だが事の真偽を確かめるために、一旦は距離をとって見詰めていた彼女は、思わず駆け寄ってしまった。

「近寄るんじゃないっ！！」

そこで待ち受けていたのは、凄まじい剣幕でそれを拒絶する戒だった。

「…百万年、遅えんだよ。

てめえの役目は、こうなる前に助けることだろ。

腕輪の番号が若いから、相当のキレ者かと思いきや……とんだ食わせ者だったようだな。」

「だからって、ずっと目を離さずにいろって？
いくら師弟とはいえ…」

カジエットは口を尖らせて、弁明しようとした。

「パンリが垂耳だってことさえ、知らなかったんだろ？
それは、全く信頼されてねえってことじゃねえのか。」

だが、間を空けずに捲くし立てる戒。

「その程度で何が師匠だ……笑わせるな。
失せる……！」

「……………」

彼の怒号に対し、カジエットは返す手段を持たなかった。

ベルッサスが伏せ目がちに、そんな彼女へ寄り添うようにする。

「……クソつたれめ……」

……とりあえずは、これで大丈夫だろうがよ……」

戒は奇妙な重さを足首に感じながら、立ち上がる。

じわじわ痺れるような感覚は、それがこれから激痛に変わることを示唆しているかのようなだった。

それを承知している世羅が彼の腰を支え、ザナナが肩を貸す。

「……まだまだ、油断は出来ねえぞ……」

以前も……それで痛い目を見てるからな……」

疲弊した顔で、パンリを抱いて進む戒。

「大丈夫だ、猪族の長のように、ならん。」

「だと……いいんだがな。」

ザナナの慰めに、彼は軽口で答えながら足を引き摺っていった。

「……お前の怪我は平気なのか？」

そして、前を見据えたまま世羅に訊く。

「え？」

彼女は、そこでようやく自分の身体を見回した。
小さな棘の欠片が、まだ手と膝に刺さっている。

「これくらい平気。」

でも……カジェットのこと…怒らないで。」

「あ？」

だが、それを気にも留めない気丈な様子と言葉に、戒は面食らった。

「あんな奴にお前を預けた俺様を、恨んでくれたっていいんだぜ？」

「……それは……」

世羅は精一杯、気の利いた言葉を探す。

だが対する戒は、その考えが纏まるのを待たずに、歩調を早めて行ってしまった。

ウベは最後尾から、懷に忍ばせた聖十字を握り締めていた。

自分を含めた、この集団の所有する腕輪の総数は10を超える。

全てを手にすることが出来れば、大会の上位入賞という目的も、より現実的なものとなるう。

おそらく、二度と訪れないであろう好機である。

これを逃すのは、あまりにも惜しいと感じていた。

「……お父さん？」

振り向いたレンが、集団から少し遅れ始めた彼へと問いかける。

「ああ……何でも……ない。」

その声で正気を取り戻し、ウベは流石に分の悪い賭けだと思い直した。

「……せつかくの獲物を置いていくなんて、どうかしているぞ。」

そこから早足で先頭まで追いつき、まずは戒に声をかける。

「仲間のことで焦る気持ちもわかるが……」

「もしも私達が追わなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「……その時は、その時だ。」

無言の戒に代わり、脇のザナナがきつぱりと言い放った。

「はは…。

まあ、狩りを手伝ってくれた、せめてもの御礼だ。
君たちの分も、村まで運ばせてくれ。」

次に、ウベは後ろの面々を順繰りに見据えながら言った。

すっかり消沈しているが、まだ一行の後をついてくる長身の女性
と、その付き人。

外見だけでは、彼女らの実力は量れない。

どのような反撃が来るのか。

それが完全に予想できない限り、奇襲で成功を収めるのは難しい
だろう。

ウベは、やはり今は静観することが正解なのだと、自分を鎮めた。

そして気になるのは、世羅と呼ばれた少女。

娘くらいの年恰好だが、腕に浮かぶ渦巻くような黒い紋様が印象
的である。

そんな彼女がさほど気に留めていない擦り傷を、ウベは注視して
いた。

もしかしたら、彼女は今後、自分にとって有益をもたらす存在に

なるかもしれない。

当面、彼はこの不義の気配を抑えるのに、全力を注ぐことを決めた。

3

選手村へと向かう途中。

おそらく『獲物を狩る』ことよりも、『まちぶせ』を選択した組が、諸所に潜伏しているのだろう。

道端の深い茂みの奥からは、常に鋭い視線が向けられていた。

だが皮肉にも、ここで、事前に囁かれていた『数の有利』が顕著に表れることとなった。

今の戒らは、三組が同行した大所帯。

制限時間にもまだ余裕があるこの局面で、総勢9名もの人間を敵

に回すような愚か者などいなかった。

ここは早まらずに、もっと好ましい標的を待てば良い。

誰もが様にそう考え、目の前を通り過ぎて行く集団を、ただ視線で追うばかりである。

戒らは無益な争いに巻き込まれることもなく、やがて二対の大きな石像に出迎えられる。

そこが選手村の入り口だった。

村の中を少し覗けば。

乾燥した葦^{あし}で造られた原始的な家屋が建っており、南国の古い農村をモチーフにしたような印象がうかがえる。

石像の間を抜けると、すぐに少し開けた土地があり、そこで選手達に対するチェックが行われているようだった。

ところが、大会開始時とは違い、人の列が出来ていることもなく、今は閑散としている状態である。

肩透かしを食らったように、全員は暫くそこで立ち尽くしていた。

「…お、お疲れ様です。」

どうぞ、こちらへ…」

そこへ、設置された長机から、慣れない様子で声をかけてくる眼鏡の女性。

中王都市側の唯一の代表として任務を遂行している
議員秘書のウェイールネントである。

大会は当初、ギルド主導の様相を呈していたが、前半のチェックポイントの説明以来、いけ好かない魔導人形は詰め所に籠っている。今では現場の指揮は元より、大会の成功は自分の腕にかかっているのだと、彼女は勝手に錯覚していた。

「では、本人確認の手形を照合させていただきます…。
その前に、課題のチェックを…」

先頭の戒の仏頂面に恐れを抱きながら、遠慮がちに続ける彼女。

続いて、脇に控えた物言わぬ二体のクマの着ぐるみがウベを誘導し、彼が担いでいた凶獣を確認する。

全員はそこでようやく、晴れて、休息の空気へと身を委ねられる心地になった。

「…その方は、どこか怪我でも？
棄権なさるのでしたら、ここで手続きできますが…」

その合間、ウェイは彼に抱かれて眠るパンリに目をつけて訊いた。

今後、目を覚ましたとしても、戦える心境ではないだろう。
だが、せっかく傷が癒えたというのに、ここですぐに棄権を決めるのは惜しいと戒は思った。

「あいつらが、仲間だ。」

彼は渋々、カジエツトの方へと親指を向けて示す。
その合図をもって、彼女らも、どこかばつが悪そうに前に出て、
照合に加わった。

「…三組とも揃って、皆様ご本人で間違いないようですね。
それでは改めて……前半戦突破おめでとうございます！
ええっと……では……この選手村の説明を……」

戒の顔色をいちいち伺いながら、ウェイは半笑いで切り出す。

「…してもよろしいですね？」

「手短にな。」

終始、苛ついた調子で戒は返した。

「…こちらは普段、中王都市の高級リゾート地として、上流階級の方々のために使われております。」

ただし、現在は当大会の貸し切りにつき、宿泊施設は勿論、飲食

や雑貨の購入にも従来通り、リングのポイントをそのまま使っただけです。

あらかじめ申し上げている通り、完全に中立地帯となっておりますので、戦闘行為は一切禁止です。」

彼女は手にした書類の文面通り、読み上げていく。

「なお、これ以上先に進む自信の無い方は、ここでの棄権も可能です。」

そばの湖畔にて停泊中の大型船でゴール地点までお送りいたしますので、お気軽に係の者にお申し付けいただければ……」

「ああ、わかった。」

「二日後の早朝より、レース後半の開始となります。それまで、ごゆっくりと……」

「てめえに言われるまでもねえ。」

長い講釈に、いよいよ辛抱できなくなった戒が去ろうとする。

「あ、あの……！」

あと……すみません。」

「まだ何か用か!?」

だが、さらに付け加えられようとする背後からの言葉に対し、声を荒げる彼。

「い、いえ…用というか。」

これ…ボーナスリングなんですけどお…」

「……あ？」

小さく身を縮めた彼女から差し出されたリングに近付き、戒は茫然とそれを受け取った。

続けて、同様の物がカジエットとウベの手にも渡る。

「やったー！」

これで入賞に近付いたわ!!」

「…はて、我々で何番目なのかな？」

はしゃぐレンをよそに、ウベは訊ねた。

「ちょうど10番目…これで最後ですね。」

「ふむ……そうですか。」

手元の空箱をひっくり返しながらのウェイの答えに、小首を傾げる彼。

他の組は予想以上に、もたついている。

これが運なのか、偶然なのか、すぐには判断できなかった。

「では…約束どおり、協力体制もここまでかな。
そろそろ、別行動と……」

かくて一行は先へと進み、ウベが戒に別れを告げようとした矢先だった。

「キヤー!!」

エリスの悲鳴に全員が振り返ると。
村内の家屋の影から、腰巻一丁の怪しげな大偉丈夫がこちらの様子をつかがっている。

「やはり、おぬしらか。
随分と遅かったのう。」

長い顎鬚あごひげをなびかせながら、悠然と歩み寄り。

「ぐ……フンドシ野郎……やはり既に到着していたか……」

気安く声をかけてくる彼の様子を睨みながら、呻く戒。

「…前半の課題は、やはり、てめえ一人の力でクリアしたわけだ。」
「いやいや、ここまで全力で走ってもらったアリアネとシュナにも、」

苦労かけたわい。

おかげで、昨日の夜のうちにここで合流できてのう。
わしらは一等賞じゃ、がはは。」

二人は会話を交わしながら、皆に先んじて道を進む。

「そして、これが戦利品じゃ。」

タンダニスが背を向けると、10を余裕で越える腕輪が、腰に巻いた布　それも尻の部分に通されていた。

（こんな野郎に倒された連中は……何とも……哀れというか……同情するぜ……）

それを凝視しながら、戒は顔をしかめる。

「ところで……どうして、この人は半裸なのかね。」

一方のウベは、後ろで娘達の目を塞ぎながら、猜疑に満ちた眼差しで問い正した。

「なあに。」

朝の運動がてら、湖を軽く泳いでおったんじゃ。
調子こいておったら、首都までついてしもって焦ったわい。
魚、食つか？」

そんな視線など全く気にしない様子で、タンダニスは笑顔で握った生魚を差し出す。

だが当然、ウベはそれを受け取らず、その怪しげな大男を眉間にしわを寄せて警戒していた。

「ところで、わしらは既に泊まるところを決めとつてのう。ちよつと遊びに来んか？」

「そんな余裕はねえ。」

戒は即答した。

だが、タンダニスは含みをもった笑みで、さらに近寄つて来る。

「まあ、そう言わずにの。
シユナに、おぬしらを見かけたら連れてくるように言われていてな。」

「…あいつに？」

「この道をまっすぐじゃ。
ほれほれ。」

彼の招きに、彼らは強引に従わされる形となり、綺麗な砂利の敷かれた大通りを歩いて行く。

途中。

大きな石像が再び、村の広場に鎮座しているのを見かけ、ウベは不意に立ち止まり、それを感慨深げに見詰めていた。

「先代の王じゃな。」

そこへ、タンダニスが声をかける。

彼自身も瞼を半分沈めて、遠く、像の全体を眺めているように見えた。

「ええ、リエディン…フィラサンスカ三世……いや、四世ですかね。」

「うむ。」

おぬし、何か因縁でも？」

「いえ、まさか。」

ウベは修道着の襟を直しながら答えると、先に行く集団を追いかけて行った。

タンダニスに言われたまま、歩くこと数分の後。

「じ、これは……！」

案内された建物を前に、戒が腰を抜かしながら言葉を洩らす。

見渡す限りの芝生の敷地にそびえ立つ、恐ろしく巨大な豪邸。

その大理石の白い壁には、沢山の窓。

部屋が何室もあるのだろう、全てにベランダも設置されている。

さらに、明らかに無用と思われる広大な中庭は、湖畔が見渡せるほど景観が良く、噴水やプールも備えていた。

「…いくらなんでも、奮発しすぎだろ…」

お前ら、どれだけポイントを稼いでやがるんだ。」

「約20組分じゃからのう。」

まあ、ちよこつと揉んでやった程度じゃが。」

首と肩を鳴らしながら、にかりと笑うタンダニス。

「戒なの!？」

そこで、ちょうど二階のベランダから景色を眺めていたシュナが、上から声をかけてくる。

「…ちゃんと、生きてたのね。」

「当たり前だ。」

「ちょっと待ってて、いま降りるから。」

少し高揚した声調で彼女は告げて。

階段を降りる大きな物音の後、両開きの玄関扉が勢いよく開かれる。

「……どうしたの!？」

彼女は、まず全員を見回して、パンリの様子と世羅の姿を見てから驚きの声を上げた。

さらに、カジェットらの存在は、ある程度は予想していたが、そこへ加えて見知らぬ者達もいるのである。

「話は後だ。」

とにかく、俺様たちも宿を決めてくる。」

「あんた達もここに泊まりなさいよ。」

そのために、こんな大きな宿を選んだんだから。」

「……いくら取るつもりだ?」

彼女の軽い口調に対し、訝しげな眼差しを送る戒。

「馬鹿ね。」

そんなセコい真似しないわよ。
ねえ、陛下？」

「うむ。」

シュナが提案してくれた通り、大人数の方が楽しくて良いと思っ
ての。

なかなか、粋なはからいじゃろ？」

タンダニスは鬚を撫でながら、笑顔で返す。

「…随分と優しくなつたもんだな。」

戒は、さらに得意げな彼女の横顔を睨みつけて言った。

「失礼ね。」

私は、昔から優しいわよ。」

「…そうか？」

……じゃあ、遠慮なく上がせてもらっぜ。」

「？」

その彼の言葉に、シュナは面食らった。

「あんだこそ……今日は随分と素直じゃない。」

「悪いが、意地なんざ張ってる余裕は無えんだよ。」

戒はそこで初めて表情を苦痛に変え、低い嗚咽を洩らしながら、パンリをシュナに託す。

彼の能力を良く知る彼女は、それだけで大方を察することが出来た。

「では…我々はそろそろ失礼するよ。

最後は慌しかったが、力を貸してもらった御礼を、彼らによろしく伝えていただきたい。」

戒達が早々に豪邸へ入ってしまうと、取り残されたウベはシュナへ向けて切り出す。

「いえ…こちらこそ、何だか…あいつがお世話になったみたいで…。」

もしよろしければ、あなた達も泊まっていけます？

部屋は沢山ありますから…。」

「それは是非とも、ご厚意に預かりたい！
我々も、リングは節約したいものでね。」

途端、豪快な笑顔と共に頭を下げるウベ。

「うそ、こんな所に泊まれるの？
すごいラッキー！」

少し離れた所で、その会話に耳をそばだてていたレンが両の拳を

握って叫んだ。

「レン…はしたないわよ…。」

そうやってなだめるエリスも、瞳を輝かせている。

「それと…貴女たちも。」

最後にシュナは、カジェットとベルツサスに声をかけた。

沈んだ表情。

気を失っているパンリとの関連があることは、すぐに理解できた。

「あたしは…いい。」

ベルツサスだけ頼むわ。」

「そう。」

気が向いたら、いらっしやいな。」

それ以上は促さずに、シュナは踵を返し、豪邸へ戻って行く。

「…あたしが真っ先に腕輪を取りに行ったのは、あのクマ達が可愛かったからだ。」

玄関先に残ったカジェットは、懨然とした表情で、恨みがましく呟いた。

「それなのに、あの野郎が勝手に買いかぶったんじゃねえか……」

「…二代目……。」

「……いや、言い訳だな。」

哀れみを内包して掛けられるベルツサスの声に、カジエットは思わず首を振る。

「パンリを巻き込んだのは事実だし。

術を教えるからって、ちよつと強引だったよな……ただ、一人で空回りしてただけ……なわけだ。

向こうにその気が無かったんだからよ。」

「本当のことを教えていただけませんか。

あの世羅という娘に構っていなければ、きっとこのような事態にはならなかったはず。」

「…それは関係ねえよ。」

彼の強い眼差しに、彼女は耐えきれずに目を逸らす。

初代カジエット「セイルクロウは、アルドの弟子だった
そのような真実を背負うのは、自分だけで充分である。

「ならば何故…あそこまでこだわったのです?」

「もうやめろ。」

全部、あたしが悪いんだよ！
それでいいじゃねえか！！」

彼女の自棄的な物言いに、ベルツサスは諦めて後退する。

そして彼も結局、豪邸には入らずに、静かにその場から離れていった。

「おいこら！

寝床は、どこだ！！」

「どの部屋でも、寝れるわよ。」

広すぎる大広間で足踏みをして、わめき散らしている戒に、シュナが答える。

「…なら、一番奥だな。」

彼はそう呟くと、少し足を引きずりながら廊下を進む。

「あんたは、まずお風呂よ。
その服も洗濯してあげるから。」

そのまま彼についていこうとした世羅の手を引き留めて、シュナは言った。

土や砂で汚れている姿は勿論、露出した左腕に、さらに彼女は目を留めている。

「……うん。」

その視線に気付いた世羅は、そこを片方の手で覆いながら頷いた。

「自分も、その後に沐浴させていただきたい。
狩場は…ひどい場所だったんでね。」

「お風呂も幾つもありますから、良かったらこちらへ、一緒についてきて下さい。」

ウベからの申し出に、シュナは笑顔で答える。

「レンとエリスは、先に部屋で休ませてもらいなさい。」

娘達に荷物を預け、彼は彼女の案内に従った。

「…あの女、あいつの何なのかしらね？
色々と世話焼いているようだけど。」

レンが、廊下を振り返りながら言う。

「ただの友達とか……じゃないみたいね。」

不安げな表情で、エリスが呟く。

「やかましいぞ、双子ども！

俺様はもう寝るんだ。

絶対に起こさないよう、二階の部屋にでも行ってる。」

そこへ、後ろで小さく会話する二人に向けて、辛辣な言葉を吐く戒。

「あんたに言われなくたって……！」

でも、まだお昼よ？

選手村の見物とかしないの？」

「うるせえ……寝てえんだよ。」

戒はさらに悪態をつきながら、奥の一室の扉を開く。

「本当、ぐうたらねえ。」

レンは彼の荒れた様子に苦笑しながら、陰口を叩いた。

「……。」

そこへ、無言で扉の前を塞ぐザナナ。

扉が閉められるた直後、突然に柱を殴るような大音。
そして、床を乱暴に叩く音が響きだす。

「がああああああああああああああ！！」

「！？」

続けて、壁の向こうからの咆哮。
二人の少女は驚き、同時に不審に思った。

「あ、あいつ……頭でも打ってたっけ？」

「戒は、今、痛みと戦っている。」

「痛み？」

レンに答えるザナナに、エリスがさらに訊く。

「傷は、簡単に癒せるものではない。
たとえ天命人であっても。」

豹頭はそのまま扉の前で胡坐あぐらをかいて、槍を肩にかける普段の態勢をとる。

「もしかして、あの傷の痛みがそのまま…？」

「まさか。

痛くて死んじゃうわよ。」

「全て、覚悟の上だ。」

豹頭は短く、低い声で呻いた。
その言葉には真実味があった。

「……！」

二人の少女は、驚愕と感嘆を混じらせる。

「きっと、大事な人なんですネ。

あのパンリって人も、世羅って人も。」

だが、やがて表情を微笑みに変えて、エリスは言った。

「口には、出さんかな。」

ザナハは、その彼女の純な感情に懐かしいものを覚えながら、静かに階段を上る二人を見送った。

やがて痛みにもがく声は小さくなり、寝息を聴く。

しかし、それからも、豹頭がその場を離れることはなかった。

「……はああああ……」

大勢の喧騒が過ぎ去った大広間。
そのこのソファに腰掛けながら、この世の終わりを迎えるかのような暗い表情で、深い溜め息をつくアリアネ。

「あ、ごめんなさい。」

アリアネさんに聞かないで、色々と勝手に決めてしまつて……」

当面の仕事を終え、大広間に戻ってきたシユナは、それを敏感に感じ取って先に謝った。

「へ……何のことです?」

だが、考え込んだ表情から一転。
さも意外そうに言葉を返す相手。

「いや、だから……私が勝手しているのが気に入らないわけじゃないんですか。」

「ち、ちがいますよ!」

そしてさらにアリアネは、大袈裟な素振りで否定する。

「じゃあ、何を悩んでいるんです？
全て順調なのに。」

「そこが問題なんじゃありませんか。」

人差し指を立て、彼女は続けた。

「前半、私達が目を離しているうちに、陛下は相当に大暴れしたようです…。」

国王という立場ゆえに抑圧されていた陛下は、ここでは、まるで野に放たれた猛獣。

後半はもしかしたら、全ての組が餌食になってしまいかもしれません。

このままでは、優勝して目立ってしまうのは明白……飛翔艦は得られたとしても、国際上で困ったことにならないでしょうか…。」

「なに言ってるの？」

優勝なんて初めからするつもりなんてないんだから、そんなこと心配しなくてもいいじゃない。」

「……え？」

一瞬にして動きを止めたアリアネは、呆然と聞き返す。

「貴女も重々承知の通り、陛下は仮にも一国の主でしょ。」

それが非公式に他国に侵入した挙句、こんな大会に出場しているなんて世間に知れたら大変なことになるわよ。

そんなこと、どんな馬鹿でも分かるわ。」

「…シユナさん。」

仰っていることが、以前と随分違いますか。」

全身をシユナへと向き直して、彼女は真剣な顔つきで言った。

「あのねえ。」

『たてまえ建前』って言葉、知ってる?」

「バ、バカにしないで下さい!」

「貴女みたいに善良な人に隠したままじゃ気が重いから、この際、はつきり言っておくわ。」

……本当は私、陛下に協力するのを口実にして、仲間を援助しようとしているだけのの。」

「ええっ!?!」

シユナの突然の告白に、アリアネは仰天した。

「我々を騙していた……そういうことですか?」

そしてその衝撃も冷めやらぬうち、自問するよつに言葉を洩らす。

「うん…。」

たぶん、陛下は初めから、それを承知して乗ってくれているんだと思うけど。」

「そ、そうなんですか!？」

何ゆえそんな…」

「陛下もね、この国を回るための、何か口実が欲しかったんじゃないかしら。」

ま、利害の一致ということですか。」

シユナは一転して気安い口調になりながら、失意のアリアネの肩を軽く叩く。

「たとえば……この村の到る所にある、リエディン王の石像を眺める陛下の憂いを帯びた顔を見た？」

御二人共、何といってもアルドの叛乱の英雄でしょう？」

何か他人には入り込めないような、難しい感情があるのよ、きっと。」

「…それは……全然、気付きませんでした。」

反省の色を滲ませながら、顔を伏せるアリアネ。

「ダメねえ、何事も深く洞察して『裏』を読まないと。」

特に、ああやって、一見おかしい行動をとっている人は、何か別の考えがあることが多いのよ。

遠路はるばるフィンデルさんに会いに来てくれるし、タンダニア国王様の懐は深く、素敵だわ。」

「……………」

「それに比べて、親衛隊長さんは…」

何気なく口をつく本音。

対するアリアネは頭を深く垂らし、わかりやすく落ち込んでいる。

「あ、ごめん。」

別に責めてるわけじゃないのよ…」

「いえ。」

私も何となく…自分は他人より、その辺りが『少し』鈍いのではないかと思っておりました。」

真顔で、呟く彼女。

（これでも『少し』…………という認識しかないところが、規格外の鈍さを形容してるわね…………）

だが、一方のシュナは呆れて物も言えなかった。

「昔から、陛下のお気持ちが、どうしても察せないのです。しかし、これが私の器量不足のためだということが、シュナさんのおかげで確信できました。」

お恥ずかしい限りです。」

「いや、そんなに思い詰めなくてもいいんだけどなー……」

沈んだアリアネの様子に若干の後悔を感じながら、シュナは目線を天井に移して口走る。

「折り入って、シュナさんにお願いが御座います。」

「な、なに？」

急に改まって……」

「もしも貴女が『本気』ならば、我が親衛隊に入隊し。

行く行くは、陛下の妃になっていただけないでしょうか？」

急にアリアネは、普段以上に真面目な表情で言った。

「…私が？」

事態を飲み込めず、ただ呟き返すシュナ。

「実は、陛下にはご世継ぎがないのです。」

「??」

「もはや、タンダニアの未来のためならば、その腹が国民でなくとも厭いません。」

どうか！

このとおり！！ 陛下の子をお産み下さい！！」

「ちよつとちよつと、早まらないで。

それに、話が全然見えないんだけど。」

アリアネの大声に辺りを見回し、冷や汗を拭いながら、シュナは自分の両肩を力強く握る彼女の手を振りほどく。

「…まず、なんで親衛隊に入らないといけないわけ？」

そして彼女は、紅潮した顔を片手で扇ぎながら、苦笑と共に返した。

「『そういうこと』のために組織された部隊だからです。」

「は？」

「…お察し下さい。」

「後継者が欲しいってことは……つまり、後宮の代わりってこと？」

やがて、シュナは悟った表情で、手を打ち鳴らした。

アリアネも無言で、それに首肯する。

「建国後、陛下はどうしても妻を娶らなかったため、過去に私の母が後宮を作ったのですが…」

「そこでも、一切手を出さなかったのね。」

「はい。」

そう答える彼女は、しばらく間を置いてから続けた。

「…やがて後宮は取り壊しとなり、そこを取り仕切っていた母は、別の男性と結婚いたしました。」

……ですが、それでも母は諦めず、次に後宮の代わりとして親衛隊を組織し、悲願を娘の私に託したのです。

建前上、王家を守るという武力機関ゆえ、陛下は文句を言われません。

しかし、そういった理由から、我ら親衛隊は若い女性のみで構成されているのです。」

「まさに親子二代の執念つてやつね……恐れいったわ。」

大きく開けた口を塞げないまま、シュナは感想を洩らした。

「ですから、もしもシュナさんさえ本気ならば、ぜひとも……！」

「ほ……本気じゃないですって。」

「では、遊びなのですか!？」

「あなた、本当に面倒な性格してるわ……。」

まるでちぐはぐな会話に、頭を抱える彼女。

「とにかく…どんなに熱く語られても、急にそんな重大な話は受けられませんから。」

「非常に残念です。」

陛下には、貴女のように氣くばり出来る女性がふさわしいかと思っただのに。」

「何でそう思うのよ?」

「長年お傍に仕える私よりも、陛下のことをより理解されているようですし…」

「あのねえ。」

私は単に、要領がいいだけよ。

夫婦の相性とは別…じゃないかしら。」

興奮しないよう相手をなだめつつ、シュナは言った。

「それに第一、アリアネさんは…それでいいの?」

「…国王陛下のご世継ぎさえ誕生し……親衛隊の本懐が遂げられるのであれば。」

母もそう望んでおりますゆえ。」

「ほんとに?」

母親の言いつけだから、従ってるだけなんだ?」

「……そういうわけではありません。」

私だって本気で陛下を……お慕いしております……。

たとえば、ずっとお傍にいられたら……それだけで何もいりません……」

「あ、そう……」

アリアネの想いに、気持ちが悪くなりながら、再び呆れ声を唇端から洩らす彼女。

「『陛下！　またそんな格好で出歩いて！
もっと威厳をお保ち下さい！！』」

そこで、シュナは指で目を大袈裟に吊り上げて、唐突に叫んでみる。

「……誰の真似ですか？」

薄々感づいているアリアネが訊いた。

「私から見れば、貴方たちって、もう夫婦みたいなものじゃない。きっと結果なんて、後からついてくるわよ。」

「……」

目を覚ますような一言に、立ち上がる彼女。

「ほ、本当ですか？」

本当に…そう見えますか？」

「え、ええ……まあ、結構。

……それなりに。」

「嬉しい…」

いささか自信の無いシュナの返答だったが、アリアネは単純に機嫌を直していく。

「有難うございます。

シュナさんに言われると、私も少し自信が……そうだ！

もしも陛下の正妻の座が重いというならば、せめて乳母役などはいかがでしょうか。」

あからさまに、シュナの胸へと視線を向けながら、真面目な顔つきで言うアリアネ。

「考えておきます……」

その悪気の無さが、かえって痛々しく。
彼女は苦笑で答えるのであった。

「驚いたわよね。」

あいつが、あんな力を隠し持ってたなんて。」

ベッドに飛び込み、柔らかな羽毛の感触を味わいながら、レンは言った。

「でも、大丈夫かな？」

その横で枕を抱いているエリスが返す。

「平気ですよ。」

… たぶん。」

おもむろに立ち上がり、レンは設置されたクローゼットを乱暴に開ける。

「わぁ……見てよ、この服。」

自由に着ていいみたいよ。」

彼女は、そこに掛けられた民族衣装に、早速首を通してみる。

「今まで野暮ったい修道服しか着たことなかったものね。」

エリスは、はしゃぐ妹の姿を見詰めながら、嬉しそうに言った。

「後でこれを着て、村を見物に行こうよ！」

「……私は……いいわ。」

「どうして？」

外界を見物する、折角の機会じゃない。」

動きを止め、彼女を見詰めるレン。

「だって悪いもの……。」

戒さんが……あんなに苦しんでるのに……。」

「あの蛮族も言ってたでしょ。」

自分で覚悟してやってんだからさ……。」

「私ね。」

あの人達の関係、すごく羨ましいと思った。」

エリスは開かれた窓際に移動し、風を肌に感じながら呟いた。

「何も言わなくても、お互いに助け合ったり、心も通じているんだなって。」

ああいうのが、本当の仲間ってことなのかな。」

「……感心するのでもいいけどさ。」

あの連中に、ちよつと気を許しすぎじゃない？

特に、あのインチキ修道士。」

レンは言う。

「…そうかな。

でも疑ったら、余計に悪いよ。

…こんないい所にも泊めてもらって……。」

言葉にならない感情の末。

黙り込む彼女。

「エリス。

あんな状況だったから、お父さんは何も言わないけど……本来は、男の人に近付いちゃだめなんだからね。

私達は立派な修道女になるために生きてるのよ。」

「わかってる。」

「……それにね……そういう気持ちは、世間を知らないからだと思うの。」

もつといい男だって、沢山いるはずよ。

あんな奴でも、それしか見てないから、気の迷いを持つちゃうのよ。」

「だから、そんなんじゃないってば。」

「どうかしらね。

まだまだ、修行が足りないんじゃないの?。」

「レンの意地悪。」

エリスはそう笑って、柔らかい枕に顔を埋めた。

「男に興味もつことは止めないけど…どうせなら、ちゃんとした司教とか司祭と仲良くしなさいよ。」

死んだお母さんが選んだ、お父さんのように立派な…」

「そうね。」

「真面目に聞いている?」

邪魔くさそうに相槌を入れる彼女に、レンは怒りながら返した。

やがて疲れが全身を支配し、二人の会話は少なくなる。

「ねえ…お母さんの顔…憶えてる?」

そんな中、不意に訊くエリス。

この姉妹が今まで何度となく繰り返してきた質問だった。

「…ここまで来て、その話はよしましゅうよ。」

そして大抵、レンはいつも同様に返し。

二人は答えの無い想像を打ち消すのであった。

次へ

4

戒「セバンシュルドは夢を見た。

虎の如き体躯に、狼の様な気高い顔。
全身に青白い焰ほむらの毛を纏う、巨大な獣。

それが身を屈め。

正面から自分を見詰めている、そんな夢だ。

獣の瞳は、深い哀れみを携え。
秘して何も語らない。

それが果たして、何を暗示しているのか。

返る答えを恐れて。

戒は、問うことさえ出来なかった。

獣と人。

両者の間に、遮るものは何もない。

だのに何故か。

はつきりと判る、拒絶の壁が横たわっていた

世羅と行動を共にするようになってから、奇妙な夢には慣れたつもりだった。

戒は、喉に絡んだ息を吐き出しながら、四つんばいでベッドから上体を起こし、自分の左手を見詰める。

あの獣の『青』は、天命の輪が発する光と良く似ていた。

（……犠牲の月獣……？）

まだ朧おぼろな意識の中で、彼は自身に問い返してみたものの、先の印象は既に霧散してしまっていた。

体を変え、立ち上がれば。

不思議なことに、パンリを癒した時に移した足の痛みが、今は皆無であることに気付く。

ゆえに、戒は経過している時が気になった。

すぐさま部屋の扉を思い切り開く。

と、それが廊下に座するザナナの背中にぶつかって、鈍い音をたてた。

「……！」

何やってんだ、こんな所で。」

何の気遣いも無く、そう呟いた戒に対し。

「体は、もういいのか？」

ザナナは胡坐あぐらをかいたまま、器用に背後へと首を曲げて、逆に怪訝げんげんそうな視線を返す。

「…ああ。

ところで、後半戦…まだ始まってねえよな？」

「まだ、陽さえ落ちてない。」

「それしか経ってねえのか？」

その割には…何か…」

淡々とした豹頭の言葉に、戒は釈然としないまま途中で歩を止め、そのまま床を強く踏みしめてみる。

「いや…何でもねえや。

お前も、もつと落ち着いた所で休め。」

そこでさらに問いかけてきそうな豹頭に、彼は誤魔化すようにねぎらい、廊下を後にした。

大広間に入ると、長いソファで世羅が眠りについていた。

見慣れない寝巻き姿、おろした髪から漂う石鹸の香り。
遠くの窓から見える、洗濯された彼女の衣服。

それらの情景に、戒は相応の時の流れを知った。

「　　なんて顔してんのよ、あんた。」

やや正面脇。

調理場の勝手口から、大量の野菜を抱えて現れるシュナ。

「俺様が、一体どんな顔してるって？」

自分の両脇を軽く押さえながら返す戒は、まともに取り合おうとしない。

「鏡で見せてやりたかったわ。」

そう言い放つと、彼女は調理台に次々と野菜を置いていった。

「お前…こんなところまで来て、何やってんだ。
食事なんて、適当でいいだろ。」

「そうは思ってるんだけどね……市場で食材を眺めてたら、つい。
私って、根っからの料理人なんだわ。」

世羅の寝る位置から、わざと遠い席につく彼を脇目に、彼女は答えた。

「…でも、ある人に言わせれば、お妃様になれる器量だそうよ。」

「何だそりゃ。」

てめえにや、せいぜい小さな料理店が関の山……だろ。」

戯事ざむじだと言わんばかりに、苦笑する戒。

「失礼ね。」

シユナは俯うつむいたまま、野菜を千切つては、ボウルに入れていく作業を続けた。

その顔には、まんざらでもないような微笑をたたえている。

「それでさ…世羅から大まかに聞いたんだけど。

大変だったわね……パンリのこと。」

やがて調理を終え、手にしたサラダをテーブルに放ってから、彼の横に座る彼女。

「で、平気？」

「……何がだ？」

「何がって…あんたの足よ。」

あの『力』を使つて、怪我を治したんでしょう？」

「ああ…。」

何でか分からんが…もう痛みは引いてる。」

「なら良かったわ。」

「いつの間にか、さらに天命の輪を使いこなせるようになったのかもしれん。」

流石は俺様……自分で自分の才能が、時々恐ろしくなる。」

「はいはい。」

真剣な顔つきで呟く彼に、シュナは終始、呆れ顔だった。

「……ところで、あの大女はどうした？」

「パンリを寝かした部屋の、すぐ外の庭に居座ってるわよ。別に、中に入って来ても構いやしないのに。」

「フン。」

もしあの女に、さらにそんな厚かましさがあつたら、俺様が真っ先に追い出してるところだぜ。」

だが、そんな戒の威勢に、シュナは決して良い顔はしなかった。

「でもそうやって……一概に怒ることは出来ないんじゃない？」

「……なに？」

「今回の件はねえ……パンリにだって責任があるのよ。」

そりゃあ、友達を傷付けられて、頭に血が昇る気持ちも解らないでもないけどさ……」

諭すように、彼女は続けた。

「サラダを食べる時に必要なのは、やっぱりスプーンじゃなくてフォークなのよ。

…こと戦うことに関しては、腕っぷしが強い人間がやればいいんだし。

ああいう穏やかな気性の子が、何も背伸びすることないわ。」

「知ったふうな口、叩くんじゃねえ。」

並べられる言葉に対し、戒は短く言い切る。

「何よ。

じゃあ、あんたはパンリの行動に賛成なわけ？
だったらどうして…」

「お前は、あいつのことがあんまり分かってねえよな。
それに、人はスプーンやフォークとは違うんだよ。」

そしてサラダの中の揚げパンを素手で摘み、口に放り込む彼。

「それって『たとえ』の話でしょ？
やっぱりバカな奴ね。」

そこで廊下側から聞こえる、憎らしげな声。
顔を向けると、休む直前に別れたきりになっていた双子の姉妹が、

階段を降りてくる。

「戒さん、もうお身体の具合はよろしいんですか…?」

少し驚いた面持ちで、エリスが訊いた。

「さつきから、どいつもこいつも。」

俺様を病人扱いするんじゃないよ。」

「だから言っただでしょ…エリス。」

こんな奴を心配したって、悪魔を応援するみたいなものだってさ。」

彼の横柄な態度を予想していたレンは、そんな姉の肩に触れながら、慰めとも諦めともつかない言葉をかける。

「あら、二人とも。」

その服、良く似合ってるじゃない。」

一方で、シュナが彼女らの派手な花柄のワンピースに目につけた。

「どう、女の子らしいでしょ?」

調子に乗ったレンは両手を広げ、くるりと回ってみせる。

「…んなことより、てめえらの親父はどうした。
疲れて寝てるのか？」

だが、それに対して全く感想を述べず、退屈そうな眼差しで戒は訊いた。

「お父さんは、しばらく選手村の入り口に張り込むそうです。
休む前に、勝ち残った組を調べておきたいとか…」

「それは随分と勉強熱心なこった。」

ヘリスの返答を聞いた戒は背を伸ばしてから、口角を歪める。

「それでね…。」

私たちは私たちが、これから外へ見物に出ようと思ってるんだけど…。」

その直後、タイミングを計っていたかのように、レンは少し遠慮がちに切り出した。

「誰か大人の付き添いが居ないと、ダメだって言われてるの。
たとえば…」

続けながら、目線を戒へと泳がせる彼女。

「ちょっと待て。」

いくら海よりも寛大な心を持つ俺様とはいえ、そろそろ我慢の限界というものがあるぞ……。」

嫌な予感を敏感に感じ取り、先手を打つ戒。

そして続けざま、乾いた喉を潤すため、テーブルに置かれた水差しを直接口にくわえた。

「そんなこと言わずに……お願い！
戒おにいちゃん……！」

そこで、一転。

甲高い声で、脇に擦り寄るレン。

「……おッ……!?」

さらに潤んだ瞳で見詰めるという、性格の変貌ぶりに、戒は含んだ水を思わず噴出した。

「レン……！」

だめよ……これ以上、迷惑かけたら……」

そんな妹の、あまりにも現金な態度に、エリスは背後から注意を囁く。

「外の世界に触れる絶好のチャンスなのに、なりふり構ってられないわ。」

エリスも、ほら……嘘でもいいから、頼みなさいよ。
このまま宿でじっとしてたら、もったいないって。」

「それは…そうだけど…」

だが、さらなる小声で囁かれる反論に、彼女は顔を赤らめながら
意を決した。

「じゃあ…お願いします…戒…お、おにいちゃん…」

「照れながら言うんじゃない、こっちの方が恥ずかしくなる…！
それにな、俺様にも一応、都合というものが…」

「どうせ暇なんだろうし、行ってきたら？
こんな可愛い妹たちのお誘いを断るなんて…ねえ。」

首を大きく振って拒絶する戒に、シュナが相当の嫌味を込めた口
を挟む。

「仕方ねえな……わかったよ。」

だが確か、大人の付き添いが必要とか言ったよな…。」

やがて彼は観念したように立ち上がり、レンの顔の高さまで屈み、
近付いた。

「こう見えても、俺様はまだまだ子供なのだ…！
と、いうことで、付き添いはできん！」

ざまあみろ！ カカカカカ！！」

だが、そこで急に彼女の額を軽く指で弾き、散々にこきおろした後、すぐさま椅子へと身を返す彼。

「……この……！」

……でも……まあ……大体予想してたけどね。

エリス、もう白けちゃったわ、戻りましょ。」

大人気ない戒の様子に、額と悔しさを必死に抑えながら、レンは震えた声で言い放つ。

「人生そんなに甘くねえんだよ、クソガキども。」

さらに、二人の去り際にも容赦なく悪態を続ける彼。

「……変わったわね。」

あんな子供たちに、冗談でも構ってあげるなんて。」

意気消沈する姉妹が二階へ戻るのを見届けてから、シュナは真顔になって呟いた。

「それとも、世羅が……変えたのかしらね。」

「？」

途中から静かに変わった彼女の口調に、戒は体を硬直させる。

「何だよ、やぶからぼくに…」

「私ね、あんたがどうして世羅にこだわっているのか、わかったの。」

「…てめえ……まさか？」

「今日は手袋してなかったでしょ。」

別に、見るつもりがあつたわけじゃないわ。」

シユナは後ろ髪をかき上げながら、一分のためらいと共に唇を開いた。

「…ひとつだけ聞かせて。」

世羅には、ちゃんと『全て』を説明してるの？」

そして喉を離れた言葉が、広間の空気を揺さぶる。

「……大まかにな。」

利害の一致を納得した上で、俺様たちは一緒にいる。言わば…互いに利用し合う関係ってやつだ。」

戒は目線を逸らし、相当に低い声で言った。

「嘘ね。」

「もしも、あんたが納得しているのなら、『利害の一致』だなんて言い訳がましい表現はしない。」

「それは負い目がある証拠よ。」

「シユナは興奮のあまり、己の声が大きく上ずっていることに気付かなかった。」

「この先、世羅と一緒にいるつもりなら、はつきりさせなさい。」

「……あんたが『あの女』をどれだけ愛しているか。」

「そして、契りを交わしてる仲だってことも。」

「おい!!」

戒の呼びかけも虚しく。

シユナ言葉の途中で、ソファで横になっている世羅と目を合わせていた。

彼女の閉じていた目は、今はわずかに見開いて。

先ほどよりも、頬をさらに紅潮させている。

「……。」

そんな中、自身の出方を決めかねている戒は、固まっただまま動けない。

「…世羅、起きてたんだ？」

シュナもばつが悪そうに言葉をひり出すのが精一杯だった。

「うん……。」

いま起きた……」

眠そうな目を擦りながら、座る態勢になって、両膝に小さく手を乗せる彼女。

「えっと……何か食べる？」

野菜しか無いけど……」

「ううん……いいや。」

慌てて言い繕うシュナに、浮かない表情で答え。

「ちょっと暑いから、風に当たってくるね。」

世羅はそう言い残すと、小走りで玄関へ向かっていった。

「…あの子……言葉の意味、わかってたと思う？」

それとも、雰囲気で気付くかしら……」

その後、すこぶる居心地の悪そうな苦笑を浮かべつつ、シュナは呟いた。

「……………!!」

対する戒は、テーブルを強く蹴飛ばして、無言で立ち上がる。

「あのね。

世羅が男だったら、気にしないわ。

でも、あの子は、あんたに好意を持っているみたいだから……私
…傷付けたくないの。」

「うるせえよ。」

茫然と座ったまま呟かれるシュナの言葉に、戒は頭上から冷めた
視線を浴びせた。

「誤解してたら…解いて来てあげて。

こんな形じゃ……私だって夢見が悪いし。」

「誤解なんて、あるものか。

それに…お前の指図なんぞ、なおさら受けねえよ。」

大股の足取りで、玄関と反対側へ進む彼。

「戒！ あんたどうするつもり…」

「おいこら…！」

外へ行つてやるぞ、双子ども!」

そして、シュナの問いかけを無視する形で、彼は階段下から二階へ向けて大声で怒鳴りつける。

すると。

地響きのように、二つの足音が急いで駆け降りて来るのであった。

大会の運営本部は、選手村の中ほどに一件の小屋を借りていた。

スタート地点の時とは違い、その中には客品も要人もおらず、閑散としている。

やたらと暇な空間に、乾いた歯車の音が響き。
四つの眼が輝いているのみ。

《…用意したボースリングも、ギルド班が回収できたのは、たったの半数とは情けない。》

《課題が、少し難しかったのでしょうか。》

双頭の魔導人形ハーニャンは、限りなく照明を落とした室内で、密やかな言葉を交わしていた。

《いえ。

この程度ならば、想定内のはず。

そこを越えた要因があるとすれば……選手村に一位で到着した……》

書類を一枚、手の甲で叩きながら、青いルージュを引いた首は続けた。

《この『ヘイカ』という者。

能力は、こちらの予想を遥かに上回っています。

課題の達成を急いた優秀な組ほど、彼によって、そのことごとくが殲滅させられました。

……一体、何者ですか。》

《よほど名のある傭兵、もしくは剣豪かと思い、様々な記録と照合してますが……どれも一致せず。

偽名を使っている可能性も捨て切れません。》

赤いルージュの首は、淡々と返答する。

《ただし彼の組は、この選手村において最も高額な宿泊施設を選択し、ボーナスリングは勿論、他のリングも殆ど失っております。》

《……勝つ気があるの？》

《少々、判断に苦しみます。

念のため、ここで残ったギルド班を一同に集めて、団結させますか。

当初の予定と違い、外部に彼らの共闘行為を漏らしてしまう危険^{リス}性がありますか…》

その問いに、暫しの沈黙。

《許可します。

ギルド本命の組が失敗し、そのうえ頭数まで減らされた今、背に腹は変えられません。

……まったく、七星剣を呼んだからと安心していれば…》

「背に腹？

魔導人形にも、そういう言い回しがあるんですねえ。」

急にかけられた声に反応し、ハーニャンが見やると、小男が入り口の扉を開いていた。

《ロメス！！》

「へえ。

このとおり、なんとか生きておりますよ。」

その軽々しい口調に反し、彼は壁に体をもたれ、立っているだけでも辛そうな状態である。

《…いまごろ到着して何です。

一体、幾つの組に先を越されているのか、教えてあげましょうか？》

「ボーナスリングのことですかい。

まあ……これで帳消しじゃないですかね……。」

途端、彼の背から顔を出す、ドウナガンとセアムリツヒ。

彼等の腕には、10を超える腕輪が装着されていた。

「指示どおり、我々も優勝へ向かっている。

文句はあるまい。」

セアムリツヒは胸を張り、断言する。

だが、そんな彼らの様子も、圧倒的な勝利に満ちたものではなかった。

ドウナガンの服とセアムリツヒの鎧に付着した土くれは、疲労の色として見てとれる。

だが決して、参加者たちに苦戦をしたわけではない。

おそらく原因は、課題の区画においての強行軍。

競技序盤の出遅れを取り戻すために、相当の無茶を強いたようであつた。

《『目立たないように』、そう命じたはず。》

立場さう述べた魔導人形ハーニャンも、ギルドから役目を一任されるだけのことはある。

彼等を観察していくうち。

持ち前の高い計算力で、一つの可能性を打ち出していた。

《……本部の意向に従えないというならば、放任します。

どのような方法でも、ギルド側に勝利さえもたらせばよろしい。》

《不確定要素の強い者がいます。

くれぐれも、油断なきよう。》

双頭の人形は口々に言った。

「かしこまりました。」

対するセアムリツヒは、自身の鎧の肩口を打ち鳴らし。

乾いた土を落としながら、小馬鹿にしたように体をすくめ、踵を返した。

まさに、この選手村は身を休めるに相応しい、穏やかな場所だった。

湖から運ばれる風が、実に爽やかで。

やや原始的な田舎風の景色も、心を和やかにさせる。

その中で商店が建ち並ぶ小通りは、村の入り口の反対。北側に位置していた。

ここまで辿り着いた選手達はまだ少ないが、さすが村唯一の娯楽施設である。

外から覗く酒場では、結構な席が埋まっており、予想以上に盛り上がっていた。

加えて。

両脇に並んだ露店にも大会の趣旨は周知のようで、選手達の懐目^{ふくめ}当ての声^{こゑ}が、あちこちからかけられる有様だった。

「なに何これ、アイスっていうの!?

冷たくって美味しい!!

こんなお菓子って、初めて食べたわ!

甘あい!!」

視界の遠くから、カップを片手にレンが叫ぶ。

その傍では、店員がリングを催促している仕草。

「おい……誰が食っていいって許可した!?

一文無しのくせに……畜生め……!!」

悲痛な叫びと共に、洪々、リングを取り出しながら近付く戒。

「だってえ、お父さんが全部持っていったんだもん。

仕方ないでしょう。」

「だから、俺様にしか付き添いを頼まなかったのか。どこまで汚いガキなんだ、てめえは。」

「すみません…。」

レンのわがママを聞いてもらったうえに…出費まで…。

あとで、お父さんに説明して、お返ししますね…。」

後ろから申し訳無さそうに戒の修道服を握り、エリスが呟いた。

「バカ。」

この程度で請求してみる。

逆に、この俺様が笑いものだぞ。」

「ご、ごめんなさい…!!」

ひたすらに謝るエリスの眼前に、店員から差し出されるアイスのカップ。

彼女はそれを反射的に受け取ってから、戒が二人分のリングを店員に渡していたことを知った。

「謝るな。」

必要経費ってことにしておいてやるよ。」

彼は無感情のまま言った。

その言葉に、偽りは無く。

終始、彼は世羅の行方を追うために辺りを見回していた。

だがそのような事情を知らない彼女は、その言葉を額面通りには受け取らなかった。

「ねえ、こっちは見たこともない魚がいるよ！！
見て見て！！」

今度は水槽の前で騒ぐレンに、エリスはつられて、戒の前に出る。

そこへ、大きく開いた緩やかな襟から覗く、彼女の細い首筋。
『うなじ』の部分に十字の紋章。

「こら、なにジロジロ見てんのよ！？」

そんな戒の視線に、前のレンが目ざとく気付き、強い口調で言った。

「あ…これ、ですか…。」

直後、エリスも気付いたようで、自身の首に手を当てる。

「『洗礼痕^{こん}』が珍しいの？

神に仕える者として、別に珍しくないでしょ。」

「ああ…まあな。」

神学校にいた頃、そのような印を見た記憶はまるで無い。
だが、また単に自分が無知なだけかもしれないと思い、戒は追求しなかった。

「私たちは教会で生まれたから、すぐにしてもらったらしいわ。
もしかして、まだ洗礼受けてない？
最低でも10歳までに受けてないと、神罰が下るのよ。」

「ンなわけねえだろ。」

苦々しい顔で返す戒に、レンは冗談交じりに笑う。
そして、さらに浮かれた足取りで、二人よりも小通りを先に行っ
た。

置いていかれたエリスは、それに追いつこうと一步を踏み出す。
だがすぐに、つま先を鎮めて、戒を待った。

「私ったら、全然ダメな姉だから。
本当は……自分が妹だったらいいなって思ってたんです。
今日は、それが叶ったみたいで嬉しい……。」

そして前を向いたまま、彼女は呟いた。

「気負ってんのか？」

あいつが、お前のことなんぞ、姉と思わなくて当然だろ。」

ポケットに両手を深く入れ、素っ気無く返す戒。

「そ、そうですか…？」

「生まれてきたのが数秒違っただけで、ことあるごとに先輩ヅラしてみる。」

俺様が妹の立場だったら、ブン殴ってるぜ。」

「あは…」

彼の物騒な言い草に、エリスは思わず笑った。

「でも……後半戦が始まれば、もうおしまい。
また敵同士ですね…。」

「いや、そうはいかねえよ。」

「え？」

戒の意外な反応に、エリスは向き直る。

「こっちとしちゃあ、もう流石に正面切って、お前らと戦う気はしねえぞ。」

「ほ、本当ですか!？」

「どちらにせよ、ここから先、孤立して戦うのは無謀だからな。お前のとこの親父は、戦力として充分だ。後半戦が始まる前に、停戦同盟くらいは結んでやる。」

ウベとの一戦は、以来、あまり考えないように努めていたが、戒にとつては衝撃の体験だった。

今だから、自分の聖十字が通用しなかった相手は、凶獣以外にいないのだ。

相手が同じ聖十字の使用者であつたことも大きな要因のうちだが、それ以前に技量の土台がまるで違う。

筋力や戦闘経験において、自分を軽く凌駕していること。それが、得意の喧嘩戦法などで埋まる差ではないこと。

ただの一撃が、それらを身体の内まで知らしめたのである。

『逆らえない』という意識の楔を、まるで心臓に打ち込まれたように。

しかもそれは。

時が経つにつれ、次第に大きくなっていく思いがした。

「良かった…。

お父さんも、きっと喜ぶと思います。」

「……なら、いいけどな。」

野郎…かなり真剣に、上位入賞を狙っているみたいだからよ。」

「やっぱり…戒さんも、そう感じますか？」

「豊かな生活が欲しいってのは、理解できるけどな。」

戒はウベの口から聞いた話から、そう予想して言った。

「でも私……とても、それだけとは思えないんです…。」

「どういうことだ？」

「ちょっと…うまく言えません…」

戒は、そうして伏せられるエリスの瞳の奥から、一種の怯えのよ
うな感情を見た。

畏敬よりも、もっと根の深い そんな印象だった。

「まあ、誰がどんな考えだろうと、最低でも自分の身は守れ。
この世では、自分が一番大事なんだからよ。」

「……………ありがとうございます…！」
……戒さん……」

「ちょっと、エリスも早くこっちに来なさいよあ…！」

礼を言う途中、遠くでレンのはしやぎ声。

彼女はその呼びかけに応え、今度は元気良く、足早に向かって行った。

戒はそんな二人の姿を眺めながら、過去への想いに達した。

神学校を出てから、若干の街を旅し。

知り合った仲間と共に、あんな風に浮かれた記憶もある。

ある日、世羅と出逢い、求めるものへの糸口を見つけ。

彼女も、自分と共に、突き進むことを決めた。

だから、互いは利用しあう関係なのだと、表向きはこじつけていた。

だがそれは、世羅の純朴さを良い事に、付け込んでいるだけかもしれない。

それどころか。

目的が果たせなかった時、彼女を　彼女を、自分を慰めるための『代用』にしようとする、汚い算段が眠っているのではないか。

心の奥底で繋がるような、圧倒的な信頼感など錯覚である。
リジャンが生前に語った戦友論を、こんな自分が信じているわけ

がない。

それらを思えば、先ほどシュナが投げかけた言葉は、もっともな意見だった。

（……昔の俺は…どんな顔をしていた…？）

正面の店に飾られた、大きな鏡に映る、虚ろな自分の姿。日々、『彼女』のいない時間に、慣れていく人間の成れの果てだ。

その彼女を救うがための旅なのに、向かう先への確証は無い。否、むしろ遠回りを好んで選択してはいないか。

しばらく意識していなかった頬の古傷が、先程から鈍い痛みを発していた。

（もう絶対に傷つくな。）

（これから先は、いつでも身を挺して、お前を守ってやるから。）

（…私が傷ついたら、その力の出番だ。いつでも、必ず、癒してくれよな。）

（嫌な顔するなよ。）

…その都度、痛いのは御免だつて？）

（誰にも理解されなくたって構わない。）

この世に…キミさえいれば……私は何も無い明日だって生きられるぞ。）

（……今度は寝たフリか？）

「…雨……？」

頬に触れる雫を感じ、驚きの声と共に、空を見上げるエリス。

だが、そのすぐ頭上には。

いつのまにか眼鏡をかけて、空を仰ぐ戒の姿しかなかった。

帰りの道中。

「かしこまりました。」

脇のセアムリッヒの口を真似ながら、可笑しそうにロメスは手を叩く。

「よっぽど、あつしが健在だったのが驚きだったんでしょうねえ。
あのいけ好かない魔導人形。
ハトが豆鉄砲くらったような顔してましたぜ。」

「あまり…調子に乗らないことだ。」

二人の後ろを離れて歩くドウナガンが、そこで諫めるように低く呟いた。

「す、すみません。」

お二人の厚意で生かされてるってのに。」

歩を止めて、ロメスは視線を落とす。

「はは、そう卑屈になるな。」

勇士殿も、嫌味で言っただけではなからう。

……それより報告も終わったことだ。

さっさと宿に戻って、一杯やるうじゃないか。」

セラムリツヒは、先ほど露店で購入した酒を片手に、二人の間に入る。

だが、その笑顔の前を素早く伸びる腕。

「この仕事には、家族の運命がかかっているんだろ。お前に余裕など無いはずだ!!」

ロメスの襟元を逆手で掴み、殴りかからんばかりの剣幕で詰め寄るドウナガン。

「ふぁ……はい……」

それにすっかり怯えてしまった彼は、か細い声を洩らすだけで精一杯だった。

「よせ！」

彼は、まだ本調子じゃないんだ。」

流石に見かねて、両者を引き剥がすセラムリツヒ。

「いいか……」

絶対に、それらを不幸にするなよ。」

だがドウナガンは悪びれた様子も無く、さらに睨みを利かせてから背を向け、脅迫にも似た言葉を繰り返した。

そうして声を震わせる最中。

彼はベルトに吊るしてある古い鎖を固く握っている。

二人は、彼がこのような仕草をするのを、何度か見かけていた。

「ふむ……岩のように黙しているかと思えば、烈火の如く感情を露にする。」

ただの若者特有の癪癢かんしゃくかと思っていたが……それは『家族』という言葉にのみ敏感らしい。」

やがて、彼の背に向けて語りだすセアムリッヒ。

「……君は戦災孤児か。
ならば、戦地を点々と巡る理由もおのずと知れるな。」

その一句に、ドウナガンは怒りにやつれた横面を見せる。

「しかし、いつでも時代は変わっていく。
その価値観を、誰彼とかまわず押し付けるのは如何かな。
……勇士の名が泣くというものだろう。」

「命と娯楽を天秤にかける、剣闘士風情に何が解る……！」

「風情と出たか、青二才。」

憤怒から吐き出された直情的な言葉は、温和なセアムリッヒの逆鱗にも触れたようだった。

真正面から、刃を互いの喉元に突きつけるような、鋭い殺気を放ち始める二人。

両者が宿に得物を置いて出てきたのは、まさに幸運としか喻えようが無い。

「ああっ!？」

そして元を正せば、この確執の原因となったロメス本人はといえば。

二人を仲裁するどころか、あさつての方向を指さしていた。

「お二人とも、喧嘩してる場合じゃありませんぜ!

…ほら、あそこ!」

周辺では、沈みかけた夕陽が景色を赤く染め始めている。

道に設けられた柵の向こう。

西の湖に向けて流れる川も、その美しさの恩恵を余すことなく受けていた。

「まずいですよ、ありゃあ…!」

負傷した体にも関わらず、柵から身を乗り出して訴えるロメスの様子に。

「……？」

セラムリツヒは、片目だけでその視線を追う。
するとすぐに、川の中に小さな人影を見止めることが出来た。

脱力して、流れに揉まれている。

泳ぎに興じる様子とは、明らかに異なっていた。

「あれは……子供……」

今度は首を向け、目を細めて確かめる彼。

だがそれを言うが早いか、脇のドウナガンは柵を軽やかに飛び越えていた。

「ああ……まいった……」

これじゃ……サポートしてやるどころの話じゃねえ。」

被った、大きなクマの着ぐるみの頭部を両手で抱え、バークは嘆いていた。

ジャグマーに扮する彼の今の居場所は、村内の端に設けられた、応急処置用のテントである。

「情けねえ……こんな珍妙なカツコまでしてやってるってのに……」

外での救護班ならまだしも、この詰め所での勤務は最悪である。

配属されてからは、ずっと缶詰状態な上、大会の情勢も全く伝わらず、心配している戒らの安否さえも依然として知れなかった。

しかも、このテントの設備は実に粗末で、用意されている物といえど包帯と消毒薬などが少々。

外科医療の道具さえ無く、これならば野戦病院の方がまだましだと、バーグは思った。

現に、難関を突破してきた屈強な参加者たちが、この程度の施設を必要とするはずもなく、暇をもてあます状態は続いている。

湖で停泊している大型船では、ここより遥かに良い治療を受けられると聞いている。

そのため、負傷者が出た組は、余程のことがない限り、大事をとってリタイアしてしまうだろう。

（ちよつと外の様子でも見に行くか…。

これなら、どうせ少しくらい離れたってな…）

彼は居ても立ってもいられず、任された席を離れようとすると、そこでちょうど入り口の斜幕が大きく開かれる。

複数の気配。

バーグは咄嗟に身構えると、真っ先に、全身鎧姿の彼に呆気にとられた。

「……急患だ。」

そう切り出したセアムリツヒが視線で示す。

すると脇より現れる、水に全身を濡らしたドウナガン。

その腕に抱かれているのは、息を荒げている少女の姿

「世羅……!？」

思わず、彼女に対して叫ぶバーグ。

が、そこで慌てて口をつぐむ。

（いけねえ……。

俺がこのカッコしてるのは、ナイショだったんだよな。）

あたかも彼女を知っているようなクマの言葉に。

案の定、訪れた三人は、一様にこちらを怪しそうに睨んでいた。

「ど、どうしたん……ですか？」

そこでバーグは咳払いをした後、丁寧な口調で彼等へ向けて言い直す。

「あ……いや、何気なく目に入ったんですがねエ……」

この子、川ベリの斜面で休んでいたように見えなんですが……それが、急に川に転げ落ちまして……」

「なにやら、熱があるようだ。

早急に適切な処置を頼む。」

ロメスの説明が終わらぬうちにテントの内部まで入ったドウナガンは、診療台に世羅を寝かしつける。

言つとおり、彼女は激しく胸を隆起させ、呼吸も上がっていた。

「ロメスよ、お前もここで治療でも受けていくか？」

外で待っているセアムリツヒが、テント内の設備の有様を揶揄して笑う。

「勘弁して下さいよ旦那。

あつしも宿に戻って、アルコールという名の魔法の水で養生させてください。」

「うむ……では行くか！」

この一件で先の確執もうやむやになり、彼は機嫌を取り戻したようだった。

やがて二人は、意気揚々と去り。

最後まで残っていたドウナガンも、長居は無用とばかりに後退する。

「感謝するぜ。」

だが最後にかけられたバーグの小さな言葉に、彼は振り向いた。不思議な思いに駆られ、数秒だけ立ち止まる。

（これは…疲労……いや、病気が…？）

そんな背後の彼には構わず、バーグは毛布を用意しながら、思いを走らせた。

（どちらにせよ…。

この熱さ…尋常じゃねえぞ……！）

固く目を閉じたまま、細かい呼吸を続けている世羅。額に手をかざすと、分厚い着ぐるみさえ通して、熱気が伝わってくるのである。

あらゆる処置を続けるうち。

バーグは、見慣れぬ彼女の寝巻きの袖から覗く彼女の右手が、ひどく腫れていることに気付いた。

そこで痛々しく浮かんでいる擦り傷の跡は。

彼女のそばに居てやれなかった自分を、酷く罵っているように思えた。

第四章

第四話 『以心変心・前編』
了

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

4 - 5 「以心変心・中編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The fifth story

・Understand・middle part・

「 よう、オーロン。

今日の成果はどうだい。」

その小さな場末のバーの主人は、扉を開けた男を一目見るなり、
軽い口調で訊いた。

「芳しくない。」

マフィア通の情報屋を、片っ端から当たっているが…どうにも。」

闇路からやって来た、無精髭を生やした中年の彼は枯れた声で答え。
え。

慣れた様子で、カウンターの末席に腰を落ち着けた。

「中王都市きつての腕利きが、連日珍しいこともあるもんだ。」

…ところで、どんなご関係だい？

べっぴんさんが開店からお待ちかねだぜ。」

「…？」

冷やかすような店主の視線をなぞり、顔を向ける。

酒が並ぶ棚越しのテーブル席に、スーツ姿の女性。

それは、暗めの店内に吊るされたランプの光に映える、色気のあ
る佇まいだった。

「失礼…。」

一体、どちら様ですかね……？」

オーロンは気だるい足を引きずりながら、全く心当たりの無い様
子で、目深に被っていた帽子を取りながら接近する。

彼女の方もそれに合わせ、ゆっくりと立ち上がり、会釈をした。

「あ…」

そこで初めて、彼は気付いたようだった。

「フィンドル大尉じゃありませんか！」

急に表情を気恥ずかしそうに変え、彼女の手を両手で取り、大袈裟に振るオーロン。

「私は、既に退役済みだと言ったはずですが…。」

そんな彼から伝わる妙な熱気に、フィンドルは苦笑を覗かせた。

「ははっ、そうでしたね。」

いやあ、この間はあるな形で別れたものですから、一体どうされているのかと思ってました。」

「ご心配おかけしました。」

実は、あれは知り合いの馬車でして…。」

「知り合い？」

それにしちゃあ…ずいぶん乱暴な…」

彼女の言い訳に対し。

彼は、ふ、と記者の顔に戻る。

「しかし……本当に、フィンドルさんですかい？
前回お会いした時とは、だいぶ雰囲気が違うというか……」

「ええ、本物のつもりですが……。」

眉をひそめ、一層に苦笑を強めるフィンドル。

「何か……前より、ぐつと美人に見えるんでねえ……。
どきまぎして、いけねえや。」

「？」

何やら口ごもる彼に、彼女はそれを聞き取ろうと顔を近付けた。

「いやいや、こっちの話で。

マスター！

一杯、強いの出してくれや。」

「……オーロン。」

その女性が、例の捜し人かい。」

だが店主は先程とは打って変わり、フィンドルを冷やかな目で睨みつけている。

「ん、ああ。

まあ……そうさな。」

「ならば、もつと怒ってやっても良いんじゃないのかね。」

彼女のために費やした時間は、決して少なくはないのだろうか？
色んな仕事を蹴ってまで、だ。」

「それ以上、言つなよマスター。」

慌てて取り繕うようにして、オーロンは返す。

フィンドルは、そんな彼等のやりとりに何かを察したようだった。

「まさか…あれからずっと、捜してくれていたのですか？」

「いやその……。」

取材の対象を、あんな至近距離で見失ったとあっちゃ、『遠目の
オーロン』の名がすたると思ひましてねエ……」

「すみません！」

もつと早く、お知らせしていれば……」

直後。

テーブルに額を付ける勢いで、彼女の頭が下に向く。

その愚直なまでの謝罪を前に、オーロンは大口を開けて呆気にと
られていた。

「よしてくださいよ。」

所詮、ウチらなんざ、興味を誘うものにたかるハエみたいなもんです。

だから、これは親切ではなく、あくまで私の意地……そう思っ
て下さいや。」

暫くして、彼は主人から出されたグラスを傾けつつ、仕切り直す
彼。

「無駄話はこのくらいにして、用件をうかがいましょうか。
欲しいネタがあるからこそ、わざわざこんな所まで足を運んでく
れたのでしょうか？」

「……これを見ていただきたいのです。」

彼女は頷き。

書類用の鞆から、鳥の羽根を取り出した。

「こりゃ……何ですかい。」

極彩色の大きな一枚。

それを受け取るなり、彼はとぼけた調子で片眉を上げた。

酒場の主人は、それを合図に店の入口の鍵を閉める。

「……私の仲間が遺してくれた……何かの『手がかり』だと思います。
」

そう毅然と切り出すフィンドルの顔を見ながら、オーロンは以前
の彼女の姿を記憶から手繰り寄せた。

「あれだけ放っておいてくれと言っていたあんたが、これはまた随分なご変化で。

斬った張った、跳梁跋扈の血なまぐさい世界はもう懲り懲りだつて、そんな顔してましたぜ？

一体、何が目的なんです？

仲間の遺志？ 仇討ち？

…どれも、聞こえがよろしくありませんがねえ。」

「そのような」

畳み込むような彼の言葉に、彼女は目を伏せる。

その仕草に、オーロンは失望した。

だが。

その考えは、すぐさま訂正することとなった。

「そのような崇高な考えが、私にあるはずがありません。何にも強制されることなく、ただ真実を欲している。それだけです。」

改めて口を開き。

対面を射抜くように見詰めてくる、彼女の瞳との一瞬の交錯。

（…これが、この御方の本領つてやつですかい。）

以前の彼女と印象が違って見えたのは、決して錯覚ではない。
自分の背を伝う一筋の汗を感じ、オーロンは思わずグラスを握り
締めた。

「…もう軍人でもないあんたが、真実を知ってどうするおつもりで？
まさかウチらのように、大衆相手の『餌やり商売』をするわけ
もありますまい。」

「知った後のことは、元より考えておりません。」

酒に浸かった大きな氷が、音を立てて半分に砕ける。

(…こうやってこの御方は、幾多もの死線をくぐり抜けてきた……
なるほど、そういうわけで。)

オーロンは思った。

自分はここまで、想像力が豊かな方だったろうか。

彼女の瞳を通し、その生き方、過去にまで思いを馳せることが出
来ようとは。

また、他の者には頼りなく聞こえるような、その言葉は、こつも
聞こえた。

考えずとも。

己が魂が、自分の行く末を、進むべき正しい道に導くだろう

と。

「あんだ…難儀な女性むづかしいですねえ。」

やがて態勢を斜にして、刺激にあてられた全身を休ませながら、テーブルを指で神経質そうに叩く彼。

「殺伐としている方が、ずっといい顔してるなんざ。きつとロクな死に方しませんぜ。」

「随分な言い方ですね。」

目尻を吊り上げて返す彼女からは、既に先程の凄味は感じなかった。

そのことが余計に、愉快で。

「褒めているんですよ。」

そう言っ て彼は、グラスを一氣にあおって片付ける。

「ちなみに…この羽根について、何か掴めたんですかい？」

「国立図書館に何日か通い詰めました。しかし、どうしても行き詰まってしまっ て…。そんな折、ここを思い出したんです。」

フィンドルが続けて取り出すのは、このバーの場所が明記されている名刺だった。

前回の接触の際、オーロンが渡した物である。

「これは『皇帝孔雀^{クジャク}』と言われる鳥の羽根だ。

世界有数の資料を誇るあそこなら……そこまでは余裕で辿り着けたはず。

違いますかい？」

「仰るとおりです。」

彼女の返答に頷いてから、彼は再び唇を開いた。

「私が知りうる限り、これが、この中王都市で繋がる事柄は一つしかない。

ただし、その一つとは。

『表』で探している以上、一生かかっても見付からないものでしてね。」

謎かけのようだが。

その口ぶりから、オーロンは何かを、確実に知っているようだった。

「そして、真実を知れば……早期のうちに私に相談されたことを、これ以上ない祝着だと感じることでしょう。

やはり、あんたにゃあ、運命が味方してるに違いありませんぜ。」

「？」

「この件、教えてさし上げますよ。
ただし…」

「その見返りとして…例の事件を取材させると…？」

彼女は身構え、先んじて言った。
ムーベルマの惨事、騎士団との確執を表沙汰にするのは、今はどうしても避けたかった。

「とんでもない！
情報屋としての私を頼って来られた以上、あんたはもう客ですぞ。
お客様に対して、そんな無粋な真似、出来るはずないじゃないですか。」

しかし、返ってくるのは意外な反応。
うやうやしくお辞儀をした後、彼は続けた。

「ときに、お客様。
これから暇ですかい？」

「……と言いますと？」

突然の申し出に戸惑いながら、フィンデルは訊き返す。

対するオーロンは、おもむろに立ち上がり。
壁に掛けられていた外套に袖を通し、身支度を始める。

「あいにく、自分はこれから、すぐに出発しなけりやならないんです。」

数日に渡る取材が先用で入ってましてね、そちらの依頼は後回しにせざるをえない。

しかしながら、一緒に取材の地までご同行いただければ、お互いにとって時間が有益に使えるということです。

いやもう、前から編集長がカンカンで……これ以上サボると私のクビが……おっと、旅費くらいは、こちらで負担いたしますぜ。

とまあ、とにかく、あ、いかがでしょうか？」

「わかりました……」

それで、場所は……」

つくづく口の回る男だと。

フィンドルは呆れ半分、感心しながら呟いていた。

「ちよいと西まで。」

今、飛翔艦に関する、何か妙な大会が催されているのをご存知ですかい？

そのゴール地点での取材を任されてまして……」

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第五話 『以心変心・中編』

1

道の両端に大きな松明たいまつが置かれ、辺りを煌々と照らす。

選手村の夜は、格段の趣きがあった。

酒盛り場から風に乗る、楽しい音楽と料理の香り。

戒達は、それに後ろ髪を引かれつつも、宿への帰路についた。

双子の姉妹が興味を示したものを、右から左へ。
散々遊んで、散々歩いた。

歳相応の遊びを、教会の暮らしでは制限されていたのだろう。
遊びたい盛りの子供が、羽目を外す気持ちも分からないでもない。

戒は、終日振り回されたことを鬱陶しく思いつつも。
少々の理解を添えて、出来るだけ平静に努めていた。

加えて今夜は、いつ凶獣に襲われるとも知れない野宿とは違い、
綺麗で柔らかいベッドが待っている。

明後日から始まる後半戦。
入賞を狙うための準備と、十分な休息をとる時間は十二分にある

ところが、宿の手前に差し掛かったところで、三人は不意に足を
止めた。

門前で、シュナと大きな図体の物体が、何やら話しこんでいるの
である。

「あれは、ジャグマー君…？」

エリスが小さく呟く。

「誰か、不正でもやったんじゃないの？
もしかして、失格かしら？」

「そんなわけ…あるか。」

さらに続くレンの冗談を、戒は一旦は短く切って捨てたものの、
すぐさま表情を変えた。

そのクマの着ぐるみが、こちらの姿を発見したかと思えば。
猛然と、大きな足取りで近付いて来るのである。

「……がッ!？」

そして戒は、一気に振り抜かれたクマの拳に、全く反応することが出来なかった。

分厚い布越しの拳自体は、非常に柔らかい材質だったが、その勢
いのため、瞼の裏では星が飛ぶ。

「な……なにしやがる…!？」

大きく後ろへ反り返った首を向け直し、怒鳴りつける彼の言葉は
至極もつともだった。

ところが相手は、その一撃でも気が収まらない様子。
さらに彼の襟を掴み上げ、拳を振り上げようとする。

「ま、まちなさいよ、この暴力グマ!!」

「やめてください!!」

体格差にも物怖じせず、両者の間に割って入るレンとエリス。彼女達が腕に食らいつく恰好で、二発目は寸前で止められることとなった。

「戒……」

そこへ、シュナが神妙な顔つきで歩み寄り、戒の耳元に迫る。

「なに……!?!」

その言葉を聞き、血相を変えて宿の中へ駆け込む彼。双子の姉妹もただならぬ空気を感じたらしく、顔を見合わせた後、それを追いかける。

「……バーグさん。」

三人が去った後。

シュナは改めて口を開いた。

「悪いが、正体を明かすのは、お前さんにだけだ。ギルドとは、ちょっと訳ありだよ。」

皆が俺と関係していることがバレると、面倒なことになる。」

その場で背中を向けたまま、淡々と答える彼。

「すみません。」

私がついていながら、こんなことになっちゃって…。」

「いや。」

こんなに環境の良い場所を用意してくれたのは、まさに不幸中の幸いだったぜ。

何か状況に変化があつたら、連絡をくれ。

俺の方も……ダメもとで色々と当たってみるからよ。」

そして、別れの挨拶として片手を力無く上げ、彼は夜道の闇へと足早に消えていった。

戒が部屋に踏み込むと、まず目に飛び込んできたのは、白衣を着た小人だった。

そして次に。

ベッドに全身を沈ませ、息を荒げている世羅。

その脇では、タンダニスとザナナが付き添っていた。

「…おぬし、一体どこに行つとったんじゃ。」

連れの娘が大変なことになつとるぞ。」

「くわしく説明しろ。」

タンダニスの言葉を真つ向から返して、戒はベッドに歩み寄る。
一変して衰弱しきつた彼女の様子に、身の硬直を余儀なくさせられた。

「体調不良で倒れたところを、ギルドの施設で保護されたくての。

あのクマの人形が、わざわざこの宿を探して、運んで来てくれたというわけじゃ。」

彼の言葉を片方の耳で聞きつつ、戒は喉を鳴らしながら、世羅の顔に手を差し伸べる。

熱い吐息と体温が、触れる前から伝わるようだった。

「…こいつは？」

白衣の彼を見下ろしながら、戒はさらに訊く。

「見ての通り医者だよ。

自分も、あのクマに強引に連れて来られたクチさ。」

肩をすくめ、甲高い声で答える相手。

「あいつが…どうして、そこまでする義理がある？」

戒は自分の頬に触れながら、さらに殴られた理由も探していた。

「そんな疑問より、この患者のことを聞くのが優先だろう？」

発熱と意識混濁で、極めて危険な状況にあるんだ。

この、やたらに腫れた右手が原因かもしれない。

何か前兆みたいなものは無かったかい？」

そう言われて、戒はザナナに目を向ける。

だが、豹頭は左右に首を振るばかりであった。

「
陛下。」

そこで部屋に入ってくるアリアナ。

「どうやら、この付近で常駐している医師は、今は不在のようです。
大会側が村を貸し切った時から、休暇をとっているらしく…」

彼女は息を整えながら、落胆した様子で続けた。

「地元の医者って、こいつのことじゃないのか？」

彼女の報告を聞いた後、戒は再び男を見下ろす。

「俺は、ギルドに雇われている船医だよ。」

ほら、あの向こうの湖に泊まってる、大きな船さ。」

彼は、唇を尖らせて返した。

「それにしても、他の医者の見解が知りたかったのだが…参ったな。こりゃ、街まで戻らないとどうにもならん。」

「街って…ここから、どのくらい時間がかかるんだよ?」

そして、ぶつぶつと呟きだす彼に、戒は詰め寄る。

「俺も乗ってる、中途離脱の選手達を乗せた第一便は、明日の昼に出発する予定さ。」

その日のうちの夕方には、何とか到着できると思うけど…」

「とても、それまで身体が保たねえぞ！」

何か…他に方法はねえのか?」

「ならば、わしが運んでやろう。」

感情的に騒ぐ戒の肩を抑え、一歩前に出るタンダニス。

「どつやって。」

睨み合っていた二人は、同時に目を剥いた。

「もちろん、湖を泳いで渡るんじゃないよ。そのくらい朝飯前じゃて。」

「あんな……冗談でも、それは勧めないぞ。夜の水温はかなり低いんだ。病人なら肺炎を起こしかねない。」

医者 は半眼で、呆れながら言った。

「そうか…。」

「そりゃ、まいったのう。」

「真面目に考える！
このファンドシ野郎！！」

どこか飄々（ひょうひょう）とした苦笑を浮かべるタンダニスに
対し、悪態をつく戒。

「せっかくの陛下の親切心に、何たる口の利き方ですか！！」

さらにどうでもいいことに、そこへアリアネが突っかかる。

「はいはい！

患者の前では、お静かに！！」

そんな喧騒に目がけて、手を叩いて注目させる医者。

「しかし、この発熱具合は、ただの風邪や体調の変化じゃない。おそらく元を断たなければ下がらんぞ。つまり、原因が特定できない限り、打つ手なしだ。」

「お前、医者だろ！？
何とかしろ…」

弱気を見せる彼に、戒は苛立つ。
その肩を、今度はザナナが背後から抑えた。

「このまま放っておくと、どうなる？」
そして呻くような声で訊く。

「さつき打った解熱剤の効果が薄いのが、非常にまずい。
こんな状態が長く続けば、最悪の場合……失明や脳障害、生殖機能の喪失などを引き起こす可能性がある。」

医者の言により、絶望の空気が室内を支配し。
世羅の吐息の音が目立つようになった、その時。

「
そうよ！」

部屋の隅で、様子を伺っていたレンが突然に叫んだ。

「薬とか病気だったら、うちのお父さんが詳しいじゃない。
何とか出来るかも。」

「……本当か!？」

不意に射した一つの光明に、戒は色めきだつ。

「私、すぐに呼んできます!!」

反転し、駆け出すエリス。

だが直後、その身体は、廊下で構えられていた太い腕によって宙に浮いてしまう。

「こら、急に走ると危ないぞ、エリス。」

抱いた彼女を優しく叱りながら入室したのは、なんとウベ本人であつた。

「……何か、あつたのかい？」

やがて彼は、そんな自分をやたらに注視している全員を見回してから訊ねた。

「これは……蛇薔薇スネイクローズの毒では、ありませんか？」

全ての事情を聞いたウベは、世羅の容体を確かめるなり、あっさり
と診断を下した。

「学術書でしか読んだことは無いが…確かに、症状が酷似してるな。
もしかしたら……いや、きっとそうだ。」

「おい、二人だけで納得してるんじゃないよ。」

そんな彼と医者の中に、戒が割り込む。

「蛇薔薇は、中王都市周辺の山間部のみに生息する固有の植物だ。
茨の部分に強烈な毒がある。」

「あの手の擦り傷……そうだったのか…！」

戒は後悔から、拳を自分の手の平に叩きつける。

当時はパンリの惨状に気を取られたあまり、彼女の様子を、つい
軽視してしまったのだ。

「待てよ……だとしたら、本格的にまずいんじゃないか？」

そして、独り言のように言葉を洩らす、医者の表情は優れないま
まだった。

「刺された直後なら、患部から毒を放出すれば済むことだが…。
彼女の症状は、すでに潜伏期間を過ぎて、第二段階に移っている。」

「ええ。」

こうなるともう、体内に回った毒を、解毒するしか方法はない。」

ウベは冷静な口調で返した。

「これを解毒する薬草は何だったろうか…？
いや、これから採取するには時間がかかる上、精製にも特殊な知識が要る。」

やはり街に行かねば…。」

「アガレア樹木の新芽。
これでしよう？」

医者不安をよそに、ウベは鞆から赤茶けた草を取り出す。

「これは…ついてる！
持ち合わせがあるなんて！！」

「薬師とは、常に色々な状況を想定しているものです。
そして、この種の毒に対抗する手段は、近くにある自然が生み出してくれるのが定石。」

こうやって、行く先々での採取を欠かさないのは、癖みたいなものなんですよ。」

「……本当なの、お父さん？
そんな、都合よく……？」

室内が安堵の空気に包まれる中、エリスが言った。

ウベはその質問に、少し黙り、考えてから口を開く。

「どうして、そんなことを聞くのか……わからないな。
お父さんが、いつもしていることだろう？」

「……。」

そうして穏やかな口調で頭に乗せられる父の手に、エリスは異様な圧力を感じて黙り込んだ。

「まさに備えあれば、憂いなし……か。
それなら、後はよろしく頼むよ、薬師さん。
これでようやく、俺も持ち場に帰れる。
向こうも、怪我人が沢山だね。」

肩の荷が降りたように、医師は笑顔でそう告げて、部屋を出て行った。

「礼の代わりにもならんがの、せめて帰り道をお送りいたそう。」
それに、タンダニスとアリアネが続いた。

「助かったぜ…。」

ここまで来てリタイアなんて、たまらねえからな。」

戒は大きく息を吐いて、床に座り込み。
力無く笑いながら呟いていた。

「皆…少し席を外してくれないか。
彼と大事な話がある。」

「…？」

そこで、唐突に言葉を発するウベ。
無論、エリスとレン、ザナナに向けられたものであった。

だが理由を聞いている暇も無く、三人は彼の言葉におとなしく従った。

「…話って何だよ。」

そんな暇があったら、早く治療にとりかかってくれ。」

床に座ったまま、不満そうにこぼす戒。

「単刀直入に言わせてもらおう。」

ウベは真剣な顔つきで迫り、切り出した。

「この容体から見て、今ここで処置したとしても、とても後半戦が開始されるまで全快には至らない。

だから……彼女を救う条件として、君達のリングを全て渡してほしいのだ。」

そして、世羅に視線を落とし、戒に向けて手を差し出す。

「私は、この選手村に辿り着く猛者達を観察しているうち……。このまま幼い娘達を連れて、上位入賞に食い込むことなど、やはり不可能だということを確信した。」

彼は、奥歯を噛みながら続けた。

「天命の輪を持つ君は、私のような凡人とは違う。より多くのチャンスを持っているはずだ。

その気になればどこでも重用されるだろうし、どのような仕官だっ葉うに違いない。」

それはひたすら自分を正当化し、諭すような口調だった。

「この申し出が、どれだけ破廉恥なのかは重々承知だ。しかし私達が勝つためには、この方法しか無いということも理解して欲しい。」

「ふざけんなよ、てめえ！」

戒は、跳ぶようにして立ち上がり。
自分の腕輪、そしてホルダーにかかったリングの全てを、ウベの
胸元に乱暴に突きつけた。

「こんなモンが欲しいなら、一言で済むだろうが！
回りくどい話をしやがって！！」

「そう感情的にならずに、もっと深刻に考えてくれ。
あの不笑人の彼とも、よく相談した方がいい。

双方が納得した上でなければ、私としても実に胸が悶える心地だ。

「あと少しでも無駄口を叩いてみる。
その口、ブツ潰すぞ！！」

「……！！」

交渉の流れによつては、自らの譲歩も覚悟していたウベは、目を
見開いて驚いた。

そしてまた、彼はそれ以上問わなかった。

戒の怒りは、脅迫まがいの申し出に対しては微塵も無い。
そのことが気迫から知れた故である。

ウベは早速、鞆を開き。
小さなすり鉢と、先程の草を取り出して作業に取り掛かる。

「熱い湯が必要になる。
都合して欲しい。」

「ああ!!」

言われるがまま、扉を開いて飛び出す戒。
すぐその裏で待っていた三人とも、目もくれずに走り抜けて行く。

「……お父……さん？」

入れ替わるようにして、レンが部屋を覗くと。

床に置き去りにされている、腕輪とリングの数々。
エリスに至っては、その光景は、とても受け容れられるものでは
なかった。

「これより、処置にとりかかる。
向こうへ行っていないさい。」

だが、中腰で作業をしている父の横顔は、驚くほど冷ややかで。

無機質な瞳は、何も映していなかった。

まるで、辛い現実から逃避するかのように、身体が深い眠りを欲していた。

パンリが目を覚ましたのは、実に、翌朝のことである。

染み一つ無い綺麗な天井。

自身が沈むベッドから漂う、清潔感のある香り。

だが彼は、それらに違和感を覚える以上に、奇妙な静寂を感じていた。

まるで旅の途中で、自分一人が取り残されたような、孤独にも似た空気。

それに絆^{ほど}されて、記憶の断片が押し寄せてくる。

「……」

シーツをわずかに持ち上げ、恐る恐る確認した。

わずかな傷跡も無く。

元のまま、意のままに動く足がそこにあることが判ると　　パ
ンリの思考は、すぐに世羅を経由して戒に辿り着いた。

「……。」

安堵と共に、窓の外へ目を向ける。

辺り一帯、色濃い芝生が敷き詰められた庭園は、まるで平和を象
徴するような情景だった。

だが、その中心で座り込むカジェットの姿を見止めた時。
パンリは反射的にカーテンを閉めてしまった。

ほどなくして隙間から覗くと、彼女はたまに上体を大きく前傾し、
うたた寝をしている様子が判る。

きちんとした施設で介抱されている自分とは、あまりに対照的な
その姿に、彼はにわかに混乱した。

「…起きたの？」

だが屋内においては、かすかな物音が気付かせたのだろう。
部屋の扉を開けて、無遠慮に入って来る者がいた。

「シュナさん…！？」

まず、彼女の存在に目を丸くするパンリ。

「思ったより、元気じゃない。

…おなか空いたでしょ？

食事の用意をしてあげるから、こっちに來なさい。」

説明を求めようと外へ目を向ける彼を置いて、シユナは足早に寢室を出る。

その後を追うと。

廊下には沢山の部屋がある割に、やはり一様に静けさが支配していた。

「ここは、選手村よ。」

途中。

彼女から聞かされた言葉に、彼は早速、淡い期待を挫かれた。

カジェットが外にいた時点で薄々勘付いていたが、ここは安寧が保証されている地ではない。

コルススとの対峙。

恐怖、屈辱、苦痛の全てを覚えている。

完全な心の安らぎ。

しかも、速やかな『それ』を求めていたパンリは、落胆せざるを

えなかった。

「……シュナさんがここにいるということは…バークさんも見付かっただんですか？」

それでも…もう一人いないと、参加は出来ないはず…」

大広間に入ると、彼は思考を紛らわせるため、適当なことに気を回しながらソファに座った。

「私のことより、まずは自分のことでしょ。」

だが、彼女は見透かしたように、背後からその小さな肩に触れて、話を引き戻す。

「…！………すみません…」

対し、すぐさま目を伏せる彼。

初めてまともに咎められたような気がして、湧き上がる感情の下、自然と四肢が硬直した。

「まあ…どう叱ってやろうか、色々考えてたけど。」

あんたの無事な姿を見たら、全部吹き飛んじやったわ。」

だが次の瞬間、朗らかな言葉と共に、パンリは強く抱かれていた。

「言われたとおり…甘かったみたいです…
強くなりたいけど…やっぱり…自分には…どうにもならないって…。」

その胸に赤子のように身を任せ、自責の念で咽ぶ。

「今は何も考えなくて、身体を休めなさい。
何か美味しいもの食べれば、きっと気分も上向くわよ。」

「…ありがとうございます…。
…でも…食欲が…」

「こういう時は、無理にでも食べるの。
あいつの力で傷は治せても、失った血は戻らないんだから。」

シユナは少し離れてから、笑顔で人差し指を振り、妙に真実味のある忠告をする。

「そうだ…。
先に…戒くんに謝らないと…」

だがその一言で、パンリは重要なことを思い出した。

「私の傷は、かなり深かったんです…。
その痛みを抱えて、これからの競技に望むのは不本意でしょうし…。」

眩きながら力無い笑みを浮かべる。
そんな彼を、シユナは全ての動きを止めて、複雑な表情で見詰めていた。

一層、深まっていく静寂が、何かを予感させた。

「きつと…明日は晴れるな。」

船尾の甲板上で、手すりにだらしなく背を預けながら、戒は快晴の大空を眺めていた。
遠くに喧騒を目に納めながら、ザナナは無言で頷く。

二人と同じ甲板にいる人ばかりは、脱落者の類ではなかった。
選手村に辿り着きながら、賢明な判断をもって、自ら棄権することを選択した者達である。

だが彼等に、不思議と悲壮感は無く。

戦利品を各々の手に、大きな催しに参加できたという、一種の満足で熱気立っている様子だった。

「…今回は悪かったな。」

「……何がだ？」

その熱に無常を感じつつ呟く戒に、豹頭は真剣に訊いた。

「まだ、暴れ足りないんじゃないかねえかと思ってよ。」

「平気だ。」

ザナナにとって、『それ』は大事ではない。」

「…そうか。」

戒は苦笑を浮かべ、無頓着そうに喉を鳴らしている彼を眺めていた。

こういう仕草を見ると、たまに本当に半獣なのではないかと疑ってしまう。

暫くして、船が大きく揺らいだ。

見ると、クマの着ぐるみが二人がかりで、湖に沈めていた大きな錨を引き上げている。

それを皮切りに、出発が近いことを察知した連中は、船室へ向けて続々と流れ始めた。

「そろそろ…部屋に戻るとするか。」

伸びをしながら、手すりから離れる戒。

「戒は、もう少し、ここにいろ。」

だがそこでザナナは彼の肩を掴み、強引に押し付けた。

「…？」

その腕力にバランスを崩し、戒は思わず振り返る。

向いた視線の下。

湖の畔には、パンリが立っていた。

「…何で、お前…ここに…」

「全部……シユナさんから…聞きました…！」

息も絶え絶えで、さらに寝巻き姿のまま喚く彼に、戒は思わず眉をひそめる。

「…世羅さんの…容体は……？」

「もう毒は消えて、熱も下がった。

まだ眠っているけどよ…まあ、大丈夫だって話だ。」

「…私のせいで……彼女が…皆さんが棄権することになってしまうなんて…。」

間違ってる！」

早口で続くパンリの声は、今まで聞いたことが無いほど大きかった。

「貴方達には、夢があるのでしょうか？
やりたいことがあるのでしょうか！？」

それが、どうして、私のようなつまらない者のために……！！」

だが、その言葉の出どころへ、近くにあつた清掃用の桶を投げて命中させる戒。

「……い……痛いです……！」

「黙れ、馬鹿。」

涙目で訴えるパンりに、拳を前に構えながら、ぐつと身を乗り出す彼。

大型船は、ゆっくりと水面を進み始めていた。

「まるで世界の終わりみたいに、大声で騒ぎ立てやがって。
俺様がこの程度で挫折するような、小物みてえに思われるだろうが。」

「そんなこと……気にしてる場合ですか！」

パンリは追いかけて、さらに叫ぶ。

戒の言葉が強がりということを知っている。
犠牲にしたり、犠牲になったりすることを、彼が人一倍嫌っていることも。

「……じゃあ、何なんだよ。」

「……言いたいことがあるなら、こっちへ上がれ。」

だが、そんな相手は、気を取り直すように一度だけ咳払いをし、地に向けて、大きく手を伸ばす。

「……それは……」

対するパンリは、口ごもりながら、何故か立ち止まっていた。

理由は解らないが、足が進もうとしなかった。

もう逃げたいはずなのに。

虚ろな表情で俯うつむいて、遠ざかる飛沫しぶきの音を感じていることしか出来なかった。

「　　気が済むまで、やってこいよ。」

それに混じって聴こえた、啞然とするような言葉に、瞳を向ける。

進み行く船上には。

口角を歪め、根性が悪そうに笑う、普段の彼の横顔があった。

周囲で鬱蒼と茂る木々と。
背丈の短い草花が。

風に吹かれ、生温い音を立てていた。

「…どうして、踏みとどまったのです。」

その背後から迫る、ベルツサスの声。

「あの船に乗ってしまえば、君はもう戦わなくて済んだというのに。」

「ずっと、見ていたんですか。」

振り向きざま、目に涙を溜めたまま睨み付けるようなパンリの顔を、彼は一瞥した。

「ええ。」

君を守る義務がありますので。」

「義務…。」

その間接的で無機質な語句に、思わず閉口する。

「どうやら、考え違いをされているようだ。

二代目に付き合う羽目になった経緯には同情していますが……ただそれだけです。

君に対する私の全ての行動は、彼女の不始末を処理しているにすぎない。」

ベルツサスの人当たりの良さは、嘘のように消えて。

今では、鉄面皮が冷たい言葉を吐き連ねていた。

「…思えば、二代目が頭領の座を継いでからというもの、私の役目は、ずっとそれに終始していた気がする。」

拳句の果てに両腕をだるそうに組み、傍の大木に身を委ねながら、溜め息混じりに呟く彼。

「人には、他人を見限る権利が、いつでもあるのかもしれない。」

そして感慨深げに放たれた一言に、パンリは拒絶感を抱いた。

単なる愚痴ととれる言葉だったが、その向こう側があるような気がした。

シユナや戒が、こんな自分を庇^{かば}い続けるという、異様さを思っ
ての一言かもしれないと

「君も遠慮なく、我々を見限ってもらって構わないのですよ？
二代目は、君を守るという約束を果たせなかったのだから。」

だが、ベルツサスは次の瞬間、全く別の問いかけをしてきた。

「……それでは、貴方達が困るんじゃないんですか。」

「こちらの状況が窮^{きわ}まっているのは、今に始まったことではありません。
せん。」

元々、コルスス達と比べて、組織力も戦力も圧倒的に劣っている。

「

首を左右に振り、堰を切ったように飛び出す辛辣な言葉は、蓄積
されていた彼女への憤懣^{ふんまん}だろうか。

「ならば……まず、貴方が彼女を見限るのが自然の流れでしょう？
それとも……仲間だから……出来ないとも言うのですか……」

パンリは無意識に、自分が抱いていた不可解な気持ちの答えを、
ベルツサスに求めている。

「……仲間だから見限らないのではない。」

彼は、その真意を知ってか知らずか。

「絶対に見限らないと決めたから、仲間なのです。」

瞼を薄く閉じて、小さく呟いていた。

皆が寛容なのは、自分が未熟に扱われているからとばかり考えていた。

「…だから、ここで君が脱落し、我々の空挺団が潰れても何ら後悔はありません。」

二代目の出した結果であれば、甘んじて受け容れることが出来る。

「

だが、その言葉を聞きながら、パンリは償いたいと思った。

「あなたは……私を守るのは、『彼女の不始末の処理』と言った…。まさか…カジエツトさんは…」

「ええ。」

徹夜した状態でさらに一晩中、見張り続けるなど、無謀と言わざるをえない。」

首肯するベルッサス。

その事実、膝を落とす。

庇護を約束し、弟子として扱ってくれた彼女に、偽りは無かった。それに比べ、自分には果たして同等の気構えがあったろうか。

「……何だ…これ…」

何かが腹の奥底から逆流して、急に吐き気をもよおす。

粘性のある、どす黒い感情。

生まれて初めて体験する、自分への憎悪だった。

全身が溶かされそうで。

だらしなく地面に這いつくばり、いつの間にか、砂利を嚙んでいた。

3013

「一時でも、源法術士を志したのならば その感情を込めて、
今こそ唱えればいい。」

ぼやけた視界の中。

厳つい表情のまま、自分の手をとるベルッサスの姿。

(……《源・衝》フェルード……！)

いざなわれるまま、口が微かに動いていた。

重なる手中で何かが弾けると。

彼はすぐに両腕で自身を抱き、今にも零れ落ちそうな、不安定な感覚を掴み込んだ。

「ベルツサスさん…！」

そして、期を逃したくない一心で上半身をもたげ。

「お願いがあります…！！」

切り出さずにはいられなかった。

「…30秒だけ、待ちましょう。」

ベルツサスは彼の顔を少し眺めた後、
背を向けて、口調を冷淡に戻して返す。

猶予の間、パンリは大声で泣いた。

盤外へ出た者達を乗せた船便が向かう先は、奇しくも競技の終着地である。

ギルドによる貸切のため、船内では何の気兼ねも要らない。が、『中途の脱落者』と、まがりなりにも選手村へ到達することができた『勇気ある離脱者』との扱いの差は歴然だった。

怪我人が多いせいもあるが、前者は三等以下の客室で雑魚寝を余儀なくされているのに対し。

後者に充てられたのは、立派な二等客室。

普段は一端の観光船として使われているらしく、それらの区画には厚い絨毯と、廊下には見晴らしの良い大窓が設置されていた。

そこから眺望する湖の様子は、非常に穏やかで。気がつくものといえば、船体が水を掻き分ける際に作る細波くらいなものである。

戒はすぐに、そんな船内見物にも飽きて、世羅を休ませている部屋へと足を向けた。

その途中、果物や干し肉などを両手一杯に抱えたザナナと、廊下で遭遇する。

「……今は、その量は無理だな。
いくら食い意地の張ったあいつでも。」

歩を合わせ、その内の一粒に手を伸ばす彼。

「仲間をかばって傷つくのは、ザナナの故郷では、最高の名誉だ。食いきれないくらいで、ちょうどいい。」

だが相手は顔を真正面に向けたまま、早足になってかわす。

厨房で働く料理人達も災難であつたろう。

戒は虚空を切った手を遊ばせて、ただただ苦笑した。

「……最高の……名誉ねえ。」

そして、ふと足を止め、頬の古傷に触れながら呟く。

「……ん？」

それつてもしかして、釘を刺しているつもりか？」

直後に気付き、彼は苦虫を噛み潰したような表情で、ザナナの背を睨みつけた。

「あいつの無茶さ加減はな、初めから勘定のうちだ。お前に言われなくなつて、怒る気……」

「そうか。」

戒の口ぶりから内容を解し、ザナナが途中で会話を断ち切る。

それ以上の説明は必要無かった。

彫り物の施された重厚な扉を開くと、中に満ちていた薬草の香りがそれぞれの鼻腔をくすぐる。

室内にあるベッドの上で、おとなしく横になっていた世羅は、彼等二人を見た瞬間に飛び出して。

直後、柔らかい絨毯に足を取られてよろめいた。

そんな彼女を、背の高い観葉植物の脇で受け止める戒。

「おい…平気か…？」

約一日ぶりの会話を、まずは障りの無い言葉で探る。
支えた華奢な身体には、まだ微熱が残っていた。

「…うん。」

へーき、へーき。」

すぐに彼から離れ、ベッドの上に跳んで腰掛け、はにかんで返す
世羅。

健気だが、その言葉は額面通りには受け止められない。
仲間に心配かけまいと元気に振舞うのは、彼女の悪い癖だ。

「じゃあ、恐い夢でも見たか？」

今度は、子供扱いするようにからかうと。

「…二人が…どこか遠くに行っちゃったのかと思って…」

世羅は後ろに束ねている髪を左右に大きく振って、閉じた腿ももに両手を挟んで縮こまった。

「ザナナは二度と、黙って消えたりなどしない。」

そこで、抱えていた食料を棚の上に降ろし、強い口調で言い放つ彼。

それを聞き、身体の力を解く彼女を傍で見、戒も安堵した。

これから辛い事実を伝えなければならないのだ。

その負担が、少しでも楽になることに越したことはない。

「隠してもしようがねえから、はっきり言っておくけどよ…。
この大会、こちらは降りたぜ。」

世羅の落ち着いた様子を見計らって、戒は一気に切り出す。

「…うん、知ってる。」

だが、そこで返されたのは、意外な言葉だった。

「……全部、聞こえてたから。」

さらに呟く世羅。

先程の彼女の行動は、罪悪感からも起因しているのだと、二人は感じ取った。

「熱がひどかった時も…意識はあったのか？」

戒が近寄って訊くと、シーツを掴む力が強まる。

「あ、あんまり悔しがるなって…」

「悔しいよ。」

励ましの言葉を遮り、世羅は再び身体を強張らせて言った。

そんな憂いだ横顔を暫く眺めているうち、踵を返して無言で部屋を出るザナナ。

本人は気を効かせたつもりだろうが、こういう時こそ『名誉云々

」の話を、本人の前でしてやれば良い。

まったく無粋な奴だ、と戒は恨めしそうに彼の背中を目で追った。

「でもな。

お前が落ち込んだら、助けられた奴の立場はどうなんだよ。」

場を一方的に任された形になって、苦し紛れに呟く言葉。

もう、慰めているのか責めているのか、戒自身にも解らなくなっていた。

だが。

そんな一言にこそ、世羅は顔を上げた。

「そっか…。

そうだよな…。」

ふっと、普段の穏やかな顔つきに戻り。

「ねえ、パンリは元気になった？」

そして熱い眼差しで戒を見詰めながら、再びベッドで横になる彼女。

「ああ…。

だから、次にあいつと会う時のために、お前も早く元気になっておけ。」

戒にしてみれば、別段、優しさを演出したつもりは無かったので、全身がむず痒い。

だから、再び彼女が休む様子を見せれば、すぐにでもザナナの後にくつもりだった。

「あの時……どうして、川の近くへ行っただ？」

だが背を向けて、彼女から目を離れた途端、口が動いていた。機を逃してはならないと、逸る心が後押ししたのだ。

「……え？」

その辺りが涼しいかな、と思っただけ……」

振り向くと、綺麗な双眸そうぼうが何の疑問も持たずに、純粹に見詰め返してくる。

高熱をもたらす毒が、急激に彼女の全身に回ったのは、入浴したことが一因だと、ウベは言っていた。

その後、涼を求めた彼女の行動は、ごく自然である。

だが戒は、自分とシユナとの会話を、彼女が気にしているのではないかと疑っていた。

しかし今の態度を見る限り、それを聞いたかもしれないが、おそらく内容までは理解していない。

どうやら完全な思い過ごしだ。
ともすれば、この質問自体が、何とも女々しい。

戒は己の足元から、蟻のように這い昇ってくる不快感を掻き消すように、素早く世羅の両手を握った。

「俺様と一緒にいれば、いずれ飛翔艦は必ず手に入る。
お前は、そこで飛翔艦乗りになる。」

世羅はそのままの姿勢で、上体を退いた。
驚きを隠せない、そんな仕草に戒は笑う。

「協力する見返りとして、レティーンに來い。
そこに俺様の目的がある。
…最後まで付き合ってやるんだ、必ず役に立てよ。
…絶対だぞ。」

「うん……！」

聞く人が聞けば、卑しくも尊大で、強引な言葉であろう。
だが世羅は、これまでで一番の快活な返事をした。

挫折感は晴れ。
夢が不思議と、途端に現実味を帯びてくる。

戒が自分に対して、旅の目的を明確に話してくれたのは、これが

初めてだったのだ。

根拠の無いことを、胸を張って言えること

相手の喜ぶ顔や、希望に満ちた表情を見る度に。

これが己の利点なのだと、戒は少し自覚している。

流石に八方塞がりの苦境に立った時には、糞の役にも立たないが、
一方で可能性があれば、功を奏す特技だ。

これまでも、そうやって何度も状況を打破してきた。

…今回も間違っていないはず。

シュナの提言に僅かながら従ってしまったことが少し気に入らないが、この件は、どのみち世羅に話すつもりでいた。

…丁度いい機会だったのだ。

戒は部屋の扉を閉めた後も暫く、そう自分に言い聞かせていた。

そこへ不意に、廊下の先で待っていたザナナの槍が、視線の前を横切る。

「
いやはや、ついてますなア…！」

ボクちゃんをボコボコにした奴等と、同じ便で遭えるなんて…！」

同時に、ノイズのように響く、不快な声。

廊下の床を伝わる、集団の足音。

「なるほどな…。」

これに乗った以上、こういう可能性もあるか…。」

身構えるザナナの脇で、戒はどこか納得したように呻いた。

大方、船内を見物していた時に目を付けられていたのだろう。

こぞって姿を見せ始めた連中の先頭。

顔面や四肢に包帯を巻いていて判別しづらいが、おそらくは競技中に交戦した男達である。

さらにそこへ、野次馬的に加わっている連中を含め。

総勢10名程によって、狭い廊下の両端は埋められていた。

しかもおめでたいことに、彼等は自分らを、同じ『手負い』だと思っ込んでいる。

「おい、ザナナ。

てめえの故郷だと……仕返しにきた奴に対しては、どうもてなすんだ？」

待ち望んでいたとばかりに笑い、指を鳴らし始める戒。

「…息の根を止める。」

深くこもった豹頭の返答に、さらに彼は口笛を吹く。

どこか懐かしい暴の匂いが漂い始めると。

二人は何の申し合わせも無く、左右に分かれた。

これからも、同じことの繰り返しかもしれない。

だが、戒は拳と蹴りが乱舞する宴に興じながら、新しい運命に身を任せる覚悟を決めていた。

がくり、と自分の頭が大きく垂れたところで、カジェットは夕暮れの景色に気が付いた。

胡坐をかいたまま、ずっと寝ていたため、下半身が痺れきっている。

見張るべき部屋の中にも、もう誰もいない。

「寝ちまったのか…」

「ええ。

それはもう、ぐっすりと。」

間の抜けた独り言に対する、背後から皮肉混じりの声。

彼女はそのままの姿勢を崩さずに、歪んだ表情を一層に強めた。

そこへ畳み掛けるように、ベルツサスはこれまでのいきさつを重ねる。

パンリの負傷から、それによって引き起こされた世羅の病。

戒らの苦渋の選択。

建物の裏で、ただ愚直に一室だけを見張っていたカジエツトは、そこで初めて事態の深刻さに気付き、頭を抱えた。

「…最悪だな。

何もかも巻きこんじまって…」

「貴女が未熟なのは仕方ありません。

はじめから、期待だっしておりません。」

「…みんながみんな、そうは思ってくれねえだろ。」

彼の冷言に全く気を留めず、彼女は続けた。

「『群れ』ってのも、そういうもんだ。

あたしだって…先代が死んだ時は、何か……力強い後ろ盾が無く

なつた感じがして、絶望した。

やっぱ、頭つてのは賢く…強くあるべきなんだよ。」

「その苦勞を承知で継いだのでしょうか？」

「……わかんねえ。

ただ、大好きな師匠の頼みだったから………そうしなきゃいけない気がしたんだ。」

「肝心なところでも、いい加減ですね。」

無表情のまま、横を向くベルッサス。

「…こんな質問をすること自体、おこがましいがよ…。
今、パンリは無事なのか？」

「……。」

カジェットは、その問いに押し黙る彼の視線を、自然と追った。

そこで思考は止まる。

見張るべき部屋が空になり、ベルッサスが自分を哀れむように傍にいてくれている。

だから、その光景は予想していなかった。

風が凩ぎ、邪魔な音は微塵も無い。

静止した時間の中で、その画が目飛び込んでくる。

大きく葉を広げた大木の根元に、直立不動の少年 瞑想する

ように、深く瞼を閉じるパンリ。

何かを呟くたび、小さく握りこんだ両の手が、それに応じて規則正しく発光を繰り返している。

それは、初歩的な現法術を連続して繰り返す。

カジェット空挺団における、基礎練習法であった。

「彼は『きっかけ』を掴みました。

そして、私が見せた幾つかの手本を、あのとおり完璧にこなします。」

啞然とするカジェットを尻目に、淡々と言葉を連ねるベルツサス。

「まったく…妬ましい才能が眠っていたものですね。」

彼は微笑を浮かべた。

「…お前がそんな風に笑うところ………久しぶりに見たぜ。やっぱ、あたしより…お前の方が…」

「だが、彼はカジェット流の門前に到ったすぎない。ここから先は…貴女の仕事です。」

「……!!」

その言葉に、彼女は戸惑う。

まだ半分寝ているせいもあるが、頭が上手に回らなかった。

そうこうしているうち、ベルツサスが指を鳴らす。

パンリが気付き、急いで駆け寄って来る。

そのわずかな間も全く役に立たず、彼女の頭の中は依然として真っ白で、何も考えがつかなかった。

「…おう……」

「カジェット師匠…!」

気の抜けた彼女が適当にかけた言葉に対して、威勢のいい掛け声。さらに彼は突き進んで来る。

「どうか私にもう一度、機会を下さい！」

強くなるための術を…ご教授いただけないでしょうか!!」

カジェットの足元に達した直後、パンリは伏し、地に額を付けるようにして懇願した。

「ベルツサス!!」

その態度が卑屈に感じた彼女は、思わず怒声を上げる。

「ベルツサス先生は関係ありません…」

本人が弁解する前に、パンリは先んじて言った。

「まず最初に謝ることは、自分で考えたことです…。
自分の気持ちの弱さを棚に上げて…貴女の熱意に気付けなかった。
それを反省した上で…」

「よ、よせよ。」

確かに、師弟の関係つてのは、礼儀作法とか厳しいかもしれないけどさ…。」

カジェットは恥ずかしくなって言った。

本来は、謝るのは迷惑をかけた自分の方であつて、彼ではない。
まるつきり逆なのだ。

だが、彼女はそう思いつつ、その言葉をあえて飲み込んだ。
物事の始まりには、形が必要な時もある。

「い、今までどおりでいいぜ。」

そうやって改められると…余計に気恥ずかしいからな。
行き過ぎな敬語も、やめてくれ。」

「私も先生と呼ばれるのは少々、抵抗が…」

カジエットの言葉に、ベルッサスも付け加えた。

「…ありがとうございます、二人とも!!」

パンリはまたも、気分が良くなるような、はっきりとした声で言う。

照れたカジエットが何気なく脇を見やると、建物の玄関からは、シユナが姿を見せていた。

「見ての通り、状況が変わった。

これからは一秒も無駄にしたくねえ。

食事と泊まる所…ここで世話してもらってもいいか?」

彼女と目を合わせるなり、カジエットは口を開く。

「ずいぶんと不躰^{ぶしつけ}ね。」

シユナは腕を組み、呆れたように返した。

「まあ、いいわ。

男二人は入りなさい。」

そして顎で示し、彼等を屋内に導く彼女。
断れない空気に、まずはベルッサスが従った。

「シュナさん…どうか、穏便に…」

「ちゃんと、台所で手を洗うのよ。」

そして、パンリが小声で囁くものの、今の彼女には取り付く島も無かった。

「さて………忘れたとは言わさないわ。

あんたは、私の好意を一度断ってる。

何でも勝手に、自分の思い通りになる、そんな風に思ってる傲慢な奴を手助けするほど、私は人間が出来ていないんだけど。」

シュナは、真正面から突き放す格好を見せる。

「無礼を承知で相談してんだ。

こっちは、弟子が強くなるためなら………信念くらい、いくらでも曲げてやる。

吐いたツバだって、飲んでみせらあ。」

だが、臆するどころか、さらに一步踏み込むカジェット。

「…器用じゃないわね。

腹立たしいくらいに。」

あまりにも堂々とした相手の態度に、シュナは組んだ腕を解き、それを腰にやりながら溜め息をついた。

「…友達の師匠を名乗られた以上、もてなさないわけにもいかないか。」

そして半身をかわして、屋内へと招く合図を出す。

奥に見える大広間には、既に豪華な食事の用意が整っていた。

カジェットは、考えてもみれば空腹。
目の色を変えて、それを眺めていた。

「急に二組も居なくなつたせいで、食材も余つてんのよ。
腐らせるのも癪だしね…」

シユナは複雑な笑みを浮かべ、再び顎で示して急^せかす。

「悪い。」

全部、あたしの責任…」

カジェットが謝罪を言いきる前に、その頬は強く張られた。

「初めて会った時から、気に入らないのよ。
人の友達をそのかしたり……拳句の果てに、怪我まで負わせてさ。」

痺れる手を押さえたまま早口で捲くし立て、その脇をすり抜ける彼女。

「でも…傲慢なあんたは、一番、傲慢な人間を判らせてくれたわ。きっと親切ってのは、自分の願望の裏返しなのね。」

戒が聖十字を持って消えた時も、事情を知っていながら、寛大になりきれなかった。

今でこそ仲間に戻ったが、彼に一番必要なのは、自分を含めた過去との断ち切りなのではなからうか。

さらに尊敬しているフィンデルへ差し伸ばした手も、拒絶され。パンリもまた、自分の厚意をすり抜けて行く。

「私は…あの子があんな風に変われるなんて、少しも信じてなかったのよ。」

…薄情な友達でしょう?」

他者への好意は、その者の未来を摘む可能性を孕んでいる。恐怖に震える声で、シユナは呟く。

「親切な奴が傲慢なんて話、初耳だぜ。」

だが、小指で片耳をほじりながら、カジェットは返した。

「あたしは、あんたと初めて会った時……パンリには、すごい

友達がいるなっと思った。

その気持ちは、まったく今も変わらねえ。」

そして、大きな足音を踏み立てながら進み。

「そんなくだらねえ話より、腹ごしらえだ。

…今日は徹底的に食うぞ、てめえら!!」

空腹で待ちぼうけをしている二人に向けて、発破をかける彼女。

「…ちゃんと…台所で手を洗うのよ!!」

それに負けじと、シュナも振り向きざまに大声を放った。

4

訪れた正午は、快晴。

腕におぼえあり。

そう言わんばかりの自信に満ちた顔ぶれによって、選手村の小さ

な広場は埋め尽くされる。

進退を考える時間は、十二分に与えられた。

故に、この場に残っている者達には一切の迷いも無い。

「予定通り……我々は、自由にやらせてもらって良いのかな？」

そんな鼻息の荒い連中を煙たがるように。

離れた場所に陣取ったセアムリツヒが、欠伸あくび混じりに訊く。

選手村に着いてからというもの、酒浸りの二日間だったが、ギルド側の使いが何度もなく自分達の宿に訪れているのを彼は気付いていた。

「ええ…計画自体は…変更無いんですがねえ…」

それらとのパイプ役を担っているロメスは、周囲に気を払いつつ小声で囁く。

「ウチの組は、腕輪の数では二番手らしいですよ。
現在、三個差で。」

「ほう、かなり頑張ったつもりだが…まだ上がったのか。」

「…詳細は分かりませんが、かなりの手練だそうで。
くれぐれも彼等とは争わないように、とのこと。」

その他は予定通り、自由に行動して構わないそうです。」

「だったら、尚のこと交戦するべきだろう。」

憂いは、早目に潰しておくに限る。」

密談する二人の背後で、ドーナガンは口走る。

物騒な言葉だが、あながち間違いではなかった。

上位三賞の確保のためには、ギルド班が集めたポイントを、最終的に分配しなくてはならない。

たった一組とはいえ、その計画を脅かす存在があれば、ここでの消極策が仇となる。^{あた}

「いえ、どうか……今回ばかりは、我々を信用してなすって下さいよ。」

だが前歯を剥いて笑顔で取り成すロメスに、二人は互いに顔を見合わせた。

どうやら運営側には、まだ自分達の知らない奥の手があるらしい。

「で、生き残っている『お仲間さん』はどのくらいいるんだ？
それだけ余裕があるということは……」

セアムリツヒの問いに、ロメスは無意識に目配せして、指で『9』を示した。

視線の先には、記憶力に長ける彼にしか識別できない、ギルドの

息のかかった者達がいるのだろう。

現在、広場にいる参加者達は、目測で40組程度。
互いに顔を知らないものの、全体の四分の一が味方と思えば、それは歓迎すべき要素である。

「魔導人形の計算によると、このまま順調に事が運べば、上位の独占は間違いないそうです。」

お二人のおかげで何とか……私の首も繋がりましたよ。」

前半戦における自分の失態が、思わぬ窮地を演出してしまったため、ロメスは思わず声を震わせていた。

「礼を述べるには、まだ早いんじゃないか？」

そんな彼の肩を、ガントレット手甲の裏で軽く叩いて励ますセアムリツヒ。

「勝利が間違いない　　そう煽おだてられ、とんでもない戦場に回されたことが、一度や二度では無いんだがな。」

一方のドウナガンは、油断の無い眼差しで二人を睨みつけ、やはり皮肉を口にする。

い。
どんなに有利な状況に在ろうが、樂觀できないのは傭兵の性さがらしい。

セアムリツヒは頬が突つ張るほどの笑みを浮かべ、手にする長斧の先を真っ直ぐ地面へと突き刺した。

今回もまた、安心して彼に背中を任せることが出来そうである。

広場に設けられた高い演壇に、やがて何者かが姿を現すと、途端に注目が集まった。

《 只今より、中王都市大競技会・後半戦の説明を行います。》

静寂を待った後、凜とした言葉を投げかけるのは、例の双頭の魔導人形。

青と赤のルージュで判別される二又の首のうち。

前者は今回も眠ったように目を閉じて、後者に場の仕切りを任せ
ている。

だが参加者達も慣れたもの。

もはや、そのような異様には何の関心も示さずに、ただひたすら、
続く言葉を待ち詫びていた。

《後半戦の課題、それは『洞窟探索』です。》

眼下で渦巻く、そのような感情を知ってか知らずか。
さっそく本題を切り出す人形。

同時に、脇の巨大な地図板の幕が取り払われ、暴かれる。

そこには無数の×印が記されていた。

《このアルチャー洞窟は、中王都市の創生当時、主な輸出品として
鉱物の採掘が盛んに行われていた地。

故に、付近一帯の表層には、数百の穴が造られております。
そのうちのいずれかの最深部に、『宝』を隠させていただきまし
た。》

説明を一句とて聞き逃すまいと、固唾を飲んで見守っている目を、
人形は地図の北西部へ向けさせる。

《その宝とは、競技の最終目的地である『首都リエディン・西征門』
をくぐるために必要な『通行証』に他なりません。》

言葉通りに地図をなぞれば。

前半戦では、スタート地点から湖の右側を半周して選手村に至つ
たのに対し。

今度は、湖の左側を半周して首都方面へ帰る形となっている。

《制限時間は、二日後の日没。
タイムリミット

それまでにゴール出来なかった組は例外無く失格とし、得たポイントも全て無効とさせていただきます。》

児童のような内容だが、時間の余裕は無い。
参加者達の一部から、嘆息が洩れた。

《なお競技の勝敗は、先にお伝えしている通り、『ゴールした順位』ではなく『総合ポイント』にて争われますので、お間違いなきよう。》

そこで少し間を取りながら、人形は注意を喚起する。

《無論、今回もゴールに先着した組には、特別ボーナスを用意しております。

内訳として、第一着に5万P、^{ポイント}二着に3万P、三着には2万Pが加算。

…以降には、加算ポイントはございません。》

そして、何気なく付け加えられたその発言に、誰もが耳を疑った。

たかが中間地点であるこの選手村に先着した10組でさえ、5万Pのボーナスが貰えたのだ。

これでは、ゴールへ早く到着する価値は無にも等しい。

《 以上で説明を終わります。

何かご質問はございますか？ 無ければ、これにて…》

大半が呆気にとられている中。
群集から一人、太い腕を突き上げる男。

「この腕輪もポイント加算の対象だったはず。
今、全員がいるこの場で、その価値を明確にしていきたい！
！」

《……》

大変失礼いたしました。》

大声でなされた質問に対し、スカートの両裾を軽く持ち上げ、うやうやしく頭を垂れる人形。

《皆様の持つリーダー・ブレスレッドは、ゴールした時点で、一つにつき『10万P』に換算させていただきます。》

その常軌を逸した法外な価値設定に、広場は一瞬にして様々な雑音が混じり始めた。

《…なにぶん、第一回目の開催ですので、ルールにも色々と洗練されていない部分がございます。
どうぞ、ご容赦ください。》

言葉とは裏腹に。

喧騒を壇上から見下ろす魔導人形の態度には、およそ一片の謝罪も無い。

そこで参加者の大半は理解する。

運営側は、もっと露骨に各組の潰し合いを狙ってきたのだ。

腹の中では憤然としながらも、彼等はそれで一応の納得に至った。

何故ならば、相手は初めから、その一貫した姿勢を崩していない。さらに何よりも、自分達はその悪意の始まりとも言えるべき、前半戦をクリアしてきた自負がある。

この期に及んで、覆るはずの無いものに対しての妄想や論議など、時間と労力の無駄であろう。

《それでは、只今の説明をもちまして、後半戦開始の言葉と代えさせていただきます。

……終着の地にて、皆様と再び会えることを。》

もはや慇懃無礼にしか聞こえない、わざとらしい挨拶の後、魔導人形は背を向けた。

それを合図に、広場を囲んでいた柵の一部が解放されると。

その先には、やはり大量の武具と雑貨が整然と並べられている区画が見える。

大混戦になったスタート時の慌しさとは対称的に、今回は各組とも急ぐ様子は無かった。

象のように雄大に歩み。

勝利へ向かうための、考えを巡らせているのである。

しかし、その光景は、魔導人形の瞳には滑稽に映っていた。

一見して不条理に見えるルールなど、ただの添え物にすぎない。

これから体験する絶望に比べれば、勝利に思いを馳せられる今が、なんと幸せなことかと。

「……流石は、ここまで残った精鋭じゃな。

まるで至強の軍団のように、内に気を秘めておるわ。」

そこで横から飛び込んでくる、呑気な声。

魔導人形は演壇の階段に片足をかけたまま、動きを停止する。

振り向けば、地図を支える柱の影で、大偉丈夫が待ち伏せをしていた。

前半戦を最も荒らした男の突然の来訪に、魔導人形ハーニャンは警戒した。

(…どうして……この男が…ここに…？
狙いは…何だ…？)

その高度な演算能力をもつてしても、彼とタンダニアの関係が結びつくはずも無い。

ハーニャンにとって、この『ヘイカ』という人間は。

卓越した戦闘力を有するものの、組織的な行動が無いため、ギルドにとって大した障壁にはならない その程度の認識であった。

だが、ここであえて接触を計ってきたあたり、やはり他の連中とは毛色が違うようである。

刹那。

前半戦で彼に敗れたギルド班の誰かが、『仕掛け』について口を割った可能性を、魔導人形は最も案じた。

個人の文句ならば幾らでもかわせるが、まだ周囲には参加者達が多すぎる。

ここでネタを晒されて、彼らが暴徒と化す事態だけは、何としても避けなくてはならない。

《……ええ。

まさに、どの組が優勝するか、見当もつきませんわ。》

青いルージュをひいた首は、それまで閉じていた瞳を見開いて、
まずは言葉で探った。

「やはり皆、上位の賞品に目の色を変えておるようじゃな。」

だが、惚^{とほ}けているのか、世間話のようなものを続ける相手。

《人間にとって、強大な力を追い求めることは、安寧を求めること
と同意義なのでしょう。》

「……そういえば、武力は、他国と同等、またはそれ以上でもって
応じる。

国防のため『仕方ない』と、オーンヒルデは言っておったな。」

タンダニス^{タナ}は重臣の名を小さく呟きながら、憂いを帯びた瞳を半
分だけ瞼で隠した。

「じゃが、悲しすぎるとは思わんか。」

《……悲しい？》

彼の身分を知らないため、言葉の意味を解さぬまま、双頭の人形
は訊き返す。

「いつから人間は、武器を携えねば、隣人と会話すら出来ぬようになった？」

《…先程から、ご質問の意図が解りかねます。

妙な言い回しをなさらずに、本題を仰って下さい。》

その毅然とした言葉に、タンダニスは立派な顎鬚に触れながら笑った。

「人の手に余るようなものを、ただの民草にまで広めようとする。これが単に、おぬしらが益を貪るためだけの行為なれば、然るべき処置をとらねばならんと思つてな。」

《…やはり、脅迫なさるおつもりですか。》

「……今わしは、そんなに恐い顔をしておるか？」

二度三度、まばたきをする彼に、人形は肩透かしを食らった心地だった。

直後、彼の言葉には表面的な意味しか無いことに気付き、赤いルージュの首は唇を開く。

《そのようにギルドの運営を誤解をされている方は、良くいらつしやいます。

ですが本来、我々は営利機関。

大陸全土の円滑なる社会向上のために、それなりの代価と利権を

要求するのは当然のことでありましょう。》

タンダニスは瞳を閉じた。

この魔導人形の言葉は、真理だ。

文明は一握りの者達が、闘争の中で創る。
それが次代へと繁栄をもたらし、幾度も積み重ねられていく業の
様を、歴史と呼ぶのである。

自分が『悲しい』と評した思想は、きっと未来永劫に続くに違
ない。

《…ただし、此度の大会は、中王都市側から持ち掛けられた話です。
指針に意見されるならば、ぜひとも、その主要格たるデスタロッ
サ卿に直接申されてみたら如何でしょうか。》

「ほ。

なるほど。」

そこで青いルージュの首が洩らした嫌味に、己が膝を叩くタンダ
ニス。

「忙しいところを、すまんかったな。

親切な魔導人形どの！」

そして、彼は勝手に満足した様子ですぐに踵を返し、背景の集団に紛れ込んで行った。

《…いま、私は何か、親切をしましたか？》

奇妙だが、不快ではない残滓ざんじを感じつつ、ふと、青いルージユの首が傾く。

《……さあ……》

赤いルージユの首は、自然と脱力した声で返していた。

参加者達の殆どが慎重に動く中、激しい氣勢を隠さない集団があった。

コルスス率いる一党である。

「…とにかく、まずは休息だ。

半日くらい遅れてもかまわねえ、すぐに休める所を探して来い！
」

鶏の足をかじり、急ぎ足で小道を進みながら怒鳴りつける彼。

「おい！

返事は……！？」

だが振り返れば、手下は全員、離れた場所で硬直していた。

「…あ！？

てめえ……どうしてここに……！？」

眼前。

至近距離に、憤怒の表情たるカジェットの姿。

思わず、コルススはその場で腰を抜かす。

「なにやら、弟子がえらい世話になっちまったんでな。
お礼に来たぜ。」

とても女性とは思えない低い声で唸るが早いのか、彼の鼻先に拳を
付ける彼女。

「あ…あのガキ、生きてやがるのか…？
どうやって…」

コルススが体を反らしたまま視線を泳がすと、他の組がその不穏
な気配を注目していた。

「…おい…中立地帯で争えばどうなるか、知ってんだろ…？
どんな手段を使ったか知らねえが…全部、無駄になっちまうぞ
…へへ…。」

「てめえのバカっ面を一刻も早く叩きのめせるなら、それも悪くねえわな。」

その会話を聞き、ようやく周囲の手下共が距離を詰め始める。
カジェットが睨みを利かせると、一触即発の緊張が全体を駆け巡った。

「あ…慌てなくとも、ちゃんと競技中に殺してやる。
それまで、せいぜい生き延びやがれ…！」

その隙に彼女の間合いから抜け出し、コルススは逃げるようにして建物の影に姿を消した。

従う手下共も、同様に退散していく。

「ははっ、おつかしいぜ。
連中のあの疲れきったザマを見たか？」

彼等を最後まで睨み続けていたカジェットは、後から追いついて来たベルッサスに笑いかける。

「ずっと、あたしらを『外』で探してたんだな。
この後半戦が始まるギリギリまでよ。」

「……！」

彼女の言葉を受けて、周囲を見回す彼。
連中が道に残した足跡には、新しい土が大量に付着していた。

「大方、パンリをやった後、あたしらにもトドメを刺すつもりだったんだろ。」

「けどあの時は、戒のおかげですぐに選手村に入ることが出来た。あいつらの予定は完全に狂ったんだ。」

「コルススの性格からいって………すぐには襲ってこないでしょうね。」

ベルツサスは彼の顔を心に浮かべつつ、呟く。

「姑息だが、慎重な野郎だからな。」

「ま、おかげで、こっちの使える時間はかなり増えたってわけだ。」

「

「それまでに『彼』は少しでも戦力になるでしょうか。」

「……パンリを鍛えるのは約束だからさ。」

「こっちのゴタゴタには、これ以上巻き込みたくねえ。
刺し違えてでも、あたしが決着^{ケリ}をつけてやる。」

そう言って、カジェットは握った拳をもつ片方の手の平に叩きつけた。

「そのような危険な真似を、二代目だけにさせるわけには…」

「いや、お前がいるからこそ、やれるんだよ。」

そして迫るベルツサスを、制する彼女。

「縁起でもねえけどさ。」

あたしが死んだら、お前に三代目を…」

「お止め下さい。」

ただの言葉でさえ、亡くなった初代がお嘆きになられます。」

「継いで欲しいんだ。」

二代目カジェットⅡセイルクロウは、あっさりと遺言を口にした。

背にした青空と同じような、清々とした表情だった。

シュナとパンリは、二人きりでいた。

後半戦開始直後だというのに、互いの組のリーダーは、競技の説
明中に何処かへ消えてしまったまま。

アリアネとベルツサスも、それを探しに出たきり戻って来ない。

下手に動くことも出来ずに待ちぼうけする中、パンリは沿道の岩
に腰掛けて、重ねた指先を絶え間なく動かしていた。

「緊張してる？」

明らかに落ち着きの無い様子の彼に、シュナが明るい声をかける。

「正直……恐いです。」

私にとって、本当の意味での初陣ですから……。」

虚ろな表情のまま、静かに返す彼。

「とか何とか言っつて、本当は覚えてたての術を早く使ってみたくて、
ウズウズしてるんじゃない？」

「……そうかもしれません。」

シュナの冗談に、パンリは正直に答えた。

彼が恐れを抱いていたのは、周囲の状況ではなく、そんな自分の
感情に対してである。

以前ならば、考えられない心境だった。

「……何か使える物があるか、見てくるわ。
ちよつと待ってて。」

暫し無言の後、前方に陳列された品々を何気なく眺めていたシュナは、一言告げて離れていく。

取り残されたパンリは、無理もないと思った。

現法術を少々かじった程度で、生意気な態度をとった自分を、彼女は大いに軽蔑したに違いない。

だが、衝動は、それくらい抑え切れなかった。

集中すれば、周囲は音を失い。
じわり、と痺れるような緊張が足元から這い上がる。

ひどく現実感の乏しい世界が、頭の中に広がって。
そこで自分は、想像した相手と、何度も戦っている

「……っ!？」

いきなり頭のフードが外され、頭上から襲う圧迫感と、暗転する視界。

パンリが慌てて立ち上がると、笑い声が背中から聞こえた。

視界を塞いでいた物を上にずらすせば、それは深い毛糸の帽子である。

「せんべつ 銭別よ。

これなら長い耳を丸ごと覆えるし、フードより邪魔にならないでしょう？」

さらにシユナは態勢を屈めて、彼の腰に皮のベルトを巻く。すると、みるみるうちに、ローブ状の服装が改善されていった。

「機動性を高めないと、戦場では命取りよ。

……以上、先輩からの有難いお言葉でした。」

そして自分の胸当てに片手を軽く乗せ、おどける彼女。

「……よろしいんですか？

大事なポイントを、こんなところで使ってしまった……」

「やあね。

気にするほど、高い買い物じゃないっただら。」

その好意に、少年は身を任せた。

「すみません……。

いつも心配してくれているのに……自分は……わがままな人間です。

「

「そう、あんたって一度決めたら、頑固よね。」

…でも私はきつと、そこが気に入ってるんだわ。」

シュナは二本目のベルトを彼の脇に通しながら、自分の気持ちを確かめるように呟く。

「シュナさん…」

言葉にならない何かを口にしかけた矢先。

パンリは視界の端に双子の少女を見る。

話だけは聞かされていたので、それが誰なのか、すぐに見当が付いた。

「…あれから、ちゃんとした宿に泊まれたの？
疲れてない？」

その視線に感づき、シュナも立ち上がる。

相手が幼いためか。

彼女の口からは、まず先に心配が言葉として出た。

だが、それがかえって不気味さを増して、脅えさせてしまう。

双子の姉妹は無言のまま後退すると、再び人混みに紛れていった。

二人は、参加者の大半が村を出るのを見計らい、父親と合流する手筈だった。

幼い彼女らは目立つ上に、標的にされやすい。
しかし大黒柱のウベさえ顔を知らなければ、まだ戦う手は残っている。

一家がそんな思いから立てた作戦の途中、よりによって彼女と出くわしてしまうとは誤算だった。

「ああ、びっくりした……！」

咄嗟に走って逃げたのは、レンの主導である。

「……私、ちゃんと謝りたいよ……」

開けた場所で足を止め、エリスは呟いた。

「謝るなんて、どうかしてるんじゃないの！？
お父さんのせいで仲間が失格させられてるんだからさ、きつと怒ってるに決まってるでしょ。」

近付くだけでも危険だって。」

「……。」

「もう考えを切り替えないと、今度こそ怪我するわよ。」

「でも……昨日のあれは、あまりにもタイミングが良すぎない?」

レンの度重なる忠告にも、エリスは聞く耳を持たなかった。

「あんた…本当に…昨日からずっとそればかりね。」

「だって…。」

世羅さんの症状が発生してから丁度、外出してたお父さんが帰って来るなんて…」

「そんなの、偶然で説明がつくわ。」

「私もそう信じたい。だけど…」

「……何よ?」

二人は、小さな額に浮かべた汗を拭いもせずに、互いの顔を付き合わせた。

「薬に詳しいってことは、毒にも詳しいのよ。」

傷を見ただけで、発病する『可能性』くらいは予想できるんじゃないかしら…」

それで、あえて黙ってたとか……」

「たとえそうでも、これは勝負じゃない！
敵の弱味につけこんで、何が悪いのよ！！」

「違うよ。」

「……………！」

自分の意見を滅多に主張しないエリスは、たまに強い志をもって見詰め返してくることがある。

その場合、怯んで黙り込むのは、決まってレンの方だった。

「お兄ちゃんには…戦う意思は無かったの。」

後半戦は協力しようって…私には言ってくれてたのよ。」

若干、都合の良い解釈を交えつつ、エリスは静かに告白した。

「何それ……。」

本当なの…？」

自分が全く知らされていなかった事実にも、口を尖らせるレン。

「……ようやく追いついたわ。」

何も逃げることはないでしょーに。」

その瞬間。

背後から忍び寄っていたシュナが、二人の服の襟を掴む。

「げっ、追ってきてた!？」

レンは反射的に飛び退くが、既に遅かった。

決して強い力ではないものの、子供の力ではまるで動じない。

「私の娘達に、何か用かな。」

だが、そのシュナの手首をさらに掴み上げる、白い修道服。

(…お父さん……!)

人混みを割るようにして駆けつけた彼が、姉妹の頭上で聳え立つ。
非常に険しい表情であることが、真下からでも見てとれる。

「ウベ神父…。」

どうして、黙って出て行ってしまったんですか。」

だが、シュナは臆さずに訊いた。

「……君の仲間達に悪いことをしておいて、共にいれるはずないだろっ。」

先制の詰問に、彼女の手を離してから、淡々と答える彼。

「悪いこと？」

あいつらの腕輪を取り上げて、未練を断ってくれたのが悪いことなんですか？」

だが、続けてシユナが示した意外な反応に。

姉妹は自分達の父親を、驚きの表情で見上げる。

「君の言う通り、彼等の安全を優先した　　薬師としての自分に
打算は無い。」

だが、この大会に参加している以上、人の親としての自分には利己心を感じた。

神に仕える者として、非常に恥すべきことだ。」

そこでウベは膝を曲げ、両手で静かに娘達を抱き寄せた。

疑っていたエリスさえも、今では彼の自責の念が痛いほど判る。

「真面目ですね。」

誰かさんとは大違い……」

「　　おお、ここにおったか！

随分と探したぞ……！」

その様子に感心するシユナに対し、遠くから大きく振られる手。地鳴りのような声に目を向けると、タンダニスの顔が、参加者の群れから頭一つ飛び出している。

「何じゃい。」

「空気が重いのが。」

そして合流を果たした途端、くぐもった場の様子に、齒に衣着せぬ物言いをする彼。

「陛下!!」

どこに行ってたんですか、もう……」

その余りにデリカシーの無い様子に、シュナは声を荒げた。

「お、喧嘩か？」

「楽しそうだな。」

ちょうどそんな折、もう一人の無頼者カジエツトも、パンリとベ
ルッサスを連れて姿を見せる。

「あたしらは、そろそろ出るぜ。」

「ちよつと事情があつてよ……できるだけ早く、先に進んでおきて
えんだ。」

「一宿一飯の恩が返せなくて、悪イな。」

その言葉は、まだ少し先だと思っていた別れを唐突に予感させる。

覚悟していたつもりだったが、シュナはすぐに声が出なかった。
視線の先のパンリも、ただ俯うつむいている。

「…長い道中、そんなに急ぐこともなかるう。
そうじゃ、皆で一緒に楽しく参らんか？
ここから先、単独では、ちときつそうじゃぞ。」

そんな中、タンダニスは出し抜けに提案した。

「子連れなら、なおさらの。」

さらに彼は片目を閉じて、小声で付け加える。

「わ、私達も…？」

「あ…ありがとうございます！」

子供の無邪気さで、素直にその申し出を受けるレンとエリス。

「……このお導きを、神に感謝します。」

喜びで抱き合う娘達の姿を見て、ウベの心も自然と定まり、額を
二回叩く独特の仕草で感謝の意を示した。

「あたしらには、事情があるって言うてんだろ。」

しかし、一向の歓迎の空気をよそに、カジェットだけは、うなじ

を強く掻きながら反発する。

「別に途中までも構わんぞ。

いつ集団を離れても自由、そういう約束でどうじゃ？」

彼女の態度に気分を害することもなく、タンダニスは自分の意見をさらに押した。

他の人間と組めば、自分の正体を晒す危険がある。

矛盾だらけの彼の行動に、シュナは目を丸くして、ただ傍観するしかなかった。

「じゃあ……そうするよ。

多勢でいることが安全なのは、疑いようもねえからな。」

深慮の末、カジェットは仲間の二人に脇目を振りながら呟く。

「決まりじゃな。」

その反応に、タンダニスは分厚い手を打ち鳴らし、今度はシュナに大きな笑みを見せた。

よく人を惹きつけて、よく人心を得る。

不思議な王だ。

しかも、自分が纏めた集団を率いることもなく。
最後尾から、全員を包み込むように眺めているのが好みのようである。

「……今までどこを放つつき歩いてたんですか。
アリアネさんが、探しに出たままなんですよ！」

シユナは歩調を緩め、そんな彼と並んだ。

「おほつ。」

それじゃあ、村を出る前に、あやつを先に探さんといかんのう。」

脇腹を肘で突かれる感触に、思わず素っ頓狂な声を上げるタンダ
二ス。

「毎回こんな調子じゃ、彼女の苦勞する気持ちが良く解りますよ。
ご自身の立場のこと、まったく省みないんですから。」

「……ふうむ。
あやつには日頃の苦勞に見合うよう、たまには何か褒美でもとらせねばなあ。」

「……赤ちゃんとかどうですか？」

「あっはっはっ！」

何の冗談じゃ、そりゃあ!！」

全く真に受けていない様子で高笑いする彼を見て、シュナは彼女のことが少しだけ気の毒に思った。

残念なことに、自身に向けられた好意には、とことん鈍いらしい。

もしかしたら全ての行動も、深い思惑があるようで、実は何も無いのかもしれない。

だが、この捉えどころの無さも、魅力の一つであろう。

シュナは丁重な礼の代わりに、短い間だけ、本当にただの仲間として振る舞い続けることを心に決めた。

破格の傑物である、人徳の王がそう望むままに。

第四章

第五話 『以心変心・中編』 了

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

4 - 6 「以心変心・後編」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The sixth story

・Understand・last part・

中王都市の領土拡大期。

その軍勢が凱旋した橋に、初代リエディン王の偉業を称える『西
征門』は建造された。

無骨で巨大な石柱は、鎮護の証。

揺るぎない礎と共に、堅牢な国家に守られているという喜びを、万民に与えてくれる存在である。

そして古人達は、如何に思うだろうか。

それが今、文明の一端を体現する饗宴の終着を飾ろうとしていることを

西征門と南の湖に挟まれた平地に、軍の基地がある。

駐屯する部隊の名は、中王都市軍・第8防衛部隊。
首都方面軍の内の一つである。

見晴らしの良い敷地を縦断し、閑散とした滑走路に行く。

途中で格納庫を覗けば、飛翔艦は最奥で埃をかぶっており。
整然と並べられた戦闘騎からも、煤の香りがしない。

この国の軍隊は中枢に近付くにつれ、形骸化していくのが現状らしく、ここもその例に漏れていない様子である。

コルツとマルリッパは、そうして興味半分で見物したのを後悔し

つつ、軍務区画へと足を向けた。

「 コルツ・デスタロッサ中尉、マルリッパ＝エングス少尉。
両名とも…只今、到着いたしました。」

レンガ造りの小屋の二階。
執務室の扉を開けるなり、いつものようにマルリッパが代表して
挨拶をする。

「すみません！
今は取り込み中でして……！」

だが、その中にいた若い男の事務官は、いきなり指で口元を塞ぐ
身振りを見せた。

彼が机を挟んで相對している先客の二人組に対して、大そう緊張
している面持ちでもある。

「親父じゃねえか…。
こんな所で何してやがるんだ。」

彼との予期しない遭遇に、コルツは開口一番、不快感を露にした。

「なんか、また忙しそうだねえ…。」

マルリッパもまた呟く。

「例の艦が国境を越えたのか、それを知りたいだけだ。早急に、向こうの基地と確認を取ってくれ。」

だが当の本人には、それらの言葉は一切耳に入らない様子だった。大きな執務室で、たった一人しかいない事務官に対し、ひたすら苛ついた口調で威圧を続けている。

「チバステイン男爵様、どうかされたんですか？」

少しでも場の雰囲気のを和らげようと、改めて明るいついで調で声をかけるマルリップ。

「……ああ……君か。」

賞品になっている飛翔艦の到着が遅れていてな。競技も終盤に近付いているというのに、間に合わないとなれば、笑話話では済まされん。」

「いやはや、面目の次第もないです。手筈は綿密に整えたつもりなのですが……。」

片や男爵の傍に侍る男は、件の艦の関係者らしい。それなりの立場の人間のように、終始、品の良い微笑を浮かべている。

「その程度のこと、取り乱しやがって……。情けねえ。」

「……だが、これが私の仕事だ。」

呆れて思わず口走ったコルツに、男爵は目を合わせずに言った。

「補給物資が前線に届かないなんて、しょっちゅうだぜ。これだから、現場を知らない奴等は……」

「政治は、表面に見えることが全てではない。一見して矮小な事柄が積もってこそ、大局へと繋がるのだ。……いずれ、お前にもわかる。」

そうして、もっともらしいことを言って話をはぐらかす父親の口を、コルツは随分と昔から眺めていた気がする。

戦場を幾つも経てきた彼にとって、その類の言葉はもはや受け容れられるものではなかった。

政治家が語るほど、人に余裕など無い。
『瞬間』を健やかに生きることこそが、最大の至福なのである。

生死のやり取りをしたことのない連中は、認識そしが根本的に間違っているのだ。

「では、向こうと連絡がつき次第、知らせてくれ。
私は西征門の運営本部に居る。
非公認の屋台まで沿道に広がっていてな、警官隊にきつく取り締

まるでよう発破をかけねばならん。」

男爵は一秒すら惜しむように、後ろ歩きで指示を下し、ステッキの音を忙しく床に響かせながら部屋を後にした。

「まるで雑用係だな。」

そんな彼を見て、コルツは吐き捨てるように言う。

「雑用係こそ、政治家のあるべき姿ですよ。」

軽く会釈をしながら呟き、男爵の後を追う品の良い男。

立場上、共感するものでもあるのだろうか。

それとも、単なる世辞なのか。

どちらにせよ、同じ穴の連中の詭弁だと、コルツは心の中で蔑んでいた。

「おい、親父の件なんざ後回しだ。

例の物はどうなってる？」

そして頭に昇った血も降らぬうち、平机を乱暴に叩き、声を荒げる彼。

「は。

少々、お待ち下さい……」

促された事務官は立ち上がり、壁際にある棚の引き出しに手を回す。

するとそこで、奥のカーテン越しから、軍の駐屯地らしからぬ談笑が聴こえた。

見れば、ちょうど窓の真下に設けられた小さな庭で、ティータイム茶会が行われている。

若い兵士達が付近の町娘を連れ込んでいるようで、それらの声が響いていたのだ。

「…日和^{ひより}りやがって。

こういう時に敵が攻めてきたら、どうするつもりだ。」

見下しながら、まだ慣れない様子で胸ポケットから葉巻入れを取り出すコルツ。

「中王都市の首都に侵攻する？

そんな畏れ多いことを考える輩がいるのなら、一度拝んでみたいものですよ。」

口元に笑みさえ浮かべて話す事務官の横顔に、マルリツパは不吉なものを感じた。

大陸における空の軍事力の重要性が増すにつれ、それらは社交界に対しても高い地位を築くようになっていた。
この基地では、さらに輪をかけて貴族や豪商の子息達が多く集っており、きつい教官も訓練も無いと伝え聞く。

首都中西部の『お坊ちゃん』部隊といえば、軍内でも有名だったが、実情は噂以上かもしれない。

「貴様らはムーベルマでの軍隊の脆さ^{もろ}を知らないから、そんなことが言えるんだ。」

「ムーベルマ？」

「あれは事故でしょう？」

軍の流した偽の風評を真に受けているためか、また冗談のように笑い、書類の束を差し出す彼。

「とりあえず、あのバカ騒ぎしている女どもを追い返すよう伝えろ。
30分後に訓練を開始する。」

……オレは、これまでのようにはいかなえからな。」

コルツは目を剥きながら、ようやく取り出せた葉巻の端を強く噛んだ。

エア・ファンタジスタ

A i r・F a n t a g i s t a

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第六話 『以心変心・後編』

1

コルツ・デスタロッサ隊がこの地に来た理由は、軍総司令部からの辞令以外の何ものでもない。

実戦経験の豊富さから、教官役を兼ねての配置である。

万年、各地の戦場を駆け巡っている彼等としては、極めて珍しい任務だった。

ただっ広い敷地の一角に、似つかわしくない緑の芝と、装飾の施されたテーブル。

きっと定期的に、先程のような会合が行われているのだろう。そんな洒落たテーブルの席に、二人は全く似合わない無骨な様子で座り込む。

と

「…本日は、ご高名なデスタロッサ隊にお目にかかれて光栄です。まずは何をしたら宜しいでしょうか。」

臨時教官殿。

前に並ばせた『もやし』達の中から、一人。

全くといって良いほど擦れていない、玉子のような肌の少年が、愛想笑いを浮かべながら声をかけてくる。

集団の中でリーダー格らしい彼は、軍服だけは一丁前で。胸元に何やら、既に光り物を付けていた。

士官学校の成績優秀者、第四級の褒章。

コルツは、それを面白くなさそうに眺めてから、口を開く。

「普段は、どんな訓練をしている。」

「用兵学を主に学んでおります。」

戦闘騎を使用した訓練は、五日に一度ほど……」

「整備実習は？」

続いてのマルリツパの問いに、相手は怪訝な表情を隠さなかった。

「整備は……いつも整備士が行っておりますが？」

「貴様。」

もしも戦場で整備する人間が、流れ弾にでも当たって死んだらどうするつもりだ。」

「……はあ……それは……考えたこともありませんでした。」

コルツから突きつけられた厳しい言葉に、彼は首を傾げながら咳く。

「ただでさえ、機械つてのは気まぐれなんだ。」

自分で修理できなけりゃ、生きて帰れなくなる時だってある。」

「しかし……上級士官たる我々が、そのような前線に行く状況は……とても……」

「もういい、この敷地を10周しろ。」

体力の錬度を見てやる。」

「……10周……ですか。」

先程までの媚びた笑みはどこへやら。

相手は恨みがましく何かを呟きながら列に戻り、言われたままの指示を全員に告げる。

一挙一動が鈍く、もたもとと離れて行く隊列の無様な姿に、コルツは鼻からゆっくりと煙を吐いた。

彼等とは、階級も年齢も殆ど同じだが、思想と経験は全く違う。まるで、異民族と話している錯覚さえ起こしそうだった。

「……司令部も、冗談が過ぎるぜ。」

コルツは吹かしていた葉巻を、まだ中身の残っているティーカップに入れる。

この様子では、戦闘騎の操縦も期待できないだろう。

「それにしても……入隊希望者、集まらないと思っていたけども……まさか『0』とはねえ。」

これだけ各地に募集をかけたつてのに……。」

芳しくない結果を知らせる書類の束に目を通しながら、マルリッパも呻く。

「戦闘騎部隊の中でも、オレたちは武闘派で聞こえてるからな。それだけ根性のある奴が、今の中王都市にはいねえってことだ。」

コルツは頬杖を突き、もう息が上がり始めた連中を遠景に眺めながら返した。

自分達は、もっぱら血を求めて転戦していると揶揄され、また畏怖されていた部隊である。

事実そうであつたし、その悪評を承知の上で補充要員を募つただからコルツにとって、この結果は予想と大差無い。

むしろ予想外だつたのは、司令部が、同隊の未来を憂慮してくれたことである。

辞令の書類に『補強人材の確保・編入を許可する』という項目を見た時には、流石に驚いた。

しかし彼等が、男爵家という自分の家柄だけで判断し、配置先を選んだのは明らかで。

この連中ときたら、過酷な部隊に組み込むには力量不足は無論のこと、何よりも必要な覇気に欠けている。

少しでも才能ある人間を見初めて一から育てていくにしても、果たしてその性根まで変えるに至るかは、甚だ疑問が残る資質であつた。

「この際、高望みは出来ないよね。」

メンバーがたったの二人じゃ、何の活動も出来やしないからさあ。

「

「マルリツパ。」

コルツは顎を上げながら、傍の彼に呼びかける。

暗雲が立ち込めている現在の状況とは正反対の、清々しい青空だった。

「……オレは近いうちに必ず、軍と騎士団との全面衝突があると睨んでいる。」

背もたれに首を掛けたまま、初めての敗戦に思いを馳せる。

「その時はムーベルマで散った連中への弔いに、騎士どもの死体を倍にして送るぞ。」

一機でも多く撃ち墜とし、一人でも多く撃ち殺す。」

激昂した様子もなく、平然と粗暴な言葉を吐き連ねる少年の姿を、他人は決して良く思わないだろう。

こんな時、マルリツパはいつも、黙って聞き手に回る。

幼馴染であり、昔から付き従ってきた彼だけが、その狂気を完全に解することが出来る存在だった。

「中でも特に、部下を目の前で殺して行った……銀色の戦闘騎^{あいつ}は忘れられねえ…。

麻薬の代わりに、いまオレの脳を焼いているのは、あの時の記憶だ…。

奴を墜とすための部隊は、やはり屈強でなくてはな…。」

虚ろな表情で呟き続けるコルツは、あれから己の訓練にも余念が無い。

腕がさらに磨き上がっていく自分の可能性にも改めて気付かされ、今ではその相手との邂逅を感謝している節もある。

彼があえて補充要員を陳情せずに、募集という形をとったのも頷けた。

この溢れる闘争心を共有できる仲間以外は、『新生コルツ・デスタロッサ隊』には無用なのである。

実に彼らしいやり方だった。

「そして…オレが軍内で信用のおける人間は、お前だけだ。今まで以上に手をかせよ。」

「そ、そんなの当たり前じゃないか。」

急に振られた言葉に、マルリツパは笑顔で即答する。

あの会戦以来、変わったのは気概だけではない。
友としての自分に、昔以上に信頼を寄せてくれるようになったの
だ。

マルリッパは、それを最も嬉しく感じていた。

「しかしさあ。

この軍隊さえまともだったなら……コルツはもつと出世して、皆か
ら尊敬される軍人になれたはずだよ。

先の戦いを、これほど見据えている人間は他にいないもの。」

「現状をとにかく言っても始まらねえだろ。

それに……出世なんぞより……有能な部下に巡り合うことの方が、
よっぽど重要だと思うがな。」

最後の語句を、彼は少し気恥ずかしそうに呟く。
だがマルリッパは、もう一度言わせようと、聞こえないふりでい
た。

「別に、お前のことを言ってるんじゃないぞ。」

それを何となく察したコルツは、彼の椅子を蹴り飛ばす。

「あ……そうだ！

早速、有能な副隊長から隊長殿へと提案がございます。」

その衝撃によって、何かを思いついたマルリップが、わざとらしい口ぶりで切り出した。

「軍の内部からの召集が難しければ……外部からはいかがでしょうが。」

「何か思い当たる奴でもいるのか？」

「思い当たらないかい？」

ほら、元・ルベランセのメンバーだよ。」

「？」

「戒」セバンシュルド。

彼、鍛えれば、かなりやれるんじゃない？」

「……………」

「あ、いや……どうかって……思っただけだよ……」

その名前を出した途端、黙り込むコルツに、マルリップの言葉尻は弱まった。

「…確かに、あいつは、素人にしちゃあ骨のある方だったかな。とても誰かの命令の下で動くとは思えん。」

「でも一応、打診してみたら……」

「いいんだよ。」

諦めた口調。

だが、その唇は、静かに笑っていた。

「実はな、それはオレだって全く考えてなかったわけじゃない。

あいつの治癒の能力を見たら、どんな軍人でも自分の部隊に組みこんでみたいと思うだろう。

もしも配置するとしたら、後方部隊だな。」

「彼、けっこう器用に見えたしね。

：それなら、コルツが先陣で切り込んで、僕が中盤をまとめるってことかあ。

彼が入れば、理想の部隊になるよ、きっと。」

「理想どころか、奴の加入で、おかしくなる可能性の方が大きいと思うぜ。」

「いやいや。

日頃から、うちの部隊は守りが弱いと思ってたんだ。バランスを取るためにさ、今度は守備部隊を増強……」

二人は暫し、愉しげに互いの構想を交わした。

昔から、この種の談議に興じると、時間さえ忘れてしまう。

そんな折、湖の船着場から、敷地内に繰り出し始める集団の列。二人の視界を横切り、まっすぐ街の方へと向かっていく。

「何だ、あの連中は？」

民間人のように見えるが…」

「例の飛翔艦争奪レースのリタイア組らしいよ。」

コルツの疑問に、その話をあらかじめ聞かされていたマルリッパが答える。

「親父の手配だな。」

まったく…軍の施設を私的に使いやがって…」

「それはそうと、彼等は無事かなあ？」

「オレが一目置いているんだぞ。」

こんなところで失格するような…やわな連中じゃ…」

言いながら。

早速、列の中に戒ら三人の姿を目撃する彼。

「え……？」

あれ…！？」

マルリッパも思わず立ち上がり、テーブルに身を乗り出した。

「何で、お前らが、ここにいるんだ？」

そんな彼の図体が目に留まり。
戒も寄って来る。

「……ここは軍の敷地だ。
いて当然だろ。」

それをコルツは、無然とした様子で迎えた。

「それはちょうど良かったぜ。
この辺りに宿は無いか？
なるべく安い所だぞ。」

彼等の気も知らず、戒は物珍しそうに周囲を見回しながら、空いている椅子に平然と腰掛ける。

「ちょっと待て。」

そこでコルツは、後方でザナナに背負われている世羅に気付いた。

「そいつ、どこか怪我してるのか？
だったら、すぐに医務室へ……」

「風邪みてえなもんだ。
気にするな。」

「……なら、いいけどよ。」

戒のつれない返答に、彼は誤魔化すように葉巻を取り出して、火を点ける。

「なんだ、随分と偉そうなもの吸ってやがるな。」

「蜂蜜風味のシガレットさ。」

今、街で流行ってる、お菓子みたいなものだよ。」

戒の疑問に、嬉しそうに答えるマルリッパ。

薬の依存をすぐには断ち切れないと思い、彼が薦めたものだった。思いのほか、効果があつたのが喜ばしい。

「ところで、あの船に乗ってきたってことは……大会の方はもしかして……」

今度は逆に、マルリッパが、なるべく穏便に訊く。

「人が手ぶらで帰って来てんだから、少しは察しろよ。」

「ご…ごめん。」

過酷なレースだったんだね。

顔中、傷だらけじゃないか。」

「いや、こっちは船の中でリンチされちゃってな。」

頬に手を触れながら、含みのある笑みを浮かべる戒。

「何を言つとるんだ、まったく。」

人がせつかく治療した病人達に、また大怪我させといて……」

そんな彼の背中を、ぼやき声が突く。

振り返ると、白衣の小人がいた。

最初に世羅の治療に連れて来られた船医である。

「お前も船を降りるのか？」

「ジャグマー君たちが船内の後始末をしている間だけな。」

……しかし、おかげで到着も大幅に遅れるし、もう無茶苦茶だよ、あんたら。」

そしてザナナの方にも目を配り、肩をすくめたまま、街へと足を向ける彼。

「まあ、しばしの休憩を楽しむとするよ。」

お大事に。」

「ああ。」

微妙に感慨深いものを感じつつ、戒も別れの挨拶に応えた。

「……元気が有り余ってやがるようだな。」

だがその余韻に水を差す、コルツの低い声。

「何か文句でもあるのか？」

戒は睨み返す。

「その力、軍隊で使う気はないか。」

……暴れるのが仕事みたいなものだからよ。」

コルツは顔を背けながら、苦虫を噛み潰したような表情で、言葉をひり出した。

おそらく彼なりの、精一杯の勧誘だろう。

マルリツパは微笑ましい気持ちで、ただそれを見守っていた。

「軍隊だあ？」

一方、鳩が豆鉄砲を食ったような顔で聞き返す戒。

「住む場所と金は保証してやる。」

……女一人くらい養うには充分だぞ。」

「は……冗談……だよな？」

「本気です。」

視線を泳がせる戒に、この機を逃すまいと、マルリツパは姿勢を正して畳みかけた。

「……そうか。」

おまえら……遂に、この俺様の才能に気付いたのか。
……いいだろう。

この国の腰抜け軍隊にはうんざりだが、中でも少しは根性のある、お前らの部隊に入ってやっても構わねえ。」

「……本当か？」

彼の返答に、コルツは気色ばむ。

「その代わり。」

俺様が、隊長に就任することが条件だ。」

だが言葉は、まだ終わっていないかった。

「いざとなった時によお、操縦席で半ベソかくような奴が隊長ってのは、いかなもんですかってことですよお。
なあ、コルツちゃん。」

テーブルの上で、顎と唇を突き出して、おどける表情。

完璧に、人をおちよくっている。

先の言葉も全くの冗談で、その気が無いのは明らかだった。

「……なるほど。」

お前が隊長つてのは、まるで考えてなかった。
それも、けっこう面白いかな。」

だが、感心したように呟いて笑うコルツ。

突っかかって来るものとばかり予想していたので、戒は少し戸惑った。

「じゃあ、僕は副々隊長になっちゃうねえ！」

さらに、再びテーブルから身を乗り出してくる、はしゃいだ様子のマルリッパ。

「な、なんだこいつら……気味悪い……」

戒は堪らずに席を立ち、後ずさる。
すると不意に、傍にいたザナナの胸にぶつかった。

そこで力無く地に落下し、乾いた音を立てる槍。

「……！」

どうした？」

異変に気付いた戒が寄ると、つい先程まで軽々と彼女を背負って

いた彼が、ひどく消耗している様子だった。

大量の汗の雫を、首筋や裸足に浮かべているのである。

「…あつい。

また世羅の熱が、高くなっている。」

「薬が切れたのかもしれないな。

早く休める所を探さねえと。」

「それなら、軍の宿舎に空いてる部屋が沢山あるよ。

好きなだけ泊まっていつていいからさ、さっきの話、ちょっと考えてみてくれないかな。

……そこでゆっくりと。」

マルリツパは話に割って入り、今度は揉み手で怪しく迫り来る。

「泊まってやってもいいが、百年考えたって、軍隊なんぞ入らねえからな。」

戒はまた一步離れ、早急に建物の方へ向かうよう、ザナナに目で合図をした。

「まあまあ、そんなつれないこと言わずに。

僕たちは同じ飛翔艦でカレーを食べた仲じゃない。」

「馬鹿野郎。

それくらいで気安いんだよ。」

「今なら三食・昼寝つき。

大サービスで、おやつも付けるからさ！」

ズボンのポケットから大量の棒キャンディーを出して、その執拗な勧誘は止まることを知らない。

「…わかった！ わかったから！

三秒くらい考えといてやるから、離せよ！！」

あまりのしつこさに、戒は適当に答え。

掴まれた袖を振り払い、逃げるようにして去っていく。

「彼が加わってくれば……理想が現実になるよね。」

それを見送りつつ、どこか達成感のある満足げな表情で、マルリツパは椅子に座り直した。

「だからって、あまり下手に出るな。

みつともねえぞ。」

「さっき、自分が話したことを忘れたの？

部隊を強くするためなら、何でも協力するさ。

ウチの隊長に出来ないことなら、特にね。」

もっとな反論と、決意を固めた友の笑顔の前に。

コルツは何も言い返すことが出来なかった。

参加者達の全てが去ったのを確認してから、小一時間。選手村では、運営側による撤収作業が進められていた。

（ここらが潮時かもな…。）

バーグは段々と慣れてきた着ぐるみの中で、雑多な作業をしながら思う。

後半戦の開始直前に、戒の組が離脱したことをシュナから告げられたこと。

結局、手助け出来たのは序盤のみで、裏方として華々しい活躍を想像していた自分にとっては、実に不本意な結末になってしまったこと。

様々な思いの末、彼は代わりにシュナ達のサポートに回ることを提案したが、それは丁重に断られた。

そのことで、この種の親切が、本当に正しい行為だったのか。今では、それさえも判らない。

《 一体、これはどういうことですか？ 》

心沈む最中。

双頭の魔導人形の甲高い声が響く。

何事かと思い、目を向けると、武具や雑貨を並べている区画が騒然となっていた。

《何故こんなにも、武具の行方が不明なのです？ 》

人形はそこで、物品の勘定作業をしていたらしく、支払われたリングの数と品物の数が合っていないことに疑念を持っているようだった。

《搬入と移動に関しては、全てあなた達に任せているため、他の者は一切触れていないはず。

…… よもやのことは無いでしょうね？ 》

張り詰めた空気の中。

腕章を付けたリーダー格のジャグマーに詰め寄る魔導人形。

確かに、用意された武具は巷に流通する正規の品ではないものの、性能は同等である。

それらを盗もうと考えても、何ら不思議はない。

だが、部外者のバグから見ても、彼等は任務に忠実な者達で、

文句一つこぼさずに一生懸命働いていた。
不気味なほどに、統率もとれている。

果たして、こそ泥のような、そんなせこい真似をするだろうか。

「あの…」

それまで場を静観していた女性が、眼鏡を片手で上げながら自信なさそうに切り出す。

自分が『秘書官の立場』であることを、ことあるごとに持ち出し、愚痴っていた女だ。

「後半のコースの交換所へ、多目に流れてしまったのでは？
何かの手違いで…。」

《手違い？》

人形は再び周囲を見回しながら、全員に問いかける。
だが、やはり何の返答ももたらされなかった。

《…わかりました。

首都に帰還する前に、私自らそこへ寄って確認しましょう。
たった一振りの剣でさえ、不明な物は許しません。
全ては、ギルドの所有物なのですから。》

魔導人形の認識に刻まれているのは、恐ろしいまでのギルドへの

忠誠と執着である。

それに対し、延々と気の無い言葉を返していた女性秘書だったが、仕方なく同行しようとする様子が見てとれた。

バーグは、一時的とはいえ、彼等の疑いが晴れたことに安堵している自分に気付く。

同じ恰好で共に作業していたから、一体感を持ったわけでない。元々、彼等とは形は違えど、アルドの叛乱を共に生きたという感覚が、まだ心の奥底にはあるらしいのだ。

《…今の話を聞いていたでしょう？
何を怠けているのです、早く準備なさい。》

そこで、呆と様子を眺めていたバーグに目を付け、顎で示す人形。

彼からしてみれば。

抜け出す機会を完全に失ってしまったようである。

「……あの話、受けるのか？」

ザナナが訊いてきたのは、世羅をベッドに寝かせ、薬を飲ませて

からすぐだった。

「受けるわけねえだろ。

まあ、ギャグとしては受けたけどな。」

引きつった笑顔で切り返す戒。

軍の宿舎は、飾りっ気こそ皆無だが、清潔感のある悪くない環境だった。

それでも彼は、長居する気は毛頭ないつもりである。

「俺様の目的は、あくまでも飛翔艦だ。

時間はたっぷりあるしな、別の方法くらい簡単に見付けてやるぜ。」

「

戒の陽気な言葉を聞いて、ザナナは胸を撫で下ろした。

コルツらと話を交わしている彼からは、まんざらでもなさそうな、そんな気配を感じたからだった。

戦う方法は熟知しているが、飛翔艦を手に入れる方法など、皆目見当もつかない。

世羅の夢を叶えるには、戒だけが頼りなのである。

「そんなことより、荷物を回収しに行くぞ。

金から、何もかも預けたままじゃ身動きがとれねえ。」

確かフンドシ野郎の馬車は、ゴール付近で待機しているはずだ。」

「…うむ。」

やはり、いつもの槍が無いと、落ち着かん。」

細身の槍を肩に乗せながら頷き、同意する豹頭。

「というわけだ。」

お前はおとなしく…」

二人が世羅の方に向き直した、その時だった。

寝かせたはずの彼女が、そのベッドの向こうで大きく開け広げられた、窓の下枠に腰掛けている。

「…なにしてんだ…？」

危ねえぞ。」

最初、それが熱にうなされたせいだと思い、和やかに促す戒。

《無力なくせに、その余裕ぶりは、流石に目に余る。》

だが返る彼女の声は、普段と似つかない異質なものであった。

「……お前…誰だ…？」

鼓膜を刺すような音に対し、戒は思わず、そう口走っていた。

《なかなか冴えた、良い質問だ。

戒「セバンシユルド…だったかな？

そう、キミたちのことは……虚ろだが憶えている。

この肉体が経験したことは、お前達で言うところの『夢』のように、ワタシに伝わっていたからな。》

指先を額に付けて、一つ一つを確かめながら呟く彼女。

《…同時に、8年の歳月の中で、これ程までに負荷がかかったことは無かった。

そのおかげで意識を一時的に解放することが出来たとはいえ、手放しでは喜べん。》

さらに己の胸に両手を当てて言う。

直後、そこから伝わる感触に落胆し、彼女は自分の身を何べんもまさぐった。

《…やはり……この身体は、育ちが鈍い。

所詮、急ごしらえの器か。》

上着の脇の隙間から手を入れて、小ぶりの乳房を確認し、さらに嘆く。

戒とザナナは、その奇妙な彼女の行為を、ただ目を見張って眺め

ていることしか出来なかった。

《 確信した。

…急がねば。

中途半端な力の者の傍では、この大切な器が傷付くばかりだ。

……ワタシは、『他の連中』ほど、気が長くない。》

「……」

ザナナは彼女に対し、始めて身構えた。

あの愛らしいエメラルドグリーンの瞳は、今ではどういうわけか、暴虐を示すかのような、ルビーレッドへと変貌している。

《この国まで連れてきてくれただけでも、キミらには感謝してやろう。

もつとも、先を望むため、さらに力のある者の所へ向かわねばならないが……。》

素早く、長い手袋を外す彼女。

その細い左腕に、普段は浮かんでいただけの黒い紋様が、地を這う蛾のように不気味に蠢いていた。

《…お別れの前に。

見下ろされているのは好かんのでな。》

奇術を見ているかのようだった。

彼女がその左手を横に凧いだ瞬間。

周辺の空気が赤く染まり、二対の巨人の姿が浮かびあがる。

それらが手にし、振り下ろしてきた棍棒は灼熱。

戒とザナナは、それぞれ上から圧されたことで、四肢を強制的に屈ませられた。

《これで見栄えが良くなった。

畜生は、畜生らしく、だぞ。》

「…てめえ…どこでこんな術を…おぼえて…！

寝惚けるのも…いい加減にしねえと、怒るぞ……！！」

彼女の恍惚の表情を前に、背中を焼かれながら必死に叫ぶ戒。

《感謝しろ。

そんな無礼な言葉を許すのも、『世羅Ⅱディーベンゼルク』に尽くしてくれた故の、特別だ。》

本来なら、今の一言で灰塵に変えている。》

「尽くしただと…？ 勝手なことを抜かすな…！

お互いの目的のため…協力するっての……忘れたのか！？」

戒は僅かな望みをもって、仲間としての世羅に語りかけた。

《キミ達が勝手に決めたことなど、知らんな。
それよりも…》

だが対する彼女は即座に否定すると瞳を閉じ、彼等とは対照的に涼しげな面持ちで、両手を耳の裏に当てた。

《聴こえないか？

この大陸の中心に、多くの神の息吹が集まりだす音を。
乱世が近い。

これより強き者は、星の数ほど現れる。》

続く言葉の後、黒炎に包まれる彼女の全身。
衣類はその悉くを焼かれ、白い肌が露になった。

半身を侵されている、他の黒い紋様は一切がそのままである。
異常はやはり、左腕のみにあった。

《積年の恨みを晴らし、暴虐の限りを尽くせる日が近い。
そう思うと……全身が喜びで打ち震えるよ。》

自身の細い指を、彼女は己の唇に触れてから、甘く噛んだ。
今まで見たことの無い彼女の扇情的な仕草に、戒は、思わず自分の顔が火照るのを感じた。

「やめろ…！！」

それらを拒絶するように叫ぶ彼を前に、彼女は嗜虐の気配を湛えた表情を反らし。

窓に座ったまま妖しく足を組む。

《その、禁断の果実を見詰めるかのような、無垢な目は何だ？》

世羅の意思が既にそこに無いことを確信させる、邪な笑みだった。

《やはり、天に矛を向けるに相応しいのは……天に限りなく近い存在のみ。

キミは先程：協力がどうだとか抜かしたが……》

そしてベッドに敷かれていたシーツを、無造作に掴み、その身に羽織る。

《あきらめろ。

所詮、鎖に繋がれた獣ごときでは、天を仰ぐことすらままならん。

》

片足が窓にかかり、さらに外へと踊り出た。

「ま……待ちやがれ……！」

《何故、『逃れえぬもの』が、どうしてキミごとき痴れ犬に期待したのか、今となっては理解し難いな。》

無理な体勢で追いかけようと、勢い余って床に伏す彼を一瞥し、悪戯っぽい笑みを浮かべる彼女。

その言葉で、戒は鮮烈な記憶を呼び覚まされる。

夢のような空間で語られた真実。

その『逃れえぬもの』と呼ばれる何かは、確かに自分に世羅を託した。

同時に、彼女の中には複数の神呪が眠っていることも教えたのだ

「……て……てめえは…」

《天命第一位『忘却の炎』。》

黒炎に包まれた手を二人に向けてかざし、呟く。

室内で増した熱波が、巨人をも巻き込み、高まっていた。

《キミのさだめが、ワタシと再び交わるのなら、また逢えるかもな。》

それが最後の言葉だった。

扉を強く閉めた音で、二人は我に返る。

「……？」

自分が後ろ手に握っているドアノブを、不思議そうな顔で眺める
戒。

「…何で、こんな所にいるんだっけか？」

訊くが、同様の心地で廊下を見回しているザナナからは、返答は
無い。

「荷物……取りに行くんだろ。」

なら、こんな所に用はねえよな。」

他人事のように呟いてから、戒は笑う。

それすら、ザナナが携えた槍を見て気付く始末だった。

まるで寝起きのように、浮付いた足取りで進む。

廊下の窓の向こう。

軍施設内に在る教会の鐘台に、少女は座り。
その様子を最後まで眺めていた。

2

「異常無し。
不気味なほど、静かだ。」

斥候から帰還したウベが、修道着の袖に付いた砂を払いながら、
皆に報告した。

選手村を出てから、二時間弱。
周辺の森を抜け、山岳地を目前に控えると、いよいよ周りの景色
は寂れてくる。

前半戦のように、ぬかるんだ足場にも困らされたが、この慢性的
な登り斜面もまたきつい。

そんな折、途中で泉を発見できたことは僥倖であった。

幼い娘達のため。

ウベは本格的な山道に入る前に、ここで休息を持ちかけた。

意外なことに、誰からも反対の声は出なかった。

どうやら各組とも、それぞれの思惑があるようなのである。

その話が決まった途端。

カジェットという大柄な女は、そそくさと仲間の二人を連れて泉の対岸へ移動した。

彼女らの会話に耳を傾ければ、ここで仲間の少年を鍛えるつもりらしい。

何も競技中に……と、内心で感じたものの、他人には他人の事情がある。

ウベも、それ以上は立ち入ろうとはしなかった。

対する一方、シユナは『ちょうど、おやつの時間帯ね』などと吞

気に笑い、火を焚く準備にとりかかる。

そして彼女が元から共に行動している、ヘイカという男。疲労とは無縁に見える偉丈夫だが、嫌な顔一つせずに休憩を快諾してくれた。

ウベはその心遣いに感謝しつつ、彼の太腕に装着されている膨大な数のリーダー・ブレスレッドを気にかけていた。

穏やかそうな人間が、いざ戦闘となると、一転して凶暴な人間へと豹変することは珍しくない。

普段ならば、絶対に気を抜けない人物だろう。

…にもかかわらず。

先程、自ら斥候に出た時、娘達を無造作に置いてきてしまったことにウベが気付いたのは、それからずっと後だった。

どこか安心してしまう。

ここは、人間味のある、温かさを感じる集団だった。

戦況は依然として、『多数』に有利な展開である。

大方の予想通り、どこの組も後半戦が始まった直後に、複数の組から成る一時的な同盟集団を作った。

故に、互いに探り合いとなり、早くも膠着の様相を呈している。

リーダー・ブレスレッドのみに高いポイントが設定されたため、上位を狙うには、どうしても他組を潰さねばならない。

だが、見知らぬ土地での集団戦闘は、相応の危険を伴う。

今のところ、この矛盾を看破できた組は皆無だった。

参加者の粗暴さが目立ち、無秩序だった前半戦とは違う。それらが排除され、質が向上した現在では、各組の慎重さは顕著である。

「この流れが始めから計算のうちならば……主催側の善意と作為を、半々に感じるのう。」

「…ええ、まったく。
ルール無用のはずなのに、これでは流血が起こりようもありませ
ん。」

タンダニスの皮肉った呟きに、ウベも肩をすくめて応えた。

命こそ保証される展開だが、逆転の機会も無いに等しい。

この先、何かしら波乱でも起こってくれなければ、順位はこのままだろう。

「しかし、用心を怠ることは出来まいて。
どれ……次はわしが行こう。」

自ら斥候に出るなぞ、60年ぶりのか。」

多数の腕輪を所持している余裕からか、嬉々としながら、左腕を大きく回しながら立ち上がるタンダニス。

「はは。

アルドの叛乱の、それも初期ですか？

それにしては、お若く見える。」

その言葉をウベは冗談と捉えて笑い、彼の代わりに傍の切り株に座り込んだ。

「陛下……！！

そのような任務は、私めにお命じ下さいませ。

もしものことがあればいけません。

その御体は……貴方一人のものではないのですから。」

「野暮じゃな。

こういう時くらい、楽しませい。」

彼は、駆け寄ったアリアネの過ぎる心配に辟易した様子で、ふらりと消えていく。

「……ふう……。」

そんなつれない主の反応に、彼女は視線を落とす。
ことあるごと、つい小言を出してしまう自分に嫌気がさしてしま

う一瞬である。

自分にとっては、彼への慕情から来る反射行動なのだが、それを煙たがられる構図は、随分と昔から変わっていない。

いつも微妙にすれ違っている。

二人の仲が進展することなど、ありえるのだろうか

「…旦那さんのことが、本当に大切なんですね。」

「え!？」

そこへ突然、微笑を湛えたエリスが声をかけてくる。

不安と本心を見透かされたようで、アリアネは驚きのあまり硬直した。

建前上、二人はタンダニアからの参加者として、さらに夫婦ということで皆に紹介されている。

知らぬ間に、シュナがそのように取り計らっていたのだ。

『嘘をつくという感覚よりも、その役を演じるように、遊戯のつもりで楽しめばいい。』

その方が、かえって怪しまれないで済む。』

シュナは、そのように説明した。

事実。

策は功を奏していて、他の者達は、タンダニスの素性や偽名に一切の疑問を抱いていない。

そんな中、やはり自分だけである。

どこか要領が悪く、またもや浮いてしまったのは

「ほんと。

二人の様子を見てみると……まるで、主従関係よね。」

続けて、レンまでもが呟いた。

「それにあの立派な髭……」

さらにウベが、自分の顎先に触れながら、険しい表情で畳み掛ける。

「あのっ……！」

ひ、髭がどうかしましたか？」

「……いや、手入れが大変そうだと思ひまして。」

慌てて詰め寄るアリアネに、面食らいながら呟く彼。

「……手入れ……そ、そうですね……。」

でも……ああいうの、今タンダニアで流行ってるんですよ、けっこう……」

特徴的な彼の長い髭は他国でも有名で、タンダニス王の印象と直結するものである。

自分の早とちりに、アリアネは及び腰になりながら、自分の襟を正した。

妻を演じる役。

いつも彼の傍に侍る親衛隊長として、決して難しい任務ではないはずだ。

「しかし、こんなに若くて可愛い、献身的な奥さんがいるなんて。

まったく、ハイカさんが羨ましいものです。」

だが固い決意も、そのウベの何気ない一言で吹っ飛んでしまう。

「いや、いやいやいや!!

私なんて、そんなそんな!!

あの方と釣り合いが取れようもなく……」

まるで茹でダコのように顔中を真っ赤に染めて立ち上がり、大袈裟に否定する彼女。

それと対照的に、頭の中身が真っ白になっていくのが、自分でも良く判った。

「あゝあ。」

お父さんも、再婚すればいいのにな……。」

だが、その反応には気を留めず、レンは顔を背けて、わざと聞こえるように大きく呟く。

普段はそうに淋しさを見せないが、物心ついた時より、母のぬくもりを知らぬ娘なのだ。

今は戦場の緊張感から解放されて、程良く地が出てしまっている。

「いつも苦勞かけてすまないな。
私にもっと、甲斐性があれば……。」

ウベは完全に困り顔で、苦しい言葉で応えることしか出来なかった。

「……でもさ、そうになると、あのシュナって人との関係は？
彼女も何だか、色々とお世話してるみたいだし。
自分の旦那さんが、あんな風に若い女に慕われてるの……普通許せるかしら？」

「う……。」

レンの勘の良い指摘に、またもやアリアネは固まる。
シュナ自身のことまでは、口裏を合わせていないのだ。

「ねえ、そのところ、どうなの？」

「……ええと……
ですから、彼女は……陛下の……」

いたずらに突っ込んでくる質問に、言葉は詰まるばかりだった。

（…彼女は、ただの協力者と答えた方が良いのか…。

いや、そのように具体性の無い返答では、逆に怪しまれる……！
ここは貞淑な妻らしく……ウィットに富んだ、小粋な返答をせねば……！！）

今までに経験の無い、新たな難題である。

現在の状況に合うような適切な語句を、今まで目にしてきた書物や会話の記憶から必死に模索した。

「……そう。

…シュナさんは『愛人』ですから、私は何とも思っておりませんの。」

そして、彼女の真つ白な頭の中で描いた結論が、涼しげな表情で伝えられる。

「……………」

それに対し、絶句して後ずさる一家。

一瞬にして凍りついた空気によって、アリアネも自身の過ちに気付き、顔面蒼白となった。

「き…聞かなかったことにしましょう。」

静止した時の中。

虚ろな目のままで、ウベはようやく言葉をひり出す。

「凄いわよね。」

奥さん公認で不倫だつて。」

レンが半笑いのまま、エリスに囁く。

対する彼女も、訳もわからずに首を大きく縦に振って頷いていた。

そこへ丁度、人数分の包みを抱えたシュナ当人がやって来る。

「皆さん、食事できました……よ…？」

だが周囲の奇妙な視線を感じとり、途中で声を上ずらせる彼女。

「何か…私の顔に、ついてます？」

「つつ！ ついてませんよぉ！！」

で、では、私は、陛下の分を差し入れに行きますね…！！」

急に眼前に飛び出してきたアリアネが、二人分を乱暴にかっさう。

そして、一刻も早く離脱。
猛然と森の中を疾走していった。

「…？」

それを呆然と眺めつつ、皆に料理を配るシュナ。

渡された包み紙を開くと、ホットサンドが中から顔を出す。

主材料は、リングと引き換えに購入した、乾いたパン。

火で炙り、適度な焦げ目のついたパンの中は、干し肉と薄い緑菜が彩りとして添えられて。

その上に今にもこぼれ落ちそうな、溶けたチーズが乗っている。

「ウベ神父からいただいた野草、さっそく使ってみたんですが、とても良く合っんですよ。」

野菜の代用品に使える植物って、意外に多いんですね。
「すごく勉強になりました。」

「あ、いえ…こちらこそ…」

ウベは照れながらパンを手で千切り、口に運ぶ。
素朴な味で、とても美味しい。

「この後半戦はずっと…殺伐とした空気でごすごすことを覚悟してお

りました。

それが、皆さんと共に行動させてもらえるばかりか、こんなにも
まともな食事にありつけるなんて、感無量です。

食事が安心と英気を与えることは、当然といえば当然ですが……
容易そうで難しい。

料理を熟知しているんですね、とても。」

「お上手ですねえ。」

横に腰掛けたシユナは、笑みと共に両腿を締めて、聖弓隊特有の
短いスカートを直す。

豊満な胸も無論のこと。

彼女の全身には若さが弾けていて、やもめ暮らしの長い彼には、
少し目の毒であるように思えた。

3121

「おとうさん……若い女の人が相手だと、そういう台詞が出るのね。」

そうして故意に視線を伏せた直後、レンが半眼になりながら言う。

「な、何を言ってるんだ。」

私はただ、正直に感想を述べただけで……」

「ですよ。」

こんな所で、口説く人なんて……」

慌てて、二人が顔を向け合う。

彼が焦っているその様子が、互いに気恥ずかしく、思わず同時に下を向いた。

「…コホン。」

それに…人様の女性に手を付けるほど、お父さんは人でなしじゃないぞ。」

「はい？」

弁解を続けるウベの言葉尻に引っかかるものを感じ、シユナは表情を怪訝に変えて、顔を素早く上げる。

「あ、いえ……お気になさらず。」

国や土地柄によって文化の違いもありますし、愛の形もそれぞれでしょう。

少しくらい教義に外れたからといって、背徳と決め付けるのは、クレインの古い考えです。

神がおいそれと罰を与えろとは、私も思いません。

ご安心なさい。」

「……はあ。」

シユナは、どうして自分が急に説教をくらっているのか、全く思い当たらなかった。

それも、とってつけたような詭弁交じりである。

「…愛人サンじゃなければ、お父さんの再婚相手に良いかもしれないな

いのね。

惜しいわ。」

レンは両手でパンを握ってかじりつつ、また囁いて言った。
その輝く瞳に、女の憧憬の感情が、少し見てとれる。

「うーん……」

対するエリスは、あまり視界に入れたくない話題のようなので。
良く解らない、といった素振りを返したただだった。

「まるで…ピクニック気分だな、あいつら。」

対岸の様子を眺めながら、カジェットが呆れた声を洩らす。

だが彼らのおかげで、今という時を、ずっとパンリを鍛えることに費すことが出来る。

それには、深く感謝していた。

しかし、敵対するコルスス一党との抗争を考えれば、この有意義な時間も、あわずかだろう。

無関係の人間を、これ以上、巻き込むわけにはいかなかった。

「……よし、そこまで。」

『四極』終了。」

頃合いを見計らったカジエットの合図と共に、パンリの手足の先から光が消える。

その途端、一気に消耗した様子で、彼はその場にへたりこんだ。

「……ここまで上達するとは……」

ベルツサスは息を飲み、それを複雑な表情で凝視していた。

「あいつにも嫉妬してるのか？」

「……いえ。」

別にそついうわけでは……」

脇のカジエットの声で我に返り、口ごもりながら答える彼。

「まだまだ、実戦なら、お前の足元にも及ばねえさ。」

……経験の差は、如何ともしがてえよ。」

「あと三年も学べば、どうなることでしょうかね。」

対抗心が無い、というわけでもなさそうな彼の返答。

フォローのつもりで言った彼女は、苦笑を隠さずに、そのままパンリへと歩み寄る。

「ヘタな先入観が無い分、吸収が早いな。
なかなかセンスがあるぜ。」

『四極』は、源法術の難度でいったら、かなり高い。
ウチの空挺団でも、あたししか使えないんだからさ。」

「……そうですねですか……？」

地に半身を伏せたまま、パンリは答える。

疲労のためか、それとも比べる相手がいないためか。
褒められても実感が湧かなかった。

「それに術の種類も、この短期間でよく憶えた。
勉強家で器用……ただ一点を除けば、言うこと無しだ。」

「二代目！」

「何だよ。どうせ、いつかは解ることだろ。
自分の限界は、初めに知っておいた方がいい。」

話の途中で咎めるベルツサスを追い払いながら、カジェットはさ
らに歩み寄る。

「……どういうことでしょうか？」

彼女の足先が見えたところで、パンリは膝を立て、正座の態勢を

とってから訊いた。

「教わった術を忠実に出せるってのは、洞察力と想像力に長け、感受性が豊かな証拠。

全て、源法術士には重大な要素だ。

それが、お前にはある……」

今日のカジエツトは、異様なほど褒めちぎってくれる。

本来ならば喜んで良いのだろう。

だがその伏線であろう、先に続く語句を、パンリは嫌な予感と共に、固唾を飲んで見守っていた。

「……しかしな、それじゃあ『頭でつかち』なのさ。

お前は、源法術に体力なんて必要無い、と考えているかもしれない。

だが、一概にそうとも言えねんだよ、これが。」

カジエツトは彼の脇を通り過ぎ、枯木に拳を力任せに叩きつける。幹が揺れ、砕けた木の皮が舞い落ちていった。

「例えば源法術を、体術や剣術と組み合わせれば、俄然として有利なのは分かるだろ？」

実戦で『術だけ一辺倒』ってのは、あまり好ましくねえ。

……その点を、お前は恵まれていないってこと……分かるよな？」

彼女は自分で言いながら、酷な言葉だと思った。

パンリの生まれ持った体軀では、たとえ一生かけて鍛えたとしても、たかが知れている。

「でも、それでいいんだ。

まずは、自分の欠点を知ることが大切だからさ。」

「…はい！」

元氣良く返された言葉に、カジェットは目を丸くする。

慰めをかけるまでもなく、パンリはそれほど気落ちしてなどいなかった。

こんな風に、明確に自分の強さを評価されたのは、彼にとっては初めてのことだったのだ。

「……よし。

そんじゃ休憩がてら、これから基礎を教えてやる。

これは、楽にして聴いてていいぜ。」

「基礎…ですか？」

「論理的に、源法術の仕組みを講釈してやるってんだ。

好きだろ？ こういうの。」

「…でも何だか、順序が逆さまのような気がしますね……。」

パンリは帽子を脱いで、長い耳を掻きながら言った。

「最初に知識を詰め込むより、先に体で慣れた方が、おぼえが早いんだよ。」

あくまでも、あたしの勘だけど。」

「な、なるほど。」

妙に説得力のある言葉に、素直に頷く彼。

そんな風に、カジェットが他人に教えている姿を初めて目にして、手下のベルッサスは、改めて感じるがあった。

彼女は自分では意識していないが、合理主義者である。

そして恐ろしいまで質実剛健で、簡素だ。

自分の思った感情を包み隠さず、単純シンプルな教えを、ただひたすらに押し付けていく。

なるほど、彼女と師弟の仲になるには、まず心が通じ合わなければ、反発を招きかねない。

機械の歯車が噛み合わないみたいなものだろう。

「まず源法術の大原則のひとつ、『束縛量』^{フエル}。」

これは一言でいえば、体内に源を溜められる容量のことだ。」

カジェットはその場に胡坐をかき、人差し指を立てる。

「源法術を使えない人は…その『束縛量』が極端に少ないか、無いということですか？」

パンリは相槌の代わりに、質問を投げかけた。

「そう。」

そして、この容量には個人差があり、さらに言えば…大きければ大きいほど、有利だ。

空気と肺活量の関係みたいなもんさ。」

「『源』が『空気』…。」

『束縛量』が『肺活量』……ですか。」

源法術を扱える人間とそうでない人間の分かれ道が、ここにある。自分も一歩間違えば、後者だったかもしれない。

背筋が凍る思いがした。

「よく憶えておけよ。」

自分の限界を超えて源法術を使おうとすると、酸欠に似た症状になる。

その場合、術は出ないし、全身の神経が激しく痛み、苦しむだけだ。」

彼女は自分の脇腹を叩きながら、話を続けた。

「…質問をよろしいでしょうか。
いったん体の中で束縛された源は、いつまでも放出されずに、そのままなんですか？」

「そうだ。」

「…特に意識はしていないだろうが、人体に束縛された源は、その容量に対して『常に100%』の状態を保っている。」

「私は、源の無い土地では、源法術は使えないと聞いたことがあります。」

でもそれなら…体内に残った源が許す限りは、たとえそのような土地でも使うことが出来るのでは？」

「いいところに目をつけたな。」

カジェットは、満面の笑みで先を続けた。

「お前の考えている源法術の法則は、実際とはかなり異なる。使った分だけが目減りして、80%や30%に減少するわけじゃない。」

人体に束縛された源は『常に100%』でないと、いけない理由があるんだ。

「どういう事かという…」

そして、自然と視線が上向きになる彼女。

「自分で放つ術が、どうして術者自身に影響を及ぼさないか、不思議だろ？」

「はい……そう言われてみれば……」

「源は別名、万能物質とも言われている。

炎や氷など……この世界にある自然を模した、様々な性質や形態になるからだ。

しかしそうになると、術者自身が、その効果に巻き込まれる危険が一番高いわけだな。」

両手を広げ、身振りで示す。

「そこで、術者に束縛された源は、内側から放出された術に対してのみ、防壁バリアーの役目を果たしているんだ。

そしてこの効果は、体内に『常に100%』の状態であることで、初めて発揮される。

人体の自己防衛本能みたいなもんだ。」

パンリは感嘆しながら、聞き入っていた。

まるで、生物や物理学の授業のようだ。

「だから源法術を使う瞬間、消費する分を即座に補充する作用が、術者本人の中で起きる。

これが、代替の源が無い場所では、どう足掻いても術を使うことが出来ない理由さ。

無理に使おうとすれば、やはり酸欠状態に……」

カジエットはそこで、ベルツサスの方をちらりと見て笑った。

見れば、彼も口元に薄っすらと笑い浮かべている。

「……とまあ、偉そうに高説しちまったが、全部、師匠からの受け売りだ。

これらは一つの学説らしい。

あたしは学者じゃねえから、『こういうもんなんだ』って、単純に納得している。

興味があるなら、この先、自分で勉強してみればいい。」

そして最後は、やや投げやりに言い放つ彼女。

パンリは大いに興味をそそられていたが、この先があればの話だ、
と思い直した。

「さて、次の話に移るか。
今度は『詠唱』だ。」

「……詠唱……。」

パンリが反復して呟いたところで、対岸に動きがあった。

「高難度の術を使うためには、術者の集中を促す『詠唱』を行わなければならぬ。

それらは大抵、効果が高く、威力もでかい術になる。

言わば、源法術戦の花形だ。」

言いながら、腰を上げるカジエット。

「…詳しくは、歩きながらも話せる。

これを幾つか覚えりゃ、お前も初心者卒業さ。」

軍の敷地を出て、馬車が6台は横一列に並んで走れるくらいの大通りを歩いていくと、すぐに巨大な西征門が見えてきた。

西方諸国から首都への玄関口である。

そこでは、商人や馬が、ひっきりなしに往来していた。

門の口は思った以上に狭く、守衛による検問が行われており、行列を作っている。

その検問の順番を待つ中王都市側の広場こそが、ゴール地点の会場らしい。

まだ時期が早いのか。

人の数もまばらだったため、タンダニアの馬車は、難なく見つけることが出来た。

御者は無愛想で、仕える主が傍にいないにも関わらず、用便と食事以外は一切席を離れない。

そんな無骨者だった。

戒が彼に自分の名を告げると、黙って車内にある荷物置き場を開放してくれた。

そこへ回り込んだ途端。

キイキイと小さく鳴きながら、馬車の天辺にいた小猿が顔を出す。

奇しくも自分と同じ名をもつ『それ』の登場に顔をしかめつつ。戒は、各人の荷物が無造作に投げ込まれている箇所、手をつ突っ込んで入れた。

だがその中でも、どこからか入り込んだ梅が、丸くなって眠っていた。

自分の荷物は、すっかり抜け毛混じりである。

「……飼い主のしつけがなってねえよな。まったく。」

舌打ちと共に、ザナナに声をかける戒。

言葉には出さないが、久方ぶりに自分の槍と対面し、彼も満足している様子だった。

「……何だ？
この荷物。」

そこでふと、自分の荷の傍に置いてあった、小さな背負い鞆に目をつける。

中を覗いてみると、小さな衣類が無造作に詰め込まれていた。

「こんな小さなサイズ、誰か持ってたか？」

呟きながら、濃い紫色の薄い上着を手取る。

鞆のさらに奥には、大事そうに仕舞われている封筒。
中身は、決して低額でない紙幣が何枚か入っていた。

「ま、いいか。」

しかし……バーグの野郎の荷物も、まだここにあるじゃねえか。
あいつ、船を降りた後から、どこへ行ってるんだ。」

「バーグ？」

ザナナが不思議そうに訊き返す。

「だってそうだろう？」

三人いなくちゃ、大会には参加できなかったんだから。」

「……。」

「……あいつ……だよな？」

俺様たちが一緒に組んでたのは。」

「……。」

自信なさげに、首肯する豹頭。

「で……どこへ行った？」

「随分と前から、一緒でない気がする……」

「そんなわけねえだろ。」

チツ……船で暴れるもんじゃねえな、酔ったに違いねえ。」

頭全体に『もや』がかかったように、どこか釈然としないながら。二人は馬車を後にして、ゆっくり歩き出した。

だが、背中に感じた気配に振り返ると、ついてくる梅の姿。さらに、その背には小猿までもが乗っていた。

結局。

二匹の動物を引き連れたまま、大通りを戻る。

「選手村の時といい、最近の俺様は疫病神に縁があるな。」

邪険にするわけにもいかず、戒は、途中で見かけた屋台で適当なクッキーを買い、仕方なく二匹に施してやる。

猫もそうだが、小猿も雑食性のようで、何でも良く食べた。

やがて、来た時には気が付かなかった大きな駅を、彼らは脇道から目にした。

廃墟のように人気が無く、戒が知っているそれとは、根本的に違うようである。

興味のまま覗き込むと、複数の衛兵が緊張した面持ちで詰めており。

線路の終点には、頑丈そうな鉄の箱が山積みされていた。

「見ろよ。」

「この兵隊は、真面目に働いてるぜ。」

からかうように、戒は衛兵達に向けて言う。

「おい、そのの。」

部外者は、ここから早急に立ち去るんだ。」

「あ？」

そして自分を目ざとく発見した衛兵からの、お決まりの文句に突っかかる彼。

「やい、貴様。」

俺様は中王都市なんたら方面軍、コルツ＝デスタロッサ様の部隊

直属だぞ。

……今日は休暇だな。」

からかい半分で、戒はでまかせを言った。

それを聴き、血相を変えた衛兵の一人が駆け寄って、注意を促した衛兵に耳打ちをする。

「こ、これは失礼を……！」

そして態度を一変、苦々しそうに退散していく相手。

「せいぜい、励みたまえ。」

対する戒は、ご満悦。

彼の背に向けて労いの言葉を放った後、胸を張りながら、大通りへと歩を戻していく。

「……いつ、軍隊に入った？」

直後、脇から真面目に問うザナナに、彼は思わず吹き出した。

「ジョークだよ、馬鹿。」

そして腹を抱え、唾を飛ばしつつ否定する。

「…あまり、おどかすな。」

「何だよ。」

俺様が軍隊に入ったら、不都合でもあるのか？」

「……いや、無いな。」

ザナナは少し考えた後、平然と返した。

どこか、間の抜けた会話だと思った。

二人とも、心ここに在らず。

そんな違和感が、ずっと漂っている。

先程の衛兵に対する悪戯も、どこかむしゃくしゃした気分のせいだと思った。

空腹のためなのか。
わからない。

ただ、ゆつくりと、時が過ぎていく。

当面、大会が終わるまで、何もすることは無い。
初めて訪れるかのような安らぎだった。

「そろそろ、宿舎に戻るか。」

戒は、ザナナに示す。

この大通りには、酒場や盛り場が多い。
だが、シュナに酒でこっぴどい目に合わされたのを思い出し、空
腹は気にならなかった。

ふと、振った手が腰の辺りで、虚空を掴んだ。

もの寂しい。

大切な何かを、どこかに置いてきてしまったような感覚だった。

双頭の魔導人形ハーニャンと、議員秘書のウェイールネント。
彼女らと大勢のジャグマー達が目的地に着いたのは、陽が傾いた
時分だった。

輸送騎で着陸した、すぐ付近。

簡易な柵に囲まれた、交換所である。

小屋があり、その前方に広げられた平机に、武器と食料の類が並
べられている。

遠くから目視する限りでは、必要以上の品が運び込まれている様
子は無い。

そして、未だ参加者が訪れた形跡も無く、辺りは静かだった。

人形はドレスの裾を両手で摘み、早足で先頭に行く。

小細工する間を与えずに、抜き打ちで小屋へ突入するつもりだ。そんな様子が、誰の目にも明らかだった。

速度が増していく中、ジャグマー達の踵かかとが、地を蹴って鳴る。

刻む、一定のリズム。

最後尾にいたバーグは何故か、一瞬、古い戦場の光景が脳裏に浮かんだ。

何故だろう、と疑問を抱く前に、突如として全隊が右回りに動く。彼も慌てて、それに倣った。

しかし、慣れてない着ぐるみの装備のためか、足がもつれて転んでしまい、頭から突っ伏してしまう。

最後尾なので、幸い誰にも気取られずに済んだ。

彼は地に転がったクマの頭部を反射的に拾い、頭に戻しつつ、中腰の姿勢で藪の中へと身を隠す。

もうここから、歩いてでも首都に帰ろう。

雑用の仕事は、もう沢山だった。

だが、事の顛末に、少し興味があるのも事実である。
それだけでも見納めようと、彼は気配を悟られないように、静かに小屋の裏へと近付いた。

丁度、顔の高さに小窓があった。
ここから顔を覗かせれば、すぐに中の様子を伺うことが出来るのだ

魔導人形が小屋に踏み込むと、その内部も至って平常だった。
数名のジャグマーが、木の椅子で休憩中で、自分の方を何事かと見詰めている。

双頭が回転し、小屋内をくまなく見回す。
何ら、変哲が無い。

自分の背面に触れた、金属の突起以外。

《……何のマネです？》

態勢もそのままにして、魔導人形は抑揚の無い言葉を発していた。

「判っていて、訊くものではないだろう。」

ぴたりと背中に張り付き、囁くのは。

顔面傷だらけの彼。

戦いの年季を感じる男であった。

二つの頭部を軋ませながら、人形ならではの角度で背後を確認すれば、長剣の刃を見事に突きつけられている。

そして、腕章が付いたクマの着ぐるみが、男の足元で、抜け殻のように脱ぎ捨てられていた。

《おやめなさい。

我々の場合、人間と同じ部分が急所であるとは限りません。

それに、戦闘用ではないとはいえ、普通の人間よりは強いつもりですよ。》

「その程度の脅し文句は、相手が素人の場合にしていたきたい。あいにく……この下らん大会に参加している連中と同じように、私も腕に自信がある方だね。

下手な真似をすれば、一刀の下に伏してお目かけよう。」

やや捻くれ気味な言葉を交え、凶刃を付けたまま、間合いを詰める彼。

空いた片手が、さらに懷に忍ばせた短剣の柄に触れていた。

《あなた……どこの傭兵です……!?!?》

「俺の体運びで、もう実力の差を察したか。
流石はギルド製、見事だ。」

即時、動きを完全に静止する人形の態度に、笑みをこぼしたのも束の間。

「だが訂正してもらおう。
我々は、傭兵などとは違う。
あのように無節操な連中ではない。」

一転、神経質そうに促す男。
少し苛ついた語感の端は、危険な薫りを孕んでいる。

《…何が望みです。
今のうちなら、少しくらいの条件なら飲みましょう。
ギルド全体を相手にすることになれば、あなた方に勝ち目はありませんよ。》

「それは、『何をもって勝ちとするか』によるだろう?」

男の静かな目配せ。

それを合図に、席にいたジャグマー達が荒縄を携えて近寄り、手際よく、人形の体を小屋で最も太い柱に縛りつけた。

両足を伸ばして座らせ、首・胴・腰を括くる。
いくら人間と体の仕組みが違うとはいえ、ここまで嚴重に縛られては、一切を動かせない。

「それに、大方…こちらが金銭や品物目当ての強盗程度だと見て、譲歩の交渉を持ちかけたのだろうが…」

まったく反吐が出る。」

傷の男は、それを見下ろしながら言い放つ。

「いいか。」

我々の目的は、もっと崇高なものだ。
貴様のように下らん人形風情には、考えつくはずのない、な。」

そこで、顔を近づけた魔導人形のガラスの瞳に、眼鏡姿の女性が映る。

彼女 ウェイも何も知らずに、小屋に入って来たのだ。

《…女！！》

早急に脱出し、本部に知らせなさい！！》

この状況を彼女が理解する前に、双頭は同時に叫んでいた。

言葉通り、自然と足が動く。

一目散に逃げ出そうと、上半身が振り返る。

だが眼前には既に、武装した着ぐるみ達が、整列して待ち構えていた。

もはや逃走が叶わないことを悟り、一気に脱力して腰を地に落とす彼女。

「よし。」

これでもう、この場に部外者は無いな。

しかし……選手村を撤収する時点で感づかれるとは……ギルドの武器を失敬したのは、少し軽率だったか。」

男は自分自身を律するように、反省の弁を述べる。

「予定を修正し、この小屋を我々の本陣とする。
念通士。

速やかに、通信の用意をせよ。」

命令通りに、彼等は良く動いた。

迅速、そして的確に、機材が小屋へと運び込まれていく。

「ご婦人にも、粗相の無いようにな。」

彼の目が、柱に縛りつけた人形へと向く。

その言葉の意味を解した部下達が、気絶したウェイの彼女を押さえつけ、それと同様の姿へと変えていった。

「今頃、同胞達も快適な『空の旅』を続けていることだろう。」

彼らの犠牲を無駄にせぬよう、我々も任務を必ず成功させねば……。

「

男は外に出て、待機していた者達にも告げる。

「これ以上、世界を誤った未来に歩ませてはならん。
大陸の輝かしい前途も、諸君の働き次第だ。」

無言で敬礼。

それに倣う男達。

静かだが、根底で渦巻く、怨念のようなものを感じる。

仲間達から放たれる意気が心地よいのか。

リーダー格の男は無表情のまま。

傷だらけの顔を若干、上に傾けて、吹き荒ぶ風を感じていた。

全てを見納めてから。

よろけるように、バークは利き足を退いた。

しばらく、まばたきすらせず。

大口を開けたまま、その場で立ち尽くしていた。

今は、脳が働かない。

両手で掴んだクマの頭部を、意味も無く、被ったり脱いだりを繰り返す。

自分でも意味不明の行動だ。

それくらい、動揺と混乱を抑えることが出来なかった。

首都まで戻り、然るべき所へ知らせるべきか。

付近の誰かに救援を求めるべきか。

どちらにせよ。

この事実を抱いて、すぐにも走り出さねばならなかった。

3

（フィンデルさんさえ良ければ、応援に来て下さい。）

別れ際、シュナは確かにそう言った。

奇しくも、オーロンから取材の同行を申し込まれた、飛翔艦が賞

品になっているという『大仰な催事』のことだ。

だが、記者の仲間内では、以下のような評判らしい。

運営が思い通りにいかず、開催の直前になって、慌てて高額賞品を掲載した広告をばら撒き。

海千山千の人間を釣りあげ、何とか体面を繕った、完成度の極めて低い、馬鹿げた大会 と。

故に、各新聞社ともこの件は見送る方針だったが、『ゴシップから政治まで、全てまとめてブツた斬る』がモットーのアイアン・ウォー紙のみは、所属記者であるオーロンに仕事を命じたのである。

「……ここらで降ろしてくんな。」

そんな彼が不意に御者にかけた声で、フィンドルは思考を一旦止め、馬車の窓から周囲の街並みを覗いた。

「目的の場所まで、随分とあるようですが……」

そして、直ちに問いただす彼女。

西征門は、かなり遠くからでも視認できる巨大な建造物である。それが米粒ほども見えないということは、まだ相応の場所なのだろう。

「少し寄り道をしたいのですが、よろしいですかね？」

「……ええ、構いません。」

この同行はもとより、フィンデルは当面、オーロンの申し出を断るわけにはいかなかった。

目下のところ、彼が、ルベランセを襲撃した者達についての情報を握っている、唯一の人物であるのは無論のこと。

貴重な取材の時間を費やしてまで、自分の搜索に手を尽くしてくれたという負い目がある。

実際その時は、事件に巻き込まれたわけではなく、この国を非公式に訪れたタンダニスと会っていただけなのだが、それを正直に告白しようものならば、必要以上に大事件として扱われそうな予感がした。

「では、しっかりとついてきてくださいや。」

停車した馬車から下り、複雑に絡み合った細い脇道を、オーロンは早足で先導する。

自称・三流新聞紙の記者。

ある時は、情報屋と名乗り方を変える彼。

この男が口から先に生まれてきたであろうことは、もはや疑いようが無い。

決して理知的な言葉遣いではないが、勢いに乗った時、機関銃のように繰り出す押しの強さだけは、一流だと思う。

だが、どこにだって、面倒や厄介ごとに首を突っ込みたがる人間はいるもので。

彼もおそらく、その類に漏れない人種である。

初めはムーベルマの戦いに興味を示していたかと思えば、次に一転して、自分のことを客として扱い。

終いには、諸手を挙げて協力してくれるなどと言う。

フィンドルは自らが歩み寄った事とはいえ、彼の急な心変わりを警戒した。

古来より、舌先ばかりの人物は災いをもたらすのが通説である。彼の動向は、今後も注意深く気にしておかねばならないだろう…。

本音を明かすなら、今、かつての仲間達に再会するのにも、抵抗があった。

内容をロクに調べもせず、大会への参加を決めたという彼等は非常に浅はかだし、気の毒にさえ思う。

だが、ひたすら己の力を信じて突き進むその『ひたむきさ』は、

常に憧れの対象であり。

勇気を与えてくれた存在だった。

変わらずに、いつまでもそうであって欲しいと、心から願っている。

自分の行く末には、もはやそのような清々しい色が入り込む余地は無い。

今にして思うのは。

この気分を顕著に表していたのは、同様に仲間を殺され、自身も重傷を負ったアイザックの傭兵 ミラ＝ホロであった。

タンダニアの面々と共に入国した後、首都の闇に消えて行った彼。

その仇討ちにのみ妄執する異貌に、嫌悪と拒絶感を抱く一方。彼が至って正常であることも、同時に理解できた。

もしも自分に、有益な部位が脳漿以外にあったならば、単にルベランセ襲撃の真相を明かしたいとは願わない。

自分も彼と似たような行為をとっただろう。

その考えに辿り着いた時。

かつての仲間達とは、もはや相容れないという証明が成されたような気がした。

細い道を抜け、開けた場所に出てから、フィンドルは改めて周囲を見回す。

第一印象として。

洗練された首都という地に、よくもこのような下品な繁楽街が在ったものだと思えた。

道端で堂々と、禁制の品をさばく密売人。

露出の多い服を着て、往来の男共に声をかける娼婦。

それらを仕切る、ごろつきや、はぐれ者たち。

危険を承知で店を構える、屋台の連なり。

潔癖な者ならば、その際どい状景を直視することは出来ないだろう。

「フィンドル大尉。

初対面の時……貴女は確か、こう仰いましたよね。

『その件について嗅ぎ回るのは、おやめなさい。命が惜しいですよ。』って。」

オーロンは先導したまま、そこで唐突に切り出した。

生来の皮肉屋なのだろう。

少し声真似をしているし、軍階級で呼ぶことも一向に止めてくれる気配が無い。

「…あれは、私が騎士団に狙われることを危惧しての言葉と受け取りましたが、そっちの方が数段マシだと思っんですがねエ。」

さらに彼は、やけにもったいつけた言い方をした。

いつの間にか、一段と細い裏道に入っており、足場は危ういほど闇に包まれている。

フィンドルは話を耳に挟みながら、とにかく彼の背から離れないよう努めた。

「たとえば、今すぐ言われても信じられますかい？

この国の地中深くに、蟻の巣のように張り巡らされた地下施設があることなんて。」

「それはちよつと…想像がつきませんが…」

「そうでしょうねえ。」

しかし、貴女が探ろうとしている連中は、そんな規模の秘密結社それも、太古から暗殺を旨としてきた組織なんですから。」

彼が唐突に持ち掛けてきた物騒な文句に、彼女は無言で自分の意を示した。

「私の知り合いにもね、その組織に手を出して、痛い目にあった奴がいるんですよ。」

しかも相手は……驚くことに、こんなにも小さなお嬢ちゃんだっ
た。

暗殺者といっても、見た目からは予想できない連中もいるんです。
いや、本当に油断ならない。」

腰のあたりに手を踊らせながら、少し興奮気味に話す彼。

丁度、世羅ほどの身長だろうか、フィンドルは不意にそう思った。

「その方は…今もご健在なのですか？」

「生死の境を100日ほど、さまよいましたがね。」

「私も…二の舞でしょうか。」

フィンドルは唇端を引きつらせながら、さらに突っ込んで訊いて
いた。

「やり方にもよりますわな。」

まだ他の情報屋には、喋っていないのでしょうか？」

「ええ。」

表立って相談したのは、オーロンさんが初めてですから…」

「それは、本当に幸運ですぜ。」

自分たちの秘密を暴こうとする者に……連中は容赦しませんから

ねエ。」

彼は溜め息を交え、語尾を小さくして呟く。

何か、吐き出したい語句を飲み込んだ様にも見えたのは、気のせいであろうか。

「今向かっている先は、その被害者の方の所へ？」

「……いえ、それとは別の。」

気難しいですが……中王都市で屈指の情報網を持っている人物が、この辺りに居ましてね。

あれならば、きっと貴女の助けになるでしょう。」

追う影の歩調が、早まっていった。

「それに……少しくらい痛めつけられたからといって、被害者と決め付けるのも、ちょっと語弊がありますな。」

この世が上手く回るには、『触れるべきじゃない禁忌』というものもあるでしょう？

街の悪い部分を集めてくれている、この裏通りのように。」

彼の言うことには、確かに一理ある。

だが必要悪があるとして、それが暗殺でさえも許容しなければならぬのだろうか。

フィンドルは吐き気がする思いだった。

「……おっと、ここですぜ。」

肝心の場所を三步ほど通り過ぎてから、立ち止まるオーロン。

道端の排水溝にある、小さな石蓋。

彼は屈み、そこを三度ノックする。

すると、地面の奥深くから、すぐに合図が返された。

「不摂生しておりませんか、大尉殿？

かなり狭いんでね。」

いやらしい笑みと共にその蓋をずらし、地下水路へ続く縦穴を示す。

さらに全く躊躇無く、設置されている縄梯子に足を掛けて、慣れた調子で降りていく彼。

フィンドルはおぼつかない手つきながらも、その後を必死に食らいついた。

どうやら、出立前に自宅へ戻り、動きやすいシャツとロングパンツに着替えきたのは正解のようである。

考えてもみれば。

少し前まで一隻の軍艦を預かっていた自分が、知り合って間もない男に連れられて、このような場所。

なんと現実感に乏しい状況だろうか。

自分も、相当な物好きなのかもしれない。

彼女は、心もとなく揺れる荒縄を握り締め、暗い深遠を見下ろしながら、ふと感じていた。

土砂の隙間を縫うように生えた背丈の低い無葉の樹木は、山岳地に多く見られる象徴で。

何物の行く手を阻むこともなく、ただ鹿の角のように枝を広げ、天の恵みが降るその日を待ち侘びている。

大会後半の主戦場、アルチーユ洞窟。

昔は鉱山として栄えていたという話だったが、現在では見る影も無い。

かつてここが人の文明の域にあったことを、物悲しく横たわるトロツコ線路が、示唆しているのみである。

さらに今までのチェックポイントと異なり、交換所が設置されていないことに、そろそろ補給を考えていた組は心を打ちひしがれることとなった。

前半戦において、相当数が配備されていたクマの着ぐるみ達も、今では全く姿を潜めている。

だが、そのことは、参加者たち個人の認識として、辺りの閑散とした印象に輪をかけた程度に過ぎなかった。

各組は、ゴールするために必要な『通行証』の探索で手一杯のため、いずれも進んで争う気配は無い。

そこへ到着したばかりのタンダニス達も、細かい策などは弄さなかった。

周囲と同様、幾つかの穴に狙いを定め、アタックを試みるまでである。

だが、洞窟内には凶獣まではいかずとも、蛇や蝙蝠コウモリなどに代表される有害な生物は多い。

用心のため、ウベは家族一組。

タンダニス、アリアネ、シュナは、それぞれ単独で探索を行うことにする。

そしてカジエットの組は、彼等の入った穴が見える位置に陣取り、見張る態勢をとった。

他の参加者達に、背後を突かれるのを防止するためである。

「あ、あの!!」

各々が松明を片手に、洞窟に入る直前。
大声を張り上げたのは、アリアネだった。

「私に割り当てられた洞窟……何か妙なのですが…。
ほら…水が、あんなに…」

彼女が示す指先を追えば、その岩穴は地盤が緩んでいるのか、壁
や天井から相当な量の雫が染み出ており。
さらに、濡れた苔で一杯の足場が、行く手を阻んでいる。

「誰か…傘持つてませんか？
もしくは、場所を交換していただけると、非常に有難いのですが
…」

半笑いのまま、提案をする彼女。

だが各自が搜索する穴の選別は、誰が指示したというわけでもな
く、自然と決まっていたので、そこに故意はない。
なので、誰もが我関せずと目を逸らし、黙々と各々の穴へ踏み込
んで行く。

「ちょ、ちょっと…皆さん…!？」

アリアネの嘆願むなしく、視界から消える全員。
やがて彼女も諦めて、渋々と岩穴に入ってしまった。

「…本当によろしいのでしょうか、我々も手伝わなくて。」

それらの様子を脇目に、火を点けたばかりの小さな焚き火に木をくべながら、ベルツサスは切り出す。

「見張りだって、立派な仕事じゃねえか。
ちよっぴり楽チンだがよ。」

カジェットは岩場で横になったまま、悪びれもせずに答えた。

「なあ…尻馬に付く時は、とことん行こうぜ。
無駄に体力を浪費して、いざという時に術が使えねえんじゃ……
目も当てられねえしな。」

そして、自分の胸を枕代わりに熟睡している、パンリの横顔に触れる彼女。

詠唱を必要とする源法術を二つほど学んだ後。
頭に詰め込めるだけ詰め込んだ彼に、限界が訪れた。

それもそのはず、通常の修行に比べ、何十倍もの駆け足で教えている。

本来、基礎ほどゆっくり教えるべきなのだ。

「…で、コルスス達の様子はどうなってる？」

「選手村を出てからは、今のところ目立った動きはありません。」

「……そっか。」

肩の力を抜きながら、カジェットは深い息をつく。

結局、自分の手下達で前半戦を突破できたのは、一組しかいなかった。

今ではそれを、ただの諜報役として使っている状況である。

「これから先は、報告を入れる間隔を短くしろ。

向こうが少しでも隙を見せたら、先手をとって奇襲をかけたい。

総力戦になれば、こっちの分が悪いからな。」

対し、コルスス一党は、現時点で半数を残していた。

ここまで戦力差があると、もはや大会自体にも入賞にも、それほど執着は無い。

逆に余計なことを考えないで済む分、やり易くさえ思えた。

「……では早速、そのように伝えて参ります。」

「お前も気をつけるよ。」

彼女の軽い気遣いに、ベルッサスは少し頭を下げ、風来棒を片手に丘を下っていく。

そんな彼と入れ替わるようにして、洞窟側にも動きがあった。

一人、また一人。

カジェットが前景にした穴から、続々と抜け出てくる彼等。

各自が掲げた松明の炎が一齐に集まりだす様子を眺めながら、彼女は、想像よりもずっと早い帰還だと思った。

「…そうそう、うまくはいかぬものじゃな。」

タンダニスの言葉を皮切りにして、他の者達も同様、『はずれ』の報告に終始する。

どこも浅い洞窟で、収穫といえば、ポイント加算となるリングが僅かに発見できた程度だった。

「なんという…無駄骨でしょうか…」

そこへ身を縮ませながら戻ってくる、最後の帰還者のアリアネ。皆の予想通り、髪の毛から靴の先まで、ずぶ濡れの恰好である。

「さ……どうぞ、焚き火の方へ。」

「…う……。」

苦笑混じりのウべに連れられて、血色の悪い唇を震わせながら火の傍に座り込む彼女。

近くに男性陣さえいなければ、服も脱いで、全身を乾かしたい気分だった。

「そちらの穴は、どうでした？」

「どうしたもこうしたも…。」

途中から道が完全に水没してたものですから…。」

「わざわざ、潜って調べてくれたのですか。
何もそこまでしなくとも。」

「してないです！

これは、雫で濡れたんです！！

おまけに苔で何度も滑るわ、それはもう、ぐっしりです！！」

悪気の無いウベの言葉に対し、やけくそ気味に叫び続ける彼女。

「じゃあ、奥がどうなっているのかは、確認してないわけね？
もしかしたら…。」

その背後で話を聞いていたシュナが両手を叩く。

「その水溜りの先は、抜けられるかも。」

「でも、かなり泳いだ末に行き止まりだったたりしたら…。」
「溺れて死んじゃうわよ！？」

エリスとレンは声を揃えて、否定的に言った。

「いや、確かに危険だが……調べてみる価値はありそうだ。」

そんな二人の肩に手を添えながら呟くウベ。

「『通行証』は、この大会で最も重要なもの。

簡単に見付かる場所に置くわけがない。

アリアネさんが入った洞窟は、それを隠すには、まさにうってつけの難所じゃないか。」

「ならば、わしが調べてみようかの。

潜水は得意中の得意じゃ。」

最後に、満を持して、タンダニスが上着を脱ぎながら言う。

「陛下！

またそのように、はしたない！！」

子供を叱りつける母親よろしく、焚き火から声を荒げるアリアネだったが、時すでに遅く、彼は既にスボンまで降ろしていた。

（これだから、この人が王様ってこと、絶対に誰も思わないのよね……。）

その周りでは、全員が気恥ずかしそうに目を逸らしており。

一人内心で微笑んでいたのは、シュナのみであった。

首都の地下水路は、完全な闇ではなく、
わずかに生活の息吹を感じられた。

水路の番人であろう、汚い外套を頭から被った蛮族の小人が複数。
彼等は隅で固まって、じっと黙ってパイプを吹かし。
オーロンとフィンデルが頭上から降りて脇を通るまで、その一連
の行動を佇んで見守っていた。

「このような場所に、本当に住んでいるのですか…？
目的の人物は…」

特に自分に向けられる好奇の視線を感じながら、訊ねる彼女。

「意外と、『住めば都』なんじゃないですかねえ。」

軽口で質問をかわす彼の横顔は、妙な熱がこもっている。

その満ち足りた表情を、フィンデルは頭の端に留め置いた。

同行の建前は大会の取材だったはずだが。

どうも、これから向かう先にこそ、彼の真の目的があるように思わせるのだ。

「まあ、あと少しですから、慌てないで下さいって。」

やがて紆余^{ゆいよ}の最奥、通路の行き止まりに達すると、ひどく錆びた鉄板が姿を見せる。

濃いペンキで二重の丸が描かれている、奇妙な扉であつた。

「よっ…っつと。」

あ、そちらを頼みます。」

「…こうですか？」

フィンデルも促されるがまま手を貸し、二人がかりで、立て付けの悪いそれをこじ開ける。

すると、その先は小さな個室。

扉が開いた時の風圧により、床に積もった埃が舞い踊り。

低い天井に吊るされたランタンの光が、それらを乱反射させながら、内部の様子を照らし出す。

足元に無造作に転がっているのは、ワインの空瓶やパンくず。チーズの欠片に到つては、鼠がかじっている真つ最中である。

先刻、どこかの組織が『蟻の巣のように張り巡らされた地下施設に住みついている』などとオーロンが言っていたが、きつとここよりはマシな所に違いない。

フィンドルは、その場のむせかえるような空気に、思わず眉を曇らせていた。

「……ここは一体…？」

思わず壁に右手を伸ばすと、何か柔らかい物体に触れた。

息を飲み、顔を近付ける。

掛けられているのは、この場所とは全く似つかわしくない、中王都市軍の士官服だった。

豪華な刺繍と、丁寧に縫製された、男女兼用の小さな服。確か、貴族や豪族の軍人が、少年兵の時期にのみ着用する特別なもので、彼女自身も数度しか見たことが無い。

希少な印象が強かったため、強く記憶に残っていたのだ。

さらに彼女は、その襟章を確認してから目を疑った。
階級は『大佐』である。

汚らしい室内で、これだけが綺麗に保たれて、異彩を放つ。
何故このような辺鄙な所にあるのか不思議でたまらないが、彼女

は深く考えないように努め、目線を元に戻した。

「モグラの親分。
元気かい？」

ゴミの山に下半身を埋没させたまま眠っている、醜く肥えた男の頭を、靴の先で叩いて起こすオーロン。

「…ん？」

袖のないシャツ一枚で、赤茶けた肌を晒している彼は、完全に寝惚けた表情でオーロンを見詰め返してくる。

「お、お、おぼっ……おんな……!？」

だが、その背後のフィンドルの姿を認めた途端、色めきだす。
同時に彼のボサボサ頭から、大量のフケが飛散したので、彼女は思わず数歩退かざるをえなかった。

「紹介するよ。
こちら、フィンドル大尉だ。」

自慢げに、オーロンは余計な紹介を付け加える。

「た、大尉……って……あ、あの？」

ふい、ふい、フィンドル大尉……！？
あぎやつ。

ぜ、ぜひとも、あ……握手を……し……して……して……くださ……
興奮のあまり、無様に転倒しながら、勢いよく伸ばされる男の両手。

それを前に。

フィンドルは作り笑いを、より大きく引きつらせながら硬直する。

「彼は、熱狂的な軍事マニアなんで……
……ちなみに機嫌は損ねない方が、後々よろしいことかと。」

そこでオーロンが、耳打ちをした。

再び彼女は、壁に掛けられた小さな軍服に目を移し、若干の理解の気持ちをもって手を伸ばす。

「あぎゃぎゃ……もう、この手は当分洗わないぞ……」

「おいおい、お前さんが手を洗ったことなんて今まであったか？」

だが直後、そんな二人のやりとり。

今まさに握られている自分の手を見詰めながら、フィンドルは相
当に複雑な心境に陥った。

「気が済んだら、そろそろ『先生』に会いたいんだがね。」

…中に、いるんだろ？」

「も、もちろん…。」

お……おでより、ここが好きだし…。」

オーロンの催促により、名残惜しむようにして彼女から離れ、部屋
の奥へと這って進む彼。

否。

ゴミの海を泳いで行く、に近いであろうか

「目的の人物は、彼ではない…？」

それを眺めつつ、フィンデルは半眼で呟いた。

「もしかして、早合点しちゃいましたか？」

からかいながら返すオーロン。

まったく人が悪い、と彼女はむくれ、両腕を固く組む。

「だから、慌てないでくれって、さっきから何度も言ってるじゃありませんか。

ちよつとの辛抱で、国立図書館の資料室よりも役に立つ情報が、
得られるのですから。」

彼は冗談で場を濁しつつ、天井で揺れるランタンを見上げた。

ここは、まさに秘密の地下室と呼ぶのに、ぴたりと来る。
だが不思議と、外のように反社会的な雰囲気は無い。

室内の隅には、船室に付いているような巨大なバルブが付いている小さな扉があった。

それを先程の男が、力を込めてそれを擦ると、やがて隙間から若干の明かりが漏れ始める。

「ど、どぞ……お、お入りください……」

男が招き、応じるオーロン。
フィンドエルも続く。

いやに嚴重だった扉を抜けると、そこはまるで巨大な円柱の中に居るようだった。

壁が全て、機械とパイプで囲まれている、奇怪な空間であり。
床は見渡す限り、大量の紙が塔のように積まれている。

薄闇の中、他に目につくものと言えば。
作業用の木製の机と、巨大な脚立であった。

「起きてましたか、先生。」

オーロンは、媚びる様に声をかけた。

フィンドルがその視線に倣うと、脚立の上で、何者かが作業をしている気配が伝わってきた。

パンリが目を覚ましたのは、夕闇に月が姿を現した頃だった。

自分の冷えた背。

それと対照的な、焚き火の炎。

「す、すみません……！」

そうした漠然とした感覚の中、やがて思考が追いつくと。

パンリはカジエツトを寢床代わりにしていたことに気付き、すぐさま離れて謝った。

「……気にするなよ。」

回復した弟子の様子に、安心して笑う彼女。

焚き火を中心として、ほぼ全員が集まっていた。

炎が心地よいのか。

自分と同様に、双子の少女らも二人で抱き合って、父親のウベの元で熟睡していた。

「今は、あのヘイカって野郎が頼みだよ。

…あそこに潜って、もう一時間くらいかな。」

カジェットが洞窟に視線を向けると、その付近で、アリアネが心配そうな面持ちで歩き回っているのが見える。

「ところでさ、中王都市の『通行証』って、どんな物が知ってるかな？」

「いえ…実は、私も初耳で…。」

彼女からの質問に、パンリは首を左右に振った。

「…そもそも、この国は自由貿易だし。

…所々に検問所はあるけど、通行証なんて聞いたこと無いわ。そりゃあ、昔は必要だったのかもしれないけど…。」

傍らで座っていたシュナが虚空を眺め、肩にかけた大弓の弦を指で遊ばせながら呟く。

「しかし、洞窟に入ったあいつ……ちょっと遅すぎないか。

あの中で、何かとんでもない化け物とかに襲われているんじゃないの？」

「…まず、平気でしょう。」

「ここが大会のコースである以上は。」

それまで娘達に付き添っていたウベが、歩み寄って来る。

「前半戦のチェックポイントでも、わざわざ結界で隔離区画を作り、そこに凶獣を放していた…。」

普段は行楽で使われている選手村の様子からも、周辺の殆どが安全であることが判る。

つまり、この大会においては……外的要因による不確定要素が、完全に排除されているといっても過言ではない。」

さらに彼は、一つずつ状況を確かめるように、自分の考えを呟いて言った。

「さあて。」

そこまでして、大会の賞品が欲しい人達って……どこのどいつかしらね…。」

どうやら同意見らしいシュナが口を開いた矢先、闇に流れる一筋の光。

大きな人影が、やや短くなった松明を高々と掲げ。
飄然と己の生還を示した瞬間だった。

しかも、その片手にはしっかりと、金属製の筒が握られているの
が見える。

「ご無事でなによりです、陛下！
それは…？」

歡喜をもつて駆け寄るアリアネに、彼は強張った表情で返した。

「おそらく、わしらの求めておる物で間違いなからう…。
奥を隅々まで探してきたのじゃが、一組分だけ足らんの。」

「そうだったのですか…。
一応、中身を確認いたします。」

その手に握られた二本の筒を、彼女は丁寧に受け取り、蓋を開ける。
すると、それぞれの中には、通行証と思しき古い羊皮紙が詰められていた。

（……………なんてことだ。）

だが一方のウベは、喜ぶどころか、自分が思い浮かべていた最悪の事態が的中したことに顔をしかめた。

この洞窟の奥に許可証があつたとしても、親切に全組分があるとは限らない。

最も話が早いケースは、見付かった通行証が一つだけの場合。

功労者本人の組がそれを得るのは当然。

その後、目的を果たした彼等がこの同盟を抜けたとしても、自分にはまだカジエットの組と協力する余地が残されている。

しかし、二つの場合は、甚だ面倒なことになる。

この三組の中で最弱の立場なのが、幼い娘を擁する自分の組なのだ。

さらに両組の関係と比べて親交の度合いも薄く、通行証を得る権利から除外されるのは、目に見えている。

当面の障害さえクリアしてしまえば、一刻も早くゴールを目指しなくなるのが、全参加者達の共通の心理だろう。

同盟といっても、あくまで口約束。

必要以上の馴れ合いを望む理由は、どこにも無い。

「…どうかしたか？」

おぬし、顔色が悪いぞ。」

だが、そんな心配を露とも知らず、タンダニスは濡れた肌を晒したままで声をかけてくる。

「いえ…平気です。」

それよりも、どうぞ焚き火の方へ…。

充分に暖をとった方がよろしいでしょう…。」

ここが正念場である。
ウベも平静を装い、彼を誘導した。

「うむ……？」

濡れた両の手を、燃え盛る炎にかざした瞬間。
タンダニスは異変に気が付いた。

自身の手首に着けていた複数の腕輪が、乾いた音を立てる。
金属の表面が剥がれ落ち、ぱらぱらと足元に注いだのだ。

「あつ……！」

それから、まるで咲き終えた花の様に、次々と崩壊する腕輪。
アリアネは口を目一杯に開け広げ、その様子に絶句した。

「……どうして急に……？」

シユナも慌てて駆け寄り、その残骸を拾い上げる。
それには、自分達の組番号が刻印された部分も含まれていた。

「……しもつた。」

泳いでいる時に、岩場にぶつけてしまったかの？」

かろうじて手首に残っている腕輪を、何気なく外すタンダニス。

「失礼。」

無事な方を見せていただけますか？」

その言葉にウベは疑問を抱き、彼が差し出した腕輪をよく観察する。

「これは…番号が若い腕輪だけが残っているようですが……」

「…番号が若い？」

それを脇で聞きながら、シュナは視線を泳がして、何気なく傍のアリアネに目を留める。

彼女が持つ筒の、先端に付いた装飾の宝石が、微妙に振動していた。

次に地面に目を向けると。

砕け散った腕輪の破片も、それと同様、小刻みに震えている。

「腕輪をしている人は、アリアネさんに近寄らないで……！」

「……残念ながら……もう遅いようですね。」

シュナが叫んだ瞬間、咄嗟に一步退いたウベだったが。

不意に軽くなった手首の感触に、その行為が無駄だと知る。

「…そのようだな。」

カジェットもまた、座った態勢のまま、亀裂が走り始めた腕輪を見ながら呟いていた。

「…何やら隣が騒がしいと思っていたら、やっぱり準会員のオーロンさんね。」

高い脚立の上からかけられる、女性のか細い声。
機械とパイプの壁に向けて、何かの作業をしているようだが、その表情は伺い知れなかった。

「準会員？
私ですかい？」

首を大きく反らしながら、間抜けな声を返すオーロン。

「たった今、罰則で降格させてもらったのよ。
『会員規約 第5条：会員以外の者を、この場に連れてくる場合、会員2名以上の承認を必要とする』…だから。」

「たちの悪い冗談は、勘弁してくださいや。
私は、決して酔狂で彼女をここに連れてきたわけじゃ…」

「ふふ、信じるわ。」

必死に取り繕う相手の姿がよほど滑稽だったのか、脚立の足が大きく揺れた。

「……会員とは……何のことです？」

「あ、そうそう。」

紳士淑女の情報交流所、『大驚の瞳』^{おおわし}にようこそ。」

フィンドルの小声での問いかけに、オーロンは、またしても後付けで説明する素振りである。

「人に慌てるなと言う割には、せっかちな人よね。」

ここがどのような場所かも教えずに、連れて来るなんて。」

下にいる二人の会話を聞き、呆れ声を出して興味を示すものの、脚立を降りて来る気配は無い。

フィンドルは、彼女に警戒されていることを察した。

「オーロンさん、頼まれていた事件は調査済みよ。」

43の3番、勝手に持つて行って頂戴。

『機械』が壊れちゃってね、いま手が離せないの。」

「43……どこですかね？」

オーロンが、足元に積まれた紙の束を見回しながら訊く。

「いま踏んでいるのが、そう。」

「おっと、失礼。」

彼女の指摘に、片足を上げ、おどけながら叫ぶ彼。

「まア…これはこれで有難いんですがねえ。」

さし当たっては、ゴシツプを書いている暇が無いんですよ。」

「残念ね、大変おもしろい情報なのに。」

（…………おもしろい情報……？）

彼が手にした紙片を、フィンデルは背中越しに覗いてみた。

だがそれは、

・大地主のレッチャー家の主人が、また自分の屋敷の若い女中に手を出したらしいこと。

・あの嫉妬深い正妻にバレるのも、時間の問題とのこと。

・一連の事件が明るみになれば、レッチャー家と懇意の仲である、由緒正しきサレオ家は、今後の取り引きを中止する恐れのあること。

など。

女の言葉とは裏腹に、記されていたのは非常にくだらない箇条書きである。

『ゴシップ』という語句が初めに交わされていなければ、これらは何の暗号なのだろうか、と深読みしてしまったことだろう。

「私は、フィンドルバーディと申します。

ここがどういう場所か、ぜひとも教えていただけないでしょうか。

」

どこかやりきれない感情を抑えつつ、彼女は慇懃に挨拶をした。偏屈が相手であれば、とっかかりが肝心であることは、長い経験で知っている。

「フィンドル…？」

対し、女は頭上で声を潜め。

確認するように一度だけ返した。

直後に、落下物。

ごとりと重たい音を響かせて、床に散乱している紙の上を転がるのは、念通球である。

彼女は念通士なのだろうか。

「！」

フィンドルが訊ねる前に、急に視界に現れるブーツの先端。さらに続けざま、黒いストッキングに包まれた細い脚線が降りて

きて、同じく黒いガーターを見せる。

「御免なさい。」

大尉さんとは知らず、とんだ粗相を。」

フィンドルは、そうやって脚立の途中から挨拶する女の容姿に圧倒された。

後ろで束ねて丸めた髪、瞳と唇は薄桃色。

丈の短いワンピースから覗く肌は、蠟のように白く輝き。表情の乏しい面皮も加わって、まるで石膏の彫刻。

いや　それよりも、花の精霊か。

その印象を強めたのは、彼女の身体から漂う香りのせいであった。おそらく植物から採取された、香水かオイルの類だろう。

奇妙な雰囲気を全身に纏いながら、床につま先を降ろす彼女。

それはまるで、扉一枚を隔てて、俗世とは別世界にいる者の様であった。

「会えて光栄だわ。」

貴女が…本当にあの、フィンドル…えっと、バーディ……ハーディ？」

「発音は、どちらでも結構です。」

「じゃあ、好きなように呼ぶわ。」

両足を床に降ろしてから向き直り、その女は手を伸ばしかけた。

が、そこで大きく態勢を崩し 傍のフィンドルに支えられる。

「ありがとう。」

想像していたよりも…軍人っぽく無いのね。」

絡んだ細い腕を慎重に抜きながら、彼女は言う。

「私が恐くない？」

「ええ、割と。」

そして、まるで唇を重ねるか、舐めるかように差し迫る白い顔に向けて、フィンドルは漠然と答えた。

「嬉しいわ。」

オーロンさんなんて、けっこう長い付き合いだけど、いまだに手の届く距離にさえ、近付いてくれないのなもの。」

「単に苦手なだけですぜ。」

すかさず、後方で小さくぼやく彼。

「……以前……どこかで、お会いしたことがありましたか？」

一方のフィンデルは、何かの思いに駆られ、無意識に訊いていた。

「なぜ、そう思うのかしら。」

……初対面なのよ、確実にね。」

襟元を直し、長い睫毛^{まつげ}を伏せて呟く相手。

「いいかげん失礼じゃありませんかい、先生？

私の客人にだけ名乗らせて。」

「……まいつちゃうわ。」

この生活が長いと、一般的な『たしなみ』も忘れるの。」

今にも消え去りそうな薄笑いと共に。

「私の名は、イメルゲ。」

イメルゲ＝モンスロン。

東方で儚く散った、卿の養女です。」

永遠に消えそうにない言葉が、差し向けられた。

夕闇の向こう、帝政ヴァルクハルト方面に浮かぶ小さな黒点。

「…あの飛翔艦を停めずに、国境を越えたいって？」

それを双眼鏡で視認しながら、中王都市軍・国境警備隊の壮年係官は呻く。

「何とかありませんか。」

一旦エンジンを冷ますと、再点火が厄介な代物ですから…」

彼の傍で説明するのは、ツナギ姿の男。

作業帽を目深に被っており、表情はうかがえない。

「気持ち解るがな。」

係官は双眼鏡を構えたまま、彼の人相よりも、その胸にあるバッ

ジに目を留めて呟いた。

イマツエグ社。

空の仕事に携わっていれば、誰でも一度は聞いたことのある、名の知れた企業だ。

「飛翔艦だろうが馬車だろうが、入国前の検査は、規則で決められている。」

下っ端の俺達がどうこう出来る問題じゃ……」

「しかし今回は、チバステイン・デスタロッサ男爵の火急の御用なんですよ。」

『あれ』自体が大会の賞品という話、聞いていませんか？」

「……賞品？」

おい、そんな話、あつたか？」

係官は半身を反らして、背後の詰所に居る念通士に訊く。

「……ン、そっぴゃさつき……連絡があつたな。」

……何だか、えらく催促してた。」

機器の置かれた机に両足を放りながら、新聞と軽食を片手に、平然と返す相手。

「馬鹿野郎！」

なんで、そんな重要な報告をしねえんだ！！

…本当に、男爵の用事だったか？」

「ああ、言ってた、言ってた。」

「畜生、上に知られる前で良かったぞ、まったく…」

「へっ。」

男爵に尽くせば、明日の馬競走^{レース}に勝てるって？」

「もう、てめえは喋るな！！」

おどける同僚を一喝した後、ぐっと歩み寄る係官。

「…当該飛翔艦の、航行継続を許可する。
絶対に間に合わせろよ。」

「勿論です。」

そして小声で囁き、一転して急かすような態度に。
ツナギの男は思わず、表情を緩ませた。

「あ……ちょっと待った。」

だが、踵を返した途端。

呼び止めてくる係官の声に、再び緊張で唇を結ぶ彼。

「…何か、他に手続きでも？」

「いやいや…それ。
それだよ。」

静かに振り向けば。

係官は、手にした羽ペンを、やや下方に向けて示していた。

「そんな手で、よくも操縦できる。」

自分の右手の薬指と人差し指が無いことが、手袋の上からでも判断できたらしい。

おそらく、他意は無いだろう。

単に好奇心から出た言葉ということが、その惚けた表情が物語っている。

「…子供ガキの頃、弾薬の点検中に『やって』しまつて。
でも、もう慣れてますから、問題ありませんよ。」

男はやや気恥ずかしそうに帽子に触れながら、軽く笑った。

「働き者の少年だったんだな。」

まったく、どこぞの馬鹿にも、爪の垢を煎じて飲ませてやりてえ話だ。」

「はは。」

では、失礼。」

丁寧な見送りに会釈を返しつつ、彼は改めて、首に下げた防風ゴーグルを装着する。

そして、先導を担う小型の戦闘騎に素早く搭乗。呼吸を整えてから、速やかに発進をした。

それから数分後。

イマツエグの新造飛翔艦は、対空砲塔が連なる軍施設を目下に。国境を難なく通過したのである。

それはまさに、洞窟から帰還した直後のタンダニスと全く同様であつた。

シユナの警告も甲斐無く。

軋み、ひび割れて、崩壊する全員の腕輪。

「まさか……これは……私のせいですか……？
だとすれば、なんと取り返しのないことを……！！」

その無惨な光景を前に、通行証の入った筒を握ったまま立ちすくむアリアネ。

「落ち着いて下さい。」

我々はまだ、失格したわけではありませんので……」

「ああ、その通りだ。」

続けて彼女に声をかけたのは、ウベとカジェット。

二人は所持している腕輪の殆どを失ったものの。

自身が元から持つリーダー・ブレスレッドは無事である。

「勘違いさせちゃって悪かったわ、アリアネさん。」

あなたじゃなくって、通行証の容れ物……その『筒』が危険だつて言いたかったの。」

慰めるように寄り添い、それを代わりに手に取るシュナ。

「おそらく大半の参加者が持つ三桁の番号の腕輪は、錬金術で作られた特別製。」

それらは、これを開けた時に作動する罠に反応して、壊れる仕組みになっていたのよ。」

彼女は説明しながら、筒の先端に装飾された宝石のような物体を、地面に落ちている破片に近付ける。

するとそれらは、大きく振動し、さらに砂のように細かく分解されていった。

「そういえば、重さをあまり感じないこのリングも、錬金術で作られているとの説明がありました。

我々は、もう少し警戒をするべきでしたね……。」

腰に下げたリングホルダーを片手に答えるウベ。

先ほどのシュナの実践も相成って、それに反論する者は誰もいなかった。

「ああ…私さえ迂闊な行動をとらなければ……！！
…どうして私はいつも、こう…」

「おぬしも悪気があったわけではなからう。
……皆も、どうか許してもらえぬかのう。」

未だに頭を抱えて悔やむアリアネを見かね、タンダニスが苦笑混じりに呼び掛ける。

「あの場合、誰だって中身を調べるだろ。
ましてや今は、同盟中なんだ。
あんた一人が責任を感じることはねえって。」

陰気を吹き飛ばすような力強い言葉に、ウベも首肯した。

「皆さん…。」

段々と明るさを取り戻していく、アリアネの表情。

傍らのシュナも、ほつと胸を撫で下ろす。

「…そうか……この罠がほぼ不可避なものだとしたら……」

だが、一連の騒動を黙して聞いていたパンリが、そこで口を開いた。

「これは、単なる意地の悪い罠じゃないですよ。
憶えてますか？

あの大会の進行役を努める魔導人形が、述べた前置きを。」

「前置き？」

急に気色ばんだ彼の様子に、思わず顔を向けるカジェット。

「たしか…こう言っていたはずです。

飛翔艦乗りにおいて特に大事とされる三つの要素、
勇気・知恵・体力を競っていたと、と。」

パンリは咳払いをして、一歩前に出る。

「ただ漠然と、勇気や知恵や体力などという言葉聞いた時。

人はどうしても、こういった競技に対する常套文句として受け取ってしまう。

でも、よく考えてみて下さい。

『勇気』に関してのみ、今までの中で、別の解釈が出来るところ

は無かったでしょうか？」

「……おいおい、今度は謎かけかぁ？
勘弁してくれよ。」

いまいち反応の薄い全員の気持ちを代弁するかのように、カジエツトが声を洩らした。

そんな、軽い沈黙の最中。

「……広場に集まった私達に向けて、参加表明を求めた、一番最初の時だわ。」

シュナのみが視線を固めたまま、自分に言い聞かせるように呟く。

「はい。」

それに対し、大きく頷くパンリ。

「そ、そうか。」

……なるほどねえ。

……それで、つまり……どういうことなんだ？」

思いが合致した様子の二人に合わせ、表情を粛としたものに変えつつも、カジエツトは再び訊いた。

「後半戦をクリアできる組は、とっくの昔に限定されていたのよ。」

『命の保障が一切無い』という脅し文句にも負けず、すぐに参加を決めた『勇気』ある組に。」

口に出すのも悔しいが、シユナは断腸の思いで説明をする。

「戒の奴も『質問が競技に関するから、拒否をする』っていう魔導人形の言葉が引っかかってたみたい。

今思えばあれは、既に競技が始まっていたことを示唆してたわけね…。」

「でも一応、ヒントを言葉として出しているのですから、公平な仕掛けとも言えます。

たとえそれに気付けなくとも、カジエツトさんのように何も考えずに袋を手にした方もいますし…」

「何も考えてねえってのは、余計だ！」

不意に凶星を突かれた彼女は、パンリの頭を叩く。

「あの時は、急に魔導人形が狂った口調で注意を逸らしてきたから、そこまで考えが回らなかったわ。

でも、選手村では態度が普通だったところを見ると、あれも演技だったわけよね…。」

シユナは齒噛みしながらも、諦めのついた様子で、肩から弓を降ろしていた。

仕掛けが明らかになったことで、少しは溜飲が下がった気分である。

（確かに、あの思考力を削がれた状況で、私やカジェットさんのように迷い無く行動できた組は、偶然に過ぎない…。

だがそれにしても、すぐに袋は無くなってしまった。

おそらく、この大会の仕様を知っていた者が多かったのだ。つまり、運営側の息のかかった人間が……！）

一方のウベは、自身の推測をパンリの意見に重ね、息を飲む。

幾分、斜に考え過ぎているかもしれない。

だが、女性がいる組には攻略が困難な、前半戦のチェックポイント然り。

組によっては一瞬で失格してしまう、この後半戦のやり方も、ただの罠にしては悪辣すぎる。

真に公平であるならば、初めに腕輪を得られなかった者達に対して、何かしらの救済策が取られていて当然であろう。

（運営側が仕組んだ連中は、壊れない二桁番号の腕輪を8割は手に入れているはず。

そこから脱落した者を差し引いても、現段階で6割以上は独占していると見て間違いない。

大きな不確定要素さえ無ければ、間違いなく上位を独占できる数だろう…。）

競技に選ばれたコースが安全な理由。

そしてゴール到着時にポイント換算される、腕輪の法外な価値。

ようやく、全ての事柄が一つの答えに繋がったような気がした。

（全ては…飛翔艦を取らせなかったためか…。
回りくどい、小賢しいことを考えるものだな…。）

だが、そのように利益を得る側を仮想できれば、生き残る方法も見えてくる。

ウベは新たな気持ちで、かつて戒が持っていた腕輪を握り締めた。

「ひどい話ですよ！

その時、我々はまだ、現地にすら着いていなかったのですから…。」

「まあ、済んでしまったものは、仕方あるまい。
踊らされるのも、また一興じゃろう。」

タンダニスは、憤るアリアネを笑いながら、腕輪の欠片をつまみ、吹いて飛ばす。

さほど落胆しておらず、恨み言の一つも無い様子は何とも潔かった。

「…短い間じゃったが、楽しかったな。
礼を言わせてくれ。」

そして、周囲に向けて述べられる言葉は、不思議と品格に満ちて

おり。

全員は思わず目を見張っていた。

「リングの方は、ほとんど使ってしもうたが、壊れていない腕輪は四つある。

半分ずつ取らそう。」

まずウベに向け、筒と二つの腕輪を差し出すタンダニス。

彼は同時に、残りをカジェットに渡すよう、シュナに促した。

「何故、我々にまで腕輪を？」

縁のある向こうの組にならともかく……」

「まあ、堅いことを言うでない。」

戸惑うウベに対し、タンダニスは破顔して、手にした品々を強引に握らせる。

「それより、この先の道中は気をつけよ。

……あまり上を望まぬ方が良い。

娘達の無事を考えるのならば、の。」

そして、焚き火の傍で熟睡している双子の姉妹に、穏やかな目を向ける彼。

「……ご慧眼、恐れ入ります。」

しかし、何の見返りも無しに易々と……貴方は未練が無さ過ぎる。
一体何のために、この大会に参加を……？」

「語る程もない、些細なことよ。」

ウベの問いかけに、タンダニスは長い顎鬚を得意そうに撫でながら背を向けて、悠然と仁王立ちになった。

「ただ……国を知るためには、そこに生きる民との触れ合いが一番
と思つての……」

「どうしてもいいですから、そろそろズボンだけでもお穿きく
ださいませ！」

荘厳な台詞の途中だが、堪らずに叫ぶアリアネ。

「……まったく、最後なのに締まらないこと。」

シユナは一転して和やかな雰囲気に変わる彼等を眺めながら、パ
ンリに歩み寄り、通行証の入った筒を差し出す。

「あ……あの……何ていうか……」

なすがまま、それを受け取り、少し身を引いて口ごもる彼。

「もう、そんなに身構えることないでしょ。」

この期に及んで『一緒に帰るわよ』なんて、言わないから。」

意外にも、シュナは素っ気無く笑う。

「昨晚のうちに、非常食としてクッキーを作っておいたの。
頭を使うと、甘いものが欲しくなるじゃない？

だから……」

そして、それをポケットから小さな袋を取り出して添える彼女。

「……有難うございます。」

自分達が万全の態勢で臨めるのも……シュナさんのおかげです。」

「……まるで、戦場にも行くみたいな言い方をするようになったんだ。」

あの弱虫がね。」

「……すみません。」

厳しい口調に、彼は愚直に返すばかりだった。

「あんまり苛めるなって。」

小言なんて、帰ってからでもいいだろ？」

そこへカジエットが近付いて、助け舟を出してやる。

「言葉だけじゃ、全然足りないわよ。
代わりに、思いつきりぶん殴ってあげるから……絶対、無事に帰
って来なさいよね。」

シユナは言い放つと、表情をそれまでとは全く別の不敵なものに
変え、二つの腕輪を放り投げた。

それを片手で受け取り、カジェットもまた歯を見せる。

「良かったな、パンリ。」

お優しい友達は、帰る理由まで作ってくれたぜ。」

「馬鹿ね。」

あんたも含まれてるのよ。」

くだけた表情は、わだかまりが微塵も無い。

二人とも、初めて出逢った時のままだと、パンリは気付いた。

そして。

それらを眺めていると、自分を変えたいと願う思いが、ひどく陳
腐なものにさえ思えた。

「……ちょうどいい機会だ、神父さんよ。」

あんたの娘が目を覚ますまで待つてやる……そこから先は、うち
らも別行動だ。

悪く思わないでくれ。」

カジェットは岩場に腰を降ろし、特に感情を交えずに淡々と告げ
る。

有無を言わさないつもりであることが、そのきつい横顔から見てとれた。

ウベは深く頷いて、シュナに向け一礼。
それを受けた彼女も、勢いよく振り返る。

緩い時の流れが、唐突に流れ始めたようだった。
待ちかねていたタンダニスとアリアネと合流し、シュナは視界から徐々に消えていく。

（自分を変えることって…一体どうということなんだろう）

周囲は音を失い、自分の心の声が響いた。

迷いではない。
今までとは別の感覚を煩いながら、パンリは暫く、その方角を見詰めていた。

「貴女が、モンスロン卿の？」

フィンドルには、その後続く言葉が無かった。

静止した思考の中で、彼から家族は居ないと聞いていた記憶だけが反芻している。

「義父というのは…額面通りの意味よ。」

相手の疑問を察したのか。

イメルゲ＝モンスロンは、静かに呟いた。

「彼は、ある施設から自分を養子に迎えてくれた人なの。」

その後、私はこうやって、すぐに隠遁して。

彼と生活を共にしたことは無かったけれども……様々な情報を横流ししてあげていたわ。」

細い指が、机をなぞり。

「それは結果的に、彼の寿命を早めただけだったけども。」

そう言葉を結ぶと、彼女は目を細める。

「…何故、笑うのですか？」

「だって、皮肉を口にする時…人は苦笑を浮かべるものでしょう？」

フィンドルの問いに、イメルゲは自身の唇に触れながら、無機質に答えた。

「彼が亡くなったことについて、どのように知り得たのですか。その事実を知る人間は、あまりにも限られている…。いくら貴女が、情報を得ることに秀でていても……」

血の通わない問答に顔をしかめながら、フィンデルはさらに訊く。

「当然の疑問ね。」

でも貴女が退役したと聞いて、予感し。

ここを訪れたことで、それが確信に変わった。

……こんな説明じゃ、不服？」

イメルゲの言葉に、一応は首を横に振る彼女。

相手が嘘を言っていないと仮定すれば、今の会話だけで推測できることが幾つかある。

軍内の末端に過ぎない自分の状況を把握していることから、その情報網は決して侮れないこと。

だが、それはあくまで国内限定であり、他国までは及んでいないこと。

どのように情報を収集しているのかは見当もつかないが、その方法にも限界があるということだろう。

「ちなみに、彼との最後の会話は出国直前。

『名将の乗る飛翔艦だから、タンダニアまでは必ず辿り着けるだ

ろつ。』って…あの人にしては珍しく、自慢のように話していたわ。」

「…！」

……申し訳ありませんでした…。」

その言葉は、フィンデルの心を抉るようだった。

「どうして謝るのかしら？」

「期待に添えなかったことに…」

無為な問いだが、彼女は目を伏せて返す。

「案外、義父のことを分かっているのね。」

騎士団の秘密を握って亡命することのリスクなんて、承知の上。常に最悪の状況を想定して、覚悟も決めている人間よ。」

「かといって…命が救われるに越したことは、無いと思います。」

「氣を楽にして頂戴。」

大尉さん。」

フィンデルは彼女に促され、初めて全身に力が入っていることに気が付いた。

「命の使い方など、人それぞれじゃないかしら。」

「しかし

」

「人の周囲は、常に死で溢れているわ。

そして、死者達が、生者の足をひきずることなんて、無いと思うの。」

何かを答えようとしたフィンデルを制して、イメルゲは続けた。

「全ては、生きている者の気持ち次第よ。

レイキ＝モンスロンの死に関する感傷も、私に対しての懺悔の気持ちでさえ、貴女の中における『決め付け』に過ぎない。」

「…あの方が生きていたら、貴女と同じように慰めてくれたかもしれません。」

「そう、可笑しいわね。

血の繋がりがあって無いのに。」

相変わらず、イメルゲの笑みは一方通行だった。

「あの……話の腰を折っちゃあ悪いと思うんですが、先ほどの話……」

それは事実ですかい？」

そこへ、力のこもった目つきで、会話に割り込んで来るオーロン。

「騎士団所属のモンスロン卿が亡命して…それを何者かが妨害、および肅清した？」

目ん玉がブツ飛び出るほどの、特ダネじゃありませんか。
先生も人が悪いや。

ルベランセのことは教えてくれたのに、そこに卿が乗っているなんて話は初耳…」

事件の詳細を知らない彼は、興奮を抑えるのがやっとの様子だった。

「順番が逆になっているのではなくって？」

私は、先にそちらの用件を伺うつもりなのよ。」

「あ、ああ……そうでした。

でも約束ですぜ、後で今のこと、必ず取材させて下さいや。」

興奮に喉を鳴らしてから、彼は一息ついて、姿勢を正す。

「…で、その、卿に手をかけた者と、同一かどうかは不明なんですがね…。」

こちらの大尉の仲間が……どうやら『久遠』と接触したようで。」

「　　ねえ、モグラ君。」

イメルゲは首を傾け、壁のパイプを叩いて合図をしながら、声の調子を上げて言う。

「扉を閉めて頂戴。」

…それと、外を見張っていて。
私がいいって言うまでね。」

「あ、あい！」

外からすぐに快活な返事が聞こえ、室内の圧が高まる。

そして、バルブを回す音。

あの重い扉が、ふたたび閉められたのだ。

「流星は先生。」

随分な念の入れようで。」

だがオーロンといえば、それらを眺めながら、のんびりと感嘆の
声などを洩らしていた。

「私は、命が惜しいわ。」

向こう見ずな…貴方と違って。」

「かいがぶらないで下さいや。」

私だって、そんなタマじゃありませんぜ。」

そこでフィンデルは、イメルゲの変化に気付く。

久遠という言葉の響きがあつてから、それまで飄々とした雰囲気
だった彼女は、緊張を身に纏っている。

「先に一点だけ、お聞きするわ。

口にすることさえ憚られる忌まわしい組織が関わっていると、なぜ断言できるの？」

「あの『音速のギュスターヴ』の装飾品が、現場に残っておりまして。」

「…紛うことなき証拠が出たものね。

これで中王都市の国政争いは、騎士団側に軍配が上がったと見ていいのかしら。」

彼女の指が、机の上で忙しく踊る。

「さあて…どうでしょう。

少なくとも、両者が繋がった明確な証拠は無い。

先生が知らないということ自体、あちらさんの内部でも、まだ極秘事項として扱われているという証明だと思いますがね。」

オーロンはそこで初めて彼女に近付き、肩をすくませて言う。

「よって、現時点で事の大小は判断できる段階じゃありませんが…。最近の『久遠』の動きについては、把握しておきたいと思っています。」

ぜひとも、お力を拝借…」

「私自身も興味があるし、快くお受けしたいと思うわ。でも彼女はご存知なのかしら、久遠を探るという意味を。」

……それこそ、義父と同等の危険に、立ち向かう覚悟が。」

座ったまま、身を捻るようにして、イメルゲは言った。

「……？」

急に話を振られたフィンデルは、説明を求めるようにオーロンの背中に食い入る。

「……オーロンさん。」

どうやら大きな失敗を犯したようね。

貴方、一番重要な説明を怠っているじゃない。」

「はて……どういうことですかい？」

「とぼけずに、見せてあげなさい。」

「……今、ここで、ですかい？」

「そうよ。」

短くも、強い口調で促されたオーロンは、少しためらいながら、背広をシャツごと捲り上げる。

そうして露になった脇腹には、痛々しい拳大の傷跡があった。

「……貴方という人は……そこまで物好きな方でしたか……。」

フィンドルは声を震わせ、ようやく言葉をひり出す。

ここに来る途中、彼が語った犠牲者とは、彼自身である。

一見、物見遊山を絵に描いたような男だが、この件に相応の覚悟で望んでくれているのだ。

それまで彼女が抱いていた警戒心は、氷が解けて無くなるようであった。

「物好き……褒め言葉として、受け取らせていただきます。」

気取りながら、フィンドルの横につくオーロン。

「いや…照れますぜ。」

そんなに感動なされなくとも…」

だが、いつまでも顔を下に向けたままの彼女に不審に思い、さらに顔を近付ける。

「感動ですって？」

私は、非常に不愉快です。」

「へ？」

返された冷たい言葉に、今度はがらりと変わって、オーロンは困惑した。

自分が言ったとおり、感謝されたとしても、その逆はありえないと踏んでいた。

何が不愉快なのか、理解し難い。

当代きつての情報通を紹介してやったつもりなのだ。

「イメルゲさん。

非常に残念ですが、私は帰らせていただきます。

ここの事は一切を忘れますので、ご安心下さい。」

「な……ここまで来て、ビビったんですかい？」

拳句の果てに、勝手なことを言い出して扉に向かう彼女に、オーロンは慌てて立ち塞がる。

「貴方に危害が加わるという可能性を、あらかじめ知っていれば、私はノコノコとついてきませんでした。」

「な、なあに。

裏の仕事には、危険はつきものというやつで……」

しかし、まさに屹然としたフィンドルの表情に、すっかり気圧される彼。

「……危険にも、度が過ぎています。」

「だってえ、もったいないでしょう？」

ここまできて。

知りたくは…ないんですか…？」

「それ以上は見苦しいわ。

大尉の性格を見抜けなかった貴方の負けよ。」

声の調子が変わる一方の彼に向けて、イメルゲは席にいたまま言い放った。

「彼女はきつと、他人が傷付くのが一番イヤなタイプ。

軍人という職業からは、程遠い人種ね。

人が傷付くのを見たくない………だけかもしれないけど。」

「否定はしません。」

思いがけぬ人物評に対し、鋭い眼光が返される。

「ちゃんと、彼女をお送りしてあげてね。

ご婦人が一人で歩くには、あの通りは危険すぎるわ。」

それを受け流すように、イメルゲは視線を逸らし、軽く笑った。

「あの…。

なんというか…お二人に対して、申し訳ない気持ちで一杯ですぜ

…」

「別に、気にしてません。」

「私もよ。」

二人からの強烈な視線を向けられながら、オーロンは額の汗を拭いた。

「う……じゃあ、ぼちぼち帰りましょうかねえ…。
おっと…！」

だが、気の重さが足に移ったのか。
勢い余って、床の機材に蹴つまずく彼。

《 我々は…。

…救国…。 》

その拍子に何かのスイッチが入ったらしい。
途端に、脇の壁に設置された声通管から、音が漏れる。

「あら、直ったわ。」

オーロンさんでも、たまには役に立つことがあるのね。」

イメルゲは歓喜の声と共に、手元の念通球を握った。

「ちえっ…」

皮肉に舌打ちしながらも、彼は耳を澄ますことは怠らなかった。

「周辺の軍施設に向けた通信みたいだわ。
さて、何か面白いことでもあったのかしら…」

易々と『軍施設』などと口にすることから、盗聴の類なのだろう。

今までの経緯からして、フィンデルは同時に、彼女とオーロンの関係も完全に理解する。

裏の情報屋と新聞記者との相性は、水と魚よりも優れたものに違いない。

だが、この女の嬉々とした様子はどうかだろうか。
少々ふてぶてしくもある。

フィンデルは、憮然として再び踵を返した。

《 周辺の駐屯軍、諸君らに告ぐ。
これから数時間の後 首都リエディンは、地獄の業火に焼かれるであろう。 》

だが、ノイズは消えて。

声が澄んだ音として、はっきりと聞こえると。

それは、決して看過できるものではなかった。

《 くだらん大会の賞品である 飛翔艦の一隻は、我々の同志
によって完全に奪取された。 》

それを列強七国の盟主たる、中王都市の王宮に向けて墜とさせてもらう。

この蛮行が、過剰な文明を生み出した、人間の傲慢さを認識してもらおう良き教材となりえるならば

実に光栄であるが、如何であろうか？
》

少し気取った、演説のような語句。

「大会…？」

それに…奪取？…王宮って…？」

フィンドルは呆然としながらも、矢継ぎ早に訊いた。

今この首都圏で行われている催しは、一つしか心当たりが無い。これから現地に向かおうとしていた、オーロンも同様である。

「…今の…。」

先生、感度を上げていただけませんか！」

「騒がないで。

もうやってるわ。」

彼女は念通球を握り締めたまま、空いた手で制する。

真剣な口元と横顔。

声通器から出力される声は、段々と音量が増していく。

《 空からの理不尽な暴力を止めることが、非常に困難であることは 過去の歴史により、既知であろう。

それでもあえて、本艦に対し何らかの攻撃姿勢を示した場合、相應の報復をさせていただく。

我々には、その十分な戦力と準備があることを、まず念頭に置いてもらいたい。 》

機械の向こうで。

男の声は、静かに、そして確かな脅迫をしていた。

《 中王都市の軍人……並びに、官僚・貴族どもよ。私は、諸君らの迅速なる逃亡を期待してやまない。 》

諭すようだが、文言は明らかに挑発的で居丈高である。
三人は反射的に、騎士団の姿を思い浮かべていた。

《 繰り返す。

民草らに、己の無能さと醜態を存分に示されることを我々は『コーラル救国軍』。

この世界の悪しき流れに対し、破壊を以って、異を唱える者である 》

だが、知らない組織の名。

小さな密室で。

六つの瞳が、無尽に交錯した。

第四章

第六話 『以心變心・後編』

了

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

4・7 「三つの嵐」

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The seventh story
' Storm People '

当初は知名の低かった催しも、予行の花火が打ち上げられ、豪華なアーチが建造されると、噂が噂を呼び。

実態は見えずとも、それにあやかろうとする者達が集まりだす。

この大会を開くため、ギルドをはじめとした諸所への様々な便宜を計らってきたチバステイン「デスタロツサ男爵にとって、それは至福の景色であった。

やがては世界が追隨するに違いない、中王都市の新たな一歩。それを思うと、心が躍らずにはいられなかった。

「一時はどうかと思いましたよ…」

一方。

広場に鎮座させた、自分の姓が側面に記されている真新しい飛翔艦の前に。

ブロード「イマツエグが安堵の溜め息をつく。

「どうなるか、ではない。

責任者ならば、もう少し余裕をもった航行予定にして然るべきだ。

」

「作品を仕上げる時は、どうしても、いただいた工期ぎりぎりになっってしまう。

良い技師ってのは…そういうものなんですよ。」

社長には見えないほど、屈託なく照れながら笑う彼に、デスタロツサはそれ以上何も返さなかった。

一介の技術者に過ぎなかった彼が、飛翔艦の兵器商の長になりえ

たのは、自分の尽力によるところが大きい。

故に、彼の飛翔艦を大会賞品として用いたのも、その成果を確認するという側面もあった。

だかどうだろう。

目の前に現れたそれは、確認などと考えた自分を恥じるほど、想像を遥かに凌駕していた。

装飾を極力廃し、洗練された物理学に基づく、紡錘形状の胴体。唯一の兵装となる、両翼の下部に格納された、出入自在の二門の主砲。

軍属ではない新しい飛翔艦乗り達のため、機動性を重視した無駄のない造形は、見事の一言に尽きる。

「正直……社長という立場が無ければ、自分が直接、携わりたかったですよ。」

「言つに事欠いて、私の前でそれを言うかね。」

才気に溢れた彼だからこそ許される冗談に、デスタロッサは笑う。

偶然、辺境の町工場で見かけた若者の熱心な仕事ぶりを買って、社長職に就かせたものの。

それは、初めの一歩だけだ。

後日になって、出資に加わる者が後を絶たず、いつの間にか会社が大きくなっていったことには、驚かされた。

飛翔艦技術に寄せる、大陸各所の期待と打算。
その両方を、充分に感じさせるものだった。

（…熱心なのは結構だが、有能ぶりは極力秘すべきだな。
出る杭は、必ず打たれるものだ。）

驚きの嘆息が止まない観衆。
その中で唯一、血色を失っているムーゼンクレタ社の関係者を見かけ、苦笑するデスタロッサ。

一位に進呈される予定の飛翔艦こそ、老舗兵器商である彼等の面子を立てたものの、この艦の出来を目の当たりにすれば、襟を正さざるを得ないのだろう。

「残る一隻ですが、こいつが到着したのならば時間の問題です。
夜半には、もっと壮観な絵をお見せできますよ。」

「…そうであることを祈るがな。」

今回、イマツエグに頼んだ艦は二隻。
残る片方も、工房は違えど、ほぼ同距離に位置するヴァルクハルトで建造させていた。

ようやく、肩の荷が降りる。

そう一息つこうとした矢先。

「あれは何だ？」

広場から大通りを挟んで見える西征門の様子に、デスタロッサは思わず言葉を漏らしていた。

疾走する馬車が、次々と繰り出しているのである。

「…何でしょう？」

作業に氣をとられて氣が付きませんでした…」

土地勘が乏しいイマツエグには、ぼんやりと返す以外に無い。

「おい、君。

いつからだ？」

考える時間も惜しいと。

人混みを抜け出して、道端で座っている物乞いに訊ねるデスタロッサ。

「…なんだい、あんた。

やぶからぼくに…。」

「征西門を抜ける馬車が、不自然に多いではないか。

いつ頃から、あの調子なのかと訊いているのだ。」

憮然と返す相手に、彼は懷から小銭を出しながら、改めて問う。

「ついさっきからだよ。」

この時間、こんなじゃねえんだけど。

普段は交易の馬車の出入りも終わり、静かなものさ。」

その好意を受け取りつつ、物乞いは素直に答えた。

「：そう言われてみれば、妙ですね。」

先程から、衛兵が検問をしている様子がありません。」

「あれらは全て、高家の馬車ということだ。」

背後からのイマツエグの言葉に頷き、デスタロッサは真剣な眼差しで洞察する。

嫌な予感の中。

帽子を手で押さえ、ステッキで地を鳴らしながら、足が自然と動いた。

「待たれよ！！」

失礼ながら、伺いたき儀が御座います。」

そして、手前から迫る馬車の紋章旗に目を留め。
両腕を大きく広げて示し、道に飛び出す彼。

「おい！！

なにしてんだ、あんた！！」

突然の妨害に仰天した御者が、手綱をきつく引きながら、身を前傾して怒鳴る。

「デスタロッサ男爵……？」

やがて、車の窓から顔を出す初老の男。

この場に彼が居る事が、さも意外そうな口調であった。

「ご無沙汰です、子爵どの。

何やら、先ほどから只ならぬ御様子。

変わったことでもありましたか？」

「そうですか。

たしか、この大会の発案者は……」

傍に駆け寄って来たデスタロッサの顔と、周辺の様子を交互に眺め。

納得したように、独り言を呟く彼。

「その貴殿が此度のことを知らぬとは、軍部の混乱が知れますな。私に声を掛けられたことは、実に僥倖です。

……どうぞ、お入り下さい。

共に避難いたしましょうぞ。」

そして脇に座る貴婦人の膝に優しく手を置きながら、扉を開ける。

「避難？」

何故、そのような必要が……」

そこでデスタロッサは言葉を止めた。

子爵の下知により、御者が鞭を振りかざしながら、自分の動きを待っている。

その青褪めた表情には、生気が感じられない。

すぐ脇で往来する民の姿とは、あまりにも対照的だった

エア・ファンタジスタ
A i r・F a n t a g i s t a

第四章
飛翔艦時代到来

・

第七話 『三つの嵐』

1

叛乱軍は、巷で言われているほど野蛮ではなかった。
そのころ畜産が盛んだった自分の村に、食料調達のため出入りを
していた彼等は非常に友好的で、紳士に見えた。

忘れもしない。

とある傭兵団が、村を訪れた日。
それは運悪く、彼等との取り引きが行われる日だった。

双方の接触直後。

村が戦場になることを懸念した叛乱軍側は停戦を求めたが、傭兵側がこれを認めず。

交渉は決裂。

即時、戦闘へと発展。

補給部隊であった叛乱軍側は、初めから数の面で不利だったこともあり、ものの二時間ほどで殲滅された。

焦土と化した村を眺めながら。

少年は、膝を山なりに折って座り。

腕を交差し、首に巻きつけるようにして、漠然と時を過ごす。

見ようによっては、塞いでいるように見えるかもしれない彼の癖だった。

「ドウナガンさん。

ええと…聞いてますか？」

耳に届く、ロメスの遠慮がちな声。

「どうした、寒いのか？」

気温とは無縁そんな全身の甲冑を揺らしながら、言葉を掛けるのは、重闘士セアムリッヒ。

「…聞いている。」

気にせずに続けてくれ。」

首に絡んだ両手を解き放ち、ドーナガンは膝を崩した。

現在地は、ゴールの西征門まで約3時間ほどの森林にある、崖下。ロメスの指示により、大半の参加者が向かった採掘場跡を完全に無視して、ここまで辿り着いたのだ。

そして同様の行動をとった者達が、彼等以外にも、その地点に徐々に集まり。

今では5組にまで膨れ上がっている。

言わずもがな、全員、ギルドの息がかかった組であった。

お互いの面識は無いが、記憶能力に長けたロメスが、それぞれの身元を確認できている。

この崖下の隠れ場は、あらかじめ用意されていたらしく。

大きくせり出した崖壁が天然の屋根となり、敷き詰められた柔らかい草むらのおかげで睡眠もとれる。

宿とまではいかないが、今が競技中であることを考えれば、破格

のもてなしである。

後は『通行証』を回収した組が、合流するのを待つばかりだった。

ロメスがそこで皆に、初めて明らかにしたギルドの最後の台本。シナリオ

この後半戦には、他の参加者達に対しての最大の罠が用意されている。

通行証を入れた筒である。

錬金術を用いたそれを開けると、三桁の番号のリーダー・ブレスレッドだけが破壊される仕組みになっており。

自分達が大会の説明時に渡された、二桁の番号以下の物には反応しない。

尚、筒の中身にス力は無い。

ゆえに、この事実を知る者だけは、通行証の有無を確かめずにゴールへ筒を持ち込み、さらなるポイントの獲得が可能なのである。

- ・リーダー・ブレスレッドの損失が失格の対象になること。
- ・大会の勝敗はゴールに到着した順位ではなく、ポイント制である

こと。

ギルドは初めから、自らの上位独占を目的として、これらの規則^{ルール}を作ったのだ。

そんなロメスの種明かしに。

総勢14名の傭兵達は、皆一様に複雑な表情で押し黙っていた。

ここから先、膠着は続かない。

罠にかかった組から失格し、次々と数を減らしていくのみ。

時間が経てば経つほどに、自分達が有利だが　　時は経ち過ぎてもいけない。

異変に気付いた参加者達が、団結する恐れもある。

この隠れ場で待機するのは、上位を独占できるポイント数が判断できるまで。

最終日の昼を目途に、速やかに出立するのが望ましい。

「ギルドの予定は完全であり、完璧です。

通行証を持った組が合流したら、ゴール権を持つ組を選抜し、ポイントを調節します。

非常に、簡単なことです。」

崖下の窪みに沿った半月の陣形を前に、ロメスは言葉を締めくく
る。

「ギルドのやり方を、軽蔑しますかい？」

その代理人とも言つべき彼が、さらに低い姿勢のまま質問を投げかける。

面々は、まだ無言だった。

「依頼人が不在なところで、その質問は無意味だ。

…今はただ、仕事を終わらせることだけを考えた方がいい。」

口火を切ったのは、ドウナガンである。

「一番、反発しそうな人間がそう答えてくれると、ロメスも有難からう。」

続けて、セアムリツヒが呟いた。

「そうじゃない。

仕事を受ける前に聞かされたのならば、いざしらず。

もはや、この段階で善悪を議論しても、仕方のないことだと言っているんですよ。」

角は立っているが、ドウナガンは冷静な口調だった。

この大会が本当にルール無用の殺し合いだったならば、任務の放棄も辞さなかつたらう。

だが、彼の心をかろうじて引き止めたのは、運営側の『民間人に対する配慮』という点に尽きる。

前半戦のチェックポイントでは、凶獣の習性を利用し、女性を含む組を大いに脱落させた。

後半戦も、無益な争いが起こり難いようになっていく。

主催側は単に、大勢の者が過酷な競技をした末に、選ばれた者が価値ある飛翔艦を得るという、涙ぐましい演目をご所望らしい。

ただ、その演者に選ばれてしまったのは、非常に不運なことだったが

「実際、前もって詳細を知らされていれば、私は受けなかったかな。

ギルドから呼ばれる前に予定していた、南国の島でゆっくりと余暇を過ごしていたはずだ。」

皮肉たっぷりに、セアムリツヒは笑う。

「あ、あつしは、お二人と組めて、本当に良かったと思ってますよ。本来ならば、スタート時に失格して、ギルドには多大な損失を与えていたに違いありません。

家族も路頭に迷ったことでしょう。

お二人の好意で、こうして生かされているに等しいんですから……」

「よしてくれ。」

私達は、もう杯を交わした仲じゃないか。」

取り繕うように言うロメスの背を、セアムリツヒは叩く。

その様子に、回りの傭兵達も表情を緩めた。

「もう少し、気を引き締めた方がいい。

安心しきっている時に限って、何か予想外のことが起きる。」

だが、ドウナガンの忠告に、場は再び水を打ったように静まり返る。

彼は、遙か年下。

普段ならば、反発を招く状況だが、今回ばかりは誰も異論は無い。

むしろ畏敬の眼差しに溢れていた。

ギルドの特設部隊、七星剣。

そして立派な勇士として、各地で名を馳せた強者。

共に仕事が出来ること、喜びを覚える傭兵さえもいるようだった。

「……誰か、適当に話でもしてくれないか。
明日までただ待つのも、退屈でたまらん。」

自然に生まれた沈黙の中。
草の上でだらしく寝転がったまま、セアムリツヒが唐突に提案する。

「ガトランザの剣闘士として活躍していた貴方ほど、面白そうな話し手はいないでしょう？」

「他人の自慢話など、誰も聞きたくはあるまい？」

その切り返しに、数人は思わず吹き出した。

鎧で固めた外見とは裏腹に、彼は人を和ませることに長けている。

「…では、こういうのはどうだ。」

誰かに対し、知りたいことを質問をして、それを断ってはいけな
いという『ゲーム』は。

ひとつ、気になっていることがあるんだ。」

「え……？」

ロメスは戸惑った。

それまで横になっていたセアムリツヒは胡坐をかき直し、よりに
もよって鉄面皮のドウナガンの方を向いたのである。

「ぶしつけない質問だが、しても良いかね。」

念を押すような、再度の申し出。

相手は無言のまま、腰に下げた鎖を指に絡めていた。

「君は、徹底した現実主義者のように見える。
だからこそ、不可解なんだ。
そんな役に立たない鎖を、どうしてもブラ下げている？
とても装飾を好む人間とも思えない。」

「いけませんか。」

平淡な口調で返す彼。
場は、固唾を飲むような戦慄に包まれた。

「セアムリツヒさん…。
人には、色々な事情があるんですから…」

ロメスは媚びるように、柔らかく咎めた。
傭兵達の引率を任されている手前、ゴール目前にして厄介ことは
避けたいところである。

「どうしても話したくないならば、諦めるさ。
ただ単に、個人に対しての興味だ。
仲間のことを知りたいと思うのは、当然だろう？」

「仲間…ですかね。」

ドウナガンは、どこか引つかりのある言葉で濁した。
どこか、人との交わりを避ける冷たさ。

普段から単独任務が多いという、彼の経歴を知っているロメスは、それも無理からぬことと感じていた。

「……自分が傭兵になった、きっかけです。もう原型も留めてませんがね、これをくれた人に再会したいと思っています。」

「恩人か？」

「ええ。」

我々と同じ傭兵　戦地を点々としているであろう……。生きているか死んでいるかも、全く知らない人です。」

「……。」

質問者であるセアムリツヒ以外は、それを漠然としたまま聞いていた。

ドウナガンが下らない遊びに応じたことが、それくらい意外に思えた。

「よ、良かったら、詳しいことを教えて下さいや！
力になれっかもしれない！！」

我に返るなり、やたらと力の入った言葉をかけるロメス。ドウナガンは思わず苦笑し、背後の岩壁に体を寄せた。

「…無理だ。」

名前すら知らないからな。」

「え？」

「子供の頃の記憶など、誰もが曖昧だろう？」

「かろうじて憶えているのは……その男の雰囲気だけ……ということだ。」

「…それじゃあ、いくら記憶力に自信のあるあつしでも難しいですねえ。」

「申し訳ねえです。」

「なぜ謝る？」

「あんたには関係ないというのに。」

ドウナガンは、心底から不思議そうに言った。

「ですよねえ……うちらは…別に…」

ロメスは苦渋の面持ちで、言葉を飲み込む。

それを声に出すには、あまりにも身分がかけ離れていると思った。

「なるほど。」

「君が戦地を巡る理由は、そういうことだったのか。」

セアムリツヒが、膝の装甲を打ち鳴らす。

「それが、全てではありませんよ。
いつか会えれば、儲けものだという程度でね。」

ドウナガンは続けた。

「だが、この小さな鎖に触れるだけで、不思議と迷いが消える。
いくら研鑽を積もうと、消えることが無かった……恐怖を和らげ
てくれる。」

剣を手に取り、感慨に耽るように呟く。

「これで分かったでしょう。」

俺がとても勇士などと呼ばれるような人間じゃないことが。
全ては、成り行き……噂が一人歩きしたに過ぎないってことです
よ。」

「人の噂とは、残酷なものだな。」

本人の意思とは、無関係に広まっていく。

だが戦地においては、その勇名に希望を見出し、救われる者がい
たのも事実じゃないか？」

「……どうでしょうね。」

そうやって、肩をすくめる彼を、卑下する者はいなかった。
むしろ、それを潔しとして正直に話す、ドウナガンの姿に胸を打
たれていた。

彼もまた、自分達と同じ人間なのだ。

そんな共感は、目に見えて、結束をもたらす。
ロメスも胸を撫で降ろす心地だった。

それから先。
セアムリツヒが発案したルールの下、各々の身の上話が延々と続いていった。

取るに足らない話で、暇を費やす時間が流れていく。

いつしか、ドウナガンはその場から少し距離を置いて、外の様子を眺めており。

その背後にロメスが近付いた。

「幼い頃の記憶を追うのは……まるで、夢を追うような話ですねえ。」

「ああ。」

口が軽くなったのは、ゴールを目前に控えた、幾ばくかの感傷のせいだろうか。

ドウナガンも、先ほどの自分の行動が解せないところがある。

「だが、各地で転戦を繰り返すうち…。
今となつては、その人に会って何を言いたかったのかさえ、忘れてしまった。」

彼は自分を御するように、薄く笑った。

「結構じゃないか。」

『健忘無くして、人の成長はありえず』、だ。」

いつの間にか、セアムリッヒも背後で口笛を鳴らす。

「…何の引用です？」

「忘れてしまったよ。」

ロメスの問いかけに、彼は眉を上げて言った。
ドウナガンのぼやけた笑みが、わずかだが大きくなる。

「……！」

だが、会話の途中、頭上で物音。

三人の反応を皮切りに、全員が視線を重ね。
無言で各自の得物を手に取り、身構える。

通行証を回収した組が、合流地点を探しているのであろうか。

しかし、それにしては早過ぎるし、伝わる気配も明らかに単独。森の中を激しく徘徊する様子は、獣のようにも思える。

長弓を構えた一人が立ち上がると、全員は頷いて促した。

「ふっ!!」

息勢と共に、けしかけられる威嚇の一矢。

「…うおっ…!？」

…うああああああ!!」

途端に、人間のけたたましい声と共に、斜面を転がり落ちてくる物体。

それは皆が見憶えのある、クマの着ぐるみである。

「い…だ…だだ…!!」

しかも、そこで被っていた頭部が傾き、無精髭を生やした冴えない男の登場に。

皆は、すっかり気を削がれてしまった。

「何するんだ、この野郎！
急に矢なんて…撃ちやがって…！！」

弓を背負った男から、申し訳なさそうに差し伸べられた手を払い、
バーグは地に尻を付けたまま喚く。

だが、予期しない多数からの視線に、たちまち怒りは消え失せた。

「数が多いな！
しかも、お前ら強そうじゃねえか！！」

「…？」

一転した褒め言葉に、顔を見合わせる傭兵達。

「おっと、俺は断じて、怪しい人間じゃねえ。
ひとつ重大な話があるんだ、聞いてくれ！！」

転がったクマの頭部を拾い、小脇に抱えてから、バーグは呼びかけた。

無論、気だけが急いており、その白けた空気までは察せていない。

「…知っている顔か？」

「ジャグマー達は、あつしの管轄じゃないんですよ。個々の素顔さえ、判らないので…」

セラムリツヒの質問に、ロメスが即答する。

「そうだ！」

そのジャグマー君が裏切ったんだよ！！
お前ら、ちよっと手を貸してくれないか？」

「……………」

勢いだけのバーグの言動は、さらに場を凍りつかせた。

「おい…なんなんだよ？」

さつきからノリが悪いぞ、お前ら。」

「裏切ったってな…今の自分の姿を鏡で見せてやろうか？」

……ジャグマー君は、お前だろうが。」

やがて、傭兵の中の一人が鎮痛な面持ちで言葉を洩らす。

「あ……ああ。」

違う、違う。

今はこんな成りをしているが、俺はジャグマー君じゃねえんだよ。

「

白けた空気の正体に、ようやく気付いたバーグは、慌てて手を左

右に振って否定した。

「じゃあ、何者だ？」

背後の一人の詰問。

「何者かって？」

ええつとだな……」

思わず自分の姿を眺め回しながら、声をつまらせる彼。

正直に話そうものなら、不正をしていたことは明白。

ややこしい話になるのは、目に見えている。

「い、今はやむを得ず、この恰好をしているが……違うんだ。とにかく一刻を争うから、そんな細かいことは省略だ！」

「話の筋が全く通っていないぞ。」

このおっさん……頭でも打ったんじゃないか？」

「だあああああ……！」

ちつくしゅう……！」

いいから、俺の言うことを聞きやがれ……！」

ぼやく一人に向けて掴みかかるバグに、今度は複数の刃が向いた。

「ちよつと、待て…。」

彼の声は聞き覚えがある。

確か、選手村の施設にいたジャグマーの声だ。」

そこで、それまで我関せずと、黙していたドーナガンが呟く。

「ああ、あんたか!!」

これ幸いと、その言葉に乗っかり、バークは彼へにじり寄った。

「やっぱり、ジャグマー君なんじゃねえか!!」

「なんか怪しすぎるぞ、こいつ!!」

だがその行為で、周囲からは、次々と不満の声が上がる。

「うるせっ!!」

なら、もういいよ、ジャグマー君だよ!!」

それらのブーイングに対し、逆上して言い放つ彼。

「つまり、君以外のジャグマー君が裏切ったと言いたいのか?」

「ちよつと違うが……まあ、そういうことにしてくれや。」

セアムリツヒの好意的な解釈にも、口角を歪ませながら返す始末だった。

「とにかく、つべこべ言わず一緒に来て欲しい。
連中もかなりの手勢だ。

だが、これだけの人数がいれば何とか…。」

「何を言っている……？」

そんな話に乗るわけがないだろう。」

気の逸る彼の言葉尻を捕まえて、心底呆れたような声が、どこから漏れる。

バーグが全員を見回せば、どの視線も猜疑心で満ち溢れていた。

「お前の話が、畏じゃないって保証がどこにある。」

「…大体、ジャグマー達が裏切ったって何なんだ。
そんなことをして、連中に得るものがあるのか？」

方々、疑問も宙に浮いたままだった。

「そ、それが、よく解らないんだが…。」

急にジャグマー君達が、あの魔導人形を縛り上げてだな…。」

「あいつの態度が鼻持ちならなかったからか？」

「そうかもしれない……。」

いや…そこまでの事情には見えなかったが…」

バークは思い返しながら、自信なさげに呟いた。

「では、肝心なことだけを聞かせてくれ。
奴等の目的は何だ？」

「……目的……？」

わかるかよ、そんなもの。

とにかく、誰かに知らせるために急いで来たんだ…！」

中立の立場を取っていたセアムリツヒも、これには、たちまち肩を落とした。

「そんな不確かな情報で、動くわけにはいかん。

部外者の君に詳しくは言えないが、我々は、ある重要な任務をこなしている最中だ。

…ギルドの用件と言えば、後は解るだろう？」

「そのギルドが一大事なんだぞ…！」

「残念だが、他を当たってくれ。」

凄みながら詰め寄るバークに、セアムリツヒはつれなく返す。
誰の耳にも、当然の言葉に聞こえた。

「…ロメス。」

唯一、深刻な面持ちで、ドウナガンが呼んだ。

「あの男の言い分が真実だと仮定し、ジャグマー全員が裏切ったとなると、どうなる？」

「確かに事件には違いはないでしょうが、あの魔導人形を捕らえたところで、さほど意味はありませんよ。」

一度始まった大会が、その程度で中止になるなんてことは…」

「だろうな。」

彼等が何のために裏切ったのか…その辻褄が合わなければ、どうにも…。」

「まさか、あの男の言っていることが気になるんですか？」

流石に慎重になりすぎだろう、と笑う。

頭から怪しいと決め付けているロメスには、ドウナガンの嗅覚が理解できなかった。

(…こいつらじゃ、だめだ……。

せめて顔見知りの…シユナかパンリを探さねえと……。)

一方のバーグには。

頭から自分を疑ってかかっている彼等を、説得する話術は無い。

（だけど、見付かるのか……！！？
こんな広大な森の中で……！！）

さらに、ここまで木々に目印の傷をつけて来たとはいえ、
ジャグマー達が陣取っている小屋まで確実に戻るには、もう限界
の距離である。

「お前らが忙しいっていうなら、もういい。
暫くは、この辺りで別の人間を探してみる。

……もしも気が変わったら、声をかけてくれ。」

やがて、離れながら言い残す彼。

「待て待て。

念のため聞くが、あんたはギルドに所属している傭兵か？」

「昔はな……！！

ギルドを出入り禁止になったバーグハウドっていやあ、このあ
たりじゃ有名だぜ……！！」

投げかけられた質問に、彼はぶっきらぼくに答えた。

振り返らず。

背を向けたまま。

片手だけを、ふらりと挙げていた。

村内で唯一残った小屋の前で、残党狩りの成功を祝し、宴会が行われていた。

奇しくも、あの時もジャグマーたち コーラル・サーカスが慰問に訪れていた日だ。

だけれども。

その大道芸を、心底楽しんでいる地元の子供なんて、いなかった。

あれから治安維持のためと称し、何日も村に居座り。

略奪の如く、村の食・財の備蓄を巻き上げていく奴等。

老人たちから聞かされる度、胸を熱くたぎらせた、英雄譚に出てくる『勇士』とは、天と地ほども違う。

彼らは、まるで悪漢……いや、その発想の幼稚さときたら悪童だ。

そんな、ひどく無粋な彼等の様子を見ていたから。

ドウナガンもまた、傭兵という種族を、心底から嫌悪していた。

視界に入れたら、やり場の無い恨みが噴き上がる心地だ。

真逆の方向を向き、小高い丘から、村の景色を遠くに見据えていた。

やがて、二つの影が自分の背に迫ったのに気付き、振り向いた。体格の良い男と、少女だった。

「ボウズ、一人か？
これ、やるよ。」

男はジャグマーの姿をかたどった、粗末な木彫りのキーホルダーを出して言った。

情けをかけられるくらい、自分は貧相な姿をしていたのだろうか。

その言葉を聞いた瞬間。
ドウナガンの自尊心が、膨れ上がり、心胆から屈辱感を押し上げた。

「なんだかよ…。
せつかく買ってやったのに、気に入らないようだな。」

だが、人の気も知らず、能天気言葉続ける男。
少女の方はずっと、彼が背にした剣に抱きつくようにしている。

「いらねえよ。」

子供ながら、殺気を帯びた低い声に、男の瞳孔は鋭い反応を見せた。

「鍵かけるくらい大事なものなんて、なに一つ無い。
ぜんぶ失っちゃった。」

…… あんたらのおかげで。」

今まで誰にも言えなかった、鬱憤を吐いていた。

村の大人達が、遠ざかる。

傭兵をぞんざいに扱って、ひどい目をみた村民は少くない。

「あ？」

剣を担いだまま、さらに迫る男の姿。

ドウナガンは真っ直ぐに向き、恐怖に対して必死に抗っていた。

「…… いらないうって、言ったんだよ。」

キーホルダーを突き返す。

たとえここで殺されても、後悔は無い。

少年が彼等に浴びせられるのは、そんなちっぽけな意地くらいなものだった。

「そうか。」

それは悪かったな。

俺はよく無頓着な男って言われるんでよ、全く気付かなかったぜ。

だが男は意外にも、頭をかいて苦笑する。

「でもそれなら、なおさら持っておけ。

お前にもいつか、鍵をかけるくらい大事なものが出来るはずだ。」

「いつって…いつだよ!」

肩透かしを食らったためか、強気になって叫んでいた。

「…そうだなア。

……俺は傭兵になったおかげで、それが分かるようになった。
大きくなったら、お前もやってみればいい。」

傍の少女の肩を抱き、踵を返す彼。

「おい!

あつちで、記念碑を造るつてよ!」

そこで丘の上から、へべれけに酔った傭兵が、男に声をかけた。

「名を刻んでいこうぜえ。

俺ら、英雄様のよお!」

「悪い。」

そんな気分じゃねえんだ。」

男は、娘を連れたまま遠ざかっていく。

「お前らみたいなの…傭兵になると…」

自分は、草と小石を握りしめて、侮蔑を込めた言葉を吐いていた。

睨んだ先の男は、去り際。

自分への別れの挨拶か。

背を向けたまま、だらしない手を上げていた。

やるだけやってみて、納得がいかなかったら、傭兵を否定しよう
と思った。

初めて人を斬ったのは、剣の修行を始めて、わずか一年後である。

戦場では、いつでもぎりぎりで、余裕が無かった。

皆、くだらないことをして、精神の平衡を保っているのが分かつ

た。

任務中であっても、どこか享樂的なのは、そのためだろう。

この隠れ場で、談笑する彼等もそうだ。

誰もが、恐怖に抗っている。

名声欲や金銭欲に走るのも、そのためだ。

今では、理解できる。

詰まるところ。

傭兵ほど、一日を懸命に生きている人間はいない。

誰よりも明日をも知れぬ身だから、誰よりも愉しみたい。

誰よりも死に塗れてきたから、誰よりも生きたいと願う。

その存在自体が、人生の縮図とも言えるかもしれない。

最も、人間の根本の部分を、具現化している存在と言ってもいい。

軍人や騎士と違って、彼等を縛るものは無い。

戦うも逃げるも、個々の自由。

雇われの身なれど、命まで賭ける必要は無い。

分が悪ければ退くし、優勢ならば追い込みをかけるだろう。

名誉も自尊心も無く、ただ彼等の中心に据え置かれているものは、それぞれの信じる自我。

善悪なく研磨され、最後に残った、純粋な魂だ。

自然と、飾らない人間が出来上がり。

その融通が利くという存在が、世界によっては歓迎され。または、罵られている。

色々な光を放ち、それらは点在する。

そして時に、一瞬の華を咲かせ、散っていく。

人生とは、あるがままだ。

傭兵ドウナガンが、いつしか認めた結論だった。

いつしか、自分の村で起こった惨事も、受け容れることが出来るようになっていた。

それからは、世の子供たちに自分のような目に遭わせたくない一心で、特に危険な戦区を駆け巡った。

各地における紛争も、自分の努力次第で、軽減できるかもしれない。

恐怖は消えなかったが、自我の赴くまま戦った。

その姿が、他人の目には献身的に映ったのだろう。

いつしか戦場に、勇士と呼ぶ声が響いた。

誰かの、安心したいという気持ちが産んだ虚構。

ドウナガンはそれを、自分を自惚れさせるための、悪魔の囁きだとも思っている。

だがそんな自分でも、一つだけ、死ぬ前に望むことがある。

道しるべをくれた、あの名も知らない傭兵に

ただ、歩んできた証を見て欲しかった。

呼ばれた本人は背を向けて。

無造作に挙げた手をそのまま、首だけを振り向かせた。

「……まったく……変わってない。」

もう一度。

重い口調で、ドウナガンが言った。

去り際の男に対し、真っ直ぐに鎖を差し出す彼の横顔を見て、口

メスは仰天する。

人の親だからこそ、そう思ったのだ。

目の前の勇士と呼ばれる存在は。

我が子らと何ら変わらない、無垢な表情をしているではないか。

2

ベルツサスの帰還と、ウベ神父の娘達が眠りから覚めたのは、ほぼ同時刻。

かねてからの取り決めに従い、その時点で同盟は解散となったが、奇妙な縁で繋がった双方は、互いの無事を祈りながら別れた。

何か、強い奔流に飲み込まれている心地なのだろう。

最後まで戸惑いを隠せない、幼い双子の顔が、パンリには印象に残った。

あの家族はこれから、他組との争いを避けるため、ただゴールのみを目指すという。

自分達は それとは真逆。

コルススらとの決戦に備えるため、山岳のさらなる上方へと足を伸ばしている。

「この殺風景な所、中々いいな。」

無数の口を開ける、相変わらずの洞穴群。

加えて、人の気配は皆無という期待通りの景色に、カジエツトは満足そうに歯を見せた。

「何か遮蔽物が無ければ、人数の差を埋められません。
まだ時間があります。」

戦場を選ぶならば、もう少し慎重になられては……」

だが早速、背後からベルツサスが苦言を呈する。
その声には、否定の色が濃い。

「大博打つてのはな、まだ余裕がある時に打つもんだ。
後が無くなってからじゃ、遅すぎる。」

それが失敗した時に、ドン詰まりに陥っちまうからな。」

対する彼女は、もっともらしいことを言いながら、気炎を吐いた。

「先手を取った上、この場所に相手を誘い込めれば、勝ち目は十二分だぜ。」

「……そこまでの確信があたりだと言うのなら、異論はありません。ですが、私は……」

若干の躊躇を振り払い、切り出す彼。

「その時は、パンリさんにも戦陣に加わっていただきたいとおっしゃいます。」

当のパンリは、一瞬、彼が何を言っているか解らなかった。言われるまでもなく、自分も戦闘に参加するつもりでいたのだ。

そもそも、そのための修行ではなかったのか。

「戦闘にかけちゃ、こいつは素人だぞ。」

彼の疑問の目を避けるように、ベルツサスに詰め寄るカジエツト。

「相手側もそう思うからこそ、戦力になります。使わない手はありません。」

「これは初めから、内輪の問題だろ。部外者のパンリが、ここまで付き合ってくれただけでも、あたし

は感謝してんだ。

これ以上なにを…」

「甘すぎます。

今からの戦いが、我々にとって運命の分かれ道になるということを、本当にご承知なのですか。」

「おい。

今日は随分と反抗的じゃねえか。」

「…二代目には、死んで欲しくないのです。」

あの従順なベルツサスが、珍しく食い下がっていた。
それは、彼と付き合いの浅いパンリにも、良く判った。

「今さら青臭いこと言うな。

これが、あたしの生き方なんだ。
好きにやらせてもらうぜ。」

「先代がそんなことのために、立場を譲ったとお思いのですか？
貴女は全く解っていない。

我々の源法術は、どのように使うべきか…。
本当は、このような抗争さえ恥ずべきこと…」

「お前の方こそ、先代のことを全然わかってねえよ。」

互いに感情的になる中、すれ違いざまに、彼女は低い声で唸った。

「…そうだ、そうだ。」

あたしに万が一があった時のために、本当のことを教えてやらなきゃな。」

そしてわざとらしい笑顔と共に、傍の岩に座り込む。

二人を晴眼で眺め。

一旦、間を空けてから、カジェットは口を開いた。

「前半で一緒に居た、世羅のことを思い出してくれ。」

「何故、今そのようなことを…」

話を途中ではぐらかされた恰好になったベルツサスは、呆然と返す。

だが、それには答えずに、パンリの方へと視線を向ける彼女。

「あいつは……アルドの直弟子だ。」

「アルド…?」

パンリは歩み寄って、さらに訊く。

低い姿勢になった彼女とは、ちょうど目線が合う高さだった。

「急に何を言い出すかと思えば……。」

彼女が…あのアルド…セイングウェイの、ですか?」

真顔で問い質すベルツサス。

大陸史上、最も大きな動乱と呼ばれている50年に及ぶ戦争。その『アルドの叛乱』により知れ渡った悪名は、世界中の人間の脳裏に刻み込まれている。

「あのバカでかい『源・^{フェル・ド}衝』。

お前にとっては、かなり驚いたことだろうが、あたしにはそうでもなかった。

あらかじめ、先代に聞いていたからな。」

「…先代から？」

「さぞかし不愉快だったろ。

見ず知らずの人間に、あたしが色々と技術を教えちまったこと。」

「ええ…まあ…」

彼女からの凶星に、ベルツサスは言葉を濁す。

「だけど、おかしいことなんて何も無いんだ。世羅と先代は、同門なんだからよ。」

「お待ちください……と、いうことは……」

「先代の師匠も、アルドだ。」

カジエットの断言に、全身を強張らせる彼。

中空を彷徨う視線は、彼方に吹き飛んだ自分の思考を、必死に手繰るようであった。

「冗談だと……。
……言っていただけませんか。」

やがて、自失の形相で彼女に迫る姿に、脇のパンリも戦慄を禁じえない。

「お前が動揺するのも、無理はねえ。
確かに『アルドの弟子』って聞いて、良い印象を持つ奴はいねえだろうしよ。」

だがカジェットは、意外なほど呑気に構えている。

その態度に。
彼の両足が、ぐらりと揺れた。

「つ、つまり……形式上、お二人はアルドの孫弟子になってしまうわけですね……?」

パンリも、己が口にした言葉で、心の中を整理する。
大悪名のこととは、自分とて無関係ではない。

「先ほど二代目は、私が先代のことを何も理解していないと仰いま

した。

…そういう意味ですか。」

「それだけじゃねえ。

お前が『先代の教え』がどうだとか、あの人を必要以上に敬っていることもさ。」

強い口調で改めて問う彼に、カジェットは答えた。

「いいか…よく聞け。

あの人は、病気で死んだんじゃない。毒を盛られたんだよ。

微量な量を、少しずつかけてな。」

「……！」

まさか…コルススが……」

可能性を考えなかったわけではなかった。

だが実兄の凶行を、心のどこかで否定していた彼に、カジェットは非情にも首肯する。

「勿論、あの人は全て気付いてたさ。

知った上で、弟子のしたことを……自分の過ごしてきた人生の結果を、受け容れた。」

彼女の声が響く。

その直後、辺りの静寂が深まるようであった。

「……お前が思っているほど、綺麗じゃねえだろ。」

再び、カジェットが口を開いた時。

目の前には、血色を失った背丈の高い物体がそびえていた。

「事実を知らずに……これまで時を過ごし……」

二代目だけに真実を背負わせて……私は……。」

それは、笑みさえ浮かべ、ただ独り言を呟いている。

「何が……正しい源法術だ……」

……人のため……だ……」

……全て……私の幻想……」

思わず駆け寄ったパンリに目もくれず。

それどころか、彼を振り払うようにして遠ざかる。

「先代に後悔は無かった。」

……あの人の弟子ならば、それを汲んでやれ。」

彼女の声に。

彼は一度、立ち止まり。

そして、二度と振り返ることは無かった。

「動くな。」

背に銃を突きつけられた感覚。
素直に、事務官はその言葉に従った。

「ウチの軍人にしては、随分と働き者じゃねえか。
…こんな遅くまで残業だなんて。」

詰め寄る声は若い。

日中に赴任してきた、青年士官のコルツの声だ。

「だが部屋が真っ暗なままじゃ、作業もはかどらないだろう。
何なら、明かりを点けてやろうか？」

撃鉄を起こす音が、延髄の中まで鳴り響く。

「ま、待って下さい！

ちゃんとご報告、しようとしたんですよ…!!」

途端、事務官は書棚から両手を離し、情けない声を上げた。

「夜盗の真似事の挙句、ご報告だと？」

「…そうです、重要な書類を確保してからと思ひまして…」

「いいだろう。」

営倉にブチ込む前に、言い訳くらいは聞いてやる。」

彼に銃を向けたまま、コルツは背後に合図を送る。

すると、ランタンを掲げたマルリッパが現れ、室内はにわかに照らされた。

「言い訳だなんて、とんでもない！」

…実は現在、首都周辺では、避難勧告が出されているのです。」

二人が揃ったところで、事務官は姿勢を正しながら言う。

「避難？」

何をバカなことを…。」

コルツは窓から外を覗き、街の様子を伺った。

別段、変わった点は見られない。

「ですから…密かに。」

まずは貴族や役人が避難を…。

次に、軍隊が撤収するという段取りで…。」

徐々に張りを失っていく彼の言葉に、二人は息を潜める。

「先ほど、謎の組織から通告があったのです…。
奪取した飛翔艦を、首都王宮に墜落させる、と。」

瞬間、全身が泡立つようであった。

「そんな脅しを鵜呑みにして、おめおめと逃げようってのか！
民間人への連絡はどうした！？」

コルツの激昂。

「それが…。
上層部の判断で…」

「し、知らせて…いないの？」

次に、マルリップが落胆を顔に表した。

「逃げまどう住民が街に溢れば、要人の避難に支障をきたす恐れ
があります…」

国家において、常に優先されるべきは…」

「だから、見殺しか！？」

汚ねえ！！

汚すぎるぞ、てめえら…！！」

杓子定規な言葉を遮り、コルツは彼の首を掴み上げる。

「オレだって、褒められた人間じゃねえ。
だが、そこまでは腐ってねえつもりだ!!」

自分への乱暴な問いかけに、マルリツパも押し黙った。

その沈黙が、頭を冷やしたのか。
やがてコルツは事務官の体を離し、その浮いたままの手で胸元の
タイを締め直す。

「現在の詳しい状況を教えろ。
その飛翔艦、なんとしても阻止してやる。」

「ほ、他の基地も似たような状況です。
……ここが単独で機能したところで……どうにも……」

床で咳き込みながら、返す相手。

「貴様には、最後まで付き合ってもらうぞ。
今まで安くない給金を、国民の皆様からフンだくってきたんだ。
死ぬ前くらい、一度は何かの役に立ってみろ。」

「……そ、そんな……」

「そうでなくとも、念通士はこの種の作戦ミッションの要だ。
了解しろ。」

でなければ……いま殺す。」

上方から銃口と共に向けられたのは、噂に違わぬ、死を招く声である。

事務官は無言で頭を垂らし、それを返答とした。

「まずは作戦を立てるぞ。

マルリツパ、総員すぐに集合させる。」

「か……彼等を使うわけ？」

脳裏に、昼間の訓練の惨状がよみがえる。

だが迷ってなどいられない。

「こんな絶望的な状況こそ、オレたちの新しい門出に相応しいじゃないか。」

隊長の瞳は、既に狂気の色を帯び始めていたのだ。

声通機から、各基地の騒乱が聴こえてくる。

非難や憎悪。

伝播する混沌に、耳を塞ぎたい心地だった。

これが周辺住民にまで飛び火した場合、数十万人の規模でパニックに陥るのは明白。

その点においてのみ、利己的な軍の判断が正しいと思えた。

コーラル救国軍という、謎の組織からの通告を皮切りに、どのくらい漠然としていたのだろうか。

まなしり
眦を決すれば、再び視界に飛び込む、鉄パイプと機械に囲まれた地下室の異形。

それが気付けとなり、フィンデルは我に返ることが出来た。

「お二人とも、久遠どころの騒ぎじゃなくなってしまったわね。」

念通球の操作で、備え付けられた声通機の音量を落としながら、イメルゲは足を組んで言った。

同時に、彼女自身は小型の機器を片耳に被せている。

どのような原理を用いているのかは、依然として不明。
だが厳然たる事実として この地下室で、各地の通信が傍受
できることは間違いない。

設置されている機材、彼女の念通士としての腕。

共に、高いレベルであることを伺わせた。

「…しかし、妙ですねえ。」

皆、最初の通信に踊らされているようですが、あれには決定的なものが欠けている。」

「同感ね。」

相手を脅迫する場合、その行為を止める代償として、何かを要求するのが自然なもの。」

オーロンの意見に、イメルゲは少しはだけた白衣を直しながら答えた。

「大尉。」

彼等のやり口からして、騎士団との関連性は薄いと思いますかい？」

「現時点では、何とも言い切れませんが…」

オーロンの不意な質問に、フィンデルは口ごもる。

このような状況にも関わらず、嫌に冷静な彼等の様子には面食らうものがあるが、反面、少し心強かった。

「本当に中王都市にダメージを与えるつもりがあるのなら、わざわざ通告などせずに、奪った飛翔艦とやらを、そのまま王宮に墜としてしまえば良い。」

よって、こいつは……根性の悪い悪戯か、流言ですな。」

「初めは、幕僚の会議室でも、そういう意見が多数だったみたいよ。」

斜に構えながら、そう結論づけたオーロンに、含み笑いを浮かべるイメルゲ。

「だけど、試しに各基地に確認を求めたところ……ヴァルクハルト方面の国境警備隊から報告があったわ。」

少し前にイマツエグ社の艦が通過したことを、ね。」

「…裏づけが取れちゃったわけですかい。」

彼は無念の声と共に、自分の髪をむしる。

「しかしながら、目立っておかしな様子は無かったようね。よって、『艦を乗っ取ったように見せかけている』という線も捨てきれない。」

耳につけた端末から聴こえる情報に、凄まじい勢いでメモを取りながら、彼女は続けた。

「ならば、その艦の進行上に近い部隊が確認を…。」

どちらにせよ、首都圏に入る前に迎撃の準備を整えないと…。」

フィンドルの口からは自然と、指揮の言が漏れていた。

「残念ながら、それを担うべき人間が次々と退避してるのよ。」

「正体不明の物体が、首都に切っ先を向けて、猛然と突き進んでいる。」

さぞかし、想像をかき立てられるんでしょうねエ。」

イメルゲの皮肉に続き、オーロンが苦笑する。

「こんな有事は今まで無かったし、想定もしていないから、軍本部が統率しきれていない。」

指揮系統の弱さと、愛国心の薄さが露呈されたわけね。

…どちらにせよ、私たちがやれることなんて無いわ。」

遂には念通球を机に置き、両手を放り出して言う彼女。

周囲の音は消え失せて。

完全に、現実の世界へ舞い戻った気分だった。

(…やれることが…無い?)

フィンドルは自問し、天井を見上げる。

そこには、まるで井戸の底に落ち込んだような闇が見えた。

暗い深遠。

自分にとっては、ここが全ての始まりなのだった。

かつて覚悟が持てなかった頃、心が沈んだ場所だ。

今の自分は、どうだろう

後に仲間の手によって引き揚げられたそれは、何かを成すため、身体に戻っている。

沸々とした脳漿の動きが、その証拠だった。

「…逆は出来るのかしら？」

通信の傍受ではなく、ここから軍施設に連絡をつける……なんてことは。」

フィンドルの、少し自尊心をくすぐる言い方に、イメルゲは耳を傾ける。

「可能よ。」

距離に限界はあるけれど。」

「まさか、ここから助言でもしてやるってんですかい？」

その会話の流れに、オーロンは口から飛沫を出すほど興奮して訊いた。

「素晴らしい機材があつて、優秀な念通士もいる。」

……やれるわ。」

フィンドルは誰に同意を得ようとするわけでもなく、ただ独り呟いているように見えた。

「軍も退役し、それほど身分があるわけでもない。」

そんな人間の言うことを、彼等がおとなしく聞くとおもうて？」

そんな彼女の変化に、長い前髪を弄りながら訊ねるイメルゲ。

「確かに、徒労に終わる可能性は高い。」

だけど試す価値は、あると思うわ。」

「…それは、私に協力を求めることの意味を理解しての発言？」

無表情のまま、問う。

（…ああ、そうだ。

無茶な相談なんですぜ。

自分の存在を公にすることは、裏道で生きる情報屋にとっては致命傷になる。

手段が手段である彼女には、なおさら、ありえない話じゃねえですか。）

オーロンは、面白い余興を観てみたいという自分の欲求を抑え、

彼女の心境を察していた。

（もつとも……あの救国軍とかいう連中の凶行が成っちゃえば、そんなことも杞憂でしょうがね。）

この地下室も、完全に首都圏である。

そう思うと、余計に背筋が冷えた。

「事の次第では……こちらの一生を、全て面倒見てくれる、そのくらの覚悟があるのかしら？」

「ええ。」

「……即答とは恐れ入るわ。」

私の身体に、たとえ、どのような障害があろうとも？」

「待った。」

その質問には、答える必要はありませんぜ。」

続く二人の問答に、オーロンが急に割って入る。

「先生、その質問は公平フェアじゃない。
人が悪いにも程が……」

「何であろうと、私の答えは変わりません。」

だが、たしなめる彼が全く眼中に居ないように、その横で平然と

返される言葉。

(…出る幕なしときてる。)

オーロンは取り付く島を失ったが如く、重い鼻息を吐きながら、部屋の隅の影へと身を隠す。

「傲慢だわ。

いざとなれば、何でも自分の頭と口先で解決できる。そう思っていなければ、到底吐けない言葉。」

イメルゲは頭を振りながら、席を立ち。

挟んだ机を大きく迂回して、フィンドルの脇へと張り付く。

わずかに紅潮させた唇が、平静を装う彼女の動揺を表していた。

「何故…そこまでの。」

もう軍属ではない貴女が。」

「理由を問われれば、返答に困るわ。

私自身、とても曖昧な感情なんだもの。」

一瞬、恥じらいと憂いの混じる、その横顔。

オーロンは部屋の片隅で、彼女と酒場で交わした会話を思い返す。

確か、あの時も似たような答えを聞いた。

その凡庸過ぎる言葉には、色々と感じるし、何故か惹かれるものがある。

だから、彼女への興味は尽きないのだ。

「一生を面倒見れる？ そう問われた時、それも悪くない思
ったのは本心よ。」

…理とはかけ離れたことばかりする、変わった友人を思い出した
の。」

傍で微動だにしなくなったイメルゲに対し、フィンデルは笑って
言った。

「ほんの小さな偶然の出会いからも、時に、生まれる絆があるわ。」

気がつけば、自分の細い二の腕を奪われていた。

ベルツサスが放心した様子でこの場を去ってからというもの、時の流れが嫌に鈍く感じた。

行き先さえ告げず、何処へ向かったのであろうか。

自身の敬愛する師がアルドの弟子だったという真実。
潔癖な気質の彼にとって、それが許容し難いものだったことは、
想像に難くない。

「……先代はさ、ずっと昔に破門されてるんだよ。」

長い沈黙を先に破ったのは、カジェットの方だった。

「もしかして、アルドの叛乱が起こる以前に…ですか？」

すぐに返されるパンリの問いに、彼女は首肯した。

「アルドって奴は、世間では『大悪名』にさせられちまってるけど……
……本当はきつと、想いやりのある人
だったんじゃないのかな。」

自分の弟子達の叛乱を予測して、あえて先代を突き放してくれた
んじゃないかって…。」

我ながら都合の良い解釈だと思ったのか、そこで薄笑いを浮かべ

る。

「私も同感です。

世羅さんを見れば、その師である方が悪い人とは、とても思えません。

でも、どうして破門の件を、ベルツサスさんに伝えなかったのですか？

そうすれば、余計な誤解を招くことも無かったのでは……」

彼の正論に、カジエットの自嘲は深みを増した。

「誤解されて終わる関係なら、それまでさ。

コルスス達と同じように、いずれは袂を分かつだろうな。」

あまりに極論。

デリカシーの欠片も無い。

以前のパンリなら、その言葉を理解する前に、ただ閉口したことだろう。

「…信頼されているんですね。」

「考えるのが面倒なだけだ。

仲間とはいえ、結局は他人同士だしよ。

こっちも、いちいち気を遣ってられるほど、退屈じゃねえのさ。

」

当然かもしれないが、自分の出会う人は皆、違う仲間観を持っている。

彼女もまた、その例に漏れなかった。

そして、一様に聞こえるのは

不確かで、曖昧で。

線引きが確かでない言葉。

だからこそ、パンリは、そこに興味を惹かれていた。

「…仲間の定義とは一体、何なのでしょうか。」

不意に口を突く疑問。

「自分が優しくされる理由を、言葉として聞かないと納得できないのか？」

それに対し、カジエツトは厳しい表情で返してきた。

「……！」

その指摘に、啞然となるパンリ。

心臓を抉るように突いてきた言葉は、的確だった。

「お前って、ホントにおかしい奴だよなあ。」

他人が当たり前前に感じていることを、そうやって難しく考えてる。

「

絵に描いたような彼の反応が見れて愉快だったのか。
彼女からは自嘲は消えて、本物の笑みが戻っていた。

「ま、出会った当初は、誰にだって打算があるわな。」

こいつに従っていれば、手を組めば 得をする、強くなれる
…とか。」

そしてカジエットは、遠くを見詰めながら言葉を紡ぐ。

「でもよ、苦楽を共にしていると…不意に、それが変化する一瞬があるんだよ。」

それから先は、手に取るように相手の気持ちが解るんだ。
そうになると、色々な感情が入り混じって…もうワケが分からなくなってしまう。

考えなんてそっちのけでさ……体が理屈抜きで、その人のために動いてしまう
「

まるで、パンリ以外の誰かに向けて、語るような仕草だった。

ベルッサスは空を駆ける。

風来棒に乗って、山岳地帯を一気に降り。
辺りは、再び森林。

他の選手達と比べ、やや進行が遅れ気味の集団は、すぐに見付けることが出来た。

そしてそれは、『彼等』にとって予期せぬ来訪だった。

「……大した度胸だな。」

気配を断つこともせず、正面から飛来して、完全に姿を晒したベ
ルッサスに対し、慚然たる面持ちで呟くコルスス。

周囲の木々の上には、おびただしい数の自分の手下達が佇んでいる。
それを分かっているなお、相手の歩みには迷いが見られなかった。

「何か、重大な話でもあるってのか？」

だがその奇妙さに、あえて好転を予感したコルススは、周囲を御
して自ら歩み寄る。

「おっと、全て言う必要はねえぜ。」

頭の良いお前のことだ、大方の察しはつく。」

勝ち誇った彼の表情には、もはや疲労は無かった。

「争いを終わらせたいんだな？」

言葉と共に、一羽の夜鳥が森の奥から飛び立つ。

それを皮切りにして、無防備に歩を寄せ合う両者。

「同じ団員同士が、これ以上お互いに血を流すのは無益。

お前なら、その結論に必ず行き着いてくれると信じていた！」

周囲の手下達に聴こえるよう、大声が続く。

「そうさ、あんなバカな女に付き従う道理はねえんだ。

いくら尊敬する師匠の遺言だってなア、認められねえものだってある！」

さらに大袈裟に手を広げ、全体に呼びかけるコルスス。

「オレならば、お前を立派に使いこなしてみせる自信がある。

今までのことは全て水に流し、共にカジェット空挺団を大きくしていかうじゃねえか。」

遂にはベルツサスの手を正面から力強く取り、歯牙を見せて笑った。

もはや、相手に争いの意思が無いことを確信しての行動である。

長い抗争。

その苦悩を、ずっと煩っていた周囲の面々は、不意に迎えた終焉に思わず緊張の糸を解いた。

安堵の混じる溜め息と共に、各々が居る枝が揺らぎ、葉が乱れ落ちる中

「…兄よ。

我々ほど滑稽なものはないぞ。」

ベルツサスは生気の無い目で訴えた。

苦楽を共にしていると、相互の理解が深まる一瞬がある

カジェットの論理を、彼女自身に照らし合わせてみれば。

そのぶっきらぼうな言葉の端々に、己だけで何もかも背負おうとする不器用さが表れている。

また、自己の信念のために、命をも簡単に捨て去る覚悟があり。逆に奪うことも厭わない。

その屈強な人間性には、ただ圧倒されるばかりだ。

大らかで頼りがいのある、心身。

それでいて、彼女がその逆を求めることは無い逞しさ。

だが、パンリが瞳を閉じると。

その強者ゆえの暗部が、障壁となってそびえていた。

彼女を真に理解できるのは、おそらく同じ目線に立てる者しかない。

「貴女は、あたかも私の中に既に結論が出ているように言われますが、やはり、分からないことで一杯です。

たとえば、強さとは…何なのでしょう？

自分は、強くなりたい理由が…それほど明確ではないんです。」

そんな儚い考えと共に、パンリは自然と言葉を続けていた。

問答をしている状況でないことは承知している。

それでも、自分の中で堰き止めていた感情が、溢れ出して止まらなかった。

「結構なことじゃねえか。

羨ましいぜ。」

意外な返答に、パンリは彼女の横顔を凝視した。

「お前もいつか、今の『まっさらな自分』が貴重に思える時が来る。……人間、ある程度の性根が定まっちゃうと、それくらい後戻りは難しいのさ。」

カジエツトは、足元の岩の隙間から生えた植物を眺める。
数本の茎が互いを絡ませて、いびつに身を擦じらせていた。

「あたしがいい加減なもの、ベルツサスが堅物なもの……コルススが乱暴者なもの、もう変えられはしねえ。
だけど、お前は違う。」

出たばかりの芽は、これからどう伸びるのか自由に決められる。
できることなら、あたしらみたいに曲がらずに、真っ直ぐ伸びて
欲しいもんだ。」

そう涼しげに言って、彼女は笑う。

「昔に……戻りたいですか？
まっさらな時に……」

その問いの答えは、結局、返らなかった。

「……でも、今の混乱の原因は、あたしなんだろうな。
やっぱ。」

だが、わずかな照れを口元に浮かべながら、彼女は頭を掻く。

「団員の大半がコルススに従ったのも……まんざら力の支配ってだけじゃねえ。」

男つてのは、どうしても女の下につきたがらねえ生き物だからよ。」

その口ぶりから、彼女には予ねてから、そういう考えがあるようだった。

他の団員との間に距離が見えたのも、このためかもしれないパ
ンリは思った。

「……貴女は、素晴らしい人です。」

ただ、ちよつと誤解されやすいために、皆さんがその魅力に、気
付けないだけなのだと思います。」

「よく、そんな恥ずかしい言葉を吐けるもんだ。
これだから、学のある奴は参るよ。」

慣れない慰めに対し、カジェットは彼の頭を軽く小突くことで返
す。

「……あたしの空挺団のこと、まだ何も教えてなかったよな。」

そして、寂寞の地に再び沈黙が訪れる前に、彼女は告げた。

「中王都市より北、ずっと向こうに隠れ家があるんだ。」

断崖絶壁をくりぬいて造った、小さな集落さ。」

まるで直面している危機から、故意に関心を逸らすような話題だった。

「普段はそこで修行して、仕事が入ると、そっちに精を出す。凶獣退治や、規模の小さな戦争の加勢……色々なことをやったっけ。」

だが、パンリはすぐに、さらなる違和感を覚えた。

「でも……あたしの代になってからは、まだ何も出来てねえ。ずっと、内部の抗争の始末に追われてる。」

彼女の話は、独り言に近い。

「あの人は……どう思ってるんだろうな。」

否。

生者に向けられていない。

虚空のみを映す瞳を眺めながら、パンリはそう悟った。

「…滑稽とは、何のことだ？」

意表を突かれた言葉に対し、コルススが問う。

「今の二代目に資質を問う心。」

そして、その行為全てが滑稽ということだ。」

「…抜かせ。」

あんな女に、技量で負ける気はしねえ。」

「技量などを問題にしている時点で、お前に跡を継ぐ資格は無い。」

さらなる断言に、余裕を漂わせていた微笑を止めるコルスス。

「皆も、彼女こそが、先代の想いを最も体现した存在と知るがいい。」

さらに全く憚らずに、驚くほど通る声で言い放つベルツサスに、周囲の面々は互いに顔を見合わせた。

「傑作だな！」

身内が身内を褒めるほど、見苦しいものはねえ!!」

すぐさま、その空気を変えるべく、コルススも声を張り上げる。

「お前や俺がいかにも努力しようとも、到達できない境地がある。それこそが今の…」

「やめだ、やめ！」

結局お前は、代が違えども、あくまで『カジェット』セイルクロウ』の『信者』ってことだろう！！」

弟の不遜な態度に、今度は諦めたように一笑に付す兄。

「あの女の居場所に案内しろ。」

サシで戦って、実力でその名を奪ってやる。

それならば、お前も納得してオレの手下になれるだろう？」

「案内する最中に、背中から襲われなければの話だ。」

「おいおい、心外だな。」

オレが実の弟を騙し討ちをするような…」

「師匠に毒を盛った、欺瞞ぎまんの塊が何を言うか。」

急に顔を寄せたベルツサスが、呟く。

それは、周囲の部下に聞こえないほどの小声であった。

「……あの女から、そう吹き込まれたのか？
ならば、逆に聞きてえな。
証拠はあるのかって。」

顔色一つ変えずに、呟き返すコルスス。

だがその詭弁は、ベルツサスの動揺を誘うには到らなかった。

眼前に据えられているのは、それほど強い意志と確信を持つ瞳である。

「ハッ！ 真偽も量らずに、仇を討つ気マンマンか。

お前らしいが……やめておけ。

この数を相手に、たった一人で何が出来る。」

「心配は無用。

全員を相手にするつもりなど、こちらにも毛頭無い。」

改めて吐く気声は。

大きく、森に波及する。

「俺には、先代が遺された空挺団の『これから』を、あの人と作る務めがある。

そのために必要な団員達を、返してもらいに来ただけだ。」

身を転じて構え、手にした風来棒の切っ先をコルススの首元に向けるベルツサス。

辺りに潜んでいた夜鳥の全て その群れが一斉に飛び立った。

「…この決闘に手出しは無用。」

百雷の羽ばたきの中、周囲を嘗め回して言い放つ彼。

空を漂っていた温い空気は逆巻き。

詠^{あつら}えたように、肌を刺す寒風へと変わっていた。

「決闘だ……？」

お前ごときが、勝手に決めるんじゃない！」

コルススは、甲高い声と共に回し蹴りを先制する。

踏みこんで散らせた土砂が、辺りを包み。
ぶつかり合う肩と肩。

瞬間。

すぐさま半身をかわし、相手の背に自身の背を付けるベルッサス。

「もうこれ以上、カジェット空挺団に犠牲は必要ない。
……ここで終わらせる。」

その低い声が耳に届くのと同時。

弧を描いて放たれた肘が、コルススの側頭部をかすめた。

僅かな衝撃が脳を揺らし、夜景を一瞬にして歪める。

聴覚が刈り取られ、色を失った空間で、周囲の様子が嫌にはつきりとしていた。

誰も手を出す気配が無い。

弟の宣言どおりに事が運んでいたのが、不思議だった。

頬骨にまで響く鈍痛。

そして軽い脳震盪に酔いながら、コルススは目を見開く。

今の攻撃自体に、驚いているわけではない。

弟のベルツサスが、こうも敵意を剥き出しにして向かって来たことは、今まで一度たりとて無かったからだ。

口元に垂れる鮮血を拭い、周囲を顧みれば。

全ての手下の視線が、この戦いに向けられている。

予期せず、決闘の舞台が整えられてしまったことに、コルススは眉をひそめた。

(…オレとしたことが…。

まんまと、あいつの口車に乗せられちゃったわけか…。)

懐柔などせずに、直ちに総攻撃の号令をかけるべきだった。

だが、後悔しても始まらない。

思考は、早目に切り替えるのが肝要である。

（これで五分と五分になったと思ったら…大きな間違いだぜ…。

…あの女とやる前に、軽く準備運動といくか。）

あの初撃は、むしろ自分にとって良い沈静剤になったと、彼は幸運で頬を緩めた。

団内においては、自分こそが誰よりも暴の技術を磨いてきた。根底にある実力は、どうあっても揺るぎはしない。

コルススは、ゆっくりと風来棒を利き手に戻した。

大陸全土からすれば、初代カジエツトⅡセイルクロウは、それほど名の通った源法術士ではない。

だが、風来棒と名づけた櫂かいのような特殊な器具を発明し、簡易ながら、有人飛行を成功させたことを鑑みれば、密かな傑物である。

彼が、飛翔艦や戦闘騎のように大陸を席卷する機を逃したのは、

欲が乏しく、隠者のような生活を好む気質からだった。

半ば享樂的に始めた空挺団において、彼が主眼を置いたのは、やはり得意分野たる源法術。

さらに、それを補う戦力として、武器の携帯も認めており、特に厳しい制約は無い。

風来棒自体も、実戦に耐えうる堅い木材で出来ており。

平たい部分には、風を掴むための布が巻きつけられてはいるものの、急所に命中すれば、充分に致命傷となりえた。

彼の弟子達が自ずから、それを使用した格闘術に行き着いたのは、まさに自然の流れであった。

コルススの棒術は弟子の中でも群を抜いており、団内一である。

今でも、数十合の打ち合いの後。

繰り出す連撃が、徐々にベルッサスの身を捉え始めていた。

「……何故、先代を殺めた。」

その方法しか、考えられなかったのか。」

だが、怯むことなく間合いを詰めてくる彼は、再び小声で質してくる。

その顔や腕。

肌の所々は内出血によって、どす黒く染まっていた。

「野心が無かったからだ！！

オレならば……もっと、この空挺団を大きく出来る！！
世の中を、上手に立ち回ってみせる！！」

「……組織における重要な点だな。

その部分だけは、先代もお前を買っていたのかもしれない。」

「……！！」

そこで思いがけずに交差し、絡まる両者の風来棒。

コルススは、その静止した得物の間隙から重い蹴撃を胸に食らい、
背後の朽木まで一直線に吹き飛ばされる。

「ぜひとも、二代目にも備わって欲しいところだ。」

「あの女に集団を運営することは、初めから無理だ！
だからこそ、オレが相応しいんだよ！！」

割れた幹に半身をめり込ませたまま、猛禽もつきんのような唸り声を上げるコルスス。

「……だが、兄よ。」

その目の枝に、ベルツサスが降り立つ。
穏やかな表情であった。

「一時でも誰かの下についたのならば、忠実であるべきだ。

『俺は』そう思う。」

「お前の意見ン！？」

ハッ！

それがどうした！！ オレが聞く耳を持つと思ったか！？」

「押し付けなどはしない。

偉大なる師は、死してなお、全ての弟子に選択する自由を与えている。」

ベルツサスは、感情の悉くを受け流す。

コルススが砕けた幹の間から抜け出すのを待ちながら、まるで柳のような気配を保ち続けていた。

「だから……お前もまた、正しいのだ。

そして正しい者同士は、戦うことで勝負をつけるしかあるまい。」

「どんな綺麗ごとを語るかと思いきや……ただ、兄であるオレを殺
したいだけか！

見下げた野郎に成り果てたな、ベルツサス！！」

「肉親の情など、上辺だけの小さな問題だ。

…もつと早く気づき、お前を止めるべきだった。
自分の至らなさが、腹立たしく思う。」

「まるで、今までオレに遠慮していたような言い草だな！
おい！！」

コルススは、やや遠い間合いから風来棒を突き上げた。

だが精彩を欠いたそれは。

威嚇の言葉と同様に、ただ虚しく空気のみを切り裂いていく。

先代が存命の時。

模擬戦では、程良いところでベルツサスは降参していた。

弟は、少し体格に優れている点を除き、全て自分に劣っている。
常に見下す対象だった。

負ける要素など皆無ではないか。

「オレに一度でも勝てたこと……ねえだろうか！」

可能性を否定するように、風来棒から手を離し、背に仕舞うコルスス。

「くたばれッ！」

《針・雨》ヒヤッ・リ「！！」

そして身を縮ませ、絶叫と共に唱える。

ハリネズミのように尖った、細い無数の衝撃が全身を包み、放たれた。

ベルツサスは咄嗟に身をかわしたものの、足場に使っていた木の枝を崩される。

だが落下しながら、冷静に風を拾う彼。

コルススも棒を取り直し、それを追った。

脚が天を突き、頭は地をなぞる。

そこからは、カジエツト空挺団の真骨頂である。

中空で繰り出される四肢の連打。

離れる折、別の風を纏い、再度ぶつかり合う両者。

木々の上で見守るコルススの手下達は、もはや跡目争いなどを抜きにして見惚れ、それぞれが同様の感傷を抱いていた。

何故、この二人が争うのか。

これだけの技術を持った二人が相反することこそ、自分達にとって、本当の意味での損失ではないのか。

押し上げる熱い感情は、さらに周りの風を押し上げていくかのようだった。

ベルッサスのみならず、コルススも周囲の変化を感じ取っていた。この戦いが注目を集めているのは当然としても、それだけでは説明のつかないものが空気に入り混じっている。

だが、それよりも、今のコルススを主に支配しているのは羞恥心だった。

格下と考えていた相手に対し、いまだ有効打を与えられていない現実。

屈辱と焦りが、さらに視界を濁らせていた。

「お前は内外を問わず、暴力によって他を従わせた。だが、そのようなやり方が通用するのは、自分よりも弱い者が相手の時だけだ。」

暴風のような攻めの中で、ベルッサスが低い声で迫る。

「お前のような人間は、恐れずに攻めてくる相手に対し……極端に脆い。」

論破する声だ。

「だからこそ、あの二代目を恐れているのだろう？」

暴力で抑え込むことが、決して絶対的で無いことを気付かされてしまう存在であるからだ。

お前は、そんな彼女を平伏させることによって、自分の心に安寧をもたらせようとし。

団内における威光を、ただ知らしめたいだけに過ぎない。」

続く彼の苛烈な言葉に、コルススは顔面を真紅に染める。

額の血管ははちきれんばかりに怒張し、その心を映していた。

「誰に向かって説教してるんだ…」

てめえ……！！」

遂に、コルススは肉食獣の如く爪を立て、右手を構えた。

「ハイ・ソン《風・走》！！」

黄色い閃光に包まれたその手が、細い樹木を輪切りにしながら迫り来る。

かつてパンリの足を切断した、必殺の源法術であった。

「…その術で評価できるのは、威力のみだ。

軌道が単純すぎる。」

だがベルツサスは、その一撃にあえて接近。

相手の上腕に狙いを定め、軽く蹴りを当てるだけで、その稼動を止める。

「!」

驚いたコルススは瞬時に離れ、態勢を戻した。

だが、右手の術は解けている。
隠しよりの無い動揺の証だった。

「ダー・ナン
《土・葬》！」

相対するベルツサスは、その機を逃さない。

足元に生じた地滑りから逃れるため、真上に跳躍するコルスス。
だが、その動きを読み切って、回り込む俊敏な影。

「く、くそっ！」

コルススは枝を両手で掴み、その反動でさらに退く。
彼から離れないよう、ベルツサスも食らいつく。

互いに身動きがとれない距離で、形勢が動いた。

「ザイ・ボルグ
《石・甲》。」

ベルッサスは握った砂利を、手にした風来棒に振り付ける。

物質の表面を媒体によって硬質化させるこの術は、本来は防御用。

だがこの時ばかりは、彼の得物をより強力な武器へと変貌させるのに一役買うことになった。

「ぐ……くそぉ！」

自分に向けて振り下ろされる凶器に、コルススが合わせた風来棒は、無惨に砕け散る。

鼻先を擦った、焦げ付いた匂い。
体が崩れる。

眼下のベルッサスは、脇の樹木を蹴り、その反動で落下地点に先回りしている。

そして、手前の地面に風来棒を突き刺し。
祈るような姿勢で、大きく息を吸い込み、肺を膨らませるのが見えた。

「初めに、火のゆりかご。

次に、風の子守唄あり。

そして大地の乳飲み子よ。

天空の牧者カジェット「セイルクロウの名をもって、その豊穡を

分け与えたまえ。」

続けられる詠唱に、コルススは中空で手を泳がせた。

自分でも驚くほど、全く意味を持たない行動だった。

なまじ術の威力を予想できるため、事前に大きな焦りを生んだのだ。

「……《土・龍^{ダー・インダル}》！」

土が隆起し、三又に分かれる。

それぞれの先端は、無数の牙を持つ大蛇の姿をとっていた。

凄まじい速度と、唸り。

弟の徹底した心に。

全身が泡立った。

「く……《風・爆^{ハイ・ゴ}》！！」

唱えたコルススの周囲で、空気が爆ぜる。

迫る大蛇を相殺し、さらに反動を生かして傍の木まで避難する目論見だった。

だが、後ろから回り込んでいた大蛇の一匹が、煙幕を突き抜けて、彼の首元へと喰らいつく。

猛烈な勢いで、コルススを地面へと引き摺り込んでいく。

その凄惨な光景に、周囲の者達は息を飲んで前傾した。

「皆の者、聞け！」

ベルツサスは身の構えを解かないまま、大声でそれを制する。

「師や頭領に…全てを求めるな。

完璧な者など…何処にもいない。

だからこそ、互いを補って生きるよう出来ている…。」

大蛇に咬まれたまま地面に打ちつけられたコルススは、虚ろな意識の中で、不可解な語感を聴いた。

「かつて、アルドの弟子がそうであつたように……弟子の数だけ、主義・主張があつて良いはずだ…。」

…ただ、従うだけでなく、自分の頭で深く考える。

…何が最善か。

そうして、納得した上で…二代目カジェット「セイルクロウに従つてくれれば…嬉しく思う…。」

掻き消えるように、萎む声。

首元に食い込んでいた、牙が緩んだ。

「……！？」

そればかりか、大蛇の体を構成していた全ての土が溶けて、地面へと還っていく。

正面を向けば。

風来棒を両手で握り締め、膝を地に付けたまま、微動だにしないベルッサスの姿。

「……気を……失っています……。」

傍に寄って、彼の様子を確認した手下の一人が、驚いたように報告した。

「は……はは……！」

一瞬、腰砕けになってから、その場に駆け込んでくるコルスス。

「自滅しやがった！！

このバカが！

難度の高い術の最中に、偉そうに講釈なんぞ垂れるからだ！！」

そして、無防備なベルッサスの脇腹を、思い切り蹴り込む。骨の碎ける音が響くが、彼が目覚めることは無かった。

「こっちは、あの女と戦うために、力を温存しておかなきゃならね

えんだ。

てめえなんざ、まともに相手などしてられるか！

弟だと思つて…少しばかり、手を抜いてやりやあ図に乗りやがつてよオ…！！」

常軌を逸した言い訳に、手下達は言い知れぬ恐怖を覚え。

遂に、弟を^{なぶ}蹴り続けるコルススを、堪らずに背後から止める者が現れる。

「お頭…。

この人が、本当にあんたを殺すつもりだったと…思っているんですか…！？」

「うるせえ！！」

だが、返されたのは、振り向きざまの拳。

「寝惚たこと言つてんじゃねえぞ…！！

加勢も出来ねえ臆病者が！！」

鼻を折られ、悶絶する手下を見下ろしながら、コルススが叫ぶ。

「…てめえらも同罪だ！！

オレが、こんな勝負に本気で付き合つても思つたのか！？

敵の言つことを真に受けやがつて、この愚図ども！！」

猜疑を剥き出しにした彼に、もはや誰も近寄ることは敵わない。

距離を置き、遠巻きにするばかりだった。

「そうか…お前ら…隙あらば、オレの地位を狙っているんだろう！？
そうなんだろ、おい！！」

向けられる害意の視線に、慌てて首を振る面々。

コルススは、そんな彼等の怯えた瞳を眺め、満足そうに笑う。

あまりに癡狂じみている横顔が、全員の心にさらなる強烈な畏怖を刻んでいった。

4

「
なあ。

お前は、十年前のことを憶えているか？」

照明の無い廊下を歩きながら、戒は出し抜けに訊いた。

「……………」

どういう意味か。
そう問いたげに、豹頭が振り返る。

「俺様が自分の特別な力に気付いたのが、たしかその頃だ。
だが、当時を鮮明に憶えているかっていうと、そうでもねえ。」

「…何が言いたい？」

もつともらしい表情で呟くばかりの彼に、先を促すザナナ。

「いや、な。」

最初は疲れのせいかと思っていたんだが…。
ここ数日の記憶が、まるで昔のことにように、ぼんやりとしてて
よ。」

シユナ達と組を違えて、別々に大会に参加した経緯。
イデイス
自分と同じ聖十字を持つ神父、ウベらとの出会い。

パンリの負った重傷を治したことなど そこまでの流れは、
大体把握できている。

だが、どうして自分が競技を途中で棄権することになったのか。
肝心の部分を考えると、霧がかかったように認識がぼやけてしま
うのだ。

「…ザナナも同じだ。」

豹頭から漏らされた一言に、戒は合点して頷いた。

街を散策している最中。

彼も自分と同様に、どこか、うわの空だったのだ。

「こうなると、競技の最中か直後に何かがあつたに違いねえ。

問題を解決するには、知っている顔と早く合流することだな。

勿論……そこは、まともな人間限定だよ。」

足元に視線を下ろせば、梅とその丸い背中にしがみついた小猿。こちらの心配をよそに、二匹はあれからずっと、傍に飄々と居続けている。

「明日になれば、無事に大会も終わるだろうしな……」

戒は逸る気持ちのまま、視線を前に廊下を進んだ。

「畜生。」

だが直後。

壁に一撃いれて、舌打ちする彼。

「薄々おかしいとは思ってたが……ここは宿舍じゃねえ。」

呆れた。

ここまでくると、自分の頭蓋を割って、脳味噌を直に殴ってやりたい気分だった。

「つい最近のことだったのに…。
まったく…」

誰に向けて言うわけでもなく、ぶちぶちと独りで文句を垂れながら、踵を返す直前。

戒は廊下の奥に注目した。

ドアの無い部屋からこぼれる照明が、多くの人影を作っている。

吸い寄せられるように、体が自然と動いていた。

「以上、状況の説明を終わります。
…はつきり言って、ここから先は命の危険がある作戦になると思う。」

戦場とは、得てしてそういうものだけど。」

背筋を緊張させて並ぶ士官達の前で、壇上のマルリッパは言葉を締めた。

少し離れた卓では、傍らでコルツがその場を見守り、事務官が声通機の調整を行っている。

結局、謎の組織からの通告は一度きり。
一方的な宣言のみだった。

首都を脅威にさらすと前置きしながら、それに対して何の代価も
要求しない相手方の行動には、妙な違和感が残る。

だが、大国の威光を笠に着ることに慣れた者達は、自身に弓を引
かれることに慣れておらず。

王宮に飛翔艦を墜とすなどという蛮行を、何者かが考えつき、は
たして成し得るものなのか。

彼等にまず逃亡の一手という愚拳を犯させたのは、信じ難いとい
う気持ちが半分。

もう半分は、元来弱腰の性根である。

「じゃあ、何か質問はあるかな…」

その末端の、恐怖に引きつった面々に、マルリツパは問う。

状況を包み隠さずに説明したのは、隊長であるコルツの意向でも
あったが、どうやら功を奏しているとは言い難い。

「あの…出撃するのは、何も我々でなくとも…。
首都の周りには…基地が他にもありましたよね…?」

各々が遠慮がちに目を伏せる中、特に顔色のすぐれない一人が意

を決し、弱々しく発言した。

「こういうときのために、国の税金が使われているんだから、戦うのは義務だよ。」

他の基地は、他の基地……僕らは、僕らさ。」

「でも、先ほど実家の方から連絡がありまして…早く避難するように言われたのですが……どうすればいいのでしょうか？」

「それは……」

別の隊員から出た質問に、マルリッパは言葉を失った。

しかし、自分で判断できずに、ここで訊ねてきた隊員などは、まだましな方である。

目の前に並ぶ彼等は、昼間と比べ、明らかに数が減っていた。

この駐屯地には、裕福な出の者が多い。

特に高家の連中などは、すでに役人の馬車に乗じて、首都を脱したことだろう。

「…確かに、ここも無事では済まないかもしれない。

でも大きな混乱を避けるという名目で、街に避難勧告は出されていないんだ。

軍人が民を見捨てて敵に後ろを見せるのは、とても恥ずかしいことだとは思わないかい？」

マルリップも、相手が響かない鐘だということを承知しながら、あくまでも真摯に語りかけた。

「回りくどい話は、もうやめろ。」

だが、いつこうに上向かない場の空気を見かね、遂にコルツが言い放つ。

「貴様等がどんな甘い幻想を抱いて入隊したのかは知らんが…軍人は死ぬことが仕事だ。」

それに納得できない奴は、ここを去れ。」

冷えきった室内に、さらに氷塊を投げ入れるかのような文句だった。

「従来なら敵前逃亡は重罪だが、裁く人間が真っ先に逃げだした今、何も遠慮することはない。」

保証を求めるような視線に対し、続けて放たれるコルツの一言。

そこから、士官達の行動は素早かった。

マルリップが制止を呼びかける前に、争うようにして、狭い出入口を飛び出していく。

人によっては、二足で歩くことすらままならない。軍の威厳が塵ほども無い醜態だった。

完全に予想通りの展開に、事務官は卓上に両手を付いて、頭を垂らし。

マルリツパは、彼らが胸から落としていった勲章を拾い上げ、絶望に打ちひしがれた。

(…飛翔艦を墜とす…。

…王宮に……?)

冗談のような内容。

壁越しに聞こえてきた会話は、戒にとっても衝撃的であった。

先ほど脇をすれ違って逃げて行った、軍人達。

部外者であるはずの自分の姿に目もくれず、廊下の闇に消えていく。

自分は、王宮の正確な場所など知らない。

だが、その言葉の持つ意味くらいは解るつもりだ。

確か、大会の上位入賞者を招いて行われる晩餐会が、宮殿で行われると聞いた。

あの魔導人形が言った『宮殿』とは、王宮の意味か？

だとすれば、ここから近い位置にあるのは想像に難くない。
まだ競技中の人間も、この凶事に巻き込まれる可能性が充分にあるということだろう。

特に深刻な問題は、タンダニス王の存在である。

極秘で中王都市を訪れている最中、その身に何かあれば、世界にどのような影響を与えるのか。

そればかりは、全く想像出来ないだけに不安になる

「大変なことか。」

判り切った言葉を呟きながら、背後のザナナが静かに動く。

「ああ、悪いことは重なるな。

地震と津波と、火山の噴火が同時に襲ってきたようなもんだ。」

こんな状況で、軽口を叩く自分が信じられなかった。

覗きこんできた豹頭の瞳に映りこむ、己の顔は爛々と輝いている。

自分も、闘争に毒されてしまったのだろうか。

虚^{から}になった心を埋めるべく、振って涌いたような危機に胸が躍るなど、少し前には考えられなかったことだ。

「あいつらが下手を打てば、きっと大惨事だぜ。」

戒はそんな高揚感を紛らわせるように、室内に佇むコルツとマルリッパの姿を眺めながら、改めて小さく唸った。

「…ならば、助けてやればいい。」

「まあ、そう焦るな。」

そこで白槍を担いで前傾するザナナの袖を取り、しかめ面のまま囁く彼。

「こんな状況だからこそ、ギリギリまで粘って、こっちの腕を高く売りつけてやるうじゃねえか。」

「……………」

その言葉に豹頭は閉口して、二の腕を自慢げに叩いている戒の脇に座り、壁にもたれかかった。

「…フ族のすることは、いつも面倒だ。」

「ちよつとくらい、辛抱しろ。」

首尾よく事が済んだら、美味しいメシでも奢ってやるからよ。」

そして苦笑しながら、ザナナと同じ態勢をとる戒。

《 応答を願います。 》

その耳に飛び込んできたのは、女性の声だった。

丁度よからぬ企みを考えていた戒は、慌てて辺りを見回して探す。

足元にいる梅が、耳を立てて部屋の方を凝視していた。

それに倣い、室内を再度うかがえば、向こうの景色は慌しく動いている。

急に現れた声に肝を潰したのは、コルツとマルリツパも同様。

だが、それ以上に駭目がいもくを晒していたのは、卓上で声通機を調整していた事務官である。

機能している基地など何処にも無いと、たかをくくっていた。

《 現在、首都周辺の各隊に向けて、お尋ねしております。

誰か応答できる方はいませんか？ 》

しかし、混じりっ気の無い声が、現に声通機から届いている。

まるで室内にもう一人居るかの如く、清らかで滑らかな声質だ。

「 フィンデル大尉！！ 」

それを奏でる声通機を両手で掴み、叫んで応えたのは、マルリツ

パだった。

《 もう、大尉ではありませんが…。》

その声は…マルリツパ少尉…ですか？ 《

若干驚きながら、彼女の声も少し上ずる。

「あんたはもう退役したはずだ。

それが今、どこ基地にいる？」

喜びを露にしているマルリツパと対照的に、コルツは淡々と訊いた。

《 詳しいことは明かせませんが、こちらは軍事施設ではありません。ん。

もはや関係できない身分であることも、承知しています。でも今の状況に、じっとしていられなくて… 《

「と、とんでもない！

渡りに船ですよ！！」

コルツの詮索によって、急に色を失った彼女の声を、マルリツパは必死に手繰り寄せる。

《 そちらには、軍本部からの指示はありましたか？

ギルチ准将は何と… 《

「残念だが上の連中は、いち早く撤退を決定している。おそらく、役人主導で決めたことだ。准将の判断もそこには無いだろう。」

苦虫を噛み潰したように、言葉を返すコルツ。

声通機の向こうで、フィンデルも納得した。

他の基地とのコンタクトが一切とれないのも、それで道理が繋がる。

そして、その流れに逆らっているこの部隊だけが、最後の望みの綱だということも確信できた瞬間だった。

「こんな有様ですけど、大尉が手助けをしてくれるなら、きっと何とかあります！」

どうか…どうか知恵を貸していただけないでしょうか！！」

「マルリツパ！！」

だが、既に退役した彼女にすがろうとする友の姿に、コルツは若干の抵抗を覚えた。

「みつともない真似はするな。」

「全力を尽くさずに後悔するくらいなら、みつともなくても結構さ！」

声通機の前で、頑として動かない両者。
だが睨み合いは、僅かも続かなかった。

「……確かにこの期に及んで、つまらん意地を張ってる場合じゃねえな。

それにたとえ『元』であれ、オレが大尉に従うことは、階級的に問題は無い。

……だな？」

深い溜め息と共に、コルツが呟く。

急に振られた言葉に、事務官は目を丸くしたまま絶句していた。

そして間もなく。

「これより、この基地はあんたに全指揮を委ねる。
以降の指示を頼む。」

卓上の小さな声通機に向けて、この夜、最大の決断が下されたのであった。

「あのバカ……」

せつかく、争いとは無縁のところに行ったのかと思いきや……何や

ってやがる……」

戒は、壁に背をつけたまま、思わず微笑んでいた。

「また巻き込まれて、流されて……つくづく、救えねえ女だ。」

そして、ずっと彼女の声に耳をそばだてている梅の頭を、掴むようにして乱暴に撫でる。

「ま、思ったより……元気そうだな。」

大会の始まる直前、シュナが語っていたことは、間違いではなかった。

感情の赴くまま中王都市を訪れたタンダニスを自分は責めたが、彼は、ルベランセにいた誰もが出来なかったことをやったらしい。

ますますもって、彼の身に何かがあつてはならない。

そう戒が決意を固めると同時に、廊下の奥から、やけに急ぐ足音が響いてくる。

一人の士官が引き返して来たのかと思いきや、それは別の人間のようにだった。

暗がりのため姿は見えないが、漂わせている機械油の匂いは、整備場を彷彿とさせる。

「…緊急の要件です。
入っても…よろしいですか？」

息を切らせた様子の男は、その場に不釣合いな修道着と豹頭を交互に眺めた後、部屋を指して訊ねてきた。

《 コルツ中尉。

それで、現状の戦力は…？ 》

各々が囲む声通機から、凜として、整然なフィンデルの声が響く。

「戦闘騎の操縦士が二名。

声通機を管理している事務官が一名。

これで全部だ。」

《 ……少数精鋭というわけね。 》

沈黙と冗談を交えた彼女の言葉が、全てを形容していた。

迫り来る脅威に対する防衛力として、明らかに逸脱している。

「大尉、オレからの問いにも正直に頼む。

こんな戦力で、まともに作戦が立てられるのか？」

《 厳しいと言わざるをえないわ。

せめて、相手の詳しい戦力を把握したいところだけでも…」

「それならば、私から説明いたします。」

大声を発して応えたのは、上着の袖を腕から抜きながら入室する男。

日中 コルツの父親と一緒に行動していた者である。

「男爵様からの言いつけで参りました。

こちらの基地の指揮官どのは…どちらで？」

その問いに、三人は無言で卓上の声通機に目をやる。

真剣な彼等の眼差しに、冗談ではないことを察し、彼は頬を掻きつつ口を寄せた。

「よろしいでしょうか。

私はブロード＝イマツェグと申します。」

《 フィンデル＝バーディです。 》

「…おや？

随分と感度がいいな…ここの設備は。」

早速、話題が逸れたことに気づき、彼はネクタイを緩めながら真顔に戻る。

「失礼。

自分は、『強奪されたと思しき飛翔艦』を建造した会社の責任者です。」

《……！》

向こうのフィンデルと同様、室内のコルツ達も、その彼の一言に驚愕した。

《…手を貸していただけのですね？》

「はい。」

そのために来ました。」

彼はそう答えてすぐに、悔恨の念を顔に浮かばせる。

「あれに乗っている者達は、その殆どが非戦闘員です。命に大事が無ければ良いのですが…。」

《彼等の安否は、今は祈るしかありません。》

「そう…ですね。」

今は、私どもに出来ることをやらなくては…」

少し冷淡ともとれるフィンデルの言葉だったが、イマツエグも、持ち前の柔軟さでそれに応えた。

「向こうの艦の戦力を、具体的に教える。」

機を見計らって、コルツが肝心な部分を問う。

「当該艦は、初めから賞品を目的とした運用が想定されていたため、弾薬の類は一切積んでおりません。

無論……強奪した連中が手を加えていなければ、の話ですが。」

依然として樂觀視できない状況は変わらないものの、わずかに光明が射した心地だった。

「加えて、我が社の建造したもう一隻の飛翔艦は、無事に到着しております。

至急、その艦装きやうじやうを済ませ、王宮を防衛できるよう手配を整えて参りました。」

さらに、朗報は続く。

「おかげで10万ヤクスYもした背広が台無しですよ。
もつとも……似合ってるつもりはありませんでしたかね。」

そして油に汚れた上着を、椅子に目掛けて放り投げる彼。

「万が一の備えはいたしましたが、そこまでに至らないよう止めていただきたいのが本音です。

飛翔艦に飛翔艦で対抗するのは、本当に最後の手段として……」

《 解っております。》

しかし戦略上、最後の砦が出来たのは、本当に心強い。》

フィンドルの言葉に、彼等は勇気づけられる思いがした。

「しかし…あれを、なるべく無傷で奪還することは出来ないでしょうか？」

《 無傷？ 》

「自分は設計に携わっているので、攻めるべき急所を知っております。」

たとえば、技師用の小さな搬入口から、格納庫に乗り込めるルート。

簡単に内部の見取り図も描くことも出来ますし…」

「無用だ。」

考える間もなく、コルツは言い放った。

「強奪されていることが判明次第、目標は即時に破壊する。」

加減する余裕など、こつちには無い。」

強く断言する彼の調子に、それ以上の反論は無かった。

現在が切羽詰まっている状況なのは、誰もが知るところである。

《 ……イマツエグさん。》

貴方ならば、飛翔艦が首都に達するまでの時間が予測できるはず。やっていただけですか？」

暫く押し黙っていたフィンデルが、やがて質問を変える。

「了解です。

地図はありますか？」

イマツエグは、彼女と室内、双方に対して呼びかける。

「あれはエレクカル・パレス社の最新の火力反応炉を積んでおります。

艦の最大速は、毎時14万^{マイル}M。

王宮まで、およそ三丁四時間で到達できます。

ヴァルクハルト方面の国境で連絡があったという話ですので…現在
の空域は……」

早速、地図を羽根ペンでなぞり、彼は動きを止めた。

「件の通信は、どのくらい経ってますか？」

「およそ一時間は……。」

「となると…王宮の方角に向けて直進していると仮定して…」

予想されるコースを、細長い楕円で描く彼。

「ラスラン運河を渡ったあたりか。」

それを肩越しに覗きながら、コルツは言った。

地図上の、長い水色の線^{ライン}。

北東から南へ、かの地方を縦断している大河である。

「行くぞ。」

今すぐ出撃すれば、首都圏に入る前に止められる。」

「待った……勘だけを頼りに出撃するのは危険だと思う。」

既に靴のつま先を外に向けている彼を止めたのは、マルリッパだった。

「こちらの網は、ただでさえ狭いんだ。」

おそらくチャンスは一度……目標と大きくすれ違えば、そのまま逃がしてしまう可能性が大きい。

相手の正確な動きを、索敵しないと。」

「そんな！」

ここから50万Mも離れているんですよ!？」

視線を向けられた事務官は、髪を振り乱しながら、素っ頓狂な声を上げた。

「常駐の方面軍ならともかく、ここからでは不可能です!!」

《 その問題ならば、こちらでなんとかします。 》

割り込んできたフィンデルの声に、一同は関心を寄せる。

遠隔地との会話が行えている以上、向こうにも念通士がいることは、想像できていた。

「まさか都合よく、その周辺にいるわけでもあるまい?」

コルツが問う。

《 どちらかと言えば、貴方たちの基地に近いところにいます。
しかし、可能な距離です。 》

「ありえない!

騙されてはいけません、コルツ中尉!!」

事務官は、逆上したように吠え立てた。

「中王都市の国土の横幅をご存知ないのですか!?

…約160万Mですよ!!」

そして卓上に広げた地図に、指で乱暴に大円を描いて示す。

「我が軍の念通士の一般的な索敵可能範囲が、せいぜい半径10万

M。

これだけで『50万M』という数字が、どのくらい無茶なものが解るでしょう!？」

《…疑うのも解ります。

しかし、こちらに任せていただけませんか。》

「どうしても事実だと言い張るなら、一度そちらの念通士と話をさせて下さい!」

《第三者に詳しい素性を明かさないと条件に協力してもらっているゆえ、それは出来ません。》

フィンデルの無味簡潔な声。

「では、どうやって信用すれば良いのですか! お話になりませんよ!」

《ならば、この話は無かったことに。失礼します。》

「……え?

…あの…もしもし!？」

事務官が間抜けな声を洩らした頃には、既に彼女の声は途絶えている。

色々と端末を操作するが、応答は無い。その縮こまった背に、全員の冷やかな視線が突き刺さっていた。

「…良かったの？」

この国を救うことが、貴女の望みではなかったのかしら？」

急に自分の手から念通球を取り上げたフィンデルに、イメルゲが訊いた。

「頭を下げるだけが交渉じゃないわ。

全指揮を委ねられた私に対し、誰かが一人でも疑念を見せている
うちは、まだ戦えない。」

彼女は真面目な顔つきで返す。

「それに、泳げない人が、いきなり船から海に突き落とされたら恐
いでしょう？」

数分もすれば、藁わらをも掴みなくなる。

互いに選択の余地は無いのだから、個人の感情など二の次よ。」

「…恐いのは、貴女の方かもね。」

イメルゲは肩を震わせて笑った。

「でも、この距離を索敵するだなんて、見得を切って大丈夫？」

私、そんなこと出来るなんて言ったかしら。」

「この程度なら、余裕でしょう？」

先ほど壁から引き剥がしてきた小さな地図を、フィンドルは机上で叩きながら返した。

そんな彼女らの様子を、オーロンは部屋の片隅で見守っていた。

イメルゲは今のところ、なし崩し的にフィンドルに協力しているものの、それは気持ち半分である。

その証拠に、基地の声通機に介入するほかは何もせず、何も語らずにいた。

自分に関する情報を出し惜しみしているのだ。

無理もない。

いくら仲介人を交えたとはいえ、会って数刻も立たずに、相手に自分の全てをさらけ出す馬鹿が、どこにいるというのだ。

そう。

この裏社会は、信頼で成り立っている。

情報とは時として最大の武器であり。

それを取り扱う人間は、掴んだネタによっては、自分の首が容易に刎ねられることを知っている。

一見、相手がウマの合いそうな人間だとしても、そこまでの信頼が短期間で築けようはずもない。

…しかし、どうだ。

イメルゲは平静を装っているが、自身の能力、またその限界にさえ、目途をつけている口ぶりをフィンデルにされて、内心は穏やかではないだろう。

「簡単な推測よ。

オーロンさんと初めて会った時、彼はゴーベ山脈における、ルベランセと炎団との交戦を知っていた。」

不意にフィンデルは、脇の彼に目を向けながら、実に堂々とした様子で述べた。

「民間人ならば絶対に知り得ないことだから、ずっと不審に思っていたのだけれど…その疑問はここで解決したわ。

全て貴女からの情報に他ならない、ということとして。」

「…情報屋の風上にも置けないわ。」

「面目ありません。」

半眼で呟くイメルゲに、こめかみを揉みながら小さくなるオーロン。

侮れないものだ。

彼女は、どんな小さな事柄でも冷静に分析し、真実を見抜く力に長けている。

「つまり最低でも、ここからゴーベまでの距離が、貴女の索敵が届く範囲であるということ。

ここからラスラン運河なんて、楽に越える距離よ。

：確かに、私の知っている念通士の範疇に収まらない能力だけでも。」

「私がずっと『ここ』にいるとは限らないでしょう？

その時、偶然にゴーベ近郊に滞在していたのかもしれない。」

質問を逆に切り返してくるイメルゲに、フィンドルは不意に視線を外し。

彼女のワンピースの、開いた胸元を見詰めた。

「貴女が女であることを差し引いても、その肌は白過ぎるわ。

もう長い間、この地下室を出ていない……もしくは、動けない理由があるのではないかしら。」

だが、既に事態を看破している当人にとっては、もはや蛇足のようであった。

「…恐れ入ったわ。」

イメルゲも観念したように呟き、椅子に深く背をもたれる。

「でも、私には『協力しない』という選択肢があることに変わりはないのよ。」

「今だって、気まぐれで手を貸しているだけなんだから。」

「気まぐれ？」

「それは違うわ。」

意地のように聞こえた言葉に、首を振るフィンデル。

「貴女は初め、モンスロン卿の姓を名乗った。」

「たえ実の娘でないにせよ、彼に対して好意的な感情を持っていなければ、そのようなことはしない。」

「今まで勝手な憶測を色々と語ったけれど……あの時点で、私を助けてくれることを確信できる。」

彼女の実直な言葉に。

「イメルゲの白顔は一層に色を失い、不意に動かなくなった。」

「……オーロンさん。」

「大尉は、想像以上に面白い人ね。」

「やがて呆れたように、うつろな笑みを浮かべる彼女。」

「理知的な行動をしているかと思えば、変に感情論が混じってる。そこがなかなか、魅力的でしょう？」

手にかいた冷や汗を握りながら、彼も答えた。

「大尉のことを、もつと良く知りたくなつたわ。

この国や軍隊に肩入れする気は無いけれど、きつと、この事の顛末は見なくちゃ損ね。」

そう言つて、イメルゲが意気揚々と机の下部から取り出したのは、奇妙な物体だった。

太めの小刀。^{ナイフ}

だがその刃には、念通球と思しき物体が三つ埋め込まれている。

「あれを使つんですかい……」

早くも瞼を閉じて集中する彼女の様子に、オーロンはうんざりした様子で帽子を目深に被った。

次の瞬間。

フィンドルは、たじろぐ。

幻想のように、イメルゲの身体から強烈な光を放つ人像が、魂が抜けるように出てきたからだ。

女性的な形状だが、身長はその倍。

そして、巨大な瞳が一つ、人間でいうところの頭部に付いている。

「興味本位で、『あれ』には触れないでくださいや。
三日は寝込んでしまいやすぜ。」

オーロンが自信をもって説明するのは、既に経験済みであるからだろう。

「精神の集合体だか何だとか……まあ、原理はわかりませんがね……」

これがイメルゲの諜報力の正体なのか。

その驚くべき光の人像は、床に居るうちは鈍い動きを見せていたが。

やがて宙に浮くと、細かい光の筋となって、凄まじい速度で天井に吸い込まれていった。

「一次メルファ・アルケ状態安定。
東の方角へ向けて、遠隔視開始。」

体温の低い無機質な言葉が、彼女の口から続き。

「現状維持のまま、第四速度で直進。
……ルグラン地方……ジトン地方通過。」

そして瞬く間に、中王都市の各地を横断していく。

「…ラスラン運河の上空に到達。
付近の空域には、見受けられないわ。」

向こうの念通士は、こちらが提示した事に、あからさまに難色を示していた。

無理もない。

これは、まさしく人外有能力だ。

「索敵範囲拡大。

さらに遠方の空域…に中速で接近する物体……。
おそらく…これね。」

そこで彼女の眉が小さく反応すると、薄く開けた瞳の視線が、地図上に落ちた。

「首都王宮より、東東南の方角。

付近にバスクレイ大聖堂、確認。

首都より、距離…およそ70万M。

高度…およそ5千M…」

「ありがとう。

もう充分だわ。」

素早くメモを走り書く彼女に、フィンデルは堪らずに声をかけていた。

この遠隔視は、想像していたよりも楽な作業ではない。
身体に相当な負担を強いていることが、差し出された紙の震えから伝わってくる。

「……どう？」

これで……私がもう、大尉を疑っていない証明……出来たかしら？」

イメルゲは深い疲労を表情に湛えたまま、呟いた。

オーロンはそこで初めて、通信を断った時のフィンドルの言葉が、基地側ではなく、正確には彼女に向けられていたものであったことに気付く。

フィンドルは類い稀なるその智謀で、イメルゲからの信頼を勝ち取り。

イメルゲもまた、フィンドルの言葉の裏に隠された真意を理解し、応えて見せたのだ。

何という慧眼の応酬だろう。

興奮に背筋が踊る。

まったく、緊張感あふれる音楽劇を、特等席で観ているようだった。

《……おい！

応答してくれ！！》

イメルゲがナイフを置き、念通球を握り直すと、コルツの現実を帯びた声が途端に響いてくる。

《…先ほどの件だが、こちらの人間にはきつく言っておいた。

あなたの協力者がどこの誰だろうと、余計な詮索はしないことを約束する。

今後も含めてだ。》

「ご理解に感謝します、中尉。」

フィンドルは慇懃に礼を述べながら、自身の手をイメルゲの指に重ねることを忘れなかった。

「バスクレイ大聖堂？

本当に、まだその辺りにいるのですか？」

向こうからの報告を地図で参照しながら、真っ先に疑問の声を上げたのはイマツエグであった。

「想定の半分程度しか速度が出ていない…。
どういうことだ…。」

「エンジンまわりのトラブルでは？」

「ええ…。」

ロールアウト

工房で完成したばかりの機体には、ありがちなことですが…。」

マルリツパの呟きに、彼は頭の働きを止めずに答えた。

「何にしても、ついている。

首都から遠くなればなるほど、撃墜がしやすいからな。」

《 中尉。 》

コルツが洩らした一言に、呼びかけるフィンデル。

《 本当に、撃墜しか方法が無いのかしら…。 》

それでは、地方に住む多くの人間を危険にさらす恐れがあるわ。 》

「…なら、どうしろと。」

《 先のイマツエグ氏の作戦…。 》

せめて白兵戦が行える人員が少しでもいれば、考えようがあるの
だけれど…。 》

「冗談はよせ。

強奪された飛翔艦を、また奪い返せって言うのか？
しかも空中で？」

コルツは、声通機を睨みつけて言った。

「そうですね！」

下手に敢行して失敗し、首都圏に侵入される方が問題です！！」

先ほどの件に懲り、口を閉ざしていた事務官も思わず声を荒げる。
この時ばかりは、彼もコルツと同意見のようであった。

《 人が住んでいるのは、何も首都だけではありません。
被害を最小に抑えられるよう、最大の努力をするべきです。 》

「優先度の問題ですよ！」

王宮と比べれば、他の地域の損害はやむをえないと、言いたいの
です！」

事務官の言葉は、自分の保身の気持ちも含んでいる。
だが、その言葉は正論であり、咎められる者はいなかった。

壁を隔てた廊下で、戒もやりきれない思いで聴いていた。

「 マルリツパ。
どうした？ 」

響くコルツの声。

再び身を乗り出して室内の様子を覗くと、マルリツパが大口を開

けて、呆けたように動きを止めていた。

実に容易に、彼の思考が想像できる姿だった。
ちようと駐屯地を訪れている、自分らの姿が浮かんでいるのだろ
う。

「少し席を外す。
……少し席を外す。
大尉の言うことを、よく聞いておけ。」

そこでコルツは、有無を言わさぬ口調で事務官に告げると、強引
にマルリッパの腕を取って廊下側に寄った。
思わず、身を隠し直す戒。

「お前。
今、何を考えていた！」

マルリッパに対する厳しい叱責が、頭のすぐ後ろで響く。

「……彼等ならきつと、頼めば手を貸してくれる。」

返される低い声。
壁に張り付きながら、戒は苦笑した。

いよいよ、連中が泣きを入れてくる。
ここで自分が何食わぬ顔をして颯爽と登場すれば、後は算段通り
に事が運ぶはずだ。

彼は修道着の皺を直し、中腰になった。

「奴等には、適当な理由をつけて、ここを脱出するよう伝えておけ。」

だがその動きを途中で止めたのは、コルツの一言だった。

「言っておくが…これは意地を張ってるわけじゃないぞ。やれることは全てやらなければ後悔する……お前の言葉に、オレは大賛成だからな。」

「なら、どうして…」

「だからこそ、あいつらを逃がしたい。軍隊は相手の命を奪い、自分の夢を捨て、希望を諦める……生臭いところだ。もう関わって欲しくねえ。」

それを聞いたマルリッパは、力のこもった肩を下げて、穏やかな表情に戻る。

「すまん。」

結局、コルツ＝デスタロッサ隊は、始まりも終わりも二人きりだ。

そして腕を目一杯に伸ばし、手袋に包まれた拳を突き出す相手。

「謝ることないさ。」

君に振り回されるのは、いつものことだもの。」

マルリツパは、もはや何も考えず、それに手を打ち合わせていた。

恐怖は無い。

それに代わるような友の決心と成長ぶりに、ただただ感じ入っていた。

だがそこで、不意にコルツの姿が消えた。

廊下から何者かの手が伸びて、その後ろ襟を掴み、引きずり込んだのである。

マルリツパが慌てて追いかけると、そこは修羅場だった。

「ふざけんなよ…勝手に決めやがって…！！」

出て行くのも残るのも、俺様の自由だ…！！」

怒り心頭の様子で、コルツに詰め寄っている戒。

闇の中の低い位置にザナナも居るが、そちらは微動だにせずに胡坐をかいているままだった。

「何もかも背負いこんで、自分らだけが犠牲になってよ。」

それで、悲劇の英雄気取るつもりか？

そんなこっちゃ、失敗するのがオチだな。

無駄死にするに決まってる。」

意気を挫くような手厳しい言葉の連続。

コルツは持ち上げられた態勢のまま、それを黙って凝視している。

「おいブタ！

てめえも、人をおちよくってんのか。

あれだけ勧誘しておいて、いざとなったら『はい、消える』ってか！？」

「え、違うよ！

ただ……きみらのことを思っ……」

急に矛先が自分に向けられて、弁解しながら後ずさるマルリツパ。

「この俺様が、逃げ出した奴等と同等の扱いつてのが気にいらねえ！
そんな程度の評価しか、してねえってことがな……！」

だが聞く耳持たず、大きな軌道を描く戒の張り手が直撃し。
口の中を走る痛みに、彼はうずくまった。

「おいおい、お坊ちゃんよあ……」

前回の戦いの経験で、急に大人になったとでも言うのかあ？」

そして悪びれもせず、今度はコルツの頭を、手の甲で軽く叩き始める戒。

「他人を思いやる心なんざなあゝ、らしくねえんだよあゝ。」

俺様の言ってること、解りまちゆかねえ、このクソガキが？」

「……。」

挑発には乗らないとばかりに、コルツは首元の拘束を強引に振りほどき、無言のまま背を向けた。

しかし、その隙を狙って、戒はその尻を蹴り飛ばす。

「な……！？」

肩から床に転げてくるコルツに、片足を上げて仰天するマルリツパ。

「盤上の駒が、あれこれ気を回すんじゃねえ！

てめえらの勝手な行動が、どれだけフィンドルから勝利を遠ざけているのか、わからねえのか！！」

戒は額に血管を浮かばせながら、怒りを撒き散らす。

雷鳴が轟くような騒音に耐えかねて、梅と小猿は、そそくさと離れた位置へと退避する。

「まったく…イカれてるところだけが長所だった野郎が、丸くなっちまうとロクなことが無えな。」

戦闘騎をよこせ。

俺様が代わりに出撃する。」

「……！」

「てめえらはそうだなあ…。

丸々してるのは、ブタだ。

二人揃って丸くなったところで、『ブタちゃんズ』にでも改名して、ブーブー踊ってる。」

その暴言を聞きながら、片膝を立てるコルツの目は据わっていた。

「せっかく、人が気を利かせてやりやあ……好き放題言いやがって……！」

このド素人が……！」

そして腰に提げた拳銃を抜き。

振り向きざま、その柄で殴りつける彼。

「……らしくなってきたじゃねえか……。」

切れた唇から垂れた血を、指で拭う戒。

「ま、まるで子供の喧嘩だ……！」

ザナナさん、止めてください……！」

そこから始まった取っ組み合いに、マルリップの絶叫にも似た声が、廊下にこだました。

床に座したまま傍観していた豹頭は、肩の槍に手を伸ばして立ち上がる。

次の瞬間。

加減を知らない一振りが、戒とコルツの身体を凧ぎ。

両者を壁に打ち付けた衝撃は、建物全体を震わせ、マルリツパだけでなく、室内の事務官とイマツエグをも驚かせた。

「やはり、フ族は面倒だ。

たまには理屈をこねずに、素直になれ。」

床に重なって伸びる二人に、ザナナは気付けの言葉をかける。

「外で待っている。」

そして下から突き上げる彼等の怨嗟の眼差しを、鼻息で一蹴し。槍を担ぎ直して、踵を返す豹頭。

全てを達観したような彼の背を目の当たりに、二人は同時に立ち上がった。

「野郎……！」

仕切ってんじゃないぞ……！！」

そして、乱れた髪を両手で掻き上げながら、大股で続く戒。

「てめえら…少しでも足を引っ張りやがったら、腹に鉛弾をブチ込んでやるからな!!」

そんな調子で、コルツも後を追う。

「コルツ!!」

「お前は大隊の作戦を、最後まで聞いて来い。

…オレは戦闘騎を暖気してくる。」

マルリツパの不安そうな呼びかけに、彼は振り返らずに答えた。
わずかに見えた口元が、吹っ切れたように不敵な笑みを浮かべている。

隊長たる者が、作戦の場を中座する。

その勝手な振る舞いは、また昔に戻ったようだ。

ただ、あの頃とは違う。

並ぶ三人の姿を眺めているうち、マルリツパは理解した。

もし自分が、戒の立場にされたなら、同じように激昂するに違いない。

「二人とも！」

何をやってるんですか！！」

室内で、事務官の助けを求める声。

場を繋ぐので精一杯だったのだろう。

マルリッパは大急ぎで部屋に戻ると、卓に向かい、声通機に口を寄せた。

「…すみません、戻りました。」

《マルリッパ少尉、どこからか増援を求めることは出来ないかしら…。》

やはり現状の戦力では…》

フィンデルの声に頷き。

「そのことですが、急遽…二名参加に。白兵戦向きの人間です。」

マルリッパは、窓ガラス越しの宵闇を眺めながら答えた。

「どんな策でも命じて下さい。

…全員、貴女を信じていますから。」

言葉と共に、自然と涙が浮かんできたのは、殴られた頬の痛みだけではなかった。

第四章

第七話 『三つの嵐』

了

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

4 - 8 「兵士に挽歌 鳥には鎮魂歌を」(上)

This story is a thing written
by RYUU

Air・Fantagista

Chapter 4

『Coming in flight warship age』

The eighth story

'An elegy and Requiem'

勢いよく排気する、二機の戦闘騎。

瞬時に熱気と化す、格納庫で澱んでいた冷気。

これに絆され、背中を押されるようにして。
再び、空という戦場へと赴くのか。

戒は焦れるような興奮に、胸を高鳴らせていた。

「逃げるなら今のうちだぞ！

途中で帰りたくなっても、降ろしてやらねえからな！！」

プロペラ越しの向こう。

機体の発する轟音に負けないよう、声を張り上げるのはコルツ。

その挑発的な言葉を、壁際で座り込んだザナナは微動だにせずを受け流すと。

マルリツパが巨体を揺らしながら、出入り口に姿を見せた。

件の飛翔艦を造った会社の長。
イマツエグを伴って、である。

「作戦は決まったか！？」

「うん。」

フィンドル大尉が言うには…」

コルツの呼びかけに対し、少し目線を落とすマルリツパ。

「おそらく相手方にも、相応の航空戦力が予想される。

それを一点集中で突破した後、降下部隊による敵飛翔艦の制圧。
常に攻勢を心がけ、相手に先んじるよう行動せよ、と。」

「上等だ!!」

コルツは両の手を打ち鳴らし、酷な伝令を嬉々として歓迎した。

「…二人とも、本当にいいの？」

「何だ？」

向けられるマルリッパの問いに、顔を上げたザナナが平然と返す。

「この作戦、とても無事で済むとは思えんということだ。
今のうちに、連れの女にでも別れを告げておけ。」

「連れの…誰だって？」

さらなる戒の言葉に、訊いたコルツの方が目を丸くする。

「まあ……それくらい、絶対に戻ってくるという気持ちが必要かもしれないよ。」

そこでイマツエグは気を利かせ、笑顔で取り成した。

「どうぞ、今作戦は失敗を恐れず、大胆に決行して下さい。
後曲に控えた我が社の艦が、必ずや王宮を死守してみせます。」

「まったく……流石だな。」

さらに胸を叩きながら続けられる彼の滑稽な身振りに、コルツは笑う。

「そう言えって頼まれたんだろう?」

「……まあ。」

凶星を突かれ、イマツエグは正直に声を洩らした。

彼等は優秀な技師だろうが、実戦に関しては素人。

だが、フィンドルは戦場に赴く者達の憂いを晴らすため、わざわざ芝居まで打たせているのだ。

「外面では頭を下げてるように見えても、裏では操って従わせるのが、あいつの常套手段よ。」

まったく、相変わらず悪知恵が働く女だ。」

二人のやりとりを眺めながら、齒を剥き出して呟く戒。

「無事に帰って来たら、あいつにタカってやろう。」

それでようやく、この骨折りの帳尻が合うってもんだよな。」

彼が同意を求めると、ザナナは呆れたように再び頭を垂れ、肩に担いだ白槍を揺らした。

「…最終確認だ。

目標について、さらに詳しく知っておきたい。」

「はい。」

唸り上げる戦闘騎から一旦離れ、コルツからの改まった問いに、イマツエグは襟を直した。

「艦名：グレーリ・オーサ。

我が社として初、民間用として開発した当艦は、非常に単純な機構であり、万人に快適な運用をもたらすことでしょう。

兵装も両翼に搭載した機動型主砲二門にのみに絞り、前方320度を完全にカバー！。

…裏を返せば、真後ろにあたる防備が無いため、攻めるならばここがポイントとなります。」

彼の講釈に、眉をひそめる面々。

その微妙な空気に、イマツエグは思わず目を剥いた。

「もちろんこれは、あくまで初期プランの話ですよ？

オプションとして、後部の空きスペースにも砲座や武装は搭載できます。

が、これ以上は別料金となり…」

「見事な話をありがとうよ。

ためになったぜ。

これがお互い、商売の席じゃなけりやあな。」

セールスと見紛うイマツエグの流暢な話を、戒は途中で茶化して終わらせた。

「早い話、死角に回り込んで、中に突入すればいいわけだ。
…しかし明らかに奪取が困難な場合、撃墜する予定に変更は無い。
全員、それだけは頭に入れておけ。」

咳払いして、皆に告げるコルツ。

「一応、聞くが…。」

あれを機銃レベルの武装で墜とすのは、困難だな？」

「我が社の商品は、搭乗者の安全第一がモットーです。
耐火・防水に秀でており、その装甲は重厚にして堅牢。
その程度では、びくともしないと思えますが…。」

彼からの問いに、イマツエグは大いに自負を含ませた答えを返す。

「その場合、最後の手段として、僕の機体をぶつけるよ。」

搭載火力に秀でる重戦闘騎、リッツアー・ゲルガ。
マルリツパが、その自機を視界に収めながら呟いた。

「ならば、不笑人^{ふせうじん}と一緒に乗ってくれ。
そうだった時は、二人でオレの機体に飛び移るんだ。

…かなり太っていて重たい荷物だが、出来るか？」

コルツの冗談めいた言葉に、特に深く考える素振りもなく、豹頭は無言で頷く。

「これが艦内の図面です。

突入の際、参考にして下さい。」

そしてイマツエグから差し出される、一枚の紙切れ。

だいぶ簡素化されているが、そこには艦の侵入経路からブリッジへの道筋まで、しっかりと記載されている。

「あんな代物を空中で奪い返すなんて、アホみたいな作戦だが…。こつやって目に見える形になると………なんというか、実感が湧くな。」

戒は喉を緊張で鳴らし、その紙を奪い取るようにすると。

網膜にまで焼き付けるかのように、必死に睨み合いを始めた。

マルリップは安堵する。

若い士官達と問答するよりも、遥かに話が早い。取るに足らない、意思の疎通が嬉しかった。

あとはただ、先に気が滅入ってしまわぬよう、何も考えずこの緊迫した空気に身を任せるだけだ。

出撃まで、あとわずか。

今が最期の安らぎの時間となるかもしれないのだから。

「……親父は何処に行ってる？」

それを意識したのか、皆から離れた位置で、コルツはイマツエグに訊いた。

「こちらへ向かうよう私に指示を出された後、別れたきりです。」

少し迷いながらも口を開く相手。

「……やはりそうか。」

あいつも他の政治家や貴族連中と同じだ。

いつもいっつも、国のためにと偉そうにふんぞり返っちゃいるが、肝心な時になると自分だけ助かるうとしやがる。」

その愚痴の最中。

低く屈みこんだイマツエグが、戦闘騎の先端部に触れるのが見えた。

「おい！」

オレの機体に勝手に触るな……！」

「平気ですよ。」

この『クモサ・クアターナ』は、私の設計ですから。」

「お前が…造ったのか？」

「ええ、とても懐かしい。」

男爵の依頼で製作してから、どのくらい経ったかな。」

イマツエグは機体下部に顔を潜らせて、いやに嬉しそうに笑った。

意外なところで、人は繋がっているものだ。

否。

今の飛翔艦騒動も、元を正せば親父の繋がりではないか。

別段、この巡り合わせは、不思議なことではない

「しかし…随分と、操縦席まわりに手が入っているようですね。」

「元々の装甲が厚すぎたからな。
軽量化するため、すぐに交換してやった。」

「それは良くない。
機体重量やバランスは、全て計算して作っているのです。
これでは、本来の機体の力を出せていないでしょう。」

「……そういうものか？」

コルツは呻く。

「軽いことが、即、機体速度に繋がるわけではありません。

形状や重さ、空気抵抗や風の流れなど…技師は、全ての要因を計算してモノを造っているのですよ。

…10分だけ時間を下さい。

現状で、最適の状態にしてみます。」

「それは助かるが…」

出撃間際に、よく知らない人間を自機に触れさせるのは如何なものか。

だが、そんな複雑な面持ちの彼を顧みず、既にイマツエグは腰に下げた工具を取り出していた。

「機械だって、まるで人間のように複雑なものですよ。

男爵も無愛想ですが、あれでなかなか優しい一面もありましてね。

」

早速、作業に取り掛かりながら語る彼。

「搭乗する者が必ず生きて帰れるような機体を、あの人は依頼してきました。

装甲を厚くしたのは、そのためでもあって…」

「あの野郎!!」

そこで色をなして、コルツは吼えた。

「隊長は、部下を何人も殺す運命にあるんだ！

自分だけ、のうのうと安全な機体に乗っていられると思うか！！」

「わかります。

ただ親が子を思う気持ちとは……」

「五分だ！

それで調整を終わらせる！！」

程々に背を向け、言い放つコルツ。

イマツエグも慌てて命に従い、口を閉ざして集中する。

「貴様らも準備万端か！？」

「夜間の飛行だから、合図用の照明は忘れないようにしないとね。」

迫るコルツに、マルリツパが床に置かれた木箱の中身を漁りながら、和やかな口調で言う。

「……何だ、そのヒモは？」

だが戒は、彼が用意した道具類の一つに目を付けて、思わず呟いた。

「縄ばしっ」。

突入時に必要でしょ？」

「お前つ、ふざけんなよ！」

そんな安っぽいボロで、飛翔艦に乗り込ませる気か！？」

「急場で、まともな装備を求めるな！」

それにこの間は、もっと乱暴なやり方してたじゃねえか！！！」

マルリツパに変わり、コルツが反論する。

あの時は土壇場の機転で、命綱ひとつで相手飛翔艦のブリッジに直接飛び込んだのだ。

今思えば、無茶をした。

三人は急に笑いが込み上げて、抑えることが出来なかった。

笑うという感情の無いザナナも、快い空気を肌で感じ。

イマツエグは脇目を細める。

「まあ、あれに比べりゃあ、今回の作戦はハナクソみてえなものだな。

楽勝だ。」

「……だろ。」

やがて、ふてぶてしく返す戒の修道着の胸に、コルツは軽く拳を当てる。

この部隊には、全てが杞憂に思えた。

自分の求める理想とは少し違うが、不思議と充実感に満ちている。

（いつだって、死ぬ覚悟で戦ってきた。

敵を殺すのだから、代償として当然だ。）

踵を返したコルツは、振動する戦闘騎に歩み寄り、胴体に触れた。

（お前は、そんな人殺しの道具。

…価値の無い命を守る役目なんて、似合わねえ。）

自分の内と同様、愛機も熱を帯びている

エア・ファンタジスタ
A i r ・ F a n t a g i s t a

・

第四章

飛翔艦時代到来

・

第八話 『兵士に挽歌 鳥には鎮魂歌を』

1

《 戦闘騎は、無事に飛び立ちました。

残念ながら、三文芝居はアッサリと見破られましたかね。 》

事務官に席を譲られて、報告する声はイマツエグ社長のものである。

「色々とお手数をかけてすみません。

…他に何か、周辺の状況で気付いたことがあれば、教えていただけませんか？」

《……。》

フィンドルの少し頼りない語句に、返される沈黙。

「恥ずかしながら、今の首都周辺の事情には、あまり詳しくないのです。」

住居はありますが、任務で帰ることが少なかったため……。」

視線を泳がしつつ、彼女は卓上の声通機に向けて言う。

《……そういうことでしたか。

ええ……大丈夫……だと思います。》

がさがさと地図の音を立て、自信なさげに答えるのは事務官だった。

「ほんの些細なことでも構いません。

気がついたことがあれば何でも、遠慮なく報告して下さい。」

フィンドルはそれを敏感に読み取って、念を押した。

小さな見落としても、現状では命とりになりかねない。

《首都の西方では、例の大会が続行されておりす。

現在そちらがどうなっているか、関係者らも詳しく把握できておりません。

おそらく参加選手達にも、この状況は伝わっていないでしょう。

》

イマツエグは焦りを帯びた口調で言う。

それはフィンデルも頭の片隅に置いてある事柄だった。

ルベランセで共に戦った彼等の所在や、安否が気にならないわけではない。

だが今となってはどうにもならないこと故、意識的に考えないようにはしていたのだ。

《実は、そこで賞品になっている飛翔艦が、もう一隻余っており
ます。

別の会社ですが、そちらにも応援を要請した方が良いでしょうか
？
》

「…やめておきましょう。

彼等が中王都市のために協力してくれるとは限らないですし、あまり大ごとにすれば、それこそ混乱を招きかねません。」

フィンデルは思案しながら答え、再び小さな地図に目を落とした。

「懸案事項は、そのくらいかしら…」

何か忘れてはいまいか。

しかし、このような薄っぺらな二次元の対象が相手では、想像力を刺激されないのが現実である。

「…大変。

私ったら同業者から、お客さんの横取りをしてしまったわ。

『おおわし大鷲の瞳』規約、第三条の重大な違反ね。」

そこでイメルゲが、自身の両手を重ね。
間の抜けた声で、のんびりと呟く。

幸い、声通機には届いていないが、視線を向けられたオーロンは
噴き出していた。

国家が危機に瀕している最中に、そんな悠長な言葉が聞けるとは
思わなかった。

「少し休憩にしましょう。

また、こちらから連絡します。」

フィンデルも適度に気が抜けたようで、声通機に告げ、姿勢を若
干楽にする。

「事の発端の…あの通告。

彼等が名乗った、『コーラル救国軍』というものをご存知ですか
？」

そして彼女は椅子を引き、記者であるオーロンに自然と訊いてい
た。

「聞いたことはありませんねえ。」

対し、肩をすくめて答える彼。

「そもそも、この一連の行為の益が見当たらない。
彼等は、いったい何の目的があつて、こんな真似をやらかすんで
しょう。」

「単に飛翔艦が嫌いなだけじゃない？
あんな巨大なものが空を飛ぶのだもの。
新しい時代に追従できない頭の固い連中の目ほど、脅威に映るん
じゃないかしら。」

彼の言葉に、イメルゲの憶測が続く。

（今回の件、中王騎士団は関係ないと信じたい…。
自国の土地や王宮を狙うなんて、あまりにも…）
フィンデルは過去に思いを馳せながら、小刻みに首を左右に振つ
た。

彼等は今まで、背信者のみでなく、その障害となつた軍の一艦隊
までも容赦なく葬つてきたではないか。

「今の先生の話で思い出した。
飛翔艦に対して、複雑な思いを抱く連中は………確実にいると思ひ
ますねエ。」

そんな中、低く呟いたのち、言葉を濁すオーロン。

「アルドの叛乱後期、飛翔艦の導入による殲滅戦。

あれは筆舌に尽くしがたい、陰惨なものでしたよ。」

「では、前戦争の敗残兵や、蛮族の類ということに!？」

思わず、フィンドルは口に出してしまった。

今の騎士団は、炎団をはじめ、立場・組織の垣根を越えた関係を四方に張り巡らせている。

きつと、彼等のような人種を焚きつけるのに秀でた、おぞましい何者かが、その中核に存在しているのだ。

「…すると彼等の目的は、中王都市の現体制に対する批判。

これが最も有力な線かしらね。」

イメルゲは、長い前髪を弄りながら呟く。

「摂政のゼンに敵意を抱く者ですかい？

…自分が戦場に派遣された時、実際に会った経験があるんですよ。

あの当時、奴は従軍医師でしたかね。」

その言葉尻を掴まえて、オーロンは強い口調で言った。

「あら、凄い人と知り合いじゃない。」

「会ったと言っても、袖が触れた程度ですぜ。」

驚く彼女に、特に自慢する素振りも見せず、片方の瞼を閉じる彼。

「アルドの叛乱の終結後、奴は経済学者となり……今の地位に転じたようですが、そこから中王都市は一層に拡大政策を執っている。良くも悪くも、経済の発展を促してきたわけです。」

それで国民の暮らしが向上するってのなら、私は文句はありやせん。

「少なくとも、あの戦場に触れてきた者にとっては、豊かさこそ真理だ。」

そんな考えに行き着くのが、自然でしょう。」

オーロンは持論を語りながら、編集長の苦い顔を思い浮かべた。アイアンウォー紙で、自分がゴシップ程度しか任されないのも、現体制に肯定的なため面白みに欠けるからだ。

「……とまあ、悪党の素性を詮索してもしょうがない。」

手の空いている人間は、今のうちに上で食料を調達してきますかね。

今日は、どうやら徹夜になりそうだ。」

そして高い天井を親指で指し、欠伸をしながら扉に向かうオーロン。

彼の残した言葉どおり。

険しく、長い深更の様相を呈している。

虫の音ひとつ入らない。

密閉された空間に押し潰されそうだった。

これから目視できないところを、様々な情報を元に間接的に見通して決断を下さねばならない。

自分にとっての未知の指揮が、幕を開けようとしている。

森林に息づく自然。

それが『生』をイメージするところならば。

カジエットが選んだ地形。

露出した岩肌の丘陵地は『死』だと、パンリは感じていた。

この競技にさえ使用されず、人が寄り近くなっ
てなっ
て久しい、
採掘用の小さな洞穴群、

重畳とは縁遠い場所。

彼女が何を思い、ここで佇むのか。

その真意は一切知らされないまま、時は過ぎた。

他の参加者は、どうなっただろう。
もはや、喧騒は耳に入らない。

いずれ時間を数えることも忘れ、瞑想と居眠りの中間のような心持が訪れた。

そうになると、わずかな風の変化でさえ、感じられるようになる。
錯覚かもしれないが、自分の感覚が鋭敏になっていくのだ。

パンリとカジェットが、僅かな音の方へ顔を向けたのは、ほぼ同時であった。

そこに立ちつくしていたのは、斥候として放っていた彼女の手下達。

顔を向けた二人と同様、ベルツサスとの連絡が途絶えて久しいらしい。

定時を決めて互いに接触を計っていたはずの彼等の焦りの表情が、それを如実に表している。

いてもたってもいられず、遂にカジェットの元に駆けつけたといったところだろう。

「あの人が、他の参加者との戦いに巻き込まれた可能性もあります……。
早く探しませんと……」

「その前に、だ。」

手下の一人が進言した直後、カジエツトが制止する。

「どうやら、先に兄貴の方の面倒を見ねえといけねえようだな。」

顎先を向けた、岩山の頂。

月光に照らされる、三白眼の凶面。
コルスス。

「……！」

そこで初めて、事態の深刻さに気付いたカジエツトの手下らが狼狽する。

自分達を囲むようにして、さらに二十人超の人影が配置されていたのだ。

「……手間が省けて助かったぜ。」

どうやって、ここへ来て貰おうか、考えていたところだ。」

だが、カジエツトは涼しい顔を崩さなかった。
歓迎の挨拶とばかりに、軽口を叩いてみせる。

「手間が省けただと？
強がりも程々にしやがれ！」

嬌声が夜空に響いた。

「最高のタイミングで、最高の結果を導く。

この『かけひき』に関しちゃ、オレの右に出る奴はいねえんだ！」

そんなコルススが、意気揚々として放り投げる物体。

砕けた風来棒。

「カジエット」セイルクロウは、二代に渡って弟を狂わせやがった
おかげでな。

このざまよ。」

さらなる合図で連れられてこられたのは、負傷したベルツサス。
もはや自分の足では立てないほど疲弊しきっており、両腕を二人
がかりで取られ、ただ引きずられている状態である。

そんな彼の髪を掴み上げ、コルススはせせら笑った。

「…何故…！？」

呆然と見上げるパンリの横で、カジエットの表情が凍りつく。

理解が出来なかった。

彼等に単独で戦いを挑むほど、ベルツサスは動揺していたのだろうか？

それとも、アルドに師事したという先代のいきさつを話した自分が、彼を追いつ込んでしまったのか？

混乱めいたものが、頭の中に一気に広がっていく。

「安心しろ。」

命にかかわるほどの怪我じゃねえ！

少し痛い目をみせてやったただけだ！！」

そこでコルススは握っていた弟の髪を放し、叫ぶ。

「命まで取らないところを見ると、てめえにも肉親の情が残っていたようだな……」

「どう思おうが勝手よ！

だが、お前に『効く』と思つてなア！！」

そしてカジェットの減らず口に、威勢良く返される言葉。

「この種の手が、あたしに通用すると思つてんのか……！

おい！！

降りてきやがれ！！」

「充分、効果あるようじゃねえか。」

激昂する彼女を見るだけで、コルススは悦に入ることが出来た。

鬱積していたものが、晴れる心地。

快樂の極みである。

「てめえらのやり方は、よく分かった…。

全員…覚悟しておけよ…。」

一方、堰を切った彼女の怒りは、手当たり次第、目に映る全てに向けられている。

たじろぐコルススの手下達を見て、パンリは思う。

カジェットは強い。

だが、この害意を向けられたら、相手は誰でも必死になる。

罨だ。

コルススならば、平然と手下を盾にして、いずれ疲れ果てた彼女の間を突いてくるに違いない。

「……パンリ。」

だが内心、怒りにたぎっているはずの彼女が小声で呟いた。

誰からも見えないよう、手を腰元で振る合図。

逃げるように。
そう示している。

（あたしがお前を戦いに加えようとしなのは、本当は、経験の差とか…そんな理由じゃない。

…周囲を巻き込まずに戦うような、器用な真似できねえだけだ。）

彼女は、地に伏したままのベルツサスに目を向けた。

自分の怒りに任せた、源法術による戦闘が展開されれば、身動きのとれない彼が巻き込まれるのは確かだろう。

だが元より、怪我を負って動けないような者を救うことも、かばうことも、この状況では出来はしないのだ。

彼には恨まれるだろうが、今のカジエツト空挺団に所属していた運の悪さを諦めてもらうほかない。

「…あたしが教えた術は、好きなように使え。
元の仲間の所に帰るんだ。」

少しずつ前進しながら、小声は続く。

だが、せめて無関係の彼は無事に帰りたい。
最後に残ったのは、そんな切なる願いだった。

（すみません師匠…）

やっぱ……こじれちまったものは、直せねえみたいです。）

目を瞑る。

初代カジエットの築いた全て。

その地位を継いだ自分が、壊して良いはずはない。

だが、他に方法は見出せなかった。

師は笑うかもしれないが、それでも自分なりに必死にもがいた末の結果だ。

背後で、砂利を踏みしめた音が聞こえる。

パンリが傍を離れる音だろう。

それを皮切りにして、瞼を開く。

初撃で決める。

はじめから攻勢に出ねば、この人数は捌ききれない。

半数を削ってからが本当の勝負。

そこからは、自分にはこの地形を利用した、対コルスス用の策がある。

だが。

そんな風にカジエットの頭に巡っていた全ての血流は、一気に全身に霧散した心地だった。

自分よりも前に出ているのは、もう去ったかと思っていたパントリーの姿。

「貴女の言つとおり…」

自分よりも何回りも小さな少年。

「学んだことを、好きに使わせていただきます。」

月光の下。

両者が、相まみえている。

初めて彼と会った時と全く逆の光景に、時が遡る。

今度は自分が、傍観者だった。

小鳥は、枝の端や木々の間で、平穩に囀^{さえず}っている印象がある。

だが、その実。

それらは、主に茂みや藪の中で日々を過ごし、耽々と獲物を待ち狙っているものだ。

「……何をやっていやがる。」

下から真っ直ぐに向けられる少年の眼差しに対し、コルススは苦々しく呟いていた。

「小僧の方は、もうお呼びじゃねえんだ。

さつさと尻尾を巻いて、この場から消えろ！」

カジェットの前に出たまま微動だにしない彼に向けて、今度は自身の頭蓋にまで響く怒声を放つ。

「…私と勝負をして下さい。

この前、貴方には殺されかけましたから、そのお返しをしなければ、こちらにも気が済みません。」

だが、胸を疼かせる瞳は背かない。

臆すどころか、逆に粹がった言葉が返される。

「…誰が…誰に…仕返しだつてえ!？」

コルススは込み上げた笑いを堪えきれずに、思わず嘖き出した。

「それとも、最近決闘を申し込むのが流行はやりなのか!？
なあ、おい…」

「私は源法術を嗜たしなんで、二日ほどです。」

冗談を交える相手に構わず、続けるパンリ。
あまりに正直で慇懃いんぎんな独白に、周囲は水を打ったように静まり返る。

「これから新たに頭領を狙わんとする人間が、こんな素人に喧嘩を
売られては、面白くないでしょう。」

器の小さい人間だと思われたくない、違いますか?」

「……。」

コルススは余裕の表情から転じ、口を真一文字に結んだまま、その
戯言たわごとに聞き入っていた。

挑発であることは明白。

両者の力量の差も歴然としている。

相手にする必要など全く無い。

だが。

今のコルススは確信を持って、その決断が下せなかった。

先刻、弟のベルツサスとの苦戦の様を、手下共に見られている。

相手の質がどうであれ、理由も無く決闘を断れば、彼等に対して示しがつかない。

団内での統率を、僅かでも失いかねないのではないかと疑った。

「恐いですか。」

私を相手に、万が一でもあれば。」

その心を見透かしたように聞こえる、パンリの言葉。

笑う者はいない。

吐息すら静まり、岩陰に潜む蛇蝎だかつの動きさえ耳に届きそうだった。

「…何を考えてんだよ。」

やがて敵方の気持ちを代弁するかのようになり、パンリに声をかけたのは、背後のカジェットである。

「逃げろって命令したろ。」

…おかげで、奇襲が台無しだ。」

「貴女が…冷静でないからです。」

訝る彼女に、パンリが目線いぶかで示す。

そこにはコルススによって投げてよこされた、砕けた風来棒。

「布の結び方からして、あれはベルツサスさんの物ではありません。一方的に私刑にでも遭わせたよう見せかけ、貴女を怒らせようとしているのです。」

「そんなことは、どっちだっていい…！」

あいつがやられたのは、事実じゃねえか…！」

「ならば、向こうの人間が、ほとんど無傷でいるのは何故ですか。」

パンリの言葉に促され、カジェットは改めて周囲を見回した。

確かに、コルススの手下共に怪我を負っている者はいない。

戦いがあつた痕跡が全く見られないのだ。

ベルツサスの力をもってして、彼等に埃さえつけられないのは、甚だ妙である。

「…まさか、あいつ……初めからコルススだけを狙って…！？」

今度は視線を上げ、伏している彼を視界に納めて呻く彼女。

「彼は師が残してくれた空挺団を、貴女のように諦めていない。」

……解りますか、この想い。」

「お、お前こそ、知った風な口を！！」

自然と口をつく、むきになっていることを自覚できる言葉。
紛れも無く、冷静でない証拠である。

「確かに、あたしは今、全部をブツ壊そうとしていたさ。
よくて五分五分の賭けだが……それでも仕方ねえと思っていた。」

それを悟り、カジエットはやがて虚ろな笑みを浮かべた。

「本来なら、あたしが始末をつけなきゃならねえ問題に、お前らは
そうやって、あえて土足で上がりこんでくるわけか。
まったく身勝手な奴等だぜ。」

「申し訳ありません。
でも……」

嫌味のたつぷりと効いた言葉に、パンリは暫く間を置き。

「この感情に従う自分を、どうか許してください。」

胸元を強く掴みながら頭を下げる。

カジエットは大きく息を吐くと共に、いからせた肩から力を抜いた。

「いいだろう…混乱しきったこの空挺団を再びまとめるには、決闘こそ相応しい！」

だが、大将の私が出るまでもねえ。
弟子が代役で充分よお！！」

そしてパンリの背を思い切り叩き、周囲に響き渡る、気風の良い大声を放つ彼女。

対し。

コルススの顔面には、一気に憤怒の血管が浮き上がった。

「…いいのか？」

大層、その小僧がお気に入りのようだが……そいつは一度、お前を裏切ろうとしたことがあるんだぜ。」

彼は激昂を必死に抑えながら、口を尖らせて言う。

「以前、オレと遭遇した時にな。

『自分は無関係です。見逃してください。』ってよお。
そんなカス野郎を、本気で信じられんのか？」

パンリは口をつぐんだ。

事実には、言い訳もしようがなかった。

「あたしがロクでもない性格だったのは、自分が一番良く知ってい

る。

いつ見限られても、無理はねえ。」

だが先んじて返し、力強く彼の肩を寄せるカジェット。

「しかし、こいつは『今』、ここに残ってくれている。それだけで充分だ!!」

「小僧が負けりやあ、お前はオレのものになり、カジェット」セイ
ルクロウの名を譲る。

この条件を飲むのなら、あえて挑発に乗ってやってもいいがな。」

「発想が、細々と小せえんだよ。」

いつそのこと、ここで本当に全ての決着をつけてやるうぜ。」

彼女は不敵な笑みと共に、筒と腕輪、リングの類を取り出して答えた。

「そつちも、この大会に関係してるものを全部出せ。
勝った方が総取りだ。」

ゴールするのに必要な通行証だつて、ここにある。」

一挙一動に、皆の耳目を集めていた彼女だが。
その頭は、いよいよ狂ってしまったのではないかと、誰もが思った。

パンリと呼ばれている少年。

彼は、大会のスタート地点の村での襲撃の折、カジェットが偶然に出会った者だということは周知である。

あの時、恐れおののくことしか出来なかった、ただの子供風情では、とてもコルススの相手にはならないだろう。

獣の前に生肉をブラさげれば、どうなるか。

結果は、これ以上ないほど目に見えているではないか。

彼女が自信をもって、彼に全てを託す意図が掴めなかった。

否、きっと何も考えていないに違いない。

二代目カジェット「セイルクロウには、コルススのような狡猾さが圧倒的に欠けている。

己の嗅覚だけで生きているためか、他者に対する意識や配慮も薄い。

それが自分達を、逐一不安にさせてきたのだ。

「今の話、一字一句逃さず聞いたか？

てめえら！！」

皆が暗沌とする思いの最中、コルススが意気揚々として叫ぶ。

後半戦を出遅れていた彼にしても、カジェットが出した条件は魅力的だった。

二分して相争い、疲弊しきった空挺団の再興には、新しい飛翔艦は不可欠である。

「言っておくが、こいつは遊びじゃねえ。

正真正銘、オレ達の未来を賭けた決闘だ！！」

さらに大声を張り上げて、右腕を大きくぶん回す彼。

「明かりを掲げ、この場を囲め！！」

周囲の殆どは彼の手下だが、カジェットも構わずに命を下した。
その威勢に、彼等も従うほか無い。

にわかに騒がしくなる周囲に、地に伏していたベルツサスが意識
を取り戻す。

彼は半分塞がった目で、三人の姿をはっきりと視界に納めた。

世界は、公平を拒み。

どうしようもなく、不公平を愛する。

種族や性別、生まれや貧富の差。

だが、たとえ恵まれた側に生まれても、薔薇色の人生が送れると
は限らない。

カジェットⅡセイルクロウは、二代に渡り、従者達と心の隔たりがあったと言わざるをえない。

この騒動を巻き起こしてしまっていることが、良い証明だ。

自分は彼女らと違い、凡夫で良かったと思う。

才があるからこそ他者と相容れず、生きる枷となることを、傍で散々眺めてきた。

そして才が無いからこそ、強者に従事し、それを補佐することが自分の身分に相応なのだと確信が持てる。

だが、個々の器をはみ出した行為に対し、天は的確に罰を下すのだろう。

先代の死の真相。

その真意を知った時。

自分は、分不相応の行動をしてしまったのだと痛感した。

最も目を背けたい構図が、そこにはあったからだ。

我が兄と対峙しているのは、こともあろうに、あの少年

少年の習得の早さには、驚いたものだ。

つい最近まで初歩さえ出来なかった彼が、源法術の数々を貪欲に吸収していく様を見るのは、少し複雑な気分だった。

きっかけを掴んだ後は、まるで坂道を下る雪玉のようである。
恐るべき素質が、その小さな体に眠っていたものだ。

だがベルツサスは、不意に恐ろしくなったのを憶えている。

最終的に、肥大していった雪玉はどうなるのだろう。

どこかの平地で、大きいまま落ち着くか。

そのまま加速して、何かに衝突し、粉々に砕け散ってしまうのか。

この世で圧倒的に多いのは、後者だと思った。

「…見る。」

代わりをあんな小僧に任せるなんぞ、皆が呆れ果てている。

敵、味方も含めてな。」

「…彼の力を…あまり見くびらない方がいい…。」

才能は…二代目に匹敵し…その資格は充分にある…。」

コルススが語りかけるのを、ベルツサスは地に伏したままで返した。

「いい加減、夢から醒めてくれ。
弟よ。」

哀れむように、しみじみと呟き。
その顎を持ち上げるコルスス。

「そもそも何故、歯向かったお前が、まだ生かされているのか解るか？

肉親だからじゃねえ。
その力量を買っているからだ。」

彼の表情は、不思議と悪辣さが失せていた。

「オレが本格的に取り仕切れば、組織は今よりもずっとデカくなる。
その時に、他にも手下共をまとめられる優秀な人間がいなくちゃ
あ、不便だからよ。」

「……私は…それほど優秀ではない…。」

「謙遜するなよ。
お前は教え上手だし、部下の信頼も厚いことも知っている。
それでいて、自分を磨く努力も怠っていないようだしな。」

袖を捲くり、先ほどの激戦による痣を撫でる様子に、遺恨は無い。ただ、続けられる甘言に、ベルツサスは言い知れぬ『むず痒さ』を背筋に感じた。

「頼む……。」

あの子の命までは奪わないでくれ……。」

その一縷の望みにすぎるようにして、ベルツサスは懇願した。

「矛盾した願いだな。」

あの小僧の才能を認めているんだろう？」

「それは……長い目で見た時の話だ……。」

……初めて風来棒で空を飛んだ時、どう感じた！？

何でも出来るような、不思議な錯覚に陥らなかったか！？」

鉄面皮の弟が、珍しく形相を必死に変えて、前傾になって訴える。

「きっと今の彼も、それと同じだ……。」

急に力を得、一時的に気が大きくなっているにすぎない……。」

その才能と若さゆえ、思い上がっているんだ……。」

「ああ。」

確かに、空の飛び方を覚えてた頃の頃は、どこまでも行けるような気がしたな。」

口角を歪めるコルスス。

その顔が一瞬、懐かしそうに。
また、穏やかになる。

だが、行き着いた先は、氷のように凍てついた表情だった。

「……やはり、全ての元凶は、初代カジエツトⅡセイルクロウだ。
さつさと引退して、オレに跡目を継がせ、あの女とお前を補佐役
に据えてさえくれれば……こんな事にはならなかった。」

三人であの頃のまま、もっと高いところまでいけたに違いねえ。」

「そうだ…。」

これは、あくまでも我々の問題……。
関係ない人間の未来までは…奪わないでやってくれ…。」

もはや反抗の意思も無く、単純に頭を垂らすベルツサス。

「もしも願いを聞き入れてくれるならば…お前が作ろうとする組織
に、この身を捧げても構わない…。」

二代目にも掛け合って、和平の道を選ぶよう勧める…。
だから…。」

「ダメだな。」

だが、コルススは顔を寄せて言い放った。

「今さら仲直りだなんて……お互い、そんな軽い覚悟で争っていたわけじゃねえ。」

命のやりとりを始めたら、どちらかが果てるまでよー!!」

瞬時に、返した手の甲で殴りつける。

ベルツサスの紅い飛沫が、乾いた地面に飛び散った。

「あの小僧が無惨に殺されるのを見て、あの女につき従っていたことを後悔しろ！」

オレが欲しいのは、その絶望の果てに、生まれ変わったお前だ。現実を直視し、新たなカジェット＝セイルクロウとなるオレを祝福できるようなー!!」

「……待て……！」

まだ食い下がろうとするベルツサスを、傍にいた手下達が強引に地面に押さえつける。

口を塞ぐためではない。

彼がこれ以上殴られないよう、かばうためであった。

その健気な様子を鼻で笑ってあしらい、コルススは緩やかな斜面を下りる。

「代役を立てた人間に、途中で手を出されちゃ困るからな。お前の動きは、封じさせてもらう。」

彼の指示によって、左右からカジェットへと恐る恐る近寄る複数

の手下達。

「ま、当然だ。」

あからさまに畏怖した彼等の様子に苦笑しながら、彼女は自ら両手を背に突き出す。

そこには縄がすぐにかけられ、厳重に締められた。

「……すみません。」

自らが起こしたその状況に、パンリの表情に罪悪が滲み出る。

「今さら、そんな顔すんなよ。」

それより、お前にも何か策があるのかもしれないが……とりあえず、あたしの奥の手も授けておいてやる。」

だがカジェットは、軽い調子で彼を呼び、他の人間に聞こえないよう耳打ちをした。

「……わかりました。」

パンリはすぐに頷き、無数の穴の開く周囲に再び視線を移す。

「だからこそ……この地を選んだのですね。」

「今のお前なら、あたしと同じことが出来るはずだ。」

カジェットは断言した。

だが、その笑顔の裏では、違いすぎる土台に悲観する心もある。

やはり実戦と頭で浮かべた予測とは違う。

それを埋めるものこそが経験なのだ。

無論、パンリも解っている様子で、傍で屈みこみ。

緊張を紛らわすため、靴紐や服を固定し直している。

「そうだ、もう一つ重要なことを言い忘れてたぜ。」

…これは師匠から聞いた話なんだが

「

強張った様子の小さな背に向け、彼女は付け加えた。

「大悪名、アルドⅡセイングウェイも『垂耳』だった。」

その言葉に驚き、頭を上げるパンリ。

既にカジェットは背を向けていた。

彼は自分の頬を両手で強く張り。

岩に立てかけていた風来坊を手にとって、接近する足音に視線を上げた。

「……おい。」

戦う前に、一つ聞かせてくれよ。」

対面のコルススが、両の手首をほぐしながら関節を鳴らす。

得物を一切持たないのは、せめてものハンドェのつもりだろうか。

否。

彼がリーダー・ブレスレッドを外していることは、この一戦に油断が無いことを示している。

「お前の切れた足は、トカゲの尻尾みたいに生えてくるのか？」

冗談を吐き続ける唇。

「だとしたら、少し面倒だと思つてよオ。」

絶えず語りかけてくるのは、警戒心があるという顕^{あらわ}れだろう。

かつて自分に負わせた傷が、跡形も無くなっていることに疑念を抱いているのだ。

「もう一度、切つてみたらいかがでしょう。」

そうすれば、解ると思いますよ。」

パンリは危険を承知で、その質問をはぐらかした。

「……今度は、素っ首を飛ばしてやる。」

そうすりゃあ、もう、その舐めた口を聞くことはねえ。」

一方的に言葉を締める相手。

燃え盛る松明^{たいまつ}で出来た円陣が、彼の無表情を八方から照らしていた。

普段は平和な領空を、かつてない速度で駆け抜ける、たった二機のコルツⅡデスタロッサ隊。

戒は修道着越しに感じる寒気に、体が堪えるのを感じた。

だが、脇に並んだ機体にマルリツパと同乗しているザナナは、更に薄い着物一枚。

半裸に近いにも関わらず、よくも平気なものだと苦笑する。

そんな折。

自機のエンジンやプロペラからでない。
耳に障る音を聴いた。

戒には実感が薄いが、おそらく目標の空域まで、中ほども達していないだろう。

「嫌な予感、的中か……！」

前の操縦席から、コルツの呟きと強い身軋りが伝わる。

「……何だ……？」

振り返る戒。

月光を返す、無数の鈍い光沢。
戦闘騎の集団である。

「援軍じゃねえか？
一体、どの基地から……」

思わず連ねた言葉に、若干の期待がこめられているのが自分でも判った。

「……相変わらず、こっちが嫌がる用兵をしてきやがって……」

だがそれは、コルツの低い声調によって、無惨にも打ち碎かれる。

迫る機体の紋章には、^{エンブレム}『三つの脚の馬』。
中王騎士団の象徴が刻まれていた。

「最悪だ……！」

やはり、こいつら、つるんでやがった…！」

戒はなびく後ろ髪を押さえながら、服の中で聖十字を握り締める。

「どうする…！？」

このまま背後をとられたままじゃ…！！」

機体をさらに寄せたマルリッパが叫んだ。

「ただでさえ、時間が無いってのによ…！」

コルツはエンジンの回転数を下げ、思考の中の選択肢に迎撃の二文字を加えた。

背後の群れは、瞬く間に押し寄せて、無言の圧力を向けてくる。

闇の中で一糸も乱れぬ、横並びの整列。

秀麗な集団飛行であり、さらにそこへ先頭の一機だけが抜け出て、豪速度で追い上げてくるのが見えた。

（…騎士団には、これほどの奴がまだいるのか……？）

マルリッパの機体に速度を合わせているとはいえ、ここまで素早く距離を詰められたのは意外。

以前に交戦した銀の戦闘騎を思い起こしながら、コルツは、遂に機関銃の引き金に親指を添える。

「先に行つて！」

「ここは僕が引きつける……！！」

マルリップが叫んだ矢先、光が飛んだ。
集団から抜け出た一機からである。

「……？」

光は連続して点滅し。
信号らしきもの変わる。

「奴等め……！
白々しい……！！」

コルツが大きく目を剥いて、まるで吐き捨てるように叫んだ。

「『こちら中王騎士団、蒼華の戦闘騎部隊である。
所属を名乗られよ。』」

貴兄らは、当団の管轄空域を無断で侵犯している。』……だつて
？」

マルリップは、戒とザナナのために信号を音読しながら、その真意を自問する。

「あいつら、この状況を知っていながら……いけしゃあしゃあと……！
お返しだ！

この緊急事態を、ありのまま説明してやれ！
一体、どんなツラをするか押んでやろうぜ……！」

コルツの激が飛ばされるや否や、シャッターのついた発光信号用のランタンで打ち返すマルリップ。

「……！！」

そこへまた、すぐに返される光の連続。
途端、二人の表情は固まった。

「何と言っている。」

背後に迫る鎧姿の操縦士達をじっと睨みつけながら、今にも飛び掛かって行きそうなザナナが訊く。

「『それは、大変だ。』

ぜひとも、我々も援護・協力させて欲しい。』……って……？……これ、
どういうこと……？」

「どっ、どう考えても罠だぞ……！」

再びのマルリップの音読に対し、座席に嚙りついて肩を震わせる
戒。

「だが……撃つ気があるなら、とっくに撃っているはずだ。」

左翼後方にまで迫っている、隊長格と思しき一機。

そして、背後で展開する戦闘騎群を視界の端に納めながら、コルツが呻いた。

「てめえ！」

本気で奴等と協力するつもりじゃねえだろうな……！」

「前も後ろも敵じゃ、流石にどうにもならん……！」

難色を示す戒に対し、彼は前を向いたまま怒鳴りつける。

無論、本音では協力なぞしたくない。

だが、目標との交戦を前に、わずかな消耗でも避けたい。

今回の件と騎士団が、全くの無関係であるという危険な仮定を信じて、突き進みたい状況である。

戒の意見は自然と却下され。

マルリツパが協力を受け容れる旨を信号で伝えようと、隊長格の一機は速度を落とし、隊列に戻って行った。

それからの後方の戦闘騎群は、非常に慎ましかった。

自分らは先導しているつもりは無いが、彼等は絶妙の距離をとっ

て確実に後をついてくる。

よほど訓練されている部隊に違いない。
悔しいが、それが頼もしく感じざるを得なかった。

そんな中、戒だけは振り返ったまま、彼等の動向を注意深く追っている。

相反する組織。

腰抜け中王都市軍と、憎き中王騎士団。

こんなにも奇妙で、予想外な組み合わせは無い。

彼等は、今にもこちらを蜂の巣に出来るよう、銃の照準を合わせているのではないか。

そう思つと、まるで生きた心地がしなかった。

3

松明の炎が遠巻きになり、殺風景な山岳に大輪の花をつくる。

二人のためだけの、決闘場である。

だが、コルススが注意する対象は、戦う相手ではない。

カジェットとベルツサス。

いま対峙している少年に、何らかを授けたと思われる彼等であった。

どちらの影響を色濃く受けているか。

コルススは、それを推測するだけで事が足りると、信じて疑わなかった。

（さて、こいつ…。

風来棒を…どこまで使える？）

漠然とパンリの全身を眺める。

彼が手にした棒は、ただの異物として握られている、その程度の印象だった。

（大方、ただの威嚇だろう。

本格的に風を乗りこなすのに、数ヶ月はかかる。

…あの女が、要領よく教えられるはずもねえ。）

一歩踏み出すと、案の定、パンリはその分を退いた。

距離をとろうとする相手に、コルススも必要以上に追わなかった。

（ならば、ベルツサスの奴が格闘を仕込んだか？

いや…それも、それなりの体格が前提にあつてのこと。

こいつは、あまりにも貧弱…。）

身の構えだけで、実力の程は知れる。

パンリの姿からは、その種の圧力が全く感じられない。

ただ一点。

自分に向けられている、闘志に溢れた双眸のみを除いて。

（…こいつの自信の根拠は、やはり……！）

才あれば、肉体を鍛えるより遥かに早い期間で、人を殺す
ことを可能とする。

源法術である。

逆に考えれば、パンリの活路はそこにしかない。

改めて結論づけて、焦れる。

いっそのこと、一気に屠りなくなる衝動に駆られそうだった。

「どうした。」

今回は、『源・衝^{フェル・ド}』は使わねえのか？」

「…あの時の…何も知らなかった私とは、違います。」

向き直り、正対したコルススに、パンリが落ち着き払った声で返す。

距離にして、数歩。

「ならば……代わりに、オレが使わせてもらおうか。」

《源・衝》^{フェル・ド}！

コルススの諸手より、発せられる小さな光。
無防備な鼻柱に、わずかな衝撃が走り、パンリはのけぞった。

「ほれ、どうした。」

かわせよ、《源・衝》^{フェル・ド}！！

再び、冗談交じりに放たれる光球。
今度はパンリの足を捉える。

威力こそ、小突かれた程度だが。
それが何を意味しているかは、両者には解っていた。

「その位置でいいのか？」

次は、もっと威力の強い術でいくぞ。」

「…いつそのこと……貴方の持つ最大の術を使ったら如何ですか？」

強がりながら、後退するパンリ。
体が反応するには、まだ距離が足りないことを悟った様子であった。

場慣れしていない証拠を早くも露呈した相手に、コルススは笑いを必死に噛み殺す。

「まあ……慌てるな。」

こっちとしても、少しは楽しませてもらいたいじゃねえか。

《風・衝》ハイ・ド！

会話も途中、閃光と衝撃。

その不意打ちに合わせ、パンリが地面に伏せる。

「《石・壁》ザイ・レイズ！！」

小柄な体を隠すように地が盛り上がり、生成される岩の壁。

両者の闘いを見詰めるベルッサスが、息を飲んだ。

はじめは初歩の術すら使えなかった少年が、実戦で申し分の無い集中力を発揮できている。

選択も悪くない。

しかし、相手が悪い。

「壁ごと吹き飛びやがれ！

《風・衝^{ハインド}》！！」

コルススは容赦しない。

岩に打ち続ける衝撃。

その裏で身を隠すパンリの肩口に、火花が弾雨のようにかすめていく。

「小僧。

そのままじゃ、逃げ場はねえぞ……」

コルススの余裕の口ぶりど、術が同時に止まった。

岩の壁は無傷。

代わりに、胸が悪くなるような、嫌に焦げ付いた臭いが辺りに立ち込めていた。

屈み、足元の地面に触れてみる。

砂利と共に、指に付着する光る粒。

即座に彼は、相手の企みを理解した。

盾とした壁は、想像以上の用を成してくれた。
自分は、とりあえず無事である。

緊張と疲労。

気が遠くなりそうな、荒々しい呼吸の中、パンリは自分の頬が持ち上がるのを感じた。

まるで、戦記の主人公になったような気分だ。

わずかに砕け散った岩の破片を拾い、眺めてみる。
今でも、自分が現実に行っていることとは思えない。

「…おいおい。」

大口を叩いた拳句、隠れているだけか。

そんな虫も殺せないような顔じゃあ、当然だなア？」

壁に背をもたれて息を整える中、相手の挑発に思わず顔を上げた。

中性的な容姿。

獣のような耳。

何度、蔑まれたことだろうか。

何度、その場から立ち去り、聞こえないふりをしただろう。

今は、応じることが出来る。

「つまらん小細工に付き合うのは止めにしたぜ。

…お望みどおり、オレの持つ最大の術で、これから首を刎ねてやるう。」

岩陰から身を乗り出して様子をうかがうと、コルススは爪を立てた右手を背後に、姿勢を低くとっていた。

前に切断された足が、疼く思いがした。

「やはり貴方は…その術に相当の自信を持っている…。」

その場を離れずに、パンリは震える指で襟元を開けながら、言葉を放つ。

「源法術の中でも、上級の威力を誇る『風・走（ハイ・ゾン）』…。ですが……習得が難しく、術の軌道も直線的であり、有効範囲が狭い。

そして何より、術者本人の消耗が激しいことが大きな欠点です。」

「……。」

コルススは、あえて黙って聴いた。

やはり、壁越しの相手がダメージを受けていないことが、流暢な言葉使いで判る。

「大抵の術に関しては、このとおり頭に詰め込みました。

特に貴方の得意とするものに関しては、具体的な対処法を、既に聞かされています。

過去に痛い目に遭わされていますからね…。」

パンリは喋り続けた。

そうして相手が聞き入る隙に、彼は地面の砂利を大きく掬^{すく}って握り締める。

「…それがどうした。

理論や理屈で、人が殺せるとでも思うのか？

勉強しただけで勝てるなら、世話ねえのさ、小僧。」

やがて否定の文句と共に、コルススは岩壁へと歩み寄った。

「…ならば、試してみますか？」

少年の言葉は、いちいち癪に障る。

不敬であり。

不敵だった。

「安心しろよ、小僧。

もう、挑発する必要なんてねえんだ。

こっちは、乗ってやるって決めたんだからよ。」

コルススは歩を止め、わざとらしく肩をすくめて見せた。

「確かに、『風・走^{ハイ・ソン}』の消耗は激しい。

オレでさえ、日に三回の使用が限度だ。

しかも、そのうちの一回は、さつき弟との戦いで使っちゃまった。」

彼の言葉に嘘は無いことが、周囲の手下達の困惑した表情から汲み取ることが出来る。

「ペラペラと、こちらがタネを明かすのが解せないか？

まあこれは……間抜けな師匠を持った、憐れなお前への、せめてもの手向けだと思ってくれりゃあいい。」

不気味に微笑みかけるコルスス。

「こんな場所で待ち構えてるなんざ、初めから妙だと思っていたが……。

なるほど、昔の採掘場らしく、ここの土は金属質を多く含んでやがるわけだ。」

そして見回す、洞窟など穴の開いた地形。

「確かに硬い、硬いなあ！

いくらオレの術でも、これを切断するのは無理だ！！」

強く両足で地を踏む間、彼は遂に堪えきれずに吹き出した。

「オレの『風・走』^{ハイ・ソン}を、お前はあと『二発』、さっきのように壁で凌げばいい。

簡単だろ？

そうすれば、オレはもうクタクタに疲れて、術を使うことが出来ない。

後はもう、楽勝じゃねえか。」

しかし、すぐにコルススは嬌態を止め、態度を一変させる。

再び態勢低く。

右手を背後につけて、大きな溜めを作りだした。

「…だが、これからの攻撃は、さっきのように直線で放たれると思うな。

様々なフェイントと、角度をもって襲い掛かる。

素人のお前に、本当に防ぎきれるか？」

「……！」

パンリの顔に、はつきりと絶望の色が滲んだ。

「口車に乗せられて、肝心な点を分かっていたいなかったようだな。

あの女が立てた作戦は、お前なんかが出来る代物じゃない。

…地獄で恨めよ。

無茶な作戦をけしかけた、バカな師匠になあ！」

コルススが跳ぶ。

たまらずに半端な姿勢で岩陰から飛び出したパンリは、すぐにバ
ランスを崩し、片手をついた。

だが、残る片手で握った棒が地面を風ぎ、かろうじて砂利を乗せ
る。

それは迫るコルススに向け、真っ直ぐと掲げられていた。

「サイ・ボルグ
…《石・甲》!!」

(…壁ではなく……!!
風来棒で防ぐつもりか…!!?)

若干予想とは違ったパンリの行動に、コルススは動きを鈍らせる。
だが、前の戦いでベルツサスが用いたように、棒が硬質化される
気配は無い。

「!?!」

狼狽するパンリの表情。

一瞬、対するコルススも同じ心地に陥ったが、答えは簡単だった。

術の不発である。

「サイ・ボルグ
《石・甲》!!!」

再度のパンリの言葉も虚しく、続く二回目も不発。
棒は、何も変化を起こさなかった。

「集中が切れたんだよ！
素人が！！」

勝利を確信し、強く地を踏むコルスス。

直線的な動きが止まり。

左にステップしてから、すぐに右へと返り、最後は上へ跳び込む。

「ザイ・レイズ
《石・壁》！！」

棒を投げ捨て、パンリは両手で地面を叩き、最後の苦し紛れを行った。

再び発動する、地面を直接媒体とした岩の壁。

だがコルススはそれを軽く蹴り飛ばし、その反動で斜めから迂回。
難なく、パンリの背後に回りこむ。

硬直して動けない標的へ、中空にいる時から、既に狙いは定まっていた。

「ハイ・ソン
《風・走》。」

相手の延髄めがけ、手の平を突き出す。

抑揚の無い非情な声が、乾いた地に響き渡った。

東部に位置する、中規模の町を越える。

そこで寝静まった民も、まさか中王都市軍・騎士団の連隊が、遙か頭上を駆け抜けている姿など、夢にも見ないだろう。

果てしなく思える、過酷な空の旅。

唯一歓迎してくれるのは、自然。

目の退化した夜行鳥の群が、仲間と勘違いして機体の列に並ぶ。

本日の見所は、海原のように雄大に隆起し、横一杯に広がった流れ雲。

そして、その隙間から、闇夜に降り注いでいる月光で御座います

だが、感傷も長くは続かない。

天然の照明が、遙か前方に巨大な影を照らしたことで、現実に連れ戻される。

フィンデルが用意した念通士によって、事前に索敵された方角。

件の飛翔艦である。

「…あのデカブツの他に、何か見えるか？」

「いや……！」

敵護衛機と一戦交える覚悟だったコルツの茫然とした問いに、後部座席で眉間にしわを寄せる戒。

「こつちの信号にも、反応無し！！」

飛翔艦に対する停止の呼びかけも空振りに終わり、マルリツパがランタンを振り回して叫ぶ。

「こつなったら、畏だろうが何だろうが……行くぞ。」

迫る飛翔艦に対し、徐々に機体の速度を緩めるコルツ。

その時。

騎士団の動向。

操縦に集中していた彼は勿論のこと、戒も眼前の目標に気をとられ、その事実気付くのに遅れた。

「おいッ！！」

いつの間にか、連中……数が減ってるぞ！！」

首を真後ろに向けたまま、戒が喚く。

「…奴等、手馴れてやがる。」

コルツは耳を澄まし、感嘆と共に上空を指した。

薄雲の中から聴こえる、かすかなエンジン音。

騎士団は部隊を半分に分け、片方を待機させるつもりなのだ。
それは目標に対する用心であり、全隊の動きを悟られないように
する意味合いも兼ねている。

ほどなくして、隊長格の機体から、具体的な指示を求める信号が
発せられた。

飛翔艦に接近し、戒とザナナが侵入。

まずは格納庫を制圧した後、発進口^{ハッチ}を解放し、そこから戦闘騎が
突入するという流れである。

マルリツパは、それを光信号で騎士団側に伝えた。
若干の沈黙の後、了解の意を示す光が飛ぶ。

「『イカれてやがる』だよ。」

「…大きなお世話だ！」

俺様の気が変わらねえうちに、さっさと行っちゃまえ！」

戒は両腕を組んだまま、覚悟も半ばに命じた。

すぐさま反転し、機体の向きを飛翔艦の針路に合わせるコルツとマルリップ。

騎士団の部隊は、上昇。

邪魔にならないよう、旋回しながら待機する構えである。

だが、周囲を虫のようにたかられても、艦は依然として緩やかな飛行速度を保っていた。

胴体後部の装甲へ目掛け、まずはザナナが降下。

躊躇は無い。

横殴りの突風をものともせず。

絶妙なバランス感覚で、艦体の表面に裸足を吸い付け、扉の傍へと到達する。

「次は俺様だな…。」

じっと身を屈めて待機するザナナを眼下に、戒はタイミングを計

っていた。

「頼んだぞ……！」

コルツの祈るような本音が聴こえ、それを合図に身を投げる。

「……！」

だが予想以上の突風に、修道着が煽られた。

ほぼ真横に泳いだ戒の体を支えたのは、咄嗟にその手を掴んだザナナだった。

その際に、肘の皮が伸ばされて、筋肉と健が嫌な音を立てる。

「……平気か。」

「こんなもん……鼻毛を抜く程でもねえ。」

ようやく艦体表面に張り付いた後、ザナナから出た心配に、舌打ち混じりに答える戒。

コルツとマルリツパは、二人の無事を見届けて離れていく。

腰から解いた命綱を直ちに放り投げ、戒は小さな鉄扉を開けた。イマツエグの情報どおりならば、この縦口は格納庫へと直接繋がっているはずだ。

「ならば……先に行く……！」

設置されている鉄梯子すら使う間を惜しんだザナナが、一気に飛び降りる。

下への着地と同時に両手で槍を上段に構え、辺りを威嚇が、それを出迎えたのは戦闘騎が一機のみ。

格納庫は、完全に無人だった。

「……拍子抜けだな。」

梯子を慎重に降りきった戒も、安堵の息をつく。

爆薬などが満載され、異様な武装集団が跋扈はつこしている図を、勝手に想像していた。

丹念に辺りに気を配る最中。

床に響く自分の真鍮入りブーツが、潜入向きでないことが知れる。

だが、それが全くの杞憂に思えるほど、周囲に人の気配は無い。

二人は無言で視線を交わし、鈍重な発進ハッチ口のレバーに手をかけた。

勝利を祝福する血しびきはなく、代わりに浴びたのは石の飛礫。^{つばし}
その意外すぎる洗礼に、コルススは瞼を狭めた。

「……!？」

薄目のまま確認するパンリの首と胴は、分断されていない。
自分の最大の術を直撃させたにもかかわらず、その身は、やや沈んだ程度である。

真一文字に裂かれた、その服の襟元。
隙間から覗く、硬質。

パンリの首は、周囲の石と同化して守られていた。

（あの術は…失敗なんかじゃねえ…!）

棒ではなく、自身を覆うため。
そして最後に出した岩壁は、接近するであろう自分に、それを悟られないよう死角を作るため。

相手の真の狙いに気付くのと同時に、眼前の影が揺らぐ。

自分はまだ、視界が完全に晴れていない。

「……《氷・槍》！！」
チス・ラキナ

パンリの細い指先から飛び出す、細く尖った氷。

反射的に顔を逸らす。

喉元を、冷たい塊がかすめた。

「……くそッ！！」

コルススは両目を乱暴に擦り、外野に向けて睨みを利かす。

会心の笑みを浮かべているカジェット。

決闘の寸前、彼女がパンリに何かを吹き込んだのは承知していた

「……っ！！」

絶好の機会だがパンリは激痛のあまり、それ以上の攻撃を重ねられず、片膝を落とす。

人体を容易に切断せしめる術である。

いくら特製の『岩の鎧』越しとはいえ、全身に堪えた。

一方、態勢を戻すコルスス。

だが手下の目が、少年の変調ではなく、自分を凝視していること

に気が付いた。

己の鎖骨にまで達する、熱い液体。

恐る恐る、首筋に手を当てる。

噴き出す程ではないが、薄く裂けた皮から、鮮血が染み出している。

まるで赤い前掛けをしているような自分の姿に、周囲は驚いていたのだ。

「…確かに……才能がある。」

どこかで相手を侮っていた傲慢さを嘲るように、コルススは虚ろな表情で呟いた。

「よく短期間で……ここまで……」

弟の言ったとおり、逸材のようだ……」

少し間違えば、頸動脈を切られ、絶命していた。

相手が、自分と対等の位置まで来たことの証明としては、充分だった。

屈辱で、耳朵の下で奥歯が鳴る。

「ホララ・ゴ
《炎・爆》！！」

患部を抑えた手を中心に、爆風を起こす彼。

自らの肌を焼き。

強引に傷を塞ぐという乱行に、周囲の松明が興奮で揺らいだ。

「認めてやる。」

だが　あくまでもそれは、『源法術』の話だ。」

不意の接近。

前蹴りに続き、肘の一閃がパンリの横っ面に決まる。

避けきれず、まともに食らった彼は、残る膝を地につけざるをえなかった。

そこへ、さらに鼻柱を目がけて蹴り上げるコルスス。

パンリはそれを拾い上げた風来棒で受け、何とか直撃を防ぐ。

「何が、首を刎ねるだ…。」

安い挑発に乗せられた拳句、してやられ……逆に『このザマ』だ。」

衝撃で遠のく相手の姿を追わず。

地面の一点を見詰めたまま、コルススは低い声で呻いた。

だらりと下げた両手から、焦げた皮膚の粉が散る。

「お前は、強い。」

単に勝ちを優先することを……もう恥と思わなくても良さそうだ。」

そして適当な石を拾い、手の中に忍ばせる彼。

その硬い拳が、振り向きざま直後に、パンリに振るわれた。
細身の体が浮き、その手から風来棒が落ちる。

格闘には、思考の介入する余地が少ない。

コルススの行動を想定した中で、最悪の事態が、まさにこれであった。

直角に曲げた両腕が、上下左右あらゆる方向から襲い掛かる。
一直線上の戦いならばまだしも、横や縦の動きについていけないほど、自分は戦い慣れしていない。

ただ殴りつけるのみ。

コルススは原始的だが、最も堅実な方法を、ここで選択した。

今の彼にとって、周囲の目は無いに等しい。

ただ機械的に間合いを詰め、石を仕込んだ重い拳を振るう。
それを繰り返すのみである。

「……運の悪い奴だ。」

あの女にさえ関わらなければ、平穩無事に暮らせただろうに。
オレと戦うことさえしなかったならば、将来、その才能を生かせ

ることも出来た。」

やがてコルススの口を突いた言葉に触発され、パンリの脳裏に様々な過去が甦る。

「ちがう……」

彼は膝を掴みながら、まだ身が動くことを確認した。

「……誰よりも幸運なんだ……」

そして、震える腕に力を込め、上体を起こす。

「私は……わずか数日の間で、素晴らしい師に二人も出逢うことが出来て……」。

かけがえのない仲間に、何度も助けられた……」。

もはや、これが一方的な処刑であることは、誰の目にも明らかであった。

立ち上がった彼は、なすすべもなく次々と喰らった痕　　体の
到る部分を腫れ上がらせている。

「そして……この『きっかけ』が無かったら……この先もずっと、悔しいことに目を背け、何かを理由にして逃げ続けていた……」。

だが、切れた唇から発せられる言葉。

「ありがとうございます…！」

私の前に、敵として現れてくれて…！！」

虚勢。

比類なき強情さに、周囲の者達は驚愕を重ねた。

そうまでして何故、コルススに抗うのか。

彼の暴力の前に屈するしか無かった彼等にとって、少年の姿は理解しがたいものであった。

「オレは、踏み台にするには高すぎるぞ。」

平淡に呟き、拳の中の石を握り直すコルスス。

いつの間にか決闘の場は、その役目どおり、二人の空間となっていた。

そして彼等の位置は、初めの場所から、幾つもの穴が開いた所へと移っていく。

鉱物が掘り尽くされた墓場。

その洞窟の中の一つを、パンリが感慨深く見入り、おぼつかない足で近寄る。

そして、後を追うコルススを一瞥し、最後の力を振り絞って中へと駆け込んだ。

「……いよいよ、終演らしい。」

コルススは自ら勝利を宣言するかのように両腕を広げ、腫れた手の中から石を落とした。

あまりにあっけない侵入劇。

機体から降りてきたコルツとマルリツパも、一様に冴えない表情を浮かべていた。

開かれた発進口からは、続けて騎士団側の戦闘騎と人員がなだれ込んでいた。

胸に青い線が引かれた皮鎧に全身を固め。

各自、大鉈を腰に佩び、頭髪を剃り上げた、巨躯の者ばかりで構成された威容。

コルツは負けじと、そんな敵つい騎士達の前に歩み寄り、下から睨みつける。

「……なんつう作戦だよ…。」

軍隊つてのは、意外と無茶をする奴等なんだなあ。」

そこへ、少し間延びした声。

最後に格納庫に降り立ったのは、先の隊長格の男である。

垣根のような大柄な集団を掻き分けて前に出る彼の外観は、思ったよりも若い。

「ン……おたくら、本当に軍隊の人間か？
随分と面妖な……」

早速、修道着の戒、不笑人のザナナを目に留め。
面白がる彼。

防風ゴーグルを外し、山なりに立てた頭髪を両手で直しながら、
それは人懐っこい笑みで歩み寄ってくる。

部下の雰囲気とは正反対の、気さくそうな青年であった。

「コルツⅡデスタロッサ中尉だ。
とりあえず、協力を感謝する。」

嫌に平然とした相手の様子。
その真意をまだ読みきれないコルツは、まずは口先だけで礼を述べた。

「こりゃあ、光栄だな。
同じ空に携わる人間として、そちらの評判は聞いてるぜ。」

だが、わずかな感嘆を呟いただけで、握手を求めてくる彼。

「最近の景気はどうだい？」

「おかげさんでな。」

前の戦闘で、ほとんど壊滅状態だ。」

コルツは応じずに、さらに探りを入れる。
だが、騎士達の表情に変化は見られない。

「へえ。」

軍隊は、こちらより台所事情は良いと聞いてたがね。」

肩をすくめて屈託の無い男の笑顔には、肩透かしさえ食らうようだった。

「申し遅れた、俺はダラス＝メルステン。

蒼華の戦闘騎部隊を仕切ってる。

とはいえ、こんな状況だ。

挨拶も程々にしようか。」

片手を軽く挙げて号令。

背後の面々が、背筋を伸ばして一歩前進する。

「メルステンといえば、たしか騎士団の名家の一つだよ……。」

「何だあ？」

マルリツパが戸惑いながら呟く説明に、戒が口角を歪めて撫でた。

「また、ボンボンの坊ちゃん部隊かよ。
勘弁してくれ。」

その分かり易い侮辱に、並んだ騎士達は、無言で腰の得物に手をかける。

だが、それを御したのは他でもない、メルステン自身であった。
った。

「手厳しい挨拶には、慣れっこさ。
ファグベールの伯父貴おじきにも、会う度に言われていることだしな。」

あの剛直で口うるさい老騎士は、最近どうしているだろうか。
そんなことを軽く心に思いつつ、まだ真新しい床を踏み鳴らす。

「しかし、おたくらの情報だと、こいつが首都の王宮を狙っている
ってことだが…。」

抵抗が一切無いのは何故だ。
外部の侵入者に対し、ちよっとおかしくないか？」

「ああ。
まるで幽霊船だ。」

コルツは、他人事のように返した。

「ま、あれこれ議論するよりも、制圧しちまうのが一番てっとり早いから……」

幸い、こちらには腕自慢君が沢山いる。

何か艦内の情報があれば、もっと楽なんだが……」

「それなら、これだ。」

催促されるがまま、戒はイマツェグから預かった見取り図を差し出す。

それを渡すつもりは無かったが、メルステンは存外に強い力でそれを抜き取ると、背後の面々に広げて見せた。

「……全員、すぐに憶えろ。」

お前とお前は、機関室。

残りは、俺とブリッジの制圧。

進撃。」

そして手際よく組を分け、廊下へ呐喊する彼等。

「おい……図面……」

そのあまりの機敏さに何も出来ず、戒は片手を伸ばしたまま間抜けな恰好で呟いていた。

静けさを取り戻す格納庫。
残された四人は憮然として、顔を見合わせるばかりだった。

4

恐怖。

人の本能に根ざし、その行動を支配する要素の最たるもの。

それに打ち克てる者を指す言葉が、『強者』なのだとすれば。
先ほど己の傷に対し、乱暴な治療を施した相手 相手には、
その資質がある。

自分はどうかだろうか？

今の自分が最も恐いと感じるのは 大好きな仲間の顔を、ま
ともに見られない生き方することだ。

ただ強く変わりたいという、曖昧な願望から始まった旅から、ど
うして、そのような結論に行き着いたのか。

よく解らない。

コルススは闇の中を追った。

洞窟内は分岐も無く、天井は背が支え^{つか}そうなほど低い。
片手に掲げた松明の炎で、そこに自身のおぼろげな影が揺らめく
のを、視界の端で一瞥する。

一見、相手は追い詰められた末に、ここへ逃げ込んだように思えた。

だが、このように極端に狭く、細い地形では、直線的な戦いが必然となる。

人数の差を埋めるためには、もってこいの場所だろう。
さらに今では、互いの身体能力の差を埋める作用も果たしている。

（ここも……あの女の思惑……。
外での作戦の延長……なのか……？）

首筋の火傷が疼く。
道幅はさらに狭まり、自然と腰が引けた。

そこで、音の反響が変わる。
前方で不意に感じる、体温。

ゆつくりと、松明の炎を向けた。

闇に溶けるように浮かぶ、少年の姿。

「…ひとつだけ、教えて下さい…」

病人のように洩らされる吐息に、コルススは歩みを止めた。

「…私の知らない…貴方とカジェットさんの関係を……」

「そんなものを、訊いてどうする。」

問答に彼がまともに付き合う気になったのは、相手の位置を掌握できた安堵からだった。

「大会が始まる以前…貴方は、彼女に『自分のもの』になるよう呼びかけていました。」

地位や名前だけが狙いだけではない、そこに何かを感じたのは…
…私の錯覚でしょうか。」

「オレがあいつに、特別な好意を抱いている。
そう問いたいわけか？」

若干、照れた言葉に、小さな影は身を乗り出してくる。

「ならば……今からでも、全てをやり直すことも出来るのではない
かと思っています。」

貴方に、その気さえあれば……」

「ククク。」

この期に及んで……どうもこいつも……」

思わず、傍の岩壁を殴りつけたい衝動。

猛烈に込み上げた笑いを、コルススは必死に抑え込む。

「立会人が不在だったとはいえ……あいつはカジェット」セイルク
ロウの名を継いだ者。

同じ源法術士として対等に扱えば、かなりの数の団員が与しよう
としただろう。

それを止めるため、あいつが『女』であることを強調して演出す
る必要があった。

こっちが強引に言い寄っているように見せかけてな。」

彼の剥き出す犬歯が、松明の炎を照らし返した。

「無論、周囲にオレの方が優秀だと認めさせることさえ出来れば、
そんな演技も終わりだ。

全身を切り刻んだ後、先代と同じ墓にブチ込んでやる。」

およそ、この世の全ての負の感情が集約されたような。
今までパンリが見た経験の無い、醜悪な人間の貌かおだった。

「だが…女につくよりはマシだという程度で、オレに付き従った連中も程度が知れているな。」

奴等のように平凡なクズどもも、組織が大きくなった暁には、お払い箱よ。」

先代の遺物を、微塵も受け継ぐ意思は無い。

自分が後継として選ばれなかった悔恨と叛発が、今でも言葉の端々に込められている。

「弟の奴は、自分で物事を考えるなどと、世迷言を抜かしていたが…。」

所詮、弱い者には、生きるための選択肢は限られている。

そんな奴等を導いてやるには骨が折れるからな。

苦勞の対価に見合わぬ人間など、そばに居させてやる必要など無いだろう？」

同意を求めるように肩をすくめ、拳を握る。

「この世は、どのような間柄だろうと、互いの打算と見返りで成り立っているんじゃないか。」

それらが釣り合わなくなった時は……決別するまでよ。」

一連のコルススの言葉で、パンリは理解できた。

自分が恐れるものの正体。

それを知る糸口となったのは、この真逆の存在の相手だった。

本当に大事なものは、力の有無ではない。
期待に応えられないことは、裏切りではない。

無償の絆の存在を、今の自分は強く確信できる。

いつも己の弱さに不安や負い目を感じ、怯え。
特別な人間や、志ある者の邪魔をすることはならないと、卑屈に
なっていた。

自分はそんな、とても『おこがましい』理由で逃げだした過ちを、
まだ面と向かって仲間達に謝っていない。

「…数奇な出会いの数々は……この答えを導き出すためのようにな
え思います…。」

パンリは祈るように、ただ呟いていた。

「いま…帰ります…。」

自分のもてる…全力……最高の術で…。」

不意にパンリは立ち上がり、岩壁を離れた。

そこが既に、洞窟の行き止まりであったことにコルススが気付い
たのは、その時だった。

シユナから貰ったクッキーを、口に含む。

材料も調理道具も満足でない選手村で、大した出来だ。
バターとシナモンの利いた、甘くて優しい香りが鼻腔に立ち込め、
すぐに全身の疲れが薄まるような気がした。

「
　　いいか。」

詠唱を使う術は、源法術士の切り札だぞ。」

パンリが吞気に感心をしていると、カジェットが脇から、そのクッキーの包みに手を伸ばしながら言った。

ウベ神父らと別れた直後。

山頂へと場所を移す最中、彼女は手短に教えてくれた。

威力や効能が高い術の発動ほど、精神の集中を要する。
それを補助するものが、『詠唱』である。

つまり、主な用途として、高難度の術の発動。
例外として、術の威力の単純な向上、が挙げられる。

「で……なんだ……うん。」

お前は、どんな切り札を持ちたい？

詠唱を必要とする強力な術……教えられる範囲ならば、何でも教えてやるよ。

ほ……美味しいじゃねえか、このクッキー……」

口と包み紙の間に、手を忙しく往復させながら。
カジェットはさらに、こうも言った。

源法術士が、必要以上の強大な力を持っていることに越したことは無いんだ。

そう、嫌そうな顔をするなよ、初心者くん。

人生には、何があるか分からない。

そんな時に何も出来ず、無力を痛感したくないのなら。

この新米師匠の言うことを、ちゃんと聞いておけ　と。

「グース・バーヤの山に、十を捧げよ。
されば十を授けん　」

瞼を閉じ、無防備にさらけ出す。
パンリの体と言。

「グース・バーヤの谷に、十を捧げよ。
されば十を授けん」

源法術の詠唱に規則は無く、それを聴いただけで、どのようなものが放たれるかを察することは、至難である。

(…この術……！)

だが、この時ばかりは、コルススには鮮明に思い出された。

よりによって、自分の最も得意とする『風・走^{ハイ・ソン}』。
相手が唱えているのは、かつて師から教わった詠唱と全く同じである。

確かに、詠唱は先人が考案したものを、そのまま使用するのが常。

伝統は、得てして洗練されており。

整った韻律を踏む分、集中力が増す。

だが、完全に舐められたものだ。

コルススは一旦、右手を後ろに振りかぶる。

撃ち合いになれば当然、詠唱を必要とせず、錬度も充分な、自分の『風・走^{ハイ・ソン}』の方が早い。

しかし闇の中であることが、寸前のところで彼の行動を止めた。万が一、仕損じた場合を考えれば、ここで対抗することは賢い選択ではない。

消耗の激しいこの術を、あと一度放てば、自分も後を失うのだ。相手は、先の戦いと同様、何かを企んでいる恐れもある。

松明を前方に投げ捨て、コルススは前へ飛び出した。

「天空の牧、カジェット」セイルクロウの名において、原初の風を与えたまえ
「

パンリの両手が、指を開いて突き出される。

が、その照準は外れていた。
迫ったコルススの身体は、既にパンリに密着し、その手を掴み上げている。

「ハイ・ソン《風・走》――」

手を左右に捻られ、その身が大きく宙に浮いたまま。
術の発動は、止まらなかった。

直後。

コルススの背後で、岩が風の刃に挟られる音が響いた。

（勝った……！）

完全に動きを封じた相手を見下しながら、コルススは嗤う。
同時に、その表情が止まった。

「自分が得意にしているからこそ……余裕ある対処が出来る……」
呻くパンリ。

「だから……必ず……そう来ると信じていました……。」

浮いた膝が、コルススの左胸に届いている。

手からではなく、足からの発動。

疾風は、コルススの胸筋と肋骨を裂き、心臓を薙いでいた。

源法術を放つ部位は、利き手が最も集中できるとされている。

しかし理論上は、全身のどの部位からでも放つことが可能である。

先代が考案した、『四極』^{しきごく}。

両手に両足を含める、四肢を用いることからそう呼称される秘儀

だが、この特異な芸当をこなせる人間を
コルススは二代に渡るカジェット「セイルクロウ以外に知らない。

そのくらい、実践できる者は稀なのだ。

自分も何度も習得を試みたが、努力の分だけ、疎外感が増すばかりだった。

同じ空を飛ぶ。

だが、どんなに手を伸ばしても届かない。

あの二人は、自分にとって、本当の鳥のようだった。

そんな彼女らの姿が、目の前の少年と重なる。

コルススの唇が歪んだ。

打ち捨てられた松明の炎が、瞳孔を照らし。
光がこぼれて消えた。

もはや、以前の饒舌さは返らない。

「よりによつて……何で『風・走^{ハイ・ソン}』なんだよ?」

パンリの申し出を受けて、すぐにカジェットは不満そうに頭を抱えた。

「お前も、相当な物好きだぞ。

あんなひどい目に遭ったくせに……」

「だからこそ、ですよ。」

彼女の言葉も途中に、彼は首を横に振って応える。

「ベルッサスさんが、かつて教えてくれました。

源法術は、体験した印象が最も大切だということを。

私は、あの術の恐さも威力も、身をもって知ってます。
どうか……お願いします。」

強い感情を秘めた眼差しで、彼は言った。

理には、適っている。

彼女に断る理由は無かった。

やがて、洞窟に入っただけ、一向に姿を見せない両者を不審に思

い、中の確認をコルススの手下の一人が行った。

それが最奥で見たものは、不自然に盛り上がった岩と、そこに寄り添うように力尽きているパンリの姿。

疲労しているのみで息がある彼に対し、コルススは見当たらない。少年が源法術で拵むすえたと思われる『それ』が、彼の墓標であることは、想像に難くなかった。

外の面々が、その報告を聞いた時の心境は、驚愕よりも呆然の色が強い。

動揺する周囲の喧騒に紛れ、解かれるカジェットの拘束。すぐに彼女は駆けて、運ばれてきたパンリを抱きしめた。

ひどい有様だった。

あの軽かった短躯が、鉛同然に重い。

内出血で膨れ上がった肉。

まるで熟れた葡萄のようにグズついている皮。

また、赤く染まった膝元は、彼女に闘いの全容を見せてくれた。

（…悔しがるなよ…コルスス……。

あたしの作戦だけじゃねえ。

お前を倒したのは…その強さを尊敬し、越えたいと強く願った…こいつの心なんだ…。）

カジェットは息を深く吐いて、パンリを腕に抱いたまま、その場に崩れるように座り込む。

「…二代目……。」

背後に気配が寄る。

彼もまた、満身創痍である、ベルッサスだった。

「二人とも、心配させやがって！

これなら自分だけで戦った方が、何倍もマシだ。寿命が何百年あっても、足りやあしねえ。」

顔も向けずに、口を尖らせる彼女。

「勝手な行動をして、申し訳ありませんでした。

兄の不始末は、自分が断ずるべきと…。

結局……何も出来ませんでした。」

ベルッサスは痛む身を折り曲げて、生真面目に頭を下げた。

「…そう落ち込むな。

あたしの方策だけじゃあ、一手足りなかった。

あらかじめ、お前がコルスを消耗させていなければ…勝敗は違っていたかもしれねえ。」

「……その兄についてですが…。
皆が揃っている今の機会に、全ての真実を話し、名誉を回復すべきかと思います。」

ベルッサスは、周囲を見回して言った。

コルススの手下だった彼等は何かを待つように、固唾を飲んで彼女を見守っている。

「必要ねえ。」

だがカジエツトは、短く切って吐き捨てた。
思わず、ベルッサスは目を伏せる。

そう彼女が答えることは、分かりきっていた。
先代の死の真相を、明かすつもりなら、とつくに晒していただろう。

師が受け容れたことを、彼女も永遠に胸の中にしまっつもりである。

その気遣いに対する言葉が、彼には見付からなかった。

「あの…これを……。」

やがて、地に金属音が鳴らされる。

誰かが気を利かせたつもりで、決闘に賭けられていた腕輪とリングの類を持ってきたのだ。

「それらは…迷惑料とも思っ、てめえらで分けてくれ。運が良けりゃあ、いい順位に食い込めるだろ。」

だが、ぶっきらぼうに、他人事のように言い放つ彼女。

その場にいる者の殆どは、初代の後継者を裏切ったという認識が、はつきりとある。

だからこそ、何かしらの制裁を食らうものとばかり思っていた彼等は、ひたすら呆氣にとられていた。

「そ…それはどういふ…？」

周囲の疑問の目。

彼女は背を向けることで、返答と成す。

「この抗争の中、あたしだって、お前らの仲間を手にかけてきた。いくら決闘での取り決めとはいえ、団内のいざこざが、それだけで全て丸く収まるなんて思っちゃいねえさ。」

ここで、あいつのように…誰もが納得できる、悪知恵が働けばいいんだけどなア。」

ベルッサスの背中が、開け広げた言葉と共に、強く叩かれる。

「だから…カジェット空挺団は、今をもって解散だ。急で迷惑な話だろうがな。」

「……!!」

それを聞いた面々は、一斉に詰め寄った。
彼女を恐れていた彼等に見れば、不自然な行動であった。

「不平や不満がある奴は、中王都市で聞いてやる。
あたしは逃げも隠れもしねえ。
だから、さっさと行っちまいな。」

一方的に急かす彼女。
だが、やはり従う者はいない。

それどころか、松明の輪は狭まっていく。

「…近付くんじゃねえ!!」
文句は、中王都市で聞くんて言ってんだろ!!」

急に激昂した大声。
その雷鳴の如き衝撃には、流石に彼等は三步も足を退いた。

「……腰が…抜けてんだよ!!」

その様子に、彼女は吹き出して、諦めて照れ臭そうに叫ぶ。

「恥ずかしいったらありやしねえ。
自分が戦う時には、これっぽっちも思わなかったけどな。」

こいつが傷付くを見て、初めて怖いと思っただけ、畜生。」

カジェットはパンリの顔を撫でながら、感情を吐露する。

「……悪かった。」

こういう気分を、今まで解ってやれなくてよ。」

そして、何気なく呟かれた一言に、彼等は思わず目を見開いた。

彼女との会話は少ない。

故に、互いに知り合う機会が無さすぎた。

初代カジェットが没し、コルススの暴威に屈することしか出来なかった。

それに屈辱を感じないほど、鈍感ではない。

吐き出したいが、必死に抑えているものがある。

彼女は、その痛みを理解したと言ってくれた。

初めての共感だった。

確かに、団内の抗争において、友や仲間が傷つき、失われることもあった。

だが果たして、彼女の言うとおり、何もかもが手遅れなのだろうか。

否

「行くぞ！」

誰かの号令を皮切りに、地に集められた腕輪とリングが、それぞれの手に取りられていく。

ベルツサスはただ、何もかも失ったカジェットの横で、その様子を眺めていることしか出来なかった。

「……ああ、そうだ。

言っのを忘れてたが、通行証の入った筒は絶対に開けるなよ！
そいつは、腕輪を壊す罠になってんだ。」

そこで思い出し、慌てて付け加える彼女。

「……そんな重要なことを、忘れないで下さい。」

いやに整然とした応えが返った。

「これを頭のため、無事に運ぶことが……俺たちの初仕事なんですか
ら。」

集団は列の形をとり、返事を待たずに一丸となって、駆け抜けていく。

ベルッサスは、夜空を見上げたまま、何も返さない。

腕の中で眠る、パンリの前髪が揺れる。

沁みるような風が、胸に届いていた。

次へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5110d/>

Air・Fantagista（エア・ファンタジスタ）

2010年10月13日16時11分発行